現代日本文學全集

PL Yamamoto, Sansei
755 Shimamura Hogetsu shu
.6
Y3

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

島村抱月集
生田長江集
中澤臨川集
片上伸集
吉江孤雁集

杉浦非水装幀

改造社版

LIBRARY
MAR 24 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
755
.6
Y3

島村(左上)片上(中)中澤(左下)三氏と筆蹟(順に日記・原稿・署名)及び生田(右上)吉江(右下)二氏

活を偏重する惡傾向』より（三四二）
年譜……三四〇

中澤臨川集

卷頭寫眞（照影・筆蹟）
序……三四四
嵐の前……三四五
新藝術觀……三五七
思想藝術の超然性……三六七
感能のさまざま……三六九
愛は、力は土より……三七一
湘南養痾錄……三七五
余の態度……三八二
新社會主義への道……三八七
魔の花……四〇五
（附）ビートーベン一（三五六）同二（三六六）同三（三七〇）同四（三七四）同五（三八六）同六（四〇四）同七『田山花袋氏へ』より（四〇五）「知識階級よ團結せよ」より（四〇六）
年譜……四〇六

片上伸集

卷頭寫眞（照影・筆蹟）
序……四〇八
國木田獨歩論……四〇九
アーサー・シモンス論……四二〇
イエーツ論……四三〇
近代文學に對する疑ひ……四三六
思想の力……四四一
生みの苦み……四四五
內在批評以上のもの……四四六
現代日本文學の問題……四四八
無產階級的文學批評……四五二
「否定の文學」……四五五
トルストイの宗教的人生觀……四六〇
現代ロシヤ文學の印象……四七二
ロシヤ無產階級文學の發達……四八三
（附）『薄明の中』より（四一九）『母の眼』より（四二九）與へる人（四三五）何もしないでゐる時（四四〇）藝術の味ひ、ナイヒリスト（四四四）生きてゐる心持（四四七）行ふことと思ふことと（四五四）檞なにがしの君に（詩）（四五九）人間の貴族（四七一）奇蹟（四九四）信愛の力（四九六）
年譜……四九五

吉江孤雁集

卷頭寫眞（照影）
序詞（筆蹟）……四九八
綠雲
槻の森……四九九
車の男……五〇四
草叢……五〇七
新綠……五一〇
夢……五一二
春の街……五一三
風の日……五一三
死……五一四
曇天……五一六
夏の日……五一八
渡鳥……五二〇
枯林……五二一
梅雨……五二四
霜月……五二七
石地藏……五三〇
蜻蛉……五三〇
郊外……五三一
都會と自然……五三四
高原の村……五三七
葡萄園……五四〇
墓……五四四
森の庵……五四五
冬の國……五四八
信濃高原……五五〇
橡の落葉……五五四
杜の家
杜の家……五六五
切株……五七〇
松林……五七四
自然美論……五八一
藝術の歩道……五九八
（附）代木一（五六四）同二（五八〇）同三（五九七）饗（六〇四）『綠の國』の「序に代へて」より（六〇七）
年譜……六〇五

島村抱月集

序

抱月島村瀧太郎先生の生涯は大凡、三期に分けられる。第一期は明治二十七年、東京專門學校卒業後、同三十五年、同校の海外留學生として渡歐される迄、第二期は同三十八年の歸朝を境として大正二年藝術座を組織される迄、第三期は、それから大正七年十一月に亡くなられる迄である。この中で、文學者としての先生を見る上に、特に重大なのは、云ふ迄もなく第一期及び第二期である。

本集所載の『西鶴論』『悲劇論』の二篇は、この第一期を代表する文藝評論である。前者は、西鶴の藝術を、所謂性格論の立場から、又文化史論の立場から、後者は、人生と悲劇との關係乃至文藝の一形式としての悲劇を、或ひは哲學的立場から或ひは美學的立場から精細に評論したもので、文藝批評家としての先生を、終始一貫して特色づけてゐる重大な諸要素卽ち詩人の情熱と哲學者の洞察と科學者の分析とは、すでに夙くこゝに現はれてゐる。

第二期は文藝批評家としての聲名を一代に恣まゝにされた時代である。こゝに收めた『囚はれたる文藝』以下の諸篇は、何れもこの期を代表する。『囚はれたる文藝』は明治三十九年の一月再刊の「早稻田文學」第一號の卷頭を飾つたもの。滯歐中の見聞と實感とを基として歐洲文藝思潮の根本問題に新しい解説を施したものとして、その絢爛無比な文體と共に當時普く喧傳された名篇である。『沙翁の墓に詣づるの記』は豐潤な詩情を流麗な文體に盛つたエブォン遊記であり、『ルイ王家の夢の跡』はヴェルサイユ宮殿の建築を論じてロココ藝術の問題に及んだもの、先生獨自の領域を開拓した美學上の論文であつて、又、共に先生の滯歐土產の逸品でもある。

『自然主義の價値』は明治四十一年の稿にかゝり、その文藝上の該博な知識とその透徹した觀察と相俟つて、その當時、澎湃として起つた我國の所謂自然主義運動に對して、初めて學理的根據を與へたものであつて、今日からは文化史的にも特に重要な意義を持つたものである。『人生觀上の自然主義』『懷疑と告白』亦共に上記の自然主義論の結論とも云ふべきもの。文藝と實生活との間に橫はる態度上、人生觀上の重大な諸問題がそこに暗示されてゐる。

『奈良より』は大正元年十一月の稿。閑寂な古都奈良の藝術と風光とを心ゆくばかり味つた鑑賞的隨筆であるが、そこに又、その頃一身上に大きな變化のあつた先生の隱しきれない心的動搖の影のほのかに出てゐることは賢明な讀者の誰しも認めるところであらう。其他『メエテルリンク論』『「人形の家」とイブセンの作劇術』等は、先生が、一面、いかに近代劇の研究に沒頭して居られたかと云ふことと共に、後の藝術座の新劇運動が、先生に取つて決して偶然でなかつたと云ふことを示す好資料である。

『淸盛と佛御前』以下の脚本は、何れも近代劇のテクニックを應用してものされたもの。單に讀み物としてばかりでなく舞臺的にもそれぞれ成功を收めて我が新劇運動に寄與した作である。又、小說『山戀ひ』は、浪漫的色彩の强烈と云ふことを特色とする先生の數ある小說の見本の一つとして、又、トルストイ原作アンリ・バタイユ脚色の『復活』の飜譯は、日本の所謂新劇運動が、これに依つて初めて民衆のものとなつた好記念として、こゝに倂せ收錄したのである。

本集は、かくして、批評家及び創作家としての我が抱月先生の全豹を窺ひ得るもの。先生の業蹟を永久に傳へる記念塔である。

昭和五年十月　本間久雄

西鶴論

（人に答ふる書に擬す）

紛々たるかな西鶴の是非、或時はわけの聖とたゝへられ、或時は文盲にして書法を知らずと嘲られ、此の人、肚裏に一字の文學なしと卑むものあれば、好色の書を作りて活計の謀としたる罪人と誹るものあり。『日本文學史』の著者は西鶴を評して「深遠なる學識あるにあらず、高雅なる思想を存するにあらず、從うて其の作何れも猥雜卑陋にして後世識者の譏を免れず」といひ、『好色五人女』の飜刻者は「さはれ西鶴は一箇の詩腦を蓄へしが故に閭巷の些事を見るも凡そ眼に觸るゝもの總て自家の詩材に供へしかど、彼は小說家にも物語作者にもあらねば、元より彼の手腕をもて京傳或は馬琴と比ぶべくもあらず 彼が述作は足利時代の小話を一轉し、分明に一種の浮世草紙派なるものを起し、小說世界の一紀源を開きしかど、悉く端物にして廣く人間を觀察せしも 會の一部に過ぎず、殊に性情を面白く寫せしも其變化流轉する所以を詳かにせず、深く世態と人情との關係する處を說明せしに非ず、又最高の理想あつて是を人事に寓せしにもあらず。されば小說家として是を尊ぶこと頗る疑はしく京傳馬琴以上にあるべくも思はれず、思はれざるも彼が價値は毫も減ぜざるなり」といひ、また「西鶴と芭蕉は以て元祿の社會を代表すべし。共に厭世家にして高く超然たりしが、西鶴は放縱に流れし故に、唯俳諧に滿足せずして其奇才を驅て卑猥なる社會を毫も假借する處なく有りのまゝに描寫して獨り樂み獨り笑ひ、一般の我が文學者と同じく社會的觀念は微塵もなく、破天荒の浮世草子は偏更色道の隱微に渡りき」といへり。其の他彼れを樂天的といふものあり、彼れの理想を粹の一字に留むべしと論ずるものあり、知らず、西鶴の眞價畢竟幾何ぞ。案ずるに貴諭質さるゝの主意は以上の如くに候ふべし。本より西鶴を一個人としてその人品を論ぜんは、彼れの生涯を明めたる後の事、且つ道德上より見ると文學上より見るとは、其の間多少の區別もあることに候へば、茲には社會的に西鶴をあげつらふを止め、旨と文學上より彼れが價値につきて立論いたすべく候。中にも

浮世草紙の西鶴

是れ彼れの本面目に御座候。御存知の如く西鶴の浮世草紙に筆を染めしは、五代將軍常憲公の二年、天和二年に出でし『好色一代男』を始と致し、越えて二年、貞享元年『好色二代男』成り、同じ三年『好色一代女』『好色五人女』『本朝二十不孝』成り候へど、翌貞享四年には浮世草紙の面目一變して『男色大鑑』『武道傳來記』『武家義理物語』等となり、相尋ぎて『日本永代藏』『新可笑記』『本朝櫻陰比事』『胸算用』のたぐひ見はれ申候。今假に天和二年より元祿六年西鶴の死せしまで凡そ十二年間を彼れの浮世草紙時代といたさば、件の變化を界として文學者西鶴の一代はおのづから前後の兩期に分れ申すべきか、即ち前期は『一代男』『二代男』を經て『一代女』『五人女』に其の圓熟の極を示し、後期は『武道傳來記』『武家義理物語』『永代藏』『胸算用』などにて代表せらるゝ義に御座候。試に之れを色分けいたさば、無論一は好色氣質を素とし、他は武家氣質、商人

氣質を素とするものと申すべく、而して『男色大鑑』は一種の異彩として其の間に挾まれ、兩者を糊塗するが如き觀有之候。この他西鶴の死後世に出でしものにては、『俗つれ〴〵』『萬の文反古』など或は僞作なるべしと論ずる向も有之、且つ思想露骨、文調淺俗のふしもなきにあらねば、僞作ならぬまでも之れによりて西鶴の眞價を窺はんは如何と存候。さて西鶴のいかに人生を觀ぜしかを尋ぬるに先ちて辯ずべきは

西鶴が浮世草紙

の性質に御座候。概して申さば浮世草紙は今日いふ所の小說に候はず、小話或は短き記事文といはゞ相當り候はんか、固より此處にて、小說といへるに嚴正の定義を下さんとには候はねど、假にも小說と名け得ん限は、脚色を匠みて事柄を面白く敍し候ふか、性情の發展人間の運命を描き候ふか、何れといたすも單に一場の出來事、一時の心ざまを記述するのみにては、飽き足らぬ心地いたし申候。例へば『一代男』『二代男』『三代男』『一代女』など、表面は主人公ありて首尾一貫するに似たれど、其實主人公を因として事柄を之れに湊合せしむといふにも候はねば、さりとて毎段別に一の首尾結構を具ふと定まれるにも候はず、申さば切れ〴〵の記事を無秩序に綴り合はせたるに過ぎず、『男色大鑑』『二十不孝』以下の作に至りては、全く小話集の性質を顯し申し候。ひとり『五人女』のみは、五種の短篇を集めたるものなれど、每篇略ゞ小說の態をなし、西鶴物中にての異色と見え申し候。要するに浮世草紙の性質は小話集にて、西鶴は人間の全運命を觀じて之れを描破せるよりも、寧ろ人間の一部の運命を描破して眞に達せるものと申すべく候。語を更へて申さば所謂氣質を緯として雜多の事件を織りはへたるものにて、西鶴の作は何れか氣質物に候はざらん、とりわけ好色氣質其の主なる部分を占め、武家氣質、商人氣質など之れに亞ぎ候ふべし、只後の其磧、自笑等の如く特に親父氣質娘氣質と取り出で申さざりしのみ。まづ『一代男』に就きて御覽あるべし、七歲より六十歲の老人となるまでに三千七百四十二人の女に戲れ、七百二十五人の少人を弄びきといふ世之介が好色の行狀五十四條は其の事柄こそさま〴〵なれ、畢竟同轍に候はずや、作者の自白せる如く、世之介生れ落つるより黠しきこと十歲の翁と申すべく

　女是非なく、御心にかなふやうにもてなし、其後小箱をさがし芥子人形、おきあがり、雲雀笛を取そろへ、これ〳〵大事の物ながら、樣に何惜かるべき、御なぐさみにたてまつると、此れにてたらせども、嬉しさうなる氣色もなく、頓て子を持つたらば之れに泣きやます物にもなるぞかし、此のおきあがりが其方に惚れたかして倒けかゝるといひさま、膝枕してなほおとなしきところあり

といへる九歲の少年は、やがて、あれこそ譯知りの世之介さまと持て囃され、廣き世界の遊女町殘らず眺め廻れる當年の世之介と何の擇ぶ所か候はん。例を擧げて論ずるまでもなく、好色道の極意、粹の一字が權化して世之介となりたるものと申さば事足るべく候。既に粹といへる一性情の權化なるからに之れを火に投ずるも、水に委ぬるも變化の妙なく、五十四條の複雜なる事柄は、一條にも納むべく五十四條にも別つべく虛靈なる人間の精神が一貫の特性を具しながら尙五十四境の變化をなすとは趣を別にする次第に御座候。思ふに西鶴が落筆當時の用意も恐らく人間の性情を根本より描破せんなど申す高尙のものにあらずして、只そが好色

界に發現したる結果を面白く寫すにありしものと存じ候、他語にて申さば、西鶴は『一代男』の主人公を描かんとせるにあらず、むしろ世之介といへる一箇の粹客を觀察者の地位に立て、其が周圍に蝟集し來る好色界の現象を觀察せしめたるもの、而して世之介はやがて西鶴自身かと存ぜられ候。勿論西鶴の平生を審にせざれば、此等悉く彼れの實驗譚なりや否やは明めかね候へど、その中幾分は確に聞親實歷の事柄に材料を取りたるものと見え申し候。さて斯の如く世之介は單に粹の權化とも申すべき言はゞ變通虛靈の性なき人物にして其はまた西鶴の俤なりといたさば、一見西鶴の心はしかく狹隘にして單調なるものかとの御疑も生ずべし、されどこは怪むに足らず候、世之介を西鶴の作りたる完き人間もしくは西鶴自身の全體と申さばこそ惡しけれ、萬般の好色的現象を一に統べんため總て是等を包容して之が軸となるに堪ふべき圓滿の好色家、すなはち理想的好色氣質を揑成化了したるものといはばよろしかるべく候。西鶴の理想を器に譬ふれば、之に好色を盛りたるが粹にして世之介はこれなるべく、更に盛るに武道を以てすれば武家氣質となり、財事を以てすれば商人氣質と相成るべし。さればまた一方より言ふときは武家氣質も理想なれば、好色氣質も理想にて、何れも西鶴の一部なれど全體には候はず、西鶴を掩ふの理想は一段大なるものならざるべからずと存じ候。隨うて彼れの人間觀は彼れの氣質と別なること申すまでもなし 次に『一代女』は『一代男』と同調にて、女主人公が十一歲より六十五歲までのいたづらを書き連ねたるものに御座候。但し主人公の女性なるだけ、此方の事柄及びそが觀察の、彼方のと別趣なること二者相違の第一點に御座候。又種々の好色事件を統轄すべき極致、彼方にては粹又は大通など申す男性的のものに歸し、此方にては遊女氣質とも申すべき複雜なる女性的のものに歸すること、二者相違の第二點に御座候。此等を除き候はゞ『一代男』も『一代女』も共に作者が好色氣質といへる中央點に立ちて周圍の好色界を眺むるものなること、相同じく候。兩書の性質既にかく候上は、之れによりて一面、西鶴の好色的極致を窺ふとともに、他面にはそを軸として群り來る事柄につき彼れが人間觀の片々をも尋ね難からずと存じ候『五人女』に至りて西鶴の本領は最も圓滿に見はれたりと申すべきか、この作、『一代男』『一代女』の如く切れ／＼なる事柄を强ひて結びつけし嫌なく、每篇主人公と境遇と、因緣兼ね到りて個人の性情おもひ／＼の發展を遂ぐる所、五篇の短小說と申すべく、幾分か今日所謂小說の體面を具へ申し候。作者みづからは此の書にも得意の好色の二字を冠し候へど、實は夫の支離滅裂の事柄を狹隘なる好色氣質の埒にて結び廻したる如き『一代男』『一代女』などと異なりて覺束なきながらも人間の全局其の裡に髣髴せられ申し候。西鶴が小說家としての技倆及び彼れの纏まりたる人間觀を示すは此の書を第一と致すべきか、さればこゝにては、西鶴が色道の極致とせるものにしてまた幾分か彼れの俤なる好色氣質を說明いたすに『一代男』『一代女』を以てし小說家として人間の運命を描ける彼れを觀察いたすに主として『五人女』を以てすべく候。其の他女色界を去りながらも猶好色の味忘られず、顧みて武道に恰好なる男色に指を染め、之れをもて武士氣質を彩れるもの『男色大鑑』に候はずや。西鶴の前期と後期とを點綴すとは此の意に御座候。この書、體裁は一章一事の純然たる小話にて、其の中より抽象いたさば、一種の武家氣質を得べく候。更に進みて後期の諸作につきて申さば、『武道傳來

記『武家義理物語』の武士氣質に於ける、『日本永代藏』『胸算用』の商人氣質に於ける、何れも漸く色道とは相遠かり候へど、略ゝおなじ型と御承知下さるべし。而して武士氣質は義理をいのちと致し、商人氣質は財貨集散の秘訣、遣り繰り懸け引きの利巧を眼目と致すとは申せ、此れらはさまで複雜ならぬものに候へば、取り出でて論ずるまでも候まじきか。尤も義理と申すには說あり。西鶴の描ける義理は後の作家が勸懲の窓より觀ぜし義理とかはりて、極めて純潔のものと存ぜられ候。その故は、後世の義理は眞吾の底より流れ出づるものに候はで、只々世間體とか外見とか申す點より割り出し候もの、即ち形式的人爲的のものに過ぎず、申さば輕薄なる義理に候へど西鶴のは然らず、眞に我が本然の性より煥發するもの西鶴の義理にして、彼の之れを寫し候や、單調子ながらも靈氣淋漓、深く人心に通徹する所有之候。蓋しかゝる相違は之れを時勢の上にも認めがたからず、西鶴の義理はまた

元祿的

と申すも不可なかるべしと存じ候。德川氏のはじめ文運未だ盛ならず、雲の如く林の如き參河武士が創痍斑々の腕骨を撫して、一番槍の功名談に餘念なかりし世は、人々眞率、意を着けて正義を衒はざるも動作おのづから義理を離れず候ひつれど、元祿の一關を越えてのち、文漸く質に勝ち淫靡蕩敗の餘弊は人を虛儀虛飾の奴隸と化せしめ候ひぬ。あはれ武道の精英は發して元祿武士と匂ひしまゝ名殘を此に留めて日に月に銷磨し行き候。劃と何時頃を境とは定めかね候へど、およそ天和元祿の際を德川氏治平の頂上といたさば、此の時代はまさに、質をもて優れる慶長元和の氣象、寛文延寶の頃を經て文の衣を着し文質調和の實を示せるものと申すべく、人皆泰平にして殆ど無缺とも見えけん現實の世界に滿足して他を思はず、世を擧げて醉生夢死、いはゆる「花に寐て夢よりぢきに死なんかな」の境に彷徨へる有樣に候ひき。されば一方より見る時は此のうち既に不健全の萌芽を含み候こと勿論なれど、かゝるは歷史が示す必然の數にして、圓熟の極はやがて腐敗の端なること、有限の人世には免れがたき所に御座候。元祿は圓熟の極なり、その後は腐敗の端なり、圓熟と腐敗と相接するのゆゑをもて圓熟を誹議せんとするは燎くを恐れて火を廢するの愚と擇び候はんや。天和元祿の社會は固より淫逸華奢に候ひき、しかも淫逸といひ華奢といふの性質おのづから後世のものと異なりて、眞摯なり、一徹なり、眞面目なり、天和元祿の人の花に戯るゝは、花に戯ると申すよりも、花に狂すと申すべく、彼等の月に浮かるゝは月に浮かると申すよりも月に淫すと申すべく、凡そ其の境に入るときは即ち滿腔の熱誠を捧げて顧みざること當時の狀態と存じ候。要するに天和元祿の社會は情熱的、狂氣的とも評し候はんか、比較を英のエリザベス時代に取るものあるも此のゆゑに候。今より見れば、丹前姿に六方を踏みきといふ元祿の伊達男は狂に似たれど、しかも彼等は澁面つくりて之れをなしゝに候はずや。はたエリザ朝の紳士淑女は靴尖を延ばして膝に餘り、帽子に帆を張り二重三重に及べるものありしに候はずや。而して此等の稚態却りて可憐の心地するは畢竟眞心流露して虛僞ならず輕薄ならざるに因り候。この至情一轉して他方に向ふときは、道義金鐵の元祿的武士氣質を成すも怪むに足らず候。天地の美は常に一元を姿とし人心の本然はた二元を惡むの理を會得候はゞ、元祿の社會其の物の甚だ惡むべきにあらぬを知るに難からずと存じ候。元祿以後の社會はすなはち然らず、彼等は表面

に義理を説きながら內心必しも之れに應ぜず、もしくは衷心私に憚る所ありながら煩惱の犬制し盡されずして遂に蕩淫身を敗る、何れか輕浮の心根に候はざらん、元祿以上にありては、世間の知ると知らざるとに論なく自家の信ずる所に從ひて義理をも行ひ淫逸にも耽る社會的眼光を以ていたさば不善に候べし、しかも何その自己のために自己の信ずる所を行ふの形式は美に候。元祿以下にありて義理も世間のために行ひ、淫逸も世間のために抑ふ、時に結果の善に似たるもの有之も、所詮醜態を免れず候。元祿を境としてかく義理の性質を分ち、さて西鶴を件の潮ざかひに立てるものと致さば、彼れの振りかへりて寫せるは勿論元祿以上のものに候。而して其の善惡ともに滿身の熱誠を捧げて一往直前、他を顧みざるは、之れを元祿的と申すべく、西鶴の作全部に通徹するはこの風に御座候。以下章を改めて西鶴の好色氣質及び彼れの人間觀に論及すべく候。

好色氣質

好色氣質に新説なし、たゞ少しく巨細に論究いたすまでに御座候、之れを內分して粹人氣質、遊女氣質の二といたすこと前に申上げたるが如し。或は粹人氣質など申す事、用語未熟の嫌有之やも計られねど、其はしばらく御見ゆるし下さるべく候。まづ粹人氣質は如何。春のや氏がひとむかし前の戲文の一節に

(前略)世に粹といふことあれども其傳來も鮮かならねば其本義もまた定かならず或は所謂通をいふ或は今いふ意氣なる者を指す九太夫が由良どんを呼んで粹め〳〵といふは通人めといふ心なるべく母親の粹な捌といへるも亦同樣なる心なるべししかして粹な姿といひ粹な調子の爪彈などいへば今の所謂いきな姿いきな調子を指したるに似たり曲亭翁嘗ていはく「萬事に心きゝたる者を乖。といふ由は柏案驚奇に見えたり水滸傳に乖。覺とあるも同意なり國俗は粹とかくもあり乖。は元明の頃よりの俗語ならんか又案ずるに乖。は粊。の俗省。粊。は乖。の本字にて乖。と異なり」といへり云々

また同じく

(前略)故に粹には三原素あり曰く酌情曰く寬恕曰く自敬即ち是なり此三原素を幷存して錬熟其妙に入りたる者是之を大通と云ふ大通は恬憺無爲大聖のごとく大智識の如し得て名狀すべくもあらず老子の曰く大德は德とせずこゝをもつて德ありと大通もまた然り外に求むる所なくして自ら守る是大通の形といふべし世人或は粹と通とを混じ或は花柳界の事に明き者を以て直に通となす者あり蓋し誤れりといふべし通は萬事に通ずるをいふ花柳事情に通ずるものは單に老練の嫖客なるのみいかでか通といふべけんや如何となれば花柳事情に通ずるもの未だかならずしも粹ならず粹なるも亦必しも花柳事情に通ぜざるも可なればなり

といへる、片々たる戲文字に候へど、粹、通など申すものの義は略ゞ相通じ申候。たゞし通の本義はしかく廣しといたさんも、其を花柳界に應用したるものやがて粹かとも存ぜられ候へば、こゝには粹と通とを分たず、むしろ粹を花柳界の事とし之れと意氣とを對せしめて立言いたすべく候。春のや氏の説の外、鷗外氏は嘗て

意氣の我を以て彼の領地を犯すものなることは復た疑ふべからず、唯その人を凌ぐや體面を傷らず、唯その我を以て彼の領地を犯すや趣味を損せず、意氣と云ひ粹と云ひまた通といふ、其祕鑰蓋しこゝにあり

といひまた

世に大通と稱するものあり、說をなすものは通より大通に至り、意氣より大通に至るといふ。其說は平淡を以て絢爛の極なりとするものにおなじ、絢爛豈平淡の前階級ならむや、意氣豈大通の前階級ならむや、大通は始より人を凌ぐ心なし。大通は意氣にあらず、通にあらず、野暮にして偏屈ならざるをいふなり、上品なるをいふなり、高等なるをいふなり。

といはれたれどこれ亦精しからず、餘事は姑く措き好色界にて粋と申すは、言はゞ斯の道の極致にして、鷗外氏のいはゆる通、意氣など申す境を通り拔け優に大通の域に入りたるものに候。蓋し鷗外氏の通もしくは意氣とは、着意して通を利かし粋を衒ふもの、したがひて着意の底には利己排他の一念潛むを免れず、所謂通の通ぐさく、味噌の味噌くさき物に候はんか。眞の粋、大通の通はさに候はじ、野暮はたしかに未だ意氣ならざるの名、意氣は着意して粋ならんとする名、粋は乃ち野暮と意氣との上に邁出したるものと存じ候。語を換へて申さば好色道にての野暮とは、未だ意氣の何ものなるかを知らず、隨ひて意氣ならんの意をも有せざる心ざまに御座候、之れを作文に譬ふれば、些も鍛錬修飾を加へざる稚き文章の如きものに候、若しくは粉脂を劑せざる垂髫乙女の無邪氣なるに比べ候はんか、要するに其の道にかけては猶無緣地にありて全く無心無意識なるものと申すべし。しかもやうやく見聞の廣まり行き候とともに心やゝ動きはじめて全盛の羨むべきを思ふに至るは人心の自然に候、斯くして陰に陽に虛實を盡して全盛あたりを拂ふの用意に汲々たるを意氣の時代とは名け候、文章にてはまさに絢爛綺麗、辭のために辭を聯ぬるものに相當すべく、鞦韆の下、春風泣くの少女が長眉畫くべく粧奩親むべきを知れるたぐひにて御座候、すなはち、意識して極致を眞似るの狀態にして、凡そ何の社會たるを問はず、それ〳〵の道に入る第一歩は常にかゝるべしと存候。更に粋に至りては此等の兩端を沒入して意識無意識の外に優遊するものと申すべく候、又は其のあとを尋ぬれば、意識を追ふの極、意識の盡さゞるものあるを曉りて不用意自然の我れに還れるものとも見なされ候はん、又は意識の表にては平々淡々他の野暮漢の云爲する所に異ならざるも、しかも應對おのづから節に合して、櫻に霞める春の月、紗に裹める夜光の璧の含蓄限りなきが如きものに候はん。要は着意して奇を求めざるも奇自然に會し、斯の道に於て他より尊ばれ、さもあるべしと思はるゝ諸性質期せずして一身に湊まるにあり、經驗を極め差別を悉して其を自己の體といたすにあり、意氣の中より着意の分子、我執の塵を淸め去りて無意不識なる姿趣の復び野暮と似寄るにあり、野暮と意氣とを沒するにあり、自他の城壁を拔くにあり、本然の我れに還るにあり、同情にあり。眞の同情に滯るものは、野暮來るとき野暮をも容れ、意氣來るとき意氣をも容れ、偏執なく端徼なく、事々すべて無碍なるのさかひに出入す、之れ粋の奧義にしてまた大通の實諦かと存じ候。さてかく形式の上にては一わたり粋人氣質の何物なるかを辯明いたし候へど、これのみにては物色いまだ定かならず、いでや粋とは如何なるものに候やらん、取りわけ西鶴の眼に映ぜし所はいかに。

生まれながら聖なるものに候はゞ知らず、凡下のものにありては、何事によらず、修行を積み精進を重ねたる後にこそ始めて即身即法の三昧地に達し得るものに候へば、粋と通とはた此の數には漏れ候はじ。而してその修行地に入るの第一歩は、粋を極めたる人のおのづか

ら他より尊仰せらるゝを見て己れも之れに倣はんの意を起すにあること、凡夫の免れざる所に御座候、所謂意氣の始は是れに候べし、すなはち粋を衒ひて他を凌ぎ他より敬愛せられんとするに外ならず候。これにも差等あれど

『一代女』に

今の世のよねのすきぬる風俗は、千筋染の黄無垢の上に黒羽二重の紋付裾短かに、帯は龍門の薄かば、羽織は紅とびにして八丈紬のひつかへし、素足に藁草履はきすて、座敷つきゆたかに脇差すこし抜出し扇つかひして袖口より風を入れしばしありて手水に立ち石鉢に水はありとも改めて水をかへさせて靜に口中などあらひ禿いひやりて供のゝのに持たせ置きし白き奉書包の煙草とりよせ呑むなど、のべの鼻紙膝近く置きてかりそめにつかひすて引舟女郎を招きよせ手を少し借りたいと袂より内に入れさせけんべけにすゑたる灸をかゝせ太鼓女郎に加賀節のぞみて謠うてひくをそれをも心をとめて聞かず小歌の半に末社に咄しかけ昨日の和布刈の脇は高安はたしと褒め此のぢうの古歌を大納言どのにお尋ね申したが拙者聞いた通り在原の元方に極まりたなどいたり物語二つ三つ、かしらにそゝらずして萬事おとしつけて居たる客には太夫氣をのまれて我れと身にたしなみ心の出來て其の男するほどの事賢く見えて恐ろしく位とる事は脇になりて機嫌を取る事になりぬ。

と申すは意氣の上乘なるもの、強ち身に粋骨なきも態度の表だけは粋の形を擬し得たるものと申すべく候。單に嫖客氣質のみにつきていはゞ、此のあたりを其の頂點といたすべくや。・・面より申さば、『一代男』『一代女』『二代男』『三代男』など、要するにかゝる心意氣を體する淺薄なる人物と、やゝ複雜なる傾城氣質と相觸れて生ずる事件を寫せるものに外ならず、まことの粋は一段高きものと存じ候。西鶴はいかにしてまことの粋の消息を傳へ候ひしか、『一代男』五十四條の何れを見候も、表面に現れたるは意氣全盛の事柄のみにて、まだまだ粋の彼岸は遠しと申すべし。さはれ一人壇上に立ちて瞰すとき、眼下に集まり來るものの己れより矮きを怪み候はんや、作者が一段高き處より知らず〳〵主人公の上に放つ光明にこそ『一代男』の粋は留め申すべけれ。世之介十八歳まで部屋住の色ぐるひ、十九歳勘當せられて凡そ色界の貧しきかたを漁り盡し、三十四歳にして歸參、一心のまゝ此銀つかへと母親氣を通して二萬五千貫目確に渡しける「に何時なりとも御用次第に太夫さまへ進じ申すべし」日ごろの願今なり思ふものをうけ出し又は名高き女郎殘らず此の時買はいでは弓矢八幡百二十の末社どもを集めて「大大大盡」の家名の緒を開き候までは、さしたる事もなけれど、之れより後の世之介は、全盛以外に分明に一種の光彩を發し申候。例へば或時は、「今日は譯知りの世之介さまなれば何隱すべき各々の科にはと申すうちに夜更けて介さまのお越と申す太夫只今の首尾を語れば其れこそ女郎の本意なれわれ見捨てじと其の夜俄に採み立て吉野を受出し」或時は「女の心入を驚き樣子を聞けば隱れもなき人の御息女なり請出して直に丹波へ送り」、「戀は五」の思ひやり自然に身に備はり人の男を取らるゝ事此のちらの仕出しなり此の心入のいやな所はさら〳〵戀にあらず紋日缺かさぬ程の大じんにばかり其仕方ぞかしと噂せらる惡女郎には「四五度も忍び會うてから、正月の入用御無心の書簡拜しまゐらせ時分がら忝くぞんじ候金を出して女郎狂ひ仕れば御存じの通り此方に好き申候太夫と久々申しかはし候貴樣よりは只のやうに御申越候程に戀

の暇のなき身なれども折節合力にあうて進じ申候、餘人を御かせぎあるべし口錢の金子御貸しなされ候はゞ肝いり申すべく候」と眞向より責めつくる類、一方より見れば所謂侠にも通ふべき振舞と申さんか。勿論侠と申 にも等ありて、市井の侠は、大侠の根本より正義を體とするに異なりとは申せ、侠と粹とは畢竟同じ水脈の別なる噴井かと存じ候、大にしては大和魂など申すも矢張り同呼吸に候べし。所詮粹は好色界の侠骨、好色界の大和魂なり、つぶさに色道の坎坷、人情の曲折を經歷して酸きも甘きも嚙み分けたる上、其を鹽梅するに濁なき同情の淨味を以てするものに候。尋常の場合にては、何事にまれ己れ專にせんとすれば他を壓するに至ること避けがたき結果に候へど、ひとり粹は然らず、粹は此の際に處して能く自他を調和し、己れ遊興を盡すも他を犯さず、隨うて他をして己れをも犯さしめず、却りて己れの欲する所直に他の樂ふ所に合するものに御座候。哲學者の口氣を假りて申さば、好色界全體の目的とする所と、其内の一員の目的とする所と、所謂平等想と差別想との相即せるおもむき、之れ粹に候。粹を衒ふの徒は假りて以て他を壓するの具と致せど、粹其の物は、他より尊仰せらるゝの性をこそ有すれ、他を壓せんとはいたさず候。

以上粹の辨稍々贅に似たれど、然らずと存じ候、其のゆゑは、後の作者の粹を描き候や、多くは外形に泥みて、命脈の繋がる所を觀ず、西鶴の死後二十年ならずして世に出で、善く西鶴の骨を得たりと稱せらるゝ八文字舍の「傾城禁短氣」すら既に色道の粹を解して澄空一點の雲氣あるを免れず候、況や其の以下の作者をや。「傾城禁短氣」に

法師さらにせかずしてあくる四ツ過に來られ何を騷がしうするぞ山伏などの祈で行くものにあらず我れらが粹の祕密にて此の狂氣をなほして見すべしと座敷へ通り給へば眼すわり息ざし荒く美しき姿はなくて凄じき體相、鐵漿つけし齒を鳴らしてさまざまの譫言聞くに身の毛もよだつばかり法師は少しも騷がず煙草盆ひきよせ心靜かに一服煙らせおどしつけて是れ八雲、所に居て多くの客に揉まれてもまだ粹といふ人を見しられぬと見えたりなぜ打ちわつて我が身には深い言ひ交はせの男あればおなさけに其れに添はせてたまはれと包まず心底をあかし我が手前を首尾ようひまは貰はれずして騷がしい狂言をはじめ飽かれてひまを取らうとはそりや前方なる若手の男にして見せたがよい筈この古法師はそんなちよろい手をくふ事にあらずねんごろな男は廓にあるか客にあるかありやうに白狀めされ出しおくれになつて長狂言せらるゝと其方が身は買切ておいた物なれば死なるるまで座敷牢に押こめ置き月日の光を見せぬがなんと雲八返事はどうぢやと星をくはされ覺えず足手が一所へじんじとよつてほろりと涙をこぼし何事も今までのおなさけに御免ありて御機嫌ようおいとま下さるべし深間の男と申すはいたづらものにもあらず我れゆゑに代々の家を潰して淺ましくなられし丹波橋の少六といふ大臣に添はいでは心中立たず樣子は是れにと少六文を懷より出だし涙片手に見せければ見るまでもなし外に心ある女を不便がるはらうのわれてある煙管で煙草のむやうなもので煙が傍へもれて我が口の慰にはならず其方ゆゑ身代つぶしたる男を忍ぶは情の最上卽ち今より暇をやると二念なくひまをやられし法師の捌き天晴至極の譯知りと今につたへてわるうは言はず

とある、何條心からの粹に候べき。化性を見拔ける法師の眼力は凄きほどなれど、我れ粹顔の手捌きは輕薄とや申さん。まこと不便の心あらば、始より何にも言はずにひまやるこそ粹の極意に候はめ、若し又奸計憎しと思はゞ飽くまでも懲らすが眞の人情に候はずや、何れともつかぬ鼠色は、必竟下地に名聞利己のにごりあればに候べし。此等は未だ意氣の範域を脱せざるものにて、味ひ來れゝ、色ばかり醇に似たる直し酒のひりゝと舌に障る心地いたし候。此のきはを超して醇乎醇の妙境に入れるは獨り西鶴あるのみ、西鶴が好色氣質の貴きはこのゆゑに候。　兩刀手挾んでは元祿武士となり、拔き額に六方蹈みては男伊達となり、腰纏萬貫狹斜に豪放しては粹大通となれるもの、これ豈一代に燦爛たりし元祿の花に候はずや。爾來德川のながれ淵瀨うつろひ、逝く水杳然春を載せ去りて回らず、我等は只々西鶴の描破せる所によりて其の一端を想望いたすのみに御座候。

次は遊女氣質の說に候。總じて西鶴の好色氣質を寫し候や、女性の方に密にして男性のかたに疎なるの傾有之候　こは作者が觀察の自然にも由るべけれど、また實際嫖客氣質のみにては、さまで多趣なるものならぬにも由り候べし、之れに反して吳郎を送り越客を迎へ、朝夕境遇の變に處し、一人の心もて萬人の心を操る傾城の氣質は、勢、複雜ならざるを得ざる義と存じ候。さて「京の女郎に江戶の張を持たせ大坂の揚屋で會はゞ此の上何かあるべき」と『一代男』の好みもさることにて、西鶴の寫せる傾城はおのづから江戶と上方との二色に分れ申候。『一代男』に

(前略)秋まで殘る螢を數つゝみて禿に遣はし蚊帳の內に飛ばして水草の花桶入れて心の涼しきやうなして都の人の野とや見るらんと(中略)假にもさもしきことといはず可愛さのまゝに人のほしがる物は是ぞと巾着にあるほど打明けて物數四十ばかり包みて袖に投げ入るれば取敢へず夜も明けて別れさまに旅の道心者の　志　うけたきといふ

といへる、作者の意は由緖ある身の上を示すにあれど、却りてこれ優にやさしき遊女の心意氣とや申さん。同じく

茲に吉原の名物吉田といへる口舌の上手あり(中略)萬賢きこと思の外なり山の手のさる御方殊更不便がらせ給ひ數々忝き御しなし否といはれず外をやめて指に疵などつけてまことの心になつて御いとしさも增すときさる太夫を戀ひ初め吉田の退き端を色々仕かけ給へども一つも憎むべき事あらず或暮方に小柄屋の小兵衞ばかり召連れられ何によらず今日は限りに難儀を申かけ手をよくのきて遊をかへるぞ急げと淸十郞方に行きて太夫に會ひてそも〳〵より橫を行けばはや合點して少しも氣やぶらず常の酒振り重ね飮みになつて無理を肴になすぞかし(中略)花も火ともす時分になつて太夫勝手へたちさまに廊下を半すぎて取はづされて其の音に疑なし世之介も小兵衞も橫手を打つて面白の春邊や天晴口說の本たて重ねて出たらば座敷が臭うて居られぬといはう、いや兩人共に鼻塞ぎてあの方からあらためるときに今日よきにほひを嗅ぎに來たと申せ之れにきはめて待てども出でずよもや出らるゝ所でないと大笑して見るに衣裳仕替へて櫻一本持ちながら立出づるより二人目をつけて居るに最前屁をこきたる板敷まで來て其所にて心を着け障子を明けて疊の上へ廻らるゝこそ一代の大事こゝなれ小兵衞も聊爾申してはとしばし之

れを默りぬ世之介も二の足を踏みてかの板敷歩めども鳴らざりしされども出し遲れてゐる中に吉田方より申し出して此のちうの御仕方總じてよめぬ事のみ始より飽かるゝまでとの御傳へ成程今日切りに飽きました御見も今より後はと申し捨て表の見世に出で、犬にさんたさせて遊ばるゝこそ少しは心憎けれ

大人しき態度、利發なる取り捌き、善きかたより申す傾城の心がけは此の邊に候べし。此には假に之れを傾城の上方氣質と名くべく、江戸氣質の張り強きものと照り合うて一段の風情有之候。『一代男』に太夫高橋の意氣地を敍して

それ程急な人には會うて面白からずと喜右衞門方に戻りぬ七左方より呼び立つれ共歸らず世之介も戀は互と思ひ太夫を諫め是非行けと申せば今日に限つて日本の神ぞ〳〵行かぬと申すよく〳〵分別を極めよもや先にも此のまゝは措かじ掴みに來る時腰半分切つてやつて頭此方に置くがと申すいかにも覺悟と世之介にひかせて膝枕してさても命はと投げぶし聞いて居られぬ所ぞと尾張の大盡刀拔きながら切つてかゝれど目も遣らずして聲も振はせず唄ひけるめいめい取付き樣々扱へども聞かず揚屋町中袴着て兩方の詫こと入り亂れて親方かけつけ今日は尾張のお客へも世之介殿へも賣らぬとて高橋がたぶさを取つて宿に歸るそれにも飽かず世之介樣さらばといふこそ心強き女此の男あやかりものぞかし

といひ太夫小紫の豪奢と俠氣とを記して

紫さまお一つまゐれと暴くおさへて襟から膝くだり打ちこぼしたんと氣の毒がる顏つきをかし太夫苦しからぬと座をたちて行水取れとて湯殿に入り最前の衣裳つき少しも變らず肌は白綸子中は紅鹿子のひつかへし上は淺黃八丈の八たんがけ召しかへられける又上方女郎のせぬ事なり（中略）世之介重ねてたづねければ樣子見るに少し足らぬ人を賭にして遣はしけるとさながら見えますによつて先さまの人憎さも憎しあんな男に逢うてとらしましたといふ

といへる、さては『一代女』の主人公の、己れに敵するものには飽くまで悍に、己れに與するものには飽くまで情深き一種の氣象、「此の男嫌うて振るにはあらずかしらに粹顏をせらるゝによつて此方からもむつかしく仕掛」くるまけじ魂、正しく町の髮結らしく思はるゝ供の男が全盛顏の憎さに一旦は振りたれど、其の男の優しさに心和ぎかけし途端「大臣の聲して、夜の明くるに程近し、われは先へ歸れ、髮結ふ人も待ちかねんと何の遠慮もなく起されける之れを聞くと又こゝろざし替り先に見立てし職の人なればかさねて浮名の出づることをうたてく其の通りに起きわかれぬる」情より名聞の念、およそ是れらを江戸女郎のいのちといたし候はゞ、上方氣質と江戸氣質と、相通ずる節も候へど、概して彼方はたしなみ深く利發に、此方は意氣地、名聞を最後の行留まりといたす。藤なみの細く長う風に靡くを執ねしと見候はゞ、雪折竹の雪に一夜の宿をだにをしむは無情とも見え候はん、されど亦細く長う續くは情に深入りせぬ故にて、太く短く一夜に折るゝものこそなか〳〵に熱情とも申すべく候へ。外に「いかなる粹もいやとはいはぬ遊女の手鍊、一客からのつけ次第にして傲る」遊女の威、遊女の薄情、遊女の莫連、いまさら例を擧げて論ずるにも及ばずと存じ候。要するに、『一代女』の生涯は卽ち遊女氣質の始終にして、上に論ぜし諸性質は其が根じめとなれるものの一斑に候。されば遊女氣質の粹人氣質と異なれるは、一は女

性だけに我れといふ城郭を胸に構へ、絶えず其を振りかへり見るの風あれど、他は同情の面より此城郭を脱却し、時に放焉として本來平等の天地に遊ぶを得るの點に候。縱令しか意識せざるまでも偏狹は女性の常に候へば、審美上に所謂同情、忘我等の境には長く停まるを得ず、動々もすれば我れの身上に立ち還らんとする傾有之候。意氣地といひ、名聞といひ、たしなみといひ、利發といふ、何れか此の我執の影に候はざらん。粹は此處を通り抜けたるものにして、粹人氣質と遊女氣質との相違はやがて男性と女性との差別と申して可然候。

好色論の終に申添ふべきは粹、傾城などすべて好色氣質を體とするものと、眞の戀との逆行する一事に候。『五人女』は眞の戀を描かんとせるが故に好色の範圍を逸し、『一代女』は好色を寫せるが故に其の戀一も眞の戀となり申さず、此の關係は次章西鶴の人生觀を論ずるくだりにて細述いたすべく候。

西鶴の人間觀

人間觀、人生觀など申すこと、此の頃の流行語にて何人も口にする所に候へど、其の本義はさる簡易のものに候はず、近松が心中物のあはれを寫したるの故をもて彼れを厭世詩人といひ、西鶴が好色界の快樂を描きたる故をもて彼れを樂世詩人といふの類は勿論據なき說に候。本來は人間を何と解し現世相を如何さまに觀ずべきかと尋ぬる前に、先づ人生の果して解了せらるべきものなりや否やを論じ、兼ねて知識の性質を明め、造化の祕密は約そ何分通りまで人智の思量をゆるすものなるかを研究致したるのち、人生觀の厭世といひ樂世といふが如き感情的のものに分るゝ所以を說くが至當の順序に候へど、煩はしければ、他日に讓り、此には直に西鶴の人間を觀ぜし次第を論及いたすべく候。

西鶴が作の原來小說にあらずして短き記事文なる由は既に申上候、隨ひて作者の理想を加へて結構せるもの少く多くは俗にいはゆる寫實に候。されど一方より申すときは却りて頗る理想派に近き點もなきにあらず、『一代男』『一代女』など、全體より見るときは即ちこれに候、其ゆゑは此等の作の表にては、人生は全く好色氣質の獨舞臺にして何程蕩淫を極むるも社會的制裁とか周圍の係累とか申すことは殆どなく好色者流の理想鄉も斯くやと思はるゝ有樣に候へば也、すなはち個々の事柄は寫實なりといたすも、全局の上よりいふときは實際にあるまじき世界に候へば也。『一代男』『一代女』の描ける所は好色といふ目安より割り出せる一種の理想的社會にしてまた西鶴が好色の窓より觀ぜる人生の極致に候。さもあらばあれ是れ彼れが人生觀の一部のみ、之れを以て全西鶴を掩はんとするは僻事に候べし、夫の西鶴を譯の聖といひ又は高上の理想なき野人といふが如きは、貴ぶも賤むも、ともにこの間の消息を會得せざるに由るものと存じ候、或は西鶴の何故にしかく不健全なる理想世間を不健全と知りつゝ描きしかと訝る者も候はんか、そは戲作者の本意を餘りに重く見たる論と申すべし。昔時は戲作者の筆をとり候や、まづ念頭に浮ぶは讀者を娛ましめんの一事にあり。『一代男』『一代女』の成れる、はた此の目的にしたがへるに外ならず候、されば西鶴のはじめより人生に對する己れの感情を歌はんとせるにあらざるは申すに及ばず、彼れは人生の圓滿を夢想して之れを髣髴せんとせるにも候はず、否、圓滿を髣髴せんとは致したれど、其の圓滿は人生の圓滿にあらずして歡樂の圓滿に候ひしなり、就中强大の勢力ある色欲的歡樂の圓滿に候ひしなり。而して西鶴の之れを擇ぶに至

りしは、彼れの時勢と彼れの地位との所以にして、猶馬琴が勸懲の眼鏡により仁義世界の圓滿を想望せるがごときものに候。たゞ馬琴は一途道念の滿足を得んと欲して煩惱の念を拒斥し、之れを以て人生の圓滿と心得候へど、西鶴は然らず、西鶴が色慾の滿足をもて直に人生の圓滿と觀ぜしにあらざるは『一代女』『五人女』などの中に勸懲の口氣を帶べる節少からぬを見ても知らるべく候、殊に自恣自由なる『一代女』を讀み卒へたる眼を『五人女』に移すときは此の事實最も著く見えすき申候。『五人女』は卽ち西鶴の觀ぜし人間の全相なるからに、其の中なるは、色も戀も、『一代女』と異なり、極めて窮屈にして煩惱の傍に常に何物かの看守するが如き心地いたし申候。例へば等しく肉慾の戀を寫し候も、『一代女』にありては靑天白日誰れ憚る所なきに引きかへ、『五人女』にありては、お夏と淸十郞、お仙と長左衞門、おさんと茂右衞門、お七と吉三郞、何れも其の戀密事の性を有せるたぐひ、若しくは「世に神ありむくいあり隱してもしるべし人おそるべきは此の道なり」「あしき事はのがれずあなおそろしの世や」等の評語を以てせるなど、明に西鶴が描ける人間の煩惱一偏に非ざりしを證するに候はずや。『八犬傳』は其の偏狹なる不健全なる道義界を以て人生を掩はんとするが故に、結果は娛樂よりも驚嘆を主とするに至りたれど、『一代男』『一代女』は娛樂を主として驚嘆を求めず、是れ前者の動々もすれば說理に終らんとする所以後者の知らず〳〵美術の肯綮に觸れ得る所以に候。近松は乃ち能く美術の本旨の娛樂にあるを忘れざると共に其の娛樂の單に煩惱に媚び肉感を充たすにあらざるを知り、人間の全相を活寫して始より同情の娛樂に訴へんとせるものに候。佛の批評家テーンが曾てミルトンの驚嘆、シェークスピアの創造、スキフトの打破、バイロンの挑戰、スペンサーの夢想を並稱せるに倣ひて上の三家を品隲致さば、馬琴は驚嘆するを好み、近松は同感するを好み、西鶴は娛樂するを好みきとも申さんか。要するに元祿の社會にありて西鶴が娛樂の頂點を好色界に求めしは怪むに足らず、一步を進めて無意識のうちに審美の域に參せしは彼れの偉なる所以に候。西鶴の詩人としての技倆は彼れに取りては寧ろ無意識的に候、但し美術の成るはすべて無意識と意識との兩面の作用によるものとも見らるべくハルトマンの

無意識的槪念によりて能く部分を全に統理し渾成し、同じく無意識の所產なる自然體と比肩するを得るに至るは天才なり（中略）此のゆゑにセリング及び其の流派の人々は一切の美術的作業には意識無意識の兩作用の不斷錯綜して相助け相濟するを要すと說けり

といへるも此の理に候へど、此は西鶴の場合に意識無意識と申すとは別にて、直接に美を目的とし美術のために美術を營むものにつきての事に候、卽ち美を成ぜんと意識して靑を點し丹を施せども、これのみにては未だ美ならず、此の上に美趣の橫溢し來るは別に無意識の作用によれりとの義に候、近松の如きは之に候べし。他に勸誨を直接の目的とする馬琴の如き、娛樂を直接の目的とする西鶴の如き、感慨を遣るを直接の目的とする詩歌辭賦の如きも有之候て、此は其の直接の目的より更に審美的同情といふが如き間接の目的に移るの手數を要し候。西鶴を無意識と申すは此の際にて、彼れは意識內にては單に娛樂又勸誨といへる淺俗なる目的に停まりたれど、無意不識の間に高尙なる審美的同情を目的とするに至りたるものと存じ候。約言すれば西鶴の浮世草紙を作れる趣意はたゞ面しろをかしく讀まし

めんといふにありたれど、何時か人間の眞相を揣破して同情に訴ふるの呼吸を默會したるものと申すべし。『一代女』には片々ながらもこの縮影鋭く見れ、『五人女』には稍々含蓄の意をなして圓滿に顯れ申候。或は西鶴の意ことさらに社會の浮猥を暴露して此れを刺るにありきといひ、或は西鶴冷に世相を觀じて獨り筆にし獨り笑めるのみといふが如きは、恐らくは聖海上人が社前の獅子のたぐひかと存じ候。斯く西鶴の悟入は無意識に近かりきといへども、されども悟入は悟入にて其の此處に到れる天才の效は沒すべくも候はず、若し西鶴が好みて不健全なる色界の歡樂を題目とせるに罪あらば、そは肉體の快樂と精神の快樂との調和し圓熟せる醉生夢死の社會の全般に渉れる罪にして西鶴は社會の兒たりしに過ぎず候。

西鶴の人生觀を論ずるはやがて『五人女』を評するも同じ事に候、まづ大體の點より申さんに、『五人女』の動因も『一代男』『一代女』の動因も等しく色情なれど、『一代男』『一代女』には只々色慾ありて戀愛なし、眞の戀愛は『五人女』にはじまり申候、之れ明に西鶴が『五人女』に一轉歩をなせし證にて、好色に執する限は戀愛に筆を着くるの餘地なかりしこと當然に候。好色と戀愛とは一方に於て相類し他方に於て相背くものにて、精しく申さば好色も我れを中心とし、戀愛も我れを中心とし、兩者差別見に立脚する點に於ては同一に候へど、また好色の我れは全く我れ一人なり、戀愛の我れは我れと我が愛する人とを合したるやゝ廣き我れなるの相違有之候。此の相違こそ好色と戀愛とを背馳せしむる根本にして、好色は我れに不利なるもののすべてを排し候へど、戀愛は戀人の爲にのみは我れの不利をも顧みず、多淫浮薄は好色のいのちにして實意獻身は戀愛の面目と存じ候、二者の併立せざるは此れにて相知れ申すべし。『五人女』に好色の二字を冠せしは單に市らんためか、はた好色戀愛の別などには無心なりしためか、知りがたく候へど、實際の上にて正しく西鶴は『一代女』と『五人女』との間に一頓悟いたし候。而して頓悟して好色と戀愛との別を辨へ、戀愛の本性を揣破し、到底戀愛の、道念の制埒以外に獨立するを得ざる所以を示せしもの、『五人女』の心中悲劇に候。

總じて古今心中物の精粹は近松の世話淨瑠璃に鍾まれりと申候へど、其の發端は西鶴の『五人女』にあらんと存じ候。心中物とは必竟戀愛といへる一種の煩悩と、義理とか世間とかいへる道念と、即ち哲學者のいはゆる差別と平等との衝突に基くものにて、何故に衝突の此世にあるかは姑く別問題といたすも、本來萬物存在の大原理は件の兩端の調和にあり、之れに正反對なる衝突は存在すべからざるもの即ち自滅すべきものたり、心中悲劇とは此の衝突の調和するを得ずして遂に自滅するものに外ならず、一切の悲劇は此の原則に依りて生ずるものに候。ただ此に注意すべきは斯く心中悲劇のみが盛に我國最大詩人の手に描かれたる所以に候、勿論シェークスピアにも『ロメオ、エンド、ジュリエット』『アントニー、エンド、クレオパトラ』以下心中悲劇に近きものなきに候はねど、其の趣も異なり、且つ我が國ほど多からず。『ロメオ、エンド、ジュリエット』のみは其の社會の我が國のに似たりしため稍々我が心中物と同調にして近松よりもむしろ西鶴に近似せる節有之候、蓋し後に論ずるが如く、西鶴の作はすべて元祿を寫し候へば、南方伊太利を寫して批評家をして

啻に事柄のみならず語句の形までも南方より來れるを見る、其の抒情的音節、其の盲

情熱、其の殷豊なる活氣を見、燦爛たる想像を見、放膽なる措辭を見て誰れか伊太利を想はざるものあらん。

といはしめたる『ロメオ、エンド、ジュリエット』の西鶴に似たるも無理ならぬ義に候はんか。さて立ちかへりて案ずるに、心中悲劇の我が國に行はれしは東洋の社會の性質に由來せしものに候はんか、西洋にては蚤く個人といふ思想發生して、差別を重ずるの風行はれ候ひしより、社會を統制し行く平等すなはち道念もさまで差別に酷ならず、啻に酷ならざるのみならず、兎もすれば差別の方跋扈して、政治に宗教に哲學文學美術に、善惡ともに差別の勝てるより來るもの多き傾候ひき。此に於てや、差別見に立つ戀愛の如きも、一擧一動道念に掣肘せらるゝの累なく却りて神聖視せらるゝまでに相成り申候。東洋は之れに反して古より萬事平等を先とするの傾向強く、隨つて道義の如きも差別的個人的の所業を酷遇するの嫌あるを免れず、萬國史家が亞洲國民の特質を擧げて個人の感識薄く自由の想念に乏しなど申すは口惜しけれども致しかたなき事に候、これ我が國にて戀愛の動々もすれば義理と衝突して心中悲劇を醸す所以に候べし、西洋の戀愛の何處となく白晝公然の趣あるに引きかへ、東洋の戀愛の多く祕事隱密の性あるもゆゑある事に候。或は東洋の戀の肉感に流れ易きを譏るものも候へど、こは西洋とても同轍にて、永く精神上の戀にのみ停留するは寧ろ變例に候、詩人の好みて精神上の戀愛を寫すは之れを縈紆ならしめんためにて强ち戀愛の肉感に終るを咎むる譯は候はず、精神の作用はやがて肉體の作用にして體、心畢竟は二致なく、愛の極は必ず肉體の觸接に終るべきこと心理學の證する所に候。但し實際世間の上にても詩歌美術の上にても肉感を前驅として愛の跡を模するものの賤むべきは勿論に候。

心中悲劇の由來以上のごとしといたし、さて等しく此の地盤に立てる近松、西鶴兩家の殊なる所を考ふるに、まづ目に留まり候は、悲案を結ぶべき最後の破裂、すなはち主人公の滅亡のさまの、彼れ此れ著く相違することに候。單に此く申し候のみにては些々たる表面の事柄のやうに思ひ做されんも計りがたく候へど、決して然らず、其の裏面の意味はたしかに兩家の人間觀の相違といふことに候。近松の情死は『曾根崎心中』『天の網島』を首とし多く男女の主人公が現世の覊約に堪へ得ずして厭離穢土、欣求淨土の念に驅られ、相携へて自滅する心中悲劇の態を具へ候へど、西鶴にありては、現世の覊約、煩は煩なれども、之れが爲に直に厭欣の一念に驅られみづから殄滅の淵に赴くといふことなし、西鶴の人間は斯かる場合に處しても猶現世を見捨てんとは致さず、動々もすれば却りて平等旨を破り、道義の網を潜りても、煩惱の慾を追うて現世にながらへんとす、此をもて必然の結果として他人の手に逼られ不承ながらに死地に就くもの比々是れに候。設ひ一時は來世を樂ふの氣分となることあらんも、其は刹那の出來心にして、根柢を叩けば何處までもこの世を捨てて他界に快樂を求めんの覺悟なく、會々自殺せんとすれば他の手に阻られたる絶體絶命の場合のみなること、おなつ淸十郎もおせん長左衞門もおさんも茂右衞門もお七も吉三郎も皆同樣に候。凡そ煩惱と道念、差別と平等とが一旦衝突の端を啓き候上は特別の事情によりて之れを調和する喜劇、例へば『伊達染手綱』『夕霧阿波鳴渡』などの外は、主人公の滅亡は必定免れざるものにして滅亡の樣樣に三種ありと存じ候、一は飽までも差別に執して平等の法に抗せんとするため遂に社會の手に強迫せられて死するものにて、西鶴の人

間は此のかたに傾けるものに候、二は一に反し平等の前に慴伏して差別の欲を捨て形骸ほどは殘せど有餘の涅槃に入りしも同然、情あり熱ある世間の存在を亡じて白眼世を看るの人となるものにて、馬琴の人間は往々之れに近づき候、三は差別の欲も捨てられず、さりとて平等の法をも破り得ず、悶又悶、遂に自滅の途に就くものにて、近松の人間は之れに外ならず候。近松にありては「難波土産」に「某が憂はみな義理をもつぱらとす」と申せし如く常に差別と平等、煩惱と道念とを幷べ揭げて彼れに五分、此れに五分の重さを持たせ候へど西鶴にありては差別のかた七八分を占め、やゝもすれば批評家の眼に映じけんシェークスピアの人間の如く、人間の本相は煩惱我、煩惱狂にあるかと疑はれ申候。同一社會を寫しながら、近松と西鶴と其の觀ぜし心中物の人物のかくの如く相違いたすは何故に候べきか、蓋しこれ前に申し述べたる、近松の意識的と西鶴の無識的との、また一を理想的ならしめ他を寫實的ならしめ、一をして眞を先とせしめ他をして實を先とせしめたるに由るものと存じ候。審に申せば近松は現實世間の人間の昏々として歡樂に耽るの外、念なきを見、而して其の終に自滅に就くの必至なるを見て、差別我、煩惱我の傍常に平等、道念の看守するものなかるべからざるを察し、且つ此の兩端、時により處によりて互に消長はあれど古今東西に通じて觀るときは兩々端峙して何れを重しとも定め難く、衝突するの已むべからざるものたるを曉り、此の人生不朽の眞相を描破して詩人の本分を完うせんといたせしものに候、すなはち現實の世相は如何あらんも、之れを醇化して眞に近からしめ以て一段明に天の人間を作れる本意即ち造化の極致、即ち天の理想を發揮せんとせる者之れ近松に候、近松もし西鶴に比して高き者あらば正に此の點に候べし、彼れの「大まかなる所あるが結局人の愛する種子とはなるなり」と申せしは、善く其の理想的なりし趣意を表し申候。西鶴は之れと異なりて現實の世相を現實のまゝに觀じ候ひぬ、現實の世相とは如何なる者に候ひしぞ、曰く社會の組織圓熟して差別平等一諦に歸し、人々現世の外をおもはず、打ち見たる所天地は現實の生活、差別我の働作に盡きたらんが如く、無邊に流行する平等の大法力には夢にだに想及せざりし者、これ元祿以上の世相に候、一言以て掩はゞ樂世的なりきとも申さんか、但し樂世的と申すには二義ありて佛家のいはゆる常見外道の樂世と、斷見を經由し斷常二見を空したる後の樂世とは、おのづから別に候、前者は無意識に只わけもなく此の世樂しと觀ずるもの、後者は此の世の外に淨土なく煩惱即菩提なるを意識して此の世を樂しとするものに候。元祿社會の樂世は固より前者にて、何の代の泰平か夫の薾々たる蒼生をして悉く悟後の樂世に達せしむるを得候はんや、此に於てか元祿の社會は動々もすれば平等の畏るべきを知らずして差別の一偏に走るの病あり、悲劇の芽ざす所此にありと存じ候、換言すれば、ひたすら差別界の歡樂を極めんとするが故に平等之れを責めて、尋ぐに哀傷を以てするもの、やがて元祿の心中悲劇に候。西鶴は實にかゝる社會を現實のまゝに描寫するに出で立ちしものにて深く此の奧に踏み入らんとはいたさゞりきと存じ候、彼れは煩惱に狂せる人間が盲奔して遂に道義の大法に觸れて滅する次第を描くに能事了ると思量いたせしものに候、近松は時空を超して其の此の如くなる所以の眞相を此の上に達觀いたせしなり。されば西鶴は元祿といへる一定の社會に實現したる人間を描き、近松は此の阙を取り除きたる人間を描けるものと申すべく、近松の寫せ

る所は直に不朽といふを得れど、西鶴は全部其のまゝを不朽といはんこと難く候。西鶴の人間觀は元祿の社會を悉すも明治の社會とは全くかなはずといふ如きことあるべし、近松の必然掩ひ盡すとは限られねど、また元祿も明治も彼れの埒外には逸し得ざるものに候。時により處により西鶴に同感するを得ざるもあるべく馬琴に同感するを得ざるものもあるべし、而も何人か近松に同感し得ぬもの候はんや。序ながら近松の人間の情熱的なるを元祿の產物といふは異存なけれど、近松の心中物をもて直に元祿を描けるものといたすが如きは淺膚の見たるを免れず候、近松の心中物出で之に造られ感化せられし以後の社會は知らず、近松を造りし以前の社會は決して近松の心中物其儘の社會にあらざりし義と存じ候。勿論時に一二の近松的なる人物事件はありきといたさんも、大體は近松よりも寧ろ西鶴に似、道念と煩惱との衝突に苦みて自殺するよりも煩惱に驅られて盲進し自滅することこそ元祿社會全般の本調に候ひつらめ、これより近松に至らんには尙一際平等を炳焉たらしめ差別との權衡を保たしめざるべからず、近松の理想的なるは此のゆゑに候、西鶴の寫實的なる所以もまた此れにて明瞭と存じ候。

以上西鶴の人間觀の基く所を概說して近松の人間觀と幷べ論じたれば、以下『五人女』の總評に移りてさらに事實の面より之れを明め申すべく候、而して、『五人女』中五の卷は姑く措き、餘の四卷の壓卷は第三と存じ候へば之れを骨子といたして立言いたすべく候。『五人女』の飜刻者は「就中四の卷は西鶴作中屈指の文字、彼れを代表するに足る」と申し候へど、我等の見る所は然らず候。さて『五人女』は其の名の示せる如く、女主人公の悲劇にして、一の卷お夏淸十郞、四の卷お七吉三郞は共に無分別なる若氣の戀、二の卷おせん長左衞門、三の卷おさん茂右衞門は共にやゝ差別つきたる年增婦人の戀にして、後の二者は何れも其戀の性質極めて複雜、眞箇千古の好詩題と見え申候。然るに西鶴は二の卷にては可惜筆をそらして枝葉の事柄に卷の半をうづめ、要所をば卷尾にちらと敍述し去りたるに止まれば見るに足らず、眞に悲劇の面目を具へたるは三の卷のみと相成り申し候。又近松の筆に上りて『戀八卦柱曆』の名篇となりしも之れに候。そも〳〵此の悲劇の主人公は如何なる人物にして其が戀愛は如何にして始まり如何にして終りしか。申す迄もなく西鶴にては茂右衞門は一の配色たるに過ぎず候へば、兩人の戀愛より其破滅に及ぶまで一切の動因はおさんに歸する義に候。而しておさん茂右衞門と全く意外の契を結び夢おどろきて「わけもなきことに心はづかしく成てよもや此の事人にしれざることあらじ此のうへは身をすて命かぎりに名を立て茂右衞門と死出の旅路の道づれと尙やめがたく」遂に邪徑に迷ひ入りし刹那の心機こそ全運命の要にして如何樣にも解せらるべき微妙の問題に候へ。稍々同轍ながらも二の卷おせんの戀は又別樣の所ありて「おもへば〳〵憎き心中とてもぬれたる袂なればこのうへは是非に及ばずあの長左衞門殿になさけをかけあんな女に鼻あかせんと思ひそめしより格別のこゝろざし程なく戀となり」しものに候へば始はさら〳〵長左衞門いとしとの愛着心より起れるに候はず、唯々我れに辛き女の鼻あけさせんの面あて心、卽ち意地、卽ち戀と異方面なる一種の煩惱心、差別心より來れるものにて、終には必然之れに伴生すべき長左衞門への同感も交り眞の戀となりしものと存じ候、されば自然と才覺づき人たる人の娘はかくありたきものと褒められた

る發明女の、たゞ一筋に柔和なるのみにあらで、何處にか意地もありて申さば遊女氣質の幾分に女房氣質の肉を被せたらんが如きおせんの性格もよく相見え申候、且つ此の何處にか遊女氣質の名殘の失せかぬるは西鶴が描ける女主人公の一貫の風格にしてまた元祿女の特質ならんかと存じ候。おさんにありては其の心緒の複雜なることおせんの比にあらず、おさんが侍禍身を汚して今さら退きも進みもならぬ大窮地に陷れるあはれもさることに候へど、彼れが心機窮まりて而して革まり、老陰再び陽に往きて正に背を決して天堂、地獄の岐頭に立てる一髮裡こそ千萬の人間觀を容れて餘あるの地ならめと存じ候。馬琴をして此の際に處せしめば如何、特別の事情なき限は彼れの人間は恐らくは直に刃に伏して心の潔白を證し候はん。近松をして此れに當らしめば如何、『戀八卦柱曆』は答へて申すらく、近松のおさんは流石にしかく單調子ならず、結ぼれてなまなかつらき亂れ苧の解くに解かれぬ義理人情に縛られ夢にだに戀せぬ中の戀となり「ア丶おろかしい事いふ人ぢや我れひとり生きながらへ言譯が立つほどなれば二人生きても同じ事とりちがへようがどうしようが以春と云ふ男持ちながら其方と肌ふれ寐たは定、かたちは生まれ粹つても此の惡名は削られぬ」と自死の以て罪跡を清むるに足らざるを知るとともに、絕えず良心の呵責に苦むさまは表面に相見え候へど紆餘曲折は之れに盡きず、さらに裏面に一大祕密の潛むもの候はざらんや、縱令身に悋氣といへる缺點ありきとは申せ、當初の心根は微塵曇のなかりしものを斯くまで酷き周圍なか〳〵に怨めしく心ともなく振りかへりて茂兵衞の方を見れば這はそもいかに、おさんの胸底には實に夢にだに知らざりし一道の異光漏れ來て兩人の行手を照すに似たり、あはれおさんが無意識的に茂兵衞に寄せし同感は由來遠かれど此に至りて形をなすまでに成長いたせしなり、而して成長いたせる同感は周圍に對する諸多の感情及び危害を避くる生類の本能と混じて一團となり、おさんを刺擊して茂兵衞と共に一徃夢路を辿らしめ候ひぬ、卽ち一方には我れを責むるの道念儼として存し、他方には責めらる丶の煩惱我無意識裡に蟠り以て『戀八卦柱曆』の悲劇を成せるものと存じ候。最後に西鶴のおさんは近松のとも異なり、近松にありては道念の手にさいなまれての墮落に候へど、西鶴にては濡れぬ前こそ露をも厭への意氣ほの見え道義世界に絕望せし極終に「此のうへは身をすて命かぎりに名を立て」んと一直線に煩惱に走れるおもむき有之候。斯くなるには自暴自棄の底に既に知らず〳〵の戀の萌芽も潛みしか、其處までは今は研究いたさゞるも、自暴自棄に流れ易き性格より察するも西鶴が人間を觀ずるの本意は大抵相知れ申候。彼れに取りては道念の羈は以て狂へる意馬を制するに足らず、隙だにあらば驀地煩惱に馳せんとするを人間の本相とせるものに候、されば西鶴は每々人間を惡しく卑しき方より觀ずるの風あり、石山寺の開帳に都の袖をつらぬるは「どれがひとり後世わきまへてまうでけるとは見えざりき皆衣裳くらべの姿自慢此の心ざし觀音さまもをかしかるべし」と笑ひ、尾上の櫻咲く頃は「人の妻の樣子自慢、色ある娘は母の親ひけらかして花は見ずに見られに行くは今の世の人心なり」と嘲り、なべての世のさまを觀じては「人はみなうつり氣なる物ぞかし」「一切の女うつり氣にして」など罵れるたぐひ皆之れより割り出せるものに候。さはいへ理想の歡樂鄕にあらざる限は人生は哀傷は逃れぬものに候へば、西鶴の描ける人間とて固より煩惱一偏なるを得ず。

其の頃おさんも茂右衞門つれてみ寺にまゐ

り、花はいのちにたとへて何時散るべきも定めがたし、此浦山を又見る事の知れざれば、今日のおもひ出にと、勢田より手ぐり舟をかりて、長橋の頼をかけても、短きは我々がたのしびと、浪は枕のとこの山、あらはるゝまでの亂髪、もの思ひせし顔ばせを鏡の山も曇る世に、鰐の御崎の逃れがたく、堅田の舟よばひも若しやは京よりの追手かと心たまも沈みて、たがらへて長柄山我が年のほども此處にたとへて、都の富士二十にもたらずして頓て消ゆべき雪ならばと幾たび袖をぬらし、志賀の都はむかし語と我もなるべき身の果ぞと一しほに悲しく、龍灯のあがるとき白髭の宮所につきて神いのるにぞいとゞ身の上はかなし、兎角世にながらへる程つれなき事こそまされ、此の湖に身を投げて長く佛國のかたらひ。

といひ

切戸の文珠堂につやしてまどろみしに夜半ともおもふ時あらたに靈夢あり、汝等世になきいたづらして何國までか其の難をのがれがたしされどもかへらぬ昔なり向後浮世の姿をやめて惜きとおもふ黑髮を切り出家となり二人わかれ〳〵に住みて悪心去つて菩提の道に入らば人も命を助くべし

とありがたき夢心。

といへる、又はやゝ首尾透徹の致を缺けども末章茂右衛門が心の上の悲劇に筆を移せるくだり、茂右衛門が案内知りたる京の町の忍びあるきにも十七夜の影法師に胸をひやし、雜談の立聞に身をふるはし、おさんの舊夫を一目見るや「たましひ消えて地獄の上の一足飛び玉なる汗をかきて木戸口にかけ出」づるなど何れか緒に觸れて閃發する道念の光に候はざらん、されど刈り盡さゞる雜草は茂り易く、間もなく煩惱の蔭さしてくらぶ山もとの闇路を復たたどりそめ最後の淵に急ぐばかりに候。五百兩の金子を持ち出して家を走りしそも〳〵より、入水と見せかけて身を逃れ愈々罪科を重ねて顧みず「うれしや命にかへての男ぢやもの」といふにいたりて全然不義煩惱の犬となり了れる箇のおさんは豈近松の描かんとして描くに忍びざる所、馬琴の夢にだも想像し得ざる所に候はずや、取りわけ文珠堂の靈夢はやがて我が道念の影なるに之れに對して、

何にならうともかまはしやるな、こちや之れが好きにて身にかへての脇心文珠さまは衆道ばかりの御合點、女道は曾てしろしめさるまじといふかと思へば嫌な夢さめて橋立の松の風ふけば塵の世ぢやものとなほなほやむ事のなかりし。

といへる煩惱心の強梁なる、此の一節にて西鶴の人間觀を悉すに足らんと存じ候。「粟田口の露草とはなりぬ九月二十二日の曙の夢さら〳〵最期いやしからず世話とはなりぬ今も淺黄の小袖の面かげ見るやうに名は殘りし」と西鶴の筆はうつくしけれど、おさん茂右衛門が最期決して潔しとは申されず、之れも煩惱我の是非なしとや申さん。要するに西鶴が一代の述作は一面に武士氣質、好色氣質、商人氣質のさま〴〵を寫しておのづから其の骨髓となれる一道の氣魄を發揚せしめぬ、大和魂とは之れに候べし。而して他面には元祿を寫實して其の奥に伏する煩惱狂の人間を描き候ひぬ。右に日本左に元祿の人間を束ねし西鶴が手腕亦亙ならずと申さんや。近松の世話物は乃ち元祿を門として横に不朽の堂奥に通れるものと申すべく、之れに時代物を幷べ觀るときは、近松の手には右に不朽の人間宿り左に日本國民藏れぬと見え申候。ついでながら申上ぐべきは近松を理想的と申すに疑を挾むものあるこ

とに候、此は恐らくは理想の本義を解せざるに由り候はんか。近松は實よりも眞を理想とせるが故に其の作厭世樂世の二端を絶して孰れにも近づきぬ、これ理想の本義に候はん。天地の眞は本來無邊なり、其の定着せる意味はカントのいはゆる意匠と申す一形式の外說明すべからず、說明すべきものは既に實にして眞に候はず、西鶴は固より意識して理想せんとせざりしが故に、此に論ずる限に候はねど、かの馬琴の人間を觀じて煩惱は何時も道念の下には屈し易きものとせるが如きは理想の小なるもの、其れ唯小なるがゆゑに樂世とか厭世とか黑とか白とか說明するを得る義に候、近松の厭欣黑白の矛盾を包蓄して場合により何れとも見らるべき所、殆ど無理想に似たるは其の大に理想的なる所以に候はずや。尙近松の論は盡きねど他日に讓り申候。

　終に拾ひて申上ぐべきは西鶴が神佛不思議に對する觀念の著く現世的人間的なりしことに候、之れはた彼れの人間觀の自然の結果に候はんか。西鶴は不思議を寫せども心より之れを信じたるものとは見えず、隨うて神佛と申すも神々しき所なく其の言ふ所は皆西鶴自身の語氣にして前に舉げたる文珠の告の外

老翁枕神に立たせ給ひあらたなる御告なり、汝我が言ふことを善く聞くべし、總じて世間の人、身のかなしき時いたつて無理なる願、此の明神がまゝにもならぬなり、俄に福德をいのり、人の女をしのび、惡き者を取り殺しての、降る雨を日和にしたいの、生れつきたる鼻を高うしてほしいのと、さま〴〵のおもひ事、とても叶はぬに無用の佛神を賴り、厄介をかける、適にし祭にも參詣のともがら一萬八千十六人、いづれにても大欲に身のうへを祈らざるはなし、聞いてをかしけれども散錢投げるがうれしく、神の役に聞くなり、此のまゐりの中に只一人信心の者あり、高砂の炭屋の下女、何心もなく足手息災にて又まゐりましよと拜みて立ちしが、小戻りして、私もよき男を持たして下さりませと申す、其れは出雲の大社を賴め、こちは知らぬ事と云うたれども得聞かずに下向しけり、その方も親兄次第に男を持てば別の事もないに、色を好みて其の身もかゝる迷惑なるぞ、汝をしまぬ命はながく、命ををしむ清十郎は頓て最期ぞとあり〳〵との夢かなしく云々。

といへるなど、粹なる親爺の口小言とも聞えて可笑しく候。何れの世にか斯かる道化たる神佛のましまさんや。或はまた此等の神佛の、作者の化現とも見ゆると共に、之れに出會へる人物の心とも見らるゝより考ふれば、穿ち過ぎたる說かは存ぜねど、西鶴は一切の神佛不思議を主觀的のものとし、我れの心の影と解釋せるにあらざるか。『一代女』夜發附舞の章に、

　一生の間さま〴〵のたはぶれせしを思ひ出して觀念の窓より覗けば、蓮の葉笠を着たるやうなる子供の面かげ腰より下は血に染みて九十五六ほど立ちならび、聲のあやぎれもなく負りよ〳〵と泣きぬ、是れかや聞きつたへし孕女なるべしと氣を留めて見しうちに、むごいかゝ樣とめい〳〵に恨み申すにぞ、扨ては昔血荒をせし親なし子かと悲し、無事に育て見ば和田の一門より多くて目出たかるべきものをと過ぎし事ども懷かし、しばらくあつて消えて跡はなかりき、是れを見るにいよ〳〵世を限とおもひしに、其の夜明くれば、つれなや命の捨てがたく思はれし。

といへるは何等淒涼の筆に候ぞ、今日の知識より見るも優に幽を闡くの文字と申すべし。

更に「總じて五百の佛を心靜に見とめしに皆々

逢馴れし人の姿に思ひあたらぬは一人もなし」といへる「皆思謂五百羅漢」の條は『一代女』の掉尾の絶唱、此等に見ば思半に過ぐるもの候はん。

西鶴の文章と、西鶴の人生觀に關係ある滑稽諧謔とは他日別に一題として論ずるの價値あるべければ此には省き候。たゞ彼れの小説家としての技藝につきては到底幼稚と斷ぜざるを得ず、人物の主客を轉倒し記事の繁簡を亂し、意匠脚色の單純に失する等、今日より言へば未だ小説の形を成さずと申すべし。西鶴に取る所は其の人間觀の深刻にして、衣を剝ぎ皮を剝ぎたる元祿の煩惱社會を忌憚なく活寫せる點に御座候、是れのみにて西鶴は近松馬琴と并べ論ずるの價値十分と存じ候匆々不宣。

（明治二十八年）

眞我

人間は自ら飾り僞る動物である。眞我に達するの困難は、必ずしも無我に達する困難に劣るものでない。切に眞我の人を想望する。

冷氣ある個人、温氣ある個人、熱氣ある個人、要するに夫が眞實でさへあれば、何れでもよい。困難は其の冷を冷とし、温を温とし、熱を熱として傳へる點にある。熱を以て冷を議し、冷を以て熱を議する謂れは無い。

今日の如き時世にあつては、百人寄れば百個格別の世界である。共通同感の賴みは如何にも果敢ない。各人はたゞ默々として其の行かんとする所に行く外はない。

我等が思議言説の底には、たゞ默の一字があるのみだ。それをお互に斯うして口を動かし筆を動かすといふのは、多分に外から强ひられる結果である。苦しいながらに絞り出す叫聲に外ならない。

植木屋

植木屋といふものはよく煙草を吹かして休むものだ。庭でも造らうとすると、二三十分もそこらの石や木をいぢくつて居るかと思ふと、軒先に腰を卸して、銜へ煙管をしながら、ぽかんとして庭を眺めてゐる。半時間でも一時間でも眺めて居る。併しあれが庭造りの人生である。石を動かしたり土を返したりして居る忙しい間が彼等の實行の世界で、銜へ煙管でさも閑さうに見える間の頭の中が彼等の宗教であり、哲學であり、文藝である。茲に人生の縮圖があると見れば、面白いではないか。

眞の生活

次の一年のあひだ、私は如何なる瞬間に於いて、眞の生活を經驗する機會に出會ふであらうか。一毫の見えも無い、僞りも無い、恐れも、遠慮も、無理な緊張も、だらけた單調も無い、大地から生えぬいたやうな生活に、大膽な滿足を味ふ機會がせめて瞬間たりとも幾たびあり得るであらうか。我々は之に渴して居る。

生命

眞と妄、美と醜は、共にたゞ有と無、生と死、の別名である。

生命のシムボルは美となり、死のシムボルは醜となる。

生命を味はんとする心が、美の要求である。

（『斷言』より）

悲劇論

厭世觀の三類及び其の要件

樂世といひ厭世といひはた樂天といふ、其の義を窮めて十分ならんとせば、先づ人生の原理より說き起さざるべからず。されどそは本論の能くする所ならねば暫く措きつ。世の詩人を論ずるもの動々もすれば則ち、慒然言を立て僅に右左の一端を揣摩して厭世といひ樂世といふ、畢竟推理の精しからざるが故也。吾人は心理學者の所論以外に、哲學上より厭世觀の構成せらるゝ所以の一斑を論じ、其の種類中著きもの三を擧げ併せて之れが要件を示さんとす。

人生の兩面

吾人をして冒頭第一に前定せしめよ、曰く、人間の本然には一見相反するが如き兩端あり、以て天地萬有の二元の面と相應ずと。所謂兩端とは何ぞや、靈性と肉性、理性と感性、道心と煩惱、博愛と利己、社會性と個人性、凡そこれらのものは精確なる點に於て多少相違する所あらんも、大體は其の義相通じ、一は平等圓融の旨を成ずるの根本となり、他は個々差別の相を現ずるの原理となる、未然は知らずといへども、過去及び現在の經驗以內に於ける事實は此の如し、吾人の前定せんと欲するはこの事實なりとす。復言すれば、人間の本性は由來なりとせんも、表裏相卽の關係によりて一面に平等心と現じ、他面に差別心と現じ、相對し相背くの勢を示す、是れ經驗上否むべからざるの事實也。吾人をして唯此の事實を前定せしめよ、而して其の何ゆゑに然るかを問ふこと勿れ、若し夫れ之れが價値を批判して平等と差別とを是非軒輊するは、やがて厭樂二端の岐るゝ所以にして、後段の論點なりとす。

快感苦感の意義

快苦の意義を論じたるもの古來尠からず、或は之れを關係比較の上より見て度の大小に歸し、或は之れを意識の原理より推して消極積極の論をなす。今快感苦感の意義を考定するに先だち、本論の第二の前定として、人間は欲を有するもの、卽ち欲の動物なりといふべし。饑ゑて食を欲し凍えて衣を欲するは煩惱の欲なり、仁を成し義を成さんと欲するは道心の欲なり、かゝる意味にて人間は欲の動物なり。また欲は必ずしも意識に入らざるも、知らず識らず本然の底にありて活動するを得べし、故に意外に得たる物に對する滿足も同じく欲の滿足といひて不可なし。要するに人間は緒に觸れて雜多の事物を意識的、無意識的に將欲す、人間の人間たる活動は主として此の欲に基く、之れ爭ふべからざるの事實なり。

さて此の前定によりて快苦の義を案ずるに、二條の說明を得べし。其の一に曰く、他の一切の事情を除き、單に快感苦感の二者をのみ抽き出して計量するときは、快は人の得んと欲するもの、苦は人の避けんと欲するものなり、卽ち快苦の二者を欲の尺度に擬するときは、快は欲の向ふ所、苦は欲の拒む所といふべし、隨うて快を樂ひ苦を忌むは人間の自然なり、故なくして之れに背くは自然に背くなり。若し夫れ欲するが故に快なるか、快なるが故に欲するか、此等は此に辨ずるの要なし。其の二に曰く、

快の來るは欲の充たされたる場合にして、苦の來るは欲の阻まれたる場合なり、斯くいへばとて欲が直接に快を目的とし苦を目的とすといふにはあらず、欲の目的は別に之れあり、別に之れあるの目的に達せると否とに由りて報酬に快苦の品ありといふのみ。或は難じて曰く、人茲に忠義を成さんと欲すとせよ、而して成し得たりとせよ、其の結果は往々却りて苦なることあるにあらずやと。これ偏見のみ、既に便宜のため人間に兩面あることを假定せる以上は、これによりて此の疑を解かんこと易し。おもふに欲の滿足と不滿足とは常に該の欲の主に就きていふべきものか、忠義といふが如き平等心の欲を充たしたる場合には、宜しくまた平等心の快苦如何を考ふべし。上の例の如きは此の標準を誤りたるの論なり、平等心は忠義を將欲し之れを得て快く滿足しつ、たゞ差別心は之れがために不快を感じたり、論者乃ち此の差別心の苦を誤り認めて平等心と混淆し、さて平等心は欲する所を得たれど結果は苦なりきといへるなり、この事尙後に論ずべし。

人生の目的と快苦

人生の目的の如何なるものなるかは此に論ずべき限にあらず、さはれ之れと快苦の情とは如何なる關係を有するか、總じて目的の成就したる結果の快なるは、猶欲の遂げられたる瞬間の快なるが如きものか。此問題を解釋せんとせば、所謂目的と欲との關係を明めざるべからず、吾人は玆に目的と欲とを合して論ずべし。固より欲を全く一種の衝動のみとし、之れに目的を附して指導するものは別の原理なりとするも一說なれど、本論にては差別心と平等心とを並べ掲げて、差別心には差別的欲あり、之れを指導する差別的目的あり、平等心にもまた平等的欲あり、及び之れが標本となるべき平等的目的ありとするが故に、欲と目的とを別論するの必要なし。換言すれば欲するが故に目的とするか、目的なるが故に欲するか、此れらの先後は論ぜざるべし、たゞ既に目的といふ限は、必ず欲するものならざるべからずといひて已まんのみ。蓋し平等心も差別心も全く欲せざるものを將て目的とするが如きは自然の人情にあらず、隨ひて目的の達せられたる結果は常に快感ならざるべからず、尠くとも之を欲したりし半面は快を感ぜざるべからず。之れに因りて是れを觀れば、人生の目的とは人間の最も欲すべきもの、又現に欲するものにして、之れを得れば快を感じ、之を失へば苦を感ずるものなり。言ひ更ふれば、快樂は直に人生の目的にあらざれど、目的は必然快樂の色を帶着せるものならざるべからず、快樂は目的を達したるの結果なり、報酬なり、快樂說と苦行說とは此の點に於て調和すべし。因りて思ふに人生の眞の目的は感性、理性の兩者を等しく滿足せしむるもの、卽ちいはゆる差別、平等調和の域にあるものならざるべからざるの理、此れにて益々明なるに似たり。而して人間は精進以て此の目的に近づき得べし、欲する所に從ひて矩を踰えざるの妙境は蓋しこれならんか、此の點に於て人生は多望なりといはざるべからず、吾人が世の厭世論に同ずる能はざるの一根據此にあり。

目的と手段との齟齬より來る厭世觀

既に目的といふ、希望して而して之れが手段を取れるものならざるべからず、到達すべからずと信ずるに及べば、目的たるの性は亡ずべし。されどまた獲得せんと欲したりし目的の、時に或は獲得せられざることあり、所謂目的と手段との齟齬これなり。而して欲したるものを得ざるは苦なること既に論ぜしが如し、人もし此

の見を推し廣め、人生の目的限なくして手段の之れにかなふべきなきを信ずるに至らば、此に目的の破壞を來し、人生に絕望して之れを厭離するの已むを得ざるに終らん。人間は欲の動物なりといふの一案、既に如何さまにか欲するの目的あることを前定するが故に、此の目的をさへ破壞せざるを得ざる自家撞着の苦境は、人を厭世の淵に驅るもことわりなり。斯くして來る厭世觀最も世に多し、青春多望の徒が坎坷數奇、失敗に失敗を重ねて遂に現世に絕望し、自家の目的を自ら破却し去るに了るが如きは皆此の部に屬せり。吾人の論ぜんとするは此の種の厭世觀の由來なりとす、之れに凡そ三種あり、（一）人生の目的を平等心差別心兩面の滿足に置けるもの、（二）之れを平等心の滿足に置けるもの、（三）之れを差別心の滿足に置けるものこれなり。人生の目的成就したる結果は必然

（一）平等心差別心兩面の滿足

を來すべしと信じたりしものの、一朝この兩面の到底衝突すべきもの、調和の望なきものなるを見るや悲觀之れより生ず。一時の例を援きて曰はゞ夫の平の重盛が忠孝兩全の途なきに絕望し甘じて死地に就けるが如き是れなり。世或は忠と孝との衝突を目して、直に二種の平等想の衝突せるものとなす、されど此は誤れり。當時法皇と淸盛との不快は、理により是非を匡さば歸着する所あるべし、假に淸盛の暴橫を非とし、法皇の之れを惡みたまひしを理なりとせんか、單に平等心の上よりいはゞ重盛たるもの直に馳せて法皇の御味方に參ずべきのみ、何を憚りてか父を顧みんや。此の際重盛が父を見ること路傍の人の如くなるを得ざりしものは必竟親を先にし疎を後にする差別想の無下に蔑視し去るに忍びざるものありたればなり、孝も此の如き意義なりとせば孝は差別心に根ざせるの德といふべし。親を捨つるに忍びざるは差別心の德なり。理に就き君に奉ずるは平等心の德なり、（此等につきては論あるべけれど此には省きつゝ、しかも二者共に善なり、軒輊し易からず、此に於てか衝突の已むべからざるものあるなり。此の例を全人生の上に應用するときは、則ち本條の厭世觀となるべし。さればこの種の厭世觀を構成するの要件は次の三條ならん、第一、人間に差別平等の兩面あるの事實を認め、第二、この兩面ともに眞にして輕重の分なきことを信じ、第三、而して兩者の到底調和すべからざるを斷定すること是れなり。兩者の調和するを容すときは樂世主義に入るを得べし。若しくは厭世に陷らざるを得べし。次に人生の目的は

（二）平等心の滿足

に伴ふを以て足れりとするの論者あらんか、人生は冷かなる理性の滿足に終るべし、差別心の欲の如きは初より存在すべからざるものとなるべし。而も實際の人世にありては、差別の欲禁ずるに由なく、精進に精進は重ぬとも、動々もすれば乃ち退轉して煩惱の濁を掬す。換言すれば、本來存すべからざる差別心の存せるため、人世は汚濁の淵となり煩惱の宅となる、厭離穢土の念は之れより生ずるなり。ストア學派、Kantian Rijorism は知らずといへども、東洋思想中にはこの類の厭世觀最も多し、之れに要する三件は、第一差別平等の兩面あるの事實を認むること、第二、此のうち平等心を是とし眞とし差別心を拒排すること、第三、しかも差別心の到底現世にては脫離し難きを信ずること是れなり。差別心を拔去すること容易なりとするものは厭世に到らず、一派の小說家等が描く賢人君子は大抵かゝる人物なり。最後に人生の目的

（三）差別心の滿足

を來すにありとし、平等を否定するものあり、

而も倘ほ否定したる平等心の抑へ難きありて、我れをして差別の欲に耽るを得ざらしむと觀ぜんか、此にも厭世觀を生ず。之れに要すべき三件は、第一、差別平等の兩面あるの事實を認むること、第二、差別心を眞實とし平等心を妄とすること、第三、されど倘現世にては平等心の芟除し盡し難きものなるを信ずること是れなり。而して此のたぐひの厭世觀は實際あること稀なり、これ一には人間の本然の到底平等心を無視し得ざるものあると、一には若し之れを無視し得るほどの人ならんには、一時抑壓し去りて差別心の欲に耽ること難からざるとに由るならん、此れらの人はやゝもすれば劣等なる快樂主義に入るなり。

人生の目的を苦とするの厭世觀

前段論ぜし所はすべて先づ人生の目的を立て、而して之れに達し得ざるに及びて之れを破壞し去り、人生を厭ふに終るものなり。或はまた、人生の目的を以て苦の結果を生ずべきもの、即ち人間の避けんと欲するものとなすの論あり。此はみづから目的を立ててみづから破却するものなり、何となれば、既に目的といふ限は之れを得れば快なるべきに却りて苦なりといふは矛盾なればなり。おもふに此の論は前に擧げたる(二)(三)等の場合の變形せるものにして誤謬を含むの論たり。試に(二)の例に就きて言はんに、論者以爲らく人生の目的は平等心の滿足にあり、されば其の結果の苦なること例へば義のためには愛をも捨てざるべからざるの類也、人間何を苦みてか强ひて斯かる世に生存し、斯かる不快の目的を追ふを要ひん、世にある限は苦しき目的を追求せざるべからず、死してこの苦を解脫するの安に如かざるなりと。吾人は此の說を難ずるに一種の快樂說なりといふを以てせざるべし、快樂と目的との關係は前に論ぜし如くなればなり。此の說の缺點は平等心と差別心とを混淆せるにあり。平等心の欲する所を成し得たるの結果は、平等心其の物の滿足となるも差別心には苦となること、人事往々にして然り、論者は此の際に誤謬の見を插みて、差別心の苦を平等心の快とを混同したるものといふべし、若し此の如く平等心と差別心と快苦相逆ふを咎めば、飜りて(一)の厭世觀に參すべきなり。夫の仁義は人生の目的なれども之れを成ずるは苦なりといひ、又は肉體の快樂は人生の目的なれども之れに耽るは苦なりといふが如きは、概ね此の謬見的厭世觀にして、其を構成すべき要件は、第一差別平等の兩面の存する事實を知り、第二其の一方を是認し他方を非認し、第三非認したるものの苦を是認したるものの滿足の上に蒙らしめて是認したるもの其の物の滿足は苦の結果を生ずと斷案するにあり。

外に初より人生の目的を否むの論あり、此は人生に目的なしとし、一躍して他界に之れを求むるものなれば、立脚點おのづから以上の論と別なり。

また人生の兩面を認むるに及ばずして厭世觀を構ふるものあり、道理以外、平等以外に人生なしとするもの、及び煩惱心、差別心の欲を追ひて顧みざるもの是れなり。平等の一面に埋頭するものは、萬事この範圍に於て自由に成壞し得べきものと信ずるがゆゑに、反對の原理なる差別の傍より之れを覊絆するを知らず、幾たびか躓きて遂に吾生の厭ふべきを觀ずるに至る。差別の一面に執するものは乃ち一意煩惱の欲を追ふのみにて、平等の大法の高處より之れを限れるに心つかず、此に於てか歡樂の極めがたく富貴の恃みがたきを觀じて我れと厭世の淵に趨くなり。さはれ此等は畢竟するに前に掲げたる三類の何れかに歸宿すべきもの

にて、此のまゝにては取り出でて論ずるの價値なしとす。

悲劇の種類を論ず

上

悲劇はおよそ三面より論ずるを得べし、第一悲劇の哲理、第二悲劇の美、第三悲劇の結構これなり、而して本論の主とする所は此の第三の問題を研究するにあり。今主題に入るに先だち、第一、第二の兩點に就きて吾人の取る所を一言し置くべし。悲劇の理に關する學說は今日さまで多樣ならず。それ差別の調和といふことを萬有存在の一原理とすれば、之れに正反對なる差別界の衝突といふことの、到底存在を害ふものなるは言ふまでもなし。されば人間社會の上に見るも、調和は人生の幸福を意味し光明を意味すれども、衝突は悲慘、暗黑の半面を表す。或は人情の柵にせかれ、或は讒謟邪惡の毒に中り、盲運のため、錯誤のため、つぶさに人生の苦惱を味ふもの、此等すべて人間界の衝突にあらざるはなし。義理人情の柵とは情と理との衝突をいへるなり、讒謟邪惡の毒とは善人と惡人との衝突をいへるなり。しかも人生は終に衝突なくして已むべきものにあらず、社會の進步を助くるに於て衝突はまた人生必須の一原理なり。之れを河水の混々として晝夜を舍てざるに譬ふ、其の滔々は以て人生の順境に比すべく、其の巖に激し隈に淀まるは以て世路の艱險に比すべし。悲劇は乃ち此の衝突に由りて人生を描寫せんとするもの、猶畫家の險山難水に筆を着けて全幅の景を眞にせんとするが如し。言ひ更ふれば、悲劇は衝突以上の人間を寫せるものなり、但し斯くいへるのみにては盡きず、悲劇とは人生の衝突が其人物の死に迄るまで解け去らざるさまを描けるものなり、主人公の死によりて僅に衝突の此の世より拭ひ去らるゝの謂なり、之れを悲劇的結案といふ。

次に悲劇の美的快感を吾人に與ふるは何故なるか。之れが解釋は古來一ならず、或は之れを藝術の力に由るとし、或は之れを崇高の理に同じとし、或は之れを利己の一念に基かしめんとす。吾人は之れを同情性の滿足に歸せしむべし、卽ち悲劇によりて人間美の益々圓に現はるゝと共に、吾人の之れに對する同情ますます切なるを得、この切なる同情其のものはやがて美的快感の根ざす所たり。

下

悲劇の結構とは人物の運命をして悲劇的結案に達せしむるの模樣を謂ふ、之れに相反對せる二系の說あり、一は稍々廣き意にての善惡因果說にして、他は生存卽罪惡說なりとす。善惡因果說にありては、悲劇的結案をして必ず其の人物の上に由來せしめ、犯せる罪、性格の缺點、錯誤等の原因ありしがために、悲劇的結果に到達せるものに外ならずとなす。すなはち悲劇によりて現世の無法無秩序のものにあらざること、罪と罰との必然相平均すべきものなることを說明せんとするなり、故にまた此の說は之れを樂世的悲劇論ともいふべし。生存卽罪惡說は乃ち始より人生其の物の罪惡なる所以を前定して立論す、以爲へらく、現世は穢土なり、火宅なり、天道必ずしも是ならず、姦邪時を得て忠良却りて窮途に泣くもの、見わたす限り世間は此の如し、人生豈厭ふべからずや。而して最も善くこの理を說明するものは悲劇なり、吾人は悲劇に感興を發して現世に執着するの念を斷つべしと。悲劇的結案の常に其の人物の缺點、罪惡、過誤等より來らずして、却り

て自然の人事上に織り出さるべきを主張するなり。前者に對して此の說を厭世的悲劇論といふべし。

さて上の二說は何れか是にして何れか非なる。思ふに兩者共に或度までは眞にして其の以上は偏せるの論なるべし。之れを個人と社會との上に見よ。或時は個人罪(固より廣義にての罪)ありて自ら亡ぶることあり、此の場合にては善惡應報の分まことに顯著なり。或時はまた、社會(尠くとも當人以外の四圍)罪ありて而も個人の之れが犧牲となることあり、此の際にては善必ずしも勝者にあらず、惡必ずしも敗者にあらず、强弱の標準別に存するなり。樂世論者は個人に罪あるを知りて社會に罪ある場合を認めず、厭世論者は社會、否人生其のものに罪あるを知りて個人に罪ある場合を等閑に附す、共に長短あるを免れざるなり。

樂世論者難じていはく、社會の罪もと之れあるべし、しかも尙他に個人の上に罪ありてこそ初めて悲劇的結案を生ずるなれ、單に社會の罪といふを以て個人を殺すが如きは、天道の本意にあらず。例へば世を擧げて濁れるの際に獨り皭々の白を以て處るもの、彼れは少くとも和光同塵といへる處世の一原則にたがへる點に於て罪あり、以て甘じて悲劇的結案に服すべきの類也と。吾人はむしろ斯かる論の强辯に近きを信ず、人間より神にあらざる限りは、君子も欺くに道を以てするときは欺かるべし、オセロ、デスデモナは言ふに及ばず、コーデリアの淸淨純潔を以てするも、此の如く穿鑿し來らば多少の缺點なからんや。之れを極言するときは世の惡人の爲に欺かるゝ者は凡て欺かるゝ點に於て缺點ありといはざるべからず、强ひて斯かる薄弱なる據を索め來りて悲劇の因緣となし、却りて他の重き社會の罪といふが如きものの天網に漏るゝ所以を觀過す、至當の論といふべからざるなり。必竟これらの論者は、因果の理を狹く解したるの弊に坐す、彼の勸懲說は見地の最も狹隘なるもの、樂世論はやゝ廣けれども尙五十步百步の譏を免れざるものといふべし。勸懲論者は人間の有意的善惡を根柢として因果應報を說き、樂世論者は之れを擴めて性格上の缺點、過失等をも應報の因となす也。されど此の外に更に差別界必至の缺點として、個々人相互の地位、關係より織り成さるべき罪惡の存するを知らざるは二者一なり、約言すれば到底個人の罪のみを認めて社會の罪を認めざる弊あり。或は社會卽ち個人の集合にして、社會の罪といふも必竟は個人の罪の相寄れるものに外ならずといふ。何ぞ必ずしも然らんや、松に聲なく風に聲なし、而も松風相あひて籟をなす、社會の事も亦此の如きのみ。且つたとひ個人の罪相集まりて社會の罪を成ぜんとするも、報を受くるもの常に罪を荷へるものにあらざることあるに於てをや。

厭世論者は曰く、個人の罪を認めざるにあらざるも、量に於て社會人世の罪の居多なるをいかにせん、且つ個人をして罪を犯さしむるが如き不完全の社會は既に罪あるにあらずやと。斯かる厭世觀を根柢より說破するは容易の業にあらず、此には只人間の本然が實際世の進步といふことを豫期し、及び進步の頂點として罪惡跡を絕てる圓滿の社會を想像し得るの一事を以て之れに答へんのみ。人生に悲劇あるは、其の到底罪惡汚濁の淵なるに由るか、はた不完全より完全に向ふの途次、崎嶇坎坷の免れがたきものあるがためか。吾人は後者の意義にて樂世的ならんを欲するものなり、卽ち個人に罪ある場合を認むると共に社會に罪ある場合をも認め、而して社會進步のためには個人の遂に之れが犧牲となることあるの理をも信ずるものなり。

以上の所論はむねと人生の上より觀察せるものなれど、更に之れを劇として見るも同樣の結論に到るべし。一切の悲劇の動機を主人公の罪に歸すると、社會の罪をも之れに交へ用ふると、美的快感を買ふに於て差等あり。戀のために死するの『ロメオ、エンド、ジュリエット』は『ハムレット』『キング、リーア』の多趣なるに如かず、はた『博多小女郎浪枕』『戀八卦柱曆』等複雜なる悲劇に至りては、皆多少社會の罪に筆を着けざるなし。個人の罪を主とするの悲劇にありては、假令主人公に同感するの度は深切なることあらんも、之れにより全人間に同感すること難し、此をもてこの種の悲劇は悲哀なるを得るも高大の致なく、眞に悲壯の境に達すること尠し。之れに反して全人間、全社會の罪によりて悲劇的結案を結構するときは、個人たる主人公に同感すると共に、之れに對する人間の全運命といふことにも同感すること容易に、何人も高大悲壯の妙味を解し得べし。我が心中悲劇の悲壯といはるべきものに乏しきは、職として此の理に由るか。

個人の罪によりて悲劇を成すにも、或は差別の欲に走りて平等を忘れたるもの、或は平等の一面に偏りて差別を疎にせるもの、固より種々なるべし。社會の罪といふにも品あり、二三の惡人が人情の弱處につけ入りて罪なき人を陷るゝが如き、又は盲運に役せられて悲慘の境に沈淪するが如き、此れらは其の最下層なり。雜多の性格の相寄れるため、何れ罪を犯せりともなく、錯綜糾紛して悲劇をなすの類は其の中層なり。己れの把持する主義、道德と當社會の主義、道德と衝突して悲劇的結案に到達するもの、例へば之れを小にしては革命時代の偉人が往々にして陷る悲壯の末路、之れを大にしては全人間の惡と鬪はんとせる釋迦、基督の徒の如きは其の最上層なり。而して若し之れらの種々を交錯せしめたるものあらば、其を以て悲劇の最も妙なるものとすべし。

終りに、樂世的悲劇論者は、當然の結果として、悲劇の快感を道德の圓成せらるゝに基かしめ、厭世的悲劇論者は、之れを現世の穢土たるを示すに由るとなす。すなはち一は人間の道德心の滿足を主とし、他は人間の厭欣心の滿足を主とするなり。此に於てか前者は漸く美感と實感との區別を沒せんとし、後者は悲劇と喜劇と觀美の方法を二途ならしめんとするの傾あり。此は他日題を改めて論ずべければ今は言はず。

劇詩人と人生觀

造化意ありて天地を造れるか知るべからず、忖度するものは我れの心なり。精舍の鐘の音に諸行無常を感じ飛花落葉に盛衰のことわりを悟るもの、彼れの現世厭ふべしと念ずるは猶井して飲み畊して衣る無懷氏の民の知足淨土の樂趣に傾くが如きのみ。厭ふべきが如く樂むべきが如く渾圓として端なきものはそれ天地の實相か、厭樂の目は畢竟觀るものの心にあり。

詩人は第二の造化なりといふ、劇詩人に於て最も然り。手に眞宰の樞機を把りて、生殺與奪心のまゝ、機微の運命を描く、この刹那、詩人の懷臆は江漢の廣きよりも廣く霽月の清きよりも清かるべし。偏執の見を將りて强ひて自家の人間を染め出さんとするが如きは固より客觀詩人の事にあらず、造化の心なきが如く劇詩人はた此の意に於て無心なるべきなり。さはれ詩人もまた人なり、日常差別の世に處して、朝三暮四、喜怒の其の身に蝟り來るに逢ひては、誰れか厭樂の間に出入することなしといはんや。一面に平等無私の詩人、むしろ第二の造化翁と

して花にも同情の涙を濺ぐの彼れは、他面に社會の一分子として或は生をはかなみ世を憤ることもあるべし、しかも其の社會に處するの心は以て詩人の心と混ずべからず。此に於てか劇詩と劇詩人の人生に對する觀念とは如何なる關係あるかの問題出づ。就中悲劇と其が作者の厭世觀との關係如何。

人間の全相を寫さんとするものの、ことさらに我見を其の間に插むべからざるは既にいへるが如し。即ち劇の極致をいへば、其の描ける所は直に無端無方の天地と相通じ、心ありて作爲せる我れの小天地觀とは相關せざるを本意とす。否天地觀ある必ずしも咎むべきにあらず、思量以外直に造化の大天地觀と冥應する底のものならんには、小天地觀といふとも誰れかは咎めん。要するに劇詩は作家より出でて而も作家の見地を離れ、獨立自主の姿をなさざるべからざるなり。されど此は之れ極致につきていへるのみ、シェークスピャの作或は之れに近かるべく、近松の作また或は之れに近かるべし、而も事實果して然りや否やは本論の問ふ所にあらず。バイロンが世を憎むの念、衷に盛に情を抒するの『チャイルド、ハロルド』に成功して、人間を描くの『マンフレッド』『ケイン』等に失敗せる、縱令失敗は之れありきといへども、劇詩の必ずしも作家の影を宿せるものなきにあらざるを見るに足らん。しからば即ち劇詩の上につきて作家の觀念を窮めんとする、如何せば可ならんか、劇詩人が抱持する厭世觀の其の作る所の悲劇に見はるゝの模樣如何。

此の問題に答へんとせば、先づ之れを作劇の趣意に求めざるべからず、作家が悲劇に筆を着くるに至れるは何故なるか。時としては單に功を收め易きのゆゑを以て悲劇を擇ぶ、猶畫家が春水の畫き難きを避けて、秋渚蘆荻の畫き易きに就くの類なり。又は當代社會の嗜好に刺せられ、其の以外に一歩を轉ずるの餘地なかりしため、可惜手腕を悲劇の一面にのみ揮ふものあり。これらはすべて全く自由なる詩人の境にあらず、斯くして出で來るの詩篇は、縱令幾百部に及びて而も悉く一樣の悲劇なりきとするも、此の故を以て作家は人世を一大悲劇と觀ぜりといふべからず。之れに反して作家眞に天地を涙の谷と觀じ、此に感發して悲劇を成せりとせんか、此の事實をだに定かならしむるを得ば、作は僅に一篇にとゞまらんも、以て優に作家の厭世思想を窺知するに足るべし。所詮本論の要は第二の造化が其の作に先だちて懷抱する本意の何邊にありしかを研究するにあり。吾人は之れを四點に分ちて下に論述すべし。

第一、作家みづから權に作中の或人物に化し其の言動によりて自家の本意を表白することあり。第二、其の主人公はやがて作家自身にして、隨うて全曲に通徹せる悲慘の聲は作家の感慨に外ならざることあり。されど上の二者は凡て未だ純粹なる客觀詩とはいひがたし、蓋し斯く明に主人公若しくは其の他の人の言動に作家の影の憑れることを知り得るに於ては、其の詩は到底作家一人の外に眞の人間を寫すこと能はざるべければなり。第三、主人公と、作家と直接に合體せりといふにあらざるも、描く所の人間すべて作家の實相と觀ぜる性格を具し、而して其の性格は一途悲劇的なることあり。第四、個人の性格上には別に作家の厭世的所見存せざるも、千差萬別の人間の錯綜せる際に、必然悲劇的結構の生ずる所、作家の意見を寓せるものなることとあり。而して第三、第四は共に眞の純客觀詩につきての論なりとす。

此に悲劇ありとせよ、而して作家の厭世觀此のうちに見れたりとせよ、吾人は此の上につきて、更にこまかに前段の四點を論究すべきなり。或者はいはく、曲中の某の人物が云々の言動を

なせし所、明に作者の厭世思想を表示せるものなりと、例へば「ハムレット」の曲中にて公子ハムレットが芝居道の講釋をなすあたりを、直に作者シェークスピヤの意見と見なすたぐひをいふ、此は前段第一の場合なり。論者若し此の如く結論し來らんとせば、此の際に要すべき立證と判斷とは、其の曲中の人物の片言隻句、果して作家自身の意見なりや否やを明にするにあり。

或者はさらにおもへらく、曲中の主人公は其のまゝ作家の面影にして、主人公の世を惡み天を恨む悲慘の光景は、やがて作家が現世を厭ふの念を直現せるものに外ならずと、例へばハムレットを直にシェークスピヤの寫眞と見傚し、シェークスピヤは實に生死迷途の境に彷徨せるものなりといはんが如し、此は前段第二の場合なり。かくの如く論斷し來るに際して要すべき立證と判斷とは言ふまでもなく主人公の果して作家自身なりや否やを明にするにあり。

或者はまたおもへらく、曲中の重なる人間卽ち主人公の性格旣に悲劇的結案に到るの外なき缺點を有すとせば、之れ明に作家が人生を悲劇の舞臺と觀ぜし者に非ずやと、例へば心中悲劇の主人公がすべて戀愛の一偏に走らんとするの傾あるを見て、心中悲劇の作者は此の間に自家の厭世思想を寄せたりといふの類なり。此は前段第三の場合に相當す。此の如く論下せんとする際に要すべき立證と判斷とは、要するに作家が性格上の件の缺點を全人間の漏れがたき眞相と認識せりや否やを明むるにあり。而して此の斷案を誤らしむべき事情は種々ある中に、（一）他の事情によりて悲劇の大體の種類、結案等まづ定まり、而してのち之れに恰合すべき性格を擇べるものなるを、順次に轉倒して、作家が好みて性格を擇べるに基くが如く思惟する事。（二）本誌（早稻田文學）前號の悲劇論（譯）にて一言せる如く、作人の罪に因りて悲劇を描くにも、觀やうによりて厭世的と樂世的との二面あり、さるを其の樂世的の方すなはち罪あるものの罰を得て亡ぶの趣を寫せる方の本意を忘れ、一途に厭世の意に基けるものと思ひ僻む事等其の主なるものなるべし。

最後に、或者はまた、曲中の主人公乃至其の他の人物の、罪なくして不幸に陷るを見て、作家が人生を苦趣、罪業の宅と見なせる厭世思想の現じたるものに外ならずといふ、例へばショオペンハウエルの眼に映ぜし「ハムレット」の如き、若し果して社會の罪を描くを以て本意とせるものならんには、之れに由りてシェークスピヤの厭世觀を證せんとするの類なり、此は前段第四の場合に當れり。此の結論に要すべき立證と判斷とは、要するに作家果して斯かる罪ある社會を、人間の全眞相と認識せりや否やを明むるにあり、若し單に之れを人間の半面として描けるものなるが如きことあらば、以て作家の人間觀を表するに足らざること論勿しとす。

夫れ劇に悲劇あり喜劇あり、人生また廬山の面目に似て、右よりすれば嶺となり、左よりすれば峯となり、厭ふべきが如く厭ふべからざるが如し。厭世詩人の作る所必ずしも悲劇のみならねば、樂世詩人の作る所また時に悲凉の調なきにあらず、而して吾人の特に悲劇と厭世詩人との上に就きて論ずる所以のものは、世間往々にして悲劇詩人なるが故に厭世詩人なりといふが如き誤謬の結論に近かんとするものあればなり。且つ吾人は前來弊を重ねて、厭世觀を論じ、悲劇を論じ、及び二者の關係する所以を論じ了りたれば、稿を更へて我が國唯一の劇詩人近松が諸作に就きて論究する所あらんとす。

（明治二十八年四月、五月）

囚はれたる文藝

第一

去年八月三日の夜は、我れ伊太利ナポリの港に舟がかりして、感慨の事ども多かりし。中にも分けて老いたる文明のいぢらしさ。文藝の伊太利は死なざれど、さりながら、今の世に亡骸を曝す哀れさよ。更にアドリアチコの海一つ越えては、同じ命運の岸に、苦しき息吹の身を横たふる希臘。世は二十世紀の叫びけたゝましき頃を、御身も尙ほ求むる所ありてや、見る眼も傷ましき覺悟かな。

兎から思ふ頃、日はヴェシゥギアス山の背後に沈んで、跡に曳く五彩の輝かしさ。「死に行くものは皆斯くの如く」と天の示しに會ふ心地して、やがて浪の染め色、人の面の染め色、みな消ゆると見れば、そこにヴェシゥギアスの活きたる火こそ我が胸を焦したれ。

ポムペイの町々に花と咲いたる藝術を、一夜の怒りに、永劫の夢と埋め了んぬる千八百餘年の昔語は、今も尙ほ此の山の烟と共に長くして、其の同じ烟の、晝は黑く世を愁ひの息にも包まん氣色すれど、夜の眺めはまた更に凄じ。見られよ。渦巻き上る烟の根、今は次第に焰となつて、明くまた暗く、おのづから呼吸を宇宙の胸の動悸に合はすならずや。其の底に萬年消えず燃ゆる思ひの潛めばこそ、夜ごと天に向つて噴く熱氣には、石も熔けよう空も焦げようなれ。あはれ囚はれたる此の火、太古以前は世を舉げて皆御身の領なりしならんを、冷めたるものつれなく、殼となり屑となつて御身の周圍を鎖し了せり。百年千年に一たびは、忍耐の紐きれて、山を裂き都を埋むる自暴の振舞も、思へば恕すべき謂はれはあり。我等もまた命を造化に享け、熱を御身と分ちて、此の熱、此の命を保たんが爲めに、仁義の縛め、博愛の纒、幾その覊絆に身をもだえしことか。あゝ、されども此の覊絆は遂に斷つべからず、一たび之を斷つときは、軌道よりすべりし星の如く、一切の人見る／＼溶け去つて、無相の海に入滅す。なまなか我れに知識あり、此の理を知るが故に、みづから、流るゝ星の如く美しく消えんとも得せず。さりとて胸に一念の火は盡きざるをいかにせん。

はかなき轕隙を繝みては燃え上る夫の火柱よ、道義の纒に縛られて、世を引かれ者と過ごさすが造化の趣意ならば、何故人間に感情といふ凶器をば與へたる。昔全能の神は、アダムを造りて、地球の邊に横たへ、彼方太虛の世界より、指頭を延ばして、そこに生命あらしむ。人の命といふもの、譬へば月の光を葉頭の一滴露に溶かして、永劫不斷と引くが如く、此の時初めて、妙にして見るべからざる一縷の流れとなりて神の指頭よりアダムの指頭に通ひ來たり。かしこ羅馬の法王殿の天井は、ミケランゼロが絕代の筆と稱して、此の崇高なる詩歌を、今も觀者の想像に活かしたり。あゝ此の全能の神は、斯の如くして生命を我等に分ちながら、何故に其の行く道を二手には築きし。左に沿ふものは感情の下り路にして、右は知識の坂、道德の峠なり。登らで叶はぬが人の世の道ならば、假りそめにも降ることの易きを味はす造化は、つれなからずや。また降るが正しき道ならば、登る苦勞は初めより省いてこそ欲しきなれ。

ホルマン・ハントが一代の名畫世界の光は、一切眞理の幽微と玄黑とを擧げて、基督が携ふる一燭のために明白々たりと描けり。されば、我がオクスフオドのキーブルカレッヂに此の繪を見し夜は、我れはまた眞理の明燭を片手に揭げ、紫微の御門の扉を敲いて「あはれ萬能造物の御神、世は待對矛盾の塊にして、其所やがて調和を要し、節制を要し、努力を要し、道德を要し、苦痛を要するの根原たり、そも〳〵待對矛盾として此の世を表白し給ひし理趣如何」と詰らまほしの情に禁へざりしが。

我が瞑想のやうやく理に入らんとする時、ヴェシウギアス山は、再び其の面目を展開したり。今まで黑き衣に覆ひかくせし胸を披くゝ見れば、慘ましくも一痕の生傷、たとへば、みづから衷心の苦悶に堪へずして、爬き剜りたる深手とも見えて、山腹の谷間にラヴの流れ尙ほ燃え殘れり、晝は心づく人もなし、夜に入れば其の色血よりも赤く、おのづから人の腸にこたへて物々し。

此の時夜はすでに更けたり。我が立つ上甲板の端のあたりは唯闇くして人も居らず。耳を欹つれば何れの岩に住むざれ貝か、何れの岸の藻の花に便り迯るか、四方たゞひた〳〵と浪のさゞめきのみ聞ゆ。

と見るに、山腹なるラヴの火よりか拔け出でたる、異裝の者一人、頭に頭巾を戴き、眞紅の長衣を垂れ、彼方の岸に立ちて我れを招くと覺えしが、我れや行きし、彼れや來りし、知るべからず、彼れと我れとは忽然として幷び立つたり。

此の異裝の友こそは伊太利繪畫の祖、ジオットーが筆と傳へらるゝフキレンチェのダンテが肖像そのまゝなりけれ。

第二

彼れは徐ろに手を擧げ遙かに白む地平線のあたりを指しながら、

「見られよ、東海の客。我れ足下のために古今を示すべし。かしこ天と水と相迫るところに、かすかに髮の如き一道の明るみあるを見たまはずや。天地いかに晦朦の夜なりとも、此の一線の明白は、曾て消ゆることなし。

闇より滑り出でてまた闇に入るべき一葉舟の微といへども、一たびこの白光域に來るときは、詳細に其の本體を露呈す。彼の岸と此の岸と始終と周圍とは、凡て黑漫々として知るべからざれども、ひとり中間の一線のみは極めて明徵、極めて白精、來るものを照破せずといふことなし。我れ今此の白光の中に古今を觀せまくす。

しばし待ち給へ、東海の客。脣を動かし給ふは、白光とは何ぞと問はん心なるべし。其の答はかしこにこそ。」

指さす方を望めば、光道おのづから二列に分れて、一は物みな青く、一は物みな赤く映ずと見えたり。たとへば、一は赤き雲、一は青き雲なんどにて敷き詰めたる道ともいふべし。其の折忽ち一群の人數、彼方の闇より我等が視界の地平線に過り入つたり。

「いかに東海の客、夫の一群は、青き道をこそ驅けぬけんとはするらし。其の先頭にある寬衣の紳士等は、希臘のプラトーン及びアリストテレースなり。中にもプラトーンは、殆んど半脚を赤き道に踏み入れんとしては、また引き戻す。手に携ふる所は『フキードラス』の巻か『シムポジアム』の巻か、はた『レパブリック』の巻なるべし。最上絕對の鄕を忘じ得ず、夢の如くかすかに之れを追慕して、憧れ仰ぐの情に堪へずと說きしプラトニック、ラヴの心根は、赤き道行く人に近からずや。されど其の最上絕對のエロスは、遂に知識によりて近づくべき理

體たるを免れざりき。此の人もまた、理により、知識によつて闇黑を照破せんとするならずや。アリストテレースに至つては、其の淨化の說、一點の別彩となつて彼れの詩論を麗しくするにも拘はらず、思想方式の調子、手障り、みな赤き道に上るべき人とも覺えず。知識、理性を以て萬象を照らさんとするに於いては、他の哲學者流と異なるところなし。

東海の客、我れは哲學に於いても、此の以外のものを求めんとするなり。

中世の哲學は基督教の註釋なり。知識の燭を掲げて、宗教の靈龕を照さんとはしたれど、神祕の一扉これを遮りて通ぜず。其の光は空しく反射して、自己の上に落ちたり。見られよ、かしこに佛のデカート等再び青き道に據り、群をなして登場せり、彼等が自己の左右を顧みて叫ぶを聞き給はずや。曰く、己れとは何物ぞや、と。是れ所謂近世哲學の開始を報ずる聲なり。されども斯くの如き思想の流れは、知識の範圍に於いてのみ完結せんとする限り、尙我が胸の深海には達すべくもあらず、唯これ表面の窪みを傳ふ一系の水脈に過ぎざるなり。我れも一たびは同じ道を尋ねんとしたれど、末は詩の都、神の宮殿とこそ心ざしたれ。

こゝに嬉しきは、カントかな。知識、理性に無上の權威をば持たせながら、傍に一種の別なる力あることをも忘れず、純理性、實理性の上に、更に微妙なる判斷力といふものの存在を認めて、而して此の判斷力の重なる發現は、快不快等の感にありとなす。味ひ深く、優しく、温く、懷かしき觀方にはあらずや。見られよ、カントが場を降るとき、青赤の兩道は殆んど相合せんとしてまた分れたり。

次いで心ゆくものは、ショーペンハワーが意志の說なり。彼れに取りては一切の根元實在は意志なり。されども我れは此の所に於いて意志といふ名を嫌ふ。我が內的經驗には情といふ名こそ一層明瞭にして事實に切なるを覺ゆれ。

我れとショーペンハワー等と、押へたるは同一實在の活動ならんこと有り得べき結論なり。されども之れを意志と呼ぶときは、黑、冷、力の氣餘りに盛んなり、我はむしろ、熱あり、光あり、色彩あり、香芬ある活動を想像して、情念と呼ぶものに與せんと欲す。カントは判斷力と稱して我が思ふ所の一半を說き、ショーペンハワーは意志と稱して我が思ふ所の一半を說けり。二つのものは、相合して人生至高の力の府たるにあらざるか。而して一切の學問知見は綜括して此の一團力に觸れ來らざる限り、未完成のものたるをば免れざらん。斯くの如きは主義無く生命無く、言はゞ急所を有せざる學問となるべきなり。我れは急所ある哲學を求む。

十九世紀の或る部分は、科學萬能の旗下に奔趨したれども、世紀末に於ける彼等の叫び聲は失望なりし。何ぞや、知識の根本を忘れたればなり。我等が燭を秉つて闇夜を照らすとき、見んと欲するものは向うにあり、されども、見て以て何とせんかと問はゞ反射して自家に還る。我れ彼の物に對して覺悟を定めんが爲めならずや。かくの如くして、知識の根本は物我の干係を定むるにあるが故に學問は凡て此の點に達して初めて完結す。此の結を缺くものは、不滿足なり、尙何物をか要求せざれば已まず。一切の學問は哲學に入り、哲學は我れの安立の情を揣摩するに及んで初めて眞に意義あり生命ありといふべし。此の意に於いて哲學は科學の仕上げなり、畫龍の點睛たりといふを妨げず。」

第三

「あゝ我が言說復た抽象に走せたり。許されよ東海の客。來つて文藝の跡を見たまへ。赤き道の末、朦朧たるが中に一列の長き影うごめく

は、中世紀のさまなり。青き道の遙かに後れて明るきは、知識が感情に追ひ越されたるさまとや見ん。赤き感情の路にあるものは、之れを意ともせずして猛進す。其の重なる人數は、歷代の法王等か、朦朧たるが中に、只一點輝くものあるは、黃金の十字架なり。あゝ是れ十字軍！

げにも中世の歷史に於いて最も麗しく夢の如きものは十字軍なり。中世の暗黑なる歷史も、是れを燒點として見るときは、則ち許多の光耀あり。

それ信仰感情の絕對權未だ衰へず、隱者ピーターの勸進に始まりて、幾萬の士女が初めてゼリウサレムの聖地の前に泣き伏せしまで、おのづから是れ一篇の詩を實行に移せるものなり。何等の情致ぞや。中世に文藝なし、一切の感情は馳せて宗教に之いたり、而して其の磅礴する所、遂に發して自然の文藝となれるものは、十字軍ならずや。而して闇黑時代の濃霧尙ほ歐洲の都市を壓して垂れかゝりたる中より、かしこナポリの丘腹に挺然たる寺塔の十字架のみ已に燦然として光を放ちたり。是れかすかに天の一角に芽ぐめる文藝復興の第一光が早くも頭地を拔ける塔の頂に反射せるならずや。やがて黃金の如き光線は、林を浸し野に溢れ、天地はじめて一朗、人畜共に舞ひ、百禽聲を揃へて歌ひ出づるの盛觀を呈したり。世に若し斯くの如き文藝復興の圖あらば、其の壯麗いかばかりならん、想像しても見給へや。

さて十字軍の一隊は過ぎ去れり。後れて一人、長衣の袖を叉ぬきて、俯き勝ちに赤き道を辿り來るは、誰れと思はるゝぞ。青き道にもしば／＼跨ぎ入るを見ずや。あゝ東海の客、足下うなづく所あるか。斯くて兩道に携はれるモンク頭巾の彼れこそは、我れダンテの前身なれ。

我れは今も一代の事業を誤れりとは思はず。文藝復興の夜明けの鐘は、我れ撞けりとこそ信ずれ。唯だ、過ぎし我が意を、今の我が意にて解釋すれば、多少の言ふべき節なきにしもあらず。

我れはもと二つの傾きを有して生れたり。一つは理に行くの癖にして、一つは情に行くの性なり。わかかりし我が生涯は抑へがたき情のさすらひにして、情の熱する所、周圍を顧みれば不平あり、我が思ふところを行へば葛藤あり。斯くの如くして我が五十七年は、ローマを追はれ、ヹロナに隱れ、フランスに避けたる、流離逍竄の歷史となれり。されども、我れはまた盲なる情の一面のみには從ひ得ざりき。我が理智性は、生れ得て銳敏『神曲』中の理趣は言はずもあれ、夫の悲哀に富める『新生涯』の一卷すら、記敍の方式に究理の調あるは、足下も心づき給ふ所か。さればこそ、中世、闇黑の覆ひの下に潛み通へる學問興復の氣に、我れ逸早くも衆に先だちて感染したるなれ。智によりて過現を照し、情によりて未來を察す。斯くて我が情は闇中摸索の妄飛躍を嫌へども、知識の盡く所、飛躍の外に途なしといふ時は、則ち情の翼に羽打つて飛躍せんことを願ふ、未來に對して無限に向上せんとする所以なり。然れども、我れは遂に之れに向つて突進すること能はず。之れを爲さんには我れ餘りに聰明なりき。內に憂愁を抱いて、一代を轗軻の間に送るの人たりしこと、また憐むべしとは見給はずや。」

第四

「さらば當時我が豫見せし未來は如何なりしぞと問はるゝか。『神曲』淨罪界の初めに、我が意は盡きたり。下界にては見し事もなき四つの星、燦然としてきらめき出づれば、天に歡喜の光滿つる、其の天こそ我が理想なれ。四つの

星に額を照らされて而も輝くかと見ゆる一老翁は、問うて曰ひけらく『語れ、御身は何者ぞ、此の眼しひたる流れを溯り、彼の永劫の牢屋より逃れ出でしと覺ゆるは』我が東道の主人ヴージルは答へて曰く『自由を索めんがために旅するものぞ』と。あゝさなり、精神の自由、語は陳なれど、之れよりも切に此の一塊の思想を表白すべき言葉はあらざるべし。當時、政教混亂して一となり、一切の主權は舉げて法王の手に委ねられたり。政治はいふに及ばず、學問藝術みな舊教の隷屬たるを免れず。而して舊教はすでに其の生氣を失ひて、地中より掘り出せる巨獸の骸の如く、徒らに大に、徒らに人を壓するのみ、滔々として寄せ來る知識の潮をばおろかにも自ら體を横たへて防止せんと欲したれど、そは無益なりし。精神の上に牢獄を築いて我等を囚へんとする者は實に此の巨怪なりしなり。我れ乃ちおもへらく、是れ基督教の罪にあらず、俗輩之れを汚して斯くの如くならしめたるのみ。眞の神、眞の愛の尊さは、古今いさゝかも變りあらずして、現に我が胸に躍々たり。此の清き愛、此の絶大なる想ひは、直ちに是れ内在經驗の事實ならずや。我れは今より後、唯之れを追うてあこがれんのみ。新生命に入り、新光明に接せんが爲めには、先づ舊教義舊慣例の我れに邪魔するものを擺脫せんと念ふ。我が精神を法王專制、教義專制の覊約より拯うて、そこに大自由を得せしめんことは我が願ひなり、と。

斯くの如く思惟して、我れは基督教の精神に新たなる光を注がんとはしたり。後世のニーチェ等が如く、直ちに走りて基督教を破却せんには、我が知識餘りに聰明に、また我が基督教に對する愛着の情餘りに強かりき。されどこゝに顯はれたる世界の一傾斜は、此の後永く平衡に返ることなく、延いて二十世紀の今日に及んだり。後れたりし青き知識の道にあるもの、感情一存の振舞に快からず、赤き道にあるものを追ひ越して久しき枉屈を伸べんと奮迅せる有様は、やがて我が身に代表したりし文藝復興の夜明けなり。コンスタンチノープルの落滅、印刷機械の發明と、史家が數ふる文藝復興の外緣は多けれど、一味の溫光は、早くほの〴〵の夜明けより、人の心の底に通ひたり、畢竟は是れ自然なる命數の循環のみ、節奏のみ。世は知識と感情との一大競爭場にして、二者の漲落は世態の變遷なり。今文藝復興の初めにあたりて、知識は千年の長き屈伏より起き、清新の光を放つて四方を照破す。新日昇つて山河鮮やかなるの概あるも宜なるかな。

知識の汪溢、若しくは知識の勝利、是れま、ことは十三四世紀以後、延いて今日に及ぶまでの歐洲思想界の原動力にして、此の間は唯だ一傾斜のみ。文藝復興乃至學問興復といふものは卽ち知識の復興にして、十六、七、八、九世紀は其の連續たり。史家の所謂近世是れなり。而して、知識の流れと相游ふべき感情の領土は知識の流勢のすさまじさに壓倒せられて動々もすれば其の氾濫に任せんとす。文藝の森、宗教の園、是等は凡て道德といひ、科學といふが如き知識の流れと對映して感情の領土を代表する者なるにも拘はらず、近世の文藝は、殆んど常に、かしこの木の間に科學の泉、こゝの木の間に道德の盆池を隱見せしめて、其の森の姿勢を整へんとす。宗教また、知識の流れを引いて其の園に漑ぐを禁じ得ず。斯くの如くして止まる所なくんば文藝の森、宗教の園は終に知識の水底に溺れ果つべし。夫の科學興りて詩歌亡ぶと叫びし者の聲を聞かずや。また夫の科學興りて宗教亡ぶと叫びし者の聲を聞かずや。十四、五世紀に於ける文藝復興の氣運は、十九世紀の末、當然の結果として斯かる叫びに到達したる

なり。知識全盛、感情屏息の義、明かならずや。」

第五

「されども我れは單に概般の理を語れり、更にかの赤き雲の道行く我が姿を見られよ。窶れたらずや。我が煩悶は闇黑不快の世より出でて早く光明自在の天地に到らんと願ふにあれども、斯かる願の本となりて、打つとも踏むとも變るまじき、大地の如き誠の上に我れを据ゑしは、あゝ其のかみよ、愛の一念力なり。我れは何事を思ふにも眞率誠實の外に行くこと能はず。眞率誠實は、涙を盛りたる袋の如きものか。之れに觸るれば涙出づ。我れは事を想うて深く誠なる毎に涙のはふり落つるを禁ずること能はず。あゝ此の涙こそは、我が早き生涯に於いて愛より受けし賜物なれ。我が愛の名はベアトリチェなり。うるはしき其の名かな。之れを聞けるのみにてだに、胸は春の野と開けて、得も知らぬ芬芳の香に、魂銷ゆると覺ゆ。頃は千二百七十四年五月、花祭りの日なり。ベアトリチェは九歳の春なほ淺く、我れはやがて十歳ともなるべき兄にして、二人は、此の日初めてしみ／＼と相見たり。ベアトリチェの父が春の宴には、我が父も列なれり。我れは父の跡につづきて、奧なる客室に導かれしが、此の時客は既に半ばをも越えたりと覺しく、歡聲笑語湧き立ちて、窓の前に相對するもの、隅なる安樂椅子に身を横たふるもの、卓を圍みて坐するもの、立つて室内を歩むもの、女、男、黄に赤に緑に色彩の輝かしさは目もまばゆきばかり。暫くありて、再び裳の戸に觸るゝ音ありと見れば、母と共に入り來りたるベアトリチェの立姿、氣高くも美しかりし面影よ。

天降りたる星かと見えて、今立てるは水色窓掛の前なり。衣裳は抑へ薄めたる眞紅の色にして、帶、胸、頸の飾りは、天つ乙女が集めたる珠のかず／＼、塵の世の人品とも思はれず。

少女は默してにこやかに我が會釋を受けしま、はにかめる我が姿をつく／＼と見ぬ。我れも一たびは其の眼を見たり。されど其はたゞ刹那にして、長くは見るに堪へざりし。長くは見得ざりしかども、此の一瞥こそは、我れに永久の神祕となりて殘りたれ。深くも潛める我が靈は、此の時全身に動悸を傳へて打ち震ふと覺えしが、之れより永く其の身を愛に捧げたり。

九年は仇と過ぎて、二たびベアトリチェに巡り會ひしは、十八の春、フヰレンチェの町に人の往き來も繁き頃なりし、此の婦人、われには尋常の人蓄とも思はれず。天人などにやあらん。此の日は純白の粧ひして、二人の年長けたる婦人を左右に伴へり。我れは、はたと彼等に行き合ひて恥しさに顏も得擧げず、此方の軒下に身を避けしが、之れを見たりしベアトリチェは、世にも心を籠めて我が方に會釋を送りぬ。情ある會釋の言葉なりしよ。初めて之れを聞きし我が嬉しさは、推察あれや東海の客。命かぎりの幸福は是れを極みぞと思ひて、我れはたゞ醉ひたり、恍惚として夢心地となりぬ。淋しき我が家に歸りては、何さらに、一念ベアトリチェが其の日の事を忘れ得ず。不思議の夢も見たりけり。

後は語らずもがな。十六年の雨風、卑怯なりし我れよ、女々しかりし我れよ、はた思ひ迫つては遣る瀨もなかりし我れ、薄倖にして多感なりし我れ。我れはたゞ失望、憂愁の雲に鎖されて、後世『ヱルテル』のゲーテ、『チャイルド・ハロールド』のバイロン等と一つ思ひに身をもだえたり。而してベアトリチェは千二百九十年、明け行く空の星と消え去りぬ。殘る想ひは、我が胸に祕めたれども、如何にせんや、眉目人の心を語る、世にダンテが面型といふもの、客も

見知り給ふべし。されども東海の客、我が此の胸裡には指さば指にも觸るべき一塊の物あり、名づけて誠といふ。是れあるが爲めに我が思ふ所は悉く涙なり。感激にも涙來り、喜悦にも涙來り、悲哀にも涙來る。而して此の優しき涙の源を穿ちしものは如上の戀の歷史に外ならず、淸き戀に泣き盡せし人は、必ずや、眞摯誠實の情に富むべきなり。」

第六

ダンテの影去りて、赤き道には登場の人しばし荒んだり。と見る間に、後れて來たりし靑き道の人數も、今は一散に驅けぬけて、赤き道にあるものと先きを爭はん氣配あり。世は早や近世に移れりと覺ゆ。中に二人の風骨すぐれたる紳士あり、赤き道より上り來る。ダンテは之れを指して、

―彼等は伊太利の畫家及び彫刻家、ラファエロとミケランゼローとなり。中にもラファエロが聖母の圖は、遂に古今を絕して、彼れの外に出づるものなし。足下は彼れが歐洲近世の思潮と如何なる交渉を有するかを知れりや。其の點二つあり、曰く一味の知識なり、曰く一味の人間なり。

由來知識の勃興に伴ひて起るべき文藝上の變動は、外形には常に寫實といふこととなりて見はる。文藝復興期の文藝が當然其の色を帶ぶべきは言ふに及ばざるべし。古き批評家はいふ、ラファエロはミケランゼローの寫實的なるに反して、理想的なるが故に、些細なる點にまで知識の要求を充たすべき寫實をば敢てせざりきと。されども此は寫實理想の語を妄用して自ら矛盾の結論に陷る滔々者流の筆法なり。古今同嘆、深く論ずるに足らず。ラファエロの寫實は必ずしも定規を手にし解剖學書を傍らに置き乍らといふが如きものにはあらざりしならん。されど其の疎描たると、密描たるとに論なく、背景に於いて、遠近、布置に於いて、明暗、權衡に於いて、歩一歩前代の稚氣を脫し行くの觀あるは、大局に於ける寫實的精神の發展なり、理想は目的として之れあるを妨げず、手段としての寫實的精神の發展、すなはち知識の光明を增せる徵候は、ラファエロが畫に於いて歷々數ふべし。是れ疑ひもなく、彼れの畫をして、何所ともなく一種近世的、若しくは近世にも尙且活きたりといふが如き感を呼ばしむる所以ならずや。

但し此の如きは、所詮外形の論たり。彼れの繪畫には、知識あり人間あり。是れ近世の氣運を當時に權化せるものといふべし。

ラファエロが一代は凡そ三期に分ちて見るべし、第一期は尙ほ師ペリウジノー等の跡を追ひて、古畫風に囚へられし頃なり。第二期はフヰレンチェに來りて、レオナルド・ダ・ヰンチ及びミケランゼロー等の影響を受けし時代なり。第三期はラファエロみづからの時代ともいふべし。今は此の三期に亙りて、彼れが聖母の圖を援き來らんに、第一期は卽ち、むしろ文藝復興以前の思潮を見はしたり。ローマの法王殿なる『マリアの戴冠』の圖は、最もよき此の期の代表畫たるべし。周圍の如何には問はずもあれ、中央に坐し合掌して今や將に聖冠を頭に受けんとするマリアの顏の表情は、唯是れ信仰なり、無我なり、淸淨なり、柔和なり、之れを見つむること少時なる時は、我も又、先づ頭腦より徐ろに溶けて消え入るが如き心地す。卽ち宗教畫として偉大の力を有する所以なり、されども一たび頭を回らして之れを思ふときは、我が心中に尙ほ何者かの不滿あるが如し。此の畫に、神聖は是れあり、耽溺は之れあり。人の心のさま尙中世の如くして、既成の基督教義に絕對の威權ありし世は、是れを以ても足れりとせしなら

む。否、此の書はすなはち此の如き世を代表したる者なるべし。是れわが古派と名づくる所以なり。然れども、時移りて、文藝復興の氣に感染したりし人は、必ずや之れを十分の滿足とはなし得ざりしならん。蓋し此のマリアは餘りに神聖なればなり、餘りに信仰一途、神々しさ一邊にして、動々もすれば模型的となり、抽象的となり、血あり肉ある此の世の人と遠ざかるの度餘りに大なればなり。一言以て言はゞ、生命は無し、否、生命は無きにあらざるも、狹隘なる既成教義の下にのみ生ける生命なり、不自然に抑壓したる生命なり、若しくは人世の行路に惱み疲れたる、氣魄惰沈、寒枯痩貧の生命なり。近世の初めは正しく此くの如き宗教的抑壓の下より醒起して、光明、活氣、自由、豐富、積極といふが如きものを得んとするの氣に充てる時なり。第一期のラファエロは、以て之れに當るべくもあらず。

此に於いてか第二期の彼れは出でたり。今フキレンチエにある聖母の諸畫、例へば『太公家のマドンナ』『金翅雀とマドンナ』の如きは皆よく此の期を代表す。而して此の期の彼れが特色は、聖母の顏に、一味の知識の光を漏し來れること是なり。此の點に關しては歐洲の評家も已にいへる所あり。太公家のマドンナを以て此の傾向の初頭に置くを例とす。されども、其の最もよく此の事實を示すものは『金翅雀とマドンナ』の圖に如くはなし。金翅雀を持てる聖兒等を膝に倚りかゝらせながら、左手には書を繙きたる聖母の顏に、一點現實の氣の漲り來ると共に、其最も著しき表情は、怜悧、聰明、といふが如き標徴なり。されば之れを見るに、賢女の相あり、而もなほ、溫良、純潔、信仰といふが如き感は油然として人の肺腑に湧くを覺ゆ。たゞ斯くの如くして、近世の知識的傾向は、中世の信仰感情と調和の形を示したれども、之れが爲めに、其の耽溺一邊なりし神聖といふが如き意義は些も損失を蒙らざりしか。或る種の人が、此の期以後のラファエロ、マドンナを以て俗氣ありとなし、却つて初期の抽象的なる聖母像に心を寄せんとするものは、むしろ注意すべき一現象にあらざるか。更に言ひかふれば近世の藝術が漸く人間と相接近せんとするに從ひ、超人間的なる宗教の生命は多少の變改を來さざるを得ず。此に於てか或者は知識に媚びて人間に墮せんよりも、理は如何ともいへ、去つて單一なる宗教的感情に身を捧げんと願ふ。此の如きは、知識に慣れず、近世に慣れざるものか、然らずんば知識に慊らず、近世に慊らざるものの行くべき道なり。復古の思想こゝに於いてか起る。此は十八世紀末及び十九世紀末の事實ならずや。此の理は尙後にこそ。」

第七

「第三期のラファエロは、獨逸ドレスデンの畫堂にある、サン、シストーのマドンナを以て、遺憾なく表出するを得べし。此の畫は、彼れが死する前二年、千五百十八年の作と傳へられ、或る評家は、之れを以てラファエロが一代の聖母像中最も傑出せる者なりとす。少なくとも第三期のラファエロを見るに於いて、之れに勝る圖はあるべしとも覺えず。薄き暖色の光を徐ろに集中したる中央に、聖母は雲を踏んで立てり。抱いたる聖兒の額は、母の頰にもたれ、其の裸體なる肉の丸み及び色合には、現實の味ひこぼるゝが如し。聖母が穿てる袴は、深藍の染め色に、神祕、永久の意を現はし、膝のあたりに至りて、强き光線を反射せしむ。上衣は氣高き赤にして、之れまた小兒を抱ける左手の肱より腕にかけて、光線を出せり。總じて之れをいふに、母子の顏、小兒の肌、聖母が膝、腕に受

けたる光線、及び聖母像の半身程に高まりたる左右のシスタンとバーバラとが、肩、背の明るみ等を中心として有名なる明暗の分布、變化、まづ少なからず人の注目を惹く。青、赤、黄、白、茶、橄欖等の色の鮮やかにして、而も沈痛の氣を失はざる、脚下及び周圍の群のおのづから尋常の物ならずと思はるゝ、是等は玆にくだくだしく言ふ迄もなかるべし。最も驚かるるは、此の聖母が顏なり。中にも其の眼こそ世界の不思議といふべけれ。

サン、シストーのマドンナは遂に人間のものとなれり。其額には、我等と同じく、活きたる血通へり。第二期に於いて見はれたる知識、聰明の相は、尙ほ是れあれども、其の以上更に何物をか加へたり。其は人間的意義、卽ち是れなり。初めて此の畫に對するものが、一見先づ其の餘りに近世的なるに驚き、唯是れ一幅の無邪氣なる田舍乙女が圖にはあらずやと訝るたぐひは、此の理を説明して餘りあり。第二期の聖母にすら旣に慊からざりしものは、此の畫を見るに及んで、あゝ、ラファエロ遂に人間に墮したりと叫ぶなるべし。然れども、此の圖の中に、尙ほ一道の神聖なる表情なしとはいふべからず。全局の調子はたしかに人間化したり。されど、人間化して、尙ほそこに神的淸淨あらば、是れ神と人との和合にはあらずや。隔絶不可思議を許さずして、むしろ之れを人間に引き下さんとせるは、やがて近世思潮の意義なり。神人一致、語は古けれども、意は常に新たにして、近世は實にあらゆるものを人間化せんとしたり、知識化せんとしたり、我が摸索の内に置かんとしたり。神も此れが對當たるをば免れず。されば、第三期に於けるマドンナが人間となれるは、實に時勢の影なり。近世を豫表するの大藝術たる所以こゝにあり。何ぞ異しむを須ゐんや。此の如くにして、ラファエロは初めて大なり。

母子の額には、單に無邪氣、聰明、優美といふが如き表現あるのみならず、また實に神聖あり。神聖といふに弊あらば、たゞ心を靜かにして、數分間其の眉目の邊を注視せよ。玆にも亦第一期のラファエロに於いて最も赤裸々に見はれたる、一種の幽致を認むるに至るべし。其の情は明かに説きがたきも、譬へば我が體漸く虛靈となつて、永久無限の邊に導かれ行くが如く、優しく、心細く、物哀れなる心地となるにあらずや。是れ凡て大なる宗教畫が有する一作用にして、畫家の宗教的感情が、おのづから光澤となつて、畫面に流れ出でたるなり。

聖母の眼は、更に一段の驚異なり。第二期までの圖にありては、兩眼常に下に向ひて俯したり。『ワージンの戴冠』に於いて、『太公家のマドンナ』に於いて、『金翅雀とマドンナ』に於いて、はた巴里ルーブルのマドンナに於いて、みな然るを見る。思ふに、是れ人世の消極を意味し、悲哀を意味するものにはあらざるか。眼は感情の窓なり、之れを鮮やかに開きて、望み見るに便ならしむるときは胸中に燃ゆる感情の火、其の色に從つて一々外に輝き出でんことを恐る。別言すれば、生きたる感情之れより漏れて、聖母は遂に人間に墮せんことを憂ふ。畫家はすなはち易きに就いて眼を俯しにせしめ、感情を隱して其の光を消し、以て僅かに其の神々しさを保たんとせるなり。一切の感情を活かして、直ちに神に合せんとするは、積極たり。之れを消して神に合せんとするは、消極たり。眼を伏せて感情の窓を閉づるものは、消極に行けるにあらずや。また伏し目は常に悲哀憂愁を意味す、孤獨なり、寂寞なり、小弱なり、逡巡なり。前に目的とすべき光明なく、希望なく、また之れに向つて猛進すべき英氣なし。悲觀的たり。

此の如き意義を有する第一、二期のマドンナの眼は、第三期に入りて、深夜の星影よりもあざやかに見開かれたり。其の瞳は下を見ずして正面に向へり。霧とかゝりし愁の雲は消ゆると共に、星の瞳は燦爛として麗しき光を放ち來りぬ。天地初めて光明あり、希望あり、生氣あり。生きたる感情も此れより輝き出づるよ。其の感情を直ちに導いて、永劫に入らしむるも、此の眼ならずや。美術史家リュブケはおもへらく、ラファエロは、此の圖によりて自家の最も深遠なる思想と最も美しき人とを結合せんとせるかと。ラファエロの心は知るべからずといへども、事實の跡は、是れよりも更に〳〵深き意義を示すに似たり。彼れは、此の畫によりて實に神と人とを合一せんとしたり。而して是れが爲めには、舊來の信仰一邊なるものを損するの危險を恐れず、活きたる人間の感情と知識とを之れに導き入るゝを辭せざりき。知識的、而して人間的、是れこそ誠に近世を標榜する根本精神にはあらずや。」

第八

「あれ見給へ、東海の客、青き道には早くも宗教革命の大旗を飜し來るものあり。獨のマルチン・ルーテルに紛れもなし。宗教として地歩を占めたる中世の感情が、近世の知識の爲めに征服せられ行く世相は是れなり。

次いで赤き道より快活の態度にて上り來るものは、シェークスピーアなるか。濃紫に黃金の縁つけたるガウンの袖を反しながら、左右を顧みて諧謔一番するに似たり。彼れ今は詩國の帝座について久しければ、儀容おのづから王氣を帶ぶと覺ゆ。

彼れが文藝上の地位は、一大驚嘆なり。凡そ古往今來彼れが如く時代を破り、彙類を破りしもの他にありや。當時歐洲が中世の長き眠より醒めて、文藝復興の光により、こゝに新鮮の天地を見たりし喜びは、おのづから映じて彼れが一代の作にあり。彼れの諸作を通じて見たる天地は、エリザ王朝のそれの如く、豐富なり、燦爛たり。廓寥として底に無限の淋しみを藏する中世の調子とは、おのづから類を異にす。加ふるに彼れが興味の中心の人間にありし、はた其の、事に逢へば直ちに之れを戯曲化し、客觀化する力の逞しかりし、凡て是れ近世的傾向の特色にして、ラファエロが第三期に於いて成さんとせし所のものを、シェークスピーアは一代の事業として大成せるの觀あり。其の他『マクベス』『ハムレット』、就中『ハムレット』に於いては、彼れまた近世の知識的傾向を最も明らかに表出したり。されども、彼れはまた矛盾の一面を有す。『ハムレット』『マクベス』の類より『眞夏の夜の夢』『あらし』の如きに至るまで、諸作に一貫して存するものは、一種の超人間的興味なり。單に超人間的といふは尙ほ盡きず。ローマンチックといはゞ、或は一層便なることもあらむ。『眞夏の夜の夢』『あらし』等が、全篇此の調子に滿てるはいふに及ばず、『ハムレット』の亡靈、『マクベス』の妖婆、皆超人間的若しくは傳奇的空想的風味を、彼れが作に注加する所以なり。而して此の如き風味は、溯つては之れを中世に求むべく、下つては之れを十八世紀の末に起りしローマンチシズムに見出すを得ん。ラファエロは、始終宗教の藩籬に頼りしが故に、中世の感情を宗教、若しくは神、若しくは信仰として保留し、之に人間を和合せしめんとしたれど、シェークスピーアは宗教に執せずして中世を見たり。故に、其中世は傳説的、妖怪的、騎士的、巡禮的、超人間的といふが如き、ローマンチシズムとして彼の心に留まれり。近世の評論家、ローマンチックといふ語を直ちに中世的といふ義に解するものすらあ

るに至るは以て如何に此の二つのものの相接するかを證するに足らん。而してシェークスピーアが作中のローマンチックなる風味、若し源を此に汲むとすれば彼れは、斯くの如くして近世と中世とを一に會流せしめたりと謂つべし。人間的、知識的、藝術的は近世の潮流にして、超人間的若しくはローマンチックは中世の潮流なり。更に簡單にいはゞ、ラファエロは人間と神、シェークスピーアは人間と超人間、といふ形に於いて近世と中世との精神を一身に湊めたり。

それより二百年のあひだ、ラファエロが爲せし所と同精神なるものには、ミルトンの『失樂園』、クロップストックの『メシアス』、ハンデル、ハイヅン等が聖劇歌、乃至近くは英の畫家ワッツ、露の作者トルストイ等ありといへども、是等は未だ一時代を畫するに至らず、之れに反してシェークスピーアの爲せし所は、十八世紀の末に及び、一大潮流となつて再び全歐文藝の岸を洗ひたり、史家之れを名づけてローマンチシズムといふ。さればシェークスピーアが作中のローマンチシズムは、一方之れを中世に尋ね上りて、此處に中世と近世との會合を認め得べきと共に、他方は之れを十八世紀末に尋ね下りて、此所に學問興復の近世と、二百年の後之れに對して起れる反動的氣運との會合を見るを得べし。畢竟ずるに、彼れは中世と近世との調和なるか、將た近世と其反動との豫表なるか、そも〳〵また兩つながら之れを其の身に總ぶるものか。彼れが地位の重大且つ無類なる所以はこゝにあり。」

第九

論ます〳〵進まんとして、シェークスピーアは早くも我が眼界より去れり。懐かしかりし人の面影かなと思ふうち、ダンテは再び指を擧ぐ。

「群を成してシェークスピーアの後に續くものは、十七世紀の文藝星等なり。十六世紀は、ラファエロ等あるが爲めに前半を伊太利の文明に捧げ、シェークスピーアあるが爲めに、後半を英國の文明に獻ず。十七八世紀は佛西蘭及英國の天下たり。彼の一列は佛のコーネイユ以下ヴォルテヤ等を前隊として、英のドライデン・ポープ等を後詰とせる人衆と覺ゆ。何れも身だしなみ上品に、整然また瀟洒としては居ながら氣力光彩に乏しと見ゆるは、十九世紀の反動の羽風に、あさましくも揉み落されし爲めなるか。更に異しきは、見よ、彼等共の赤き道より轉じて、やうやく青き雲の道に移らんとするならずや、赤き道次第に落寞たり。文藝傾けるか、感情は遂に知識の急なる追躡に堪へ得ずして、其の優越なる地歩を他に讓らんとするに似たり。學問興復の自然の結果は、此の外なること能はず。

此の期に屬する文藝の理想は、前列の一人たるブワローが詩論に明けし。模範は希臘、羅典にありとおぼしく、其の項目は、曰く理を輕んずべからず、曰く思想形式共に明晰なるべし、曰く外形の統一均整は必要なり、曰く尋常なるべくして奇怪なるべからず、曰く諷刺は眞理なり、曰く詩の各體には各越ゆべからざる制限ありと。凡そ此くの如きものは、十七八世紀にわたれる英佛の大文藝に有せる特色なり。之れを概括するときは、形式的、理智的、尋常的、嘲笑的となる。更らに言はゞ、一切是れ感情を薄めて知識の閒に工夫を費さんとする文藝の傾向にはあらずや。形式の整理、理智を容れたる詩、畫、常規を逸せざる思想、嘲笑し諷刺して、熱怒せず、同感せざる氣風、數へ來れば、すべて知識の發揮によりて初めて成就し得べき事項たり。知識的といふ一語は、實に此の

種の文藝の生命なり。

斯くの如き十八世紀に反抗して起りしものを、十九世紀初頭の歐洲文藝とす。或は呼んで之れをローマンチシズムといふ。我れは意義の直截明確ならむことを欲して之れを感情的、若しくは情緒的といはん。蓋し天地の間知識にあらざる存在は情緒にして、情緒にあらざる存在は知識なり。こゝに我家の哲學あり。故に我は十八世紀の知識的文藝に反抗するものは、當然情緒的ならざるべからずといふ。更に精しく言はゞ、形式的なるものに反抗するの心は、赤裸々の中身を抉出せんとして、ルーソーの「自然に還れ」となり、ワーヅワースの「感情の自然の流れ」となり、ゲーテ、シエリー等が理想となる。理智的なるもの、嘲笑的なるものに快からざるの心は、また、情熱主義となり、多感主義となりて、ゲーテの前半、ハイネ、バイロン、キーツ等を生ずべし。尋常的といふことを嫌ふものは、則ち非常非凡の想像を超自然に求め、神祕に求め、往古に求む。スコット、コールリッヂ、ワグナー等の傳奇、驚異、神祕、超自然はこれならん。

さはあれど、是等のもの多くは一に會して感情の本に歸るといへども、或るものは外れて再び舊の知識に行かんとするを免れず。已に自然といふ語生る、之を推し廣むる時は、所謂自然主義となるも已みがたき狀態ならずや。已に理想といひ、宗教といふ語用ひらる、其結論が哲理となり、教義となるもまた是非なき趨向にあらずや。而して、自然主義は、夫の寫實といふ近世の一潮流を併呑して、ます／＼隘路に入り、遂に科學主義にまで墮せんとせり。佛のゾラ等は之れが代表者なり。哲理主義は、道德問題、哲學問題、人生問題となりて、一派の作風を成せり。諾威のイブセン等是れに據る。また教義は遂にトルストイを宗教化したり。

我れ語れば多端にして、談は十八世紀より十九世紀の後半にまで飛躍したり。言ふべき事盡きずして、夜はいたづらに更けんとす。中間は省除して、直ちに現代の二三子を場に登らすべし。」

第十

一十九世紀末の文藝は、實に目もあやなる雜多の潮流の會湊なりき。前にいへるラスキン、ゾラ等の自然主義、ニイチエ、イブセン等の道德問題、ワッツ、トルストイ等の教義的宗教の外、多感派の脈を引ける新ローマンチシズム、神祕派と見るべきベクリン、はた自然主義の別流とも見るべき、英のロセチ等が、ファエル前派、佛のマネー、モネー等が印象派、近くは佛に起りて獨に及べるカーン、マラールメ、ハートレーベン等が標象派、殆んど數ふるに遑あらず。

されども、中に就いて最も著しかりしものは、自然主義と道德問題との二流なるべし。自然主義は近世を一貫したる夫の寫實的潮流と合して、殆んど全歐洲の文藝を風靡したり。此の點より見る時は、十九世紀の後半は、自然主義、寫實主義の時代なりきといふを妨げず。されども自然主義といふ中には、種々の波瀾を藏したり。自然を自然のまゝに、若しくは現實を現實のまゝにといふが如き口氣は、ラスキンに於いて、ゾラに於いて、聞くを得れども、此は餘りに輪郭的たり、漠然たり。事實に於いても、自然を自然のまゝに寫せるものが、必ずしも十分なるにはあらず。此に於てか、或者は智的工夫によつて別の力を藉り來り、之によりて興味の源を涸らさざらんとす。心理學なり、遺傳論なり、社會問題なり。寫實主義自然主義が落ち込まんとする穽は、常に此の邊にあり。之れを文藝上の科學主義といふ。此に至れば、文藝は科學、否、自然主義に囚はれたるなり。更

に適切にいはゞ、文藝は再び知識に囚はれたるなり。

此くの如き意義ある自然主義に對しては、勢ひ感情の反抗、知識の憎惡を表すべき氣運所々に起らざるを得ず。歐洲の評壇に、近時、科學的文藝評の多く喜ばれざる、ラファエル前派、ワッツ等の畫風の復興を見んとする、若くは白耳義のマーテルリンク等が神祕主義を取つて立つと稱せらるゝ、皆此の意氣がさする業なるべし。而して前にいひたる佛、獨の標象主義といふものこそ、千八百九十年前後より廣まりて、自然主義に抗せんとする凡ての傾向を總括したるが如き名にはあれ。十九世紀の初めには十八世紀末の古典主義に反動したる彼れが如き雜多の思潮を概稱して、ローマンチックと呼びぬ。今は二十世紀の初め十九世紀末の自然主義に取つて代らんとする諸思潮を概稱して、シンボリックといはんとす。面白き對照なるかな。

標象的といふ語は、上は希のプラトーンが美論より、下つてはニイチェが『ツァラツーストラ』にまで冠せらるゝ名なり。更に下りては、則ち今の標象派詩文人之れを標榜す。獨逸の一評家は、之れを分解しておもへらく、標象主義の中には、少なくとも三方面あり、頽廢期的兼女性的（デカデント、フェミニスチッシェ）快樂的兼超人間的（デヰオニシッシュ、ユーバーメンシュリッヘ）及び神祕的兼初心的（ミスチッシュ、プリミチーフェ）是れなりと。されども此の流派が果して將來長く此等の氣運を統率するの名たるに堪ふるや否や。此は未解の問題なり。同じ評家は謂へらく、獨逸人等は佛人より標象主義の名を借りて已に十數年、之れに代るべき新しき題目をば得たしと思へど、未だ之れを發見せざるを如何にせんと。

標象主義は、小說劇等の上にも見はれたり。獨逸のハウプトマンが『沈鐘』は其の好例たるべし。佛のサードゥが英の名優アーヴィングの爲めに我れダンテを材とせる劇『ダンテ』も此の部たり。溯りてはイブセン、ニイチェ等にすら、早く已に其の徴を見るといふならずや。

更に試みに學者といふものが理によりて解する標象主義の意義を聞け。現代の歐洲の美學者中、最も覇を稱するは、蘇格蘭セント、アンドリゥ大學のボザンケ、獨逸ミュンヘン大學のリップス、獨逸ライプチヒ大學のフォルケルト等ならん。ボザンケには美學史の著あり。近代歐洲に出でたる美學史中の白眉と稱せらる。書中、希臘の美論を評する爲めに揭げたる三標準の一として、著者は標象的と模寫的との對照を作れり。言ふ心は、模寫とは只だ見ゆるがまゝ聞ゆるがまゝの寫本を極意とするといふなり、標象とは、見ゆるもの以上、聞ゆるもの以上にある一物、すなはち見えざるもの、聞えざるものを拉し來つて、見ゆるもの聞ゆるものに寓するを目的とすといふなり。而して希臘にありては、プラトーンすら尙ほ美術は模寫なりといふを憚らず。されども、其の終に眼に見るべからず、耳に聞くべからず、唯心に思念して憧憬し得るものをも模寫すといふに至りては、プラトーンの模寫論はおのづから破綻を生ぜざるを得ず。此の破綻こそ、後に及びて一段高尙なる標象觀の出で來る端緖なれとは、此の著者の言ふ所たり。此の意を推し廣むるときは、文藝は、時勢につれて標象的となり行くを進步の路程とするなり。たゞボザンケは、別にハルトマン等の理想具象觀を援取する所あるが故に、近世の文藝を直ちに凡て標象的とは言ひ得ざらむ。されども、下の一事は明らかなり。曰く、內在の一物と外在の事象と、二重なるものが、如何なる方式を以てか相結合する所に、標象的といふことを生ずと。同じく二重なるものの干係なりといふに論を起せるは、フォルケルト

が今春公にせし『美學系統』第一卷の標象論の條なり。此の人はおもへらく、標象は日常の事にもあり、十字架を以て耶蘇教を標するの類は是れなり。されども是れを導いて審美の世界に入るゝ時は、別なる意味を生ぜん。第一は有相的標象（フォールシュテルングス、ジムボリーク）なり。人事の進行の中に、明らかに思念し得べき別の感想を寄するをいふ。ベクリンが『人生は短き夢』の圖に於いて、花に戯るゝ少女等、戎衣の袖も赤き騎士、やがては老い行き、死に行く、白頭の人、是等を配して、我等がはかなき夢と空想とを以て飾れる人生、其の終局の慘澹さなどいふ思想を寓したるが如きは、即ち是れなり。次は全化的標象（フェヤアルゲマイネルンデ、ジムボリーク）といふべし。事象の一部を取りて其の類の全階級を之れに表出せしめんとするなり。個を其のまゝ全の地に高むるなり。ゲーテのファウストが或る意味に於いて全人間を代表するのたぐひならずや。終りは情趣的標象（スチンムングス、ジムボリーク）といふ。第一の場合に於いて内在の一物が、明白なる感想なるに反し、玆なるは全く無相、たゞ一の名狀しがたき情趣の縱横に浮動するを覺ゆるものなり。此の種の標象美術は、多く其の材を非情物に求む、單なる色、音、模樣、建築といふが如きものに最も多し。人事を避けたるなりと。兎にも角にも、此等の解釋はみな、標象的文藝の要素たるべきこと、爭ふべからず。然れども、我れは斯くの如き標象主義及び、之れに漏れて而して何ほ十九世紀後半の自然的潮流に反動し來るべき、幾多の傾向を、總稱する別の名を有す。之れを横より呼ぶときは情趣的なり。之れを縱より呼ぶときは宗教的なり。」

第十一

「情趣的といふ語は、我れすでに之れを屢々繰り返せり。所謂自然主義が知識の工夫、知識の補助に墮せんとするとき、悍然として之れに反抗するものは、其の主義所執の如何に拘はらず、必ず何れの邊にか感情を生命とせざるべからず。例へば夫の理想といふが如きものも、知識の跋扈を惡みて之れに對立せんとする場合にあつては、其形必ず漠たる感情ならざるを得ず。明白なる理想は、知識に入るものなればなり。其の他快樂的といひ、女性的といひ、神祕的といひ初心的といふが如きは、すべて知識の明確以外、感情の自由なる天地に出でんとする傾向の變形たるを見る。更に之れに多感的傾向も加はり來ることあるべく、超自然的傾向も馳せ參ずることあるべく、往古的傾向も來らば拒むことなかるべし。此等の一切を總括するものは、情趣主義なり。

更に繰り返して之れを思ふ、文藝は囚はれたり。十九世紀の後半に於いて遂に精力非凡なる知識の爲めに囚はれたり、追ひ越されたり。我れは、ミューズの壇前に靈火を焚いて、囚はれたる文藝の爲めに義軍を擧ぐるものの意を諒とす。

今の文藝は一旦、全く知識の羈約より切り放たるべし。而して其の放浪する所は情の大海なるべし。情の海より搖れ來る千波萬波は、斷えず我が胸の岸邊にそゝろの音を立つれども、彼方の岸は究むべからず。今の文藝は先づ此の海に入りて自由を得よ・其の垢を洗へよ。」

第十二

「さは言へども、我れは自然主義を呪詛し去らんとするものにあらず。十九世紀の大なる文藝は、大半此の主義の影響を蒙りて生じたり。惡む所はたゞ其の極端のみ、知識に隸してより後の自然主義のみ。されば此の主義が更に一たび其の自然に還りて、飾らず、矯めざる自然

の感情の源を穿つに至らば、是れもまた情海の旅程に帆を并ぶる一同行たらん。且つや、自然主義は、十九世紀の後半に於いて、彼れが如くならざるを得ざりし理由あり。ローマンチシズムの浪は如何に寄せ返したりとも、一方に於ける知識の進歩普及は、駸々として秒時も止まらず。現に眼に見、耳に聞く所の驚嘆は、すべて知識の事業なり。斯くして、知識は遂に牢乎移すべからざる基礎を近代の人心に据ゑたり。何人が如何に活動を起さんとするにあたりても、傍に知識の一席あるをば無視すること能はず。自然は當に何事にも其の言を插むを忘れざりし。之れを觀るときは、自然主義はまた時勢なり。されど玆に自然主義と手を分ちて行きし一派あり。十九世紀の兒と生れし限りは、事に觸れ物に接して、知識は泉と湧き絲と縺れて止め途なし。彼等は、此の含蓄豐かなる知識をとりて、生きたるまゝ直ちに文藝の俎上に拋たんとす。科學者の爲す如く、死なして之れを截り出さんは容易の業なれど、願はくは之れを活きたる一塊の物として解きほぐしたし。如何にせば、我等が胸底の智の泉は其の甘味を失はずして世に流布せんか。彼等は斯くの如く案じわづらひたり。古のローマンチシストは感情の自然の流れ』と叫びたれど、今は『知識の自然の流れ』と叫ぶものあらんとす。イブセン等が行けるは此の道なり。

イブセン來りぬ。老體を杖に支へながら、巧みに青赤雨道の中間をあやどり行くを見られよ。彼れは所謂近世問題劇(プロブレム、プレー)の祖なり。問題劇といふ語の意義は廣けれども、近時歐洲に於いて、此の名を冠するは、普通に道德問題と相渉れるものなり。或者は、之をイブセンの社會問題劇といふ。されども、イブセンが取り扱ひたる問題は、ゾラが、飲酒問題、金力問題、教權問題といふが如きものを取り扱ひたるの故を以て、社會問題に携はれりと稱せらるゝとは類を殊にす。イブセンの問題は更に深し、道德問題なり、而も第二義道德にはあらずして、第一義道德の問題なり、道德の根本に關する問題なり、哲學的、人生觀的なり。

八年の間、我れ我れを知らねば、人をも知らず、唯不自然なる人形の如く日を送り來しノラが、一日俄然として眼を開けば、我れは尊き自然の我れを僞りたり。我が眞を追はん爲めには、慈愛ある夫も、いとしき我が子も、顧みるには足らず、籠の戸潛りし小鳥の如く、まつしぐらに高行く感情と翔りたる、また哀れならずや。罪もなき夫を緤にし、罪もなき我が子を孤にする、それも道德の心に苦しからずとは言はず。されど我れは之れよりも尊きものを見出せり、之れよりも高き道德を認めたり。我が自然の自由を追うて走る心中の情は、夫のため、子のための道德よりも更に尊からずや。一篇の『ノラ』は斯く問ひぬ。やがて是れイブセンが提起せる道德問題なり。我れは思ふ、是れ好個の哲學なり、含蓄ある知識なり。イブセンは、巧みに之れを感情の海にすくひ取りて、一流の文藝をなせり。されども、其の所含あまりに明瞭なるが爲め、新奇の色を失はざる限りは、人の視聽をも動かせど、終には墮して、知識に消化せられ了せん事を恐る。知識に囚はれたりとはいはず、一歩すれば則ち囚はれんとするものなりといふ。されば知識に飽きたる十九世紀末は、此の異彩ある文藝を早くも反動の氣勢によりて拂拭し去らんとす。我れはむしろ此の種のものに一片の愛着心を有するなり。

次に來らんとするものは、獨のハウプトマン、ズーダーマン、英のピネロ等ならむ。前なる二人はイブセンの跡に續きながら、斷えず身を赤き道に傾くるを見ずや。後の一人ピネロは、

むしろ一路にイブセンが跡のみを追ふと見えたり。

ピネロは地位に於いてアーサー・ジョーンスと共に英國劇作者界の泰斗なれども、イブセン風なる問題劇の末路甚だ振はず。動々もすれば過去に屬する者と見られんとす。其の回頭期を示したる『後のタンカレー夫人』以來、また一世を動かすべき作なし。此の作と並ぶべきものは、ズーダーマンが『其代榮えよ』の一篇ならんか。二つながら一婦人が夫に對する我れと過去の我れ若しくは他面の我れとの衝突を主題とし、其の婦人の滅亡によりて僅に其の衝突も滅亡すと描く。之れより來る解決の感は、人によりて種々なるを得べし。我れは以上の作風を名づけて哲理的といはん。」

第十三

「哲理的なる文藝は、近代の知識の非常なる發射力に應じて生ぜしものなり。而して斯くの如き思想上の形勢は、實に文藝復興以降數百年に亙れる一大經過の結果なるが故に、萬人如何ともすること能はず。凡そ一旦十九世紀に身を置いたる者は、文藝に於いても宗教に於いても、決して知識の壓迫力を度外視するを得ざるなり。さるが故に、工夫はおのづから如何にして、此の知識を文藝の海に溺らしむるを得んかといふ一點に集まる。知識は常に感情を手取りにして、解體し殺戮せんとす、是れ事實なり。文藝はすなはち感情を斯くの如き危險より拯はんが爲め、知識の足がかりとたり爪がかりとなるべき一切のものを包被し、若しくは除去せんとすることあり。之れを、我れは名づけて神祕的といふ。哲理的文藝は、大膽にありのまゝに理智を結選して、そこに文藝を見んとすれども、神祕的文藝は、退いて十九世紀が集積したる知識より回避せんと欲す。明らかなる月の夜に爛漫の花を見んは、妙ならぬにあらざれど、俗事の眼を遮り來るを如何にせん。暗夜靜かに滿天の星と語るの神祕さいかばかりぞや。知識は限りあり。感情は限りなし。知識の盡く所はやがて神祕なり。

獨逸近代の畫家をいふときは、人まづベクリンとメンチェルを擧ぐ。メンチェルが畫ける所は、宮廷的貴族的のもの多くして、最も有名なるは今伯林の王城にある先帝戴冠式の圖なり。寫實派の巨擘と稱す。之れに對してベクリンは過去數十年を代表すべき理想派畫家の棟梁といはるれども、特色は、其の神祕なる暗色乃至對照色を用ひて、幽玄の情を之れに寄するにあり。有名なる「葉島」の圖は、最もよく此の作者を代表す。蒼々として大魔王の如く並び立てる杉檜なんどの、只輪郭のみ青く黑く染め出されて、凄涼の氣まづ人を襲ふ所に、樹間極めて小さく、而も極めて鮮やかに一基の墓石立てり。其の前には白衣の女、髮ふり亂したるが、之れも墓石に釣り合ふ程に小さく、鮮やかに、膝を折りて禮拜の掌を合す。繋ぎ捨てたる舟は彼方にあり。全幅の色調、寂然、また蕭然、神祕の氣咄々として人に迫るを覺ゆ。斯くの如き畫に就いて見るも、神祕的文藝は理智を要せず、また之れを有せず。尋常の事象よりして、直ちに或る深奧不可思議なる感情に闖入す。中間に理智の容喙を許さず、是れ其の知識的文藝に反して起るべき資を有する所以なり。

更にまた神祕的と連續して見らるゝは、超自然的といふことなれども、茲には之れを神祕的といふ項下に合せんとす。蓋し超自然に材を取るの發意は、是れによりて知識の干渉を一排し、以て自由廣濶なる感情の天地に羽うたんとするにあればなり。超自然的、超人間的なるが故に、こゝに驚異來り、不可思議來り、神祕來る

は當然の數なるべし。

超自然的文藝の好例はオペラに多し。音樂界にありて、ローマンチシズムの近祖と稱せらるゝ獨のヴエーバーが『フライシュッツ』中、主人公が惡魔に敎へられて魔術の彈丸を鑄る一場は、下には巖穴の間に髑髏の影亂離として、上には妖雲起つて頻に東西し、全面の光景おのづから遠く人間界を出で、鬼氣人を襲ふと共に、沈痛、雄大、神祕なる音樂は、我れを導いて、廓落涯りなき世界に入らしむ。此の瞬間、我れはまた知識を以て其の境の假實を檢するに堪へざるなり。其の他ワグナーのジーグフリートが、鳥の高音に導かれて、歌ひつれながら、ブリユンヒルデの長夜の眠りを醒さんと火もて圍める巖上に登り行くあたり、ロルチングのウンデキネが、男の邸宅見る〱海底と變りたる龍宮に、初めて男と戀を全うする一齣、みな知識以外に出でて近代文藝の大を致せるためしなり。我れは之れを總稱して神祕的といふ。知識を絕し、若しくは知識を消したる形といふ義なり。」

第十四

「今若し上の如き諸多の思潮を、縱に次第して見る時は、またおのづから別樣の意義あるを感ず。卽ち自然主義哲理主義よりして神祕主義乃至標象主義に至れる傾向を推し延ばすときは、次に來るべき頂點は、おのづから明らかなるにあらずや。曰く、宗敎的といふこと是れなり。

宗敎的といふときは、人は直ちに露西亞のトルストイを連想するならん。されども玆にいふところは之れと異なり。思ふに、トルストイは既成宗敎に囚はれたるにあらざるか。見よ、彼方の赤き道より、殿として登場するものは、此の聖人なり。彼れが敎義を具象的に見得る好作の一例は、『復活』ならんか。主人公ネフリユドフと、女主人公カチューシヤとが西比利亞の荒原に於いて、遂に博愛獻身の大精神を全うしたる、はた其の取材取景の上に見はれたる所々の基督敎的感想は、げに誠實と覺えたり。一味の誠實、是れだにあらば、如何なる感情か描いて人を動かさざるべき。トルストイの文藝は實に宗敎的なり。されども、此の場合に於ける宗敎は基督敎なり。トルストイは所詮基督敎的なり。彼れは既成宗敎に囚はれたりとは、此の義に外ならず。それ基督敎の敎義は、大體に於いて已に餘りに明白なり。愛といふ一語、枝葉の解釋は幾ばくあらんも、其の根本的意義は殆んど自明なり。直覺なり。又其の範圍は餘りに廣大にして、抽象に近づき、刺戟力を缺く。此等の理由よりして、我れは此のもの文藝全般の生命となるべき題目にはあらずと斷ぜんとす。感情の海は無邊際なり。若し一切の文藝は愛（廣義）の說法ならざるべからずといはゞ、百弊立どころに生ぜん。前に擧げたるイブセンの『ノラ』は、斯くの如き基督敎義をば、宣傳せざれども、其の大文藝たる既得の地位は何人も奪ふこと能はざるべし。トルストイが『藝術論』中の美論に見るときは、彼れが其の結論を基督敎に嫁せしめたるの嫌は避くべからず。彼れおもへらく、美の客觀的說明は次第に蹉躓し去りて、主觀の感情のみとなれり。文藝は快感情にして、また他に對して感染力を存するものなり。文藝は文藝の爲めにあらずして、人間の爲めに存在す。故に又道德とも無交涉なること能はず。文藝が感染的に人と人とを結合するは善事ならずや。此等の點よりいふも、最も文藝に適したる感情は基督敎の精神なり。但し玆に基督敎といふは、其の踏襲的意味をいふにはあらず、眞精神を指すなりと。眞精神は可なり。されども、何ぞ之れを基督敎と限るが故に、

之れに合せざるものは不善となり、不美となりて斥けらる。殊に近代の文藝に至りては、此の如き、藩籬の中に入り得ざるもの、數ふに遑なからん。而も我れは此等の凡てを一掃して火中に投ずるの勇氣を有せず。トルストイは基督教に囚はれたるにあらざるか。

文藝の上にて、宗教的といふときは、其の意一層深し。我等が凡ての文藝に對するときは一種微妙の快味を感ず。前後左右を忘却して醉ひ入りたるが如き醇味を嘗む。蓋し快樂の擴充せられたる狀態なり。此の點よりいふときは、文藝の悦樂には高下の品等なし、凡て絕對、唯一、平等なり。されども斯くの如き感情の下に潛める知識は、到底永く無言にして已むべくもあらず。或る場合には、日常道德の聲となつて、善惡の批議を試み、或る場合には科學の聲となつて、眞僞の判斷を下すならん。哲理的文藝は則ち之れを導いて、理趣そのまゝを情の衣に包みたり、味ある文藝の一方式たり。神祕的、標象的文藝はまた、此の知識の明りを閉ぢ去つて、感情の暗所空所に美の神を安置せんとせり。之れも風情ある文藝の一方式たるを失はず。去りながら、此等のもの單に此に止まらば、美の最上座は尚ほ一扉の奧にあるべし。我等が眞に大なる文藝に於いて味ふ最後の者は、言ひ難き一種の妙機なり。我れ之れを何とか說かん。譬へば讀下に、觀照に、鏗然戞然として音を成すが如き機微あるなり。魂魄悸くの境あるなり。事は一小部なれども、其事直ちに全人間、否我が全經驗に響きわたりて、人生、運命などいふものに今更の如く頭を回らし來るの情禁じがたきの謂なり、哲理的より進んで、其の上に悟入あるなり、神祕的より進んで、其の奧に直觀あるなり。之れを宗教的といふ。要するに此くの如き主義にての宗教的とは、人生最後の命運に回顧するの情を刺戟するなり。文藝の奧に、廓落として、廣大無邊の天地は開け來るなり。文藝は此の域に達して初めて眞に大なりと謂ふべし。」

第十五

「東海の客。我が宗教的文藝といふの意義を領せられしか、いかに。文藝一たび此の妙相を着くる時は、たとひ其は刹那的たらんとも、聊も厭ふところにあらず、文藝は滿足すべし。之れを讀むもの、見るもの、聞くもの、みな必ず是れによりて忘れがたき妙旨を味ひ得べし。

而して文藝が漸く此くの如き域に向はんとすると共に、全般の思想界また、傾き行く所は宗教にあるか。世人或は未だ意識せずして、さまざまのものを要求しつゝあることもあらん、而も其の落ちつく所は宗教を求むるの聲なりしことを發見するの日、必ず來るべし。たゞ我がいふ宗教は、此の所にも既成の宗教を指すにあらず、一層廣き意味に於いてするなり。各個人各個の教義出づるも妨げず。またわが求むる宗教は、理智の調和を要するものに非ず。宗教は所詮感情なり、理智の絕したる所に生ずる一種の感情ならざるべからず。從つて之れに到達する方式は、悟入的、頓悟的なるの外なからんか。而して此くの如き感情は、傳染的なるか、または個々自發ならざるべからざるか、此は我が茲に答ふる能はざる所なり。

宗教の意義、上の如くなる時は、之れに入らんこと甚だ容易、また隨意とはいふべからず。一旦之れに入る時は、其の持續及び復現も必ずしも難事にあらざること、學者等のいふが如きものあらん。されども、先づ入ること、易からず。此に於いてか文藝の門を開いて、我等は、そこに少時ながらの妙法を示さんと欲す。

あゝ我れ論に興湧きて、いたくも夜を更かしたり。今夜はさらば。」

名殘惜しく、袖を引き止めんとするに、姿は早くも失せて、彼方水天の極みに、青赤の雲道虹の如く消ゆると見れば、今まで開いたりし天と水とは再び相迫つて、僅にもとの一髮線の明るみを殘すのみ。天地闇々、山腹なるラヴの火もまた火勢衰へたりと覺し。

後の半夜は、狹き船室の寢床に、眠りもやらで過ごせしが、船は未明に錨を拔いたり。而して歸來早くも百餘日、ヴェシゥギアスの火は今も燃ゆるなるべし。

附記

わがナポリの沖の一夜の瞑想は、ダンテをして我れに情趣的、宗教的の二語を語らしめたり。文藝の舟を知識の杭より解き放ち、情趣の海に浮んで宗教の岸に到らしめよ。取るべき針路は、哲理的、可なり、神秘的、可なり、標象的、可なり、はた自然的、可なり、寫實的、可なり。要は目ざす所に一種非凡のもの、人をして、胸躍らしむるものあるに止まる。是れ幻中のダンテが說法なり。

我もおもへらく、情趣的よし、宗教的よし、されども尙此の外に、日本の現代といふ特殊の事情に應ずべき文藝觀なかるべからず。其は、正しく日本的若しくは東洋的文藝の發揮といふことならんか。時は國興り、國民的自覺生ずるの秋なり。東西洋の感情には根柢に於いて到底容易に混ずべからざるの相違あり。此の感情の發揮たる文藝は、さればまた、東西別彩として存するも當然の事ならずや。文藝若し終には世界に統一せらるべしといはゞ、それにても可ならん。只其の前に當つて、先づ十分に自家を發展せしめんと要するなり。我れ嘗て匈牙利に遊び、劣りたる西亞の文明が、千年の間に如何に全く勝りたる東歐の文明に征服せられ滅亡せられたるかを見て、涙のにじむを禁じ得ざりし。日本は先づ日本乃至東洋の文明を確立するの必要を感ぜんか。

英にキップリング等の英帝國主義を歌へるあり。獨逸の文藝は世界にありて、最も多く國民的といふことに意を注げるものなるべし。十八世紀後半以後の、いはゆるローマンチックの文藝が、此の一語によりていかに誠實を加へ、奮發を加へたるかは、史を讀めるものの知る所なり。近くは標象的文藝の蔭に、早くも自國文藝(ハイマート、クンスト)を喚ぶものあるも、此の國なり。日本文藝の特殊の刺戟は、それ東洋趣味の發揮といふことにあるか。

情趣的、宗教的、東洋的、此の關係論はなほあるべきなり。「放たれたる文藝」を說いて更に我が想を尋ねん。

（明治三十九年一月）

即興

『人形の家』開演の第一日には招待客が多かつた。ノラとヘルマーとの對決以後になつて笑ふ人は殆ど無かつた。第二日からは大多數が普通の會員であつた。其の中には又傳手の勸誘を受けて義理に入會したやうな見物も可なりあつたらう。踊りのお淩へを見に行く心持で來たものも勿論あつたらう。ノラがヘルマーに對して、話したい事が澤山あるから坐つて下さい、といへばげら〳〵と笑ふ。私はあなたの前で藝當をしてゐたのですよと言へばげら〳〵と笑ふ。何よりも第一に私は人間です、と言へばげら〳〵と笑ふ。斯ういふ見物が二三分はあつた。さうかと思ふと、すぐ其隣席では、若い奧さん連で、急所々々にそつと涙をふくのも見られた。年をとつた婦人では、あんな女が本當に居るでせうか、とさゝやいて居るのもあつた。

（『頭言』より）

ルイ王家の夢の跡

一

ブールボン王家の榮華は三代にして亡びぬ。千七百九十三年、ルイ十六世がギロチンの露と消ゆるや、流れ淀みし斷頭臺下の血は、凝りて王者の恨と朽ちず。されど傳へ聞くだに魂銷ゆと覺ゆるは、十四世王が豪奢のさまなり。藤門平家の例は物の數かは、佛蘭西一國の富貴を身一つに荷ひて、全盛は歐洲二千年の歴史に并ぶものも無し。七十二年のあひだ人間の權勢悉く己れに歸して、「吾れは是れ國家」、藝術は以て己れを莊嚴すべく、劍戟は以て己れを誇耀すべし。ヴェルサイユの金碧裡に恒住の春ありて、羅綾の風、粉黛の香ひ、燕樂日夜を分たず。ルイ大王が黄金の代は、まことに人生の夢に似て、而してのち二百年、明けがたの薄あかりする我等が世にも、輪郭あざやかに影を遺すは夫の二百餘房の歡樂殿なり。されば阿房宮の昔は知らず、主亡き榮華そのまゝの跡を訪はんとするものは、佛蘭西ヴェルサイユの宮殿に往け。

二

ルイ家三代の文明は、煥發してヴェルサイユの宮殿となれり。宮殿の全部は、やがて一彙の藝術にして、富麗豪華の態、眞に世界の何ものも以て比するに足らず。十七八世紀の歐洲の文華は、佛蘭西に精粹を萃めて、此の一宮殿に結晶せりと見るべし。ポツダムなる無憂宮の規模は、獨逸國民が示して世界の誇りとするところなれども、ヴェルサイユの原本に比すれば、氣品に於いて、はた技巧に於いて、同日の談にあらず。

ヴェルサイユの宮殿がブールボン家三代百餘年の間に於いて多少の變易増減を經たるは言ふまでもなし。ルイ十四世の驕妃マントノンあり。麗しきこと雪の如く、冷かなること氷の如く、舊教の狹隘なる情味に驕飾虚榮の色を塗りて、こゝに一代の風尚を作り出しぬ。ルイ十四世期の文明は、此の意味に於いて一婦人マントノンの導くところ、彼の女もまた大いならずや。ヴェルサイユの藝術に其の風あるは、聊かより異しむに足らざるなり。

ルイ十五世の内廷には寵妃ポムパドゥア及びデュパリーあり。ポムパドゥアは絶世の美人と稱す。王官職を以て之れを廷臣の妻たる身分より購ひ得て妾となす。宮殿は是れよりたゞ彼の女が紅嬌翠艷の化粧の間と化し了んぬ。

さはれ是等は尙ほ言ふに足らず。ルイ家の一門悉く革命の浪に漂ひて、引く潮のあとに怪巖の如く聳え立ちしは、ナポレオン一世の帝國なり。此に至りて、佛蘭西の藝術は明かに一轉化しぬ。ブールボンの文華衰へてボナパルトの文華起る。ヴェルサイユの宮殿はまた此の對照をも示したり。

去年の夏、われヴェルサイユに過りて、其の建築裝飾庭園にルイ家の藝術を見る。所謂ロココ(Rococo)の一體是れなり。ルイ十四世の初めて此の宮殿を經營するや、一代の風尚はなほ大にクラシカルなりき。其の庭園の狀はよく此の理を示せり。然れども其の建築內に裝飾を加ふるに及びて既に大に後のロココの風を成せり。或は之れをバロック(Barock)式と見る。畢竟やゝ原始的なるロココに外ならず。而してのち、マントノンの世はポムパドゥアの世となり

て、茲に所謂ロココは其の發展の頂上に達せり。ロココは實にルイ十四世に發し、十五世に滿ちて、十六世に衰へたりといふべし。是れ其のルイ王家を代表するものたる所以。而して其のマダム、マントノンの爲めに建てたりと傳へらるゝグラン、ツリアノン宮に入るに及んで、其處にナポレオンの遺物と傳へらるゝ家具のかずかずを見たり。當時おもへらく、何ぞ其の風致のロココと異なることしかく甚しきやと。我れはこゝに所謂アムピール（Empire）體と稱する一箇の藝術に接したるなり。ナポレオンの第一帝國成るや、建國の基礎もと武にあるが故に、音樂に軍樂の發達あり、建築に武器の裝飾あり。されど其の最も顯著なる時尚は、發して雄健の氣、英邁の態を帶びたる裝飾美術となりぬ。雄健の氣、英邁の態、之れを統ぶるものは力なり。力の發現、是れ實にナポレオン帝國の精神にして帝國式と稱する藝術の生命また茲にあり。帝國式藝術の標現は偉大なる力が暢達して無碍不撓なるの姿なり。

ロココに粉脂の氣、柔婉の態あらば、アムピールには、帝王、權を行ふの概あらん。我れは二つのものゝ對照に、言ひがたき味ひあるをおぼえたり。

三

ヴェルサイユの地は巴里を去ること汽車にて略々一時間、ルイ王朝三代百餘年の帝都にして人口五萬を超ゆ。定規もて區劃したるが如き長方形の市街を、横に矢の根形に貫き來る三條の大路は、プラース、ダルメーの廣場に相會して、尖頭はすなはち宮殿の入口たり。宮殿の地域は凸字線をなして、矢の尖端は其の底邊の中央に接す。往衢の全觀、たとへば水干の袖を張りて烏帽子を戴けるものゝ如し。烏帽子は宮殿なり、束帶の紐の垂れたるが如きは三條の王道なり。而して宮殿の背後はすなはち一面の大庭園、其の規模の大にして其の按排の精微なるは、眞に人の目を驚かす。後の自然式築庭法に對して、所謂古典式庭園の模範たり。

左翼の門を潛らんとして先づ足を返して此の廣大なる一郭の建物を展望す。中夏の空青く澄みて白雲の僅に其の一隅に漂ふところ、麗しくも畫き出せる凸凹の古典的輪郭は、左右に延ぶること蜿々千餘尺、優に五萬の廷臣を容れて、居然としてまことに人間の天に驕る姿とも見るべし。されど其の高さの二層三層に止まるに比して横に房を連ね閣を並ぶるの限りなきや、全局の眼界おのづから天より壓せられて地に這ふものゝ形を成す。頭上に何物かの重きを戴くが如きは、此の建築の一瞥が與ふる感情なり。即ち些の重濁、沈鬱の氣は之れより生ず。中に不斷の歡樂を藏するの宮殿が、外形に於いて却つて此の對照を有するは奇といふべし。想ふに是れ、ルイ家全盛のはじめ、マダム、マントノンが冷靜の風格をこゝに印するものか。

同じき情味は更に後庭の眺めに於いて明に認めらる。試みに宮殿の西の階に立つて眼を放てば、大いなるかな人の智巧や。翠嵐滴る樹林の間には、中央に一線の大道果つるところを知らず。是れより左右に或は直く、或は斜に、枝線縱横に發して、而も均整方圓は必ず規矩によらずといふことなし。芝生あれば繪の形に小路を切り、花壇あれば色を組みて鍵子の模樣となす。水あれば、小なるは之れを花瓣に象り、大なるは之れを十字架に象る。紋所に似たるは、角切、武田菱、九曜星、幾何圖に似たるは大小等邊の三角形、辻は必ず圓形をなして、路の八方より會するもの車の輻の如し。さしも廣濶なる庭園は、たゞ是れ花木水石を使役して織り出せる一面の絨毯模樣なり。

されば此の庭園には、智巧ありて自然なし。

それ智巧は常に劃一を意味し、均整を意味し、規律を意味して而して此の一面に限らるゝものは人間なり。自然はすなはち劃一の裡に變化の多態を藏し、均整規律の上に放肆の趣、自在の形を有す。我等が人間の事に倦みて自然に之くとき、放焉として救はるゝが如く感ずるものは、實に此の變態自肆の新生命に觸るゝが故にあらずや。人爲の煩に堪へずして自然に還るものには、常に此の意義あり。

今ヴェルサイユの庭園は此の變態自肆の一面を缺く、滿目すべて均整なり、劃一なり、之れが調子を定むるものは直線と鋭角となり。されば、明澄徹底の趣は是れあらんも、紆餘たり、雜然たり、朦朧たるの情致は此所に求むべからず。冷かなり、重々し。端嚴はあれども煙波の情に乏し。前人が之れを呼んで嚴刻なる古典式といへるもの、亦た此の義に外ならず。

而して此の端嚴明徹の底には、實に一味の哀傷潜む。夫れ端嚴明徹は我等が知識を窮むるの形なり。知識の到達せんとする形式は、如何なる場合に於いても端然井然として一明徹底なることなり。然れども我等一たび知識の之くところを窮めて洞然たるの後、靜に回顧反覆して其の達し得たる理路に習熟するときは、異しむべし、其が底心より更に微かに一脈の哀感を發し來ることを。言ひがたく微妙なる、荒涼寂寞の感は、一見滿足ありて缺憾なきが如き知識の奧より閃き出づるなり。名づくべくんば是れ知識の哀傷か。我等は此所に至りて天地の最深所に横はる矛盾の大塊に觸着せるなり。我等は知識のあらゆるものを征服せんことをねがふ。而も一たび征服し得たりと信ずるものは、之れに住するとき却つて寂寞の感に堪へず、哀傷は洞穴より吹き來る風の如く我等を襲ふ。ヴェルサイユ宮の庭園は一たび見て端麗なり、二たび見て寥寂なり、三たび見て哀傷を惹く。

想ふ、其のいにしへ、宮中の夜宴曉に徹して、花の如く蝶の如き滿廷の士女、やうやく翠帳のあなたに疲れ去る頃は、初夏の空に殘月淡く、星薄く、庭の芝生に置く露の繁さ。此のとき窓に憑つて望むものは嬌瞼三分の眠を帶びて、明けがたの風に鬢の亂れを吹かす楊家の子、刀もて割れるが如き後庭の大路の末、霞にくろむあたりを眺め入りては、歡樂足んぬ、そゞろに新愁の我れを誘ふに堪へざりしなるべし。

四

ヴェルサイユ宮殿の外觀は以上の說に盡く。傍門より入りて、室を巡ること階上階下すべて二百餘房、金粉堆裡を過りては花を出でし蜂蝶の、身邊悉く黃に染むかと疑はれ、滿壁の畫圖、每扉の明鏡に包まれては、顧望たゞ七彩の虹、往返悉く日月の影、人をして路迷ひ眼眩して出づるところを知らざらしむ。斯くの如きは、謂ふ所ロココ式建築の意を示せるものなり。我れは更に精しく此の絕富麗の藝術を敍するの前少しく之れが說理を加ふべし。

帝國博物館の編述に係る日本美術史は、我が日光廟を以て彼の土のロココ建築に比せりと記憶す。是れ固より何人も想ひ及ぶべき類似なるべく、一は廟宇、一は宮殿たるの差こそあれ、許多の連想に於いて、まことに日光は我がヴェルサイユたるに恥ぢずといふべし。但し此の場合に於ける建築式上の類似は、單に其が有する濃味の彼此相通ずといふに止まる。豐富を示し、華奢を示し、靡麗繁縟を示すに於いては兩者一なり。

然れども、ロココが生命とする裝飾の様式は此の外にあり。何ぞや、曰く、放肆なる曲線の疊用是れなり、之れを卷曲線の美術と呼ばん。

更に適切に之れを言へば、渦紋、螺線、卷葉蔓

草の濫用なり。形は悉く彎曲して、線は悉く婉柔自在、舒びて端に至れば、巻縮して必ず多少の螺狀をなす。若し我が國に類を求むれば、渦、浪、雲、唐草の組織之れに外ならず。而して日光廟は其の堆金堆朱の臺に必ずしも唐草模樣の輪郭を用ひず。是れ其の樣式の異なる所以なり。

今ロココの由來を考ふるに、其の名は佛語のロカイユ（Rocaille）より來りて、螺狀裝飾を意味し、今は世に飽かれて、殆んど陳腐俗惡といふ語と同義に見らる。其の樣式に至りては、之より先き十七世紀にバロック式あり、端をミケランゼロが一側の技巧に發して末流の弊は輕快活動の線を用ふること漸く度に過ぎ、典雅平靜なる古建築の威容次第に崩れ行きぬ。ロコは實に此の脈を引けるもの、されば或は之れを以て直ちに佛蘭西化したるバロックに外ならずとするなり。

五

凡そ建築裝飾の如き美術に於いては、色彩の外、美の材料となるものは專ら線にあり、而して線は如何なる形に於いても、曲直の二つを離れず。金を柱に泥し、朱を榱に塗り、璧を璫に埋むるが如きは、色彩によつて美を成さんとするものなり。塔の圓きもの、尖れるもの、壁は横に割り、階は斜に渡す。此等のものが畫き出す輪郭の美はすなはち縱横曲直の線の配合なり。直線は常に沈靜を意味し、威嚴を意味し、淸涼を意味して、色ならば靑を以て譬ふべき性を有す。曲線が與ふる感銘は活動なり、輕快なり、溫潤なり、紅色を以て之れに比すべし。

建築が最も多く有する美は、直線的なること言ふまでも無し。建築の威容は多く之れより生ず。されば、バロック式よりロココ式に及んで、裝飾に曲線美の應用せらるゝこと其の極度に達するや、柱に、桁に、長押に、累々として堆きものは蔓草の影なり、巻葉の形なり、螺背の形なり、渦紋の形なり。建築本自の柱や長押やの力ある直線は悉く之れが爲めに蔽はれて、輕浮滑脫の曲線のみ表面に蔓り來りぬ。其の標象するところ察すべきにあらずや。

今渦紋狀の巻曲線が殊さらに斯く寵用せらるゝに至りし起原を考ふるに、夫のカーツーシュ（Cartouche）といふものと通ずる所あるに似たり。而してヴォリュート（Volute）といひ、スクロール（Scroll）といふもの、また皆カーツーシュと相通ず。蓋しカーツーシュは、上古埃及人が用ひし羊皮紙類の貼札のさま〴〵に刻みし線のあたりおのづから巻縮して、横斷面より之れを見るとき、一種の巻曲線をなすに基づくといふ。されば夫の建築史上にアイオニック式と稱する圓柱の柱頭には、明かに此の起原を想像し得るの裝飾を用ひしもの多し。譬へば一紙を展べて其の兩端を拔く下方に巻き放ちて之れを柱頭に冠したるが如きもの是れなり。

然るに下つてコリンス式圓柱の行はるゝに及べば柱頭のカーツーシュは中央より折れて二線と成り、恰も尖端を外に巻きたる對生葉の如く、はた百合の花瓣を抱き合せたるが如きものと展開し來れり。是れをアイオニック期に於いて單に直横線の兩端巻縮せるに止まりしと比すれば、媚態幾ばくを加へたるかは、言はずして知られん。後世ロココ式裝飾の中に濫用せられし巻曲圖線は、此に至りて形を成せるなり。啻にロココのみならず、あらゆる樣式の曲線裝飾に於いて、最も寵用せられしもの此の巻曲線の原理に如くはなかるべし。

六

また等しく巻曲線の原理といふも、或は對た生葉に似たりといひ、或は百合の花瓣に似たりといひ、或は蔓草の手に似たりといふ。之れを夫の水の渦巻くに比べて渦紋といひ、螺の背に比べて螺線といふに對すれば、其のあひだ截然として意義の變遷あるを認むべし。後者は尙ほ多く線條其のものに執す、生きたる自然の形似に近づけるの度甚だ徵少なり。『意匠の理論及實技』の著者英のジャクソン(F. Jackson)氏は裝飾美術の原素を分ちて幾何學的、建築的、工業的、植物的、動物的、人間的とせり。若し此の分類に從はゞ巻曲線は其の初め專ら幾何學的若しくは工業的より起り、植物的形似に達して、其の繁盛を極むるものといふを得ん。蓋し幾何學的とは、單に線條の組み合せに美を求むるの謂なり。工業的とは諸器具類の形似に意匠を籍るの謂なり。植物的とは植物の枝葉花莖に圖案を託するの謂なり。之れを水の渦巻くに譬へて渦紋と呼び、之れを螺の捩れたるに譬へて螺線と呼ぶのたぐひは、其の譬喩的稱呼が自然物の形似を示すにも拘はらず、必ずしも實の渦實の螺を聯想せしむるが爲めに美なるにはあらず、意匠の源は單に其の動いて窮まらざるが如き曲線の一種特殊の進行に存せり。是れ其の幾何學的なる所以。たゞ之れを貼札の巻縮せるものと見るのカーツーシュに於いて、僅かに器用工業の上に美の一源を發せしめんとするの意あるを見る。何となれば巻縮せる貼札は一の器具にして此の形を聯想するとき、そこに單なる線條以外の興味を發し得べければなり。また我邦に雲の巻舒を模したる雲文といふものあり、浪の頭に擬したる返浪といふものあり。是等は夫の渦紋、螺線に比して、一段多く自然の形似に近づけるものなれども、なほ植物形の巻曲線よりも多く幾何學的か、然らずんば逸して模樣の外に出で繪畫の域に入らんとするものに似たり。以上の理によりて我れは巻曲線裝飾をまづジャクソン氏のいはゆる幾何學的乃至工業的境域にありしものと見んとす。

之れに植物的標示の加はりしは何の時代なるか、今得て明にすべからずといへども、其の決して新らしきことにあらざるべきは早くすでに上古のコリンス式圓柱、乃至溯つてはアイオニック式圓柱の或るものにすら之れが應用を見るに徵して察せらる。されば今日にありては植物的原理もまた初めより此の種の裝飾の基礎の一となれりと見るを可とすべし。啻に一基礎たるのみならず、今は之れを以て幾何學的工業的原理を壓し去りたるものと見るも不當ならざるに至れり。我が邦に唐草模樣の稱あり、最も此の意を標するに適せるを覺ゆ。

さらば斯くの如く幾何學性の巻曲線裝飾が其の內容を展開して植物性の巻曲線裝飾となりしには如何の意義ありや。普通に裝飾圖案の要素を分つときは、上の幾何學的と呼べる無意味無標示の圖紋と、意味あり標示ある自然物の模寫より成れる模樣との二とするを例とす。之れを我が邦の紙門の模樣に徵せんに、其の方圓さま〲の紋樣が或は井桁に、或は巴に、單に紋樣として描かれたるは幾何學的なり。進んで線を薄に象り、圖を姬小松に作り、雀を散らし、鳩を對するが如きは模寫的なり。巻曲線の植物性を帶び來れるは、此の模寫的裝飾の部に入れるに外ならず。而して模寫的圖紋の最も重要なる特色は、其が自然の有機物に象る所ある點に存す。有機物はやがて生命あるものなり。生命! 實に此の一義を加ふるより圖紋美術は別個の新彩を發し來るにあらずや。

我が見るところを以てすれば植物、動物、人

間の三界にわたりて、有機物中最も形式の勝てるを以て直ちに圖紋模樣等の形式美術と調和し得るもの、換言すれば、生命はありながらも、生命が未だ甚しく其の物體の線形、色彩等を壓するに至らずして、色彩や線形やの外觀が直ちに生命の標示たるもの植物に如くは無かるべし。動物以上にありては其の名の標する如く、動といふ一現象が中心意義として表はれ來り、他の諸形式をば注意の燒點より押しのくるの感あり。言ひ更ふれば、動物に於いては、單に其が色を見、線の輪郭を見たるのみにては、直ちに生命を聯想するを得ず、之れに動くといふ一要素をたしかめ得て、初めて滿足するなり。よし極めて微妙なる線形、色彩の特徴によりて、其の生命の如何を見得る場合はありとせんも、此の如きは以て粗大なる圖紋美術の模し得るところに非ず。强ひて之れを模せんとすれば、走つて繪畫の領に入る。此等の困難以外に立つものは植物なり、我等は、草木花卉に動を豫期せず、たゞ其の延びたる枝葉幹根の形式乃至其の色によりて、彼等が有する生々の氣に接す。是れ其の形を模して生命を聯想せしめ易き所以なり。且つや、植物の形似に於ける曲直線の表象は、比較的に簡易單純なり。例へば種々なる葉の周圍は種々なる曲線の配合にして而して其の曲線はたとひ多少の變形を受くることありとも必ずしも以て其の草木が有する生命の表象を失ふには至らず、之れに反して夫の人體の面を劃れる曲線の如きは、一分一厘の微といへども、之を變ずることによりて其の體の生命を疑はしむるほどに鋭敏なる表象を有す。是れより推せば、いちじるしく線形の變形を要する圖紋美術には、植物の形似こそ最も攝取し易き材料にして、動物の形似は之れを圖紋化するの頗る困難なるを見る。

七

總じて圖紋美術の原理は美學上稱するところの形式美の原理なること言ふまでもなし。而して形式美の原理は之れを一括して變化の統一(Unity in Variety)といふ一語に簡示するを得べし。或は線を用ひ或は色を用ひ、或は形を用ひて、種々の圖樣を描くものあらば、其の種々の線、種々の形はやがて變化なり。すでに二個以上のものありて、加ふるに此等は地位形態一ならず、變化にあらずして何ぞ。然れども、此等多態變化の形象は、決して無制限に雜多なるべからず、必ず如何なる邊においてか劃一せられ統一せられざるべからず。部分は雜多なり、されど全體にわたりて一定の規律あり、是れを變化の統一といふ。圖紋が美術の性を帶び來るは此の理に合すればなり。

然れども斯くの如き原理の下にある圖紋は、他の姉妹美術と同じく、おのづから二つの相反せる方向に馳せんとす。一は其の原理の半面たる變化に重きを置くものなり。變化を先にするものは、自由を喜び、不規律を喜び、自然を喜ぶ。自然の物象は凡て必ずしも赤裸々の統一性を表せず、一見全く不規律なるが如く見ゆるところに其の妙あり。是れ、自然物を模寫すれば、其の形圖は多く自ら變化勝ちて統一性に乏しき所以、前にいはゆる模寫的圖紋は、來つて玆に美を求めんとするに至る。日本の裝飾美術に此の傾向の著しきは何人も容易に想ひ到るところなるべく、花草を描き、鳥魚を描くも、すべて之れを原形の自由なるに象りて、たゞ僅に圖紋美術の必要性たる統一の意を點す。されば日本の模樣圖は、模樣化したる花鳥にあらずして、花鳥化したる模樣といふを適當となすの觀あり。西人にして此の理を考へたるものの一例は、夫の『生理的美學』を著して近世の美學界に一紀元を作れる英のグラント・アレン

氏が千八百七十九年の雜誌『マインド』に寄せたる文中に見るを得べし。其の要に曰く、均整（統一といふも同理）といふことの快味は知識の滿足に萠す、理解を助くといふこと是れなり。又斯くして此れを喜ぶの情は遺傳的に集積して一種の愛着の情となり、此の情の滿足みづからも快味の一源となる。また斯くの如きものを産する人の熟練を嘆稱するの情も同一理に歸すべし。之れを總括して均整統一の快味といふ。然れども均整の快味に慣るゝ時は厭きて一種の反動を生ず、規律を幼稚として不規律を喜ぶの情是れなり。昔者希臘人は早くすでに模寫美術、裝飾美術の區別に於いて、此の反動を模寫美術の上に示したり。更に極端にまで此の意を示したるものは日本の美術にして、日本人の自然を寫すや、先づ其の不規律の方面に筆を着け、進んでは裝飾美術にすら此の方法を用ひたりと。變化の一面を過分に愛するの趣味が、果して統一を過重する趣味の反動として起れるものなりや否やに就いては、尙ほ大に論あるべしといへども、日本の裝飾美術が西洋のそれに比し、一見別樣の觀あるは實にアレンの言ふが如き事實に基づくなり。形式美の原理中、統一の方面よりもむしろ變化の方面を顯著にして、裝飾美術より模寫美術に之くの中途にあるが如きもの、我が模樣類の特色たるは爭ふべからず。之れに反して、統一を先とするの圖紋は、よし自然物の模寫に其の形を發することあるも、而も統一といふ約束のために多大の制縛を蒙りて、自然物が有する自由放奔の態を失ひ、固滯して生動の致なきに至る。餘りに規律あり、餘りに整然たるなり。夫の、初めより全く幾何學的なる圖紋類、たとへば龜甲形といひ、綸子形といひ、萬字といひ、雷文といふが如きは、辯ずるまでもなし、形を植物に取りたるものにすら、此の傾向あるもの少なからず。十六の菊は菊の花に則り、五三の桐は桐の葉と花とに則れりといへども、其の模樣化して均整統一を重んずるの結果は、殆ど模寫の原意を沒して、幾何學的圖樣と成り了りたり。其の他斯くの如く全然有機的本性を沒却するをも厭はず、單に模樣圖案を自然物中により探り出さんとするに於いては、進んで之れを動物の形に求むるも容易なるべし。蓋し動物の形は槪して均整的規律的なり。植物に於いては我等は其の不規律的なる點に自然の生命を認むれども、動物にありては、却つて規律的なるを自然と見る。若し樹木にして左右全く均等に枝葉を發したるものあらば、人は之れを不自然にして造り物の如しと感ずべけれど、魚鳥の形にありては、左右略ぼ均等ならざれば不自然と呼ばれん。色線等の幾何學的形似よりいふときは、植物界の支配原理は變化にして動物界の支配原理は統一なるを見るべし。

八

然らば統一的なる動物の形似は、同じく統一を生命とする模樣圖紋の材案として最も妙なるべきの理なれども、事實は之れに反すべし。蓋し圖紋が幾何學的立脚地より離れて模寫的立脚地に接せんとするの動機は、アレンの所謂單調幼稚なる均整に厭きて、之れに不規律自然の趣を加へんとするにあればなり。即ち統一を生命とするものが、之れに變化を加へんとするなり、模樣が繪畫の姿態を着けんとするなり。從つて單に形似よりいふときは、動物よりも寧ろ此の點に自由なる植物を取るを便とすべし。動物の形は之れを淺く寫すときは均整統一の意には調和し易きも、自然の生趣を失ひて、殊さらに之れを借り用ふるの本意に違ふを如何にせん。また之れを寫して深く其の生命に觸れんとすれば、已に高遠に過ぎて模樣圖紋等の形式美

に止まるに堪へず、逸走して寫生本意の繪畫に投ぜんとす、紋樣美術の約束を破るなり。要するに模樣と繪畫と、若しくは形式美と內容美との混和に最も恰當なるものは、植物程度の自然物なるに似たり。

模樣が、繪畫の分子を混和して、統一裡の變化を自由にせんとするの意は、また靜的趣味に動的分子を加味せんとするにあり。統一といふ現象に對しては、人心は常に靜止に近き態度を持す。凡て領會し、徹底し、結了せる形は統一なり。我等の意識作用が、一たび斯くの如き域に達して、之れを反復するときは、慣れ滑りて漸く其の活動力の消費を減じ、茲に靜止の狀に近づき行くは何人も經驗する所の事實なるべし。此の際之れを搖り興して、新たなる活動に導かんとせば、其の結了し徹底するまでの過程に曲折を加へて、意識をして容易く駛走せしめざるに如くはなし。變化多態にして、各部の經過にも多分の活動力を要するが如くならしむるを妙とするなり。變化を豐富にし自由にするの義これに外ならず。動の理また茲にあり。

而して此の如き變化と統一と、動と靜との美學上の原理を最も、簡單に標出するものは二個の線なり、所謂曲線と直線と是れ。

直線は統一を意味し靜的を意味す、蓋し線のうち最も單一にして力を要せざる進行の形を標せるものは直線にして、從つて其の印象は冷靜、明徹、威嚴といふが如きものならざるを得ざればなり。曲線は之れと異なりて、すでに二個以上の力の協同を意味し、直線の靜的なるに比して遙に動的なり。我等の是れに對するも、直線のひたすらに無碍なるものを追ふとき、突として彎曲したる線に移ることあれば、茲に一種の刺戟を感じて、將に靜止に入らんとせし注意力が、遽然として活動し來るを覺ゆべし。之れに反して、若し曲線より直線に移るときは、其の結果また相反す。要するに曲線には常に努力の意識を伴ひ、直線には休止の意識を伴ふ、一は動的にして他は靜的たる所以なり。

而して此の如き意義ある曲線を比較的自由に表はすものは植物の形似にして、植物の形似を、或る度まで生動の原意と共に傳へんとする圖紋は、實に唐草模樣の類に外ならず。唐草模樣が有する原理の價値察すべきに非ずや。

唐草といふ稱呼については、古來絡み草のみの字の省かれたるなりといふ說あり。此の說に從へば、から草とは蔓草といふ義に外ならず。然れども他方より觀るときは、夫の唐紙唐繪等と同じく、支那より渡來したる珍しき草模樣といふ義ならずやとも想像せらる。稱呼の起原はしばらく何れにありとするも此の種の裝飾模樣が我が國にては如何なる時代に如何にして現はれたるか。同一原理に基づける類似模樣にて、必ずしも草ならざるもの、例へば前來しばしばいへる渦卷、螺線乃至卷雲の形等の何れが先なるか。古き建築物乃至經卷類の金具、梵鐘の緣飾等に彫られたる唐草、蕨手、渦まきの類が古きか、將た狩衣地、錦、緞子等の織物に見えたる雲菱、龍膽、唐草、蔓牡丹などいふものが古きか。此等は全然支那より輸入せるものか將た我が國自發のものか、そも〳〵兩源相合したるものか。若し其の起原を支那にありとすれば、之れと西洋との比較、關係如何。すべて此等は趣味深き別箇の硏究題案たり。

九

而して如上諸圖紋の根本原理は卷曲線といふ事なり。夕映の空にさま〴〵なる雲の卷舒を見、若しくは河中に水の渦まき海邊に浪の逆まくを見て、こゝに卷曲線圖の落想を得るが如きは稍々稀なる場合なるべしといへども、紙片、

葉端、花瓣等の卷縮せるを見て、卷曲線圖の工夫を案出するが如きは、むしろ頗る自然の順序ならんか。さらに進みて、蔓草の一莖生じては卷彎し一莖伸びては卷彎し行くさまに想を託するに及べば、卷曲線の原理は十分の發展をなせるものといふべし。

さらば、卷曲線の原理とは何ぞ。古來線の美に論及したるもののうち、曲線美について最も重要の說をなしたる者は、『美の分解』の著者英のホガース(W. Hogarth)なるべし。彼れは、形式美の原理たる變化の統一を以て、美一切の原理とし、之れを一種の曲線に代表せしめて、以て就中裝飾美術について巨細の論をなしたり。之れをホガースが美の線の說といふ。要は波線若しくは蛇線を描いて、其の二個以上の曲線の連續せる所に變化の意を尋ねんとするもの、ホガースみづからの語を藉れば、美の最要素たる複雜葛藤(Intricacy)を之れによりて標示せんとするなり。

曲線の連續によりて複雜なる一切の美を說明し去らんとするの難事たるは言ふまでもなけれど、之れによりて形式美の一面たる變化活動の理を標示するの思想は、注目に値するものたり。また「裝飾意匠の原理」と題する書を著せし英のドレッサー(C. Dresser)氏が楕圓曲線の說に以爲へらく、楕圓線が正圓線よりも美なるは正圓線が一中心點に發するものなるに反して楕圓線の二個の中心點を有するがためなり。言ひかふれば一個の出立點を有する曲線よりも二個の出立點を有する曲線が之れを考察するとき意義複雜なるの理なればなり。從つて楕圓線は更に三個の中心點を有する卵形曲線の複雜なるに如かずと。是れまた曲線美の說明に於いて注目すべき思想の一たるべし。

我等は以上の說より更に一步を進めて、卷曲線の上に同一の原理を認めんとす。之れを例へば、蕨の芽、浪の頭の如き渦紋は、其の軸に於いて直線若しくは非常に鈍き曲線をなし、其の頂に及びて急遽彎卷して、而も圓に還らず、次第に其の彎曲の度を急にして、こゝに二個以上の中心點を有する曲線が、不卽不離の微妙なる關係を以て連結するの狀を呈す。其の意義、夫の卵圓線よりも更に複雜なるを見るなり。蕨の芽、浪の頭が、枝を生じ脈を分ち、且つ伸びては且つ卷曲して窮まるところなきの觀を成すものは、卽ち一層複雜なる唐草模樣の原理なり。卷曲線の美は玆に至りて十分の展開をなせるものといふべし。

此の點を超ゆるときは、形式美の原理盡きて、內容美の原理其の作用を始む。すなはち、寫生の意を援き來りて模樣の中に繪畫の味を點加するなり。而して唐草模樣の多くは、また此の原理をも適度に包含す、其の謂ふところ成長の原理(Inflorescence or Principles of Growth)を加へたること是れなり、植物が根より長じ行くの姿を攝取したること是れなり、植物に象りたる殆ど凡ての卷曲線圖には、如何なる形に於てか其の根を標すべき區劃線を加へて之れより上騰し行くといふ、成長の意を明にするを例とす。卷曲線圖は、此に至りて啻に其の線形を蔓草に似するのみならず、其の精神をも蔓草に擬して、以て生動の氣を著け來るを見る。一葉の卷曲線圖は模樣ながらにして生きたるものとなるなり。

卷曲線の理はしばらく玆に盡きたりとせん。斯くの如きものを堆積したるヴェルサイユ宮殿の樣は如何。

十

幾變遷の後のヴェルサイユは、一箇の美術宮たるに過ぎざれども、其の昔は、眞に情海無限の波瀾をこゝに寄せたり。庭の構へは冷きまで

にクラシカルなり。膨みに微妙の線を見せたる古代の石瓶、冷靜の美を希臘に寄せし大理石の彫像、此等のものを點綴せる道は悉く直線にして、此所に逍遙せる宮人等が、肉を暴し情を暴したる蒼白の額には、歡樂の底より湧き出づる荒涼の感、隱すべくもあらず。

然れども、一たび紅綠の帳を揭げて內裡に入るときは、光景おのづから一變す。冷靜沈重の威あるすべての建築的直線は、漸く注意圏外に墮ちて、視界に進み來るものは、彫りたる裝飾、塗りたる裝飾の堆積なり。中にも長押に、柱頭に、額緣に、累々として彙をなし房をなすものは、夫の卷曲線形にして、卷曲線形のあるところ、金粉狼藉、碧壁を照し、紅帷に映じ、燦爛として我が額も輝くかと異しまる。すべてこれ歡樂閒滿の姿なり。粉脂溫柔の氣、歌舞周旋の態、到るところに充ちたり。壁に名畫を懸け、床に名器を列ね、柱に彩紋を施し、天井に神仙を刻む。二百の房子之くとして是れならざるはなし。人間富貴の家も亦た極まれるかな。

十一

中央正面の階上に、幅六間、高さ七間、長さ四十間に係るの一室あり。淨玻璃の間（Galerie des glaces）と呼ぶ。室內一切の裝飾は此の宮殿と共に一代の文華を代表する名畫工ラブリュンの意匠に成りて、當代美術の粹を集めたりと稱せらる。天井の區界、長押まはりの凸凹線等に、尙ほ必ずしもロココならざる趣味はありといへども、全局に漲れるものはロココの風潮なり。此の室、庭に面して十七個の大窓を開く。窓の高さ三間に餘り、幅之れにかなふ。白玉を溶したるが如き日光此の窓より汪溢して正面の壁に達すれば、こゝには柱間悉く大玻璃鏡を揭げたり。埋め木の床また精磨したる一面の玉の如く、走るものをして直ちに滑り且つ倒れしむ。日光この間を左往右往に照射して、身はたゞ大光明の中にありと感ずるの外、何事をも思ふの遑なし。柱はすべて碧、黑の大理石にして、磨き出せる自然の理紋は、或時はしよろ〳〵流れの水の跡、或時は曉の空に棚引く橫はた雲、或は蔓の如く延び、或は蟲の如く這ひて、こまやかに其の面を飾れり。畫幅を嵌したる圓天井は、虹の如く其の脚を垂れて、脚のつくるところ、簇々として群り起る彫刻彙は、多く形に於いて卷曲、色に於いて黃金、柱頭以上の壁面は之れに蔽はれたり。コリンス式の柱頭、窓のアーチの花環、見るとして黃金の光り饒なる卷曲線にあらざるはなし。されば此の淨玻璃の間に綏舞の裳を飜したる當年の宮女等が、其の風俗に於いて、浮誇の粧ひ殆ど人間の自然にあらざるが如き狂態に陷りて異しまざりしもの、まことに所以あるかな。

十二

淨玻璃の間に隣して、大いさは其の十が一とも見るべき一室あり。ルイ十四世の寢室にして、彼れが臨終の寢床も今なほ舊のまゝなりといふ。蓋し王者の富と力とによりて、あらん限りの善美をつくせる此のヴェルサイユ宮殿に於いて、更に其の華奢の極點を示したるもの、此の室の如きは無からん。此の意味よりすれば、ルイ十四世の寢室は、またヴェルサイユ宮殿の眼目ともいふべきなり。

室に入ればたゞ見る、中央に逞しき金塗の欄を横たふ。蓋しルイ大王の遺物を保護せんがため、後世の構ふるところ、其の彼方に一基の寢臺を安置せり。ルイ十四世が七十二年の長き王位の後、千七百十五年九月一日を以て安らけく此の世の眼を閉ぢしはこゝなりといふ。深紅の帳を深く絞りて、上には天蓋に淡紅淺綠の彩

帷を垂れ、崩るゝばかり盛り上げたる卷曲葉の彫刻には、金粉を恣に推して、指頭を觸るれば指頭も埋もるゝかと疑はる。右に煖爐あり、緣は金粉と唐草となり。其の奥に數尺高さ燭臺を置く、また黄金と卷曲線となり。壁幅の緣、柱の頭、長押の上、扉の面、色として金色ならざるはなく、形として卷葉蔓草にあらざるはなし。我れの初めて此の室に入るや、見ること暫時にして眼眩し氣暈するの感に堪へず、終に長く留まるを得ずして出で去りぬ。あゝ是れルイ王が空しき榮華の跡なり。

十三

風物の遷らんとするや、ルイ王の富貴ポムパドゥアの驕奢を以てするも、ヴェルサイユ宮殿をして長く美術の宗たらしむる能はず。此の纖細婉柔に對する反動の機は、早く十八世紀の後半、ルイ十六世が頃に萌したり。ルイ十四世は十八世紀の初めに死せりといへども、ロココ式美術はむしろルイ十五世の寵妃ポムパドゥアの生涯と始終して、十八世紀の後半に其の衰微を示せるなり。さればまたロココ美術の運命はルイ王家の運命にして、ナポレオン一たび之れに代つて起つや、反動の氣勢は所謂帝國式美術となりて第一帝國と共に興りぬ。

ロココに對する反動は第二のクラシズムなりき。一旦卷曲線の下に隱れたる建築的直線が、其の沈靜の威容を呼び返して、再び表面に顯はれ來らんとせるなり。而して古典的といふが中にも、希臘よりはむしろ羅馬に心を寄せて、一切の事、羅馬帝國の昔に式せんとせしは、實にナポレオンの理想にしてまた其の期の文明なるべし。羅馬式といふものの委細は今こゝに論ずるを得ざれども、希臘の後を受けて、典雅沈靜の中に一味の雄健を加へたるものは、其の主なる特色なるべし。支配の氣、帝王の相はあらゆるものに影を宿して、威力といひ雄大といふことを其の生命とするに至れるなり。是れ社會國性のおのづからの發現に外ならず。而して歐洲統一の覇圖を有せるナポレオンの人格は之れと歸を一にす。彼れが羅馬帝國の古に式せんとするの好尚は、當時の藝術に影響して、第一期佛蘭西帝國の下に帝國式の一體を生ずるに及べるもの、亦た宜ならずや。帝國式美術について稍々精しく論ぜるものには、獨のカール・ロスナー氏(K. Rosner)が『十九世紀裝飾美術』と題する書あり。此の體の美術を標して、威力、單一、適當の三語につゞめたるを見る。

十四

ヴェルサイユ宮殿に遊ぶものは、また必ず之れと隣したる大小二つのツリアノン宮殿に過るならん。其の大ツリアノン宮に於いて、我れはロココとアムピール、ルイとボナパルトの對照を見るを得たり。

グラン、ツリアノンは既に述べたる如く、固ルイ十四世がマダム、マントノンの爲めに建てたる小宮にして、其の倚ほ平明なる古典式建築の面影を存するところ、多く後の風氣の感染せざるの藝術たり。中にナポレオン一世の遺物を保留したる一室あり。彼れが用ひし寢臺は、以て前のルイ十四世のそれと對照すべく、其の他、椅子に卓子に、ある限りの什器は一種別樣の色調を有して、ヴェルサイユ宮の靡麗の藝術に馴れし眼を新たにす。

ナポレオンの寢臺は其の臺の輪郭、截りたる如き方形にして、頭尾の楯の内面に用ひたる卷曲線は細麗の風を避けて、數尺たゞ一卷曲の雄勁なる趣きを寓したり。金を泥すべき所に一面の木地を見せ、圖紋を要する處には直線を以て劃りたる中央に唯一つの卷曲線圖を施して堆積累重の臭味を脫せり。之れを要するに

金粉を用ふること漸く濫ならず。鋭き直線は凡てのもの輪郭を支配して、固かりしものは多く方形となりぬ。全面にわたりて小卷曲線を堆積せしもの、今は之れをたゞ一の大卷曲線にして雄健の致を添へ、若しくは之れを中央の一葉に減じて純潔單一なる品位を貴ぶ。其の印象は高貴なり、英邁なり、帝王の氣を帶びたり。

後のマホガニ細工または我が欅細工に似て、橙、黄、色の木地を磨きたる中央に無造作に黄金の圖紋を置き其の他には周圍の直線の外何ものをも配合せず、たとへば我が漆器類に菊桐または三葵の金紋を蒔繪したるが如き高貴の風あるもの、玆に見えたる裝飾の特徴なり。總じて我が紋章といふものに一種の韻致あるは其の多く曲線を用ひたる圓形圖なるに拘らず、規律を持すること嚴に、且つ之れを累積して濫に流るゝことなく、婉曲を整々の中に保つの微妙なる調和あるがためにあらずや。

十五

帝國式美術は、斯くの如くロココに對して清新なりきといへども、何ものか長へに清新なるを得べき。此の體もまた時勢の遷移には抗し得ず、やがて過去のものとなり了んぬ。ロスナー氏は此の體の美術を以て千七百八十年より千八百二十年に亙りて行はれたるものとなす。千八百二十年はナポレオンがセント、ヘレナに死せるの前年なり。其の他は、ロココ以後の美術を以て一に古典式復興と概稱するもの、又はルイ十六世に已に此の氣勢ありしが故に之れを古典的ロココ時代と稱して、ナポレオン期はただ其の連續たるに過ぎずとなすものあり。我れは帝國式に一期を劃するの說を採れり。而して千八百二十年頃より後の古典的美術は、羅馬より更に希臘に溯らんとせりと稱せらる。

嗚呼ルイ家とボナパルト家と一代の氣風はまた其の代表者の運命なり。文藝も亦た往々にして之れと消長を等しくす。王者逝いて藝術も其の墓に葬らるといふもの、ヴェルサイユに於いて其の理を見る。

對句哲學

理想を視てゐる心は宗教である。
理想を尋ねてゐる心は藝術である。

彼れは夢幻であり、
此れは事實である。

攝取せられた滿足と感謝とから宗教が生れ、
求めて得ざる不滿と絕叫とから藝術が生れる。

昔の藝術は宗教の下風に立ち、
今の宗教は藝術の下風に立つ。

藝術の底には常に眞理の認識が一粒のダイヤモンドの如く埋んでゐる。
之れを感情に求めれば、唯はつと思ふ驚きである。
之れを知識に求めれば、終に窮極する所を知らない。
畢竟千古不塡の深淵を認めたのである。

相手が犧牲になつて聽いてゐると思へば、話すのがいやになる。
自分が犧牲になつても、合槌を打たねばならぬ對話は尙いやである。
犧牲を拂はせても、犧牲を拂つても、何とも感じないやうに神經を馴らすのが世渡りの道である。

（『題言』より）

自然主義の價値

一

吾人は此の文によつて上に掲げた自然主義論（『文藝上の自然主義』、明治四十一年一月『早稻田文學』參照）の後を承けようと思ふ。彼れが如き文藝上の傾向は結局如何なる意義若しくは價値を有するか。本論の眼目は此の問題を研究するに在る。

顧みて周圍の文壇を見ると、此の問題に關する議論は日を逐うて益々盛んになり、吾人の所懷に對する批評も數回のみならず聽くを得た。其の中で吾人の論に疑議を加へられた諸説に對しては、論題の性質上、一々別に答へることが容易で無い。蓋し其の題意の複雜深邃なること自然主義論の如きは近時の文壇に多く見ない所である。其の一末梢を將つて搖かすも、震動は幹に及び根に及ばなければ休まぬといふ趣で、一端の説も直ちに文藝存立の本本問題、乃至人生道徳との交渉問題に入らねば解決せられぬやうに見える。其の實地運動が極めて重大な意義を有すると同じく、自然主義論も責任の重い大問題として取扱はれなくてはならぬ。よつて吾人は茲に部分々々の辯護よりも先づ自家の根本觀を述べて、更に世の批評を得たいと思ふ。

專ら彼の地に於ける事實及び理論を基として自然主義の要領と見るべき點を數へ出さんと試みたのが、一月の論の趣旨であつたが、其の結論としては、作の態度方法の上に純客觀的と主觀插入的との二項目を得、作の目的題材の上に自然の眞といふこと、之れを碎いては社會問題、科學、現實等に現はれた眞といふことの一項目を得た。併しながら此等の諸項目には尚多分に解釋、批評の餘地が存する。態度方法の上の研究を自然主義文藝の外形論と呼び得るなら、目的題材の上の研究は其の內容論である。吾人は便宜のため此の區別に從つて論緒を進めよう。

二

目下の我が文壇が前掲の要項に對して提出する疑問は一二に止まらないが、それに先だつて一瞥して置く必要のあるのは現時の小説が實際前期（と假りに呼ぶ）の作風と如何なる點で相違するかといふ事である。吾人は參考のため前期の代表作の一二と近時の傑れた作の一二とを比較して、優劣の判はしばらく措くも、其の作風に截然たる差あることを明にして置きたい。例へば故紅葉の作中、內容の上で最も新しい方向に近よつたものは『多情多恨』と『金色夜叉』とであらう。兩つながら一種の意義ある小説である。意義ある小説とは漠然たる語であるが兎に角單に讀んで面白いといふ以上、何ものかの深い暗示を與へるやうな印象を、感想の上に刻まうとする作風である。『多情多恨』には思想上にさした暗示も無いが、一つの情緒を描いて見よう、又は或る特殊の性格を描いて見ようといふ所に、作者の考へ方が一歩人生の意義といふ如きものと接近した跡を認める。『金色夜叉』は明に一の落想を以て人生の意義の一片を見させようとする、思想上の印象を覘つた作であらう。而して前者は其の所含の意義があらはな思想で無いだけに、一方からいへば一層多く渾然として自然派的であるが、一方からいへば情緒のうしろに深い背景が無さ過ぎる。たゞ

情緒を書いたといふ丈に了る弊がある。また「金色夜叉」の方は思想があらはに出てゐるだけに、「多情多恨」よりは多く意味ありげに見えぬでもないが、併し其の思想が單純平明であり過ぎるため、熟視すれば其の思想が概念となつて作から離れる、所謂觀念小說の餘弊を免れない。さらば此等の內容的意義を引き去つて此の二作を見るか。たしかに手だれの作であるからそれ丈としても面白いには相違ない。たゞ同時に作の威嚴が無くなつて、段々普通の娛樂機關に近づく。我等の審美判斷の少なくとも半面の評價が下落する。此の兩作を特に他作から抽き出す理由が無くなるのである。

(5) 內容の論はそれでよいとしても、外形は何うであるか。手だれの作だから面白い。其の面白いのは何ういふ風におもしろいか。「多情多恨」の中で最もおもしろいと言はれるのは葉山といふ副主人公の通りものと、並はづれてうぶな鷲見柳之助といふ主人公との對照であるが、取り分け第三節のあたりが喝采を博したと記憶する。たとへば柳之助が愛妻を喪つて淋しさに堪へずして、葉山をたづねた會話の條に、葉山の細君を窮屈がつて、

「君ひとり限りだと可いけれどな」

「私がひとり限りなら、早速鷲見さんと夫婦になるよ」

「實にさうだね、君が女だと可いのだ」

洒落でも何でも無く、柳之助は眞面目で言つたのである。葉山は手を拍つて、反身になつて笑ふ。

「此奴が雌だつた日にはお荷物だ。床の中から指圖をして、亭主に飯をたかせる玉さ。夕涼みよくぞ男に生れたるで、自他の仕合せなのだらうよ」

又は、「金色夜叉」で例の熱海の海岸のくだり、貫一の詞の

「吁、みいさん、かうして二人が一處に居るのも今夜ぎりだ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜ぎり、僕がお前に物を言ふのも今夜ぎりだよ。一月十七日、みいさん、善く覺えてお置き。來年の今月今夜は、貫一は何所で此月を見るのだか！　再來年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ！　可いか、みいさん、一月十七日だ。來年の今月今夜になつたらば、僕の涙で必ず月を曇らせて見せるから、月が……月が……月が……曇つたならば、みいさん、貫一は何處かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いて居ると思つてくれ」

宮は挫ぐばかりに貫一に取りつきて、物狂しう咽び入りぬ。

一字一句皆洗練せられて、是れだけづつ別々に味へば、含んでゐたいやうな甘味がある。けれども詮ずるに作者がこしらへて言はせた言葉といふ埒をば破り得ない。見物を前に据ゑて置いて、さてうまい事を言つて見せるぞと舞臺に見えを切つた時の臺詞である。それだけの情、それだけの性格を一つ取り離して强く出さうとした修辭的誇張たるを免れない。犇と之れを取り卷いてゐる長い廣い周圍の一凸起であるとしての情緒、性格の濃寫では無い。從つて之れを全體に繫けて見るとき、誇大、修飾、人巧、すなはち不眞實といふ意識が伴ひ起らざるを得ない。幕背に作者の聲容が透けて、言葉の遊戲、感情の遊戲、人事の遊戲をおもしろく演じて見せる。されば面白いと思はれる限り寢ころんで讀むのは善いが、起き直つて眞面目に考へ込む氣にはなれない。馬鹿らしいといふ感じが起る。言はゞ人を眞實にする力が足りないのである。

要するに外形に於いてはそれがぴつたりと本來の內容にくつかないで、中間に作者の手が挾まり、全體の結構に於いても、性格の鏤刻、感想の表出に於いても、譬へば胸で作つた外形でなく、頭で作つた外形になる。與へられたる內容を外形の力で增加しようとする。又內容に就いて言へば、人生の意義を暗示する力が無い。之れを作家の態度覺悟の上から見ると恰も近時の作風と相反することとならう。外形の力で內容を增加せんとする態度と、內容以外に一毫も外形の寄與を許すまいとする態度と、筆を執る時の氣持が違ふ。又表面に見えてゐる事柄だけを面白く書かうといふ態度と、其の背面に人生の深い意義を暗示しようといふ態度とも、氣持が違ふ。此の氣持がやがて作風に千里の差を生ずる所以である。

或は態度氣持といふことは、作者心內の事であるから有無ともに明白には分らぬかも知れぬ。また甲乙種々の氣持はあつても、其の實現した結果は必ずしも之れと符合しないことが多いかも知れぬ。されば結局は作の出來ばえによつて推斷する外ないのであらう。今最近時の佳作の中で、便宜のため『早稻田文學』に載つたもののの一二を取り出せば、正宗白鳥氏の「何處へ」の中で、主人公健次と友人織田とが救世軍の說教を聽いた後のところ、健次が

「面白いぢやないか、彼奴は地球のどん底の眞理を自分の口から傳へてると確信してゐる。あの顏付を見給へ。自分の力で聽衆を皆神樣にして見せる位の意氣込だ 人間はあゝならなくちや駄目だ」

「何にも感心しない君がなぜ今夜に限つてあんな下らない者に感心する？」

「さうさ、僕は救世軍にでも入りたいな。心にも無いことを書いて讀者の御機嫌を取る雜誌稼業よりや、あの方が面白いに違ひない。あの男は欠伸をしないで日を送つてるんだ。生きてらあ」

「はゝゝ」と織田は大口開けて勢無く笑つて「僕は靑年が淺薄な說敎なんかして日を送るのが不憫になる」

「しかし淺薄や深刻は本當の問題ぢやないんだね、打たれようが、罵られようが、自分のしてる事が何であらうとかまふものか。もつと刺戟の强い空氣を吸はにや駄目だ」

と健次は歎息する如く言つたが、織田のぼんやりした顏を見上げると、急に「ぢや此處で別れよう」と早口にいつて輕く會釋して九段の坂を下りた。

又は眞山青果氏の『家鴨飼』の主人公が巡査から立退の說諭を受けて、

「だとつて家鴨は私のものだ」

「誰も家鴨をお前のものでないたア云はんよ、會社は家鴨の背中へ柱は立てない」

と警官は噴出した。

皆ドッと笑つた。老爺は額越しにジロリ皆の顏を見た。（中略）

「、仕事だ〳〵」と源吉は下から上へ聲をかけた。工夫や人夫どもはドヤ〳〵と窪地へ降りて來た。

「待つて、待つて」と門左老爺は空を泳ぐやうな手附で、慌てて寢床を起つた。見ると顏色も靑褪めて、眼も淚含んで居た。脣はブル〳〵と顫へて居る。

「何んだ、まだ文句があるんか爺さん」と一人は鶴嘴を杖つきながら嘲つた。

「家鴨をしまつて……垣根も私が結つたのだ」とヨボ〳〵と緣先を下りる。

「早くしねえ、背中に柱が立つよ」と皆を笑はせる。

老爺は大手を擴げて池の周圍をグル〳〵回りながら、ト、ト、ゝと鳥を一所に集め

る。頸の長い牡雞が一羽いたづらさうにそちこちと逃げ廻つて何うしても鳥屋へ入らない。老爺は息を切らしながら一生懸命追廻してゐた。そしてやつと入れた。
「さア仕事だ」と監督の命令で人夫どもは埋立の土を畚で搬び初めた。老爺は丸い背中を日に曝しながら、周圍に結つた裏竹の垣根を實體にほぐして居る。

此等の文例を前に引いた例に比べると、修辭上粗雜の點あるに拘らず、中身から發して來る味を極めて素直に傳へてゐる。面白いのは全體と連なつた内容であつて、其の部は其の部だけ特に取り離して後から彩色を濃くしたといふやうな氣味は少しも無い。

更に此等の作が提起する内容について言ふと、「何處へ」は未發展の作であるため周圍が充實してゐないに拘らず、作中の諸性格、たとへば主人公や織田や、主人公の父や、乃至降つては博士の細君や其の夫や、それ〴〵のスケッチだけで既に其の周圍もおのづから想像せられ、現人生の一邊が深い印象を讀者に刻みつける。『家鴨飼』亦た其の主人公の性格及び周圍の生活が一幅の活畫圖となつて、眞面目に人生を回顧指目するの情に堪へざらしめる。如何にも此等が眞實の世相であると感ずると共に、それを本にして眞面目に其の周圍、其の連續、其の奥を想ひまはさしめる。人生は味ひの深いものだといふ氣持を起させる。たゞ其の事柄だけは面白く見せても、延いて人生の味ひといふ氣持にまで我等を導く必然性の無い作は、おのづから是れと類を異にする。

以上の説は主として之れを事實に着して立てたのであるが、其の新しいものの特徴を今一度概括して言ひ直すと、外形に於いて消極的には排技巧となり積極的には描寫の自然となる。また内容に於いて消極的には排遊戯となり積極的には人生の意義の暗示となる。さて此等は一般謂ふところの自然主義と理論上如何の干繋を有するか。

三

自然主義論に對する種々の非難の中、先づ外形の純客觀的といふことに關聯して起る疑問は、之れを作者の心内に求めては、果して無念無想といふ如きことがあり得るか否かといふ事、また之れを作り上げた物に求めては、果して全く主觀の交らない作品といふものがあり得るか否かといふ事である。

此の論を根本から明らめようとするには、主觀、客觀といふ語から定義してかゝらねば無駄である。例へば常識上の主客觀、心理上の主客觀、哲學上又は知識論上の主客觀といふ風に區別して見ると、通例の議論には此等のちがつた別け方がごつちやに用ひられてゐる。吾人は論の煩瑣を避けるため茲に或度以上の論據を假定して、審美的主客觀ともいふべきものを極ざつと取り出して見んに、論の順序として先づ心理的主客觀から出立する。即ち吾人の意識内に於いて知的現象は（判斷までを含めて）凡て客觀であるとし、情意的現象は凡て主觀であると假定する。

此の以上はこゝでは説かない。而して斯くの如く客觀が我等の意識内に生起したとき、之れに主觀の情意が反應作用を呈する狀態に凡そ三段若しくは四段の境地があり得る。例へば路傍に性の知れない異體のものが横はつてゐる。先づ斯やうな智的現象が意識の鏡に映じた時、我等ははつと思つて驚き見つめる。我れの是れに對する態度を定めるため先方の正體を見極めんと注意を一時に之れに集める反應である。而してそれが行倒れであつたと知れると共に、自分に不利の繫累が來りはすまいかと思

へば、すた〳〵と急いで其の場を去る。又自分に掛り合ひは無いと思へば好奇心で立ち止まつて見る。玆までは第一段の情である。我的と名づけてよい。我れを中心として直下に感ずる情である。而して好奇心で立ち止まるなり、急ぎ行き過ぎるなりしながら、さてつく〴〵其行倒れの身の上を思ひやると、哀れになる、又何か深い遺恨でもある者なら善い氣味と思はぬとも限らぬ、つまり同感若しくは反感が起る。之れは第二段の情で半我的とも名づけられよう。卽ち半ば我れを基本としながら半ば先方の情に同じて、彼我對立の狀となり、可哀さうとか、憎いとか善い氣味とかいふ批判的態度を取る。從つて可哀さうなら救濟の方を考へてやる、また憎ければ其の狀態を續けさせたいといふ氣持になる。凡て直ちに我が意のまゝに實行せんとする階段に移つて行く。道德的同感又は反感とも呼び得よう。それが第三段になると審美的同情になる。卽ち他的とも稱すべく、全く我れを離れて先方と同じ情が我れに起る。妻子もありながら零落して到頭路傍の行倒れとなつた、當人の心の中は無限の悲哀であらうと普通に察せられる。此の悲哀が傍觀してゐる我等の胸に迫る。此の時我れと行倒れの人とは一になつて、一つの情で結合せられて了つてゐる。幾分か先方の悲哀を想ひ得て氣の毒だ、救つてやりたいと思つてゐる間は、まだ我れと他と一つにはなつて居ない。第三段の情になると、我れは全くさもあらうと想定する先方の情そのものになり切る。此に至つて主客の兩觀は溶けて意識の一燒點に合體する。我れの情で向うの物を生かす。向うからは物が來、我れからは情が往つて、ぴつたりと行き逢つて一つになる。之れを美意識の本來と名づけてよいのであらう。而して此の第三段境は更に二つに分れる。情緒的と情趣的ともいはう。情緒的とは前來の說の如く普通種々の情緒が其のまゝ客觀に合した場合で美的情緒(Aesthetic emotion)であるが、情趣的とは、斯くの如き情緒的事象が幾何づつでも起つた後または切れ目に、其の中心事象がちよつと意識の上に薄らぐと同時にそれに伴つてゐた明白な情が水に繪具汁を點したやうに、ぱつと散つて一面の漠とした情になり、且つ連續した數多の情が朧げに或る一調子を鎖として周圍に浮動し來る。またそれにつれて其の種々茫漠の情を的確にせんと雜多蓄積の智的要素が意識の表面に浮びかける。玆に一種捕捉し難い一般的な感情を經驗するに至る。此の一般的な情、言はゞ事後感情、全體感情、混合感情とでも解すべき一種の印象を玆で美的情趣(Aesthetic mood)と呼ぶ。印象的情緒である。第四段境と見てもよい。

斯やうに見地を定めて見ると、第一第二の境にある情は美的とはならない。何故ならばまだ客觀化されて突き出されてゐないからである。勿論是れは舊來の美學の實感假感の別ではない。現實に對して痛切に同感してゐる、其の同感で差しつかへないが、たゞ同感といふ形に是非ならなければ、藝術は產れぬといふのである。行倒れに對して驚く、憫む、直ちに筆を援いて之れを描く、而も若しそれが藝術になつたら、必ず其作の成る瞬間の氣持は知らず知らず驚く憫むを通り越して、悲しいといふ境に入つてゐるか、乃至其の驚く憫むが直ちに自分でありながら自分に打眺められ同感せられるといふ二重の形になつてゐるに相違ない。此の意味から言へば、凡て藝術は客觀的でなくてはならぬ、客觀化せざる主觀は斥けらるべきものである。卽ち藝術の世界から全く遮斷せらるべき主觀とは、第一境第二境の情である。强ひて遮斷しなくとも、是れに滯る間は、藝術的取扱をする餘裕は無い。達つ

て之に形を與へても、藝術では無いものになる。第三境以上は、自ら實地に切に感じながら同時に之れを描くことが出來るが、第一第二の境地では初めから藝術は出來ぬといふのである。

されば非藝術的な此の主觀的情緒を藝術に入れるには一歩を轉じて第三境の情緒に變性さすか、然らずんば一種特殊の方法を用ひて強ひて之を誘ひ出す外は無い。其の方法とは節奏統一などいふ人心本然の活動形式に模した技巧の力で其の途を滑かにするとか、又は客觀化した事象の中に感嘆、批評、判斷、意見等の形で點綴し附着せしめるとかいふ工夫である。例へば夫の「萬葉」の行倒れを哀む歌に「家にあらば、妹が手まかん、草枕、旅に臥せる此旅人あはれ」とある、末句を哀れむといふ意に取れば、主觀の情が其のまゝ點綴せられ、且つ節奏に乘つて流れ出たのである。其の他抒情的な詩歌乃至散文中の抒情句等が皆同じ例である。此等は即ち一種特殊な工夫に屬するもので、藝術中の主觀方面といふべく、主觀的と抒情的とは此の意味で同義に見られる。之れを抒情的又は自彼的主觀と名づけて置く。

抒情的主觀に對して情緒的主觀ともいふべきものがある。第三段境の情緒を特に智的方面から引き離して、是れを主として描き出さうとする。茲では旅人不憫といふ作者の抒情でなく、旅人みづからの悲哀孤獨の情緒ではあるが、それを更に旅人から取り離して作者が自由に取扱はうとする。夫のロマンチシズムの中にある主觀的傾向は多く是れである。情緒主義などいふものと連なる。

最後には情趣的主觀がある。第四段境たる情趣は本來第三段境の結果として生ずる印象であるから、第三段の客觀的情緒さへ十分に現はれゝば、情趣的印象はおのづからにして伴ひ起る筈であるが、併し殊さらに此の順序を逆にして、情趣の方から寫さうとする。此の場合には情趣が我れの氣分氣持といふ如きものに近よつて、而もそれが主位に立ち客觀の智的要素は從位に落ちる。勿論主從位の度合は色々であるが、詮ずる所情趣といふことが著しく前に進み出て來る。此の意味で主觀的と言つてよい。情趣的主觀である。夫の印象派の藝術などいふものにあらはれる主觀は此の部に屬する。

四

吾人は審美的主客觀の意味を數へて、主觀といふに抒情的、情緒的、情趣的の三を得た。今之れを自然主義が主觀を排するといふ意に照すに、排する所の主觀は抒情的と情緒的との二つであることが知れる。此の派にあつては、抒情的主觀は、其の内容たり目的たる自然の眞を打破するが故に斥くべく、情緒的主觀は情の誇張から技巧上の作爲を生ずることによつて同じく自然の眞を遮る、故に斥くべしとする。無念無想とは其の智的方面に見はれた事象に對して第一段第二段の利己的道德的思量若しくは之れを表出せんとして生ずる技巧の念を絕すること、及び第三段の情的半面に特に執するの念若しくは其の結果として生ずる技巧の念を絕することである。されば殘るところは其の智的事象を歩々成るべく實驗に近似して自然と思はれる方式に展開せしめ、一々相當の情緒の反應し來つて事象と相即するを期し、さて斯くの如き智情融會の第三段境を其のまゝ忠實に表出しようとする。客觀的藝術の極處である。直接間接の實驗に導かれて事柄がおのづからの如く展開すると共に、第三段の

情を吸ひ出して生きた事柄にする。是れを片端から直寫して行く。排主觀といひ、排技巧といひ、無思念といひ、描寫の自然といふは是れに外ならぬ。

又感想が第四段に達するまで描寫の筆を取り上げず、さて第四段の情趣から初めて忠實に寫しにかゝるといふ場合には主觀插入的となる。すなはち所謂印象的自然主義である。而して此の種の描寫も歸するところは第三段の客觀化せられた世界を活現するにあり、また第三段からする描寫もつまりは此の第四段の情趣に達しなければ味が無い。自然主義に於いては雙方相合し得る。

而して若し第四段の情趣からするものが、其の行きどまりに第三境を見ずして別の世界を見るとすれば、そこに神祕主義標象主義が生ずるのであらう。

五

外形上の自然主義が抒情的主觀を斥け情緒的主觀を斥けるのは、此等のものが皆自然の眞を打破し若しくは蔽遮するからだといふ。さらば自然の眞とは何であるか。自然主義の内容論目的論は此所から始まる。

曰く社會問題、曰く科學、曰く現實、此等を以て事實が示す自然主義の内容と假定するときは、其の底に共通する意義は何であらうか。蓋し社會問題といひ個人問題といふ如きものを文藝に入れたのは、明かに當時の道德界の潮流に動かされたのである。たとへばイブセン、ハウプトマン、ズーダーマン等の作に其の適例を見る。又科學の眞を傳へ、現實を本とし、作者の實驗を語り、普通人の言葉を取次ぐを本旨としたゾラの如きは明かに當時の學問界の風潮に動かされたものである。（コントは其の所謂績極智として科學的知識を最高價のものとした。畢竟我等が五官で實證し得るもの程確實な知識は無いといふ思想で、此等がゾラなどを動かして、極端にまで行かしめたと稱せられる）。最後に現實を殊さら其の隱れた方面に穿ち入り、野獸性、暗黑面を暴露したゾラ、モウパッサン等には、單に學問界の科學熱に動かされて的確なものを描いたといふ以上、他の意義があつたらうと察する。それは彼等獨自の人生觀で、暗黑面は人生から掩蔽し去らるべきものでは無い、是れに最もよく人生の眞相が見える、又は少くとも是、半面を算入せざる限り眞の人生は分らぬといふ見解で、即ち隱すところ無き人生を見せるといふ意義である。

斯くして道德問題を研究する、科學の助けをする、人生の眞相を見せるといふ意義が社會問題、科學、現實などいふ自然主義の内容に存するとすれば、吾人は茲に先づ見逃すべからざる重要の一問題に到達する。蓋し此等の三意義を一貫するものは道德的又は實際的目的である。自然主義の動機乃至目的は、道德（廣義の）上にあつて、文藝の上に無いのではないか。即ち自然主義は文藝獨自の目的によらずして道德問題、科學問題、世相問題を取扱ふが爲に存在の意義を有してゐるのであるか。それとも文藝といふもの本來が何等か斯やうな實際上の支柱に倚りかゝらなくては獨立し得ないのであるか。

六

古來文藝の目的には常に二つの極があつて互に相動搖してゐる。一は快樂で、一は實際的意義である。併しながら之れを總括していふ時は文藝の歸趨はたゞ美にあること勿論であらう。即ち快樂といひ實際的意義といふものは、畢竟美の成分として文藝に入る。されば若し斯やうな統一目的から離れて實際的意義のみ傑

れた作品があつたら、それは文藝としては價値の無いものになる。道徳を說くものであつたら修身書になり、教義を說く者であつたら說教集になり了するであらう。之れに反して快樂のみある作であつたら、やがて講談落語遊戲飲食の樂みと徑庭がなくなる。此の二つは必ず並存するを要する。さればと言つて二つのものが漠然同居したばかりでも藝術とはならぬ。快樂は其の講談落語的方面から來り、實際的意義は其の修身說教集的な所から來る。斯くの如きは往々いはゆる應用文學の上に見るところであるが、文藝として高價なものでは無い。兩者は是非とも溶解して一つになつてゐなくてはならぬ。快樂である、併しながらそれが他の快樂と違つて一種の意義を含んだものでなくてはならぬ。また實際的意義である、併しながらそれが其のまゝ快樂であり懷しく忘れ難いものでなくてはならぬ。此の境を吾人は先づ大まかに美と名づける。されば美は一體であるが、其の判斷評價を分解するときは、常に二元的傾向を有する。一方には快樂の度で藝術に高下の品等をつけようとする、他方には其の所含の實際的意義の深淺で高下を定めようとする。二つの標準が絕えず交錯して作用する。實地に於いても理論に於いても、これが古來の事實である。のみならず兩者は往々調和せずして、反動的に相消長することすらある。又或時は名稱を更へ形を變じて互に知らず〳〵相抱合してゐることもある。

今自然主義の場合に之れを當てはめると、其の所謂眞が含む道德的意義も此の意に於いて是認せられる。茲では畢竟實際的意義が眞といふ名を被つて快樂と相擁し以て美の要求を全うせんとするものである。自然主義は文學をして道德應用の門に降らしめた者では無い。眞といふことを特に標榜するのは、在來の文藝が漸く套窩に陷つて單なる空想の遊戲、形似の遊戲のみとならんとするに對し、反動的に他の一面を提起して、文藝に實際的意義の價値加はらざるべからざる所以を明にしたに過ぎぬ。更に之れを事實に近づけて言へば、たゞ遊び事をして人に娛樂を與へてゐるやうな藝術では、無意義で、劣等であるやうに思はれて、眞面目にやる氣がしない。もつと嚴肅な意義が見出したい、そこで人生の眞相を露呈せしめよう、科學の眞理を敷衍しよう、社會問題を研究しようといふが如き實際的意義を標榜して來た。所謂眞は美を完成する一材料たるに外ならぬ、最も多く美を有價ならしむる範圍に於いて眞は文藝上に價値を有する。

七

然るに今若し見地を一變して考へると、文藝を有價ならしめ嚴肅ならしめんがために眞を加へるのでなくして、逆に、此等の眞が發揮したくてたまらない、社會改革の念、科學發展の志、世相暴露の望抑へがたく、それが發して此の種の文藝となつたとも解せられる。此の場合には美は從になつて、眞が主位に就く。美はたゞ眞を發揮するための方便に過ぎない。思ふに此の兩面は雙方とも事實であり、また眞理である。恐らく同一の人にあつても、兩者が交互に若しくは同時に存し得よう。凡そ文藝の內容となるべき思想は、それが充實して熱してゐなくてはならぬ。たとひ美の材料として眞を描くものでも、其の眞が浮薄な未熟なものであつてはならぬ。必ず己れ一個の胸中には十分に醱酵してゐるを要する、衷心から自分のものになつてゐるを要する。單なる一時の間に合はせや附燒刃であつてはならぬ。また美を眞の方便とするものでも、それが誠の藝術家である限り、最初の動機の如何に拘らず、筆を執つて紙

に陷んだ瞬間からは藝術的態度に入らざるを得ない。卽ち己れが個人として社會を思ひ、科學を慕ふ一念は、しばらく其の方便として選んだ眼前の材料を活描せんとする一念に地歩を讓らざるを得ない、言ひかへれば之れを文藝として文藝の目的に從つて取扱ふ外如何ともしかたが無くなる。如何なる動機から生ずる文藝でも、結局美の一義に括られるに於いて二つは無い。たゞ美の內容に變化があるのみである。世上往々審美上の醜と道德上の醜とを混じて道德上の醜惡を描くことが直ちに美を超越するものと考へるのは誤りである。美とは人間一切の現象を包容し得る文藝の終極點の名であつて、美を破るといふことは文藝で無くなるといふことに外ならぬ。

さて自然主義の文藝が斯くの如くして內容に眞を蔵するとすれば、それが自然主義たる所以は、眞そのものの性質解釋に存すると見るのが當然であらう。何となれば、若し宗教問題を目的とするもの、哲學的眞理の布衍を目的とするもの、表面的世相の描寫を目的とするものがあつたら、自然主義で無くなるからである。さらば社會問題、科學の眞理、人生の暗黑面などいふ解釋の眞が何ゆゑ特に自然主義の名を蒙るに至つたであらうか。

是れに對する答は二箇條ある。一は所謂社會問題の文藝が因襲道德、現在文明に對して反對の一面たる自然素樸の出立點を特に取り出し、人をして一旦素手に立ち戻つた時の葛藤を想像せしめる。言はゞ文明對自然の照合を描く。而して文明は既にありふれたもの、自然は新たに作者が掘り起して來たものであるため、おのづから注意は後者に集まる。自然主義の文藝と言はれる所以である。他の一は、科學といひ人生の暗黑面といひ、みな根柢に現實といふこと、而して五官を通ずる物的現實といふことを取り出し、理想的精神的といふことに對照せしめる思想を蔵する。幾ら暗黑醜惡でも、それを隱蔽した人生圖は不眞實の人生圖である。我等が人生を考へようとするには、之れをも算中に入れなければ間違ひになる。斯ういふ方式で物的現實を掲示する所からまた自然主義の文藝と名づけられる。

八

斯う解して見ると、文藝上の自然主義は文明對自然、精神對物質、理想對現實といふ所まで、一般思想上の主義と通じてゐるけれども吾人の見る所を以てする時は、兩者は此の點を追分にして相別れるものである。文明に對して自然を見、精神に對して物質を見、理想に對して現實を見るとは、一方から言へば既成物の破壞である、出發點に還元することである。一般思想、就中道德、宗教社會等の實際文明が若し破壞還元を最後の解決とした場合には、恐らく人生は悲劇のそれの如く絶滅するであらう、卽ち還元主義であると共に一種の涅槃主義である。けれども今日の多數者は是を最後の解決として安立し得るもので無からうから、どうしても破壞還元の後には新しい何ものかの建設を豫想せざるを得まい。從つて此所にまた他の種々の解決が生じて、個人主義にも社會主義にも本能主義にも唯愛主義にも嚴肅主義にも之くであらう。さもなければ凡てを信ぜざる絶望のナイヒリズムにも入るであらう。要するに斯くして何れにか相對的理想を求めて之れに解決の安心を託せんとするのが自然の成行である。

然るに一たび之れが文藝に入れば、破壞還元の事實はあつても、それが還元主義といふ解決になつて居らぬ、理想になつて居らぬ。ましてそれ以上の主義解決は猶さら出て居らぬ。其の作品に接して、明瞭な歸結を認め、是れだ是

れだと言ひ得るやうな氣持は決して起らぬ。思ひ得たやうな、思ひ得ぬやうな、却つて益々深く瞑想せざるを得ないやうな、つまり未解決の心地が殘る。作者は肉的生活が善いとも靈的生活が善いとも自然が善いとも文明が善いとも言はぬ。そんな風に思はせようともせぬ 思はせようとしたら即ち邪道である。されば現實の一相として取扱ふ限り還元主義もよいと同じく、光明主義も唯愛主義も皆よい。十分の力を用ひて之れを活現せしむべきである。けれどもそれらは作の目的でない、目的は此の時すり拔けて一段高い所に懸つてゐる。

では何ゆゑ特に自然、物質、現實などいふものを自然主義の要件とするか。曰く、此等のものは從來の主義の偏したものを解散せしめんがために必要なのであつて、其の跡に入り代らしむべき主義として必要なのではない。理想主義寫實主義等が文明、精神、理想等の表面的なものの蔭に自然、物質、現實等の裏面的なものを押し隱した人生を描いたのに反抗して、斯かる偏した人生を破碎せんがため、隱れた半面を大膽に暴露し、以て眞實な全人生と觸面せしめる。約言すれば是れによつて本當の世相を知らせる。拵へ物の人生でないものを味はせるといふに歸する。決して人生を此の一面に限らうといふ解決や理想では無い。從つて必ずしも是れでなくとも増さず減らさぬ人生でさへあれば何でもよい譯である。事實に徴して見ても、文明對自然の問題でない自然主義もあれば、肉感醜惡の世界を描く必要の無かつた自然主義もある。要は現實である限り選り好みをせぬといふ一句に盡きるであらう。

論じて茲た至れば文藝としての自然主義は、内容の上には全く無條件主義である。在りのまま主義である、現實界が首もなく尾もなくあらはた結論の無いのと同じく無解決無理想主義である。斯やうな意味での現實主義である。

九

自然主義が折角内容上に所有した實際的意義の足掛りは、斯んな順序で一旦全く抛擲して了ふ。さすれば自然主義の文藝は寫實主義などと同じく全く嚴肅な、氣を引き締める方面の目的は無くなるか。何か實際方面の意味目的として取り縋つてよいか。たゞ在りのまゝの人生を寫すといふ丈では、隱れた所をも描くといふ外、寫實主義と何の相違する所も無い。寫實主義の眼界が廣まつたといふに止まる。固より是れもたしかに其の一面ではあるが、併し自然主義は是れよりも以上の意味を有するのではないか。曩に中間相對の理想や解決やを放擲したのは之れを低し淺し狹しとして斥けたのであつて其の奧に更に最後絶對のものを求めて、直接之れを揣摩せんとする所に自然主義の新生命は湧くのでないか。

思ふに直ちに事物の中身を取り出さんとする一種の傾向は、クラシシズムの形式觀に反抗して起つたロマンチシズムの特色であつて、それが自然主義にも傳はつたと見られる。一番奧深いものを、其のまゝ衣裳を着せないで赤裸々に摑み出したい。併し自然主義はロマンチシズムと違つて、現實の形も忘れることが出來ないから、茲に極端な寫實的表面に、直ち飛び離れた絶對不可説の本體を裏づける 書いてある事實が直ちに書いて無い、全體としての人生といふやうなものを暗示する。固より全體の人生であるから、明瞭にそれと捉へることは出來ぬが、成程斯んな人生もあるかと思ふと共に、それが直ちに人生全體の運命問題を提起して限りなく之れを思ひ廻らさしめる。讀み終つて卷を伏せると共に一種の瞑想的情趣は我れを驅つて樣々の人生問題に回顧せざるを得ざらしめる。

而して色々に想ひ得てしかも何れにも滿足するを得ず、無限に欣求の情を恣にする時は、心の活動につれて無限の快味を感ずる。吾人は之れを文藝の末尾としての宗敎的情趣とも名づけよう。是れが解決に一轉すれば其處から新宗敎なり新道德なりになるのである。斯くして自然主義の文藝は我等を宗敎の門にまで導く、宗敎的といふ所にまで接續させる。創作時の目の据ゑ所は是所にあるべきである。吾人は之れを美の最高所とも生の本體とも名づける。

更に此の問題を作家の個人格と關係せしめて見たらどうなるか。一定の人生觀を有する作家は自然主義の無解決文藝は作れないか。極致から言つたら、作家として立つ時と個人として身を處する時とは到底二元であるから、自家の理想解決は宜しく鎭壓し去るべく、無念無想が卽ち其の態度であるべきである。けれども一方には自家の理想のために累せられた人生の映ずることもあるも、凡人の免れ難い所であらう。此の點から見れば、更にまた或る特殊の傾向を有するものが、最もよく自然主義の文藝に之いて以上の約束を果すに適當する。例へばスケプチシズム、ナイヒリズム等の如く、初めから旣成の理想解決を破壞する性を帶びたものは、木地が出ても其のまゝ役に立つ。文藝が帶着する理想の關を破るからである。卽ち前に言つた二三の破壞的思潮は自然主義に最も便宜な傾向である。けれども是等が文藝として成功する瞬間には必ず其の上に最後の一契點が加はつてゐなくてはならぬ。斯やうな制限的意味で自然主義は事實特殊の思想と連續する。

十

自然主義を以て獸性、就中男女間の獸性のみを描くを主旨とする如く考へるものと、自然主義を以て道德の本能滿足主義と同一視する者とは、自然主義論中の二大謬見である、肉欲も現實の一部である限り、眞の現實を描かんがため必要の場合には提出せられるを厭はぬ、こゝまでは自然主義の大膽とも名づけられよう。併しながら其の肉は必ず全景の背後に髣髴せられる嚴肅な深意義によつて攝取せられ、其の方を注意の主點として見るとき、肉も亦た嚴肅な意義を帶して來る。此の點が其の作の是認せられゝと否との境界線でなくてはならぬ。たゞ此の所に殘る問題は、讀者が解釋力の程度といふことである。『早稻田文學』に見えた判事今村氏の言は此の點に於いて吾人の意を得てゐる。多數低標準の人は恐らく全景の背後にかゝつてゐる中心興味に達する前に、先づ前景の肉に囚へられて了ひはすまいか。思ふに高級の文藝は凡て此の恐れを豫見して立たなくてはならぬ。多數の後れた人と少數の進んだ人といふ扞格は、やがて社會道德と文藝との扞格である。文藝は性として半途半熟を許さぬ、常に全力的でなくては大なるものは出ない。斯う考へて見ると多數の後れたものと少數の進んだものと、卽ち社會道德と文藝との衝突は、萬人悉く同程度の知識感情に達した黃金時代の外、永久に斷絕すべからざるものである。兩つながら決して亡ぶべからずして而も和しがたいものである。雙方から互に犧牲者を出してもがきながら進むのが我等の運命であると覺悟する外はない。たゞ望む所は其の衝突をして成るべく公明な堂々たる衝突たらしめたいといふ事である。

本能滿足主義については多く言ふを俟たぬと信ずる。道德の上から發足して直ちに本能（就中獸的）の滿足のみを實行の目的とせよと叫ぶものがあつたら、論は同じく道德の上から決せらるべきである。之れに反對すると同意する

と、凡て身を道德の地に於いて定むべく、贊否の聲はやがて道德の聲である。是れと自然主義論とは全然類を別にする。自然主義は宜しく文藝の聲によつて贊否せらるべきである。

繰り返して言ふと、自然主義は凡そ手段に於いて一般思想と連なる。因習破壞新機軸發揮といふ點に於いて、文藝は文藝の範圍で是れを行ひ道德は道德の範圍で是れを行ふが根本は通した思想の傾向である。之れを第一段の連絡といふ。また一般思想が科學を重んじ經驗を重んずると同じく文藝も現實を重んじて所謂理想を斥ける。是れを第二段の連絡といふ。而して吾人は是れに更に第三段を加へて、直ちに絕對神祕の一物を指し、中間の說明を以て滿足せざらんとする宗教的傾向を、之れ亦た一般思潮が既成宗教から去つて求めんとする所あるに合期すると見る。絕對最上の一物を理想に求めるものが偏に上に向つて終に人生を超せんとするに反對して、下に向つて之れを求めんとするのが中心の思想である。現實の中に直ちに絕對を見んとする東洋的傾向である。現實を滅却し變形して目的に至らんとする思想と、現實を充足し展開して目的に至らんとする思想との對照に於いて、後者を文藝の上に極端に實行せんとするのが自然主義であらう、之れが實行手段の上には尙煩瑣の論もあるが、要するに此の根本の傾向で紙を展べ筆を染めると否とが最重要の問題である。手段は如何にもあれ、結果は必ず違つたものになると信ずる。我等が憧憬の本體を今一度現實に返せ、現實の生に返せ、自然主義は此の叫びとも聞かれる。吾人は此の意を贊する。

（明治四十一年五月）

チェスタトンとショー

十一月二十二日、夜半ペンを握つたまゝ呻吟してゐる、題言など、書けさうな氣分は湧いて來ない。頭の底が微溫を帶びた鉛の板で張りつめられたやうである。

チェスタトン氏はロンドン兒を以て誇りとしてゐる人である。其のユーモアもたしかにコクニー式だ。廣く言へば英國式だ。「成功術の書は書物を書くことにすら成功し得ない手合によつて書かれる。第一世の中に成功なぞといふ事はない筈だ。富豪は富豪であるのが成功だし、驢馬は驢馬であるのが成功だ。生きてゐる人は生きるに成功し、死人は自殺すれば成功する」などと言ふ所はとぼけてゐて、それでおとなしい所がある。其のチェスタトン氏が別の書物でショー氏を評すると、トルストイもショーも戰爭と戀愛が嫌ひだが、トルストイはそれ等が實際であるのを嫌ひショーはそれが理想であるのを嫌ふ。ショーは戰爭は構はないが戰爭にあこがれるのが反對だ、彼れは戀は厭はないが、戀を戀することに反對だ。トルストイは一切戰爭を斷つて、戀より遁れよと叫ぶ。ショーは、戰爭はよいが戰爭を讃美する歌はいけない、戀はよいが戀に魅せられるなと叫ぶ」といふ意味の事を言ふ。チェスタトン氏がショー氏を解する、其の配偶がおもしろい。ショー氏が英國人を罵るのを聞くと、「彼れは何をするにも主義を擔ぎ出す。愛國主義で君等と戰ひ事業主義で君等のものを盜み、帝國主義で君等を奴隸にし、男兒主義で君等に亂暴をする、彼れは忠臣主義で國王を扶け共和主義で國王の頭を刎ねる」是れは、アイヤランド人たるショー氏の滑稽である。

（『題言』より）

序に代へて
人生觀上の自然主義を論ず

一

私は今玆に自分の最近兩三年に亙つた藝術論を總括し、思想に一段落をつけようとするに當つて、之れに人生觀論を裏づけする必要を感じた。

けれども人生觀論とは畢竟何であらう。人生の中樞意義は言ふまでもなく實行である。人生觀は卽ち實行的人生の目的と見えるもの、總指揮と見えるものに識到した觀念で無いか。所謂實行的人生の理想又は歸結を標榜することで無いか。若しさうであるなら、私にはまだ人生觀を論ずる資格は無い。何故ならば、私の實行的人生に對する現下の實情は、何等の明確な理想をも歸結をも認め得て居ないからである。人生の目的は何であらうか。我等が生の理想とすべきものは何であらうか。少しも分つて居ない。

勿論斯やうな問題に關した學問も一通りはした。自分の職業上からも、斯やうな學問には斷えず携はつて居る。其の結果として、理論の上では、あゝかかうかと纏まりのつく樣な事も言ひ得る。又過去の我が經歷と言つても、十一二歲の頃から既に父母の手を離れて、專門敎育に入る迄の間、凡て自ら世波と鬪はざるを得ない境遇に居て、それから學窓の三四年が思ひ切つた貧書生、學窓を出てからが生活難と世路難といふ順序であるから、切に人生を想ふ機緣の無い生涯でも無い。しかも何是等のものが眞に私の血と肉とに觸れるやうな、何等の解決を齎し來つたか。四十の坂に近づかんとして、隙間だらけな自分の心を顧みると、人生觀どころの騷ぎではない。我が心は依然として空虛な廢屋のやうで、一時凌ぎの手入れに床の拔けたのや屋根の漏るのを防いでゐる。繼ぎはぎの一時凌ぎ、是れが正しく私の實行生活の現狀である。之れを想ふと、今さらのやうに Armer Thor の嘆が眞實であることを感ずる。

二

私は何うしたら善からうか。私は一體何うして日々を送つて居るか。全くの其の日暮し、其の時勝負でやつて居るのだらうか。強ちさうでも無いやうである。事實、自分の日常生活を支配してゐるものは、やつぱり陳い／＼普通道德に外ならない。自分の過去現在の行爲を振りかへつて見ると、一歩も其の外に出ては居ない。それで以て、決して普通道德が最好最上のものだとは信じ得ない。或部分は道理だとも思ふが、或部分は明に他人の死殼の中へ活きた人の血を盛らうとする不法の所爲だと思ふ。道理だと思ふ部分も、結局は半面の道理たるに過ぎないから、矛盾した他の半面も同じやうに眞理だと思ふ。斯ういふ次第で心内には一も確固不動の根柢が生じない。不平もある、反抗もある、冷笑もある、疑惑もある、絕望もある。それで何思ひ切つて之れを蹂躪する勇氣は無い。つまり愚圖々々として一種の因襲力に引きずられて行く。之れを考へると、自分等の實行生活が有してゐる最後の筌蹄は、たゞ一語、「諦め」といふことに過ぎない。其の諦めもほんの上つ面のもので衷心に存する不平や疑惑を拭ひ去る

力のあるものでは無い。しかたが無いからといふ諦めである。

三

此所まで回顧して來て、何時も思ひ惱むのは其の奧である。何が自分をして諦めさせるのだらう。私に取つてはそれが神の力でも信仰の力でも無くして、實に自分の知識の力である。若し自ら僭して聰明といふことを許されるなら、聰明なからである。假に現在普通の道德を私が何等かの點で踏み破るとする。私には其の後の事が氣づかはれてならない。それが有形無形の自分の存在に非常の危險を持ち來す。或は百年千年の後には、其の方が一層幸福な生存狀態を形づくるかも知れないが、少くともすぐ次の將來に於ける自己の生といふものが威嚇される。單身の場合はまだよいが、同じ自己でも、妻と擴がり子と擴がつた場合には、愈々それが心苦しくなる。つまり名といひ、利といひ、身といひ、家といふ、無形、有形、單純、複雜の別はあつても、詮ずる所自己の生といふ中心意義を離れては、道德も最後の一石に價しない。直觀道學はそれを打ち消して利己以上の發足點を說からうけれども、自分等の知識は、何うも右の事實を否定するに忍びない。却つて否定するものの心事が疑はれてならない。(衆生濟度の方便なら構はないが) 傍に千萬卷の經典を積んでも、自分の知識は「道德の底に自己あり」といふ一言で之れを斥ける勇氣を持つてゐる。而して此の知識が私をして普通道德の前に諦めをつけさせる、爲かたが無いと思はせる。それ以上、自分に取つては普通道德は何等崇高の意義をも有しない。一種の方便經に過ぎない。

まだ一つある。私は寧ろ情負けをする性質である。先方の事情にすぐ安値な同情を寄せて、氣の毒だ、かはいさうだと思ふ。それが動機で普通道德の道を步んで居る場合も多い。そして是れが本當の道德だとも思つた。併し段々種々の世故に遭遇すると共に、飜つて考へると、其の同情も、あらゆる意味で自分に近いものだけ濃厚になるのがたしかな事實である。して見ると是れも餘り大きな事は言へなくなる。同情する自分と同情される他者との矛盾が、死ぬか生きるかの境まで來ると、そろ〳〵本體を暴露して來はしないか。先づ多くの場合に自分が生きる。よつぽど濃密の關係で自分と他者と轉倒してゐるくらゐの場合に、言はゞ病的に自分が死ぬる。又は極局身後の不名譽の苦痛といふやうなものを想像して自分が死ぬることもある。所詮同情の底にも自己はあるやうに思はれてならない。斯んな風で同情道德の色彩も變つて了つた。

更に一つは、義務とか理想とかの爲に、人間が機械となる場合がある。唯何とはなしに、爲なくてはならないやうに思つて爲る、たゞ一念其の事が成し遂げたくてする。斯んな形で普通道德に貢獻する場合がある。私は正しく其の通りの事をしてゐる。併し是ればかりでは地球がいやでも西から東に轉ずるのと少しも違つた所はない、徹した心持が無い、生きて居ない、不滿足である。そこで色々考へて見ると、何うも矢張り其の底に撞きあたるものは神でも眞理でもなくして、自己といふ一石であるやうに思はれる。此の意識の消し難いが爲に、義務道德、理想道德の神聖の上にも、知識は其の皮肉な疑ひを加へるに躊躇しない、曰く、結局は自己の生を愛する心の變形でないかと。

斯やうにして、私の知識は普通道德を一の諦めとして成就させる。けれども同時に其の源が神祕なものでも莊嚴なものでもなくなつて、第一義眞理の魅力を失ひ、崇拜にも憧憬

にも當らなくなつて了ふ。

四

知識で押して行けば普通道德が一の方便になると共に、其の根柢に自己の生を愛するといふ積極的な目標が見えて來る。世間には此の目標を目障りだと言つて見まいとするものもあるが、自分には何うしても見えると言ふ方が正直としか思はれない。從つて今の所、若し私の知識で人生の理想標榜といふやうなものを立てよといふなら、先づ差しあたり是れを持つて來る。人生の理想は自愛である、自己の生である。自分の實行的生活を導いて來たものは、事實この外に無かつた。無論實行の瞬間はそんな事を思ふと限るものでないから唯傳襲の善惡觀念でやつて居ることが多い。けれどもそれは盲目の道德、醒めない道德たるに過ぎぬ。開眼して見れば、顏を出して來るものは神でも佛でも無くして自己である。だから自己が即ち神である、佛である。

併し斯んな事は畢竟するに私の知識の屆く限りで造り上げた假りの人生觀たるに過ぎない。是れが分つた爲に私の實行的生活が變動する譯でも何でもない。のみならず現に其の知識みづからが、まだ此の上幾らでも難解の疑問を提出して休まない。自己といふ其の內容は何と何とだ。自己の生を追うた行止りは何うなるのだ。殊に困るのは、知識で納得の行く自己道德といふものが、實は何うしてもまだ崇高莊嚴といふやうな仰ぎ見られる感情を私の心に催起しない。陳い習慣の拔殼かも知れないが、普通道德を盲目的に追うてゐる間は、時として是れに似たやうな感じの伴ふこともあつた。あの情味が新開眼の自崇道德には伴はない、要するに新舊何れに就くも、實行的人生の理想の神聖とか崇高とかいふ感じは消え去つて、一面灰色の天地が果しもなく眼前に橫たはる。讃仰、憧憬の對當物が無くなつて、幻の華の消えた心地である。私の本心の一側は、たしかに此の事實に對して不滿足を唱へる。もつと端的に我等の實行道德を突き動かす力が欲しい、而も其の力は直下に心眼の底に徹するもので、同時に讃仰し羅拜するに十分な情味を有するものであつて欲しい。私は此の事實を我等の第一義欲または宗教欲の發動とも名づけよう。或は斯んなことを思ふのが既に陳い夢に囚へられてゐるのかも知れない。灰色の天地に灰色の心で、冷たい、物凄い、荒んだ生を逐つて行くのが人生の本旨かとも思つて見る。けれども今日までの私はまだ何うもそれだけの思ひ切りもつかぬ。一方には赤い血の色や青い空の色も欲しいといふ氣持が滅しない。幾ら知識を驅使して見ても此の矛盾は殘る。つまり私は一方には或意味での宗教を觀て居ると共に、一方は極めて散文的な、方便的な人生を觀て居る。此の兩端にさまよつて、不定不安の生を營みながら、自分でも不滿足だらけで過して行く。

此の點から考へると、世の一人生觀に歸命して何等の疑惑をも感ぜずに行き得る人は幸福である。況してそれを他人に宣傳するまでになつた人は愈々幸福である。私には凡てそれ等のものが信ぜられず、あらが見えるやうに思はれてならない。或るものは持つて廻つた揑造物だ、或るものは虛僞矯飾の申譯だ、或るものは梢の半面に過ぎず、或るものは唯の空華幻象に過ぎない。自分の知識が白い光を其の上に投げると、是等のものは皆其の粉塗してゐた色を失つて了ふ、散文化し方便化して了ふ。それを知らぬ振に取りつくろつて、自分でも其の夢に醉つて、世と跛を合はせて行くことは、私には段々堪へ難くなつて來た。自分の作つた人生觀さへ自分で信ずることの出來ない私であるから、況

して他人の立てた人生觀など、其のまゝ受け入れることの出來るものは一つも無い。何ものをも批評するのが先になつて、信ずることが出來ない、讃仰することが出來ない。信じ得る人の心は平和であらうが、批評する人の心は何時も遑々としてゐる。玆に至つて私は自分の强梁な知識そのものを呪ひたくなる。

五

自分は何等の徹底した人生觀をも持つて居ない。あらゆる既存の人生觀は我が知識の前に其の信仰價を失ふ。呪ふべきは我が知識であるとも思ふが、しかたがない。何等かの威力が迫つて來て、私のこの知識を征服して吳れたら、私は初めて信じ得るの幸福に入るであらう。

されば現下の私は一定の人生觀論を立てるに堪へない。今はむしろ疑惑不定の有りのまゝを懺悔するに適してゐる。そこまでが眞實であつて、其の先は造り物になる恐れがある。而して此の私を標準にして世間を見渡すと、世間の人生觀を論ずる人々も、皆私と似たり寄つたりの邊に居るのではないかと猜せられる。若しさうなら、世を擧げて懺悔の時代なるかも知れぬ。虛僞を去り矯飾を忘れて、痛切に自家の現狀を見よ、見て而して之れを眞摯に告白せよ。此の以上適當な題言は今の世に無いのでないか。此の意味で今は懺悔の時代である。或は人間は永久に亙つて懺悔の時代以上に超越するを得ないものかも知れぬ。

以上を、私が現在に於いて爲し得る人生觀論の程度であるとすれば、そこに藝術上の所謂自然主義と尠からぬ契機のあることを認める。けれども藝術上の自然主義はもつと廣い。また藝術は必ずしも直接に我等の實行生活を指揮し整理する活動でもない。

六

餘論として玆に一言を要するのは、史上にいはゆる人生觀上の自然主義である。過去に於いて明に斯やうな名辭を用ひたのは、私の知る限りでは、Professor W. H. Hudson のルソー論に Naturalism in Life と言つてゐるのなどが其の最近の例である。是れは言ふまでもなくルーソーの「自然に還れ」「自然の人」「反文明」「反人巧」の人生觀に冠した名であるが、若し之れを定限とすれば、さやうな人生觀上の自然主義は、私に取つては疑惑内の一事實たるに止つて、解決の全部とはならない。

ニイチェが人生觀の、本能論の半面に見はれた思想も、一種の自然主義と見る人がある。それなら是れもまたルーソーの場合と同じく、我が疑惑内の一事實を提示するに過ぎないのは言ふを待たぬ。

ロシアの作者、ツルゲネフやトルストイに見はれた虛無思想を以て最もよく人生觀上の自然主義に當るものと見る人もある。虛無思想の中心は、ツルゲネフの作が定義する所によれば、あらゆるものを信ぜず、あらゆる權威に抗爭する點に存する。併し此の思想を一の人生觀として取り上げる時、そこに當然消極か積極かといふ問題が起り來らざるを得ないことは、既にヨーロッパの論者が言つて居る通りである。而して其の當然の解釋が、信ぜず從はずを以て單なる現狀の告白とせず、進んで之れを積極の理想とするに傾くとすれば、是れも私には疑惑圈内の一要素となるばかりで、最後の解決とはならない。

斯くの如くして所謂人生觀上の自然主義も私には疑ひの一面たるに過ぎない。

（明治四十二年）

懷疑と告白

上　本論の背景

私は今此の文を先達て公にした「人生觀上の自然主義を論ず」（『近代文藝之研究』序）といふ一文の續きの積りで書く。併し何の必要があつて私は其の續きを書くのであらうか。ちよつと考へて見たい。

私に取つては無論斯うして書く文章が一の藝術である。從つて之れを書く因緣を考へるのは、やがて少くとも私一個の上で藝術發生の實情を研究することになる。卽ち私の態度が依然として一の研究者といふ埒内にあることをば免れない。一體何ぜ研究だの考へるのといふ事をやるのだらう。昔の懷疑者流は、判斷といふ事を拒絕すると同時に研究だの知識だの考へるだのといふ事をも拒絕しようとした。從つて學問めいたことや書物めいたものをば遺さないのが多かつたといふ。成程之れも一理窟だが、併し今日の我々から言はすれば、一向に斯う言ひ切るのも矢張り矛盾である。第一それで事實我々の研究だの、考へるだの、判斷だのがぱつたり息んで了へば申分は無い、が、さうは行かない。ソフヰスツの後にソクラテース以下の哲學が起つたり、後の懷疑派につゞいてプロチーヌス以後近世に及ぶまでの大哲學が起つたりした以上、今日の我々が眼には、此等の事實が一方に立つて物を言ふ。それのみでなく、私みづからの本心に振りかへつて見て、今のところまだ明白に研究とか考へるとかいふ事に根本の要求がある。事實に觸れるごとに必ず何等かの程度でそれを考へなければ不滿足で氣がかりで仕方がないのだから、是非が無い。斯う思ふと、結局私みづからの根本要求の爲に研究考察をやるのである。是れをやらなければ自分に滿足が出來ないからである。昔の學者が何うの、現代の誰々が斯うのと言ふのは、それこそたゞ自分の根本要求の後援を其處に、求めるに過ぎない。

自分の根本要求で、たゞ考へたいから考へると一種の道樂とも解せられるが、道樂と解せられるのは厭だ。厭な理由といふのは、道樂といふ語の中には考へても考へなくても、其の人の生活には無關係だからといふ意が籠る。斯う思はれるのが厭だからである。事實自分にとつては、考察といふ經過の無い觀念は、それを推し進めて次の實行過程に移すのが不安心である。色々の意味で不安心である。現に此の論文を書きつゝある間も、直に本文に入ればよいのに、不圖思ひついて、全體書くといひ考へるといふことからして極めてかゝらねば、跡の仕事は皆地ならしのしてない普請のやうなものぢやないかと考へ出す。さうなると是非何とか此の問題を片づけて置かねば、氣がかりで跡が心地よく進まない。此のまゝ抛つて置いて、縱し自分は我慢しても世間から突つ込まれたら、忽ち自分の立場は崩れて了ふ。自衞の上から言つても是れではならないといふ氣になる。つまり私の實生活が阻碍せられるからである。斯う說明して來ると、玆までは事實の告白に過ぎない、極平凡な事實の告白に過ぎない。と同時に動かすべからざる眞實である。自分自身に生の爲に研究もすれば考へもする。けれどもちやうど男女の愛が子孫を遺すための方便として與へられた本能であると解說せられる如く、自愛本能の

一つとして現はれた研究本能考察本能も、結局はそれで以て漸次に天地人生の眞理を闡明させようといふ造化の計畫なのかも知れない。併し此所まで來るともう事實の告白でなくなる。事實の推斷である、哲學である。從つて其の通りかも知れないが又さうでないかも知れない。人さま〲の解說を容れ得る所以である。眞理の爲に研究するといふのと自分の爲に研究するといふのとは哲學と事實との相違である。私は茲で哲學は立てない、事實に止まる。

斯んなにして自分の生の爲に考究するものを何で私は文字に書きつけて世に公にするのだらう。通例世間の人が此の問題に答へるには一定の型がある。已れの所思を發表して眞理の研鑽に資する爲だとか、已れの發見した眞理を世に布いて他人と分け前する爲だとかいふ。つまり眞理の爲、世の爲といふのだ。そして史上の逸話などを引いて、誰々は自分の身を殺しても眞理は曲げなかつた、宣傳は已めなかつたといふ。成程それも一面の事實であるには相違ない。が、自分の眞理と思ひ込んだ事や、況して一旦それと發表した事が、輕々しく變更せられるものでないのは、必ずしも逸話の場合のみぢやない。其の人の事情境遇に應じて、皆それぞれに自分を眞理に殉せしめざるを得ない複雜な理由を有して居る。例へば行きがかり上何と威嚇されても此處は前來の說を固持しなければ都合が惡いといふこともあらう。茲で前說を飜せば、自分の地位が亡びる、世間へ出す面目がない、それを思ふと苦痛だ、寧ろ殺されても生きてる苦痛よりは樂だといふやうな動機が隨分多量に作用することはないか。斯うなれば實は眞理非眞理や救世濟民の問題ぢやなくて、自分の存在といふ問題になる。其の他是れに似た元素が幾らもあり、又、反對にたゞ眞理だと信ずるが爲それに愛着するやうな元素も幾通りかあつて、到底單一の動機で說明することの出來ないのが心作用の特色である。如何に單純に見える人でも、心の中の色彩は決して簡單なものではない。行ひに對しては油斷しても、心に對しては油斷の出來ないものだと信ずる。人間を單一な動機で動いてるものとするのは、陳い人間觀である。

私は茲で現に此の論文を書くに至つた動機を數へて見ようと思ふ。一番直接には雜誌のため是非とも九月號には何か書かなくちやならぬ、若し書かなければ雜誌が困る、そして其の雜誌は自分乃至自分の親しい人々がやつてゐるのだから、打ちやつて置く譯には行けない。是れだけ動機が餘程強い要素になつてゐるのは疑ひない。つまり論文さへ書けば、此の論文たると他の論文たるとは問ふ所でないのである。又是れが別な雜誌の場合なら、自分が困るといふよりも、金が是非入用だからとか、編輯者に對する情實だとかいふものが重要な動機の一つになるだらう。何れにしても眞理のためとか研究のためとか世間のためとかいふ事とはかけ離れて全然自分の爲の動機である。此の動機が無かつたら事實私は此の論文を書かなかつたかも知れない。

それから今一つは何かしつかりした物を書いて、自分が論文壇に立つて居る地步を益々強くしなくてはならぬ、自己存在の地盤を築いて行く、少くとも現に有してゐる地步を脆弱にしてはならないといふ自己的な動機も加はつてゐるに相違ない。

更にまた前に書いた論文の趣意が世間から誤解されたり、十分徹底しなかつたりする恐れで、是非あの跡を書き足したいと思ふ、何ぜなら、あのまゝでは自分の價値を傷けられる恐れがある。現に世間の批評の中などにさういふのが見えて、其のまゝほつて置けば自分の存在を弱め

るかも知れないからである。

以上の諸動機と類の違つたものと思はれるのは、此の論文に書く思想そのものを、私の內段々と心の中で熟させるに從ひ唯何となくそれを公にしたいやうな一種の傾向を覺える。勿論其の中にすら一部はそれで世間の人を感服させたら愉快だらう、從つて早く發表して見たいといふ氣持が交らぬとは言ひ得ないが、それ以外唯何となく其の感想を發散させなければ胸に滯りを覺えて氣持が惡い、古人の謂はゆる腹ふくるゝといふ心地なのである。是れは感想といふものが凡て強まるにつれ自然に實現方面へ表白の途を求めて來る心理上の原則に應ずるものだらう。一つの科學的現象と見てよい。

又これも強ち自分の爲とは見えない一動機として擧げると、例へば世間の人があんな間違つた事、僞りの事を本當と思つてる、見てゐるのがもどかしくて自分の說が出して見せたい、といふ氣持である。先づ言はゞ眞理を顯揚して世が救ひたい爲とも言ふのだらうが、併し斯う言ひ切ればもう誇張になる。實際の眞理狀態はもつと漠然たるものである。僭妄に過られる他人が不憫でたまらぬといふ程强烈な慈悲本願で論文を書いた經驗は曾て無い。却つて此の動機が強く明になればなる程、たゞ偏に自分の信ずる所を立て通さうといふ形になる。つまり眞理の爲、世上の爲といふに近い氣持と、自分の主張だから擁護し擴張したいといふ氣持とのうべ合されたやうな動機である。或はこゝでうんと踏ん張つて、眞理のため世上のためといふ事一途に熱發するのが、即ち大文字を成す所以だと反駁せられはしないか知らん、とも思つて見るが、實際私には何うしても其處まで行けない。其自分を標準にして觀察するから、勢ひ世間で右の樣な動機で大文字を製作すると公言する人々の多くはみんな己れを僞り若しくは誇張して夢を見てゐるのだとしか思はれない。自分を以て他を忖ると言はれても仕方はない。それが自分の現在の最高眞實である以上、自分以外に何で他人を忖度する目標があらう。斷るまでもなく、以上の諸事情は、動機論であつて、目的論ぢやない。目的は云々の眞理を說明して見ようといふ點に存する。別事である。

さて斯んな風に數へ上げて見ると、此の一論文を作るにすら、雜多な動機が雜多な比例で結合してゐる。そして其の不純粹な動機といふことが、私には已み難い本性のやうに考へられる。同時に、だから其れが結構だと讃美する氣持もない、唯無闇と一方づいて、眞理のため天下國家の爲の一動機で仕事をしてゐるやうに言ひ做し觀做すものを疑ふ。若しそれが聖人なら、私は聖人の心事を疑ふことを禁じ得ない。それと共に人間が自利一點で仕事をしてゐるとも思はない。推しつめて解釋すれば矢張り自己の爲といふことになりさうな場合でも、直接動機としては他人の爲にも眞理其のものの爲にも動かされる。要するに事實は以上述べたやうな複雜なものである。それを鉈で薪を割るやうに、荒つぽく一つか二つに片をつけて了ふのは私の承服し得ない所である。

此の論文が懷疑と告白といふ題目で私の人生に關する現在の考を述べようとする、それだけは自明の事としても、述べて、さて何にする。述べようと決心するに至つた動機が既に以上の如く雜駁であるとすれば、此等の諸動機の凡てを是認するだけの統一目的が潛んでゐて、それの力が我々をして書かざるを得ざらしめて呉れなければ困る。現在の心理狀態を檢べれば前言つた通りの無統一な有樣で、眞理の爲、世上の爲といふ氣持もあるが、それと反對にただ自分の爲といふ氣持もある。現狀を告白して見ると、自分で恥かしいやうな、不愉快な感じ

がする。將來も是れでやつて行つて美いものだらうか、不快不安だ。出來るなら單一な、あらゆる部面を滿足させる解決がつけて貰ひたい。何時か何處かで一度は是非それをつけて置かないと、我々の生は一代ぐら〳〵として過さなくちやならぬ。それは苦痛だ。そこで斯んな考の起るたびに彼あか斯うかと考察に耽る。けれども遂に是れが最後の鐵案だといふものに行き當らない。此の論文を書く必要即ち根本目的はと問はれても、結局今の私は明確な答を與へ得ない。已むを得ぬからそれを催進した諸動機を漫然數へ上げて見る。あれも一理由、是れも一理由だといふ。そして其のあれと是れとの間の矛盾を思うていやな、不滿足な感を殘す。何とかして此等の矛盾した動機の奥に、凡てを是認して安心さする統一目的又は統一動機があつて欲しい。私は今斯んな背景の中で此の論文を書く。

中　現代の哲學も宗教も懷疑に生く

何う考へても、今日の自分等が眞に人生問題を取り扱ひ得る程度は、懷疑と告白の外に無いと思ふ。今迄の人は餘りに信じ過ぎた、他人の思想を信じ過ぎたり、自分の思想を信じ過ぎたりした。或は信じて頼りすがるべき思想のあるのが一生の平和の爲には仕合せかも知れないが、時勢はそれを出來なくして了つた。早い話が近代の新聞紙の發達だけでも、優に天下を凡人化し平等化させる力があるではないか。凡人化といひ平等化といふのが、實は人間をして眞の人間たらしめたのである。衆人を擧げて一種の自覺に導いたのである。聖人であらうが、英雄であらうが、人格の一面から見れば、路傍に客待をしてゐる車夫、足に鎖のついた囚人と少しも違つた事はない。隱微もあれば矯飾もあり、天眞流露の美しさもある。偶像崇拜、英雄崇拜の時代が過ぎ去つて、人は皆平等對等の世となつた。所謂現實暴露だ。今日の新聞紙を一週間も讀んで居れば、天下に聖人だの英雄だのといふものは居なくなつて了ふ。勿論一藝一能に秀でた人は居るけれどもそれは全人格の上の英雄でも聖人でもなく、從つて崇拜などとは思ひもつかぬことである。政治家としての伊藤氏、相撲取としての常陸山氏、俳優としての羽左衞門氏、皆一面に他の及ばぬ特技を有してゐると共に、一面は共通の人間たることを最も明白に見はしてゐる。是れが人間の眞相であらう。昔は新聞紙なども無かつた爲、キリストも孔子も馬鹿々々しい程人間離れのした偶像に飾り上げられた。現代ではそれが出來ない。

斯んな世の中に立つて、我々は誰をたよりに自分の全生活を支配する問題を打ち任せよう。何處に一つ我々を全部服從させるに足る思想があるか。我々はたゞ現在の自分の心内に振り返り見て、其の紛亂に驚くのみである。口を開いて眞實を語らうとすれば、たゞ此の紛然たる心内の光景を、ありのまゝに告白する外はない。其の以上の凡ての思想は我れといふ眞骨髓に徹するには隔りのあるもの、我れの一部には違ひないが、隙のある我れである。充實した我れはたゞ懷疑、未解決といふ點までだと思ふ。私が他人の說を聞いてあれ迄が眞實權威のある部分で、あれから先は造りものだなど感ずる境目は常に此の點である。高山樗牛の思想は、其の狹義本能の覺醒と共に生ずる心内の矛盾煩悶の告白といふ點までが充實したものとして、私を壓して來る。それから先は、日蓮に行かうが、ニイチェに行かうが、皆彼れ一個の試みであり、假定であるに止まつて、私といふ別個のものの目から見れば、合理もあり不合理もある一の研究材料たるに過ぎない。若し彼れが是れに解決を

得たと言ふのなら、私は其の部分から先に彼れに疑を插む。次に綱島梁川の思想は、彼れが其の見神法悅を最後の解決としたに拘らず、あんな風になりたいと努力する人が心內に經驗する個々の閃光を集積したものとして私に力を與へる、けれども之れを統一した見神法悅の解決其物は一篇の詩に過ぎない、尙深く實生活と觸れて行くに從ひ、必ず變じて今一度磊々たる灰色の現實に戻つて來べきものだと信ずる。あれがあのまゝ眞に充實した我れとして永續すべきものではなからうと疑ふ。

其の他多くの思想家が道德を說き人生を評いてゐるのを聞くと、其の骨折には尊敬を拂ふし、結論も參考として無用だとは言はぬが、惜しいことには其の解決以前の心內の實光景たる疑惑狀態を傳へる聲が足りない。賽の河原のそれではないが、智慧の塔の積み上げ競をして居るなといふ感を起させる。畢竟第一步に充實した現實感の基礎が示してないからである。要するに哲學といふものが現代に於いて眞に生きてるとすれば、それは唯その素材となつた現實感に存するので、組織や結論で私等を動かす力は無い。私は此の意味からして、哲學が、今のまゝでは、人生に對して働いて居る力の量は頗る疑はしいものだと思ふ。

近頃世に唱へられるゼームス、シラー等諸家のプラグマチズムの思想の如きは、最も巧に此の活きた現實と親貼して立たんとする哲學である。從つて若し茲で一つ最も自分に近い哲學を選び出せといはれゝば、今のところ此の思想を擧げる外はないと思ふが、それすら私は其懷疑に立脚して、それから多く離れまいとする所に生命を感ずるのであつて、若しあれが究極の解決だと言はれると、首を傾けざるを得ない。實際我々は唯自分々々の實生活に都合のよいやう、其時々に適應する經驗の整理統一をやつてゐる。事實はプラグマチストの言ふ通りである。之を外にして何の哲學も成立つ譯はない。併し之れだけで凡てだとは何うしても言へない。問題は實に是らから先にある。實生活に好都合なやうに統一すると、一口に言つて了へば何でもないが、事實其の統一が滿足に行はれてゐるか否かといふことが第一問題である。勿論何うにか斯うにかやつてはゐる。其の人の其の時の境遇事情で滿足は滿足なり、不滿足は不滿足なりに否應なしやつて行く。併し大體の傾向から言つて、進んだ複雜な思想の人ほど不滿足の統一に陷り行く趣のあるのが、見逃すべからざる悲しい人生の事實である。過去の生活に對する悔恨反省、それから將來の生活に對する不安、心配、是れらが丸で人生に無いものなら、プラグマチズムの命題は十分の權威を以て我々を支配しやうが、事實は其の反對である。昨日の行爲といふのが實は不滿足な、仕方なしの一時凌であつた、結果は覿面今日に色々の苦痛を殘す。悔恨の傷が胸から消えない。是れでは明日からの生活が心元ない。時の宜しきに從ふなどと暢氣なことは言つて居られない。此の、將來に對する不定不安が當然要求して來るものは統一の標準である。何とかして間違ひつこのない目安が立ちはすまいか。此の氣持で人生を回顧思量する、所謂第一義を思ふ心である。是れは實に已み難い自然の事實だ。プラグマチストといへども、之れを消して了ふ力はない。然るにプラグマチズムが其まゝ解決哲學にされて、人生觀論にまで來ると、此の要求を事もなげに無駄だと打ち消さざるを得なくなる。但しプラグマチストが此の場合に提出すべき言葉は別にある、卽ち生活の爲に都合よくといふ。けれども實は生だの生活だのといふ言葉が本來詩であり謎であつて、中身は充實してゐながら定義の下せないものだ。分つたやう

で分らない、言はゞ哲學も宗教も文藝も此の一懸案の解答を得んが爲に存在してゐると言つてもよい程な言葉である。さうであればこそ、其の中に矛盾があつたり、衝突があつたりして、之れを標準とする限り無統一無解決の不安が消えなかつたのだ。實生活の爲といふのは、實は一つの逃口上、乃至は詩として据ゑて置くべく、哲學として知識の手をば觸るべからざる言葉である。それを哲學上の標準論に何度持つて來てもトートロジーに過ぎない。要するに生活の雜多な矛盾、それを過去現在未來の時にかけて何う統一するか、之れが根本の問題で、プラグマチズムではそれが解けて居ない。居ない所に生命があつて、解いたとする所には空な聲がある。

宗教に對しても同じ事が云へる。（六月の「太陽」に「宗教の三分化と文藝」と題する文を載せた、讀まれた讀者は、此の點に參考を乞ふ）信仰といふ言葉が祕傳めいたものにされ過ぎて、人間の活きた血と遠ざかるにつれ、今では信仰よりも寧ろ疑惑の方が宗教の味になつては居ないか。茲で私は宗教の味といふ、宗教の全部とは言はない。けれども兎に角宗教が現代のものとして生きた溫い息を呼吸して居ると見えるのは、此部分だけである。青年などの、本當に深い眞面目さで宗教を語つてゐるのを聞くと、其の普通生活に統一を失つて、神に據り處を求めようとする、痛切熱心な祈願の一面が惻々として人を動かすことはある。言ひ換へれば、彼等の懷疑の悶えが宗教的に現はれてゐる間は眞實の味が漲る。けれども一歩して其の求める所の神を得たと號し、悟り顏をして、信仰の隱れ家に澄し込むに至れば、もう其の言說は洞々として空なものになつて了ふ。信仰を說かないで懷疑を說き、安心を說かないで煩悶を說く間が依然として現代宗教の味である。跡は私等の精神生活と殆ど全く沒交涉と言つてよい。

下　文藝と第一義生活

今の私に取つては、宗教でも哲學でも生きた血の通つてゐるのは其の懷疑的方面ばかりだと思ふ。併し懷疑は何時でも終點を意味するものでないから、之れに住する限り、必ず何等かの形、何等かの程度で終點を知らうとする努力若しくは要望が殘る。其の實終點は恐らく知れないものであらうとは今までの經驗が敎へる所であるが、それにも拘はらずそれを知らう知らうとあせる氣持は、古今を通じて少くも減じない。又あせらざるを得ない事情が人世の根本に橫はつて居る。知れないものを知らうとする、此のパラドックスがやがて造化の神祕なのであらう。近代の經驗派の諸哲學は、成るたけ此のパラドックスに手を附けまいとする。けれども手を附けないことが其れを無くすることにはならないで、パラドックスは依然としてパラドックスのまゝ人世に生きて殘る。第一義欲は消し難い我々の眞實であつて、決して夢では無い。哲學も宗教も此の軸の引力に吸ひ寄せられて、周圍を回轉してゐるものに外ならない。

日常の第二義生活は何うにかして果して行く。併し同時にそれの不滿足を意識して、絕えず一層圓滿な第二義生活に入りたいと焦躁する必然の行當りとして、第一義の最勝道に頭を回らす、其の第一義の主觀にあると、客觀にあると、具象であると抽象であると、乃至それが摑み得られると得られないとは關する所でない。得られないと聞いたからとて休められる道ではない。そして此の一念を何うにか心の中で取扱ふ所に人間の第一義生活若しくは精神生活の中樞が存する。

此の第一義生活の、最も著しい發現であり、また刺戟であるものは哲學、宗教、それに加へて文藝がある。そして少くとも現在の哲學なり宗教なりは、僅に上に言つたやうな部分でのみ私の第一義生活に觸着する。それでは哲學の哲學たり、宗教の宗教たる本領からは外れたものになる。之れを一言で言へば現實の觀照即ち文藝的だ。哲學の文藝化、宗教の文藝化、私には斯う名づけたい現象である。

そこで本論の終結に近づかうと思ふが、哲學、宗教、文藝の三姉妹を併せ觀て、現代に最も生きてゐるものは文藝だと考へることを禁じ得ない。贔屓目と言ふ人は言へ、事實私の第一義生活に全力を擧げて刺戟を送るものは文藝である。固より深淺強弱はさまざまであるが、兎も角も全機能を働かせて第一義生活に廻るの使命を果しつゝあるものは文藝だとかしか思へない。現實の人生を與へて切に第一義を想はせる。唯想はせるが故に、宗教でもなければ哲學でもなく、矗然として文藝である。或は今は文藝の時代であつて、哲學の時代でも宗教の時代でもないのか、或は哲學宗教は已み難い現代の要求であつても、それが一たび文藝に立ち戻つて出直すべき運命に際してゐることを暗示するのか、何れにしても現代に於ける文藝の地位は哲學宗教よりも意義の多いものと感ずる。私の第一義生活は、深かれ淺かれ、文藝によつて最も多く滿足させられる。同時に今後の哲學たり宗教たるものを何う て貰ふことかと思ふ。

終りに、私が文藝に緣の近い事を職業として居るのは、決して文藝に後のやうな讃仰の意味があるからではない。之れに携はつたのは唯私の性質や境遇が然らしめたのである。初から文藝にそんな意味があるのを見拔いて、それに從事したなどといふ譯でないことを斷つて置く。

（明治四十二年九月）

二途

言葉は最も具體的なものか最も抽象的なものかが最もおもしろい。中間のものは總てだれる。

藝術はこの二つの言葉の何れかを求めようとしてゐる。

眞理は最も個々的なものか最も統一的なものかが最も正しい。

哲學はこの二樣の眞理の何れかを假定して立たうとする。

（『題言』より）

田舍の友人

――君、田舍に老い行く寂しさはもつともの事ながら、せめて斯う思ひ直して見給へ。我等都會に住むものは、却つて都會の眞の生活を味ふことの出來ないものである。それに對する感受神經が鈍くなつてゐる。また家庭がここにあり、職業がそこにあつて見ると、それらの周圍が到底自由な夢の世界に這入ることを許さない。また旅の心で人生を味ふ、あの甘い淋しさは都會の常住者には得られない。また、即いてゐては都會も散文的になつて了ふ。離れて理想化してゐればこそ、詩的である。

身は田舍にゐて都會にあこがれる心を失はない人、そんな人が年に一度か二度づつ都會に出て、其の渇いた心と新鮮な感受性とで、心ゆくまで、都會生活の杯を吸ひ乾してゆく。家と職業との散文から去つて、都會の旅の詩に這入る。田舍にゐる君等こそ、まことは都會の生活を餓ゑたるものの如く味ひ得る幸福な人である。

（『題言』より）

近松の藝術及人生

近松門左衛門といへば、我々には懐しい古馴染の名である。私みづから其の感化を受けた事も無いとは言へぬ。殊に我が早稲田と近松研究とは浅からぬ宿縁がある。去年の秋は近松祭もやつた。其の早稲田の出版部から、今度插畫入詳註附きの「近松傑作集」五巻物を出すといふ。骨折は勿論斯道のオーソリチーたる水谷不倒氏で、坪内逍遙、饗庭篁村其の他の諸家の専門的な評論考證等が巻首に附く。其の中へ私も近松論をするのだといふ。餘人でない近松の事ではあり、且私は其の内日本文學史論を書いて見たい希望があるため、是れを機會に一つ元祿の時代其のものから彫り上げて、其の一凸起面としての彼れを書いて見よっと思ひ立つた。所が例の通り、準備の何分一も進まないうちに期限が切れてたうとう其の斷片のまゝで書物に插むの已むなきに至つたのが次の一文である。

一

曾て十年前に近松を讀んだ頃は、彼れの作に向ふと、一ページ繙すか繙さぬに、早く一種の歡びを感じて、讀み行くに從ひ、言ひ知れぬ心嬉しい氣持になるのが常であつた。あの心持は、今思ひ出しても、如何にも甘味の濃かなものである。あれだけの歡びを我々に傳へ得る近松の力は偉大と言つてよい。

其の後、私みづからの身心にも、又世上の風尚にも幾多の曲折があつて、就中藝術の上では、最近兩三年に、殆ど二十年來初めて見るの廻轉が行はれた。其の今日に於て、近松は果して如何いふ關係を我々と保つであらうか。此の問題は私も豫てから興味を以て考へて居た。それで時々讀み古した武藏屋本の、彼れが世話淨瑠璃を取り出しては覗いて見たこともある。其の時は、昔なつかしい人に、久々で會見する時のやうな好奇心と恐怖とが伴ふ。そして讀み了つては、ほつとして、是れまでに自分が書いた近松評などの事を想ひ出す。近松は今日讀んでも決して無意義では無い。たゞ其の意義といふものの解釋に多少の變遷あることをば拒み得ない。

二

近松の世話淨瑠璃を讀むと、一種の歡びは依然として其の文字の間から匂ひ出て、我々の心を醉はせようとする。此の歡びといふことに尋ね上つた。元祿の人生、放たれたる生の歡びが近松の文藝を藉りて其の聲を揚げて居るものに外ならない。近松の作から得る喜悦はやがて元祿の社會が享有した生の解放の歡びである。生の解放、生の歡び、是れを外にしては、近松が情調の一面は解せられまいと思ふ。

而してこの歡悦の香ひを彼れは如何なる技術によつて傳へたかと云ふと、言ふまでもなく音樂である。竹本義太夫の三絃を離れて、近松の文句みづからが全然音樂である。綺葩絢爛の言葉と空想とで組み立てた一大シンフォニーである。のみならずその成り立ちが既に三絃に合せて歌ふべき淨瑠璃であつて見れば、其の點では近松の作は、シェークスピアよりも、むしろ時代の違つたワグナーのオペラに比せらるべき

理由を有して居る。シェークスピアも固より其の辭句の音樂的富麗に主なる情調を託して居ることは、或はイギリスの原文では十分邦人に味ひ盡されぬとしても、曾て文藝協會で土肥春曙氏が演じたハムレットの長白を耳にし、若しくは其の原本たる坪内逍遙氏の譯文を一讀したものゝ必ず領會する所であらう。近松は更に之れに一歩を進めたものである。本來音樂は、他の姉妹藝術、就中小說、散文劇等と對角線をなして、音といふ元子感覺から斷片的情緒を攪き動かして、直接に最後神祕の或物に到達せんとする藝術である。中間に知識の詮議や現實の要求を容れないのを其の根本とする。否應なしに音の力で人の心を蕩かして了ふ。意味の上の穿鑿などは、其の點から言ふ 殆ど無用である。近松が淨瑠璃の場合も、之れを他の文學に比べれば遙に多く右の傾向を持つて居る。彼れの作は之れを劇として取扱ふ前に先づ音樂として取扱ふべきである。

三

論の便宜のため、試に彼れが作中最も自然に近い心中劇の一例として『曾根崎心中』を取つて見ると、先づ其の發端の觀音巡りに「げにや安樂世界より」と書き出して、「契り置きてし難波津や……今も弘誓の櫓拍子に、ゝりの玉ぼこゑい〳〵……胸に木札の普陀らくや……誰れをか戀の祈りぞと、仇の悋氣や法海寺……羽と羽とを合はせて袖の、染めた模樣を花かとて、肩に留まればおのづから、紋に揚羽のてうせん寺」と事柄は辭句のために勝手に持つて來られ、辭句は音樂や連想のために勝手に案排せられて、中身は何でも構はず唯何となく讀んで快い感じを呼び起すのが此の種の文の常套である。道行の條では有名な「此の世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ」の書き出しが、昔の儒者をして一唱三歎せしめたと傳へられるが、是れとても事情の痛切なのに比しては、極めて不釣合な文字である。たゞ之れを中身から引き離し、それみづからの音樂として見るとき、華かな一曲の譜を成して心をそゝるやうな悦びを感ぜしめる。此等は辭句の上の例であるが、情緒の濃密なるもの、例へば「どうで德様一緒に死ぬる、私も一緒に死ぬるぞやいのと、足にて突けば緣の下には涙を流し、足を取つて押戴き、膝に抱きつきこがれ泣き、女も色に包みかね、互に物を言はねども、肝と肝とにこたへつゝ、濕り泣きにぞ泣き居たる」の如きですら、全篇の配色の中に入つては、强く美しい冷艶な一彩色に化して了ふ。「結末の「未來成佛疑なき戀の手本となりにけり」に至つてたとひ其の文句は此種の文學の常套語であるにもせよ、全篇の調子を明るく華かなものに締め上げて了つた觀がある。

四

美しい辭句、美しい情緒想像で生の歡びを奏する音樂が近松の作であるとすれば、其二十幾篇の世話淨瑠璃（茲では時代物に見えた近松をば、深く論ずるに足らずとして差し置く）が悉く所謂心中劇乃至それに近いものであるのは矛盾でないか。男女が不如意な戀に泣いて、終に相抱いて情死するに至るのは、生の自由でなくして生の破滅である。解放せられたる生には相違ないが、其の結果は滅亡の悲哀であつて、生を樂み行く歡びではない。斯んな人生を歌つた音樂は、當然厭世的な悲哀の調を全曲の上に漂はし來る筈である。然るに近松の心中劇は、背景に常に光明喜悦の調子を持つて居て、事柄や人物そのものが哀れであるに拘らず、人生全體としての運命は、歌舞の聲によつて語ら

れ。樂觀的であつて、悲觀的でない。若し一たび人生を開放して、行く所に行かしめれば斯くの如き運命に陷らざるを得ないといふ、人生觀的意義を、情死その事の中に暗示する氣持が近松には無かつた。我々は此の暗示を却つて西鶴の作中に見出す。近松に取つては、情死といふ事柄は、實にたゞ是れによつて奇なる、艷なる、而して濃密なる情緒を剪裁するの便宜を得るにすぎなかつた。情死を語る詩も其の全篇に漲る近松みづからの情調は、抑へ切れない生の歡舞の聲である。情死といふ事が映射し來る暗い人生觀の影を彼れは正當に觀取しようとしなかつた。人物は哀れである、事柄は哀れである、併し乍ら之れを語る近松の聲は華かであつた。情死も近松の筆に入つては、美しく明るくなつた。此の點からいへば、近松は現在に於ける生の歡びの謳歌者であつて、その先きに横はる暗い矛盾の人生までをば見なかつたと謂つてよい。見ても之れを光明化する人であつた。

五

情死を美化し光明化する近松の心持は、當時の彼れが周圍の生活と何ういふ關係になつて居たか。或は彼れは德川期の他の戲作者と同じく、文藝を以て全く一つの遊戲に過ぎない狂言綺語と見て居たらうか。若しさうであつたなら、彼れの作中に眞面目な人生問題を求めるのは、求める方が間違つてゐる。遊戲娛樂となれば誰れでも浮れて嬉謔する。彼れの作が人生を浮華歡樂の調で描いたからといつて、それが彼れの眞實の人生觀とは何の交渉もない事になる。

思ふに此の　は二つながら近松に存して居る。彼れとても一面、藝術を以て慰みと心得た時代の埒を、全然破り出ることは出來なかつた。幇間が輕口を言ふのと似た心持で淨瑠璃にも浮華調子を加へたに違ひない。併し同時に彼れには、一歩を自覺した藝術觀に進めた所が見える。是れが彼れをして他の舊代の諸作家から一頭地を拔んでしめた所以である。彼れは其の作を以て單に觀客の機嫌を取結ぶもの以上、虛實皮膜の間を縫うて、義理人情の奧祕に分け入らうとしたといふ、固より今日から見て極めて不徹底な自覺であることは爭はれないが、兎に角人生のあるものを、ある方法で描かうといふ藝術觀上の自覺が一面に伴つて居たことは、其の言に徵して明白である。即ち彼れの作には、ふざけて居る一面と共に、眞面目な一面が存する。惡ふざけの一面は固より論外として顧みないでよい。かの時代淨瑠璃の多くは即ちそれである。老熟して世話淨瑠璃に及んで、初めて眞面目な人生の一面が並び見はれるに至つた。我々は、此の眞面目な藝術としての方面から、彼れの作中に見はれた歌舞喜悅の調子を推究して見たい。

思ふに桎梏から切り放たれた若い人生が、生氣に滿ちて、躍つて居るやうな彼れの調子は、やがて、元祿の社會そのものの調子であつたらう。

德川時代の歷史を讀むものは誰れでも氣がつくではあらうが、元和偃武の後、爭亂が跡を絕つに從ひ、今まで極端に殘害せられ荒廢せられて居た生といふものが、春に遭うた木の芽のやうに、抑へても抑へても抑へ切れない自然の力を以て萌え出て來た。それを尙、昔の殘害荒廢の力の權化たる時の爲政者が、其の同じ力即ち武力を以て壓迫し、以て、自家の勝利者たる地位を保たうとする。勝利者は即ち爲政者であるから、それが國家といふ名を冒し、國家と一つになつて、萌え來る多數の生の力を平民といふ名の下に壓迫した。生に對する抑壓力と

生みづからの發揚力とが、政府と人民とに別れて相爭うたのが此の期の歷史である。而して生の暢び行く形は、衣食住の富となり、逸樂となり、藝術となつて見はれると共に、之れを禁壓する力は尙武といひ、勤儉といふが如き道德兼法規の形式を取つて苛細を極め、繁褥を極め、無道を極めた干涉を、平民の生活の上に加へた　けれども自然に氤氳する生の力は到底壓迫しつくせるものもなく、第一期の爆發時代となつたのが元祿前後である。百花の一時に亂れ咲いたやうな元祿文明は、生の力の勝利に外ならない。その百花繚亂の間に歡喜の歌を囀つてゐる鳥のやうな當時の人々、殊に農工商の平民社會の情調は、卽ち近松が知らず識らずの間に見はしてゐる歡びの情調であらう。解放せられた人生の歡びとは是れを謂つたのである。西洋に於ては、正に十五世紀前後よりの文藝復興期と趣を同じくする。其の意味から言へば、シェークスピアの十六世紀に於けるリネーサンスの人生と、近松の元祿に於けるリネーサンスの人生と、固より相似た點が多い。共に放たれたる生の歡びの藝術である。シェークスピアの『ロメオとジュリエット』と近松の心中劇とは好箇の對偶である。

六

元祿を以て西洋のリネーサンスに比較することから更に重大な一つの論點に達する。西洋の文藝復興は一面に於いて知識の解放であつた。其の生といふものには情意生活の自由と共に知識生活の自由をも含んで居た。つまり全生活の解放が十五六世紀のリネーサンスである。然るに日本の元祿文明には此の知識といふ一角が缺けて居た。元祿の生は知識が無くて情意のみある活動と言つてよい。勿論社會の一部には同時に和漢學の復興もあつたには相違ないが、それはたま〳〵以て政府側の爪牙となり裝飾となるか、然らずんば人民生活に間接舊い桎梏を加へるに過ぎないで、此等平民の活きた生活を新たにする上には殆ど無作用であつた。西洋のリネーサンスに於いてギリシアの學問精神が復興して來たのとは逆さまの事情である。斯やうにして、元祿に解放せられた人生には、耽溺蕩逸の趣はあつても、根柢に深い知識の省察が伴はなかつた。淺はかな、知識程度の極めて低い、それで歡樂を追ふ情意の盛んな人であつた。情意の生を追ふ行き止りには當然の結果として情死のやうなものが幾つも橫はつて居る。情死は實に當時の社會の深意義を標象したものである。然るに其の深い人生の矛盾を、何等の省察もなく觀過してしまふ。是れが元祿の平民文明の特色であつた。省察しても、それは極めて因襲的な、輕々しいものであつた。要するに知識の解放の伴はない解放に歡舞して居たのである。

斯んな風にして醉生夢死する世の中は、少しく深く觀れば、其の底に色々の不安、疑ひ、心細さを藏して居るのに氣がつく筈である。此の深省の影を兎も角も捉へられて居るのは、西鶴の作である。近松は此處まで突つ込まなかつた。近松に博大富麗の趣はあつても、深刻の味が足りないのは此の故である。其の深刻の味を却つて西鶴が領して居る。

近松の作で見ても當時の人生が如何にも心細く、齒がゆく、淺薄であつた事は、今日の傍觀者たる我々よく見える。知識を拔いた、情意のみの恣まゝなる生活が描かれて居る。而も作者のそれに對する深い人生觀的な省察が加はつて居ない。何も露骨にそれを結論する必要は無いが、其の味ひは必ず香ひとなつて出て來なくてはならぬ。私は前に『曾根崎心中』を以て近松の作中最も現實的なものの一つだと言つ

たが、部分々々に小細工の技巧は弄してあるに拘らず、九平次一味の人物が必ずしも結末の運命まで引つぱつて行かれないで、立ち消えて了つたり、天滿屋の亭主が久しい客の徳兵衞の事とて、九平次の雜言に善惡を言はず吸物でもと紛らしたりする邊は、如何にも自然である。性格描寫などは言ふに足らぬが、徳兵衞が身のつまりなども、素直に、無理がなく運んでゐる。部分々々の小細工や辭句の技巧を除けば、最も自然な作といつてよい所以である。而して此の作での徳兵衞と九平次との悶着など、善と言はず惡といはず今日から見れば、如何にも無智文盲な淺はかな、齒がゆい事ばかりでないか。斯んな下らない葛藤で亡び行く人生なら之れを救解する道はいくらもある。馬鹿々々しいといふ感を起さす。が是れが大部分の當時の社會の實狀であつたらうと察する。無智暗愚の民衆が、其の淺はかな智慧の範圍で、放たれたる生の歡樂に醉うてゐるにすぎない。『堀川波の鼓』の前半、また自然な作意の一つであるが、玆に見はれたお種などの上にも同じ趣が見える。

七

更に近松みづからの工夫に立ち戻つて考へると、彼れは上のやうな元祿の人生に、種々の理由から知識の一面を醇化して加へた趣がある。作全體の上には、生の無自覺的享樂の歡びが、殆ど知らず識らずの間に彼れの主觀の匂ひとなつて出て居るが、其の事件を結構し工夫する上には、必ずしも生の盲目的歡喜のみでなく是れに知識の一面を配して、葛藤を複雜にした。併しその配加せられた知識の一面といふものが、惜むらくは深さを缺いて、たゞ在來の表面的、强壓的な義理といひ、分別といひ、來世といふものの以外に出で得なかつた。此の點に於いて彼れは依然たる傳襲の人であつて革命の兒ではなかつた。たゞ從來世俗が無自覺的に盲從して來た、道德知識の聲を一層顯著に掲げ出したといふに止まる。此の方面に於ける解放が彼れには無かつた。一層多く理想的空想的な作意のもの、例へば『柱曆』であるとか『波の鼓』の後半であるとかいふものになれば、生の歡びといふものの以外、作者が主觀の香ひを感ぜられるものが出は出ても、それはたゞ此の解放以前の知識、道德の影に外ならない。我々は近松のリネーサンスに『オセロ』の深さをすら求め得ない。まして『ハムレット』の深さをである。畢竟彼れは「無智の時代」といふ檻を破り得なかつた。

斯やうにして、近松は元祿の放たれたる生の歡びを音樂で我々に傳へてくれる。此の點に於いては、彼れも亦近代の一樂手である。けれどもその生には知識の解放が伴はなかつた。從つて歡舞の底に潛む深刻凄慘な意義に徹到する味が足りない。是れがやがて近代藝術の重要な一面を逸する所であつて、近松の爲遺憾とする點である。

（明治四十三年一月）

沈默の藝

あらゆる存在の原始と終極とは沈默である。それが展開して動作となり、更に展開して言葉となる。言葉は表現の頂點を示すものであると共に、最も多く深奥な根本存在と遠ざかつてゐる。

俳優の技藝を見るに、言葉の表情は第一歩である。動作の表情は第二歩である。沈默の表情は第三歩である。完全な沈默の表情に達した瞬間は最も深い意義を發揮して來る。

（『題言』より）

『人形の家』とイブセンの作劇術

一

哲學と詩、眞實と夢とは人間に離れない二つの靈魂である。二つながら美しい靈魂となつて我等の生涯を彩つて行く。そこに藝術があり、そこに生命がある。

藝術は常に若き心に生れ、道德は常に老いたる心に生れる。二つは永久の不調和である。

イブセンは一生涯老いたやうで若い人であつた。彼れの生活はくすんでゐた。併しながら彼れの生命は常に藝術の表白となつて若やいでゐた。やゝともすれば人を老いしめんとする哲學と眞實とが彼れの壯年期藝術の基調となつてゐると共に、晩年期の藝術は却つて詩に還り夢に還つた節奏を多く有してゐる。而して其の『ヘッダ・ガブレル』(一年おくれてはゐるが作風は前期のもの)と『建築師』と、哲學と詩との基調の轉期にはかのゴッセンサッスの戀愛事件が挿まつてゐる。六十二歳のイブセンと十八歳のヴヰンの小娘との戀が、この老詩人の上に不思議な運命を齎して漸く老いんとした彼れの心に、華やかな夢の世界をよみがへらせた。『建築師』以後の作を彩れるものは此の夢の世界である。彼れの死んだ年に、相手の婦人の請ひにより、イブセンの發見者ともいふべき批評家ブランデスが公にした手紙によつて、この祕密が世に知れたのである。ゴッス氏が趣味ある筆でこの間の事を敍してゐるから、下に先づ之を譯出して見る。

二

千八百八十九年のシーズンに、ゴッセンサッスにゐた避暑客のうちに、十八になるヴヰンの少女でエミリー・バルダハ孃といふのがあつた。よく公園の隅のきまつた共同椅子に腰をかけてゐたが、或時かねて崇拜してゐるイブセンがそこを通ると、大膽に微笑を呈して見せた。すると不思議にもその微笑は酬いられて、イブセンはいつか彼の女の傍に腰をかけてゐた。女の宿所もすぐ知れ、其の宿の人たちにもすぐ紹介せられるやうになつた。其の家の食堂には、窓腰掛があつて香ひの高い花の藪がこんもりと蔭を投げてゐる、そこで果しない會話が交へられた。此の插話は不思議なことである。其の情は本當とも思へないほど譯の分らない、深く深く自然な眞實なものであつた。九年の末に二人が別れたまで、恐らくこの老人と小娘とは、二人の關係がお互の上に何んな意味を持つてゐたかを知らなかつたであらう。けれども若さは遂に復讐して勝利を得た、バルダハ孃は間もなくヴヰンから手紙をよこして、もうずつと靜平になりました、ずつと獨立して、たうとう幸福な氣持にまでなれました、と書き送つた。之に反してイブセンは斷腸の思ひで、嬉しかつた時のことを思へば身も顫へるばかり喜びと絕望とに心を搔き亂されてゐた。

彼れが自分の「王女」と呼んでゐたバルダハ孃のあれまでにこの老詩人を魅して了つたのは謎である。彼の女は決して媚を賣る婦人ではなかつたらしいが、其の危險な魅力を彼れの足元に投げつけ、其の精神の美

を解き放つて彼れの上に注ぎかけた。イブセンはまた愼み深く威嚴を失はない範圍で、幸福をしみ〴〵と身に受けた。イブセンが或る若いノルウェーの文學者にこの時の事を話した言葉に「おゝ、君、愛することはいつでも出來るが、私は愛せられたのだから、仕合せもの中の仕合せものだ」と言つたさうである。餘程たつて後、彼れの力も段々衰へかけて七十の誕生のとき、バルダハ孃へ送つた手紙には「ゴッセンサッスのあの夏は、私の全生涯の中で最も美しく、最も調和した部分でした。私は殆どあの時の事を考へないやうにしてゐるが、それでも他の事は何も考へません。あゝ！永久に！」と書いた。彼の女の面影が一行一行の文字の間に香ひの如くつきまとつてゐる。「建築師」をば、さすがにイブセンも送つてやることを躊躇したが、女が寫眞を送つて來たのに『オランジアの王女』と自ら署名して作中の少女ヒルダは自分の事であると大膽にもきめて了つてゐるのを見て、感觸を害したといふことである。も少し氣がきいてゐたら、そんな事は避くべきものであると思つたからである。疑ひもなくバルダハ孃は今では專ら自分の虛榮に媚びることに氣を取られてゐるに反して、イブセンは倘ほ全然愛に囚へられ魅せられてゐた。女に取つては面白半分であることが、彼れには生死の問題であつた。

三

晩年のイブセンも、戀愛にかけては斯やうに若く、斯やうに初心である。是れは一面には彼れが比較的多く女を知らなかつたためとも見られるし、一面には老いて道德的氣分に支配せられかけてゐる好老爺が、孫よりも若い少女と戀をするのであるから自然あんな風に純粹な初心狀態に還つたのであるとも見られる。

併しどちらにしても、此のときイブセンの、女に對した感情は極めて純粹なものである。而して彼れの女性觀が一代を通じて好意的、理想的、純粹的であつたことも信じられる。たゞ一人『ヘッダ・ガブレル』のヘッダを除けば、イブセンが描いた女性はすべて女性の美しい方面が主になつてゐる。『ロスメルホルム』のレベッカのやうな、物凄いところのある女ですら、全體の上からは美しい方面が主になつてゐる。まして其の他の女は、すべて善良な純粹な女性である。ノラも、アルヴィング夫人も、エリーダも、ギーナも、ヒルダも、イレーネもみなさうである。

而してこのイブセンの美しい女性には、常に二種のタイプが混合したり、別々の人になつたりして存してゐる。一は思想の女、若しくは思慮分別の女で、一は感情の女、若しくは優しい溫情の女である。この兩型は、ひよつとすると、一方が新しい女で一方が舊い女といふ風にも見えるが、必ずしもさうは限らない。同じ思慮分別の女でも『人形の家』のリンデン夫人は新しい女とは言へないが、『幽靈』のアルヴィング夫人や『海の夫人』のエリーダは、其の實行してゐる事柄こそ舊くとも、精神に於いてたしかに自覺以後の新しい女である。彼等の抱いてゐる煩悶は新しい女の煩悶である。之に反して、『ヘッダ・ガブレル』のテヤ、『鴨』のギーナ等は優しい溫情の女として同時に舊い女たることを免れない。舊くして美しい女である。

四

イブセンの女性の兩型を一つにして、而も之を前後半生づつに明白に對照せしめたのは、言

ふまでもなく『人形の家』のノラである。それと共に、『人形の家』はまたイブセンが社會劇に於いて女性を中心に取り扱つた最初のものであるから、言はゞ之が彼れの女性觀を築き上げた第一歩である。彼れの女性觀の手習を此の作でしたものと見てよい。イブセンが婦人問題をスケッチから、素描から、構圖から書き上げて行つた順序が、『人形の家』で最もよく窺はれる。殊に近年出版せられた此の作の草稿から見て行くと、一層明かに其の徑路が認められる。

大體に於てイブセンの社會劇が現實に立脚してゐることは否みがたいが、それと共に其の現實味には後の或作家などに比して、どこか大まかな鈍みを持つた所がある。是れが彼れの現實的作品としての弱みでもあり強みでもある。蓋し彼れは其の劇の場面や出來事や人物の言動を、部分々々には現實に見出し經驗した範圍から取り集めて來る。けれどもそれ等を一つに陶合する藥劑の中には多量の哲學と詩とが這入つてゐる。空想とは言はないが、現實以上のものが交つてゐる。彼れの作の根本動機が單なる空想や即興であつたら、固より近代藝術として何等の價値もないものになる。イブセンが其の劇の動機として掴んでゐる所は、彼れみづからの生活若しくは之と最も密接の利害を有する社會から感得して來たものに相違ない。たゞ彼れは之を自分の詩若しくは哲學、就中哲學の液に浸して保存して置く。從つて再び之れを取り出して使用する場合には既に多量の哲學の臭ひを帯びてゐる。イブセンみづからのものになつてゐる。是れが彼れの作中の現實味をしても、他の一層鋭角的な現實的作家に比して鈍角的ならしめる所以である。それと共に、彼れの作の強大な深刻な壓力はこの鈍角的な所から發して來る。稍大まかな併しながら決して架空でない所の底力を感ずるのがイブセンの作の特色であつて、此の點がやがてストリンドベルヒとも違ひ、ショーとも違ふ所以である。此等の作家には現實的鋭角はあるが、針の先でつゝかれたやうな感味である。棒でなぐられたやうな感觸はイブセンにあると思ふ。彼れが『社會の柱』で書き『鴨』で書いたやうな男子の煩悶、たとへば表面生活と裏面生活との不一致から來る破綻の悲劇のやうなものは、多數の近代人がみな色々の形で經驗してゐる所である。イブセンも亦た必ず其の影を自分の生活に持つてゐたであらう。けれどもそれが果して『社會の柱』や『鴨』にある程度までの經驗であつたか否かは疑はしい。世には自分の經驗以下のものを書く作家もある、經驗と一ぱい〳〵のところを書く作家もある、經驗以上を書く作家もある。イブセンはむしろ經驗以上を書いた。併し其の「以上」は空な思ひつきの「以上では」ない、練りに練つて造り上げた哲學である。こゝに彼れの力と特色とが存してゐた。其の練りに練つて行くところに彼れの作の發展があるのである。

一方から言へば、現實の外形はずん〳〵變化して行く。作中に捉へた現實味が此の方面に於いてずん〳〵と舊くなり鈍くなつて行くことも忘れてはならない。いかに現實的な作者のものでも、年代を經れば、少しく鋭敏な觀察者の眼には鈍みを持つて來るのが見える。トルストイの小說でもイブセンの劇でも此の運命は免れない。また作者が人間である限り、到底造化と同じやうな無縫の天衣を仕立てることは出來ない。どこかに手細工の縫目が見える。イブセンに於いても、ストリンドベルヒに於いても、ショーに於いても、この破綻はある。此等の理由が相寄つて、イブセンの作の外形的現實に鈍みを持たせ、延いて其の内部生命たる作の根本動機にまで非現實の影を投げかけるのである。

要するにイブセンは以上の意味で現實と理想

との奇なる結合の上に其の殿堂を築いたものと言つてよい。

五

婦人問題はイブセンが社會劇の初期の中心題目であると共に、之れを擴げて戀愛問題とすれば、それが個人の上、家の上、社會の上に及ぼす運命は、殆ど全部の彼れの作を支配する題目である。更に之れを擴げて單なる愛の問題とすれば、それが直ちに彼れの哲學の全部である。人生のすべての紛糾は、愛によつて解決せられた時が最も正しい解決である。

婦人問題を戀愛といふ廣いものに還さない前の特殊現象、たとへば結婚とか婦人の獨立とかいふ問題を主にした第一が「人形の家」である。この點から言へば、此の作こそ純粹な婦人問題の劇として、啻にイブセンの諸作のみならず、近世のすべての劇中に格別の地位を占むべきものである。

もつともイブセンみづからは、此の作を單なる婦人問題劇と呼ぶことを好まないであらう。また藝術上からも、問題劇といへば數學の課題のやうなものと誤解せられるのはなさけない事である。眞の藝術が問題を提出するのは、そんな淺薄な意味ではない、むしろ深い藝術はすべて問題を提起すると言つてもよい。人生の結論は到底分る筈が無い、しかも我々は知らず識らずのあひだ永久に之れを探し求めてゐる。この求めに觸れるところに問題が生ずる。其の觸れる途の婦人問題であると、宗教問題であると、戀愛問題であるとは問ふところでない。であるからイブセンみづからも、千八百九十八年五月ハルウェー女權同盟會の席上に於ける演說に「私は此の女權運動といふものが實際如何なるものであるかといふことすら、十分明白に承知してゐないのであります。私にはそれが一般人間の問題であると考へられるのです。私の著作をよくお讀み下すつたら、其の事はお分りにならうと思ひます。勿論女權問題も他のすべての問題と共に解決せられることは望ましいのでありますが、それが問題の全部でないのであります。私の仕事は人間の描寫にあつたのでございます」と言つてゐる。「人間の描寫」これがあらゆる意味に於いて、就中現實的藝術の最高題言である。

ではイブセンは全く問題といひ、哲學といひ、思想といふやうな事を離れて「人形の家」を書いたかといふと、決してさうでないことは明かである。彼れが此の作の素描として書いた「近代悲劇のおはえ」と題するものを見るとそれがよく分る。（この文は嘗て島村民藏君が一二年前他の雜誌に獨譯から譯出したことがあるが、玆には英譯から譯出する）其の緖言と見るべきものに、當時作者の考へてゐた思想の骨組が次の如く書いてある。

六

「凡そ精神上の法則に二種類ある。二種の良心である、一は男子に、而して他の全然異つた一は女子に。彼等は互に相理解しないで、實際生活では女子は男子の法則によつて判定せらる、さながら女でなくて男であるかの如く。

劇中の妻は如何なるものが正で如何なるものが邪かといふことの觀念を得ずして終る。一方には自然の感情、一方には權威といふ信念があつて、全然彼の女を方向に惑はしめる。

現在の社會では、女子は女子自らであることが出來ない。現在の社會は全然男性の社會であつて、其の法律は男子によつて編まれ、其の裁判は男性の見地から女性の行

僞を判定する。

彼の女は僞署をした。そしてそれを誇りにしてゐる。夫に對する愛で、夫の命を救ふためにした事だからである。然るに此の夫は名譽といふ平凡な主義から法律の方に身かたをし、男性の眼でその問題を取扱ふ。

精神的葛藤　權威といふ信念に壓せられ惑はされて、彼の女は自分の子どもを育てる道德上の權利と能力との自信を失つて了ふ。苦悶。近世の社會の母は、或種の昆蟲のやうなものである。種の繁殖の義務を果しさへすれば去つて死んで了ふ。生の愛、家庭の愛、夫子供及家族の愛。所々に女らしい思想の破綻、心配と恐怖の突然の回歸。すべてを彼の女一人で堪へなくてはならない。破裂は必然不可避的に近づいて來る。絶望、葛藤、破壞。(クログスタッドは不名譽の行ひで裕になつたが、今やその富も助けにならないで、名譽を回復することが出來ない)」

以上がイブセンみづから作つた思想の筋書である。之れによつて彼れの婦人哲學も想像することが出來るし、婦人對社會婦人對男子の問題も窺ふことが出來る。たゞそれが後の完成した作ほどに充實し展開してゐないだけである。

七

此の緒言のあとに『人形の家』三幕の場面と仕組みとを略記し、そして本文三幕全部の草稿をつけてある。其の草稿と、完本として公にせられた劇とを比較して見ると、第一、第二幕すなはち自覺以前のノラが雲雀の如く栗鼠の如く跳ね廻つてゐる所から、僞署してこしらへた借金に苦しめられながら、尙夫に對する愛の爲にした事だから、夫も身を捨てて自分を救ふと言ふであらう、そこが美しい人情と人情との奇蹟である、と信じてゐるまでの所は、草稿と完成本との間に非常の相違がある。たゞ第三幕、ノラが自覺して以後の對決、すなはち全篇の眼目といふべき思想の所は、多少の字句の相違の外殆ど全く草稿のまゝである。思ふに『人形の家』は、此の第三幕を目的にしてイブセンの胸中に先づこゝだけが明確に出來上つてから書かれたものか、それでなければ、書き書きして玆に達して、殆ど一字も動かすべからざる結論が彼れの婦人哲學の上に生じたのかである。

其の中で唯一ケ所此の劇の最重大の句として有名なノラの言葉が、草稿にはまだ出て來ないで、刊行本にはじめて現はれてゐる。卽ち夫ヘルマーが——けれども幾ら愛する者の爲だつて、男が名譽を犧牲には供しない」といふのに對してノラが「それを何百萬といふ女は犧牲に供してゐます」といふのである。古來何百萬の女の男に對する不平を此の一句で言ひ現はしたものと評せられる。その句が草稿を書くときにはまだイブセンの頭に浮ばなかつた。其の代りに極めて露骨な喧嘩口調で「私は死なうと覺悟してゐたのです」といふ自分の前の言葉をついで「そしてどうなつたかといふと、禮を一つおつしやるぢやなし、情のある言葉一つかけるぢやなし、私を救つて下さる考が絲すぢほどもあるぢやなし。たゞ叱りつけて——父まで引合に出して嘲弄して——けちくさくびくびくしてたより無い者を殘酷に罵り立てていらつしやる」と言はせてある。此の句と前の句とは、深さから言つても、品位から言つても、比較にならないほどの相違である。斯うしてイブセンの思想は劇を作ると共に段々練れて行つたのである。

啻に思想のみでなく、『人形の家』を舞臺の上に活かす劇的技巧も、第一、第二幕に於いて

草稿と完成本とは著しく違つてゐる。例へば第一幕の初め、ノラがパン菓子を隱して食つたり、ランクやクリスチナの口に頬ばらせてやつたりする邊は、ノラの性格の一面を說明すると共に、舞臺の上に豐富快適な調子を加へる效果があるが、草稿ではパン菓子などは全く用ひられてゐない。また第二幕の終りから第三幕に亙つて、此の劇の舞臺的色彩の中心となるものはタランテラ踊であるが、之れが草稿ではまだ全く出てゐない。で、唯僅に『ペール、ギュント』の中の歌を歌ひピアノを彈ずる位の事があるばかり。若し『人形の家』からタランテラ踊及び之れに附隨する衣裳や音樂や插話やを省いたら、如何に落寞たるものであらう。是等はみな推敲のあひだに發展して行つた作劇術である。其の他人名の變更や小さい仕草の增減等は煩を厭うて茲に擧げない。

最後に『人形の家』全篇に通じた落想である所の「私はあなたの人形妻になりました。ちやうど父の家で人形子になつてゐたのと同じことです」といふ思想は、この作の草稿の出來るよりも十年ほど前の「青年同盟」の中に早くも芽ざしてゐた。其の第三幕でゼルマンが夫及び舅に對していふ言葉に「あゝ、なんて殘酷な目に私を遭はしたのでせう！ 恥とも思はないで――あなたがたみんなで！ いつも貰ふのは私の役目で、與へるといふことはつひぞなくて、私はまるで、あなたがたの間にまじつた貧民のやう、つひぞ私の所へ來て犧牲を出せとおつしやつた事がない。私は何をする力もないものになつてゐました。……どんなにか私はあなたの困難、あなたの心配を、唯一滴でも分けて欲しいと思つたでせう！ けれども私がそれを言ふと、あなたはたゞ笑つておのけなさる。私を人形のやうに裝はせて、ちやうどあなたが子供とお遊びになさるやうに私とお遊びなすつた。あゝ私はどんなにかあなたの負擔を分けて貰ひたいとあせつたでせう！ どんなにか熱心に、人生の廣い、高い、盛んな方面に望をかけてゐたでせう！……」といふのが卽ちそれである。批評家ブランデスが指摘して、別の大作を成すに足る思想だと言つたと傳へられるのは卽ち此の一節である。イブセンもたしかに是れから出發したに違ひない。

（大正二年四月）

◇

此の頃の自然主義非自然主義の論は、何だか口先ばかりの看板爭のやうになつて厭だ。二三年も前に通過した所を、今一度繰り返さなくちやならない。手數な話である。もつとずん／＼先の方へ行つて、中身に深く突き込んだ論をするやうに 殊にも新しい人々は心がくべきだ。非難者の側が取りわけさうである。文藝革新會の人々などが疾くの昔に言つた事を今さら人を替へて繰り返す必要はない、名義なぞは何うでもいゝから、實質を新しくしたいものだ。

右の一連には、故なくして無闇と相手に野卑な罵詈を加へることがはやるやうだ。愚な話だ。よく世間には、年を取つて不遇になると、無闇にやけ酒を被つたりなぞして、空氣焰を吐いて自ら慰むるやうになるものがある。末路憐むべしの感はあるが、餘り立派な事ちやない。今の評壇にはこんな連想を呼び起す現象が多い。そんなガラ／＼した頭で文藝を褒めたつて誹つたつて、文藝に一毫の輕重をも加へはしまい。若い者は、死に身になつてたゞ自分の行くべき道を開拓することだ。

（『覺がき』より）

メーテルリンク論

一

英國の一評論家は、大陸の作家中メーテルリンクとトルストイとイプセンの三人を、最も多くイギリスの讀者に喜ばれるものとして擧げてゐる。そして此等の作家はみな道學者であるがためにイギリス人に喜ばれるのであると說明してゐる。此等の作家はたしかに道學者である。道德家、ある。其の貴い所以もそこにある。イプセン、トルストイ、メーテルリンク等の如くであつてこそ、初めて眞の意味の道學者であり、道德家である。私がこゝで言はうとするのも、此の道學者たるメーテルリンクの一面である。

道學者とは人生を說く人といふことでなくてはならない。近世の藝術は、藝術そのまゝが人生、ある、人生の中でも、特に精神爭鬪の一面が結晶して現代の大なる藝術を成すのである。現代の人の複雜を極めた精神は、それに自覺の起るところ、必ず矛盾を感じ爭鬪を作ふ。この精神爭鬪の評價と結論とを考へるものが眞の道學者である。眞の道德もそれに生きる。痛切に之に觸れない道德は、要するに死道德たり、無自覺道德たり、極樂とんぼの道德たるに過ぎない。

けれどもまた、道德は實行の道である、而して實行は常に斷案から生じ結論から生ずる。今日の我々が懷く精神上の爭鬪に、現代の何人かよく斷案を下し、結論を着け得る者があらう？眞の權威を以て「我れ汝に道德を敎ふべし」と廣言し得るものは一人も無い筈である。我々は、すべて謙遜な哀れな、自己研究者たるに過ぎない。自己の精神爭鬪に苦しみ、疲れて血をふり絞る聲で天の一方に結論を求めてゐるものたるに過ぎない。而して此の聲を傳へるものが現代の藝術である。これだけの意味で、現代の大なる藝術はすべて道德であり、之れが作者はすべて道學者である。

而して、斯うした藝術に接するとき、我々が最後にかち得るものは、嘆息と寛かな同情の心とである。啻に藝術のみでなく、直ちに人生そのものが我々に敎へるところは此の如くである。甲も乙も丙も丁も、爭鬪し矛盾するすべての精神は、深い人生の立場から見れば、一樣に眞理であり、正義である。人生にはたゞ一つの眞理があると共に、すべての存在が眞理であり得る。すべてを容れて一つにするものでなければ、我々の生活を統一する力は無い、結論となる力は無い。而して斯やうな結論が得られないところに、嘆息と寛大自由の心とが生ずる。嘆息憂愁の色調を帶びない人間は、概して淺薄な人間である。寛大自由の心を缺いて、直ちに甲の存在の上から乙の存在を非難し得るともがらは、其の自己の奧に荒涼無慚な空虛の横たはることを感じて、恥かしくはないであらうか。

哀れな、謙遜な、眞摯な人生研究者が到達するところは之れを以て一段落とする。けれども、嘆息と寛大自由とは、要するに人生の消極的結論であつて、まだそれみづからが積極的結論にはならない。人生は要するに實行であつて、實行には積極的な結論が入用である。嘆息と寛大自由とは、たゞ眞に生きんとするものの爲に背景を與へ雰圍氣を與へるに過ぎない、さう

した氣分の中に行はれる實行が最も眞實であり、正當であるといふに止まる。我々は更に此の先の結論を要求する。併しながら、古往今來、何人かよく眞に此の先の結論を與へ得たであらうか。

それに拘らず、事實に於いて我々は生きてゐる、實行しつゝ進んで行く。眞の結論なくして、たゞ眞の實行のみがある。眞の道德なくして、眞の人生のみがあるのである。言ひかへれば、結論は知るべからず、道德は知るべからずして、たゞ實行があり、人生があるのである。我々は此の知るべからざる道德によつて支配せられて行く。道が見えないで、たゞあるいてゐたのである。斯う思ひ來ると、人生の眞理は闇黑である。人生の支配力は不可知である。而して、闇黑にして知るべからざる力の前には、常に恐怖があり、畏敬がある。人生の最後の道德は、此の畏敬、恐怖、闇黑、不可知の源から發するものでなくてはならない。

二

こゝまで來て、私はメーテルリンクに出會ふことが出來る。メーテルリンクの道德もこゝから出發する。闇黑にして恐ろしい力を彼れは運命と呼んだ、運命の神祕と呼んだ。人間はいやおうなし、此の力に引きずられて行く。こゝまでは昔からある運命觀、神祕觀と同じである。取りわけ、其の運命といふものが、我々に說明することの出來ない力である點に於いて太古から今日に傳はつてゐる行詰りの人生觀である。其の五幕劇『ペレアスとメリサンド』(一八九二年)の中の少年イニヨルドが、夕暮に羊飼に連れられて歸る羊の群を見て「一所懸命に走つてゐる。……一生懸命に走つてゐる……大きな四辻へ來た、あゝ! あゝ! どの路へ行つていゝか知らないんだ……もう鳴きたくなつた……待つてゐる……右へ行かうとしてゐるのがある……みんな右へ行かうとする……行つちやいけないのだ……羊飼が土を投げてゐる」といふのが、やがて人生の姿である。又一幕劇『內部』(一八九四年)の老人が、悲しみの通る道は知れないものだといひ、人間はたゞ操り人形のやうに、何も自知しないで生きて行くといふのがそれである。運命はたゞ事實に現はれて終結した時でなければ我々に分るものでないといふ意味の言葉が、メーテルリンクの作には幾度となく繰り返される。要するに人生の最後の眞理であり、正義であり、道德であるところの力は、闇黑不可知であつて、之に對するとき恐怖と畏敬との感を起す、すなはち神祕と感ずる所以である、之れを名づけて運命といふに他ならない。而して此の運命は、どちらかと言へば、恐ろしいだけに悲しい色調を多く持つてゐる。幸運といふよりも、むしろ不運の運命である。人生の最高支配力は、斯うして暗い影のついたものになる。これも昔からの運命論が、概して持つてゐる色調である。エヂポスの上に落ちて來たギリシアの宿命も『內部』一家の上に落ちて來たメーテルリンクの運命も、其の悲哀である點では同じである。

けれどもメーテルリンクは是れから先へ、更に一歩を進め、二歩を進めた。彼れは稍々明に運命の步む途を見ようとした。そして夜明の薄あかりの中に、朧げに二筋の途を見、二通りの足音を聞いた 一つは死であり、一つは愛である。メーテルリンクの作に、早くから、或は別れ、或は合して存してゐるのは、此の二つの思想である。

メーテルリンクに取つては、死といふ事が運命の象徴であつた。何時、何處からともなく、併しながら不可抗的に、平等に我々に迫つて來るものは死である。若し運命の姿を見ようとす、

るなら、死の人間を襲ふ有様に最もよくそれが見られる。この死の姿、死の歩み、死の力をまざ／＼と描いたものが一幕劇「闖入者」（一八九〇年）同じく「七王女」（一八九一年）五幕劇「タンタジールの死」（一八九四年）等である。死の足音は極めてひそやかである。けれども其の手が一度かゝつたら決して放さない。死の神秘と之れに對する恐怖とは、啻に此の三作のみでなく、殆どすべての彼れが作に現はれてゐる。

では、死は如何にして人生の最後の解決になるであらう？「死卽運命」の思想に從へば、我等の實行生活は死によつて指導せられてゐなくてはならない。生は直ちに死を最高の結論として營まれなくてはならない。死なんが爲に生きるのである。此の種の思想も固より今日に始まつたことではない。一方から言へば、死はたしかに一切の事を解決する。人間の生活が複雜に、深奥に、自覺的に、なればなるほど矛盾と爭鬪とが增して來る。樂天家の理想に從へば、それらの矛盾爭鬪が增すと共に之れを統一し調攝する途も發達する譯であるが、事實はさうでない。文明の進歩が生活の複雜を意味すると共に、精神上の矛盾、爭鬪は、調和力に對して遙に增大せられ、遂に調和そのものを破毀して了はねば止まない、そこに近代生活の不安が生ずる。而して此矛盾爭鬪を深刻に徹底せしめようとすれば、生そのものを絕滅する外はなくなる。死に入つて初めて一切の矛盾が解ける。人生の約束は初めから悲劇であり、死である。古來の厭世哲學が歸着してゐるのはこゝである。

三

併しメーテルリンクには之れと反對の一面もあつた。人間は死と共に生といふ事實をも所有してゐる。運命が「死せよ」と命ずる時に、我等は「生きんと欲す」と答へる。生の力も亦た死の力に劣らない程の强さで、我等を引きつける。而して此の方は、メーテルリンクに於いて、愛といふ事で象徵せられる。死と同じく不可避的に、平等に、我々の上に迫つて來るものは愛である。愛は、生そのものの躍動し充實せられる姿であるから、其の色調は喜悦であり、光明である。「愛卽運命」の思想もまたメーテルリンクに認めることが出來る。

斯やうにして、メーテルリンクには、死と愛と、二つの矛盾した運命の象徵がある。而して此の二つのものの關係により、彼れの思想がおのづから前後の二期に分れる。愛と死と接觸して相爭ふ姿を書いたものは「七王女」であるが、併しこゝでは、王女ウルシュラは、久しく待ちこがれてゐた王子のはる／＼自分を尋ねて歸つて來た、その一瞬間前に死の手に攫まれて了ふ。簡單に死の勝利と愛の敗北とが描かれてゐる。秤にかけたら、運命の重さは死の方にある。愛はまだ運命といふ程の權威をすら持つてゐない。けれども「ペレアスとメリサンド」乃至同じく五幕劇「アグラヴェーンとセリセット」（一八九六年）に至つて、愛が重大の地歩を占めて來る。言ひかへれば、愛が運命として人間に歩み寄つて來る狀態を書いてゐる。例へばペレアスとメリサンドとが殆ど自ら知らずして、一目相見た瞬間から、一生を支配するやうな不思議な愛に陷つたのは、運命の力の發現であつて、同時にそれが人生最上の結論を象徵するものである。人生が愛を中心にして廻轉する。

けれども、こゝでは、まだメーテルリンクの道德に重きをなしてゐるのは死である。愛がそんなにして運命の力を持つに拘らず、其の愛の先には更に他の結論が豫想せられてゐた、それは卽ち死である。知らず識らず愛の運命に引きずられた我等は、それによつてたゞ一層高

い死といふ運命の本座に導かれるに過ぎなかつた。從つて喜悦と光明とに充ちて居るべき愛も、其の色調は依然として悲哀であつた。メリサンドが「私は幸福です……けれど悲しい」といへば、ペレアスは「人は戀をするとよく悲しくなります」といふ。そして結局二人は死なざるを得なかつた。アグラヴェーンとメレアンデルの愛も、セリセットの死と其の前後の懊惱悲哀で憂鬱の色に塗られてゐる。要するに眞の痛切な愛の終局には死が横たはつてゐる。此の點から見れば、最後の運命の姿は、やはり死である。

死は果して我等の生の最高運命であらうか？

四

メーテルリンクは知識の逞しい作家である。其の論文集『貧賤者の寶』(一八九六年)から『智慧と運命』(一八九八年)に行くに及んで、暗黒な憂愁の運命觀から一歩を轉ずるやうな氣合を見せた。運命は必ずしも神祕な象徴としてのみ取り扱ふべきものでない、人間の靈智によつて見ることが出來る。斯うなれば其の力は最早運命といふことすら出來ないものになる。不運は之れを避け、幸福は之れを引き寄せることも出來る。光明的になつて來た。

之れと相應じて、作の上に新しい光明を示したのが三幕史劇『モンナ・ヴンナ』(一九〇二年)である。此の作は『ペレアスとメリサンド』『アグラヴェーンとセリセット』と同じ道を、更に一歩先に進むと共に、死の暗い運命から回避して、新たに生の光明と喜悦とに達せんとする峠に立つものである。遙かの向うに、曉の第一光を望んでゐる。女主人公ヴンナは、愛の手によつて新人生の門を開かうとしてゐる。

併しながら、其の開き得た新人生の門の奥には、果して安らかな人生の大路や殿堂があるか否かは分らない。光明と喜悦とはたゞ暗示に止まつてゐる。新人生の大道が果して愛にあるかは、問題として殘つてゐるけれども、前來の諸作のやうに絶望的でなくなつた、死の運命によつて影をつけられることが無くなつた。少くとも暗示として、問題として、光明的になつて來た。其の以上は、更に之を光明と解するも、暗黒と解するも、觀る者の自由である。メーテルリンク自身すら、此の作以後明白に人生觀を一變してゐるか否かは分らない。

メーテルリンクが、何れの作にも殆ど自分の身代りのやうにして用ひる老人がある。『内部』の老人、『ペレアスとメリサンド』のアルクエル、『モンナ・ヴンナ』のマルコー等がそれで、人生のあらゆるものを經驗して、あらゆるものに同情し、あらゆるものを理性の眼で見る、言はゞ人生の説明者、運命の先導者である。そのマルコー老人すら、『モンナ・ヴンナ』に於いては、既に一歩あとに取り殘された氣味がある。ヴンナは一歩を踏み出してゐる。マルコーはたゞヴンナを讃美して「正義はやつぱり生きることだ」といふ。新道德を生の方角に求めようとするものと言つてよい。併し我々みづからの問題はまだ其のさきに殘つてゐる。(大正二年九月)

◇

懷疑がまだるつこいとか時代後れだとかいふものがある。滑稽ではないか。まだるつこければ一足飛びに解決なり理想なりに行くがよい。我等は安値な解決理想の多きに苦んでゐる。懷疑は幾ら微細のものでもそれが眞實である限り、貴い。解決理想は、それが眞實であり得るかが先づ疑問である。(『畫がき』より)

沙翁の墓に詣づるの記

一

千五百八十六年の春、四月の央でもあつたらう、ウッドストック街道からオックスフォードの北の宿はづれに差しかゝつた、二十二三の旅人がある 疲れた足を停めて今宵の宿はと見廻すと向うに何某のインといふ 古風な、蔦なんどの這ひかゝつた旅籠屋の土壁が、今しも薄れ行く春の日影を一杯に浴びて、あか／＼と照り榮えてゐる。

北の都會からロンドンへの街道筋とて、此邊は殊に上り下りの人馬繁く、宿屋の門には、朝夕の送り迎へが賑やかに見られる。インの狹い階子を昇つて、明りのついた取りつきの部屋に這入ると、茲は石入の厚い叩き壁に古色ゆたかな、天井の低い、小さな、穴倉の樣な室である。四月といつても北歐羅巴の夜陰はまだ薄寒い。ストーヴには焚火が今丁度燃え上つて、マントルピースの上の燭臺の明りが却つて心細い。

椅子をストーヴに近く引き寄せ、手を拱いて、默然として燃え立つ火影を見つめゐる、旅人の面は赤く輝いて、額の廣いのが目立つ。

折から靜に扉を押して這入つて來たのは、此の家の娘であらうか、十八九ばかり。客は不圖瞳を擧げて其の方を見た。娘は面はゆげに顏を背けて無言のまゝに晩餐のテーブルを調へやがて出で行かんとする。

「姉さんは此の内のお娘御だね。」

「どうですか。」

「まあ、聞きたいことがあるから、お坐んなさい。さあ此の椅子に。」

「有りがたう。何ですか、聞きたい事つて。あなたはロンドンへお出でなさるのね。」

「さう。ロンドンへ行くのだが……。其のロンドンがね……。」

「結構ですわ。わたしも來年の誕生日は、ロンドンの伯母の處で爲る筈ですが、來年といへばねえ、隨分待ち遠いこと……

「あゝあ、ロンドン！ そして何ぜさうロンドンへ行くのが嬉しいのだらう。」

「何ぜつて、それはロンドンですもの。わたしの從兄妹だけでも三人居りますし、其の中のフレッドといふのは、去年の暮も此處に來てゐました。男には珍しい程美しい眼を持つてゐて、そして唄が上手で……。それは善い聲ですよ。」

うつとりして、目のあたり其の唄に聞き惚れてでもゐるかと思はれた時、入口の戸をコンコンコンと叩く音、メーリーと優しき呼び聲、イエスと輕く答へて、女は立ち去つた。

「あゝ！ 戀だ！ 戀を求めてロンドンへ行く。あれで人生が濟めば仕合せなものだ。自分は何を求めてロンドン三界へ迷ひ出るのであらう。自分だつて故郷には戀もある 夢もある。その故郷に住みかねて、行く手は雲のはる／＼、是れから浮世の波風と戰はねばならぬ、前途の闇の明け方は、空に明星か、海に眞珠か、望みの的はあざやかに我が手に落ちようか、それともロンドンの大路の塵にまびれて、一代をすがれ行く荷馬の如く、死して跡なくなるであらうか。天使の樣なあの乙女が身は 成程光明に包まれてゐる。それに照り合はせて、今さらのやうに我身の謎が目につく。此の謎の解き場は

ロンドン。あゝ、ロンドン！」と獨り思ひに耽つた旅人は、翌朝、オックスフォードの町を越して、重ねて南へ〳〵と旅を續けた。

我れには此の弱き旅客の名がウヰリアム・シェークスピーアであつたらしく思はれる。

二

山の懐、水の畔と、地上の住ひは廣いが、この英國のロンドンから西北へ百マイル許り、エヴン川の岸のさゞ波に夜毎の夢を洗はする、スツラツフオードの片隅に、方五間には足るまじき一地を劃してそこを長へに世界の眼目とし、そこに不滅の靈火を點じた、造化の寵兒シェークスピーアが家は、まことに人の世の譽れかな。大英國は縦し亡びても、シェークスピーアは亡びぬ。此の一地域ありしが爲に永劫不壊なる英國も亦た幸ひではないか。

ロンドンに出でしより後のシェークスピーア、殊にも其の著作ありてより後の彼れは、千の傳記、百の考證よりも、彼れみづからの書こそ最も明白に之れを傳へて居る、『ハムレット』『マクベス』の著者は『ハムレット』『マクベス』の著者として天日の輝くが如く遍く後昆を照してゐる。之れに想像を加へんには既に餘りに煌々たるに過ぐるであらう。唯我が最も想ふは、スツラツフオード、オン、エヴンの一青年たりしウヰリアムが身の上である。

斯やうな思ひ出に導かれて、我が初めてスツラツフオード、オン、エヴンの土地を踏みしは過ぐる年の春、茱月茱日であつた。オックスフォードから汽車で二時間が程、巴旦杏の花の暖に赤い家幾つかを過ぎて、停車場近く來れば、かしこに見える一群の樹立が、早やホーリー、ツリニチーの森といふに、何となく心ときめく、繁みの色はまだ調はぬながらの蒼さ、中央から肅然として立ち上つたる尖塔は、げにも默して天をさす指の如く、其の深い意義をば、唯感涙あるものが測り得よう。停車場から新開の道を病院の前に出で町に取りかゝると、もうそこに行き當りがある。廣い四つ辻の眞中にしつらへた噴水はいま樣ながら、町は何所ともなくさつぱりとして優雅の趣を具へてゐる。店の構へ看板の工合などまでどうも唯の町ではないやうだ。右手は商人宿で向うに農作物の店が見える。あの店？ シェークスピーアの父の店も盛んな時はあんな風であつたらう。見れば店先に子供が遊んでゐる。ひよつとするとあの子の顔がシェークスピーアの幼顔にでも似ては居まいか。と用もないに其の間近まで行きかけると、子供は外國人と見て逃げ出した。馬鹿らしいとは思つたが、いや併し、此のあたりは、古來交通が薄く、血統が單純であるため、面相がおのづから類似型を存してゐると聞いた。シェークスピーアの面相にはスツラツフオード型といふものが過たず現はれてゐるといふ。さすれば今の子供に彼れの幼顔が寫つてゐまいにも限らぬ。も一度跡をつけて見ようか。

など忙しき空想に耽つてゐるあひだ、時は午に近くなつた。地圖によると、此處から向うの角の小路を拔ければ、すぐ其所がヘンシー、スツリート。シェークスピーアの舊宅の殘つてゐる所である。と思ふと飛び立つやうには感ずるが、先づ宿を取つた上と、大橋通りのゴールドン、ホテルといふを探した。廣い通りを眞つ直ぐに辿ると、幾らもあるかぬ内に早や、橋が見える、其の下はエヴン川であらう。町は之れで盡きるのだから、誠に小さい可愛らしい都會である。ホテルは橋のすぐ手前であつた。

三

旅行の季節とて、ホテルの客室は凡て約束

濟、よつて是非なく近所の室内裝飾品を賣る家の一室を借りさせ、食事だけはホテルに來てすることとなつた。晝食はひとり後れて調へたれば、食堂の模樣などはまだ見ず。兎も角もと、近まのヘンレー、スツリートへ先づ驅けつけた。

あれがシェークスピーアの生れた家といふ、其の前には成程多勢の人が入場を許されるのを待ち合せてゐる。また此方の軒下には馬車の客待ちをしてゐるのもある。併し斯う見わたすと、さして長くもない通りながら、何となくからんとして、人の往來も少ない、如何にも田舍の小町といふ趣である。折しも空には薄雲が掛つて冷氣を含んだ風が町を吹き渡つて來た。何だか淋しいやうな悲しいやうな風情である。

想像して見ると、シェークスピーアがまだ腕白盛りの頃は、傍のグラムマー、スクールに通ふ朝夕の途すがら、弟と肩を組んで、此の邊を行きつ戻りつしたものであらう。そして年よりも老せた彼れは、十六七にもなると、もう一廉の若い衆氣取りで、日本ならば湯歸りの手拭を肩に、つゝかけ下駄か何かでそこらをそゝりあるく方であつたらう。いや彼れは案外におとなしい質で、服裝からは若年寄といふやうな綽名を附けられてゐたかも知れぬ。父が家産の傾くにつれ、生活の辛苦は早くもこの大天才が青春の夢を蝕みそめて、弟と共に商品の賣出しから偶には得意回りもする、稼業の手傳に追はれて好きな雜書にも讀み耽る暇は無くなつた。夜遲く店を仕まつてから、僅かに自分の寢室で覺束ない蠟燭の光をたよりに昔の心ゆく唄の本などを讀んでゐると、其の明りが、あの今見える東北角の窓から微かに漏れる。

頃しも秋の末、月も無い霜夜の事であつた。シェークスピーアが優しい情を忘れかね、八つの姉でありながら、我れから戀をして、深くも彼れと契つたアン・ハサウェーは、三月の身重く、窶れた樣の目につく頬を風に吹かせつゝ、窓の明りを心あてに、そつと尋ね寄つて呼び出せば、男は心得て忍び出づる。つれ立つて指して行つたはあの橋の袂、アンが身の始末を二人しみじみ泣きつ語りつしたであらう。

氣がさして、ふと橋ある方を見かへれば、二人の後姿にはあらぬ一群の男女が、アメリカ音に語り興じつゝ、此方を指して來かゝつた。

四

げに世界の如何なる處にも見がたい偉觀は、此の僑屋の一隅シェークスピーアの誕生室であらう。金字に彫られては、帝王の書架をも飾る文學史上の大名が、見よ、此の一室に來ては、如何に賤小に、如何に謙抑に、窓、壁、天井に其の跡を留めて居るかを。說明係の男が、一葉の薄紙を窓の硝子に當てて指し示す所を見れば、縱橫に切り込みたる名字の中に、鮮かにスコットの名も見られる、カーライルの名も見られる。天井にはブラウニングの名が切つてある。そして此等の人々は、此の室の主人の前には、一切の地位階級を棄脫して、無名微賤の巡禮者として讚仰の意を主人に捧げてゐるらしい。

其の外に、いはゆる何人も一度は腰かけて見る記念の椅子。我が其の側に立つて長々しい說明に耳を傾けてゐる間、傍にありし一老士と、そが娘とも見える妙齡の一婦人とは、先づ紳士から始めて試みに其の椅子に腰を託した。

「シェークスピーアは、さう太つた男であつたとも思はれんが、私のやうなものがしば〳〵腰をかけると、成程是れでは脚も減りさうぢや。はつは。見物人が腰をかけるために椅子の脚が減るといふのは、丁度あのカンターベリーのお

寺で、巡禮禮拜の膝を突く、ために石段の中程が凹んでゐるといふのと好一對の話ぢやな。さあお前の番ぢやぞ。」

娘は輕く周圍の人に會釋して、しとやかに身を落した。

「お父さま、似合ひまして？」

と心持そり身になつて見せる。

「うむ、クヰンぢや。」

「ほゝゝ、文學の玉座に直つたのですもの。」

と父と我れとの方を等分に見て立ち上つたが、父の側に寄つて「日本の紳士を。」とさゝやいた。すると老紳士は我が肩を叩いて、

「さあ、あなた、一つ腰をかけて御覽なさい。」

我れも同じ道に心を寄するもの、緣なればこそと、人のする通りを爲て見た。續いては、シェークスピーアの指輪、シェークスピーアの印形、シェークスピーアの肖像と、確否は知らねど、斯かる場所には附き物の遺物の數々を巡覽して、再び町に出る。

五

大通りに沿うて、シェークスピーアが專ら羅典の知識を得たといふグラムマー、スクールの前からホーリー、ツリニチーの寺地まで、殆ど此の土地を縱斷しても、三十分とはかゝらぬ、町の周圍に散在する、菅笠を伏せたやうな丘、其の間に廣がる牧場、畠。立木は楡、柏、山毛欅、水松の類が多からう。總じて綠の濃い緣をつけたやうな瀟洒たる小都會、その東南を限つて流れるのが、可憐なエヴン川である。

春であつたからでもあらうが、打ち見た所、町の雅趣あるに對して、四圍の色調は青いといふよりも綠である。いかにも若々として、新鮮の氣は野に森に漲つてゐる。華やかな日光が青紗のやうに透ける青葉の蔭には、水の乙女、空の乙女が踊つてゐる、あのコローの繪にでもありさうな趣。我は曾て、初めて鎌倉に勝を探つた時、先づ其山色のいかにも歷史と相呼應して蒼古の調を帶びてゐるのに魅せられた。其の土地が有してゐる內容と、之れを覆ひ包んだ色調との間に、自然の調和があるのを面白く思つた。然るに今スツラツフォード、オン、エヴンに來て見るに及んで、そこに一種の、意義ある對照を認める。鎌倉三代の歷史は、如何にドラマチックであつたにもせよ、畢竟歷史である。其の調は茂古老蒼を加ふるに從つて愈々妙を增す。スツラツフォードの內容は詩である、藝術である、シェークスピーアである。年時を忘れて常に清新に、常に快活にして、却つて懷古の情を深うするではないか。歷史は老いよ、藝術は長へに若くあれ。」

寺の門は、幾百年の菩提樹道の兩側に列を正し枝をわたして、青葉の天蓋を引く。左右に、楡の葉蔭ひろく塵も留めざる一面の墓地は、凡ていはゆるホーリー、ツリニチーの神領である。その楡の木隱れから、遙に尖塔の頂のみを示して、人をして想望の情に堪へざらしめた聖院は、今や、菩提樹の若葉香る穹道の奧に扉を見はして來た。我より先に、遙か離れて行く小さい人影は、黑い外套と空色の絹服と、男女二人の後姿、天國の門を叩きにでも行く人かと思はれる。

入口には黑き法衣の僧がゐて、出入を取締り、入場料も取れば、案內記、繪葉書、記念印紙の類も賣る。之れも寺の維持費と思へば故障はあるまい。

さて建立の由來、建築、窓、繪の說明はざつと聞いて、つか〳〵と香壇の前に進めば、此處である、欄を隔てて右より二つ目の床石の銘は、

善き友よ、耶蘇の願なり、止めよ、此處に納めたる塵を發くことを。幸ひあれ、此の石を庇ふものに、將た呪ひあれ、我が骨を

移すものに。

三百年のあひだ、斯くの如き銘を負うて靜かに眠つてゐる大詩人の骨は、今後といふとも、彼れが著作の亡びざる限り、永劫に亙つて動かさるゝことはあるまい。思ふに敢て此の願ひを亡みせんと企つるものがあつたら、世の憎み禍ひは必ず其の頭上に集まり來るであらう。墓の主が遺したる呪詛の祈りは、夫の古の豫言の如く事實となつて功力を現はし來つたと言はずばなるまい。

右手には、之と幷んで妻アンが墓、左には三つ相續いて、娘スサンナ及び其の夫等一族の墓がある。

回顧すれば我が初めて學窓にシェークスピーアを習讀して以來、殆ど十年、しば〳〵想像の間に出入してゐたスツラツフオード、オン、エヴンの地、別けても彼の銘を刻んだ詩人の墓を、今目のあたりに見て、我れは眞實我が身の此の境にあるかを疑ふの情に堪へなかつた。

けれども、斯やうにして墓前の欄に手をかけたまゝ、しばし茫然たる胸の底から湧いて來るものは、一種の喜悦光明の情であつた。伽藍の中は取りわけて空氣がひや〳〵としてゐる。光線は色硝子に透けて明るさを減ずる。場所は人氣の少い寺院の、而も十字架像の前である。それにも拘らず、此の時の我れは、千古の詩人が冷に骨を横たへてゐる傍に立つて、一種の溫さを感じた。嗚呼玆にこそシェークスピーアの靈は安まれと思ふに、おのづから、肅然として容を正しうするの氣は生ずれど、されども哀傷の心、寂寞凄愴の情は絕えて萌さぬ。むしろ愛慕の感、同悅の感、光明の感が身邊を圍繞するやうに思はれた。由來英雄の追懷は如何なる莊嚴美麗の形に於いてするも、畢竟生時の燦爛と死後の變易荒廢との對照に外ならぬ。玉壘浮雲、無主の江山、何れか廢墟を傷み荒殘を哀しむの情でなからう。所詮英雄を弔するの意は荒廢を弔するの意である。而して斯くの如きは亦實に現人生を弔するの意味ではないか。人生は到底其しりへに變易を豫想し廢滅しなければ、深切の感味を發しない。ひとり我は今、詩人シェークスピーアを弔せんと欲して此の以外のものに逢着した。彼れの追懷は繁榮である、光明である。而して夫の藝術の追懷もまた玆に歸するであらう。滅び行くは人生の姿、之を暫く天上不滅の光に照して示すものが藝術ではないか。さればいふ、「人生は常に荒廢也、藝術は常に繁榮也」と。

六

後年巴里にナポレオンの墓を訪うた時は、其の構造の如何にも壯麗を極めてゐるに拘らず、金粉榮華の底に、堪へられぬ程の淋しさ物悲しさを感じ、愴然として寺を辭したが、シェークスピーアの墓に詣でては、我れは覺えず笑みの眉を開き、和親の面を輝かして、周圍を見まはした。

ホーリー、ツリニチー、バストと言つて此の寺にある半身像は、世にあるシェークスピーアの肖像中でも最も古いと信ぜられるものの一つである。是れからそれを一見しようと、振りかへるはずみに後から聲をかけるものがある。誰れかと見れば曩に誕生室で會つた老紳士親子であつた。

「あすこにあるバストを見落しちやいけませんぞ。」

成程像はすぐ香壇の横、我等の左手の壇龕に安坐してゐる。床から數尺の上に、黑い大理石を彫り窪め、同じ石のコリンス式圓柱で左右を裝飾した龕中に、半身をあらはしてゐる石灰石像が卽ちそれで、本來は赤の上衣に黑の袖無しガウンと、粉塗の跡あざやかであつたといふ、

その服裝は人のよく知る通りである。左に紙、右に鵞ペンを持つた手は臺の上にさゝへられて像の下には夫の「停まれ行人、何とて御身然は急いで行き過ぐるぞ。」云々の文句を彫つた石が嵌めてある。

「お父つさま、此の像をよーツく見つめてゐますとね、笑つて來ますよ。そら御覽なさい、ね。」

と眼は我れの方を見ながら、娘がいふと、

「あ、それは此の像についての有名な話ぢや。是れはもと墓作りのジョンソンといふ土地の石工が刻んだもので、一つは据ゑやうが心持高過ぎるからでもあらうが、あの通り顎は二重顎のやうで、顔が總體下から見上げた形になつてゐる。御覽なさい、日本の紳士、脣が少し開いて歯でも見えさうではありませんか。あれが此像に特殊の表情を與へて、愛くるしい子供のやうな所が見えるのぢやと言ひます。」

「いかにもさうのやうですね。そしてあの眼と眉とがまた‥‥。」

「さうですよ。わたしもさう思ひますの。何か斯う向うに見詰めてゐるものがあるやうですわね。」

「さうです。何か普通の人には見えないものを、はつきりと見据ゑて、寫し取らうとでもしてゐるやうではありませんか。おもしろいですね。」

「いや私の考は少し違ふ。あれはアブスツラクト、アイといつて、深く思想を一事に集中してゐる時の狀態ぢや。眼は明いて居ても何も見當をつけて見てはゐない表情ぢやと思ふ。私には寧ろ何か我々には聞えぬ靈妙の音樂どもを、耳で一心に聞いてゐる時の眼と見えますな。」

「それはお父つさま、考へやうですけれども、若しあれが耳の方に氣を取られてゐる眼なら、今少し上を向くか下を向くかして欲しいと思ひますわ。」

「私もどうも其の方の說に贊成したいですね。あれをアブスツラクトの眼としては、ちと意味があり過ぎるやうに思ひます。」

「さうかな。私にはどうもさうは思はれんが、併しこんなことは主観的な所の多いものぢやから何とも言へん。」

と和して同ぜざる英國紳士のゆかしい氣質を見せた老人は、更に言葉をついで、

「それであなたは此の像に對して全體に何ういふイムプレツションを得ましたか。」

「さうですね、それは、ちやうど今の前私が此の墓石を見てつくづくと感じてゐた所と一致した一つの感じですが、言はゞ藝術は如何なるものをもブライトにする、藝術の標徴はブライトネス、プロスペリチー、プレジュラブルネスといふやうなもので、シェークスピーアの此の像は、よく此の事實に結論を與へてゐるやうに思はれるのです。わたしのシェークスピーア觀及び藝術觀の一部が此の像によつて完結せられる、と云へば少し大層なやうですが、まあそんなものです。お孃さんのお考はどうです。」

意外の見識に驚いたといふ風で、我が方を見つめてゐた娘は、あわてて眼を外らすと共に、其の緣をさつと紅めて、

「わたし、あなたのお說にすつかり贊成ですわ。」

「ぢや多數決ぢや。しかたが無い。どうです、是れから墓地を見ようではありませんか。」

紳士に導かれて戸外に出た。

七

川に沿ひ寺を圍んだ廣い墓地には、楡の大木が所々に蔭をなして、細工を凝らした花壇や、硝子箱に入れた造花の仰々しい新墓の脇を通りすぎれば、青苔に埋もれた古い墓、試に手で拂へば、木蔭の露がしとゞ滴れる。地は一面

に掃き清められて、塵一すぢも落ちてはゐない。時々さら〳〵の音を立てるのは、エヴン川を渡る微風に、楡の葉の摺れるのであらう。川向うの牧場からは、稀れに牛の鳴く聲が聞える。墓地を一巡して川に臨んだ小高い土手の上に出れば、木の下に共同椅子が据ゑてある。三人は之れに腰をおろした。見渡す限り、エヴン川は、水嵩ゆたかに牧場の草の根を浸して、漣波の果遠く、もとは一面の葦の繁みであつたといふ小島の跡に續く。別けてゆかりは此の川の白鳥である。ベン、ジョンソンがいはゆる「エヴンの美しき白鳥」こそは去つて繼ぐものも無けれど、まだ肌寒い川風に羽を搔く鳥の風情は、今も昔のままであらう。

「あすこにシェークスピーアが。」

といへば娘は崩れるやうに笑つて、

「スキート、スワン？」

「此の白鳥はスキートであるか、どうぢやらうか、わからんな。」

「わたし、向うの牧場へ行つて見たいのですが……。」

「もう茶の時刻ぢやらう。一旦歸つて、茶でも呑んでからにしてはどうぢや。あなたも御一緒にお出でなされてはどうです。まだ御名前も存ぜなかつたが、お名が何はれませうか。」

我れも名刺の交換を乞うて宿所を聞くと奇縁か、同じホテルの相客であつた。されば論もなく同道して四時といふに、ホテルの食堂で茶を共にした。紳士は愛蘭土の者で身分ある人であるが、妻を失つて、娘一人をたよりの身であるといふ。血の冷熱の激しいアイヤリッシュの所は少く、却つて英蘭土の氣象を多く持つてゐる。

八

ホテルの客は二十人の上に出でて、食堂は中々の賑ひである。我等は今一人亞米利加に育つて、獨逸に長くゐたといふ、五十左右の元氣な婦人を加へて、四人片隅のテーブルに席を占めた。

今日の話題は、自然のこと、あちらでもこちらでもシェークスピーアで持ち切つてゐる　亞米利加の婦人は盛んに獨逸が文藝の國であることを說いて、シェークスピーアは本國たる英吉利よりも却つて獨逸に多くの眞知己を有してゐると主張した、そして英國が此の大詩人を表彰することの倘足らざるを慨した。彼方のテーブルで一際高くベーコンといふ聲がすると、それを捉へて、この饒舌博識な婦人は、さらにベーコン、シェークスピーア論に移る。

「お〻馬鹿々々しい。先達ても或る書物を見ると、二人の名を一つにしてシェーコン、ベークスピーアなんて書いてゐました。そして言ひやうが面白いぢやありませんか。一つ此の際に折衷案を立てて名をベークスピーアと改めたら善からう、眞理はいつも中庸にあるから、ですとさ。人を馬鹿にしてゐるぢやありませんか。」

「ではあなたはシェークスピーアとベーコンとは全く別人といふお說なのですね。」

「勿論ですとも。まあ、考へても御覽なさい。『學問の進步』を產み出した頭が、どうして『ハムレット』や『キング、リア』を產み出しませう。『學問の進步』と『ハムレット』と、どれ程違つてゐるかといふことが分れば、跡は議論をするまでもないぢやありませんか。ベーコンのやうな、あんな羅甸狂、活字引、論理機械が、どうしてどうして、シェークスピリアン、ソンネッツの、唯の一句でも作れたら世界の不思議でせうよ。是ればつかしはわたしが……。」

と鼻息あらくテーブルの上から手を引くはずみに、飲みさしの茶をひつくりかへした。ミルク入りの灰色のものが白いテーブル掛を浸し

て、スカーツに流れかゝる。あわてて立ち上らうと椅子を後へ押せば、後の椅子とからみ合つて此所にも一騒ぎ、給仕人を呼ぶけたゝましい聲、あちらの方ではくす〳〵と笑ふ聲。我等は總立ちで、急いでハンカチーフを取り出し、婦人の前の洪水を防いでやつた。座が靜まると、日本のシェークスピーアは誰れであるかといふやうな話から、老紳士は、愛蘭土の人が往々人種上の偏見に驅られて英蘭土と反目せんとする結果、シェークスピーアにまでも冷淡なのを非難した。

「さうですね、今英國でシェークスピーア反對の旗頭はお國のバーナード・ショー氏だといふことですね。」

「恥ですね。わたし、あの人は大嫌ひ。書いたものを讀んで見ましても、何だか冷たくて、皮肉で。」

「あれは佛蘭西の系統ですよ。佛蘭西ではあの通りヴォルテヤの昔から、今のサードゥに至るまでシェークスピーア嫌ひが多いのですからね。なあに佛蘭西人なぞにシェークスピーアが分るものですか。一體ケルト人種は……。」

といひかけて、婦人は氣が附いた風に、跡を引き込める。座の白けるを恐れてか、娘は先づ立ち上り、老紳士もつゞいて立つた。

九

夕暮前の一時間許りは、橋を渡つて、川向うの牧場、近郊などをそゞろあるきした。娘が、持つて來た菓子をしきりに白鳥に與へてゐるあひだ、老紳士は岸づたひに水下へ下つて行く。我れは立木の幹に倚つて眺め飽かぬ川の景色を見てゐたが、心は何時かまた空想に這入る。

此土地の風格の、何とはなく淸らかで、情ありげなのは、畢竟この川あるが爲めであらう。シェークスピーアと、エヴンとは、土地の命である。若しあの白鳥がシェークスピーアの靈であつて、それがエヴンに浮んでゐるとすれば、其の關係はいよ〳〵面白くなる。

など考へてゐる間に娘はそこらで一つまみの櫻草を摘んで來て、笑ひながら、之れを君に捧ぐるの名譽を許したまへ」といつて我が胸の左の鈕穴に插んだ。

「何を考へていらしつて？」

「今妙な事を考へました。あの白鳥がシェークスピーアの靈ではないかといふ……。」

「ほゝ、あなたも迷信家ですことね。」

「迷信といふ譯でもないのですが、今日午にも、あのシェークスピーアの家の窓を見てこんなことを考へた。夜遲くある窓から明りが漏れてゐると、アン・ハサウエーが村から尋ねて來て、そつとシェークスピーアを呼び出して、この牧場の邊から舟でも出して夜中月の下に身の振方の相談をしたのではないかといふのです。」

と言つて不圖見ると、娘は赤面して俯いてゐる。是れはしまつた、アンが身の振方といふ裡には、私通の懷胎といふ疑が籠つてゐる、デリケート、センスの淑女紳士の前では言ひ及ぶまじき事柄であつたと思つたが追つかぬ。話題を轉じようとしてゐるうち、娘はポッケットから美しい袖珍本を取り出し、

「わたし、シェークスピーアのソンネッツを持つて來ました。二人で讀んで見ようぢやありませんか。さあいらつしやい。此所がようござんす。」

みづから草を敷いて席を造つた。歌の中からは、所々會心の章を引き出して、自分も誦し、我れにも讀めよと勸める。我れに朗讀を迫つて抑揚の正しからぬ箇所をば一々直して吳れる。

はつきりしなかつた夕日が、ぱつと一時に榮えて沈みそめると、川づらも遠くから靄の幕を

引いて來る。と思ふ途端に流れに沿うて一艘の端艇が下つて來た。漕いで居るは二十歲ばかりの若者、情人でもあらうか、一人の若い女を載せてゐる。我れは之れを見ると、何となく心とゞろいて立ち上つた　シェークスピーアとアン・ハサウェーとが話の緒ぎめを、また思ひ合はせたのである。すると娘も同じ電氣にでも感じたかのやうに、まじろいて身を起した。端艇は過ぎて行く、そして遠靄の中に沒してしまふ、岸にはあゝとの嘆息のみが取り殘された。

しばらくして、娘は、

「シェークスピーアが此の土地に居られなくなつたのは、サー、トーマス・ルーシーの蓄つてる鹿を盜んだからだと言ひますが、わたしは何だかそれにはシェークスピーアに言譯がありさうに思はれます。」

「さあ、それはどうとも言へないやうですね。」

といふとき、老紳士は後の畠道から歸つて來て、我等の傍から口を插んだ。

「私の讀んだ範圍での傳記によると、よし盜んだにしても、それは半分は習慣、半分は徒戯ぐらゐのものではなかつたか。「盜んだ」といふ語が餘り強いから、彼れを呪ふやうに聞えるのぢやらう。そんな例は今でも田舍にはよくある事ぢや。それで私はシェークスピーアの此の事件に關しては、一種の哲學を立てゝゐますよ。」

「おもしろいですね。どんな哲學でせう。」

「倫理上では善と惡との中間に無善惡の事柄があるかどうかといふことは既に人も論じてゐる所ぢやらうが、私は其の外に半善惡といふやうなものがあると思ひます。シェークスピーアの場合が丁度それぢや。盜んだは盜んだがそれは普通の盜賊が夜陰に他人の家へ忍び入るといふたぐひとは、心持が違ひはせんか。土地の若い者等がよく自分の庭へ紛れ込んで來た鷄を締めて喰ふ。又は通りがけに葡萄園の葡萄の房を摘んで行く。是等は田舍の習はしによくある事ぢや。行る者は善い事とは思はぬが、さして惡い事とも思はぬ。徒戯をして叱られるくらゐの心持で行つて居るのです。シェークスピーアの鹿の事も事實なら恐らくはこんなものぢやつたらう。それをルーシーが意地わるく咎め立てをしたのでせう。あなたはどう思ひます。お前もどう思ふ。」

我等はちよつと答へかねたが、娘は滿足の體に見えた。

オックスフォードのインで見た時、直接に彼れに質して見れば好かつたと不圖考へて、思ひ直せば、何の事、それは平生我が空想から造り上げてゐる夢に過ぎなかつたのである。

ホテルへ歸る途々も、娘は、かの舟の事が心にかゝると見えて、月の冴えた夜、自分等も、エヴン川に露降ちるまで葦を分けて、シェークスピーアの歌の本でも讀んで興をふかして見たいと繰り返して言つた。けれども今は生憎月が無い。明日は早や三人ともに此の地を去らねばならぬ。我れも月のエヴンの舟遊びは期してゐたのであるが、此の度は斷念して了つた。明月の一夜を、露が骨身に冷え徹るまで此の流れに上下して、或時は牧場の岸に舟を寄せ、或時は寺に沿うて木蔭にしばし纜をかける。耳を澄ませば彼方の牧場には銀絃を彈くやうな蟲の聲、寺を周つてさゝやくものは、楡や菩提樹の葉に戯れる風。あゝ此の時、願はくは舟に樂手の乙女あれかし。樂器はヴイオリン、曲は戀、泣かずには已みがたい興趣であらう。

而して東海の一後進が捧ぐる愛慕の歌に、詩人の夢も涼しめられよう。

十

オックスフォードのアイシス川の月も美しい、來て見られよ、といへば、さらばバーミン

ガムよりロンドンへの途すがら必ず立ち寄ります。彼處で月の思ひは果させ給へと、言葉をつがへて、夕食の後、急に親子はバーミンガムへと出立した。我れも翌日は見殘したものを見て、此の靈地を辭した。

* * * * *

越えて數日、一封の書狀によれば、彼の老紳士と娘とは、遂にオックスフォードへは立寄る機會がなくなつた、殘念との事である。そしてスツラツフォード、オン、エヴンの一日の記念は永く消えざるべしと書いて、末に當日讀んだソンネッツの一節が抄してある。

When to the sessions of sweet silent thought
I summon up remembrance of things past,
I sigh the lack of many a thing I sought,
And with old woes new wail my dear time's waste:
....
....
But if the while I think on th e, dear friend,
All losses are restored and sorrows end.

歌はおもしろいが、思ひ出は淋しい。噫「我れは記憶か、藝術は悦びか。」（明治三十九年四月）

四十歲

二十歲が所有してゐるすべては Love である。三十歲にはまだ其の色香は殘つてゐる。併し肉の方がまじつて來る。最も花やかなのは巧名の心である。

四十歲にはもう Love は無い。たゞ其の追憶がある、羨望がある、悔恨がある。巧名の心にも、最早空想の花は咲かない。不安の影がさす。

Love と Ambition の殘軀！ 四十歲のすべてには臆病な打算の心が息をしてゐる。

四十歲に至つて、無邪氣を暗示する顏の筋肉が全く隱れて了ふ。表情の何處かにふて〲しい、物凄い線が浮び出て來る。呪ふべき四十歲よ。

（『題言』より）

チューゼ及サラ・ベルナールのマグダ

ズーダマンみづからも、チューゼのマグダを見なかつたら、自分がどんな風に書いたのだか知らなかつたかも知れない　チューゼのマグダを見たら、前に見たサラ・ベルナールのは記憶から消え失せて了つた。もつとも貴婦人訪問の場と初めて牧師と話して大笑する場とはサラの方がよかつた。

今一つ印象を殘してゐるのは、ケラーを戸外へ逐ひ出さうとする場で、齒を喰ひしばり虎のやうな唸り聲をする得意の藝である。併しチューゼはそれに比べて如何に單純に、如何にいき〲と、如何に意味深く、あの言ふべからざる侮蔑心の閃きを唯一句に現はし得たことよ。此の第三幕の終りに於ける時ほど英國の見物が魂を奪はれて了つた例は嘗て見たことがない。

（『題言』より）

奈良より

第一信

奈良に來て二日目の十一月六日、その暖かさはシャツや外套の冬支度が恥かしいやうである、黄いろい光りに包まれた南部の秋を、自分はこれから何う受取るであらうか。

　正倉院寶物の曝涼はこの十日頃までだといふ。もつとも之れは平民には見られないものである。それを無位無官の自分等が拜觀させて貰ひたいといふのだから、むづかしいのは當然である。けれども自分の專門學は美術に關したものでもあるし一方には例の文藝委員會などいふものもあるのだから、何とかしたら見られまいものでもない。そこで早速文部省へも御助勢を賴んで、願書を出して見た。そして奈良へ來てその返事を待つてゐると、やつぱりいけないといふ。少々氣ぬけの氣味である。日本といふ國では、雲上からさす直接の光榮はとこしなへに、平民の上を照さない仕掛に出來てゐる。しかたがない。行つて春日野の鹿に餌でも買つてやつて、羨かしさうな眼をする額でも撫でてやらう。

　と思つてゐるうちに天氣模樣が變りかけて來た。少くも四五日はゆつくりと此の土地に親しんで見ようと思つたのが、何だか荒んだ氣持になつて來る。今の自分には、一つところに長く留つてゐられるかどうかも問題である。二三日したら京都邊へでも行かう。或は二十年ぶりに故鄕の石州へでも這入つて見ようか。體がちつとしてゐれば頭が働く。西へ東へと休むひまのないほど漂泊してゐたら却つて心がやすまるかも知れない。受働的でしかも痛烈な刺戟を絕えず神經に受けてゐたい。それには奈良はあまりに穩和である、鈍角である。懷古の情味それみづから、自分には昔ほどの濃やかな心持を齎さない。十年以前、はじめて一度この地を訪うた時は、あの猿澤の池の邊まで來ると、何とは知らず感謝の涙が眼頭ににじんだのをおぼえてゐる。自分の心が荒んだのか、あの時のナイーヴな情味を今いちど呼び返すことが出來るだらうか。少くともこゝ二三日は此の土地に居て見よう。十時、この原稿をポストに入れながら、雨の覺悟をして出かける。

第二信

　自分は奈良の焦點を嫩草山に置いて見る。此の山の氣分が奈良のシムボルである。此の土地で最も氣に入つたものは此の山である。

　二月堂、三月堂の邊に小半日を過して、春日神社の方へ拔けようとすると、すぐ左手に明るく眼をあいたやうな嫩草山が坐つてゐる。右は春日山、左は手向山、いづれも鬱蒼とした中に燃えるやうな紅葉の錦をかけてゐる。其のあひだに挾まつて、此の山一つが肌を脫いだやうに柔かである。山といふよりも丘である。かけ上ればすぐ頂に達せられさうに見える。圓みを持つた輪郭をのび〳〵と西南にひろげて、其の裾が自分の今通つてゐる道である。曇つてゐた空がちやうど此のころから晴れて來て、小春日の暖い日光が一面に此の山に流れかゝつてゐる。中腹に殊さらしく松の大木が三四本立つてゐる外、立木といふものは一本もない。秋草の黃いろに枯れたのが、しなやかな毛織物のやうに全山を蔽うてゐる。その勾配のなだらか

な、廣々とした裾野には鹿が遊んでゐる、掛茶屋がある、白い手拭を姉さまかぶりにして手甲をかけた草の根掻の女がゐる。時たまに茶屋の女が客を呼ぶ聲の外物音一つも聞えない。掛茶屋に腰をおろしてうつとりしてゐると、いつの間にか、うつら〳〵と眠くなるやうな氣分である。鹿は雌鹿が多い。草の上に腹這つてゐるのは、大抵顔を日の方へ向け、まぶしさうに眼を細めて、口をもぐ〳〵させてゐる。立つてゐるのは其の涙ぐんだ大きな黒い柔和な眼をぢつとさせて、物を考へるでもなく考へぬでもない様子をしてゐる。或は絶えず何物にか驚いてゐるやうにも見える。人が行くと逃げるでも逃げないでもないといふ態度で寄つて來る。一皿二錢の餌を一つ〳〵つまんで口に含ませてやると、しまひにはみんな懷いて來る。前の一疋にやつてゐると、右の奴は外套の袖を喰へて引つぱる。後の奴は裾を喰へて引つぱる、自分等にも呉れといふ催促である。兒鹿は遠慮して離れてゐる。雄鹿も其のいかめしい角の手前、すまして後の方にゐる。やはり人なつこいのは雌鹿である。と思つてゐると、あとの方にゐた一疋の雄鹿が自分等の方へ餌の廻つて來ないのを憤つたと見えて　其の角の生際の邊を振り立て、傍にゐた雌鹿の横腹をどんと突き倒した。今まで靜であつた一群が忽ち動搖しはじめる。併し騒ぎはそれだけで、また元の平和に戻つてしまつたが、穩な彼等の世界にも、波瀾はあるのである。

茶屋の女が出した木熟しの柿の甘いのを一つ二つ剝いて食ふ。鹿が前へ來てしきりにお辭儀をしてゐる。皮やへたを投げてやると、みな喰つて了ふ。

山は一面に黄色な芝草を地として、卓でてゐる草に薄がある、草萩がある。薄は小柄のやさしいのが、紅の細々とした莖に白光りのする輕やかな穗を出して、かすかな風に搖れて見せる。草萩も花はもう無いが、折り取つて見ると小鳥の脚のやうに赤い水々した莖に生氣を充實させて、花の後の秋の荒みと戰つてゐるのが無殘である。

しばらく、草の上に坐つて此の山と親しんで見る。秋の嫩草山を人化したら、二十五六の美女の尼が、黄絹の袈裟ころもを着て端坐した心持である。

第三信

二月堂と三月堂とは手向山のすぐ下に隣して立つてゐるが、奈良の古堂塔の中で最も境地のすぐれてゐるのは此の邊である。興福寺の五重塔は、偉觀には相違ないが人家に接しすぎてゐる。東大寺金堂の大佛殿は大きいは大きいが、唯の寺構である。ひとり二月堂三月堂四月堂等の一群が、かけ離れて周圍との調和に特殊の意味を現はしてゐる。中でも三月堂が其の意味の中心を代表してゐる。眞に千年以上の古堂院に接するときの畏れと靜寂と神秘とは、此の建物の前に立つた時に感ぜられる。

三月堂は千一二百年前の造營にかゝり、奈良最古の建物であるといふ。之に隣つて、半ば山に據り雄大の構をなしてゐるのは二月堂である。二月堂と三月堂とは榮と寂、生と死の對照である。而してこの古都に古寺院を觀んとする自分等に取つては、現在の榮と生との如何に殺風景にして、寂と死との如何に高貴なることよ。二月堂の觀音は今も諸人の信仰厚く、石段の兩側に立ち並んだ夜燈の寄進者は多く藝妓である。本堂で御みくじも出ればお札も出る。堂めぐりのお百度も踏む。お水取りの儀式もある。要するに眼をあいて生きて繁昌してゐるのが二月堂である。

三月堂は其の傍の平地に立つた儘千年の戸

はすべて鎖されて、寂然として永久の眠りに入つてゐる。奈良へ來て觀る寺は、斯うでなくてはならないと思ふ。松、杉、檜の巨木に色々の紅葉を綾どつた背景や翼景に圍まれて白く打ち開いた寺地には、折しも薄れ日がさして、一面の落松葉にかすかな香ひがある。屋根瓦の苔、金物の銹、柱の朱の剝げの淋しさ、軒裏の胡粉は後朝に殘る女の頸白粉のやう。木材の朽ち黑み細つた木地の荒れ。薄暗い光りの落ち込む堂內には、大香爐の上に積る埃が冷たさうである。そこを離れて石段に腰をかけ目をつぶつてゐると寂寞の氣が人を襲うて來る。二月堂との間に落ちる水の音も次第に消えて行き、刹那の寂寞の中からは全く別な世界がひろがつて來る。千餘年の昔こんな大建築のプランを細かい一線一畫の末までも頭の中に描いた、其人の頭と今の吾々の頭との働き工合など比べて考へて見る。斯うした茫然としてゐる十餘分間は貴い時間であつた。其內後の山で、手斧を擔いだ男と商人風の男とが、大きな立木を距てて調子はづれの聲で、「五十錢や。三貫にしなはれ。飽かん。買ほか」といふやうな會話をはじめた。其の響が木だまを返してゐる。

第四信

奈良ももう見飽きたやうである。大佛の前は何度通つたか知れないが、昨日まで這入つて見る氣になれなかつた。あの境內は門の前から見るのが一番いゝ、本堂の前に來て見るのが其次にいゝ、中へ這入つて見るのが一番つまらない。それもたつた一人、陰影のやうな堂內の空氣の中で、あの時代の巨大趣味と妄想趣味との結合した怪物とも見るべき此の巨像のまはりを徘徊してゐたら、そこに特殊の心持も味へるであらうが、今は修繕中である。掛橋を上つて行つて、雜沓の中を正面から拜んで來たのでは愈々つまらぬ。此のほか塔にはたしかに面白いのがある。佛寺の塔はちやうどヨーロッパ中世のゴシック寺院の尖塔と同じく、人間が天に向つて高まらんとする心を現はしてゐる。古佛寺の一面の趣味たる靜寂、死滅に對しては、むしろそれを裏切り若しくはそれ以上を示してゐる氣味がある。之れに對して奈良最古の建築の一と言はれる唐招提寺金堂の全景のプポーションは何といふ靜寂であらう。多くの寺院の屋根の如くむやみと上に向つて延びないでしつとりと下に落ちついて、心安らかに棟を横たへ、軒を伸べた感じは、靜止そのものである、安定そのものである、クラシカルヂヰグニチーそのものである。たゞ修繕したらしい瓦の色の生々しいのが僅に趣味の調和を破つてゐる。

唐招提寺と一緒に見たうちには、業平、菅家、横笛などのローマンスに富んだ舊蹟もあつたが、舊都大極殿の跡が一番心を惹いた。高田學長も來合はされ、久しく土地に在る岡本社長、高田教諭などが同道して案內して吳れられる。お蔭で地理的變遷などもよく分つた。昔の宮城から眞正面、朱雀大路を下つた邊は、今の奈良の町から外れてゐたといふ。大極殿を中心にした宮城址は一面に打ち開いた田の中に點在してゐる。一二尺も土の盛り上つたまゝに、芝草、小笹、其の他の雜草の茂みが枯れ殘つて、野菊、提灯草などの黃や紫やの小さな花が秋の日を受け、つゝましやかに咲いてゐる。諸方の門や廻廊やの跡は小さな土饅頭に過ぎないが、大極殿跡は廣い長方形の土臺である。その上に立つて、底寒い秋の風に吹かれながら昔の事を想像して見ると、型の通りの懷古の情が起る。奈良朝式の風俗をした大宮人の洒落者等が、リファインされた綺麗な顏立の中に、どこか悧發と隱忍の影を藏して併しまだ平安の子

女程には神經が細らないで、そこらをぶら〳〵してゐたらうと思はれる。そこが今はもう田の稲も大かた刈取られて、秋もさん〴〵に老けたといふ風情である。土地の言ひ傳へによると、古來此の地點に鍬を入れると乾度疫病にかゝるといふので、周圍は殘らず田になつて以來千年であるに拘らず、此の地點だけ農夫の破壞力から遁れて保存せられたといふ。よくある例であるが、ちやうど蟲類が毒粉やそれに連想するやうな色を身につけて、自己保存をやるのと似た自然の保存法である。此等の地域が迷信の宗教的威力を借りて自己の逆保護色としたのである。少くとも十九世紀以前の歴史にあつては、文明の最も永久な保存者は宗教力であつた例が、此地盤の上にまで見られるのである。けれどもマッスの中にすら斯うした宗教的威力の漸く消えて行く今後は、何が最も強い永久力になるのであらうか。

斯んな事を書き出しては果しがない。奈良の事はこゝに止めて、少しく遠出をして見る。

第五信

今日は畝傍、多武峯、三輪、長谷寺を見るために同じく高田中長と岡本氏と三人で出かけ、時間の都合で三輪だけを省いて、順に初瀬の長谷寺まで來た時は、薄暮である。長い〳〵廻廊形の屋根で蔽うた急勾配の石段を登つて行くと、泊瀬山の山腹に據つた本堂及び舞臺の構へがまづ觀音だといふ輪郭を與へる。元來數ある御佛のうちでは、觀音が最も凡夫に親しい佛である。從つてまた最も繁榮するのも觀音である。俗といへば俗だが、そこに人情の味の豐な所がうれしい。迷信も願がけも、誠でさへあれば默つて聽いて下さる、温い血の通つた佛といふ感じがする。その觀音の寺院では、淺草の淺草寺や信州の善光寺のやうに雜沓の巷に降りて來てゐるのと、京都の清水やこの長谷寺のやうな、山の中腹に舞臺を構へたのと二通りあるやうである。そして同じく山に臨んで舞臺を構へた中では、清水は華手で長谷寺はぢみである。ぢみなだけに大和の山中に立つた觀音堂として、蒼古なところがよく纏つた氣分を持つてゐる。舞臺の上から見おろすと、下の谷合からかけて初瀬の旅籠屋町の屋根はもう夕暮の靄で黑ずんでゐるが、左右に迫つた山の側面は、今が紅葉の眞盛りである　峯を越して僅に殘つてゐた夕日が、見てゐるうちに消えて行く。欄干によつてしばらく無言のまゝに見送つてゐたものが、溜息をして向き直ると、本堂の暗い中にはもう燈明が上つてゐる。本尊を拜した後こゝの管長某氏は早稲田の校友であるといふので、名刺を殘して山を下つた。長谷寺と清水とは、恐らく此の式の觀音の雙璧であらう。それを寫したといふ鎌倉の長谷と上野の清水とのおもちや式たるは言ふまでもない。

長谷寺へ行く前に廻つたのが多武峯の談山神社である。之れは關西の日光だと謂ふ。日光ほどの華麗豐富は無いが、徳川氏の廟社に對する藤原氏の廟社といふ比較の興味がある。高山の奥にこれ程の壯麗な殿社を構へたのは、關西第一の名に背かないものであらう。日光ほど燦爛としてはゐないが、其の代り何處か上品な貴族的な落つきを見せてゐる。所謂檜皮葺の厚い屋根が十三重に疉つてゐる角度と直線の調和が特殊の印象をおしつける。之れが我が邦に於ける此の種の塔の魁であるといふ。また此の社の奥に鎌足の墓があつて、事變のあるたびに破裂するといふので、御破裂山といふ、珍しい名前である。社殿までの山道、兩側すべて二三百年を經た大杉や大檜の立派なのが日も透さないほどに競ひ立つて、此の神社の威嚴を守つてゐる。兎も

角も日本の文明に第一回の澤布巾をかけて之れを美しいものにして興れた藤原氏の祖先が、斯うして靜に此の山の奧に鎭まつてゐるのだと思へば、感謝の念が湧かぬでもない。西洋ではマースよりもヴヰーナスの力で政權を張つたのが一頃のオーストリアだといふが、日本では藤原氏がちやうどそれである、當時の美人は凡て藤原氏の出であつたのだから堪らない、といふやうな高田學長の話を聞きながら山を出た。

第六信

畝傍の神武陵及び橿原神宮は、歷史の上から言へば名所舊蹟の中でも日本第一に位すべきものであるが、其の割には道路等の設備も、所在地の構へも行屆いてゐない。あらゆる意味に於いてもつと壯大であつてよい譯だ　日本に於ける神話と歷史との分劃線はこゝである。古代にあつては、交通といふことよりも、先づ其の反對に阻隔的な地形が自家を衞るに便宜と考へられたであらう。從つて外との交通路となるべき海港などといふ觀念は國都を選ぶ上にさしたる要素とはならなかつた。寧ろ自然の大城壁を周らしたやうな山脈が三方を取り圍んで、一方に打ち開いた口がある、其の口は成るべく南面して日光の豐な所であつて欲しい。斯やうな條件に合ふものとして大和の山間の平地はおのづから古代の人の好みに適したらうと察せられる。勿論この好みたゞ一つが定都の條件であつたか否かは別問題であるが、少くとも之れが上代人の居都をトするサイコロジーに最も重大な一作用をなしてゐたことは想像せられる。而して此の好みの最も完全に大規模に現はれたのが大和では奈良の平野、山城では平安の平野であつた。彼等が先づ奈良に明白に其最大理想的居城を認めるまでは、其附近の山間に、其時代の程度に應じて比較的小規模の平野を見つけ、そこを彼れから是と移つてゐた。其最初のものが卽ち神武帝の畝傍附近である。

今の畝傍驛から橿原の帝都跡までは車を走らせる。途に飛鳥川を淺る。淵瀨常無しと詠ぜられた此の川も、此の邊は川幅二間にも足りない溝のやうな川である。細砂の川牀で、少しばかりの水が白ちやけてゐて、一向に歌の譬に引かれさうにもない。それよりも此の邊の興味はやはり畝傍山を中心にした地勢の上にある。見わたすと遙に生駒、金剛、葛城の諸山脈が、一瞬間もぢつとして居ないやうな其の不安不規則の輪郭に高く青空を限つてゐる。其の中の平野の一帶にすぐ手近の畝傍、耳成、天香山の三山が鼎立して、さも人間と親しみ易い樣子をしてゐる。吾等の祖先が何ゆゑに山と特別な親しみを持つてゐたかは別として、彼等は朝夕此の愛らしい小山や彼の天空を限つて近づき難い大山脈やを仰ぎ見、めぐり見して、人間と自然との間に一路の感應を通じてゐたに違ひない。今日我々の硬ばつた精神や感覺には、自然は多く死んだ外形の面が觸れて來る。併し古代人の新鮮な精神や感覺には自然の生きた方面が一層赤裸々に感觸せられたであらう。神話時代に近づくに從つて、山川も段々生物に近よつて來る。神話時代の人間には、山にも川にも靈があつて、彼等と相互に感應し行動するのが常である。我々の祖先と此の邊の山ともまた其の通りであつた。其の神話の遺物の最も著しいのが三山である。

畝傍と耳成と天香山とは其の小さい愛くるしい山で、且つ箇々平野の中に孤立してゐる點が、いかにも人間に親しみ易いと共に、其山の意義は決して莊嚴とか强大とか神祕とかいふものでなく、優美な可憐な平明單純なものである。であるから此二山が神話に這入つて、彼の「耳成と女を爭つた傳說となつた。すべて神

話には多く人間以上の超越力が要素となるものであるが、三山の女爭ひの如きはむしろ人間的である、神話としては極めて平明單純な可憐な神話である、優しい神話、特色のある神話である。此點が面白いと思ふ。殊に三山の女爭ひといへば、直に近世の文藝の世界を想はせる。近代の社會悲劇の最好題目は所謂三角關係である。之をマーテルリンクで言へば、女一人に男二人の關係から生ずる『ペレアスとメリサンド』の悲劇か、さもなければ男一人に女二人の關係から生ずる『アグラヴェーンとセリセット』の悲劇かである。啻に近代のみでなく、昔に溯つても、最も痛切な人間の悲劇は常に此三角關係から生ずる。『寂しき人々』『アンナ・カレニナ』から、『小春治兵衞』『パオロとフランチェスカ』に至るまで皆三角文藝で、而も已みがたい人生悲劇の根柢に突入つたものである。玆まで來れば人生はたゞ涙と嘆息の外はない。此の見地から見た三角文藝の端緒がこの三山の神話にまで溯つてゐるのである。三山の三角關係は大樣な古代の神話であるから喜劇的趣味であるが、其の同じ流れが文明の變化に従つて後世の三角悲劇(時としては三角喜劇)を成すに外ならない。此の意味から見て、三山はなつかしい山である。

こんな事を考へながら畝傍山の麓まで來ると、流石に此の山は三山の中でも最も威容に富んでゐる。東北(?)から見ればやゝ笠を伏せたやうな形になる、其の下が神武帝の御陵である。西南側は脚の開いた机を傾けて据ゑた形で、其下に橿原の宮がある。畝傍山には若い赤松などが茂つてゐて、要するに美しい山である。昔はどんな木が茂つてゐたか知らないが、此の山を目標にして神武帝が其の宮城地をトし給うたのは所以あることであらう。耳成山は小さく端麗である。天香山の形にはそれ程の特色が無いやうである。

『奈良より』の紀行はこゝに止めて、題をかへて其の後の事どもを書きつける。

故梁川君の柩に捧ぐる辭

謹みて綱島榮一郎君の靈に告ぐ。君が生前の知友等玆に相會して、君の亡軀を送らんとす。生等同人また柩に侍して君の傍にあり、しばらく最後の別れを惜しましめ給へ。

此の日たま／＼淅瀝の雨そゝいで止まず、死に行く人を思ふの淋しさ、そゞろに切なるを覺ゆ。

理情矛盾の間に齷齪たるの生等は、今に於いて、君が晩年の安立を羨む。君が世に遺せし感想に對しては、長へに批議するものと讃美するものとを絶たざるべし。君の精神は斯くの如くして不滅なるを得ん。

君はまた十年病蓐にありて、慈母の愛、舊師の恩、弟妹の情味をつぶさに嘗めたり。三十六年の短生涯も、君に於いて遺憾なかるべし。

君の友人等は、君が遺業を集めて、散逸せしめざるべしと信ず。

君の弟妹みな君と孝慈の質を同じくせらる。加ふるに一世の君が死を悼むこと肉身の如きもの多し。君の身後は憂ふるに足らざるべし。

生等こゝに君と永久の別れを惜しむ。是れより更に君の遺骸を送りて、大地に還さんとす。幽明世を隔つるの人、こひねがはくは安らかに眠り給へ。

清盛と佛御前

序言

此『清盛と佛御前』は數年前單に『清盛』と題して本誌(『早稻田文學』)に掲げたものを、一昨年一度其の第二幕だけ改作して本誌に再掲し今回いよ〱藝術座大正五年度の春季興行に上演する目的で改めて第一幕第二幕とも殆ど面目を一變するまでに作り直したのである、此たびは第一回を一月二十四日より大阪中座、京都南座、神戸聚樂館で開演し三月二十六日より東京帝國劇場で開演することになつてゐる、其の役割は、

佛　御　前(二十四五歳)松井須磨子
清　盛(六十歳位)澤田正二郎
宗　盛(三十四五歳)中井　哲
叡山の法師順念(五十歳位)宮　島
同　西念(三十歳位)小川　洛陽
安部資成(三十歳位)中田　正造
大夫判官季貞(二十七八歳)宮城　千之
侍　士(二十二三歳)花田　幸彥
妓王御前(二十二三歳)三好　榮子
侍　女　澤井　嘉枝
侍　女　礒野不二子

尚、此の劇の舞臺面、衣裳道具其の他詳細のことは、大正二年五月植竹書院發行、『影と影』と題する私の著作集に收めた初作による、

大正五年二月

人物

平　清盛　(六十二歳)
前右大將宗盛　(三十四歳)
佛　(二十歳)
妓王　(二十二歳)
安部資成
大夫判官季貞
叡山の法師二人
侍士二三人
侍女二三人

場所

京都、西八條、清盛の邸

時

治承四年三月十六日、午後より夜に及ぶ

第一幕

上手半面、横ざまに一段高く寢殿の一部を現はす、室内の調度は、すべて平安朝の優麗高貴な好み、正面の半を白地薄模樣の襖で仕切り、其の奧には、遙か離れて上手から下手へ打ちわたした細殿が廂緣ごしに見える、下手から奧へかけて中庭の景、庭の中央に櫻の大木二三株、花が丁度眞盛りである、遲い午後の光線が、おつとりとした暖い色にあたりを包んでゐる、

素絹奴袴で脇息に倚つた清盛を上座にして、一方は薄紅梅の小打着に袴の妓王、及び侍女、法師、一方は侍女、資成、季貞、侍士

等宴席の體に居並ぶ、銚子高坏の外、妓王の前に箏を置き、琵琶、笛　鼓等管絃の樂器をそれ〴〵資成、季貞、侍女、侍士等に割りあて、暫時管絃樂の中に、靜かに幕を揚げる、やがて奏樂止むと、

清盛　やあ、御苦勞々々、御坊は鼓も上手と聞いたが、なか〳〵管絃のたしなみが深いと見える、

法師甲　お恥かしい手すさびでございます、もつとも此のごろ叡山の法師仲間には琵琶や鼓を弄ぶことが流行でござります、

清盛　結構ぢや、私も管絃の遊びはすきぢやが、併し御坊、管絃が面白いといふのは、あれはみんな聞く人の心がらぢやなう、自分の身がおもしろければ、聞く音樂もおもしろい、自分の身が悲しければ、聞く音樂も悲しい、此の世は天晴淨海が世ぢやと思ふと、其の心をしらべて呉れるから管絃の音までが浮立つて面白く聞かれる、御坊などは、いつも菩薩や天女と往來して居るから自然と管絃の音が極樂淨土の音樂に聞えるであらうな、

法師乙　はゝ、はゝ、それ程でもござりませぬ、斯うして三法に身を捧げては居りまするが、やはり肉身の息は通うて居ります、極樂淨土の音樂よりも、此の世の女菩薩方の爪音の方が眞身にこたへて有りがたいと思ふ時もござります、

清盛　はゝ、はゝ、御坊も腥坊主の方ぢやな、

法師乙　是れは恐れ入りました、入道さまのお仕込で段々人臭い息が通うてまゐります、しかし入道さま、當節の法師づれは、昔と違ひまして、みな元氣ものばかりでござります、口でこそやれ淨土ぢや穢土ぢや極樂ぢやと申しますが、内心では未來の淨土よりも、此の世の穢土の方が大すきな手合ばかりでござります、殊にかうして美しい女菩薩方のお酌で一こん頂いて、よい心持になつてまゐると、なか〳〵此の世の執着は斷たれませぬな、あゝ、世は末になりました、末世王法なげかはしい次第でござりますな、

清盛　やあ、御坊は大分まゐつたやうぢやな、

法師甲　此の者は酩酊いたしますと無作法な事ばかり申して恐れ入ります、あまり長座をいたして、無禮をはたらいてはなりませぬから私どもはこのまゝ御免を蒙りたうござります、

法師乙　これ朋輩、そのやうな事は言はぬものぢや、たとひ酩酊いたさうがいたすまいが、この順念、思うたことは屹度言ふ、今時の法師どもは、あれはみんな大盜人ぢやが、

法師甲　これ〳〵順念、何をお言ひなさる、そのやうなたはけた事を言ふものではない、殊にこゝは入道樣の御前ではないか、氣をおつけなさい、

法師乙　御身こそ何をお言ひなさる、此の順念決してたはけた事は申さぬ、山法師どもが近年の騷ぎは何ぢや、何かと言へば、やれ法皇さまへお味方をする、いや上皇さまへお味方をすると、山の輿を擔ぎ廻つて暴れ散らす、つまりは俗人原の喧嘩口論、切取强盜と何が違ひますか、荒法師どもが法衣の袖をまくツて戰をする、殺生戒も女犯戒もあつたものかい、此の順念はまだ殺生戒は犯さぬ、

清盛　女犯戒はどうぢや、女子をあやめた覺えはないかな、

法師乙　いやあ入道さま、之はきつい事を仰せられます、此の順念五十になりまするが、いまだ曾て女子に手をかけた事はござりませぬ、たゞ斯う遠くから女菩薩たちの御來迎を拜んで居ればそれで結構なのでござります、

法師甲　さあ〳〵、もうよいからお暇を申し上げなさい、立ちませう〳〵、

法師乙　まだ言ひ居るか、入道さまからの許しの出ぬ内に立つのは無禮ぢや、これからお山へ歸つたら、またあのやかましい騷ぎの仲間入をせねばなるまいがな、もう當分お山へは歸るまいよ、

清盛　叡山の騷ぎといふのは何ぢや、

法師甲　いえ、なに、些細な事でござります、

法師乙　些細でもあるまいぞ、入道樣、それは斯うでござります、

法師甲　これ〳〵お止めなさい、あのやうな内輪事を申し上げて、折角の御酒興を殺いではなりませぬ、

法師乙　いや、内輪事ではない、入道樣、實はこのたび嚴島へのお行幸につきましてな、山のものどもに不服がござりまして、

清盛　その事なら、私が疾くに叱つて置いたから、もう騷ぐことは無い筈ぢや、

法師甲　さやうでござります、入道樣のお聲がかりでもう鎭まつた跡ぢや、順念は何をお言ひなさる、

法師乙　いゝや、まだ鎭まりませぬ、尊公はさうした僞りを言ふからいけぬ、成程上部は一旦鎭まりましたが、まことの不服はまだなかなか治まりませず、より〳〵不穩の事などを言ひ觸らす倂が多うござります、拙僧それがうるさうて、斯うしてお山にも居りませぬやうな次第で、なに、尊公とても同じ思惑ぢやといふではないか、何も入道樣の前ぢやからと言うて、取りつくろうて譃をいふことはない、譃をいふことはない、

法師甲　併し其の騷ぎは打すてて置けば自然と治まります、一旦入道樣のお聲がかりで、鎭まつたものを内輪の不服など申上げるのは、入道樣の御威光に傷をつけるといふものぢや、さあ〳〵其の話はもうお止めなさい、

清盛　いや、分つた〳〵、その事なら今一度私が叱つてやる、さうしたら皆も落ち付くであらう、さあ、今一めぐり酒を流行らせい、

（侍女、酒をついで廻る、清盛、立つ、妓王をつれて來る）

妓王、そちも何か歌はぬか、そちはいつも便りなささうに默つて沈んでゐる女子ぢやな、そちは今に尼法師にでもなるのぢやらう、

妓王　でも、上樣にも、此の節は管絃を聞いてお慰ぎ遊ばすことがございます、私はあれが氣がかりでなりませぬ、

清盛　ふむ、そちもそれに心づいたか、私もな、此の頃は時々氣が弱くなつてな……ま、やめい〳〵、今の私が身の上に鬱ぎの種はない筈ぢや、いま日本の天下は私が威光で光つて居る、なら妓王、そちとても、私が寵愛してやればこそ、それ程美しく見えるのであらうが、

法師乙　順念はもう酩酊いたしました、こゝらでちよつと御免を蒙りまして。（座をすべつて縁端に出で、柱によりかゝつて、うつらうつらとして居る）

妓王　それは上樣の御威でございますもの、その前に出ましたら、どんな者でも消押されて了ひます、それでも妓王には、また妓王のよい所が……幾らかあるとは思し召しませぬか、ほゝ、上樣、如何でございますか、

清盛　いや、さうでない〳〵、私の物ぢやと思ふから、それで美しいのぢや、さう思ふと、咲き盛つたあの櫻よりも、暖いその肌の色が遙に美しいぞ、もつとも、よい女子だけは、他のものぢやと思ふと尙よく見えることがある、えゝ？　妓王なども、若い仇し男を見て、さうした心を起すことがあらうな、

妓王　私は、たゞもう上樣の大きな光に包ま

れて、外のものは何も目に這入りませぬ、斯うしてぢつとお惠みに身を任せて居りますれば、此の上欲しいと思ふ願ひは一つも起りませぬ、たゞ此のやうな、身に餘る榮華がいつまで續きますかと、それが氣がかりでございます、

清盛　そちはいつも心許なさうな奴ぢやな、ちやうどあの花のやうな奴ぢや、見事は見事ぢやが、今にも散りさうで手が離されぬ、私までが、どうかすると釣り込まれて一緒に心許ない思ひをする、さうかと思ふと、時々はもう、そちが側にゐても私には何の手ごたへもない心地がする、そちのゐることを忘れて了ふことがある、

妓王　さうして私は、段々と上樣に棄てられて行くのでございませう、心許なうございます、

清盛　はゝ、はゝ、今私が言うたのは、そちを疎略にするといふのではない、そちがあんまり弱いからぢや、もつと强うなれ、强うなれ、さ、もつと近う寄つて一つ飮め、私はな、そち達のやうに、ちよつとすると、もう直ぐ此の世の事にあきらめをつけて、此の上望みは無いなどと、ちゞこまつて了ふことは嫌ひぢや、そち達も私の側にさへ居れば、少しも氣づかふ事はない、平家の運勢は千萬年ぢや、なう資成、

資成　あの櫻を見るにつけましても、誠に世は平家の天下でござります、

法師乙　併しあの櫻は、今が眞つ盛りと見えますから、やがてもう、散るかも知れませぬ、

資成　（目で制しながら）これ〳〵、何で其のやうな不祥な事をおつしやる、寢ぼけてでもおいでなさるか、

法師乙　いや、御當家の御代はさうではござりますまいと申すので、

清盛　なう御坊たち、考へても見い、保元平治このかた、此の入道は隨分身を棄てて上へ奉公をして居る、さればこそ、跡の月には新御門もいよ〳〵御卽位で、當家は准三后の宣旨を蒙つた、鹿ケ谷の一類、法皇の御謀叛でさへ此の淨海には敵はぬでないか、法皇さまの鳥羽におはすのを、世間は何かと言ふさうぢや、淨海の身にもなつて見て吳れい、あれほど長いお馴染でありながら、つまらぬ奴等の口車に乘つて、當家を亡さうとされる、それもお上へなら、此の淨海が首一つ差上げて、少しも惜しいとは思はぬが、お上といふのは上部のこと、裏には當家の繁昌を嫉む輩が牙を磨いて待つて居る、當家が亡びればそれらのものの天下になるのぢや、なう御坊、それでも私は負けて居らねばならぬぢやらうか、

法師甲　御もつともと存じます、たゞ天下を味方になされて、佛法王法の憎しみをお受けなされぬ御用心が（此の時法師乙、緣端に香を立てて眠りこける）肝要と存じます、

清盛　やめい〳〵、この淨海が生きて居る限りは、日本國中、當家に指を差すものは一人も居らぬ、

（此の時取次の侍士出で來る）

取次　先程から白拍子の佛と申すものがお車寄に參つて居りますが、是非一度お上へお目通りが願ひたいと申し張つて、何と叱つても歸りませぬ、いかゞいたしませうか、

季貞　これ〳〵、御前へさやうな推參な事を申し上げるとは何うしたものぢや、それは屹度狂人であらうから、早く引き出すがよい、

侍士　（立ちかゝる）私共が參つて引立てませう、

取次　いや、引立てますのなら、世話はございませぬ、私共が引立てますから、どうか其

のまゝにおいで下さい、

妓王　まあ、待つて下さい、上様、あの、佛と申しますのは、此の頃洛中に名高い舞の名人でございませう、上様のお氣晴しに、どうかお呼び入れ下さいませ、それに白拍子と申せば、私とても元は同じ身の上でございます、折角尋ねて參つたものを、すげなくお歸しなさるのが本意でもございますまい、呼び入れておやりなさいませ、

清盛　いや、ならぬ〳〵、そちが居る西八條へ、何うしてさやうなものが推しかけて參つたか、不埒ぢや、神と言はうが佛と言はうが、妓王の居る所へ足踏みもかなはぬと、早くさう言へ、

妓王　いえ〳〵、私への義理をお立て下さるのは嬉しうございますが、お願ひでございます、どうか呼んでやつて下さいませ、佛御前とやらを、私も見たうございます、

清盛　はゝ、遠慮をするな、そちに義理を立てるのではない、私がそちより外の女子は見たうないからぢや、追ひ返せ〳〵、

取次　はツ、（立つて行く）

妓王　女子の身を追ひ立てて、恥をおかゝせなさるのはむごうございます、召し返して、せめて御對面ばかりでもしてやつて下さいませ、妓王がゐて歸したと申されては、私の女子が立ちませぬ、資成どの、どうぞ止めて下さいませ、

資成　ごもつともではございますが……（立ちかけてもぢ〳〵する）

清盛　よし〳〵、それ程に言ふなら呼び返してやれ、資成、行つて連れて來い、

資成　かしこまりました、（急ぎ足に出で行く）

（一座動搖する）

清盛　さあ、妓王、もつと近う寄れ、斯う並んでゐて佛とやらを見てやらう、どのやうな女子であらうな、（妓王の手を取る）

妓王　でも上様、佛御前が私よりも美しい女子でございましたら、上様はどうなさいます、

清盛　そちより美しい女子が、日本國はおろか唐にも天竺にも居る筈はない、安心して居れ、

妓王　まあ、上様のお口のよい事、でも上様はもう私などはお忘れなさるのでございませう？

清盛　そちを忘れるとは？

妓王　先程さうおつしやつたではございませぬか、

清盛　あゝ、またあの事を言ひ出したか、あれはな、そちばかりを忘れろといふのではない、そちが側にゐることを忘れるときには、私は京の町まで忘れてゐる、そして何所かもつともつと花やかな所を心の中に描いて樂んで居るのぢや、そちもよく、京はいやぢやと言ふではないか、

妓王　私は京を遁れて、極樂淨土のやうな靜かな所へ行きたいと思うて居ります、

法師甲　極樂淨土の御誓願は御奇特でござります、

法師乙　（寢言のやうに）南無阿彌陀、南無阿彌陀、

（此の時資成、佛をつれて登場、佛、下手に平伏する）

資成　車に乘つて歸りかけました所を、呼び戻して召しつれましてござります、

清盛　あゝ、さうか、佛とやら、よく聞けよ、私はな、そち等がやうな推參者に會ふ筈ではなかつたが、こゝに居る妓王が達てと申すから會うてやるのぢや、顏を上げて見せい、そして妓王に禮を言へ、

佛　（顏を上げ大膽にぢつと清盛を見て）はい、

ありがたうございます、冥加でございます、どうぞお見知り置き遊ばして……

（清盛、ぢつと佛の顏を凝視して其の美貌に驚き、覺えず妓王の手を取り落す、妓王もはつとして身を退く）

清盛　おゝ、そちが佛か、私はどうやらそちを見たことがあるやうに思ふが、まあ近う寄れ、もつと近う進め、そちは一體どこの者ぢや、

佛　はい、私は以前福原に居りましてございます、

清盛　ふむ、では福原でそちに會うたかな、私は少しもおぼえて居らぬが、とにかくそちの顏は、私にはどうも初對面のやうには思はれぬ、昔馴染にめぐり逢うたやうな氣がする、

妓王　では佛御前は、上樣と福原以來のお馴染でございますか、

佛　妓王さま、御免遊ばせ、私も志願の筋がございまして福原には居りましたが、ぢきぢき上樣にお目通りいたした事は一度もございませぬ、ましてお馴染などとは、思ひもよらぬ事でございます、上樣がおたはむれをおつしやるのでございます、

妓王　さやうでございますか、上樣、

清盛　いや、たはむれではないが、ぢき〳〵會うた事もないやうぢや、たゞ不思議とこの女子の顏が私には昔馴染のやうに思はれるといふまでぢや、氣にかけるな〳〵、

佛　かやうなお席へ推參いたしまして、妓王さまへ申譯がございませぬ、

妓王　いゝえ、少しも御遠慮には及びませぬ、

清盛　遠慮するには及ばぬ、それでそちが今日まゐつたのは何か願ひの筋でもあつてか、

佛　お願ひと申しますのは、たゞ斯うして一度上樣にお目通りさへかなひますれば、それでよいのでございます、私も是まで名ある方さまへお目通りのかなうた數は多うございますが、たつた一つ、今日本で一の位においで遊ばす上樣に、お目通りがかなはぬ許りに、私は生甲斐のない思ひをいたして今日までこの西八條の御殿を夢現に慕うてまゐりました、

清盛　それ程ならさうと早く申し出ればよいのに、つまらぬ所に氣を兼ねたものぢやな、さ、そちに一つ酌をして貰はうか、

（侍女、銚子を渡す、佛、取つて酒をつぐ、其間）

そこでそちは、私に會うてどう思ふか、これで滿足したと思ふか、

佛　お目通りして、優しいお言葉まで受けました上は、私はもう故郷に歸つて、一生藪草の中に埋もれましても、殘惜しいとは思ひませぬ、今日のお目見えを、一生の思出にいたします、

妓王　藪草の中とやらにお歸りには及びますまい、いつそこのまゝ上樣のお側にでもおいで遊ばせ、上樣も屹度その方が御滿足でございませう、なう、資盛どの、

資盛　（當惑して）はゝ、はゝ、佛どの、もうそろ〳〵御退きなされてはいかゞでございますか、

清盛　いや、まだよい、まだよい、妓王にも酌をしてやれ、

妓王　いゝえ、上樣、私はもうたんと頂きました、どうぞお構ひなさいますな、

佛　妓王さまにも、お目通りのかなひましたのを、身に餘る面目と存じて居ります、

妓王　いゝえ、私などは物の數でもございませぬ、却つてお邪魔であらうとお笑止に思うて居ります、それとも、何か此妓王にも上樣と同じくお氣に召した所がございますか、

佛　ほゝ、それはもう、上樣のやうなお方に是

程思はれておいで遊ばす、日本一の果報なお方にお目にかゝるのでございますもの、女子冥加と思うて、嬉しく存じて居ります、

清盛　なう妓王、佛は思うたよりも賢い女子ぢや、そちが妹と思うて召使うてやらぬか、

妓王　私には、今居ります妹一人で澤山でございます、御所望なら上樣御自身でお召し遊ばせ、

法師甲　資成どの、季貞どの、一旦この席をおひらきなされて、上樣を奥へ御案內したらどうぢやな、

資成、季貞　それがよろしうございませう、一度席をお改め遊ばして、

清盛　いや、まだよい、まだよい、大分興が湧いて來たぞ、此の尊い春の日を、さう心忙しくするものではない、心ない雜人原どもぢやな、そち達も今少し酒を過ごせ、

（侍女、酒をつぐ、皆々どよめく）

佛　どうぞ一つお聞かせ下さいませ、

清盛　いや、そちにさう言はれると二の句は出ぬわい、そち一つ歌うて聞かせい、舞うて見せい、なら、妓王、おもしろからうぞ、

妓王　どうぞお聞かせ下さい、

佛　音に聞えた妓王御前のお目通りで何で私風情が歌どころでございませう、おなぶり遊ばしますな、

清盛　いや〳〵、遠慮は無用ぢや、私が所望する、辭退するには及ばぬ、さ、早く歌うて聞かせい、舞うて見せい、

佛　今はこのやうな身なりでございますから後ほどまた、舞の裝束でお目通りが願ひたうございます、

清盛　烏帽子水干の支度なら、次の間でせい、私は是非今そちの舞が見たいのぢや、さ、これをあちらへ案內して舞の裝束いたしてやれ、

（侍女一人、佛を案內して次へ行きかゝる）

佛　（ぢつと妓王を見る、妓王臆して俯く、清盛の方へ媚を寄せて）ではしばらく御免遊ばしませ、

清盛　おゝ、早く行つて支度をせい、それから皆のものは廂へ出い、

（清盛、立上る、皆立つて席を改める）

おゝ、御坊は鼓が上手ぢやといふから、一つ舞に合せて打つて下さい、これ誰れか鼓の用意をせい、

（侍士一人、次へ鼓を取りに行く）

法師甲　いや、私どもの鼓はとてもこの席で打つやうなものではございませぬ、平に御辭退申上げます、愚僧どもはもう御免を蒙つた方がよろしうございます、これ順念々々、目をおさましなさい、もうお暇を申上げよう、

（法師乙、目をさまし緣に坐つたまゝ不思議さうに一座の光景を見廻してゐる）

清盛　いや、ならぬ〳〵、是非に打つて貰はう、佛はどうした、待たせ居るな、遲いぞ〳〵、

（立つて次の間の行へ行かうとする、途端に佛、水干を着舞の姿で出て來る、從ふ侍士鼓を持つて來て法師甲に渡す）

（此間妓王は忘れられたやうに、手持無沙汰で片隅に悄然として坐つてゐる）

やあ、佛か、美しいぞ〳〵、まあそちらを向いて見せい、目がさめるやうぢや、妓王よりも美しいぞ、

法師乙　南無阿彌陀佛〳〵々々〳〵々々〳〵、

清盛　さあ舞へ、さあ舞へ、

（清盛、座に就く、佛、席の中央に身構して）

佛　（檜扇をかざし、今樣を坐つたまゝ歌ひ、後起つて歌ひながら舞ふ）

「君をはじめて見る時は、千代も經ぬべし

姫小松、お前の池なる龜が岡に、鶴こそ群れゐて遊ぶめれ」

德是北辰 椿葉影再改

尊猶南面 松花色十廻

(責歌、亂舞)

(よしさらば、心のまゝにつらかれよ、さなきは人の忘れがたきに」

淸盛 (興奮して)やあ〳〵、そちは舞も歌も上手ぢやな、妓王にも劣らぬよい聲ぢや、殊に私が上を歌うた歌が氣に入つた、かはいゝ奴ぢや、私も入道の身ぢやから、今日からは、さつぱりと佛の御弟子になるぞ、こつちへ來い、こつちへ來い、(淸盛、歡喜極まつて興奮した體で佛の方へ立つて行き、手を取つて奥へ連れて入らうとする)

佛 まあ上樣、何事でございます、お放し遊ばせ、お放し遊ばせ、

淸盛 いや〳〵、放さぬ〳〵、私はそちに相談がある、まあ奥へ來い、

(二人、奥手へ這入る、侍女等ついて這入る、妓王、覺えず立ち上り、奥手を見込みて立つ)

法師乙 とろ〳〵と居眠をして居るあひだに、世の中が逆さまになつたやうぢやな、

資成 飛んだ事になつたものぢや、

季貞 妓王さまもお氣の毒な……

(皆々妓王の方へ氣をかねる)

法師甲 あゝ、さま〳〵の世の中ぢや、私等は有爲轉變の教を目の前に見て居るのぢやな、では皆さま、愚僧どもは一足お先へ失禮いたします、

法師乙 またあの嵯峨の庵で一休みして行かうか、どれ〳〵、

資成 我々も兎も角下つて居らう、

季貞 それがよからう、お次へ下つて居りませう、

(皆々行きかける)

侍女 大夫判官さま、お召しでございます、

季貞 あ、まだ何か御用があつたかな、何御用であらう?(考へながら一人奥へ行く)

(皆々退場)

妓王 (泣き伏して、やがて顔を上ぐ)えゝ口惜しい、斯うしては居られぬ、あまりと言へば非道なお仕打、私も奥へ行つて上樣の存分にして貰ふまでぢや、

(血相をかへて立上らうとする時奥から季貞出で來る)

季貞 妓王さま、何うなさいます、おかはいさうではございますが、唯今入道さまからお暇が出ました、あなた樣おいでの限りは佛御前が御遠慮なさるとかで、早々此の屋敷をお立ち退きなされいとの事でございますぞ、

妓王 えゝ? 大夫判官さま、それは何事でございます、あなたはまあ何をおつしやるか、

季貞 妓王さまに、上樣からお暇が出たと申すのでございます、

妓王 まあ、それはまことでございますか、私は夢を見て居るのではございますまいか、

季貞 夢でも何でもございませぬ、急いでお立ちのきの用意をなさい、

妓王 それにしても、あんまり淺ましいではございませぬか、人の心がさうまざ〳〵と變るものとは、私はどうしても思はれませぬ、

季貞 そこが入道さまのお氣質とお諦めなさる外はありますまい、今日は一旦お引取りなされて、入道さまのお心の解ける日をお待ちなさい、玆で何うなされうとしてもすべはございませぬ、

妓王 では、せめて佛御前に一目會うて、言ひたい事がございます、

季貞 お恨みは御もつともでも、今おあひなされてはお爲になりませぬ、ま、ま、玆は一旦

素直にお立ちなさい、

妓王　いえ〳〵、恨みは申しませぬ、たゞ一言言つて置きたい事がございます、お願ひでございます、

季貞　いけませぬ〳〵、お氣の毒でも、今日は是非このまゝにお下りなさい、兎も角お次へなりとも下つて、それからの御思案になさいませ、さ、さ、（手を執つて引立て退場す）

（幕）

第二幕

舞臺面、前と同じ夜の景、

清盛　これ〳〵、まてといふに、なぜそのやうにあわたゞしう逃げて行くのぢや、佛、佛！

佛　（衣裳をかへやゝしどけない樣子で檜扇を持つたまゝ足早に出て來る、そして振りかへつて、輕く扇で手拍子を取つて）はゝ、はは、お歳のせゐでお足元があぶなうございますよ、さ、こゝまでお出で遊ばせ、早くつかまへて御覽遊ばせ、

（清盛、わざと足をゆるめて出て來る、つづいて侍女一人、あかしを持つて出て前面にする）

清盛　譃を言へ、私が無理を言つたのではない、そちが何かひどく物におびえたではないか、

佛　ほゝ、上樣、お氣がつきましたか、では敎へて差しあげませう、上樣のお頭の影がそれ、それ、あの障子にも映つて居ります、大きな入道さまではございませんか、

清盛　はゝはゝ、大入道ぢやな、あゝいふのがまことに出て來たら、そちはどうする？

（佛、清盛に寄り添うてかしこまる）

それ見い、

何事ぢや、けたゝましい騷ぎをするではないか、

佛　（衣裳をかへ、しどけない樣子で足早に出て來て振り向いて輕く手を叩いて）ほゝ、ほゝ、上樣のお驚き遊ばした御樣子がをかしうございましたこと、

清盛　何がをかしい、をかしい所の騷ぎかい、

佛　でも上樣があんまり御無理をおつしやいますもの、

（二人並んで前の方へ出る）

清盛　そちもやつぱり弱蟲ぢや、妓王めがよく物おぢして、陰氣な事を言ひ居つたが、そちも似たものぢやな、妓王の事ばかり惡くは言はれぬぞ、

佛　はい〳〵、どうせ私、風情が妓王御前の事など、とやかう申してはすみませぬ、御免遊ばせ、

清盛　妓王が物におびえると、屹度この京の都を私と一緒に出たいと言つて居つたが、ではこゝを出て何處ともあては無いといふ馬鹿な奴であつた、あいつはいつもあての無い愚癡ばかりこぼす女であつたよ、そちは妓王よりもしつかり者ぢやと思うたに、案外弱い奴ぢやな、

佛　實を申せば上樣、先程は全く恐ろしうございました、あの細殿を御覽遊ばせ、あの暗い中を妓王御前が恐ろしい眼でこちらを睨んで、魔物のやうに飛んで行きました、

清盛　たはけを言ふな、妓王は疾くに追ひ返したではないか、それぢやから女子といふものは相手にならぬ、そちだけは男のやうにすつきりした事を言ふと思うたに、やつぱり駄目ぢやな、

佛　でも上樣がこの都をお出遊ばすことがございましたら、私がよい所へ御案内申しませう、私はたんと〳〵よい所を存じて居ります、

清盛　おゝ、それは何ういふ所ぢや、私も實はもう此の都に飽きて來たから、そちの案内する所へなら行かぬ事もない、どこがよいのぢや、

佛　それは、もつと〳〵明るいよい所でございます、この京の都は、思うたよりも日影が薄くて、上樣の御繁昌にも似ず、何所か淋しい所があるではございませぬか、日脚のさゝぬ隅々が多うございます、

清盛　私もこの頃さう思ふことがある、そちと私とは心が通ふと見える、そちに案内を賴んだら定めてそちの顏のやうに花やかな美しい所に連れて行くであらう、私はそちの跡になら、何所へでもついて行く、そちは私の案内者ぢや、

佛　屹度ついておいで遊ばしますか、

清盛　おゝ、ついて行く、そのよい所といふのは何所ぢや、一體そちは何所で生れて、何所に育つた女ぢや、今までに何んな男と連れ添うたか、白狀せい、

佛　お聞かせ申しませうか、

清盛　おゝ、言へ〳〵、早く聞かせい、

佛　でも聞いた上でお腹立遊ばすやうな事がございましたら、

清盛　構はぬ〳〵、

佛　おやき遊ばしますなよ、（侍女の居るのを見て躊躇して）

清盛　やかぬ〳〵、あちらで其の話を殘らず聞から、隱さず物語らぬと承知せぬぞ、さ、奥へ行かう、

佛　いえ〳〵、こゝがおもしろうございます、さ、あなた樣もこゝへおいで遊ばせ、

（清盛を引よせ緣端へ並んで立つ、侍女、褥を取りに行かうとする、途端に風が吹き入つて燈を消す）

侍女　御免遊ばしませ、すぐに燈を持つて參ります、

佛　いえ〳〵燈には及びませぬ、燈の無いのが却つて風情でございませう？　上樣、

清盛　暗いな、そちは淋しうはないか、私は暗い所が大きらひぢや、

（此の間侍女、褥をすゝめる、二人は佇立ちながら）

佛　でも、まあ御覧遊ばせ、あの淋しい景色も惜しいとも思召しませぬか、（風また吹き入る）おゝ冷たい風――髮の毛が總毛立つやうでございます、（清盛に寄り添ひながらふと後を見て）あの渡殿の邊の暗うございますこと、若しや先程のがまことの妓王御前であつたら、……

清盛　引つとらへてそちが思ひのまゝにしてやるまでぢや、さあ、約束した話を早く聞かせぬか、

佛　まあ、ちよつと、あの月を御覧遊ばせ、風に吹きさらされて、白けて居りますこと、それにまあ花吹雪の散りますこと、淋しい中に賑かな、不思議な景色ではございませぬか、

清盛　これ佛、そちは私をじらして居るな、

佛　でも、これ程の景色を仇にお過し遊ばす上樣なら、私は嫌ひでございます、人に情の厚いものなら、月夜にもやはり情が無くてはなりませぬ、上樣は月夜の眺めには少しも情をおかけなさいませぬか、

清盛　むづかしい事を言ひ居るな、なるほど之はよい景色ぢや、あわたゞしい花の散り方をする、さあ、そこでそちの話はどうぢや、そちが見て來たよい所といふのは何所ぢや、其の男といふのは何ものぢや、

佛　まあお待ち遊ばせ、上樣が若し花なら、此のやうにあわたゞしい中で散りますのと、おつとりした暮合の空に一ひらづつ散つて行きますのと、どちらがお好きでございますか、

清盛　また妙な事を言ひ出したな、それは靜かに散つて行かれるものなら、其の方がよささうにも思ふが、併しわしにはそれは出來ぬ、私の體にはいつも嵐が吹いて居る、これ、この胸に手をあてて見い、この通り胸には大波が打つてをる、それから此の手、それ、しつかりと握つて見い、熱いでらう、焼けつくやうであらう、それから此の頭、頭の中はいつも此の風が立つてをる、散るならあわただし〳〵散るのが私の本性ぢや、

佛　ほんたうに上樣のお手が熱いこと、それからお胸の動悸も高う御座いますこと、私は今はじめて上樣のほんたうのお心を聞いたやうな氣がいたします、私も上樣と御一緒にあわたゞしう散つて見たう御座います、

清盛　あゝ、またつまらぬ事を言はせをる、私は散際の相談などは嫌ひぢや、さあ〳〵、今度こそそちの話の番ぢや、其の男は何ものぢや、今生きて居るか死んで居るか、

佛　二人は殺され一人は生死の程も分りませぬ、

清盛　なに、二人も三人も男がゐたといふか、それは一體どうした譯ぢや、どれ〳〵、私が手を引いてやるからあの花の中をあるきながら、精しい話を聞かせい、私はもう、我慢がならぬぞ、さあ來い〳〵、

(侍女、履物をすゝめる、其の方を向いて)

そちは次へ下つて居れ、それで、其の最初の男といふのは何者ぢや、

佛　在所の濱邊にわびしい住居をしてゐた若い男でございます、

(話しながら二人つれ立ち庭に降り、花の散る中に姿を沒する、引かへに妓王硯箱をかゝへて忍びやかに入り來り、襖の前に立つて二人の姿を見送り、襖に歌を書く、終つて立ち上り庭の方を見る、途端に出て來る佛と顔を見合はす)

おゝ、あそこに妓王御前が……(清盛にすがりつく)

清盛　えゝ、また騷ぐか、何事ぢや、そちには妓王が祟つてゐると見えるな、(こちらを見て)おゝあれは妓王ぢや、おのれ、邪魔をしようと思うて來居つたか、憎い奴め、

(駈け上り捉へようとする、妓王、すり抜けて逃げる、清盛、茫然と見送る、佛も庭に立つたまゝ見送つてゐる、やがて清盛、心づいて振りかへり、縁端へ出て)

これ佛、こちらへ上らぬか、妓王はもう逃げて了うたぞ、さあ〳〵上つて來い、

佛　でも不思議ではございませぬか、衣の音も立てず飛ぶやうに逃げて行きました、

清盛　はゝ、妓王は身の輕い奴ぢやからな、今に呼び寄せて糺明してやる、

佛　(上りながら襖をすかし見て)おゝ、上樣、あれは何でございます、お障子に大きな文字が見えます、

清盛　え、障子に文字が？(不審さうに一足すさつて透し見る)うむ、成程文字が書いてある、今まで何も無かつた筈ぢやが、不思議だな、(次の間の口へ行つて)これ誰れか居らぬか、早く燈を持て來い、燈を、

侍女　(次の間から)はい、只今、(燭臺を持つて出てすぐ引下る)

清盛　(燭臺を襖の前に引きよせ斜に面して立つたまゝ)

「萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草」

佛　(横向きに膝をついて坐つて)

「何れか秋にあはで果つべき」

(讀み了つてしばらく間を置き顔を上げて)

はゝ、はゝ、是は何でございます、上樣、萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草、いづれか

秋に逢はで果つべき、早い遅いはあつても、草といふ草はみんな今に枯れて了ふぞ、見てをれ、と申すのでございませう、

清盛　是れはたしかに妓王が手ぢや、重ね〴〵不埒な奴め、平家の繁昌を呪ひ居つたな、

佛　（笑つて）いゝえ、上様、此の歌は私の身の上を呪うた歌でございます、此の佛も今に妓王御前と同じやうに、秋風たてば棄てられて、枯れ果てて了ふといふ謎でございます、

清盛　それなら愈々けしからぬ事ぢや、此の淨海が寵愛するそちの身の不祥の事を言ふとは以ての外ぢや、今まであれ程大事にしてやつた私に、恩を怨みで返し居る憎い奴め、呼び寄せて成敗してやる、

佛　まあ、お待ち遊ばせ、私が秋に逢ひますも逢ひませぬも、みんな上様のお心一つではございませぬか、妓王御前をお咎め遊ばす前に、まあ上様のお心から聽きたうございます、私もあの妓王御前と同じやうに、また誰れかに見かへられるのでございませう、あゝ、あゝ、さうした上様の水性と知つたら、こゝまで慕うて參るのではございませんでした、

清盛　馬鹿を言へ、私の心はな、疾くからそちの樣な女子を慕うてゐるのぢや、あの妓王などはあれはほんの膳部の口取に過ぎんのぢや、私はあの樣な弱い女は嫌ひぢや、美しうて强い、そちのやうな女子でなくては私の心には手ごたへが無い、何んで私がそちを棄てるものか、そちの身にだけは、平家の天下の續くかぎり夢にも秋風は聞かせぬぞ、

佛　上樣はそれをお誓ひ下さいますか、

清盛　おゝ誓ふとも、上は梵天も照覽あれ、私の眞實は變らぬ、私は一目そちを見た刹那から不思議と魂をひきよせられて了うた、そちは私の生命ぢや、

佛　上樣、それは神もつて誠でございますか、私が上樣のお生命になつてもよろしうございますか、

清盛　おゝよいとも、そちの好きなことなら私は何んでもする、そちの行きたい所へは私もついて行く、そちは私が生命の案内者ぢや、併し佛、私にばかりこれほどの誓を立てさせて、そちは少しも誓を立てぬではないか、そちから先に私を棄てたらどうするか、

佛　ほゝ、此の天が下は上樣のものではございませぬか、私が若し上樣を棄てましたら上樣は草をわけて土を篩つても私をお捕へなさることが出來ませう、そのやうな御懸念は御無用でございます、

清盛　いや、さうでない、そちの體は捕へることが出來てもそちの心は捕へられぬ、そちの心に秋風が立つたら私はどうなるのぢや、

佛　はゝ、上樣には日本國中の男女がみんな心を寄せて居ります、私風情のものがよし一人や二人心を背けたとて上樣は少しもお困り遊ばす事はございませぬ、却つてよい厄拂をしたと思召すでございませう、

清盛　またたはけた事を言ふ、私はなるほど上部にこそ日本國中を味方にも持つて居るが、心はいつも一人ぼつちぢや、私はいかにも强い男ぢやとは思ふが、心はいつも淋しいぞ、私の後にはいつも暗い懸念のやうなものが附きまとうて居る、それぢやからこそ、私は强いものが好きぢや、美しいものが好きぢや、暗いじめ〴〵したものが大嫌ひぢや、私は淋しい男と思うてくれ、

佛　上樣、私は必ず〴〵一生上樣のお傍は離れませぬ、

清盛　おゝ佛、

佛　けれども上樣、若しや私の體に自然と秋の衰へが來ましたら、其とき私はどうなるでございませう、私もやつぱり妓王の跡を

追ふのではございますまいか？

清盛　またそのやうに心細げな事を言ふか、そちが衰へるまでには私が先に衰へて了ふ、ぢやからそちが先に立つて、私にいつまでも力を添へてくれといふのぢや、もうさうした鬱した話はやめい、先の事は分らぬとして置け、未來といふものはまだ紐を解かぬ經巻のやうなものぢや、何が書いてあるか知れたものではない、それよりも先程あの前栽で聞いたそちが男の話の續きを聞かせい、で、その濱邊に住んだ男はどうしたのぢや、

佛　それが私の十六の初戀でございます、そして其の男と二年ばかり、あの福原近くの松原と苫屋の蔭で二人は身も世も無いほどの戀をしつゞけました、

清盛　これ佛、少し遠慮して物を言はぬか、清盛がこゝで聞いて居るのぢや、

佛　はゝ、御免遊ばせ、ではもう其の話は申しますまい、

清盛　いや、いかぬ／＼、其の後が聞きたいのぢや、たゞ少し手柔かに話せといふのぢや、

佛　春の宵にはあの濱邊に絹を搖るやうな漣が寄せて、砂子が銀のやうに月に照つて曖い風が沖から吹いて來ます、私はいつも松並木の黒い影の中に木の幹に寄りかゝつて、その男の來るのを待つてゐますと、男は遠くから横笛を吹いて近づいて來ます、そしてあたりに人氣の無いのを見すましてはそつと出會うて一夜を千夜の思ひで契りかはしました、

清盛　そこはもう、それでよい／＼、それからどうした、終りを言へ、終りを言へ、

佛　それがいつか、笛の逢瀬といふ浮名になつて、さる人に引分けられて了ひました、

清盛　それは何者ぢや、引分けてそちをどうしたといふのぢや、

佛　庄司の房遠といふものが庄司の威光で其の男を殺して了ひ、私はいつか房遠の心に從ふやうになりました、

清盛　ふむ／＼、房遠はけしからぬ奴ぢやな、そしてそちはどうして房遠と別れたか、房遠との仲はどうであつたか？

佛　房遠も男でございました、さる隱れ家でざれ歌を作り私がそれに合はせて舞ひました、

清盛　ふむ、そちが舞うたのか、その舞は見たかつたな、

佛　今もよく覺えて居ります、舞うてお目にかけま　うか？

清盛　おゝ、舞うて見せい／＼、

佛　（扇をかざして歌ひながら舞ふ）

唄「さても女子は濱松原に、笛の逢瀬を松風々々、私も君ゆゑ戀松原に、房遠男を斬つて棄てけり、あとには浪も引しほの、月は冴えたり小松原―

清盛　やあ／＼、いや／＼、房遠はけしからぬ奴ぢや、そのやうな歌は忘れて了へ、

佛　けれど房遠との逢瀬も半年ばかりで、房遠もまた私ゆゑに亡ぼされて了ひました、そして私は其の房遠よりも強い男に身をまかせて一年が程をすごしましたが、其の男もいつかは其の房遠と同じ身の果になるかと思ふと、もうそのまゝには居られませず、強いもの勝ちの世の中に私が思ひのまゝに身を任す男は日本國中で一番強い男でなうてはならぬと、其の時私は心を定めてひとりで福原へ抜け出しました、そしてたうとう此の京にまでさすらひ出たのでございます、

清盛　そしてたうとう此清盛を探しあてたといふのか？

佛　福原で上樣と妓王御前の噂を聞きました時は、羨ましうございました、それで私も白拍子となつて、見事この世に力と賴む一の

人にまみえて見せようと決心したのでございます、

清盛　よし／＼、私が其一の人になつてやる、斯うして私とそちとが同じ時代に生まれ合うて、互に慕ひ求めて居るものに出合ふといふのは宿縁ぢや、必ず私の傍を離れるなよ、

佛　私は離れませぬが、上樣こそお離れ遊ばしますな、いつど、やうなものが出て參つて二人の仲に立ちませうとも、

（此間資成登場）

資成　申上げます、前の右大將さまがたゞ今これへお見えでございます、

清盛　なに宗盛が來たと？　今時分に何用があつて來たのぢや、

（座に就く、佛、從ふ、資成、席を整へて引退くと、ちがへて宗盛、衣冠にて登場）

清盛　おゝ、宗盛か、夜中に何事が起つたのぢや、何か急用か、さあ、そこへ／＼、

宗盛　（會釋をして座に就き、佛を尻目に見て）父上、お話が密談にわたりますがお差支がございませぬか？

清盛　うむ、遠慮には及ばぬ、それに居るのはな、何さ、あの、それ、佛というてな、近う召し使うて居るものぢや、大事ない／＼、

佛　私は暫くお次へ下つて居りませうか、

宗盛　いや、父上がお許しの上は差支ありませぬ、そのまゝにしておいでなさい、それにしても妓王御前はどうか致しましたか、父上、

清盛　うゝ、あれはな、無禮を働いたから先程暇をやつた、之を見い、斯ういふ事を書き殘して出て行つたわい、

（二人ふりかへり襖の文字を見る、佛、燭を取つて差し照し、ぢつと宗盛の顔を見る）

宗盛　「萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草何れか秋にあはで果つべき」
是は何とした歌でございますか、父上、

清盛　そこに居る女子を恨んだものともいふが、私は當家を恨んだ心と見た、

宗盛　妓王御前は、なぜにまた當家を恨みましたか、あれ程父上の寵愛を受けてゐた女子ではございませぬか、

清盛　さあ、それが私を恨んだのぢやから、不埒であらうがな、

宗盛　私には合點が參りませぬ、

佛　差し出がましうはございますが、其わけは私がよく存じて居ります、御免遊ばせ、右大將さま、

宗盛　はあ、

佛　私は佛と申して、京の町に舞と歌とを商うてゐた下賤のもの、今日上樣にお目通りがかなひまして、お側にお仕へ申す身になりましてございます、どうぞお見知り置き下さいませ、

宗盛　して妓王御前との仲は？

佛　上樣のお情が私の身に移りましてから、舊きは衰へるならはしで、自然と妓王御前の御寵愛が衰へました、それが妓王御前のお恨みでございます、

清盛　おとなしくさへして居れば、また何とかしてやる方もあるのに、あのやうな無禮な眞似をし居る、憎い奴ぢや、

宗盛　それでは妓王御前も不憫なもの、佛御前とやらもなぜ身をへりくだつて、情を讓つては、おやりなされぬ、妓王御前が恨むのも道理と思はれます、

佛　妓王御前のお恨みも、もつともとは存じますが、それかと申して、私が身を引くのもいやでございます、情の戰に、私が勝てば、負けた妓王御前が身を引かれるのも、是非ない成行と存じます、

宗盛　併し佛御前、勝ち誇るばかりが道でもありますまい、たまには負けておやりなさい、

佛　右大將さま、それが私には出來ませぬ、日々かりそめの仁義なら、それもよろしうございませうが、人一代の運さだめに、蔭を立ててみづから亡びるのが眞の道とは存じませぬ、强いものが勝ち榮えてまゐるのは是非ないことではございませぬか、

宗盛　いや、勝つものも久しからず、因果應報の道理は恐ろしいと、お思ひなさい、妓王どのが此の歌を書き遺して置いたのも、偶然とは思はれませぬ、

佛　でも右大將さま、そのやうな歌は此の節日本の流行文句でございます、唐や天竺には、五百年も千年も前から、箕ですくふ程あると申すではございませぬか、それでも世の中は次ぎ／＼に榮えてまゐります、

宗盛　盛者必滅は尊い佛法の教であるのに、此の歌の心が佛御前には分らぬと見える、それともおん身は、佛法の法に背かうと言はれるか、

佛　右大將さまは、その法師づれが言ふやうな、殊勝らしい口眞似ををかしいとは思召しませぬか、盛るものも衰へ、盛らぬものも衰へるのが定なら、なぜせめて、衰へぬ前に、盛りの色のありたけを誇つて置けとは教へぬのでございませう、暗い行末ばかり眺めてゐる、陰に籠つた世の中に、私はあの大日輪のやうな上樣を慕うてまゐりました、（清盛の方へ）緋葵の花が日に向いて赤い息を吹くやうに、天に上樣、地に私が面を見合せて、天竺の魔法にかゝつてゐる世の中を、大笑ひに笑うてやらうではございませぬか、

清盛　なる程、そちの言ふことは面白い、併し佛法の道もな、世を治めるには大切なものぢや、法師等が私の言ふ事をきゝさへすれば、あれで人の心をおだやかにする役に立つ、つまりは清盛が手足にしてはたらかすのぢや、あれも方便ぢや、道具ぢや、

宗盛　父上、だん／＼と世のなりゆきを見ますにつけ當家の一門に集つた世上の恨みは、おもひのほかに深う御座います、

清盛　またそれを言ふか、その話はもうやめい、此の淨海もよく承知してをる、

宗盛　それを父上は恐ろしいとは思召しませぬか、

清盛　はゝは、そちはそれ程世上の恨みが恐ろしいか、弱い男ぢやな、亡くなつた小松内府が遺言とやらで、さやうな弱い事を言ふのであらう、内府を見い、餘り氣が小さかつたために、早死をした、此の淨海は死なぬぞ、人の恨みなぞといふものは何時の代にもある、負けたものは何時でも勝つたものを恨むのが常ぢや、先方で恨むなら、此方でもそれだけの事をしてやる、向うが勝つか、此方がかつか、二つに一つのほかは世をわたる道はない筈ぢや、それともそちは先程佛御前が言うたやうに、一か八かの瀬戸際に負けてのきたいか、えゝ、馬鹿な事よ、なう佛、酒でも持つて來て賑かにせい、宗盛をもてなしてやれ、

宗盛　いや、それはお待ち下さい、まだ申上げる一大事が御座います、

清盛　そち達はむやみと後を見廻すから、それで無氣味になるのぢや、世の中は闇夜の獨り道と思うて後を向くと己が足音まで物の怪のやうに聞えて、ちりけ元がぞッとする、後にはいつまでも暗い影がついて來る、

宗盛　其の暗い影を父上もお氣付でございますか、

清盛　知つて居るとも、世の中に勝つたもの、强いものには皆その影がついて居る、が、私

はそち達のやうに其の影に怖ぢ恐れて逃げ廻ることは嫌ひぢや、なう佛、

佛　でも上様まで、お肩の凝るさうな强がりやうをなさいますことゝ、斯うしてお話の席にまで、のび〳〵した息は通ひませぬ、右大將さま、お庭にでもお降り遊ばして少しくおくつろぎなさいませぬか、

宗盛　いや、今宵はそれ程悠長な此の身でもありませぬ、

清盛　して、ほかの用事といふのは何事ぢや、

宗盛　實は私、今日上皇さまから鳥羽殿の法皇さまへお使に立ちました、

清盛（屹となつて）なに、法皇さまへお使に？

宗盛　はい、お使に參りました、そしてあの鳥羽殿のわびしいお住居をつく〲見て參りました、それにつけ、私は、どうも當家の繁昌のうしろに、暗い不思議な物の影が覆ひかかつて居るやうで、不安でなりませぬ、

清盛　おろかな事を言ふな、たとひ法皇さまのお力でも、今この平家をどうなさる事が出來よう、して其のお使と云ふのは何事ぢや、

宗盛　たゞの御消息で、久々打たえておなつかしいから、近々にお出でなされて御對面なされたい、

清盛　そちはそれを唯の御消息とばかり聞いて來たか、

宗盛　私とても、それほどの事に心づかぬおろか者でもございませぬ、第一、ことさらに此の宗盛をお使にお立てなされた、上皇さまのお心からして、淺い御計略とは存じませぬ、併しいち早くそれにお氣のつく父上は……

清盛（いら〳〵として）あゝ、もうよいわい、言ふな〳〵、さうした沈んだ話を聞くと、此の淨海までが勇氣を挫く、今淨海が弱い心を起したら、平家の一門は瓦解ぢやがや、たとひ山を移し海を干しても、入道が一存は立てずには居られぬ、これ佛、酒を持てこい、酒を、

（清盛、緣へ立ち出ようとしてよろめく、佛、走りよつて支へ、緣境の柱に立つたまゝ寄りかゝらせ、顏を見合せる、此のころから月が雲に隱れた態、舞臺やゝ暗くなる）

佛　私のまゐるまで、こゝをお動きなさいますな、獨りでお動きなさいますとあぶなうございます、

（清盛、うなづく、佛、次ぎの間の方へ出て行く）

宗盛　それから鳥羽の御所では、この頃夜な夜な怪しい物の笑ひ狂ふ聲が聞えますとかで、世上のものが寄ると障ると耳口を寄せて取沙汰いたします、何か大事の起る前兆に相違ないと言ひ囃して居ります、總じて此の頃の世のさまが、上部の靜かさに引きかへて何か動亂の兆を呑んで居るやうで、私には心がかりでなりませぬ、例へば三位入道などが近頃の擧動にも不審な噂がございます、

清盛　不審な噂がある？

宗盛　はい、油斷はなりませぬ、

清盛（益々いら〳〵として立つてゐるに堪へぬ如く體を搖かし、柱の根に坐る）はゝ、源三位などに何が出來よう、

宗盛　そればかりではございませぬ、此のたびの嚴島行幸で山法師どもの動搖が今以て收まりませぬ、

清盛　あれは、もう、私の聲がかりで鎭まつた筈ぢや、

宗盛　いや、まだ鎭まるどころではございませぬ、益々廣まつて行く樣子でございます、

清盛　いや、さういふ筈はない、私を差し置いて法師等が騷ぐ譯はない、

宗盛　たしかに此のたびの騒ぎは、たゞ事とは思はれませぬ、

清盛　たしかにさうか？

宗盛　はい、

清盛　憎い法師めら、此の淨海を何と心得て居るか、今に見て居れ、山門も佛法も一揉みに揉みつぶしてやる、酒、酒、酒を持て來ぬか、

（侍女等、酒肴を運び、清盛に褥をすゝめ、二人に酒をつぐ）

宗盛　併し佛法の力は人の力でどうすることも出來ませぬ、山法師を敵にして平家の天下がいつまで續くと思召しますか、せめて佛法の前には弱くおなりなされて……

清盛　なに、弱くなれと？

宗盛　はい、佛法の前には弱くおなりなされて、末の安泰をお祈りなさるやう、お願ひに出ました、

清盛　弱くなるとは、どうすればよいのぢや、

宗盛　先づ法師等をおなだめなされて……

清盛　うるさい奴等ぢやな、この清盛が山法師どもの前に降服するのか、此のわしに弱くなれといふのか、（しきりに酒杯をかさねてゐたが、座に堪へぬやうに立上り、縁の邊をあるき廻る）

宗盛　法皇さまへもお詫の心で……

清盛　あゝ、うるさい事ぢやな、この私に弱くなれといふのか、私にはとてもそれは出來ぬ、達て私にそのやうな事をせいといふなら、私はもう此の京には居らぬぞ、

（此の時また月光が舞臺を明るくする、庭の奥にあたつて、佛の聲が聞える）

佛　上樣、私は今宵の月で、またあの福原の住居を思ひ出しました、

清盛　（聲のする方を見込みながら）おゝ、佛か、そちも福原にゐたと言うたな、

佛　（庭先へ出て來て）上樣は席をお動きなさいましたな、あぶないお足元ではございませぬか、

清盛　そちを待つてゐた、さあ、こゝへかけい、そちは今、福原と言うたな、

佛　（縁に腰かけて）はい、あの南の海の、明るい明るい福原の御殿を、上樣はお忘れなさいましたか、福原はよい所とは思召しませぬか、

清盛　おゝ、そちも福原が好きぢやといふか、福原はよい所ぢやな、

佛　上樣と御一緒で、今一度福原に住みたうございます、此の樣な月の晩にはあの松原かけて夢を見てゐるやうな景色が、まあどんなでございませう、

清盛　私もさう思ふ、福原がなつかしうなつた、さうぢや、私は福原へ行かう、もう此の京の都がうるさくなつた、

佛　ではあの福原に新しう都をお立て遊ばすおつもりでございますか、

清盛　さうぢや、こゝに居ればこそ、やれ山法師、やれ謀叛と噂が絶えぬ、あの福原は後が山で、前に海を控へて、山法師等も容易に降りては來ぬ、うるさい傲訴沙汰や爭亂の沙汰も自然と遠のくであらう、さうぢや、一思ひに京を福原へ移して見よう、私はどうして今まで福原を忘れてゐたか、佛、そちも福原の都へ來いよ、

佛　では、屹度あの福原に都をお遷しなさいますか、福原を京に見かへて御覽遊ばしますか、上樣、

清盛　おゝ、明日とも言はず、すぐに遷して見せるぞ、

佛　さうしたら上樣と私との新しい日も明日からさし初めるのでございませう、上樣、福原へは私が御案内に立ちます、氣を丈夫に

お持ち遊ばして日本國中に新しい日の目を見せておやり遊ばせ、玆ばかりが都ではございませぬ、

清盛　さうぢや〳〵、

宗盛　父上、それは御酒興でございますか、桓武このかた四百年の都を、さう輕々と遷さるるものではございますまい、強てさうな事をなされて、此の上にまた世上の恨みをお重ねなされば、福原は安泰の都とはならいで却つて平家の運の果場となります、

清盛　うるさい〳〵、もうそち等が說法は聞かぬぞ、私の心は定まつた、四百年の都が何ぢや、大極殿も紫宸殿も此の淨海が指一本の差圖で移して見せる、佛、そちだけは、いつまでも私の傍を離れるな、私は淋しい男ぢやからな、

佛　私は上樣の生命ではございませぬか、福原へは私が御案內に立ちます、そして新しい都へ！　新しい都へ！

宗盛　（氣色ばんで）これ佛御前！

佛　（緣へ上り、淸盛の手を取つて）さあ、上樣、奧へ參りませう、

清盛　おゝ、奧でまた一さし舞うて、平家の繁昌を祝へ、福原の天下は萬々年ぢや、（侍女に）資成を呼べ、鼓の用意をさせい、

侍女　かしこまりました、（一人次ぎへ行く）

清盛　（佛の肩にすがり、奧へ行きかける、侍女一人、從ふ）明日はいよ〳〵福原ぢやな、そちも奧で舞の支度をせい、今日の今樣は何とか言うたな、さう〳〵「君を初めて見る時は千代も經ぬべし姬小松……」（半ば歌ひながら這入らうとする途端に）

宗盛　佛御前！　お待ちなさい！

佛　（初め立留つて淸盛の手を取り、後一足離れて正面へ出で）何でございますか、右大將さま、お呼びとめ遊ばしたのは、

（此の言葉のあひだ、侍女、淸盛を扶けて奧へ入る）

宗盛　あなたはなぜ父上を外道に引入れようとなさるか、それは天魔外道の仕業といふものぢや、

佛　私はたゞ上樣のお爲を思ふばかりでございます、都をお遷し遊ばすのも、腐つた水は流して御覽遊ばせ、古い住居はかへて御覽遊ばせ、それが此の世に榮えるおきてかと私は存じます、

宗盛　それは敎に背く外道といふものぢや、

佛　私から申せばあなたのお敎が外道かも知れませぬ、

宗盛　これ佛御前、

佛　はい、

宗盛　あなたは死んで貰ひたい、（短刀の鐔に手をかけ立ち上る、一足早く資成出で來り宗盛を押し止める、佛は一足さがつたまゝぢつと見て）

佛　ほゝ、私はまだ死にませぬ、生きて榮えて行かねばなりませぬ、御免遊ばせ、右大將さま、

（言ひすてて、すた〳〵と奧へ入る、宗盛、資成に止められて立膝の儘默然として跡を見る、外は風全く止んで月がます〳〵冴えてゐる）

（幕）

◇

本能熱のロマンチシズム時代、而して見神熱の宗敎的傾向時代、而して自己靜觀のナチュラリズム時代、此の遷移を今になつても認め得ない人があるとは何うしたものだ。

（『對草庵漫筆』より）

運命の丘

人

ナポレオン（四十四歳）
ダリュー（五十歳）
ミュラー（四十二歳）
モルチエール（四十五歳）
アンドレー（三十歳）
韃靼人二人
將校下士從卒其他

場所
モスコウ市外

時代
千八百十二年九月十四日の午後

第一場

モスコウ市の西南、雀が丘の一部、丘の頂を舞臺の前面に現はして、背後は一面にモスコウの市街を見下した景色、秋日和の午後二時過の日光が強くモスクワ河に反射してゐる。市内すべて本文にある通りの景。

軍服のナポレオン、馬を麓に乘り捨てた氣持で、數歩先に立ち、つか／＼と小急ぎに下手から丘の頂に現はれる。續いてダリュー、モルチエール、アンドレー及三四の將校從卒等登場。

（ナポレオン、モスコウの市街を見るや否）

ナポレオン　モスコウ！　モスコウ！
（叫んで尙熱心に向うを見てゐる）

ダリュー　モスコウだ！　モスコウだ！
（他の人々も之れに和して、競うて市街の方を見る）
そら見給へ、あれがモスクワ河だ。其の向うがクレムリンさ。丸の内だ。綺麗ぢやないか。

モルチエール　なる程、これや綺麗だ。まるで古い繪本が拔け出したやうな町だな。

ダリュー　あの建物を見給へ。木造だらう。塗つた屋根や壁の色も違つてるね　東洋的ぢやないか。其の前を、まるで灰色の熊が馬に乘つたやうなコザークめが、木材を横たへて通る所は似合つてるな。配合がいゝぢやないか。

アンドレー　北國に似合はん明るい町ですね。空氣も實に澄んでる、たしかに神聖な町といふ感じがしますね。

モルチエール　眩しいやうだ。金の十字架が、まるで星を散らしたやうに光つてるぢやないか。あれが皆んな寺だらうか。寺の多い處だな、外郭も内郭も、見給へ、町の半分は寺だが。尖塔がまるで雜木林のやうに幷んでる。其の一本々々に金の星がかゝつてゐるのだ。

アンドレー　寺院ばかしが三百近いでせう。それから處々新月の徽章も光つてゐます、マホメタンの寺でせう。斯うなると壯觀ですね。十字の星と新月が此の古い街の空に撒いたやうに浮んでる、これだけでも胸が躍りますね。あれが此の町の命なのだ。命のサンボルが、あゝして光つてるのだ、平和ですね。

ついゝそこいらまで煙硝の煙で重くなつてゐた空氣が、茲へ來ると水晶を斷ち切つたやうに澄んでゐる。其の中に強い色を塗り立てた屋根や壁が品を作つてる所は、成るほど女性的ですね。ロシア人は此の町をおつ母さんと言ふさうだが、私等には美しい尼さんといふ感じですね。

モルチエール　處々隨分大きな庭がある。人家の間に森を切つて撒き散らしたやうな處だ。何うしても繪本だ。是れが本當にモスコウなのかなあ。夢のやうだ。

（飽かず市街を見てゐたナポレオンは此の時初めてこちらを向き、近くに立つて居るモルチエールの肩を輕く叩いて）

ナポレオン　おい！

モルチエール　はツ！

（皆一齊に其の方を向く）

ナポレオン　モスコウへ來たんだよ。氣をたしかに持たなくちやいかんよ。

モルチエール　陛下、夢のやうでございますなあ。

ナポレオン　夢ぢやあない。本當のモスコウへ來たのだ。到頭來たのだよ。

ダリュー　夢が事實になつたのですね。

ナポレオン　お前にも似合はん事を言ふね。初めから事實さ。夢が何で事實になるものか。俺がパリーでセギュール伯に言つて聞かせたのはそこさ。俺には初からモスコウは目に見えて居た。必ず來られるものといふ確信があつたのだ。確信は運命だ。運命は事實だ。

ダリュー　陛下の其の筆法によりすと、モスコウは陛下の運命でございますね。

ナポレオン　運命だ、全く運命だ。俺には是非とも一度此のザールの城へ來なくちやならん運命があつたと思ふ。モスコウは私の戀人だ。古い〳〵前世からの戀人であつたのだ。先つき一目見た時に、私はすぐさう思つた。今までこの懷しい戀人を人手に委せて置いたのが妬ましいやうだ。

（振りかへつて復た市街の方を見る）

ダリュー　前世からの戀人ですね。約束されたる土地ですね。人生にはたしかさうしたものがあります。

アンドレー　併し閣下、前世からの戀人といふやうな者は、こんな北の暗い國へ來てこそ道理と思ひますが、フランスには、少なくとも女にさういふものがございますまいね。明るい國の人間は淺い戀をします。其の代り急です。底まで透き徹つた小川の瀨のやうに、急な思ひをするのが、フランス人の習ひでございませう。

モルチエール　此處で女の話なんか怪しからんな。

ダリュー　フランス男は戰をしながら戀を論ずるさ。

モルチエール　戀を論ずるもいゝが、早く陛下をクレムリンへ御供したいものだな。

アンドレー　ミロラドヴヰッチ少將が歸つてから、彼れ是れ二時間近くなりませう。もう、町の使節が來てよい時刻ですね。あゝ御覽なさい、今やつと敵軍の後衛が町を出はづれました。あの森の蔭に續いてるのが其れです。あれでクツーゾフ元帥の率ゐて居られる九萬がすつかり退却した譯です。

ダリュー　やあ、ミュラー將軍が市街の入口で盛に歡迎せられてゐるぞ。貧民どもが珍しさうに集つて來るぢやないか　まるで觀せ物扱だ。

ナポレオン　クレムリン！　響のいゝ言葉た。あの邊が宮城だらうな。おい！　地圖を見せないか。

（アンドレー、市街の地圖を披いて捧げ

る。ナポレオン、手に取つて見て)

ふむ。

(顔を上げ、また市街を見入つて)

あれだ。クレムリン、クレムリン。俺はあの宮中の繪を見た事がある。あの大きなサロンには、さう〳〵、イタリヤから磨かせて來た大きな大理石の柱があつた。あの前にアレキサンドルと后とが並んで腰をかけて居た。あのアレキサンドルの神經質らしい顔は、決して憎い顔ぢやない。私の兄弟にして、つき合つてやりたいと思つた。

(直立して凝視してゐた將校等互に顔を見合はせる。ナポレオン、顧みて)

ねえ、さうだらう? 全くルッスは憎くない國民だと思はないか。俺は好きだよ、俺は。

モルチエール　全く憎さげの無い國民でございますな。のろつとして居て、素直で、勇敢で。

ダリュー　いや、我々の脈管に流れてゐる血が同じセルトの源だから・・・

アンドレー　それもさうでせうが、一方から言ふと寧ろ違つてるから相惹くのかも知れません。異性相惹く道理ですね。永い間冷たい外部の壓迫で、反抗的に沸いた彼等の血は、永久に熱いのです。所が、自然が温めて呉れた我々の血は冷熱が早い。僕はむしろ、僕が西南の人であるといふ理由で、此の東北の神祕な國民を慕ひたいと思ひます。

モルチエール　はゝ、君の言ふことは、あんまり感に入り過ぎて可かんよ。第一我々は征服者だぜ。強きものが弱きものを愛する關係だぜ、忘れちやあ可かん。

アンドレー　ですが、愛は強い弱いの關係ではありません。

モルチエール　はゝ、生意氣を言ふなよ。

ダリュー　まあいゝさ。若いからなあ。戰をしながら戀を論ずる筆法だらう。ねえ、君。

(ナポレオンは地圖を卷いて手に持つたまゝ、そこらを大股に往つたり來たりして居たが、寄つて來て)

ナポレオン　まだ來ないか。遲いぢやないか。

モルチエール　もう來さうなものでございますな。おい君、一つ偵察にやつて呉れ。

アンドレー　は。

(下手へ行つて何か命ずると、一人の士官急ぎ足に降り去る)

ダリュー　陛下はお疲れであらうから、そこらへ假りに何したら何うだらう。

ナポレオン　要らん〳〵。俺の顔に疲れが見えるか。

ダリュー　いや、お顔色は却つて益々活氣を帶びて参るやうでございますが、何にしても一週間以來のお疲れでございますから。

ナポレオン　俺には疲勞といふ事は無い。此の眼の輝くのは、それ、運命が眼の前に來たからさ。此の晴れた空に、此の壯麗な景色を見て、興奮せずに居られるか。ダリューなぞも顔色が違つて來たぜ。つい先つきまで君等の顔にはボロディノの影が粘りついてゐた死の影がついてゐた。それが今ぢやモスコウの影が反射してゐる。生の影だ。みんなの眼が躍つて居る。今にクレムリンの城へ這入つたら、君等は一番がけに何をするだらうな。モルチエールは何が欲しいか。

モルチエール　久しぶりで善い葡萄酒でも御馳走になりませうかな。

アンドレー　私は先づ靜かな部屋に引つ込んで、この興奮の心の褪せない内に日記をつけたいものでございます。

ダリュー　私もそれに贊成。

ナポレオン　さう〳〵、ダリューは歴史家で詩人だつたな。

ダリュー　「だつたな」は恐れ入りました。

ナポレオン　忘れて居たのだよ。

ダリュー　忘れられて少しも恨みはございませんな。私なぞは新世紀の上にさしかけてゐる十八世紀の影のやうなものですから。

ナポレオン　はゝ、悟つたね。

ダリュー　却つて此のアンドレー君などが十九世紀の若い息を呼吸してゐて、自然と詩人になつてゐます。

ナポレオン　ふん。若い者の時代か。俺なぞは

ダリュー、どちらの組か、若い方か古い方か。

ダリュー　さやう：：陛下は勿論私なぞよりも若くていらせられるし、國家の上では新しい時代を代表せらるゝのでございませう。

ナポレオン　其の譯は？

ダリュー　さやう：：十八世紀の纖弱な冷たい文明に對して、強い熱力の要求が陛下のお體に權化したと申したら、如何でせうか。

ナポレオン　ふむ。併し其の力は何處から來るだらう。私に言はすれば運命だ、運命！　力はそこから來る。若し私が十九世紀の時代を暗示するとしたら、私は運命の權化だと言つて貰ひたい。

アンドレー（進み出でて）陛下、陛下、私は唯今の瞬間に於いて、陛下に神仙の如き高風を感じます。運命の權化！　何といふ深いお言葉でございませう、手が此の通り感激に顫へて居ります。何うか握手を願ひたうございます。

ナポレオン　よし〳〵。

（微笑しながら固く握手する。其の途端に市街の方で爆發の音が一つする。皆々愕然として其の方を向く。ナポレオンも俄に正氣づいたやうに屹となる）

モルチェール　あれだ〳〵。外郭に接した東の處に煙が上つてゐる　何事だらう？　うむ。騎兵が這入つて行くやうだから、今に分るだらう。是れや長く斯うして居るのは危險かも知れんよ。使節は何うしたのだらう？　何うして遲いのだらう？

（一同無言で、待遠しい樣子に市街の方を見る。ナポレオン、こちらを向いて）

ナポレオン　今に來る。屹度來るよ。先つきの報告はまだか。もう一度偵察にやつて見い。

アンドレー　は。

（再び下手へ行つて令を傳へる）

ダリュー　町が段々靜かになつて來るやうに感ずるが、譃かねえ。動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるで無くなつたやうな感じがする。見給へ、馬鹿に森として來たぢやないか。河の瀨の音が聞える。

モルチェール　はゝ、生の町がまた死の町になつたかな。モスコウがボロディノになるのかな。

ナポレオン　（モルチェールの方へ鋭い一瞥を投げて）

馬鹿ッ！

モルチェール　（姿勢を正してナポレオンの方へ向き）

陛下、お氣に觸りましたら御免下さいませ。併し私は飽くまでも戰地といふことを忘れたくないと思ひます。モスコウに何時敵軍が現れても驚かない覺悟はして居たいと思ひます。私は今以てまだ確實にモスコウを占領したとは思つて居りません。

（ナポレオン、無言のまゝ往つたり來たりしてゐる。皆々無言。一同の胸に一種の氣まづい心持が流れ込む。しばらくして）

ナポレオン　分つたよ、分つたよ。併し私はもう確實にモスコウを占領したつもりで居るね。先つきからクレムリンの宮城で、大夜會を開く手筈まで考へて居る。二百九十五

寺といふ夥しい寺の坊主どもを集めて諭してやらうと、其の演說の腹案まで拵へた。寺の建物には、殘らず大きな字でMaison de ma mère と彫りつけさせてやらうと考へた。此のモスコウには、お前等のうち誰を總督にしようかとそんな事まで考へてゐる。モスコウ占領！ もう動かん事實だ。夢ぢやない、夢ぢやない。

（言つてぢつと市街の方を見下して立つてゐる。皆々同じ方を見て無言。此のとき一同の胸に一種の不安が萌す心持。やがてナポレオンはそこらを歩きはじめる）

ダリュー　もう何時だらう？ 日があんな方へ行つたね。何うだらう、兵をやつてロストプチン總督を連れて來させては。

モルチエール　何うもそれがよくはないかな。暗くなると面倒だぞ。先つきの爆聲が何か意味があるのぢやなからうか。

（ナポレオンはまた市街の方を見て沈默してゐる。日影が薄くなつて、處々の庭木の森が黑んで來る。間を置いて）

アンドレー　あゝ、來た／＼！ 報告を持つて來た。

（騎兵一人、飛び下りて、アンドレーの前に直立し、封書箱を渡す。手早く開いて）

アンドレー　あゝ、是れは先つきの爆聲に關聯した事です。

（急いで讀む內に顏の色がかはる）

是れは怪しからん。大事件でございます。

（皆々驚いて聞耳を立てる。ナポレオンも無言で立つて聞いてゐる）

ロストプチン總督が囚徒を悉く解放した樣子で、其の一人が先程の爆發に關して我が軍に捕縛せられました。場處はドロゴミロフの門に近い市街の空家で。爆發の原因等は不明、出火にはならなかつたが、附近で擧動不審な一人の韃靼人を捕縛したのださうでございます。

モルチエール　其の韃靼人を調べて見たのか。

アンドレー　取調べたが更に口を開かないとあります。

モルチエール　それや容易ならん事だ。すぐ市街を警戒しなくちやいくまい。

アンドレー　勿論やつてるやうです。

モルチエール　それから其の捕縛した韃靼人は連れて來たのか。居るならすぐ此處へ連れて來いつて。通譯を附けてな。

ナポレオン　なあに心配するには及ばない。大勢はもう極まつてゐる。この運命は動くものぢやない。そいつは追つ放してやれ。

モルチエール　でございますが、此の際注意しませんと……

ナポレオン　いゝさ、いゝさ。それは何か偶然爆發したんだらうよ。偶然の事だ、恐るゝに足らん。

（立つてゐる騎兵に向いて）

さう言つて行け。

（騎兵敬禮をして引きかへす）

それよりか、一方の樣子は何うだ。一向に報告が來んぢやないか。誰れか此の內で行つて見い。

アンドレー　私が參りませう。

（敬禮をして行かうとする時第二の傳令來る）

おゝ、報告か。

（下手へ急ぎ足に行くと、馬から飛び下りた士官、あわてた樣子で、聲を潛めて話す。アンドレーの顏色また／＼變る。他の二人も寄つて來て報告を聞き、顏を見合はす。ちよつと密話をして、ナポレオ

ンの方を振り向くと、立つて鋭く皆の方を見てゐたナポレオンの眼と見合つて、あわてて他を向く。同時にアンドレーがつか／＼と群を離れて進み寄り、顫へた聲で）

陛下！　モスコウは空虚でございます！

ナポレオン　え、？　モスコウが空虚？

アンドレー　はい、空虚でございます。

（ナポレオンは聞くと同時にアンドレーの上に投げた鋭い眼光を、市街の方へ轉じて、無言のまゝぢつと見てゐる。顔の色變る。アンドレー其の他、皆々佇立したまゝ、一齊にナポレオンの横顔を見つめて、身動きせず。しばらくの間、森として聲無き氣持）

ナポレオン　馬車を持つて來い。

（士官の一人走り去ると、跡からナポレオン大股につか／＼と丘を下手に降りる。皆々沈默のまゝ續いて降り去る。丘の上には夕日が淋しく薄れて殘る）（幕）

第二場

モスコウ市の一方の入口たるドロゴミロフの見附が夕日を負うて遠見に立つてゐる。路傍の土手上の景。

髪も髯も蓬々と伸び、垢まびれの顔の蒼白く窶れた韃靼人二人、土手に腰をかけ、下の路からかけて向うの方を眺めてゐる體で幕上る。

甲　一體どうしたと言ふんだ。馬鹿に騒ぎ出したぢやないか。

乙　町へ遣入つて來ると言ふんだらうよ。

甲　それにしてもお前をよく放免しやがつたなあ。よつぽど言ひ抜けがうまかつたと見えるな。

乙　俺は言ひ抜けなんかしやしねえ。たゞ言葉は一切韃靼語のほかは分りませんといふ風をして默つて居ただけさ。なあに、俺の體はどうせもう、持てあましてる體だあな。殺さうが活さうが、悲しくもなけれや、嬉しくも無え。總督さんに頼まれたから、火だけはつけてやるが、つけねえかも知れねえ。どつちだつていゝ事だ。

甲　だつてお前、同じロシア人だな。頼まれた以上は：：（向うを見て）あゝ、通る／＼。あれがナポレオンだらう。來ねえ／＼。行つて見ようよ。

（甲が乙を引つ張るやうにして後へ降りる）　（舞臺廻る）

第三場

ドロゴミロフの見附前、夕暮の光景、門の兩側に數人の衛兵が立つてゐる。路を離れて前場の韃靼人二人及び貧民體のもの三四人まばらに立つて見てゐる。

ナポレオンは馬車を降り、徒歩で、第一場の人々を從へ、ミュラーに先導せられて門の前まで來る。

ミュラー　是れがドロゴミロフの見附でございます。御命令で兵は總て一足先に市街へ入れて置きました。

（ナポレオンは、見附の入口でばたりと歩を止め、石門を見上げて立つてゐる。皆々一様に立止まる。しばらく無言）

ナポレオン　もう是れでいゝ。此の門さへ見れば、私は滿足だ。今夜は私は引きかへして此の村へ泊らう。ミュラーは市街の方を氣をつ

けい。

（言つてすた〳〵と跡へ歸らうとする。皆々驚く。ミュラー、急いで其の前に立ちふさがる）

ミュラー　陛下、それはまた何うした譯でございます。こゝまでお出でになつて引つかへすと仰しやるのは意を得ません。縱ひ市民は遁走しても、市街と宮殿とは殘つて居ります。陛下、是れが此の大戰爭の目的地たるモスコウの町でございます。是非お這入りを願ひます。申すまでもなく危險は少しもございません。ミュラーが身を以てお守り申して居ります。危險をお恐れになる陛下ではない。此處からお引つかへしになるといふ法は、斷じてございません。

（ナポレオン、再び門の方を向いて、見上げたまゝ、默して答へず）

モルチエール　ちよつとでも、クレムリンの宮城へ陛下がお這入りになれば、一般の士氣が振ひます。

アンドレー　陛下はモスコウの町に這入るのが運命だと仰せられたでございませんか。其の通りになつて參つたのです。躊躇なさる理由はございません。

（熱心に進み寄つて）

運命！　運命！　陛下、運命の門はこゝに開いて居ります。たゞ一足です。クレムリンの門も開いて居ります。我等、フランス人の手で明けて待つて居ります。あれ程待ち焦れておいでになつたモスコウへ來たのでございませんか。陛下は運命の權化だと仰しやつた、あの豫言が今一足で充されます。よしロシア人は一人も居なからうが、フランス人、モスコウで結構でございませんか。何うかお這入り下さい。陛下、我々がお手を取りませうか。馬車にお召しなさいますか。

ナポレオン　（ぢつとアンドレーの顏を見て、やや涙ぐみ）

運命！　運命！　運命の門！

（アンドレーの肩に兩手をかけ）

空虛なモスコウ！　空虛なクレムリン！　はは、はゝ。

（絕望的に笑ひすてて、すた〳〵と門の中に這入る。皆々驚いてついて這入る。跡に衞兵も見物人も居なくなると、先程の韃靼人二人門の前に進み出で、人々の這入つた跡を見送つて）

乙　運命の門だとよ。

甲　這入つて行つちやつた。

乙　は、は。

（乙が氣の無い笑ひを一聲したまゝ、二人とも口を明き、窪んだ眼を一杯に見ひらいて、無意味に門を見て居る。日が暮れて行く）

（幕）

（モスクワはフランス人にはモスクウであらうし、クレムリンはロシア人にはクレムリださうである。又ダリューは實際は此の時四十六歲であつた。是等は舞臺上の發音の便宜や筋の便宜で詩的特權の自由を用ひた。）

◇

◎個々の告白、事々の告白、すべて誠實であればそれでよろしい。既に告白した告白と、未だ告白せざる告白とに論なく、一切個々の事實、自己內心の實行を結合しようとする時に、初めて人生觀上の努力が生ずる。人生觀とは統一觀といふことに外ならぬ。而して統一觀がさう手輕に成り立つ譯のものではない。お手輕料理の統一觀なんぞ、我々の前に何程の値打があるものか。（『覺がき』より）

競争（縮圖劇）

場所　或る海濱の旅館の裏手、座敷から橋がかりに濱邊に臨んで建てた涼屋、籐椅子、テーブルなど備付けてある。こゝへ出て居る客は二人きり。

時　初秋の夜

人物　羽庭
　　田室
　　清水たまえ

羽庭。もう私達も、そろ／＼歸り支度をしなくちやなりませんね。一月といや長いやうだが、斯うなつて見ると、あつけないものですね。

清水。えゝ、全くですわね。夢のやう、でも羽庭さんは一月いらしつたのですが、私のはまだ、まる三週間にもなりませんよ。

羽庭　さうです／＼、あなたのいらつしやつたのは、僕等が來てから、ちやうど十日目でした。僕はあれ以來の事を、不思議なほどあざやかにおぼえてゐます。あの晩は、そら、やつぱりこんなやうに暗い晩で、私たちが其暗いのを利用して、濱邊から覗き込んで、下座敷にぐつたりとなつていらつしやるあなたを、殘酷なほどよく見ましたつけ。

清水。ほんとにひどい方ねえ、私知つてゐたら、懲らしてあげるのでしたつけ。

羽庭　所がなか／＼懲らされる段ぢやない、さかさまに、こつちから逆襲しようといふんですからね。田室と來ちやあ、とてもあなたなんかの及ぶ所ぢやない。人間もあゝづう／＼しくなつて來ると、たしかに強者ですね、人を征服するに足りますね。

清水。でもあの方のは、たゞ肉的強者なんでせう？　靈の征服者にはなれませんわね。

羽庭　さうでせうか？　僕も元來その主義なのですが、此の節少々不安になつて來ました。世の中はやつぱり肉から征服してかゝらなけりや、負けさうですね。

清水　私、さうは信じませんわ。やつぱし心が先ですよ。肉體的に來る誘惑は一時は強いやうですけど、それだけだと跡が殺風景ですよ、 しもゆかしい所がありません。

羽庭。たとへば　　？

清水。たとへば……？

羽庭。あなたが假りにさうした誘惑を受けたとしますかね。

清水　えゝ、ようございます、假りにですよ。

羽庭　假りに。さうしたら、あなたはどうなさるでせう？

清水　わたし？

羽庭　えゝ。

清水　それは知れてますわ。一喝の下に斥けてやります。

羽庭　一喝の下に？

清水　えゝ一喝の下に。

羽庭　はゝ、それはだめだ。僕の見てゐる女といふものは、そこへ行くと弱いものです。僕が不安に思ふのはそれですよ。

清水　いけません〳〵。それはまだあなたが女の本たうの心持を知つていらつしやらないからです。それはねえ、他に氣を引かれるものが別に何もなくて、そのまあ…男なら男がそれほど厭なのでもないといふ場合なら、それは隨分どんな機で無理から誘惑されてしまふ事が無いとも限りません。けど一方に心をひかれるほどのゆかしいものがあつて、比較するとなれば、いくら一方が肉的な亂暴な事をして來たからつて、さうたやすく自由になるものぢやありませんよ。いくら女だからつて、さう見くびつたものぢやありません。そこへ行けば、男の方こそ却つていくぢが無いといふぢやありませんか。弱いのは男ですよ、それこそ肉體的誘惑でも受けようものなら、ぐにや〳〵になつて了ふと言ふから。

羽庭　つまり男は正直なのですね、すぐ眞に受けて了ふのです。

清水　あら、苦しい辯護ね。さうだと、何だか女ばかりが不正直なやうに聞えますよ。いい面の皮ですわ。

羽庭。いや、そんな譯ぢやないんです。無論女だつて…あゝ、もう僕は退却しよう、いつでも此の邊まで來ると擊退されて了ふんだから、つまらない〳〵。

清水　えゝ？　何ですつて？　どうおつしやる？

羽庭　……

清水　羽庭さん！　擊退ですつて？　ほゝゝ、何の事？　それは。聞かしてちやうだい、ね。

羽庭　清水さん！

清水　えゝ。

羽庭　……

清水　波が光りますこと。あんなに暗くつて、やつぱり何處かに光りがあるのですわね、反射する所を見ると。

羽庭。あの中には發光體のものもゐるのでせう。

清水　さうでせうか？　あら〳〵、あんなに光つてよ。それにちつとは星明りもありますわね。…人が減つたせゐだか、淋しくなりましたこと。つい此の間までは、どんな暗い晩だつて、人影の絕えたことはなかつたのですが。向うの家なんか火が消えたやうに森としてゐますわ。それに風の寒いこと、東京ももう秋でせうね。

羽庭　急に歸りたくなつたのでせう？

清水　えゝ、里心がついてね。けれども實際は歸りたくないの。又あのいやな東京へ歸らなくちやならないかと思ふと、心細い氣持になりますわ。あなた歸りたいでせう？

羽庭　いゝえ、僕はいつまでも斯うしてゐたいと思ふ位だから、東京なんかてんで思ひ出しもしません。清水さんなんか、仕事が仕事だから、いゝ加減こんな所へ來ていらつしやると、また華やかな都會が戀しくなる筈ですがねえ。音樂會の夢は見ませんか。

清水　ですけれど、羽庭さん…たゞ華やかな席へ出て、人にわい〳〵言はれる位の事で、本當の滿足が得られるでせうか？　私の胸の底には、もつと大きな傷が口を明いてるのですよ。そんな上つらの事で、其の傷が癒えるでせうか。…私は東京にゐても淋しいんですよ。それはね、あゝして華手な社會に立ちまじつてゐますと、氣は紛れますけれど、それはたゞ麻醉劑でしびらせたやうなものです、一時忘れてゐるだけの事ですよ。是れからまた、相も變らず、あのピアノ臺にしがみついて…あゝ、もう、私…

羽庭　でも清水さん、あなたはさうして…

（此の途端に田室入り來る）

田室　何だかいやにしんねこだね。おい、氣をつけえ、羽庭君。清水さんもいけないや。僕がちよつと油斷をすると、もうすぐ是れだから困つちまふ。

清水　何をです？

田室。何だつて彼んだつて、一體いけないや、さう內證話ばかししてゐちやあ。

清水　內證話なんかしやしません、ねえ、羽庭さん。

羽庭　君等には分らない話をしてゐたのさ。

田室。分つてるよ。また例の人生だらう。人生が淋しくて運命が神祕で、そこで、二人は道づれになりませう、てな話だらう？　六道の辻で女を拐かすやうな話はよせよ。

清水　田室さん、そんな事を言ふのは、およしなさい。口のわるい！

田室　口はわるくても、腹はこれで極いゝものです。一體口の惡いものは腹は綺麗なものですよ。却つて口のいゝ奴が油斷がならんて、口のいゝ奴が。僕なんかのは是れで、口ばつかりですからね。吹抜の鯉と同じです、腹はから〳〵、江戸ッ兒だ、其くせ生れは上方ですがね。

羽庭　あんまり口ばかりでもなささうだよ。少くとも手くらゐはちよい〳〵出します。

田室　おい、人聞のわるい事を言ふなよ。ちよいちよい手を出しやあ、掏兒の見習だぜ。ねえ、清水さん、向うの端に火が三つ四つ見えるでせう？

清水　どの邊にですか？　私眼がわるくなつたのかしら。

田室　そうら、此の見當、僕と顏を同じ方角に並べて御覽なさい。（女を抱くやうにして肩をつけ顏を寄せる）ねえ、見えるでせう？

清水　えゝえゝ。（女は羽庭の方へ氣を兼ねて、ちよつと身を引く）

田室　あれが、そら、昨日見て置いた出ッ端の所ですよ。夜と晝とは方角が違ふやうに見えませう？

清水　まるで違ひますのね。

田室　今日、船を出させればよかつたつけ、惜しいことをしましたよ。

（此のとき羽庭行きかける）

清水　羽庭さん、もうおやすみ？

羽庭　いや、ちよつとそこらをぶらついて來ます。

清水　さう？　ぢや、行つていらつしやい。

羽庭　あなた、最後の散歩はどうです。

清水　さうですね……

田室　寒くて、しやうがあるものか、およしなさい、およしなさい。（押し戾すやうに女の肩にさはる）君もよしたらどうだ。ぶらつくのもいゝが、あんまりぶら〳〵して、風邪でも引くと大變だぜ、避暑に來て、風邪をひいて歸つちや引き合はない。

清水　寒いたつて、そんなぢやありませんよ。みんなで御一緒に出かけたら？

田室　ちよいと〳〵、後生だから手を貸して下さい、襟！　襟！　あゝ、たまらん、痛い！　くすぐつたい！　早く〳〵。

（女の手を取つて自分の襟元に押し込む）

清水　どうなすつたの？　痛むんですか？　揉めばいゝんですか？

田室　蟲です〳〵、蟲が這入つたのです。

清水　え？　蟲？　おゝ、氣味がわるい。

田室　そら、此のかなぶん〳〵め、背中ぢう這ひ廻りやがつて。

清水　かなぶん〳〵ですか、馬鹿らしい。私また氣味のわるい蟲でも這入つたのかと思つたわ。騷ぎが大きいものだから、びつくらしましたわ。

（此のとき羽庭は出て行つた跡である）

田室　はゝ、はゝ、計略が圖にあたつたでせう？　羽庭は行つちまひましたよ。

清水　ほんとに人の惡い！

田室　それやさうと、愈々お別れが近づきましたね。

清水　全く早いものね、今もさう言つた所ですよ、まるで短い夢のやう。

田室　夢にしちやあ、隨分人じらしな夢でしたね。

清水　どうして？

田室　どうしてつて、あなたも隨分人が惡い。どこまで行つても、こゝまでお出でゞ、たうと、あすお立ちといふ所まで引ぱつて來たのだもの。

清水　また田室さんのお極り、そんな事をおつしやると、私もういや、行つちまひますよ。

田室　おつと待つて下さい、此のまゝ行かれちやあ、元も子も無くしてしまふ。

（女の手を取る、それをそつと除けて）

清水　ほんとにあなたは肉體的ねえ。

田室　え？

清水　いゝえ、こつちの話。はゝ。

田室　いけないね〳〵。あの羽庭と二人で、無暗と僕を肉體的にして了ふものだから……全體、人間といふものが肉體的ぢやありませんか。精神的だの神經的だのつて、それやあ氣が頭へ上つた奴の言ふ事です。昔から肉體的にならないラヴなんてものがありますか。あればそれは、ならないのぢやなくて、なれなかつたのだ。ならせれや、みんな肉體的になつて了ふ。それが惡けれや、第一人間の子孫からして絕やさなくちやなりません。古い理窟さね。

（マッチを摺り卷煙草に火をつけ、あとの燃さしを女と自分の顏の間に揭げて照し見る。雙方ちよつと顏を見合つて）

清水　でもあなた、それだけの議論をなさるのは眞面目だわね。

田室　眞面目ですとも、大まじめ。

清水　あなたのやうな人が眞面目におなんなさると、何だか氣の毒ね。滑稽ですわ。

田室　これは怪しからん。（女の兩手を取る、女は笑ひながらすりぬけようとする、それを固くつかんで）さあ　もう逃しません。人がまじめになつて話してるのを、滑稽だなんて。

清水　だつて、いゝぢやありませんか、私、その滑稽が好きですよ。おゝ、痛い、お離しなさいつてばね、そんな失敬な事をなさると、私おこりますよ。

（言ひながら兩手を取られたまゝぢつとしてゐる）

田室　おこつて下さい、おこらせでもしなくちや、あなたは眞面目になつて吳れないから。羽庭と話する時だけ、いやに生まじめになつてさ。僕に向ふと、まるで態度を一變するんだもの、ひどいや。

清水　あなたがさうさせるのですよ。だつてさうでせう？　羽庭さんのやうに生まじめな話ばかししてゐちや、窮屈でいけないつて、あなた、さうおつしやつたでせう？　實務家の癖に哲學者のやうな事ばかし言つてゐるつて。

田室　それや、あなた、いくら眞面目だつて、あゝどうも、人生だの藝術だのばつかし轉がしてゐた日には、たまりませんや。まじめつたつて、まじめになりやうがあります。ちよいと斯う急所々々で眞面目になつてさへ貫へば、それで話は極まらうと言ふものです。

（羽庭歸つて來て入口を這入つたまゝ立つてゐる、二人は氣がつかぬ）

清水　おゝ暑い、あなた、あんまり接近なさると暑くるしくなるんですよ。もつと離れていらつしやい。

田室　さう肱で押さなくつてもいゝでせう。

清水　あら、肱鐵砲？　はゝ、はゝ、御免なさいよ。そんな意味ぢやなくてよ。

田室　ねえ、清水さん、僕實際眞面目ですがねえ……

清水　枕辭がつきましたのね。

田室　あなた、あの羽庭と僕とどつちがお好き？

清水　へえ？　何ですつて？

田室　僕と羽庭とですよ。

清水　まあ、あなた、隨分亂暴な事をおつしやる方ね。あきれて了ふわ。こんな亂暴な人を、私、見たことが無い。

田室　だつて、それが要點です。事務を敏活ならしめる所以です。え？

清水　存じませんわ、そんな事。

田室　何もさう、色だの戀だのと言はなくつてもいゝでせう。たゞ友人として、フレンドとしてさ。どちらの柄がお氣に召しますか、中形？　絣？　それともどちらも木綿ものでお氣に入りませんか？

清水　お答への限りでございません。

田室。僕が好きなら好きだと、遠慮なく言ふことですよ、恥かしがるには及びません。

清水　田室さんてばねえ！　私、もういや。

田室　これで分りの早い男ですから、御希望の方はどうか……

清水　もう〳〵田室さんにはかなはない。私もう御免蒙りますよ、あすまたお目にかゝります。

田室　まだいゝでせう？　まだ早い。（時計を出して見て）九時にならない。もう少しいらつしやい。もう亂暴な事は申しませんから。

清水　でも、お蔭で今夜はおもしろうございました。

田室　羽庭がゐると尙おもしろかつたのだが。あの男、あれでなか〳〵……

（羽庭二人の方へ行く）

清水　おや、羽庭さん、いつ歸つていらしつて？　私ちつとも知りませんでしたわ。

（本能的に二三歩田室の側から離れる）

田室　這入つて來るにまで、しんねこだなあ、君。

羽庭　君の方が夢中で氣がつかなかつたんだよ。

田室　それやさうだ、どつちかに違ひない。鐘が鳴つたか撞木が鳴つたかさ。そこで？　今、君と僕とどつちが清水さんは好きだらうといふ問題を出した所さ。

清水　およしなさいよ、そんな話は。

田室　所が、どつちに團扇が上つたと思ふ？　君。

羽庭。どつちにも上らなかつたらうさ。

田室　所が上つたよ、君に。だからおごれと言ふことよ。

清水　あら、いけないのねえ、そんな出たらめばかし言つて。私こまつちまふ。

田室　はゝ、はゝ、あんまり喋つて咽が乾いて來た。麥酒でも飮んで來んか。

羽庭　（行きかける）

僕は飮みたくないから、君行つて來たまへ。

田室　つき合へ〳〵。

羽庭　いやだ。

田室　行かないか、頑固な男だな。

（出て行く、羽庭はそれを見送つて、ふりかへり、女と顏を見合す）

清水　（微笑して）肉體的誘惑！

羽庭　（眼が輝き體がふるへてゐる）僕、さうしてあなたの體を汚さして見ちやゐられない。

清水　あら、體を汚しなんかしませんわ。

羽庭　なあに、今に負けてしまひます。

清水　憚りながら、そんな女ぢやございませんよ。その事、あなたには、よく分つてる筈ぢやありませんか。

羽庭　ですけど、だめですよ。僕は不安です、僕に取つちや貴いあなたですもの、出來るなら、いつまでも其のまゝにして、讃美してゐたいのだけれど、人がさうして置かない、危險です……どうせさうなるものなら……さうだ！　一そ僕が……

（突然女を引よせ烈しく接吻する、女驚いて見上げて）

清水　あゝ！（首を垂れる）

羽庭　さう!……斯うして僕の手で救はせて下さい。肉で肉を防いでやる！

（再び女を抱く、女は頭を男の胸につける）

（幕）

◇

古い形式に則つた歌舞伎劇には、今日のところ新作は殆ど無用である、現代人の作る作には、いやでもおうでも其の複雜な思想の勝つた生活が影をさゝずには置かない、内容がそれ相應に這入つて來る、内容の目にさはる程度の歌舞伎劇は無意味である、歌舞伎の面白味は其の純形式的なところにある、よく言へば虚靈趣味、わるく言へば荒唐無稽趣味にある、成るべく内容に觸らないやうに、生きた生活意識を攪動しないやうに、時としてはわざと大とぼけにとぼけていはゆる江戸式のファンやウキツトバツトルで思想の理に落ちる手がかりをまいて了はなければつまらない、そして其の煙にまかれて居る見物をいやおうなしに色と線と運動と音響との節奏形式の中に包み上げて了ふだけが歌舞伎劇である、歌舞伎劇を見てゐる間は、必ず生活意識の眼をさましてはならない、現代人の作者にこゝまでとぼけることが出來ない、だから作らない方がいゝ。

啻に新作のみでなく、舊作の中にも、内容に觸れるものは概してありがたくない。此の節出すものは大抵其の内容も幾分は現代に同意のできる理路を持つものに限られてゐるやうだが、それですら、多くは情脈が陳腐で事件がツリヴキアルで我々には我慢してゐられない、伊賀越がどんなであらうと太功記がどんなであらうと、要するにくだらないものである、あれを眞劍になつて見てゐる見物の顔を見廻しては、いつも失笑を禁じ得ない、たゞ其の中のところどころに僕の音樂的結晶點があるだけに、沙漠でオアシスに出會つたほどの清爽な氣持でほつとして救はれる、是れは誰れしも同じ經驗であらう、其の結晶點すら、なまなか筋の通つたものであればあるほど少なくなつて來る、其の上に役者までが筋の上の人情か何かにくだらぬ力瘤を入れて、此の大事な結晶點を手薄に演じて了ふ、そこへ行くと上手でも下手でも、戻橋がいゝ、矢の根がいゝ、助六も道成寺も勸進帳もいゝ、それも出來るだけ節奏を純粹にして結晶させるだけいゝ、此のごろ見た新作改作の歌舞伎劇、たとへば玉藻の前とか葵の上とかいふたぐひのものは、ところどころ無意識的(?)に虚靈的な要素をつかつて、現代生活の手がかりを無くしようと試みた所もあり、形式の上にも階段をあしらつた玉藻の前の動作などで純形式を覘つた箇所がまじつてゐるに拘らず、面白くない、要するに現代人では舊式の歌舞伎劇はもう作れないのだ、人が違つて來たのだから仕方がない、藝術はやつぱり人である。

（「僕のページ」より）

海濱の一幕

娘　甲、乙
浴客の婦人　甲、乙
浴客の老人　甲、乙
男
書生　甲、乙
若者
小僧

娘甲（娘乙の肩につかまるやうにして歩きながら）まんだ早いせゐだか、人が遊んで居ないわよ。何だかきまりが悪いよう、こんなに早く髪なんか結つて。（頭に手をあてゝ見る。兩人立止まる）

娘乙　構ふもんか、人は人だによ、こちとらは爲ることをして、濟ますことを濟まして來たんだもの。大晦日だとつて忙しいと極つたものぢやないよ、町がこんなに靜かなのは、不景氣だからさ。

娘甲　不景氣だつて、嫌だよ此の人は、定さんの口眞似なんか止してお呉れよう。

娘乙　だつて不景氣ぢやないか。見せい、あの寶來屋の店なんか景物の看板ばつかし幅を利かせて、客は一人もありやしないぞよ。

娘甲　それや然だけれど、でも寶來屋の店は妾好きよ。御覽よ、しよつちう東京から珍らしいものを取り寄せてゐるに。天下堂だつて、名産堂だつて、并べてる繪葉書からして、何時も同じものばかしで、寄つて見る氣もしないがよ。寶來屋の店だけは、前を通ると自然に足が留まるでないか。あの右の窓に并べてあるもの、なんて好い色合なんだらう。下の黄色いぼかしになつてるのは、電燈の笠だとよ。それよりか、懸つてるリボン！　褪紅色はいゝわね。クリームの地に縞の這入つたのが見えるだらう？　高等な色合ねえ。空氣草履だつて、好いのがあるよ。表が水淺黄の天鵞絨で、鼻緒が繻珍の切れで。東京ぢや、もうあんなのでも廢つてるのかしら。何んなのが今流行つてるのだらう、行つて見たいわねえ。（うつとりとして海の方を見る眼が潤みを持つて美しい。又店の方を眺めて）ほら、遠くから見ても、あの窓だけ眼を明いたやうに明るいだらう？　輝いてるだらう？　此の町中で一番あの店だけが活きてるやうだ。他はみんなどろんとして、眠つてるやうだによ。

娘乙　それでゐて客が來ないんだから、倘の事不景氣ぢやないかよ。

娘甲　そら御覽よ、お前がそんな事を言ふから、早速お客が一人來た。

娘乙　長芋を賣りに出た小僧つ子だよ。

娘甲　だつてお客でないか。蟇口を買はうとつて見てゐるのだよ。此のごろ、中で口金の合はさる蟇口が來たから、屹度あれを見てゐるだよ。あれ〳〵、見な、源さんと定さんが遣つて來たよ。そら、橋のとこ、寒さうぢやないか。風があんなに上つ張をまくつてゐるよ。弱つてぐる〳〵舞をしてゐる。おゝ、をかしい。

娘乙　お止しよ、人が笑はな、御覽々々、橘屋へお客が着いた。夫婦客だよ。橘屋の門松は今年は小さいこと。やつぱり不景氣だからだよ。

娘甲　また始まつた。そら、定さん達がやつて

來る。早く隱れようよ。こんな所に立つてゐて、見つかると又からかふから。

娘乙　構はないよう。此方でからかつてやれ。でもあの衆も、もう上衣なんか着てゐるよ。

娘甲　源さんの上衣の模樣は馬鹿に赤いでないか。夷子さまが鯛でも釣つてる所だらうか。定さんのは浦島太郎だよ。ほら、來た〳〵。

(乙の後に隱れるやうにする)

娘乙　(すまして)こんちや。

男甲　よう〳〵。

男乙　もう早えおめかしか何かで、早えなあ、お前たちは。あつちの方へ行つて見べえ、一緒に行かねえかよ。

(二人とも立ちどまり、一寸女と話し合つて、向うへ行く。女二人も、少し離れてついて行く。すべてゆる〳〵と歩く。奥手の隅でまた止まる。入りかはつて次の三人出で來る)

浴客の婦人甲　御前さま、何といふ靜かな町でございませう。年の暮のやうぢやございませんね。

浴客の老人　もう春の景色だ、梅でも咲きさうだなあ。でも日が沈みかけたと見えて、段々寒くなるやうだ。

浴客の婦人乙　(仰いで町の家根越しに見える山脈を眺めて)まだあの山半分、日が射してゐますよ。日あたりは全く暖さうですことね。

浴客の老人　此の邊は枯山の色がみな暖さうに見える。枯葉が赤味を帶んで、枯れ切らない青草のやうなものも大分交つてゐる。そこへ日が射すから猶暖さうに見える。が、何だか斯う、鈍い血の色のやうに赤い山だな。

浴客の婦人甲　でも町は、かげると矢つ張り寒さうに見えますのね。人通りの少ないだけ、猶からつとして。

浴客の老人　人間といふ奴が巢を造ると、兎角暗い蔭が出來るものだ。(間を置いて)お前、あのピストルは仕舞つて置いたらうな。

浴客の婦人乙　はい、たしかに。

(二人とも向うへ行く。入りかはりに次の二人現はれる)

書生甲　君、さつき見たらう? あの砂濱に、大儀さうに横になつてゐた、あれは皆病人なんだよ。あゝして日光を吸うては、ごろ〳〵してゐる。それが大抵は若い活動ざかりの人なんだから、かはいさうさ。海岸の空氣や日光を、藥を飲むやうな心持で、吸うたり浴びたりしてゐる。あの時にこそ、全く人間は、自分の肉體が衰へ亡びて行くことを感ずるね。

書生乙　つまり、君が、身につまされるのだ。

書生甲　さうかも知れん。そら、見給へ、向うの角に柳の木が一本立つてゐて、其の手前の小流で、かみさんが煤けた小障子を洗つてゐるだらう? 樹の下ぢや、白粉を眞白に塗つた村娘と、上つ張を着て新しい手拭を首に結んだ浦の若い衆が立話をしてゐる。そつくり繪ぢやないか。いゝね、何となく長閑な別天地といふ感がして、都會の大晦日とは違ふねえ。

書生乙　馬鹿に氣に入つたやうだなあ。まあ、もう一二日居て見なけれや、分らんよ。

書生甲　全くいゝ。斯ういふ所で育つて、斯ういふ所で死んで、一生を何等の精神的煩悶もなしに過ごせるものは、幸福だ。斯ういふ所の若い人の顏には、見給へ、暗い運命の影なんてものは、てんで痕跡を印してゐない。彼等の太い突つ張つた聲は濤の音の反響であるし、彼等の濃い血色は、黄金色の蜜柑山や紺青の海から反射して來る光線で染め上げたのだ。逞しい骨格は、あの大山脈の模型

と言つてゐる。斯ういふ所からは、早く人生の悲哀を味ふやうな不運の兒は生じない譯だ。僕等のやうな、やくざな體のものは、實際、彼等の大自然と連なつたやうな健康が羨ましいなあ。

(言ひながら不圖また向うを見ると、柳の木蔭に立つてゐる甲の娘が彼のうつとりとした目附で此方を見守つてゐたのと、眼を見合す。娘はあわてて他を向く。書生がぢつと其の方を見てゐると、此の時忽ち、寶來屋の店先にゐた十二三許りの小僧が、長芋の藁苞にしたのを提げて足早に通りすぎる。と思ふと、突然また一人、紺の上つ張に三尺を締めた若者が、突かけ下駄で足音を殺しながら走つて行く。驚いてみな〲其の方を見る途端に、若者は先の小僧に追ひつき、後から肩を摑んで、ぐつと引き戻し睨みつける)

若者　野郎、出せ、隱すない。(懷に手を突つ込んで茶革の小さい新しい蟇口を引き出す)此の野郎、さんざ品物をいぢくり散しやがつた擧句に、之れを萬引しやがつて。ちやあんと睨んでゐたんだぞ。太え野郎め、さあ、何うしやがる。警察へ來い。警察へ來い。

小僧　(藁苞を抛り出し、頸首を取られたまゝ、うつむいて、涙ぐみ、懷を探つて)負けて呉んなよ、買ふから。よう、負けて呉んなよ。

若者　負けて呉んなも糞もあるかい。此の泥棒め。負からなきや盜んで行くつもりか。太え野郎。ぢや、是れ、二十錢に負けてやるから買つて行け。さうすれや、今日だけは許してやる。

小僧　(紙に包んだ銅貨を出しながら)さつき長芋を賣つたのが玆に二十錢あるけんど、是れみんな無くしちや叱られるから、十錢に負けてくんなよ。

若者。野郎、錢も無い癖に、品物なんかいぢくり廻しやがつて。初手から盜む氣で來やがつたらう? 負からねえ。其の二十錢みんな置いてけ。それでなけれや警察へ來い。(領がみを取つてこづく。大勢立つて見てゐる方へ向き、ちよつと笑つて、又小僧の頸首をゆすり)さあ、何うしやがるんだ。早くせい。大晦日だぞ。(小僧が澁々其の金を渡すのを引つたくり、蟇口を突きつけて)野郎、顏を上げえ。手前は一體何處の者だ。岡の者か。名は何だ。力造? 苗字を言へ、苗字を。隱したつて直ぐ知れるこんだ。下を向くなつて事よ。今になつて恥かしがるにや及ばねえ。さあ、皆さんに此の顏をよく見て置いて貰ふんだ。(小僧の顏を仰向けさせて、見物の方を見、またちよつと笑ふ)一度泥棒すれやあ、一生泥棒だぞ。おれがよく手前の顏を見覺えといてやる。今度斯ういふ事をすれやあ、懲役だぞ。さあ、よし。是れでな、手前の顏はこゝいらの人の眼にや、泥棒といふ極印がついたんだ。惡い事をしたつて、すぐに取つ捕まるぞ。さあ、此の蟇口を持つて行け。

(突き離して若者は行つた。見物人の間につぶやきの聲が一しきり起つて、去るものもあり、立つたまゝ小僧の爲ること事を見てゐるものもある。小僧は泣きもせず、眞蒼な顏をして、心もち顫へながら靜かに藁苞を拾つて、周圍の人々の顏をちらと偸むやうに見、しよんぼりとして向うへ這入る、人々四方へ散じ、二人の娘のみ殘る)

娘甲　かはいさうぢやないかよ。

娘乙　何がかはいさうなものか。自分で惡い事をしたでないか。

娘甲　家へ歸つて何うするづら。あんなに顏を

曝されて、もう此の土地にや居づらからう。

娘乙　まだ子供だもの。

娘甲　だつて、大きくなつたつて人は忘れやしない。

娘乙　其のうちにや、何處かへ突つ走つてでも了ふづらよ。

娘甲　爲さんも、譯こそ違ふが、ちやうどあんな風にして突つ走つたけよ。

娘乙　あら嫌だ、お前まだ爲さんの事を忘れないでゐるのかよ。(笑を隱した眼で甲の顏を見ると、甲は心持顏を赤めて)

娘甲　さうぢやないけんど、あんな風にして否應なしに旅へ出る人もあるし、源さんや定さんのやうに、出たい〱と言つてゐて出得ない衆もあると思つたからさ。そら、源さんがお前を呼んでるによ。

娘乙　いやだ、あんな手つきをして呼んでるよ。さあ行つて見ようよ。(つれ立つて去る。今まで向うの店の前に背中を見せて立つて居た二人の書生、こちらを振り向いて無言のまゝ娘の跡を見送つてゐると、段々暗くなりかけた柳の木のあちら邊から、旅舍の軒の電燈が二つ三つぽつと點つて來る)

(幕)

◇

▲西洋で、寫生文として最も古いものは、ボカチオの作デカメロンの緒言(イントロダクション)であらう。殊にその前半がさうである。千三百四十八年から九年に渉つて、フロレンスの町に惡疫が猖獗を極めた。七人の宮女と三人の紳士とが、それを數哩の市外に避けて、どうせ長くは生きぬのだから、生ある中、出來るだけ氣儘に暮して、逸樂を縱にしようといふ所から、百物語の發端は起つて來るのだが、まだその前、渠等が市外に去らぬ前に、市民が疫病の襲ふ所となつて悶え苦しむ有樣、續々と枕を並べて死んで行く慘鼻の樣から、片附けるものもない死屍を餓ゑた犬が貪り食つて、忽ち病毒に感染して、その儘斃れて行く樣なぞを歷然と目の前に浮ぶやうに描き出した所は、疑ひもなき寫生文である。

▲今の所謂寫生文は未完成(アンフイニッシュド)のもの、無形式(フォームレッス)のもので、それだけで、完成したものと見ることは出來なからう。いはゞ寫生文は、手習ひにいゝ、他日完成したものを作るべき準備として、筆ならしをするにいゝ、筆力を養ふにいゝ。それのみで滿足して、進まなかつたならば、或は何の役にも立たぬかも知れぬ。

▲尤も、未完成のものが、すべて必ず興味がないとは限らぬ。レンブラントのスケッチは、雪舟の墨繪にも比較すべきものであるが、その下書である所にまた一種の興味は無論あるが、然し、スケッチでいゝものは、それが完成せらるればなほいゝ如く、未完成の寫生文も、それが完成すればなほいゝものとなる譯である。

▲寫生文の興味は、下繪の興味と同じであるといつたが、或は現に今の寫生文の中にも、渾然とした興味を與ふるものがあるといふかも知れぬ。自分が前にいつたのは、所謂寫生文なるもの全體についてのことで説者の言の如きものも實際あるに違ひない。けれども、これについては、自ら異つた解釋をしなければならぬ。即ち、文學の上には、初中終の形式がなく、表面はなしにではないけれども、作者の內生命、卽ち感じの上に一種の形式がある。換言すれば、作者心內の感じをもつて散漫なる文字以外に、その文章を統一してゐる點があるのだ。されば、この意味より云へば、この種の寫生文は、形式もあり、完成されてもゐると、いつてよいのである。(『今の寫生文』より)

復活（五幕）

（トルストイ原作、アンリ・バタイユ脚色）

トルストイの小説『復活』(Resurrection)は千八百九十九年の作で、晩年の作者の面を代表する名篇である。是れが小説として、藝術として、乃至思想教義の宣傳として、社會組織の批評としての研究は、既に種々の人によつてなされた所であるが、その賛否いづれに拘らず、十九世紀末の最も重大な一著作として、世界を動かしたものであることは言ふを俟たない。

小説と劇とは固より方式を異にした藝術であるから、小説の寫すところが其のまゝ劇になることは困難である。たゞ如何なる程度まで原作の感じ、思想、人物、事件を劇中に生かし得るかといふだけが比較の興味である。從つて小説から脚色した劇の善惡が、原作小説の責任でないことは言ふまでもない。

小説『復活』を劇に脚色したものでは、フランスのアンリ・バタイユ（Henry Bataille）の作がある。私がそれを見たのは千八百三年にビアボム・ツリー（Beerbohm Tree）がロンドンの「陛下座」で其の英譯を演じたときである。

今回の此の脚本はトルストイの原作小説とバタイユの脚本とそれに小改竄を加へたツリーの所演と、三つを本にして更に「藝術座」第三回の上演臺本に適するやう、再脚色を施したもので、大正三年三月二十六日から六日間帝國劇場で演ずる。重なる役割の定まつてゐるは松井須磨子のカチューシャである。

尚小説『復活』の飜譯には英譯にロイス・モード(Loise Maude)のがあり、邦譯に内田魯庵氏のがある。

人物

ネフリュドフ（公爵）
シモンソン（國事犯囚）
チホン（老僕）
ファナーリン（辯護士）
陪審長、陪審の商人、同教師、同大佐、同職工組合長、他七人
病院の助手醫、同醫長
看守、押丁、小使、召使、護送兵等
男囚徒若干人
マスロワ（カチューシャ）（女囚）
フョードシア（女囚）
ミシー（コルチャーギン侯爵家の令孃）
マリア（國事犯の女囚）
一の叔母、二の叔母（ネフリュドフの）
老女中、若女中
老女囚、綽名大ロシヤ、綽名美人、無言の女等の女囚徒

時代
現時

場所
ロシヤの田舍、モスクワ及びシベリヤ

第一幕

第一場

モスクワ市の貴族ネフリュードフの家の寢室の一部、中央下手に寄つて立派な寢臺、正面上手にカーテンを引いた窓、上手横に扉、又寢臺の前には見事な小卓、其の上に火の點つた銀の蠟燭皿が載せてある。夜更けの心持。季節は四月。

ネフリュードフは上等の眞白なリンネルの寢衣を着て寢臺の上にすわり伸べた兩脚に羽蒲團をかけたまゝ、寢がけの紙卷煙草を吸ひながら蠟燭の火で一枚の寫眞を見てゐる。

ネフリュードフ　（生あくびをして）あゝあ。コルチャーギンの夜會もいゝが、あゝ、どうも立てつゞけにやられちや、たまらない、第一體がつゞかないからなあ。しかし、ミシーは憎くないね。初めの内あんまり持ちかけやうがしつこいので氣味が惡かつたが、今ぢや向うの仕うちも自然になるし、こつちもだんだんなじんで來たせゐか、いゝ心持で、お相手が出來るやうになつた。ふゝ、ミシー！　ミシー！（寫眞にちよつと接吻して）私がお前さんにきまつた返事をしないのは、お前さんが嫌ひだからぢやないのだよ。私には或る主のある女で、少々困つたのがあるのだ。私の地面内の田舍にゐるのだが、どうしても女の方で切れて呉れない。併しこの頃はまた若い士官に岡惚れして浮れてゐるといふから、今に片づくだらう。田舍女は思ひ切りの惡いくせに浮氣だからね、全くいやになるよ。田舍女と言や、あゝ、もう十年からになるが、カチューシャはどうしたらう？　長い昔の事だね。あれは復活祭の晩だつた。さう〳〵、あれと二人向ひあつて窓に腰をかけてゐると、外は一面の靄のこめた月夜だつた。下の川からは氷の割れる音が聞えて、遠くの方から復活祭の歌が聞える。あの時カチューシャが手拍子を取つて私も一緒に中音で歌を歌つたが、あゝあゝ、もうみんな遠い昔の事だ。明日はまたコルチャーギンへ行つてミシーのお供で美術館へ行くのかな。あゝあゝ、（また生あくび）疲れちやつた！　コルチャーギン、田舍貴族の細君の浮氣者、カチューシャ、復活祭の歌、復活祭の歌、あゝあゝ、（寢て枕元の蠟燭皿を取り蠟燭の火を吹き消す、舞臺暗くなる、ダーク、チェーンジ）

第二場

舞臺の眞暗な中から復活の讚美歌が遠く聞えて來る。其うちにパッと明るくなると田舍の別莊の一室に變つてゐる。正面上手に作りつけて寢牀、カーテンがしぼつてある。下手は大きな窓、そこから月夜に遠く雪の野の景色が見える。三月の復活祭の頃で薄い靄が一面にこめてゐる趣。時々向うの川の氷の破れる音が聞える。室の下手と上手に扉。

女中二人、若い方は寢牀を直して居り年取つた方は窓から外を見てゐる。

老女中　もう何時だえ？

若い女中　（枕元の置時計を見て）もう十分で十二時ですよ。

老女中　ぢや、もう十分たつとキリスト樣が蘇らつしやるんだね――今夜は何ていふ氣候だらう？　明るくつて、それで暖い靄が立つてゐて、まるで夏の晩のやうだ。接骨木

の花が匂つてゐること！

若い女中　あなたもうおやすみなすつちやどう？　あとは私とチホン爺さんとで十分ですよ。

老女中　いゝえ、私はお歸りまで待つてゐて復活祭の接吻をしなくちやならないのだよ。瓶の水だの、タウヱルだの石鹼だのをよく見てお置きよ。

（遠くで此時鐘が鳴る）

若い女中　復活祭の鐘が鳴り出した！

老女中　「キリストは蘇り給へり」

若い女中　「キリストは蘇り給へり」

（二人一寸抱き合ふ）

若旦那はまたすぐお立ちだつていふぢやありませんか？

老女中　あゝ、さうとも、明日の朝は是非立つていらつしやらなくちやならないのさ。トルコへ戰爭においでなさるのだよ。その前にちよつとソニヤ叔母さまとラウラ叔母さまに會ひにいらつしやつたのだから、どんな事があつても、それより長く御逗留は出來ないのだ。それやさうと、カチューシャは何うしたえ？

若い女中　あれは奧樣方と一緒の馬車で敎會のお祭に行つたのですよ。白い服を着て赤い簪をさして、めかしこんでさ。

老女中　奧樣方と一緒の馬車で？　へん、牛乳屋の私生兒が馬車に乘つてかい！　そして、若旦那さまも御一緒の馬車かえ？

若い女中　いゝえ、若旦那はお着きになるとすぐ、服もかへないで馬でいらつしやいました。此前いらつしやつた時よく運動にお乘り遊ばしたあの年とつた方の馬がお好きなのだよ。

老女中　此前たつて、つい一昨年いらつしやつたのだが、あの時はまだ大學生の帽子を被つて、書生々々していらつしやつたが、今度見ると立派におなんなすつた事ねえ。髯なんかはやしてほんとに立派におなんなすつたよ。

若い女中　（窓の方へ行き）御覽なさい〳〵、もうみんな敎會から歸ると見えて、提灯が見え出しましたこと！　あの一番早い提灯が二つ、屹度家の方ですよ。

老女中　ちやお迎に出なくちや……

（二人出て行く、戶の外で）

一の叔母の聲　さあ〳〵、お這入り。

二の叔母の聲　氣をつけておあるきよ。

ネフリュドフの聲　はあ〳〵、大丈夫です、よくおぼえてゐますから。

（ネフリュドフと二人の叔母入り來る）

一の叔母　之がお前さんのお部屋ですよ。すつかり元のとほりですよ。

ネフリュドフ　全く元の通りですね。

二の叔母　あの寢牀も、テーブルも、それから神さまのみ像も、みんなそつくり元のまゝだらう？

老女中　（勿體らしく進みよつて）「キリストは蘇り給へり」

ネフリュドフ　（微笑して）さう、さう。私はお前をおぼえてゐるよ。

一の叔母　お前、笑つてゐて、何もしないね。軍隊へ這入つてから、神さまの事を忘れたのぢやあるまいね？　復活祭にはお前、上下の隔てなくみんなが抱き合つて接吻するものぢやないか。此の邊ではまだみんな其尊い習慣を守つてゐますよ。

ネフリュドフ　さうでしたつけね。なに、忘れやしないのですがね、ついその、あちらにゐるとあんまりやらないものですからね。（室内を見まはして心ありげに）全く何も變つてゐませんね。一昨年のまゝですね。それから叔母さんたちまでまだ白髮一本も見えませんねえ！

二の叔母　變つたのはお前ですよ。本當にこ

んな立派な軍人になつて、ちよつと見分けがつかない程ですよ。何よりも其髯が立派だねえ。

ネフリュドフ　また髯ですか？（笑つて）私がこゝへ來てから一等よく聞いたのはキリスト樣の復活と髯が生えたといふことです。近衞は中尉になるとこいつを生やすのが規則ですからね、髯は卽ち位なのです。

一の叔母　（寢牀を見て）お前、蒲團を二枚かけたら、寒くはなからうね。

二の叔母　湯たんぽでも入れてあげようか！

ネフリュドフ　いゝえ、叔母さま、決してそんな御心配には及びません。暖です〱。それよりかもうよつぽど遲いやうですから、あなた方はどうかおやすみ下さい、さ、早くおやすみ下さい、風邪でもおひきになるといけません。

（扉を叩く音がする）

一の叔母　百姓衆がお前に復活祭の接吻をしに來たのですよ。（ネフリュドフたじろぐ）尊い習慣だから、してやつて下さいよ。

ネフリュドフ　おはひり。

（一群の農民、帽子を手に持ち這入つて來る。先づ神の前に一禮してからネフリュドフに辭儀をする）

農民甲　（進み出て）若旦那さま、御無事でお着きなさいましておめでたうございます。

ネフリュドフ　やあ、今晩は。お前の家はたしか川向うだつたね。今晩は、お爺さん。私はいつもお前がたの事を思ひ出してゐたよ。今晩は。君にはたしか子供の折よく驢馬に乘せて貰つたつけね。やあ、今晩は、今晩は、今晩は。

農民甲　若旦那さま、私等みなして復活祭の卵を差上げに參りましたが、斯うして鬱金色に染めた卵でございます、神さまの思召でございますから、どうぞ受けさつしやつて下さいまし。

ネフリュドフ　ありがたう、見事な色をした卵だね！　さ、お前から手初めに接吻して呉れ。

農民甲　（袖で口を拭ひながら）若旦那さま、待たつしやつて下さい。斯うして口を綺麗に拭いて置きますから……「キリストは蘇り給へり」（ネフリュドフの顏に三度接吻する）

ネフリュドフ　それからお爺さん。それから。

（農民交る〲卵を捧げ、口を拭ひ、「キリストは蘇りたまへり」と言つて接吻する）

一の叔母　さ、もう、お前は疲れたでせうからおやすみ。

ネフリュドフ　はあ、疲れましたから、それでは明日。ぢや皆さん、卵をありがたう。（農民出て行く、それを戶口まで見送つてあとをしめ）あの大きな口で三度もつゞけざまに接吻された時は、觀念はしてゐてもちよつと驚きました。硬い髯で顏中引つかゝれるかと思ひました。（大股に室內をあるきながら）此の机でしたね、私が一昨年卒業論文を書いたのは。あの時の紫のインキのしみがまだ殘つてゐますよ。

二の叔母　さうとも、お前、そつくり昔のまゝにしてあるよ。それはさうとお前は明日立つて戰爭へ行くといふことだが、大丈夫だらうかねえ？

ネフリュドフ　大丈夫ですとも、六ケ月たつとまた休暇を取つてやつて來ますよ。そして昔のやうにいろんな面白い本でも讀んであげませう。

一の叔母　どうかねえ。では今夜は早くおやすみ、寢牀の支度はいゝかしら（下手の戶口の所へ行つて呼ぶ）カチューシャ、カチューシャ！　ちよつとおいで。

カチューシャの聲　はい〳〵。

一の叔母　（戸の外へ向つて）あのね、私の部屋にある上等の石鹼と、それから新しいタウエルとを若旦那さまに持つて來ておあげ。それから、チホンに水差を持つておいでつてね。

カチューシャの聲　はい、かしこまりました。

（ネフリュドフはカチューシャの聲に聞耳を立てる）

ネフリュドフ　さあ、叔母さん、これでいよいよ今夜はお別れにしませう。どうぞおやすみなすつて下さい。荷物ですか？　あれは今にチホンが來たら解いて貰ひますから御心配には及びません。どうぞ早くおやすみ下さい、私もすぐ寢ますから。（二人の叔母の手に接吻する）

二の叔母　ではおやすみ。よく暖かにして、風邪をひかないやうにおし。おやすみ、おやすみ。（額と兩頰とに三度接吻して上手口から出て行く）

一の叔母　明日の朝は乳入りのコーヒーにして置きますよ。ではおやすみ、おやすみ。（之も三度接吻して上手口から出て行く）

ネフリュドフ　（椅子に腰をかけぐつたりとなつて）あゝ、これでやつと樂になつた、年寄りといふものは何うしてあゝ諄いのかなあ！　カチューシャは何うしたらう？　早く會つて話して見たいものだ。（扉の方を見るとちやうど叩く音がする）おゝ、カチューシャか？　おはひり！（戸口まで行つて戸をあけると、老僕のチホンが水差を持つて入り來る）なんだ！　お前か？

チホン　はい、若旦那さま、おめでたうございます。が、あなたさまは、さぞお疲れさまでいらつしやいませう。（水差を盆に載せたまゝ卓の上に置いて頻りに口を拭ふのを見て）

ネフリュドフ　さあ〳〵、復活祭の接吻をして吳れ。（チホン、「キリストは蘇り給へり」といつて額に接吻する）私も戰地へ行く前に斯うして皆と會へて實に愉快だよ。

チホン　わたくし共も、まことにありがたい仕合せでございます。斯うして立派におなり遊ばした若旦那さまにお目にかゝるのでございますもの、長年御奉公の仕甲斐があつたと申すものでございます。

ネフリュドフ　こつちではみんな變りはないか？

チホン　（行李を解きながら）へえ〳〵、神樣のお蔭で此の爺まで、斯んなにぴん〳〵して居ります。

ネフリュドフ　それからお前の子供も孫も？

チホン　はい、みんな息災でございます。それからあのお好きなカメもまだ丈夫でございますし：：たゞあの年取つた馬の一つの方、それ、御存じでございませう？　今夜お乘りになつたのでない方のが、去年赤痢に取りつかれて死にましてございます、かはいさうな事をいたしました。

ネフリュドフ　さうか？　それはかはいさうだなあ。あゝ、その劍は出して置いて吳れ。それからそのリンネルと化粧箱だけ出して置いて吳れゝばいゝ。あゝ、その紙入れをお見せ。其の中にはな、一杯、女の手紙だの寫眞だのが這入つてゐるのだよ。

チホン　はゝあ、若旦那さま、いけませんぜ、いけませんぜ。成程、これは可なり重うございますな。

ネフリュドフ　はゝ、お前等にはさういふ世の中は分らないだらう？　な、爺や。

チホン　若旦那さまは、きつい色男におなんなさいましたな、へゝへゝ。

ネフリュドフ　馬鹿を言へ。これが世間並なのだよ。みんなやるから俺もやるのだ。此の中

には或大使館附の武官の細君から來た手紙があるが、私は其女のために決鬪までしたよ。

チホン　其女のために決鬪をなさいましたつて？　へえ！　若旦那さまもえらい色事師におなんなさいましたな。

ネフリュドフ　それから此の包と紐とは或る女優が送つて呉れたものだ。

チホン　若旦那さまはまあ、お變り遊ばしましたなあ！　つい一昨年までは、まだほんたうの書生さまで、よく理窟ばかり言つていらつしやいましたが：：何とかそれ、イギリスの學者でスペンサーとかおつしやいまして、今に此の御先祖からの大地面も財産も小作人どもに、たゞ呉れてやるやうな事をおつしやつていらつしやつたが。：：まあ〳〵、あれよりは今の方がよつぽどよろしうございます。若いときには女の二人や三人おこしらへ遊ばすのは當り前でございます。いや、よく立派な旦那さまにおなりなさいました。斯んな風に軍服を召して髯をはやして：：（ネフリュドフの額を見ると頻りに一枚の寫眞を見てゐる）若旦那さま、それも女衆の寫眞でございますか？

ネフリュドフ　カチューシャ！　カチューシャ！

チホン（不思議げに覗いて）：：あゝ、一昨年の寫眞でございますな。私も寫つて居ります。眞中が若旦那さまで、右が大叔母さま、左がカチューシャ、其の前に私が坐つてをつて、カメも寫つて居ります。カチューシャは全くいゝ娘になりましたな、若旦那さま。

ネフリュドフ　あゝ、いゝ娘になつたが、今夜はどうしたのか、さつぱりやつて來ないね。

チホン　まだ御挨拶にも出ませんか？　はゝあ、屹度恥かしがつて居るのでございますよ。御主人さまにそんな事があるものか。今に呼んでまゐります。

ネフリュドフ　いや〳〵。わざ〳〵呼んで來なくつてもいゝから、爺やはもうお寢み。遲いからな。もう用はないから。

チホン　はい、さやうでございますか？　ではもう御用がございませんなら、これでお先へ失禮をいたします。（また口を拭いてゐるのを見てネフリュドフ顔を差出すと「キリストは蘇りたまへり」と言つて三度接吻して出て行く）

（ネフリュドフ窓の前へ行き外の景色を見てゐる。戸を叩く音）

ネフリュドフ　どなた？

カチューシャの聲　カチューシャ。

ネフリュドフ　カチューシャ、さあおはひり。さつきから隨分待つてゐたよ。

（カチューシャ、祭の白の晴着に赤いリボンの簪をさし、タウエルと石鹸と花束とを持つて這入つて來る）

カチューシャ　御免なさいな。花を揃へてゐたものですから、少し遲くなりましてすみません。此のタウエルとね、それから此の包ひ入りの石鹸は、特別に叔母さまからあなたに差上げるのでございますつて。それから此の花は：：つまらない花しか集まらないのですけれど：：でも少しは香ひがございますわ。

ネフリュドフ（石鹸と花とを兩手に持ち交交る嗅いで見て）ぢや、此の花はお前が呉れたのだね。どうも、ありがたう。どうも、ありがたう。さあ、まあ、こゝへ來ておかけ。

カチューシャ（恥ぢらふやうに横を向いて）もう遲うございますから、私、行きますわ、おやすみなさい。

ネフリュドフ　いけない〳〵。來るとすぐ行かないで、少しの間でいゝから話して行つてお呉れ、私なんだかお前に行かれると淋しくて

いけないから。そら、あの枕がまだ袋にはまつてゐないよ。あれを拵へて置いて呉れなくちや。

カチューシャ　あら、まだでしたか？　いけないわね。私、うまく行きますかしら。

（寢臺の傍へ行き枕を枕袋に入れようとする。ネフリュドフ、つか／＼と寄つて後から其頸に接吻する）

何をなさいますよ？（振り放して）……あなた、いけないぢやありませんか？　放して下さいよ、さ。後生ですから放して下さいよ！　いゝえ、よかありません！　よかありません！……（泣く）

ネフリュドフ　（手を放して）泣いちやいけない、泣いちやいけない。私が悪かつたから堪忍してお呉れ。お前はそんなに私を嫌ひだつたのか？　私はもつと私を愛してゐて呉れると思ひ込んぢやつたのだよ。私が戰地へ行く前にこゝまで來たのはたゞお前の顔が一目見たかつた許りでだよ。今日私は初めてこゝの家へ着いた時も、一番にお前が玄關まで出迎へて呉れるかしらと、そればつかり樂しみにして來て見ると、お前の姿はどこにも見えないぢやないか？　もう此の家には居ないのだと思つたら胸が一杯になつて了つた。其のうちにお前の聲が廊下の方で聞えたものだから私の心臓は一時に動悸がしはじめて、急に家の中が明るくなつたやうに思はれたよ。私はそれほどに思つてゐるに、お前は少しも私の事を思つて呉れないのだね！

カチューシャ　それは私だつて思つちやゐますけれど、だしぬけに今のやうな事をなさるのですもの、びつくりしますわ。私だつて、あなたがこゝへお着きになつたと思ふと、ひどく動悸がし出して、顔が火のやうにほてつて來ました。そのために出ることも出來なかつたのですよ。（うつむく）

ネフリュドフ　分つた／＼。だから私たちは、斯うして誰も居ない所でほんたうの話がしたいぢやないか……恐いことはないから、あそこへ腰かけてお呉れ。さ、お坐り、私決して亂暴な事はしないから。（背に手をかけて椅子に坐らせる）恐かないよ。

カチューシャ　もう恐かありませんわ。

ネフリュドフ　ね、さうだらう？　で、さつき教會で、儀式のあつた時は、お前、少しも私の方を見なかつたね。なぜさ？

カチューシャ　でも、きまりが悪かつたのですもの。

ネフリュドフ　あの時、お前は全く綺麗だつたよ。一方には燭臺の蠟燭が赤く燃えてゐて、戸の傍には銀色の袈裟をかけた坊さんが香爐を手に載せて立つてゐる、その眞中程に眞白の服を着て眞黒い髪をしてお前が坐つてゐて、ほんたうに美しかつたよ。

カチューシャ　あなたがそんなに見て下すつたのなら、半分嘘にしても嬉しうございますわ。

ネフリュドフ　嘘なことがあるものか！　さうさう、此寫眞を御覧、お前あの一昨年の祭の時の事を覺えてゐるか？

カチューシャ　えゝ、おぼえてゐます。

ネフリュドフ　二人一緒に駈けくらをしたね。私がお前の手を引いて、一、二、三で駈け出すと、お前の糊のついた下着がガハ／＼音がしたつけ。

カチューシャ　あらいやだ！　そんな事をおぼえていらして！　だけどあなたはすぐ駈け越してお了ひなさいましたわ。

ネフリュドフ　あゝ。それからどうしたつけ！

カチューシャ　それから私、あの連翹の茂みの後へ行つて、駈けることを止めてゐると、

ネフリュドフ　私がそこへ行かうと思つて、其

の方へ駈け出すはずみに茨の生えてる溝へ落つこちて了つて、

カチユーシャ　えゝ、あの時は私、どうしようかと思ひましたわ。

ネフリユドフ　やつとお前の手につかまつて這ひ上つたが、足はづぶ濡れで手には引つ掻き傷が出來て、みじめな樣だつたね。

カチユーシャ　でも、たうとう連翹の木の蔭で二人一緒になりましたわね。

ネフリユドフ　あゝ、あの連翹の木の蔭！　お前、あれを忘れてる。

カチユーシャ　いゝえ、私、あなたの傍へよつて、何の氣なしにあなたの服について茨を取つてゐると、あなたは何時か私の上にのしかゝつていらつしやつて私の手をきゆと摑んで接吻なすつたわ。

ネフリユドフ　するとお前は驚いて一二間駈け出して、白い花の散りかゝつた連翹の枝を折つて眞赤になつた頬を煽いでゐたね。

カチユーシャ　だつてひどいのですもの。でも、其爲めに、あなたを怨みなんかしませんでしたわ。

ネフリユドフ　あれから私はお前が忘れられなくなつたのだよ。（腰を抱きながら急に立ち上り）お前、何も聞えないか？　あの音は何だらう？

カチユーシャ（耳を澄して）ほゝ、あれは女中頭のお婆さんが鼾をかいてるのですよ。

ネフリユドフ（笑つて）なんだい、女中頭の鼾だつて？　だが鐘の音か何か聞えるね。（窓へ行つて明け放す）あゝ、好い夜だ！　潤んで暖かくて……さあ、こゝへ、私の傍へおいで。（二人向ひあつて窓に腰をかける）春になつたね！　あの月の眞下のところに割れ目の見えるのは、川の氷だらう？　あの音は氷の割れる音だね。

カチユーシャ　春になつたのですね！　お聞きなさいよ、もう一番鷄が鳴いてゐます……氷の碎ける音はあの森の後の川から聞えて來るのですよ。

ネフリユドフ　實にたまらなくいゝ景色ぢやないか？　斯うしてお前の手を取つて、此の景色の中をいつまでも〳〵あるいてゐたい！　おや〳〵、田圃にはまだ人が大勢ゐるやうだね？

カチユーシャ　あれは隣村の人たちが復活祭の火を燃やしに來たのでせう。

ネフリユドフ　その前でみんな歌を歌つてるやうだね？

カチユーシャ　そしておしまひにお祈りを言ふとそれが一年經たない内にかなふのださうでございます。

ネフリユドフ　お前も一つ歌をお歌ひ。そしてお祈りをして願をかけようよ　ね。

カチユーシャ　でも、私、できないのですもの。それに叔母さまのお目をさますと大變ですわ。

ネフリユドフ　大丈夫、低い聲で歌つたらいゝぢやないか。お前の名を入れた歌をお歌ひ。

カチユーシャ　さうねえ、ぢや、歌ひませうか？……（ちよつと考へて輕く手を拍ち）

カチユーシャかはいや
別れのつらさ
せめて淡雪とけぬ間と、
神にねがひをかけましよか
ジ、ジ、ジジピチツチ。

ネフリユドフ　もう一度。私も歌ふよ。

（二人して手を拍ち低く歌ふ）

さあ、歌を歌へば、もう一つ、復活祭の儀式があるだらう？　私とお前と脣に接吻すること、今日はみんな平等なのだから。

カチユーシャ　いゝえ、それは父親ばかりです

よ、他人は額に接吻するのです。

ネフリュドフ　ぢや、この他人は額をお出し。

カチューシャ　はい。

（すなほに額を出す、それを兩手に挾んだまゝ接吻せんとして）

ネフリュドフ　でもこんなかはいらしい額では、接吻する場所がないよ。だから唇にしてもいゝだらう？

カチューシャ　いけない〳〵。額だけ。

（避けんとするのを制してぢつと眼を見つめ口をつける、女それを唇に受ける。しばらくして目のさめたやうに）

あゝ。私どうしたのでせう？　いけない〳〵、後生ですから放して下さい。

ネフリュドフ　私はもうお前と此まゝには別れられないよ。

カチューシャ　（涙聲で）でも明日は戰地へお立ちなさるぢやありませんか。またいつお目にかゝれるか分らないものを、今夜きりそんな事をなすつて、殘酷ですわ。あゝ、私どうしたらいゝでせう？　私、もう行きますわ、いゝえ、行かなくちやならない、行かなくちやならない。

ネフリュドフ　（しばらく抱きとめようと　もがいて）そんなに言ふならおいで！

（女を手放して立つ。女はまた男の胸に頭をあて啜り泣きながら

カチューシャ　私、やつぱり行かれない、行かれない。（ひしと男にすがる、其時再びダーク、チェーンジ）

第三場

舞臺段々に明るくなると、第一場の場面に戻る。早朝の光が窓かけを透して射し入つて來る。

ネフリュドフは寢臺の上に眠つてゐる。下手の扉を叩く音に眼をさます。

ネフリュドフ　あゝ、古い夢を見たな。（戸の音に耳を向け）誰れだ？

召使　コルチャーギン樣から急のお使でございます。お手紙がこゝにございます。

（寢衣のまゝ起き出て戸口へ行つて手紙を受取り、寢臺に腰をかけてそれを讀む）

ネフリュドフ　「あなたさま昨夜は例の輕受合にて今日美術館へ御同道下され候やう　お言葉、樂しみにいたし居り候へど、よく〳〵考へ候へば今日あなたさまは、陪審官として裁判所へお出でなさる由のいつぞやのお話、萬一其方をお忘れ遊ばしては大へんと存じさつそく文してお知らせ申上候、其代り裁判所の方すみ次第私宅へお越し下されたく、御用すみの時刻を見はからひ、私、馬車にて裁判所までお迎ひにまゐり申候、あとはお目もじの上、ミシーより」（讀み了つて手紙をテーブルの上に投げ出し）さう〳〵、今日は裁判所へ行くのだつたな。馬鹿々々しい仕事もあつたものだ。どれ、もう起きよう。（ベルを押す）。

（幕）

第二幕

モスクワ巡廻裁判所内審議室、中央に一脚の大テーブル、周圍に椅子、上手に長椅子、正面中程及び左右の横手に扉。

小使甲乙テーブルの上を整理してゐる。

小使甲　今日の裁判は何の事件だらう！

小使乙　それ、あの、女郎の毒殺事件よ。知らないのかい！

小使甲　知らないよ。

小使乙　あんなに新聞で書き立ててゐるぢやないか！　マスロワといふ女が客の商人を毒殺した事件さ。

小使甲　さうかい。

（此時ドヤ〳〵と音して、正面の戸口からネフリュドフを初め十二人の陪審官等が這入つて來る。ネフリュドフは顏色が蒼ざめて、今にも卒倒しさうな樣子で、他のものに扶けられて入り來り、長椅子に倚りかゝる。他の人々は退屈したといふ風に體を伸したり、息をついたり、煙草を吹かしたり、そこらを歩き廻つたりしてゐる。小使出て行く）

陪審の教師　ネフリュドフ公爵、一たいどうなすつたのです？　カチューシャとおつしやいましたね！

陪審の商人　いや、誰れでもあゝなると、氣絶したくなりますぜ。拙者なぞも少々まゐりました、第一、女が不便でさあ。あれを罪に落さうとは、檢事もひどいや、人情が無いといふものだ。

陪審の退職大佐　では君？　この被告を無罪だと主張するのかね？

商人　無罪さ、勿論無罪さ。あれは大佐、竊盜だの人殺しだのと、そんな大それた事の出來る女ぢやごわせん。あの眼を見れやあ、分つてるぢやないか。

大佐　いや、大惡人といふものは、得てあゝいふ無邪氣な容貌をしてゐるものだ。君はいかんよ。被告が女だと、すぐ同情して了ふからいかんよ。

商人　大佐、そいつはいけない、女だから同情するといふ法はない。少なくとも吾輩に取つてはだね、せめて、美人だから同情すると言つて貰ひたいね。マスロワは全く素敵な美人だ。ねえ、ネフリュドフ公爵、さうぢやごわせんか？

陪審長　さあ諸君、どうか席について審議をお始め下さい。要するに問題は簡單です、本年二十七歳のカテリーナ又はカチューシャ・マスロワがシベリヤの商人スメルコフを、其のダイヤモンド入の指輪及び所持金を竊取する目的で毒殺した、共犯人の一老婆は拘引せられる日に死んで了つた、被告人マスロワは有罪なるか、無罪なるか、といふのであります。

教師　僕は、有罪ではあるが情狀酌量すべきものがあると考へます。

商人　いや、吾輩は無罪放免を主張します。あの女は決してそんな惡事を行ひ得るものでごわせん、重なる共犯人といふのが死んだ以上、到底動かない證據は上りつこはごわせん。罪の疑はしきは何とやら言ふ本文がごわすからな。吾輩は無罪放免を主張します。

大佐　これは怪しからん、他に二人までちやんと共犯人が出てゐるではないか、君。彼等は既に竊盜をしたに違ひないと定まつて了つた。さうだとすると、若しマスロワが彼等と共謀しなかつたら、彼等ホテルの傭人どもが金のありかを知らう筈がないではないか？

陪審長　それに被害者の鍵は現にマスロワが預つてゐたのですからな。

教師　それだけでは證據にはなりますまい。鍵を預つたからといつてホテルの傭人どもが、何も他の合鍵を用ひないとは限りますまい。

商人　ヒヤ〳〵。

教師　それから、金を竊んだといふが、此の女は其の金を何所にも所持して居りません。境遇が境遇だから、そんな大金を盜んだつて、使ひ道がないのです、隱す場所も無いのです。

商人　ヒヤ〳〵。それが圖星だ。

大佐　併し指輪を持つてゐる。

教師　それはたしかに貰つたのだといふ證據があります。

商人　あの指輪はづぬけて大きいですねえ。被害者の身體檢査は何うとか言ひましたね、陪審長？

陪審長　こゝに要點が筆記してあります。丈が六尺五寸。

商人　ふうん、見事な男でげすな。

陪審長　年齡四十歲前後、全身悉く腫物を生じ、皮膚の色は濃い藍色になつて紫色の斑が出てゐる。髮の毛は栗毛で、さはるとすぐ脫け落ちる。眼球は飛び出してゐて、角膜は黑ずんで居り、鼻、耳、口から薄い鼠色のとろとろした液が滲み出てゐる。

ネフリュドフ（長椅子から立ち上り）陪審長、私は今日或る重大な理由で、あの被告人の身の上に關し、非常な感動を受け、それがため陪審の席にも居られない程精神が興奮して、皆さんの御厄介になつたのでありますが、マスロワが最後に泣き叫んで言つた一言は、神に誓つて僞りでありません。此の事を眞に斷言し得るものは恐らく私一人であらうと信じますが、其の理由を、只今この席で述べるだけの決心がまだ私につきません。兎に角マスロワは竊盜を働いたり、人を殺したりする女でないことは、先程のお說の通りです。現に犯人はもう其罪を白狀して死んだではありませんか？　それ程の大罪を犯したものが、裁判廷に立つて、マスロワのやうな態度でゐられるものでは決してありません。千百の證人や證據物件よりも、このたゞ一つの心の證が大事であります。私はこゝで天地神明に誓つて、マスロワの辯明に僞りの無いことを繰返して置きます。

陪審長　併しマスロワがコニャック酒に亞砒酸を混じて其商人に飮ませたといふことを自白して居ります。

大佐　そして亞砒酸は毒藥ですからな。それについて自分の親戚に關する一つの例がありますから參考のためにお話しませう……

教師　いや、例には及びませんから、簡單に願ひます。亞砒酸の毒藥たることは吾々もまた認めて居りますが、マスロワは其商人を少し眠らせる爲だといつて、老婆から渡されたのを、信じて飮ませたのです。ですから輕々しくさういふ事を信じた過失の罪はあるかも知れないが、殺意は無かつたものと認めざるを得ません。

大佐　そこがさ、分らない所だよ、君。知りませんでした、殺すつもりはありませんでした、と犯人が言へば、君はすぐそれを信ずるのかね？　そんな言ひぬけは犯罪人のきまりぢやないか？

ネフリュドフ　成るほど、それは言ひぬけかも知れません、が、また眞實かも知れません。どちらとも分らない時には、たゞ其の當人について、さういふ事をするものであるか無いかを吾々が直覺で見とほす他はありません。其の心の證が何よりも貴いのです。證據などといふものは、たゞ物の外部だけしか照す力はありません。

大佐　だから吾々は吾々の心の證で、有罪だと見とほしたのではありませんか！　吾々の方がよつぽど筋道が立つて居る。

ネフリュドフ　それを見とほすには、何よりも其の當人を知つてゐなくちやなりません。マスロワの生ひ立ちから經歷、彼れが今日のやうな悲慘な境遇に陷つたまでの事情を、それも心の底の祕密にまで立ち入つて知つてゐる者でなくては正しい直覺は出來ません。

大佐　ふん、ではあなたは何か被告人に關する、祕密を御存じですか？　これは聞きものだ。

立ちかゝる、皆々その方へ向く）

ネフリュドフ　……（眼をつぶつてゐる）

陪審長　何か特別の祕密を御存じですなら、それを此の席で打ち明けて頂きたいものです。それが被告人のためにも何より利益な事と信じます。こゝでお打ち明けになることが出來ないやうな祕密だと、却つて公爵の心證に或る私情がまじつてゐるのぢやないかといふ疑ひを起させます。公爵の公平を疑ふ材料になるばかりです。さういふ事情なら却つて知らない方が公平な判定が下されませう。

ネフリュドフ　はゝ、公平！　私は事情も知らないで冷やかな心から公平だと思つてゐるものと、事情を知つて同感するために不公平だと呼ばれてゐるものと、どちらが果して眞の公平であるかを疑ふものです。

陪審長　さういふ御議論は法廷では許しません。

商人　公爵、兎に角その祕密な事情といふのを聞かせて下さい。吾輩は必ず何かそんな事があるのだと信じてゐましたぜ。不公平なんて、そんなべらぼうな事があるものですか、公平々々つて公平面を並べてる連中なんざ、あれやみんな人情無しでさ。だからそんな手合の鼻を明かしてやるために、その祕密の事情てのを、ぶちまけてお了ひなさい。吾輩は一から十まであなたに同感でさ。

ネフリュドフ　……（尙答へず）

大佐　ぢやあ、別に祕密の關係も無いものと認める外はありませんね。へつ〳〵、その方が公爵のためにもいゝやうだ。あんな女と祕密の關係なぞがあるとなると、ねえ君……

商人　あつたつて結構、憚りながらこゝにござらつしやる御連中でも、しかつめらしい顔はしてゐなさるが、どうだい、あの女を別嬪でないとは言へますまい？　別嬪だと思へば、もう其の心には祕密の關係が出來たのぢやござせんか？

陪審長　要するにマスロワの一身に關しては當然、法廷に立會はれる方々は、先刻檢事が述べられただけの事情を御承知の事と見るほかはありません。すなはち此女は立派な敎育を受けて、フランス語までも解し得るに拘らず、私生兒といふ遺傳で、罪惡の血を生れながら持つてゐたのです。身分ある家に引き取られながら、正當な生活を立てることが出來ないで、其恩に背いて自墮落の行ひをなし、遂に自分から妓樓に身を沈めたのです。そしてお客の商人をたらして其の所持金と指輪とを卷き上げんがため、鍵を預つて客のホテルに行き、ちやうど犯罪を行はんとする所をホテルの傭人二人に見つけられ、遂に三人共謀して其金を盜み、尙其罪跡を隱す目的で客を連れ歸つて毒殺したのであります。どうか是れだけの事實に基いて御意見をお述べ下さい。

大佐　それから檢事はうまい論告をしましたね。斯ういふのが卽ちデカダンの標本で、敎育ある墮落分子として最も多く社會に害毒を流すものであるから、社會は少しも之れを寬假すべき理由を認めないと、さういふ論告でしたね。

ネフリュドフ　此の女がそれほど惡むべき墮落者であるなら、其の罪は他人にあるのです。當人は却つて純潔で正直であつたが爲に墮落させられたに過ぎません。それは到底あなた等に分らない事です。私はたゞあの女の顔にいかに哀れな不幸な運命の影があり〳〵と跡を殘してゐるかを見て貰ひたいと思ふばかりです。

敎師　ですから、あなたにしか分つてゐない其の哀れな事情をお話しなすつたら如何です。

ネフリュドフ　……（尙答へず）

商人　（側へ行つて）さうなさい〳〵。それが一番近道でさあ。えゝ、公爵？

ネフリュドフ　（立つて商人の肩に手をかけ）許して下さい。今はどうも話せません。それといふのも私の卑怯からです。許して下さい、許して下さい。私はたゞ……私はたゞ……私の義務としてこれだけの事を言はなくちやゐられないのです、許して下さい。（椅子の上に倒れかゝる）

陪審長　さあ諸君、議論も盡きたやうですから、マスロワは謀殺犯として有罪なるか無罪なるか、情状酌量の餘地があるか無いか、起立によつて決を　りませう。（無罪有罪の起立を命じ、其數を數へる）その隅の所に着席してゐられる方は初めからどちらとも意志を表明なさらないやうですが、無罪とお考へですか、有罪とお考へですか、どちらにでもお立ち下さい。

陪審の老人職工組合長　人間が人間を捌く權利はありません。

陪審長　陪審官として法廷においでの上はさうはまゐりません。

組合長　世の中に誰れ一人罪の無いものがありませうか？　私等は神さまぢやない。

陪審長　ではマスロワは有罪ですか？

組合長　ですからすべての罪は赦されなくちやなりません。

陪審長　ではマスロワは無罪ですか？

組合長　無罪です。

陪審長　おや〳〵。それでは採決の結果、二人の多數を以て殺人犯マスロワは有罪と決定しました。

ネフリュドフ　（立ち上り）有罪？

商人　かはいさうになあ！

ネフリュドフ　それは實に殘刻です！　諸君、それは殘刻です！　私はそれを辯明する義務がある！　何もかも言つて了ひますから、どうか諸君、お待ち下さい……

陪審長　公爵、もう間に合ひません。審議は終つたのですから、採決の結果を尊重なさるやうに希望いたします。さあ、皆さん。（陪審長が先に立ち正面の戸口から出て行く〳〵）

ネフリュドフ　（一人あとに殘つて小使を呼び）陪審長の所へ行つて、ネフリュドフは病氣で列席せられませんと行つて來て呉れ。それからあの辯護士のファナーリンさんが控室に見えてゐるやうだから、此名刺を渡してちよつとお暇ならこゝ迄來て下さいと言つて呉れ。それから、今の事件の宣告が濟んだら、其の結果を聞いて來て呉れ。

（小使、出て行く、ネフリュードフは心の苦しみに堪へぬ樣子で室内をあるいてゐたが、テーブルの上にあつた法律全書を取つて、熱心に繰りはじめた。そこへファナーリンといふ名の賣れた辯護士が這入つて來る）

ファナーリン　やあ、ネフリュドフ公爵、今日は御苦勞さま、いかゞですか、裁判は進行してゐますか？

ネフリュドフ　今ちやうど宣告がある所です。

ファナーリン　あなたは何うしてこゝにおいでですか！　今日の陪審には列席なさらないのですか？　ひどくお顏色が惡いやうですね。どうかなさいましたか？

ネフリュドフ　いや、實は君に打ち明けて御相談したい事があるのです。私は此の事件の陪審官たる資格を斷つて被告マスロワのため控訴をし、それでいけなければ上告でも上訴でもして、是非ともあの女の寃罪をそゝいでやりたいと決心しました。

ファナーリン　大へん御執心ですね。併しまだ裁判はきまりますまい？　有罪と定まつたの

ですか?

ネフリュドフ　陪審の方で謀殺犯として有罪に決めて了つたのです。けれどもそれが無實であることは私がよく知つてゐるから、是非救つてやるのが私の義務だと思ふのです。それで手續の御面倒を一つお願ひしたいと思ひましてね。

ファナーリン　なる程、それは、ほかでもないあなたの事ですから、出來るだけの御盡力はいたしませうが。併し妙ですね、一囚徒のためにそれほどまで熱心におなりなさるといふのは。一體そのマスロワといふ女はもとからお知合ですか?

ネフリュドフ　知合です、或特別な關係を持つた女です。

ファナーリン　ふうむ!　あなたがねえ!　いや、併しそんな事は世間にもいくらもある事ですね。

ネフリュドフ　まあ其の先を聞いて呉れたまへ。關係と言つても、さう簡單なのぢやないのだ。今からちやうど十年前、田舍の別莊であの女が小間使をしてゐたところ、私が行き合つて軍隊生活の向う見ずから、つい一夜つきりに弄んで了つたのだ。

ファナーリン　ふむ〳〵。

ネフリュドフ　それが元で、女の姙娠となり、流浪となりして、たうとう今のやうな賣笑婦とまで墮落して了つたのです。

ファナーリン　さう聞けばかはいさうでもあるが、併しあなたに取つちや、そんな事は何でもありますまい。若いときには誰れでもやることです。あなた一人に限つた事ぢやない。それに、今日の墮落はあながち其の最初の誘惑のためだとは言へません。間接の遠因にはなつてゐるかも知れないが、直接の責任はあなたにある譯はありませんね。

ネフリュドフ　世間の人はさう言ふさ、私もさう言つて今まで自分の心を押しつぶしてゐた。併し今日私の良心は目をさまして來たのです。第一の罪惡が無ければ決して第二の罪惡は生れない。いくら遠い昔の罪惡でも、責任は其の第一歩にあるといふことをつくづく感じました。罪は罪を生んで、段々大きくなつて行く。私のあの過ちがたうとう斯んな恐ろしい結果になつたかと思ふと、私はもう此の裁判に立ち會ふ勇氣が無くなりました。

ファナーリン　で、其の女が冤罪だといふ理由はどこにあるのですか?

ネフリュドフ　それは第一が私の心證です。私は一目あれを認めると同時に、すぐ其の顏にそれが讀めたのです。さう思つて見て行くと、此事件のすべての證據はみんな不たしかなものばかりで、結局は人々の推定にすぎないと知れて來ました。斯ういふ境遇に陷るくらゐの女は、罪を犯すのが當然だといふ假定を腹の中にたてて、それから割出して行く判決に過ぎないのだ。それに比べれば私は遙によくあの女の境遇の祕密を知つてゐる、その私の推測が誰れの推測よりもたしかでなくてはならない。ですから、君、此の裁判を無效にする正式の手續を考へて下さい。費用などは幾らかゝつても構はない。

ファナーリン　承知しました。併し、どうしてそれが其の女だと分りましたか?　女が自身で法廷にそんな身の上ばなしをしたのですか?

ネフリュドフ　初めは私にも分らなかつたが、ふと呼び出された女の顏を見ると變つた中に不思議と昔のカチューシャといふ小間使に似た所があつて、それが私の眼さきにちらついてならない。何だか不安心でたまらないから、見まい〳〵としてゐても、やつぱり目

について離れない。そんな事のあらう筈はないと打ち消して見ても、心の底から〳〵とカチューシャの記憶が出て來て、だん〳〵はつきりとマスロワの顏に其の面影を認められるやうになつたのです。考へて見ると、をかしな話だが、昨夜不思議に十年前の事を夢に見ました。今まで忘れよう〳〵とつとめてゐた結果、まるで思ひ出しもなかつた事を、どうしたはずみかふつと夢に見たのが、今日の記憶を助けたに違ひありません。初めマスロワと言つてるあひだはまだ半信半疑でゐたが、カチューシャといふ名を言つたので愈々それに違ひないと分つたのです。そして向うも何度か私の顏を見たが、向うには私といふことは到底分らなかつたやうです。起訴狀の朗讀や、檢事の論告のたびに、顏を赤くして自分の罪狀に驚いてゐる樣子や、最後にたゞそんな惡い事をした覺えはないといつた限り泣きくづれたさまは、いぢらしくて見てゐられなかつた。そのため私はたうとう卒倒しかけたのです。あゝ、あの最後の言葉を思ひ出すと、今でも體がふるへて來る。

ファナーリン　分りました〳〵。あなたは大分感情が興奮してゐるやうだから、早くお歸りになつた方がいゝでせう。

（小使入り來る）

小使　たゞ今宣告がすみました。マスロワは徒刑囚としてシベリヤへ移されることになりました。

ネフリュドフ　えゝ、シベリヤ？（立ち上つたまゝ茫然としてゐる）

（小使去る）

ファナーリン　徒刑囚、シベリヤ。ようございます。早速一件書類を調べて控訴の手續をしてあげませうから、明日にもちよつと私の事務所へおいでを願ひます。其のとき萬事御相談をしませう。今日は早くお歸りなさるがいいと思ひます。

ネフリュドフ　ありがたう〳〵。それでは何分とも願ひます。さやうなら。

（ファナーリン、下手口から去る。ネフリュドフしばらく立ちゐて）

カチューシャがシベリヤへ。……それでいよいよ私のする事も分つて來た。私もシベリヤまで行かう。シベリヤはおろか、世界の果までもついて行つて、あれの體と靈魂とを救つてやらなくちやならない、さうだ、私にはもう財産も地位も用はない、身の累ひになるものは一切棄てて了つて、明日からは體一つになつて過去の罪を贖はなくちやならない。それでこそ、久しくなえてゐた良心に申譯が立つ。あゝさう思ふと何だか急に身が輕くなつて、清々するやうな氣がする。カチュー シャ、カチューシャ、決してお前一人をシベリヤへはやらないから堪忍して呉れよ。

（小使、下手口から入り來る）

小使　御婦人のかたが、馬車でお迎ひに見えました。

ネフリュドフ（ぎよつとして）今日は氣分が惡いから失禮しますと言つて呉れ。

（小使が出て行くと入れちがひにミシー盛裝して入り來る）

ミシー　何うかなすつたの？　手紙であんなにお約束して置いたのに、今日は失禮するなんて、ひどいわ。ほんとに御氣分が惡いのですか？

ネフリュドフ（慰めるやうにミシーの手を取つて）ミシーさん、堪忍して下さい、今日の裁判が私の氣を顛倒させて了つたのです。今日は氣分がわるくて、とても御一緒に行くことは出來ません。（ぢつとミシーの樣子を見てゐたが突き放すやうにして）或はこれき

り、永久御一緒に行くことは出來ないかも知れません。

ミシー　（泣聲になつて）あら、私どうしようかしら。なぜだしぬけにそんな事をおつしやるの？　何うかなすつたの？　今日の裁判でどんな事があつたのですか、聞かして頂戴。

ネフリュドフ　まあ、ちよつとこゝへおかけなさい。今日は實に重大な事があつたのです。お宅でゆつくり話せばいゝのだが、それももう無駄な事のやうですから、こゝでかいつまんで言つて置きます。よく聞いて置いて下さい。

ミシー　（段々眞面目になつて）何でせう？

ネフリュドフ　私はね、今までまだあなたと公然結婚の約束をした事はないが、その前に斯う言つたらあなたはどうします？――私は決して清淨無垢の人間ぢやないと、さう言つたら？

ミシー　別に何とも思やしませんわ。何をおつやるのだらう、ぐらゐにしか思やしません。

ネフリュドフ　私の過去には或る大きな罪惡があります。それを今いよ／＼贖はなくちやならないやうになつたのです。それを贖はない内は私は決して無垢の人間ぢやありません。

ミシー　ぢや、それを贖つたらいゝぢやありませんか？　私どんな事だつて、あなたの爲ならお手傳ひしますわ。

ネフリュドフ　それを贖ふためには、あなたと此の上の御交際は出來ないのです。あなたのお家とも是れきりになる他はありません。私は明日から、地位も財産もない、貧乏な平民になつて了ひます。

ミシー　まあ、そんな大變な事になるのですか？　一體その罪惡といふのは何でせう？　聞かせて下さいな？

ネフリュドフ　それは私が過去の男の生涯です。それだけ言つて置けばいゝでせう。

ミシー　男の生涯！

ネフリュドフ　あなたはまだ年が少ないから、此のうへ打ち明けて聞かすことは出來ませんが、私は其罪を贖ふために、囚徒の女と結婚するかも知れません。

ミシー　まあ、どうかしていらつしやるのね？

ネフリュドフ　どうもしちやゐません、本當の事を言つてゐるのです！

ミシー　ぢや、まあ！　あなたは私をだましていらつしやつたのですね？

ネフリュドフ　だました譯ぢや決してありませんが、今までは大して惡いとも思はなかつた事が、今日の裁判ではじめて恐ろしい事だと分つたのです。ですから此のうへあなたと御一緒にゐては、それこそあなたをだます事になります。どうか今までの事はあれきりにして忘れて下さい。お頼みです。

ミシー　あゝ、あなたは！（蒼白になつて）もう澤山です、もう澤山です！　分りました。どうか御自由になすつて下さい。私も歸りますわ。お母さまが待つていらつしやる筈だから……さやうなら。

（ミシー出て行く。ネフリュドフ見送つて立つてゐる）　　（幕）

第三幕

モスクワ監獄の女囚室の一、正面中央に大格子窓、其奥は薄暗い室と假定する、格子窓の上手に大扉、其横手に格子窓、下手横に鐵の小さい扉。室内には隅に寄せてベンチや粗末な寢臺や木箱が置いてある。遲い午後。

女囚三四人、マスロワを取卷いて騷いでゐる。

大ロシヤ（と綽名せられた女）（窓から外を見て）やい、そこにゐる爺、てめえ、もう濟んだのかい？

老女囚　だまれつたら！　業つくばりめ。お祈りの邪魔になるぢやないか！

大ロシヤ　何だと？　牢に這入りやがつて、お祈りも神さまもあるかい、大腸婆め。

老女囚　今に見てゐろよ、あたしが、何うするか。（神の像の前に膝をついて）お救ひのマリアさま、どうか私たちをお守り下さい。そしてあの大ロシヤめを足腰の立たない目にあはせてやつて下さい。

美人（と綽名せられた女）ほんとに、もう澤山だよ。あの肺病やみは奥でゴホ〳〵やつてゐるし、大ロシヤは惡たいのつきどほし、お婆さんはグシヤ〳〵お念佛ばかり言つてゐて、うるさくて〳〵しやうがない。

大ロシヤ（倚窓の外へ）さうだよ爺、私窩子だよ、モスクワの私窩子だよ。若くて綺麗でさ……羨ましくはないかい？

美人　一體誰れと話してるんだ？（覗いて見て）いやだ！　あの禿ちよろの、狆ころ親爺とだよ！　呆れつちまふよ。

看守（下手口から入つて來る）こら、靜にしないか？　大ロシヤ、窓の外へ何を言つてる？　窓を離れなさい、窓を離れなさい。

大ロシヤ　はい〳〵、小言を喰ふのはいつも私ばつかりよ。

看守　お前の聲が一番大きいからだ。

大ロシヤ　あの大腸婆さんだつて、隨分大きな聲をしますわ。

老女囚　餘計な事を喋るない。自分が叱られやがつたものだから、小言の相棒をこしらへようと思やがつて。看守さま、此の檻房で暴れるのはあいつ一人でございますよ。こつぴどく喰はしてやつておくんなさいまし。

大ロシヤ　何だとこの婆め。

看守　こら〳〵。二人ともそのざまは何だ？　靜にしないと、またひどい目に逢ふぞ。みんな仕事でもしてゐろ。

（マスロワは正面窓下のベンチに腰をかけ、兩手に額を埋めたまゝ、初めから何も言はないでゐる。フョードシアが之も無言で其傍で編物をしてゐる。老女囚は床にすわつて縫物をしはじめ、大ロシヤ、美人等はそこらにぐつたり腰をかけてる。一人の無言の女は、始終室の端から端へ行つたり來たりしてゐたが、此時寢牀の上に向うむきに寢て了ふ。舞臺しばらく森となる。看守出て行く）

フョードシア（マスロワに）お前さん、まだ泣いてゐるの？　ねえ、私、これからお前さんの事を姉さんと言はせて頂戴な。お湯を貰つて來てあげませうか？　其の卷パンでも喰べたらどう？　隨分お腹がすいたでせう？

美人　この人がシベリヤへ流されようとは、全く思はなかつたよ。無罪放免で、お金でも貰つて歸つて來るだらうと思つてゐたのさ。

フョードシア　一たい何年くらゐ向うに居ればいゝのだらう？

大ロシヤ　二十年ていふぢやないか。

フョードシア　二十年？　まあ！　そのあひだには死んぢまふわねえ。

大ロシヤ　死ぬとも。シベリヤへ行きや、大ていの奴は二年か三年でくたばつて了ふさうだよ。

フョードシア（すゝり泣きながら）私、死ぬまで姉さんの傍は離れないわ。

老女囚　それだから私が言はないことぢやな

い。いゝ辯護士を頼んで、うまく言ひぬけなくちや駄目だつて。

マスロワ　（顔を上げて）あゝ、もう何も言つてお呉れでない。シベリヤだつて何處だつて構ふものか。行けといふなら、何處へでも行くさ、シベリヤでもサガレンでも。私一人、此の世にゐるのがそんなに邪魔なら、いつでも來て殺すがいゝ、縛り首にでもするがいゝ。

老女囚　だつてお前、言ひぬけられるだけは言ひぬけなくちや譃だよ。

マスロワ　言ひぬけるつて、私には、言ひぬけることも何もありはしないのだもの。私や、何もしやしないのだよ。たゞ私がこんな商賣をしてるばつかしに、みんなで、よつてたかつて私を罪人におとしちやつたのだよ。だから私もうあきらめちやつた。こんな體になつたのが私の不運だよ。

老女囚　世間の奴ら、ほんとに憎いつちやない。みんな大惡人の癖に、大きな面をしてやがつて、こちと等のやうな弱いものが、何かするとすぐ罪人呼はりをしやあがる。こちと等の方がよつぽど善人だい。

大ロシヤ　全くさうだよ。

美人　正直なものが馬鹿を見るんだよ。

老女囚　あゝあ、お縋り申すのは神樣ばかりだ。（また聖像の前に立つて）お救ひのマリアさま、どうぞ私どもをお守り下さい。

大ロシヤ　およしよ、馬鹿らしい。

マスロワ　私たちの神さまは、もう疾くに居なくなつたのだねえ！（次の臺詞のあひだ、マスロワはそつと奥の室へ這入つて行く）

老女囚　何がさ、お前、神さまがおいでなさらなきや、此世は全くの闇だ。せめて神さまお一人をたよりに、私たちが生きて行けるのぢやないか？　神さまのお心に背いちや、私たちだつても何も出來やしない。

大ロシヤ　もう何も出來ないぢやないか！　こんな所へ來ちやあ、生きてるも死んでるも同じことだ。神さまに守つてもらつてる奴が牢屋へ來るかい。

老女囚　だから世間が惡いといふぢやないか！　手前だつて、神さまのお心に背いたためにこんな所へ來たとは思つてゐまい？

大ロシヤ　私は世の中に神さまも何も居ないと思つてゐるよ。甥が間違つた召集で徴兵に取られようとした時、村中のものが集つて巡査に手向ひしたのを、現在伯母の私がどうして默つて見てゐられるかい。私は飛び出して、甥を乘せた馬の鼻づらを押へて、巡査を刎ね飛ばしてやつた。それが惡いと言つてこんな牢屋へ入れやがつたのぢやないか。神さまがほんたうに居たら、こんな無法な眞似をさせて默つて見てゐるだらうか？

老女囚　さう言や私だつて、二度目の亭主の奴が、爺の癖に私の連れ子の阿魔と巫山戯た眞似をしやあがつて、あんまり情ないから、ぶつた切つてやつたのさ。どつちが善いか惡いかは神さまが見てゐて下さる。それから此の人だつて（美人の方を指して）こんなにお洒落はしてゐても、娑婆ぢや鐵道の線路番のおかみさんで、信號の旗を振るのを間違へた爲に汽車が衝突したのだといふぢやないか？　誰れが好き好んで汽車を衝突させる奴があるものか？　ねえ、怪我だあね。それを後の見せしめだといつてこんな所へ抛り込んで、抛り込まれたやつこそいゝ面の皮だ。お前さんが運わるく損な番に巡り合はせたのだよ。それからあの物を言はない女だつて、自分の子どもを河へ投げ込むにや、よく／＼辛い譯があつたのだらうさ。それはみんな神さまが御承知だ。

（この時、ちよつと森となる、先ほど寢牀

の上に横になつた女の、啜り泣きの聲が聞える。みな〳〵其方を振り向く）

フョードシア　あれはね、寢ると昔の事を思ひ出して、それが夢だか現だか、どうしても分らないのだつて。昔惚れてゐた錠前屋さんの事を思ひ出して泣くのだつて。かはいさうねえ。

（マスロワ、奧から酒氣を帶び、ヴォツカの瓶を持つて出て來る）

マスロワ　さあ、みんな景氣づけに一杯やらないか？

（腰をかけ、一口喇叭飲みにして、大ロシヤに渡す。老女囚は顏をしかめる。美人寄つて來て、瓶を大ロシヤの手からひつたくるやうにして飲んで、マスロワに返す）

フョードシア　（マスロワに）姉さん、またそんなに飲んぢやいけないわ、もうおよしなさいよ。

マスロワ　これが飲まずにゐられるかい、お前。飲むとこんなにいゝ氣持になるぢやないか？昔の事も今の事も、みんな忘れちやつて、たゞもういゝ氣持だが、今日は私、全く驚いちやつたよ。私が罪人だなんて、ねえ、どうすれば、そんな事が言へるのだらう？　このカチューシャが人を殺したなんて。ほんとに驚いて了ふわ！　その癖、みんなで、私を見ちやニコ〳〵して喜んでゐた癖に、裁判所でも、あの意地のわるい檢事のほかは、みんな私に色目をつかつてゐたよ。

美人　男といふ奴は、みんなそんなものよ。女と見れやあ、砂糖に蠅のたかるやうに集まつて來るのよ。

マスロワ　だけど、それが惡いのでもないし、誰れが惡いのでもないのよ。あたりまへの事なのよ。ねえ、私は斯う思ふのよ。一體世間の男は、どんなものでも、好い女を欲しがらないものはないし、好い女はさうして欲しがられるために出來たのだから、精々欲しがらすやうにするのが當りまへだわ、私も今まで隨分と、いろんな男に出つくはしたが、たゞの一人だつて私を欲しがらないものは無かつたよ。私なにも、自分が好い女だか何うだか、そんな事は知らないけれど、みんなが欲しがるから好い女なのだらうと極めちやつたのよ。全く、出つくはす男も、出つくはす男も、みんな私一人を的に、いろんな智慧を絞つたり、金をつかつたり、喧嘩をしたりして來たのだもの。

大ロシヤ　さうだらうとも。其の話を聞かしてお呉れよ。

マスロワ　聞かさうかねえ。まづ一番に、私にねらひをつけて來たのが、私の育てゝもらつた別莊の若旦那でね、身分の高い人だつたのよ。それがお前、たうとう私を手ごめにして、翌る朝、百圓札一枚私の懷へ押し込んだきり行つちまつて、二度とたよりもしなくなつたのよ。

老女囚　百圓札を！

マスロワ　あゝ、百圓札を。だけど其のころは私まだ金なんか欲しくなかつたものだから、其の金をみんなに呉れちやつて、さうかうしてゐる内に私は姙娠したと分つたのさ。それで別莊にも居づらくなつて、或る役人の家へ奉公したのさ。するとお前、そこの主人といふのが、五十面を下げて、うるさく私に附きまとつて來るぢやないか。あんまりうるさいものだから、馬鹿野郎とどなりつけといてそこも飛び出しさ。其のうち生み月になつたものだから、村で造り酒の拔け賣りをしてゐる産婆の家へころがり込んで、子どもだけはそこで生み落したが、其の子はすぐ孤兒院で死

んで了つた。

美人　かはいさうにねえ。

マスロワ　其の次に奉公したのが山林の役人だつたが、そこの主人は前の役人よりも上手だと見えてね、たうとう私をおびき出して、うまく手に入れて了やがつた。けれどそれも長くは續かないで、その家の細君と掴み合ひの大喧嘩をしてさ、給金を踏み倒されて飛び出しちやつた。（酒を又一口飲んで次へ廻す）

大ロシヤ　そんな分らない奴は、張り倒してやればいゝのに。

マスロワ　それから何處だつけ？　さう／＼、伯母が洗濯屋をしてゐるから、そこの洗濯女にならうかと思つたのだけどね、それもあんまりみじめだと思つて、桂庵の手から或る女主の家へ奉公したのさ。すると今度はそこの總領息子で中學の五年生といふのが、もう口髭なんかはやしてゐてね、學校そつちのけに私の跡ばつかし追ひ廻してゐるものだから、私がそゝのかしてでもゐるやうに母親から睨まれて、そこも長續きはしなかつたのさ。

美人　油斷もすきもあつたものぢやないね。

マスロワ　それから二度目に桂庵へ行くと、又傳手で或る旦那といふのに引き合されたが、それが髮も髯も胡麻鹽になつた脊の高い男でね、無氣味な眼つきをしてニヤ／＼笑ひながら私にふざけかゝつて來たのよ。するとおかみが其の男を次の間へ呼び出して「どうです旦那、田舍から出たての手いらずの處女ですよ」つて頻りと取り持つてゐたが、たうとう二十五圓で世話になることに話がついたの。でね、私は貰つた手附金で借りを返したり、着物や帽子を買つたりした。

美人　つまり旦那取りだね！

マスロワ　あゝ。だけど私は、よく／＼男運の惡い女だと見えてね、その旦那の世話で引き越した下宿の隣り部屋に、面白い氣象のお店者がゐて、いつか其の男と出來てしまつたのさ。さうなると私の氣象で、其のまゝぐづ／＼にしてゐるのがいやで、さつぱりと旦那に打ち明けて別れて貰つて、其の男と一緒に世帶を持つたよ。所がそのお店者め、いい頃合のところで、商用だとか何とか言つて出て行つたきり歸つて來ないで私を置き去りにして了やがつた。

大ロシヤ　憎いつたらありやしない。そんな奴こそ、目つけて引つぱたいてやるといゝのに。

マスロワ　さうなつて行くのが、つまり私の運だつたのだねえ。そして私はその頃からやけ酒を飲むことをおぼえて、一日酒浸りになつてることもあるし、しらふの時は、つく／＼自分で自分に愛想のつきることもあつて、もうもう私の體は何うなつてもいゝから、したい三昧の事をして過ごせといふ氣になつたよ。そして或る女衒の手で、私はたうとう今までゐた家へ身を沈めて了つた。それがめぐりめぐつて、こんな落ちになつちやつたのさ。ねえ、人の行末ほど分らないものはないわねえ！（また酒をあふる）はゝ、はゝ。今度はシベリヤかサガレンへでも行つて、そこの牢番のおかみさんにでもなるかねえ？

美人　でも、其程の男の中で、お前さんの方から打ち込んだ男があつたかえ？

マスロワ　それは一人や二人はあつたさ。私を置き去りにした男だつて、憎くはなかつたよ。だけどやつぱり一番長く殘つて、今でも時々思ひ出すのは、初戀だね。その公爵の若さまだけは、其の頃の、うぶな心でしみ／＼かはいゝと思つたつけが、今から思や薄情者だつたのねえ。

美人　お店者でも公爵でも、揃ひも揃つて薄情

者だつたのだね！

マスロワ　あゝ、だからもう〳〵男といふものはたよりにならないものと極めちやつたのさ。（また酒を飲む）あゝあ、隨分長い身の上話をしちやつたわね。

フョードシア　さあ姉さん、水をあげませう。もう其のお酒はおよしなさいよ。私が斯うしてしまつて置いてよ。（ベンチの下から藥罐を出し、水をコップについですゝめ、瓶をそこへ隱す）

マスロワ　あゝ、いゝとも。煙草が一服呑みたいねえ！　誰れも持つてゐないの？　おやおや、今日は不景氣だね。

フョードシア　私、あとであの押丁さんにねだつて置いてあげるわ。

マスロワ　ありがたうよ。今度はお前さん一つ身の上ばなしをおしよ。そんな優しいいゝ人が、どうして自分の御亭主を殺さうなんて、大それた事を思ひたつたの！

フョードシア　それはね……私ほんとに不仕合せだつたのよ。私がお嫁に行つた時は、やつとまだ十六だつたの。でね、見たことも無い人の所へ無理やりお嫁にやられて、私、ただ恐いばかしで、ほかになんにもありやしないのだから、泣いて〳〵泣き通して、どうしても其の人と一緒になつてやらなかつたの。私、今考へると、あの時の心持が自分でも分らないわ。きつと魔がさしたとでもいふのでせうね。たうとう其の人を殺しても自由になりたいと思つて、そんな眞似をしちやつたのですよ。それだのに、不思議なこともあるものだわね、八月ばかし保釋になつてる間に、すつかり其の人が好きになつたの。馭者をしてゐるのだけれど、それや氣立の優しい人でね、今ぢや兩方から離れられないやうになつてるのよ。それでどうか此の事を願ひ下げにしたいと思つたのだけれど、もう間にあはないのですつて。そして五年の宣告を受けて、此のさきどうして生きてゐられるでせう。ねえ、姉さん、察して頂戴。

（看守入り來る）

看守　マスロワ、これをお前の主人だといふ女の人が差し入れて行つたよ。金が二圓五十錢と卷煙草が一函。

マスロワ　お金と卷煙草！　そられ、言はないことぢやない。今日は何か福があると思つたのだよ。看守さん、どうも有りがたうございました。

看守　禮はその人に言へ。

マスロワ　それやさうですけどさ。その人はきつと私をかゝへてゐた家のおかみさんですよ。看守さん、どうぞよろしく言つて下さいな。（看守の出て行く後から追うて行つて、出口の所で銀貨を一つ握らす）さあ、これで、呑みたい〳〵と思つた煙草にもありつけたと。マッチはどこにしまつてあるの？（一本つけて、うまさうに貪り吸ふ）あゝあ、酒と煙草の中に私の命はあるんだね！

（煙の香を嗅いで他の女等、羨ましさうに寄つて來る）

老女四　（さつきから縫つてゐた針仕事を下に置いて）私にも一本相伴させてお呉れな。お前さん、辯護士に控訴の事を頼んだのかい？

大ロシヤ　私にも一本お呉れな。控訴する時には、お前さんの名を書かなくちやならないのだが、そんな手續はしなかつたらうね。私が知合の上手な辯護士を世話してあげようかしら。

老女四　そんな事は、お前さんよりも、私の方が明るいよ。

大ロシヤ　私、なにもお前さんに言つてるのぢ

やないよ。餘計な事をお言ひでないよ。

老女囚　へ、煙草が吞みたいものだから、急にお世辭をつかひやがつて。

大ロシヤ　どつちがだい？　この百ぴろ婆め。

老女囚　業つくばり、今に見てゐろ、晩になるとたゞぢや置かないから。

美人　まあ靜におしよ。

大ロシヤ　へん、誰れが百ぴろ婆なんか恐がるものかい。

（看守再び這入つて來る）

看守　こら〳〵。また騷ぎ出したか？　靜にしろ、靜にしろ。（鐘が鳴る）そら、もう晩のお祈りの時刻だ。みんな列をつくつて行くのだぞ。列をつくれ、列をつくれ。

（女囚一同列を造り、看守の跡について上手口から出て行く。舞臺ちよつと空虛となる。やがて下手口から看守に伴はれてネフリュドフ、ファナーリン入り來る）

看守　囚人は今禮拜堂の方へ行つてゐますから、マスロワだけ先にこゝへ連れて來ます。御面會の時間はかつきり十五分ですよ。

ファナーリン　典獄に特別談判をして來たのですから、十五分と限つた以上、それより延びてはよくありませんし、他の囚徒の歸つて來ない前にお濟みにならないと、此の室で會つてゐるのが犯則になります。だから御用談はなるたけ早くお進めになる方がいゝでせう。

ネフリュドフ　ありがたう、ありがたう。ではしばらく、どうかあなた方はあちらでお待ち下さい。

（ファナーリン、看守、出て行く。ネフリュドフはそこに立つたまゝ、室内を見廻してゐると、下手の戸があいて、マスロワ小きざみの足つきで這入つて來る。ネフリュドフの顏を訝り見ながら、ちよつと髮を撫で、數歩前に立留まつて、其りうとした身なりを見、媚びるやうな微笑を浮べて）

マスロワ　今日は。あなたですか、私に面會したいとおつしやるのは？

ネフリュドフ　（胸を躍らせ聲をしやがらせながら）私だが、お前、もう忘れたらうね？

マスロワ　（まぶしさうにして媚びる態度で）さうね、どなたでしたつけか、今ちよつと思ひ出せませんわ。だけどきつと、私をかはいがつて下すつた方でせう？

ネフリュドフ　（帽子をぬいで一二歩近より）私だよ、よく見て思ひ出して下さい。さあ――分つたか？

マスロワ　（しつかりとは見ないで、そは〳〵として）えゝ、おぼえてゐます、おぼえてゐます。お名前はあの……さうでしたつけね？

ネフリュドフ　ネフリュドフ。

マスロワ　（耳にとめないで）さう〳〵、よくあるお名前でしたつけね。で、どうして私が分りましたか？

ネフリュドフ　昨日裁判所で、陪審官になつてお前の裁判に立會つたが、お前は氣がつかなかつたらうね？

マスロワ　まあ、さうでしたか！　ちつとも氣がつきませんでした。ぢや、あなたも御一緒で私を裁判なすつたのね？　私シベリヤへやられるのですつてね？（言つて脣をふるはせ）あんまりひどいわ、無實ですわ、まちがひですわ。私決してそんな惡い事なんかしやしません。……でもあなた、どうして逢ひに來て下すつたのですか？　裁判がどうかなるのですか？

ネフリュドフ　その事で來たのだが、私はどんな事をしても、お前のその無實の罪を救つてあげようと決心したのだよ。

マスロワ　ほんたうに御親切ね。（つゝましや

かに男に近づき、娘らしい調子で）あなたね、若し實際私を助けて下さるおつもりなら、少しお願ひがあるのよ。（賤しげに諂ひ笑ひをする）

ネフリュドフ　あゝ、何でもするから、言つて下さい。

マスロワ　かなへて下すつて？　どうもありがたう。私ね、何よりも先に控訴しなくちやいけないのださうですが、いゝ辯護士を頼むとお金が大へんかゝるんですつてね。

ネフリュドフ　その事なら、もう私が手續をして來たから安心して下さい。今日來たのもお前にそれを承知して置いて貰はうと思つたからさ。で、もし控訴でいけなければ上訴でも何でもして、是非ともお前を救ひ出すつもりでゐる。金のことなんか少しも心配するに及ばない。

マスロワ　（わざと嬉しげに）まあ、うれしいこと！　それで安心しましたわ。それから今一つのお願ひてのはね、……（躊躇して）私少し買物がしたいのですけど、……あんまり澤山頂いても無駄につかつたり、みんなに借りられたりするばかしですから……ほんの少しばかり……、お錢をね……十圓でいゝのですよ、たゞそれだけでいゝの。

ネフリュドフ　お錢を？……（絶望の様子で）あゝ、あゝ、いゝとも、上げるよ。

マスロワ　ちよつとお待ちなさい。看守があつちへ向くまで。（外の方にゐる看守の様子をふりかへり見て、後向きにさもしげな手つきで金を取らうとする。看守の姿見えなくなる）さ、さ、早く下さいな。どうも、ありがたう。（急いで其金を靴下の中へ隱す）

ネフリュドフ　（ぢつと見てゐて絶望のためいきをする）あゝ、お前、そんなにまでなつたのか？

マスロワ　え？　何ですつて？（見上げて媚び笑ひをし）それや、もう、どうせ牢屋へまで來たんですもの、貧乏もしますわ。このつぎいらつしやる時に、若しまた願へたら、またお錢を少し貸して下さいな……、それから卷煙草を少し持つて來て下さるといゝのだけれど……あ、さう〳〵、私、今一つお願ひがありますわ。（また看守の姿を見て）あなた、あいつに二圓ばかり掴ませておやんなさいよ。うるさくていけないから。

ネフリュドフ　よし〳〵。

（看守の方へ行く。マスロワは其の間にベンチの下の酒の瓶を取り出し其の口から酒をあふる。ネフリュドフの入り來るのを見てあわてて瓶を後手に隱し壁の方へ寄る）

マスロワ　今、水とコーヒーと交ぜたのを飲んだところなの。私、一日中何も飲まなかつたものだから、喉が渇いて、喉が渇いて、こゝが燒けつきさう。（苦しげに胸をたゝく）

ネフリュドフ　お前今、何かまだ私に頼みがあると言つたね？

マスロワ　さう〳〵、さうでしたつけ、……何だつたらう？　あ、さう〳〵、私の妹分でね、フョードシアといふ女囚がゐるのですよ。それやかはいゝ女でね、何も知らない内にお嫁にやられたといふので、御亭主を毒殺しようとしたのですつて。それが保釋されてる間にすつかり仲なほりが出來て、今ぢや羨ましい程な夫婦仲なのだのに、どうしても罪に落ちなくちやならないのださうです。あの子も、ついでに救つてやつて下さらない？

ネフリュドフ　ふむ……それは調べて見なくちや分らないが、辯護士に頼んで見ようよ。私はね、お前を一日も早くこんな所から救ひ出して、せめてもつと靜な病院か何かの方へ

でも廻して置きたいと思ふのだが、何なら其の女も一緒にその方へ行けるやうに運動しよう。

マスロワ　さうして下さるとありがたいわね。

ネフリュードフ　もつと周圍の靜な綺麗な所へでも移つたら、お前の眠つてゐる靈も眼をさまして來るだらう。

マスロワ　お說敎のやうだわね。

ネフリュドフ　あゝ、カチューシャ、お前はまだ本當の事を想ひ出して吳れないのだね？　ネフリュドフといふ名が分らないのかい？

マスロワ　何だか變ですわね、ネフリュドフだのカチューシャだのつて。あなた、どうしてそんな名前を御存じ？

ネフリュドフ　（十年前の寫眞を取り出して女の手に渡し）どうか此の寫眞を見て思ひ出してお吳れ。

マスロワ　（寫眞を手に取つて）あなたのですか？　女のかたもいらつしやるのね？　綺麗ですこと！（尙ぢつと見てゐる）

ネフリュドフ　よく見て下さい。十年前お前がまだ、私たちの別莊にゐた頃の寫眞だ。あの、復活祭の晩の事をお前はもう忘れたのか？

マスロワ　（男の顏に目を向け、ぢつと見て身ぶるひし、寫眞を床の上に投げつけ、飛び上がるやうにして、覺えず拳を固め）この惡魔め？

ネフリュドフ　（マスロワの撲らんとするのをぢつと受けて）カチューシャ、私はお前にあやまりに來たのだよ。

マスロワ　惡魔！　惡魔！　薄情者！　あなたのやうな薄情者は、私がこんなざまになつたのを見物する氣ででも來たのでせう？　よくも私の前で、あなたの名前が名乘れたものだ。

ネフリュドフ　カチューシャ、みんな私の罪なのだから、どうか許して吳れ。

マスロワ　それだけの事なら、何もこゝまで追つかけて來る必要は無いぢやありませんか？　こんなになつてる私を、なぶつてやらうと思つて來たのですか？　あなたにだけは私、こんな境遇で會ひたかなかつたのですよ。それをわざ〳〵探し出して、こんな悔しい恥かしい思ひをさせられて…あゝ、私、あひたくない、あひたくない！（兩手に顏を埋めて泣く）

ネフリュドフ　私は實に申譯の無い事をした。十年前のお前に對する不始末が昨日の裁判を見て空恐ろしくなつて來た。私はどうかして其の罪が贖ひたいと思ふのだが、カチューシャ、どうか私を許して吳れ。

マスロワ　（顏を上げ淚を振り拂つて）御免なさいよ、私が惡うございました。私もう疾くの昔あきらめた筈でしたつけ。ついあなたのお顏を見たものだから、あんなに怒つちやつて。でも、みんな運ですわ。そんなに心配して下さらなくてもようございます。お互にあの頃の事は、もう〳〵忘れて了ひませうよ。

ネフリュドフ　いや、忘れてゐるのが私の過ちだつたのだ。…（苦しげな沈默の後）子どもがゐたつてね。

マスロワ　えゝ、ゐましたけれど、都合よくすぐ死んぢまひました…。

ネフリュドフ　都合よくつて、どうしてそんな事をいふのさ？

マスロワ　だつて、生きてでも居られたら、私が死んぢまひますわ。私もその頃病氣だつたのですよ。

ネフリュドフ　叔母たちがお前に暇を出したのだつてね？

マスロワ　（娘らしい怒りをちよつと見せて）當り前ですわ。身重になつてるものを、誰れ

が使つて呉れるものですか。それよりか叔母さまたちは何うなすつたでせう？

ネフリュドフ　あれ等は二人とも先だつて死んでしまつた。

マスロワ　あら、まあ？……あゝ、もう、そんな事は考へつこなしにしませう。みんなお仕舞になつた事ですから。

ネフリュドフ　いや、まだお仕舞ぢやないよ。私はどんなにしてでも過ちを贖はなくちやならない。それのすまない内はお仕舞ぢやない。

マスロワ　つまらない事ですわ。何も贖ふものなんかありやしません。過ぎ去つたことはしやうが無いぢやありませんか？

ネフリュドフ　一そ私の財産を残らずお前に譲つて、それで罪亡ぼしをしようかとも思つたが……。

マスロワ　冗談はおよしなさいよ。もう時間が來ますよ。

ネフリュドフ　とても〳〵そんな事で濟むものぢやない。やつぱり、私のこの體で救はなくちやならないのだ。行くところまで行かなくちやならないのだ。ねえ、カチューシャ、私はお前の體の清まりきるまで、何處までもついて行つて、どんな事でもするから、それで私を許して呉れるだらうね？

マスロワ　なんて諄いのでせう？　私、あなたを許すことなんかありやしませんわ。昔の事なんか言ひつこなしですよ。さあ、もうお歸りになるのでせう？（輕く手を握つて）辯護士のお金の事はお願ひ申しましたよ。

ネフリュドフ　その事はたしかに引受けたから、書類が出來次第、お前の名を書いて貰ひに來ます。けれどもお前は、たゞそれきりで別れるつもりかい？　他に言ふことはないのかい？　許すとも許さないとも、憎いとも懷かしいとも言つて呉れないぢやないか？

マスロワ　そんな野暮つたい話はもうお止しなさいよ。

ネフリュドフ　カチューシャ、どうか是丈は眞面目に聞いて置いて呉れ。私は今日限り地位も財産も棄てて了つて、お前を救ふ爲に、お前と結婚しようと思ふのさ。

マスロワ　（ぢつと聞いてゐて、屹となり）何ですつて？

ネフリュドフ　（決心の調子で）お前を救ふためには、お前と結婚でもする。

マスロワ　結婚もするのですつて？

ネフリュドフ　あゝ、それが私の、神に對する義務だと思ふ。

マスロワ　（ぢつと見すゑて、脣を顫はせ、抑へがたい悲憤と冷笑の調子で）神に對する義務だつて！　はゝ、はゝ、神さまのお引合ひなんか、お止しなさいな。神さまを賴むのなら十年前だつたのでせう？（顔をネフリュドフの方へ突き出す。酒の息がする）

ネフリュドフ　お前、酔つてるね？　まあ少し落ちついてお呉れ。（肩に手をかける）

マスロワ　振りはなして）私、落ちついてますよ。さう、酔つてもゐますさ。けれど酔つたつて、言ふ事は正氣よ。ね、あなた、お聞きなさい。私は醜業婦なのですよ！　人殺しの罪人なのですよ！　はゝ、私はさういふ身分のものですよ。そしてあなたは、公爵の御前でいらつしやる。それがまあ、私と夫婦にならうとおつしやるんだから、とぼけてるわねえ、随分とぼけてるわねえ。そんな馬鹿な料見はお止し遊ばせ、御身分にさはります。あなたの奥方には、何處かのお嬢さまでもお迎へ遊ばせ。私が御用なら、十圓札一枚で、いつでも御用を達しますよ！（酒瓶を片手に持ち、片手を其の上に載せて憤怒の形相でつつ

立つ、調子は初めわざと冷嘲であつたのが、段々怒りに移る）

ネフリユドフ　静にして呉れ、カチユーシャ、私がどれ程良心に恥ぢてゐるか、お前には分らないのだ、そんな恥かしい事を言つて……。

マスロワ　恥だつて？　へッ！　どうせ私は醜業婦さ！　十圓札で御用を達すに不思議はないからう？　もつともお前さんはあの時百圓札を私の懐へねぢ込んどいて逃げ出したつけね。

ネフリユドフ　カチユーシャ、カチユーシャ、みんな私が悪かつたのだ。だから正式に結婚して、罪を贖はして呉れといふぢやないか？　お前は正氣を失つてゐる。

マスロワ　まだふざけた事を言つてるのかい？　私をだしに使つて自分の罪を贖ふんだつて！　へ！　いゝ料見だ！　此のうへまだ私をなぶり物にしようといふんだね！　私に恥をかゝせようと思つてやつて來たんだね？……さあ！　私に指一本でもさして見ろ。お前さんと結婚する位なら、首でも縊つて死んだ方がましだ！　私、もう、その生つ白い脂ぎつた顔を見るのも嫌だ。さあ、もう、いゝ加減に歸つて行かないか？　出て行け！　出て行け！

（地だんだを踏んで罵り、また酒をあふり瓶を傍に置く）

ネフリユドフ　（涙ぐんで）ぢや、今日は歸るが、どうぞあとで、も一度思ひ直して呉れ。お前に見せようと思つて持つて來た寫眞だから、之れは預つて置いて貰ひたいよ。（寫眞を拾つてマスロワに渡す）

マスロワ　（寫眞を渡されて見るともなくそれを見込む。そして聲をあげて泣く）あゝ！　なぜ、あの時死ななかつたのだらう？　なぜあの時死ななかつたのだらう？（寫眞を抱いたまゝ横倒しになる）死にたい、死にたい！　殺して下さい！

ネフリユドフ　（倒れたマスロワをぢつと見おろし、靜にその側によつて扶け起す。マスロワ又酒の瓶を取つてベンチに腰をかけ飲まんとするのを、ネフリユドフ後から肩に手をかけ）お前の體が汚れてゐようがゐまいが、そんな事は私に取つちや何でもない。私がお前と結婚しようといふのはその體の中に眠つてゐる、お前の靈魂を呼び覺ましたいからだ。お前の靈魂を今一度昔の淸いカチユーシャにして、そのカチユーシャと結婚したいのだ。お前をシベリヤから救ふだけが救ひぢやない。私のこの心持をよく呑み込んでお呉れ。私はもう、世間並の結婚ばなしなども斷つて、堅い〳〵決心で來たのだから、かはいさうだと思つて私の願ひを聞いて呉れ。分つたか？

（マスロワ、次第に顔をあげ前面を見つめる）

私は必ずお前を救はなくちや置かないよ。

（マスロワうつとりとなつて、瓶を取り落し立ち上る。看守入口から顔を出し）

看守　公爵、どうしたのですか？　もう時間が切れましたよ。

ネフリユドフ　（カチユーシャを見つめて）また來るよ、カチユーシャ。（看守のゐる方へ出て行く。

（マスロワは失神したやうになつて正面上を見つめたまゝ、彫像の如く立つてゐる）

（幕）

第四幕

監獄内の病院の一室、白い壁、正面中央に窓、其左右には薬品棚など、横兩方に入

口、室の中程、稍上手よりに大きな木地の角テーブル、其の上に薬瓶、乳鉢など置いてある。テーブルの周圍に二三脚の椅子。マスロワとフョードシア、椅子に腰をかけて丸薬を採み居る。

フョードシア　でもよく酒も煙草も一どきに止されたわね。

マスロワ　もとから好きで呑み出した譯でないからだらうさ。

フョードシア　だつて、あんなにうまさうに呑んでたものを急に斷つて了ふつてのは、大抵のことぢやないと思ふわ。あの方の眞實が通じたのだわね。全くあの方は親切なお方ね。私までお蔭でこんな薬が出來て、私これなら、斯うして姉さんと二人でゐられるのなら、三年や四年の懲役ぐらゐ何でもないと思ふわ。こんど公爵さまがいらしたら、お禮を言はせて頂戴な。

マスロワ　あ丶、お禮をお言ひ。本當にあの女囚室からこ丶へ來ると清々することね。薬の香ひだけでも胸がすくやうだし、こんなにまた白い前掛をかけて……私、前掛をかけるのはほんとに久しぶりよ、十年ぶりよ。こんなさつぱりした風をしてゐると、何だか昔のカチューシャに戻つたやうで、うれしくてたまらないのよ。

フョードシア　え丶、昔の姉さんに戻つてお了ひなさいよ。私お話を聞いただけでも、其の頃の姉さんが懐かしいわ。

マスロワ　私だつて、あの頃が懐かしいけれど……、私だけ昔に戻つても、傍がさうでなければつまらないわね。

フョードシア　ネフリュドフ様だつて、さうに違ひないのよ。姉さんを、昔の清い姉さんに引き戻さうと一生懸命骨折つていらつしやるのよ。姉さんはほんとに仕合せですわ。

マスロワ　だけど考へて見ると、その間の十年は長いわねえ！　變つたわねえ！　これでまた舊の私に戻れるものかしら！　世間がさうさせて呉れるかしら？

フョードシア　それは姉さんの心がけ一つよ……ねえ、姉さんはいつか、あの方と別れた時の話をしましたつけね？　なぜあんな親切な方が、もう一度その別莊へいらつしやらなかつたのでせう？

マスロワ　それはね、戰地からの歸りで、寄る暇が無かつたといふのよ。それで私は、夜わざわざ停車場まで逢ひに行つたつけが……

フョードシア　さう？　で、逢へて？

マスロワ　私だけ一目見たけれど、それなり別れて了つたのさ。あ丶、あの時ほど悲しい、情ない思ひをしたことはなかつたつけ。あの時私は、ふつつりと、世の中が頼みにならないものだと思ひ切つたのだよ。

フョードシア　どうしてさ？

マスロワ　其のころは私ね、まだ何も知らないものだから、お腹の子どもの事を思ひ出しては、嬉しいやうな心配なやうな氣持で、毎日毎日、あの人の歸つて來るのを待つてゐたのよ。叔母さんたちも歸りには是非寄るやうにと手紙を出して、待ち暮してゐると、こんどは、規則で中途に寄り道をすることは出來ないと電報を打つて來たのさ。

フョードシア　まあ！

マスロワ　だから私、是非會つて置かなくちやならないと思つてね、汽車の着くのは夜の二時だといふから、みんな寝たあとで、料理番の娘を連れて、肩掛を頭からすつぽり被つて、停車場へ驅けつけたのよ。

フョードシア　大抵の事ぢやないわね。

マスロワ　其の晩は生ぬるい風が吹いて、大雨

が降つた後の闇夜でね、近路をしようと思つたのが、すつかり迷つてしまつて、停車場へ着いた時はもう發車の二番目の鈴が鳴つてるぢやないか？　だものだから、私、あわててプラットフォームに驅け込んで、一等室の前まで行くと、中にはランプや蠟燭が目ばゆいやうにともつてゐて、二人の士官は天鵞絨の椅子に倚りかゝつてトランプをしてゐるし、あの人はきちんとした裝で、椅子に肱をもたせて笑ひながら卷煙草を吹かしてゐたの。

フォードシア　で、向うでも姉さんに氣がついたの？

マスロワ　いゝえ。私、其の平氣な顏を見ると腹が立つやうな、懷かしいやうな、何ともいへない氣持になつて、いきなり拳で窓を叩く拍子に、列車はがたつと搖れて動きはじめたのよ。で、はじめは、せめて一言でもと思つて、其の箱と並んで走つてゐると、內から其の樣子を見た一人の士官が、硝子戶を開けようとして、しきりとがた／＼させたの。するとあの人も窓の側へやつて來て、二人でがたがたやつてる內に汽車は段々早くなり出してやつと窓の明いたときは、もう間に合はなかつたのだよ。…(淚ぐんでうつとりとなる)

フォードシア　それから？　それから？

マスロワ　私がまだ一生懸命に追つかけてるものだから、驛の役人がやつて來て、引き戾して了つたのさ。私は雨で濡れてるプラットフォームから、危く滑り落ちようとしたのを、やつとの事でこんどは線路へ降りて追つかけたけれど、どうすることも出來よう筈はないし、水槽の所まで來たときは、肩掛は風に吹き飛ばされて、裾は泥と水でべた／＼になつてゐた。それを、あとからいきせき追つついて來た娘が聲をかけたものだから、私は初めて氣がついて、べつたりそこに坐つたなり、泣き出しちやつたのさ。

フォードシア　私も泣きたくなつたわ。

マスロワ　づぶ濡れになつた娘も縋りついて泣くし、二人暗い中で、あの時こそしみ／＼泣いたよ。あの人はあんな氣樂な眞似をしてゐて、私はこゝで斯うして土の上にすわつてゐると思ふと、なぜだかふつと生きてるのがいやになつて、このまゝ汽車に轢かれて死にたいと思つたよ。けれど、その娘にせがまれて夢のやうに家へ歸つて來た。

フォードシア　でも、よかつたわね。

マスロワ　あくる朝まで考へて、お腹の子どもがかはいさうだと思ふと、また氣が折れて了つて、今日まで斯うして生きて來たのさ…だけど、その時から、私はふつつりと、神さまも人間も賴みにしない氣になつたのよ…

フォードシア　もう其の話はやめませうね、また十年前に戾れるのだから…

マスロワ　考へて見れや、あの方ばかりが惡いのでもないわね。それに今ぢや、あんなにして下さるものを、こなひだは私ほんとに濟まない事をしたよ、こんど逢つたらお詫をして置かう。

フォードシア　私また、姉さんへ教はつた歌を歌つてあげませうか？

（ネフリュドフ、小使に伴はれて入り來る）

マスロワ（うれしげに走り寄り、手を出して握手し）よくいらして下すつたのね。丁度今も噂をしてゐたのですよ。フォードシアが一度お目にかゝつてお禮が申したいのですつて。

フォードシア　あなたが公爵でいらつしやるのですか？（ネフリュドフの前に膝をついて）私、お禮の申しやうもございませんわ。ほんとにほんとにありがたうございます。どうぞいつまでも／＼姉さんのお傍にゐられるやう

になすつて下さいまし。

ネフリュドフ　（フョードシアを立たして）よしよし、そんなに禮なんかいふ程の事ぢやないよ。つまりあなたの心がけがいゝから、病院でも許して呉れたのさ。

フョードシア　いゝえ、みんな公爵さまのお蔭でございます…。ぢや、姉さん、私ちよつと看護婦部屋へ行つて來ますわ。

マスロワ　さう？

フョードシア　公爵さま、御免遊ばせ。（禮をして出て行く、ネフリュドフ、うなづく）

ネフリュドフ　今日はね、控訴の結果が分る筈で、こゝで辯護士のファナーリン君を待ち合はす事になつてゐるが、お前もこゝへ移つてから、もう可なり日數が立つたから、大分馴れて來たらうね？

マスロワ　えゝ、馴れて來ました。實は早くお目にかゝりたいと思つて待つてゐました。

ネフリュドフ　何か用が出來たのか？

マスロワ　用事つてほどのことでもないのですが、ほんたうに伺つて見たいと思ふことがあつたのですよ。

ネフリュドフ　ふむ、何だらう？

マスロワ　ほんたうに伺つて見たいと思つたのはね、……何だか時々自分で獨り極めにそんな事を思ふものですから……まあよしませう。また此の次にうかゞひませう。それよりか、あなたは、あれからずつと田舍へ行つてらつしやいましたつてね？

ネフリュドフ　あゝ、私はね、今度の跡しまつの爲に久しぶりであの別莊へ行つたよ。そして其のついでにお前の伯母さんといふのに逢つて、子供の墓も尋ねて來たよ。

マスロワ　よくお墓が分りましたねえ。伯母さんはまだ達者でゐましたか？　私も行つて見たいわねえ。どんなになつてるでせうねえ！

ネフリュドフ　別莊にはもうチホン爺も居ないで、中學生上りの若い男が留守番になつてゐて、建物は恐ろしく荒れてるし、屋根の鐵板の剝げたなりになつてる所などもあるし、煉瓦塀の上には草が一杯生えてゐた。それから裏庭つゞきの林檎や櫻の林はね、ちやうどこぼれるやうな花盛りで、あの垣根の接骨木の花も昔のやうに香つてゐたよ。

マスロワ　あゝ、私、もう一度自由な身になつて行つて見たい！（うつとりとなる）

ネフリュドフ　それからあの、氷の裂ける音のした川では、パチャ／＼と洗濯をする音が聞えてね、あの窓に額を突き出してゐると、和かな風が吹いて來て、しんとした中に蜂のうなり聲が聞えてゐたよ。

マスロワ　もう雪は無かつたのでせうね。

ネフリュドフ　無論さ。そしてね、私はやつとの事でお前の伯母さんの家を尋ねあてて、逢つて見たよ。お前の事をよく覺えてゐたよ。

マスロワ　あゝ、昔の自由な身になりたい！……そして本當にかなふ事なら……

ネフリュドフ　私は誓つてお前を自由な身にする。そしてお前の蘇つた心で私と一緒になつて呉れ。

マスロワ　それがかなふ事でせうか？……

ネフリュドフ　かなふとも。お前の心はさうして今一度淸い昔に戻るのだ。

マスロワ　さうでせうか？……けれどだめですよだめですよ。一ど汚れた體は誰れも信用して呉れないから。

ネフリュドフ　（肩に手をかけ、やさしく）そんな事を考へちやいけない。カチューシャ。（助手醫入り來る）

助手　あなた、此の方が面會室で待つてゐられるさうです。（名刺をわたす）

ネフリュドフ　あ、ファナーリン君が來たのだ。ではちよつと會つて來ます。（マスロワと助手とに目禮して出て行く）

助手　（マスロワの方に寄つて行つて）お前さんの名はマスロワだつけね？

マスロワ　えゝ。マスロワ。

助手　何處で稼いでゐたの？　此の土地で？

マスロワ　（むつとして）何處だつていゝぢやありませんか？

助手　以前のお前さんの馴染が、お前さんをこゝから救ひ出さうと骨折つてるといふぢやないか？　本當かい？

マスロワ　早くいらつしやらないと、院長さんが見えますよ。

助手　大丈夫、今は誰れも來ないことになつてゐるよ。だが、私もその御馴染さんになりたいものだね。一たいどんな人だい？　素的に身分の高い人だといふぢやないか？

マスロワ　えゝ、えゝ、非常に身分の高い人よ。

助手　名は何といふのだい？

マスロワ　うるさいぢやありませんか？（立つて窓の方へ行く）

助手　そんなにうるさがらなくつたつて、いゝだらう？

マスロワ　よかありませんよ。早くあつちへ行つて頂戴。

助手　馬鹿にかたぎな事を言ふね。お前さんにも似合はないぢやないか？　いくら監獄の中だつて、おもしろい事も出來ようぢやないか？　看護婦さんのお手つだひなら、少しやあ我々の方へもお愛想くらゐしても、損は行くまいぜ。

（女の傍へ行つて腰を抱かうとする。それを振り放して）

マスロワ　あんまり人を馬鹿におしなさんなよ。（又テーブルの方へ行き、腰をかけて丸藥を揉む）

助手　（ついて來て横手から）新米にしちや、揉みやうがうまいね。その粒の切りかたがまづいや。さ、手つきを教へてあげよう。

マスロワ　分つてゐますよ。（肱で助手を突き飛ばす）

助手　（後から抱きすくめて）この性惡女め、そんなに人をじらすものぢやないよ。ちよつとでいゝから、まあ私のいふ事をお聞き。お聞きつたらね。今夜ね、あの小さい廊下の戸を明けて置くから、そのすぐつき當りが私の宿直部屋だよ。いゝかい？　分つたかい？

マスロワ　（立ち上りすりぬけて）知らないつてばねえ。私、聲を立ててよ。

助手　お前さん、お小づかひに困つてるやうだから、こなひだから是れを上げようと思つてたのだよ。取つて置いて頂戴。（銀貨を握らせようとする）

マスロワ　（それを烈しく床の上に投げつけて）人を馬鹿におしでないよ。（助手が捉へんとする手を振りほぐし、追つかけられるのを逃げ廻る）

助手　いよいよおれに肱鐵砲を喰れるつもりだな。見やがれ、どうして喰れるか？

マスロワ　（また捉へられて）放さないか？　放さないと蹴とばすよ！　畜生！　畜生！

（振りはなすはずみに、テーブルの上の物を床に落す。騷音。その途端下手口から醫長、ネフリュドフとファナーリンとを伴ひ入り來る）

醫長　こら？　何をする？　なんだ、その騷ぎは？

助手　（びつくりして）先生、どうも困りました。この室へはひるとすぐ此のざまですからね、實際あきれて了ひます。大抵樣子で分つてゐませうが……どうも明らさまに申上げ

るのも極まりがわるいやうで、どうかお察しを願ひます。ちよつと油斷して優しい事を言ふと、もうすぐこの通りの事をしかけるのです、どうして〳〵、なか〳〵の女ですよ。

醫長　一たい君、何をしたのです？

助手　何つて、どうも驚きました。私が丸藥の揉みかたを説明してゐますと…此の女がだしぬけに私に接吻しようとするのです。

マスロワ　まあ！　大噓つき！　噓ですよ、噓ですよ。

助手　噓なものですか？…こなひだから私につきまとつてる樣子が、何か私をだまして、便宜を得ようとでもしてゐるらしいのです。

マスロワ（泣聲になつて）あんな卑怯な。自分でした事を私に塗りつけて、大噓つき！

醫長　默んなさい！…そんなに騷いぢやいかん。それよりかそこらに落ちてるものを片づけなさい！

助手　本當に此の女には驚きました…

醫長　もういゝから、君もあつちへ行きたまへ。君の部屋へ歸つてるがいゝ。マスロワ、お前はもう此處を出るのだぞ！（大きな眼鏡越しにけはしくマスロワを見る。そして入口に立ちすくんでゐるネフリュドフを顧みて）かういふ種類の女は、どうも困りますね、公爵。

ネフリュドフ　分りました、分りました。ではどうか暫くこのまゝになすつて下さい。

（醫長出て行く）

マスロワ（おづ〳〵と寄つて來て）御免なさい？　私、あの騷ぎでびつくりして了つたのですよ。

ネフリュドフ（冷やかに）これが辯護士のファナーリンさんといつて、いろ〳〵お世話になつてる方だ。

（マスロワ辭儀をする）

ファナーリン　今日はおもしろくない知らせを持つて來たのですよ。控訴は却下されて了ひました。

マスロワ　私、そんな事ぢやないかと思つてゐました。今さらしやうがございませんわね？

ネフリュドフ　併し、ほかにまだ方法があるから、失望しなくてもいゝ。こんどは直ぐ上訴して特赦を願ふことにするのだ。

ファナーリン　裁判の形式に手落ちがあるのですから、取り消すことの出來る裁判です。氣を落さないでおいでなさい。

マスロワ（ネフリュドフに）私、もうその事はどうでもいゝと思ひますから、この上あんまり御心配下さらないやうにね。どうせもう、斯うなつた私ですから。それよりか、私、お願ひがあるのですよ。私は今の騷ぎで、また舊の監房へ入れられるのでせうけれど、あれは決して私がしたのぢやありませんから、どうかそれだけはね、惡しからず思つて下さいな。

ネフリュドフ　あゝ、もうそんな事を言ふ必要は無いよ。お前が何をしようと、それはお前の自由さ。私はどんな事があつても、一旦きまつた以上、お前を救ふといふ決心は變らないから。

マスロワ　あなたまでがそんな事をおつしやつちや、私の立つ瀨がありませんわ。ねえ、惡く思はないで下さいな。あの助手めが私を見くびつて…

ネフリュドフ　もういゝ、もういゝ。

ファナーリン　どうも困つたものですね。

マスロワ　私、どうしたらいゝでせう？（兩手を顏にあてる）

ネフリュドフ（あはれみの眼で見て、其の手をおろさせ）もうそんな事はいゝといふぢやないか？

ファナーリン　ではともかくも、此上訴書類に署名して下さい。

マスロワ　どこへですか。私、手がふるへてゐて書けさうもありませんわ。

（襟巻の端で涙を拭ひ、啜り泣きながらテーブルに倚りうつむいて名を書く。辯護士は其の個處を指定してゐる）

ネフリュドフ　上訴の結果の分るまでには、手間取るだらうから、お前は多分この十日の護送隊に這入つて、シベリヤへ行かなくちやなるまい。併し特赦されゝば、すぐ歸つて來られるし、私もお前の隊について行くから、宿場々々では會へるだらう。一時の事だと思つて辛抱して呉れ。

マスロワ　えゝ、もう、私、その事はちつとも苦にしてゐませんから、どうか御心配下さらないやうにね。シベリヤへ行かうがこゝにゐようが、どうせ私に取つちや同じ事ですから。

ネフリュドフ　途中でいるものを考へて置いて呉れ、持つて行けるだけは買ひとゝのへるから。

マスロワ　何もいるものはありませんわ。

ネフリュドフ　シベリヤで逢ふまでは、それまでま當分逢へまいから、何か私に言つて置くことがあるなら：：：

マスロワ　何もございません。

ネフリュドフ　では是れで用が濟んだから、私等は歸るよ。

ファナーリン　公爵、私は一足お先へ失禮いたします。

ネフリュドフ　いや、私も御一緒に行きませう。さやうなら。

マスロワ　さやうなら。

（マスロワは離れて立つたまゝ二人に挨拶し、其の出て行く後姿を見送つて、テーブルの前にぐたりとなり、淋しく頰杖をついて考へ込む。フョードシアが這入つて來る）

フョードシア　（マスロワの傍へ行き覗き込んで）檻房へ歸るのだつてね？　私よく知つてゐますわ。姉さんが惡いのぢやない、みんなあの助手の奴が惡いのです。あいつが不斷してゐた事を、なぜ姉さんは言つつけてやらなかつたの？

マスロワ　もう何も言はないことにしたのさ。私たちの言ふ事を信じて呉れるものは、世間に一人もありはしないのだから。

フョードシア　でも、公爵だけは信じて下さるわ。

マスロワ　だめなの。誰れも信じちや呉れないの。：：それもその筈だわね、私たちのやうになつたものは、實際自分で自分を信ずることさへ出來ないのだもの。私ね、一ど、或るお祭の晩だつけが、そんな身の上がつくづくいやになつて、同じ家に居たピアノ弾きの女に其の話をすると、其の女もひどく自分の身をはかなんで、二人一緒にそつと家を出る相談を極めたのさ。そして支度をしてゐると、そこへ男どもが大浮かれで上つて來て、ヴイオリンを弾く男は曲彈を始めるし禮服を着た大男と髭武者の小男とは私とピアノ弾きの女をつかまへて踊り出すしさ。たうとう夜どほし踊つたり唄つたりして、あくる日からはまた元の通りさ。逃げ出す相談なんか何處かへ行つちやつた。何が何だか分つたものぢやないのよ。

フョードシア　公爵は何か用があつていらつしやつたの？

マスロワ　控訴がだめになつて、私はこの月の十日にシベリヤへ行くのだとさ。

フョードシア　まあ！　何うしたのでせうね？

いよ〳〵さうと極まつたら、私も姉さんと一緒に行きたいわ。

マスロワ　そんな事が出來るかどうか分りやしないよ。私ね、お前さんにかたみが上げたいのよ。（嚢の隅から小函を取り出す）私が是非シベリヤへ持つて行かうと思ふのは此の小函一つきり。この中にはそら（蓋をあけて品物を取り出す）あの寫眞と、それから昔つかつてゐた小鏡と、それから此の指輪と……此の指輪もあの方に初めて接吻された時の記念よ。これをお前さんに上げるから取つて置いてちやうだい。

フョードシア　まあ、どうもありがたう。

マスロワ　それから此の赤い花のリボン！　これを差して、あの晩教會へ行つたつけ。こんな風にさしたかしら。（鏡に向ひ昔のやうな身づくろひをして見る）こゝいらが襟飾りで一杯になつてゐて……（鏡の中の姿をしばらく見つめてゐて、がつかりしたやうに鏡を投げ出し）あゝ、もう、昔のカチューシャぢやなくなつた！

フョードシア　私、こんどこそ、あの歌を歌つてあげるわ。（低い聲で）

　カチューシャかはいや
　別れのつらさ
　せめて淡雪とけぬ間と
　神にねがひをかけましよか

マスロワ　（フョードシアと同音に）

　カチューシャかはいや
　別れのつらさ
　せめて淡雪とけぬ間と
　神にねがひをかけましよか

（此の歌をくり返すあひだに幕がおりる）

第五幕

シベリヤ一寒村にある驛所の構内。奥は見わたす限り一面の雪の原で、谷の兩側に村のつゞいてゐる遠見。雪のつもつた並樹の向うが道になつて其の道を上手から下手へ、下手から前面へと出て來られる。下手に小屋あり、戸を明け放してある。其の軒下に腰かけ、數個のランプなど。また上手には岩に寄せてテントが張つてある。時刻は夕ぐれで、遙かの空には入日の影が赤く雪に反射してゐる。

奥の道からマスロワ等一隊の囚徒が護送の兵數人に導かれて出て來る。普通犯人はマントを着、國事犯は學生服でゐる。村の男女が、食料品など賣りに來る。囚徒は護送兵の指揮で小屋やテントの中に這入り、焚火などはじめる。

女商人　（他の二三人と下手奥から籃など提げて出て來る）まだ一人も着かないね。この宿へは二三十人も來るかしら？

男商人一　こんどは全體で七百人からの囚徒だといふぜ。今にシベリヤは罪人で一杯になるだらうよ。

男商人二　今夜は少しはいゝ商賣があるかなあ。

女商人　今夜は復活祭だから、囚人だつて少しは御馳走をするだらうよ。（上手奥を見て）さあ、着いた〳〵。

男商人一　十四人は居るやうだ。

（みな〳〵道の方へ出て見る。警護兵を先に立てた囚人の一隊、並樹の向うを通つて出て來る）

女商人乙　さあ〳〵、魚はいかゞですか？　善い魚ですよ。安くして置きますよ。五錢に負けときますよ。

女商人甲　卵はいりませんか？　卵はいりませんか？　新しい卵ですよ、産みたての卵ですよ。

男商人　肉菓子に燒豚、素麵に羊の肝　おいしいものばかりでござい。おいしくて安いものばかりでござい。

（囚人等、がや／＼と寄り來り、商人等と話す）

護送の士官　こら／＼。こゝへ來ちやいかん。あつちへ行つて居れ、あつちへ行つて居れ。それから囚徒はそのテントと小屋に分れて、いつものやうに夕飯の支度をするのだ。

（病人を助けなどして、みな／＼小屋とテントの中へ這入つたり、戸外に腰をおろしたりする。小屋とテントの中には火が焚え上る。士官兵士とも去る）

老男囚　（テントの方で）おれはもう駄目だ！　二十時間もあるきつゞけたからもう駄目だ。

老女囚　まあ四五時間はこゝで休めるんだから、ゆつくり寝て休むがいゝよ、お爺さん。

若女囚　（獨語のやうに）　虱婆さん！　お前さんも此の間に虱でも取つといてお呉れよ。私たちが助かるから。

マリア　さあ／＼、皆さん、靜になすつて下さいよ。（小屋の方へ行つて病囚に）あなた寒かありませんか？　蒲團にしつかりとくるまつておいでなさいよ。今夜は復活祭ですね？

病囚　（屋内で）みなさんが御親切にして下すつて、實にありがたいです。今夜は復活祭ですね。はゝ、世間は復活祭でも、私は死んで行くのです。（咳をする）

若女囚　あの人、事によつたら今夜が持てないかも知れない。

老男囚　かはいさうだな。

一男囚　（奥の方で）此の柱にナイフで字が彫つてあるよ。えゝと、「余は千八百八十年八月十七日刑事犯の一行と共に此の所を通過せり。國事犯人は余一人なり。一人の友人はカザンの瘋癲病院にて自殺せり。余は主義のために倒るゝものなり」

マリア　名が書いてありますか？

一男囚　ペルキンとしてあります。

マリア　あゝ、其の人の事なら聞いたことがありますよ。

病囚　私なんか、これくらゐの病氣でぐづ／＼言つちやならないんですね。

マスロワ　あゝ、やつと寝かしつけた。（小屋で言ひながら舞臺の中程へ出て來る）

マリア　マスロワさん、どうしたのですか？

マスロワ　あの子の父親はもうよつぽどの死ですのよ。母親がチブスで死んでから、こゝへ來るまで十日間といふものあの子を抱きとほして來たのですつて。それをね、意地のわるい護送兵が急に手錠をはめろといつたものだから、子供が抱けないと言つたら、口返答をしたといつて、頰つぺたを血の出るまで撲つたのです。そして泣きたてる子供をむりやり引つたくるのですよ。私、あんまりかはいさうだつたから、すかして引きとつてやりました。

シモンソン　（奥手から出て來る）子供は靜まりましたね？

マスロワ　えゝ、やつと靜まりました。私の頰つぺたを吸つて眠つて了ひましたよ。

シモンソン　さあ、みんなもう、大抵にして中へ這入つたら何うだね？　食事の支度をした方がいゝだらうよ。

（マスロワ、マリア、シモンソンの外皆去る）

マリア　マスロワさん、私はあなたにあやまらなくちやなりませんよ。實はね、あなたが斯

うして特別に我々國事犯囚の方へ御一緒においでなんなすつたのが不平でしたのよ。私たちは無論平等主義ですけれど、何だかあなたと御一緒といふ事が私たちの汚れのやうな氣がして、あんまり打ち解けられなかつたのですよ。それが此のごろから段々、あなたの御經歷に似ず清い立派なお心だと知れて來て、私、實は恥ぢ入つてゐました。シモンソンさんが初めからあなたを大事になすつたのが本當だと氣がつきました。ですからね、どうか是れからは何もかも打ち明けて、お互ひに扶け合つて、このかはいさうな囚徒のために盡してやりませうね。私の了見の狹かつたのを勘辨して頂戴な。

マスロワ　マリアさん、何をおつしやるかと思つたら、そんなつまらない事を勘辨も何もありはしませんわ。私こそ、こちらへ御一緒になつてから、まるで別の世界へでも來たやうで、今まで十何年ちつとも知らなかつた貴い仕事をしてゐる氣がしますの。これなら私、なまじつかあちらにゐるよりも、罪人になつてこゝへ流された方がよつぽどありがたかつたと思ひます。みなさんの方が世間の人よりもずつと立派な方ですわ。ですから、どうか此のさきもみんな御一緒で、いろ／＼の事を敎へて頂きたいのですよ。

シモンソン　もう四年たつと自由になりますから、それまで辛抱して下さい。自由になつたら、一緒にうんと立派な事をして、あれ等のために盡してやりませう。我々がこれまで嘗めて來た辛苦艱難の結果を、生かして世の中へ應用してやらなくちやいけません。あなたのその美しい顏にも、隨分長い辛苦の痕が見えてゐます。今まではつらかつたでせうが、こゝまで來れば、此のさきもう落ちつこはありません。こゝで新しい生涯が開けるのです。さう思ふと私は愉快でたまりません。

マスロワ　私も此のごろ何だかそんな風に思はれて來ました。

シモンソン　でね、私は……

（この時背後の道を通つてネフリュドフ、一人の士官に伴はれ急ぎ足に這入つて來る）

マスロワ　（振りかへり見て、ネフリュドフと顏を見合はせ）あ！　ネフリュドフさまが……

（シモンソンの後へ隱れるやうにする）

シモンソン　さあ、また二人で病人の着物を乾かしてやらう。いらつしやい。

（シモンソン、マスロワ、小屋の中へ這入る）

マリア　公爵、しばらくお目にかゝりません。私もう國へ御歸り遊ばしたかと思つてゐました。

ネフリュドフ　いや、トムスクで國からの通信を待つてゐたものですから、四五日遲れました。別に變つた事もありませんでしたか？

マリア　はい、變つた事もございません。あのシモンソンさんが、しきりと公爵にお目にかかりたいといつてゐました。

ネフリュドフ　シモンソン君が？　何でせう？

マリア　マスロワさんに關した事ぢやございませんか？　シモンソンさんは、初めからあの方を親身のやうにして大事にしてあげてゐますし、いろ／＼また考へもあるのでございませう。

ネフリュドフ　シモンソン君といふのは、實際立派な人物ですね。

マリア　はあ。あゝして、一度思ひ立つた事は實行しなくちや置かないといふ人ですから、どうしてもこんな事になります。御承知でもございませうが、菜食論者だものですから、着物まで一切動物の毛や皮は用ひないで、護

謹製のものばかり着てゐます。あの人だけには、刑事犯人までが懐いてゐます。それにマスロワさんも實に立派な心がけの婦人になられましたよ。公爵のお骨折はむだぢやございませんでした。

士官　さあ、もういゝから引つ込みなさい。（マリアを去らせる）公爵、乾いてゐてお寒うございますな。火がございますか。（ネフリュドフ卷煙草を與へる）いや、御馳走さま。あの、閣下がお世話をしていらつしやいます、マスロワといふ婦人は、全く感心な婦人でございますな。

ネフリュドフ（うるさいといふ風で）さうですかね。さうでせう〳〵。

士官（腰の水筒を取り出し）コニャック酒が少しばかりございますが、いかゞですか、公爵？　寒さ凌ぎに一口召し上りませんか？

ネフリュドフ　いりません。（逃げ廻るやうにして）私は酒を斷つてゐますから。

士官　ですか。ぢや私がちよつと失禮して。（一口飲んでもとへ收める）併しこの邊鄙なシベリヤで高貴のお方と御一緒になるといふのは、實に名譽ですな。いや、全くあのマスロワといふ女は：：：

ネフリュドフ　さうです〳〵。どうか君、その女に至急會ひたいのですがねえ。

士官　承知しました。どうぞこちらへいらつしやい。（小屋の入口を覗くとマスロワとシモンソンが火の傍で病人の外套を乾かしてゐる。ネフリュドフをそこへ招いて置いて、士官は禮をして去る）

ネフリュドフ（不快げに入口に立留まり）カチューシャ、私はお前に用があつて來たのだが：：：

マスロワ（冷淡に）あら、さうですか？

（立たうとするのをシモンソンとゞめて）

シモンソン　それより先に、私が一つ公爵にお話したい事があるから、ちよつと待つて下さい。（外へ出て）公爵、私は是非あなたに聞いて頂きたい事があるのですが、お差支ありますまいか？

ネフリュドフ　いゝですとも、話して下さい。

シモンソン　それはカチューシャの事ですがね、あなたとカチューシャとの關係はよく承知してゐますから、一應御相談をするのが義務だと思ひまして：：：

ネフリュドフ　はあ、それは伺ひませう。

シモンソン　その御相談と申しますのはね、私とカチューシャとの關係を一應耳に入れて置きたいと思ふのです。

ネフリュドフ（段々心配げに）とおつしやるのは？

シモンソン　實は、私があれと結婚したいのです。

ネフリュドフ（驚いてぢつと見つめ）ふむ！　それはカチューシャも同意ですか？

シモンソン　まだカチューシャの意志は聞いて見ませんが、これから打ち明けて聞いて見ようと思ふのです。

ネフリュドフ（冷やかに）それなら、私の關する事ではありますまい。カチューシャの心一つできまる事です。

シモンソン　それはさうですが、併し、あなたの許しが無ければ當人だつて、自由な返事は出來ますまい。

ネフリュドフ　どうして？

シモンソン　つまりあなたとの關係がはつきりしない内は、どちらへ行くことも出來ないのです。

ネフリュドフ　併しその問題はもうきまつてゐます。私は私の義務と信ずる事を行つて、カチューシャの負擔を輕くしてやれば濟むの

で、そのためにあれの自由を束縛する必要はありません。

シモンソン　それはさうでせうが、併し、あれは、あなたのお世話になることを望まないやうです。これだけは間違ひなからうと思ひます。

ネフリュドフ　別に世話をするといふ譯ぢやありません。

シモンソン　でせうが、カチューシャは、あなたの折角の御好意も飽くまで受けない決心でをります。

ネフリュドフ　それなら、何も改めて御相談なさる必要はないぢやありませんか？

シモンソン　所がカチューシャは、あれの思つてる通りにあなたもなつて頂きたいと望んでゐるのです。

ネフリュドフ　といふのは、私が爲なくちやならないと信じてゐる事をやめて呉れといふのですか？　それなら無理といふものです。私は私の義務としてするのですから、先方の希望でやめるといふ譯には行きません。併し君、お互にこんなつまらない話はもうやめようぢやありませんか？

シモンソン　いや、大事な事ですから、どうかよく聞いて下さい。それでは、あなたは、カチューシャの一身に關しては、手をお引き下さるのですね？

ネフリュドフ　それはカチューシャがいやだといふのならしかたもありません。

シモンソン　では、あれにさう言ひませう。

ネフリュドフ　私があれに話さなくちやならない事があるのです。

シモンソン　公爵、私は決してカチューシャの色に溺れて斯んな事をいふのではありません。誤解して下さらないやうに。私はたゞ彼れを苦勞した立派な婦人として愛するのですから、どうかして、あれとこれから半世の苦勞を分ちたいと思ふのです。あれの行くところは、何處へでもついて行つて、あれの重荷を輕くしてやりたいと思ふのです。

ネフリュドフ　カチューシャが君のやうな立派な保護者を得たのはあれの幸福です。

シモンソン　ではどうか、其の幸福のために、私とあれとが一緒になることを御承認下さい。

ネフリュドフ　私は何と御挨拶していゝか分らないが、とにかくカチューシャに來るやうに言つて下さい。直接話して見たいと思ひますから。

シモンソン　（うなづいて入口の所へ行き）カチューシャ！　カチューシャ！（呼びながら中へ這入る）

（マスロワ出で來る）

マスロワ　（おづ／＼と出て來て、冷やかに）何か御用ですか？

ネフリュドフ　（カチューシャの手を取つて）カチューシャ、今日はいろ／＼話したい事があるよ。だが何よりも是れが一番さきだ。（ポケットから書類を取り出し）今度いよ／＼お前の上訴が聞き届けられたよ。今日この書類がアナーリン君から屆いた。斯う書いてある。「請願局長は皇帝陛下の思召によりカチューシャ・マスロワが受けたる徒刑二十年の宣告を破棄し、シベリヤ附近の地方に於いて一年間の流刑に處す」ね、これでつまり特赦と同じ事になるのだ。

マスロワ　ぢや、こゝまで來なくてもよかつたのですかねえ！

ネフリュドフ　たうとう私たちの望みが之れで半分成就した譯だ。お前は特赦になつた。

マスロワ　私ひとり他へ行かなくちやならないのでせうか？

ネフリュドフ　それはお前の自由だが、その前にお前に聞かなくちやならないことがある。私は今シモンソン君からお前の身の上について相談を受けたよ。

マスロワ　（うつむいて）何んな相談？

ネフリュドフ　シモンソン君がお前と一緒になりたいといふのだ。（言つて思ひに沈む、しばらく間を置いて）お前が承知さへすればいゝのだから、それにはまつさきに私とお前との關係をはつきりさせて呉れといふのだ。

マスロワ　あなたと私の關係といひますと？

ネフリュドフ　私はこれまでも言つた通り、お前の體を救つた上でお前と結婚しようと思つてゐた。そしてお前も一時はあんなにして怒つたが、併し段々私の心持を解して呉れて、二人の結婚といふことが全くの空想でもないやうに見えて來た。そこへシモンソン君が這入つて來たのだから、お前は今、私とシモンソン君と、二人に一人を擇ばなくちやならない地位に立つてゐる。つまり私と結婚して呉れるか呉れないかといふ問題を決めればいゝのだ。お前はどういふ氣でゐるか？　シモンソン君とも親しくしてゐるやうだから、どうか本當の決心を聞かして呉れ。

マスロワ　（途方にくれた樣子でしばらく默つてゐて）私の決心てそれはもう、疾くに決まつてゐるぢやありませんか？

ネフリュドフ　何う決まつてゐるのだ。

マスロワ　私のやうなものが、今さら人の妻になれつこはありません。私は一生獨りで暮らします。

ネフリュドフ　カチューシャ、それはお前の心得違ひだ。何でお前が人の妻になれない譯があらう。

マスロワ　いゝえ、こんな體で結婚するのは、其の人の顏をつぶすやうなものです。愛してゐる人の顏をつぶしてすむものぢやありません。

ネフリュドフ　ではお前はシモンソン君を愛してゐるか？

マスロワ　……はい、愛してゐます。

ネフリュドフ　あゝ、やつぱりさうだつたか！　お前もシモンソン君を愛してゐたのか！……　それでは私をどう思つてゐて呉れるか？　私はお前に取つちや何ういふ立場にゐるのかい？

マスロワ　あなたと御一緒になることも無論お斷りいたします。

ネフリュドフ　シモンソン君は、お前があれと結婚することを望んでゐると言つたよ。

マスロワ　さうですか？（沈默の後）さうです、さうです。本當は私、あの人と一緒になりたいのです。あなたには長くお世話になりましたけれど、どうぞ惡しからず思つて下さいまし。シモンソンがそんなに言つて呉れますなら、私、あの人と結婚した方がいゝと思ひますから。

ネフリュドフ　それはお前本當かい？　本當に考へてした決心かい？　無論シモンソン君も立派な人物だから、それと結婚するのはお前の幸福かも知れないが、私もこゝまでついて來たのだから、お前の最後の言葉が聞きたいよ。

マスロワ　私、シモンソンと一緒になります。どうぞそれを許して下さい。

（沈默）

ネフリュドフ　きつと決心したのか？

マスロワ　はい。決心したのですから、ね、どうか堪忍して下さい。

ネフリュドフ　ふむ、思ひもかけない事だつたね……ぢや、どうも仕方はない、さうするがいゝ。私の長い務めはこゝでお仕舞ひになる

のだね？　あゝ、長い旅だつた！　それでは私はもうこゝに用の無い身だから、今夜にもすぐ跡へ引き返さう。お前の幸福を祈つて置くよ。カチューシャ。

マスロワ　どうも濟みません。

ネフリユドフ　お前の將來はシモンソン君に賴むから、私の仕殘した務めを果して貰ひたい。

マスロワ　あの人と一緒に、あなたのお志を守つて行きます。

ネフリユドフ　どうかさうして呉れ。では、之れで永いお別れになるのだね？（兩手を取る）

マスロワ　えゝ、永いお別れに。

ネフリユドフ　そしてこゝで、私の義務も、お前の愛も、一緒に終つて了つたのだ。さやうなら、カチューシャ。（兩手を取つたまゝ、ぢつと見る）

マスロワ　（突然男の胸にすがり）あゝ！　私、このまゝぢや別れられません、このまゝぢや別れられません。どうして私の愛がこのまゝ消えて了ひませう？　私はまだあなたを愛してゐます、あなたを愛してゐます。愛してゐればこそあなたと結婚することをお斷りしたのです。

ネフリユドフ　カチューシャ！　カチューシャ！

マスロワ　あなたが初めて監獄へいらつしやつた時は、たゞ譯もなく憎くて、殺して了ひたい程に思つたのですが、今ぢやもう、そんな心は無くなつて、昔よりも、もつと大切なあなたになりました。酒も煙草も斷つて、あなたのおつしやるやうに、段々昔のカチューシャに戻りかけて來たのも、みんな其のためですよ。

ネフリユドフ　カチューシャ！　カチューシャ！

マスロワ　それで時々は、ひよつとかすると、あなたのお言葉通り夫婦になつて、樂しい日が送れるものかと、己惚れてゐたことがありましたが、それは私の料見ちがひでした。一度汚れた身は、傍がそんな事をさせません。あの病院の事があつてから、私はふつ〳〵己惚れの夢なんか見ないことにしたのですよ。

ネフリユドフ　あれは私が至らなかつたからだ、どうか許して呉れ。

マスロワ　許すの、許さないのといふお話ぢやございません。私に取つちや、それがみんな悟りの道になつたのですから、今ぢや誰れも怨んぢやゐませんの。

ネフリユドフ　では、今でもお前は私を愛して呉れるか。

マスロワ　愛してゐます。深く〳〵愛してゐます。ですから、私、どうしても此の體であなたと御一緒になることが出來ないのですよ。私はどんなつらい思ひしても、あなたのお身に累ひをかけちやならない。

ネフリユドフ　併しそれは私が承知の上だから、救はれた體に累ひも何もある譯はないぢやないか？

マスロワ　いえ、いえ、いくらあなたは御承知でも、それをさせては私がすみません。これだけは何んな事があつても思ひ切らうと決心したのですから、どうぞ其のまゝにして置いて下さいな。途々も、お目にかゝつて親しくすればするほど執着が殘ると思つて、なるたけよそ〳〵しくして來たのですよ。

ネフリユドフ　お前の志は實にうれしいが、そんなにしてシモンソン君と結婚して、これから後幸福に暮せるだらうか？

マスロワ　それはもう心配しないで下さい。あの人はあんな立派な人ですから、私の心はよく呑み込んでゐて、少しもそれを氣にかけませんし、私だつてこれから、眞心をつく

してあの人の仕事を助けて行きます。その内には自然と幸福な日が來るだらうと思ひますの。

ネフリュドフ　では、是れでいよ〳〵私の用は無くなるのだね？

マスロワ　隨分長いあひだ御親切を受けましたわね。

ネフリュドフ　お前とシモンソン君とは、やつぱり長くシベリヤに殘るつもりかい。

マスロワ　はあ、どうせ四五年はゐなくちやならないのですから、出來るだけ長くシベリヤに居て、不幸な囚徒のために盡してやりたいと思ひます。あなたは？

ネフリュドフ　私も、一度モスクワへ歸つてから、またすぐ出直して北の方へ行き、そこで一生をあはれな人々のために捧げたいと思ふ。萬事の手筈はモスクワで定めよう。

マスロワ　モスクワからこゝまで何のくらゐありませうね？

ネフリュドフ　三千里以上だらうよ。

マスロワ　隨分遠く來ましたわね。

ネフリュドフ　あゝ、世界の果までもついて來ようと約束したが！

マスロワ　それから今夜は復活祭でしたね？あの時から十年、隨分變つた處で變つた復活祭をしますこと！

ネフリュドフ　十年のあひだにねえ！　そして今夜が私たち二人の永劫のお別れになるのだ。そして別れ〳〵に新しい生涯に這入るのだ……私は是をお前に記念として上げよう。同宿したイギリスの紳士が呉れたバイブルだがね、ゆうべ私が偶然明けて見たところにしるしがつけてある。馬太傳の十八章だ。ちよつと讀んで御覽。

マスロワ（書物を取つて燈火にすかして）「其のとき、多くの弟子はイエスに來つて曰く、天國に於いて最も大いなるものは誰れぞや？イエス、幼子を呼び、彼等の中に置きて曰く、我まことに爾曹に告げん、爾曹心を改めて幼子の如くならずんば、天國に行くことを得ず、凡そ此の幼子の如く自ら謙下るものは、天國に於いて最も大いなるものなり」

ネフリュドフ　さう！　ぢや、これでお別れにしよう。もうすぐ十二時だ。さやうなら。（言ひながら、カチューシャを抱き昔のやうに脣に接吻しようとするのを、カチューシャ額で受ける、長い接吻）

（この時遠くの寺で復活祭の鐘の音が聞える。ネフリュドフ驚いたやうに「キリストは蘇りたまへり」と言つて離れる）

ネフリュドフ　ぢや御機嫌よう、カチューシャ！（言つてすた〳〵と逃げるやうに並樹向うの道へ出る）

マスロワ（見送つて）さやうなら、あなたも御機嫌よう！

（ちよつと間を置いて鐘また鳴る。小屋及テントの中から「キリストは蘇りたまへり」といふ聲が幾つか聞える）

マスロワ（淋しくこちらへ向き直つて）「キリストは蘇りたまへり」（沈んで言ひながら次第に頭を垂れる。）

（幕）

◇

前人の説を信じないのは、猿が人間の心を疑ふやうなものだと言つた者がある。私と前人との間には猿と人ほどの差があると考へたと見える。それで當人は人間の組だと考へ居るのだらうか。

（『覺がき』より）

山戀ひ

一

甲斐と信濃の山あひで育つた彼女には、金峯山から吹いて來る風の遠鳴りが、胎内にゐた命の初めから二十で嫁入りする夕まで、魂の窓の薄ら明りにしみ込んでゐる。東京に住んでからもう十年であるが、夜半に雨戸打つ風の音を聞いても、感じはすぐ胸に通じて、遠いむかしの響を傳へる。「わたしが死んだら魂は乾度山へ還るだらう」と、いつも自分で言つてゐた。それは今度某選擧區の補缺選擧に代議士の候補者として立つた大原均一の妻千代子である。

其の山あひを想はせる、木枯の淋しい風が今年も赤坂あたりの高臺を吹き廻る頃となつた。

今朝の夜明を合圖に吹き出した東北風は、後の林から榛や栗の落葉を捲いて、灰色に乾いた玄關先へ打ちつける。そこに見事に刈り込んだ九尺物の檜葉の木の間を拔ければ、南向の裏庭つゞきで、可なり廣い庭も大かたは冬枯の色に變つてゐる。四つ目垣に添へて植ゑた一本の山茶花が黄昏の薄蒼い窓の障子に對して紅く咲いてゐる。

其の肱掛窓の障子がすうつと開いて、面長の白い顏が現はれた。最早はつきりとは見えないが、黑い眼の際立つて大きいのだけはよく分る。何處ともなく轟つといふ風の音がすると、から〳〵と落葉が地べたを走る、身内がぞつと寒い。

二

障子の明く少し前の事であつた。千代子は窓の柱に身をもたせかけて、首を垂れたまゝぢつと考へこんでゐると、仲働の女が仕切の襖をあけ、次の間に手をつかへて、

「奥樣、お燈を持つてまゐりました。」

と言つて、圓火屋の火を細めたランプを、座敷の眞中に運んで、捲金を廻すと、ぱつと差す明が、埋高いほど飾りをつけたニッケルの大臺に輝いてきら〳〵と眩しいやうである。ちよつと此方を振り向いた千代子は、うるささうに顏を背けて、

「あちらへ持つて行つてお呉れ。茲へは燈はいらないよ。あゝもう、そのぎら〳〵する仰山らしいランプなんか見ると、わたし、頭がくら〳〵するよ。早く持つて行つてお呉れつてばね。」

仲働は變な顏をして、命令どほりにした。座敷はまた舊の薄暗さにかへつた。すると今度は年増の女中が入り交つて來て、

「あの、車屋がまゐりまして、奥樣の今晩お召になりますお車は、どういたしませうか、若しあの、旦那さまのお車と先方で御一緒でございます樣なら、やつぱり今までの對のにいたしませうし、それともお別々でございますなら、昨日出來てまゐりましたばかりの、新調のがございますから、其の方にいたしませうか、どちらにいたしたものでございませうか、奥樣に伺つて呉れと、さう申すのでございますよ。奥さま、どちらに遊ばしたものでございませう。いづれお歸りは旦那さまと御一緒でございませうから、やつぱりあれでございませうね……。」

「うるさいね、車なんかどんなでもいゝと、さう言つておやり。」

「は、ではよろしいやうに取りはからへとさう申しつけるのでございますか?」

「車なんぞには、もう／＼乘りたくないよ。」
「まあ奧さま、どう遊ばしたのでございますか？ お加減でも惡いのぢやございませんか？」
「どこも惡かない。」
「では、車はどういたしませう？ それにもうそろ／＼お支度を遊ばさないと、加島さまへお約束の時間が遲くなりはいたしませんか？」
加島といふのは、某政黨の領袖で、今回の選擧の後援となつて大原を引き立ててゐる人である
「わたし、そんな話を聞くとぞつとするよ。白々しいお追從を言つて御機嫌を取りに人の家へ行くことなんか、わたし眞實いやになつた。あゝ、いや／＼。今までてもう澤山。」
「それはもう、おつらい事でございませう。われわれと違ひまして、上つがたには上つがたの御心配がございますからねえ。けれども、旦那さまの御出世遊ばすことでございますから、先がお樂しみでございますわ。それをおぼしめしてねえ、どうか今晩は御支度あそばして……。」
「ほゝ、お前は大層わたしたちを上つがた扱ひにおしだことね。わたしやその上つがたが大きらひ。」
「ほゝゝ、奧樣、御冗談をおつしやいます。」

といふとき、新參の下女がまた一人出て來て、近ごろやつと敎へられたらしく、そこへぺたりと坐つたが、ぞんざいな手附で、
「奧さま、あの、會社の隅田川さんが見えやして、お目にかゝりたいと申されやす。」
年増の女中は、其のあとを引き取つて、
「お辰どん、隅田川さんなんて、そんなお名前の方はない筈だよ。隅田香さんとおつしやるんでせう？」
千代子は言葉を遮つて、
「香さんでも隅田川さんでもいゝや、ねお辰、どうせあんな、人間の袋に空世辭を詰めたやうなやつは、何所へでも据ゑて置けばぴよこ／＼お辭儀をするわね。あんなものに極まつた名前なんかいりやあしないや。わたし、あんな男を見ると、身が慄へるよ。今は會へませんつて、返しておやり。」
「へ。」
と言つて下女は立つた。
「車屋もおかへし、今夜はやめたからいらないつて。」
「でも奧さま、旦那さまが……。」
「旦那さまがどういつたつていゝぢやないか、わたしの乘る車だもの。」

「旦那さまがお待ちでございませうから……。」
「くどいねえ。」
つんとして女中の方へ背を向けて、窓の障子を開けた。山茶花の咲いてゐる肱掛窓に、面長な白い顏の出たのは此の時である。

三

どうつといふ音が、向うの丘の上から落ちて來る。見上げると、夕まぐれの薄明るい空に、つきぬけた松の大木が、怪物の蹲つたやうにむく／＼と黑い影を起して、風に唸つてゐるのである。
頻りに其の方を眺めて、聞き耳を立ててゐた千代子は、次第に面を俯せて、山茶花がたゞ一輪赤く咲いてゐるあたりに眼を据ゑた。そしてぢつと見つめてゐると、青黑い葉の中に、ぽつちりと赤い其の花が、激しい視線の波動にでも感じたか、ぶる／＼と搖れるやうで今にも散りさうに思はれた。千代子は、はつと思つて眉を動かすと、何所からともな、「鄕次はたうとう死んだ、鄕次はたうとう死んだ」といふ濁聲が風の唸り聲にまじつて聞えた。途端に木の葉からつゝと身を現はした人影がある。
見れば先程玄關前で尺八を吹かせて、帶の

間の銀貨入から、ありたけの五十錢銀貨二十錢銀貨を掴み出してやつた、深編笠を被つた物貰ひである。千代子はぎよつとして體を引つこませると、

「奥さん、お待ちなさい。郷次は疾くの昔に、氣違ひになつて死んでしまひました。」

といふ言葉が夕ぐれの空氣にぼかされて沈んで聞える。千代子は氣を取り直して、

「そして、お前さんは一體誰れなの？」

「誰れでも構ひますまい。一々あなたの胸に讀めることをいふ虚無僧だと思ひなされやあ、それで澤山でごわせう。郷次といふ名も、氣違ひになつた事も、死んだ事も、みんな知つてる乞食でごわす。乞食ぢやあつても、言ふ事はみんな本當でごわすよ。こんな胡亂な裝はしてゐても、水晶の出る土地に生れたわし達だ、曇つた事はいひません。ゆすりにでも來たかと思ひなさるか知らんが、そんな料簡は微塵もない。わしが斯うして來たのは、たつた一言あなたに言傳をいはうと思つたからでごわすよ。郷次は十年の間氣違ひになつて、そしてそれが直ると、ふつと死ぬる氣になつた。其の死ぬる間際まで、唯の一言もあなたを怨むとは言はなかつた。郷次は默つて死んでしまひましたよ。奥さん、わしの用といふのはそれだけでごわす。わかりましたか。」

千代子が驚いてだまつてゐるのを見て、虚無僧は夕靄に包まれた門の潜りから、跡をも振向かないで出て行つた。と思ふと、榛の木林の方へ、町はづれの街道を淋しさうにぼろゝと吹いて行く尺八の音が、風につれて聞えて來た。耳を傾けて聽いてゐた千代子は、すつと緣側に出て、庭下駄をつゝかけて笛の音の跡を追うた。

四

街道を右によけた雜木林の暗い中に、女は栗の大木を背にして、男はそれに向つて立つてゐる。

まばらになつた枯葉の間からは、冷たく澄んだ空が透けて、吹き曝された幾點かの星影が見える。暮れるにつれて風がばたりと休み、あたりは一しほ森として、朽葉の香ひが鼻を打つて來る。

「十年のあひだ郷次がどんな事をしてゐたか、あなたは知んなさるまい。あれが氣の觸れた初めが、ちやうど今夜のやうな晩でごわした。からつと晴れた星空に、風が馬鹿に吹きずあがる。あなたの家の横手の往來は、土が灰色に乾からびて、折をり枯れつ葉ががら〳〵と捲くれて通る。其の中を夜中被り物をしないで行つたり來たりして、しまひには的もなく駈け廻つてゐましたが、夜が明けると、姿が見えなくなつた。それから後の郷次は、もう舊の郷次ぢやなかつたのでごわすよ」

言つて虚無僧は肩をふるはせたが、また言葉をつゞける。

「それも其の筈ぢやあごわせんか。たしかあなたは十七の時、村長さんの一人娘が山ばひりが好きで、人を連れないで、男のやうに峯から峯へと駈け廻んなさる。其のうちにたうとう騷ぎが起つて、あれは九月の二十日の晩でごわした。晩飯になつても歸つて來なさらん。さあ人を集めて村中を探す。といつても夜の事ではあるし、誰も山の中まで踏み込んで見ようと云ひ出すものはない。その時にぜつひわしがといつて、一番に山の方へ駈けだしたものは、おとなしいで評判の郷次でごわしたよ。日頃からあなたの好いて行きなさる方角は知つてゐるし、たうとう御嶽の方へ外れた溪谷で、疲れて途方にくれてゐなさるあなたを見つけて、一里に近い山路を負つて戻つて來た。

あの晩は月夜でごわした。辿り辿つて、やつ

と、いつもの道の見える。あの突き出た岩の上へ來た時は、流れるやうなお月さんの光りが、煙に浸つた目下の村を撫でつけてゐる。しつとりと出た身内の汗に、冷々と夜風が吹いて、あゝいゝ氣持だと思ふと、背中に負つてる人の髪の油の香がする。其の亂れた毛筋が自分の頬まで垂れて、耳元に暖かな息のかゝるのが分ると、郷次は總身にぶる／＼と慄へが來ました。

あゝ奥さん、それからあとは言ひますまい。四年があひだといふもの、郷次のたつた一つの生き甲斐は、『有りがたい』と言つて下さつたあなたの一言と、顔を合はすたび潤むあなたの眼が、何だか胸にこたへる。郷次もしまひには、あなたを見ると、たゞ何となく涙が出るやうになりました。

けれども一方は村長さんの一人娘で、一方は其の日稼ぎの日傭取りであつて見れやあ、何うすることも出來ない。心を割つて見せたら、何所の何方が來たつて負けるものぢやごわせんが、身分といふやつが憎い邪魔でごわした。その中に四年立ちました。するとある朝、郷次は耳元で早鐘を撞き出されたやうな噂を聞いた。お千代さんは、やり手といふ評判の、あの小學校の校長さんと夫婦になつて、東京へ出なさるさうだ。斯う聞いた時の郷次の胸は何んなでごわしたらう？

村長さんの宅で祝言の晩が、郷次の氣違ひになつた晩でごわした。氣違ひになつてからの郷次は、名でも忘れたか、お千代さんの事は口にも出さなかつたさうでごわすが、あいつの氣では、名で覺えてるやうな、そんな上つつらの思ひぢやあなかつたのでごわせうよ。あいつの胸には、其の人の正體がそつくり納めてあつた。名なんざあどうでもよかつたのでごわせう。それで、何所で貰つて來たか、古い書物を何册も持つてゐて、時々それを出して見ちやあ、何だか分らん事を口の内で言ふ。どうしたのだと聞くと、讀んでるのだといふ。今に見ろ、おれも斯うやつて、大先生になつて見せる、何だ、おれとあの大原先生とは、たゞ是れんばかしの青表紙の違ひぢやあないか、おれが今にこれを讀んでしまつたら、あとは五分々々の相撲だ、この青表紙さへなけれやあ、こつちあ八千尺の金峯山の風に育てられた、清しい男だ、曲りくねつたあの校長先生なんぞに、ひけは取らないと、氣違ひに似合はん理窟を言つたさうでごわす。

其の氣違ひがどうした機か、此の頃ひよつこりと治りました。治つて見れやあ間の十年は他の世で見た夢の樣で、世間は其の頃のお下げが島田に結ふほど變つてゐても、自分だけは、一昔前がすぐ昨日のやうに思はれて、忘れた事はまるで忘れてゐるが、覺えてゐる事ははつきりと覺えてゐる。それでふつと死なうといふ氣になつたのでごわす。何ういふ譯で死にたくなつたかは、自分にも分りませんが、大かた十年前のあの晩に、思ひせまつて死ぬと決心をしたのでごわせう。所がいよ／＼といふ間際に氣が狂つて、決心をぽろりと忘れてしまつて、十年おもしろをかしく生き延びた。それが正氣に立ち戻つて見ると、前の決心のつゞきが直ぐそこへ繋がつて來る。前の世の因果とでもいつた風に、否應なしに心をその方へ引つ張つて行つたのでごわす。だから死ぬるときの郷次は、誰れを怨んだといふでもない。また誰れが留めたつて留まるものでもない。油の切れた行燈のやうに、すうつと消えて行くべきに極まつてゐたのでごわす。たゞわしはねえ、親しいものの誼みで、此の世にたつた一人のあなたに、かはいさうだと一言言つてもらつたら、死んだものも定めて浮ぶだらうと思ひましてね、斯うやつて打ち明け話をしたのでごわす。あゝ郷次はたうとう死にました。思つてならない人を思ふため

に、初めの二十幾年といふものを人間で育つて、それから十年は浮世離れのした氣樂な世界で過ごし、愈々死ぬために、も一度ふらりと人間に戻つて來た。斯う考へて見れやあ、鄕次の一生もおもしろいぢやごわせんか。

　奥さん、よく聽いて下さつた。風でもおひきなさつちやあわるうごわす、さあ、お歸んなさい。わしも是れでお暇を申します。」

　男が飄然として立ち去らうとするのを千代子は引きとめて、

「よく話してお呉れだつた。わたしや嬉しいよ、お禮をいひます。若しひよつと鄕次んがまだ死なないでもゐたら、せめて其の氣樂な氣違ひの世界ででも、一度逢ひたかつたと、さう傳言してお呉れ。わたしもねえ、今ぢや、育つた山の中がしみ〴〵と戀しくなつたよ。お前さんは御存じもなからうが、ふとした意地からあゝして大原と一緒になりはなつたが、其のあくる日から、わたしはもうもとの素直な、竹のやうなお千代ではなくなつたのだよ。あれから東京へ出て、一番がけに傭手を求めてなつたのが何だとお思ひか、耶蘇敎の牧師ぢやないか、わたしは牧師の細君といふので、急に轉聲を出して讃美歌を歌ふことも習へば、敎會堂の入口に立つて、刷物を配ることも覺える。日曜日に集まつて來る女學生仕立のお孃さん方と、山育ちのわたしとは、話の合はう筈がない。それを此方が物を知らないからと思つて下手に出て御機嫌を取れば、向うはお客さまか何かのつもりで、『あの大原さんのお神さん、ちよいと』なんて馬鹿にするぢやないか。それを大原までが、一緒になつて御機嫌を取つて行く。言ふに言へないつらい思ひをして、やつと信用もついたかと思へば、今度は社會改良とやらの演説をする樣になつて、折角急ごしらへの耶蘇敎信者が、いつの間にか政治家と新聞記者の合ひの子見たいな商賣にかはつちやつて、あくる日もない思ひをして行くうちに、會社の株なんぞちよいちよいと買ふやうになつて、内は少し樂になつたけれど、金の融通が利くやうになると、こんどは紳士だの紳商だのつて、違つた名をつけて、違つた見えを張つて行かなくちやならない。お金が出來てまあよかつたと思へば、代議士の運動がはじまる。一萬圓のものは十萬圓に、百萬圓にも見せて、見えと機關で綱渡りをして今日が日まで送つたが、つく〴〵考へて見れや、わたし達は何のために生きてゐるんだか分らないぢやないかね。それは、大原は、あの通り野心の强い人だから、自分がすきであがいて行くのだし、小學校の校長から今の身分にまでなれば、大した立身さねえ。けれどつまらないのはわたしぢやないか。何時が果だか知れない大原の野心に引つぱられて、一段上ればもうすぐ其の次の足場に取りかゝる、幾ら上つても〳〵是でいゝといふ時はありやしない。絹の着物を着て、大きな玄關を構へて、旦那さま奥樣とあそばせごかしにされてゐれば、人は羨ましい身分だと思ふか知らないが、そんな事が本當の仕合はせでも何でもありやしない。

　氣がついて見れば、わたしはつく〴〵今の身分が厭になるよ、わたしはもう疲れちやつたの、今一度生れた山の中に歸つて、あの甘い溪の水を飮んで靑い山蔭の空氣を吸うて、身も心もさつぱりとして死にたい‥‥わたしは、斯んな事を考へてると言つてね、若し生きてゐたら鄕次さんに言づてをしてお呉れ‥‥。」

「分りました、よく分りました。それぢやあ是れがお別れでごわすよ。」

　虛無僧と千代子とは、潮合に漂うてゐた二つの浮木が、不圖流れ寄つてまたゆら〳〵と別れ行くやうに、夜の街道を北と南に別れて了つた。

五

「夫に面皮を缺かせて、立身の邪魔をするとは、何といふ不心得な事だ。厭なら厭で、初めからさう言へばいゝぢやないか。約束をして置いて、向うではそれがためにわざ〳〵支度までして待つて居たのを、斷りもなしに待ちぼけを喰はすなんて、物を知らんにも程がある。」

「それは重々わたしが惡いのですと、さう言つてるぢやありませんか、けれども厭で仕やうがなかつたから、止したのです。わたし、もうあんなお勤めは出來なくなつたのですよ。」

「子供のやうな事を言つてるぢやないか。何だつて勤めとなれやあ厭なものさ、それを辛抱してやればこそ後に芽が吹くのだ。ぢやあお前は、わたしの身はどうなつても構はんといふのか。」

「構はないとは言ひませんが、あなただつて餘りあがき過ぎますよ。」

「何だと？　あがき過ぎると？　ぢやあお前にはわたしの出世がうれしくはないのだね？」

「はい。」

「驚いた。」

「大臣の妻になつたからつて、それが女の仕合せとは限りませんよ。」

「うん、分つた、では何だな、わたしがお前に不親切だといふのだな、わたしは隨分お前には出來るだけの事はしてゐるつもりよ。」

「其の親切はよく分つてます。けれども、たゞ樂に暮させて、贅澤をさせて貰ふだけの親切ならちつとも有りがたいものぢやありません。あなたはあんまり世間の方へ氣を取られ過ぎておいでなさるのです。わたしが一人でどんな辛い思ひをしてゐるかといふ事を、ちつとも考へて下さらない……。」

「お前にどんな辛い思ひをさせた？　此の大原均一は二十幾つになるまで妾狂ひ一つした事はないよ。」

「それは分つてますさ。そんな事をわたし言つてやしない。」

「ぢやあ何だ？　わたしの身分には不相應なまでに、金もかけて立派に大原夫人として交際社會に出してやる……。」

「それをあなたは有りがたい事と思つていらつしやるの？」

「うれしくはないのか。」

「ほゝ、それが嬉しいやうなら、わたし何も言ひはしない。」

「お前の言ふ事は、わたしには分らない。」

大原はぷいと立つて、車を呼ばせて出て行つた。

千代子はそのまゝ柱に身をもたせ、懐手をしてぢつと考へ込んだが、

「わたしとあの人の考は、同じ世界に住んでる者とは思へないほど違つてる。」

と思つた。そして生欠伸を一つした。

六

「わたくしは、逃げも隱れもいたすものには候はず、たゞ山へ歸りたき一心の我がまゝとおぼしめし下さるべく候。かしこにて命ある限りは此の身ひとりを淸くすごしたき願ひに候。あなたさまを嫌ふのでもなければ、浮きたる心にはなほさら無之候。あなたさまの御親切はよくよく承知いたし居り候。たゞあなたさまには立身といふ思ひ者がつき纏ひ居り、わたくしはそれが嫉く、それに苦しめられてお別れ申す事に思ひ定め申候。あなたさまが立身なさるゝにつれ、わたくしは自分の田舍育ちの身がつらく、だんだん肩身狹く相成り申候。上部ばか

りを人並に着飾りて、當世の貴婦人がたに立ち交り行き候事、わたくしには何ぼうにも辛く、集會などにまゐり候たびに、傍のお世辭までがわたくしを嘲笑ひ居るとしか思はれず候。それがためおのづとあなたさまの面皮を缺かすやうなことも起り、まことに相すみ申さず候。さりとて此の年になりて、人樣のやうに學校はひりなどは、迚もわたくしの性分にては出來ず候。もと〳〵わたくしのやうな者があなたさまと一緒になり候こと、わたくしの過ちに候へば、此の上は、自分で身を引き、元の山住ひに歸りて、一生を野生ひのまゝに暮したく候。今のあなたの御身分にては、どのやうな善い所からでも緣談これあるべく候へば、跡には御身分に似合ふやうな奥さまを御むかへなされて、思ひのまゝに立身なされ候やう念じ上げ候。

千代より。」

といふ一封を殘して、千代子が親里へ歸つた日は、ちやうど鄕父が荒川筋で水死したといふ噂の村中に姦ましい最中であつた。併し千代子はそれを聞いて別に驚きもしなかつた。

久しぶりで懐かしい山の裾に出て見れば、今さらのやうに新しい景色が目につく。どちらを向いても大浪の天を限るやうに聳え立つた山脈が赤牛の背のやうに冬の瘦を見せて長々と其の脚を淡い日向に投げ出してゐる。其の中にぽつりと動いてゐるものは自分の影ばかりで、傷ましい淋しい中の平和さと言つたら、譬へやうのない氣持である。はつきりと澄み切つた空には、山の嶺が色々の形に輪郭を染め出して、其の線の曲り工合の大膽なこと、とても人間の小細工で眞似の出來るものではない。あたりの空氣は清冽な水のやうに體に透き通つて、微な土の香ひがさま〳〵の事を想ひ出させる。うつとりしてゐた千代子は、

「あゝ活きかへつたやうだ。」

とつぶやいて、ほろ〳〵と涙をおとした。

甲信の山あひでは、斯んな事が人々の噂の舌を動かし、想像の胸を躍らせて、其の靜かな空氣を騷がせて居る間、大原均一は、家出した妻の手紙を見て、一時は悄然として首を垂れてゐたが、やがて振り上げた顏には我慢の色を漲らして、にやりと淋しげに笑つた。そしてまたいつものやうに事を命じた。

◇

私の居た小田原は、歴史的興味あるべき土地である。卽ち鎌倉以後は少なくとも關東の文明は一時此の地に集つた。云はゞ江戸文明の根源地である。で、私は此の歴史的興味を味はうと思つて、地圖を繙いたり、名所案内記を讀んだり、歴史や傳記のやうなものを調べたり、いろ〳〵興味を刺戟しておいて、さて舊蹟めぐりなどをやつて見たが、どうも私には歴史的興味とか、懷古の情といふやうなものが淡くなつて了つたのを感じた。思ふに之れは、一つは境遇時勢の力でもあらうが、一つは年齡のせゐであらう。もう私も今年は數へ年四十になつた。坪内さんなどの話でも、四十とか五十とか云ふエポックを劃する時代には生理上の變化と共に、精神上にも少なからず變化のあるものださうだ。私が小田原と云ふ歴史的興味に富んだ土地を見て淡い興味しか覺え得なかつたのも、矢張り此等の意味で、段々ローマンスが消えて行くのであらう。自然は知らぬ間に人間のローマンスを一つ〳〵壞して行く。

（『早稻田大學教室』より）

故郷の父

私の故郷は石州であるが、東京に出てから彼れ是れもう二十餘年になる。其のあひだ、母の死んだ時の外は、一度もしみ〴〵と歸省したことが無い。從つて故郷の記憶も、大かたは遠い淡い夢のやうになつて了つた。たゞ所々馬鹿に際立つてはつきり想ひ出せる部分がある。

私の十ばかりの頃は、一家が久佐といふ田舍に住んでゐた。家は、四五十坪ばかりの前庭を取つて、藝州境への小街道に沿うた瓦葺の一軒家で、後は深い谿谷になり、そこから可なり水嵩のある小川が横手をめぐつて流れてゐる。其街道といつても人通りは極めて稀であるが、其の道を挾んで、向うには青田が擴がり、其の向うは又山になつてゐる。

或る夏の夕暮であつた。夕食を濟ませた後、家内中前の緣側に出て涼んでゐると、何處からか蝙蝠が一疋飛んで來て、軒のあたりを高く低く飛び廻る。私や二人の弟やは總立ちになつて騷ぎ出した。すると、今まで晩酌の微醉顏をわざとむづかしさうにして煙草盆を前に控へ、煙を吹かして居た父が、だしぬけに立ち上つて、長押に懸けてあつた樫の丸拔の一間棒を小脇にかゝへ、尻端折で跣足で飛び下りた。びつくりして見てゐると、父は擊劍をやるやうな身構へと、氣合をかけるやうな掛聲とで、頻りに其の棒を扱いたり、水車のやうにくる〴〵廻したり、門の恰好に構へたりしながら、蝙蝠を相手に棒使ひを始めた。棒と擊劍とは父がこんなに零落して以後の、唯一の自慢藝であつたのだ。

上になつたり下になつたりして、暫く相手になつてゐた蝙蝠は何時か飛び去つて了つたが、父は尙盛んに空に向つて獨りで棒を使つてゐる。其のうち日は段々暮れ、夕月の光が一杯にそこらを浸して來た。其の月影の下で、磨いた樫の棒が、稻妻のやうにきら〳〵と光る。母はほゝ笑みながらぢつと見て居た。私は强い豪い父だと思ふと同時に、何だか其の猛烈な勢が、幼な心に物凄くて、慈愛の父といふ感じと調和しない、荒んだやうな氣持を覺えた。

父はやがて棒の手を收めて、汗を拭きに小川の緣へ降りて行く其のあとをぼんやり見送つてゐると、遙かの街向うに二軒並んで立つた農家の前で、据風呂の火の赤く燃え立つのが見えた。二人の弟は其のときもう母と一緒に蚊帳の中に這入つて居た。

今から考へると、父はあの時、心に佐々木巖柳の燕返しや、寶藏院の水月の槍の傳說なぞを繰り返して居たのだらう。其の父が故鄕で不慮の死を遂げてから、今年は七年である。

◇

權威の無い者が權威あるものの口眞似をすると誰れかが言つたが、實際、人には其の人みづからの權威の充實する限度がある。其の限度以內に於ては、各個人が皆自家の權威を有する譯だ。其の限度とは事實といふ事、實行といふ事に外ならない。殊に人生觀上の問題などに關しては、自ら行つてゐない言說を千萬積み重ねても、何の役に立つべきか。

(『覺がき』より)

心の影

心の影に情の眞實はあつても事實の眞實はない。此の集の中の二三の歌が世間の一部から事實の記載であるかのやうに非難せられたのを私はかなしむ。

○
窓の外は、たゞ眞つくらな
夏の夜の八時すぎ。
雨のざんざとそゝぐ音、
その闇の中から
ひらりと拔けて來た一羽の蝶が
わびしく照す電燈の笠に、
すがりつき、すがりつき
濡れた翅を顫はす、
やるせない夏の夜の八時すぎ。

○
通り雨、通り雨、
戀の邪魔して通る雨、
それで思ひ切られる仲ぢやなし、
晴れて行け、晴れて行け
跡には濡れた青桐の
夕日の蔭のつばくらめ。

○
部屋の隅に据ゑた石膏像、
その上からふはりと
白い薄絹が覆うてある、
薄絹の襞のいろ／＼、
青い瓦斯の光がそれを傳つて
流れたり淀んだり、
あるか無いかの夜風が
窓から手を出してなぶる、
柔かな襞の搖れ、
かすかに揉める光線の戯れ、
音もない書齋の夜の心。

○
眞つ白な綿雲と青い空とを遮つて
まがつみのやうに垂れ下つた灰色雲、
ぢつと淀んで動かず、
下には憂鬱の森が黑く、
夏の薄日に蒸されてゐる
森から吐き出す重い息は
鈍い空氣に流れ込んで
私の心臟を壓して來る、
あゝ眞夏の午の沈默、
いつまで續く沈默。

○
どんよりとした薄曇り、
靄に包まれた目白の森を
今日も夢のやうに見てゐる。
森の輪郭を破つて、
一本立つた煙突、
つぎ／＼に吐き出す煙の
いつまでも盡きぬ想ひ。

○
名も知らぬ信越線の停車場に小娘ひとり
立つ雨の暮
河原あれて月見草咲く夕ぐれを汽車の窓
より見る漂泊の人
上野を去る數驛にして眼に涙あり何とも
知らぬ今日の心よ
頰を打つ大粒の雨ひやゝかに我が魂を
貫くと見し。

青田煙り遠山黒く限りなく雨に籠りて憂き日暮れ行く

旅にありし一筋町の夜を想ふたゞ赤かりし祭禮の灯よ

なつかしき城下町なり衰へし軒にたゞしくあかり掛けたる

廢滅の香ひを祕めて古濠に澱みたる水のゆるく漂ふ

痩畑に雜木林のつゞきたる其蔭に立つ頬の蒼き人

旅人の秋に感じてうなだれし襟元さむし信濃路の風

桔梗咲き女郎花咲き百合咲いて空淺黄なる信濃高原

或時は二十の心或時は四十の心われ狂ほしく

いたづらに此世を過ごすまでもなし我が身亡びよ天地崩れよ

ともすればかたくななりし我心四十二にして微塵となりしか

いつまでも斯くてあらんと願ふなり敗れたるわれ傷つける我

われ強しわれ大なりと思ふ時我が詩まことの詩を成さざりき

くれなゐに黄金に燃えて水色にさめてはまたも燃ゆる君かな

その花に香ありあらずと爭ひて君まづ折りし河原撫子

かりそめに結びし紙の誓ひにも末をかけたり住吉の宮

住吉の塔の東の窓に倚り人の世狹しと君かこちしか

住吉の赤き社と白き砂君がパラソル水色にして

むらさきの空いつとなく薄れ來て月しろじろの秋の朝たち

長岡のいでゆの旅よござんなれ江馬の小四郎天野遠景

こしかたの三十年は長かりき沙漠を行きてオアシスを見ず

秋風のさら〳〵渡りばつた飛ぶ野にひとり立てば人の戀しき

ペレアスがメリサンド戀ふそも〳〵の不可思議を思ひ思ひ寢たる夜

セリセット死にぬ哀れの妻なれど妻に代へたる戀もたふとし

こしかたの幕はとぢたり美しき夢のはじめのモンナヴンナよ

年譜

明治四年
正月十日、島根縣那賀郡久佐村に生る。父佐々山一平氏。母ちせ子。長男也。

明治二十三年（二十歳）
二月、上京す。

明治二十四年（二十一歳）
六月十三日、那賀郡濱田町裁判所檢事島村文耕氏の養子として入籍し、爾後島村姓を冒す。
十月、舊東京專門學校文學部に入學す。

明治二十七年（二十四歳）
七月、舊東京專門學校を卒業す。文學部第二回卒業生なり。卒業後、「早稻田文學」の記者となり、傍ら舊東京專門學校文學科講義錄講師たり。

明治二十八年（二十五歳）
六月、島村瀧藏次女いち子と結婚す。十二月、實母を失ふ。

明治三十年（二十七歳）
三月長女生る。四月、後藤宙外、小杉天外、原青々園、水谷弓彦の諸氏と雜誌「新著月刊」を東京神樂坂町丁酉文社より發行し、その創刊號に小說「白あらし」を掲ぐ。

明治三十一年（二十八歳）
一月、「新著月刊」第二年第一號に小說『月がさ日がさ』を掲ぐ。この年「讀賣新聞」三面主筆記者となり、一年間在職す。九月より舊專門學校文學科講師とな　、美辭學、支那文學史、及び西洋美學史を講じ、傍ら「讀賣新聞」月曜附錄を主宰す。

明治三十二年（二十九歳）
書肆三省堂編輯部に入る。九月二十三日、二女生る。

明治三十三年（三十歳）
四月、宙外、青々園との合著『風雲集』出版。八月、三省堂を辭す。九月より早稻田中學校教員となり、英語及び倫理を講ず。

明治三十四年（三十一歳）
十二月、早稻田中學校教員を辭す。

明治三十五年（三十二歳）
一月、長男生る。『新美辭學』を著す。三月、東京專門學校海外留學生として英吉利及び獨逸に派せらる。十月、牛津大學に入る。

明治三十七年（三十四歳）
九月、養父を失ふ。十月、伯林大學に入る。

明治三十八年（三十五歳）
一月、實父を失ふ。九月、歸朝す。專門學校改稱早稻田大學文學科講師となり、美學、英文學史、歐洲近世文藝史、文學概論等を講ず。「東京日々新聞」の月曜文壇を主宰す。

明治三十九年（三十六歳）
一月、文藝協會の機關として再興せる「早稻田文學」を主宰し、その初號に「囚はれたる文藝」を掲げて泰西文藝思潮を論ず。同月、小說集『亂雲集』出版。當時、牛込區藥王寺前町二十番地に卜居す。四月、「早稻田文學」に『沙翁の墓に詣づるの記』を掲ぐ。七月、『滯歐文壇』出版。九月、「早稻田文學」に『ルキ王家の夢の跡』を掲げて、ヴヰルサイユ宮殿のロココ藝術を論ず。十月、二男生る。同月、「東京日々新聞」の月曜文壇を退く。

明治四十年（三十七歳）
一月、「都新聞」新脚本懸賞募集の選者を囑さる。二月、英國の美學者グラント・アレ

ンの小說『しとげた女』を飜案し其の『女』と題して出版。九月、早稻田大學英文學科敎務主任に就任。同月『早稻田文學』に『美學と生の興味』を掲ぐ。

明治四十一年（三十八歲）

早稻田大學維持員に就任。一月、『早稻田文學』に『文藝上の自然主義』を掲ぐ。四月、三男生る。五月、『早稻田文學』に『自然主義の價値』を掲ぐ。六月、早稻田大學文學科に新設されたる特殊研究科にトルストイ研究を擔當す。

明治四十二年（三十九歲）

一月、『早稻田文學』に『歐洲近代の繪畫を論ず』を掲ぐ。二月、文藝協會演藝部內に新設の演劇研究科の指導講師となる。五月、雜誌『太陽』の新進二十五名家投票に於て、文藝家の泰斗の一人として第四位に當選し、金製頌德盃を受く。六月、『太陽』增刊『新進二十五名家』に『宗教の三文化と文藝』を掲ぐ。同月論文集『近代文藝の研究』出版。七月、四男生る。九月、『早稻田文學』に『懷疑と告白』を掲ぐ。十月、早稻田大學圖書館主催の近松祭に於て『東西心中劇の比較』を講ず。

明治四十三年（四十歲）

一月、『早稻田文學』に飜譯イブセン原作『人形の家』を掲ぐ。同月、肋膜炎を病む。二月、病氣療養のため相州小田原に轉地す。七月、『早稻田文學』に『自己と分裂生活』を掲ぐ。『大阪朝日新聞』小說懸賞募集の選者を囑さる。

明治四十四年（四十一歲）

一月、『早稻田文學』に戲曲『淸盛』を掲ぐ。四月、同誌に戲曲『運命の丘』を掲ぐ。五月、文部省文藝委員に任ぜらる。七月、『早稻田文學』に戲曲『海濱の一幕』を掲ぐ。九月、府下戶塚村諏訪の新居に移る。十一月、三男を失ふ。十二月、三女生る。

明治四十五年（大正元年）（四十二歲）

一月、『早稻田文學』に戲曲『復讐』を掲ぐ。三月、文藝協會第三回公演脚本『故鄉』を『早稻田文學』に掲ぐ。六月、同脚本單行本となりて出版さる。八月、四男を失ふ。十月、『早稻田文學』に縮圖劇『競爭』を掲ぐ。十一月、同誌に飜譯戲曲メエテルリンク原作『ペレアスとメリサンド』を掲ぐ。十一月、奈良及び京都に旅し、その紀行文を『讀賣新聞』に連載す。

大正二年（四十三歲）

四月、『人形の家』出版。五月、『ペレアスとメリサンド』及び隨筆集『影と影』出版。同月、文藝協會幹事を辭す。七月、『早稻田文學』に飜譯戲曲メエテルリンク原作『モンナ・ヷンナ』を掲ぐ。九月、藝術座を起し東京有樂座に第一回公演を催し、メエテルリンクの『內部』及び『モンナ・ヷンナ』を上演す。同月、『モンナ・ヷンナ』出版。十月、藝術座一行を率ゐて大阪及び神戶を巡演す。十一月、隨筆集『雫』出版。早稻田大學英文科敎務主任及敎授を辭し改めて講師となる。

大正三年（四十四歲）

一月、有樂座に於て藝術座第二回公演を催し、イブセン作『海の夫人』を上演す。二月、飜譯『海の夫人』出版。三月、飜譯トルストイ原作『復活』出版。同月、東京帝國劇場に於て藝術座第三回公演を催し、トルストイ原作を脚色せる『復活』を上演す。四月、藝術座一行を率ゐて信越地方を巡演す。六月、論文集『懷疑と沈默の傍より』出版。七月、府下中澁谷福澤邸に於ける藝術座第一回研究劇に自作脚本『復讐』を上演す。同月、『中央公論』新脚本號に戲曲『赤

と黄の夕暮』を掲ぐ。十月、帝國劇場に於て藝術座第四回公演を催し、沙翁原作を改訂せる『クレオパトラ』を上演す。同月、『クレオパ・ラ』出版。十一月、藝術座一行を率ゐて京阪地方を巡演す。十二月、本郷座に於て藝術座第五回公演を催し『ノラ』を上演す。

大正四年（四十五歳）

一月、「早稲田文學」に論文『文藝の弱少』を掲ぐ。自一月、至三月、藝術座一行を率ゐて南信地方及び四國、中國、九州各地を巡演す。四月、帝國劇場に於て第六回公演を催し、ツルゲーネフ原作を脚色せる『其前夜』、オスカア・ワイルド作『サロメ』等を上演す。五六兩月、藝術座一行を率ゐて京阪、及中國地方を巡演す。八月、牛込區橫寺町に新築の藝術倶樂部内に居を移す。十一月、藝術座一行を率ゐて臺灣朝鮮及び滿洲を巡演し、年末歸京す。

大正五年（四十六歳）

一月、藝術座一行を率ゐて京阪及び九州地方を巡演し、三月、歸京す。二月、「早稲田文學」に改作戯曲『清盛と佛御前』を掲ぐ。三月、此の戯曲を帝國劇場に於ける藝術座第七回公演に、中村吉藏作『眞人間』と共に上演す。六月、「早稲田文學」に隨筆『僕のページ』を掲げ始む。七月、牛込藝術倶樂部に於て藝術座第二回研究劇を催し、トルストイ原作『闇の力』を上演す。七八兩月、藝術座一行を率ゐて上州及東北地方を巡演す。九月、帝國劇場に於て藝術座第八回公演を催し、トルストイ原作を脚色せる『アンナ・カレニナ』を上演す。十、十一兩月、藝術座員を率ゐて京阪地方を巡演す。

大正六年（四十七歳）

二月、「早稲田文學」誌上にて『民衆藝術としての演劇』を說く。三月、東京新富座に於て藝術座第九回公演を催し、谷崎潤一郎の小說より脚色せる『お艶殺し』、ソフォクリーズの『エヂポス王』等を上演す。自四月、至八月、藝術座員を率ゐて信州地方、名古屋、中國朝鮮及大連等を巡演す。十月、東京明治座に於て藝術座第十回公演を催し、トルストイ原作より脚色せる『生ける屍』を上演す。十一月、藝術座一行を率ゐて名古屋地方を巡演し、年末歸京す。

大正七年（四十八歳）

自二月、至六月、藝術座一行を率ゐて京阪中國及九州地方を巡演す。八月、「早稲田文學」に『藝術座の事』を掲げ、新たに藝術座の經營を松竹會社に委託するの契約を結べる事、及び脚本部を新設せる事等を發表す。九月、東京歌舞伎座に於て藝術座第十一回公演として、ハウプトマン作『沈鐘』を上演し、引つゞき藝術倶樂部に於て第三回研究劇を催し、長田秀雄の『誘惑』、有島武郎の『死と其前後』を上演す。十月下旬、明治座十一月興行のダヌンチオ原作『春の朝の夢』の稽古を指導しつゝありしが、流行感冒に罹り、三十日臥床す。やがて肺炎に變じ、心臟痲痺を併發し、十一月五日午前二時藝術倶樂部に於て永眠す。七日午後四時青山齋場に於て葬儀を執行。八日午後二時雜司ヶ谷墓地に埋葬す。

◇

懷疑には、少なくとも自省によつて自他を眞實にする力がある。安價なる信仰談や解決談は、一時の賑やかし以外に何の實質を跡に殘してゐるか。

（『覺がき』より）

生田長江集

一の信條　生田長江

私は信じてゐる――科学的なる真と、道徳的なるものゝ善と、藝術的なるものゝ美と、此三者は更に宗教的なるものゝ聖に統一せられ、三位一體をなすべきことを。

圓光（三幕）

人物

辰巳一郎。　三十歳前後。美術家にして文學者。

歌津子。　二十二三歳。

貞雄。　十一二歳。歌津子の異母弟。

歌津子の繼母。

武田忠夫。　辰巳と同年位。歌津子の繼母の甥。軍人。

みつる。　忠夫の妹。歌津子より一つ二つ年下。

今村順。　辰巳より四つ五つ年上。美術家。

仲子。　今村の共同生活者。三十歳近く。

其他二三人。

第一幕

（東京市の郊外、辰巳一郎の畫室。正面の大きな玻璃窓から流れ込む晩春の日暮近い柔かな光線が、椅子、テエブル、繪具箱、ピアノなどの上に落ちてゐる。老婢が、絨氈の上にこぼれたインクの汚點かなんぞを拭つてゐるところにて幕上る。）

一郎。（置時計のゼンマイをかけながら）もう可いよ、ばあや。それ位で可い。

老婢。でも、まだ斯んなでございますもの。も少し綺麗に拭いて置きませう。

一郎。いや、もう可い、もう可い。

老婢。（やつと起ち上り）左樣でございますか。……ほかに何か御用は？

一郎。さうさな、別に……

老婢。あの、御客樣が御見えになりますと、直ぐ、御一緒にお出掛けでございますか？　直ぐに？

一郎。うむ、直ぐに出掛ける。そして夕飯の支度もしないで可い。お客樣と一緒にそとで食べるつもりだから。

老婢。左樣でございますか。それぢや、（玄關の方からの物音を聞きつけたる如く）……おや、もう御客樣のやうでございますね。

一郎。（玻璃窓に近づき、裏木戸の方をのぞいて見ながら）ちがふよ。歌津さんは、此頃はいつでも裏の方からだよ、（表玄關へ續く入口の方へふりかへりながら）誰かしら。生憎な時にやつて來あがるな。丁度一年目の記念日を、これから祝はうとしてゐるのに。

老婢。（入口の扉に手を掛けて）斷つてしまひませうか。

順。（老婢と同時に扉を開き、蹣跚るやうにして入る）おつと危い！　失敬、失敬。

老婢。おや、今村樣でございましたか。（出て行く。）

一郎。ああ、君か！

順。うむ、僕だ。

一郎。（椅子を押し勸めながら）其後、どうしてゐた？

順。やつぱり生きてゐたよ。

一郎。暫く來なかつたね。

順。うむ。然う言つて吳れると助かるがね。實はその暫くぶりで又、少々ばかりこれを（左の腕に注射器をあてがふ手眞似をする）御厄

外になりに來たのさ。

一郎。モルヒネを買ふお錢をかい？

順。うむ。成るべくならば、強請に來ないで濟ましたいんだけどもね。そこが、それ、矢張どうも。

一郎。（默つて煙草の箱を客の前へ押しやり、仰向いて目をつぶりながら）君の其モヒ中毒ももう、到底治る見込がないのかねえ？ 何とかして治せないものかねえ？

順。駄目、駄目。斯うなつた原因も意志薄弱だが、斯う成つた結果は、一層意志を薄弱にする。もう自分から、治さうと云ふ氣にもなれないんだよ。

一郎。それで、矢張注射の分量が多くなるのかい？

順。うむ。だが、それより困るのは藥の高くなつた事だ。此頃では、どんなにしても一日分が一圓近くかかるんだからな。先達てなぞ、僕の田舍の新聞で見ると、お醫者の家へモルヒネを取りに入つた强盜がある。無論、僕のやうな貧乏人で、モヒ中毒にかかつてる奴さ。（懷中から醫者の證明書を取り出しながら）君、もう我慢が出來ない。今朝から一回もやらずにゐるんだからな。……これを持つて行けば、誰にでも賣つて吳れる。大急ぎで買はしてくれ……賴む、大急ぎで……

（一郎は順から受取つた證明書を持つて行く。其後で順は、室內をぐるぐる歩き廻つてゐたが、或る油繪の前で釘付けにされたやうに立ち停まる。やがて近くの寢椅子にごろりと橫になり、矢張油繪から目をはなさずにゐる。）

一郎 入つて來て）苦しいかい？

順。うむ。口を利くのが苦しい位だ。

一郎。藥が來るまで然うして默つてゐるさ。

順。（さきほどから目をはなさずにゐる油繪の方へ指さしながら）あれは何だ？ どうしたんだ？

一郎。この畫か？

順。然うだ。其後光のさした女の畫よ。誰が描いたんだい？

一郎。（苦笑しながら）惡口を言ふのなら、成るべく直截に願ひたいね。

順。君が描いたのか？ え？ 本當に君が描いたのかい？

一郎。もう、止せよ。僕自身、可い加減にしよげてるんだ。此上もう、手傳つて貰ふこともあるまいからな。

順。（起つて、再び畫の前へ行く）ふむ……素敵だ……ふむ……

一郎。（寢椅子の橫から凭り掛りながら）僕自身でも、こんな畫を描くやうになつちや駄目だといふことは十分に知つてゐる。全く駄目だ。君は二三年前から、なんにも描けなくなつてしまつたのだが、その方がまだしもだと思ふよ。こんな變癡奇倫な物を、變癡奇倫だと知りながら、矢張描かずにゐられないと云ふのは、なんにも描けなく成つてしまつたより、ずつと惡い事のやうだね。

順。（突如、一郎の兩手をつかむ）君と僕との間に、今更下らない謙遜なんかいらない筈だ。君は本當に然う思つてゐるのか？ （間）君はこれがどれ丈け立派な作品であるか、知らないのか？ 君がこれ迄インクで書き繪具で描いた物みんなを集めても、この畫の十分の一をも値しないことを知らないのか？ 解らないのか？

一郎。（驚いて）君は眞面目だね？

順 まあ、聽きたまへ——此畫の中の女の頭を飾る圓光は、藝術家としての君の、辰巳一郎の一生を飾つてゐる。それを解らないでゐる君の生活の表皮こそまるつきり成つてゐな

いのだが、それにも係はらず、それだけの不可思議の世界へ突き入ることの出來た、君の生活の底を流れてゐる流れは、全然本物になりきつてゐる……ああ、僕もたつた一つで可い、これ位の物が描けてゐたなら？　これ位の物が描けるところまで來てゐたなら？

一郎。滅多に人を褒めない君が、然うまで言つて呉れるのは嬉しいよ。

順。僕はまだ褒め足りない。

一郎。だがね。本當の事を言ふと、僕は近頃いよいよ行詰まつてしまつたのだ。それは、絶望しても諦めのつかない、氣毒な藝術家が描いたんだ。自暴自棄になつた刷毛と、精神の錯亂した繪具とが、僕の監視から抜け出して行つて、夢遊病者のやうな足跡をあの畫布の上に殘したのだ。それがあの氣違ひ染みた畫になつたのさ。

順。だから、立派な物が出來たのだ。殆んど君自身を超越してゐる――

一郎。然うだ。君は昔から、狂人か犯罪者かでなくちや超人になれないといふやうな、ツァラトゥストラの哲學を信仰してゐたんだね。

順。あの哲學の、少くともあの部分だけは今でも信仰してゐる。兎に角此畫は……（と言ひ掛けたところへ、老婢がモルヒネの壜を持つて戸口へ現れる。順は飛びかかるやうにしてそれを受取る）有難う。どうも有難う。（寝椅子へ歸り、袂から注射器などを取り出して）ぢや、一寸失敬する。

一郎。（順の注射するところを見ながら）君の哲學から云ふと、モヒ中毒になるなんぞも、何かの役に立ちさうだね。

順。それや立つとも。僕は此中毒の爲めに、前に描けてゐた畫が描けなくなつた代りには、これまでに見えなかつた物が見えるやうになつて來た。

一郎。半分は負惜みだらう。

順。だが、半分は本音だよ。君の此畫なんかも、僕が斯うしてモヒ代を強請に來ないでゐると、どんな扱ひを受けてしまつたか知れたものぢやない。

一郎。（微笑しながら）どうも有難う。然う云ふ注射はモヒ以上に利くからな。お蔭様で近頃になく元氣が出て來た。それに今日は、と言ひながら、思ひ出したやうに窓からのぞいて見る）……僕達の一件の、はじめての誕生日でね――歌津子とあなつてから丁度一年目の。

順。（注射の道具を始末しながら）然うか。それや濟まなかつたねえ。

一郎。なあに。他の奴等とちがつて君だもの。もうそろそろやつて來る頃なんだが、來たつても別に差支はないよ。

順。こつちで少々ばかり差支へる位のものかね。いづれにしても、君達の戀愛中毒も、だんだんと注射の分量が多くなつて來たらうな？

一郎。うむ。矢張、君の所謂意志薄弱でね。衛生に害あることは百も承知でゐながら、つい何時の間にか此處まで來てしまつたよ。此頃ぢやもう注射の分量を減らさうと云ふ氣にさへもなれない位でね。

順。たしか、軍人だつたね？　あの人の結婚させられる相手と云ふのは。

一郎。陸軍の中尉で、滿洲の方に行つてるんださうだ。僕があの婦人と知り合つた時には、もうこつちにはゐなかつたんだ。

順。それで、其結婚はつまりどう成るんだい？

一郎。僕には分らない。兎に角、もう少し勉強しなければいけないとか何とか言つて、一日送りにしてゐるんださうだ。

順。結局自由行動を取るだけの蠻勇もなしか、

一郎。困る事には、あれの母がなさぬ仲でね——君も知つてる通り。しかも其間が模範的に、圓滿に美しく行つてるんでね——

順。うむ。それは有名なものだ。どちらも善くやつてると思ふよ。

一郎。それから、あの腹異ひの弟とだつて、それや不思議に思はれる位、美しい關係になつてるんでね。

順。それで——それでどうして困る？

一郎。あれが自分の我儘を通して、亡父の取り極めて置いた婚約を反古にしてだね、繼母の甥に當る其軍人との結婚をやめにしてしまふとなると——折角の然うした美しい關係が滅茶滅茶になつてしまふ。それがどうにも堪へ切れないと言ふんだ。

順。ふむ。

一郎。生みの母でないだけに、なにしろなさぬ仲だからと、然う片附けられてしまふのが、あの婦人にとつて何よりも辛いと言ふんだ。

順。ふむ。成程ね。（微笑しながら）僕の處の女房のやうな『新しい女』に云はせると、つまり『舊い女』に屬してゐるんだね。まだ、『自覺』と云ふ奴をしてゐないんだね。

一郎。（同じく微笑しながら）まあ、然うだ。

順。しかし、唯だ『自覺』をしてゐないだけぢやなささうだね。ああ云つた個性は——いや類型として見ても可い——君はイプセンのヘッダがどうして自殺するまでになつて來たと思ふ？

一郎。ヘッダと歌津子との間に、何かの關係でもあるのかい？

順。いや、止さう。僕にも何を言ふつもりだつたか分らなくなつた。兎に角一日送りにしてゐるなぞは厄介だな。どうだい、注射の藥がだんだん高くなつて行くだらうね。

一郎。もう、可なり持てあましてゐる。

順。其内面倒な大戰亂でも始まつて、君達の注射液も僕のモルヒネ位に暴騰すれば、其時は僕の處へ藥代を借りに來るさ。

一郎。いや、惡くするとそんな事になるかも知れない。

順。これで僕のモヒ中毒も、何時かも話したやうに、原因を糺せば戀愛なんだから可笑しい。型の如く失戀して、型の如く學校をしくじつて、型の如く放蕩をしてさ、それからもう一つ型の如く體を壞してね、ちよくちよくモルヒネを用ひ出したと云ふのが、そもそも僕ゆ今日ある所以なのだからな。

一郎。でも、モヒ中毒になつた頃には、戀愛中毒の方は治つたのだね。

順。僕の場合は戀愛中毒が急性だつたからな、はしかみたいに一遍限で免疫さ。

一郎。はしかよりは重かつたらう。どつかに其痕が殘つてゐさうだもの。

順。成程殘るには殘つたが、僕の顏や心臟には殘らないで、その後の醜い結婚生活に大きく殘つたよ。

一郎。（又もや起つて窓際へ行く）だが、君は君の家庭について、格別の不滿もなささうぢやないか——寧ろ、無さ過ぎる位に。

順。それや不滿も無いさ。僕が作らうと思つて作つた家庭ぢやないからな。僕はもう、戀をするのも、結婚をするのも何をするのもいやになつてゐたんだ。そして唯だあの女の言ふなりになつてやつたばかりだ。つまり、あの女から逃げ出すと云ふことさへも億劫だつたんだね。（思ひ出したやうに起ち上つて、そろそろと歩き出す）……うむ、だいぶ氣分が善くなつたぞ。灯の點く頃までは、先づあたり前の人間でゐられるな。（モルヒネの壜をすかして見ながら）これ丈けあれば、先づ今月一杯は大丈夫だ。全く好い氣持だよ。

一郎。いつも其氣持なら、君も仕事が出來るだらうね。

順。いや、仕事なんぞしなくつても好い位に好い氣持だよ。

一郎（笑つて）それぢや、仕樣がない。

順。だが戀愛なんかも同じだぜ。うまく行つてゐなければ、勿論仕事が出來ない。うまく行つてれば行つてるで、同じやうに仕事が出來ない。仕事なんぞしようと思つたら、面白可笑しい目にも遭はないで濟ますだけの覺悟がいる。もつとも本當の仕事は、（と言ひながら、モルヒネの壜をピアノの上に置き、例の圓光をかざした女の畫の方へ近づく。暫く無言）……矢張好いなあ。これだけは君を羨ましいと思ふよ。

一郎。またかい？　褒めてくれるのだから惡くはないが。

順。（頭をかしげて）ねえ、君。これは誰かに似てるぜ――誰か僕達二人とも知つてゐる人に。

一郎。さあ、誰に似てるかしら。僕には分らないなあ。

順。一々の輪郭でなしに、人種をも、時代をも、性別をさへも超越してしまひさうなあの顏全體の、强い、蠱惑的な印象に、僕はたしかに見覺えがある。

一郎。（笑ひながら）お互にそんな素張らしい女を、さうさう幾人も見たことはあるまいぜ。

（此時裏木戶の開く音。一郎、强ひて落ちつからと努力しながら、外廊への出口の方へ步み寄る。）

來たかな――其繪の中の女より、少しばかりましな印象を與へてくれる人間が！（戶口から頭を出して見て、暫く無言）……いらつしやい。

仲子。（外廊から）今村は來てゐませんか？

一郎。まあ、御入んなさい。（順の方へふり向いて）仲子さんだつた。

順。また追駈けて來あがつたな。

仲子。（入る）きつと此方だと思つたら、矢張然うだつたわ。

一郎。さあ、御掛けなさい。暫く――

仲子。どうも失禮ばつかし。（順の方へ向いて）あれから直ぐに？

順。うむ。

仲子。また厚かましい事を御願ひしたでせう？

（順、わざとらしく欠をして返事をせず。）

したでせう？　きつと。

順。ああ。お蔭樣で此月一杯の兵糧は出來たよ。

仲子。それで又、大船に乘つた氣で、なまけてゐられると云ふんですね？

一郎。仲子さん、腰を掛けたらどうです？

仲子。有難う。頂きます。（順へ）貴方の兵糧は御蔭樣で出來ても、私達の兵糧はどうなるんです？　あの子は……あの子は私一人の子で、貴方の子でないと仰しやるにしても、私は、私は一體どうして生活するんです？

順。俺には分らん。

仲子。分らないんですつて？

順。さうだ。俺がそんな事を考へなくなつてから久しいものぢやないか。お前と一緒になつたそもそもから、俺はどうしてお前に生活さしてやるかと云ふことなんぞ考へたことがない。お前は「職業婦人」だものなあ――さうだ、個性の尊嚴を自覺した、解放された、獨立の、自由の、新しい――

仲子。また始まりましたね。

順。お前が始めるからさ。

仲子。じやうだんは措いて、私の生活をどうして下さるかは別として、貴方は第一、御自分の食べて行くことさへも考へないぢやあり

ませんか。

順。だから、お前が考へてくれるのさ。

仲子。それを貴方は恥ぢませんか？

順。恥ぢるならば、それよりも先きに恥ぢることがあるやうだ。

仲子。それよりも先きに恥ぢること？　何です、それは？

順。さあ、なんだか判然は俺にも分らん。

仲子。判然は分らないんですつて？

順。（今度は本當に欠をする）さうだ。分らん。

仲子。（獨語のやうに）あああ、い、いやになつちまふ。（半ば一郎へ、半ば順へ）私も全く遣り切れないんですからねえ。

順。また愛想が盡きるだらう？

仲子。愛想も盡きるわ。

順。ぢや、又別れるかな。

仲子。貴方は直ぐにそんな事を云ふ。

順。もうそろそろ出る頃だと思つて、一寸先きを越して見たばかりだ。俺よりもお前だよ――直ぐに別話を持ち出して、直ぐに又一緒にならうと言ひ出すのは。

仲子。貴方はどうして然う――結婚といふ事に對して、どうして然う不眞面目でせう？

順。お前も俺位に不眞面目だと、斯う頻繁に別れたり一緒になつたりしないで濟むんだがなあ。

仲子。（嘆息して）本當に、い、い、あきれてしまふ。

順。よく飽きないであきれるなあ。（笑ふ。）

一郎。（同じく笑ひながら）夫婦喧嘩も其程度に天下泰平な奴は家へ歸つてからゆつくりやる方がいいやうだ。

順。（思ひ出したやうに仲子へ）うむ。今日は辰巳君達の記念日で、もうそろそろ歌津子さんも來るんださうだ。俺達のこの序曲も、いい加減にして切り上げようぜ。

仲子。然う。歌津子さんもいらつしやるんですか。會つて行きたいやうな氣もするわ。

順。あんまり大きなお尻を据ゑるなよ。別に用事もあるまい――今日に限つて？

仲子。無い事も無いわ。少しお願ひしたい事が。

順。お願ひしたい事か。それなら歌津子さんを待つまでもあるまい。辰巳君に解決して貰つても同じ事だ。

仲子。そんなお願ひぢやありませんよ。

順。へえ？　ぢや、お前は此處へ何しに來たんだ？　何の爲めにあんなに息を切らして、俺の跡を追駈けて來たんだ？

仲子。（少しく狼狽しながら）貴方が何時も何時も厚かましい事をお願ひしに來るのを、私として打つ捨つて置けないからですわ。

順。辰巳君、どうだい。女と云ふ奴は斯う云ふ場合に臨んでも、まだ斯う云ふ往生際の惡いごまかしを言はうとするからねえ。全く敵はないよ。（仲子に向ひ）おい、手輕に本當の事を言つちまへ――もうそろそろ借りに來ようと樂しみにしてゐた處へ、この俺が先きを越して飛び込んだので、大に面喰つたのだと云ふことをよ。そして俺がまだ強請らないでゐるやうだつたら、早速お前のお願ひを持ち出さうと云ふわけだつたらう。

一郎。（順の口を押へるやうにしながら）もう可い。分量が過ぎると面白くない。（仲子に）此前の位で間に合ひますか？　然う。それぢや明日の朝お届けしませう。

順。どうだい。俺のお蔭だぜ。俺にも禮を言へよ。

仲子。（順の言葉に頓着せず、一郎に）本當に濟みませんねえ――私までが、あんまり度々の事で。

順。（起ち上る）まづ、これで用事は片付いたと。一刻も早く引上げる事にしようよ。

仲子。少しきまりが惡いぢやありませんか。

順。きまりが惡い？　それはお前の身勝手だ。とかく他樣の御都合を後廻しにするのは、一體に女共の善くない癖だぜ。

仲子。はい、はい。それぢや——色々とどうも。歌津子さんに宜しく。

一郎。それぢや、今日は失禮します。

順。大變に失禮したね。此次ぎに來てお詫びをしよう——お願ひと一緒にね。（笑ふ。既に帽子をかぶつて行きかけたが、その儘例の畫の處へ引返して來る）然うだ。もう一度これを見て行かなくちや。（間）これだけの物を描いてゐて、其價値が描いた人間自身に解らないと云ふんだからなあ。

一郎。またやつてる。僕にも追々にはそれが解つて行くだらうよ。（仲子に）貴女のお履物もこつちへ廻したやうです。

順。君、玄關の處には矢張あの犬がゐるだらうね。さつきは好い鹽梅に眠てゐたが。

一郎。さうだ。兩人とも犬嫌ひだつたね。

順。（大袈裟に頭をかきながら）なあに、僕達は別に犬嫌ひでもないが、犬の方が僕達のやうな樣子をした人間を嫌ひでね。

一郎。ぢや、門の處まで送つて行かうよ。

（三人とも出て行つてしまふ。しばらくして、正面の玻璃窓へ外側からぽんと護謨毬を投げ付けた者がある。やがて外廊の上にがたがたと靴音が響く。）

歌津子。（靴音を追駈けるやうに）貞雄さん、いけませんねえ——そんなに亂暴しては。

貞雄。（外廊から扉を開けて飛び込む）馬鹿に靜かだと思つたら、だあれもゐないんだね。

歌津子。（入る）まあ、ひどい煙だこと。直ぐにいらつしやるわ、きつと。

貞雄。僕はこのテエブルの下へもぐり込んでやらうかしら。辰巳さんが喫驚するから。（間）姉さん、何を見てるの？（姉の立つてゐる、例の圓光の畫の前へ行き、姉の手につかまる）妙な畫だねえ、頭の處に圓い環なんかくつ着けて、昔の古い畫みたいぢやないか。

歌津子。でも善い畫ですよ。この後光が本當によく調和してゐて、何だか斯う自然と頭が下るやうだわ。

貞雄。少し、自家のみつるさんに似てるねえ——みつるさんに。

歌津子。さう？　どんな處が？

貞雄。どんな處つて——何だか似てるんだもの。（間）姉さん、そんな處へかけて、ピアノを彈くのかい？

歌津子。さうぢやないけども、此處にかけてるとあの畫がよく見えるから。もつと見てゐたいの。（と言ひながら、凭りかかるやうに、ピアノの蓋へ手をやつた時、置き忘れられたモルヒネの壜に觸れる）おや、何でせう？

貞雄。（姉の手から取り上げて、覺束なさ拾ひ讀みをする）モールーヒー、モルヒネつて——藥だらう？

歌津子。モルヒネですつて？（彈かれたもののやうに起ち上る）まあ、どうしたんでせう、そんな物！（間）こつちへお出しなさい。恐ろしい藥ですからね。

（貞雄も氣味惡げに渡す。歌津子、受取りて自分の袂に入れる）

貞雄。そんな物家へ持つて歸つて、矢張危いぢやないか！

（此時辰巳一郎、入つて來る。）

ああ辰巳さん、姉さんは袂に入れましたよ。

一郎。いらつしやい。姉さんが袂をどうしたんですつて？

歌津子。大變にお待たせして濟みませんでした。（壜を袂から出しながら）ここに斯樣なものがありました。

一郎。ああ、それですか。今日の一年祭は其モルヒネの騷ぎで、さんざんな目に遭ひましたよ。今村が來て、今村の細君が追驅けて來て、少し面白過ぎる位な幕を出したものですからね。

歌津子。ああ然う。今村さんですか。まあ可かつた。

（一郎も、歌津子もかける。貞雄ひとり何かと什器をいぢり廻してゐる。）

一郎。兎に角私の方は、今日の前曲はすつかり失敗だつた。

歌津子。（貞雄の方を見ながら）私の方もおんなじよ。それに、前曲だけで濟むかどうだか……

一郎。（これも貞雄の方を氣にしながら）何かあつたのですか。――善くない事が？

歌津子。貞雄さん。貴方ねえ、ジァイアントでも連れて、原場の方へ遊びに行つて來ないこと？

貞雄。姉さんが賴むつて言へば、行つて上げてもいい。

歌津子。（貞雄に近寄りながら）賴むわ。斯うして手を合はしてお願ひするわ。

貞雄。ぢや、今度の日曜の、お伽芝居は大丈夫ね？

一郎。貞雄さんもなかなか辣腕家だなあ。

歌津子。大丈夫、お伽芝居の方を引き受けましたから、さ、行つてらつしやい。

貞雄。よし。（玄關へ通ずる出口に近く立ちながら）だが、ジァイアントの奴、辰巳さんが出て見てくれなくつても、僕の言ふことを聽くかしら？

一郎。聽くとも。その心配はいらないよ。

（貞雄ばたばたと駈け出して行く。）

歌津子。今日は本當に濟みませんでした。大變におそくなつて。

一郎。お詫びはもう先刻濟みました。

歌津子。だけど。（間）今日は生憎なんですよ。出掛けに、今晩はもしかしたら、少しおそくなるかも知れないと、母に然う言つたんですわ――これまでにも折々言ひ置いて出たやうにね。すると母が妙に改つた調子で言ふんですよ――實は二三日前から、どう云ふわけともなく言ひそびれてゐたが、滿洲の軍人さんが今度東京へ歸つて來る。もう船の中にゐる　今日明日にも着かないものでない。ですから、成るべくならば、あまりおそくならない内に歸つていらつしやいつてね。それが、あの母の物優しい調子で、私の氣持を惡くさせまいと、遠慮をしいしい言ふんでせう。

一郎。それで貴女は、出掛けることを見合はしたんだね。

歌津子。ええ。そして又出掛けることにするまでには、かれ是れ一時間ばかりも經ちましたわ――私の母のやうな善い母と、私の辰巳さんのやうないけない辰巳さんを持たない限り、どんな方にも經驗することの出來ないやうな苦しい一時間が！

一郎。私がそんなにいけないかしら？――そんなに？

歌津子。いけないわ。

一郎。どうして？

歌津子。だつて貴方は――私が母の事も、亡くなつた父の取り極めた話も、可愛い弟の事も、何もかも、みんな忘れてしまへるほど、貴方は私を……

一郎。愛しないつて言ふの？　私の愛しやうが足りない？

歌津子。ええ。

一郎。だつて、貴女は始終恐れてゐたぢやないか――どのみち諦めに終らなくちやならない戀の相手が、あんまり度を越して熱して來は

しないかと！

歌津子。それも然うでしたわねえ。

（二人とも暫く無言。）

一郎。私は勿論、貴女の恐れてゐるゐないに係はらず、自分でも度を越して熱したかつた。貴女にも世間の義理人情をさへ忘れさしてしまひたかつた。

歌津子。私自身も忘れてしまひたかつたわ。忘れるのを恐れてゐる癖にね。（間）つまり駄目ですのねえ――こんな煮え切らない、臆病な、不徹底な人間は。

一郎。だけど、その臆病と不徹底とが、充實の足りない私の心を蠱惑したのかも分らない。

歌津子。それなら、貴方も矢張私と同じやうに駄目ですのねえ。

（前よりも長き沈默。）

一郎。（落日を見ようとでもしたかの如く、起ちて窓際に近づく〳〵）愈々總勘定をする處へ來たやうですね。此記念日が二人で祝ふ、最初の、そして最終の記念日ですね。

歌津子。（ピアノの前へ來てかける）然うでせうか？　もう此上は、どうにもならないものでせうか？

一郎。それは貴女の方が私よりも善く知つてゐる筈だ。（間）いや、解り切つた話を、わざわざ問題にするのはよさう。何か一つ弾いてくれませんか？　此場合にふさはしいやうなものを何か。

歌津子。貴方も御一緒に歌つて頂けるやうなもの？

一郎。いや、斯う云ふ場合は器樂だけでなくちや。

（歌津子、ピアノを弾く。センティメンタルに華やかな一曲を弾き終る。暫くの間二人とも無言。室内漸く暗し。）

歌津子。貴方、覺えていらつしやる――今のを？

一郎。うむ。貴女があれを弾いた時の事は忘れないね。私はあの時、斯うして貴女の背に立つてゐて、白い頸脚の微かに震へるのを見ながら聞いてゐた。あの時、貴女を色々に想像して見たことをも判然と覺えてゐる。そのあとで、初めて本當に貴女を見たのだが。

歌津子。雨が降つてゐましたのね――仲子さんが歸つて行つて二人つきりになつた時。

一郎。貴女が雨を御好きだと云ふことは、あの時から知つた。

歌津子。自分の話した事なんか、なんにも覺えてないわ。ただ、御話を伺つてると、それが庭の若葉にふり注いでゐる、柔い雨の音と一つになつて、胸の中へしみ込んで行つたのを……

一郎。ねえ、どうしよう？　今日の一年祭には、あの靜かな私達二人の「郷里」へ行つて、丁度あの晩したやうに、貴女のあの甘い飲物にお附合ひをする筈になつてゐたのだが。

歌津子。さうね――兎に角貞雄さんが歸つて來てから。

一郎。もう一つ何か弾いて呉れませんか？　今度は、過ぎ去つた事を思ひ出させるのでなくて、これからさきを考へさせるやうなのを。

歌津子。駄目よ、そんなむづかしい事を言つて。……とにかく弾いて見るわ。

（歌津子、しばらくありて、ゆるやかにペゾスの流れるやうな一曲を弾きはじめる。曲半ばにしてはたと弾き止む。）

一郎。どうしたの？　どうして止したんだ？

歌津子。（ふり返つて）あの晝の事を思ひ出したの？　あの後光のさした女の姿をふと思ひ出したんですよ。

一郎。そして？

歌津子。そして、自然に指端が動かなくなつち

やつたの。

（一郎、首をかしげて沈默。）

貴方が御描きになつて？

一郎。ええ。

歌津子。畫の事なんか解らないけども、これまでに御描きになつた物の中でも、一等善い畫だと思ふわ。

一郎。さうかなあ。口の惡い今村も、先刻しきりに褒めた行つた 妙だなあ。

歌津子。あれは頂けないこと？

一郎。それや差上げてもいいが……（間）この最初の、最終の記念日を記念する物としてですね？

歌津子。さう仰しやると、何だか悲しくなつて來るわ。

（歌津子、何物かにもたれ、一郎と見物とどちらへも顏をそむけて立つ。）

ねえ、貴方。これから先き、お互にどうなつても……

一郎。お互にどうなつても？

歌津子。せめて妹と思つて……兄妹の關係ででも……

一郎。それだけは勘辨して下さい。

歌津子。どうして？ 兄妹のやうに綺麗な關係になつて、綺麗な心持で附き合つて行くのが、どうしていけないでせう？

一郎。それは小説か芝居の中の話です。少くとも、私には到底堪へられない事だから。

歌津子。然うでせうか。

一郎。然うです。私はいつそ、お互にお友達にもならなかつた時分、あの時分の關係になつてしまひたい。

歌津子。（一郎を直視しながら）と仰しやるのは？

一郎。『もとの他人』になつてしまふのが、まだしも樂だと云ふんです。

歌津子。（駈け寄つて、一郎の手を捕へる）貴方、怒つたの？ 御氣に障つたの？ それぢや困るわ。

（一郎、無言の儘靜に歌津子の手を拂ひ、近くの椅子にかけさせる。）

一郎。ちつとも怒つてやしない。怒る理由がないもの。

歌津子。だけど、酷いわ。『もとの他人』になつてしまふつて仰しやるんだもの。

一郎。それぢや、『もとの他人』と言ふ言葉だけは取り消してもいい。だけど事實は、ただのお友達になつてしまふと云ふやうな器用な藝當が、果して私に出來るかどうだか。

歌津子。然うでせうか。然うでせうかねえ。

（太息を漏らす。二人とも暫く無言。）

一郎。歌津子さん、貴女の前だけれど、少くとも男子の場合は、いや、僕のやうな男の場合はね、新しい物が舊い物の代りになると云ふのは、そんなにお手輕な事ぢやないんだから！

歌津子。一郎さん！ 斯う云つて貴方の名を呼ぶやうになつたのもやつと近頃の事なのね！ いいわ！ 私もう、どうなつても構はないと思ふわ！ 貴方がそんな事を仰しやると、私はもう……堪忍して下さいな！ 本當に私が惡かつたから！

一郎。貴女だけが惡いんぢやない。私は、貴女を咎めるよりも、私自身を責めてゐる？

（二人とも沈默。）

蛙が頻りに啼いてますね。

歌津子。どうしてあんなに啼くでせう？ 何だか堪らないわ！ ——あんなに蛙がないてると。

（二人とも沈默。貞雄、裏から歸つて來る。）

貞雄。いい、こら、ジァイアント！ お前はここにお

いゝいゝ
となしくしてゐるんだよ。いいかい？
（室内へ飛び込む。）
暗いなあ。どうしたの？――電氣もつけないで。
（靴の儘椅子の上に飛び上つて、電燈のスキッチをひねる。）
なあんだ。可笑しいぢやないか――大人が泣いたりなんかして！

（幕）

第二幕

（第一幕より五六ヶ月の後。市内、歌津子の家の一部分。右手寄りに瀟洒たる日本風の室。左、纖巧に陷らざる程度のクラシックな庭園に、椅子ベンチの用をなすやうな物いくつかを置く。十月頃の午前にふさはしき鳥の聲。みつる、緣側の日當り善きところにて編物をしてゐる。）

繼母。（襖をあけて入つて來ながら）歌津子さん、歌津子さん！　おや、みつるさんなの。歌津子さんはどうしたかしら。

みつる。（顏をあげて）先刻まで、其邊にゐましたよ。喚んで來ませうか？

繼母。いいえ、それにも及ばない事ですがね。（間）みつるさんは、お風邪はもう可い？　さつぱりしたの？

みつる。さつぱりもしないけど。

繼母。もつと臥んでいらつしやればいいに。

みつる。だつて私の風邪け、綺麗に治るつてことはないんですもの。

繼母。だから一層氣を附けることですよ。（編物を近づいて見ながら）おや、もうお仕事なの？

みつる。お仕事と云ふほどのものぢやないわ。
（編み續ける）

繼母。貴女は始終何かにかしてるのね。

みつる。駄目ですよ。こんなに意氣地がないんですもの。

繼母。兄さんの靴足袋？　も少しですね。

みつる。ええ。も少し氣の利いた物拵へて上げるつもりだつたんだけども――御祝に。

繼母。そんな事言つて呉れる貴女が、貴女が歌津子さんだつたらねえ！　そしたらどんなに嬉しいでせう！　（言葉をきり、徐に品よく四邊を見廻したる後再び續ける）それはねえ、他の點ではなんにも云ふ事はないんです。歌津子さんも、なかなか善く出來てゐる人ですからね。あんな新しい敎育を受けた新しい人に、よくあゝまで出來ることだと、全く然う思ふこともありますよ。ただね、忠夫さんと一緖になる話だけはどうしたものか……それも、一緖になるのが嫌だつて言つたことはないんだけれど、いよいよとなると何時でも、もう少し、もう少しで結婚を延ばすんだもの。

貞雄。（植込の奧から飛び出して來る）忠夫さんは未だ？　未だ來ない？

みつる。ええ、未だなの。

貞雄。今日は大尉になつて來るんだねえ。早く來ないかなあ。來たら、直ぐに知らして頂戴、みつるさん。僕はそれまで、爆彈投下をやつてるから。いいかい？

みつる。よござんすとも。
（貞雄は耳にも入れず駈け出して行く。）

繼母。塀の上なんぞへ上つちやいけませんよ。忠夫さんも今度また大尉になつたし、然う然う何時までもねえ。此五月にあつちから歸つて來た時、どうしても濟まさなくちやいけないのを、矢張延ばしてあるんだから。（間）だけど、みつるさんは如何思ひます？

みつる。何をですか？（編物の手を休める。）

繼母。歌津子さんは、結局どうするつもりでせうね。（間）結婚はしてくれないでせうか？

みつる。まさか、そんな事――

繼母。そんな事あるまいつて貴女は言ふの？

みつる。ええ。

繼母。だけど、忠夫さんに對して何だか他處他處しくしてゐると思はない？　形の上でするだけの事はしてゐても、何だか冷たい處があるやうに思はない？　近頃になつてだんだんと。

みつる。そんな事、私なんかには分りませんわ。

繼母。それにあの陽氣な、賑かな人が、折々妙に陰氣になつてるでせう。ね？

みつる。然う仰しやれば然うね。

繼母。私もねえ、歌津子さんが本當にいやなものを無理押付にするんぢや惡いと思つてねえ。（間）それに就いて、みつるさんは何か思ひ當るやうな事はない？

みつる。思ひ當るつて、どんな？

繼母。歌津子さんに限つて、別に間違ひなんぞあるわけもないでせうけれど、何かね、忠夫さん處へ行きたくなくなるやうな事でも、あるんぢやないかと思つて。何か貴女に氣の付いてるやうな事はない？

みつる。そんな事、あるものですか。それに私なんぞ、歌津子さんの前ぢや全然の子供なんですもの。

歌津子。（左側より庭園へ入つて來る樣子。未だ其姿見えず。）あちらへ行きませうよ。貴方がたも寒がりだから。ええ、構ひませんとも。

繼母。忠夫さんかしら？　お連れがあるやうですね。

みつる。兄さんぢやなささうよ。きつと他の方ですわ――きつと。

繼母。（みつるが逃げ出しさうにしてゐるのを怪んで）あ、どうしたの？――そんな樣子をして！

（歌津子、一郎順の二人をつれて飛石傳ひに來る。）

歌津子。珍らしいお客樣ですよ。みんなで、日向ぼつこしようと思つて、こちらへお連れして來ましたわ。

繼母。おや、いらつしやいまし。辰巳さん、隨分お久し振りでございますねえ。

一郎。大變に御無沙汰しました。みつるさん、暫く。

（みつる、默禮して伯母の背へかくれる。順は既に縁側にかけてゐる、默つて人々の顏を見比べてゐる。）

繼母。今日は丁度、みつるの兄の忠夫といふのも參る筈になつて居ります。全く善い處へいらして頂きました。（みつるや歌津子に向ひ）少し片付けませうよ。

順。鳥が鳴いてるな。（目を擧げて）何か赤い實のなる樹が一二本欲しいぢやないか。

一郎。俳句でもひねりさうな事を言ふねえ。どうだい、好い氣持かい？

順。一件を（いつも注射するところへ指教へをしながら）やつた後は、全く極樂の世界だからね。

（其内に女等三人とも順次に出て行く。）

だが、今日は驚いたぜ。君の方からわざわざ押しかけて來て、突如モルヒネの押賣をはじめるんだもの。

一郎。（微笑しながら）濟みませんでした。どうか御勘辨を願ひます。

順。それや勘辨してもいいが、一體今日はどうしたんだい？

一郎。只今説明いたします。

順。早くして貰ひたいね。何處へ行くんだとも、何しに行くんだとも聞かされないで、默々として素直に此處まで隨行して來てゐるんだからな。

一郎。(ことさら唐突に)僕は此春以來……――會はないでゐたんだ。

順。會はないでゐた？　今の――此處のにね。

ふむ。

一郎。(順に近くかけて)貰つた手紙に、返事も出さないでゐたんだ。

順。ふむ。一度もだね？

一郎。ああ、ただの一度も。

順。よく我慢したたな。

一郎。然うだ。僕は我慢してゐたんだ。平氣でゐたわけぢやない。

順。それは然うだらう。

一郎。加之、僕の場合も御多分に漏れず、諦めようと思つてからが眞劔な物になつて來た。

順。ふむ。それで？――それで此僕がどんな役割を引受けるんだい？

一郎。然う急いぢや困る。

順。よし、よし　だが、兎に角諦めようと思つても諦められないと斯う云ふんだね？

一郎。然うだ。

順。それで、兎に角やつて來たと云ふんだらう？

一郎。いや。然う一足飛びに飛んぢやいけない。まだ其間にはひるものがある。(間)僕は、諦められないものを、どうしても、どんなにしてでも諦めなくちやいけないと思つたんだ。

順。ふむ。

一郎。そして近頃やつと其方法を考へついたんだよ。

順。それはどう云ふ方法なんだい？

一郎。一口に云ふと、あの人を「友人の細君」にしてしまふんだ。

順。え？

一郎。いや、然う言つちやいけない――僕はあの人の良人の友人になつてしまふんだ。あの人の良人になるべき人の友人にさ。

順。ふむ。そして、其細君の友人であるより以上に、其良人の友人になつてしまはうと、斯う云ふんだね。

一郎。まあ、然うなんだ。あの人を、ただ僕の親友の細君に過ぎないものにしてしまはうと云ふんだ。

(順、腕組みをして考へる。)

一郎。君はそれを實行の出來ない事だと云ふのかい？(間)それとも、非常な冒險ででもあると云ふのかい？

順。少くとも今迄は、さう云ふ計畫に成功した奴はあんまりあるまいな。それに、あまり新しい思付きでもないやうに思ふよ。

一郎。僕はむしろ陳腐な思付きと見られても構はない。――僕には、これよりほかに方法がつかなくなつたのだ。(間)殆んどあらゆる物の權威を承認しなくなつてゐる僕の心にも、たつた一つ、神聖にして犯すべからざるものとして殘つてゐるのは、友人同士の信任といふことだ。友人同士が互に信じ合ひ、許し合つてゐるといふことだ。ただ友情の義務といふものだけが、自由過ぎる僕をも束縛して吳れる。そして其束縛を、自ら進んで作らうと決心したんだ。

順。說明はそれでいい。だが、どつかに不自然な物がある。無理がある。君は、その理窟が君自身へのごまかしになつてしまはないやうに、氣をつける必要があるな。

一郎。今の僕には、然う云ふ見方をされても、別に腹は立たないよ。

順。それで、兎に角、もう會つて見たのかい？

その——何とか言つたけな？

一郎。武田——夫君と云ふのださうだ。實は今日これから會はう‥してゐるんだ。今日此處ではじめて其人に紹介してくれるんだ。

順。さうか。それ此僕が、甚だ光榮ある介添に選ばれたと云ふわけなのかい？

一郎。（苦笑しながら）まあ、然うだ。

順。なある程ね。

一郎。濟まないね。

順。それや可いが、少し眠くなつて來たやうだ。注射に氣前を見せ過ぎたと見える。一寸失敬して、ごろりとやるかな。僕の用事が出來たら起してくれたまへ。

（順、肘枕で縁側に横になる。）

一郎。君の斯う云ふ御行儀も通り物になつたねえ。

（自分の外套を脱いでかけてやる。鳥の聲。更に折々、『萬歲！』と叫ぶ貞雄の聲が遠くの方で聞える。一郎、煙草を銜へて庭園の中をぶらついてゐる。）

歌津子。（何處からともなく、一郎に近づいて）大變な御馳走が出來かかつてるんですよ。

一郎。（兩腕を組んだまま、右足の踵をあげて輕く地を踏みつけるやうにしながら）少し冒險すぎたでせうか？

歌津子。冒險？

一郎。今日此處へ來たことがさ。

歌津子。どうして？

一郎。武田——君は、本當に來るんですか？

歌津子。ええ。きつと來ます。

一郎。どうも冒險にすぎたと思ふ。

歌津子。そんな事ないわ。私は最初から然うして頂くつもりでしたもの。（間）貴方がたにお友達になつて頂いて、そして私は——

一郎。僕の妹になると云ふんでしたねえ。

歌津子。それを貴方は、あんなひどい事言ふんですもの。あれから後も、隨分だつたわ。

一郎。貴女が會ひに來たのに、會はなかつたと云ふ事ですか？

歌津子。そればつかしぢやないわ。いくら私から手紙を上げても貴方は一遍も返事をくれませんでした。

一郎。（苦笑しながら）其言譯は、一昨日のあの手紙でした筈ですよ。

歌津子。私もお仕舞ひには口惜しくなつて、もう書くまい、これ限り書くまいと思つたんですけれど。

一郎。全く濟みません。

歌津子。それからまだ、色々とあつたわ——言ひ度い事が。

一郎。序にみんな仰しやいよ。

歌津子。（手近の常磐木の葉を指頭に弄びながら）だけど、もう可いの。

一郎。どうして？

歌津子。（俯いて）貴方がいらしたから。

一郎、貴女は、あれつきりもう會ふことがないやうに思つてゐたの？

歌津子。いいえ。なぜだか、然うは思へなかつたの。考へられなかつたの。

一郎。兎に角私は負けたんですね。貴女の最初に言ひ出した通りになつちまつて。

歌津子。だけど、善い人ですよ——あの人も。

一郎。（微笑しながら）私だつて、人間は惡くないつもりです。

歌津子。じやうだんでなく、正直で、親切で、軍人なんかには珍らしく、極く溫厚しい人なんですよ。

一郎。私の事も、それ位には褒めて置いてくれるでせうね。

歌津子。どうですか？ これから先き貴方は、あの人のお友達にばつかし成つてしまつて、私なんかどうでもよくなつてしまふんださう

ですもの。
一郎。それで貴女も、私がどうなつてもいいと云ふわけですね？
歌津子。ええ、さうなの。（斯く言ひながら、一郎の肩にとまつてゐた枯葉をとつてやる）今日も銃獵にいらつしやるところだつたの？
一郎。ええ。貴女からのあの手紙が來たとき、私はもう此服裝で、あの（指さしながら）銃をさげて玄關まで出掛けてゐたんです。それで、此儘來たんですよ。
歌津子。（今村の方を見ながら）貴方がわざわざ御連れになつて？
（一郎、默つてうなづく。歌津子、二歩三歩今村の方へ歩き出す。）
本當に御眠みになつてるかしら？
（此時忽ちサアベルの、石の上に引き摺られる音聞ゆ。歌津子、一郎ともに振返つて見る。）
貞雄。（大きな軍服を着、軍帽に半ば顏をかくし、サアベルを引きずつて出て來る。擧手の禮）やあ、失敬！
歌津子。忠夫さんがいらしたの？
貞雄。ああ、今着物をきてゐる。
歌津子。あなた、そんな惡戲して忠夫さんに叱られない？
貞雄。叱られるもんか。忠夫さんは僕が何をしても怒らないんだもの。此前來た時なんか、僕が騎兵になりたいつて言つたらね、僕の馬になつて、四つん這ひをしてくれたよ。
歌津子。（笑ひながら）然う。それは見たかつたわ。
（一郎も共に笑つてゐるところへ、今度は本物の忠夫が、和服に庭下駄を突つかけながら出て來る。）
貞雄。忠夫さんが來たよ！
歌津子。（丁寧に迎へて）いらつしやいまし。
忠夫。（一郎に目禮しながら、歌津子へ）御客樣ださうだね。
歌津子。ええ。いつか御紹介しようつて話してゐた方なの。辰巳さん——これは私達の從兄です。
忠夫。僕は武田忠夫。こんな失敬な風をして居ります。
一郎。僕は辰巳一郎。どうか御心易く。
忠夫。（今村の方へ一寸視線を走らしたあと）御名前は豫てから伺つて居りましたし、よく展覽會や雜誌の上などで御作も拜見して居りました。
一郎。いや、どうも……
貞雄。辰巳さんはエライ文學者だし、畫が素敵にうまいんだつて。先達て描いた後光の畫なんか、それや大變な物なんだつて——（今村の方を指さし）あの人が然う言つたよ。
歌津子。私も然う言つたでせう？
貞雄。姉さんなんか駄目だけども、あの人はね、あれでなかなかエライんだつて——もとはエライ人なんだつて。
一郎。（微笑しながら忠夫に）これは當人自身が言つたのかも知れません。僕の友人です——後程改めて御紹介しませう。
忠夫。矢張美術の方ですね？
貞雄。此人は『モヒ』さんて云ふの。そして他處の家へ行つても、本當のお辭儀なんかちつともしないんだよ。
忠夫。本當のお辭儀は、此方も少々耳が痛いねえ。
歌津子。貞雄さん、あなた少し、母樣やみつるさんの處へでも行つてらつしやいな。
貞雄。いやだ。あつちへ行つてると、また姉さんの處へでも行つてらつしやいつて言ふから。
歌津子。それぢや、私も御一緒に行きましよ。

忠夫。好い季節になつて來ましたねえ。

一郎。全く體が引き緊つて來るやうです。

（斯う言ひながら、椅子にかけたまま右足の踵をあげて、輕く地を踏みつけるやうにする。忠夫は其癖に注意を拂ひながら、頭をかしげて暫く無言。一郎も無言。）

忠夫。君には何處かで御目にかかつた事があるやうな氣がしますね。

一郎。（記憶の中をさぐる樣にしながら）然うでせうか？（間）いゝ、いゝ、もつとも、僕は六七年前親類の家を繼いだので、もとは宮田と云つてゐました。

忠夫。然うだ。それで分つた——君は野球をやつてゐたでせう？——中學時代に。

一郎。ええ、あの頃は。

忠夫。ぢや、同じ中學にゐたんです。そして僕は一年か二年下だつた。

一郎。へえ！ さうですか。君も協會中學にゐたんですか？

忠夫。僕は宮田一郎といふ名前も覺えてゐるし、君があの頃の運動シャツを着て、あのグラウンドに突立つてゐたのも判然覺えてゐる。僕は羨ましかつた。

一郎。それぢや、君もあの教頭排斥の運動なんか知つてゐますね？

忠夫。僕達も驥尾に附して大にやつた方ですよ。それから、あの隣の原つぱの草を燒いて、よく問題が起つたものですねえ。

一郎。あの頃の話をしてゐると、何だかかう君の御顏にも、見覺えがあるやうな氣がして來る。今日はじめて會つたやうな氣がしない。

（歌津子、襖を開き、何かを運んで出る。）

歌津子。何だか、御話が面白さうですね。

忠夫。面白い筈、。辰巳君と僕とは、幾年前からの知合ひなんだもの。

一郎。（歌津子に）おんなじ中學にゐたんださうですよ。

歌津子。まあ。然う！（一郎の方をちらりと見て）それはよかつたわ。

忠夫。歌津子さんの御紹介なんか本當はいらなかつたんだ。何なら僕から此人の當年の活動振りを素破拔いて上げてもいいよ。

一郎。どうか御手柔らかに。こちらはまだ、なんにも素破拔きの出來るやうな材料を手に入れてゐないのだから。

歌津子。忠夫さんの方にも隨分とあるわ。お友達とあんぱんの食べつくらして病院へ入つた話だの、歌留多に負けて、お仕舞ひに泣き出した話だの——

忠夫。（頭をかきながら）よく覺えてゐるんだなあ。

歌津子。（笑ひながら）お生憎樣ね。

（一郎も輕く笑ふ。）

忠夫。今度は歌津子さんの番だが——（一郎に向ひ）一體、此人は、『新しい女』——と云ふんですかねえ？

一郎。『新しい女』——ですか？

忠夫。何かの雜誌の口繪でしたよ。『新しい女』と云ふ大勢の妙擬奇倫な女共の中に此人も寫つてゐるんです。

歌津子。なんだか、あぶなくなつて來ましたのね。

（と云ひながら、席を立ちて、徐かに室を出て行く。）

忠夫。矢張『新しい女』と云ふんでせうか？

一郎。君にはどう見えます？

忠夫。僕達には別に——然う破壞的な考なぞ有つてゐさうにも見えないんですがね。

一郎。君は御嫌ひですか？ 一體に『新しい女』といふものを。

忠夫。君は御好きですかつて、反問したい位ですな。いゝいゝ、なにしろどうも、貞操も、道德も、宗教も、社會も、一切の物を無視してしまはうと云ふやうなんぢや。そして、男だか女だか分らないやうな化物になつてしまふんだから。

一郎。（微笑しながら）そんな風にでなくとも、新しくなれさうぢやありませんか。男子が新しくなるのと同じやうに。

忠夫。男子は別です。これから先きの男子は、頭が古くちや駄目ですからね。

一郎。それで、婦人だけはいつまでも頭を古くして置いて可いと云ふんですか？

忠夫。とにかく、男の方は自然に新しくなつて來るんですからね。新しくならないぢやゐられないんですからね。けれども婦人は——

一郎。事情を異にしてゐると云ふんですか？

忠夫。さあ、然う云はれて見ると何ですが：：

（間）君はそれぢや、あの妙癡奇倫な、男だか女だか分らないやうな『新しい女』を、嫌ひでないと云ふだけの勇氣がありますか？

一郎。少くとも、我慢しなくちやなりますまいね——似て非な物がまぎれ込んだり、出來損ひの犠牲が出て來たりするからと云つて。

忠夫。むづかしい理窟は止めにして、君もまだ獨身ださうですね。

一郎。（一寸、忠夫の顔を見て）ええ、まだ。

忠夫。所謂『新しい女』と結婚するつもりですか？

一郎。（微笑しながら）今度はからめてへ廻りましたね。

忠夫。どうです。あの雜誌の口繪に出てゐたやうな『新しい女』を、細君にするだけの醉興がありますか？

一郎。（右足の踵を擧げて、輕く地を踏みつけるやうにしながら）それに就いちや、亡くなつた大山さんが、おやまかちやんりんの大山公爵がうまい事を言ひましたよ。

忠夫。どんな事を言ひました？——大山元帥が。

一郎。豪傑と云ふ奴は、友達にして附き合つてると面白い物だが、親類にもつちややり切れないつてね。

忠夫。なある程。

一郎。『新しい女』もまた然りで、こつちの身勝手かも知れないが、當分の内はまあ、友達附合にだけして置いて貰ひたいやうですね。

忠夫。それぢや君も、舊い女を滿更嫌ひでもないですね。

一郎。家庭を作る場合の相棒としてでも考へれば、むしろ大に好きですよ。

忠夫。何と云つても、純日本式の婦人は惡くありませんからね。

（歌津子、また出て來る。）

歌津子。結局私は新しい女になつたのですか、それとも舊い女になつたのですか？

忠夫。然うだ。其問題を片附けないで置いて、辰巳君が舊い女を御嫌ひでないと云ふやうな話まで來てしまつた。

歌津子。そんなお話なの。辰巳さんはいつでも然う仰しやるわ——舊い女の中の善いのは、新しい女の中の惡いのより、どれだけましだか知れないつて。

忠夫。同感だね。

歌津子。それから——惡い過渡期の風にそまらない、純粹に舊式な日本婦人には、どんな歐羅巴の婦人にも無いやうな美しい所があるつて。

忠夫。ふむ。

一郎。その美しいと云ふ言葉は、「強い」といふ言葉と入れ換へにしても通用するんです。——日本の婦人は、太平無事の日常生活には、歐

羅巴の婦人ほど面白くも重寶にも出來てゐない代り、まさかの場合には、有髯男子をして顔色なからしめるほどの勇者になる。

忠夫。全く然うだ。大に我が意を得てゐる！

歌津子。（笑ひながら）すつかり、肝膽相照らしちやつたんですね。

忠夫。これならば、實際肝膽相照らすことが出來るよ。

（此時みつる、襖を開けて、歌津子を喚びさうにしてゐる。忠夫、先づそれに氣付く。）

（みつるの方を指さしながら）歌津子さん、みつるが呼んでるよ。

歌津子。あら、然う。

（歌津子、立つてみつるの處へ行き、低聲に話をしてゐる。）

一郎。（起ちかけて）今村の奴、もう起してやるかな。

忠夫。まあ、いいでせう――其儘にして置いて。

一郎。モルヒネの慢性中毒でしてね、注射のあと、どうかするとこれなんです。

忠夫。然うですか。（間）とにかくわざわざ起さないでもいいでせう。

（其間にみつる去り、歌津子も引き返して來る。）

（歌津子の引き返して來たのを見て）此人の新しい舊いは未解決の儘として、君はどう思ひます？ あのみつるをどう思ひます？

一郎。どう思ふとは？

忠夫。舊い女の強ち嫌ひでもない君として、あの僕の妹をどう思ひます？

一郎。どう思ふと言つて、誠に好い妹さんですよ。然うです、僕が舊い女を嫌ひではないのは、みつるさんのやうな人がゐてくれるからです。實際、僕にもみつるさんのやうな妹があつたらと思ひますね。

歌津子。妹さんにでなく、みつるさんみたいな人を奥さんに有つ方は、さぞ仕合せでせうね。

忠夫。僕は其人の方が、僕なんかより、ずつと仕合せだと思ふ――自分の妹の事ですけれど。

一郎。ああ、然う云ふ御話ですか？ 解りましたよ。（歌津子と目を見合せながら）だが、僕なんぞがみつるさんのやうな人を貰ふとしますね、世の中にみつるさん位お氣の毒な人はありますまいよ。

歌津子。（用事を思ひ出したやうに、起ち上つて襖の方へ行きながら）でも、少々位のお氣の毒なら我慢してお貰ひになりたかありませんか？

一郎。だが、貰ひ度くなるところへは、大抵は來たがらないもんですからね。

（此時歌津子、襖を開く。）

歌津子。まあ！ いやなみつるさん！ そんな處に立つてゐて。

みつる。だつて、入れないんですもの。

歌津子。貴女、さつきの面白い話を聞いて？

みつる。そんな事――知らないわ。

歌津子。あら？ さうして置いて行つちまふの？

（歌津子、みつるの置いて行つた物を、運ぶべき處へ運び入れ、やがて出て行く。その時忠夫と一郎とは既に次ぎの對話をはじめてゐる。）

忠夫。（自慢とも謙遜ともつかぬ調子にて）なにしろ、あんな風ですからね。

一郎。（無意味に）然うですねえ。

忠夫。ただ一つ殘念なのは、體が餘り丈夫でない事です。それだけがあれの疵です。

一郎。しかし、餘り丈夫過ぎるのも、女とし

てはどうですか。トルストイか誰かも言つてゐましたよ――一遍も病氣したことのない女なんぞ、考へて見ただけでも恐ろしいつてね。

忠夫。それやどうしても、自分が病身だと、自然優しくはなりますね。――だが矢張、あまり弱くちやいけない。（一郎の服裝を見、近くに置いてある銃を見ながら）君は銃獵を御好きですか？

一郎。餘り中りはしないですがね。まあ、彈を打つて見るのを樂み位なものですよ。

忠夫。（起つて一郎の獵銃を指さしながら）一寸あれを拜見。

一郎。どうぞ。いゝ、ほんの間に合せ物です。

（忠夫、銃を取りに行く。）

順。（寢返りを打ちながら）よし、よし、分つた。

忠夫。（銃を持つてもとの席に歸り）御目が覺めたと見えますね。

一郎。なあに。寢言です――今のは。

忠夫。然うですか。（それから熱心に銃を吟味する）ははあ。これは頗る新式のやうだな。なある程。

一郎。先度、少し亂暴しましてね。どうでも可い處だけども、一寸壞しましたよ。

忠夫。へえ！　何處です――その、壞れてゐると云ふのは？

一郎。一寸拜借。

（斯う言ひながら、起つて銃を受取らうとした時、脚が椅子にからまつて、前のめりにのめる。その途端に銃がずどんと鳴る。忠夫はうんと一聲、仰向けに倒れる。）

ああッ！

（と叫んで、一瞬間棒立ちになつたが、やがて正氣に返つて、忠夫のそばへ駈け寄らうとする。）

順。（銃聲に目を覺まし、周章へて一郎の背より組みつく）止せよ！　つまらない！

一郎。（順を後へ突き飛ばし）穿き違へるな。異ふぞ！

（一郎、みつる、繼母、順なぞ、續々と忠夫の處に集まり、混雜を極めてゐた時、歌津子はよろよろと出て來て、途中にぴたりと立ちどまる。）

歌津子。辰巳さん！　辰巳さんが如何したのです？

みつる。（判然とした調子にて）兄さんよ！　兄さんが大變ですよ！

歌津子。（駈け寄り、忠夫をのぞいて見て）まあ！　御顏を！　こんな。こんな事になつてしまつて！（みつるの手を取つて舞臺の正面へ引き出しながら）ねえ、みつるさん過失ですか？　え？　過失だつたでせうか？（幕）

第三幕

（第二幕より十ケ月ばかりの後。山中の湖水に臨める一旅館、最上階の見晴らしよき一室。籐の寢椅子には、今は盲となれる忠夫が寢轉んでゐる。正面の欄干か何かにもたれて、妻の歌津子が立つてゐる。）

忠夫。（午睡より目覺めて）あ、ああ。好い氣持に睡てゐた。どれ位睡たかしら？

（歌津子には忠夫の言葉が聞えざるものの如し。）

歌津子！　ゐないのかい？

歌津子。（愕然として驚きたる如く）あら！　御目覺めになつて？

忠夫。ああ。何か讀んででもゐたのかい？

歌津子。（狼狽して）ええ、先刻まで。
忠夫。今は何をしてゐるんだい？
歌津子。此處へ來て、斯うして立つてますの――湖水の方を見て。
忠夫。矢張晴れてるかい？
歌津子。少し曇つて來ましたわ。雨にもならないでせうが。
忠夫。向うの山の、ずつと向うの山は見えないかい？
歌津子。ええ。見えなくなりましたわ。
忠夫。風も少し出たやうだね。とにかく此涼しさは、眞夏とは思はれないね。浴衣一枚ぢや涼し過ぎる位だ。
歌津子。先刻御睡みの時も、餘程、何かお掛けしようかと思つたんですけれど。
忠夫。なあに。それほどでもないよ。（耳を澄ますやうにして）何だらう？ あの音は。
歌津子。（同じく耳を澄ますやうにして）あれですか？ ボートですよ。風が出かかつたものだから、急いで歸つて來るんでせう。（短き間）眞白く塗つたボートに、乘つた人も眞白な服を着て、白い鳥か何かが逃げ出して來るやうだわ。
忠夫。それぢや、、、もう社の前の石の鳥居や、石燈籠や、大きな赤松なんぞは水に映つて見えないな。
歌津子。だけど、あの横の黄色いペンキ塗りの可愛い建物は、何時もより近くなつて、判然と見えるわ。そして、あら！ 何時の間にか雲がちぎれて、あんな綺麗な光が湖水一面に！
忠夫。（椅子から半ば身を起して）、、うむ。見えない俺の目にも歴々と見えるやうだ。むかし、よくやつて來た處だからな。
歌津子。（忠夫の方へふり向いて）だけど――つまりませんわねえ。
忠夫。つまらない？ 俺はちつともつまらなくないよ。斯うしてお前の目で、晴れたり曇つたりする外の景色を、その時その時見て貰ふ俺には、別に自分の目で物を見るにも及ばないやうに思ふんだ。

（二人とも暫く無言。歌津子、欄干を離れ、忠夫の横に來て坐る。一冊の書物を取り上げて膝に置き、そのまま差し俯いてしまふ。）

度々言ふ事だが、俺は此目を失くした代りには、二つの目よりも、、ずつと價値のある物を自分の物にした。（間）俺はこんな身の上になつたばつかしに、此幸福を得られたやうにさへも思ふんだ。

（歌津子、ただ太息を漏らすのみ。）

こんな事を言つても、氣を惡くしちや困るが、實際俺は、この幸福が俺の手に入るかどうか不安に思つてゐたんだからな。これと云ふ理由もなく、お前が果して本當に俺のところへ來てくれるかしらと、少尉の服を中尉の服に脱ぎ更へた時分からもう、始終俺の氣になつてゐたんだよ。

（歌津子、依然として太息を漏らすのみ。）

、、つい先達てのやうに思つてゐるが、早いものだね――かれ是れもう、半歳近くも前の事になる！ お前がお前の家をぬけ出して、俺の處へ來てくれたのは！ あの治りかけた傷の爲めよりも、絶望の爲めに痩せ細つてゐた俺の此手を、お前の（手探りするやうにしながら）その溫かい手の中に置いてくれたのは！
歌津子。（苦しげに）あの時の事なんか、もう考へないことにしませうよ！
忠夫。（歌津子の言葉を耳にも入れなかつたかのやうに）俺には伯母に當つてゐるお前の繼母自身さへ、俺が斯うなつてしまつては、流石に賛成しかねた結婚なのに係はらず……そ

の他の親類縁者一同があれほど反對したに係はらず——

歌津子。もう、あんな話はしないで下さいな！

忠夫。いや、これだけは幾度でも繰返す！　繰返さないぢやゐられないよ。自分とこの息子の嫁にしたがつた叔父さんが、お前のどうしても俺の處へ來ると言ひ張る我儘を理由に、保管されてゐたお前の財産を引渡せないとまで言つて、あれほど威嚇したに係はらず、お前は本當に身一つで、此俺のところへ飛び込んで來てくれた。ただ生きて行くと云ふことさへ、自分一人の力には及ばなくなつてゐた俺のところへ來てくれた。あの時俺は、お前の健氣な、やさしい覺悟をきいたとき、俺はもう此胸が、一杯になつてしまつて、なんにも言へなくなつて！

歌津子。もう可いわ！

忠夫。俺は唯だお前の手を押し戴くやうにして——

歌津子。もう、堪忍して下さいな。あの時分の事を考へると、何だか悲しくなるんですから。

忠夫。悲しくなる？　どうして？

歌津子。どうしてでも！　何だか悲しくなるんですから。

忠夫。近頃は、よくそんな事をいふやうになつたね。（間）あの時分の話をするのが、どうしていけないだらう。

歌津子。本當を云へば、あの時分の話ばかしぢやないわ。過ぎ去つた昔の話をするのは、みんないけないわ。

忠夫。過ぎ去つた昔の話をするのは——みんな！　ふむ。

（忠夫、腕組みして考へ込む。暫くの間沈默。）

忠夫。（歌津子を摸索する如き樣子をしながら）歌津子！　（間）　歌津子！　お前は、もしかしたら——

歌津子。（稍や驚きの面を上げて）え？　何ですか？

忠夫。お前は悔いてるんだな、取り返しのつかない事をしたと思つて後悔してるんだな。

歌津子。（短き間を置いて、決然）いいえ。

忠夫。別に後悔しちやゐないと云ふのかい！

歌津子。ええ。

（暫くの間、二人とも無言。）

忠夫。それぢや、お前は何處か體の工合でも惡いんだ。（間）あの快活だつたお前が、結婚すると間もなく——然うだ、間もなくと云つても可い——もとほど快活でなくなつた。そしてそれから後、だんだんと元氣がなさうに見える。

歌津子。然うでせうか？

忠夫。うむ。精一杯元氣にしようと努めてゐるにも係はらず、どうしても元氣になれぬやうだな。

歌津子。本當にどつかが惡いのかも知れませんわ。

忠夫。東京へ歸つたら、一遍よく診て貰ふことだね。

歌津子。ええ。

忠夫。（再び横になりながら）風がなくなつたな。また晴れたかい？

歌津子。（良人の言葉には答へずして）貴郎！

忠夫。何だ？

歌津子。私は歸りたくなりました。

忠夫。歸る？

歌津子。ええ。今晩の汽車ででも直ぐに。

忠夫。どうしたんだ？　急にそんな氣になつて！

歌津子。急にぢやありません。本當は此方へ來た、あの晩からもう歸りたくなつてゐたのです。

忠夫。でも、お前は自分から此處へ來たいと言ひ出したんだぜ。しかも、あれほど熱心に主張したんぢやないか？

（歌津子、答へず。）

それに一昨日は、みつるにも來るやうにつて手紙を出した筈だ。

歌津子。（太息を漏らして）然うでしたねえ。

忠夫。貞雄にしたところで、折角連れ出して來て、一週間にもならない內連れて歸るんぢやあんまり可哀想ぢやないか？

歌津子。然う仰しやれば、何だか歸るわけにも行かないやうですわねえ。

忠夫。兎に角もう少しゐなくちやいけないよ。體の爲めにも、此邊の空氣はきつと惡くないだらう！

（此時貞雄入つて來る。）

歌津子。おや、御歸んなさい。

貞雄。今ねえ、仲子さんが來るよ。

歌津子。えッ！　仲子さんが？

貞雄。ああ。僕は蟬をさしてたんだが、『貞雄さんなの？』つて言ふから、ふり向いて見るとあの人なんだ。

歌津子。それから？　そして今何處にゐるの？

貞雄。下で電話か何か掛けてたよ。もう上つて來るだらう。

忠夫。仲子つて、何かい？

歌津子。貴郎も病院で一二度御會ひになつたことのある――

忠夫。ああ、例の『新しい女』だね。

歌津子。ええ、貴郎はあの人を、あんまり御好きぢやありませんでしたねえ。

忠夫。（物につかまつて起ち上りながら）俺は散步にでも出て來よう。

歌津子。然うですか。（間）それぢや貞雄さん、御一緒に行つて上げて下さいな。

貞雄。姉さん達は行かない？

歌津子。ええ。でも、下まで送つてあげるわ。

（貞雄、先きに立ち、歌津子、忠夫の手を引いて出づ。入り代りに女中二人ばかり入り來りて、座敷を片付ける。）

女中甲。一寸。隨分變つてるのねえ？

女中乙。何が？

女中甲。何がつて！　下で今、電話をかけてる人よ。

女中乙。あの變痴奇倫な頭髮の事？

女中甲。頭髮ばかしぢやないわよ。一體に、あの樣子つたらないぢやないかね。私、初めは支那人かと思つたのよ。

女中乙。さう云へば何だか、口の利き工合なんかまで、日本人ぢやないやうね。

女中甲。だけど、可笑しいわねえ――此處の奧樣のやうな立派な方のお友達だつて云ふから。

女中乙。およし。もう。足音が聞えてよ。

（歌津子、仲子を伴ひて入り來る。女中等出て行く。）

歌津子。本當に喫驚しましたわ。

仲子。私が飛び込んで來たことをですか。

歌津子。ええ。

仲子。でも貴女がたは御存じだつたでせう？　私達が此處へ來てゐることを。

歌津子。ええ――私だけは。（欄干に近づき、左の手を目の上にかざし、何物かを見たしかめたる後、再び仲子の方へふり返り）それもほんの一週間ばかし前からですけれど、私だけには分つてゐましたわ――貴女がた御二人が、辰巳さんと御一緒に此湖水のそばへ來ていらつしやると云ふことは！

仲子。辰巳さんからお手紙でも來て？

歌津子。いいえ。

仲子。（不審さうに）さう？（間）實は私達からも、御知らせしちやいけないつて禁めら

れてゐたんですけどもね。又御本人の氣が變つて、直接お手紙でも御出しになつたのかと思つてね。

歌津子。私は、まるつきり別の方面から聞きましたの。

仲子。然うですか。（間）兎に角貴女御一人だけが御分りになつて、そして御分りになると、直ぐに御出掛けになつたと云ふの？

歌津子。ええ。

仲子。それでゐて、貴女は今日までいらして下さらなかつたのね——私達のところへ。

歌津子。ええ。

仲子。なぜ、いらして下さらなかつたの？

歌津子。だつて、家を出ると直ぐからもう、出なければよかつたと思ひましたもの。

仲子。でも、此處までいらした位なら。

歌津子。此處へ來てからは、一層惡い事をしたやうに思ひましたわ。

仲子。でも、貴女が辰巳さんに會つて、なぜ惡いでせう？

歌津子。なぜと云つて、武田はなんにも知らないで連れ出されて來てゐるんですもの。

仲子。連れ出してからでも、本當の事を仰しやつてしまへばいいに。

歌津子。それや餘程、然うしたかつたわ——あんまり苦しいものですから。

仲子。仰しやつてしまへば、何でもない事でせう——辰巳さんに貴女が會つたつて、ただ會ふだけの事なら！

歌津子。私が武田に本當の事を言つてしまひたいのは、あんまり苦しいからですわ。言つてしまつた後で、會ひたい人に會はうと云ふやうな、そんな積りぢやないわ。

仲子。つまらない！　そんな道德の幽靈なんぞを、貴女はやつぱし恐がつてゐるのねえ。

歌津子。私の道德なんて、そんな小難かしい物ぢやないと思ふわ。

仲子。でも、やつぱし、善い事だとか惡い事だとか言つてるでせう？

歌津子。だけど——

仲子。だけど、どうしたと云ふの？

歌津子。だけど武田は——（ハンカチーフを顏に當てて）武田は可哀想な人ですもの。

仲子。相變らずねえ——貴女は。

（歌津子、沈默。）

今村がいつもよく言つてるわ——歌津子さんて人は、强さうに見えて實際は弱い人なんだつて！

（歌津子、依然として沈默。）

それにしても貴女の結婚は、どうしても私達には呑み込めなくつてよ。（間）初めあんなにまで逃げ廻つてゐた結婚を、しかも武田さんがあんなに成つた後、貴女自身から進んで是非ともすると言ひ張つたんですつてねえ。

歌津子。仲子さん、貴女もまた、あれを問題にするんですか？

仲子。折があつたら是非是非きいて見たいと思つてゐたわ。（間）やつぱし武田さんを可哀想な人だと思つたからなの？　お氣の毒と思つたの？

歌津子。それはお氣の毒とも思つたわ。

仲子。誰よりもお氣の毒と思つて。

歌津子。いいえ。もつとお氣の毒な人があるかも知れないことは、私だつて考へてゐましたわ。

仲子。然う？

歌津子。それに武田をだつて、今氣の毒に思つてゐるほど、あの時は思つてゐなかつたの。

仲子。それでゐて——

歌津子。どうして此結婚なんかしたかと仰しやるの？

仲子。ええ。呑み込めないわ。

歌津子。(微笑しながら) よくは自分にも分らないけれど、きつと私の持前の……つまらない負嫌ひからだと思ふのよ。

仲子。負嫌ひつて?

歌津子。他の人に出來さうもない事なら、尙ほのこと、自分にやつて見たかつたの。そして、もう入らないでも可いと云はれた籠の中へ、自分から飛び込んで行つたのよ。

仲子。さうでせうか?

歌津子。勿論それぱつかしぢやないわ。私はねえ、あんな不幸な良人の世話を、か、よわい女の手一つにして行くと云ふ、柄にもない烈婦の役割が引受けて見たかつたのです。そんなつまらない夢を見てゐたのです。

仲子。つまらない夢を? そして其夢がさめたと云ふの?

歌津子。ええ。

仲子。どうして覺めたの。

歌津子。結婚して間もなく、私は前通りなんにもしないでゐて、私達二人の生きて行かれることを知りましたもの。貴女がたのやうに、パンの爲めに働かないでもゐられることをね。

仲子。(暫く考へて) 辰巳さんから提供された澤山のお金を、武田さんが貴女に内密に受取つてゐたと云ふことですね。

歌津子。ええ。武田はきつと辰巳さんの御心持を尊重した爲めでもあり、出來るだけ私の重荷を輕くしてやらうと思つた爲めでもありませうよ。だけど私には、これが大きな幻滅の緒でしたの。

仲子。(うなづきながら) 貴女のやうな性格としてはねえ。

歌津子。それから又私の結婚も、それが濟んでからはただ、同情と、憐憫と、偶には少しばかりの尊敬とで迎へられるだけでした。あれほどにやかましく言つた近親の者なども、もう私を非難しては呉れませんでした。

仲子。それは然うでせうね。

歌津子。ですから私は……私は何だか物足りなくなつて來ましたの、つまらなくなつて來ましたの。

仲子。其御心持は、私にも分るやうだわ。

歌津子。ですから私は……(間) もう止すわ。自分の事ばつかし!

仲子。止さないでもいいことよ。

歌津子。でも、もう止しましよ――私の話は。それよりも聞きたいのは!

仲子。辰巳さんの事? お話するわ。(間) 貴女、辰巳さんが貴女がたの所へ顏を出さなくなつてから、ひどく頭の加減を惡くしてしまつたことを御存じですか?

歌津子。薄々耳に入つてはゐましたわ。どつかの精神病院へ入院していらしたつてことも、それぢや本當でしたのね?

仲子。ええ。だけど、其後全然よくなつたの。退院してから私達二人で此方へ附いて來たんですけれど、此頃ではもう私達の用事はなんにもないの。

歌津子。然うですか! そんなによくなつていらつしやるの?

仲子。ええ。(起ちながら) 私、もう一遍電話をかけて見ませうかしら?

歌津子。何處へ?

仲子。何處へつて――私達のゐる處へですよ――辰巳さん達もう歸つてさうなものですから。

歌津子。(愕然として) えッ! 仲子さん、貴女先刻辰巳さんとこへかけたの?

仲子。ええ。(間) 生憎辰巳さんも今村もゐませんでしたから、宿の人に傳言して置きましたの――貞雄さんに出會つて、それから此處

へ來てるつてことをね。

歌津子。まあ！

仲子。ですから、辰巳さんも其內來るかも知れないわ。

歌津子。どうしよう！（起ち上り、寢椅子のところへ行つてかけ）私本當にどうしよう！

仲子。いけなかつたの？（間）諦めてお仕舞ひなさいよ――どうせもう斯うなつちや。

歌津子。（再び起ちて欄干へ行き、春伸びをするやうにして右手の岸邊を眺め）何だか、あの二人連れのやうだわ！ あら、もう歸りかけてゐるやうだわ！ 仲子さん、濟みませんけれども……

仲子。私が牽制運動に行くの？

歌津子。後生だから。そしてもつと、もつとゆつくり遊んで來るやうにね。直ぐに歸つて來ないやうにね。

仲子。はい、はい。畏まりました。

（仲子、大急ぎで出て行く。歌津子、ただ一人になつて、愈々落ちつきをなくする。幾度か起つたり坐つたりのあと、不圖思ひ出して鏡に向ひ、鬢のほつれをかき上げなどしてゐる折柄、俄に人の上り來る樣子。）

女中。（人を案內するものの如く、外より）こちらでございます。

歌津子。（絕望的の期待を以て、入口へ迎へに出る）どうぞ御入り下さいまし。まあ！ みつるさんだつたの。

みつる。御手紙を戴いて、直ぐに出掛けて來ましたわ。

歌津子。私、貴女だとは思はないものだから！ まあ、よかつた！

みつる。貴女、何方を御待ちになつてたの？

（歌津子、答へず。）

何方がいらつしやる筈だつたの？

歌津子。いいえ、別に。何でもない事ですよ。（短き間）私やつぱし、誰よりも貴女のいらつしやるのを待つてましたわ。

みつる。またお風邪で、臥せつてたんですけれど。

歌津子。まあ、然う？ そんなの、よくねえ。

みつる。私ねえ……夢を見ましたの。

（斯く言ひながら、湖水の方へ目を走らす。）

歌津子。然う？ どんな夢だつたの？――それは。

みつる。一寸、待つて下さいな。

（みつる、欄干に近く進み、一心に湖水を見入りて暫くの間言葉なし。）

歌津子。（同じく欄干に近づき）みつるさん、貴女は此方へは初めてね？ あら、どうしたの？――そんな樣子をして！

みつる。（歌津子には答へずして）不思議だわ。本當に不思議だわ。

歌津子。何が不思議なの？――そんなに。

みつる。私、この通りの、これとちつとも異はない湖水を夢に見ましたもの。水の色まで丁度この通りの青い色でしたの。

歌津子。まあ！

みつる。そして此欄干にもたれてゐると、この水の底から何だか知らないけれど、頻りに――

歌津子。どうしたの？

みつる。何だか知らないけれど、頻りに私の名前を呼ぶんです。

歌津子。まあ！ 貴女の御名前を――湖水の中から？

みつる。ええ。そしてそれが、丁度溺れかかつてる人かなんぞのやうな、それや可哀想な聲なの。

歌津子。（欄干を離れて體を震はせながら）恐いこと！

みつる。私も恐くて目が覺めたわ。だけど目が覺めてからも、ただの夢とばかしは思はれなかつたの。そして、其湖水がどうしても貴女がたの行つてらつしやる處に異ひないと思へたの。

歌津子。そして？

みつる。そしてね、恐い癖に何だか行つて見たくなりましたの。

歌津子。ぢや、丁度そんな處へ私の手紙が行つたのですね？

みつる。ええ。

歌津子。不思議ですねえ。

みつる。だから、臥せつてゐたのを構はず、飛び出して來ましたの。

歌津子。それぢや……私が歸りたくてたまらなくなつた時、いゝ、みつるさんは來たくてたまらなくなつてたんだわ。

みつる。あら、貴女は歸りたい？

歌津子。ええ、何だか淋しくつて、無暗に淋しくつてたまらなかつたの。

みつる。然うですか？

歌津子。でもね、貴女にでも來て頂いたらと、然う思つたの。

みつる。然うですか？

歌津子。だけど、今日はもう、今ぢやもう我慢が出來なくなつてる處なの。

みつる。そんなに淋しくつて？――ここが。

歌津子。ええ。本當に淋しくつて、そして恐くつて！

（二人とも暫く無言。）

いゝみつるさん、私ね、本當は今、恐い人が來るのを待つてるところなの。

みつる。然うですか？――やつぱし。

歌津子。えッ！ それが貴女に解つて？

みつる。何だか然うらしいのね――貴女の御樣子が。

歌津子。でも、本當に恐い人が來るんですもの。（短き間）貴女に、それが誰だか解つて？

みつる。さうね、何だか解るやうだわ。

歌津子。ぢや、誰？

みつる。（湖水の方をちらりと一瞥しながら）あの――辰巳さんでせう。

歌津子。（愕いて）まあ！ 誰から聞いたの？

みつる。誰からも。

歌津子。それでゐて、どうして？

みつる。ただ、何となくそんな氣がしたわ。（苦しげに胸へ手をやりながら）何だかそんな氣がするわ。（起ちて欄干に近づきぢつと耳を澄ますやうにして）あら！ あの聲が！ あの可哀想な聲が！（間）歌津子さん、貴女は聞えない？

歌津子。（身震ひしながら）聞えないわ――なんにも。

みつる。まあ！ あの可哀想な、悲しさうな聲が聞えない？

歌津子。（不安と恐怖とに全然取り亂して）みつるさん、私もう堪らない！ 忠夫さんを呼んで來るわ！

（歌津子、逃ぐるが如く室を去る。みつるは苦しげに胸を抱きながら、欄干に沿うて右に往き左に往きしてゐる。やがて雲の間より強き日光を落し來り、湖水よりぱつと照り返す。みつる、立ちどまり、眩さうにして後にふり返り見れば、辰巳一郎、無言の儘座敷の中程に立ちてあり。手には袋に包みたる棒の如き物を携へたり。）

みつる。（驚かずして）いらつしやいまし。

（一郎、ただ二三歩を進み出でしのみ。無言。）

何時の間にいらしたの？

一郎。歌津子さんはゐませんか？

みつる。先刻まで其處にゐましたわ。
（一郎、無言の儘、棒のやうな物を袋より取り出す。）
鐵砲ですのね――あの時の！
一郎。これを持つて來いつて云ふから、持つて來たんです。
みつる。何方が？
一郎。歌津子さんは、あれが私の過失だつたと云ふことを疑つてゐるんです。いいえ、たしかに疑つてゐる。だから、私が嫌だと云ふのにどうしても、これを藏つて置けと言つたんだ。（短き間）だが、歌津子さんばかしぢやないと言つたな……うむ。（銃の臺尻をとんと疊の上について）みつるさん、貴女はどう思ふ？ やつぱし、過失ぢやないと思ふ？
みつる。いいえ。
一郎。（みつるの言葉が耳に入らなかつたかのやうに）貴女もやつぱし、過失ぢやないと思ふんですね？
みつる。いいえ、然うは思ひませんわ。
一郎。えツ！ 然うは思はない！
みつる。ええ。
一郎。（銃を杖につき、ぢつと考へ込む。暫くありて）みつるさんは、あの時見てゐたのかい？
みつる。いいえ。
一郎。ふむ。それでゐて貴女は、あれが怪我だつたと云ふことを信じて呉れる？
みつる。信じるわ。たしかに信じるわ。
一郎。だが、見ないでゐて、どうして信じられる？
みつる。だつて、見ないから――見ないから――信じるんだわ。
一郎。ふむ。見ないから――信じる！ 見ないから信じる！
（二人とも暫く無言。一郎、室内をぐるぐると廻り歩き、寢椅子の上に　を下ろす。）
（突然笑ひ出し）ははは、つまらない事を考へ出したものだ。つまらない！ 今になつて。もう遲い。
みつる。遲いと仰しやるのは？
一郎。（ぢつとみつるの目を見つめながら）みつるさんは、死にたいと思つたことがあるかい？ 死にたいと思つた事が？
みつる。ええ。
一郎。ある？ どんな時然う思つた？
みつる。私、始終然う思つてましたわ。
一郎。ふむ。いつからだ？――然う死にたいとばかし思ひ出したのは。
みつる。（横を向きながら）初めて――御目にかかつた、あの時から！
一郎。え？ 初めて私に會つた……私が初めてみつるさんに會つた時……ふむ。（間）私はもう一度ずどんとやり度くなつた。みつるさん、貴女の其處（胸を指さし）にゐる奴を退治て上げようか？ 其處にも惡い奴が入つてゐる！ さうだ、惡い奴がはひつてゐる！……（短き間）こつちへいらつしやい……もつとこつちへ。うむ、然うだ。
（みつる指さされたる處へ行き、徐に瞑目して立つ。一郎、銃を構へてみつるの胸部を狙ふ。）
今に見ろ！ 畜生奴！
みつる。（不圖目を開き）辰巳さん！
一郎。（銃口を上に立てて）何です？
みつる。彈が込めてありましたか？
一郎。（愕然として驚き）彈？
みつる。其銃には彈が込めてありましたか？
一郎。ああ！ 然うだ。彈が込めてなかつた！ 此銃には彈が込めてなかつた！（銃をがたりと投げ出して）やくざな銃だつたな。こんな

いゝやくざな銃だつたかなあ！
（一郎、泣く。みつる、胸を抱きながら起ち上り、見物に見えざる欄干の隅へ行く。）
一郎、泣き止みて四邊を見廻し、やつと、みつるの在るところを見出す。）
いゝみつるさん、どうした？　何か聞えるのかい？——そんな樣子をして。
みつる。ええ。もう堪らなくなつたわ——あの聲が……
一郎。あの聲？
みつる。（悲鳴を擧げて）ああ！　いゝ、どうしよう？——あの可哀想な聲が。湖水の中から、あんなに可哀想な聲をして！　ああ、もう斯うしちやゐられなくなつたわ！
一郎。（突然跳び上り、みつるの方へ駈け出しながら）あッ！　あ、みつるさん！　みつるさんはもう飛び込むのか——私より先きに飛び込むのか？
（二人の前後して身を投げるときの物音。暫くありて階下に喧噪を生ず。さき程より既に曇りゐたりし湖水の面は、今にも大雷雨となりさうに暗くなつて來る。やがて今村順、第一幕の時と略ぼ同じ服裝にて入り來り、先づ投げ出されたる銃を取り上げて見、更に欄干よりのぞいて見、それから引き返して來て寢椅子の上にかけ、腕組みをして、ぢつと考へ込んだり、太息を吐いたりしてゐる。そこへ歌津子夢遊病者の如く茫然として出て來る。）
順。（歌津子を見て）歌津子さん、妙な事になりましたねえ！
（歌津子、無言の儘順のそばへ駈け寄り、寢椅子の端に突伏してしまふ。）
あの時は、いくら考へて見ても思ひ出せなかつたが、ねえ、歌津子さん、あの繪の中の女は——みつるさんでしたね。あの、頭の處に圓光をかざした女は　みつるさんでしたね。（短き間）どうも、あの畫が、少し巧過ぎると思ひましたよ。
（歌津子のむせびなく聲のみ聞ゆ。）（幕）

（一九一七年九月）

◇

勿論當世向きでない、季節はづれの心掛ではあるが、私なぞは平生からして、貴族的な痗我慢、貴族的な廉恥心、貴族的な品位といふやうなものを、出來るだけ餘計に持ち合せてゐたい。ほんの少しばかりでももつてゐる奴はなくしたくないものだと思つてゐる。つまり柄にもなく自ら一種の貴族を以て任じようとするので、まぎれもなき貴族主義者である。だが、他方では、自分だけ、少數の自分達だけ貴族であつては面白くない。一人でも餘計に自分達同樣の貴族を造りたい。出來ればすべての人々をことごとく皆、自分達同樣以上の貴族にしてしまひたい。とさうも考へないではゐられない。つまり本當は、自分達だけ別物になつてゐたくはないので、その點からいへば、いはゆるアリストクラシイの反對、デモクラシイの信奉者でもあり得るのである。ただ當世向きの、新しいデモクラシイといふ奴は、痗我慢とか、廉恥心とか品位とかいふやうな古風なものを、自分達が持ち合してゐないだけでなく、すべての人々にも放擲させてしまはうとするのである。自分達も立派な貴族になりきつてしまはうとするよりも、むしろすべての貴族をもあさましき賤民の間にまで引きずり下ろしてしまひ、さうして一切を平等化しようとするのである。

（『流行兒・問題にされることなど』より）

青い花（三幕）

人物
朝川　猛。　某大學教授。三十五歳。
芳　子。　猛の妻。二十七歳。
み　ど　り。　猛の娘。五歳。
正　輝。　猛の父。牧師。
民　子。　猛の母。
高山美智子。　正輝の親友の娘。二十八歳。
長谷部三郎。　新聞記者。二十四五歳。
其他。

時代
當今。

場所
東京。

第一幕

（市内某病院小児科病室。みどりの臥てゐるベッドの側に、母芳子、祖父正輝、祖母民子の三人が附き添つてゐる。クリスマス近き或る日の朝。遠く聞える電車の音にて幕上る。）

正輝。（今迄頬杖についてゐた片手をはなして）はあて。電車かな。電車も動き出したやうだな。

民子。（小さい時計を出して見ながら）五時半ですか。追付け明るくなりますね。

正輝。それぢや私達二人は、一遍家へ歸つて來よう。クリスマスの用意も全然して無いんだからな。

民子。でも、大丈夫でせうか？　こちらを斯うして、芳さん一人にして置いて。

芳子。大丈夫ですよ。熱もあれつきり減いてしまつたし、それにただのインフルエンザだけで濟んだんですから。本當に大丈夫ですよ。

民子。兎に角、肺炎なんぞにならないで、何よりでしたねえ。矢張私達のお祈りが聽かれたんですね。

正輝。（格別の力も入れず）うむ、然うだ。だが、油斷しちやいけない。私も夕方に復來て見る。（外套を羽織りながら、みどりをのぞいて見て）うむ、熟くねてゐるな。

民子。それぢや芳さん、氣をつけて下さいよ。（コオトの紐を結びながら）あ、それから、猛の處へは如何しませうね。電報を打つときませうか？　わざわざ歸つて來ないでもいいつて。

芳子。（扉の方へ二人を送り出しながら）だけどもう、發つたあとでせうから、よござんすわ。

正輝。然うだ。ことに依つたらもう、そろそろ此方へ着く頃かも知れない。

民子。然うですね。昨日の朝、あの電報を見ると、直ぐに發つたかも知れないんですわね。

正輝。まあ可い。同じ無駄でも、斯う云ふ無駄が出來るのは、あまり惡いものぢやないからな。はツはツは。

（民子も笑ひながら、正輝のあとから出て行く。扉の外にて二人の聲。）

や、こいつは寒いなあ！

民子。寒い筈ですよ。あれ、あんなに白い物が

降つてゐるんですもの。

（芳子、窓際へ引き返して來て、徐にカアテンを引きしぼりながら、白み行く東の天を見上げてゐる。電車の音再び鮮かに聞ゆ。やがて看護婦高山美智子、入り來る。）

美智子。先刻から交代に參る筈のが、生憎少し加減を惡くしたと申します故、はじめての私が參りました。御氣毒樣でございます。

芳子。（みどりの枕邊近く歸りて）いいえ。こちらはもう大變に快くなつたのですから。

美智子。御容態はあちらで詳しく伺つて參りましたけれど、一寸……

（病床日誌を取りて一覽する。芳子はベッドの周圍を片附けてゐる。）

（日誌を閉ぢて表紙を見たとき、我知らず絶叫する如き調子にて）朝川さん！（直に平靜を回復して）朝川さんと仰しやるんでございますね。

芳子。（何氣なく）ええ、朝川みどりと申しますの。

美智子。只今、御眠みになつていらつしやいますか？

芳子。大層氣持よささうに眠んで居ります。

美智子。それぢや、體温なんかも後程……

（二度三度、病床日誌を取り上げたり、みどりの寢顏をのぞいたりして落ちつきなし。やがて、決然たる面を電燈の方へ向けながら口を開く。）

失禮でございますが、朝川さんと仰しやると、もしかしたら麻布教會の朝川さんの御親類ではいらつしやいませんでせうか？

芳子。はあ、あれは此子の祖父にあたりますの。

美智子。では、此方の御父樣は？

芳子。（美智子の狼狽と熱心とに初めて心付きながら）此子の父ですか？

美智子。朝川猛さんでございますね？

芳子。はあ、朝川――猛。

美智子。（半ば獨白のやうに）ぢや、矢張然うだつた！

芳子。あの、朝川を、猛を御存じなのですか？

美智子。（芳子の問ひに答へずして）では、先刻廊下で擦れちがつたのは、矢張こちらの御祖父樣でございましたのね。

芳子。はあ――多分。

（二人とも少時無言。）

美智子。（再び決然たる態度を取り返して）あ、失禮いたしました。朝川さんを知つてゐるかと云ふ御尋ねでございましたのね。

芳子。はあ。猛を御存じなのですか？

美智子。はあ。……よく存じて居ります。猛さんばかしでなく、御祖父樣御祖母樣はじめ、御一家の方殘らず存じて居ります――はじめて御目にかかるのは、多分貴女がた御二人きりでせうから。

芳子。まあ！ 左樣でございますか？

美智子。私は美智、高山美智と申しますの。

芳子。（首をかしげて）高山美智子さんと仰しやるんですね。

美智子。判然した御記憶はなくとも、折々は此名前が御耳にはひつたことと思ひます。（短き間）丁度八年ばかり前までは、私も朝川家の家族の一人のやうにして頂いてゐましたから。

芳子。然う伺つて、やつと思ひ出しました。お祖父さんのお友達の方の御孃樣といふのが、何でも善く御出來になる方といふのが、二三年の間、猛なんかと御一緒にいらしたといふこと、やつと思ひ出しましたわ。

美智子。何でも善く出來るつて！（笑ひながら）それだけは人違ひのやうですね。私はまた、

隨分惡く言はれてゐても、仕方がないと思つてゐましたの。

芳子。まあ！　どうしてでせう？

美智子。惡く言はれても仕方のないやうな事をしてゐるんですもの。（思ひ出したやうに　みい、どりのベッドをのぞいて見て）まだ、御眠みですかしら？

芳子。ええ。まだ。

美智子。別して小母さんには――この方の御祖母樣のことを、斯う呼びなれてゐましたから。別して小母さんには、濟まない事をしたと思つて居りますの。

芳子。然う仰しやれば、母がいつか貴女の話をしたあとで、隨分失禮なことを云つてゐたのを思ひ出しましたわ――あんな義理知らずをするやうになるのも、矢張本當の信仰がなくなつたからだなぞと、失禮なことをね。

美智子。義理知らずと言はれても、何と言はれても足りない位ですわ。

芳子。まあ！　どんな事をなすつたでせう？　貴女が！

美智子。もう一年ばかしで女學校を卒業するといふ時、流行の腸チブスで兩親ともなくしてしまつた私が、小母さん達の御手許へ引き取られてからの、その不仕合せな仕合せは……（センティメンタルに言葉をきつてしまふ。）

芳子。（同じくセンティメンタルに）まあ、然うですか！

智子。そんな御恩を受けながら、私は突然に、默つて小母さん達から姿をかくしてしまひましたの。

芳子。あの、突然に？

美智子。ええ、私自身も前の日まで、全然思ひ設けなかつたほど突然に！

芳子。そして、默つて？

美智子。默つて、姿をかくしました――あれつきり何方にも御目にかからないつもりで！

芳子。まあ！

美智子。ですけれど、奧樣、何故私がそんな事をしたかは、どうか訊かないで下さいまし。

芳子　まあ！　何故でせう？　何故また其理由を御訊ねして惡いでせう？

美智子。斯うしてお話してゐると、だんだん勇氣がなくなりさうですけれど、私はもう一度……

芳子。もう一度？

美智子、然うです、もう一度姿をかくさなくちやならないやうに思ふんですもの――此儘貴女がた御二人のほか、、、、どなたにも御目にかからないで！

芳子。まあ！（短き間）あの、誰にも、猛にも御會ひにならないで？

（美智子、空椅子の角につかまり、だいぶ明るくなつて來た外を、じつと見守りながら沈默。）

（同じく面を反けて）猛に御會ひになつても惡いのですか？

美智子。（自分の耳を疑つたかの如く）え？

芳子。猛に御會ひになつても惡いのですか？――斯うしてゐる内にも歸つて來るかも知れませんが。

美智子。歸つていらつしやる？　あの、どちらへか御旅行になつてゐましたの？

芳子。ええ。田舍の方へ講演のやうなこと賴まれて、先達て中から出かけてゐたのです。

美智子。（別の事を考へながら）然うですか。

芳子。どんな御事情が御有りか存じませんけれど――

美智子。え？　何と仰しやいましたの？

芳子。どんな御事情が御有りか存じませんけれど、此儘御目にかかれないでしまつたら、猛に

とつてもさぞかし殘念な事だと思ひます。あとで、きつと殘念がりますわ。

美智子。（俯き勝にしながら）然うでせうか？

芳子。御目にかかれたら、そして昔の御話でも伺つたら、きつと、きつと悦びますわ。

美智子。本當に、然うでせうかねえ。

芳子。ええ、きつと。きつとですわ。

美智子。奥樣！――これよりも、もつと親しい呼び方をしたいのですけれど。奥樣、私はもう、逃げ時を過ごしてしまつたやうですわ。逃げ損つてしまつたやうですわ。

芳子。では――

美智子。兎に角、この御孃樣が御目覺めにならない内に、可愛い御聲の一聲も聞かない内に、此看護服を脱ぎすてて行くことは、私にはとても出來さうに思はれませんの。

芳子。ではあの人にも、猛にも御會ひになつて下さいますの？

美智子。ええ、御目にかかりますわ。御目にかかりますとも――貴女がた御兩人の御側近くでならば！

芳子。え？ 私と此、みどりの近くでならばと御しやるの？

美智子。（稍や周章へて）ええ。然うです。（短き間）こんな露骨な事を言つて、御免なさいまし。何故ですか私は、奥樣と御孃樣との御側近くにゐれば、もうなんにも恐いものなんかないやうに思はれて來ましたの。

芳子。まあ！ そんな事を仰しやると、何と申し上げたらいいか分らなくなりますわ。

美智子。御免なさいまし、何時の間にか、ついこんな失禮な事を申し上げたりなんかするやうな、惡い癖が附いたのですから。

芳子。あら、そんな！ 御詫びなんぞなすつちや困りますわ。

（二人とも少時の間苦しき沈默。）

（思ひ出したやうに立ち上り）これで二晩とも、ずつと續いて眠らないものですから――

美智子。（同じく立ち上り、無意味にみどりのベッドの方へ近づき）さぞ御疲れになりましたでせうね。

芳子。一寸楊枝でも使つて參りますから。

美智子。さあ、どうぞ。

（芳子、出て行く。美智子、窓際に近づき、さきに芳子のなしたる如く、ぢつと外を見てゐる。扉の外を足音高く過ぎ行く者のあるに驚かされ、窓際を離れてみどりの枕邊へ寄り、芳子の坐つてゐたところに坐る。やがて先程の足音が引き返して來て、扉の外にとまる。）

猛。（扉の外にて、遠方の人に話しかける如く）あ、此處ですか。有難う。（扉をあけてはひり、一直線にみどりのベッドへ近づき）容體は如何です？ まだ大丈夫ですか？

美智子。經過が大變に御宜しいのでございます。

猛。經過が良い？ 然うですか。（はじめて帽子を脱ぎ額の汗を拭ふ。）

美智子。昨日は、お晝前からだんだんとお熱も下り、夕方には、召し上る物もだいぶ召し上れるやうになりました。

猛。然うですか。（みどりの顏をのぞいて見る。）

美智子。此分ならば、もう御心配遊ばさないでもお宜しいさうでございます。

猛。成程。熟く眠てゐるやうだ。

美智子。はあ、熟く御眠みになつていらつしやるものですから、まだ拜見しないで居りますけれど、御熱なんかも殆んどなささうでございます。

猛。まあ、可かつた――肺炎にでもなりさうだと云ふ電報だつたものだから、隨分心配しま

したよ。

美智子。左樣でございませうともね。

猛。時に、家の者は、家内なんかどうしたんでせう？

美智子。奥樣は只今一寸‥‥直ぐにいらつしやいますでせう。

猛。ああ、然うですか。

（猛、うなづきながら外套をぬぎかける。美智子、それを手傳ひ、ぬがせたる外套を抱き締めるやうにしながら、默つて立つてゐる。一旦椅子にかけた猛が、何氣なく振り向いて見たとき、美智子の樣子を不審に思ふ。乃ち起ちて美智子の方へ歩み寄り、その顔をのぞき込む。）

（驚いて）美智子さん！

美智子。（殆んど猛の言葉と同時に）猛さん！

猛。美智子さんなのか！

（美智子、無言の儘覺えず後退りする。）

美智子。面目次第もありません。

ちつとも氣がつかなかつた。

猛。貴女に再び會へるとは思はなかつた――しかも斯う云ふ處で。實に意外だ！

美智子。私にも意外なのです。

猛。如何したのですか？　一體如何したと云ふのです？

美智子。逃げ損つたのですわ。

猛。逃げ損つた。

美智子。ええ。

猛。又、逃げるつもりだつたのかい？　また僕達の目に觸れない處へ逃げてしまふつもりだつたのかい？

美智子　ええ。

猛。何故です？　なぜ然うして逃げるんです？　いや、それよりも、あのずつと以前に、どうして貴女が逃げ出したか、それからして僕達には解らない！

美智子。今でも？

猛。ああ、今でも解らないんだ。

美智子。そして――そして今、私がそれを話さなくちやならないと仰しやるんでせうね？

猛。然うです。斯うして再び貴女に會つて見ると、私は私の一家の代表者としてでも、先づ第一に此事からして訊いて見る必要がある。（短き間）まあ、お互に腰をかけよう。

（美智子、沈默のまま、それまで左に持ち右に持ち更へしてゐた猛の外套を壁にかけ、猛とはすかひに、いいみどりのベッドに近く椅子をよせてかける。そして折々いいみどりをのぞいて見ながら語り出す。）

美智子。私は矢張駄目なのね。

猛。どうして？

美智子。折角の決心が、すぐに崩れてしまふんですもの。（短き間）奥樣にお目にかかつた最初には、其儘貴方にもお目にかからないで行つてしまふつもりでしたの。

猛。ふうむ。

美智子。そして貴方にお目にかかつても、從前私の逃げ出した理由なんか、決して申し上げまいと思つてゐましたの。

猛。ふうむ。

美智子。そんな決心が、あとからあとからみんな崩れてしまつたわ。本當に駄目ね。

猛。兎に角――どうして、あんなに突然に、默つて飛び出してしまつたのです？

美智子。貴方も――猛さんも、あの時分の事を少しは記憶えていらつしやるの。

猛。斯うして美智子さんと向ひ合つて見れば、あの時分の事は、ちつとも忘れずに記憶えてゐるやうな氣がする。

美智子。お互に隨分よく喧嘩もしましたわね。

猛。然うだ。安神して喧嘩も出來る位に仲が善かつたね。

美智子。それに猛さんは、いくら怒つても恐くなかつたわ。

猛。だが然う云ふ美智子さんが、口惜泣きの名残りの消えない目で、直ぐに仲直りをしようと言ひ出したもんだよ。

美智子。だつて、小母さんが私達二人の喧嘩を、眞劍の喧嘩だと思つて心配するんですもの。

猛。母はあの時分、美智子さんを僕のお嫁さんにでもしたい氣だつたさうですね。

美智子。（わざと猛の言葉に答へずして）だけど、お互に喧嘩もしなくなつた時分には、また別の事で、小母さん達に御心配をかけるやうになつてゐましたのね。

猛。然うだ。僕が不自然に子供らしく振舞ふととを止めてから――

美智子。そして私が不自然に大人らしく裝ふやうになつてからですわ。

猛。僕はよく美智子さんを相手に、トルストイの話なんかしたつけ。

美智子。そして小母さんは、猛さんの危險思想にかぶれて、私までが正統派の信仰から離れて行くのを、何よりも心配だと仰しやつてゐましたのね。

猛。いや、僕の危險思想については、父の方が一層心配してゐた。

美智子。だけど、小父さんは教會で御說きになるほど、家庭で信仰のお話はなさいませんでしたのね。

猛。しかし、熊本の何とか山で何とかして、この日本國を救ふために、その爲めにクリスチァンになつたと稱してゐる父なぞは――

美智子。教會で讃美歌をうたふ前に、『君が代』の三唱することを發明したのも、たしか小父さんですつてね。

猛。然うだ。然う云ふクリスチァンは、人が神樣を信じなくなるよりも國家を信じなくなることを恐れるんだ。

美智子。それも、心から本當に恐れていらつしやるでせうか？

猛。少くとも、本當に恐れてゐるやうな顏をしてゐる。そして其必要があるんだ――別して今日の日本では、別して日本の耶蘇教仲間では。（短き間）兎に角、父はあの頃の僕のトルストイ熱を、爆發物のやうに恐れたものだ。

（美智子、沈默。ただ其膝をなでてゐる。）

（大事な用件を思ひ出したやうに）あッ！　こんな話ばかりしてゐちやいけない。僕は美智子さんの說明をきいてるんだ。一體どうしたのです？　どうして貴女は姿をかくしたのです？

美智子。つまり、其話をしてるんですわ。こんな順序を通つてでなくちや、その說明が出來ないんですもの。

猛。で――

美智子。でね。（短き間）貴方先刻、小父さんが猛さんのトルストイ熱を、爆發物のやうに恐れたと仰しやつたのね。

猛。ああ、然う言つた――たしかに。

美智子。その貴方も、猛さんのトルストイ主義を、小父さん以上に恐れた者のあることを御存じ？

猛。僕のトルストイ主義を僕の父以上に恐れた者？

美智子。ええ。

猛。さう云ふ人間が、僕の近くにゐたとでも云ふの？

美智子。ええ、極く近くに。事によつたら、小父さん小母さん位近いところに。

猛。母はしかし、父ほどに恐れてゐなかつた。それにトルストイのある一面は、むしろ承認してゐたやうにも思へる。

美智子。小母さんなんかぢやないわ。(間) 御解りにならない？

猛。謎のやうな話だな。

美智子。實は私です。

猛。美智子さんが！　貴女が、僕のトルストイ主義を恐れた？

美智子。然うです。私は貴方に取次がれたトルストイの說を、ほかの誰よりも恐れてゐましたわ。

猛。だつて、貴女はあの時分、あれほど面白がつてあの――

美智子。トルストイを讀んでゐたぢやないかと仰しやるの？

猛。別してあの、性慾超越說なんか、僕と同じやうに、或は僕以上に同感してゐたぢやないか？　同感すると言つてゐたぢやないか？

美智子。それや、然う言つてゐましたわ――たしかに。だつて、然う言はないでゐられなかつたのですもの。

猛。何故？

美智子。だつてあの時分の私は、猛さんと、少しでも異つた考へかたをするやうに思はれたくなかつたのですもの。

猛。では、美智子さんは心にもない事を言つてゐたわけだね？

美智子。ええ。(短き間) だけど、信じられないあの說を、どうかして信じたいと念じつめてゐましたわ。

猛。ぢや、信じたいとは思つてゐたんだね？

美智子。ええ。そして、事によつたら――

猛。事によつたら？

美智子。頭の隅つこだけでは、もう信じてゐたとさへ云へるかも知れないわ。

猛。そして、心臟の方で信じるまでになれなかつたと云ふんだね？　つまり、一方からは信じさせようとするし、一方からは信じさせまいとしたんだね？

美智子。ええ。ですから恐れたんですよ。

猛。あの性慾超越說をね。

美智子。ええ。そして、日の經つにつれて愈々恐ろしくなつて來ましたの。

猛。僕が愈々大眞面目に、あの說をかつぎ廻るやうになつたから？

美智子。それもあるわ。

猛。僕も冷汗が流れる――あの時分の事を思ひ出して見ると！

美智子。だけど、あの說がいよいよ恐ろしくなつて來たのには、ほかにもつと、もつと大きな理由がありましたわ。

猛。何です？――それは。

美智子。(少時躊躇したる後早口に) 私の心がもう、第一の過ちを犯してゐたからです――トルストイからもポオロからも、事によつたら、ナザレの耶蘇からも叱られるやうな！

猛。(惡意なき微笑をふくみながら) つまり、戀をしてゐたと云ふわけですね？

(美智子、沈默。此時有明の電燈が徐々に消えかかる。消え了りたるとき、窓の外俄かに明るくなる。)

(椅子を立ちて、稍や美智子を遠かるやうにしながら) 誰です？　誰でした？――その御相手は？

美智子。(同じく立ち上りて、其椅子につかまりながら) そんなんぢやありませんわ？　ただ――

猛。ただ、貴女の方から思つただけ？

美智子。ええ。だけど、もう堪忍して下さいな！

猛。此上を訊いてはいけない？

美智子。猛さん！(短き間) あんまりですわ！　貴方も！

猛。(太息をついて) 然うですか！

（二人とも長き間の沈默。）

（再びもとの椅子にかけて、靜かに）しかし……しかし過ぎ去つた昔の事ですね？――そんな、つまらない事を思つて呉れたのは！

（二人とも再び無言。）

美智子。扉の方へ歩き出しながら）奥樣のやうですね。

猛。（扉の外の足音が高らかに行き過ぐるを聞きすましたあと）何をしてるんですかしら？

（二人とも復もや無言。）

（美智子がもとの所へ引き返して來るのを待ちて）美智子さん、僕は知らうとも思はなかつた事を知つた。けれども、知りたいと思つてゐた事はまだ知らないでゐる。

美智子。では、今迄に申し上げただけでは、御察しを願つただけでは、私の姿をかくした理由として十分でないと仰しやるの？

猛。然うだ。それだけの事情では說明の出來ないものがある。

美智子。何でせう？――それは！

猛。だつて、前の日の夕方まで、いつもの通り僕達と一緒に食事をして、あの緣側に蚊遣りを焚いて、いつもの通り僕達と話をしてゐた美智子さんが、その翌る朝、夙起きの母さへ目を覺まさない中に、もう家を拔け出してゐたぢやあないか？

美智子。それがあんまり突然だと仰しやるの？

猛。然うだ。其あんまりな突然を成程と點頭かす爲めには、何かしら、もう一つ告白してくれなくちやいけない物がある。

美智子。だけど、その、もう一つの告白は本當に苦しいんですよ。

猛。貴女が、きまりわるさを我慢し切れないほど？

美智子。まあ、さうなの。だけど、直接には私の恥になるやうな事ぢやなくつて――

猛。誰の恥になる事です？

美智子。ぢや、思ひ切つて言つてしまひませうか？

猛。ああ。

美智子。（四邊を憚るやうに）あの夜、晝間の明るい處ではとても言へないやうなことを、年の若い女の、私の耳元で囁いた人間があるんです。

猛。（驚いて椅子から跳び起ちながら）えツ！貴女に對して？

美智子　ええ。私自身さへ顏を赤らめるやうなことを、明らさまに、私に求めた人間があるんです。

猛。へえ！（短き間）それこそ一體誰です？どいつです？

美智子。それは後で言はして下さいな。私は第一に、私自身がその爲めに如何なつたかを言ひたいんですから。

猛。と云ふと――

美智子。つまり私は、そんな馬鹿者を馬鹿者と思つただけで濟みませんでした。然うです。そんな人間の心を醜いと思つただけで濟まされず、私自身の心をも、本當に、たまらなく醜いと思つたのです。

猛。そして――

美智子。そして、もう一刻もぢつとしてゐられないやうに思ひました。直ぐにも逃げ出さねばならないやうに思ひました。

猛。逃げ出すと云つて、何處へ？

美智子。何處でも、兎に角、そんな人間の姿の見えないところへ、それから、私自身の醜さを成るべく忘れ易いところへと思つたのです。

猛。成程。それで、そんな白い服なんか着けるやうにもなつたんですね。

美智子。ええ。だつて、子供と病氣と位、私

自身の醜さを忘れさしてくれるものは無いと思つたんですもの。

猛。成程。（短き間）だが、その馬鹿な眞似をしかけた奴といふのは、一體誰です？

美智子。誰だと思ひます？――猛さんは。

猛。僕達も知つてる人間ですか？

美智子。知り過ぎる位知つてる人間なの。

猛。へえ！ ぢや、始終家へも來てゐたやうな人間なのかしら？

美智子。それ處ぢやないわ。家の中にゐた人間なの。私達と一つお竈の御飯を頂いてゐた人間なの。

猛。だつて、あの時分、格別誰もゐなかつたぢやないか？

美智子。いいえ、ゐましたわ。

猛。（笑ひながら）まさか、あの書生の長谷部でもなかつたでせう。

美智子。（同じく笑ひながら）あの人も、二三度變な手紙をくれるにはくれたけれど。

猛。だつて、あいつは貴女よりも年下でもあり、それにあの時分はまだ、本當の子供のやうなものだつたでせう。

美智子。でも――

猛。然うですかねえ。

美智子。兎に角、私の云ふのはあの人の事ぢやないわ。

猛。（しばらく沈默の後）まさか僕の親爺でもないでせう――（體を搖ぶつて笑ひながら）あの時分からもう、大抵禿げてしまつてゐた、あの親爺でもないでせう！

美智子。さあ。

猛。（半ば眞面目になりながら）さあだつて？ そんな眞面目さうな顏をして！

美智子。本當の事實ほど、事實らしく見えないものはないんですから。

猛。えツ！

美智子。私もそんなに骨折つてまで、貴方に信じさせたくはないんですけれど。

猛。（辛うじて椅子に身を支へながら）ぢや、眞面目ですか？ ぢや、親爺が、僕の父が、その人間だと云ふんですか？

美智子。（きつぱりと）ええ、然うです。生憎とそれが事實でした！

猛。ふうむ。

（二人とも少時沈默。）

美智子。奥樣は如何なすつたでせうね？

猛。（殆んど無意識に）ああ、荊妻ですか。

美智子。本當に如何なすつたでせう。一寸行つて見て參りませうね

（美智子、出て行く。あとに猛は、腕組みをして、室内を歩き廻つてゐる。）

芳子。（徐かに扉をあけて入り、猛を見て）あら！ 貴郎！ 御歸りなさいまし。

猛。（初めて目が覺めたやうに）あ、今歸つた處だ。

芳子。（卓の上に置かれてあつた猛の帽子を、外套と同じ處へ始末しながら）隨分御心配なすつたでせうね？

猛。（椅子にかけながら）うむ。歸つて見ても間に合はないかとさへ思つた。なにしろ、あんな電報だつたからな。

芳子。濟みませんでした。

猛。大變に快くなつたさうだね。

芳子。ええ、昨日のお晝頃から大變によくなつて來ましたの。もう大丈夫ださうですよ。

猛。俺もすつかり安神してるところだ。

芳子。私も、これで本當に安神しましたわ――先刻までは何だか……

猛。（良人らしく）心配が殘つてゐたと云ふのかい？

芳子。ええ。だつて、貴郎がまだ心配していらつしやると思ふんですもの。（短き間）貴郎、

汽車の中で少しはお寢れて？

猛。うむ。豐橋邊から横濱まで、ぐつすり寢込んぢやつた。

芳子。まあ、然う？

猛。心配は心配でも、矢張眠くなると眠つちまふものだな。

芳子。やつぱし貴郎はお祖母樣の子ですのね。

猛。お祖母さんも例に依つて盛に居眠りをしたのかい？

芳子。（笑ひながら）ええ、少しは。

猛。（同じく笑ひながら）そして目が覺める度毎に『お祈り』だらう。

芳子。ええ、お祈りも隨分なすつたわ。

猛。俺はゐないし、お前もさぞ持てあましたことだらうな。

芳子 でも、お祖父樣の方がもつと御困りのやうでした。

猛。成程ね。そして又、二人で理窟を言ひ合つたのかい？

芳子。ええ。

猛。『信仰も信仰だが』――と、お祖父さんが言つたらう？

芳子。（微笑しながら）本當に然う仰しやつたわ。

猛。するとお祖母さんが、『貴郎はいつでも、神樣よりもお醫者の力を信じていらつしやる』と張り上げたらう？

芳子。全く、その通りよ。（短き間）だけど、今度は、私にもだいぶ飛沫がかかつたわ。だつて、私が貴郎を信じ過ぎてるからいけないやうなこと、仰しやるんですもの。

猛。お前が俺を信じ過ぎる？

芳子。滿更然うも仰しやらないんだけれど、『どんなにしつかりした人間でも、神樣を信用するほど信用することは出來ない』――と、斯う仰しやるの。

猛。うむ。それは本當だ。

芳子。それからね、『だのに芳さんは、何でもかでも猛をばかり信用して、それで滿足してしまつてゐる。そして、神樣を信用する心にならないからいけない』――と、斯う仰しやるの。

猛。ふむ。

芳子。それからまだ、斯うも仰しやつたわ――今度のみどりの病氣なんかも、矢張私が信仰の心を起さないからだつて、つまり、私に對する一つの試みといふものだつて。

猛。ふむ。

芳子。そしてね、私にはもつと大きな試みが來るかも知れないんですつて！

猛。（舌打ちして）詰らない事を！ 仕樣がないな。

（猛、一寸みどりの方をのぞいて見たあと、窓際へ行つて外を見る。芳子も同時に、みどりの上に掛けたる物を引上げなぞしてから、猛のあとを追ふやうにして窓際へ近づく。）

芳子。（ぴたりと足を止めて）貴郎！

猛。何だ？

芳子。不思議な事があるものですね。

猛。（振り向いて）不思議な事？

芳子。ええ。

猛。どんな不思議な事――（急に思ひ出したる如く）ああ、然うか！

芳子。（もとの處へ引き返しながら）もうお會ひになつたの？

猛。（妙に狼狽したやうな調子で、曖昧に）ああ。

芳子。お會ひなすつて？――美智子さんとか仰しやる方に。

猛。うむ、會つた。

芳子。以前、貴郎がたと御一緒にいらした方で

すつてね。
猛。うむ。
芳子。それからずつと御會ひにならないんですつてね。
猛。然うだ。あの人に復讐はうとは思はなかつたよ。
芳子。貴郎には御話しになつて？――あの方が姿を御隠しになつた理由といふのを。
猛。（愕然として）えッ！
芳子。貴郎、御聞きになつて？
猛。お前も聞いたのか？
芳子　私？
猛。お前も聞いたのかい？　あの話を！
芳子。いいえ。
猛。聞かない？
芳子。ええ、なんにも。（短き間）私なんぞ――
猛。なあに、格別の事でもないんだがね。
芳子。私なんぞ、伺はなくつたつてよござんすよ。
猛。困るなあ。
芳子。なんにも、御困りになることは無いわ。
猛。俺も今、苦しい地位に立たされてるんだ。
芳子。そして、私が貴郎の地位を苦しくしてゐるんでせうか？
猛。もう、止してくれ。お前は誤解してるんだ。
芳子。あら、誤解ですつて？
猛。うむ、お前は俺を――俺と美智子さんとの關係を全く誤解してゐる！
芳子。まあ！　然うでせうか？　然う見えるでせうか？
猛。（思ひ返したやうに）いや、これは俺の廻氣だつたかも知れないな。悪い事を言つた。
芳子。（涙聲で）いいえ、矢張私が悪いのよ。御免なさい。
猛。お詫びなんぞ、お互によさう。（短き間）俺はあの人に對して何も……ただ從前、兄妹のやうにしてゐたばかりだよ。
芳子。そんな事、ようく解つてますわ。ただね、あの方の事、これまで餘り伺つてゐなかつたものですから。
猛。然うだつたかなあ。
芳子。然うよ。御名前も覺えないでゐた位よ。
猛。だが、俺だけが話をしなかつたわけでもなからうからな。
芳子。あら！　そんな意味ぢや――
猛。誰か他の者から、美智子さんの事を聞いたことがあるかい？
芳子。お祖母様からは、たしかに聞いたと思ふわ。お祖父様からは何んだけれど。
猛。（絶叫する如く）お祖父樣からは！
芳子。（驚き恐れて）あら！　御免なさい。（短き間）また私、馬鹿な事言つたでせうか？　御免なさい――もうなんにも申しませんから。
猛。いや、お前が悪いんぢやない。
芳子。いいえ、みんな私が悪いからなんですわ。つまらない事ばつかし言ふからですわ。
猛。全く困るなあ。（短き間）いや、お前も看病づかれをしてゐるところへ、餘計な神經を興奮さして、濟まなかつたね。
芳子。貴郎こそ、御疲れになつてるところを――
（先刻より、みどりがベッドから頻に母を呼んでゐる。猛、まづそれに氣付く。）
猛。おい！　みどりが呼んでるよ。
芳子。え？
猛。さつきからみどりが呼んでるんだ。（斯く言ひながらベッドへ近寄る。）
芳子。あら、然う！　（みどりの枕元へ駈け寄つて）御免なさい！　みどりさん！
みどり。（口惜しげに）母さんはいや！
芳子。御免なさい！　母さんはね、ちつとも知らなかつたの――貴女の御目覺めを！

みどり。いや、いや。母さんはいやよ！
猛。ひどく御機嫌を損じたねえ。
芳子。いゝ、みどりさん、お父樣が御歸りですよ――貴女の好きなお父樣が！
みどり。お父樣も嫌ひよ！
芳子。まあ！
みどり。父さんも母さんもいゝ、みんな嫌ひ！　二人で御話ばつかししてるんだもの！（幕）

第二幕

（翌年、四月中旬ある日の暮近く。朝川猛の書齋。正面中央に大窓、それをはさんで、左に外廊へ出る戸口があり、右に本戸棚がある。舞臺右側にも左側にも一つ宛出入口が附いてゐる。猛、テエブルに向つて、煙草を吹かしながら、右隣の室で美智子の彈くオルガンに耳をかしてゐる。）

みどりの聲。（隣室にて）今のは讃美歌でしよ？　ねえ、小母さん、小母さんが今彈いたのは讃美歌でしよ。あたし知つてるわ。
美智子の聲。（同じく隣室にて）然う？　いゝ、みどりさん、今のを御存じ？
みどりの聲。知つてるわ。
美智子の聲。ぢや、御一緒に歌ひませうか？――みんなで。
みどりの聲。小母さんも、母さんも？
美智子の聲。ええ。御母樣も御歌ひになりますのねえ？
芳子の聲。（同じく隣室にて）ええ、歌ひますとも。御一緒になら、何んでも歌ひますよ。
みどりの聲。だけどあたし、いゝ、矢張唱歌の方が好き！――小母さんに教はつたあのいゝ――
美智子の聲。何でしたつけね？『春高樓の』ですかしら？
みどりの聲。いいえ、『天然の美』よ。
美智子の聲。『天然の……美』？
みどりの聲。（半ば歌ふやうな調子にて）『ソオラニイサヘヱヅルゥ』――あれよ。
美智子の聲。ああ、いゝ、あれですか。
芳子の聲。みどりさん、餘程御氣に召したのね。
みどりの聲。母さんも歌つてくれる？
芳子の聲。歌ひますよ――小母さんに彈いて頂いて、いゝ、みんなで御一緒にね。
（次ぎの歌を三人で歌ふ。）

そらに囀る鳥の聲
みねより落つる瀧の音
大波小波鞺鞳と
響絶えせぬ海の音
聞けや人々面白き
この天然の音樂を
しらべ自在に彈きたまふ
神の御手の尊しや

春は櫻の綾衣
秋は紅葉の唐錦
夏はすずしき月のきぬ
冬は眞白き雪の布
見よや人々美しき
この天然の織物を
手際みごとに織りたまふ
神のたくみの尊しや

美智子の聲。こんな歌でも斯うして、いゝ、みどりさんや御母樣と御一緒に歌つてると、何だか大變に好い歌のやうに思はれますのね。
芳子の聲。全くね。
美智子の聲。私は斯うして御側に置いて頂くやうになつてから、これまでの悲しい事なん

か、だんだんと忘れて行けるやうに思ふんですよ。

(此時舞臺にては、猛、椅子を離れて窓の方へ歩いて行く。)

芳子の聲。私も此頃では…… 斯うして御一緒に何かしてゐるときが、本當に一番樂しい時ですの。

(少時沈默。猛、煙草の吸殼を棄て、腕組みをして窓かまちに凭りかかる。)

(前の言葉を追ふやうに)何故ですか私、美智子さんがいらつしやらないと、妙に淋しくなるんですから。

みどりの聲。小母さんも母さんも、そんな話はいや。もつと唱歌を歌ひませうよ。

美智子の聲。ええ、歌ひませうね。

みどりの聲。御父樣も呼んで來るわ。

芳子の聲。みどりさん、いけません。御父樣は御仕事ですから。

みどり。(扉から半身を現はして、父の書齋をのぞき)あら…… 御父樣はなんにもしていらつしやらないわ!

猛。ああ、御父樣もみんなの御仲間入りをしようと思つてゐたところだ。

みどり。(背後へ振り向き)御父樣も御仲間入りをするんですつて!

猛。みんなで此方へ來るがいい。花の散つてるところが見える。さあ、美智子さんもいらつしやい。

みどり。(父の大きな椅子に乘つかりながら)さあ、美智子さんもいらつしやい。

芳子。(美智子と共に書齋へはひりながら笑つて)また、『美智子さん』だつて! 貴女は何でも御父樣の通りを仰しやるのね。

美智子。よござんすねえ――『美智子さん』でも、『美智子さんの小母さん』でも。(窓の外をのぞき)あら、あんなに花が!

芳子。綺麗ですことね!

美智子。櫻は全く、咲いてるところよりも、散つてるところの方が綺麗ですのねえ。

(少時の間、一同沈默。みどりはテエブルの上に鉛筆で何かいたづら書きをしてゐる。)

猛。(思ひ出したやうに)美智子さんは先刻、『しづかにゆふひの』か何か彈いてゐましたね?

美智子。ええ。よく御解りになりましたのね。

猛。教會や牧師は嫌ひになつても、讚美歌だけは嫌ひにならないんですか?

美智子。氣が附いて見ると、何時の間にか彈いたり歌つたりしてるんですの。

猛。矢張然うかなあ。

美智子。貴方も?

猛。僕も始終似たやうな經驗をしてゐる。もうとつくに無くなつた筈の物が、なかなか無くならないでゐる。

美智子。惡い事でせうか?

猛。強ち惡い事でもなからうね。

美智子。然うでせうか。

猛。少し異ふが――(芳子を指さして)此人に殘つてゐる、思ひ切つて舊日本的なところなんかも、僕は強ち惡いものだとは思ひたくないね。むしろ斯うした性格の――

芳子。あら、貴郎! そんな事を、人樣の前で!

猛。(笑ひながら)成程ね。だが、構はないぢやないか――他の人ぢやないし。

芳子。でも……

美智子。(笑ひながら)よござんすよ、奥樣。私は何ひたいんですから。

猛。いや、成程いけないな。別の話にしよう!

みどり。(今迄いたづら書きをしてゐた鉛筆を投げ出して)まだお話なの? つまらないわ

ねえ！
美智子。さうそ、もつと唱歌をうたふ筈でしたのね。今度は何を歌ひましよ？
みどり。（考へながら）さうね。（短き間）あたし、唱歌よりも活動に行きたいな。
芳子。あら！　また活動？
みどり。小母さん、連れてつてくれる？
美智子。ええ、參りませうね。
みどり。母さんは？
芳子。母さんは、今晩は駄目なの。行かれないの。御父樣と二人でお留守番するわ。
みどり。（美智子の手を引張りながら）ぢや、小母さん。早く。さ！
美智子。はい、はい。では――
（美智子、猛夫婦に一寸お辭儀して、みどりに引張られながら右側の扉から出て行く。）
芳子。みどりさん一寸。貴女、下に毛のシャツを着てゐましたかしら？　夜分は寒くなりますから。
美智子。（扉の外にて）ええ、お召しになつてらつしやいます。（短き間）あら、そんなに駈け出しちや危いわ！
（芳子は、扉の方へ向いた儘立つてゐる。）
猛も同じく沈默。）
猛。（新しく煙草に火を點じて）おい、どうしたんだい？
（芳子、ふり返つて、無言の儘猛の方へ近づく。）
また何か考へ出したのかい？
芳子。いいえ。
猛。それなら可いけども……
芳子。（スリッパをぬぎ、室の一隅に置いてある寢椅子の上に坐り）美智子さんは善い方ね。
猛。美智子さんかい？
芳子。本當に善い方ね。みどりも仕合せですわ。
猛。うむ。なかなか好くお相手をしてくれるやうだね。
芳子。そして此頃ぢや、あの子も私より美智子さんを好きのやうですわ。
猛。（微笑しながら）まさか！
芳子。（眞面目に）いいえ、本當に。（短き間）矢張心から可愛がつて下さるからでせうね。
猛。お前だつて心から可愛がつてるだらう？
芳子。だけど、私なんぞ――
猛。だけど、私なんぞ駄目だと云ふのかい？
芳子。ええ。だつて――
猛。だつて？
芳子。あの方は本當に何でも御出來になるのね。
猛。うむ。
芳子。學問も御有りになるし――
猛。うむ。女であれ位出來るのは、たんとはあるまいな。
芳子。文學の事でも、美術の方の事でも……
猛。まあ、『客間の女王』になれる位の、趣味と才氣とはあるやうだな。（笑ひながら）だが、まづい食物を旨しく食べさしたり、出來さうにもないお金を何處からか拵へて來るやうな藝當では、どうしてもお前の方が上だらうな。
芳子。だから情ないわ――そんなつまらない藝當しか出來ないんだから。
猛。それをつまらない藝當だと思つてるんだからなあ！
芳子。だつて、本當につまらないんですもの。（短き間）私なんぞこそ、何の爲めに生れて來たか解らない人間ですのねえ。
猛。自分の生活を然うまで無意味な物と思つてゐるのかなあ。
芳子。全く無意味ですわ。

猛。ふむ。（短き間）氣の毒な事だね。
芳子。え？
猛。氣の毒な事だと云ふのさ。然うまで自分を不仕合せに感じさしてゐるといふのは。
芳子。不仕合せに感じると仰しやるの？
猛。うむ。
芳子。私は自分を？
猛。さうだ。
芳子。あら、そんな事！　私はちつとも、自分を不仕合せだなぞと思つてゐませんわ。いいえ、私は幸福ですわ。斯うして御側に置いて頂いてゐるのは、此上もない幸福ですもの！（自分で自分の言葉に感激して涙聲になりながら）こんな、つまらない女を、斯うして頂いてゐるのは、分に過ぎた幸福だと思つてゐるんですもの！
猛。（芳子の方へ二足三足歩み寄り）まあ、そんなに興奮しないがいい。（短き間）兎に角、お前もお前自身の生活を幸福に感じてゐるんだから、それで可いぢやないか。
芳子。ええ。だけど――
猛。だけどどうなんだ？
芳子。私自身はそれで可いとして、私のやうな馬鹿が斯うしてゐちや、あの子も馬鹿になつてしまひます。
猛。困るなあ。
芳子。それよりも、差當つては貴郎を不仕合せにします。してゐます。
猛。俺を？――俺を不仕合せにする？
芳子。ええ。
猛。どうして？
芳子。だつて私には、貴郎のいつも仰しやる、『本當の仕事』といふものが解りませんもの。
猛。ふむ、『本當の仕事』か！
芳子。そして私に解るのは、ただ貴郎の、毎日の御仕事だけなんですもの。
猛。ふむ。
芳子。そして私が斯うしてゐちや、貴郎はいつまでも、毎日のお仕事ばつかししていらつしやりさうですもの。
（二人とも少時の間無言。）
猛。（一時の考を振り落すやうに）馬鹿な！　俺もお前のヒステリイに仲間入りをしてゐた。少し氣を變へようよ。
（芳子、依然として沈默。）
ねえ。何か他の、もう少し面白い話でもしようよ。ね。
芳子。面白い話なんか、なんにもありませんわ。
猛。（太息をついて）美智子さんの姿が見えなくなると、何時でもこれだからな。一體、何故だと思ふ？
芳子。自分にも解りませんわ。
猛。そして、あの人が近くへ來ると、直ぐに普通の、健全な狀態に歸つてしまふぢやないか？
芳子。ええ。自分でも何故だか解りませんわ。
猛。だが、お前も近頃の事だねえ――然う云ふ愚にもつかぬ事を考へるやうになつたのは。
芳子。然うでせうか。
猛。元來が物を苦にし過ぎる、極く氣の小さい方ではあつたが……どうも、美智子さんが來てから――
芳子。美智子さんがいらしてから？
猛。うむ。要するに俺の思慮が足りなかつたのだ。
芳子。貴郎の思慮が？
猛。然うだ。あの人を來さしたのが――
芳子。あら、私ですわ――あの方に來ていただくやうに御願ひしたのは。然う言つて惡ければ、私とみどりの二人でしたわ！
猛。だが、俺があの時――

芳子。いいえ、貴郎はあの時仰しやいました――ただ折々來て頂いたり、此方からも御訪ねしたりする位にしたらと。

猛。それや然う言つたかも知れないが。

芳子。貴郎が然う仰しやるのを、強情に私が御願ひしたのです。

猛。然う云へば、あの時のお前は不思議に強情だつた。

芳子。私は二人の女中を一人にして、その一人の仕事を自分に引受けてまでも、是非是非あの方に來て頂きたいと申しました。

猛。それも最初は、退院後のみどりを見て貰ひたいからと云ふことだつたね。

芳子。だけど後には、あの子と私と、二人の家庭教師としても必要な方だと思ひましたもの。

猛。だが、然う云ふ役目は美智子さんも、あまり易々と引受けなかつたね。

芳子。それを無理矢理御願ひして、無理矢理お引留めしたのです――ですから、みんな、みんな私の我儘ですわ。

猛。然う云へば然うだがね。

芳子。ですから、あの方に來て頂いてゐるのを、貴郎御自身の思付きかなんぞのやうなことは、どうか仰しやらないで下さいな。

猛。いや、それはまあどつちにしても可い。兎に角、あの人が宅へ來てからのお前は、それまでのお前とちがつた人間になつた。元來が苦勞性なお前は、あまりに諦めがよ過ぎるやうになつた。元來が謙遜な性質のお前は、あまりに自分をつまらなく思ひ過ぎるやうになつた。（短き間）そしてお前は、近頃のお前は、用もない事に我慢をする、無益の克己をやつてゐる。他の點では何一つ俺に逆つたことのないお前が、お前自身を苦めるやうな事になると、不思議なほど強情になつて來る。

（猛、口をつぐんで芳子を見る。芳子は、俯いて、默つてゐる。）

お前が斯うなつたのは、矢張あの人の爲めかしら？ 美智子さんが一緒にゐるからかしら？ （短き間）ねえ、どう思ふ？

芳子。（判然と）そんな事――美智子さんが一緒にいらつしやるからだなぞとは思ひませんわ！ 決して思ひませんわ！

猛。決して思はない？

芳子。ええ。だつて、あの方が側にゐて下さる時には、私もしつかりしてゐるんですもの。貴郎に御心配かけるやうなことを言ひ出したりなんかしませんもの。

猛。それや然うだが――

芳子。そして、どんなに心細い事考へてゐる時でも、あの方の御聲が玄關口にでも聞えて來ると、直ぐにしやんとするんですもの。

猛。だが、然うして、しやんとしたお前が、その後でつまらない事を考へる時には、前のきりよりも一層つまらない事を考へるんだからな。

芳子。（太息を吐き）それは然うね。

猛。ぢや、結局お前のヒステリイは――たしかにヒステリイなんだ――お前のヒステリイは、だんだん甚くなつて行くばつかしぢやないか！

（二人とも少時の沈默。）

芳子。本當に、どうすればいいんでせうねえ。

猛。どうすると云つて――

芳子。でも貴郎、美智子さんと――あの方と御一緒にゐられなくなるのはいやですよ。

猛。どうしてもいやだと云ふのかい？

芳子。ええ。（短き間）斯うして美智子さんにゐて頂いてるのを、貴郎の落度でもあるやうなこと、――そんなことを誰かが言つたので

せうか?

猛。(曖昧に)そんな事はまあ。

芳子。萬一然うだつたら、本當に惡いわ! 貴郞の御顏にかかはるやうなことをして!

猛。つまらない世間の人の、思つたり言つたりすることなんぞ、どうでも可いぢやないか。

(短き間)ただね、お前の爲めに‥‥

芳子。私の爲めに?

猛。然うだ、お前の爲めを思つてね‥‥

芳子。私の爲めを思つて下さるのなら、どうぞね、いつまでも、いつまでもあの方にゐて貰つて下さいな。私は全く、あの方にゐて頂かなくちや駄目なんですから。(涙聲になりて)駄目なんですから‥‥

(猛、椅子にもたれ、組合はした兩手の上に顎をのせ、ぢつと考へ込んでゐる。二人とも、かなり久しき間沈默。)

(起ちてスリッパを穿き、大窓の方へ歩き出しながら)またつまらない事を申しましたのね。もう、御仕事に御掛りになるところだつたでせうね?

猛。いや。まだ可い。もう少し話をしようよ。

芳子。(窓の外をのぞき)まあ、善く散ること! 見てゐる中にも、みんなになつてしまひさうですね。あら! あんなに。廊下の上も白くなつて來ましたわ!

(猛、起ち上り、正面の扉をあけて外廊へ出る。芳子も内から窓の玻璃戸を開く。)

猛。うむ。これや斯うして踏みつけるのが惜しいやうだ。舊い趣味だが、今晩はひとつ、あの石燈籠に灯でも入れて見るかな。

芳子。よござんすね。あの石燈籠に灯が點つてゐて、其灯影にちらちらと花吹雪してゐたら‥‥美智子さんも歸つて來て、きつと面白がりますね——きつと。

(猛、芳子の調子づきたるに不安げに見守つてゐたが、芳子もぴたりと口をつぐんでしまふ。しばらくの間二人とも無言。)

ねえ、貴郞!

猛。(やさしく)何だい?

芳子。耶蘇の方でも、基督教の方でも、石碑は建てるんですわねえ?

猛。石碑?

芳子。ええ。石碑だけは建てて貰へるんですわねえ?

猛。また、下らない事を言ひ出しさうだね。(強ひて笑ひながら)石碑の註文なんか、少し早過ぎるぢやないかね。

芳子。でも私は、死んだら矢張佛樣になりたいわ!

猛。死んだら、どうせ佛樣さ。(笑ふ。)

芳子。でも私は、もし出來るなら、基督教でなくお葬式を出して頂きたいんですから。

猛。さうまで耶蘇嫌ひだとも思はなかつたのにね。

芳子。それや、他の事では然うまで嫌ひぢやありませんわ。だつて以前は貴郞も、お祖母樣と同じやうな、熱心な耶蘇だつたと仰しやるし、今でも基督の教其物は、立派なものだと仰しやつてゐるんですもの。

猛。然うだ。俺は今でもクリスティアンだ。むかしよりも一層クリスティアンだと思つてゐる。

芳子。さう仰しやつてゐるのに‥‥我儘のやうですけれど——

猛。どうしても佛葬にしてくれといふのかい?

芳子。だつて、耶蘇の方では、死んでしまつた人間のことなんか、あんまり頓着しないやうに思へるんですもの。

猛。それはさうかも知れないね。

芳子。そして死ぬと直ぐ、忘れられてしまふの

は悲しいわ！

猛。（芳子の涙を流してゐるのを認めて）何だ！　泣いてるのかい？

（猛、再び書齋にはひる。芳子は窓がまちに身を投げて泣いじやくりしてゐる。二人とも少時の間無言。）

芳子。（面を上げて、けれども窓の方へ向いたまま）それからねえ、もう一つ我儘を言はして下さいな。ねえ、貴郎！

猛。何だい？　もう一つの我儘つて云ふのは。

芳子。佛葬にする爲め、宅の墓地へ埋めて頂くことが出來なかつたら、何處でもいいから……晴やかな、塔の見える處へ墓地を拵へて下さいな。

猛。晴やかな、塔の見える處？

芳子。ええ。生きてる中、あんまり陰氣な人間でしたから。

猛。塔の見える處と云ふのはどうしたんだい？

芳子。（猛の方へ振り向きながら）貴郎、人柱の話を御聽きになつたことがあるでせうか？

猛。人柱か？――塔だとか橋だとか云ふ物の土臺の下へ、女が生きながらはひるといふ奴だらう。

芳子。私、小さい時分に誰からかあの話をきいて、本當に恐ろしいと思ひましたの。

猛。うむ。恐ろしい話だね。

芳子。だけど、其恐ろしい話を思ひ出させる塔を、何故ですか私は、好きで好きで仕樣がないのです。

猛。それで、墓地からも塔が見えるやうにと云ふのだな。

芳子。ええ。我儘な御願ひですけれど。

猛。うむ。晴やかな、塔の見える處は俺も好きだ。俺の墓地にも好いよ。（短き間）だが、もう此位でよからうぜ――こんな話は。

芳子。だけど私、本當は死にたくないんですよ。

猛。それは然うだらう。それが本當だもの。

芳子。せめて、もう四五年がところは、どうしても生きてゐたいんですわ。矢張、みどりが可哀さうですから！

猛　今から死なれてたまるものか。

芳子。でもねえ、悲しいんですよ。

猛。何が？

芳子。こんなに死にたくないのに死んで行くのかと思ふと！

猛。復かい？

芳子。だつて、何だか死にさうなんですもの！死にたくないのに死にさうなんですもの！みどりや貴郎の御顏を見てると、どうしたのか、涙が胸元へ込み上げて來るんですもの！

猛。もう止してくれ。馬鹿馬鹿しいと思ひながらも、今日は俺までが悲しくなる。

（少時の間二人とも無言。一人の女中が右側の扉をあけてはひる。）

女中。麻布の奧樣が御見えになりました。

芳子。お祖母樣が？　あゝ然う。

（女中去る。芳子、迎へに出ようとしてゐるところへ民子入り來る。）

民子。御無沙汰しました。御變りもありませんか？

猛。リョウマチは如何です？

民子。（芳子のすすめる椅子にかけながら）大きに快い方なの。みどりは？

芳子。先刻活動へ行きましたの。

民子。然うですか。何方と？

芳子。（恐る恐る告白するやうに）あの、美智子さんと御一緒に。

民子。（芳子と猛との顏を見比べながら）あの人と！　然うですか。

（三人とも暫く無言。芳子、出て行く。）

（芳子の姿の見えなくなつた時、椅子を猛の方へ寄せながら）顏色が好くないねえ。

猛。誰がです？

民子。芳さんがさ。

猛。然うでせうか。

民子。だんだんと惡くなりさうだよ。それに何か面白くないお話でもおしなのかい？

猛。（一寸狼狽しながら）別に、さう――

民子。だつて、目の緣を赤くしておいでぢやないか？――芳さんが。

猛。近頃、折々つまらない事を云ひ出して困るんです。

民子。つまらない事つて、どんな？

猛。なあに、全く他愛のない――矢張ヒステリイでせうよ。

民子。それで――あの人は、美智子さんはどうなんだい？

猛。美智子さんがですか？

民子。ああ。あの人はもう此處の内の人になつてしまつたんだね？

猛。まあ、然うです。

民子。妙な人だねえ――あの人も。

猛。如何してです？

民子。だつて、一體に、する事が腑に落ちないぢやないかね。（短き間）以前ああして、突然に家を出てしまつたのも何だし、今度久し振りに會つたつて、ただ「申譯もありません」とか「面目次第もありません」とかを繰返すばかしで、事情は今以て分らないでせう。

（猛、苦しき沈默を守つてゐる。）

それに、此方に斯うしてゐながら、私達の方へただの一度も足踏みもしないと云ふのは、いくら何だつて――

猛。いや、それも大變濟まない事のやうに、始終思つてゐるやうですよ。

民子。貴方は然うして兎角に辯護をしたがるけれど、あの人はたしかに人間が變つて來てゐます。私達と一緒にゐた時分のやうぢやありません。

猛。それや、然うでせう。十年近くの間には、どんな子供でも、どれだけか大人になりますからね。

民子。ところが、あれは大人になつたのぢやなくて、墮落したのです。

猛。（笑ひながら）又お母さんの『墮落』ですか。

民子。然うです、たしかに墮落です。でなければ、他の事は措いて、芳さんがあんなになつて來るのに平氣で――

猛。平氣で、どうなんです？

民子。ああしてゐられるものぢやありませんよ。

猛。解りました。美智子さんが宅にゐるのはいけないと仰しやるんですね？

民子。いけないどころの話ぢやないね。

猛。然うでせうか？

民子。然うですとも。芳さんの實家の人達は今こちらにゐないし、萬一の事があつたら私達の責任だからね。

（猛、返事をしかけて止める。）

それに世間からもう、何とか云はれてるかも知れないつてね、御父樣は、第一に其點を心配していらつしやるんだよ。

猛。御父樣はいつでも然うです。あの人の心配するのは、世間體といふことばつかしです。

民子。それはね、世間體ばつかしの事なら、御父樣は兎に角、私はそれほど氣にしないけども……萬一事實が……

猛。事實つて何です？

民子。私は何にも知らないんだけども、先刻言つたやうに、芳さんがあんなになつて來てゐるのに、美智子さんが平氣で、ああしてゐるのはあんまりだね。

猛。お母さん、待つて下さい。貴女は美智子さんの立場を誤解していらつしやる！
民子。どうして？
猛。どうしてと云つて、あの人は無理矢理引張つて來られたんです。そして引き留められてゐるんです。
民子。引張つて來られて、そして引き留められてゐるんだつて？
猛。然うです。實際の事實が然うなんです。
民子。まあ！　よくそんな事を御言ひだね――いくらあの人を辯護したいからと云つて！
猛。私はただ事實を言つてゐるだけです。
民子。では貴方は、美智子さんを引き留めてゐるといふ責任を、自分一人に引受ける氣なんだね？
猛。お母さん、貴女はまだ、感違ひしていらつしやる！
民子。どうして？
猛。あの人を引きとめてゐるのは芳子です。私よりも芳子なんです。
民子。えツ！　芳さん？　芳さんが自分で？
猛。然うなんです。
（民子、頭をかしげて考へ込む。二人とも暫く無言。）
民子。（前と調子を變へて）貴方は子供の中から噓を言はない人だから……何だか話が分らなくなつて來ました。（短き間）でも猛、芳さんはあの人にゐて貰ひたいつて、口で然う云ふだけぢやないのかい？
猛。いいえ。然うぢやありません。
民子。ぢや、貴方があの人にゐて貰ひたいだらうと思つて、然う云ふんぢやないかしら？――あの人は、どちらかと云ふとそんな氣質のやうだから。（短き間）どつちにしても、貴方自身はあの人を引き留める氣はないと御言ひなんだねえ？
猛。（狼狽して）兎に角私は、美智子さんと一緒にゐちやいけないだらうと云つてるんですが……
民子。芳さん自身がどうしてもといふんだね？
猛。まあ然うです。
民子。呑み込めない話だねえ。（短き間）一體、どうして斯うだらう？――美智子さんと云ふ人の周圍には、いつでもこんな、腑に落ちないやうな事件ばつかし起るんだが！
猛。（强ひて笑ひながら）惡魔でも憑いてるんですよ！
民子。（身體をふるはしながら）貴方はじやうだんにそんな事を御言ひだけども！
（此時芳子、扉をあけてはひる。民子も猛もそちらへ振りむく。）
芳子。長谷部さんがいらつしやいましたが……
猛。長谷部？　東京新聞の？
芳子。ええ。
猛。こちらへ御通しよ。格別の用事でもないだらうから。
民子。（起ち上りながら）私は、芳さんに話があるから、あちらへ行きます。
猛。然うですか？　それぢや後でまたいらつしやい。
（民子、芳子と共に出て行く。しばらくして長谷部三郎の靴音が外廊の上に響く。）
長谷部。（室からのぞき）先生、お邪魔してもいいですか？
猛。（煙草をくはへた儘）ああ、はひり給へ。
長谷部。（室内へはひり、背に扉をしめて）お不在でなければいいがと氣遣ひながら來ました。（默つて頭を下げてのち）まづ、安神しましたよ。
猛。（近くの椅子を指さしすすめながら）ひどく又心配したものだねえ――僕なんかゐてもゐなくつても、大したことはないぢやない

か？

長谷部。（一寸考へて）先生、からかつちやいけませんよ。

猛。からかふ？

長谷部。美智子さんの事でせう？

猛。美智子さんの事？　君が美智子さんをどうしたんだい？

長谷部。どうか、も少し御手柔らかに願ひたいものですね。（頭をかきながら）然う云ふわけぢやないんですから。

猛。然う云ふわけぢやない？

長谷部。だつて、私も昔から知つてる人なんですから。

猛。だから如何だと云ふんだ？

長谷部。困るなあ！　別に私が、あの人の後を追駈けてゐると云ふやうなわけぢやないのですよ。

猛。（初めて氣が附いたやうに、そして沈鬱な調子で）然うか！

（猛、吸殼を灰皿に押しつけながら、默つて長谷部の顏を見てゐる。）

長谷部。（同じく初めて氣が附いたやうに）先生は別に、そんな意味で仰しやつたのぢやないですか？（舌打ちして）つまらない事を喋つたなあ！

猛。（苦笑しながら）兎に角、美智子さんは生憎とゐないね。

長谷部。全く然う云ふわけぢやないんです。近頃ちよくちよく伺ふのも、決してそんな．．．

猛。（面倒さうに）まあ、どうでもいいぢやないか。

長谷部。それに、今日は本當に用事があるんです――大切な用事が！

猛。大切な用事が？　僕にかい？

長谷部。然うです。

猛。何だか本當らしいな。新聞社の方に關係のある用事かい？

長谷部。まあ、然うです。

猛。談話の筆記を取られるのなら御免だぜ。近頃あれ位嫌ひな事はないからな。

長谷部。（頤を撫でながら）今日は、手前の方から御願ひするやうな用事ぢやないんです。

猛。（笑ひながら）へえ！　ぢや、僕から御願ひするやうな用事があるんだね？　兎に角、承つて見ようよ。

長谷部。（ポケットから一枚の紙片を取り出して、猛の前に置き）これを一つ讀んで見て下さい！

猛。何だい？　新聞の校正刷ぢやないか。

長谷部。さうです。それを一つ讀んで見て下さい！

猛。（校正刷を取り上げ、一瞥すると共に絶叫する如く）何だ！「禽獸の如き大學教授」

長谷部。（椅子から起つて、校正刷をのぞき込むやうにしながら）其下に割註がはひつて、「朝川猛氏の家庭の亂脈」とあつた筈です。

猛。うむ。

（猛、默つて讀む。長谷部も少時の間沈默。）

長谷部。（校正刷の上を鉛筆のさきで突き）これは、「看護婦上りの怪しげなる女を」の誤植です。

猛。ふむ。

長谷部。それから其次ぎのは、「妻妾室を同じうし」でしたらう。

猛。これは「發狂」か？

長谷部。さうです、「發狂したる夫人は」です。

（猛、また默つて讀みつづける。長谷部も椅子にかけて、煙草に火を點ずる。）

猛。（讀み終りたる校正刷を靜かにテエブルの上に置き）一體これは何だ？

長谷部。投書として來たのです。其投書を材料

にして書かれた記事なんです。

猛。そしてそれが君の處の新聞に出ると云ふのか？

長谷部。然うです。私の出社がもう一足おくれたら、どうにもならなかつたと思ひます。いや、全く際どいところでした。

猛。ふむ。（腕組みして考へ込む。）

長谷部。斯う云ふ杜撰なことを書くなんて、全く亂暴な話なんですけれども、何しろどうも、近頃のやうに材料がなくなつて來るとついその：：：

（猛、依然として沈默、再び校正刷を取り上げて見てゐる。）

でも先生、差當つて、明日のに組み込むことだけは禁めて置きましたから。

（猛、一寸面を上げて長谷部を見ただけで、またもや校正刷に目を注ぐ。）

それに何ですよ。先生がどんなにしてでも此記事の掲載を食ひ止めて貰ひたいと云ふ御希望ならば、私も出來るだけの力を盡して見ませうよ。（短き間）そして何とか成らないこともなからうと思ひます。（猛の落ちつき方を歯がゆがるやうに）だが、先生は：：別に食ひとめてほしいと云ふ御考もないですか？

猛。（校正刷を卓へ置き）うむ、そんな事はどうでも可い！：：：どうでも可い問題だ！

長谷部。えッ！　どうでも可い問題だと仰しやるんですか？

猛。然うだ。

長谷部。へえ！

猛。新聞は譃を書くときまつたものだ！（短き間）新聞に出て居れば、本當の事でも譃のやうな氣がする！

長谷部。しかし、結果を：：：譃でも本當でも、新聞に書かれた結果を考へたら！

猛。新聞に書かれた結果か？　僕もこれまで他の方面の事では、かなりに譃を書いて貰つた經驗がある！

長谷部。そして？

猛。大抵の人にみな似たり寄つたりの經驗がある筈だ。

長谷部。だから、本當にされる氣遣ひはないと仰しやるんですね？

猛。さうだ。新聞記事は、どこまでも單だ新聞記事として受取られるばかしだ。

長谷部。だからどうでも可い問題だと仰しやるんですね。

猛。さうだ。そんな事はまあどうでも可いが、僕にはもつと重大な問題がある！

長谷部。もつと重大な問題が？

猛。うむ。其方で僕は、君の好意を受けたいと思ふ。

長谷部。何です？――それは。先生が僕の好意を受けたいと仰しやるのは、一體どう云ふ事なんです？

猛。僕はね、新聞の譃は其儘にして置いても可いが、君からは本當の事が聞きたいんだ。

長谷部。（一寸氣味惡く感じながら）えッ！　僕から本當の事を？

猛。うむ。君は（校正刷を指さし）これを投書だと云つたねえ？

長谷部。はあ、投書です。投書が土臺になつてるんです。

猛。先づ第一に、それが譃だと言つて貰ひたいね。

長谷部。だつて、投書なんですから――實際。

猛。ただの投書とはどうしても考へられないんだ。（短き間）勿論僕は、僕の爲めに苦しい告白をしてくれる君に、何等の報酬もせずにしまふ氣はないよ。

長谷部。いくら報酬を頂いたところで：：：とに

かく困りますねえ。

猛。長谷部君、僕は君の性格の殆んど全部を知つてゐる。だから、君にして本當の事を話してくれるなら、この記事の掲載中止に盡力して貰ふより以上に、謝意を表したいと思つてゐる。

長谷部。困つたなあ？

猛。別に困ることはない。君はただ、僕に對して好意をもつてくれさへすればいい。

長谷部。（舌打ちして獨白のやうに）ええ、言つちまへ！ 全く、投書ぢやありません。

猛。然うだらう。（短き間）ぢや、どうしたんだ？

長谷部。實はある人から頼まれたのです。

猛。頼まれた？ あんな記事をかいてくれと？

長谷部。さうです。

猛。ふむ。そして或る人といふのは誰だ？

長谷部。（頭をかきながら）そいつはどうも……

猛。言ひにくいと云ふのかい？

長谷部。何しろ、絶對に祕密にするといふ約束でしたからな。

猛。成程。だが、君にとつてそれほど言ひにくい事柄は、此場合僕にとつても聞かずにゐられない事柄なんだらう。（短き間）僕は今一度、君の好意に依頼する！

長谷部。（卓に兩手をかけて暫く考へ込んでゐた後）いや、他ならぬ先生の事です。そして然うまで仰しやつて下さることですから、思ひ切つて言つてしまひます。

猛。うむ、言つてくれたまへ。頼む。

長谷部。實はねえ、先生、この記事を書いて呉れと頼まれたとき、いくら私でも、金錢上の報酬といふやうなことばかし目的には、引受けられるものぢやありません。それだけは理解して下さるでせうね？

猛。うむ、理解する。

長谷部。實はおかしい話ですが、私はあの記事の結果として、先生と……美智子さんとの間が遠くなることを希望したのです。

猛。ふうむ。

長谷部。引受ける際には然う云ふ心持も働いて、兎に角引受けたのですが、さて引受けたあとでは——

猛。引受けたあとでは、どうした？

長谷部。第一、斯うして始終御厄介になつてゐる先生に對して、あんまり申譯のない事だと思ひ返しました。

猛。それから？

長谷部。それから第二に、先生から遠くなる美智子さんは、畢竟この私からも遠くなるのだと云ふことに氣がついたのです。

猛。成程ね。

長谷部。それからこれは、一層お恥かしい話ですが、引受けた仕事をふいにしてしまふ場合、この校正刷をこちらへ持ち込んで、先生に御買上げを願つたら格別損は行くまいと考へたのです。

猛。へえ！

長谷部。つまり先生の方が、お金に綺麗でいらつしやるからです。

猛。僕が！ （短き間）ぢや君、誰だ？ 僕ほどお金に綺麗でない奴といふのは、一體誰なんだい？

長谷部。いや、やつぱしどうも、申し上げにくいんですけども……

猛。思ひ切りが惡いな——君も。

長谷部。（坐つた儘椅子をあとへ引いて）實は……麻布の先生です！ 先生の御父樣から頼まれました！

猛。（愕然として起ち上り）何だ！ （短き間）親爺？ 僕の親爺から？

長谷部。然うです。理由は、先生や美智子さん

に反省を促したいからと云ふことでした。

猛。（長谷部の言葉を耳にも入れず）あの、僕の親爺が！　あれ程、世間體を氣にする親爺が、僕達の世間體を自分から壞しにかかる！　殆んど有り得べからざる事だ！

長谷部。（愕然として起ち）先生は、嘘だと仰しやるんですか？　私がいい加減な事を言ふと仰しやるんですか？

猛。（長谷部に何の頓着もせず）兎に角、親爺に會つて來る！

（猛、血相を變へて外廊へ飛び出してしまふ。長谷部はその後に倒れた椅子を起して、それにつかまりながら暫く考へてゐたが、やつと分別が着いたかの如く、猛のあとを追うて出る。間もなく右側の扉をあけて、民子と芳子とが入つて來る。）

民子。どうしたんだらう？　あんな大きな聲を張り上げて！

芳子。（窓からのぞいて見て）あら！　御一緒に御出掛けになつたのかしら？——あの儘で。

民子。猛も出たのかねえ——私はまだ話があつたのに。

芳子。（バタバタと卓へ駈け寄り、其上に置き忘れてあつた校正刷を取り上げ）何でせう？——これは。

（芳子、稍や暗くなりかかつた窓からの光にすかし、讀んでゐる中に手先きが、やがて體全體がわなわなと震へて來る。）

民子。（芳子の樣子を不審に思ひ、近づいて見て）新聞の號外？

芳子。（片手に額を押へ、片手に持つてゐた校正刷を前へ差出しながら）御母さん！　駄目です！

（民子、受取りて讀まうとする。氣が附いて、電燈をひねつて明るくする。此時芳子はふらふらと寢椅子へ近づき、倒れるやうに身を投げる。）

民子。『禽獸の如き大學教授！』（更に老眼鏡に手をやつて）『朝川猛——氏の家庭の……』

（民子、其あとを默讀。）

（讀み了りて）まあ！　どうしたと云ふんだらうねえ。（太息をつき）たうとこんな事を、新聞に出されてしまつて！

芳子。（泣いじやくりしながら）たうと、こんな取返しのつかない事をしてしまつて！

民子。全く取返しがつかないねえ！

芳子。（半ば身を起し）御母樣、何とも申譯がございません。みんな私が惡いのです。

民子。えッ！　芳さんが惡い？

芳子。ええ、私が行き屆かないからです。私の考が足りなかつたからです。（短き間）御母樣、どうかみどりの事……それから猛さんの事も御願ひします！

民子。芳さん、貴女は何と御言ひなの？

芳子。（判然と）私はもう生きてはゐられませんから！

民子。まあどうしてそんな事？（短き間）何も芳さんが惡いから、斯うなつたと云ふわけぢやないでせう。

芳子。いいえ、私がつまらない我儘を通したからです。でなくとも、こんな事が新聞なんかに出て見れば、ただそれだけでも私は……

民子。ただそれだけでも、芳さんはどうなるの？

芳子。それは、私が書いたと同然ですもの！

民子。芳さんが書いたと同然だつて？　貴女はどうして又、そんな事を御言ひなの！

芳子。だつて御母樣、世間の人達はきつと、私が書かしたと思ひます、私が投書でもしたと思ひます！

民子。まさか、何が何でも。私達一家の者の、さうです、芳さん自身の不名譽にもなる事柄

だものね。

芳子。いいえ、きつと然う思ひます。猛さんだつて、然う思ひます。

民子。猛だつて、芳さんのした事と思ふ？

芳子。ええ。然う思ふと私もう――

民子。困つたねえ。

芳子。それに私、猛さんよりも誰よりも、あの方に、美智子さんに然う思はれるのが……然うです、私はもう生きちやゐられませんわ！

民子。本當に困つたねえ。（暫く椅子の上に思案した後）然うだ、新聞社の方へきいて見ましよ。

（民子、起ちて舞臺左側の扉をあけ、電話室へはひる。交換手の間違、お話中等にて電話容易に通ずるに至らず。其間に舞臺には、芳子、ふらふらと又寢椅子から起ち上り、頸垂れて、とぼとぼと舞臺の中程近くまで踏み出し、ぴたりと足を留める。それから頭を擧げて周圍を見廻してゐる中、不意に何事かを思ひ浮べたるらしく、風の如く右の扉から出て行つてしまふ。）

（やつと電話が通じて）もしもし――編輯のねえ――長谷部さんはゐませんか？ ええ、長谷部さん。（短き間）ああ、然うですか。それぢやねえ――何方でもよござんすからねえ――『禽獸の如き、大學教授』といふ記事のことについてね――一寸御尋ねしたいんですが。

（此時、猛の父正輝、第一幕の時と同じく牧師らしき服裝にて、外廊からはひつて來る。背に扉をしめたとき、民子の電話をかけてゐる聲が耳に入り、其儘立ちすくんでしまふ。）

あ、然うですか。あの記事のこと御解りになる方――何方もいらつしやらない？ 然うですか。御邪魔でした。さよなら。（扉をあけて舞臺へ出で）ほんとに仕樣ないねえ――誰もゐないんだつて！（正輝の突立つてゐるのを見て）おや！ 貴郎ですか？

（正輝、無言の儘二歩三歩踏み出して、また立ち止まる。）

貴郎！ 大變ですよ！（正輝が依然として沈默せる故に苛立ちながら）まあ、これを見て御覽なさい。

（正輝、器械的に例の校正刷を受取り、それを讀むやうな眞似をする。）

そこぢや灯が駄目でせう。

（正輝を卓の側へ引張つて來て椅子にかけさせる。）

正輝。（讀み了つたやうな樣子をして）うむ。

民子。一體どうしたと云ふんでせう？

正輝。うむ。なには、長谷部は先刻此處へ來たらうな？

民子。ええ。長谷部さんのやうですよ――それを持つて來たのは！

正輝。お前は會はなかつたのかい？

民子。私は會ひませんが、猛は會ひました。

正輝。さうか。猛は會つたか？

民子。そして大きな聲を張上げて、二人で一緒に飛び出して行きました。

正輝。さうか。（獨白のやうに）もう追掛けて見ても駄目かな。

民子。とにかく困つた事になりましたねえ。芳子は先刻からもう、死んでしまふなんぞと言ひ出すし――

正輝。（椅子から半ば跳び立ちさうに）なに？ 芳子が死ぬ？

民子。ええ。生きちやゐられないと云ふんです。自分が投書したも同然だからつて！

正輝。ふうむ。芳子がそんな事を言つたのか？

民子。ええ。

（二人とも暫く無言。正輝はぢつと考へ込んでゐる。）

何か私達に恨みでも有つてる人が、意趣返しにしたとでも云ふのでせうか？（正輝が尙ほ無言の儘にゐるのを見て、急に聲を落して）いゝ、もつとも世の中には案外な事があるものですからね。

正輝。（目を閉ぢた儘の顔を上げて）然うだ。案外な事があるものだ！

民子。念の爲め、芳子を此處へ呼んで來て見ませうか？

正輝。いや、それにも及ぶまい。

民子。でも……

（民子、右側の扉から出て行く。あとで正輝は……の校正刷の紙をベリベリと破つてゐたが、破り終つたとき、起ち上つて民子の後を追はうとする。扉の處まで行つて引き返し、正面の扉の方へ駈け出さうとしたが、外廊に靴音をきいて思ひ止まる。）

猛。（足音荒く飛び込んで來て、正輝とすれすれになるほど近づき）いゝ、よく逃げ出さないでゐましたね？

（正輝、默つて後退りし、椅子にかける。）

貴方は自分のした事を、自分がしたと告白してくれますか？ 立派に？

正輝。何を――何を告白するんだい？

猛。（苦しげに）貴方も、色々な事をしていらつしやる。（短き間）だが、此場合舊い事は問はない。私も問ひたくない。

（正輝、ぢつと猛の顔を見つめてゐる。）

切めて、此場合の問題について、立派に告白して下さい。耶蘇教仲間ではあまり使はない言葉だが、せめて男らしく自分がしたと告白して下さい。

正輝。お前の言ふことは、よく解らん。

猛。（體を震はせながら）よく解らん！（短き間）いや、宜しい。此上を強ひますまい。貴方の顔色が――その、わなないてゐる脚が、何よりも正直に告白してくれました。（正輝の横の椅子にかけ、稍やセンティメンタルな調子で）だが、私は殘念です――貴方の口から告白して貰へないのは殘念です！ 自分の父を、斯うまで淺間しい人間として目の前に見るのは！

（二人とも暫く無言。隣室の方からばたばたと人の駈け寄る音。二人とも目を上げて見る。）

民子。（扉をあけたままにして置いて入り）芳子は何處へ行つたか見えないんですよ。おや、猛も御歸りかい？ 大變な事になつてしまつたねえ！

（猛も、正輝も默つてゐる。）

（正輝の方へ）ねえ、矢張あれがしたんですかねえ？ そして良心に責められて――

猛。御母さん、良心つて誰の事です？ 誰の良心の事です？

民子。いいえねえ、世の中は案外なものですからね。

猛。何が案外なものです？

民子。芳子はね、先刻自分から、生きちやゐられないつて言つたんですよ。

猛。芳子が？ 芳子がそんな事を――なぜです？

民子。自分がしたのも同然だつて！

猛。自分がしたのも同然だつて？ あの芳子が言つたのですか？

民子。矢張良心に責められたんだねえ。

猛。そして家にゐないんですか？

民子。みんなにも捜さして見たが、何處へ行つたか分らないんだよ。

猛。（突如突立つて）可哀想な事をした！（短き間）あいつは、きつと死んでゐる！　芳子はきつと死んでゐる？　（幕）

第三幕

（第二幕の時より半歳ばかりを經過して、十月の末頃。生前芳子の希望したる如き、遠見に五重の塔の見える晴やかな、新しき墓地。よその墓地との間を劃る常盤木の垣根。處々に楓、櫨、葛などの紅葉したのが、午後の日光を受けて燃え立つてゐる。美智子、片手に白き花を持ち、片手にみどりの手を引きながら、左手から出て來る。其あとから墓番が阿伽桶お線香など持つて出て來る。）

美智子。（紅くなつた木の葉を見上げて）佳い色になつたのね！　たつた一週間の内に。

墓番。もう火曜日でございますかねえ——私共はみんな舊弊なもんですから、ついこの何曜といふやうなことは分りませんですが。

みどり。（美智子の手を離れて後へ振り返り）宅の母さんはね、火曜日に亡くなつたんだつて。

墓番。へえ！　御孃樣はよく御存じでいらつしやいますな。

みどり。だから、いつでも火曜日に、斯うして小母さんと御參りするの。

（此時既に美智子は柵門を開いて内へ入り、芳子の墓標の前に立つてゐる。）

美智子。（墓番を顧みて）どうも憚りさま。そこへ置いて頂けばいいんですから。

墓番。それではあとで、また取りに參りませう。（墓番の男、もと出て來た方へ引き込む。）

美智子（花筒に花を立てながら）みどりさん、貴女も。

みどり。（分けて貰つた花を立てながら）これは菊の花？

美智子。ええ、然うよ。

みどり。菊の花も、母さんが好きだつたの？

美智子。いいえ。生憎と今はねえ、母さんの御好きな花といふのがないんですよ。さ、今度は御線香よ。

みどり。（線香も立てながら）今度は御線香。（やがて、水を注ぎかけ）それから御水ね！

（美智子、默つて合掌してゐる。美智子の起ち上つた時、みどり、その前へ出て手を合せる。美智子、あとへしざり、脇へ向き、ハンケチで目を拭ふ。）

（美智子の袂につかまり）小母さん、もう可いのね。濟んだのね。

美智子。（ふり向いて、みどりの髮の毛を撫でながら）お可哀想ね！　貴女も。

みどり。どうして？

美智子。今から、御母樣を失くしてしまつて、本當にお可哀想ね！

みどり。いいわよ、小母さん。母さんが失くなつたつていいわよ！

美智子。まあ！

みどり。だつて、小母さんが母さんになつて呉れるんだから！

美智子。（愕然として）えッ！　（短き間）誰がそんなことを云つたの？

みどり。みんな然う言つてるわ！——小母さんが、あたしの母さんに成つてくれるんだつて！

美智子。然う。然うですか。みんなが！

みどり。母さんも然う言つたわ！

美智子。（再び愕然として）まあ、御母樣が？（短き間）御母樣が何時そんな事？

みどり。何時だか、小母さんのゐない時、そし

て御父樣も御留守の時よ。
美智子。まあ！
みどり。母さんはねえ、さう言つたの――母さんが亡くなつたら、御父樣と、小母樣と、三人で大きくお成んなさいつて。それからね――小母さんの仰しやること、何でも聽かなくちやいけないんだつて。
美智子。まあ！　然うですか！
みどり。それからね、母さんは泣いたの。
（美智子の沈鬱になつて來たのを、子供心にも氣付きて、みどりも口をつぐむ。
やがて長谷部三郎、右手から出て來る。）
あら、新聞の長谷部さんがまた來たわ！
長谷部。（近づきて）みどりさん、今日は。
（斯く言ひながら美智子の方へ目禮する。
美智子も目禮を返す。）
（墓標の前に一寸額づいたあと、美智子の方へ向ひ）感心によくお參りをしてお上げになりますね。
美智子。（煩ささうに）ええ。貴方もね。
長谷部。僕も？
美智子。貴方も近頃は、私達と同じ日に、缺かさず御參りになるぢやありませんか？
長谷部。僕も近頃、序と云つちや濟まないですが、折々用事でこちらへ廻るものですからね。
美智子。（長谷部に取り合はず、みどりの手を引いて行かうとしながら）さ、みどりさん、ぼつぼつ歸りかけませうね。
長谷部。（稍や強く）美智子さん！
美智子。（ふり返りて）何ですか？
長谷部。だいぶ噂が高く成りましたねえ。
美智子。噂が？　何の噂がですか？
長谷部。貴女がた御二人のだつて事は、分つてるぢやありませんか。
美智子。然うですか。
長谷部。とにかく高まりましたねえ。
美智子。貴方が高めて呉れたんですか？
長谷部。飛んでもない事です。僕はそんな人間ぢやありませんよ。
美智子。さうですか。若し何だつたら、御禮を言はうと思つたんですけども。
長谷部。そんな事を仰しやる貴女は、貴女がたは、世間から何と云はれても平氣だと仰しやるんですか？
美智子。ええ。私は世間なんぞを恐れませんから。
長谷部。世間なんぞを恐れない？
美智子。ええ。世間に對しては、意地になれる人間です！
（長谷部、口をつぐむ。今迄二人の顏を見比べてゐたみどりの手を引き、美智子、再び行かうとする。）
長谷部。（最後の勇氣をふるつて）美智子さん、一寸待つて下さい。
美智子。（緩々ふり返つて見もせず）なんですか？
長谷部。貴女は、此佛樣がどうして亡くなられたか、それを御存じですか？
美智子。（急所を突かれたやうに）え？（振り返つて）奧樣がどうしてお亡くなりに成つたかつて？
長谷部。然うです。それを御存じですか？（短き間）御存じがないでせうね？
美智子。何か事情があるんですか？　え？　事情があつたんですか？
長谷部。（門柱に凭りかかりながら）僕は、貴女を不愉快にするつもりで言ふんぢやありません。ただね、聞きたいと仰しやるから申し上げるだけですよ。
みどり。（美智子の顏を見上げて）小母さん、まだお話？

美智子。一寸！　一寸の間待つて頂戴な。

みどり。そいぢや私、あの花（墓地の外に咲いてゐる何かの花を指さし）を取つてるわ。

美智子。ええ。それがいいでしよ。（長谷部に向ひ）それで奥樣のお亡くなりになつたのは？

長谷部。實は、隨分嚴重に封じられてゐる祕密なんですけども……

美智子。（熱心に）そんな事を仰しやらないでいゝどうか！

長谷部。ぢや敎へて上げますが——第一、あれは、怪我の轢死ぢやなくて——自殺でした。

美智子。まあ！　自殺？

長谷部。さうです、自殺でした。

美智子。（半ば獨白のやうに）矢張ね！

長谷部。（美智子の言葉を心にも留めず）そして、其自殺には理由があるんです。

美智子。理由が？　一體、どんな理由が？

長谷部。實はあの時分、僕の社へ妙な投書が舞ひ込んで來たものです。

美智子。妙な投書つてどんな？

長谷部。それは、その、『禽獸の如き大學敎授』と云ふ大見出しでしてね。

美智子。そして？

長谷部。割註に、『朝川猛氏の家庭の亂脈』とあるんです。

美智子。まあ！

長谷部。しかも、其内容たるや全然事實の揑造で——少くとも非常なる誇張でしてね、妻妾室を同じうしとか、夫人が虐待されてるとか、まあ、馬鹿氣きつた物なんです。

美智子。まあ！　そんな事！

長谷部。殊に甚しきは、口を極めて、いや、筆を極めて貴女の人格性行を、讒誣中傷してゐることです。

美智子。それで、どんな人が投書したのか分りませんか？

長谷部。それが全く分らないんです。

美智子。（ぢつと長谷部の顏を見つめながら）一體誰でせうね？　何の爲めにしたものでせうね？

長谷部。（美智子の視線を逃れるやうにしながら）兎に角、それがもう少しで、本當の記事になつてしまふところでしたよ。

美智子。記事になつて、貴方のとこの新聞に出るんですか？

長谷部。勿論、私が社にゐる以上、そんなへまをやらせることはありませんがね——

美智子。それで其、投書といふのを、猛さんも知つてるんですか？

長谷部。（不安げに）ええ。知つてるんです。先生も見ました。

美智子。そして猛さんは、何と言ひました？　誰がしたことだらうとも言ひませんでしたか？

長谷部。（周章へて）先生がですか？（短き間）さうです。先生は妙な事を言つてゐましたよ。

美智子。妙な事？

長谷部。先生は何だか、麻布の先生、あの牧師先生でもやつたんぢやないかしらつてね、そんなことを言つてゐましたよ。

美智子。えッ！　あの人が？

長谷部。まあ、單なる想像に過ぎないだらうと思ひますがね。

（二人とも一寸の間沈默。）

（前の話の續きを思ひ出し）それでです、誰がした惡戲であるかはとにかくとして、それが記事になりかかつてるところを、いやもう活字になりつつあるところを、あの人が見たものです！

美智子。あの人つて？　奥樣？

長谷部。然うです。それをあの人が見て、急に無分別を起したんですよ。

美智子。その、活字になりかかつてる物を見て？

長谷部。しかも其時、奥さんは變な事を言つたさうですよ——これは私が書いたも同然だから、美智子さんも然う思ふに違ひないつてね。

美智子。まあ！　私が然う思ふ！

長谷部。だから、奥さんは生きちやゐられないんだつてね。

美智子。然うですか！　奥さんがさう仰しやつたんですか！

長谷部。これは麻布の奥さんから、あとで伺つた話です。一體あの時の騷ぎは、先生達親子御三人と、そして僕とだけで、すつかり内密に片附けてしまつたんですからね。

（美智子、傍の楓の枝につかまりながら、ぢつと考へ込んでゐる。）

（不圖氣がついたやうに）いや、少し喋り過ぎたやうですな。（短き間）僕は、そんなにまで貴女を不愉快にするつもりで言つたのぢやない。ねえ、美智子さん、僕は唯だ、貴女が是非聞きたいと仰しやるから、そしてそれをお話するのは、僕の好意として取つて頂けるだらうと思つたからです。

美智子。（頭を上げて）どうも有難う。

長谷部。いや、さう改まつた御禮には及ばないですがね——

みどり。（今迄默つて遊んでゐたが）小母さん！　あれ、御父樣ぢやない？

（美智子も長谷部も、舞臺の右手へみどりの指さす方を見やる。）

美智子。然うね。あのお帽子の冠りかたは、御父樣らしいのね。

長谷部。（逃げ支度にかかり）僕はそれぢやお先きへ！

美智子。（覺えず微笑して）然うですか。御急ぎですのね。

長谷部。ええ、先生に會ふと、どうしてもお話が長くなりますから。みどりさん、左樣なら。

（長谷部、來たときとは反對の方へこそこそと逃げ出す。）

みどり。（長谷部のあとを見送りながら）あの人、宅の御父樣が恐いのね。

美智子。ええ、さうでしよ。

みどり。小母さんは、御父樣が恐くないでしよ？

美智子。（一寸言ひ淀んだあと）ええ。小母さんは恐くないんですとも。

みどり。あたしも恐くないわ！　御父樣好きだから！　（短き間）まあ、嬉しいこと！　何か、お土産をもつてらつしやるわ！　あたし迎へに行こ。

（みどりの驅け出すあとに、美智子もつゞいて柵門から二三歩を出る。猛、學校の歸りらしき服裝にて舞臺右手から出て來る。）

（大きく）お父樣！

猛。ああ、今日は御父樣も來たよ！

美智子。（お辭儀して）學校から直ぐ？

猛。ええ。學校も一時間ばかり早く濟んだので、ふとこつちへ廻つて見る氣になつたんです。

みどり。（父の手にせる紅い花を見て）つまらないわ！——お土産ぢやないんだもの。

猛。（笑ひながら）うむ、これは貴女のお土産ぢやない。（ポケットから紙包を出し）貴女のはここにある。

みどり。小母さん、早く出して頂戴！

美智子。あら！　此處でもう？

（美智子、みどりから受取つた包を解い

てやる。中から出た玩具を、二人で面白く弄んでゐる。その間に猛は、墓標の前に行き、其紅い花を花筒にさし、一寸合掌して脇へ寄り、墓標をぢつと見入つてゐる。)

猛。(やがて其側に置き忘れられたステッキを見付け、手に取上げて)誰だらう?――ここへステッキを忘れて行つてゐる。

美智子。(起ち上り、ふり返りて)長谷部さんでせう。先刻までゐましたから。

猛。長谷部が?

美智子。ええ。近頃よく、お參りしてくれるんですよ。

猛。へえ!

美智子。お參りしてくれるのを、そんな事言つちや惡いけど、隨分煩さいんです。

猛。(うなづきながら)ああ、然うか。(短き間)そして先刻までゐたんだね?

美智子。ええ。猛さんの姿を見て、急に逃げ出したの。

猛。ふむ。(ステッキをもとの處へ突き立てながら)ぢや、此次ぎの火曜にはもう來ないな。

美智子。(俄に陰鬱な調子になりて)ええ。もう來ないでせうね。(短き間)さうです、今日きりでもう――今日がもう一番お仕舞ひのお參りでせうね!

猛。(美智子の餘りに沈み切つた樣子を怪み)美智子さん、どうしたの? どうかしてるぢやないか?

(美智子、一寸面をあげて猛を見、再び首垂れて言葉なし。)

猛。(柵門を出て、美智子に近づき)ねえ、どうしたの? 變ぢやないか?

美智子。(力なげに)私のお參りも、今日がお仕舞ひになりさうですの。

猛。え?

美智子。今度の火曜にはもう、私も此處へ來られますまいよ。

猛。美智子さんは何を言つてるんだい?

美智子。色々考へ直しても見ましたが、私は矢張、斯うしてゐるわけに參りませんの。

猛。と云ふのは?

美智子。八年前の、九年前の決心を、もう一度繰返すんですわ!

猛。復僕達から逃げるのかい?

美智子。ええ、逃げるんですわ――先刻、長谷部さんが逃げ出したやうに。

猛。そして僕を恐れてゐるのかい? 長谷部が僕を恐れたやうに。貴女も僕を?

美智子。ええ。

猛。ふうむ。

(二人とも暫く沈默。猛、そこに轉がつてゐる石材の一つに腰を下ろし、向ひ合つた石を指さして美智子にすすめる。美智子、すすめられる儘にかける。)

美智子さんも今、僕を恐れてゐると言つたね。然う言つてくれたのが、僕に取つては好い機會だ。これを機會に僕は、美智子さんに對する僕の――いや、美智子さんと云ふ人が僕の心にこれまでどんな影を投げてゐたか言つて置きたいのだよ

(先程から玩具を投げ出して、猛の言葉に耳を傾けてゐたみどりは、氣遣はしげに美智子の方へ近づく。)

みどり。小母さん、御父樣に叱られてるの? さうぢやないでせう?

美智子。(微笑して)さうぢやないの。

みどり。さう。ぢや可いわ。

(みどり、再び玩具を拾ひ上げ、美智子の脇に來て遊ぶ。)

猛。(みどりの遊んでゐるところを見入りなが

ら）美智子さんは、僕が此子の母を、あの芳子を、本當に愛してゐたことを知つてゐますね？　少くとも貴女は！

美智子。知つてゐますわ。知つてゐますとも。

猛。そして、芳子の死後に總勘定して見て、生前僕自身の計量してゐた以上に、ずつと以上に愛してゐたと言つても、美智子さんは本當にしてくれますか？

美智子。本當にしますとも。

猛。それでゐて、僕は矢張、あれを愛し足りなかつたといふこと、あまりに愛し足りなかつたといふこと、これも認めてくれますか？

美智子　然う御考へになるのに無理もないわ――猛さんとしてはねえ。

猛　ところで、若し僕が、生きてゐる者を愛するやうに、死んだ者をも愛することが出來ると言つたら、流石の貴女も馬鹿げてゐると言ふかしら？

美智子。いいえ、言ひませんわ。貴方の心の中では、死んだ人が死んでゐないんですもの。

猛。（目をつぶりて）然うだ。芳子はたしかに生きてゐる！　まだまだ、生きてゐる！

美智子。いつまでも、いつまでも生きていらつしやるわ！

（二人とも暫くの間、感傷的な沈默。）

猛。だが美智子さん、僕も、一たび愛した者を永久に愛しつづけたいと云ふ、時代おくれの理想家の一人です。そして其理想が、あまりにロマンティックすぎる夢想でもあつたなら！　切めて心の中に、いつまでも、いつまでも生かして置きたいと思ふ人間が、いつの間にか死んでしまつたなら！

美智子。それは奥樣が、ここの冷たい土に御成りになつたのよりも、もつと、もつと悲しいことだらうと思ひますわ！

猛。美智子さん、よく言つてくれた。貴女が然うまで僕の心持を解つてゐてくれるのは、僕も本當に嬉しいよ。

美智子。さう仰しやつて頂くと、私も何だか嬉しいわ。（短き間）お別れしてからも、その御言葉を力に生きますわ！

猛。あ、然うだ！　貴女は復び僕達から逃げ出すつもりだと云ふんだね。そして僕を恐れてゐると云ふんだね、美智子さん、貴女は一體、どうして僕を恐れるんです。

（美智子、無言。ただ、さつきの紙包にしてあつた紙片か何かを疊んでゐる。）

それほど僕を理解してくれてゐて、どうして僕を恐れるんです？

美智子。貴方を恐れると云つたのは譃でした。本當は、貴方の、御側にゐるのが恐ろしいんです？

猛。僕の側にゐるのが恐ろしい？

美智子。ええ。御側にゐる私は、私自身が恐ろしいんですわ。

猛。ふむ。（短き間）今でも、矢張さうですか？

美智子。私は、いくら考へて見ても、奥樣の御亡くなりになつたのが殘念ですの。私の爲めにも、一番不幸な出來事でした。

猛。ふむ。

美智子。あの奥樣がいらしたからこそ、私は逃げおくれてゐたのです。そして、奥樣と御一緒にゐる間は、ちつとも私自身を恐れないでゐましたもの。

猛。さうですか？――美智子さんは！

美智子。そして何の不安もなく、猛さんのお友達になつてゐられましたもの。

猛。ふむ。それでは、美智子さんが何の不安も感じないでゐた時に、僕は、この僕は一番大きな不安を感じてゐたわけだ！

美智子。え？　貴方が？

猛。さうだ。芳子の生きてゐた時分には、美智

子さんにゐて貰つてるのが、僕に取つて、かなりの苦痛だつた。

美智子。まあ！

猛。それに對しては、芳子が立派に理由を拵へてゐてくれたにも係はらず——いや、然うではない——立派な理窟が立つてゐるだけに一層、僕は心苦しかつた。始終自分で自分の責任を逃げてるやうな疚しさがあつた。

美智子。まあ、然うですか。

猛。しかし、其疚しさを今から考へて見ると、何故の疚しさだつたか解らない。ただ僕は、芳子がなくなつた爲めに、一層安らかに、一層よく、あの女を愛することが出來るやうに思ふだけだ。（短き間）そして美智子さんは、あの女の生きてゐた間は何の不安もなく、僕のお友達になつてゐられたと、さう言ひましたね？　美智子さんは然う言ひましたね？

美智子。ええ、さう言ひましたわ。

猛。どうして斯う、入違ひにばかしなるものだらう？　僕は近頃こそ、本當に何の不安もなく、貴女のお友達になつてゐる。そして、時代おくれの理想家としてのこれからの僕の生活には、貴女のやうなお友達が、一層必要なものになつてゐるんです。貴女が何時までも、僕達二人と一緒にゐてくれて——

美智子。猛さん、もう何も仰しやらないで下さいな。愈々のお別れして行く私にとつては、もう此上の御言葉を伺はない方が、その方が仕合せのやうですから。

猛。ぢや、どうしても行つてしまふと云ふんですね？（短き間）だが、どう云ふわけです？——丁度今日こんなことを言ひ出したのは？　どう云ふわけです？

美智子。どう云ふわけと云つて——實は、このみどりさんと長谷部さんとが、少しばかり、私を賢くしてくれたのです。

猛。みどりと長谷部とが？（短き間）二人から何か、新しい事でも聞いたんですか？

美智子。ええ。少し。だけど、それがどんな事だかは訊かないで下さいな。つまらない事ですから——此間中から感じてゐたことを、ただ、判然さしてくれただけですから。

猛。然うですか。それなら僕も訊かないで置きます。（短き間）それで貴女は、美智子さんは、僕達から別れて何處へ行くんです？

美智子。何處へ？　私がこれから何處へ行くかと仰しやるの？

猛。ああ、何處へ行くつもりです？

美智子。さあ、何處へ行つたらいいか？

猛。貴女も、そんなさきの見えない生活に入るんですか？

美智子。ええ。だつて私も、今時の人々の物笑ひになるやうな、つまらない夢を見てゐる人間ですもの。私も地上に、「青い花」を求めてゐる人間ですもの。

猛。（暫く沈默の後、徐かに立ち上つて）それで、何時いよいよのお別れにします？

美智子。（同じく起ち上りながら）これから一應御一緒に歸つて、それから東京驛まで行つて見ます。そして其頃に出る汽車の、どれにでも乘つてしまひますわ。

みどり。（先程から、不安げに猛の顏と美智子の顏を見守つてゐたが、此時美智子の側へ寄つて來て）小母さん、どつかへ行つちまふの？（短き間）え？　小母さんの御宅へ歸つてしまふの？

美智子。（みどりを見下ろしながら）折角斯うして御近附になつたのにね！

みどり。小母さん、どうして行つちまふの？　あたしがいけないから？

美智子。いいえ、みどりさんは本當に好い御兒さんでした。貴女の事はいつまでも、いつま

でも忘れませんわ！

みどり。あたし、つまらないわ――御父樣とあたしと二人つきりになつて。

美智子。これからはね、御父樣とお二人で御參りなさるんですよ。（涙聲にて）そして折々は、この小母さんの事も思ひ出して下さいよ。

（猛、よろよろとよろけるやうにして二三歩後退りし、柵門の柱に凭りかかりて、手にさげてゐた帽子で、顔をかくしてしまふ。）

猛。（顔をかくした儘、センティメンタルに）みどりさん、小母さんに抱つこして頂くがいい！（短き間）明日からはもう手を引いて頂くことも出來ないんだから！

美智子。（目を拭つたハンケチを銜へて、兩手を差上げたみどりを抱き上げ）みどりさん！ 忘れないで下さいよ！ 本當に忘れないで下さいよ！

みどり。（泣きじやくりを始めて）あたし――も――悲しいなあ！

（みどり、愈々激しく泣き出す。）（幕）

（一九一七年十二月作）

◇

▼例へばゲエテの如き文豪に於て、彼が同性の、或は異性の友人なぞに宛てて書いた消息や、折々即興的に作つた小さな抒情詩などは、極めて自然に、正直に、眞實に彼自らを表現してゐる。これに比べると一代の大作『ファウスト』なぞは、なにしろ長年月の努力に成つたものだけに、いづれの方面から見ても、何れの部分を取つて見ても、みなそのやうに自然に、正直に、眞實に彼自らを表現してゐるとは言へないであらう。しかし乍ら、『ファウスト』の中には、作者が同性の或は異性の、友人達に宛てて書いた消息や、折々の即興から作つた小さな抒情詩なぞに示されたのとは、到底比較にもならないほどの素張らしい自然さや、正直さや、眞實さをも、如何に多量に包容してゐることか。言ひ換へれば、そこで作者が日常生活に於けるより、一面稍や改まりすぎた、硬くなり過ぎた、氣取り過ぎた人間になり乍ら他面それを償うて遙かにあまりあるほどに、如何に人間の極限を盡して偉大なもの、崇高なもの、深遠なもの、精緻なもの、淸純なものとなつてゐることか。

▼更にフリイドリッヒ・ニイチェの場合を例にとつてもよい。彼が其母や妹に與へた書簡なぞを讀んで見れば、日常生活に於ける彼は、從つて普通人尋常人に共通した彼の人間性の一面は、實によく表出されてゐる。そしてそれらの書簡なぞに比べると、『ツアラトゥストラ』の如きは、ゲエテに於ける『ファウスト』と同じく、少くとも非常にアムビシアスな計畫と努力との下に成つた物だけに、一面他處行きに過ぎた、開き直り過ぎた、正面を切り過ぎたやうな何物かを有つてゐることを否まれないであらう。

しかし乍ら、それにも係はらず、あの宿命的な恐ろしい作品の處々に於て、あの不可思議な制作の刹那刹那に於て、如何に彼が自然に、正直に、最も彼らしきものを示してゐることか、最も彼らしきものとなつてゐることか。否、あの詩作の高頂と全體とに於て、如何に作者自らが高人と超人とに近づいてゐることか、如何に作者自らがツァラトゥストラそのものを生活しツァラトゥストラそのものとなりきつてゐることか。

（『日常生活を偏重する惡傾向』より）

天路歴程（二幕）

人物

安岡禎。　三十八九歳。

多津子。　もと安岡の妻、三十五歳。

君江。　安岡と多津子との間に生れた子、十三歳。

中塚幸藏。　實業家にして多津子の保護者、五十歳。

雪子。　中塚の兄の娘、十九歳。

河村壯吉。　醫學士。二十七歳。

お時。　多津子の内の女中。

其他二三人の男女。

第一幕

（音樂教師多津子の内の客間。右手と左手とに各一つ宛の出入口。正面の大きな玻璃窓の左脇にも外廊へ出るドア。それに近く左手の壁に寄せて寢臺一脚、小卓一臺、中央の圓卓を取巻いて椅子二三脚。夏も終に近き日の午後三四時頃の日光が、外庭の青葉にふりそそいでゐる。右手のずつと奥の方から稍やメランコリックなピアノの音が舞臺にまで聞えて來る。對話を妨げない位に、靜かに聞えて居るところにて幕上れば、安岡禎、左手のドアを開けてはひつて來る。）

お時。（安岡のあとを追うてはひりながら）あの、奥様はお稽古の間は何方にも御目に掛らないと仰しやつて居りますから。どなたにも御目に掛らないと——

安岡。いいよ、いいよ、御目に掛るのは後でもいいんだよ。

お時。でもあの、奥様にお斷りしないで、御通しするわけには參りませんから。

安岡。（輕く笑ひながら）だが、もう斯うして通つてるぢやないか。

お時。でも私が後で困りますから。

安岡。（寢椅子の上に腰を下ろしながら）なあに、然う心配する事はない。あとで私から奥様へ——奥様か御孃様か知らないが、兎に角、その御主人へはよく御詫びをして上げるよ。

お時。（安岡がポケットから葉巻を探り出し、それに火を點ずるのを見守りながら、半ば獨白のやうに）どうしよう。私、本當に困つちまふわ。

（餘りにも悠然たる煙草の煙に壓迫されて、お時は詮方なく幾分の不安を殘しながら、後を見返り見返り出て行つてしまふ。安岡、やがて起ち上り、ゆるゆると室内を一廻りした後、後手を組みながら外廊の方へ出て行く。間もなくピアノの音は止んで、右手のドアから多津子が先き立ち、雪子がそれに續いてはひつて來る。）

多津子。（雪子を堰きとめるやうに立ちどまつて）まあ、いいでせう。そんなに御急ぎにならなくたつて。お茶でも召上つていらつしやいな。今に、君江も學校から歸つて來ますから、君江が歸つて來たら、久し振りに、御一緒に何か面白い事でもして遊びませうよ。

雪子。でも、今日はお稽古をするつもりで上つたんぢやございませんから。

多津子。（時計を見ながら）御母樣が御心配なさるんでせうか？

雪子。はあ、一寸御見舞にと申して出たものですから。

多津子。本當に濟みませんでしたわねえ——わざわざいらしつて頂いたりなんかして。

雪子。どうか、御大切になすつて下さいまし。

多津子。（微笑しながら）もう宜しいんですわ。それに病氣といふほどの事でもなかつたんですから。

雪子。ですけれども先生は、平生から、お弱くていらつしやいますから。

多津子。大丈夫よ。それよりも貴女こそ、近頃は何だか、以前ほど御丈夫に見えないことね？

雪子。（面を背けながら）然うでせうか？

多津子。然うよ——何だか少し。もし何でしたら、河村さんに、河村さんにでも、一寸診て御貰ひになつては？

（河村といふ言葉を聞くと共に、雪子は俯いてしまふ。）

あれでも、今度大學を出たんですから、もう立派な御醫者樣よ。それとも貴女のは、河村さんぢや治らないやうな、念入りの御病氣ですかしら？

雪子。え？（面をあげて一寸考へ、忽ち再び俯いて）まあ先生、いやですわ——そんな事を仰しやつて！

多津子。（笑ひながら）御免なさい。ヽ、ヽ、ほんのじヽ、ヽ、やうだんよ——今のは。明日からは、必ずお稽古に伺ひます。どうか御母樣によろしくね。

雪子。はあ、それでは……

多津子。（お辭儀をして行きかかる雪子の背後から）一寸！ 雪子さん。

（雪子、立ちどまり、默つてふり向く。）

よく御似合ひになることね——その御洋服が。

雪子。あら！ いやですわ！ 母が、西洋の物を好きなもんですから、私なんか、何だかヽ、ヽ、きまりが悪いんですけれども——

多津子。どうして？

雪子。なんだかきまりが悪いんですけれども、折々は……しかたがないんですの。

多津子。（先きに立つてドアの方へ近づきながら）然う仰しやれば不思議ねえ——御宅では御母樣がハイカラさんで、そして貴女が、どちらかと云ふと然うではないんだから。

（ドアを開けて二人とも出てしまふ。その後に庭の方でひぐらしが鳴き出し、引きしぼつたカアテンの紐か何かが折々風に搖れてゐる。）

お時。（左手のドアを開きながら後を振りかへり）そして、あの、御名前を伺ひましても、仰しやらないのでございます。ただ、ふるくからの御知合ひだからとばかり仰しやいましてね。

多津子。（お時のさきに立ちてはひり）お前、こちらへお通ししたんぢやなかつたの？

お時。（つづいてはひり）おや、どうなすつたのでございませう？ ここの寢椅子にかけていらつしやいましたのに。

多津子。（外廊への出口の方へ歩み寄りながら）それとも何かしら……

（出口に立つて外をのぞいてゐた多津子は、思ひかけぬ何物かを見出したるごとく、本能的な驚きの叫びを擧げながら、よろよろと後方へよろける。）

安岡。（其時ドアから葉卷をくはへたまま多津子を追ふやうにしてはひつて來ながら）どの

みち、餘り作法にかなつた訪問の仕方では、間に合ふまいと思つたものですからね、一寸失禮して、御用の濟むのを待つて居りました。(お時の方を顧みて)女中さんには大變に御氣の毒をしましたね。

(無言の儘、あとしざりに、圓卓のそばまで追ひつめられて來た多津子は、目示と手眞似とで、お時を去らせようとするけれども、お時は其場の光景を氣遣つて去らうとしない。)

多津子。(お時へ)あとでまた呼びますから、あとで!(お時の去つたあと、稍や伏目に、再び太息を漏して)たうとう會ひましたのね。

安岡。さうだ、たうとう會つたといふものだな。

多津子。(半ば獨白のやうに)ああ、たうとう會つちまつた。

安岡。會ひたくないのに、たうとう會つたといふのかい?

多津子。よし、どんな事があつても會ふまいとも思つたし、たまには又――

安岡。たまには又? ふむ。

多津子。だけど、本當は何が何だか分りませんでしたわ。今も矢張分らないんですわ。

安岡。お前はあまり變つてゐないねえ――むかしと。

多津子。然うでせうか。(鬢のほつれ毛をかき上げながら)自分ではどれ位變つたか、變らないでゐるか、分りませんけれど。

安岡。いや、やつぱり變つてゐる。爭はれないものだ。

多津子。それやあ、何と言つても十年の上、十二年にもなるんですもの。君江が――やつとお誕生を濟ましたばかりだつた。あの子ももう――

安岡。然うだ、あの子も今歲は十三になる筈だ。

多津子。(脇へ向き、ハンケチを目にあてて)よく――よく覺えてゐて下すつたわねえ。

安岡。ずつと一緒に連れてゐたのかい?

(多津子、默つてうなづく。)

安岡。然うか。

多津子。(向き直つて微笑しながら)貴方もだいぶお爺さんになりましたねえ。

安岡。いや。これでも二三年來少し若返つて來たんだよ。あまり下らないことは、考へないやうに、思ひ出さないやうになつたからね。

多津子。貴方も、一通りの苦勞はなすつたらしいのね。

安岡。苦勞か! うむ、まあまあ、不足はなさそうだな。

多津子。憎い女だと、恨んでいらしたの?

安岡。女も恨んでも見たし――男を恨んでるだらうとも考へ直して見たし、それや色々だつたよ。だがもう昔の夢さ。(葉卷の煙のたなびくさきを見やりながら)然うだ。みんな過ぎ去つた昔の夢さ。

多津子。(卓上の團扇を手に取りながら)それにしても、なんて馬鹿だつたでせう?

安岡。誰が?

多津子。私が! いいえ、私達二人が!

安岡。然うか。(瞑目して)まあ、馬鹿だつたと言ふよりほかはあるまいな。あんなつまらない事で喧嘩をして――

多津子。そしてつまらない意地を張り合つてねえ。

安岡。あとさき見ずに、あんなに無造作に夫婦別れをしてしまつてさ。

多津子。それよりも悪いのは、あんな他氣ない別れかたをしてそれなりに、つまらない意地を張り通してしまつた事ですわ。

安岡。お前、それでも覺えてゐるかい?――俺達の別れたときの動機といふのが、一體どん

な事だつたか！

多津子。それや覺えてゐるわ。覺えてゐるどころぢやないわ。今でこそ笑ひ話にもなるんだけれど、世の中の事を何一つ知らなかつたあの時分の私にとつちや、あれ位大きな問題はありませんでしたもの。（かなり輕い、淡泊な調子で）そもそもは貴方が悪かつたのね。こちらで結婚すると直ぐに亞米利加へ行つて、あんなスヰイト・ホオムを作つて――笑つちやいけません。その時分の私達には、あれほど美しい、あれほど尊いものはなかつたんだから――ねえ、あんなスヰイト・ホオムを作つて、二人とも無事に幸福に勉強してゐる内、貴方がいつかしら悪いお友達を拵へて――

安岡。さうだ、悪い友達を拵へた俺が、ちとばかり悪い遊びを覺えたと言ふわけだつたな。もつとも妻帶してからの遊びだけに、表面無事のやうに見えながら、實際のたちはよくなかつたかも知れないがね。

多津子。兎に角、あの時代の私に、我慢の出來ることぢやなかつたわ。

安岡。だが、特に俺の場合を言ふと、あれは一種の反動現象だつたね。こちらの宗教學校や教會なぞに閉ぢ込められてゐて、悪く清教徒ぶつた僞善の空氣に窒息しかかつてゐた青年が、本場の歐羅巴人の本當の生活をのぞいて見て、俄かに自由な、自由過ぎるやうな心持になつて見たかつたのだ。そしてそれ以上に格別の意味もなかつたやうだ。だから、あの時分の俺から言ふと、あんな事位であんなに大袈裟に騒ぎ立つた、お前の方が寧ろ無理だつたよ。

多津子。だけど私、私で、耶蘇教の一夫一婦主義を理窟もなしに注入されてゐた上に、亞米利加へ來て、なまなかな女權思想なんぞに――さうよ、全く――なまなか女權思想なんぞにかぶれてゐたんですもの。

安岡。それにしても、別れて後の未練がなさ過ぎたな。

多津子。え？

安岡。別れたのはまあそんな事で別れたとしても、別れて後に、未練がなさ過ぎたやうに思ふと言ふのさ。

多津子。どちらが？　私がさうだと仰しやるの？

安岡。成程なあ。お前から云ふと成程、俺の方があきらめがよすぎたかも知れないな。

多津子。さうよ。本當にあきらめのいい人だと思つてよ。

安岡。然う思はれて居た俺が、どの位お前から折れて出るのを、そして俺のところへ引き返して來てくれるのを、どの位待つてゐたか、どの位あてにしてゐたか――

（忽ち言葉を切つて、多津子の顏を見る。多津子も目を上げて安岡を見る。）

（強ひて笑ひ出しながら）これは正しく愚癡だつたねえ。

多津子。序に愚癡も言ひ合つて見ませうよ――お互に。現在の私達の生活とは何の關係もない位にずつとかけ離れた話なんですもの。聞かされる方でも、只だ聞き流しに聞いてゐられるわ

（多津子の言葉の終に近く、カナリヤの鋭い啼聲が聞えはじめると、安岡は手で以て相手の話を押へるやうにしながら、椅子から起ち上る。）

安岡　カナリヤだね！　お前は今でもあの鳥が好きなんだね！　あいつが鳴くのを聞くと――（椅子を離れて室内を歩き出しながら）いつでも思ひ出すよ、俺達の別れた日の事を！　あの朝の事を！

多津子。貴方もね！

安岡。お前もか、お前もやつぱり思ひ出すのか！（對話ともつかず、獨白ともつかぬ調子にて）然うだ、お前の最後の足音が、あの階段の下に消えて了つたとき、何を見るともなく茫然として室の內を見てゐる內、お前が子供について可愛がつてゐた、あのカナリヤの籠が目についたものさ。そして、きつとお前が、あの籠をとりに來るに違ひない——その用事にかこつけてでも引き返して來るに違ひないと、俺は然う思つたんだ。さう思つて自分で自分を落ちつけながら、不可思議な一日を送つたが、日が暮れると流石にもう、ぢつとしてゐられなくなり、明るい街の方へ、賑やかな連中の方へと駈け出して行つたんだ。

多津子。其御留守に私が歸つて來たことは、御聞きになつたでせうね？

安岡。お前がカナリヤを持つて行つたことと、俺の着る物なんぞについて、こまごまと言ひ置いてくれたこととは、隣のお婆さんからたしかに聞いた。

多津子。私もあの晩には、あんなに用を足さないで置いて歸りたかつたわ——翌日もう一度出直して來られるやうに。だけど生憎なものね。こつそり忍び込んだ私が、御主人のゐないあの室からこつそり出ようとするところを、あの深切なお婆さんに見つかつてしまつたのです。

安岡。それでもう、俺の處へ引き返して來る第一のきつかけをなくしたといふんだね？

多津子。ええ。そしてあの時の失敗が、どれだけその後の勇氣をなくさしたか知れません！

安岡。俺はまた俺で、何處にゐるとも居處さへはつきりしないお前の跡を追ふ爲めに、切めてあのカナリヤでも俺の手元に殘つてゐたならと——どんなに殘念がつたことだと思ふ！

多津子。さうですか？——貴方もね！

安岡。その內に恥も、外聞も、痩我慢も、男の意地も、何もかも棄ててしまつた俺は、どんなにしてでもお前を搜し出し、改めてお前の前にお詫びもしよう、性根を入れ換へるとの誓も立てようと、さういふ心にもなつて見たけれど、お前の居處はつひに分らずじまひさ。

多津子。（愁然として）貴方がそんなにして、わざわざ御搜しになつた時分には、私はもう、わざわざ貴方からかくれてゐたんでせうよ！

安岡。わざわざかくれてゐた？

多津子。いつの間にか私は、貴方に顏を合はされたいやうに……そんな、取返しのつかない體になつてゐましたから。

安岡。ふむ、

多津子。つまりは命が惜しくて死にそくなつたのです。いいえ、殺しそくなつたのです！——あの子を！　どうしてもあの子を殺せなかつたのです！

安岡。ふむ。

多津子。ですから、いくら貴方に會ひたくとも、二度ともう會へないやうな人間に——人間だか何だか分らないものになつてしまつたのです。そして會はないですむやうな場所へ場所へと逃げ廻つてゐたのです。

安岡。だが、運命は公平なものだ。俺は、永久にもうお前の姿を見失つたと知つた時、俺自身の姿をも既に見失つてゐた。俺は改めてやけになる必要もなかつた。長い間の心の不安定から來る放縱なだらしのない習慣が、自暴自棄な人間のやるのとちつとも異はない事を、それまでにもさんざんさしてゐたのだから。そして近年はもう、自暴自棄といふほどのものさへなくなり、あるのは唯々救ふべからざる悪習慣だけなんだ。——（苦笑しながら）自他ともに迷惑するやうな悪習慣

だけさ。

多津子。そこへ行くと、女はどうしても餘計に往生際が惡いのね。私は今でも忘れ殘した過去を、すつかり忘れ盡してしまひたく、氣にしたくない將來をなるべく氣にしないでゐる爲めに、思ひ切つた馬鹿な眞似を、次ぎから次ぎへとしつづけて行かなくちやなりません。惡い夢のあとに一層惡い夢を見つづけて行かなくちやなりません。その夢と夢との間にどうかして、いゝ、ちらりと一條の現實の光が射し込んで來るときの——その恐ろしさ、淋しさ、淺間しさは!

安岡。(いつの間にか多津子の背後に來てゐて、腕組みをして立つてゐて) それは俺にも解る! 俺自身の事は何が何だか解らなくなつてしまつたが、その代りに人の事は大抵解るやうだ!

多津子。(椅子を起つて、安岡の方へ半ばふり返りながら) 解つて下さる、本當に!

安岡。別してお前に就いて云ふと、むかしならば解らないでしまつたやうなお前の苦しみも悲しみも、一切のものがみんな解るやうだよ。

多津子。(安岡の前にかけてゐた椅子の方へ歩き出しながら) 貴方がさうまで私を解つて下さるとしたら——いいえ、私にだつて貴方が、貴方のことがようく解つてよ! ですから、お互に斯うまで解り合ふやうになつたんだから、滿更無意味な事ぢやなかつたのね——あんな關係になつて、長い間別々に、あんな苦勞をして來たといふのも!

安岡。うむ。だが、あんまりセンチメンタルな哲學者になることは止さうよ。我々中年者には似合はしくない道樂なんだからな。

多津子。それもさうね。

安岡。(椅子にかけて) ところで、お前はあちらから歸つて來て、幾年位になる?

多津子。さうね。かれこれもう六年ばかりになるわ。貴方は?

安岡。俺はと——亞米利加東部の方を食ひつめたのは比較的早いが、この日本の土地まで引上げて來たのは昨年の、いや一昨年の此頃だつたかな。

多津子。でも、どうして私のゐるところが知れましたの? それよりも音樂の先生として、駒澤桂子で通つてゐる今の私が、昔の貴方の多津子だつてことを、どうして御分りになつたの?

安岡。それは何だ。實は斯ういふわけなんだよ——だが、此邊で一寸——(咽喉を指さしながら) これを濡らしてやりたくなつたね。

多津子。これは失禮。(呼鈴を押しながら) お話の方にばかり夢中になつちやつて!

安岡。いや、俺の方も忘れてゐたのさ。別に御遠慮を申し上げてゐたわけでもないよ。

お時。(左手のドアを開けてはひり) あの、御呼びになりましてございますか?

多津子。あのね、紅茶を入れて來てお呉れな。

お時。はい、畏まりました。

安岡。(女中が出て行かうとしてゐるとき) 何か、アルコホルのはひつた物を頂けませんか? アルコホル分が體の内にきれてしまふと、妙に心細くなるんですからな。

多津子。ぢや、ビイルでも召上りますか?

安岡。左樣　同じ事ならば、ヰスキイかブランデエにでも願ひたいですな。

(女中のお時は不審の目を見張つてゐる。)

多津子。ウヰスキイはありましたかしら? あ、さう、ぢや、あれの新しいのを持つて來てお呉れ。

お時。はい、畏まりました。

多津子。あ、それから——君ちやんはまだ學校

から歸つて來ない？
お時　はい。まだお歸りになりませんでございますが。
多津子。歸つたらね、直ぐにこちらへ來るやうにつてね。
お時。はい。
多津子。（女中がドアの外に出てしまふと、多津子は椅子を引き寄せてかけ）本當に、どうしてお分りになつたの？　私が此處に斯うしてゐることが？
安岡　實はね、今日あるカッフェで一杯やりながら、見るともなしに手近の新聞を見ると――（ポケットを探りながら）たしかに見覺えのある顏が――（多津子の前に疊んだ儘の新聞を差出しながら）それにお前の寫眞が出てるんだ。
多津子。（大急ぎで新聞を擴げながら）私の寫眞が、この新聞に！
安岡。さうだ。名前は駒澤桂子といふ、何だか聞いたやうな、聞かないやうな名前だが、その横顏の印象は、目元から口元へかけて、どうしてもお前だと思つたのだ。
多津子。あら？　本當に出てるわねえ！
安岡。それから、其記事を讀んで見るがいい。
多津子。まあ！　駒澤桂子女史の――結婚ですって！
安岡。その說明に面白い事が書いてあるぜ。名物女の大年增が、年下の若い男と結婚するのは、近頃流行物の一つだとさ。
多津子。何だか、そんな事も書いてあるらしいのね。
安岡。若い醫學士の二十七歲は本當だらうが、駒澤女史の三十五歲をわざわざ三十八歲にしてあるなぞは、ああ云つた讀物を一層面白く讀ますための新聞屋さんの御苦心かね。
多津子。だけど――（新聞から目を上げて）一體どうしたんだらう？
お時。（キスキイの壜をもつてはひつて來て）どうもおそくなりました。一寸口が取りにくかつたものでございますから。
多津子。（キスキイの壜がコップと共に卓上に置かれるのを見ながら）ああ、いいよ――さうして置いてくれれば。
お時。左樣でございますか。
（お時は多津子と安岡との顏を見比べながら去る。）
多津子。（キスキイを二つのコップに注ぎながら獨白的に）だけど、本當にどうしたんだらう？
安岡。兎に角、俺は其記事を見て、お前が今何處にゐて、何をしてゐるか、何をしようとしてゐるかを知つたわけだ　そして――（キスキイをぐつと一息にあふり）そしてお前に會ひたくなつたのだ。
多津子。え？　私に會ひたくなつたと仰しやるの？
安岡。いや、然う言つたんぢや語弊がある。むしろ會ひたくなくとも、會はずにはゐられないやうな用事を思ひついたのさ。
多津子。その用事と仰しやると――
（安岡が默つてコップを出せば、多津子も默つてお酌をする。）
安岡。（口へ持つて行きかけたコップを其儘下へ置き）凡そ人間の生きて行く方法は、稼ぐか、拾ふか、盜むか、でなければ貰つて步くかの、この四つに盡きてゐるやうだ。ねえ、さうぢやないか？
多津子。まあ、そんなものね。
安岡。（コップを取上げて一口呑み）ところでだ、稼ぐのも拾ふのも、强盜竊盜を働くなんぞも、事の善し惡しは暫く措き　俺にはもう面倒臭くてやれない。

多津子。（笑ひながら）さうらしいわね。
安岡。だが、それで矢張生きて行くとしたら、
命のなくなるまで生きて行くとしたら、俺は
結局、旦那樣奥樣方の御厄介になるよりほか
はないぢやないか！　そして成るべく氣毒に
感じることの少いところから順々に厄介を
かけて廻るといふ、これだけが俺の最終の職
業でもあり、最終の道德でもあるやうだ。
多津子。道德とやらの事は解らないけれども、
そんな最終の職業をして廻る人にしちや、な
かなかお人柄だことね。
安岡。だが、最終の職業も愈々その最終へ近づ
いて來た形だよ。
多津子。お得意樣は、だんだんと減るばかしな
の？
安岡。御察しの通り。
多津子。それぢや、私のところへも其職業を
しにいらしたと仰しやるの？
安岡。うむ、序の用事は色々とあるが、眼目は
まあそれなんだ。
多津子。さうですか。
安岡。いや、俺もね、理由なしに來たんぢやな
い。（短き間）お前のお婿さんになる人とか
云ふのは、何でも大層なお金持の坊ちやんだ
とある。
多津子。ああ、この新聞ですか！　此新聞には
さう書いてありますわねえ。
安岡。さうすると、當分の内景氣のいいお前の
處へ來て、お前の御厄介になるのが、一番氣
毒に感じないで濟みさうだし、從つて、一番
俺の道德にもかなひさうに思つたのだ。
多津子。ところが駄目よ。
安岡。駄目？
多津子。ええ。二人が結婚するつてことも、相
手が大層なお金持だつてことも、みんないい
加減な出鱈目なんだから。
安岡。みんないい加減な出鱈目だ？
多津子。これは、醫學士の――坊ちやんが、自
分から材料を提供して、わざわざ書いて貰つ
たものらしいの。
安岡。へえ！
多津子。實はねえ、斯うなの。（キスキイを取上
げて口をつけ）坊ちやんは、私がどんな過去
を有つてる女だか知らない、知つたら震へ上
つて逃げ出す位な、本當の坊ちやんでしてね、
萬事を生眞面目に考へて、この私とどうし
ても結婚しようと云ふんです。
安岡。ふむ。
多津子。そして近頃は、その事を頻りにやかま
しく言つてるんです。
安岡。ふむ。
多津子。ところで、私がちつとも本氣にならな
いでせう。
安岡。（笑ひながら）少しは、本氣になつてやつ
たらどうだ。
多津子。（同じく笑ひながら）なれるものなら
ね。（短き間）でね、坊ちやん相應な智慧を
しぼつたんだわ。あんな記事でも新聞に出る
と、それでなくてさへ二人の間を可笑しく思
つて居る、私の――まあ、パトロンと言つと
きませうね、ハイカラに。私のパトロンが其
儘には濟まさないだらうし、それで綺麗に手
が切れてしまつたら私の決心もつくだらう
と、そこはね、坊ちやん相應な分別ぢやあり
ませんか。
安岡。成程ね、
多津子。だけど、一寸私も困るわ。
安岡。そのパトロンとの關係についてかい？
多津子。ええ、これを機會に切れてしまひたい
やうでもあるし、それもまだ、少し早過ぎる
やうでもあるし。
安岡。さしあたり――其坊ちやんがお金持で

もないとしたらばな。

多津子。（微笑しながら）従つて、貴方の方の御職業も御生憎樣ね。

安岡。さうだ、さう云ふことになるんだな。

多津子。（默つて安岡に酌をしてやつたあと）だけど待つて下さい——貴方も此處でがつかりしてしまふのは待つて下さいな。

安岡。何か名案でもあるのかい？

多津子。あるわ！——坊ちやんなぞの智慧よりか、少しばかりましなのが。

（此時右手のドアが少しばかり開きかかる。）

だあれ？

君江。（半分ばかり姿を現はして）伯母さん、ただ今！

多津子。君ちやんなの。お這入りなさい。

君江。でも、お客樣でせう！

多津子。だけど、いいの。構はない御客樣だから、はひつていらつしやい。

君江。（安岡が盃を捻ぢまげてふりかへつたので、いらつしやいまし。

安岡。（起ち上り）うむ、これがあの子か！　あの君江か。（抱きかかへるやうに両手を擴げながら近づく。

（君江は驚いて多津子の方へ逃げるやうに寄り添ふ。）

多津子。伯父さんよ。君ちやんの本當の伯父さんよ。今度外國から歸つていらしつたの。貴女にはまだ、この伯父さんのことを話さないでゐましたかねえ？

君江。ええ、まだ。

多津子。これからは、始終來て下さるのよ。

安岡。（前よりも一層センティメンタルに）これが俺の、俺とお前との——！

多津子。私達の——（安岡の方へ目示しながら）姪が、こんな可愛い娘になつてることを、貴方は、伯父さんは知らないでいらしたのね。

安岡。うむ。こんな可愛い娘が、俺達二人の姪なのか！　さうか！（復び椅子にかけ）背丈なんかもう、伯母さん位ありさうだな　學校は？　そろそろ女學校へあがる頃だねえ。

君江。本當は今年あがるところですけれど、一年おくれましたの。

多津子。五つの歳に、腦膜炎をわづらひましてね、その爲めか、兎角學校の方がうまく行かないんですの、可哀想ですけれども。

安岡。さうか。だが、少しばかりの智慧分別をさづかつた代りに、並はづれて醜く生れて來た女なんぞも、あんまり仕合せぢやなからうからね。

多津子。さう思つてあきらめますのね。

安岡。それにこれからは、この伯父さんが家庭教師をして上げよう。まあ、お前もそこへ御掛けよ。

君江。（椅子へかけながら）でも、伯父さんは御忙しいんでせう？

安岡。いや、ちつとも忙しくない。それにこちらへは——（多津子の顔を見て）ちよくちよくやつて來る用事もあるんだからね。

多津子。さうそ、其用事に就いてですがねえ——さつきお話した！

安岡。うむ、大切なお話を其儘にしてゐた。一件の善後策として、何か名案があると云ふことだつたね？

多津子。私の名案といふのも、實は貴方の名案を拜借したやうなものなの。

安岡。と云ふと——

多津子。貴方はさつきの、洋服を着た、綺麗な御嬢さんを御覽にならなかつたの？

安岡。うむ。一寸見た——ほんの後姿だけだが。

多津子。そして貴方はこの私を通して、あの坊ちやんから、貰ふものを貰はうと御考へになつたでせう？

安岡。さうだ。

多津子。ところが私はね、あの坊ちやんを通して、あのお嬢さんから、貰ふ物を貰はうと考へたの！

安岡。なに？　あの坊ちやんを通して、あのお嬢さんから——ぢや、あのお嬢さんが、その坊ちやんと結婚することになるのかい？

多津子。ええ、結婚して貰ふんだわ——私達の爲めに。

安岡。へえ！

多津子。名案過ぎると仰しやるの？

安岡。さうだね。さう うまく行くものかどうか？

多津子。うまく行くやうにするんだわ！　少々位の無理はしても！

安岡。ふむ。

多津子。貴方の口眞似をすれば、これが現在の、私の職業でもあり、私の道徳でもあると云ふわけですから。

君江。伯母さん、それは何方の事、私なんかの知らない方のお話なの？

多津子。ええ。

（この時舞臺左手奥の方にてけたたましき自動車の音。）

（耳をすまして）自宅の前で停まつたらしいのね。さつきお話したパトロンかも知れないわ。

安岡。（椅子を起ちながら）それぢや、俺達はどちらへか引き上げてゐよう。

多津子。ぢや君ちやんは、このお酒をあちら（右手の隣を指さし）へ持つて行つてお上げなさい。

（君江は多津子に渡された御酒を盆の儘ささげて先に立ち、安岡と共に隣室に去る。あとに多津子は、卓上の新聞を小さく疊んで帶の間へ入れてしまふ。）

お時。（左手のドアを開き）あの、中塚様がお見えになりましてございます。

多津子。中塚さん——でせう？

お時。はい、御差支がございませんでしたらば、お目にかかりたいと仰しやいます。

多津子。今日に限つて、改まつたことを仰しやる——可笑しな人ね。それぢやね、此方はちつとも差支なんぞございませんから、どうか御遠慮なく御通り下さいましつてね、さう言つて御上げよ。

お時。畏まりました。

（女中、去る。多津子、卓の上の灰皿などを始末してゐるところへ、無言の儘左手のドアから中塚幸藏がはひつて來る。多津子、氣付きながら知らぬふりをしてゐる。中塚は多津子の傍をすりぬけるやうにして、卓の向う側へ行き、椅子を一脚ぐいと引き寄せる。）

多津子。（はじめて氣付きたるごとく）おや、いらつしやいまし、そこまで御運びになりますのは、まだまだだいぶ、御暇のかかる事だと思つて居りました。

中塚。いいや、だしぬけにはひつて來たのが、惡い言ふのか？

多津子。いいえ、どう致しまして。まことに御念の入りました御前觸れもございましたことですから。

中塚　一體人を愚弄するのも、よい加減にして置いて貰ひたい！

多津子。あら、愚弄すると仰しやるの？　私が？

中塚。さうぢや。

多津子。愚弄すると云へば、貴方こそ、今日に

限つて――

中塚。いいや、今日の事ぢやない。あんたはこれまで、よくも私を！　これまでに滿更氣付かないことでもなかつたが。

多津子。何のお話でせう？　ちつとも分りませんね。

中塚。空惚けるのは止しにして貰はう。今になつてつまらんこつちや。

多津子。（はじめて氣付きたる如く）ああ、分りましたわ。（帶の間から例の新聞を取出して卓の上に置き）これの事ですね！

（中塚、默つて、多津子の頭の天邊から足の爪端まで見上げたり、見下ろしたりしてゐる。）

（悠々と新聞を開いて、中塚の方へ向けて）ここに出てゐる駒澤女史の結婚一件でせう？

（中塚、苦り切つたまま、依然として答へず。）

あら、そんな眞面目らしい御顏をなすつて、もう澤山よ――ごじやうだんは。

中塚。なに！　御戯談やと？

多津子。もう止して下さいな、私共は少々ばかり江戸兒ですから、じやうだんもあまりしつこいのはいやですよ。

中塚。何がじやうだんや！　何がじやうだんや！

多津子。（驚いたやうに）まあ、御戯談ぢやないんですか？　そんな御樣子をなすつて！　いやですねえ？

（二人とも暫くの間無言）

（獨白のやうに）まさかと思つてゐたのに！

中塚。まさかと思つてゐた？――何が？

多津子。何が何でも、貴方はまさかと思つてゐましたわ。昨日や今日に初めて知り合つたといふわけぢやなし、河村さんの事だつて、前からようく知つてらつしやるし――あんな馬鹿馬鹿しい事を貴方までが本當になさらうとは！

中塚。本當でない云ふのか。

多津子。本當　あるにもないにも――全く、馬鹿馬鹿しくつて！（短き間）私は貴方をそんな方だとは思ひませんでしたわ。さうですとも。世間見ずのお坊ちやんなんかと違ひ、流石に苦勞をして來ていらつしやるだけに、何につけても解りのいい方だと思つて、それを何よりいつたよりにしてゐたんですもの。

（ハンケチを齒に食ひしばり、暫くの間無言、中塚も小首を傾げてゐる。）

（ハンケチをべりべりと食ひ裂きて）よござんす！　私も決心しました！

中塚。決心をした？

多津子。ええ。長々御厄介になりながら、御恩返しもしないでしまふのは、殘念ですけれども、この場合致し方も御座いません、兎に角、今日限りでもう――御目に、かからないことにいたします！

中塚。ふむ。（短き間）だが――その後をどうする。

多津子。私も意地です！　河村さんのところへ押しかけて行つて――あの人も面喰ふでせうけれど――さうです、河村さんの奧樣にして頂きます。出來ても出來なくても、出來るだけの事をやつて見るのが私の意地ですから！

（椅子にかけ、中塚と見物とへ顏をそむけてゐる。）

中塚。しかし、惚れ合うた仲なら兎に角やが、意地だけで一緒になるいふのは、つまらんこつちやな。

多津子。つまらない事だつて！（再び顏をそむけて）どうせ、貴方なんぞに解るもんですか？（口惜しげに涙聲で）贅六者の貴方な

んぞに――私達の斯うした心持が――解るもんですか！

（泣きじやくりしてゐる側に立ち寄り、中塚は腕組みをしながら默然と見下ろしてゐる。）

中塚。（獨白のやうに）一體、どうしたんやらうな！（半ば獨白の樣に）私が早合點をしたといふのかな！

（多津子は、のぞき込んでゐる中塚の視線を避けながら、手早く涙を拭うて、くるり見物の方へ向き直る。）

事實でもないことを、事實のやうに思うてゐたのなら、私が惡い。私はお詫びをする。あんたも機嫌を直して呉れ。

（多津子、依然として沈默、卓上のマッチをいぢつてゐる。）

（强ひて笑顏を作りながら）さうまで機嫌を惡うせんでもよからうに、あんたも江戸兒なら、ちつとは、さつぱりしたところを見せて呉れるもんや。

多津子。だけど、あんまりですもの！

中塚。その事なら私が惡かつた云うてるぢやないか。

多津子。だつて私は、貴方がいらしたら御目にかけて、笑話の種にでもしたい位に、それ位にしか思つてゐなかつたんですもの。それをあんな――

中塚。（手を振つて）もうよい。もうよい。

多津子。ちつともよかないわ。貴方もなかなか人が惡いから、口ではそんな事を仰しやりながらお腹の中ではきつとまだ、つまらない事を考へていらつしやるに違ひないわ。

中塚。いやもう、解つた。よう解つた。

多津子。それはねえ、あんな出鱈目な記事を書かれたのにも、ようく考へて見ると、滿更理由がないことはないの。

中塚。え？　理由がないことはない？

多津子。ええ、實はね――まあお掛けなさいな。

（中塚、椅子にかける。）

實はね、河村さんも今度學校を御卒業だし、いい方があつたら、是非お嫁さんの御世話をしてあげたいつてね、さう思つてね、近頃折さへあれば、そのお話をしてゐましたの。

中塚。ふむ。

多津子。それがどうかして――（笑ひながら）こんなお婆さんが、河村さんのお嫁さんになると云ふ、飛んでもない噂になつたのかも知れないわ。きつとそんな事だと思ふわ。

中塚。なある、ほどなあ。

多津子。ところで貴方、こんな序に伺ふのは何ですけれども、いいえ、こんな序でもなくつちや伺ひにくい事ですがねえ。

中塚。エライむづかしさうな話やな。

多津子。貴方の姪御さんの　あの雪子さんは如何でせう？――河村さんのやうな、まだやつと學校を出たばかりのお醫者さんなんかには――

中塚　うむ。

（腕組みをして考へてゐる。）

多津子。人物はもう、改めて申し上げるまでもない事だし、それに第一御次男で、御自分の御家を繼がないでもいいんですしね。

（二人とも暫く無言でゐる。）

河村。（帽子を片手にさげ、額の汗を拭きながら、入口の近くに來て）御免下さい。

多津子。（ふり返つて）おや、どなたかと思つたら！

河村。（二三歩室内へ踏み込んでから、中塚の姿を認めて棒立ちとなり）御客樣でしたね！

中塚。ああ、河村君ですか？

多津子。（立ち上つて出迎へながら）さあ、どうかお掛けになつて下さいな。

中塚。まあお掛けなさい。ちつとも構ひませんから。

河村。（誰にともなく一寸默禮すると共に、あとじざりしながら）僕は別に、用事はないんです。また來ませう。

多津子。あら！ どうしたの？ いいぢやありませんか。

河村。でも僕は別に……

多津子。實はね、丁度いい處へいらして頂いたんですよ。

河村。え？

多津子。今ね、中塚さんと、貴方のお嫁さんの話をしてゐたところなの？

河村。僕の――（二人の顏を見較べながら、お嫁さんと仰しやつたんですね？

多津子。そんなにきまりを惡がることはないわ。いろんなお話の序にね――（河村へ目示しながら）あの、ほら、雪子さんの事を伺つて見たところなの。

（河村は何の事ともわからず、目をぱちくりしてゐる。）

（中塚の方へ）本當にしやうがないんですよ。此の人は聽診器なんかかけて、仔細らしく小首をひねるところは御立派ですけれど、こんな話をすると、それやもう大變なはにかみやさんでしてね。

中塚。いや、みんな若い内はさうしたものや。私なんぞは今でもそれやからな。

（中塚の笑ふのにつれて、多津子も大袈裟に笑ふ。）

お時。（左手のドアから入つて來て）あの、中塚樣へ會社の方から御電話でございます。

中塚。（起ち上り）一寸失禮。

（女中と共に出て行く。）

河村。（さきに中塚のかけてゐたところと、多津子との間なる椅子にかけて）一體どうしたんです！ 雪子さんの事といふのも、何の事です？

多津子。（微笑しながら）まあ、いいから、いい加減にばつを合はしていらつしやいな。

河村。ばつを合はせると云つて――（ちつと多津子の顏を見ながら）もう、そんな必要は……

多津子。兎に角、此場合面倒ですから、私のいい加減な出鱈目に、貴方もつき合つてゐて下さいな。

河村。だが、あの人はもう――（前に置かれた新聞を指さし）これを見たんでせう？

多津子。見るには見たんですけれど、仕合せとあの人は本當にしませんしね、私にも一寸考があるんですから。

河村。仕合せと？ あの人が本當にしないのを、貴女は仕合せだと仰しやるんですか？

（中塚がはひつて來る。）

多津子、ねえ、中塚さん、如何なものでせう？――さつきの雪子さんの御話は？

中塚。（椅子にかけながら）左樣。河村君の前やからいうて云ふのでもないが、私は至極結構な事やと思ふ――あんな不束な奴でも貰うて頂くとなればな、だが、姉の考が――姉いうても私には兄嫁の事ですがな――あれがどういふか？

多津子。さうですねえ、あの方には――（笑ひながら）もつともつと、ハイカラの人でなくつちやお氣に召さないかも知れませんね。

中塚。それに、當節の事やから、本人の考も一應きいて見んことにはな。

多津子。御本人の方は大丈夫らしいんですわ。ねえ河村さん、さうでせう？

河村。（詮方なく苦笑しながら）然う云ふ事は、僕には……よく分らないんですが。

多津子。（立つて大窓の方へ行きながら）あんまり一生懸命になつてるから分るものまで

分らなくなるんだわ。（カアテンを引いて河村の方へ直射してゐた光線を遮りながら）西日がはひりますから、少し暗くなりますけれど。（もとの席へ近く歸つて來て）斯うして面と向つてちや、（中塚へ）貴方にも仰しやりにくいんでせうけれど、全くのところ、河村さんの御熱心と云つたらないんですの。

河村。（多津子の方へ）あんまり、餘計な事は云はないで下さい！

多津子。いいぢやありませんか？　これ位のところは。

中塚。（時計を出して見て）一寸會社の方へ顏を出して來んと工合が悪いから、（立ち上り）それぢや河村君、お先きへ失禮。

河村。（ほつと息をついた樣に）失禮しました。

（多津子、中塚を送つて出る。あとに頰杖をつき、暫く考へてゐた河村が、やがて立ち上つて左手のドアの方へ行かうとした時、丁度多津子が引き返して來る。）

多津子。どうしたの？

河村　中塚さんは、僕達二人の間を何とも思つてゐないんですか？　何とも云はなかつたんですか？

多津子。ええ。

河村。いや、そんな事よりも貴女はあんな口から出まかせを云つて、僕にまであんな馬鹿馬鹿しいお附合をさして――一體あんな事をする必要があるんですか？

多津子。ええ。必要があるの。

河村。あんな出鱈目を云ふ必要が？

多津子。（椅子にかけて）本當はね、出鱈目ぢやないんですの。私は眞面目に、貴方のお嫁さんをお世話して上げたいと思つてゐましたの。

河村。眞面目に？　僕のお嫁さんを？

多津子。まあおかけなさいな。

河村。（椅子につまづきながら）眞面目に僕の――（辛うじて椅子にかけ）そしてあの雪子さんと云ふ人を、僕のお嫁さんに？

多津子。眞面目な話つてものは、あんまり改まつちや、却つて切り出しにくいものですからね。一寸、あんな機會をつかまへて見たんですわ。

河村。それぢや、貴女は、貴女は僕を……

多津子。あら！　誤解しちや困るわ。私と貴方とは――

河村。その關係はどうなるんです？

多津子。どうもならないわ。やつぱりこれまで通りよ。これまで通りでいいぢやありませんか。

河村。そ、そ、そんな、そんな馬鹿げた事が！

多津子。出來るものかつて、さう仰しやるの？

河村。（極度に興奮して、椅子から突つ立ち上り）多津子さん！　廻りくどいことを言ふのは止して下さい！　お互に遠ざかつてしまひたいならしまひたいと、なぜ貴女ははつきり云つてくれないんです。

多津子。困りますねえ――さう解らないんぢや。

（此時突然右手のドアに重い物のぶつかるやうな音がして、やがてそれから安岡禎が、醉歩蹣跚として出て來る。河村は驚いて見てゐる。多津子は一寸ふり返つて見ただけで、直にまた河村の方へ向き直り、河村の表情を見守つてゐる。）

安岡。（足許危げに踏み止まり）もう、そろそろ我輩が出馬に及んでも、早過ぎはしない樣だな。

多津子。丁度潮時よ――今が！

安岡。この坊ちやんは何とか云つたつけな。うむ、さうだ、河村君！　苦勞をして來た奴はだね、餘り間違つたことは云はないものだ。

それでだ、君はその、さつきの話の御嫁さんをだね、いや、その御嬢さんのところへ、お婿さんになつて行くのが頗る、非常にいいやうだぜ。

河村。多津子さん！　どなたです？――此方は！

安岡。此方か？　此方はつまりその…（多津子の方を指さしながら）ここにゐる古狸の…さうさな。

河村。（せき込んで）多津子さんと、どう云ふ御關係です？

多津子。さうね、以前はまんざら、路傍の人でもなかつたわ。

河村。と仰しやると――

安岡。（手をふつて）いや、待つた待つた。このけだもの共の昔の關係と、並びに今日の關係とをだね、詳しく説明して上げたなら、このお坊ちやんにも少しは世の中と云ふものがさ、少しは分つて來るかも知れないね。そして此の場合に處すべく、聊か、氣の利いた分別がつくかも知れないね。まあ、君！　お互に、そこへ掛けようぢやないか。

（安岡につづいて、河村も掛けるところにて幕。）

第二幕

（同じく多津子の内の客間。第一幕の時より三月ばかりを經過して、十月の半ば過ぎ、ある日曜の日の午前九時頃。前の時と異なれるカアテンを、三分一ばかり引きたる、正面の大窓を通して、その季節らしき草木の色が見え、椅子なども其の季節らしき物に改められてゐる。偖て多津子と中塚とが左手のドアに近く、次ぎの會話をしはじめてゐるところにて幕上る。）

多津子。大そうまたお急ぎですのね。

中塚。うむ、今日はな、夕刻でなければ來られんところだつたけれど、あの話だけは一刻も早う知らして上げたいと思うてな。

多津子。だけど、いい鹽梅にお話が纏まりましたのね――御蔭樣で。

中塚。なにせ、外ならぬ方からのお頼みやからな、私も骨を折らんわけに行かなかつたのや。

多津子。本當に、有難うございました。河村さんがどんなに悦ぶことですか？（笑ひながら）斯うお話がうまく行つて見ると、私なんぞ少々やける位ですわ。

中塚。（一緒に笑ひながら）いや、あんたにも其内よい御婿さんを捜して上げる――私の方で黒焦げに焼けるやうなのをな。ああさうぢや、河村君の方へは、それぢや、あんたから知らしてくれますな。

多津子。よござんす。直ぐに御手紙でも知らしてやります。

（多津子、ドアを開けてやる。）

中塚。（ドアの外へ半ば出ながら）だが、今度の一件についちや私もえらい目に遭うたぜ。姉がまた生憎と記憶のよい方でな、前に私が何の序にやら、河村君を惡う云うたのを、ちやんと覺えてゐくさつてな、改めてさうやない、まことにしつかりした人物やつて、なんぼ云ひ聞かしても聞き居らんでな。

多津子。それは面白かつたのね。きつと天罰よ――貴方が疑らないでいいあの人を疑つたりなんかした！

中塚。それでもな、今度の事で河村君への賠償も出來て、みんな帳消になつたわけや。は、は、は！

（中塚を送つて多津子も出てしまふ。はじめより餘り晴れやかでなかつた天が、愈々くもらはしくなつて來る。やがて多津子が引き返して來て、窓際に立ちて、物思はしげに雲行きを見てゐることしばらく。）

お時。（左手のドアを開き）河村さんがいらつしやいました。

多津子。（ふりかへり、お時の後に河村の姿を認めて、出迎へながら）いらつしやいまし。さあ、どうか。

河村。（寧ろ悄然として入り來り）朝つぱらから……構はないんですか？

多津子。いいえ、貴方よりも早いお客樣が、丁度今御歸りになつたところなの。ほんの一足違ひだつたわ――中塚さんと。

河村。さうですか。

多津子。（自分もかけ、河村にもかけさせ、一寸ふり返つて見て、ただ二人だけなることをたしかめ）どうなすつたの？　何だか御機嫌が惡さうね。

河村。ええ、少し――いや、かなり惡いんです。

多津子。さう。だけど、その方がいいかも知れませんね。

河村。どうしてです？　どうしてそんな、思ひやりのない事を仰しやるんですか？

多津子。其の埋合せに、あとではね、御元氣がよすぎる位になるんだから――きつと。

河村。それはどういふことでせう？（短き間）中塚さんからの御報告……の事ですか？

多津子。まあそんなしらじらしい聞き方をして！　だけど、昨日あの人が、雪子さんの御母樣から伺つた御返事といふのが、どんな御返事だと思ひます？

（河村、だまつてゐる。）

それをきいたら、何が何でも、そんな不景氣な樣子をしちやゐられないと思ふわ。

河村。實は、それはもう聞いてゐるんです。

多津子。おや！　どなたから！

河村。雪子さんからの、いまし方の手紙で知つたのです

多津子。早いのねえ！　流石に！

（二人とも無言。）

だけど、それなら全く可笑しいぢやありませんか？　あんなお芽出度い話を、しかも雪子さん御自身から知らして貰つて、それでゐて、どうして然うなんです？

河村。少しわけがあるんです。

多津子。わけが……それは又どんな？　ねえ、どんなわけがあるんです？

河村。僕は、それをきいて頂くつもりで來たんですが――

多津子。ぢや、なほのこと早く、それを仰しやいな。

河村。何だか。……つまらなくなつてしまつたんです。

多津子。私と話すのが？　それとも……（暫くして、半ば獨白のやうに）本當にどうしと云ふんでせうね。あの時、安岡さんと二人で說法したり、骨を折つたりして貴方と雪子さんを近づけたりした結果は、少々藥が利き過ぎた氣味合で……何でもなかつた雪子さんがあんなによくなり、そして私の方は、すつかりおいてきぼりを食つちまつてさ！　ねえ、さうだつたでせう？　さうでなかつたとは云へないでせう？

河村。何も決しておいてきぼりにしたと、さう云ふわけぢやなかつたんですが。

多津子。ぢや、どうなつたと云ふわけなの？

河村。それや、僕の貴女に對する心持も、あれまでとは別なものに成つたんですけれど。

多津子。隨分別なものに成つちまつた形ね。だ

けどまあ、それはそれとして置いて、兎に角あんなにまであの人に夢中になつて、隨分氣を揉ましてゐたほどの貴方が、それぢやあんまり早過ぎはしないことよ。

河村。早過ぎるつて、何がです？

多津子。貴方の、今度の氣の變りやうがさ――事の纏まるまで大騷ぎをして、纏まると同時にけろりとするのが、いくら、男の人の通有性だからつて、貴方のはあんまりだわ。

河村。僕のは、けろりとしたんぢやない！　僕自身ちつとも變つちやゐないんです！

多津子。それぢや――？

河村。變つたのは雪子さんです、雪子さんの心です。

多津子。本當ですか？

河村。本當どころぢやない。あの人からの手紙には、はつきりとした言葉で書いてゐるんです――折角母も承知して呉れた今日となつて、何の理由とても擧げられないことだけれど、自分はもう、どうしても結婚する氣になれなくなつたからと、はつきり書いてゐるんです。

多津子。まあ！

河村。そしてもう、二度と會ふことも出來ないから――また、そんな自分の我儘身勝手にお詫びのしやうも固より無いから、憎いところはどんなにでも憎んでくれと、さう書いてゐるんです――この手紙に、雪子さん自身が！

多津子。まあ、さうですか。

河村。ですから、多津子さん、貴女の前ですけれど――いや、正直に云ふと僕は、それでなくとも近頃貴女に對して濟まないやうな感情を有つてるんですが、兎に角、貴女の前ですけれど、僕は僕は、この一擊で以て、すつかり止めを刺されてしまつた。貴女のところへ來て、こんな事を言ひたくなるほどの目に遭つた。ああ（はじめて氣付いたらしく和服の懷から手紙を取出し）これが其手紙なんです。

（多津子が起つて來て手紙の中味を受取り、默つて讀んでゐる間に、河村は手に殘されたる封筒の表を見たり、裏を見たりしながら、默つて考へてゐる。）

多津子。（讀み了つた手紙を卷き納めながら）だけど……だけど、河村さんを嫌ひになつてゐないことだけはたしかだわ……冷靜にこれを讀んで見ると。

河村。貴女にはさう見えますか？

多津子。ええ、（短き間）これは何か――何かの行違ひが……さうよ。何か誤解のやうなものでもあるんぢやないかと思ふわ。

お時。（左手のドアを開き）あの、野々村樣の御孃樣が御見えになつて居りますが。

多津子。（ふり向いて）雪子さんが見えてゐる？

お時。はい。

多津子。こちらへお通しすればいいに。

お時。でも、御客樣かと仰しやいましたので、河村樣が御見えになつていらつしやいますとさう申し上げましたら、あの……

多津子。御上りにならないと云ふ――？　ああさう。ぢや、私が出て見ませう。

（多津子、女中と共に出て行く。立つたり坐つたりしてゐた河村は、やがて卓の上の手紙を懷に入れ外廊の方へ出かけたが、途中で考を變へ、右手の隣室へはひつて行く。そのあとへ、和服姿の雪子が多津子に導かれて屠所の羊の如き有樣にてはひつて來る。）

（河村のゐないのを氣付いて）おや、河村さんはどうしたんでせう？

雪子。丁度、よござんしたわ。

多津子　何がいいものですか！

雪子。でも私はただ、先生にだけ御目にかかるつもりで上つたんですから。ほかの方には、どなたにも御目にかかりたくないんですから。

多津子。私よりほかの人には、誰にも？

雪子。はあ。（短き間）實は先生にも、お手紙を書いて見たのですけれど…やつぱりお目にかからないぢや濟まされなくなつたのですわ。（俯いて最後に、もう一度――

多津子。まあ！最後にですつて、私にまで？

雪子。先生もどうか――（愈々俯いて、センティメンタルに）御身體を…御大切になすつて…

多津子。（ぢつと雪子の樣子を見入りながら）なんだかいやなことを仰しやるのねえ。そんな、つまらない事を考へるもんぢやないわ。（調子をかへて）兎にかく、かけてゐて下さいな。河村さんを呼んで來るから。

雪子。どうか、先生、後生ですから！それに幸あの方も會はないでゐて下さるのですから。

多津子。でもね、私が貴女のために、是非是非會つて頂きたいんですよ。

雪子。御目にかかつても、私はもう、なんにも申し上げませんから、なんにも。

多津子。ぢや、それはあとにして――まあ掛けませうよ。さあ、貴女もどうか。

（多津子、先づかけ、つづいて雪子も詮方なしに椅子へかける。）

それやね、どうしても御一緒になれないと仰しやるなら、致し方もありませんけれど、それにしたつて、つまらない行違ひが原因になつてゐたりするやうぢや、私達としても何だか殘念ですからね。ですから、兎に角、もう一度御會ひになつて頂いて、そして河村さんにも、何とか一應の御諦めのつくやうにね。

雪子。でも私には、御手紙で申し上げたより以上の事は、申し上げられませんもの。

多津子。ぢや、斯うしませう。唯だ會ふだけ、唯だあの人の言ふ事をきいて上げるだけにね。切めて、それ位の事は、して上げるものよ。貴女も。ね、いいでせう。

（雪子が答へに躊躇してゐた間に、多津子は起つて隣室へ行き、間もなく、河村を連れて來る。その物音に雪子は起ち上り、半ば河村の方へふり向いて默禮すれば、河村も默禮を返して立つてゐる。）

（河村へ）今も雪子さんに申し上げた事ですが、どうしても御一緒になれないと仰しやるのなら何とも致し方のない事ですけれど、それにしたつて、つまらない誤解なんぞが其儘になつてゐたんぢや、面白くありませんからねえ。（雪子へ）ねえ、貴女も如何です？――いつそ思ひ切つて、何もかも仰しやつて仕舞つちや。貴女の仰しやりにくい事があればある程、河村さんの方ぢや一層きたい事なんでせうからね。

（河村、一二歩踏み出し、何か云はうとして云ひ淀む。）

（思ひ出したやうに）ああ私一寸、時やに云ひ附ける用事を忘れてゐましたから。

（自分を打棄てて行く後姿を、雪子はたよりなげに目送する。多津子が右手のドアの處にてふり返り、目示にて其の儘にしてゐよと雪子に命令し置き、室を出てしまつた後は緊張したる長き間の沈默。）

河村。（化石の如くなりし姿勢を辛うじて崩し、片手を懷に入れながら）御手紙は、さき程拜見しました。

（雪子、返事する代りに、少しばかり河村の方へ向き直りて差し俯く。）

河村。僕は意外でした。(短き間)僕は何を、あんな御手紙を頂くやうな事を何――をしたでせう。

雪子。(俯いた儘 私が悪いんです!(短き間)なまなか、それを許して頂くよりも……

河村。え? 何と仰しやつたの?

雪子。いつその事、いつまでも憎んで……憎んで頂きたうございます。

河村。憎む? 何を憎むんです? 理由もなく行つてお仕舞ひになる、その不思議さを憎むんですか? それとも……理由のあるに係はらず、仰しやらないでゐることの我儘を、それを憎むんですか?

雪子。(涙を拭ひ、目をあげてぢつと考へた後、再びうなだれて)やつぱり、理由がありますわ! いゝ、いゝ、いゝ、とてもとても御一緒になんぞなることの出來さうにもない悲しい……情ない理由があるんですわ!

河村。(稍々長き沈思の後、決然として)雪子さん、貴女は僕を、信用してくれませんか? この僕がどんなことをでも赦し得る人間だと云ふ事を! いいえ、僕が赦す赦さないにかかはらず、貴女が……心から、眞心から悔い改めて御仕舞ひになりさへすれば、貴女のなすつたどんな事でもが、それでもう、綺麗になつてしまひます。それを信じませんか? 僕の爲めに信じてくれませんか?(ずつと雪子のそばに寄り)強ひて、僕の前に告白しないでもいい事です。ただ心の中に悔いて、本當に悔い改めて――

雪子。(のぞかれてゐた面を反けて)私のは……悔い改める、とも貴方から赦して頂くことも、神様から赦して頂くことさへも出來ないやうな……罪惡よりも何よりも悲しい、情ない事なのです!

河村。えッ! 罪惡よりも何よりも?(短き間)そんな、そんな事が!

雪子。(倒れさうな體を椅子に支へながら)貴方のこれまでの……私は永久に……(ハンケチで面を蔽ひながら)これでお別れいたします!

(默禮してよろけながら河村の側をすりぬけ、左手の方へ行きかけたが、立ちどまつてハンケチを顔からはなし、くるりと向き直つて、右手の隣室へ駈け込んでしまふ。)

河村。(茫然として立つてゐたのち、不圖思ひ出したやうに雪子のあとを追ひながら)雪子さん! 待つて下さい! お別れする前にもう一言!

(ひとたびしまつたドアを、再びあけて隣室へはひる。そのあとへ、外廊からのドアをあけ放し君江が駈け込んで來る。)

君江。(寢椅子に身を投げて、胸を叩きながら)苦しい! おお苦しい!

安岡。(外廊からのドアに近く現れて、庭の方を見ながら)うむ、たうとう本降りになつて來あがつたな。(室内へはひり、背後にドアを締めて)もう少しで、づぶ濡れになるところだつたね。

君江。ああ、苦しかつた。

安岡。(圓卓のそばの椅子に、君江の方に向いてかけながら)だがよく、あんなに駈けられるもんだなあ――まるで兎かなんかのやうだつたぜ。

君江。あら、酷いわ――兎だつて! 伯父さんこそ本當にぐづぐづしてゐて、丁度……何かのやうだつたわ。

安岡。何かのやうだつたは、面白いなあ。は、は……。

君江。だけど、つまらなかつたわね――、折角樂みにしてゐた今日の遠足も!

安岡。いや、お蔭様で俺は助かつたよ。前の日曜みたいに、一日中此御孃樣に引廻されたんぢややり切れないからな。

君江。あら、あんな惡い事を言つて！　いつも、私が勉强してゐるのも御構ひなしに、引張り出しに來る癖に。だから、伯父さんは嫌ひだと云ふのよ。

安岡。嫌ひでもいいが、君ちやんは一體、どちらを餘計に嫌ひなんだい――伯父さんと伯母さんと？

君江。伯母さんはちつとも嫌ひぢやないわ。伯父さんみたいに私の嫌ひな事を云つたりなんかしないから。

安岡。（ポケットの煙草を探りながら）さうかねえ。

君江。だけど、伯母さんも……

安岡。伯母さんも？　少しはいけない事があるのかい？

君江。（半ば獨白のやうに）こんな事は云ふもんぢやないかしら。

安岡。（興味をもつて）どんな事だい？

君江。（寢椅子から起つて、圓卓のそばへ來てかけ）伯父さんは、私に何でも聞かして吳れるから、私も隱さないで云ふのよ。

安岡。うむ、それがいい。

君江。あのね、（短き間）伯母さんはね、私を可愛がつて吳れるんだけれど、それや可愛がつて吳れるんだけれど、……ただね、二人つきりでゐる時でないとね、本當には可愛がつては吳れないの。

安岡。（沈鬱に）ふむ。さうか。

君江。私はね、それがいやなの。

安岡。さうか。

君江。私、何だかつまらないの。

安岡。（君江と見物とに顏をそむけて）君ちやんは……御父さんか御母さんの事を、知つてゐるのかい？

君江。伯母樣から聞いたわ――私が生れると間もなく、亡くなつたんですつてね。

安岡。亡くなつた？

君江。本當は――伯父さんも御存じでせうねえ――本當は、赤坊の私を打つちやつといて、二人ともどつかへ行つちまつたんですつてね。

安岡。うむ。さうだ。俺もさう聞いてゐる。

君江。そんな惡い人達の事だから、よその方にお話しちやいけないつてね、いつも伯母さんが仰しやるのよ。

安岡。うむ。伯母さんの云ふ通りだ。

君江。だけど、そんな人達でも……まだ亡くなつた人でなければ……生きていらつしやるのなら私も……

安岡。いや、そんな事は考へないがいい、考へるもんぢやない。

君江。（小さな太息をつき）さうでせうか。

（二人の會話の絕えたるところへ、右隣の室から河村が出て來る。）

おや、今日は！　河村さんよ！

安岡。（椅子にかけたままふり返り）ああ、河村君か？

（河村、默禮の後大窓の脇へ行き、腕組みをして壁によりかかる。）

（河村の樣子を見て、自嘲の心持をも含みながら）天氣模樣のせゐか、今日はみんなが少しづつ興奮して見えるやうだなあ。（短き間）河村君――いや、丁抹の王子ハムレット殿！　その御樣子は如何なされた？　煩悶とやらをなされるところかな。

（安岡の調子の可笑しさに君江も安岡と一緒になつて笑ひ出す。）

河村。他の場合とはちがひます。今日はからかふのはよして下さい。

安岡。いよいよこれや、天氣のせゐだな。

河村。僕は今、非常な地位に立たされてゐるんです。僕の最終の運命が、斯うしてゐる内に決定されるんです！

安岡。それは大變だ。オフィリアでもどうかしたのだね。

河村。折角あの人の御母樣も承知して呉れた今日になつて……

安岡。あ、さうか。（短き間。察するに、本人が尼寺へでも行きたくなつたね。

河村。（覺えず腕組みを解いて）えッ！ 尼寺と仰しやつたんですね？

安岡。うむ。どうかすると、オフィリアの方から尼寺へ行きたいなぞと云ひ出してね、若いハムレットを面喰はすものだよ。

河村。實際、さうです。雪子さんは、どうしても一緒になれないと云ひ出したんです。

安岡。さうか。（頰杖をついて）ふむ、矢張さうか。

河村。そして其理由を、直接僕にはどうしても話されないと云ふ理由を今、多津子さんが聞いて呉れてゐるんです。

安岡。さうか。（短き間）だが、余計な事かも知れないな。

河村。なぜです。

安岡。なぜと云つて、世の中には、分つて見てためにならない事も少しはあるからな。

河村。それでも僕は分りたいんです。今の場合の僕から云ふと、その爲めに、一層不幸な事にならうとも、分らずには、知らずにはゐられないんです。そしてもう三分か五分の内に、事に依つたら、此次ぎの瞬間に、一切が決定してしまふんです！

安岡。（椅子を立ちながら）さうだ、三分や五分の間なら大した事もない。ぢや、それまでのところ、折角煩悶して見るさ。その代り、運命の決定したあとで、あんまりへこたれないやうにね。（さきほどより一心に河村の樣子を見入つてゐた君江へ）おい！ 俺達はあちらへ行つて少し休まうよ。

君江。（立ち上り、一緒に外廊の方へ出て行きながら）あちらへ行つて伯父さんは、またお酒を召上るのねえ。

安岡。うむ、丁度、それを思ひ出したところさ。

（大窓を通して、外廊の上を右へ二人の姿が消えてしまふ。あとに河村が室の中の獸のごとく、室内をぐるぐると廻つてゐるところへ、右手の隣室から多津子がはひつて來る。）

河村。（跳びかかるやうにして多津子へ近づきながら）何んと云ひました？ どんな事を云ひました？

多津子。（微笑をふくんで椅子にかけながら）まあ、ここへ掛けるまで位御待ちなさいよ。

河村。（掛けながら）でも、どんな理由だと言ひました？

多津子。私もね、實を云ふと、少々心配になつてたんだけれど、よく聞いて見るとね——

河村。つまりどうなんです？

多津子。なんでもない事なの。

河村。なんでもない事ですつて？

多津子。さうよ、本當になんでもない事なの。なにしろ、あんな箱入の御孃樣だもんだから、つまらない事を大袈裟に考へてゐたんだわ。

河村。と云ふと——？

多津子。それはね、雪子さん御自身も近頃まで、忘れてゐた位の話なの。

河村。ぢや、あの人の、子供の時分の御話かなんかですか？

多津子。ええ、あの人のまだほんの子供の時分

に――内の君江位にもなつてゐなかつた時分の事だと云ひますがね、御近所の或る不良少年に――

河村。（腰を浮かして卓の上へ乗り出しながら）え？　不良少年がどうしたのです？

多津子。雪子さんは隨分廻りくどく云ひましたがね。つまりまあ、それが雪子さんに、惡い事をしたのよ。（短き間）雪子さんの體を處女でなくしたと云ふのよ。

河村。（再び椅子に腰を落し　表情のない聲で）さうですか。

多津子。要點はそれだけなの。そして自分でも、其時分まだ子供の事でもあるし、あんまり重大に考へもしないで濟んだんださうですがね、近頃になつて、貴方を好きな人だと思ふやうになてかつらのことよ、忘れるともなく忘れてゐた位な其一件が、だんだんと記憶の中によみがへつて來たと云ふんですの。そしてね――

（さき程から降りしきつてゐた雨に風も加はつたらしく、外に開いてゐた窓の鎧戸かなんかがかたことと鳴る。）

（起つてドアの方へ行きながら）ひどい風になりましたこと――

（多津子が外廊へ出て鎧戸の音を止めて歸るまで、河村は腕組みをして幾度か太息をついてゐる。）

（再び椅子にかけながら）それでね。雪子さんの御話はつまり斯うなの。貴方がたの御結婚に、いよいよお母様も御贊成だと云ふ事にまでなつて見ると、昔の其事件が氣になつて、ゐても立つてもゐられないといふんです。雪子さん御自身の言葉で云ふと、過ぎ去つた昔のその汚點がね、はてしもなく大きく擴がつて來て、これから先きの生活を、すつかり包んでしまつて、眞暗にしてしまふといふわけですわ。（俯いてゐる河村の顏をのぞき込み）ねえ、それで分つたでせう？

河村。（俯いたまま）よくわかりました。

多津子。でね、私は斯う云つてやりましたの――そんな事はなんでもない、世間にはざらにある事なんだけれど、他の人達は格別氣にもしないし、口に出して云ひもしないだけだつてね。それは實際さうでせうからね。（笑ひながら）もつとも、私は直接に經驗したわけでもないけれど。（河村がふと上げた面を見咎めて）あら！　どうしたの？――そんな樣子をして！　もつと安心したらしい顏を見せてもいいぢやありませんか？

（河村、またもや無言の儘に太息をつく。）

いやですねえ、河村さん！（短き間）貴方までが雪子さん同樣な、子供らしい事を考へるんですか？

河村。（腕組みをほどきながら）それや、子供らしい考へかどうか知らないんですが……

多津子。さうですか！　貴方までがさうですか！

河村。兎に角、貴女の仰しやるやうな、何でもない問題ぢやないと思ひます。

多津子。（獨白のやう）さうですかねえ！

（二人とも暫くの間無言。）

（强い調子で）だけど、河村さん。貴方はさう仰しやつたさうぢやありませんか？――雪子さんがよし、何か惡い事をして、そしてそれがどんな惡い事であらうとも、みんな赦して上げるつて！　貴方は雪子さんの犯したどんな罪惡をでも赦して上げようと云ひながら、あの人に何の責任もない――狂犬にでも嚙まれたのと同樣な、あの人のただの災難に過ぎないものを――それを咎め立てしようと云ふんですか？

河村。僕は咎め立てするんぢやない。いいえ、

咎めることの出來ないものです！

多津子。それならば、なぜ、なぜ――

河村。なぜ、それ程氣にするかと仰しやるんですか？

多津子。ええ。なぜ人の災難を、その人の罪以上に扱ひます？

河村。それは――人の罪惡なら、赦してやる方にも大きな滿足がある。けれども人の災難に對しては、咎めたくも咎めることの出來ないやうなもどかしさ、歯がゆさがあるばかりです！

多津子。さうですか。さう云ふ理窟ですか。

河村。いや、理窟は貴女がいはしただけで、根本は理窟の問題ぢやない。

多津子。それぢや、つまらない理窟なんぞぬきにして、貴方の感情は――貴方の趣味はどうしても、雪子さんと一緒になる事を許さないと云ふんですね。あれだけ熱してゐた貴方が、あんな事柄の爲めに！

河村。待つて下さい。まあ、待つて下さい。そんなにわけもなく冷却してしまふほどの熱情だつたらば、僕も斯うまで苦しみません。僕は、いいえ、僕も雪子さんも共々に……復讐することの出來ない打撃を受けたのです！（頭を抱へながら）全くのところ、どうしていいものか、分らなくなつて來た。實際どうしていいものか！

多津子。（太息をつきながら再び獨白のやうに）少し大袈裟のやうだけれど、やつぱり、さうしたものでせうかねえ。

（此の時、右手奥の方にて、突然の喧噪を生ず。無言の儘に多津子はふり返り、河村は彈かれたやうに起ち上つてゐる。）

君江。（ばたばたと駈けて來て、左手のドアを開くより早く）雪子さんが！　雪子さんが大變よ！

河村。えツ！

多津子。（河村と殆んど同時に）えつ！　雪子さんが！

（ドアに立ち塞つてゐる君江を突きとばすやうにして、河村が隣室へ駈け込めば多津子もつづいて駈け込む。奥の方では新しき喧噪を加へて來る。間もなく多津子が右手ドアから左手ドアへ駈けぬける。多津子が引返して奥へはひつた後に、二三人の男女が、或は左手ドアから或は外廊からはひつて同じく右手ドアへ駈け込んでしまふ。そのあとの空虛なる客間へ、雨も止み風も落ちたる後の爽かなる光がさし込んでゐる。やがて、手にヰスキイの壜を下げ、大窓の外を廻つて、ふらりふらりとはひつて來た安岡が、室の中央に立ち、或る椅子の背につかまりながら、あたりを見廻してゐるところへ、右手ドアからお時がはひつて來る。）

安岡　なんだか騷々しいぢやないか。

お時。（一寸立ちどまり）あら、御存じでいらつしやいませんか？

安岡。うむ。何事であるか、一向に御存じでいらつしやらないのだ。

お時。雪子樣が、あの野々村樣の御嬢樣が大變な事を――

安岡。なに！　雪子さんが？

お時。あの二階のてすりから御落ちになつたので御座います。

安岡。二階から落ちた！

（それまで抱へてゐた壜をガタリと卓の上に置く。その音に驚き、お時は自分の用事を思ひ出したらしく、すたすたと外廊の方へ出て行つてしまふ。安岡は右手ドアの方へ近づいたが、それに手を掛けることを思ひ止まり、大窓の脇の處へ行

きてその壁に背をもたせ、腕組みをし、がくりと首を垂れて考へ込んでゐる。そこへ奥から河村が出て來て立ち止まり、安岡と顏を見合はせる。）

河村。駄目か？

安岡。打ち處が惡いのか？

河村。なにしろあの高い涯の下へ落ちたのです。それに惡い物を……

（毒藥を吞む手眞似をする。）

安岡。毒藥かい？（河村のうなづいたのを見て）しかし、君は醫者ぢやないか？

河村。ところが駄目です。自分でわざわざ工夫した藥品だけに、解毒の不可能であることも、自分が一番よく知つてゐるんです。

安岡。さうか、その毒藥は君自身で！

河村。（半ば獨白のやうに）本氣に誰が吞むつもりでも、誰に吞ませるつもりでもなかつたが……

安岡。いや、さうした氣まぐれから、さうした結果になるのは有勝ちの事だ。

河村。貴方は、あの人がどうして……どうして死んだと思ひます。

安岡。いや、それは聞くまい、若い女の死んだ時、その原因を知るものは、一人でも少い方がいい。

（此時左手のドアが大きく八文字に開かれて、眞白き布をかけたる雪子の死體が、臺に乘せたる儘書齋にかき込まれる。それに附き添うて多津子君江などもはひつて來る。）

お時。（外廊の方から聲高に）一寸、待つて下さいな。こちらの方を、少し片附けなくちや通れませんから。

多津子。ぢや、（大窓の前、二間ばかりの處を指さし）そこいらへ置いて、あちらを手傳つてやつて下さいな。

（椅子などの上に死體の臺を据ゑ置き、その手の者兩三人に君江もつづき、外廊の方へ出て行く。安岡は一二歩踏み出して腕組みを解き、眞白き布をつくづくと見下ろしたる後、見物へ顏を反けるやうにして寢椅子のところへ行き、ごろりと横になる。河村と多津子とは大窓からはひる前よりも一層朗らかなる光を背に受けながら、死體を目の前に、相並んで立つてゐる。次第に頭を垂れて來た多津子は遂に堪へがたくなり、ハンケチを目にあてて咽び泣く。それに促された河村も、横へ向き涙をかくしながら泣く。）

（泣き止んでハンケチを取り）河村さん！

河村。（横を向いたまま）何ですか？

多津子。雪子さんももうこの眞白い布のやうに、雪のやうに綺麗になつたでせうね！今では貴方にもさう思へるでせうね？

河村。（正面へ向き直つて）いいえ、雪子さんは、はじめから純潔でした。純潔でなかつたのはむしろ僕なのです。それがはつきりと分つて來ました。

多津子。（進み出でて河村の手を取り、更に布の端をかきのけ、雪子の手を河村の手に握らせ）斯うして此手を握つた貴方は、雪子さんが純潔だつたやうに純潔になります。きつとなれます。他の事はみんな忘れてしまつても、どうかこれだけは忘れないでゐて下さい――私が雪子さんの此冷たい手を、貴方の手の中に置いたと云ふことをね、雪子さんの此純潔な此冷たい手を！

河村。（雪子の手を、そつともとの位置へ返しながら）この手は決して冷たい手ではなく、私の手よりもずつと溫かでした！

君江。（外廊からはひりながら）あちらも片付

きましたから。

（君江につづき、先きほどの男女二三人がはひつて來て、大きく開かれたドアより外廊へ、靜肅に運び去る。それに附き添うて君江河村なども出て行くのを、多津子は默然として目送し、やがて圓卓に殘れる一脚の椅子にかけ、頰杖をつき、俯いて沈思をつづけてゐる。安岡、身を起して手近のベルを押す。）

お時。（はひつて來て多津子へとも安岡へともなく）御呼びになりましてございますか？

（安岡、手眞似で、盃を持つて來いと命ずる。）

あの盃でございますか？

（安岡、うなづく。やがてお時が盃を持つて來る。安岡、再び圓卓のキスキイを指さし、自分のところへ持つて來させる。女中の去つたあと、自分でキスキイを注いでぐつと呑み干し、二杯目を注ぐ。）

安岡。（多津子へ）おい、どうした？

（多津子、頰杖をついたまま、目を上げて安岡を見る。）

すつかり考へ込んでしまつたな。なにか氣の利いた考へでも出て來たかい？

多津子。ええ、少し賢くなつたやうに思ひます。

安岡。さうか。

多津子。世の中は、年の行つたものが、若いものを賢くするとばかりとも云へませんのね？

安岡。うむ。

多津子。（輕い調子で）濟みませんが、一寸そこのベルを押して下さいな。

（安岡、ベルを押してやる。二人の暫く無言でゐるところへ君江がはひつて來る。）

君ちやん！ 丁度貴女を呼びたかつたの。こちらへいらつしやい。

（君江、多津子の樣子を怪しみながら近づく。）

こちらへいらつしやい――もつと。

（身近く寄つて來た君江の兩手を取り、ぢつと其顏を見入る。）

君江。伯母さん！ どうしたの？

多津子。私をね。此の伯母さんをね…母さんと云つて御覽なさい！

（君江、不思議さうな顏をして、無言の儘でゐる。）

ね、さう云つて御覽なさいな、さう云つて！

君江。（機械的に辛うじて）かあさん！

（多津子、君江の手を引き寄せて抱きしめる。）

ぢや、本當に…（多津子に抱かれた儘目を上げて見て）本當に、本當に私の…

（やがて多津子の手をのがれて起ち、多津子の視線の安岡に注がれてゐるのを見るや否や、くるりと安岡の方へ向き直る。）

ぢや、あの伯父さんは…私の…？

（安岡、うなづきながら、手を擧げて招く。君江は駈け寄つて安岡の足下に跪く。）

（狂喜の聲を張上げて）ぢや、伯父さんは父さんだつたの！ 父さんも、母さんもあつたの！ （安岡の膝に頭を埋めて咽び泣きながら）私は！ 私は！

（安岡、默つて其背を撫でてやる内に、嗚咽の聲も次第に納つて來る。多津子は先刻より、自分の胸を撫でながら安岡と君江を見やつてゐる。）

中塚。（外廊から駈け込んで來て）あ、こちらか！ 多津子さん、一體どうしたんや、今度のことは！

多津子。（椅子を起つて）まことにお可哀想な事をいたしました。

中塚。どうして、こんな無分別をしたもんや

ろ？　いゝゝ、あんたゝ其理由を御存じないかな？
多津子。（冷然として）云つて見れば、私があの方を殺したやうなものでございます。
中塚。えッ！
多津子。私が表面にはあの人達を近づけながら、內實は戀の邪魔をしてゐたのです。
中塚。いゝゝ、あんたが邪魔をしてゐた？
（君江、此頃より中塚、多津子の對話に注意を拂ふ。）
多津子。その結果が、罪のない娘さん一人を、氣毒な犧牲にしたのです。
中塚。それぢや、いゝゝ、あんたは矢張‥‥（多津子の身近く詰め寄せて來て）あんたは何んぢやな‥‥
君江。（中塚と多津子との間に飛込むやうに）伯母さんは私の母さんだつたわ！　本當の母さんだつたわ！
中塚。え？　なんぢや？
（驚き異んで、君江と多津子との顏々見比べる。）
君江。私には、母さんも父さんも――（安岡を指さし）父さんもあつたんだわ！
（中塚、安岡の方を一瞥すると共に、覺えずたじたじと二三步退き、呆然として立つてゐる。）
ああさうだ！　時やにも、みんなにも知らしてやらなくちや！
（君江は、雀躍りしながら駈け出して行く。）
中塚。（辛うじて意識を回復して）いや、今日の場合、こんな話でもないもんぢや。うむ、さうぢや。
（後退るやうにして出て行く。その足音の消えるや否や、多津子は倒れるやうにして椅子へかけ、荒々しい息遣ひをしてゐる。）
安岡。だいぶ苦しさうだな！（君江が膝をはなれてのち、またもや頻りに傾けてゐた盃を差しながら）どうだ、一つ上げようか？
（多津子、安岡のところへ行き、相並んで寢椅子にかけ、默つて盃を受ける。安岡、默つてキスキイを注いでやる。）
多津子。（盃を心持さし上げながら）だけど、これは一體どう云ふ盃なんでせうね。
安岡。（仰向いて瞑目しながら）さうさな。どう云ふ盃かなあ！
多津子。何もかも、みんなが新しくなると云ふんでせうか？（短き間）新奇蒔直しと云ふんでせうか？
安岡。いや、新奇蒔直しだけは待つて吳れ。
多津子。どうして？
安岡。どうしてと云つて――俺達はまだ、無駄な苦勞といふものは、一遍もしたことがないからな。
多津子。それはさうね。私達二人のこれまでの生活も、やつぱり、一遍は通らなくちやならない道筋だつたのね？
安岡。兎に角、これで一段落と云ふものだ。
（多津子、盃を乾して安岡に返し、お酌をしてやつてゐたとき、どん、どん、どおんと鐘が鳴り出す。）
（盃を持つたまま起ち上つて）火事かと思つたら‥‥
多津子。（笑ひながら）ニコライの鐘よ！　これから禮拜が始まるんだわ！
安岡。さうか。今まで氣にも留めなかつたが、なかなかいい鐘だなあ！
（再び鐘の鳴り出すところにて幕。）

（一九一九年四月作）

彫刻家とその妻（一幕）

人物
彫刻家。
彫刻家の妻。
大學を出たばかりの青年。

（かなり裕福に暮らしてゐる彫刻家の製作室の内部。正面は全部ガラス戸になつて居り、月雲間を出づれば、それを通して外廊の欄干、秋らしくなつて來た草木などを見ることが出來る。室内左側にドア一つ、右側にドア一つ窓一つついてゐる。大きな電燈を載せた中央の卓をめぐつて椅子二三脚。その一つに、今しがた旅行から歸つて來たばかりの彫刻家が腰を下して、煙草を燻らしながら、左手奥に立つてゐる大きな大理石の立像を眺めてゐるところにて幕上る。やがて、左側のドアをあけて彫刻家の妻がはひつて來る。）

妻。御召更になればいゝのにね。

彫刻家。（ふり返り、妻の持ち來れるコニャックの壜を見て微笑しながら）兎に角、こちらが當面の急務だからな。

（コップを取上げ、それに酒をつがせる。）

妻。平野水でも持つて參りませうか？

彫刻家。（旨さうに一口嘗め）いや、この儘で結構。

（再び大理石像の方に向き直り、貪るやうにして眺めてゐる。）

妻。貴方、もう御氣がつきましたの？

彫刻家。（ふり返り）え？　何か言つたね。

妻。御留守中に飛んだお粗相を致しました。

彫刻家。何をしたんだ？

妻。貴方があれほど、何物よりも大切にしていらしたあの立像の、左の手を折つてしまひました。

彫刻家。（はじめて合點が行つたかの如く）さうか、成程さうか！

妻。私は貴方が、私を御怒りになるよりも、御自身でどんなに御失望なさるかと思つて……

彫刻家。（やはり妻の言葉に頓着なく）いや、それで分つたよ！

妻。分つたと仰しやると？

彫刻家。今度歸つて見ると、この立像全體の與へる印象が、旅行に出掛ける前と全然變つてゐるんだ。それまでどうしても取去ることの出來なかつた餘計なものが、綺麗になくなつてゐるんだ。

妻。（稍や、意外らしく）餘計なものが！　綺麗になくなつて！

彫刻家。さうさ。最も俺らしい缺點が、或は最も俺らしくない缺點が取れてしまつて、本當の作品になつてゐるんだ。少くとも現在の俺の仕事としては、一通り完成した物になつてゐるんだ。

妻。では、あの手がかけた爲めに一層立派になつたと仰しやるのね？　皮肉でも、じやうだんでもなしに。

彫刻家。俺は昔から、そんな厭やつぽい皮肉や、氣の利かないじやうだんは言はない漢だ。俺は心からお前に御禮を言ふよ。

妻。でも私は……

彫刻家。（妻の言葉を耳にも入れないで）お前

がよし、たゞの過失からでなく、故意に、惡意で以て壞したのであつても、俺は御禮を言つたと思ふね。

妻。(椅子にかけて)私はもう、本當の事を申し上げます。

彫刻家。(妻の顏をまともに見て)お前は少し興奮してゐるやうだな。

妻。興奮しないぢやゐられません。私は實際、故意に惡意で以て壞したのです。しかも御禮を仰しやつて頂く爲めでなく、叱つて頂く爲めに、怒つて頂く爲めにしたのです!

彫刻家。(手に持つてゐたコップを徐かに下へ置いて)なに? 怒つて頂く爲めに! たしかに然う言つたね?

妻。たしかに然う申しました。それを又何故だと仰しやるんでせうか?

彫刻家。うむ。

妻。なぜと云つて、私は貴方の御機嫌を惡くしてでも貴方の御側にこの私がゐるといふことを思ひ出して頂きたかつたのです。長いこと貴方の藝術の爲めにといふよりも、此一年近くは殆んどあの立像一つの爲めに、すつかり忘れてしまつていらつしやる此私を、此私が、どんなに寂しい物足りない日を送つて來てゐますか、それを見て頂きたかつたのです。それに貴方の眠つてゐる注意を呼びさまして上げたかつたのです。

彫刻家。(自分で自分に言ふやうに)さうか。

妻。(興奮してしまつて、他の言葉を見出し得ない人のやうに)さうです!

彫刻家。だが、それにしちや、大分思ひ切つた手段に訴へたものだな。

妻。もう少し穩健な常識的な手段も、色々やつて見ることは見ましたの。けども、みんな役に立ちませんでした。それほど貴方は御自分の御仕事に熱中して、私を忘れてしまつていらしたのです。

彫刻家。さうかなあ。

妻。結婚の前と後とでは、貴方は全然別々の方ですわ。(昔を追想しながら)あんなお話をして下すつて、あんな御手紙をあんなに度々下すつて、そしてあれほどの犧牲を拂つてまで、一緒になつて下すつた貴方が! その貴方が今は如何でせう。昔の通りだと、さう仰しやることが出來ますか?

彫刻家。さう云はれて見ると……成程、少々閑却してゐたといふものかな。

妻。それに一番ひどいのは、私自身がこんなにまで置いてけぼりを食つてるのに、私をモデルに御作りになつたあの立像が、あんなにまで可愛がられてゐることでした。つまり忌々しかつたのです。忌々しいから壞したのです。

彫刻家。一通りの理窟は分つたが、そんな積りであれを壞した位なら、他にもまだ、俺を困らせるつもりの事を色々とやつてゐさうに思へるね。

妻。えゝ、してゐないこともありませんわ——大して惡い事でもないけれど。

彫刻家。だが、その告白を聽く前にきいて置きたい事がある。壞した大理石の手はどう始末した?

妻。或る人に頼んで棄てて貰ひましたわ。

彫刻家。此場合或る人ではいけない。誰だ?

妻。貴方のいつも仰しやる『兎』さんですの。

彫刻家。あゝ、あの男か。(微笑しながら)實際兎のやうな印象を與へるねえ。

妻。丁度、あの人が來てゐたものですから——

彫刻家。先づあれを壞して貰つたね?

妻。えゝ。私の爲めに壞して呉れましたわ。私の爲めには何でもして呉れるやうになつてゐましたから。

彫刻家。成程ね、そしてあの男が持つて歸つて呉れたんだね？

妻。えゝ――途中で、川の中へでも投げ込んでくれる筈で。

彫刻家。然るに、實際は投げ込まなかつたと云ふんだらう？

妻。さうですつて。その儘持つて歸つて、大切に藏つてゐるんですつて。

彫刻家。あの手でも、やつぱりお前をモデルにしたんだからな。

妻。あの人が、丁度その通りに言つてゐましたわ。

彫刻家。それ位ならば、まだ色々の物をお前から貰つて行つたね？

妻。えゝ、隨分馬鹿馬鹿しいものまで。そして私から持つて行つて上げたことも、置いて來たこともありますわ。

彫刻家。（笑ひながら）それでも、お前の一番大切なものだけは、置いて來なかつたと云ふんだね？

妻。（同じく笑ひながら）さあ。どうですか。

彫刻家。兎に角、私の二ケ月の旅行中にお前達は、色々の飯事をして遊んだんだね？

妻。貴方はそれを惡いと仰しやるの？

彫刻家。まあ、待つてくれ。

妻。貴方は私を疑ふと仰しやるの？

彫刻家。待て待て。

妻。（せき込んで）あの人と一緒に暗い濠端を歩いたと云つたら、あの人と二人つきりで夜の一時過ぎまでも話し込んだと云つたら、あの人の叔母さんから心配されるほど親しくしたと云つたら、それをどう仰しやるの？――貴方は。

彫刻家。大抵の人ならば、俺の地位に立つてゐては、幾分か不快に思ふことを免れまいと思ふね。

妻。そして貴方は？

彫刻家。勿論俺も御多分に漏れないんだ。

妻。さう伺つて安心しましたわ。私の目的が達しられたわけですもの。

彫刻家。お前の目的？　わざわざ俺を不快にするつもりの、俺に嫉妬をやかすつもりの？

妻。えゝ。

彫刻家。さうか。だが、薬が利き過ぎはしなかつたかな。

妻。あの人が眞劍になり過ぎたことですか？　そして私が持てあましたことですか？

彫刻家。いや、「兎」がどんなに眞劍にならうと、そんな事に頓着はない。俺はたゞ、お前自身までが本氣になり過ぎはしなかつたかしらと、それを問題にしてゐるんだ。

妻。若し私が、本氣に……本氣になり過ぎてゐたのなら？

（彫刻家、それに答へないで徐かに起ち上り、ガラス戸の方へ歩いて行く。妻、同じく起つてあとを追ふ。）

若しさうだつたら、どう仰しやるの？　どうなさるの？――貴方は。

彫刻家。（興奮したらしい表情を出來るだけ見せないで）それを俺にきくのか。

妻。えゝ。

彫刻家。（唾棄するやうに）馬鹿な！

（二人とも暫く無言。彫刻家は兩手を背へ廻し、片足を踏み出し、先程から明るく月光の射して來た外の景色を見ながら立つてゐる。妻は片手に胸を押へて、彫刻家の後姿を見ながら立つてゐる。）

妻。（やがて見物席の方へ向き直り、大きな太息を吐いて獨白に近く）やつぱり駄目ね。柄にないんだもの！

（彫刻家、右側のドアの方へ歩いて行く。）

（稍や、狼狽して）あら、どつかへいらつしや

るの？

彫刻家。そこいらを歩いて來る。

妻。一寸、待つて下さいな。御願ひですから。

（彫刻家、無言の儘に卓の近くまで引き返して來る。）

貴方は本當に……本當に怒つてらつしやるの？　私のじやうだんで言つたことまで眞面目に取つてらつしやるの？（短き間）あら……眞面目ですのね。どうしませう。困つたわ。

彫刻家。それは俺の方からも言ひたい言葉だ。

妻。え？　何と仰しやつたの？

彫刻家。この俺にもどうしていゝか分らないんだよ――ただ笑つて濟ましていいものか、それとも大眞面目にこだはつて考へて見るべきものか。

妻。でも貴方は、嫉妬……私を疑ふやうな事なんぞ、これまでつひぞ仰しやつたことがないぢやありませんか。

彫刻家。疑はしいものにぶつかるまでは、俺でなくたつて疑ふまいよ。

妻。でも貴方は、私達のあのお飯事が、どんな動機からはじめられたかつてことを、十分御解りになつてるぢやありませんか？　それとも、それとも……

彫刻家。それは解つてゐる。お前はあの立像の手を壞したのと同じ動機から、お前達の飯事をもはじめたのだよ。

妻。それならば、疑はしい事なんか、なんにもないわけぢやありませんか？

彫刻家。ところが然うは行かない。

妻。どうして？

彫刻家。ウソから出た誠と云ふ言葉がある。

妻。（機械的に口のさきで反復して）ウソから出た誠。

彫刻家。それなんだ。（稍や強く）手段として始めた事がいつの間にか目的になつてゐると云ふのは、ちつとも不思議な話ではないからな。

妻。まあ！　本當に然う思つてらつしやるの？　私があんな、あんな「兎」さんなんぞと……

彫刻家。俺は、ただ信じられる事を信じ、疑はしい事を疑ふだけなんだ。

妻。だけど、あんまりよ。あんな、なんにも出來ない、出來さうな見込みもない人なんぞ、私が輕蔑しきつてることは、ようく御分りになつてるんぢやありませんか？

彫刻家。尊敬するしないと、愛する愛しないとは別々の話だ。それにお前が、この男のどこかに、尊敬すべきものを認めてゐないとも限らない――よしそれに百倍して、輕蔑すべきものを他に認めてゐようとも。

妻。むつかしい理窟の分らない私は、ただ事實だけを申します。あの人はやつと大學を卒業しただけの、何の取柄もない平々凡々の人なんです。その上品性も――近頃突然にあの人不相應なお金がはひりましたので、あの人は大變なケチン坊だつてことまで分りました。

彫刻家。そんな事は、此場合に關係のない話だ。

妻。いゝえ、關係がないことはありませんわ。私は何よりもケチン坊が嫌ひですもの。盜みをしたり騙りをしたりする人以上に。そして實際に、あの人はそれ位の惡い事を平氣でやりかねないんです。

彫刻家。お前はまさか、まるつきりの出鱈目を言つてるんぢやあるまいね？

妻。事實でない事は申しません。あの人は私書僞造私印盜用とかつていふ恐ろしい罪を犯してお金を拵へたのです。

彫刻家。そんな祕密を、あの男自身の口から漏らしたのか？

妻。ええ。あの人は私を信じてゐましたから。

彫刻家。信じると云へば、お前は一體そんな話をしてきかして、俺の疑を釋くつもりか、それとも一層邪推させるつもりか？

妻。私はあの人をどんなに氣味惡がつてるか、どんなに恐がつてるか、それを解つて頂きたいんですわ。それを解つて頂けば、貴方の疑だつて消えるぢやありませんか。

彫刻家。それは駄目だ。

妻。どうして？

彫刻家。男はどんなに醜い女をでも愛しないものでない。女はどんなに恐ろしい男をでも愛しないものでない。

妻。でも、あの人は本當に恐ろしい事をする人です、しかねない人です。（壁に耳あるを恐れるやうな樣子をして）あの人は――人殺しをしようとしてゐます！

彫刻家。（流石に驚いて、けれども聲を押へて）人殺し？

（妻、卓に近づき、一つの椅子にかける。彫刻家も無意識に引き寄せられて近くの椅子にかける。）

妻。しかも誰を殺すんだと思ひます？

彫刻家。それは俺の方から言ふことだ。

妻。（顫ひしながら、良人を眞正面に見て）貴方を！　貴方を殺すんです！

彫刻家。（堪えず椅子から跳び起つて）なに！　俺を？　この俺をあの『兎』の奴が？

妻。ええ。

彫刻家。（突然に笑ひ出し）は、は、は……じやい、い、うだんはよして呉れ。俺は眞面目に聞いてゐたんだ。

妻。私も眞面目に申し上げてるんですわ。

彫刻家。眞面目だ？――そんな話が！

妻。ええ。

彫刻家。（再び徐かに椅子へかけて）あの男がこの俺を殺す、それは何の爲めだ？

妻。（腰を浮かして椅子を後へ引くやうにしながら）私の爲め……私に頼まれたのです！

彫刻家。これは面白い！　お前が『兎』の奴に頼んで俺を殺させる。そしてそれが眞面目な話だと云ふんだな。

妻。私はそれよりほかに……方法がなくなつたのです。

彫刻家。なに？　何とか言つたね。

妻。私が、私達のお飯事を切り上げようとしても、どうしても切り上げさして呉れないのです。はじめの内はそれほどでもなかつたあの人が、私の逃げ腰を見てからは、無暗に熱中して來たのです――だんだんと、狂人のやうな後前見ずで、あの人特有の執拗さで！　そして、いくら逃げようとしても逃がして呉れませんし、いくら遠ざけようとしても遠ざかつてくれないのです。（短き間）それで最後に、最後の手段として私は、あの人に言つてやりました――

彫刻家。何と言つてやつた？

妻。私の爲めに良人を殺して下さるか、でなければ、二人つきりで御目にかかることなんぞ、これつきりにしませうつて。

彫刻家。（堪えず大きく息を吐いて）さうか。

妻。これに對しては、いかにあの人でも、わけなく兜を脱ぐことと思つたのです。

彫刻家。（熱心に）ところが――

妻。ところが、あの人もさうさう無造作にはだまされてしまひません。逆樣に私がどれだけ本氣で然う言つたかと、何よりも先づ駄目を押すのです。そして駄目を押されれば押されるほど私は愈々本氣らしく見せなければなりません。

彫刻家。それは合理的だ。

妻。其結果あの人は、私の要求を眞劍なものだ

と信じるやうになりました。

彫刻家。そしてこの俺を殺せと云ふお前の要求を容れたんだね？

妻。さうです。（强ひて微笑しながら）この三日ばかりは、その爲めに苦んでるんですわ。

（二人とも暫くの間無言。彫刻家は思ひ出したやうに自分で酒をつぎ、味もなげに嘗めながら考へ込んでゐる、妻はお酌をしてやることをも忘れ、茫然彫刻家の動作を見入りながら、同じく考へ込んでゐる。）

だけど、これだけお話してしまつたら、私があの人のことなんぞ、眞面目に思つちやゐないつてことだけは、お分りになつて下すつたでせうね（短き間）ねえ、貴方、それだけのことはもう、分つて下すつたでせうね。

彫刻家。うん、分つた、と言つて上げたいところだが、實際は依然として分らないね。

妻。（半ば意外らしく、半ば不平らしく）さうですか。

彫刻家。寧ろ、色々と說明や辯解を聞かされた爲めに、愈々分らなくなつて來たやうだ。

妻。（再び）さうですか。

彫刻家。此上とも口先でばかり辯解を重ねるのは、お前に取つても無益な事だらうし、俺にもう我慢の出來ない事だ！（短き間）お前が潔白であつたといふことは、實際の、生きた、切れば血のほとばしる、事實で以て證據立てて貰ひたい！

妻。事實と仰しやると？

彫刻家。必ずしも過去の事實を以てせよとは言はない。これからのお前の行爲で以て、新しい事實を、俺のこの胸の透くやうな事實を、俺の目の前に突きつけて呉れてもいいのだ！

（此時、偶然にコップが卓から滑り落ち、ガチャリと音を立てて壞れる。）

妻。（戰慄しながら起ち上り）今度は貴方が、あの人を殺せと仰しやるんですか？ 私にあの人を殺してくれと仰しやるんですか。

彫刻家。なに？『兎』の奴を殺す？

妻。ええ。さう仰しやるんでせうね。

彫刻家。（吐き出すやうに）馬鹿な！ そんな事がなんになる？

妻。少くとも、私があの人を殺せるか、それとも殺せないかが分ります。

彫刻家。殺せなかつたらそれこそ不思議だ。人はどんなに愛してゐる異性をでも殺し得るんだからな。それどころか、愛してゐる爲めに殺す場合さへもある。

妻。（椅子の背につかまり、眼をつぶりながら）私は、いつそ自分で自分を殺します！ それが貴方に滿足を與へるんでしたら！

彫刻家。お前の自殺が俺に滿足を與へる？

妻。それが私の潔白を……（俄かに淚聲になりながら）最後まで貴方の貞實な妻だつたといふことの、何よりも確實な證據にはならないでせうか？

彫刻家。此場合淚なんぞに訴へることはよしてくれ。（調子をかへて）お前の自殺は、どんなにしてもお前が俺の疑を釋き得なかつたと云ふことの、有力な證據にはなるかも知れない。それが俺にどんな滿足を與へるだらう？

妻。（椅子につかまりながら跪き倒れて）もう駄目です。私は……どうすればよいのです？（取りみだして再び）どうすればよいのです？

（二人とも暫くの間無言。彫刻家、やがて起ち上り、妻のそばを過ぎ、彼女を見返り、左側のドアから出て行く。妻は依然として其儘の姿勢を保つてゐる。此頃より、月雲に入つて漸く暗し。やがて、

一挺のピストルを提げて來た彫刻家が、そのピストルをガチャリと卓の上に置く。その音に驚き、彼の妻は跪いた儘に上半身を起して卓の上を見る。）

（ピストルと彫刻家の顔とを見比べながら）ピストルですのね。

彫刻家。他に名案もなかつたら、（ピストルをゆびさし）こいつで一つ、遣つ付けて貰はうよ。

妻。貴方を？ そして私が？

彫刻家。いや、お前自身よりも、あの男にやらして呉れ――お前達の陰謀通りに。

妻。まあ！

彫刻家。それが容易ならぬ仕事であることは、俺自身も知つてゐる。しかし、お前が本當に潔白であつたなら、お前はそれに堪へ得る筈だ。堪へ得なければ潔白でなかつたのだ。

妻。（床より起ち上り）貴方は、そ、そんなにしてまでも……知りたいと仰しやるんですか？――私が本當に潔白か、潔白でないかつてことを！

彫刻家。俺が俺の家で、寢椅子の上で、空つぽになつたコニャックの壜のそばで、しかも俺自身のピストルで（顔をゆびさして）此處を打ち貫かれて死んだとする。それが自殺と思はれなかつたら、それこそ不思議といふものだ。

妻。何の爲めに、そんなに意地惡らしい註文をなさいます？

彫刻家。お前が潔白でない爲めに、お前の心がやましかつたらば、そのやましさが一層加はるやうにと思つてだ。

（二人とも暫くの間無言。妻は一脚の椅子を引き寄せ、見物席へ背いてかけ、仰向くやうにして考へてゐる。彫刻家は腕組みをして彼女の横顔を見守つてゐる。）

妻。（顔だけ彫刻家の方へふりむけて）幾時でせうか？

彫刻家。（時計を出して見て）十時十分過ぎ。

妻。それではもう、あの人の來る時刻です。明日と云はず今晩の内に、貴方の知りたいと仰しやることを（寧ろ早口に）十分に知らして上げます！（短き間）そんなにしてまで、そんな酷い事をしてまで、私を……私の潔白を。

（彫刻家は卓の上のピストルを取上げて右側窓の下あたりに置かれたる寢椅子に歩み寄り、ピストルを枕元に置いてごろりと横になる。）

彫刻家。その壜に酒が殘つてゐては面白くない。からにして呉れ。

（妻、夢遊病者の如く起ち上り、酒を棄てるべく右側ドアをあけて外に出る。外はまたもや月明となつてゐる。）

妻。（急ぎ足に、けれども物音を立てないやうに引き返して來て）あの人が來たやうです。用意をして下さい。

彫刻家。（空壜を受取り、寢椅子の下へ無造作に轉がしながら）俺はただ醉拂ひになつて前後不覺にねてゐればいいのだ。

（彫刻家は仰向けになり、その儘眼をつぶつてしまふ。それを見ながら妻は後退するやうにしてドアへ近づき、再びそれを開いて外へ出る。それから正面のガラス戸の向うを、小走りに左へ驅けぬけるのが見える。間もなく「兎」と綽名されたる青年を連れて引き返して來る。二人はガラス戸の向うから室内をのぞき、彫刻家のねてゐるあたりを指さし、暫く私語を交した後、右側のドアから廻つてはひつて來る。）

青年。（彫刻家のねてゐる方を見ながら）餘程

澤山飲んだのですか？

妻。え丶、平生の倍位。その上疲れてゐましたからね。

青年。だが、少し變ですね――こ丶で貴女と御話するのは。それに特別に祕密にしなくちやならないあの事に就いての御話なんですから。

妻。祕密のお話は、却つて此處の方がよござんすわ。まさか此室で惡事の相談なんぞしようとは誰も思ひますまいし、（彫刻家を指さし）此人は此人で、椅子から轉がり落ちても氣が附かない位、正體なしになつてますからね。

（斯く言ひながら妻が椅子にかけると、青年もまた椅子にかける。）

青年。ところで奥さん、私と云ふ人間はよくよくの腰拔ですね。

妻。（意外らしい表情を幾分誇張して）まあ、何を仰しやるの？　突然に！

青年。私は先達て貴女の前に、立派に誓つたあの言葉を、取消しに……綺麗に取消しに來たのです。

妻。取消しに？（彫刻家の方を一寸ふり向き）あの時の御約束を？

青年。私に對して何等の敵意をも有つてない、疑つてさへもゐない人を、到底私の手ではどうにもなりません。その爲めに貴女から信じて頂けなくなると云ふ、それも殆んど堪へ難い事ではありますが、しかし、まだしもその方を選びます。私はあの時の間違つた勇氣と決心とを、本當に心から悔いてゐるんです。

妻。貴方は後悔してゐると云ふんですね？

青年。さうです。

妻。人間の後悔は、大抵手後れになつてからのものですよ。

青年。え？　何と仰しやいました？

妻。生憎と貴方の後悔も、もう間に合はないと云ふんですわ。

青年。（半ば自分自身に問ふ如く）間に合はない？

妻。（椅子から起ち、彫刻家をゆびさしながら青年へ）此人はもう私達の陰謀を知つてしまひました。『陰謀』と云ふのも此人の使つた言葉です。

青年。えッ！（腰をぬかした人のやうな醜い起ちかたをして）然うですか！

妻。無感覺のやうに見えながら、神祕的に敏感な此人の神經に、たうとう嗅ぎつけられてしまつたのです。そしてあの鋭い頭で、息をつく間もなく疊みかけて詰問されたのです。其結果、此人は私の口から、一切の事を聞いてしまつたのです。

青年。（喪心したやうに）然うですか！

妻。此人が醉から醒めたときは、殘忍な恐ろしい復讐がはじまるんです！

（青年、覺えず一歩ばかり後へ退く。）

あの枕元のピストルは、私達の肉體を殺すだけかも知れません。けれども此人が、ただ私達の肉體を殺すだけで、そんな手緩い事で滿足するでせうか！

（青年は半ば無意識に自分のポケットからピストルを引き出す。）

（青年の側へ歩み寄る、その手にしたるピストルに指頭を觸れながら）御自分の臆病なことを誇りにしてゐる貴方は、それで以て御自分の胸をでも打ちぬく御積りですね。

青年。（彫刻家の方へ狂暴な目を走らせながら）いや、私もそれほど臆病者ぢやない！

妻。それでは、そんな物を提げ廻ることは止して下さい　目觸りだから。

青年。三發の彈では三人の人間が殺せます。そして無駄遣ひはしない積りです！

（斯う言ひながら彫刻家のねてゐる方へ

妻。（進んで行かうとする。）一寸！ 待つて下さい。ピストルは貴方のを使はないで下さい。私は自分でもまだ死にたくないし、貴方をも死なしたくないんですから。

青年。一人を殺して、あとの二人が生き殘つて行く！

妻。此人自身のピストルで、此人の額を打ちぬいて下さい――それが丁度此人の自殺だつたと思へるやうに！

（二人とも暫くの間無言。妻、彫刻家の枕元からピストルを持ち來り、茫然立つてゐる青年のピストルと取換へてやる。そして取り換へた青年自身のピストルを、卓の上にガチャリと投げ出す。その音を聞くと共に青年は、醉漢の如き歩調にてふらふらと彫刻家の寢椅子に近づき、震ひわなゝく手にてピストルのさきを彫刻家の額にあてる。）

（駈け寄りながら）一寸！ もう一度待つて下さいな！

青年。（彫刻家の額を見つめた儘で）な、なんです。

妻。（彫刻家へ聞かす積りで）これでも、私が此人を殺し得ないと云ふんでせうか？ 貴方は現在もうそのピストルの端を、此人の額にあててゐます。貴方が引金をひけばもうそれ切りです！

青年。私はもう頭が混亂してゐる。仰しやる事が分らない！

（思ひ切つて引金をひく。けれども彈が出ない。取り上げながら銃器を檢め、外見上異狀なきをたしかめたので、再び彫刻家の額にあてて引金をひく。前同樣に彈が出ないのである。）

（舌打ちをしてピストルを床へはふり出し）駄目だ！（卓の上を指さし）そらの奴を！

妻。（胸を押へてゐた手を取つて、ほつと大きく息を吐き）彈が出なかつたのは運命です。此上運命を試すことは止しませう！

（青年は彫刻家の妻の言葉を耳にもかけない如く、卓に駈け寄つて自分のピスト　を取り上げようとする。）

（青年の手を押へて）それこそ駄目です。あの人の自殺になりません。

青年。（息遣ひを荒く）私はたゞ、殺しかけたものを殺すんだ！

妻。いゝえ。いけません。私達はその爲めに、私達自身を殺すことになります。

青年。（妻の手から脱れようと焦りながら）は、はなして下さい！

妻。いゝえ。放しません。あの彈が出なかつたのは勿怪の幸です。彈が出たら其音で、周圍の人達は直ぐにも來ます。下手人の逃れる道はありません（短き間）賢い男と女とは、こんな處に愚圖愚圖してゐないで、この儘逃げて行つてしまひます――愛する二人が手を引き合つて、思ひ切つて遠い遠い處へ！ そして二人を歡んで迎へて呉れる、もつともつと廣い世界へ！

（斯く言ひながら、そして俯いてゐる青年の額をのぞき込みながらピストルを青年のポケットへ藏はせようとする。青年は人形使ひに使はるゝ人形の如く、そのピストルをポケットに押し込んでしまふ。）

いつぞやのあの公園の出口で待つてゐて下さい。二十分とは御待たせしません！

（斯う言ひながら、再び人形使ひが人形を使ふ如く、青年に帽子をかぶせ、ステッキを持たせて、左側ドアから外へ送り出す。それからガラス戸の向うを通つ

て左へはひる二人の姿が見える。やがて彫刻家は、寢椅子の上にむつくと起き上り、床に轉がつてゐる空壜を拾ひ上げ、口にあてて喇叭呑みに餘滴を貪つてゐる。そこへ今度は左側ドアから彼の妻が、二つの大きなコップに水を入れて持つて來る。そして其一つを默つて良人に差出せば、良人も默つてそれを受取り呑む。妻もコップの一つを取り上げて一口呑む。）

貴方の御註文通りに致しました！

彫刻家。さうだ。これでいゝ。俺にはもう何の不滿足も殘つてゐない。

妻。その代り、私には大きな不滿足が殘りました。

彫刻家。お前に大きな不滿足が？

妻。貴方は知りたいと仰しやつた事をすつかり御知りになりました。けれども私は、私の知りたいと思つたことの半分をも知ることが出來ませんでした！

彫刻家。お前は、何を知りたいと思つたのだ？

妻。私の潔白か潔白でないかを知る爲めには、御自分の命を棄てる位、何でもないやうに仰しやつた……貴方のあの御言葉が本當か本當でないか、それを知りたかつたのです。

彫刻家。さうか。

妻。何よりもそれが知りたかつたのです。それを知りたかつたからこそ、良人殺しと云ふやうな、大それた恐ろしい事をもする決心がついたのです！

彫刻家。（より力強く）さうか！

妻。それなのに、貴方のピストルは、引金をひいても彈が出ませんでした。いいえ、わざわざ彈が出ないやうにしてありました。さうでないと仰しやることが出來ますか？

彫刻家。それは出來ない。だがね、彈の出るやうにして置く必要もなかつたのだ。

妻。いいえ、貴方に必要でない事が、私には必要だつたのです。

彫刻家。さうか。成程。

妻。ですから貴方の前に立つた私はもう、四方の壁をガラス張りにした家も同じです。そして貴方は一方の壁に小さな窓をあけただけの、薄暗い室の中にかくれていらつしやいます。貴方の正體は――さうですわ――貴方の正體は、まだ一向に私に知れないのです！

彫刻家。（ニツモラスに微笑しながら）それでは、もう一度試驗をやり直すかな。

妻。だけど、こんな試驗は人間の思附きだけぢや出來ませんわ――運命が手傳つてくれなければ。

彫刻家。さうだ。大きにさうだ。次ぎの機會の來るのを待つさ。

（此時、舞臺右手に當つて突然ピストルの發射されたる音を聞く　その音を聞くと共に、彫刻家は椅子から跳び下りて、其妻の前に大きな盾の如くに立つ。）

（右側窓をゆびさし）彈は正しく此窓からはひつた！

妻。（良人に庇はれるのを辭する如く）ねらはれてゐるのは私です……私だけ打たれればいいのです！

彫刻家。（進み出ようとする妻を左の手に押し止め、右の拳に自身の胸板を打ち叩きながら）お前の爲めには、丁度いい障壁だ！　俺はもう俺自身を惜まない！

（先程の青年の姿が飛鳥の如く、正面のガラス戸の向うへ現れたかと思ふ間もなく、ズドンと二發目が鳴り響く。彫刻家は再び其妻を庇つて立つ。）

妻。殘つてゐるのは一發きりです。私が打たれればいいのです！

彫刻家。（わざと青年に挑戰するやうに）この

障壁は厚く出來てるぞ！ そんな玩具彈にびくともするものか！

（青年は再び飛鳥の如く姿を消し、右側ドアから流れるやうにしてはひつて來る。けれども、左手に其妻を抱きかかへた彫刻家は、青年が右へ廻れば左に庇ひ、左に轉ずれば右へ庇ひして、發射の機會をどうしても捕へさせぬ。遂にあきらめたる青年はピストルを持つてゐた手を下げて、ぴたりと一點に立ち停まる。）

青年。（大きく息を吐いてから、仰向け氣味に、極度に絶望的な聲で）駄目だなあ！

（言ひ終るゝ共に、よろよろとよろけるやうにして右側ドアまで退き、それに背を凭せながらピストルを自分の胸に打ち込む。そしてずるずるゝ崩れ落ちるやうにして其處へ倒れてしまふ。）

彫刻家。（妻の顔をのぞいて）どうした？ その顔は？

妻。どつかを打たれてゐるやうですわ。

彫刻家。打たれた？

（寢椅子へ連れて來てかけさせ、妻の體を檢べて見る。）

（妻の左の手を取り）これだね？ 肘をやられたな。

妻。（其肘を見ながら、はじめて苦痛を感じ出したる如く）やつと、自分でも分つて來ました。

彫刻家。（努めてユウモラスに）しかし、まあ、殺されたよりはいい。

妻。（青年の方を見ながら）切めてこの位の報いは受けなくちや、あの人に對しても濟みませんわ。

彫刻家。それもさうだ。

妻。兎に角私は此騷ぎで、私の知りたいと思つてゐた事を、みんな知ることが出來ました。

彫刻家。みんな知ることが出來なかつたら、これから先きの二人の生活で、氣長に試して見るがいい。

妻。（歡喜の眼を輝かしながら）ねえ、貴方。片方の手がなくなつた爲めに、私もやつぱり、餘計なものが無くなつたのですわねえ！

彫刻家（大理石像の方を見やりながら）さうだ。お前も、俺の作つた物としては、一通り仕上げが出來たと云ふものだ。（言ひ終つて、倒れたる青年の方を顧み、徐かにそちらへ歩み出すところにて幕下りる。）

（一九二〇年九月）

◇

如何に非凡なる文藝家も、彼が特に文藝家として非凡である限り、文藝上の創作をしてゐない場合、卽ち日常の生活に於ては、かなりに凡庸なる人間であり得ることは、改めて說くまでもないであらう。

乃ち一切の天才者をも「人間」化するのだと吹聽しながら、立派に、綺麗に「凡人」化してしまはなければ氣の濟まない、今の文壇の人々は、非凡なる文藝家の本質的價値を見る上にも、專ら日常生活の方面からのみすべきであり、殆んど創作生活の方面からすることを要しないものであるかの如く言ひなしてゐるのである。少くとも彼等をして言はしめれば、それらの文藝家の所謂創作は、彼の性格の極めて皮相的なる部分を代表するに止まつて居り、寧ろ日常生活の記錄であるところの斷簡零墨こそ、殆んど創作としての意味を有しない日記、書簡のきれはしなぞこそ、本當に彼の最も彼らしき處を、僞るところなく、覆ふところなく赤裸々に露出して居るのである。

（「日常生活を偏重する悪傾向」より）

詩

やや老いし人の蝸牛を見てよめる

雨の日の
梅の樹を
薄闇を
はひのぼる
かのめしひ
かたつむり

雨の日の
梅の樹を
くらき地へ
まろび落つ
かのおふし
かたつむり

（一九二三年六月一日）

ひややかに

ひややかにみづをたたへて
かくあればひとはしらじな
ひをふきしやまのあととも

たちつくし

たちつくしものをおもへば
ものみなのものがたりめき
わがかたにつきかたぶきぬ

白躑躅

まり子よ、おんみが母は、
おんみ五つの年六月九日、
咲き残りし白躑躅の
音もなく夕闇に落つるがごとく、
我等をあとにして果敢なくなりぬ。

いとせめて、この悲しさを、
いつまでも、いつまでも忘れたまふな。
——母なき子としてそだつおんみはせめて。

かの初夏の白き花に向ひゐて、
不覺にも我が太息つくことあらば、
まり子よ、おんみもおんみの母の
かなしき、白き微笑を思ひ出でたまへ。

母逝く

吾が母八十歳、
勞苦して老い、老いて病み、
つひに故里の家に逝く。
我は藥餌と相親み、

母を見ざるもの年あり、
今また其死をかへりみず。

これは是れ母を葬るの日、
三たび枕頭に幼き者をよび、
その祖母の白髪を語らしむ。

弘前の玩具の山鳩

やや老いし一人の友は、
襟垢づきし綿入の袂より、
土焼の玩具ひとつ取り出でて、
我が家のわらはべに贈りぬ。

東北弘前の物なりとぞ。
——拙く色どりし山鳩の形に、
尾と腹と二の孔を穿ちたり。

久しく病める母の枕邊にて、
わらはべ尻尾の孔を口にして吹きならせ
ば、
おろかしく空洞にほゝおゝほゝおと鳴く。

ゝゝほおほおとなく其聲の可笑しさに、
父なる我をはじめとして、
人ことごとくわらはべにならひぬ。

偖て面白き聲して歌ふ山鳩よ、
弘前の玩具のよき山鳩よと、
痛々しくも痩せ衰へたる頬に、口に、
淋しく笑みて母まづほむれば、
人ことごとく母にならひぬ。

（一九二六年十月五日）

月明

忽ちに風吹き出でて
燭の火の消えも行きなば
ふり仰ぎはじめて知るや
中天に月のありしを

お庭の松の

お庭の松の

枝から枝へ
ついと飛んで
又ついと飛ぶ
螢かや都の
初夏の流れ星かや

冬の日

浪の上の
鳥の白さよ
浪の黒さよ

砂に曳く
影の長さよ
砂の冷さよ

くもり日

古沼の赤錆びし水
くもり日の眞晝をわびて

泡立たしひとり笑へば
菱の實かあきつか知らず
河骨の破れ葉を滑る

月光雜曲

一

恵深い太陽から、
それぞれの色をゆるされてゐた
總ての物を月光はむごたらしく
自分自身の一色に塗りつぶす。

否、あの全能の魔法使は
草を、木を、人を、その他の
すべての生きてゐる存在を、
自分自身よりも蒼く、
幽靈のやうにさへあをくする。
そして幽靈を、死んでゐるものを
眞白く化粧して踊らせる。

嗚呼、月光の魔法を浴びて、

二

總ての命あるものはすすり泣き、
眞白い墓から這ひ出たものは、
高らかに、ひやゝかに其死を笑ふ。

月光に照らされてゐる
若い人の、とりわけ
若い婦人の涙を、
月光にきらめく涙を見る時、
警戒せよ、警戒せよ、そして警戒せよ。

その時人は、
愛しないでも濟んだ位の人を、
取り返しがたく愛してしまふ。

その時人は、
あまりにもたやすく、死で以て
その愛を證據立てて見たくなる。

三

月光は遠い遠い處を、
將來を、死んだ後の事を、
生れぬ前の事などを思はせ、
偶然なことなんぞ一もないやうに、
何もかもが間違であつたやうに、
それでゐてやつぱり自分は
誰より幸福であつたやうにも思はせ、
此上はもう、本當に
なんにもいらないやうにさへ思はせる。

四

太陽は高利貸を一層高利貸にし、代議士
を一層代議士にする――彼等が狂人
になるまでも。

月は詩人を一層詩人にし、戀人を一層戀
人にする――彼等が狂人になるまで
も。

五

『彼が、
或は彼女が死んだなら、
より美しく見えないだらうか。』

六

――月光は曾て囁いた。

人は月の夜に約束した事を、

何故白日の下にも守らねばならぬか。

七

月光のあざむく如くあざむけ
女よ、月の如き女よ。

八

どんなに痛ましい過去も、悉く
甘い涙になつて流れる月の夜に
一人の男は、多分
私のやうな男かと男は思つた——
序に私はもつともつと、
思ひ切り絶望をしてゐたかつた、
私がより少く愛されたことの爲め、
そしてより多く愛した其の人の爲めに。

九

ただ一人月下に立ちて、
自らを憐む者は必ず思ふ、
これより不幸にはなりやうがないと。

だから——
だからと云ふ言葉をも暫く許せ、
月は絶望してゐる者の友である。

永久の惡夢

殺されるのを、死ぬのを待たないで、
私、私自身を生埋めにした、
若々しさをも、執着をも、
そのほかの物をも一緒にして。

地面の上ではそれから後、
私の見殘した花が幾度咲いて、
いくたび風に散つたことだらう。

ちと重すぎる墓石の下に——
それを深切な人達がのつけてくれた
——私は白骨にもなり切らないで、
身も魂も迷ひつづけてゐるのだが、
雨ざらしになつた墓標を圍んで、
さてもぼう〳〵と草の茂つたことよ。

淋しい處を賑かにする爲めか、
一層淋しくしてくれるためなのか、
二人つきりの、一人ぼつちの、
さまざまな人達が來ては往く。
時には生憎な後姿の、
あまりにもよく似てはつと思はせる、
昔の人らしい人さへ行きすぎる。

草葉の蔭の今の私には
何のかかはりもなささうに、
さつさと行つてしまつた彼女のあとに、
內密らしい其聲の漂ふこともある。

『いいえ、私はいつまでも、いつまでも、
いつまでも貴方の』と囁く聲が、
咽び泣きとなり、涙となつて落ちるの
を、
私は瞑目の中にはつきりきいた。

けれども、重すぎる墓石の下に——
それを深切な人達がのつけてくれた
——「私も」の一語をさへ許されぬ私は、
永久に眠れない寢覺の床に、
永久の惡夢を見つづけてゆく。

二の祈

はじめて戀をした頃の私のやうな
若い人達を見て私は祈る——
『みんな戀をするがいい。
けれども私のやうにでなく、
もう少し愚かな人を相手にして、
思ひ切り氣易くそして勇敢に』と。

私がはじめて見た時の彼女のやうな
可愛い娘さん達を見て私は祈る——
『みんな戀をするがいい。
けれども彼女のやうにでなく、
もう少し勇氣のある人を相手にして、
思ひ切り愚かにそして無我夢中に』と。

一の元素

金剛石よりも固い私の結晶が、
氷よりも早く融けるのを見たか？
水銀の如く重く沈み又
輕く跳びはねる私の心よ。
一定の温度に達するまでは、
頑強に私の血は沸騰しない。
蒸發してからの私の姿を
私自身のほかの誰が知つてゐる！

我は一の磁石なり

我は一の磁石なり、
つねに謙遜に南北をさし、
忠實に、頑強に南北をさし、
まつたく宿命的に南北をさし示す。

磁石と磁石とは互に相引く。
我は他より引かれずして、
他をひきしこと曾てなし。
しかも我がより小さき者をひくは、
より小さき者の我を引くに比較して、
いかにより著しく、いかにより勝利の
如くにも、
より降服の如くにも見ゆるかな。

同極相にげ、異極相結ぶは我が友情。
我は反對の性格を、我が對蹠人を敬愛し、
彼自らの内に其對蹠人を藏する者と深く
相交る。

我が磁力は我と相磨するところの鐵片を
化して磁石となす。
しかも地上のあらゆる鐵片を追ひ求め、
それを化して悉く磁石となさざるを得
ざる、
これ我が悦びにして哀みなり、我が運命
の哀みなり。

されど我が磁力の愛は、鐵片の上に行ふ
ところの奇蹟を、
いかなる石塊の上にも行ふこと能はず。
而して、鐵を追ひ求むる時の如く熱烈に、
いかなる石をも追ひ求むることをなさ
ず、
これを追ひ求めて磁石せむことを思はざ
る、

これ我が一時の嘆息にして、永遠の、
究竟の、我が運命の上の救ひなり。

（一九二六年十月六日）

革命と復古主義

「我はかつてかくの如きよき人を見しことなし、
いかに彼女のめづらかに新しきかな。」
——初めてその愛人を見出でたる人間の、
その一の心は斯く叫べども、聽け、更らに
今一の心に、
「否、こは彼女を見たる二度目なり。
この世にてか此世ならぬ世にてか知らず。
別れ來し日の餘りにも遙け〳〵、又
餘りにも近きことの不思議さよ。」
一の鄕愁にして、しかも新しき島への
新しき一の遠征なる戀愛と革命と、
この二の物の軌道はつねに螺線を畫く。
螺線はもと出でし方を慕ひ求めつゝ、
未だ知られざる處へと走り行くもの。
げに回歸的前進なり、前進的の回歸なり。
嗚呼、汝等革命を好む人々よ、學び知れ、
復古主義的狂熱に出發せざる
如何なる革命も曾てあらざりしことを。

（一九二八年一月）

◇

筑波山や鋸山も、富士の山麓に如何なる草木が生え茂つてゐるか、如何なる水が流れてゐるか、如何なる鳥が飛んでゐるかを知つてゐる。けれども山腹より頂上にかけて、如何なる希らしき動物と植物との見出されるかは、彼等のつひに知らないところのもの、知らうとさへしないところのものである。殊に絶巓の空氣と眺望とが、如何に高爽であり、森嚴であり、寂寥であり凄慘であるかは、如何に雷光と雷鳴と暴風雨との上に超然として聳立するのが、低濕なる地上を徘徊するのと如何に異れるものであるかは、彼等の殆んど夢想だもなし得ないところのものである。

◇

所謂『親鸞物』を先發として、古今東西の崇高偉大を以て許されたる諸の人物を、或は童話的に或は小說的に表現描寫した物の續出は、この數年來の流行とも云ふべきであるが、それらの諸作の殆んど一切を通じて私共は、古今東西の崇高偉大を以て許されたる諸の人物が、「人間」化されたのであるといふ觸れ出しの下に、立派に、綺麗に「凡人」化されてしまつてゐるのを見出す。凡庸人なる作者等は、彼等から「親しみ」を感ずることが出來ないほど、それほど高い處、それほど深い處、それほど恐ろしい處にも、尙ほ且つ人間性の伸びひろがつてゐるものだと云ふことを、知らないのである。知らうとさへしないのである。

（『日常生活を偏重する悪傾向』より）

新貞操論

本誌(「婦人公論」)前月號には、男女各々の姦通及びそれに對する刑法上制裁の問題について、多數の思想家藝術家等の答へが載つてゐた。それに目を通して見た私は先づ、彼等の大多數が揃ひもそろつて、姦通なぞを法律問題にしたくないやうに言つてゐるのを見て、一寸意外に感じた。さうした進んだ考へ方が、餘りにも早く輿論となつてゐたことを意外に感じたのである。

しかし、私の一層意外に感じたのは、貞操なんぞ無意味な、どうでもいいものであるといふやうな見地に立つてゐる人が、彼等の中に殆んど唯だ一人もなかつたといふ事である。そして餘程久しい以前から、人々をして貞操なんぞどうでもよいやうに思はしめる議論こそ、聞きあきるほど聞いてゐたけれど、反對に、貞操の重んずべきを知らしめるやうな言説を、餘りにも讀まないでゐた私が、右の事實を非常に意外に感ぜざるを得なかつたといふのも、當然の事であらうと思ふ。

近頃新聞の社會記事には、知識階級の婦人達の所謂不貞の事件が頻々として報道されてゐる。それらの總てが實際に不貞の事件でないにもせよ、とにかく一體に貞操道德の弛廢を想はしめるものがないとは云へないやうである。

斯うした現象の根本的な、乃至主要の原因が何であるかは暫く措き、私のつねに排撃につとめてゐるところの所謂婦人解放論、及びそれに近いさまざまな似而非新思想の流布が、何程かその勢を煽り立ててゐなかつたと云へるであらうか?

ごくごく最近に至つて所謂婦人解放論の意氣頓にあがらなかつた觀があるのは、さうした點について——貞操道德の一般的弛廢を助けたといふ點について——何人からともなしに其責任を問はれ出してゐる爲めでないと、決してないと云へるであらうか?

ともあれ、一方に於ては舊時代的な一切の事物と共に舊時代的な貞操觀が根柢から覆されて居り、他方に於てはそれに代るべき新時代的な貞操觀が、未だ殆んど何人からも説かれてゐない今日、特に中年以下の男女等が實際の性的生活の上に何等の標準とすべきものも有ち得ないで、或は途方にくれたり、或はいい加減な、出鱈目な始末をつけたり、或は放逸の限りを盡したりしてゐるといふのは、堪へないところの事柄である。

思想界、藝術界の新人諸氏の中に、貞操を無意味なもの、どうでもよいものに思はない人々が、私の意外に感じたほどにも多數にあるのであれば、そして彼等が、何等の理由もなしに貞操を認めてゐるのでないならば、彼等はこの際、それぞれに彼等自身の新時代的な貞操觀を提示して、世間多數の男女等をその昏迷裡から救ひ出すことの義務を感ずべきではあるまいか?

私は『結婚及び離婚の條件』(一九一七年十月「新小說」所載)、『戀愛と結婚との關係を論ず』(一九一七年十一月「婦人公論」所載)以來、貞操の問題についての私の意見を、ほんの斷片的にではあるが、折々述べたことがないではない——それが世間からの如何なる注意と反響とをよんだかは知らないけれど。

ここには、それらの意見を最近に考察したところの物に依りて修正し、補足しながら、多少まとまりのある貞操觀に書き上げたいと思ふのであるが、しかし私自身から見てさへまだまだ非常に不滿足な、とり分け體系化の足りないものであること勿論である。

所謂舊時代的の貞操觀に於てでなく、私達の新しい貞操觀に於ては、貞操の問題は一夫一婦の結婚生活に關してのみ考へられるところのものである。即ち、私達の所謂貞操は少くとも、一夫一婦 結婚生活に於て、そのいづれかの一方が專ら他方をのみ愛して、それ以外の如何なる異性をも愛しないことを意味してゐる。

しからば、その私達の所謂一夫一婦の結婚とは如何なるものであるか？　曰く、性的に愛し合つてゐる、一人の男子と一人の婦人との共同生活である。そしてそのほかの何物でもない。

乃ち、共同生活を營んでゐるところの一夫一婦が、苟くも相互の戀愛によつて結合されてゐる限り、敎會や國家へ登錄されてゐるにもせよ、ゐないにもせよ、彼等は立派に結婚してゐるのである。（從つて、私達の所謂貞操なぞが問題になつてゐる場合、私達は所謂正式結婚とか、野合とか、内緣とか云ふものの間に何等の差別をも認めないのである。）

同時に、他方では、何等の戀愛なくして、しかも戀愛以外の必要や便宜なぞから取り結ばれたところの、そして其儘つひに何等の戀愛らしいものをも生ずるに至らないでゐるところの結婚は、それが如何ほど敎會や國家から承認されたる、如何ほど正式なものであるにもせよ、この場合本當の結婚として取られるに足りないものである。

從つて右の如き似而非結婚に於て、聊かもその配偶者を愛してゐないところの一方が、或は雙方が、その配偶者以外の異性を愛するに至つたとしても、それは如何なる不貞の事件でもあり得ないし、それが大抵の場合その配偶者及び配偶者の周圍を、甚だしく不幸にするものであり、又それ故にさうした不幸をなるべく少くすることの義務が、決して輕視されてはならぬものであるけれど。

（結婚及び離婚の條件として、戀愛が如何に重要なものであるかについては、前掲の拙稿二篇に評論して置いたので、ここにはただ其結論の一部をのみかかげて置く次第である。）

處で、性的に互に愛し合つてゐる男女の共同生活をのみ本當の結婚として認めるやうな、從つて舊時代的な貞操觀を全然超越してしまつてゐるやうな新時代的な見地に立ちながら、尙ほ且眞劍に貞操の問題を問題にしてゐない多數の人々は、貞操の根據を隨分いい加減な、粗末な、淺薄なとこへ置いて、濟まし込んでゐるやうに思はれる。即ち彼等に云はせれば、結婚した男女がその配偶者のほかなる異性を愛しないやうに心掛けるのは、心掛けねばならないのは——

或は、不貞が自らにして其配偶者の嫉妬心を挑發するものであり、その結果が甚だ煩はしく不愉快なものであるからである。

或は、不貞が離婚を餘儀なくした場合、二人の人間に出來た子供等を不幸にすることを恐れるからである。

或は、自分からも他人の愛人を偸奪しない代りには、他人からも自分の愛人を偸奪されないやうに誓約して置くことが、自他の便宜でもあり、社會的秩序を維持する所以でもあるからである。

——斯くの如き、いい加減な、お粗末な、淺薄な根據と理由とからでも、普通の人々の、普通の場合、普通の程度にまで、貞操の德が守られないことはないかも知れない。しかし乍ら、一切の問題について、出來るだけ徹底的に思想し、出來るだけ徹底的に生活しようとする人々は、貞操の意義が何であるかといふことについても、今少し考察と內省とを深めて、今少ししいつかりした物を摑んで置かなければなるまいと思ふ。

偖て私達は、貞操の意義が何であるかといふことを論ずる前に、必要なる順序として、結婚または戀愛といふものが本來何を意味してゐるか、特に倫理的道德的に見て、そもそも何を意味してゐるかを考へて見なければならぬ。

今日、心理學者及び心理學的見地に立つてゐる大多數の思想家等に云はせれば、單に戀愛のみならず、親子同胞間に於ける如き近親愛も、民族愛や人類愛なぞも、皆悉く性欲からの派生であり、もしくは性欲の醇化され、昇華されたものにほかならないのである。

私も從來、大體に於てこれに近い考へ方をしてゐたのであるが、最近に至つては、稍や別種の解釋を下したいと思ふやうになつて來た。即ち、民族愛や、人類愛や、骨肉近親愛は無論のこと、戀愛すらも、性欲からの派生物であるとか、醇化され、昇華された性欲であるとか見るより、むしろ未だ性欲と云ふところまで來てゐない、いゝより原始的な、より根本的な性的要素からの直接の派生物、醇化物、昇華物等であると見る方がより合理的で、いゝより妥當であるかも知れないと、斯う云ふのである。

しかし、私はこの場合、まだかも知れないの程度に止まつてゐる私の假定說を以て、世間の通說となつてゐる意見と、執拗に爭ふつもりは聊かもない。そこで戀愛はじめ種々なる愛着愛情が、悉く皆性欲から出て來てゐると云ふことにして置くのであるが、ただそれと共に、一の重要なる但書として述べて置きたいのは、戀愛はじめ種々なる愛着愛情が性欲から出て來たのであるにもせよ、既に一たび性欲と別個のものにまで發達してしまつた以上、性欲と親密に相伴ふ場合もあれば、性欲と相背け相戰ふ場合もあり得るといふことの事實である。

人々の知れる如く、生物學上生殖とは、成長の一種である。精しく云へば、個體を超えての成長である。一の個體がそれ自身だけで成長しつづけて行くことが出來なくなつた時、他の一の個體と補足的に結合して、一の新しい個體を創造し、その中に新しく成長しつづけて行くことの謂ひである。

そして、一般生物の場合、單に物的のものであるところの生殖が、我々文化人の場合、物的並びに心的のものであるといふことも、また大抵の人々から理解され得るであらうと思ふ。

即ち、我々文化人は物的にのみならず心的にも、異性との補足的結合によつて、それ自らだけでは創造することの出來なかつたところの物を創造し、その中に新しく成長し續けて行くのである。これを物的方面から見れば、生物的生殖への行爲であり、これを心的方面から見れば、人格的完成への努力である。

一般生物の性的結合に於ては、單に雌雄の性欲、もしくは性欲以下の原始的な力がそれを促してゐるにすぎない。けれども我々文化人の性的結合に於ては、それの動因となつてゐるものが、一面性欲であり、他面戀愛であるといふことを忘れてはならぬ。そして性欲がその生物的生殖の方面に必要である如く、戀愛がその人格的完成の方面に必要であるといふことの事

實もまた、看過されてはならないところのものである。

前にも述べたる如く、戀愛が性欲の派生物、醇化物、乃至昇華物であるにもせよ、或は性欲なぞよりもつと原始的な、もつと根本的な物から出たのであるにもせよ、兎に角戀愛といふものにまで發達してしまつてゐる限り、性欲とは別個の物であり、從つて性欲と親密に相伴ふ場合もあれば、頑なに相斥ける場合もあり得る。

乃ち、我々文化人の性的結合にあつては、一方には、全然性欲をはなれた戀愛があるのみならず、性欲とは全然兩立することの出來ないやうな戀愛もあるのである。他方には、非常に精やかな、美しい戀愛であり乍ら、思ひ切り野性的な性欲と相伴つてゐるところのものもあるのである。

戀愛その物は我々文化人にのみ特有のものであり、それと相伴つたり相斥けたりするところの性欲は、我々が他の生物や未開人類等と共通に有つてゐるところのものである。換言すれば、戀愛その物は我々文化人に十分につかはしいものであり、性欲は幾分我々文化人に不似合なものである

しかも、我々文化人に十分につかはしい戀愛が、どんなに美しいものでもあり得ると共に、我々文化人に幾分不似合な性欲が、どんなに醜いものでもあり得ることを思ふ時、戀をしてゐる男女が、一面その事を誇らはしく感ずると共に、他面その事をきまり惡く感ずるといふのも、極めて自然なる事柄ではないか？——とり分け、恥づべきことを恥ぢなくなるほど、厚顏に、惡ずれのしてゐない年少者達の場合に於て！

戀愛その物は少くとも人間的なものである。そして醇化され、昇華され、淨化されればされるほど、愈々崇高なものになつて行き、つひには神聖と云はれることを値するものにさへなつて行く。けれども、その事の故に、苟くも戀愛と呼ばれるほどの總ての戀愛を、漫然神聖扱ひにすべきではない。戀愛その物に伴つてゐる性欲を、一括して、普通に戀愛と呼んでゐる限りに於て、特別に此事が注意されなければならないのである。

總ての戀愛を神聖扱ひにすることが許されないのみならず、一體に戀愛を近親愛、人類愛等一切の愛、乃至愛情の中、最高位を占むべきもの、最も高貴なるものとして見ることも理不盡である。少くとも根據のない事である。

なぜと云つて、戀愛を最高愛として見るところの人々は、大抵皆その唯一の理由として、戀愛以外の愛情が戀愛から生れ出たものであると云ふことを擧げてゐるけれど、それは『性欲又は性的なものから』を『戀愛から』とはき違へてゐる爲めであるのみならず、かりに一切の愛情が戀愛から出たものであるにもせよ、系譜學的に先立つてゐるとおくれてゐるとは、必ずしも直に價値の高下を別つ所以になり得ないからである。

（系譜學的に見てより根原的であることが、直により高貴であることを意味するものならば、性欲もしくは性欲以上にさへ根原的であるところの雌雄性は、戀愛より高貴なものになつて來るではないか？　讀者諸君よ、希くは「戀愛至上主義」なぞの如き、餘りにも當世向きな出鱈目的俗論に迷はされざれ！）

總ての戀愛を神聖扱ひにしたり、一體に戀愛を最高の愛情と言ひなしたりする人々は、どんなに美しい、立派な戀愛すらもが、尚ほ且つ非常に冒險的な、危險な生活であることの事實を、多くの場合知らないでゐる。或は、ともすれば

忘れ勝ちである。更に或は、他の人々へ說き聞かせることを忘れ勝ちである。

然り、戀愛は或る場合、人々の好んで言ふ如く、人格を高めてくれるところの學校であり、道場であると共に、他の場合、人間性を墮落頽敗させるところの娯樂の場所である。

何故であるか？

曰く、戀愛はそれ自らが登上しつつある時、殆んど他の何物にもまさつて人間性の總てを引き上げる代りには、それ自らが下降しつつある時、また殆んど他の何物にもまさつて人間性の總てを引きずり下ろすところの、殆んど神祕的に恐るべき力を有つてゐるからである。

今時に、性欲の調御もしくは超克に關して、戀愛による人格的向上と墮落とを云ふならば、人はその戀愛をより美しいものになしつつある時、性欲のより完全なる支配者であり、反對にその戀愛をより醜いものになしつつある時、性欲のより完全なる被支配者になつてゐるのである。

かくの如く、戀愛をより美しいものにすることによつて、單に性欲を調御克服するのみならず、一般に人間性を高めて行くといふこと、そこに戀愛の、從つて結婚の倫理的道德的意義を認むべきであるが、偖てその戀愛をより美しいものにしようと努める場合、特に重要視されねばならないのは、その純粹性と持續性といふことではないだらうか？　換言すれば、當面の對象に一切を打ち込んでしまつて、また他を顧みないといふ意味での純一な氣持、並びに一たび執着したる對象へいつまでも執着しつづけて行つて、つひに變るところがないといふ意味での眞實な態度を、何よりも先づかうした氣持と態度とを、愈々濃厚に、痛切にしないで置いて、その戀愛をより美しいものにするといふことが出來るであらうか？　更に換言すれば、少くとも貞操の德を有たないでゐて、如何にして其戀愛をより美しいものにして行くことが出來ようぞ。

乃ち、貞操は戀愛その物を向上させる上の絕對的必要條件であり、從つて戀愛を、結婚を、本當に有意義なものにする爲めに、どうしても守られねばならないところの道德律である。

だが、戀愛を戀愛以外の何物かに役立たせるといふ風な考へ方に對して、あながち抗議を申出さないまでも、何となく興味がもてないやうに、氣乘りがしないやうに感ずる人々には、私は戀愛その物の享樂といふことに專ら視點を置きながら、戀愛を出來るだけより樂しく悅ばしいものにする爲めに、如何に貞操が嚴守されねばならないかと云ふことを說いて見たいと思ふ。

そもそも、何等かの悅樂を與へるといふ點に於ては、性欲も戀愛も同樣ではあるが、しかし、性欲はより粗惡な自我主義の一形體であり、謂はば相手を不幸にしてでも自分を幸福にしようとするものであり、戀愛はより精練された自我主義の一形態であり、謂はば相手を幸福にすることによつて自分を幸福にするといふことを知つてゐるものである。

性欲の事は暫く措く。戀愛が相手を幸福にすることによつて自分を幸福にするといふこと、換言すれば、戀愛が自分を幸福にする爲め、先づ相手を幸福にしようとすること、それを便宜上、消極的方面からと、積極的方面からと、別々に考察して見よう。

先づ、消極的方面から考察すると、愛してゐる人は、その愛人の既に有つてゐるところの幸福から、何物をも取りさるまいとする。そしてさう心掛けるのが、一應彼自身をより幸福にす

ることの邪魔になるやうに見えるのをも意に介しないのである。

乃ち其一の場合として、ただ其愛人をのみ愛しつづけてゐなくなるのが、愛人を何等か不幸にするものである限り、必要なる自制的努力を以てすらも、愛人のほかに愛人を作るまいとする。そしてこれが、自らにして貞操の徳を生ずるといふのは、想見するに難くない事ではないか？

次ぎに、積極的方面から考察して見ると、愛してゐる人に、その愛人の既に有つてゐるところの幸福へ、更に出來るだけ多くの物を加へてやらうとする。そして其心掛けの爲めに、彼のより外部的な幸福を犠牲にすることが、大きければ大きいほど、彼自らのより內部的な幸福に於て、ただ益々幸福に感ずるばかりなのである。

乃ち、其一の場合として、その愛人を出來るだけより純粹に、より持續的に愛するといふことが、結局自分自身より外的な幸福をすてて、より內的な幸福を取るものである限り、實際の效果に於て愛人をより幸福になし得なかつたかも知れないやうな時にすら、尙ほ且つ、その獻身的奉仕の十分に酬いられてゐることを感じる。そしてこれがまた、自らにして貞操の徳を生ずるといふのも、たやすく想見し得られるであらうと思ふ。

私は曾て前掲『愛と結婚との關係を論ず』（一九一七年十一月太誌所載）中に述べて置きました――トルストイの『アンナ・カレニナ』といふ小說の女主人公アンナの兄某といふ、さんざ女道樂をして、道樂をしぬいて來た中年者が、大變に面白い事を言つて居りました。私は始終其言葉を忘れることが出來ません。

曰く、『幾人もの婦人を愛した男子よりも、ただ一人の婦人しきや愛したことのない男子の方が、結局餘計に婦人といふものを知つてゐるのだ』と。

私はそれを意譯して、『幾人もの異性を愛した人間よりも、ただ一人の異性のみを愛した人間の方が、結局餘計に戀愛の享樂を經驗してゐるのだ』と云ふやうな言葉に直し、私の頭の中に入れてゐるのであります。

實際、幾人もの異性を愛することになると云ふのは、それだけ多く異性を愛しないで濟む人間の場合に比して、たしかにより不幸な事でなければなりません。私がより不幸なと云つてゐるものを、より不都合な事と云ひたい人々に對しては、私はさうした不都合な事をする人間が、その不都合な事その物の中に、既に十分刑罰されてゐるとだけ答へて置けば、それでよからうと思ひます。

男女の間に於て、棄てる者と棄てられる者とのある場合、世間の常識は勿論棄てられた者の側に同情して氣の毒がります。棄てられた者自身も、さうして氣の毒がられるのを當り前の事だと思つて居ます。けれども、其際本當に憫察されねばならないのは、棄てた者の身の上です。そして、棄てられた者が、それにも係らず依然として其愛を棄てないでゐられたならば、それこそ寧ろ羨望すべき幸福事であります。

此逆說的眞實は、今日のところ未だ、あまり逆說的に見えすぎるかも知れない。けれども此叡智は、個人的にも社會的にも、戀愛の上の或は甘く、或は苦い經驗が、その甘さと苦さとを加へて行けば行くほど、愈々よく會得されて來るに相違あり

ません。一言にして云へば、人間が賢くなればなるほど、戀愛の相手を變へる事の愚さを、いよいよ覺つて參ります。そして其覺りの中から、自らなる貞操論が芽生えて來るのであります。

と。

思ふに、『女房と疊は新しいほどいい』は、女房なるものを性欲的結合の相手として見たのであつて、戀愛的結合の相手として見たのではない。そして所謂女房が、性欲的結合の相手であるよりも、寧ろ戀愛的結合の相手である場合には、當然次ぎのやうに云はるべきである。曰く、『女房と酒とは古いほどいい』と。

幾人もの異性を並べて置いて、或は取り換へ引きかへ相手にするのが、より少き異性と交渉するよりも、より多くの享樂をもたらすかも知れないといふのは、性欲的結合に於ての事であつて、戀愛的結合に於ての事ではない。

戀愛的結合の場合にも、往々にしてより多くの異性を相手にするのが、より多くの享樂をもたらし得るかのやうに思ひなしてゐる人々は、戀愛その物からの、戀愛の本質的部分からの享樂と、單に戀愛の本質を包んでゐるにすぎない外被からの享樂とを取りちがへてゐるのである、混同してゐるのである。

卽ち、さまざまに浪漫的な戀愛劇を、現實の舞臺に演じて見たい芝居氣や、多くの異性から愛着されてゐる、甚だ『もてる』男(もしくは女)として自分自身を感じたい功名心や、さうした男(もしくは女)として世間から見られたい虛榮心なぞは、成程より多くの異性を相手にすることによつて、より多く滿足させられるかも分らない。けれども、さうした種類の滿足と、愛人を本當に愛したり愛せられたりすること其物からの、戀愛の本質その物からの悅びとは、全然別個の享樂に屬してゐるのである。

若し夫れ、戀愛その物をより善く享樂する爲めに、乃至戀愛その物をより美しく、より崇高なものにする爲めに、貞操の德が有用であり、のみならず必要であるとしたならば、貞操は戀愛その物からの本質的要求であり、愛する者自身が彼自身の爲めに樹立したところの道德律であり得るではないか?

そして若し、かくの如き自律的道德からさへ自由にされようとねがふのが、所謂『自由戀愛』の主張であるならば、それは自由の代りに不規律と放恣とを、又戀愛の代りに性欲とそれに近い物とを追ひ求めてゐる故に、寧ろ『放恣性欲』の主張と呼ばるべきものではなからうか?

そもそも貞操が何を意味してゐるか、何故に貞操が守られねばならぬかについてなぞの問題についての私の根本的考察は、以上の所說に大體を盡されてゐるとは思ふのであるが、尙ほその愛人に死別した人々の場合、或は一たび、二たび、乃至幾たびも不貞の過を犯した人々の場合、或はいつまでも戀愛の相手にぶつからないでゐる人々の場合なぞに於て、貞操もしくはひろく性的道德に關して、如何なる生活態度が取らねばならない、といふやうなことをも、少しばかり論じて置きたいと思ふ。

一體に人が死ぬといふのは、本當にどうなつてしまふことであるか分らないけれど、とにかく、單に性欲的にでなく、戀愛的にも(もしくは戀愛的にのみ)結合されてゐた男女の間にあつては、その愛人は一應の意味に於てこそ死ぬけれど、本當には決して死ないで、いつまでも生きてゐるのである。

本當に愛してゐる者から云へば、その愛人は墓の下へ眠つてから後も、引きつづき、より幸

福にされたりより不幸にされたりすることも出來、生き殘つてゐる者を、より幸福にしたりより不幸にすることも出來るのである。

今は世になき愛人が、生き殘つてゐる者によつて、如何にその榮譽を加へられたり傷つけられたりすることか！　如何に其意志及び事業を繼承されたり蹂躪されたりすることか！　特に宗教的に云へば、如何に菩提と冥福とを助けられたり妨げられたりすることか！

又生き殘つてゐる者が、今は世になき愛人によつて、少くとも心の內に永久に生きつづけてゐる其愛人によつて、如何に慰められ、如何に勵まされ、如何に強くされ、如何に賢くされ得ることぞ！（この事は、本當に愛してゐた愛人の死後に於て、なほ生きつづけてゐるところの人々だけが知つてゐる。恐らくは知り過ぎるほどに知つてゐるだらう。）

依然としてより幸福にされたり、より幸福にしたりしながら生きてゐる墓の下なる愛人を、引きつづき愛することが出來ないと云へるであらうか？　その生前と異るところなく、愛しつづけないでゐられると云へようか？

そして愛人の死後にも、引きつづき愛することが出來るとしたら、また其愛をより美しくより崇高なものにすればするほど、性欲の調御克服をはじめとして一般に人格向上に愈々役立つて行くとしたら、或は其愛をより純粹な、より持續的なものにすればするほど戀愛的享樂そのものを益々加へて行くとしたら、愛人の死後にも、ただその愛人をのみ心の內に愛しつづけて行くといふ意味での貞操がまた、當然一の美しい、十二分にも人間的な道德律となつて來るではないか？

勿論、愛人がまだ生きてゐる間の、普通の場合の貞操をすらも、當事者達自身から願はしい事と思はれてゐない限り、他律的に强要することを欲しない私達は、死別した愛人に操を立てるといふやうな德を、一般人にまで强ひようとは決して思つてゐないのである。

けれども、さうした貞操のゆかしさ、尊さと、特にその樂しさを說いて、一人でも餘計にその德を有たせるやうにするといふのが、どうして間違つた事であらうか？

生活上のさまざまな便宜や必要から再婚するといふこと、それは現前の社會制度や組織の下に免れにくい氣の毒な事情として、私共からも勿論寬恕されるであらう。と同時に、さうした種類の再婚が、さうした種類の初婚と共に、既にあまりにも非文化的なものとして、一日も早く跡を絕ち得るやうに、社會の制度と組織とは改められて行かねばならないのである。

外部的事情の拘束から、もしくは單なる形式道德的體面から、止むを得ず再婚を斷念してゐることの愚劣さ、及びその不自然な生活から思ひ切つた間違ひを突發して來ることの危險さなぞについてはわざわざ說かない。

それとは異つて、自分自身の內部要求から、極めて自然に、極めて樂しげに、悅ばしげに操を立てて行かうとする未亡人（男女いづれの場合にも）の場合にさへ、さうした生活態度を下らないもの、もしくは間違つたもののやうに言ひなす人々を、自稱新人達の間に折々見受けるのは奇怪千萬な事である。

それらの人々よ、試みに思へ。死別したる愛人へ操を立てるといふことが、それほど馬鹿馬鹿しいものと考へられてしまつた時、一般に貞操といふものの道德的根柢がまた何等かぐらついては來ないであらうか？　平たく云へば、妻が良人へ、「貴方が亡くなつたら、こんどは私は、どんな人と結婚しらいいでせうね？」といふやうな話を、眞面目に持ち出すやうになつてゐて、尙ほ且つ身をも魂をも打ち込んだ本當

の戀愛といふものがあり得るだらうか？

序ながら、今日ほどに未亡人の貞操の輕視されてゐない時代と社會とに於て、今日ほどにその貞操を守りにくいものであるや否やは、少くとも疑問でなければならぬ。

又、亡くなつた愛人への愛着から、再婚を斷念してゐたところの男女が、他日その志を改め再婚することになつた時、世人の多數は、『それならもつと早くさうすればよかつたのに』と言ふのであるが、しかし貞操の德その物に關してならば、さうした言葉は無意味以上のものである――『どうせ片輪になる位なら、もつと早く片輪になればよかつたのに』といふやうな言葉と同樣に！

或は、長年月に亙つて操を立てて來たところの未亡人が、ふとした機會に魔がさして、戀愛ならぬ、謂はば性欲上の過ちを犯した場合なぞに於て、如何なれば世上の多數の人々は、その未亡人の不慮の過失をのみ過酷に責めながら、その未亡人のそれまでの多年の操持を聊かも嘆美することをしないのか？

（あまり長くなつた故、以下は大にはしよつて書きます。）

片戀は、死別した愛人に愛着してゐるのと大體に於て相近い。そして動もすれば、より苦しく、またより甘い體驗であり得る。少くとも、性欲の調御克服をはじめ一般に人格の向上完成に役立つ點に於て、貞實なる片戀がいかにすばらしい力をもつてゐるかは、古來の天才者偉人などの傳記が甚だ屢々證據立ててゐる。

一たび貞操の上に過ちを犯した者が、重ねて其過ちを犯すまいとするのは、所謂前科ある人々が重ねて罪を犯すまいとするのと同じく、甚だ困難な事であるだけそれだけ殊勝な事である。周圍の者は、與へ得られる限りの激勵と助力とを與へることの義務を負うてゐる。

現在、幾人もの異性を愛してゐる人々が、眞面目な生き方に引き返さうと思ひ立つた時、そもそも如何なる處置をつけるべきであるか？　この問題ほどむづかしい問題はない。

けれども結局は、それらのいく人もの異性の中、本當に愛してゐるのは唯だ一人だけしかないであらう。少くとも浮ついた心をすてて眞劍に考へて見た場合、ゆくゆく本當に愛して行けさうな相手が、その中のどの一人であるかは、決して決定され得ないものではあるまい。

それがどうしても決定され得ないとしたら、私はその迷つてゐる人達に、敢て衷心から進言する――貴下は現在相手にしてゐるところの、いづれの異性からも、今日限り左樣ならをしてお仕舞ひなさい。なぜと云つて、貴下はそれらの異性のいづれをも實際愛してはゐなかつたしこれからも本當に愛することは到底出來ないのだから。そして、それらの異性から悉く離れてしまつて、貴下は一切を新規まき直しにやるのですと。

運命の神がいつまでも戀愛の相手にめぐり合はしてくれない人々、もはやその望みをさへなくされてしまつた人々、それらの人々が學問とか、藝術とかいふやうな仕事に沒頭してゐるのであつたら、大變に善い事である。寄邊のない孤兒とか、慰めのない病人とか、すべて身と心とに病み傷ついてゐる人々に奉仕して、それらの人々と地上の悲しみを分ち、天上の悦びを共にするやうな生活をして行くのは、更に一層善い事である。

又、はじめから學問とか藝術とかに沒頭してゐた爲めに、或は隣人及び神への愛に全存在をささげてゐた爲めに、戀愛といふやうなものへ

わき目をふるひまもなかつた――例へばナザレのイエスの如き――人々の生活は、希有のものでこそあれ、何等の不自然なものではない。のみならずそれらの、性欲をも戀愛をも超越した天才者のお蔭で、如何に人類がその人間性を高められて來てゐるか、如何に新しい生命を與へられ、永久に生きる道を敎へられて來てゐるかは、改めて說くまでもないことであらう。

『やは肌のあつき血潮にふれも見で寂しからずや道を說く君』――この名歌に於て、あつき血潮にふれて見ることとの、大なる人生的意義を強調してゐるのは有難い。けれども、あつき血潮に觸れるといふのは、戀愛の體驗を透してのほか、到底望まれないところのものであらうか？否、貧しき者、傷つける者、病める者なぞに奉仕して、つねに其嘆きをなげき、其哀しみをかなしみ、其煩ひをわづらつてゐる人々こそ、人間の『あつき血潮』は愚か、その骨髓にも、その魂の魂にも、觸れてふれて、ふれぬいてゐるではなからうか？

それにしても、イエス等の如く戀愛を超越して、ただ隣人及び神への愛に生きるといふ生活は、少くとも現在のところ希有の場合のみ可能であり、從つて濫りに推奬さるべきものではない。乃ち、馬太傳第十九章に於てイエス自らも言つてゐる――

『この言葉は人みな受け容るること能はじ。ただ天賦ある者のみこれを爲し得べし。それ母の胎よりして生れつきたる寺人あり。また人にせられたる寺人あり。これを受け容るることを得る者は受け容るべし』

と。

（一九二三年十一月）

◇

文藝家としての天分の甚だ不十分なる人間が、尙ほ且つ文藝家として立つてゐる（生憎と、今の時代にも斯うした人々があり過ぎるのである）場合には、彼が本當に如何なる人間であるかは、彼の創作に於てよりも、寧ろ客間に於ける應對だとか、出版書肆との交渉だとか、金の溜め方使ひ方だとか、その他さまざまなる態度や活動なぞに於て、一層確實に明らかにされるであらう。どうかすると、彼の本當に彼らしきところは、彼の創作時に於て、彼の創作物に於て或は最も不鮮明に、或は最も稀薄に、或は最も不正直に發揮されてゐたかも知れない。

しかし乍ら、優秀なる文藝家が、特に文藝家として、優秀な人間である場合、彼の創作時に於て、また彼の創作物に於て、彼の最も彼らしきところを、最も明白に、最も正直に、最も眞實に、一口に云へば最も善く表現してゐるといふのは、極めて當然なる事ではないか。彼にして萬々一、彼の創作時以外、彼の創作物以外の何物かに於て、彼の彼らしきところをより善く表現してゐたならば、則ち彼は文藝家として優秀であるよりも、寧ろ他の何物かとして、一層優秀な人間であつたのである。

◇

總ての人間を自分自身の高處にまで引き上げようとする意味での貴族主義は跡を絶ち、總ての人間を自分自身の低地にまで引きずり下ろさうとする意味でのデモクラシイの風のみが、世界の隅々にまで吹き及んでゐる今日に於て、文壇の大多數者がまた、此の如き種類の偶像破壞に、愚かしき功名手柄を爭つてゐるといふのも、成程異しむを要しない事のやうにも思はれる。

（『日常生活を偏重する悪傾向』より）

マルキシズムの阿片性

原始人が生活資料の交換をやりはじめると共に、數の觀念が俄かに發達したのであり、そこに數學といふものの起原があると、單にこれだけの知識からして、今日の社會に於ける數學の意義も亦、畢竟交易商業の必要手段以上のものでないと暴斷したならば、捧腹絕倒しないものは一人もないだらう。

處が、現にマルキシズムを冠するところの似而非科學なぞでは、屢々、宗教の原始社會的起源を少しばかり拾ひ上げて來て、それで以て我々文化人の社會に於ける我々の宗教の意義をもつきとめてしまつたかの如き事を言つてゐるのはどうだ？

だが、マルキシズムの似而非科學性を大きく問題にするのは他日の機會に讓り、ここには宗教否定を標榜するマルキシズムが一個の粗惡な宗教であり、宗教は阿片なりと喝破するマルキシズム自體が確實に阿片性を有つてゐると云ふことを談つて見ようと思ふ。

「宗教は民衆の阿片である。民衆の幸福としての宗教の廢棄は民衆の眞正なる幸福の再擁護である」云々のマルキシズム信條は、今やマルキシズム青年の猫も杓子もによつてふり廻されてゐる。

勿論、堂塔伽藍や金ピカの法衣や袈裟なぞからのみ出來上つてゐる、現前大多數の教會的寺院的宗教だけが宗教であるならば、宗教はたしかに民衆の阿片である。民衆をして他愛もない幻想的幸福に醉はしめて、彼等を圍繞する社會的現實をありのまゝに認識することをなさしめず、その改變を要望せしめざらんとする限りに於て、まさしく支配階級に役立つてゐるだけ、それだけ被支配階級に禍してゐるところの阿片である。

總ての幇間的な存在がさうである如く、それらの教會的寺院的宗教は、例へば基督教は帝政時代には帝政時代の支配階級に迎合して、公然たる其信條をも何をも捻ぢ曲げてさへ御用をつとめ、封建時代には封建時代の支配階級に迎合して、あらゆる破廉恥の自己放棄を以て御用をつとめ、偖てブルヂョア時代には、その支配階級に迎合して、我々の眼前に見る如き迎合ぶりと御用ぶりを發揮してゐるのである。

しかも我等の見るところを以てすれば、ブルヂョア時代の次ぎの時代にも無階級の社會は來ないであらうと共に、その時代の支配階級――それがプロレタリアであるかどうかは暫く措き――に迎合するところの、そして其御用をつとめるところの宗教――それは宗教と呼ばれないで、科學とか、社會科學とか、社會主義とか或は全く別な何物とか呼ばれてゐるかも知れない！――は矢張存在するだらう。そして其時代に相應した阿片的效果を其時代の被支配階級の上に及ぼして行くことだらう。

處で、宗教が大抵の場合に於て、右の如き迎合的な、幇間的なものとして、其時代々々の支配階級に御用をつとめるのを常とするにもせよ、それらの宗教と全然別個の、むしろ正反對の態度を取る處の宗教が他方にあり得るならば、宗教は阿片なりと總括的に言ひ切つてしまふことは許されないだらう。

「一世に眞實のクリスティアンは唯だ一人ゐた。そして彼は十字架の上に死んだ」といふのはフリードリッヒ・ニイチェの有名な言葉であるが、

全くのところ基督教とか佛教とか云つて、教祖の名前をだけ保存してゐたところで、その教祖の精神をなくしてしまつた形骸的宗教は、嚴密に基督の教とか佛陀の教とか云はれることを値してゐないのである。

少くとも我々文化人の宗教に於ては、その教祖的精神にまでさかのぼつて見た場合、支配階級に對して迎合的幇間的な態度をとつたやうなものは絶對になく、むしろ私達はその總てが何等かの程度に於て彈劾的叛逆的でさへもあるといふことを認定しなければならない。

加之、彼等教祖は暗黑に對する光明を與へるものとして、迷妄の夢から覺醒させるものとして、民衆が人生の眞實相をありの儘に見ることを妨げるどころか、專らその正しい認識へ導き入れることにこそ眼目を置いてゐるのである。

かりに教祖等が極樂とか、淨土とか、天國とか云ふやうな一つの夢を與へた（もしくは認容した）としても、其場合彼等はこれによつて民衆をより惡しき惡夢から脫却させようとしてゐたのである、其方便の目的とするところは、諸行無常諸法無我の眞實相をありの儘に認識させ、一面其眞實相に堪へ得る不畏力を養はしめ、他面其眞實相に對して忍び得ざる慈悲心を起さしめることにあるのだ。

特に私達の理解する佛教、基督教等から見れば、現實の人間社會はそれが現實の人間社會である限り、所詮、私達の滿足するやうな、私達の理想するやうなもの、即ち淨土その物、天國その物とはなり得ない。

たゞ、私達は私達の周圍の社會を、少しでも餘計により善きものにし、出來得る限りの力を盡して、一歩をでも半歩をでも淨土その物へ、天國その物へ近づけて行きたいと願望し、近づけて行かうと努力する。

そして此の如き願望及び努力のない處に、如何なる解脫や救濟への手段もなく、また此の如き願望及び努力さへあるならばその願望及び努力の內にもはや解脫や救濟が實現を約束されて居り、或る意味に於ての淨土その物、天國その物も既に建設されて居る。

敢てマルキシスト等に問ふ。私達の此の如き考へ方を宗教的でないと諸君は云ひ得るか？

又、此の如き考へ方をなすところの宗教が、ありの儘なる社會的現實の認識を妨げ、從つて其實際的改善を不可能にするものであると諸君は言ひ得るか？

此の如き私達の宗教をも阿片であると言ふならば、諸君は恐らく阿片が何物であるかを全然知らないであらう。

マルキシスト等の所謂『阿片』的な宗教は、よしそれが基督の教だとか佛陀の教だとか云ふ如き、どんなに立派な名で以て自ら呼び、或は他から呼ばれてゐようとも、それは少くとも潑剌たる教祖的精神を完全になくしたもので、その單なる形骸的存在は宗教としてよりも寧ろ僞宗教として見らるべきである。

さうした僞宗教は、特に我が日本等に於ては今日の處、マルキシストなぞが直譯的な觀察で以て大騷ぎをしてゐるのに對して、むしろ既に無力過ぎる位になつて居り、私共の大きな問題とするにも足りないのであるが、兎もあれ、私達からすれば、單に阿片的であるより以上にさへ有害な僞宗教や、似而非宗教をマルキシスト等が否定したり、排擊したり、絶滅したりしてくれるならば、これほど有り難いことはない。

一方僞宗教や似而非宗教が、社會的現實のありの儘なる認識をさまたげ、その改善的努力を不可能にすると云ふやうな事實を見るとき、他方私達は、十分に高い宗教的叡智に到達しない

けれども、精一杯誠實に事物を考へようとする人々が、屢々現實の此娑婆世界に理想的に完全なる社會の到來することを信ずるに至るといふ事實を見る。

そして此等の宗教的傾向をもつた近代の夢想家は、所謂空想的社會主義者としてマルキシスト等から斥けられてゐる。

だが、曾て空想的社會主義の名を冠して、無造作に斥けられてしまつてゐた社會思想も、近來の再吟味に於て強ちそれほど無視さるべきでないことを證據立てゝゐる。

又、それと同時に、手續の科學的（又は似而非科學的）であるにも似げなく、マルキシズムの結論に案外非科學的、反科學的なものの多いことも亦知られはじめてゐる。

マルキシズムに對する最も峻嶮なる批評家の一人であるシンコキッチ教授の『マルキシズムと社會主義』の中に言ふ――

末世の大審判の日近づくべしとの信仰を固く持してゐることに就いては、マルクスとその使徒とは毫も基督再臨論者と異らない。千八百五十年以來、殆んど總ての商業的不景氣の襲來は彼等によつて資本主義の終局の初めであるかの如く先觸れせられた。若し彼等ミレリテス（米國の基督再臨論者）のやうに此出現の日を迎ふるに、白い豹衣を着飾らなかつたとすれば、それは彼等の經典が異つてゐたからである。彼等は各國のプロレタリアに「用意せよ」との通牒を發した。千八百九十三年國際社會主義者大會は、次ぎの決議を通過した。『經濟的工業的發達は、刻々進行し、恐慌の襲來將に近からんとす、本大會は茲に各國に於けるプロレタリアが、階級意識に目覺めたる市民として、共通善に對し、その各自の國を如何になさんかを知得するの緊要なるものあるを告ぐ』と。……さりながらマルクス主義者の豫言しつゝあつた其焦眉の大變革は、其後の六十年の間には起らなかつたといふ事實のみ、そのまゝになつてゐる。實際彼等は何故それが延期されてゐるのかを説明しなければならない時であつた。基督再臨論者は何時も失望した。その度毎に彼等はそのダニエル書と默示錄との解釋を訂正したのである。

此場合、マルキシスト等の豫言が今以て中らないでゐるといふやうなことを強調するのは、私達にとつてそれほど興味のあることではない。私達はたゞ、彼等が地上天國の出現を少くとも餘り遠からぬ將來に希望し期待してゐる點に於て、彼等の冷笑する空想的の社會主義者なぞの非科學性に、相讓らないほどのものを有つてゐることを言ひたいだけである。

近々の内に、所謂社會革命が成就すれば、或はそのあとにどれだけかの、數十年又は百數十年かの過渡期をすぎて共産主義が完全に實現されるに至れば、人類社會から一切の階級對立がなくなり、一切の權力支配がなくなる――といふのは、總てのマルキシストの例外なく信じてゐるところの根本信條である。彼等に共通する最も幸福なる夢想的遠望の一つである。

斯うした夢想的遠望が、自ら『科學的』を誇りとするマルキシストのものであるとは、實に驚くべき事實ではないか？

佛蘭西の大革命の頃、あの革命家達は、封建制度の根柢的に破壞された後にも、所謂第三階級が完全に解放された後にも、尚ほ無産階級の、自由、平等、博愛の理想社會が出現しないと云ふことを、どうして豫想し得たらうか？

丁度その如く、マルキシスト等はプロレタリア革命が成就したあとに、尚ほ依然として階級對立があり、それに原づくあらゆる社會惡の殘

存するかも知れないと云ふやうなことは、假想だもなし得ないやうに見えるではないか？

　處で、所謂階級對立、もしくは權力支配は人類の社會に於てそもそも何時からはじまつたのであるか？　アダムとイヴとが樂園を逐はれない以前の事は暫く措き、我々の科學的な推定と現實的な認識との溯り得る限りに於て、そもそも何時の世の何處に何等の階級對立もない、何等の權力の支配しない人類社會といふものがあり得たか？

　殆んど限りなく遠い過去から人類社會に伴つて存在したらしい——この事は誰よりもマルキシスト等が一番よく知つてゐる筈である——階級對立または權力支配が、千九百何十年か、乃至おそくともそれから何百年かの後に、プロレタリア革命といふ一個の奇蹟的事件の勃發と共に、綺麗に此地上から跡をたつてしまふといふやうなことが、そもそも可能事として考へられるといふのか！

　そして、これが、科學的な、社會主義者の、唯物辯證法的に把握された社會認識であるといふのか！

　しかも一切の社會惡の根原を權力支配または階級對立の事實にのみ置くマルキシスト等からすれば、權力支配のない、階級對立のない各人自由にして平等なる社會は、いかなる社會惡の殘存をも考へさせないところの理想鄕であることを思へ！　今から餘り遠からぬ將來に於て、一日突然、人類社會のそれまでの辯證法的發展がその發展を停止してしまふといふやうな、彼等自身の立場に照らして實に奇怪千萬なる事を考へたものではないか？

　私達の見る處を以てすれば、曾て或る者は獅子の百獸を支配する如くして支配した。又或る者は、妖術者の愚民を支配する如くして支配した。更に或る者は、これらの支配者を兼ねる者として支配した。

　我々の眼前の社會では、主として財力に土臺を置いた、組織的な、科學的な武力の所有者が支配者となつてゐる。

　支配するところの權力は、それぞれの社會に於て種々さまざまである。歴史的に見れば變遷推移があつたとも云へる。進化論者に云はせれば、權力そのものが次第に進化して來てゐるだらう。

　支配するところの權力の性質が、今後もこれまでと同じく變遷推移し、乃至進化し得るものとしたならば、財力に土臺を置いた、組織的な、科學的な武力といふやうな現前の社會的支配力が、いつまでも我々人類の間に支配力として存續すべしとは想像しがたい。

　又、人類生活の現狀が其下り坂へかかつてゐるのでなくて、寧ろまだまだ上り坂にあるのだとしたならば——私自身は此點に於て餘り樂觀主義者ではなくなつてゐるのだが——現在の粗惡な支配的權力を、どれだけかより立派な、より精緻な、より堪へ易い權力に置きかへるとか改善するとか云ふ意味での、大きな變革を期待したり企圖したりするといふのは、必ずしも不可能事ではなささうである。

　例へば、小作料や、地代や、家賃や、銀行からの利子や、會社からの配當なぞで、全然不勞所得で生活してゐる人々の財力が、結局私達勤勞者を支配する權力となつてゐる社會に比べれば、かなり狹義の生産事業に於てでも、經營の頭腦や、科學的知識や、技術的熟練等を有つた人達が、單なる資本の所有者以上の權力者であり得るやうな社會は、少くとも今日の私達にとつて、たしかに一段と住心地のよい社會と云はれるだらうし、又さうした新しい權力支配形態へ推移して行くやうにと努力する如きは、決して意義のない事ではない。

だが、さうした新しい權力支配が確立されるかされない内に、恐らくは更により望ましい權力支配への要望が起り、別個の激烈なる階級對立をも招致してゐることだらう。しかもかくして、いつまでもいつまでも同じやうな事を新しく反覆しつづけて行くのが免れがたき人間社會の發展過程でなければなるまい。

要するに、階級對立又は權力支配は、人類社會史の最初の頁から最終の頁まで、つねに形態を變化しながら不斷に持續する。しかも自らその途上の或る一點に立てる凡庸者等は、その理智力の凡庸さの故に、足下の金ダラヒを天上の月より大きいと考へ、もしくは肉眼に映じない無數の太陽が、無限に遠くまで存在し得べきことを思はない如く、其近き將來に無階級の理想社會が出現するなぞといふ、オメデタイ夢想をもほしいままにするのである！

總ての宗教は、爾餘の宗教に對する態度に於いては聰明であるが、自分自身の宗教の事になると盲目である。自分自身の宗教に對しては、普遍的法則よりの一除外例を設けるが、他の宗教に對しては、自分自身の上に曾て疑問としない事をさへ、兎や角と言ひ爭ふのである。

――これはフォイエルバッハの言葉であるが、マルキシズムも亦、一個の宛然たる宗教として、他の宗教の上にあれほど手きびしく斥けてゐたところの非科學的な夢想を、陶醉を、從つて一種の阿片性を、矢張それらの上に、申分なく認容し、暴露してゐるではないか！

その上、マルキシスト等にまで實際上最も大きな魅力となつてゐる阿片的陶醉が、そもそも如何なるものであつたかを知る爲めには、教祖マルクス自身の次ぎの言葉を熟讀玩味するだけで十分であらう――

しかしプロレタリアは其獨裁をそんなに早く止めはしない。復讐をして勝たしめよ。青き焔の如く、人民の心臓を貫きて行かしめよ。赤き焔の如く、××を、×を、炎々として燃えしむるところあれ。プロレタリアの指導者は、『革命が勝利を得たとて革命的興奮は、直ぐ消ゆるものでない』ことを知らねばならぬ。これの反對に、此興奮を出來るだけ長く保持するやうにしなければならぬ。呪ふべき記憶の殘れる、いやな人肉や公共建造物に對して、思ひきり激烈な一般人の復讐の手本を示すことを×めるやうなことを、決してしてはならぬ。すこしの容赦もせず、この復讐の手本を×はしめることに人々を××し、これを××せしめなければならないのだ。

と。

――これは單に阿片的陶醉を思はせるだけのものではない。この舊約書的にあくどき惡趣味は、恐らく私達をしてともすれば、大にマルキシズムから遠ざからしめるところの最も有力なものの一つであらう。

◇

勿論、外面的生活の記錄としての『傳記』も、藝術家の藝術を理解する上に、色々の手引となり、鍵となり得ることは承認されねばならぬ。從つて、さうした便宜を作ることの爲めに『傳記』を調べるのは善い事である。けれども、藝術を、創作物を理解する爲めにでなくして、寧ろ作家の人格に『親しみ』を感じ得ることの爲めばかりに、例へばシェキスピアの如き天才者の『傳記』を求めるのは、たしかに恕されることの出來ない冒瀆である。

（『日常生活を偏重する悪傾向』より）

蟲のいい人類

近代的な、近代歐羅巴的な、常世風な總ての物が、いよいよ益々私の心から遠くなつて行く。私に面白くないもの、氣に入らないもの、我慢のしにくいものになつて行く。

備忘錄のやうにして書きとめられた、これらの斷片的な表白の中にも、所謂新しい思想や新しい感情と云はれるやうなのは一つもあるまい。私は私自身の考へ方感じ方を、寧ろ餘りにも新しすぎるのだと思はぬことはない。しかし、世間からして、餘りにもふる過ぎるのだと言はれることを、それほど氣にしてもゐないのである。

『民族の爲め』が一切の事物の價値を決定するのだとは、流石にもう大多數の一般群衆も信じなくなつてゐる。

しかし乍ら、より新しき標準としての、理想としての『人類の爲め』が、これまでの『民族の爲め』なぞに比して、ただ僅かに一歩を進めたものに過ぎないことは、今日果してどれだけの人々から氣附かれてゐるだらうか？

私は決して厭人主義者ではない。のみならず、大體に於ては、何物にもまして人類を愛しても居り、又愛さなければならぬと思つても居る。

それにもかかはらず、人類の悉くを皆、一樣に愛することが出來ない。そして出來ないのを不自然だと思はない。なぜと云つて、その或るものに對しては、非常に自分に近く、自分の同類であると感ずるけれど、他のものに對しては、それほど自分に近く、自分の同類であると感ずることが出來ないからである。

更に又、私達が人類の中の或るものより、ずつと好きな、ずつと愛すべき生物を、人類以外に見出すといふのは、實際に於てあまりめづらしくないところの私達の經驗である。

例へば一方には、僞善者のほかなる何者でもないやうな宗教家、教育家なぞ、及び僞善者たることの必要からさへ解放されて來てゐる、鐵面皮を第一の武器にしてゐる、或は政治家と稱する、或は實業家と稱する紳士的無頼漢、無頼漢的紳士などを——

他方には私達の掌の上から穀物を食べる足の紅い鳩、尾を振り乍ら私達のあとについて來る小狗、青々と浪打つてゐる麥の上を、ほがらかに歌ひ乍ら舞ひ乍ら雲雀、いな、青々と浪打つてゐる麥その物、その隣に一面の菜の花、蝶々、それよりも可愛い、勤勉な勞働者の蜜蜂、蟻なぞを——

これらの二種類のものを對照して見る時、どちらが私達の心にまでより近く、より親しいものであるか？ どちらがより多く『異邦人』として感じられ、どちらがより多く『同類』として、同じ血の、同じ神經の通つてゐる生きものとして、同じ悲しみをかなしみ、同じ悦びをよろこぶ友達同士として意識されるか？

人類の中にも、あれほど厭はしき生物があり、人類のほかにもあれほど愛すべき生物があるとしたら、人類といふ同種屬感情、同類意識はもはや、それほど重要視さるべきものではない。

人類なるが故に、人類ならざるが故に、一方がつねに他方を犧牲にしていいと云ふのは、さうした意味をまでこめての『人類の爲め』は、もはや私達の感情と理性とのいづれからも承認

されないところのものである。

餘りに重すぎる荷車につながれて、夏の日盛りなぞに、嶮しい坂道の中程に立ちすくんでゐる駄馬を見たまへ。彼は私達と同じ汗を流し、同じ太息をつき、また時としては全く同じやうに泣いてゐるではないか？

私はあの馬方をも愛すべき漢であると思ふ。しかし、彼より以上に苦しんでゐる故に、駄馬は一層賢く、一層人間らしくさへ見えるではないか？ 否、一層賢く、一層人間らしくさへ見える故に私達は折々あの馬方を幾分憎むべき男のやうにさへ思ふではないか？

諸君は、諸君の一寸した好奇心から、或は全くの偶然なる機會から、その手の中に小鳥を握つて見たことはないか？

その時、可憐な小彼女は、その小さな體全體が心臓ででもあつたかの如く、本當に命懸けな動悸を打たせながら、諸君及び諸君の姉妹等の有つてゐるのと丁度同じぬくもりを諸君の掌に感じさせなかつたか？

そして諸君はまた、次ぎのやうに口の中で言ひながら、再び彼女を自由にしてやらなかつたか？

『何も心配することはありませんよ、お嬢さん！ 貴女のやうな可愛い人に對して、誰が害を加へるでせう！』

神が人類を幸福に生きさせる爲めに、人類以外の總ての生物を造つたといふ、蟲のいい傳説を信じてゐる歐羅巴人等も、動物愛護を言はないではない。しかし彼等のそれを言ふ理由はかうである――

特に子供等が動物を虐待したり、動物の虐待されるのを見たりすることは、彼等の心情を荒々しく、むごたらしいものにする。そして其結果は、互に愛し合つて行かねばならぬ人間の道徳的向上に障害とならざるを得ないといふのである。

依然として、これは『人類の爲め』ではないか？ 人類以外のすべての生物を手段とする、人類中心の考へではないか？

神が人類を幸福に生きさせる爲めに、人類以外の總ての生物を造つたといふ傳説に、數十世紀の間を養はれて來た歐羅巴人と、幸にして今尚ほ輪廻觀念の全くなくならないでゐる私達東洋人とを、此場合同一に考へることは許されない。

私は佛教に說くところの如く（或はそれ以上に耆那教に說くところの如く）、輪廻をその儘に信じてもいいやうな心持にさへなつてゐるのだが、それは此場合の問題にすることを控へよう。

ともあれ、總ての生物は生物として平等にその生命を愛惜されなければならぬ。なぜと云つて、それらの生命は悉く皆、一つの大きな生命につながつてゐるのだから。その一つの大きな生命の部分部分に過ぎないのだから。本當の生命はただ一つしかないのだから。否、生命は一つとも一つ以上とも數へることの、單に『生命』といふよりほかに言ひやうのないものだから。

無數のより小さな生命から構成されてゐるといふ意味に於て、その内にある一切の物が生きてゐるといふ意味に於て、最後に全體として、最も大なる、恐らくは永久的なる生物であるといふ意味に於て、この宇宙は明白に生命である。生命の生命である。

生命としての宇宙は、殆んど死の如く、無限

に深い眠りの底から、次第次第に淺い眠りの方へ浮び上り、ともかくも現在の處までやつて來た。夢うつつの間にあるとも、半ば目ざめてゐるとも、云へば云へるであらう。そしてこれからも愈々はつきりした覺醒の方へ浮んで行き、つひには神の如き、無限に明るい意識情態にまで到達することであらう。

宇宙は、『生命』その物は、全體としての生物は、間斷なく、限りなく進化して行く。そこには單なる小部分としての退化だけがある。より多く進化せんが爲めの、より少き退化があるに過ぎない。

しかし乍ら、無限から無限への生命の大きな流に、時に或る區域をかぎつて見るならば、その經過はつねに必ずしも進化的であるとも限らないであらう。

例へば今、所謂原始動物（私共は、原始と云ふ言葉をあんな場合に用ひたくないやうにも思ふのだが）アメエバから人類までの經過が、大體に於て進化の歷史であるといふことは承認してもよい。

しかし乍ら、人類が一たび人類になり得てから今日までの經過は、大體に於てすらも、果して進化であつたか？ それとも退化であつたか？

少くとも、有史以來に範圍を限つて云へば、人類が單により複雜な、より手の込んだ生き方をするやうになつたといふだけでなく、道德的にも美的にも、本當により立派なものの方へ、だんだんと進化して來たのであるか、それとも反對であるかは問題である。さうだ、如何に控へ目に云つても問題である。

あとからあとから發掘され、發見される古代の諸事物を見る度毎に、古代人がその中から少數の巨人的天才（後代に至つてはそれに彷通つたものをさへ見られないやうな）を産出したばかりでなく、彼等全體としてまた實にすばらしい生活と仕事とをしてゐるのに、つくづく私達は感嘆し敬服する。

進化か退化かの問題を具體化する爲めには、人類が上前をはねること、利子を取ることを覺え、器械といふものを發明したことを考へて見るのは必要な事だ。

特に、人類自身がその手足の延長のつもりで作り出した器械といふ怪物——あの怪物がさかしまに、その手足の延長として人類を使役してゐる近代人の憫笑すべき『文明』生活の有難味を、細密分析して見るのは必要なことだ。

幾十倍幾百倍の生産力を加へながら、人類の大多數は住むに家がなく、まとふに衣服がなく、食ふにパンすらもない。しかもその不可思議なる生産力の正體をつきとめて見ようともせず、その正體が如何なる吸血鬼であるかを突きとめても、扨てそれをどうすることも出來ないやうに、愚鈍な惰弱な、これでも人類の子孫かと歎かれるやうな現代の人類を考へて見るがよい。

そして、人類は決して進化をやめてゐないし、退化への、頽敗への、破滅への道を急いではゐないと、嗚呼、果して誰が言ひ得るか？

いつその事、一息に破滅してしまへと、私の口は極度の興奮にふるへながら、反語的にはげしく絶叫するかも分らない。

然し、私自身も其一人として、心の底の奥底に、どうして人類の絶滅を痛快がることがあらうぞ！

それにしても明白に下り坂に向つてゐる人類が、再びその勢を盛りかへして來ることが出來るや否や、今ひとたび進化的の經過を取るや

うになり得るや否や、それはただ神だけが知つてゐる。然り、「人類の爲め」に人類以外の總ての生物を造つたエホバ神よりほかなる、何等かの新しき神だけが知つてゐる。

ともあれ、人類の絶滅は、全體としての生物の運命にとつて、生命その物の大きな流にとつて、それほどの問題ではないかも知れない。寧ろ、全く何でもないほどの小事件かも知れない。そして人類よりも一層人類らしき、より高級な、すばらしく立派な種屬が、直に、または適當な時期に於て、補充的に造り出されるかも知れない。

人類の絶滅が直に宇宙の解體でもあるかのやうに、或は宇宙の存在を無意義にするものでもあるかのやうに考へ、またそれ故に、さう易々とそんな事があつてはたまらないと云ふ風に考へるのは、全く救ふべからざる人類の蟲のよさ加減である！

（一九二四年三月）

◇

文學史とはそもそも何であるか。曰く「文壇」の歴史にほかならない。『文壇』の表面にまで浮動して來たところの作家及び作品の記述であり、乃至それらの物を通じて推斷されたところの一般的風潮の記述である。

文壇とはそもそも何であるか。文藝上の作品の賣られたり買はれたりしてゐるところの『市場』の謂ひである。賣る者はもとよりつねに文藝家もしくは其代辯者であるが、買ふ者は時に少數の宮廷人貴族富豪等、もしくは其代辯者であり、時に多數の民衆もしくは其代辯者である。その賣買に用ひられるところの貨幣が如何なる種類の物であるかは此場合の問題ではない。

ともあれ、文壇は文藝の市場であつて生産地でない。されば、どんなに立派な、賣れ行きのよささうな作品であつても、其作者にして賣ることを欲しないならば、その作品はつひに文壇に現れないでしまふ。たとひ賣ることを拒まないにしても、作者にして若し彼自ら市場へ運び出すことの煩はしさに堪へないならば、且つ彼に代つてその勞をとるところの者がないならば、其作品もまたつひに文壇に現れないでしまふ。たとひ作者が市場へ運び出すことの煩はしさに堪へようとも、或は彼に代つて其勞をとるところの者があらうとも、尙ほ且つ生産地から文壇への距りが餘りに遠く、交通の不便が餘りに甚だしきにすぎて、結局運送の不可能である場合には、其作品もまたつひに文壇に現れないでしまふのである。加ふるに、文藝市場に於ける取引は、十分に合理的なものでなく、賣れなくともよい位の作品が大に賣れ、賣れなければならない位の作品が少しも賣れなかつたり、或はつまらない作品が法外に高く買はれ、立派な作品が馬鹿馬鹿しい安値にしか買はれなかつたりする。そして市場の、文壇の記錄に著しく大きく殘るのは、一に大に賣れた作品と、高く買はれた作品とばかりである。

乃ち、過去の優秀なる文藝家及び其事業が、悉く皆文學史上に記錄されてゐるかのやうに考へたり、少くとも最も天才者的な文藝家等の名前が、文學史の内に網羅されてゐるかのやうに考へたりするのは、私達の望遠鏡の屆かない處に如何に數多くの、如何に大なる天體でもがあり得ることを思はないほどの、眞に驚くべき愚かしさである。

（『文藝家と文壇家』より）

何故鳶が鷹を生むか

――『個々の生理的心理的特徴傾向は遺傳されるけれども、全體としての人間的價値は遺傳されない』といふ、曾て何人からも指摘されたことのない一大事實を中心にする斷片的な考察――

一八六六年、有名な科學者でも何でもない一介の僧侶メンデルが、豌豆の遺傳に關する四十頁ばかりの小論文を發表した時、科學者達の唯だ一人も、それに對して何等の注意を拂ふこともしなかつた。そして其儘二十世紀の初年に及んだ。とに角四十年近くを經過してからでも、あの偉大な遺傳法則の發見者メンデルの名が想ひ起され、あれほどの榮譽を歸せられるに至つたのは、寧ろ一つの立派な奇蹟であらねばならぬ。

メンデルの發見が、右の如き運命を辿りぬけねばならなかつたのは、改めて云ふまでもなく、有名な科學者によつてなされたものでなくして、單に一介の僧侶によつてなされたものであつたからである。その上、餘りにも新しすぎ、餘りにも時代を超越してゐたからである。

今日の遺傳學は、殆んど其全部が、メンデル法則の適用と間違ひだらけの適用とから成立してゐる。

メンデル法則の、間違ひだらけな適用を基礎として、その上に愚かしくも築き上げられたる似而非科學が所謂優生學である。

優生學は未だ人情を解するに至らない年少者の無邪氣さと快活さとを以て言ふ、『生れながらの不具者や、病弱者や、狂人や、犯罪者は劣等人である。そしてそれらの劣等人が同じく劣等人であらうところの子孫を殘さないではゐない故、彼等をして絕對に子孫を殘さしめないやうにすることは人類全體の爲めに必要である』と。

或る事に關して、一方の人間を低劣であると云ひ、他方の人間を優秀であると云ふのは、極めて穩當な事であり、隨つて私共の日常やつてゐるところの事である。

全體的に、人間として、一方を低劣と云ひ他方を優秀であると云ふのも、常識的な言葉として必ずしも許されないことではない。

しかし乍ら、我々人間の目にまで、如何に立派さうに見える人でもが、神の前に丁度正反對な物であり、我々人間の目にまで、如何につまらなさうに見える人でもが、神の前に丁度正反對な物であり得ることを信ずる限り、神ならぬ人間の我々は、我々自身に對してのほか、そもそも何人に對して不敵なる瀆冒的宣告を下し得るものぞ！『彼等は生れざりしならば幸ならん。汝等は生れざりしならば幸ならん』と。

優生學者等からして『生れざりしならば幸ならん』と刻印を打たれるところの先天的不具者、病弱者、狂人、犯罪者等は、勿論定型的の人間であるよりも變質的の人間であると云はれ得るであらう。

だが、特に數千年の文化史をもつてゐる、最高生物としての人類界に於て、單に定型的であるといふことが、果してそれほど善い事であるといふことが、果してそれほど善い事であらうか。單に變質的であるといふことが、果して

それほど悪い事であらうか。

定型的でないのが、變質的であるのが、直に劣等人たることの條件をみたすものであるとしたら、恐らくは最も多くの割合に於て、定型的ならぬものを、變質的なもつを有つてゐる人間種屬は、種屬としてまた最も劣等なものになるのではあるまいか。

優生學者等よ。もしも卿等の言ふ如く、單に生れながらの不具者が劣等人であるとしたら、塙保己一は劣等人であつたらうか。

單に病弱者であることが劣等人であるとしたら、正岡子規は劣等人であつたらうか。

單に狂人であることが、乃至精神異狀者であることが、劣等人であるとしたら、ニイチェは、ドストイエフスキイは、マホメットとポオロとは劣等人であつたらうか。

單に犯罪者であることが劣等人であるとしたら、ヱルレエヌやワイルドなどは劣等人であつたらうか。序ながら不敵にも朝憲を紊亂したり、社會の秩序を破壞したりしたといふので、殆んどのべつに『別莊ばひり』をさせられてゐる社會主義的犯罪者堺利彦氏、山川均氏等は、また犯罪者たるの故を以て劣等人と云はれるであらうか。

一方を優等人とし、他方を劣等人とすることが許されるにしても、優等人であるか劣等人であるかを決定するのは、個々の生理的心理的傾向が定型的であるや否やでなく、變質的であるや否やでない。寧ろ全體として、人間として、人格的存在として、倫理的に、又審美的に、優秀であるかそれとも低劣であるかである。

へぼ繪かきとそれに相應した友人のディレッタント等とは、いつも仔細らしげに言ふ――あの色この線は、全く善い色、善い線であると。殆んど、それらの色彩や線條を畫面の全體から切りはなして見ても、尚ほ且つ美であり、醜であり得るかのやうである。

似而非科學『優生學』の信者等は如何なる個々の生理的心理的特徵傾向も、それ自身優等なものでも劣等なものでもあり得ないといふこと、それらの特徵傾向全體を綜合し配列する上の仕方に於て、はじめてそれぞれの價値を、人間的價値を生ずるといふことを思はないのである。

どもりは普通の場合願はしいものではないだらうが、三宅雪嶺先生や、大杉榮君などに於ては、寧ろ一種の品位となり、もしくは魅力となつてゐるではないか。

亡くなつた大隈侯爵に於ても、あの片脚をなくされたことが、本來の長廣舌を愈々長廣舌にし、本來の『世界的偉人』を愈々『世界的偉人』にして行つたのではなかつたらうか。

電光石火の早業が、手品師にあつては、身を助ける藝となり、巾着切にあつては、身を滅ぼす本となる。

ドストイエフスキイにあつては癲癇が彼の藝術の最善なるものを産み出させることに役立つてゐる。けれども、汽車や電車の運轉手等に癲癇の發作があるといふのは、單に假定して見ただけでも我々は戰慄を禁じ得ないではないか。

ニュウトンはその二匹の愛犬をして自由に出入せしめる爲め大小二つの孔を扉にあけた。大きな犬の爲めに大きな孔が必要である如く、小さな犬の爲めにも小さな孔が必要であると考へたのである。

彼はまた鷄卵を煮てゐるつもりで、懷中時計を鍋の中に入れてゐた。恐らくは其手に鷄卵を握りながら、懷中時計を見つめる如く見つめてゐたことであらう。

かくの如き心理的特徴傾向は、ニュウトンなぞの場合に於て天才を證明するものとなり、普通の場合に於て低能を證明するものとなつてゐるではないか。

再び言ふ――これを劣等人と云ひ、かれを優等人と云ふやうなことが許されるにしたところで、その劣等人であるか優等人であるかを決定するのは、個々の生理的心理的特徴傾向に定型的ならぬものがあるや否や、變質的なものがあるや否やでない。寧ろ、それらの特徴傾向を總括してゐる一全體として、人間として、人格的存在として倫理的乃至審美的に優秀であるか、それとも低劣であるかである。

ところで、似而非科學『優生學』の信者等は、個々の生理的心理的特徴傾向に、定型的ならぬもの、變質的なもののあることが、直に劣等人であると云ふ風に考へ、そして個々の特徴傾向がメンデル法則等に從つて遺傳される故、概して劣等人の子孫には、必ずどれだけかの劣等人が出て來るといふ風に考へる。換言すれば、人間としての價値、人格的價値、その物が遺傳されるものと考へるのである。

だが、讀者諸君よ、人間としての價値、人格的價値その物が果して遺傳されるであらうか。惡人の子孫の中のどれだけかが、必ず『惡』その物を遺傳されるであらうかどうか。醜婦の子孫の中のどれだけかが必ず『醜』その物を遺傳されるであらうかどうか。

雌雄の鳶(劣等鳥としての)は、必ず鳶を生まねばならないであらうか。

鳶と鷹との間に生れたもののどれだけかは、また必ず鳶でなければならないであらうか。

重ねて言ふ、人間としての價値、人格的價値その物が遺傳されるであらうか。

恐らく、大多數の諸君の健かな本能と、こまやかな感覺と、氣高く美しい感情とは、聲を揃へて力強く『否』を叫ぶであらう。

だが、諸君の中の何人の理智が曾て、『價値は決して遺傳されない』といふ此一大事實を明白に指摘してくれたであらうか。

優生學の根本思想を何となく瀆冒的に感じてゐる人々の如何に數多くあることぞ。それにもかかはらず、これまで唯だの一人でもが、優生學を全然似而非科學的であり、非科學的であり、單に笑ふべき出鱈目にすぎないと云ふことを喝破したであらうか。ただの一人でもがそれをなしたであらうか。

餘りにも知れ渡り過ぎてゐるメンデルの法則なぞを細説したり、染色體論を中心にした當時流行の、けれども少からず怪しげな假定説の色々なぞを講釋したりすることは、今の場合控へて置かう。

ともあれ、平たく言つて受胎の際、兩親の生理的及び心理的性格は、それぞれに先づ個々の微細なる遺傳因子に分解される。この事は今日大抵の遺傳學者等からも承認されてゐる。

ただ私は、右の分解が彼等の考へてゐるよりもずつとずつとこまやかな、殆んど無限にこまやかなものであるかも知れないことを言つて置きたい。

さて第二には、右の如く分解された父方の遺傳因子と母方の遺傳因子とがすつかり混淆されてしまふ。

さて第三には、右の如く混淆された遺傳因子の中、同一傾向のものは相合していゝより力強い

ものとなり、反對傾向のものは相斥けて、より無力なものとなり、時には殆んど無きに等しいものとなるであらう。

さて第四には、右の如き變化を受けた遺傳因子が、父の性格ともちがひ母の性格ともちがつた、全然新しい一つの性格に、生理的及び心理的性格に凝結してしまふ。

兩親を同じくする場合、子供達の性格にふくまれてゐる遺傳因子は、皆同一である。ただ受胎の時を異にするところから、凝結の結合配列の仕方を異にし、從つて非常に異れる性格を造り上げるのである。時としてはあれでも兄弟かと思はれるほどのものを造り上げてしまふのである。

兄弟にして若し、遺傳因子の凝結工合をさへ同じくされてゐたならば、その生理的心理的性格全部が全然同じものであつたらうといふことは、殆んど受胎時を同じくする雙生兒が、肉體的にも精神的にも、殆んど區別の付かない位に似通つてゐるといふ、あの顯著なる事實を土臺にして十分に推定し得られるではないか。

毛がちぢれてゐるとか、色が黑いとか、鼻が低いとか云ふやうなことが遺傳因子であるとしたら（頭の惡い遺傳學者等は往々にしてさう云ふ風に考へるのだが）、兩親のどちらよりも毛がちぢれてゐなかつたり、兩親のどちらよりも色が黑くなかつたり、兩親のどちらよりも鼻が低くなかつたりするのは不思議な、不合理な事であらう。

けれどもそれらの特色が、その儘遺傳因子になるのでなく、もつともつと微細な殆んど名狀しがたくこまやかな特色に分解されて、はじめて遺傳因子になるのだとしたら、子供が兩親のどちらにも似ない髮の毛や、肌色や、鼻などを有つてゐるとしても、別に不合理と考へるにも及ばないではないか。

髮の毛や、肌色や、鼻の恰好さへ、その儘には遺傳するものでない。

それらの物の取合せが其儘に遺傳されないのは何ほ更のことである。

美しい美しくないのは、各々の部分によつて決定されるのでなく、全體の取合せによつて決定されるのであるとしたら、美人の子に美人が出來ないとしても、『美しい』といふ價値が遺傳されないとしても、それは寧ろ當然すぎるほどの事ではないか。

道德的に立派な人物であるとかないとかいふのも、その人格を構成する所の各々の部分によつて決定されるのでなく、全體の取合せ鹽梅によつて決定されるのであるとしたら、そして遺傳されるのが各々の部分の部分にすぎないとしたら、個々の生理的及び心理的特徴傾向は遺傳されても、全體としての人間としての價値は、人格的價値は遺傳されないといふのに、聊かの不思議な事もないではないか。

取合せの上から、親にあつては寧ろ瑕瑾であつたところの高からぬ鼻が、子にあつては單に邪魔にならないのみならず、寧ろ積極的に其顏を魅力あるものにしてゐることさへある。

價値は遺傳しないのである。

取合せの上から、親にあつては兎に角ない方がよいと思はれるそばかすが、子にあつては寧ろ美しさを加へるものとなつてゐる。

價値は遺傳しないのである。

一事に熱中すれば前後を忘却してしまふと

い性質が、親爺をして金儲けの爲めに前後を忘却せしめ、息子をして藝者買ひの爲めに前後を忘却せしめるのは、極めてありがちな事である。

個々の特徴傾向は遺傳されても、全體としての價値は遺傳されないのである。

楠正成の子に正行があつても、そのまた正行の子に正儀があつても、勤王の志が遺傳されたのではない。

むしろ遺傳されるもののやうに思はせたり、思つたりしたことが、強烈なる暗示となつて働いたことを考へねばならぬ。

更に、さまざまな感化や教育が、彼等を父の如き、祖父の如き勤王家に作り上げることに貢獻してゐることを注意されなければならぬ。

泥棒の子が泥棒になり易いのも、盗癖その物が遺傳されるのではない。

泥棒の子だと言はれたり、思つたりすることが、彼の道徳的自尊心を放棄させてしまひ、自制力をなくさせてしまふこと、盗癖が遺傳されるやうに思はせられたり、現に盗癖があるかも知れないとして警戒されたりする内に、惡い暗示が働いてつひに泥棒をさせてしまふといふやうなことを注意すべきである。

序ながら所謂盗癖は、盗癖を自制する意志力の不足の事である。動物的衝動としては總ての人々に盗癖があるのだ、大抵の人々はその愚かさを抑へるに足るだけの意志力をもつてゐるのである

總じて犯罪者の子孫に犯罪者が多く出てゐるとしても、それは頭の惡い優生學者の考へる如く、「犯罪性」が、より精しく云へば「強盗性」や、「虐殺性」や、「脅喝取財性」や、「無政府主義性」や、「不敬罪性」が遺傳されてゐるのではない。

餘程こまかな分類に於ても、父祖と甚だ似通つた種類の犯罪者になる場合――それでもやはり遺傳の結果であるより以上に、惡い暗示と感化と、並びに父祖同様の不幸なる生活條件の結果であるやうに思はれる。

六本指だとか、三口だとかいふやうなどんな大きい變質的傾向が遺傳される場合にも、尚ほ且つ人間としての價値、人格的價値その物が遺傳されてゐるのではない。

なぜと云つて、親に於て其人間的價値を低める方に役立つてゐた同じ不具性が、子に於ては其人間的價値を高める方に役立つといふのは極めてあり得べき事なのだから。

例へばバイロンの惡い脚が遺傳的なもので、そしてそれが彼を偉大ならしめる上に、非常に役立つてゐたかも知れないことを考へて見るがよい。

人間的人格的價値その物が遺傳さ得ないとしたら、劣等人の子孫の中に必ず劣等人があるといふ優生學、及び優生學的思想は、何といふ非科學的な、何といふ笑ふべき出鱈目であるかよ。

定型的であることが、種屬保存に好都合であるとしてもよい。變質的傾向をもつた人間の增加が人類といふ種屬を保存する上によくないとしてもよい。

人類は愚かなる自然科學者等がお芽出度く輕斷してゐる如く、人類といふ種屬を保存する爲めに存在してゐるのではない。

人類は個々としても、全體としても、今少し意味のある、今少し嚴肅な、今少し高貴なる目的の爲めに存在してゐる。

そして其本當の目的を達する爲めにこそ、種

屬を保存して行くことの必要もあるのである。
だから、其本當の目的を達してしまつた時――それはいつの事だか知れないが――人類はもはや一刻をも殘存することを要しないのである。

優生學者及びその信者等の如き、單に著しい變質的傾向を有しない（これも實際は怪しいが）だけの定型人、或は凡庸人共が、一切の非凡人を斥けて、彼等のみ永久にこの地球の表面を這ひ廻つてゐたところで、それに何の意味があるだらう。

寧ろ釋迦牟尼や、ナザレの耶蘇や、アッシシのフランシスや、ダンテや、シェキスピヤや、ミケランゼロや、ベエトオフェンや、ニイチェのやうな非凡人が、一萬人ほどでも、千人ほどでも、いや單に百人ほどでも今一度生れて來て、そしてそれらの人々が死ぬと共に、人類全部が地上から消え失せてしまつた方が、おお其方がどれだけ慶ばしいことであらうか。

人類はその最終最高の目的を實現する爲めに必要であるならば、斷乎として種屬保存といふが如き第二次的、第三次的目的を犧牲にすべきである。

人類を單なる獸としてのみ見るところの、愚かしく、僭越な、瀆冒的な優生學者及び其信者等が何を知つてゐる。

鈴辨殺しの山田憲君を、世俗の評價してゐる如く、『大惡』人であるとする。尙ほ且つ山田憲君の子孫の中に、必ず『大惡』人が出るだらうといふのは、何等の理由なき推定である。なぜと云つて、憲君の個々の變質的特徵傾向は遺傳されるであらうが、『大惡』その物は決して遺傳されるものではないからである。

人間の魂の前に跪くことを知つてゐる信心深き讀者諸君よ、諸君は今涙と憤激とを以て、世にも薄倖なる山田憲君の遺兒、及びそれを取りまく一家一門の人々を想ひ出してくれたまへ。

謬れる遺傳觀念と、出鱈目な似而非科學〔優生學〕との爲めに謂はれなく迫害されながら、尙ほ且つそれを理由あるものにさへ思はせられてゐる、あの薄倖さは眞に言語を絕してゐるではないか。

人間としての價値、人格的價値その物の決して遺傳されないことが明白になつた時、低劣な人物を肉親の中にもつてゐる人々が、如何に救はれたやうに感ずることぞ。

「價値は遺傳されない」といふ私の格言が一般に承認された時、劣等人を祖先にもつた人々もはじめて自尊心を取り返すことが出來よう。從つて、道德も、宗教も、魂を取扱ふ一切のものが、はじめて久々に其失はれたる權威を囘復することが出來るであらう。

個々の生理的特色傾向に人間的、人格的價値があるのでなく、寧ろそれらの特色傾向全體の取合せによつて優等人が出來上つたり、劣等人が出來上つたりするものであるとしたら、そしてそれらの特色傾向の或る物を助長させたり、他の物を萎縮させたりすることが可能であるとしたら、惡い教育や訓練によつて非常に低劣な人間になつたであらう人々が、善き教育や訓練によつて非常に優秀な人間になつたであらうことは、たやすく想見出來るではないか。

これから出發して、私は山の芋が何故鰻になるかを說明し得られることを信ずる。

巧妙なる修正者は、ほんの一句か一字を增減することによつて一篇のへぼ文章をまるで似て

もつかないやうな名文章に改めてしまふ。

『人間』といふ樹木に手入れをする天才的な植木屋『教育家』は、生理的にも心理的にもほんの一寸した鋏の入れ方で、野育ちのとまるで別物のやうな、立派な『人間』を造り上げて見せるのである。

廣義に云つて環境が、如何に個々の生理的心理的特色傾向に影響し、そして其結果人間としての價値、人格的價値その物に著しい影響を及ぼすものであるかといふこと、これについて細說精論するのは他日の機會に讓ることとする。

（一九二四年六月）

◇（一）

釋迦牟尼の如き人も、矢張り人間である限りに於て、普通の、尋常の、凡庸人等と共通するところのものを一面にもつてゐた。

南方所傳の緒經に依れば、菩提樹下の瞑想生活に於て、既に屢々リウマチス、神經痛の如きものに苦んでゐられる。

後年阿難が常侍の弟子に撰ばれた頃には、世尊の健康はだいぶ衰へてゐたらしく、寧ろ非常に病弱な體になつてゐられたらしくさへ想像される。

殊に入滅時に近くなつてからは、病苦の殆んど忍び難きを覺えられること稀ならず、甚だしきに至つては、その昔成道の直後に現れて世尊を誘惑しようとした同じ惡魔が、またもや現れて世尊を誘惑しようとしてゐる。

惡魔は嘗て言つた——

『世尊よ、世尊の教は餘りにも限りなく高く、限りなく深い。爲めに世上の何者もこれを理解し得ないであらう。されば寧ろ、無益の教を說くことを思ひあきらめて、獨り靜かに涅槃にはひられるがよいでせう』と。

その同じ惡魔が今また言ふ——

『世尊よ、世尊はもはや其弟子等について御心を煩はしたまふに及ばない。彼等は今や十二分に世尊の教を學び、さとり、行つてゐる。されば寧ろ、この上無益に病苦と戰ふことを思ひあきらめて、心靜かに涅槃にはひられるがよいでせう』と。

偖て最後には、鍛冶の子純陀の供養した菌料理の中毒から、劇烈なる腹痛、下痢、發熱等を來しつひに沙羅雙樹の間に臥して復び起たず、諸行無常の理を示したまうたのである。かくの如く、折々の病氣にもかかつたり、その病苦をも訴へたり、甚だしきに至つては、餘りにも堪へ難き病苦と戰ふより、寧ろ安易なる永久の眠りに急ぎたいと願つたり、食べた物の毒にあたつて思ひもかけぬ旅のそらに、寂しい命終の時をも迎へたりした點に於て、釋迦牟尼ほどの人も、矢張り普通の、尋常の、凡庸人等と全然共通したところのものをもつてゐた。

凡庸人等は釋迦牟尼ほどの人にも、さうした一面のあつたことを聞く時、たやすくそれを信じ、また釋迦牟尼に親しみを感ずることが出來ると言ふ。

そして凡庸人等は釋迦牟尼が他の一面に於て如何に凡庸人等と共通しない、ところのもの、全然別種のものを有つてゐたかを思はず、信じないのである。如何に彼等が釋迦牟尼を仰いで見なければならなかつたか、如何に彼等が釋迦牟尼の前に頭を低れねばならなかつたかを知らず、知らうともしないのである。しかし乍ら、人間であるといふことは、單に凡庸人であるといふだけのことではない。

年譜

明治十五年（一歳）
三月、父喜平治、母かつの三男として鳥取縣日野郡根雨町字貝原に生れる。兄二人、姉一人の末子である。御大師樣の御縁日に生れたといふので、祖父が弘市と名をつけてくれた。

明治二十二年（八歳）
四月、一里ばかりはなれた武庫簡易小學校といふのへ入學。

明治二十三年（九歳）
一月、根雨簡易小學校へ轉校。
四月、根雨尋常小學校第三年級へ編入。

明治二十四年（十歳）
秋、日野郡高等小學校へ入學。

明治二十八年（十四歳）
高等小學校卒業後、將來の方針をさだめかねて、百姓の眞似事をしたり、延暦寺の松本大典和尚に漢籍を教はつたりしながら一年半ばかりを過ごした。

明治二十九年（十五歳）
十二月、次兄貞二郎のあとを追うて大阪にゆく。數學を數理義塾に、英語を次兄に學びながら、中學への編入試驗の準備をする。

明治三十年（十六歳）
五月、大阪桃山學院（後年桃山中學校と改稱）第二學年へ入學。

明治三十一年（十七歳）
秋、ニニヴーサリスト教會で洗禮を受けた。この前後から德富蘇峰先生はじめ民友社同人諸氏の著作を愛讀しはじめ、次いで内村鑑三先生の物をむさぼるやうにして讀みだした。

明治三十二年（十八歳）
四月、上京、青山學院中學部第五學年へ入學。和田幾先生、岡田哲藏先生、服部廣太郎先生などの教を受ける。故人文學博士木村泰賢君、頑鐵橋戸信君などはその時分の級友である。秋の文學會に、來賓德富蘇峰先生を前にして、先生の所謂「變節」を攻撃した小生意氣さを、今でも冷汗と共に想起する。

明治三十三年（十九歳）
四月、中學卒業の後、第一高等學校の文科にはひるべきか、それとも理科にはひるべきかについて隨分迷つたが、願書提出の締切間際に至つてやつと文科にゆくことに決定した。九月、一高寄宿舍東寮八番へはひり、一年間をそこに過ごす。同室に東北帝大の大類伸君、東京帝大の呉健君、宇都野小兒科病院の宇都野研君などがゐた。

明治三十四年（二十歳）
此頃淸澤滿之先生の書かれた物を讀んで、大きな感化を受ける。同級生森田草平君、中村古峽君、栗原古城君、川下江村君なぞと廻覽雜誌をつくる。文學をも眞面目にやつて見ようと志したのは、これから後の事である。

明治三十五年（二十一歳）
栗原古城君に伴はれて、はじめて馬場孤蝶先生を飯田町にお訪ねした。爾來今日に至るまで、何かにつけて先生の御指導をいただき、御厄介になつたことは言語に盡しがたい位である。森田草平君が澁谷の與謝野寛氏同晶子女史の處へつれて行つてくれたのも此頃の事と記憶する。その後「明星」誌上に折々つまらない美文や論文なぞを書かしていただいた嬉しさは忘れ難い。

明治三十六年（二十二歳）

七月、一高の文科を卒業。東京帝國大學文科の哲學科に入る。はじめケーベル先生や、村上專精先生や、森槐南先生や、姉崎正治先生なぞの講義を聽く。

明治三十七年（二十三歳）

上田柳村先生、馬場孤蝶先生と共に雜誌「藝苑」を出され、予も亦森田草平君なぞと一緒にその同人に加へられた。

上田先生からの紹介狀を携へて、森田君と共に坪内逍遙先生をお訪ねした。

夏目漱石先生も歸朝されたので、はじめて其講義を聽く。

明治三十八年（二十四歳）

この冬頃はじめて夏目漱石先生を千駄木町の御宅にお訪ねした。

十二月末日、予が二十歳頃までの最善の指導者でもあり、最も親しい友人でもあつたところの次兄貞二郎、郷里に近き米子に於て、急性肺炎を病んで死す。

明治三十九年（二十五歳）

四月號の「藝苑」に『風葉論』といふ七八十枚の長論文を書いたとき、上田敏先生から「長江」といふ新しいペンネームをつけて頂く。それまでは「星郊」といふのを自分でつけてゐたのである。

七月、『悲壯美論』といふいい加減な卒業論文を出して哲學科の中の美學科を卒業。

冬、上田萬年先生からの御口添へで、佐々醒雪先生の「家庭文藝」といふ雜誌の仕事を手傳はして頂くことになる。

明治四十年（二十六歳）

春、結婚して千駄ケ谷の與謝野寛氏のお隣に居を構へ、同氏夫妻から一方ならぬ御好意をいただく。

秋、馬場孤蝶先生等と共に、與謝野晶子女史を中心にした閨秀文學會なるものを作る。その聽講者の中に平塚らいてう、山川菊榮等の諸君もゐた。

明治四十一年（二十七歳）

六月頃より年末まで、萬朝報記者となる。

八月、千駄木林町へ轉居。

明治四十二年（二十八歳）

五月、ニイチェの『ツァラトゥウストラ』の飜譯にとりかかる。

八月、與謝野寛、石井柏亭二氏のお伴をして紀州新宮地方へ講演旅行に出かけた。佐藤春夫君と相知つたのは此時の事である。

明治四十三年（二十九歳）

前年よりこの年の末まで一年有半ばかりといふもの、『ツァラトゥウストラ』譯出にのみ沒頭して、自餘一切の事を顧みず。

冬、森鷗外先生の御宅へ度々推參して、「ツァラトゥウストラ」の難解な箇處を敎へて頂く。先生にはじめて御目にかゝつたのは、これより二三年以前のことかと思ふ。

大正二年（三十二歳）

十月、結婚後七年目にはじめて女兒生る。まり子と命名。

大正三年（三十三歳）

森田草平君と共に雜誌「反響」を出す。後には予一人の仕事にされてしまふ。結局一年半か二年位つゞいた。

堺利彦、大杉榮等の諸氏と親しくなつたのも此頃からである。

大正四年（三十四歳）

「反響」廢刊の後、まもなく『ニイチェ全集』譯出の計畫を立てる。

大正五年（三十五歳）

安成貞雄君等と共に、馬場孤蝶先生の代議士立候補に對して後援會を作り、その應援演説をする。

一月中旬、妻子同伴にて十日間ばかり京阪地方に遊ぶ。

大正六年（三十六歳）

六月九日、妻藤尾五歳のまり子をあとに殘して病歿。

月末、鎌倉長谷觀音の裏山に墓地を求めて、藤尾の遺骨を葬る。

八月、堺利彦氏のすすめによりて、雜誌「中外」創刊號に載せる爲めの創作『圓光』を執筆。はじめての脚本なり。

冬、脚本第二作「青い花」をかく。

大正七年（三十七歳）

三月、社會運動の一策として代議士の候補に立つた堺利彦氏を應援し、市内數箇處で喋る。

六月、『圓光』を久米正雄君が舞臺監督となつて、國民座とかいふ劇團にやらせる。

大正八年（三十八歳）

夏、賀川豐彦君にすすめられて、堺利彦氏と共に友愛會の大會に出掛け、來賓として大變に歡待を受く。

秋、友愛會主催の社會問題講演會に招かれて、堺利彦氏と共に京阪地方へ赴き、中之島公會堂、京大、同志社、平安教會などで講演をやる。

十月十六日、長兄虎次郎鄕里にて死す。

大正九年（三十九歳）

春、大衆的な作品が、同時に十分藝術的であり得ることを實證する意氣込みで、小說『犯罪』を書き、「面白俱樂部」へ載せる。一冊に纏めるとき「環境」と改題し、後更に改題して『哀史』とした。

大正十年（四十歳）

長篇小說の第二作『落花の如く』を書く。

十二月、父喜平治鄕里に死す。

大正十一年（四十一歳）

この頃より「釋尊傳」をテーマに大きな創作をやつて見ようと思ひ立ち、少しづつ準備をしはじめる。

大正十二年（四十二歳）

春頃より、何となく大異變でもありさうに豫感してゐたが、九月一日に至つてあの大震火災に遇ひ、上六番町の寓居を燒かれてしまふ。藏書の大部分と、日記書寫眞等等の重要なもの全部を燒失した。

大正十四年（四十四歳）

九月、一家を擧げて鎌倉長谷稻瀨川一六七に轉居。

大正十五年（**昭和元年**）（四十五歳）

八月末日、母かつ、鄕里に死す。

昭和三年（四十七歳）

この年の一月より小說『釋尊傳』の準備に沒頭しはじめる。

昭和四年（四十八歳）

この夏より愈々『釋尊傳』の執筆にかかる。

昭和五年（四十九歳）

五月、足掛六年目に、一家を擧げて東京に歸る。

七月、雜誌「改造」に『釋尊傳第一部『小公子』を發表する。

◇（二）

凡庸人等から「親しみ」を感じられるほど凡庸人的でないものを有つてゐようとも、尙ほ且つ彼は人間であり得る。一切の非凡人天才者をも人間として見るといふのは、彼等を低劣なる凡庸者等のレヱルにまで引きずり下ろして來るといふことではないのである。

（「日常生活に偏重する惡傾向」より）

中澤臨川集

序

中澤君の人と藝術

中澤臨川君は熱情の人である。併し彼の熱情にはいつも理智が伴つてゐる。彼が熱すれば熱するほど、彼の理智は明かになつて來る。寧ろ熱しなければ、理智が發揮せられなかつたといつてよい。その熱情の論理が人々を引きつけずにはゐない。同時に彼は人を熱愛する。彼は愛する者をその熱情で盛り上げる。

ダ・ヴィンチを愛し、ユゴオを愛し、トルストイを愛し、ロマン・ロオランを熱愛した彼の經路には併し自らなる必然性が伴つてゐる。ニイチエをもナポレオンをも彼は愛さずには置かぬ。歴史家の如き態度で平面も隆起も、遠近共に究めずしては居られぬといふのではなく。中澤君の愛するのは世界の思潮の中に輝く燈明臺の光りを、その狂瀾の波路の中から眺めやつて、抱きつゝやうな視線で、喰ひ入るやうな眼光で、それを我がものとせずにはゐないのである。彼の晩年にはカアル・マルクスの研究を始めてゐた。彼の最後の熱愛の集注目標となりかけてゐたのはマルクスである。

臨川死んで今年で滿十年になる。彼が若しその最後に始めたマルクスの研究を、生存して繼續してゐたならば、此處に恐らく彼一個人にとつてばかりでなく、我々現代人を最も純く輝し出す巨大な燈明臺を我々に近く建設して吳れたことであつたに違ひない。

彼は社會批評家であり、情熱の詩人であり、同時に企業的電氣學者であつた。彼の批評には鋭い解剖はない。けれど熱意の壓倒力がある。熱愛の抱擁力が溢れてゐる、と同時に、科學者の持つ廣い展望が一般の文藝批評家とは異つた視野を展開する。彼は嘗て詩を作つた。情熱の小說をものした。ユゴオの詩に淚を流さずにはゐられなかつた。その詩的情熱と、理智的批判力とが結合して、およそこの『中澤臨川集』に集めてあるやうな作品となつたのである。これは殆どその一部にすぎない。

信州の山間の村々へ行けば、今もなほ中澤君が企劃した小規模の電氣のモオターが運轉して、小さな山間の部落部落で、その部落自體の自供自足の電氣を起して、夕暮毎に山氣の迫る谿谷へ愛すべき小粒の電燈を戶々へ點火せめしてゐるのである。中澤式電氣モオターは、臨川の名を知らぬ山人等の間にも、今でも持てはやされてゐるのである。

これも彼のロマンティクの熱愛の現はれの一つの具現である。彼がトルストイを求め、ロマン・ロオランを愛した如く、その熱愛は電氣の光りとなつて信州の山間に澄んだ輝きを見せてゐるのである。

『嵐の前』は彼の批判力と創造性との結合を豐富に示すもの、『新藝術觀』、『新社會主義への道』は大正八九年頃に於ける、世界大戰後に於ける新社會運動、從つて新藝術運動のやがて隆興せんとする姿を豫見したるもの、『愛は、力は土より』は彼の晩年の心持を淚ぐましく現はしてゐる。一種の死の豫感の如きものすら感ぜらるゝ。

情熱と理智との結合、それが或時は議論として現はれ、また或る時は創作力となつて發揮せられ、強く朗かに燃えたつてゐて、しかも靜かな魅力をたゝへてゐた臨川の性格とその藝術の如きもの、明治大正を通じてやはりユニイクなものといはねばならぬ。

昭和五年十月

吉江喬松

嵐の前

一

西暦一八八×年のことである。ニーチェは友達のピーター・ガストと一緒に暫くヴェネチアに逗留してゐたが、七月に這入つてから、暑さを避けるために、自分獨りで牧場と森との麓地を攀ぢて、伊太利アルプスの中腹に當るエンガデンへ移つた。そこは淋しい谷合の小村で、瑞西の國中を大きな公園のやうに思つてゐる英國人でさへ、めつたに姿を見せたことがなかつた。

彼の手には一卷の書物があつた。それは彼自身の著書で、ついその月初めに漸く出版になつた「日の曙」であつた。それを出すまでにどれだけ彼はガストや本屋に迷惑をかけ、またどれだけ自分の心を苛立たせたかわからない。それだけ彼は自分の著書に自信を有してゐた。「新しい本、偉きな本、非常な本……」、から彼は公言した。その原稿は、覺束ない手記から、友人のガストによつて丹念に淨書された。なぜなら病後の彼は極度の近眼を一層弱らせた上に、手のふるへが劇しかつたからである。それが本屋に渡される時に彼はかう言つてやつた、「急いでくれ、急いでくれ、急いでくれ！……遲くとも四月中に仕上げるといふ證書を印刷屋からとれないものだらうか、兎に角出來るだけの手を盡してくれ、この書の内容はそれだけ重大だ……」と。が、本屋の都合で其出版は七月まで延びた。焦れきつた彼の手に漸く新刊書の渡つたのは、彼がエンガデンに立つ四五日前であつた。

それだけでも彼の心は沈着いた。實際この書は、彼が三四年來の長い苦しい病氣と劇しい心の懊惱とに別れるに際しての唯一の記念であつた。どれだけか長い病苦のあとで彼は平靜な心で死を待つたか——むしろそれを飢ゑ望んだか。

「おれは暇といふものの與へられなんだ人間としては、自分の爲すべき事だけは爲し了せた。おれは多くの人達に善い油の一滴をふりまいた」

幼少から間斷なく病弱と戰つて來た自分の一生を振りかへつてみたときに、何時も彼はかう言つて慰めた。それにしてもまだおれには爲すべきことがある。おれは何うしても自分の内にある或る力強い物に表現を與へねばならぬ。おれは既う「人生の眞中」だといふ三十五歳を越した。ダンテが彼の「ヴィジョン」を得たといふのもちやうどこの歳だ……かういふ意氣込を以て、彼は病のひま〳〵に筆を採つた。或時は友人のガストに口述して筆記して貰つた。或時はゼノアに留つて、朝早く床を離れるなり、僅かばかりのパンと藥物とそして手帳とを持つて海岸の岩影にたゝずんだ。そして暮れ行く海を眺め盡すまで仕事に耽つた。其處で彼は自分を思想界のコロンバスに譬へてみたりした。

このやうにして出來上つたのが「日の曙」である。その間にも間斷なく死が彼を誘惑し、威喝した。大學の教授をやめて、妹のリスベスに伴れられ、最後にバーゼルの地を見捨てたときなどは、彼は全く絶望の人であつた。

「おれの葬式は友人だけで出してくれ。決して僧侶を傭つたり、誠意のない弔辭を讀ましたりするな。どうか眞正の異教徒としておれを葬つ

てくれ」から言つて彼は遺言をした。

然し幸にも彼は助かつた。「日の曙」は遺著とならずに濟んだ。却つてそれは半生の病苦と懊惱とに別れて新しい生涯に入るめでたい記念となつた。彼は今盛裝して世に出た愛著を手にしてエンガデンへ向ふのであつた。

なつかしいエンガデン！ それは彼にとつて救生を意味する地であつた。ちやうど二年前に、彼が全き絶望の心を抱いて、死を覺悟しながら、重い傷を負つた獸の深林に遁れるやうに、遣瀨ない孤獨を覓めに來たのはこの地であつた。然るに不思議にもその地の空氣は彼を活かした。暫く滯在してゐるうちに彼の病氣は一皮々々と剝ぐやうに薄らいでいつた。殊にそこで味つた甘い孤獨は何よりも彼にとつて忘られないものであつた。

ニーチェがエンガデンの村へ入つたのはちやうど日暮であつた。彼は急に安心したやうにがつかりして路傍の小さな岩の上に疲れきつた腰を下した。水分にうゑてゐる山腹の涼しい乾いた風が吹ひとるやうにして彼の五體から汗を切つた。彼は一しきり寒氣を覺えた。草いきれのするヴェネチアの郊外とは格段の相違であるのが感ぜられた。そこから半哩ばかり上に當つた小高い丘の裾に森を控へて立つ五六軒の農家が見えた。彼はそれ等の木造の家屋に住む惇樸な伊太利語を使ふ百姓達の顏を思ひ浮べた。彼がこの前、初めて來た時には、之等の農家のうちでも割合に小綺麗な一軒で間借をしてゐた。彼は再び住はうとするその部屋の有様などを心に描いてみた。

三つ四つの丘が行儀よく同じ高さの波をうつて並んでゐた。最初に留つた農家のある丘と並び合つた第二の丘の裾には、眩く夕陽をうけて白塗の二つの建築があつた。それはこの村の寺院と學校であつた。年老つた無口の僧侶、人の好い校長――「孤獨」の經驗者がよく味ふことのあるたまらなく人懷こい日には、彼はいつもこの人達を尋ねて、自分でも不思議なほど快活に話したものだ。彼等は好意と感謝とを以て彼が去つた後にも「あのめづらしい、よく學問の出來る、謙遜で親切な獨逸の大學教授」を讃へてゐた。ニーチェの心は再びその人達に遇ふ喜びで躍つた。

溫かい光が疲れた手足に浸み入るやうにして彼の周圍にあつた。そして靜かに眼の下に擴がる青い牧場を照らしてゐた。それが殊に彼の弱つてゐる神經の力に心持よく映じた。彼はゼノアの青海原の黄昏の景色を思ひ出した。彼のうねりに似た數知れない丘々のあひには、尊嚴な威容をした松の森と樅の古木の林とがあつた。林と林、丘と丘との間隙から所々に綠色の乳をたゝへた小さな湖水が見えた。いろ〳〵の形をした岩があちらこちらに散在してゐた。見渡すかぎりの野は眞夏の飽滿をみせて、草と花とが我勝の色彩に誇り榮えるのであつた。

譬へやうのない哀傷がニーチェの心を占めた。彼は病後の人に必ずある心の脆さを以て言ふに言はれない淋しさを感じた。彼の心は秋の日のやうに澄んで沈着いた。路傍の畠にある葡萄はもう色づきかゝつてゐた。それが彼をして山國の秋の早いのを思はしめた。

凡ては平和の中に暮れて行つた。彼は無意識に懷中時計を出してみた。それはちやうど七時の處を指してゐた。

彼の前を一隊の牧牛が過ぎた。徐かな足取りで、或る者はソクラテスのやうに、或る物はマルカス・オーレリアスのやうに、或る物はヅアラツストラのやうに、どれもこれも深い瞑想に耽つてゐるらしく默りこくつて通つた。それが或時は離れ、或時は密集してリズミカルな前進

を續けた。たつた一つ遠く離れて松の森を背景に立つてゐる牝牛が夕陽をうけて浮彫のやうに映つた。一隊は白い沫を立てて流れてゐる小川の方へ近づいた。偉大と沈勇との權化のやうな王牛が無言で指揮をしてゐるやうに見えた。その後から日にやけたベルガモ系の男と男裝した十二三の少女が隨いて行つた。少女は面白さうに水瀬をじやぶ／＼させて通つた。

右手に當つて、大きな森の帶と削つたやうな岩との上に廣い雪の野があつた。その野を越して薄い靄を着けながらアルプスの連山が白氷に輝いてゐる。凡ては靜肅で、偉大で、燦爛であつた。純白な光の世界よりほかはなかつた。彼は深いなじみのある希臘の古英雄を聯想した。

その夜は夢のない眠が彼を襲つた。翌朝眼をさました時はもう日が高く昇つてゐた。

それから數日間といふものは、彼は新生活に對する準備で忙しかつた。妹のリスベスや友達にあてて安着の報知を出した。たつた今別れて來たばかりのガストに當てては、「私はこの數年來君から味つた友情ほど尊いものを知らない、私は一日に七たびも君の顏を見たい」といふやうな感傷的の手紙を書いた。それでゐて彼に若しやガストが尋ねて來はしまいかといふことを惧れた。彼は何事を措いてもこのエンガデンで味はなければならない全き孤獨を汚されまいとした。で、慌ててまた妹に手紙を書いて、ガストを來させないやうにそつと頼んでやつた。メーセンブッグ女史に宛てては殊に長い手紙が書かれた。彼はこの老女史の親切と感化とを思ふたびに、眼に涙を浮べずにはゐられないんだ。その手紙を書きながら彼はまたワグナアの事を思ひ浮べた。彼の心には竊かに感謝と後悔の波が立つた。感激に醉つたベーロイスでの幾日かが浮び出た。コシマ・ワグナア夫人が止度なくなつかしいものに忍ばれた。

彼の到着を聞いて周圍には珍らしい客人が集つた。小半里の丘を越して第一に寺僧が尋ねて來た。校長は夕方から夜晩くまで彼の話を傾聽して飽かなんだ。「よい獨逸の叔父さん」を見る事が村の子供達の好奇心を牽いた。不思議に彼はその人達をうるさがらなんだ。

日の經つにつれて彼の心は沈着いた。彼は自分の生活を整へるために一つの座右銘を書いて壁へはつた。何人にも迷惑のかゝらない獨立を守ること、自我の尊嚴を保護するに必要なだけの隱れた傲慢を維持すること、輕い眠をとること、安易で平和な服裝をすること、酒を用ゐること、華奢な貴族的の友達をもたぬこと、婦人と交際はぬこと、新聞を讀まぬこと、名譽と社交とを欲せぬこと、簡易な食物を採ること、それも成るべく自分の手で調理することなどがその中に並べて書いてあつた。

彼は自分の生活費を一日一フランときめて、そして全く農夫の生活に倣はうと決心した。ゼノアの下宿で買ひ求めた酒精燈が久し振で持ち出された。彼は覺束ない手許でポテトオを揚げたりした。

幼い時の事が思ひ出された。彼は或時母に向つてかう尋ねた、「お母さん、百姓たちはどんな暮しをしてゐるの、僕もあの人達のやうにやつて見たいものだ」。すると彼の母は笑ひながら答へた、「あの人達は芋と脂肉を食つて、惡い珈琲とアルコールばかりを飲んでゐるのさ」。その時之を聞いて子供心におびえたことを思ひ出して彼は微笑した。

彼はよく帽子を被らずに外へ出た。また眼の惡い彼はいつも暗闇の部屋で寢た。彼のこの習慣は嘗て惇樸なゼノア人から憐みを買つたことがある。「可哀想にあの獨逸の大學教授は貧乏で蠟燭が買へないと見える」、からいつて同

宿の者からそれと送られたことがあつた。そんな事をも彼は思ひ出して笑はずにはゐられなんだ。

次第に周圍に馴れるにつれて彼の心は言ひやうもなく沈着いた。甘い孤獨の底へずん〱と落ちて行つた。一種のあきらめと遊惰な安心さへがそれに伴つた。彼の頭には白髪が雜つた。彼は急に老人じみて來た。中年の者を犯す心の變化、殊に病後の身にまつはる快い肉の疲れ――それを彼はどうすることも出來なんだ。

或時は彼は夕暮の散歩から宿へ歸ることを忘れる日さへあつた。とある岩影に佇んで夕陽を見送る彼の顏は失神したもののやうであつた。「歸れ」と彼の意志が懶く命令するが、彼の疲れた身體は立たうとは爲ない。すると心の底からは、「歸つたつてどうするものだ、一體どこへ歸るといふのだ、迷ふなら迷ふさ」といふ遣瀬ない絶望の聲がする。こんな時は彼は夜露を浴びたまゝ夜遲く床へ入るのが常であつた。

彼の日課は、朝、床を離れるなり一片のパンと小さな手帳とを持つて外へ出ることであつた。然しその手帳には久しい間、一行の句も誌されなんだ。パンへも手が附かずに持ち歸られることがあつた。彼はそこゝにおなじみの場所を見つけた。とある森の一隅、大きな岩影、湖水に沿つた平な丘地、さういふ處で永い一日を傘で日を除けながらぢつと身動きだにせない彼の姿を村の人達はよく見かけた。彼等は好意をもつてそつと彼の視線をよけた。

淡い哀愁に雜つて、記憶の香氣が前に開かれた。幼い頃からの思出がよい香ひにつゝまれて、消えては浮び、浮んでは消えた。疲れてゐる彼の心には、それが殆んど何等の反抗も懺悔も伴はずに他人事のやうに通つて行つた。

敬虔な父の面影は彼を幼少の身に復らして、再び純な基督教徒にさせた。「美しい野蠻人」といふ渾名をとつた母が彼の眼の前に立つた。あのなつかしいレッケンの田舍町で、正直に父祖の業を繼いで牧師になつてゐたら、自分の生涯は何れだけ幸福であつたらうと思つて見た。ふと、憂鬱で傲慢な然し綺麗に身づくろひをした潔癖な少年の彼――「少伯爵ニエッキー」の影がユモラスに映つて消えた。幼い頃得意にした即興樂が耳元で囁かれた。

青春の危さ、最初に襲はれた懷疑の恐ろしさ、自立の信念を得るまでの苦しさ、ショーペンハウエルの鬼、ワグナアの魔、希望に充ちた教授生活の得意、果は病氣、絶望、その中から得た運命の味ひ――AMOR FATI…

彼の回想はそれからそれへ傳はつた。殊に師のワグナアと別れ、教授の職をやめてからの病苦と懊惱との一時期が、まだ生々しい傷のやうに彼の心に殘つてゐた。幾度か彼は絶望し、また幾度か強い反抗心を以て死と戰つたことであらう。肉の苦痛の壓迫が劇しければ劇しいほど、それに打ち挫かれまいとして、その下に曲げられた彼の精神は異常な緊張力を出した。永い病苦に馴れるまゝにかうした反逆狀態が却つて彼の樂みともなつた。彼は今まで知らなんだ冷たい新しい光で世の中を見渡した。その光には一種言ふに言はれない魔があつた。「この新しい光は自殺のあらゆる誘惑を打消し、生命の繼續を好ましいものに思はせるほど力強い」と彼は書いた。彼は侮辱の眼を以て、世の健康な人々が誇り氣に描いてゐる溫かく樂しい夢想世界をあざ笑つた。かうした冷笑の樂みが彼には必要であつたのだ。

……その頃のことを思ひ出すたびに彼は慄毛を振つた。今日となつてみれば、當時の自分がいかにも不自然で、空恐ろしいものに見えた。彼は自分で自分の前身を憎みもし憐みもした。

温かい回復の曙光を迎へて、その中に溶け込むやうな氣分をつく〴〵と味つてゐる今の彼は、肉體も精神も快く懶く疲れてゐた。で、つい一年ほど前までの苦みや努力や反抗や冷笑やを考へると、それがいかにも一種不快な狂暴のやうに思はれてならなんだ。人間も自然も再び彼の心に希望を齎した。健康が彼の身邊に善意の魔法師のやうに戯れた。彼の眼にはすぐ涙が滲んだ。

遣瀬ない苦みを抱いて、何れだけ彼は轉々して歩いたことであらう。彼はこの三四年來の自分の足跡を思ひ出して見た。ナポリ、ロゼンロオイ、エンガデン、ナウンブルグ、ガルダ湖畔、ヴェネチア、マリエンバット、再びナウンブルグ、マジオル湖、ゼノア、ヴェネチア……。凡ては跡方のない夢のやうであつた、ベーロイスの歡樂とともに。

その中でもゼノアに於ける幾月かを彼は忘れることが出來なんだ。彼の生命は全くそこで救はれたと言つてもいゝほどだつた。南國に滿ち溢れた光の海の中へ初めて置かれた時の彼の驚きは「喜び」といふ言葉ではとても言ひ盡せないものであつた。殊にそれが病後の身の上に不思議な力を振つた。北の國に育つて、骨の髓までも「北」の感化を享けて來た彼にとつては、南の光の知覺は宛然生れつきの盲人が忽焉として視力をえたほどの奇蹟であつた。彼は永らく食に飢ゑてゐた者のやうに、擇ばず飽かず之を吸つた。光！ 日の光、温かい光、柔かい光、濃い光、眩しい光――その光が純い裸のまゝで空に散り、地に降り、紺青の海の上に照り、街の赤い壁に映え、寺の塔の頂に燃え、アンゼラスの響き渡る夕暮の海岸の上に浸みついた。そこでは色の管絃樂の中で、橄欖、椿、杏、レモンなどの樹が榮え、熟した果實が枝といふ枝をしわらせてゐた。回復期に向つてゐたニーチェの身體には殊にその光の温かさが快く感じられた。朝な夕な、眼から、口から、鼻から、ありとある皮膚の穴から吸ひ込まれる光によつて、彼の五體は見る〳〵蘇つて行つた。彼は此の生命の流のやうに空に散り敷く光の血を自分の肉の中にも感じた。彼は自分が今迄生き苦んで來た寒い灰色の禁欲主義や努力主義を嫌つた。そして伊太利人に特有の透明な智慧を借りて柔和な運命論者になり、休息といふ事の呼吸を解するやうになつた。同時に世の中の快樂に對しても寛大な心を持ち始めた。

さうした回想に耽つてゐる彼の眼の前には何時も陽に輝くアペナインの山々と深くゆつたり息をしてゐるゼノアの海とがあつた。そして沈默そのものの象徴のやうな之等の景色を背景にして、二つの透明で親切な眼が彼を見つめるのであつた。それはメーセンブッグ女史であつた。女史の眼はいつもかう言つて彼を慰めた、「淨い尊い親切な魂よ。不幸なお前よ、何よりも先づお前はお前の心を沈着けるがいゝ」と。

女史を思ひ出すたびに彼の心には多大の感謝が湧いた。彼の眼には涙が浮んだ。何れだけか女史の深い情によつて彼の病中が慰められたことであらう。世にも稀れなほど尊い經驗のかずかずを重ねて來た老女史から彼はさま〴〵の感化を受けた。彼女が世界のあちこちで遇つたといふいろ〳〵の偉人の話が殊に彼を喜ばせた。バクーニン、ヘルツェン、トルストイ、リスツ、イブセン、マジニィ、ガルバルディ――さうした人達の噂が常に彼女の話題に上つた。ナポリの借別莊で一緒に日を過した時などは彼女は幼兒に寢物語をする母親の様な心持で、若い病哲學者を勞り庇ひながら、靜かな夜を語り通す事もあつた。その時にはよくマジニィの話がでた。ニーチェは嘗てアルプス越えの馬

車の中で此の伊太利再興の英雄と同乘したことゝがあるので、彼の噂は一しほ興味を牽いた。「妥協するな、斷乎として全の中に、善の中に、美の中に生活せよ」といふゲーテの言葉がこの偉人の處世訓であつたといふ話なども面白かつた。不遇の晩年に彼は戀しいリグリアの地を往生の場所と決めて、自分の名も國籍も隱しながらそこへ落着いた。英國人とばかり思はれてゐた彼の口からふと流暢な伊太利語が洩れたので、醫者が怪んで尋ねると、臨終の床の上から彼はかう答へた、「見たまへ、私くらゐ伊太利を愛した人間はない」。この話は殊に病ニーチェの感銘を買つた。「私の一番尊敬する人間はマジニイだ、」――かう彼は女史に言つて、感傷的な少年らしい眼付をした。

　かうした追憶が彼には一番親しかつた。彼はエンガデンの丘にうつる夕陽の前で眼を細くした。彼は弱い臆病な生粹のニーチェに歸つた。メーセンブッグ女史にはどうしても彼が一個の大學校教授として考へられなんだやうに、彼の女史になつく態度は慈母にあまえる子供のやうであつた。

　生來女といふものに極端な輕蔑を拂つてゐたニーチェの胸の中にも隱れたローマンスはあつた。で、彼は時々それを女史にだけ打明けた。「あなたを信用してお話するのだが、私も早く一人の善良な女がほしい」、かう手紙に書いたこともあつた。「自分の理想は他國の女を妻に迎へることだ」と、こんなことも言つた。肉の回復と病後の淋しさとエンガデンでの孤獨とは一しほ彼に異性のなつかしさを思はしめた。彼は自分ひとりで顏を赤めることもあつた。

　エンガデンでの幾日かは知らぬ間に經つた。彼は今の平和に思ひ比べては自分の過去を笑つた。そして十分の滿足を以て幸福に見舞はれつつある未來の樂しい事業を心に描いてみた。自分の生涯で試錬の危期はもう過ぎ去つた、自分は「我」を征服することができた、幸福が自分の避くべからざる運命であらねばならぬ、といふやうに彼は自分で媚びた。沈靜な彼の心は波一つ立たなんだ。

　彼の描く生活の圖の中には溫かい自然があつた。彼は南國の天地で昔の伊太利の百姓のやうに暮したいと思つた。思索生活と耕農生活との微妙なる調和を彼は配案して見た。一初年には十本ばかりの菓樹を植ゑよう。それから薔薇、ライラック、カーネーション、草苺の藪、グースベリイ。翌年は十畝の野菜畠、などと書きつけた。で、その靜かな農園でまめ〳〵しく彼を慰めてくれる若い溫順な女性……

　彼の顏は急にほてつた。彼は純な羞恥心から、それ以上突込んで考へることをよくせなんだ。第一それが妹のリスベスに對する非常な罪惡であるやうに思はれた。彼の身の上を案じて未だに獨身でゐる妹に。

　或る日メーセンブッグ女史から一本の長い手紙が屆いた。それには彼の安着と健康とを祝する意味が最先に書いてあつて、彼の身の上に關する樣々な女らしい注意が附け加へられた。それから「突然のやうであるが」といふ書出しで、然し決して事は突然ではなく、彼女の性質として自分の信じ愛する心の友の不幸を見遁してゐられないといふことから、「早く一人の善良な女がほしい」と言つた彼の言葉が何うしても彼女には忘れられないことやら、彼女が日頃から注意して彼の爲めによい配偶者を世話しようとしてゐたことやらが述べてあつて、最後に適當と思はれる一人の女が漸く見附かつたと言ひ足してあつた。

　女史の手紙によると、その女といふのは露西亞人で、まだ二十歳前の小娘だが、非常に怜

悧で、知識にも相當に發達してゐるといふことだ。名はルイ・サロメと言ふ。フィラデルフィヤからキエフからフレストから、世界の方々の田舍町から、よくかうした娘たちが都會の空氣を慕つて、巴里や羅馬を目懸けてやつてくる。女史にはさうした人達に知人が多かつたが、然しこのサロメのやうに優れた女は稀れであつた。

彼女の容貌は整つてゐるといふほどではないものの、却つてそこに言ふに言はれない愛嬌があるさうだ。母親が彼女の上衣とショールを持つて隨いて歩いてゐるのだといふ。

女史はその娘が非常に氣に入つた。で、或時ニーチェの著書を彼女に讀ましてみたところが、よくそれを理解するらしかつた。女史は不幸な然し「非凡」な斯の哲學者の身上話を彼女にして聞かした。ワグナアと彼との交友から離別に到るまでのいきさつなどをも話した。其の中でも彼の孤獨な生活が彼女の同情を牽いたらしかつた。彼女はぜひ一度彼に遇つてみたい希望を洩した。

「なるべく早く都合して羅馬へ來てくれ、彼女に遇はせるから」から言つて手紙が結んであつた。

その手紙を見てゐるニーチェの手は震へた。

彼は二三度繰返して讀んだ。それは陽の光の濃い谷間の午後であつた。彼はふと立つて戸外へ出た。彼の足は知らず〳〵村の學校の方へ向いた。

案内を知つてゐる彼は、誰にも挨拶せずに小さな樂堂へ這入つていつた。そこには古い一臺のピアノが据ゑてあつた。彼はその前に腰を下して、無意識に指先を鍵に觸れた。ショパンの樂がゆる〳〵と流れ出した。(その頃の彼はビートーベンやワグナアを恐ろしいものに思つてゐた。やさしいショパンが、一番彼の氣に入つてゐた)。涙がおのづと彼の頬を傳はつて流れた。小半時もかうして彼はピアノの前に坐つてゐた。誰も彼を妨げる者はなかつた。彼は泣けるだけ泣いた。

夕陽を浴びて出て行く彼の後姿を親切な校長の眼が見送つてゐたが、彼はそれに氣附かなんだ。

その晩の彼の夢にはさま〴〵のローマンスが現はれた。なつかしい母の顏付、悲しさうなリスベスの眼なども雜つた……

九月に入つてから、アルプスの山腹は急に寒さを増して雪氣さへ催した。一夜大嵐があつて四邊の天地を一變させた。樹の葉といふ樹の葉は振ひ落されて、そこゝに立つ樹が墓のやうに露出した。自然が死んだやうに固定して横はつた。

沈靜のどん底に落ちてゐたニーチェの心にも漸く厭が來た。こゝへおちついてから二月といふものは平和が彼にあつた。彼は永久にそれを專領したと思つてゐた。彼には幸福な誇りがあつた。然し日のたつにつれて、何とはなく單調な生活に對する反感が時折彼を苦め出した。平和を謳歌する瞬間に、彼の心の奧底にはそれに物足りない何物かが潛んでゐた。或時は彼の身の內、身のまはりの沈默が彼を驚起させた。病後の疲勞の回復につれて、全く征服されたと思はれてゐた彼の我が徐かに再び頭を擡げ出すのであつた。その「我」は一種魔的な、獸的な、偉きな力であつた。

秋に這入つてからの夜每の嵐が彼の心をかき亂した。夜ひと夜大きな松の森に吹きつける風が、悲壯な戰の曲を彼の枕元に寄せた。荒涼とした朝景色の中に立つ彼の顏は蒼かつた。

その脣は堅くしまつてゐた。

「平和が何だ、それを俺はどうしようといふのだ」

「俺の求めるのは幸福ではない、生命だ。戰

だ」
……かういふ聲が次第に強く彼の心の表面へのし出した。或段の如きは殆んど狂氣したやうであつた。自分も知らないまに、彼の手帳にはさま〴〵な恐ろしい言葉が書きつけられた。

然し彼の平和を求める心は意外に強かつた。それに壓されて「我」の現はれは斷片的な、無目的なものとして生滅した。

彼は急に思ひ立つてエンガデンを引拂ふことにした。で、健康を口實にして、温かい羅馬へ移つた。

二

メーセンブッグ女史は抱へ込むやうにして彼を迎へた。彼の親しい同窓の友で哲學者のポール・リイが矢張女史の處に來合せてゐた。

ニーチェは彼等の口から一通りサロメの素性や性格やらを話して聞かされた。露西亞の或る將軍の娘であること、あの邦の「インテリゲンチャ」の男女に時々見かけることのある珍らしい沈着と決斷と聰明と類のない知識慾とが純な二十歳の小娘の身體中に充ち滿ちてゐることなど、二人は口を極めて說いた。「うひ〳〵しい女傑!」かうした感嘆の言葉までが終ひに女史の脣から洩れた。

それから四五日してニーチェは女史の宿で彼女に引合はされた。その席には女史とリイと、サロメ母子のほかに二三の客があつた。彼等は華やかに話し合つた。四五年來孤獨の生活に馴れて來たニーチェにとつては、かうした社交の空氣は一つの眩惑であつた。女史の沈着き拂つたとりなしが却つて彼を臆病がらした。

サロメはおもにリイに向き合つて話した。ベーロイスに於けるワグナアの華々しい活動振などが話題に上つた。それをニーチェは傍から默つて聞いてゐた。興の高まるまゝにサロメの蒼白い額に血潮がさした。思想の交換——對話——の樂み、それを自由に行ひうる人達が彼にはつく〴〵羨ましかつた。彼の胸の奥には友人のリイを嫉む心さへあつた。

座に馴れるにつれて、何時とはなくニーチェも話手聞手の一人となつた。サロメはいかにも快ささうに沁々と彼の言葉に聞き入つた。彼女は自分では稀れに口を挾んだ。然しその熱心で沈着な態度から推して、彼女の理解力を疑ふ餘地はなかつた。

彼の前には質素な服裝をした、小がらな、聰明な娘があつた。小さな身體につゝまれた淨い魂、露西亞の女王……彼のセンチメンタリズムが彼にこんなことを想はせた。彼女は直ちに彼を牽き附けた。

ニーチェの心は小躍りした。彼の顏はほてつた。歸路に彼はリイの腕をつかみながら、いかにも快豁さうに話し懸けた。

「たしかに立派な女だよ、君が貰つてはどうだ」

「否、俺は厭世主義だ、人類を繁殖させる事は俺の主義でない、それよりか君が貰ひたまへ、君には最も好い作合だ」

「俺が結婚する?」かう彼は言つて暫く考へ込んだ、「すると俺は譃つきになる」

彼の心には急に或る哀愁が襲つた。自分は一生結婚しないといふことを、これ迄彼は妹のリスベスや友達にたび〴〵誓つた事を思ひ出した。リイの心にも直ちにそれが浮んだ、リイは彼を憐んだ。ニーチェはリイを嫉んだ。二人は默つて夜の街を歩いた。

苦勞性なメーセンブッグ女史にはニーチェの胸の中がよく讀めた。彼女は成るべく目立たないやうにして彼とサロメとの會見の機をつくつた。彼はその頃から見違へるやうに服裝を氣にし、髮にも手を入れた。女史にはそれがいか

にも自然で可愛く思はれて、おのづと微笑まれた。

彼の心では歡樂と哀愁とが手を握つた。どちらも甘い乳を吸はした。羅馬の晩秋は懶いほど靜かだつた。古い丘の都は蒼深い大空の海の底に埋れて眠つた。夕陽が公會堂の壁に赤く映えて、鐘が鳴つた。タイバー河の泥水の流が重々しく轉がつた。廣漠としたカンパニアの野に音のない風が吹いて、一面に黄ろい光が散つた。聖ヨハネの御寺のまはりにある數あまたの像の上には蜥蜴が靜かに腹をふくらせて日向ぼつこをしてゐた。午後からよくそこへ出掛けて草深い中に埋れながらうづくまつてゐるニーチェの形はちやうど一つの石像のやうであつた。

彼の胸はあらゆる物に對する感謝で充ちてゐた。彼は夜の床の上に横はりながら心ゆくほどすゝり泣きした。それは孤獨の十年を閉し盡した堰の開かれたのであつた。涙が洪水のやうに自由に溢れた。彼は低い顫へた聲で祈つた。たつた一度サロメと交した握手の跡が何時までも何時までも彼の掌の中でほてつてゐた。

サロメ親子は程なく羅馬を去つた。女史のきも入りでリイとニーチェが彼等に從つた。冷淡な母親、愉快さうなリイの顏が、いつも旅中のニーチェの心をいら立たせた。彼等は瑞西へ這入つて、暫くルセルヌに足を留めた。

それはニーチェにとつては思出の多い地であつた。或る日の夕暮、彼はサロメを伴つて湖畔へ出た。二人は遠くトリーブシェンの寂しい半島まで歩を運んだ。其處にはポプラの深い樹立に圍まれて一軒の家が建つてゐた。ニーチェの心は燃え附くやうな樂しい回想を辿つた。彼は知らず〱饒舌になつた。二人は門前に腰を下して長い間語り盡し聞き盡した。

それはワグナアが暫く世を避けて、この隠家に住まつてゐる頃、彼が若い純な敬仰の心を以て師を音づれた折の物語であつた。彼はバーゼル大學に就職後間もなく、二三の友達と湖畔に遠足を試みたが、歸路は獨り別れて、こゝに師を訪ねた。ちやうど今立つてゐる此の門は樹の繁みの中に堅く閉されてゐた。内からは微かに樂器の響が洩れた。案内を乞ふと暫くしてから從僕が出て來て丁寧に來意を聞いた。

「御主人の申されるには、ヘル、ニーチェと言ふお方は、曾てライプチヒで一夕御會ひした御仁の事であらうかと」

「左樣」と答へると、彼は直ちに奥まつた一室へ通された。そして終日そこで師とコシマ夫人の手厚い待遇を受けた。

そんな話に次いで、當時のワグナアの天才が何れだけ高貴な孤獨の絶頂に立つてゐたかといふこと、異常な智慧と經驗とを積み重ねて來た彼が、六十のその歳まで些しの衰へも見せずに愈々深い熱望に燃えてゐたかといふこと…などを彼は熱心に話して聞かした。サロメの眼は可愛らしく光つた。

「私は何うしてもワグナア夫妻を忘れることができない」。やゝ暫くしてから彼はかう言ひ足した。「然し今は何もかも夢だ、私達は一度友達だつた、それから他人になつた、それは在るべくして在つた事だ。何も隠すにも悔むにも當らない、私達は各自の港を持つ二つの船だ、私達の船はもう再び逢へないだらう、逢ひは逢つてもお互に知らずに了ふだらう、それほど海と太陽は私達を變へたのだ」

かう言つてニーチェは顏を反らした。彼は急に默つて了つた。彼の眼には涙があつた。それをサロメは氣附いてゐた。彼女は心から彼を憐んだ。暴力と驕慢との哲學者のやうに思はれてゐたこの人の胸の底にかうした温かい情の乳

のあるのが、何よりも彼女には嬉しかつた。
二人は立ち上つた。そして小暗い夕暮の道を歩き出した。東の空に月が昇つて樹の間を明るくした。ニーチェが最初にワグナアを訪ねた時も、ちやうど同じやうに月の明るい晩だつた。師に送り出されてこの湖のほとりを矢張かうして歩いたものだ……
二人はまた道傍の石の上に並んで腰を下した。月明りが微かにお互の顔を見せた。二人は默つて手を握り合つた。
涙が止度もなく彼の頬を傳はつた。彼は小兒のやうな心になつて泣けるだけ泣いた。そして幼少からの自分の身上話を彼女に明かした。殆んど囁くやうな小聲で、考へ深い長い沈默を置いては、ぽつり／＼と語りつゞけた。「私の冒險は何れもこれも苦しい徒勞だつた……私は貧乏だ、私は幸福といふものに見離された運星の下で生れた……」かう彼は言ひ足して、そつとサロメの顔色を見た。
彼女の顔に急に影がさした。彼は言ひ過ぎたと思つた。
「然しあなたのやうな尊い孤獨の生活は世の寶でせう」。彼女は慰めるやうに言つた。
「では貴女は私には家庭を造る資格がないとお思ひですか」。彼は不平らしかつた。
「妾の可愛い淨い哲學者！」彼女は獨語のやうに囁いた。暫らく沈默が續いた。
「貴女はいつまでも……？」
「何で御座います？」
「否、いつかは結婚をなさるおつもりでせう」
彼女は悲しかつた。「どうぞそんな事は訊かないで置いて下さい」かう言つて彼の顔を正直に見つめながら、堅く彼の手を握りしめた。
ニーチェの心にはふと友達のリイに對する嫉妬の念が差した。
「貴女は私をどう思つてゐて下さいます？」
「妾はあなたを尊重します、そしてお氣の毒だと思ひます」
「では貴女は……」
彼は言ひ足した、「私の……私のものになつて下さい」
…………
「否」、かう言つて彼女ははつきりと答へた。
「どうぞ妾をあなたの一生のお友達として下さい、どうぞ妾を苛めて下さいますな、あなたは妾が今迄遇つた人のうちで一番尊い、一番親切なお方です……」
「友達！」彼は悲しい眼付をしてため息をついた。
彼の心のいらだつほど彼女の心は沈着いた。
「妾はあなたを尊敬します、あなたの御本の中にかいてあるとほり、女といふものほど弱いみじめな者はありません、幸福な結婚！それは無智な人達の專領する世界でございませう、肉の結婚で一番苦まなければならないのは第一あなたです……どうぞあなたと私の間だけは潔い友情で一生を貫かして戴きたう御座います」
「貴女は私を嫌つてるのだ」
「いえ、妾はあなたを戀します」
「では……」
「いゝえ……」
「あなたはリイ君を……」
「そんなことはありません」
…………
彼の手が思はず彼女の首に觸れようとしたときに、彼女は小鳥のやうに輕捷に逃げた。
ニーチェは暫く バーゼルに居を移した。そこで彼は昔馴染のオバーベック夫婦を訪ねて事情を打明けた。そしてサロメへの交渉を頼んだ。すぐに拒絶の返事が來た。「どうぞ心の友として永くあなたを尊敬さして戴きたい」とい

ふ意味の事が感想に書いてあつて、最後に彼にデディケートした短い詩があつた。

ペーロイスではワグナアの名聲が絶頂に達してゐた。近く公演される筈の「パーシファル」が殊に人氣を呼んだ。メーセンブッグ女史からも、サロメからも、妹のリスベスからも誘ひの手紙がニーチェの所へとゞいた。彼は自分の思想の敵のまはりに賑々しく集まる之等の人達を後にして、獨り淋しく故國獨逸へ去るのであつた。

エンガデンで竊かに彼を苦めかけた思想が再び頭を擡げ　めた。彼は俄かに魔夢から醒めた人のやうに身を慄つた。彼の顏は蒼かつた。

「好戰的本能の者は、事の無い時には彼自身にその矛を向ける」と彼の言つてゐるとほり、平和とか幸福とかいふやさしい名で人に媚びようとする幻影の中に永く住むことはニーチェの堪へうるところでなかつた。休息は彼にとつては禁斷の果であつた。サロメに對する夢も晩かれ早かれ醒めねばならなんだのだ。

CRUX MEA LUX！　一生の運試しの時が來た。

エンガデンの谷間に一夜騒然として秋を呼び起した嵐が彼の平和の夢をかき亂した日から、得體の知れない一つの魔が彼の心に巣を喰ひ始めた。彼の魂の空を時々、默示の影が通ると、その地平線には待ち設けもしないさま〴〵の形の思想が上つた――夏の雲のやうに。雲は頽れてはまた盛り上つた。するうちに、かうした不思議な不安と期待との中から、そろ〳〵と一つの鬱結した形體が意識にのぼり始めた。それは「永遠輪廻」の思想であつた。彼は卽座にそれを數行の短文に現はして、その下にかう書き足した――「一八八×年九月初旬、海拔六千五百尺、人界を遠かること遙かなるシルスマリアに於て」と。

この思想は何れだけ彼を驚かしたかわからない。彼は臆病な殺人犯が自分の手にかけた相手の亡靈におびやかされた時のやうに、一切その事に關しては祕密を守らうと決心した。そしてそこ〳〵にエンガデンを逃げ出した。……サロメの交際が暫く彼の心をまぎらした。

然るに凡ての幻影の取拂はれる時が來た。意地惡く心の奥に潛んでゐた魔が二度頭を擡げ出してこと〳〵と門の扉を叩くのであつた。

「拙くも幸福顏な人間よ、汝地球上の新參者よ、聞け、この世界は既に一度ならず二度ならず、數限りなく繰返された。お前達は永遠に廻る輪廻の車の端に附いた塵の塵だ。……人間よ、お前達の一生は砂時計の砂のやうに、もどりもどつて、百年千年同じ事を繰返すだけのことだ。お前達は釘附けられてゐる。毛一本でもお前達には自由といふものがない。それのみか、お前達の醜い一瞬々々は覿面に來世で酬いられるのだ。お前達のさま〴〵な悲み喜び、友と敵、あらゆる望みと過ち、あらゆる嘆息、あらゆる草の一葉、あらゆる日の光、あらゆる事物の同じ排列が、意地惡くお前達を待つてゐるのだ。

何も新しい物は起らぬぞ。大小一切のお前達の生活が同じ順序と結果でお前達に歸るんだぞ――同じやうにこの蜘蛛も、この毛蟲も、この鬼の自分も。輪廻の砂時計は廻るぞ……で、お前達人間は塵だぞ……それでもお前はこの俺に降服しないか。お前は齒を喰ひしばつてこの事を告げる鬼は呪はぬか」

えたいの知れない魔はたゝみかけて執念深く彼の耳元に囁いた――

「まだお前は降服しないのか。それともお前はぢつと耐へて、俺の詞を神の詞として受取ることのできる法悅の瞬間まで待てるか。俺の詞

を聞いたが最後、お前はその爲めに再生するか、永久に消滅するかの一つだ。お前は死にたくはないか。自殺の方が何れだけお前に樂だとは思はぬか。永遠輪廻の重い責任を負はされてもお前は安んじて生きてゆかれるか。それとも前にはこの優越にして永遠なる聖斷のほか何物をも望まないまでに人生を愛する勇氣があるか。お前はお前の生活に "yes" と言ふことができるか」

ニーチェの心は興奮の絶頂に達した。ある時は彼は失望の底に沈み、また或時は歡喜に狂つた。彼の強度な感情は彼をして慄へさせまた笑はせた。彼は不可解の理由から自分の室を閉めきつて危い時を過したことも幾度かあつた。彼の眼は血走つてゐた。彼は處かまはず泣いた。然しその涙は遣瀬ない涙でもなく、甘い涙でもなかつた。それは不思議にも強い歡びの涙だつた。終ひには彼は獨りで謳つたり、あらぬ事を口走つたりした。

「遂々來た！」といふ自覺が彼に湧いた。顧みれば半生の烈しい痛ましい苦痛、長い〳〵努力――何一つ無駄ではなかつた。これが自分の定められた港なのだ。よくも遂々こゝまで漕ぎ附けたわいと思つたときに、彼の泣くのは無理でなかつた。聖なる恐怖と歡喜の幾日かが續いた。苦しくとも彼はこの眼前の眞理を受け入れねばならなんだ。さうでなければ自滅のほかに道がなかつた。よし、行ける處まで行かう、自分はその眞理を受け入れるばかりでなく、それを敵に廻して立派な戰を戰はう、本然の人生が無意義ならば自分はそれに一つの意義を與へよう、自ら生きがひのある人生を造らう、かう彼は決心した。

「汝は汝の敵を求めねばならぬ、汝は汝の戰を戰はねばならぬ、汝は汝の思想に向つて戰はねばならぬ」

大きな戰の野がニーチェの前に開けた。……

彼の眼は鉛のやうに悲しい深い相を帶びた。影の濃い皺が知らぬ間に彼の額に刻まれた。輕侮をかくした彼の脣は一文字に結ばれた。彼の手は靜かに力強く操られた。彼は悲壯な「驗者」としての新しい道に進んだ。（大正七年一月）

大正六年十一月十二日記の中より

舊事乍茲に誌して置く。自分は先月初めから筆をとつて「嵐の前」といふ小說處女作を書いた。四十七枚。本月上旬完成。來春新年號の「中央公論」へ掲げて貰ふ約になつてゐる。ニーチェの中年期を描いたものである。世評いかん。自分では多少得意の作である。今後も一年に一篇でもよいから小說を作らう。世評はとにかくとして之をかき乍ら自分に顧る處が多かつた。

ビートーベン（一）

或る時、不幸な彼の爲めに、神の助けを祈つた友人の好意に答へて、ビートーベンは斯う言つた、『人よ、汝自ら助けよ！』

『悲みを經ての喜び』（Durch Leiden Freude）――これが彼の一生の格言であつた。

ビートーベンの一生は、決して野心家を滿足させるやうな教訓をも逸話をも與へない。それは苦しめる者のために、眞に苦みうる力のある者のために『聖なる悲みの甘露』を惠む。

記憶せよ、（特に若き人々のために言ふ）、この世は薔薇の花の敷かれた街ではない。それは偉大を希ふ者のためには、常に孤獨と寂寥に追はるゝ山道である。最も強い者ですら、ある時は悲哀と失望からおのづと彼等の頭をうなだれる場合がある。

記憶せよ、かやうな危險な場合に眞の偉人が、汝を助けに來る。ビートーベンが汝に役立つ。

新藝術觀

ベルグソンの哲學が、いろ〱の意味でいろいろの方面に著大な影響を及ぼし、どれほど深く時代の要求を充しつゝあるかと云ふことは玆に說くまでもない。殊に彼の哲學の基礎をなす直觀なるものは、今迄の哲學者が取扱つた冷索の理智と違つて、至極溫かい一種の同情をその德とするものであつてみれば、それが藝術と一倍親しい關係を保つであらうと云ふことは見易い道理である。然らば彼の哲學の歸納する藝術觀とは如何なるものであらうか、それが在來の美學とどう違ふかと云ふことを研べてみるのがこの論文の主旨である。彼の著書には到る所に藝術及藝術家が引合に出されてゐるし、『笑』と云ふ論文のなかには、簡單ながら具體的にその藝術觀が現れてゐるのであるが、然し私はたゞ忠實な紹介者に甘んずるばかりでなく、更に一步突込んで、一個のベルグソニアンとしての見地から、自由な推論もし、蛇足をも加へて見たいと思ふ。

一　理智と直觀

ベルグソンの哲學の基礎が直觀說に在ることは詳しく述べるまでもない。人間は生存の必要上から、事物の實用的方面ばかりを觀て、之に適應するやうな概念を作ることに馴れてゐる。斯樣な功利的知識を我等に與へるものが我等の常識や理智である。我等は日常生活に於いて物を視、物を聽き、考へるとき、眞に視、眞に聽き、眞に自分の奧底で考へてゐるやうに思つてゐる。然るに我等が外界に就いて視たり聽いたりする事は、我等の五官が我等の行爲に適應するやうに、なるべく簡單に方便に採り入れた一種の選擇または符號に過ぎない。また我等が自分自身に就いて考へ知つてゐると思ふ事も、實に行爲を中心として沈澱させた意識の外皮に過ぎない。で、我等の五官や表面意識は實在の功利的皮相よりほか何物をも我等に敎へないのである。人間の生活に直接必要な類似點は誇大にして受け入れられるが、不必要な個別相は全く忘れられる。言ひ換ふれば我等の常識や理智は、豫め行爲が指し示して置く一筋途を辿つて行く馬車馬に過ぎないのである。その行爲の途を進むに必要な特性のみが事物から採り入れられて、やがて分類が行はれる。分類ほど實用に方便なものはない。分類の廣く詳しいほど、我等の日常生活は明るい燈明臺で照らされる。然し一方から言へば、分類の廣く詳しいほど、我等はたゞ物の符號と類性ばかりを見て、その物如實の色形や――その物の個性を――忘れることになる。狼から見れば山羊も小羊も同じに見えるかも知れない。生獲り易く、舌ざはりの好い柔かい肉を持つた、同じやうな二つの犧牲の間に何で差別をつける必要があらう。我等も人間仲間にこそ甲乙の差別を――それも實用的に――附けるが、一疋の蚊と他の蚊との區別を識りうる者はなからう。我等の常識や理智は我等の生活に必要な知識ばかりを分類法で採り入れ、事物をたゞの符號に化して意識に上す習慣になつてゐる。殊に斯樣な知識を現はす文字がまた一種の符號である。ある文字がその現はす事物に與へる意

味は全くその事物の極く表面的概念にほかならない。

斯う見て來ると、我等の日常の知識ほど概括的表面的で個性の失はれたものはない。それは唯だ行爲の爲めに符號、實用の方便に過ぎない。然らば科學はどうであるか。この常識的知識が最も組織的に最も巧妙に仕上げられただけではないか。

この事實は我等が外界からうる知識に就いてのみ言ひうるばかりではない。我等は自分の内心を閲して悲喜哀樂の情を細かく知り悉すものと思つてゐる。然るに我等の日常の内的經驗はたゞ其意識の皮相に停滯するに過ぎない。我等が悲と呼び喜と呼ぶものも、その實は世間並通りの類型的情緒の感得のみで、我等は一々その個性的色彩を味讀するわけではない。眞に喜び、眞に悲み、眞に愛し、眞に憎むその心の奥には、意識の底を貫いて出る、個性の濕ひをもつた濃い影、深い響が無ければならない筈である。

要するに我等は、行爲に導かれて概念と符號の狹い途を歩んでゐる。で、我等と實在の間には厚い幕の距りが附けられ、我等の知識は其實在の表面に沈滯させられた。

然らば我等は眞の實在に接觸する或る能力を有たないのであらうか。理智のやうに有目的な作用のほか我等には認識の途はないのであらうか。何うすれば我等は devenir réel の中に我等を置くことが能きようか。

『直觀に依れ』斯うベルグソンが答へる。「生きた直觀的同情に依れば我等は生命の實在の中に呼吸することが能きる」と。

我等の因習的理智は或は之を拒むであらう。斯樣な一種のプリミチーブな『同情』に依つて、幾千年來そが占めて來た知識上の權威を侵されることを容易に承認しないであらう。しかし汝の勢威はカントの唯心論を頂點として達すべき所まで達したと同時に、やがて其れ自身の界限をも意識したではないか。科學の究極はデュ・ボア、レーモンドを待たずとも、今日の人の皆な承認するところである。我等が若し理智の中にばかり生息するものとすれば、我等はその界限を知ることの能きる筈はない。既にその界限を知ると云ふことが、我等には理智を包括して、猶ほより廣い、より根本的な機能の在ることを證明する第一の左券である。更に界限の自覺はそを超越する第一歩でなければならない。

如何にして超えうるか? ベルグソンの宗徒は斯う答へるであらう。「在來我等は餘りに理智の重荷に惱まされて來た。今一度小兒のやうな原始的な直覺に歸れ。生命の哲學は至極單純である。然るに我等は餘りに學び過ぎた。「哲學をして再び the All の中に鎔ける努力たらしめよ」。その努力は勿論困難な努力である。しかし一度その味を知つた者には忘れることの能きない歡喜がある」

Sweet is the love which Nature
brings;
Our meddling intellect
Misshapes the beauteous forms of
things:
We murder to dissect.

Enough of Science and of Art;
Close up those barren leaves;
Come forth, and bring with you a
heart
That watches and receives.

超越して何處へ行く? 實在へ、生命の流れの中へ、自然人生の élan vital の泉へ。かくして我等は直觀の徳に由り宇宙共通の故郷

に歸り、事物及び自己の絶對認識に達することが能きる。

二　直觀の作用と種別

前にも述べたやうに、我等が理智の界限を知ると云ふことは、我等がそれを超越することの能きる何よりの證據である。我等は解剖者であると同時に建設者であり、批評家たると同時に藝術家であり創造者である。我等には同情があり省察があつて、無關心に自然人生を觀しむことが能きる。我等の感想、熱情、行爲には未だ我等の理智の解き得ない――寧ろ及び得ない――祕密が潜んでゐる。彼等は不用意でありまた自由奔放である。しかし彼等は確かに彼等の實人生の眞根であると云ふことだけは拒めない。彼等は『知』らない、しかし彼等は感じ、造り、且つ erleben する。斯樣な『全經驗』から産れた『生の儘の洞察』を直觀と呼ぶのである。

理智は固化し、直觀は滲透する。理智は敵視し分析し、直觀は同情し親和し共鳴する。『この機能（直觀）は決して不思議ではない。我等の誰でもが或る程度までは之を働かす機會をもつてゐる』と、ベルグソンは言つてゐる。

例へば、著作に從事する者は能く知つてゐる事であるが、一つの問題に就いて長い研究を遂げ、あらゆる記録を集め、いろ／＼の覺え書きを作つた後で、なほ今一つ缺けた物がある。それは即ち彼自身をその問題の中心に置いて、その中から能ふだけ深い衝感を攫んで來ると云ふ困難な努力である。で、一度この衝感を得ると、彼の問題は統一した精神を見出し、諸材料は適當に從順に按排されることになる。斯の衝感は即ち一種の直觀にほかならない。哲學者の内省と云ふのも、藝術家のインスピレーションと云ふのも、みな直觀の別作用である。

しかし我等の日常生活は是非とも常識や理智の支配を受けねばならない。我等が温かい直觀の恩惠に浴することは至つて稀である。我等はいつも生命の故郷を忘れがちである。此に於てか、ベルグソンの哲學は昏睡者を呼び覺ます警鐘である、『汝は再び目醒めねばならぬ』と。彼の宗徒が歡喜して彼を迎へるのもこの點である。彼等の一人は言つた、『ベルグソンが眞先に我等に要求する處のものは一種の内部悲劇である。何人か斯樣な論理的革命に堪へうるであらう。しかし一たび斯樣な心理的變化を受け入れることの能きた者があるならば、彼は決して再び從前の狀態に歸り得ないことを悟るであらう。……彼は丁度戀すると同じやうな趣で理解する。彼は全宇宙を捉へた』と。

『戀すると同じやうな趣で理解する』――若しもこゝに宇宙に共通する『心靈』と名くべき者があるならば、禽獸草木の世界まで汎く瀰漫した élan vital を承認するならば、我等の眞經驗、眞理解の方法は之を措いて他に求められないであらう。而して藝術家の直觀に於て最もその適例を見るであらう。

ベルグソンは直觀に種別を與へてゐない。勿論直觀は無目的であり、不用意であり、不羈奔放である。之を區別すると言ふことが既にその本然の性質に背いてゐるかも知れない。しかし注意深い讀者は彼の說く直觀におのづから二つの類型のあることを覺るであらう。彼はその『哲學緒論』の中で、屢々『理智的同情』とか『哲學的直觀』とか云ふ文字を用ゐてゐる。それから彼はその著書のあらゆる場所で、直觀の作用を例證する爲めに藝術を引合に出してゐる。しかしこの二つの直觀が根本に於いて違はなければならないと云ふことは自明の理である。今私は假りに其一つを理智的また

は哲學的直觀（Intellectual or Metaphysical Intuition）と名け、他の一つを情緒的または藝術的直觀（Emotional or aethetical Intuition）と名けるであらう。勿論斯様な截然たる區劃が事實に於て存在するわけではない。藝術と雖も少しも理智の分子の加はらないこともなければ、感情が哲學に入らないわけもない。たゞ兩者の主調を基として便宜の爲めに附けた區分に過ぎない。更に我等はこの二つの直觀のほかに別な直觀世界が存在しなんだであらうかと尋ねることが能きる。ウイリアム・ジェームスの所謂「宗教的經濟界」が示すやうな所に第三の直觀を區別する必要があり且つそれが妥當であると私は思つてゐる。然しそれを詳しく究めることはこの論文の主旨でない。

直觀は空手で獲られるものでない。直觀は營養と努力を要求する。『そが種々の外面的表現と永い親しみを重ねて、其信用を博した後でなければ、實在の直觀即ち智的同情に達することは覺束ない』と、ベルグソンは言つてゐる。即ち我等は理智の助けにより、その觀察と經驗を蒐集し、十分それに親善した上で、初めて哲學的直觀の慈光に浴ふことが能きるのである。また彼は斯うも言つた、『概念は直觀に統くべからざる物である。なぜなら、あらゆる科學は概念から成立する。而して哲學は他の科學なしには成立することが能きないのであるから』と。丁度それはジェームスの說いてゐる「內省」と同じ作用である。

要するに理智的知識即ち概念を土臺にして得た直觀が哲學的直觀である。之に反し、藝術的直觀は感情を基礎として成立する。我等が自然人生から得る情緒的印象が營養をなして藝術が産れる。即ち藝術とは我等が自然人生を對象とし、情緒的直觀に由つて實在に接觸する手段である。

哲學的直觀は概念即ち科學を土臺にして其上に産れるのであるから、之は十分に理智の訓練を要することは言ふまでもない。然るに藝術的直觀は感情を主にするから、前者よりもプリミチーブで且つエレメンタリーである。我等は何人もある程度まではこの直觀の享樂者である。寧ろそれは本能に近い機能と言つてよい。ベルグソンに從へば、本能とは『無意識に行爲を表はす盲目な、しかし非常に微妙な判斷力で、修得したり證明したりすることの能きないもの』である。而してこの本能が理智の助けにより自意識の域に入つたとき直觀となるのである。で、この說明から見ても藝術的直觀が寧ろ本能に近いものであることが解る。また、動物が藝術をもちうるや否やと云ふ古來からの疑問も斯様な見地から見れば、然りと答へられるのである。なぜなら、動物にも本能があるから。

三　藝術的直觀

我等は何人もある程度までは藝術家である。靜かに內省するとき、我等は各自の心靈の奥に時には快濶な、時には悲哀な、我等の內生活の破られざる諧音を聽きとることが能きるであらう。我等を圍繞する自然の中にも矢張斯様な諧音がある。しかしその響の我等に達するのは至つて微かでまた稀である。なぜなら、我等は常に意識の表面に住ひ、常識と概念と文字との制扼に縛られてゐるから。今我等がこの普通意識即ち理智の世界を想像するならば、それを一個の球體に例へることが能きる。その球體は行爲のために蒸發させられ凝縮させられた冷灰世界である。この世界では我等は概念で物を種別したり、冷やかに證明したりする。然るにこの自意識の ego の周圍を取巻いて、別に或る精神作用がある。それは氣體の世界で、固形意

識を中心として次第に擴がり次第に薄らいでゐる。我等はこの世界を無意識界とも、第四ヂメンションの世界とも、直觀世界とも名けることが能きる。其處は我等が文字通りに眞に經驗し、全人格を以て試み、感じ、活きる生命である。其處は至つて公開的なホスピタルな領域で、何人の意識も自由に交通し親和しうるのである。聖意識――神――とも我等は此處で相逢ふことが能きる。それは萬の生命の故郷である。藝術が斯樣な境地に我等を導く時我等の閲する歡喜も悲哀も、みな斯の永く忘られた故郷に再び足踏み入れた場合の歡喜や悲哀にほかならない。

しかし固形意識の外皮は餘りに堅いために、我等が無意識界と交通することを容易に許さない。我等と眞の實在との間には厚い不透明な幕が下されてゐる。たゞその幕は藝術家や詩人たる天寵を有つた者に於いてのみ半透明または透明である。で、彼等は斯樣な透視の徳に由つて自由に眞生命の世界に突入し、その經驗を我等にもたらすことが能きる。我等はその人達を天才と稱ぶ。

理智の太陽は餘りに輝いて我等を眩惑させる。この太陽の照る世界では、我等は色盲である。獨り天才のみが心靈の深い奧底に樹蔭を見出す。そこは我等の臆病で人見知りする眞自我の初めて目醒める薄暮と夢の世界である。闇い無意識界の温かな秘密の中から直觀の泉が湧き出して我等の生命をそゝのかす。我等は becoming の歡びに溶け、實在の脈搏を五體に感得する。我等は愛するか? 我等は考ふるか? 最早斯樣な事は問題にならない。それは我等の眼の濁つたわけでもなく、我等の注意の怠つたわけでもない。我等は今『完全な自我』を生命の流の中に見出してゐるのである。其處には單一の中から湧き出す無限の富がある、音樂の波の移り進むやうな『持續』のリズムがある。

再び言ひ易ふれば、藝術家は彼の人一倍に清新にして無垢な官能を以て、自然人生を感受し、影と光と、色と線と、音諧とリズムと、喜と悲と、愛と憎みと、そのほかさま〴〵な印象を採り入れ、常意識界の幕を透視して藝術的直觀に到達する。彼はその徳に由つて物の概念と類型とを忘れる。彼は個々の物に其本然の個性を見る。彼の自我は宇宙生命の源を包擁するまで開展する。……「私はこれ等の樹木がお互に何を話し合つてゐるかを知らない。しかし彼等はきつと我等の了解きない何事かを談つてゐるに違ひない」と、ミレーは言つてゐるが、この詞は少くとも彼自身にとつては眞理でない。なぜなら彼が深い觀察と同情を以て之等の無心な樹木に親しんだ時、兩者の間には同じ生命の呼吸が通つたではないか。

實在は宇宙の生命である。增成し創造する持續の世界である。その世界は常に温かく、生々し、力と歡びに充ちてゐる。我等が哲學的直觀から到達するも、または藝術的直觀から到達するも、その世界は同じ世界である。殊更に『美』といふやうな本然的特性が事物に固着し存在するわけではない。その見解は在來の哲學が、『眞理』や『至上命令』を假設したと同じ謬である。トルストイが特にその藝術論から不徹底な美の觀念を除去しようとしたのも理由のあることだ。

で、今一度前述の説明を總括すると、感情を基礎とした直觀に依つて實在その物に接觸するのが藝術で、藝術的直觀に依つて得た實在の與ふる感じが所謂美である。

四　藝術の種別と獨創

前にも述べたやうに、我等と自然との間には

黒い幕が下されてゐる。若しこの幕が全く切り落されるか、透明になつたとすれば、その時我等は在の儘の純潔な姿であらゆる事物の相を、その形をも色をも響をも、我等自身の心靈の最微妙な變化をも感得することが能きる。斯樣な人が若しありとすれば、彼は完全な意味での藝術家である。諸藝術が渾然と融溶した形で彼に於いて綜合せられる。しかし斯かるは自然に向つて餘りに多くを望むことで、勿論不可能なことである。斯の世では藝術家に造られた人達でも、其幕を上げまたは透視しうることは極めて偶々であつて、またその小部分に過ぎない。一の方面では透視の能きる人も、他の方面では盲目である。で、その方面と云ふのが我等の一々の官能に準據してゐるので、從つて我等は各官能に相當した諸藝術をもつやうになるのである。

物の色彩と形に鋭敏な天才があるとすると、彼はその優れた機能の徳に由り、小自我を離れて、即ち行爲に煩はされずに、色の爲めに形を見ることが能きる。彼はその色と形を通して事物の内生命に到達することが能きる。で、彼はその直觀を或る形で表現し、我等の知覺を醒まし、我等をして自我と實在との間に介在する色や形の僻見を棄てさせ、我等をして「自然」その儘の形容をみせ、斯うして彼は『藝術の崇高い野心』を滿しえたのである。彼は彫刻家または畫家である。

我々の日常生活に於いて、人間本然の感情はその表現する不完全な外形的行爲の類型に據つてのみ窺はれ、それ自らの原始の情調は打消されがちなのが常である。然るに同じ外形の下に現はれる一つの喜でも悲でも必ず個性の深い感激を經て生命の源に到達してゐなければならない。斯樣な感情本然の情調を音律的の文字に上せて我等に示す者が詩人である。更に或る天才は一層深く侵入して、あらゆる人類に共通する生命の主根に觸れる。それは『彼の最奥底の感情よりも猶ほ人間に親近しい生命と呼吸の或る律』である。彼はそを表現するに普通の文字の決して及ばないことを知るが故に、別により自然な方法を發見する。彼は音樂者である。

劇と謂へどもまたこの方則に洩れない。で、その目的とする所は、我等の生活上の必要と利益とが矢張我等から隱してゐる或る種の實在を闡明するにほかならない。然らばその實在とは何であるか。我等のいろ／＼の感情のうちでも他人との接觸から起るものほど深く劇しいものはない。丁度充電器の兩極板に集つて最後には火花を出す陰陽の電氣のやうに、我等の間には强い牽引と反撥がある。この心の電氣の事を我等は情熱と名ける。若しも我等の間に社會的または道德的の制裁が無かつたなら、斯程の强烈な感想の爆發は日常の出來事と見做さるべきであらう。然るに人間の功利心は斯樣な爆發の有害であることを教へる。社會と云ふ物の必然な要求からいろ／＼の制裁が產れる。功利の擇ぶ處を理智がすゝめる。義務の可しとする所を道德が說く。斯うして知らず識らずの間に、我等の熾烈な情火を壓し覆ふ堅い障壁が出來てきた。丁度焦熱地獄を包む地球の外殼のやうに。しかし火山が出來て爆發が起る。情熱の噴火は人間の自然が社會に對する復讐である。我等の內心に在つて眞自我の一部を構成する斯樣な情熱を我等は『悲劇的』要素と呼ぶのである。劇の取扱ふ實在が實にそれである。

――斯うベルグソンは藝術を種別して說いてゐる。

藝術上の獨創と云ふこともまた同じやうに說明することが能きる。それは藝術家が實在

を窺ふ藝である。彼の官能の最も鋭敏に働く點である。自然と彼との間に下された幕の破目である。藝術の領域を區劃したと同じ理由が矢張藝術家に彼自身の專有とする獨創を與へる。即ち藝術家の獨創とは狹隘な人工的制限の樹立を意味するものでなくて、その藝術家が自然と交通する天賦の特權を指すものである。言ひ易ふれば獨創は後の製作の眞實さの保證である。彼が獨創的であればあるほど彼の藝術はいゝ、いゝ、より深くより自然で、從つて其表現の内容も多色多樣でなければならない。

五　藝術上の二重個性

或る畫家が彼の畫布に上す題材は、彼が或る場所に於て、或る日或る時間に觀た自然である。二度と再び閱することの能きない創造的映象である。勿論他人には猶更起りえない經驗である。また詩人が歌ふ所のものは矢張彼自身の、彼たゞ獨りの或る瞬間の情緒で、千萬年の後にも復たと起りうる筈はない。劇作家の取扱ふパッションにしてもさうである。我等が斯樣な感情に普遍的の名を與へる所を詩人や劇作家のみが之を個性化して我等に見せる。個性のないものは最早藝術ではない。なぜなら、概念や記號は常識に墮するのであるから。

藝術の普遍性に關する誤解はこゝから起る。『或る感情が一般に眞實と受取られるからと言つて、それが普遍的の感情であると言ふことは能きない』と、ベルグソンは言つてゐる。例へばハムレットの性格ほど稀有なるものはない。彼は勿論いろ〳〵な點に於いて普通の人間に類似してゐる。しかし我等の注意を牽く彼の性格はその類似點ではない、然り彼の性格は稀有でありながら、却つてその爲めに彼は眞實の人間としてとられてゐる。即ち天才の事業は自然顯象の個性の表現であるが故にのみ、一般に承認せられる。藝術の普遍性と云ふのは實は斯樣な意味である。

然らば、稀有であり獨特であり個性的であるものが、なぜ眞實として一般に承認せられることが能きるか。それに就いてベルグソンは次のやうに答へてゐる。

勿論、それは我等の痼癖に反對して、忠實に物を視るやうにしむけるからである。忠實は傳染的である。恐らく我等は再び藝術家の觀た儘を觀ることは能きないであらう。尠くとも全く同じやうには決して視ないであらう。しかし、彼が現實に觀照したとすれば、彼が其時幕を擧げるに要した努力が、我等の想像を强ふる。即ち彼の製作は我等の見習ふ御手本である。其手本の效力の奈何が、取りも直さず藝術品の眞僞を判ずる正しい定規である。で、眞理はそれ自身のうちに說服力、否發心力を有してゐて、その爲めに我等をしてそを認識せしめるのである。

要するに、自然の眞相は個性的であり、之を把持して表現するのが藝術家の任務である。その製作の眞實性が深ければ深いほど、いよいよ個性が明らかに現はれる、そして其傳染力がいよ〳〵廣く行はれる。更に言ひ易ふれば、藝術は直接にその表現した實在を他人に示すものではなくて、その努力に依り他人を刺激して眞實に通ずる幕を上げさせるのである。

斯く藝術品の内容を支配する個性たるものは、實在その物に附着した本然の特性であつて、藝術家自身に造つたものではない。然るに藝術にはまた別に藝術家自身の個性がその表現に加はる、藝術家と自然——主と客——との融合に由つて藝術が生れる。二つの個性、二つの生命の接觸が即ち藝術である。で、實在本然の個性を客觀的個性と名けるならば、之から

說からとする個性をば主觀的個性と名けることが能きる。主觀的個性とは世に謂ふ樣體（廣い意味の）である。我等はこゝで『樣體は人なり』と云ふブフォンの警句を記憶に呼び起すべきである。

然らば我等の藝術的表現にはなぜ斯樣な主觀的個性の現はれを必要とするか。

ベルグソンの說く直觀の天地は甚だ達しにくい世界である。我等がその中に入るには非常な忍耐と努力を要する。それは彼自身も說いてゐるやうに、容易に常人には許されない天惠である。我等と自然とを遮る幕は厚く重い。たとひ天才者と雖もその一部を破りまたは透視するのはたやすいことではない。或人が天才は忍苦だと言つたのは、此意味からは至當の詞である。樣體とは卽ち藝術家が實在との交通に努力する全自我の苦い經驗の表白にほかならない。我等は次のロダンの詞を味つてみるがよい。『何物も辛抱强い勉强にまさるものはない。唯だそれのみが生命の祕密を打明けて吳れる。我慢に熱心に汝の一生を捧げて生命を知ることに勉めよ。汝は永遠に喜の輪の中にあるであらう。了解することよ――眞に見ることよ。若しも人が理解の幸福を豫知するならば、彼は必要な努力の前に、たとひ長くとも苦しくとも缺くべからざる準備の前に屈服するであらうか』と。

直觀の途は努力である。天才が努力して實在の理解に到達したその道筋を示すものが彼の表現の樣體である。彼はその爲めには僞らざる全自我を提げて戰ふが故に、其處に彼の偉大な個性が赤裸々に現はれる。斯うして彼は自ら拓いた眞理の途を示しつゝ、他人の發心をも誘うて實在の流に導くのである。

卽ち藝術上の客觀的個性は實在その物に內在する特性であるが、主觀的個性はその實在に到達する努力卽ち方便の爲めに存するに過ぎない。若し玆に理想的天才が現はれて何の努力もなくかの幕を透視することが能きたならば、否、彼と實在との間に斯樣な幕が存在しないならば、彼は主觀的個性を其製作に印象する必要を見ないであらう。寧ろ彼の個性は實在その物の個性と一體となつて現はれるであらう。

六　藝術の內容

藝術が情緒的直觀に由つて我等を導く先は勿論實在の鄕である、いかなる機能が我等を導くにしても到達する實在鄕に變りはない。それはベルグソンの說く『持續』の天地である、生命の里である、élan vital の領地である。流れて已まず、造つて已まず、自由に進み、常に進む經驗界である。更に詞を變へて言へば、ジェームスの所謂宗教的意識界、『第三經驗界』である。冷やかに敵視し分析する固定意識界から逃れて、一たんこの同情親和する流動意識界に入ると、あらゆる生命がこゝで接觸し共棲する、我等は生命の故鄕に歸る。

この說はエマーソンの說いてゐる古代の美の說と一致する。曰く、人間の心靈はこの地球の上で肉附けられてから、その離れて來た故鄕を慕つてあちらこちらさ迷つてゐるうちに、自然の太陽の光に眩惑されて、實在の影なる大地の物のほか最早何物も見ることが能きなくなつた、そこで美しい物を送つて地上の善と美を回想させるやうにしたと。

とに角その世界は持續、增成、流動の世界である。全部が一部をなした世界である。切り離すことも加へることも能きない世界である。生命の波は渾然として本然の律に從つて動いてゐる。複雜の中に單純があり、單純の中に複雜がある。易言すれば、數の觀念の這入らない

Pure quality の世界である。分析の更に用をなさない世界である。この點に就いてベルグソン自身が次のやうに例證してゐる。

ある天才の畫家が彼の畫布の上に一個の像を描いたとする。我等は剪紙細工のいろいろな色の定規を持出してその畫を似せることが能きる。で、我等の使ふ定規の細かければ細かいほど、數の多ければ多いほど、原畫の曲線や影がよく複寫される。然し無限の蔭影を現はす無限に小さな無限數の部分に分けなければ、その像と全く同じ物を再製するわけにはいかない。しかもその像は畫家から見れば單純なる物として考へられ、畫布の上に一つの全體として移植するやうに望まれ、またそれが全く分つことの能きない一つの直觀の映寫として我等に見えるほど益々完全な物であるべきだのに。で、今我等の眼が大家の製作に對する時でも剪紙細工としか見ることが能きないと想像せよ。または我等の理智が畫布の上の像をも剪紙細工と同じやうにしか説明能きないと想像せよ。その時この我等はただ多くの小さな定規の集合に就いてのみ談りうるのであつて、我等は正に機械的假說の下に立つてゐるのである。更に我等はその畫が機械的集合であると見るほかに、何かその中に畫家の企んだ目的があるとも見ることが能きる。その時の我等は目的論者になつてゐるのである。しかしどちらにしても我等は眞の途に立つてゐない。それは畫布の上に寫された畫——即ち單純な行爲——である。

要は、藝術的作品は、理智の眼から見た無限の複雜をも綜合して、生きた單純に化するのである。即ち生命の律に由つて統一するのである。『恐らく解剖學の熟語ほど身體の影の分類の方へ人間の僻見を強ふる悪い結果を齎すものはない。その爲め生命の偉大な幾何學的磁力的線は破られるやうに見える。この理論的分剖が、初學者の間に眞理の意味を變形させた。藝術の事業は斯樣な誤つた分類の思想に反抗するにある。此等の調和した形は蛇の渦巻のやうに波打つて一から他に移り、また急に貫通する壯麗な單純の一體である』とロダンも言つてゐる。

されば藝術とは——その現はす實在とは、生きた綜合であり、偉大な單純である。

更に藝術の理想鄕はベルグソンの所謂純粹記憶または精神の境である。そこには最早我等の生命の波に逆ふ物質がない。從つて我等の創造は自由である。『そはかるが故に美である、なぜなら、そは生き、動き、再造するから』とエマーソンは言つてゐる。『またその純粹精神の天地には創造があるばかりで、死もなく老衰もない。不斷の青春が榮えてゐる。既に自由であり、常に春であるとすれば、藝術の齎す感情は至大の幸福と喜とが其基調でなければならない——偶々物質の起す悲哀が色強く之に伴ふとも。それはエマーソンが nobly mad と云ふ詞で現はした境地である。またロダンが藝術の三要素を數へて『生命、青春、活動』と言ひ、『藝術に於いて人は彼の幸福の鍛冶屋でありうる』と言つたのも好く藝術の内容效果を示してゐる。

概括すれば藝術の内容は、創造であり、生きた綜合であり、自由と不滅と青春と歡喜との天地である。これが藝術の理想鄕である。

七　結論

ベルグソンの哲學は在來の唯心論と物質論との爭を解き、自由意志論と宿命論との葛藤を和げた。同じやうに、彼の哲學から藝術觀上

の矛盾も解かれるわけである。藝術の對象が實在であるとする限り、これは現實論である、むしろ經驗論である。しかし、その實在なるものは功利的常識や理智から離れた純粹經驗であつて、生活上の物質主義を超越したのである限り、その藝術論は一種の理想論である。製作の結果から見れば現實論、その動機から見れば理想論である。卽ち藝術に於いて、我等は理想を通して現實との接觸を再興しうるのである。

ビートーベン（二）

庸凡な善惡利害の世俗戰に倦み疲れた時、彼のやうな信念と意志の海に暫く身を浴することの、何れだけ我等のために興味であるかよ。偉人の身邊には言ふべからざる勇氣の感染力がある。

我等をして、運と偶然から物質的に成功した著名な人達を忘れしめよ。たゞ心の偉大であつた者だけが、ヒーローの名に値する。人格が何時も人間の偉大さを計る尺度である。

我等をして成功を説かしめるな。要は、偉大であることにあつて偉大に見えることではない。

偉人の生涯の長き犧牲にほかならない。悲慘な運命が彼等の肉と靈との苦みの鐵砧の上で、彼等の精神を鍛へ上げた。彼等は朝夕、苦痛と試錬のパンを食べた。

何のために彼等はそれだけ苦しんだのであらう。後の世のより强き仲間を助けるために、彼等に力と惠みを與へるために！

ルドウイッヒ・ビートーベンは一七七〇年、獨逸國ボンに生れた。彼の祖父も父も、その土地の王室附きの賤しい音樂師であつた。彼の母は矢張貧しいコックの娘であつたが、その夫の酒癖の爲めに、一生一つの樂みも知らないやうにして逝つた。

ビートーベンは四歳の時から、もう音樂を習はせられた。そして殘酷の父のために、死ぬほどひどい苦行をさせられた。十一歳から或る劇場のオーケストラへ出て、一家の生計を助けねばならないことになつた。

十八歳の時、彼は眞實賴りとしたその母を失つた。彼はその以前から、一家の主人役として、二人の弟を育てねばならなんだ。彼の父は酒のために全く爲方のない者になり了せてゐたので、その受ける養老金さへ直接子供の手へ渡されるといふやうな始末であつた。かやうな苦い經驗は一生消しがたい深い印象を若き音樂家の上に與へた。

一七九二年、ビートーベンは維納へ去つた。傷ましい生活の中にも、流石に若く美しい夢の醸された、靜かなライン河の岸邊を見棄てることの、いかに惜しまれたであらう。『わが故鄕、そこは私が初めて日の光を見たところ、今も昔の如く美しいところ。』と言つて、彼は一生その故鄕を慕つた。

その頃から、彼の天才が漸く芽を吹きかけた。一八九六年、彼は自分の手帳にかう書き附けた。『勇氣！　私の身體の虚弱にも拘らず、私の天才は前途に輝くであらう。…二十五歳！　此の年齢に今私は達した。…此の年齢は人間が彼の全部を發揮せねばならぬ時だ。』彼はまたかう言つた。『私の藝術は貧しき者を救ふより他の目的に捧げられてはならぬ。』（Dann soll meine Kunst sich nur zum Besten der Armen Zeigen）

思想藝術の超然性

忌憚なく言へば、明治初年から今日までに至るわが邦の文壇は泰西の模倣といふことよりほかに多くの意味がなかつたやうだ。勿論、その間には二三の獨創的な作家なり思想家なりが現はれぬでなかつた。しかし、大體から言へば『模倣』の二字が凡てを蔽ひ盡してゐたかのやうに見える。そこで最近二三年來の傾向として、自我本位の生活を力説し、凡ての權威の源を自我に置かうとする思想が稱へられるやうになつた。淺薄な模倣時代に次ぐ一種の反抗として、之は當然に起りうべき顯象であらう。なほ之にはイプセンやトルストイやニーチェの強烈な個人主義的思想、そのニヒリスチックな破壞が大きな影響を與へてゐると思ふ。たゞかやうな思想は其過渡的特性として、建設の伴はない破壞を急ぐところから、其基礎に客觀的實證的の分子を缺き、impressionistic haste and plebeian looseness に陷る弊がある。從つてその根柢に深い誠實と、天才的輝光を藏さない限り、所謂安價な告白に終る場合が多い。

かやうな反抗的傾向は、圖らずも本年中頃から勃發した歐洲大禍亂の影響をうけて、一轉して國民的自覺を促す聲として現はれた。早く歐洲文明の淺薄無自覺な模倣から醒めて幾千年來自國民が作り上げた文明を土臺とした獨特固有な哲學なり藝術なりを建設せよと叫ぶ聲が聞える。これは一應も二應も尤な説である。何れの國民も皆なかうした覺醒期を閲して來てゐる。歐洲での後進國なる獨逸や露西亞では最近にかやうな時代があつた。たゞ茲に一言注意したいのは、國民的特性の表現といふことを除り外面的に見ることの宜しくないとともに、所謂模倣も、論者の一も二もなく卑下す如く、しかく無價値なものでないといふことである。寛大な心で思ふ存分に、選り好みせずに、あらゆる異文明を採り入れられる包容力が貴くないであらうか。世界でもスラブ民族ほど模倣好きな國民はないと言はれてゐる。この邦では所謂思想は羽が生えて飛ぶ。その國民は何にかまはず新らしい物、珍らしい物とさへ言へば、最先に之を鵜呑にする。しかしまた一方から言へば、露西亞國民ほど獨創に富んだ國民はないとも言はれる。模倣と外面的無獨創の奥に、至つて深く隱れて彼等の獨創が潛んでゐる。日本人が例の偏狹な、他人を容れない心から、愛國心といふ美名のもとに、此度の戰亂で急に思ひ附いたやうに、模倣を斥け國民的自覺を促すのだとすれば、その聲には我等は左袒しにくい。立派に他國民の文明長所を採り容れ、之を模倣して我が有となしうる包容力があるならば、それは一國民の大切な獨創と言つてよい。偏狹な排他心は、國民の自負的短所に投じ易いだけそれだけ、最も忌むべき『獨創』である。

しかし模倣の時代から自覺の時代に入るといふ顯象は、何れの國民も幾たびか越さなければならない歴史上當然の過程である。それは廣い文明の流が世界に瀰漫しようとするに當り、率いては斥け、斥けては引く力に從ふ潮のみちひにほかならぬ。かやうな意味に於て我等は今日の思想界の顯象を必然の出來事と見做す。

さて模倣の囚はれから脫却したあとは何處へ行く？　我等は飽くまでも自我を我執し國民性に執着すべきであらうか。自我を貴び愛するはよいが、それが甘い母親の私愛に陷つてはなら

ぬ。眞に深く自我を愛し、國民を愛する者は、必ずその缺點を視る。自己を知るといふことはその缺點を知悉することであらねばならぬ。缺點を知悉するからには之を超越すべく努力せねばならぬ。小自我を超越し、國民性を超越することが、即ち思想家の努力である。今一歩進んでは、彼は時代をも超越せねばならぬ。更に『人間』をも超越せねばならぬ。人間を苦みぬいた擧句、彼は初めて『宇宙の市民』としてその籍を置くであらう。小自我を離れ、民族を離れ、時代を離れ、人間を離れた永久不異の都こそ、思想家や藝術家の理想郷であらう。

淺薄な模倣が不見識であるやうに、固陋な我執は一種の盲目である。前者は一轉して救はれるべきプロバビリチーを有してゐるが、後者の道は進めば進むほど狭められ暗められる。之を光明に導く爲めには、彼の方向を全然反逆して、もと來た道を家路に辿り、再びその發程を新たにする必要がある。元來、自我や國民性は敎へずとも奬めずとも、われ等の一擧一動に附き纏つてゐる。なぜなら、それは永い年代の遺傳と因習の結果であるから。その最も良き特性でさへが我等を囚へる。で、思想家や藝術家は、先づ之等の我執や遺傳から超越した『自由人』であらねばならぬ。

あらゆる思想なり藝術なりは凡そ三つの分子から成立する。第一は表現の努力に纏つて現はれる作家の個性で、第二は時代の要求を育んだその樣式、第三はこれ等の外装につゝまれた内部の本質即ち眞である。そのうち、第一第二は主觀的分子であるが、第三は客觀的分子で萬人に共通して居り、思想藝術の到達しようと努める最後の目的その物である。

思ふに、我等と自然との間には厚い不透明な幕が下されてゐる。我等の知覺や理智や感情やは行爲のために汚されて、直接自然と接觸する能力を失つて來た。固陋な遺傳と習慣とが自我とか國民性とか時代とかいふ障壁を我等の爲めに作つてゐる。即ち、凡そ人間の有する弱點が寄り集つて、厚い黑い幕を自然と我等との間に張りつめた。若し、或る人があつて、自由にこの幕を透視しうるとすれば、彼は何物にも囚はれない、完全な意味での『自由人』で、彼はその時ありの儘の純潔な姿に於ける自然と接することが能きる。しかし、かゝるは現在の狀態にして、人間に望むことは不可能である。いかなる天才にしてからが、その幕の一部を上げるにさへ、多大の努力を要する。その努力は即ちいろ〳〵の因習や障害に打克つための努力である。人間を超越する爲めの努力である。この努力の有樣が、思想家や藝術家の表現に於ける樣式または個性として現はれる。しかし、彼等の眞の目的はこれ等の努力の外形の奥にかくれた眞その物でなければならぬ。眞はあらゆる我執と時代とを超越した永遠の形である。自我や國民性の上に築かれた眞のあらう筈はない。

十九世紀は懷疑と破壞の時代であつた。舊い眞理と道德と信仰とを振り棄てて、之に代る新らしいものを造り上げる爲めに、各人各國民が荷ひきれないほどの努力を負はされた時代であつた。かやうな過渡の時代に努力その物の過重視せられたことには十分の理由がある。しかし、努力その物が最終の目的ではないのである。幸に今日は積極的建設の時代に這入らうとしてゐる。我等は先代の超人的努力に感謝するとともに、その盲目性、執着性、早急性をば棄てねばならぬ。そして眞の意味に於ける自由人として、未來の『宇宙の市民』の住む永遠の都を築き上げねばならぬ。

感能のさまざま

近代人の感覺は最早單純な制限された五感ではなかつた。彼は音を見、色を聞くことが能きるやうになつた。心理學者は斯樣な現象を synesthesia と呼んでゐる。卽ち第一次の感覺が同時に第二次の感覺を呼起す意で、二重官能とでも譯すべき詞である。米國のウイオミング大學の教授をしてゐる哲學博士ドーニー孃は幾年か此の現象の研究者であるが、近頃その結果を發表してゐる。

その說に由れば Tonal vision 卽ち光または色を直接聞くと云ふ現象は極めて稀有であるが、Colored hearing 卽ち色の着いた音を聞くことはよくある現象だと謂ふ。或人はその一人の友人の聲を薄色に、他の友人の聲を鷄卵色に聞別ける。また或人は他人の姓名を樺色だとか青色だとか言ふ。或人には母音のみが色着いて聞える。例へば Aの音が黑色だとか紫だとか云ふやうに。また或人には樂の音のみが色着いて聞える。ピッチの低い音は紫色から黑色、ピッチの高い音は青空色から白色と云ふやうに、それから、琴の音は白色、笛の音は黃金色、ヴァイオリンの音は菫色、合奏は虹色だと聞いた人もある。

次に反對に音の見える人がある。或る圖案家は新しい形圖を發見する爲めに、よく演奏會へ出懸ける。例へば彼女は或るソナタを聞いて綠の壁畫を見た。また茶話の席で人々の喋舌つてゐるのを聞いて書籍の表紙の圖案を見た。或人は音樂の複雜な調を一々色で分析して音樂家を助けたと云ふ話もある。

同じやうに味や香を見ることの能きる人がある。或る青年は鹿蹄草を味ひ乍ら其口の中で石竹色を見た。また彼には薄荷の味が暗綠色に、茴香の味が美しい黑色に見えた。

觸感が音になることもある。シンホニーの齒痛と云ふやうに。

二重感覺の最も面白い一例がピアス博士の報告にある。ある若い一婦人は音を味つたと謂ふ。ビーフステーキの聲、バナナの聲と云ふやうに。

○ 前に述べたやうに二重感覺は常習の場合であるが、普通の人でも一時的に斯樣な混感を起すことは幾らもある。殊に感覺の纖敏な近代詩人の作物にはそれが著しい特徵となつてゐる。

スウィンバーンの詩には、『樂の如く聞ゆる光』、『光の如く見ゆる樂』とか、『黃金よりもなほ黃金色せる歌の調べの甘き蜜』とか、『響の香、色の諧調』とか云ふやうな詞がよく出てくる。殊に佛蘭西近代の詩人、ボードレールやヴェルレーヌなどは、殆んど其作の全部が微妙な混感から成立すると謂つても差支へない。シモンズは其著『象徵主義の運動』の中で斯う言つてゐる『ヴェルレーヌでは聽覺と視覺は殆んど全く流通してゐた』と。

フェネカーが先頃音樂家ショパンの傳を書いて、其の音樂を評した詞の中に次のやうな文句がある、『その調は鳩の卵色から空の綠色に變つて我等の眼の前に溶けた。一瞬にして空は許多の小さき星を以て胡椒のやうに振蒔かれた』と。

○ 斯樣な混感ばかりでなくとも、總じて近代藝

術家の感覺は非常に鋭敏になつてゐる。從つてそれがその作に強い色彩と肉感を施してゐる。これがリアリズムの一面である。換言すれば、藝術上の自然主義もその起源の一部分を近代人の感能の進化と云ふことに負つてゐる。

詩人では獨逸のリリエンクローン、小說家ではモオパツサンとトルストイが感能寫實家の優れた代表者である。之等の人の作物はたゞ強い感覺の上にのみ活きてゐる。靈へ行くにも感覺から肉を透して通つてゐる。

モオパツサンは海の上に立つて『その眼や口や耳や鼻から感ずるやうに、その皮膚の全面から感覺を受け入れることの能きる人』の幸福を說いた。

トルストイはセネバ湖畔に佇んで、『自分の眼を通じて靈魂へ流れ込む美の肉體的感覺』を覺えたと言つた。

○

斯樣に鋭敏になり『解放された』近代人の感覺は外に擴がると與に內にも深くなつた。即ち肉と靈とが近づいた、感覺と理性が接觸した。

そこで響のする思想や色の着いた感情が現はれるやうになつた。心理學者の說に從へば、殊に色と感情との間には或る一定の關係がある。赤は戰爭の色、愛の色——即ち刺戟する色、また黃は快活の色、青は沈着の色、綠は希望の色、紫は高貴乃至傲慢の色と云ふ風に。

また母音の響の齎す感情にもおのづから色がある。即ちAは白、Oは赤、Eは青または紫、Uは黑。

○

私は前にも述べたが、近代の機械の發明が我等の感覺を強めて吳れたと云ふことも決して度外視することの能きない出來事だ。例へば、望遠鏡が肉眼の見えない遠い天體の星を見せたり、顯微鏡が微塵な生物を見せてくれたりして、自然に我等の感能を馴らしてくれる。

バーミングハム大學のダルペ教授が今年一つの面白い發明をした。それはセレニアムと言ふ礦物が光に照らされる强度に由つて電氣抵抗を變ずると云ふ理を應用して光を聞く器械を造つたことである。其の機械の構造は電話機に似てゐるので、教授は是に Optophone（光話器）と云ふ名を附けた。

二重感能を有たない我等も之から光や色を聞くことが能きるやうになつた。

ビートーベン（三）

丁度また同じ頃から、最大の不幸が彼の身體に一生の宿をとつた。彼は聾になり始めた。音樂家がその耳を失ふといふほど悲しむべきことがあらうか。彼は堪へざる苦痛を忍んで、幾年かの間、それを隱してゐた。然し、愈々快復の見込の立たなくなつた時、劇しい絕望を以て、これを友達に打明けなければならなんだ。『親愛なる友よ、お前のビートーベンほど不幸なものはない。私の一番貴い部分なる聽感が今私を見捨てつゝある。……凡て私の愛するもの、私に親愛なあらゆる物を捨ててまで、斯のみじめな劫慾な世の中に生き永らへなければならない私の一生はどれだけ悲慘であらう……』『しば〱私はこの身を詛つた。……私は。プルタークから忍從の德を教はつた。能ふことなら、私の運命が私の爲めに具へたものを堪へ忍ばうと思ふ。然し、この廣い天が下にも私ほど不幸な生物があるだらうかと、熟々考へ惱むことがある。……忍從よ。悲しい隱れ場所よ、たつた一つの私の隱れ場所よ。』

愛は、力は土より

M市の一隅にある城山の小高い丘を今私は下りて來た。初夏の陽はもう落ち盡して、たゞその餘光が瞼しい連山の頂を、その雪の峯を薄紫に照してゐた。眼の下の街々は僅かに全體の輪郭だけを殘して、次第々々に灰色の空氣につゝまれて行つた。

妙に心の落着く夕暮であつた。私は徐かに足を運んだ。別に行き逢ふ人もないのに、殊更迂路をして、白い野薔薇のところどころ咲いてゐる小徑を擇つて歩いた。『別に急ぐことはない。急いだつて同じことだ』

かうした淋しいやうな、なつかしいやうな、一種絶望的な、或は落ちつき拂つた考が私の心を私の歩みにつれて牽いた。次第に私の眼には涙が浮んだ。少年の頃によく經驗したことのあると同じやうな純な敬仰の心がふと燃え上つた。その時自分の頭に『生命の故郷』といふ詞が一つの尊い啓示か何かのやうに閃いた。なつかしい詞だ。久しく忘れてゐた詞だ。少年の頃よく稚い詩を作つた折に屢々使つた詞だ。

生命の故郷！

然うだ。私がこの頃來求め苦み、尋ね喘ぎてゐた道の方向を示してくれるのはこの詞よりほかにない。

私はこの三四年來人知れず苦んで來た。自分相當の懊惱を重ねて來た。

『おまへの苦みはおまへの自墮落の結果だ、自業自得だ』

かういつて私は斷えず自分の半生の放埒な徑路を悔んだ。恐らく世間も朋友も親戚もさう私を視てくれたに違ひない。物質的に私は憐まれたに違ひない、そして責められたに違ひない、笑はれたに違ひない。私は十分にそれを自識してゐた。否、それよりも以前に、私は自分を自分で笑つた、憐んだ、悔んだ、そして責めた。

この兩三年來の私の生活は自ら鞭つ生活であつた。自分で自分を責めた擧句、私は自殺の心をさへ起した――或時は江州の片田舍で、或時は京都の旅舍で、また或時は九州の旅のはてで。私は死ぬべくあせり、同時に活きるべくあせつた。

しかしこんな無益な告白が何になる？　人は私を薄志弱行の徒と笑ふであらう。ディレッタントとも嘲るであらう。

が、徐かに意識するにつれて、その頃の私の懊惱には自墮落の結果以外、實世間との交渉以外、もつと深い、もつと根本的な、生命の推移につれて必然的に來るべき或物が存在したことを知ることができた。私の年齡は四十の坂にかかつてゐた。

人が四十の坂を越す頃から、當然踏まねばならない一つの運命がある。それは一生のうちに二度とない大きな危機である。その時我等の肉體にも精神にも、徐々たる然し深甚な、犯すことのできない組織の變化が起る。我等の肉と心とは一度壞されて更に新しく築かれねばならぬ。それは神聖な生命苦である。物質的にはどうすることもできない運命の必然である。

私のその頃の懊惱には、確かにかうした必然の分子が含まれてゐたことを、私はおぼろげながら知りそめた。私の苦みはやゝ溫められた。

私は半ば運命に身を任せ、半ばは自ら苦み上げねばならぬといふ覺悟と智慧とを得た。

「何うするものだ。迷ふなら迷へ。徐かに歩むがよい。益のない苦みをするな。』こんな宿命的な考にも誘はれた。私は急に老人じみた心持を懷くやうになつた。

それから此田舍へ引込んでから約一年半を過した。

私の心は自然に『土』に愛着を持つやうになつた。

薄暮の氣のひし〳〵とせまつてくる小徑に、暫くの間私は茫然と立ち盡した。私の眼には、涙が浮んで、私の胸はこみ上げてきた。私は聲を揚げて泣くか叫ぶかしたかつたが、しかしできなんだ。三四年來苦んで求めた物が遂に來たといふやうな喜びがあつた。この兩三年の懊惱も決して徒勞ではなかつたといふやうな感謝の思ひも湧いた。『生命よ、わが故鄕よ、なつかしき自然よ、溫かき土よ、おん母よ、大地よ』といふやうな禱りの思想がリテラリイに私の胸を突いた。凡ての生命の、愛の、力の源なるこの大地のこの土を踏みしめて我が立つあひだは私は了まれた者である。

智慧は徐かに來る。苦み惱み果てた喜びに、育まれて智慧は徐かに來る。思へば人生の經驗のさゝやかな一片でさへ智慧の肥料とならないものはない。

でも苦しかりし我が最近の生活よ。更に驚くくべきはその醜き堆積の中より育て上げられし今宵の淸き華よ。

私は大地に跪いて土に接吻したかつた。しかし僅かに野草の莖の一片を取つてそれを口に當てた。

私は濃い夜色の中に立つてゐた。幸に空は晴れてゐて、星の光が僅かに四邊を照して吳れた。私は知らず識らずに或る野寺のうしろに當る墓地へ出た。

私はまた暫く其處で立ち盡した。その墓場には野薔薇が繁つてゐた。折から一段と脊の高い瘠せた莖の頂から、一つの白い花が蕚のまゝ音もせずに落ちた。小さな平和の死よ。これも自然の運行の一部である。から私は思つた。幼少年の頃から夢のやうな思ひ出が私の頭の中で繰返された。嘗て讀んだ書物の中のさまざまの人物までが次々に私を訪れた……

バザロフ！ 勇敢なりし汝の一生よ。私も或る時代には汝の如く強く行ふ人でありたいと思つた。今もその空想は私を離れない。しかし今宵の私の心のムウドに沁々と親みをはこぶものは汝の死である。汝の埋められた露西亞の遠い片隅の一寒村の墓地の光景は今もありありと私の前に浮ぶ。努力、死、自然の冷淡、生命（親と子）の矛盾と愛――これ等のものの關係を汝の墓ほど直截に談るものはほかにない。しかし何にも增して汝の墓からうる我等の感銘はかうである――『その墓に埋れた心が、何れだけ熱情的で罪深く、また反逆的であつたにせよ、そが上に咲く花は無邪氣の眼で我等に視入り、その眼は永遠の調和と無限の生命とを我等に談る』

バザロフよ、汝は遂に土に歸つた、そして汝の魂を土が溫め、汝の土を汝の魂がヒューマナイズした。

なつかしきエミリイ・ブロンテ！ 彼女は眞の自然兒であり、忍耐強いそして忠實な運命の奉仕者であつた。短命な彼女の生活は殆んどその故鄕なる沼地で過された。何れだけ彼女はその地に、その自然に強い愛を捧げたか。何れだけ彼女の生活が野生の小兎に似てゐたか。彼女は暇さへあれば何時も沼のほとりにたゝずんだ。彼女ほどに熱情的な愛着を以つて草木禽獸に

親んだ者はなかつた。彼女は幼少の頃からその日課なる散歩の歸りに、屢々ひな鳥や子兎を掌の上に乘せてなつこく談りながら歸つた。彼女は小鳥の言葉を解することができたと信じてゐた。それだけが彼女の一生であつた。彼女は Mother Earth そのものであつた。

然したつた一つの彼女の形見である『ワザーリング、ハイツ』を繙く者には何れだけ強く深い人生の經驗が、この不幸な、嘗て一たびも戀の囁きさへ耳にしたことのない少女の胸の中に潛んでゐたかといふことがわかる。それから、彼女には何よりも——凡ての情熱を超えての——強い宿命觀があつた。それは凡てを自然の懷に任せる野獸のそれに似てゐた。

忘れることのできないのは『ワザーリング、ハイツ』の最後の一節である。強い戀と嫉妬との一生を終つた敵味方の三つの墓は互に並んで建てられた。『私は穩やかな空の下で、これ等の墓を廻りながら徐かに歩いた。私はいばらの下に舞ふ羽蟲の姿を見た、そして小草を越えて吹く柔らかな風の音を聞いた。で、私は訝つた、何人が此の靜かな土の中に眠る人々に安らかでない睡眠のあるといふことを想像しえたかと』

生命の推移、運命の輪廻、それから來る永遠の調和——それを最も深く思はせる處は墓地である。『生命の戰はたゞ無益に戰ふばかりではいけぬ、汝は知られぬ神の前にひざまづくことをも知らねばならぬ』といふ詞の意味を強く教へる處は墓地である。ハンブルな靜かな心で墓地へ來る者には、溫かい『あきらめ』の教訓が與へられる。それには慈母の懷に抱かれた幼年の思ひ出に等しいものがある。かうした瞑想によつてのみ我等は『土』を知る。そして土の智慧から眞の愛と力とが湧く。

こんな考に耽りながら私は多時立ち盡した。野薔薇の小さな白い花の幾つかが星の光に愈々鮮やかに浮いて出た。

私の眼からはもう涙が乾いてゐた。私は家路をさした。しかし急がなんだ。

『急いだつて何うするものだ。急ぐことはない。……迷つてもいゝ。明け方までに歸ればいい』

かういふ考が矢張私の心にあつた。私の足の下には堅い、確かな、それで溫かい土がある。私の踵をとほしてその土のもつ深い喜びと沈靜とが私の脈搏に通ふ。私の徐々たる歩みの一歩々々には私は深く／＼大地の懷に抱き込まれるやうな氣がした。私の吸ふ露けき空氣は地の胸から出る乳だ。今宵わが『母』は贅澤に生ひ茂つた草の葉に、その上に置く露に、その根元になく蟲に——あらゆる物にあふれてゐる喜びで私の魂を牽きつけようと企んでゐるのだ。星は天の戶を開けてしんみりとして夕暮の曲の音を奏でてゐる。

一種の甘い悲に醉ひ惚れて、私は風の落ちた薄暗の小徑をとぼ／＼と辿つた。私は自分の家へ歸れるだらうか。土の精が今宵私を誑して他界からの親しらしい挨拶で私の魂を奪はうとするのではなからうか。

私は疲れた足をひいて漸く自分の家へ辿りついた。床をのべてそして靜かに身を橫へた。私は強ひて思ふまい、また強ひて祈るまい、私の感謝の道は別にあらう。

私は今夜、慈母のやうに甘えることのできる神を發見した。私の弱つた魂にあなたは祈禱の義務を免して下さるだらう。あまつさへあなたは私の疲れた眼の上に安眠のヴェールを曳いて下さるだらう。

今私は眠る。四肢にはなほ快い土の脈搏

が通つてゐる。よしや私の瞼が閉ぢ、私が無感覺の域に這入らうとも、私の五體は、魂は——彼の大地が贅澤にはぐくむ草木の呼吸とともに、彼の大地が靜かに永遠に掩き葬つた百千の靈魂とともに未來永劫に渉つて可能なる無限無數のまだ生れない生命とともに、さては地の喜びを頒つ空の星とともに、汪洋たる生命の諧調を合すであらう。（大正六年七月）

ビートーベン（四）

猶ほ一つの堪へきれない不幸が續いて彼を訪問つた。それは失戀であつた。

彼はその昔、故鄕のライン河の岸邊で、可愛い娘のロルヘンを戀したことがある。その子は間もなく彼の親友ウェグラーの妻になつた。そして三人は一生非常に仲の好い友人として交際した。こんどの彼の情愛の的はグリエッタと呼ぶ少女であつた。彼はあの有名な『月光の曲』をデディケートして、彼女の名を不朽にした。

『私はいま平穩に暮してゐる。……或る親愛な少女の情がこの變化を齎した。彼女は私を愛する、そして私は彼女を愛する』と、當時の彼は友達に書き送つた。然しその幸福も長くは續かなんだ。案外にも彼女は一種のコクェットであつた。で、散々に彼を惱ました結果、愈々見棄てて了つた。

不幸の日につゞく幻のやうな幸福、その幸福の僞善であつたことの知れる瞬間の悲み、悔み、恥辱！流石の彼も運命のこの殘忍に堪へ得ないで、死を決した。そして故鄕の兄弟へ當てて遺言を書いた。

その時、恐ろしい力が彼の全身から湧き出した。天才の誠實力！これほど強いものが世にあらうか。『私は經驗から話をするが、私の不幸に於て私を支へて來たものは唯一の德である』と、彼は言つてゐる。

『私の身體及び理智の力は益々發達する。……私は自分の青春が之から始まるのではないかと訝む。私の前には日毎に私の生涯の目的が近づきつゝある。…若し私が聾でなかつたら、私は兩腕に全世界を抱き込んだであらう。……私は睡眠のほかには少しも休息しない。……せめて、半分だけでも、私の耳が助かつてゐたら。然し、それも最早私は苦にしない。私は運命の劍を鈍らせる。それは最早私をどうすることも能きない。もし私が千の生涯を一つにして送り得たら、どれだけ面白からう。』

この愛、このなやみ、殊にこの強い鋼鐵の意志が、いろ〳〵な曲譜となつて現はれた。そしてそれはゲーテやトルストイを恐れさせたほどの力を持つてゐた。ビーマークは彼の曲を聞きながら斯う言つた。『もし俺が時々これを聞くことが出來たら、俺は非常に勇敢になれたらう』と。

かやうな曲ぐべからざる意志の下には、聖い愛の泉がいつも湧いてゐた。ビートーベンの性質にはプラトニック、ラブの或物があつた。で、この『獅子』は、まだ〳〵戀に落ちた。一八〇六年、彼はテレゼ・フォン・ブランスウィック女史と婚約した。然るに、この平和もまた永くは續かなんだ。彼等は互に相愛しながらも自然に遠ざかつて了つた——恐らくビートーベンの自尊心から、彼は一生彼女の溫かい記憶を離さなんだ。

湘南養痾錄

この地へ來てからもう二十日餘りになる。暖かい海岸の空氣が病人にとつて何れだけベネフイセントであるかは、健康である者にはわからない。昨夜の雨が晴れて、今朝は一段と日光の暖かさが感ぜられる。

朝夙く起きて海岸を散歩した。部屋へ歸つてみると親しい友達からの一封の手紙が、綺麗に片付けられた机の上に乘つてゐる。ふと披いて見てゐるうちに、私の眼にはいつとなく涙の玉がたまつた。何うしたのだらうと不思議に思ふまもなく、それは早や兩頰を傳はつて、ぽとぽとと膝の上に落ちた。

近頃はよくかうしたことがある。病氣が私を感傷的ならしめたのだ。と思ふと、その手紙を卷き了らないうちに、私はもう喜悦の滿足の中に漬かつてゐた。かうした正面から溢れた日の光をあび、開けるだけ開いた胸へ海の空氣を惜氣もなく呼吸してゐると、自分ほど健康でそして幸福な者はないといふ氣がする。私は今朝ほど生命を謳歌する氣分に醉はされたことはない。

陽は徐々として東から西へ動く。つくねんと頰骨をついたまゝ、私が自分の影法師に視入つてゐるうちに、一時間二時間と平安の時が過ぎる。私の晝寢は次第にユートピアの中へはこばれる——

この柔かな日光の下で、この暖かい大氣の中でお互が生活するからには、人間は健康でそして幸福であるべき筈だ。お互が貧乏したり、お互が病氣にかゝつたり、お互が憎み合つたりするといふことは、あるべからざる道理だ。お互はなぜ愛さずにゐられよう。それが今の世で行はれてゐないのはお互の心得違ひからだ。皆んなが心を合せてさういふ氣になつてみよ、お互のユートピアは明日からでもたやすく實現されうる事だ。ほんとにさうなのだ。さう考へられない人間は彼等のもつた貴い想像力を漏し盡した人々だ。人間が日光の下で幸福でそして愛する間は、お互が自然の壽命を樂むほかに、病氣などいふもののあるべき筈はない。殊に貧乏の現象ほどエフエメラルなものはない。

この考への世の中に徹底しない間は、百の僞科學的社會主義も人間を救ふことは出來ない。こざかしい論理と憎惡とで社會を改めようと企てるほど無謀な事はない。

それにしても看よ、この日の光を！ 何といふ美しさだ、何といふ清澄さだ！ 今私を照してゐる光は誰をも照してゐるのだ。今日輝くばかりでなく明日も輝くのだ。

◇

森戸助教授の休職事件は大分世間で喧しい問題となつた。それにつき私も卑見を述べて昨日某紙に送つて置いた。それは常平生から同じ方面へ筆を執つてゐる者の缺かすべからざる義務だと信じたからである。

私はその中で學術思想の自由がなぜ尊重されなければならないかといふ理由を說き、よしんば思想の自由を外部から威壓的に抑へようとしてもそれは到底不可能である事から世間の新思想を惧れる原因を說き及び、最後に今日の事件に關する當局者の措置の可否に言及した。

その中で私は山川東大總長の採られた態度をも非難したことである。平生から高德の紳士と目されてゐるだけに、總長に對する世間の非難

は場合に輕いやうである。然しこの場合、我等が當然氏に要求すべきだけの誠意を、氏がこの問題の解決に當り用意してゐなんだといふことは、氏に對する非難の十分な理由となりうるのである。私はそれを遺憾に思ふ。

その事から引いて、私は誠意といふことに就て考へた。誠意とは、かく世間で信じてゐるやうな固定的人爲道德の概念ではなく、人間の活動の源をなす一種の力である。それは生命の太い髄の一本である。一口に誠意といふが、之には限りない深淺の度合がある。誠意は汲み盡せない井戸だ、掘れば掘るほどその先きがある。カーライルであつたか、天才とは無限の忍苦であると言つたが、私に言はせれば、天才は無限の誠意であると言ひたい。天才の達しがたい如く誠意は達し難いものであり、高い天才の稀有である如く誠意は稀有である。

一の職責又は事業に當る者が、その任に適當であるかどうかといふことは、その人がそれを果すに要するだけの誠意、―少くとも最小限の所要誠意―を有してゐるかどうかで決定させる。若しその人がその所要誠意よりより以上の誠意を有してゐれば、多々益々よいのである。―彼の小説家はあの小説を書くに十分なだけの誠意の量を有してゐたか』、かの畫家はあの題材をこなすに十分なだけの誠意を有してゐたか』、『かの政治家はその位置にふさはしいだけの誠意を有してゐるかどうか』…と、かう我等は問ふべきである。その人の技量を言はずしてその人の誠意を言ふべきである。誠意はあつたが力が足りなんだといふのは、甚だ屢々世間で使はれる悪い口實である。自己の力を顧みずして其事に當るといふ事が既に最初から誠意の缺乏を裏書きしてゐる。彼は世間師か、さうでなければ愚物である。

山川總長は、今回突發した思想の自由問題につき、常平生から十分の誠意的考慮を費してゐたであらうか、どうか。それがこの事件につき彼に就て問ふべき核心事である。原總理は過去の宰相として或は傑出してゐたかも知れぬ。然し現在の如き急進的諸問題を控へてゐる時に、猶是等の事を同情的に諒解しうるだけの切實な誠意が彼にあるか、どうか。之が我等の問ひたいところである。

◇

何といふシンプリシティの缺乏だ。
何といふ疎惡な表現だ。
何といふ蕪雜の論理だ。
何といふ情味のない抽象だ。
何といふひとりよがりだ。何といふ傲慢だ。
そして何といふ偏屈だ。

近頃の勞働問題や社會問題に關する所謂專門學者の議論の多くをみて、私はかういふ反感に打たれる。そして自らの足りないところを想つて注意する。

或場合はかうも考へる。そこに誠意と眞さへあれば、くだ〳〵しい説明は不用ではないか。實行界の事に就ての餘計な論理や分析やは却て行爲の妨げとなりはせぬか。つまらぬ事柄にまで分析を用ゐるのはブールジョアの悪い癖ではなからうか。行爲を助ける結論、冷却の過程を經ない綜合(よしんばそれが荒削りにせよ)、實生活の情味の失せない理想―それが今の時代には一番大切ではないかと。

◇

世間に位置と財とをえてゐる人達が、自己の位置にさしさはりのない範圍で、世間といふものを眼下に見さげながら、得手勝手にするお座なりの議論ほど、馬鹿らしくそして腹の立つものはない。殊に今日の急轉的時代に這入つてから、それが一しほ目立つやうになつたのは、一種の喜劇である。

私はこの喜劇の最好標本として、大隈侯がその機關雜誌の卷頭に毎月掲げてゐる議論をあげる。

◇

世の中に貧しき者、虐げられてゐる者の多數があるとして、かやうな人々の生活に先づ第一に同情を拂ひ、そしてかやうに不公平に仕組まれてゐる社會を一番に呪詛すべき素質を有する者は誰であらうかといふに、それは疑もなく藝術家でなければならない。

藝術家は孤立であるべきだといふ。然しそれは彼等が世間の事を知つてならないといふ意味ではない。今は勞働問題のやかましい時代であつて、社會の大多數の人間がどれだけ貧乏な奴隷的位置に置かれてゐるかといふ事實が、赤裸々に議論される時である。その事實を當世の藝術家が知らぬ筈はない。知つて彼等がその爲めに深い同情と惱みとを起さない筈はない。若し事實がその反對であるとすれば、私は彼等の製作を觀るまでもなく、藝術家としての彼れの素質を疑ふものである。

私は現代に於ていろ／＼の形を採つて現はれつゝあるところの、藝術家や文學者の似而非高踏主義を憎む。

◇

好奇を愛する出來心はある、技工を見別けるだけの賢さはある、感情の精細を好むディレッタンチズムはある。然し今の特權階級や知識階級の間に眞に生命に necessary な藝術を求めるだけの純な熱心を有する者があるだらうか。『理解することは死を免れることである』とロダンの言つた詞の意味のわかる鑑賞家が一人でもあるだらうか。

かうした荒れ果てた畑地に立派な藝術の生ひ立ちを求めようとするのは無理である。この失望は誰よりも先に藝術家自身が感じてゐる筈だ。

然らば我等は之を求めて何處へ行くべきかといふに、それはまだ一度も試されない第四階級の處女地のほかはない。彼等の規範されない理智と强烈な本能とは、我等の望みを繋ぎうる十分の潛熱を有してゐるかにみえる。彼等こそ未來の新藝術の命とすべき公衆である。で、この點から觀ても、今の社會の改造を熱望する第一人者は藝術家でなければならない。

◇

昨夜東京から或友人が來訪してくれた折に、二人の間にこんな話がとりかはされた。

『近頃の世の中は火の附くやうな騷ぎだが、事實近いうちに何事か起るだらうか』

『さあ』

『君の考では一番惧いのは何だ』

『失業問題だね』

『それはまたなぜだ』

『失業とは喰へるか喰へんか、生きるか死ぬかの境の事だからな。さうなると人間は惧いよ。社會主義などいふ理想の閑問題ぢやないからね』

『實際だ。所が失業問題が來るかね』

『來るとも、今の經濟界はせつぱつまつてゐるぢやないか。資本家も勞働者も世間を繕つてはゐるものの、どちらも內心はこは／＼だ。一番困つてゐるのは小工業の持主で、今が彼等の手一ぱいだ。この上の賃金値上か不景氣でもあらうものなら、彼等はばた／＼と將棋倒しだ。そこで經濟界にひと恐慌あつて見たまへ、それこそ全國に夥しい失業者を出すにきまつてゐる。つまりこの物價騰貴の世の中に喰へない奴が澤山出來るといふことだ。喰へないとなると人間は恐ろしいぜ。幾萬の餓虎を野に放つやうなものさ。君の知つてゐる通り英國などでもどれだけ戰後の失業問題を注意したかわからん位だ』

『ところが、原首相は議會の答辯でから言つてゐるぜ、國民の大多數をなす農民が裕福だから、それほど心配はないつて』

『そこが政治者流の短見といふものだ。つまり社會心理を知らないのだ。なるほど數にしたら農民が多からうが、十町歩に一人づつまかれてゐる人間と、一坪に幾人かづつつめられてゐる人間とでは騷擾力――これは俺の造語だ――に霄壤の差がある。そこでだ、社會の安寧といふ見地から言つたら、都會は田舍よりも餘程重く見らるべきだ。今の社會に物價調節が焦眉の急だといふ意味は、何も都人士に阿れといふ意味ばかりでない。おまけに社會問題の喧しい今日であつてみれば、一たん何處からでも火が出だしたら、それこそ只では濟まんからなあ』

『いかにも尤だ。然し君、極端な物價調節をやれば不景氣が劇しくなる。つまり失業を增加するといふものだ。どちらにしても動きのとりやうが無いといふ事になるね』

『さあ、其處だ、俺がいつも言ふのは。どうしたつて今の社會は八方から塞がつてゐるのだ。之と言ふのも、全く資本主義が極端まで走りすぎた罪にほかならんのだ。かうなればお互に協同して、何とか一方の血路を開くよりほかには道がないのだ。然るに世間の頑迷な連中は、社會が一生懸命に求めてゐるその血路をさへ塞がう〳〵としてゐるのだ』

◇

人の心の中の祕密ほど、美しく又醜いものはない。

治療といふ事を一心にして、そのほかには大した慾を持たない現在の自分の胸にさへ、いろいろの空想が過ぎる。それを注意してしさいに觀察してゐると、驚くべき樣々の事がある。或時は私は卑しい感情を以て、海岸の散步で逢つた女の事を思つた。或時は私は卑しい手段を弄して金を儲けた夢を見た。或時は私はひとりで顏を赧めるやうな野心を企んだ。或時は私は親しい學友の失脚を喜ぶ氣分にもなつた。

からしたもろ〳〵の空想は――その中には美しいものも雜つて――斷えず、二六時中、我等の腦裡を往來してゐる。人間の裡には雜多な本能が休みなしに働いてゐるのであるが、それが外へ現れず、多くの場合意識にさへ上らずに消えて了ふのは、我等が之を抑壓し馴れたからである。

誰が一人の女の心に祕密に去來する百千の夢の影を捉へえたであらうか。

誰が人間の本能のどん底をのぞいて、そこに呻く怪奇なデモンを正視しえたであらうか。

想ふに我等の行爲は、我等の本能の萬分の一をも充たしてゐないであらう。

之が人生である。かるが故に人生は虛僞である。

我等は我等の本能を矯めるよりも之をレファインすることを努むべきではないか。矯められ屈せられた本能は、いつまでたつても變化される時期がなくて殘る。

せめて一人の尋常な正直な男の夢の百分の一でも、一人の貞操な女の欲望の十分の一でも、自由に表現されうる時代は來ないものか。

今の道德はあまりに窮屈な智慧を我等に授けた。その爲めに天才といふ狂人でない限りは、自分の心の中へさへまともにのぞき込む事を許されない。

◇

それにつけて想ひ起すのは、基督の姦淫の戒だ。あれほど恐ろしい、嚴しい敎がほかにあるだらうか。基督でさへもほんたうにあれを守りえたであらうか。

然るに世間では――何といふ白々しい虛僞だ！――この敎は守り易いもののやうにして說

かれてゐるではないか。

之に反し一方には、或る程度まで案外に實踐の可能な無抵抗主義が、癡人の夢の如く取扱はれてゐる。

姦淫の教の實行不實行は外部へ現れないが、無抵抗主義は直に行爲で判斷されるので、かうした矛盾が起る。そして永い道德的慣習から受けた我等の無感覺性は之を怪まうともせぬ。

◇

神祕は生命の奧に潛む大きな力である。耐久性のある行爲は神祕の背景を持たんでは生れない。マルクスでも、佛蘭西のベロチエでも、愛蘭のジム・ラアキンでも、其出現はみな勞働運動の歷史に於ける神話である。

然るに今の政治や社會運動にはミスチシズムがない。それ故に力が微い。今の政治家や勞働運動者に才幹の足りないわけではない。彼等はその才幹の背後にあつて彼等を動かす生命のミスチシズムを缺いてゐるのである。

使徒と煽動家との相違はミスチシズムの有無にある。

◇

慾から、
理論から、
野心から、
憎惡から、
倦怠から、

今の勞働運動を率ゐる主要な動機はこの五つを出でない。

然しこの運動が燎原の火の如き恐ろしい勢を以て世界に瀰漫しつゝある所以は、是等のものを超えて、氣運が支配するからである。氣運は――氣運のみが――革命を造る。

そして、氣運はあらゆる物よりも賢い。氣運は『ベクトル』である、それには方向がある。

◇

佛蘭西革命の際、あの國の貴族たちは弊履の如く爵位を放棄した。維新の初め、三百諸大名は自ら進んで藩籍を奉還した。當時の事情から彼等の心事を推すに、彼等はその出來事に對し、決して後悔してゐなんだであらうと思はれる。それどころか、彼等の多くは奉公犧牲の喜びを感じその或者は窮屈で物憂い在來の生活から脫出することの幸福を想像したであらう。

爵位や財產やは、貧乏と同じく一種の桎梏である。人間は爵位や財產に對して深い愛着を持つてゐるやうに見えるが、時の氣運が之を促す場合は、案外容易にそれを棄てうるものである。この棄てることの行爲は、彼にとつて決して苦痛ではなくて、一の喜びである。解放の喜びである。

◇

センチメンタリチイといふ事を、わが國の文壇などでは非常に嫌つてゐるが、センチメンタリチイもその強く純なるものは生命力の偉大な現はれである。

沼の月、森の香ひ、ラインの酒、そして戀、戀、戀……これがナポレオンの出る前の時の獨逸であつた。無殘な戰敗によつて、これ等の戀歌の一つ〳〵は悲壯な愛國の歌と變つた。ゲーテからシルレル、フィヒテへ――シルレル、フィヒテからシャーンホルスト、トライチュケへ――シャーンホルスト、トライチュケからビスマークへ、は皆順當な道である。戀歌の獨逸と軍國主義の獨逸との間には、根本に於てさほどの距りがない。何れも強いセンチメンタリチイの現はれである。

◇

獨逸の古い歌の中には、人間世界――"Menschenwelt"の共愛の觀念が、かなり深く浸み渡つてゐたと、或る紹介の本に書いてある。果してさうだとすれば、若し戰後の獨逸にこの

眠つてゐた思想が芽を吹き返すことのあらばといふ望みは空ではない。

◇

社會主義には三つの時代がある。

その第一期は、ありきたりの人道友愛の觀念に準つて、現在の惡い社會を昔の淳朴な狀態へ復さうとした運動である。モリスの描いたユートピアなどがそれであつた。

その第二期は、昔への夢の空であることを知りながら、それでも進化の法則を信じて、未來に望を繫いだ時代である。所謂科學的社會主義がそれであつた。

その第三期は現代から近き未來に亙り起りつつあるそれであつて、過去を棄てて未來に滿腔の希望を懸け is の力よりも would be の力に信賴する時代である。

第一期のは過去崇拜の社會主義、第二期のは現在過重の社會主義、第三期のは未來の憧憬の社會主義である。

第一期の社會主義者は聖雄の單獨的出現によつて斯樣な時代が到來するものと信じた。第二期の社會主義者は民衆の背景を重く見乍ら、矢張民衆の上に立つ官僚的司導者を必要とした。彼等は上から下へ或る組織を與へようとした。然るに第三期の社會主義者は民衆それ自らの英雄的行爲を信じてゐる。そして下から上へ進む組織を考へてゐる。

◇

私の讀んだ或小說の中に、『彼は Nature の gentleman である』といふ詞があつた。之は何でもない文句かも知れないが、私にはひどく面白く感ぜられた。貴族型の紳士、官僚型の紳士、ブルジョア型の紳士、オクスフォード型の紳士、慶應型の紳士……これ等の紳士はざらに在るが、自然の紳士は尠ない。『紳士』といふ動物の一種氣取つた、柔かな、その實人を馬鹿にした何々『型』ほど癪にさはるものはない。それは一種の威壓と殘忍と、同時に怯懦と卑劣との標象である。それは彼等の精神的空虛と追隨心を赤裸々にさらけ出した看板である。

◇

愛蘭のジム・ラアキンは、六歲の時から種々雜多な辛い仕事に從事して來たといふ經歷を有する、純粹の勞働者上りのトレード・ユニオニストである。彼の自傳の中に次のやうな話がある。彼は或時船夫として乘り込んだ船の中で、技師と爭つた件により鎖に繫がれて監禁室へ打ち込まれた。

『全、ひどい夜を俺は過した。幾百もの鼠が俺を取卷いて、手の爪と足の爪を殘らず食つて了つた。今でも俺はその時の事を考へると身の毛が顫動つ――』

と彼は曰つてゐる。今の勞働運動の蔭にはかういふ悲慘な出來事――我等にはとても想像もつかないやうな――が數知れず積まれてゐるのである。

◇

學問思想の獨立を保護する方法として、私は敎育及言論を司る機關を今の司法制度のやうに獨立させたら如何かと思ふ。その局に當る者は公選され、同時に終身官として保護される。

◇

趣味の上では貴族主義、理性の上では社會主義といふのが、今の思想家の大部分を支配する人生觀である。

ほんたうの社會主義が世の中に徹底するまでには、之に對する理論を要するばかりでなく、それが文藝をも宗教をも要するのである。

經濟學者をして獨占顏に社會主義を振廻さしてゐる間は、まだ社會改造の氣運は淺いのである。

◇

民衆文藝勃興の前にくるものは、民謠や傳說の復活であらうと思ふ。

日本には昔から印度や支那の思想を借りて來た教訓歌は澤山にある。併し民謠のよい物は尠ない。然るに今度また官選の處女會の歌とかいふのが出來た。おめでたいことである。だがこんなもので民衆の教化が分厘でもできると思つたら、それこそこけの骨頂だ。

◇

組織の改造は Reconstruction であり、人心の改造は Remaking もつと適切に言へば Re-birth である。今の社會に於ては兩者は深い關係を有するが、然しこの二つは全く性質の違つたものである。然るにそれを同類のものででもあるかのやうた取扱つてゐる論者がある。

前者は外からの干渉によつても出來るが、後者はいかなる場合にも自發からでなければ生れない。

◇

ロマン・ロオランの『ジャン・クリストフ』の中に、彼の親友のオリヴェエが、つく〴〵クリストフの顏を眺め乍ら、から言ふところがある――

『クリストフよ、其處にからして私の前に坐つてゐるお前の中にはどれだけいろ〳〵の物が潛んでゐることだらう。……お前の前途には何んな事が起るかわからない。まだまだ何んな危險と何んな悲とを突きぬけてお前が進まなければならないことだらうと、私は心配してゐる』

人の運命は天から降りかゝるものでなくて、その人の性格の中で釀されるものである。性格は悲劇の主人公である。

考へてみれば、かずにも足らぬ私自身の上にでも、この五六年このかた思ひも設けぬいろいろの出來事が持上つた。それもこれも皆んな自分の性格が產み出した卵である。その卵を自分勝手に孵化させては、喜んだり悲んだりしてゐる。現に自分は今割合に難儀な病氣にかゝつて、この海岸に養生に來てゐる……

一昨夜來、雨が降つて、海が荒れて、枕につく浪音がすさまじい響を立ててゐる。凡ての物は崩れるのだ、そして其のあとへ新しい浪が起るのだ。

今朝起きてみると、空はからつと晴れたが、浪はまだ高い。間近い沖には鰤漁の船が十幾つか威勢よく並んで、皆大漁を知らせる赤旗を立ててゐる。海が荒れゝばこそ海の幸もあるのだ。

『赤旗』はどこの國でも冒險と幸福との象徵であるとみえる。わが生命よ、お前も荒れよ。おれはクリストフを羨む。したが、おれの前途をばどんな運命が待ち伏せしてゐることか？

◇

人間同士の爭ひには掛引があり、妥協があり、理窟がある。然し自然との戰は命懸けで全力的である。前者は人を狡猾くするが、後者は人を勇壯にする。

生存競爭は進化の一條件であるといふ理由によつて、人間同士の鬪爭を許さうとする論者は、最も廣い天地を見ることの能きない擔板漢である。

コロンブスのやうな偉きな冒險者は、都會の眞中にある他人の地所をねらひはしなんだ。ミレーは佛蘭西の片田舍のみすぼらしい一軒家の中で、新しい藝術の王國を拓いた。スピノザはヘーグの裏店で眼鏡の玉を磨き乍ら、思想のオーステルリッツ戰を戰つた。自然の中に我等の耕すべき野はまだいくらでもある。かうした戰こそ人類の爲すべきほんたうの生存競爭である。

余の態度

（上）

私は一昨年から昨年にかけて、トルストイとニーチェを評傳した。十九世紀後半が產した代表的二大偉人として、新舊の精神的世紀を分つ時代に生れたラトスマンまたは先驅者としての彼等の生活に或る意義を發見すると云ふことに非常の興味を感じたからである。で、私は尠くとも私の最善を盡して其事業に從つた。

嚢にトルストイを評傳した折に私が世間から受けた非難のうち、私の心に殘つてゐるものが二つある。それは私の紹介したトルストイが眞實のトルストイでなくて唯だ著者卽ち私の勝手に造り上げたトルストイであると云ふことと、私が何もかも彼の生活と事業に同情して殆んど盲目的に彼を受け入れたと云ふことである。此度のニーチェ論に就ても恐らく同じやうな非難が世間から起ることと思ふ。由て私はここに聊か自分の採る態度を辯明して置かなければならない。

私が今日批評家、否人間として立つ態度は廣義の『行爲主義者』である。世の中に絶對の眞理とか「至上命令とか云ふもののあるやなしやを私は知らない。知らうとも思はない。寧ろそれを無益の詮索だと思つてゐる。路傍の石塊一つでも若しもそれが私の今日の生命に利益だつたならば、タイモン、オブ、アゼンスの抱いて泣いた石のやうに、それが人生の情なり道理なりを私に敎へて吳れるならば、私はその石を何よりも尊重したいと思ふ。ウイリアム・ジェームスは天上に安座まします神樣の事を一種の無賴漢だと言つた。またロマン・ローランは斯樣な神樣を、自分は金屬の高樓に倚りながら自ら火を點けた町の燃えるのを見てゐる暴君ネロに譬へてゐる。我等の實生活と密接な交渉のない『絶對』や『眞理』は我等に用事のないばかりか却つて我等の生活に害をなすものである。ニーチェの言つてゐるやうに、人間の本能には善い本能と惡い本能とある。それと同じく我等の感情にも正當な感情と邪な感情とある。例へば感傷的な心の働きは確かに病的感情で世紀末の徴候と見做すことが能きる。更に一歩を進めて見ると、我等の理性にも善い理性と惡い理性とがある。人間の生命に切實な關係のない思想は、一種の過勞的理性の遊戲で、これまたデカダンの徴候と見る外はない。空虛な『絶對』や『眞理』がそれではないか。かくて人間は本能に於ても感情に於ても理性に於ても過敏過勞に失する結果が、潑剌たる生命と遠かり、その原始的意思を磨消し、その創造力を減ずることとなる。

斯樣な意味から、私は在來の所謂客觀的眞理を無視するばかりでなく、之を輕蔑し呪詛し唾棄しようとする。我等が眞にその影響から免れる爲めには我等は平氣ではゐられない。之に對する強い輕蔑を我等の持藥とせなければならない。なぜなら、我等自身がその慢性病に罹つてゐるのだから。

私は絶對の眞理を斥けて行爲主義を主張する。今日現在我等の生命に有用なものを何よりも尊重し愛惜する。昨日の眞理は最早今日の眞理でなく、今日の朋は或は明日の敵である。親兄弟の眞理も私の眞理ではない。私の『眞理』でさへ私の眞理ではない。

て、眞理は個々人の專有物である。また眞理は絕對の自由を要する。その自由に向つての誠意、努力が偉人や天才の事業である。彼が現在と自己の眞理の自由な所有者である爲めには、彼は愛惜する過去を棄てねばならない、天賦の自我を研かなければならない、彼の最も愛する隣人——その近親、朋友、愛人——に背かなければならない。否、彼は或は是等の物を冷遇し侮蔑し排斥しなければならない。トルストイやニーチェの解脫の道に斯樣に苦しい經驗を必要とした。更にあらゆる天才の一生の過程が何よりも先づ這般の努力に於て窺はれるであらう。

その人の性格はいかなる眞理を必要としたか。彼はいかなる形式に於てその眞理を獲得しまた發表したか。彼はその爲めに奈何云ふ經驗と戰を重ねて其處に到着したか——と云ふことが批評家の先づ見なければならない要點である。

然しまた或る藝術乃至哲學から其『眞理』を拾ひ出すのが批評家の役目ではない。彼等は矢張彼自身を其處に發見するのである。言ひ易ふれば彼自身の眞理を天才の事業を通じて見るのである。即ち批評家は二重の鏡に照して彼の姿を見るのである。彼の事業は第二義である。然し彼はその爲めに卑下さるべき理由を有たない。要は鏡の善惡に由るのであるから。『この書に觸れる者は一個の人間に觸れるのである』と言ひうる者はワルト・ホイットマンばかりではない。「あらゆる偉大な哲學者の書物は渾なその數だけの人間と等しいものだ。それ等の一々の書物の獨特な然し言ひ現はしにくい根本的の香ひに對する我等の感じが、即ち我等自身の安全な哲學的敎育の最も微妙な成果である』とウイリアム・ジェームスが其著『プラグマチズム』の中で言つてゐるのは至言である。批評家が或る藝術乃至思想の中に求めなければならない物は第一にその作家の『香ひ』であり、また彼が讀者に傳へなければならないものは矢張彼自身の『香ひ』である。易言すれば、彼はただ或る作品を通して得た彼自身の心靈の物語をすれば可い。即ち彼は奈何してその中に彼自身を發見したか、どの點で彼自身の心の平和に達する光を見附けたかと云ふことを忠實に語ればよい。斯うして彼は其讀者に同じ熱情を頒ち、彼等自身を同じ興奮のもとに發見させるが任務である。

如上の理由で私の紹介したトルストイやニーチェが私自身だけのトルストイやニーチェであると云ふ非難は當らない。唯だどれだけ私が批評家としての任務を盡し得たかと云ふ點が問題である。

第二の非難は私が餘りトルストイの事業性行に同情を有ち過ぎて、その一切を稱揚し肯定した傾のあると云ふことである。

私の態度を根本的に語れば斯うである。私は何よりも誠實の德と云ふ物を人一倍に重く見てゐる。實際、世の中の人は誠實が天才と比肩することの能きるほど尊く且つ稀な德であることを知らない。誠實には奧底がない。勇氣も信念も、一切の强いものはみな誠實から出る。天才とても誠實と相待つたものでなければ完全に發達した例がない。で、思想藝術の健全性の證據は著者の誠實の度合に據る。その著書に若し眞正の勇氣と信念がなく、誠實の德に據つて立たなんだならば、その事業は彼の狹隘な偏見の爲めに壞され、彼の人生に對する恐怖心または安易な樂天觀の爲めに汚されることであらう。なぜなら、彼の弱點が何であらうと、彼の人生に於ける失敗が何であらうと、それが必然彼の思想藝術に感染しなければ已まないからである。古來、何れだけ多くの天才がこの德を

缺いた爲めに汚されたであらう。近い例はオスカー・ワイルドがさうである。

誠實が健全な男性的天才を産むや否や、女性的天才と稱ばるべき天才は無い筈である。なぜなら誠實と天才とは殆んど同意義であるから、天才の生活のほかには眞正の誠實は求められないのであるから――ダンテやビートーベンやトルストイやニーチェのやうな生活のほかには。

斯の世には誠實の生活を除いた勇氣の形はない。誠實はあらゆる代價を拂つて現實の世相を見る。在るが儘に運命に向ふ。『泣きも笑ひも怨みもせずに』唯だ觀じ、そして其運命を愛する。ニーチェの所謂 Amor fati は誠實のみ知る勇氣である。その所有者は安逸な樂天觀には滿足しないであらう。彼は現在の自己を最も憎むであらう。であるから誠實の行く道は戰と開拓の道である。常に屈せざる不斷の努力である。

誠實のある所には何者も許されなければならない。失策も蹉跌も矛盾も、罪惡すらも。私の觀たトルストイやニーチェの一生は偉大な誠實の連續であつた。彼等の生活と思想とはその爲めに何時も必ず justify せらるべきものであつた。突飛とも見える彼等の教義も行動もその人には必須の理由から産れた正當な徑路であつたのだ。

私の思想は之からいろ〳〵に變つて行くであらう。私はその事を望んでゐる。私の書いたあらゆる物は私の過去であり、別れる者に對する私の感謝である。然し私の根本の態度だけは依然として棄てずに行きたい。

（下）

私は前述せる如く自分の態度を告白した中で、自分は行爲主義者であると言つて置いた。それがまた世間の誤解を招いたと見えて『日本及日本人』の誌上で三井甲之氏からいろ〳〵の非難を承つた。一體、全く立場の違つた他人の議論を批評すると云ふことはそれほど功果のない事である。批評の批評ほど無味乾燥で不必要な事業はないのである。

氏の議論は餘りに疎笨で狷介で、其要領をうるに苦むのであるが、要約すれば、私が行爲主義者であるからは、ジェームスの信者であるに相違ない。然るにジェームスの哲學は淺薄な『現世利益の宗教』だ、『功利的個人主義』だと謂ふ攻撃に歸着するらしい。

之に對して私は斯う答へるほかはない。私は行爲主義者ではあるが、ジェームスの祖述者ではない。私はその誤解を防ぐために、特に『廣義の行爲主義者である』と言つて斷つて置いた。三井氏の言はるゝ如く、行爲主義は決してジェームスの專賣ではない。古くから行はれた思想で、その事はジェームス自身も『古き說に名けた新しい名』だと稱してゐる。しかも、ジェームスの哲學は三井氏の解してゐるやうに一個の主義でもなければ宗教でもない。彼のは行爲說である。然るに私のは行爲主義である。この點から、私と引合に彼を攻撃されるのはあの哲學者にとつて氣の毒千萬である。

要するに三井氏は私をもジェームスをも同時に誤解してゐる。私を誤解された點は氏と私との態度の根本的相違にあるからまだしも可いとして、其ジェームスに對する態度は、全然不親切か然らざれば無能力であると斷言することが能きる。

三井氏はジェームスの哲學に對して殆んど無理解である。彼の提唱した『行爲主義』の何たるかを知らない人である。私はこゝに改めてジェームスを紹介する暇を持たないし、また氏からプラグマチズムが『最も獨創を缺く思想であることは哲學史上明かな事である』と云ふ珍奇な

斷定の說明を聞かうと思ふほどの好奇心をも持たない。たゞ、私の斷つて置きたいことは、ジェームスの行爲說は彼の認識論の一部分で、ゲーテの所謂『始めに行爲あり』の說明に過ぎないといふことである。彼は在來の唯心派や唯物派の哲學者が取扱つた『眞理』の誤を正して、人間の知識は唯だ行爲の屬性であり、行爲の跡を追うて生れた物であるといふことを證明したに過ぎない。卽ち理智の與へる『一つの知識は其働に由つて構成せらる』といふ事實を述べたに過ぎない。彼はベルグソンと同じやうに、今迄の哲學者や科學者が萬能視した人間の理智の働をたゞ行爲の方便と見做して其働を局限しようとしたのである。で、彼は更により廣い世界——『意識の流』の世界——を宗敎的經驗界に見出して直觀說を立てた。卽ち氏の所謂『具體的に人生を觀る』境地を敎へてゐる。要するにジェームスの所謂行爲說は彼の哲學の消極的方面で、彼の抱持した主義でも說敎でもないのである。

それだのに三井氏は之をジェームスの宗敎か何かのやうに解し、しかも其プラグマチズムを功利的亞米利加魂の所產だと斷定してゐるのは甚だ見當違ひの邪推である。ジェームスは知識が行爲から生れた物であることを說いてはゐるが、行爲——若くは三井氏の解するやうに功利——の爲めに知識を曲げろと決して說いてゐない。甚だしい誤解ではないか。『平安朝の現世利益の宗敎』と比べられたり、『迷信』の一種に數へられたりしてはジェームスも一寸返事に困るであらう。

殊に滑稽なのは、三井氏がジェームスの『宗敎的經驗のさま〴〵』を今昔物語の御利益ばなしに例へてゐることである。斷つて置くが、この書物の硏究目的はジェームスの行爲說とは全然關係のない一個の忠實な科學的硏究であるといふことである。それまでをプラグマチズムの攻擊に引張出されては痛み入る次第である。

圖らずジェームスの辯解に時を移したが、說明上已むを得ない。で、前にも述べたやうに、ジェームスのは行爲說であるが、私のは行爲主義である——しかも廣き意味の。ジェームスは哲學上論で行爲說を採つたが、私は對人生の態度に於て行爲主義を主張するのである。

私の行爲主義の根柢は(一)自然無價値論(二)向上論から出發する。

自然無價値論とは、自然はそれ自身に於て何等の價値をも持たないといふ說である。絕對に支配する『神』も、『至上命令』もこの世にはないといふ信念である。在來の哲學や宗敎の說くやうな賦へられたる善惡眞僞を認めない意である。卽ち a-moral, a-truth を信ずる排理想者・である。總ての價値はたゞ人間の造るものである。人間は創造の自由をもつて自己の價値を決定しなければならない。彼は自己の眞理と自己の道德に生きなければならない。彼は無の中から有の價値を創造するのであるから、大膽な經驗者であることを必要とする。生命の增進に補益するあらゆる生活の形式を求めて進むのが彼の運命である。卽ち彼は自己の生命の增進に必要な價値を創造する行爲主義者である。

然るに人間が完全で且つ平等であるならば、あらゆる人類は同じ價値、永劫不變の價値を定むることが能きるのであるが、我等は缺點を以て產れた動物である。常に完全を欲求する努力者である。ニーチの詞を藉りて言へば、動物と超人の間に架せられた橋梁である。

自己向上(selbstauflebung)が人間の運命である。彼は完全を求めて進む。卽ち彼は自分の缺點を補足して進む。然るに我等の天職は各人に由つて千差萬別である。甲の缺點と乙の缺點との間には大小の差があり、種類の差があ

る。換言すれば各人の求める完全はその人に依ていろ／＼に違はなければならない。要するに人間の進に普通の道程はない。自分の生命行爲を益する眞理のみが、その人の眞理である。斯様な意味で私は行爲主義者であると言ふのである。

即ち私の理想とする行爲主義者は、總ての價値及理想の排斥者である。恐ろしい偶像破壞者である。彼はたゞ自分自らに適した眞理を求めて進む。それ故に彼は大膽な經驗者である。自己完成、自己向上の努力が彼の運命である。

然らば斯様に定義された行爲主義が到達すべき道はいづこであるか。勿論、創造と進化は無限であるから、彼には究極の目的はない。彼は進めば進むほど、彼の向上の欲望は益々盛んであるべきである。しかし彼の自己完成の欲望は低級な功利主義ではなくて或る境地に達するまでの手段に過ぎない。即ち彼が自己の爲めに苦しむのは、やがて人類の爲めに苦しまうとする一手段に過ぎない。ツァラツストラは其周圍に集めた偉人に言つた、『汝はまだ私を喜ばせるだけ十分に苦しまなんだ。なぜなら、汝は唯だ汝自身の爲めに苦しみつゝある。汝はまだ人間から苦しまなんだ』と。然り、勞苦して先づ自己から解脱し、次に人間から解脱するのが行爲主義の極致である。

三井氏は親鸞の言ふ『虚無の身無極之體』を說かれてゐる。私はその境地のいかなる物かを說明なしには知ることが出來ない。然し果してそれが一般佛教の說くやうなエクスタシーの境であるならば、それは實人生を忌避した、生命力に乏しい、消極的の住所ではあるまいか。何れにしても、若し斯様な境地を假定するとして、之に到達するに要する努力は矢張私の說くやうな行爲主義に由らなければならないのであるまいか。若しそれがショーペンハウエル流の意志否定（佛教の說く所は主にさうである）を目ざすものとすれば、それは明らかに私の行爲主義よりも消極的で安價なものである。

序に今一つ言つて置きたいのは三井氏が國民性を力說して居られることである。國民性が個人の性行に強い根底を有つことは素より論ずるまでもない。しかし努力に由つて因習的國民性を超脱すると云ふことも亦自己完成の一方便で、私の所謂行爲主義である。古からの天才の努力が明らかに之を示してゐる。茲に超然とは放棄の意志でなくて征服の意味である。ゲーテやニーチェは北に生れて南を戀した。トルストイは露西亞から世界に出ようとした。三井氏の說くやうな民族主義こそ明らかに一種固陋な功利主義に墮しはしまいか。

ビートーベン（三）

それからは、ずつと孤獨の生活が續いた。而もそれは泣くやうな貧窮と不遇の生活であつた。彼は靴がなくて外へ出られなかつたりした。『私は殆んど乞食のやうだ』と彼は言つてゐる。或る有名な曲の出た時などは、七磅しか賣れなかつた。

戀も野心も去つたあと、彼に殘されたものは、たゞ力のみであつた。その力の喜びと、之を表現する必要とが彼を專領した。一八一二年に、彼を見た者の言葉に、『いかなる皇帝も曾て彼の如く自分の力を意識しなんだ』と言つてゐる。

新社會主義への道

―ソリダリテの說―

一

「ソリダリテ」といふ詞は多くの讀者には耳新しいかも知れぬが、茲にわたくしが原語のまゝでそれを標題に据ゑたからとて、何も自分の狹い學識を鼻にかける氣が毫頭あるわけではない。近頃はデモクラシイとか、プロパガンダとかいふ外國語がそのまゝ通用する世の中である。わたくしはそれ等と競爭してこのソリダリテといふ私の敬愛する詞を一般に流行させたい野心をもつてゐるのと、今一つはこの詞の有する廣い深い意味に適當する譯語がどうも私には發見されないので已むをえず一時原語のまゝ使用したのである。

ソリダリテの大略の意味は依存とか相互間の責任關係とかいふことである。天體間の數知れぬ星は、それ〲に太陽系を作つて、引力の法則のもとに、一絲紊れないソリダリテを形成してゐる。蜜蜂の巢の中には自然の分業の法則によつて立派なソリダリテが行はれてゐる。また一つの有機體に就て見るに、各細胞各機能を美妙に聯絡してゐるところのソリダリテがある。

人間の集團生活である社會に於てはこのソリダリテの法則は特に重要な因子であつて、之れによつて人はその家族に、その種族に、またその祖先と子孫とに、汎くは人類全體に、それぞれ込み入つた關係に於て結び附けられてゐる。ソリダリテの反對は無秩序である。されば凡ての物がこの宇宙に於てその處を得る爲めには、どうしても何等かのソリダリテの法則に從はなければならない。

わたくしが茲に述べようとするのは、かやうに廣いソリダリテの法則のうち、特に人間社會に行はれてゐるところのソリダリテの現象に就てである。社會的ソリダリテの哲學はほんの最近の建設であつて、殊に之が應用方面は今後の研究に俟つべきものが多い。わたくしの意見では、唯今の社會で喧ましい『改造』の問題に正當の解釋を與へるであらうところの唯一の思想は、このソリダリテの觀念よりほかにはなからうと考へる。で、わたくしがこの問題を提げて讀者の前に立つのは、決して閑人の閑事業ではなくして、實は逼迫した時事問題に對する解決の端緒を見出さうといふ主旨である、この意味でわたくしは讀者の忍耐を望むのである。

昨今の外電は頻々として歐米に於ける勞働不安の情報を齎してゐる。滿五箇年に亙つた世界大戰が漸く片附いて、不滿足ながら國際聯盟さへ成立つた今日ではあるが、世界は平和の聲に醉はうともしない。英國に於ける鐵道從業員の大規模な同盟罷業に次いで、先頃からは同じやうに大規模な炭坑夫の同盟罷業が米國を騷がした。これ等の罷業は幸に一時鎭壓された形ではあるが、それが今少し長く續けば國を危くするほどの重大な革命的素質を具へてゐた。そのほか小規模の勞資紛爭は世界のあらゆる國々で頻發してゐる。社會主義者の多年待ち設けた『階級鬪爭』は漸く實行の期に入つて、大きな社會革命が、私共を脅かしつゝある。若しこの革命の進路にして一歩を誤るならば、

その結果は露西亞の實例が示す如く恐るべきものである。

所謂階級闘爭はマルクス以後の社會主義の重要な信條の一つである。初めはそれが過激な思想家の好戰的空想に浮び、一つには實現の遠い社會的理想を象徴させない爲めの必要の刺戟劑として殊更に力強く稱へられたのであつた。然るに今回の戰爭による深甚な人心の變動に伴つて正統社會主義者でさへ待ち設けないほどの階級闘爭が罷業、怠業等の形で急に勃發しかけたので、之に對する用意のない社會は殆んど啞然として手の出しやうのない有樣である。ベルサイユの檜舞臺で一世一代の役を演じた立役者たちも、この社會的新顯象に對しては最早古い時代を代表する無能な政治家であるかに見える。

階級闘爭の是非はどうか、その是非はとにかくとしても、既に一たん勃發しかけた闘爭を成るべく正しき方向に導き、それが陥り易い殘虐から救ひ出すには、何うすればよいか。これ等の疑問に對しては何人も一通りの理解を有することが目下の急務である。わたくしが玆に社會的ソリダリテの思想を說かうとするのは、かやうな必要に應ずる爲めである。

二

獨立と依存、闘爭と調和は、社會といふ大きな車を動かす二つの力である。引力に對して斥力のある如く、電氣に陰陽のある如く、人と人、國と國との間に獨立があるによつて依存があり、闘爭があるによつて調和がある。生存競爭とソリダリテとは生物界の進化を支配する二大法則であるが、殊にそれが人間社會の現象として現はれる場合は、自然力のほかに意識といふ特殊の自發力が加はるので、これ等の法則は非常に込み入つた相を呈するのである。人間は先づ各自にその個性に從つて發達し、十分にその才能を充實して外界に働きかけねばならぬことは勿論であり、且それは止みがたい自由の要求であるが、他方にはこれ等の個人はお互に相依り相助けて社會全體の平和のために協力する必要がある。自由の要求は義務の觀念と並存し、自利の本能は正義の思想を隨伴する。凡そこれ等の事は昔から道德的に言ひ古された思想ではあるが、この意味をもつと廣く深く解釋し、之が必然性を强めるために、新しい科學と哲學との力を藉りるといふことは此の上もなく必要である。概說すると、今の世の中は生存競爭の思想が勝ち誇つて、相互責務の思想が極度に閉息させられてゐる極端な個人主義と自由主義とが榮えてゐるのも、資本主義が專横を極めてゐるのも、その結果として勞資の反目を來したのも、階級闘爭の險しい空氣が世界を脅かしてゐるのも、みんなその爲めである。で、私は玆にソリダリテの觀念を力說する前に先づ順序として生存競爭の意義を釋き、それが今の實社會にどんな影響を及ぼしてゐるかを見なければならない。

古くからあつた生存競爭の思想が特に人の注意を牽き、それが近代的の色を帶びて普く行はれるやうになつたのは、ダーウヰンに依つて學理的に證明せられてからである。丁度それはプラトン以來の社會主義的思想が、マルクスになつて初めて科學的の說明をえたので、急に世人の注目を牽いたのと同樣である。ダーウヰンがその『進化論』に於て企てた事業は純粹な生物學の研究であつて、動物界に於ける進化の因子として生存競爭の現象を發見したのであつたが、それが當時の思想界及び實際社會に與へた影響は非常に大きなものであつた。なぜかといふに、それは當時の社會に行はれた流行の氣運と合致して、それに火を點けたか

らである。偶然にも彼の進化論はその時代の社會哲學に一番適當な說明を投入した形であつた。

凡そ進化論ほど通俗的に世間に浸み入つてゐる學說はない。殆ど誰でも朧氣ながらその大體觀念を攫んでゐない者はないほどである。それほどこの學說は時代の人心にうけたのである。この一事は最も雄辯に近世の社會的風潮を物語つてゐる。

かやうな次第であるから、茲に事新しく進化論の說明を持出す必要はないが、唯物の順序として梗概だけを次に掻い摘んで置かう。ダーウキンによれば、生物の生殖作用は甚だ濫費的である。從つてこの地球上には安全に生存するだけの餘地がない。そこで所謂生存競爭なる現象が行はれる。同じ種屬のうちにも環境に應じて生存に適する性質を賦與された物とさうでない物とがあり、競爭の結果前者は生き殘つて榮え、後者は死滅する。之が適者生存の理法であつて、つまりこの世界は自然淘汰により優者のみの占領する世界となるのである。かやうな生存競爭は時を追つて持續的に行はれ、その結果各種屬は次第に優越の度を增すのが卽ち進化である。進化は生物界の一般法則である。

人間も亦一の生物である限り、進化の理法は私どもの社會をも支配すると見るのが妥當である。で、私どもの社會が進步改善される爲めには、生存競爭と自然淘汰とは必要な成行であり、强き者の富み榮え弱き者の苦しむのは正當な現象であると見做される。かうした哲學は進化論から來る當然の歸納であつて、女々しい仁義論を押し退けるだけに有力な理由がそこにある。殊にこの學說は十八世紀から十九世紀初期にかけての中產階級の勃興に伴つて現れた產業上の『レーゼエ・フェール』(自由競爭主義又は無干涉主義)の說と合致したので、愈々その勢ひを煽つたのである。その詳しい事は次回で述べよう。

三

ダーウキンの進化論は純科學の產物であるので、それが時代の氣運と合して其の勢ひを煽つたといふことは偶然の事のやうに思はれるが、併し是は一般皮相の觀察である。ダーウキンの學說がその時代の思想を煽動したと見るよりも、その時代の思想がダーウキンの學說を產んだのだと見る方が當を得てゐる。實社會とは所緣の遠い純粹科學であつても、時代を支配する活思想の爲めに冥々裡に深い感化を受けるといふことは在りうべき事であり、寧ろさうなければならぬ事である。ダーウヰンの進化論はその根本命題を時代思潮に藉りたもので、卽ちそれは尠くとも一つの囚はれた偏見であると言ふと、世の中の人は私が好んで奇說を立てるやうに思ひ、或人は神聖な科學に對する冒瀆であるやうに感ずるかも知れぬが、之は歷史の說明する事實であるので致方がない。

歐洲の社會に於ける封建制度の破壞は中流階級といふ新しい階級を產み出したが、この階級の活動した最初の新天地は商業であつた。商業に於て最も必要なものは契約の自由といふこと、當事者相互の權利の對等といふこと、並びに私有財產權の確立といふことである。從つて中流階級がこの方面に於て成功し次第にその勢力を社會に殖やすにつれて、個人の自由(その實は契約及び蓄財の自由)といふことが、恰も『自然の權利』である如く受取られるやうになつた。機械の發明による產業革命は更に中流階級を富ましめて、愈々資本主義の跋扈する世の中となつたので、この優勝階級を守護すべき哲學として『レーゼエ・フェール』の思想が起つたのは、さもあるべき事である。

資本主義の二つの産物は『レーゼエ・フェール』の社會哲學と物質尊重の人生哲學とである。私どもの幸福に最も缺くことの能きないものは物的資財であつて、それはこの世の中で何よりも先に獲なければならぬものだといふ人生哲學は、今の人類の九分九厘までを動かしてゐる處世訓である。之と並んで『レーゼエ・フェール』の社會哲學は、殆ど萬古不易の眞理である如く、近代人の心に刻み附けられた。『レーゼエ・フェール』とは自由競爭主義又は無干渉主義であつて、産業上に於ける個人の絶對自由を主張し、その競爭に對しては政府も社會も干渉するものでないといふ思想である。なほそれには契約及財産に關する無制限的自由の意味をも含んでゐる。

近代思潮の本流なる『レーゼエ・フェール』の主義を勢附ける爲めにいろ〳〵の思想が之に向つて流れたのであるが、それを一々説明するのは私の任務でない。ホッブスが先づ生存競爭の世態を道破し、アダム・スミスやリカルドは經濟學説の上からそれを承認するに努めた。更に我等はマルサスの人口論を見落してはならない。彼の目的は當時の英國に於ける貧困の現象を説明するにあつた。で、彼は先づ社會に於ける各個人間の劇しい生存競爭と之に伴ふ商業主義とを是認した後に、勞働を以て一種の商品と看做し、勞働が十分の報酬を得ない理由は、勞働者階級が生殖過多に流れる結果供給が需用を超える爲めであるから、之が救濟策は出産制限によるほかはないと論じた。この説がどれだけ當時の商工主義に勢援を與へ、勞働苦使に對し資本家に好個の口實を設けさせたかといふことは説明するまでもない。

マルサスの人口論は一の經濟學説であると同時に一の生物學説である。社會の成員間に行はれる必然の生存競爭といふことがその思想の根柢をなしてゐる。で、是からダーウヰンの進化論へはほんの一足である。事實に於てダーウヰンはマルサスから多大の影響を受け、そこから彼は生物界に於ける適者生存の汎い概念を得た。先にも述べたやうにダーウヰンの學説が偶然にも自由競爭主義の時代に投じたのではなく、かやうな時代の空氣がダーウヰンに感染して彼の發見を容易ならしめたのである。

四

トルストイが或る處で次のやうな意味の事を述べてゐる。その昔奴隷制度の行はれた時代には王侯や貴族の特權を擁護し且つ大多數の人間が貧乏な生活を營んでゐる事實を説明する爲めに神の意志を以てした。そしてかやうな生活の不公平と悲慘とは人間の手ではどうすることも能きない不可抗な法則の結果であるといふ意味の人生觀が打ち立てられた。その爲めに無數の書物が書かれ、そして無數の説教が述べられた。然るに近代に入つてからは、斯うした説明では自覺した多數の者を滿足さすことが能きなくなつたので、丁度あつらへ向きに新しく流行り出した科學の形式を藉りて、より込み入つたそしてより巧な新説明が發見された。その爲めには矢張り書物が書かれ無數の説が稱へられた。六ケ敷い論理によつて『不易』の法則が編み出された。そして今日在るが儘の社會狀態はどうしても斯くなくてはならぬ必然の現象であるといふことが安全に辯護されたと。

之はいかにも奇警な説のやうではあるが、併し其中には十分の眞理が含まれてゐる。近代の新興勢力たる中流階級の商工主義を是認する爲めにアダム・スミスやリカルドの經濟説が起りマルサスの人口論が起つたところの事實を見るならば、『科學』の名に中毒しない人間をして、容易にトルストイの説に傾聽せしめる。實社

會とは割合に縁の遠いダーウキンの學說と雖も亦その譏を免れない。だと言つてわたくしはこの偉大な天才の眞理慾を疑ひ、彼が殊更に時流に阿つた議論も立てたのだといふのではない。眼に見えない時代の氣運は陽炎のやうにその時の空氣の中を織り込まれてゐて、その中に生存する者はどうしても之を避けえないといふのである。ダーウキンの學說の礎をなす根本觀念が無意識にその當時の流行思想から發芽したといふことは當然の出來事である。之をトルストイ流に言ふと、彼の學說は時の權勢を擁護する爲めに生れたのだと解される——彼の意志の奈何に拘らず。

その時代がどれだけ進化論的學說の發生の氣運に充實してゐたかといふことは、ダーウキンと殆ど同時にウアレースが生物進化の法則を發見し、ダーウキンとは獨立の方面からスペンサアが進化哲學を創設したのを見てもわかる。この點からいつても、この學說が決して時代の影響を蒙らなんだとは謂ひえないのである。

時代精神の影響を受けて生れたダーウキンやスペンサアの進化哲學は、今度は反對に時代精神を加勢し煽動して、愈々生存競爭、適者生存の理法を眞理化した『レーゼエ・フェール』主義は不易の鐵則である如く受取られた。斯くの如くにして十九世紀資本主義を勢ひに任せて殆ど無制限に增長さしたのである。

之に對しやがて反動の起るのは當然である。よしんば自由競爭の精神は是認するにしても、位置と財產とを最初から有する者と是等を有せざる者との競爭は公平と謂はれようか。猶ほその上にも、時代の法律は富みたる者厚くして、反對に貧しい者にハンヂカップを附し、愈々以て勝敗の數を明かにする傾きはないか。大多數の者にとつて『否』は餓死を意味するところに何處に契約の自由があるか。マルサスの人口論は眞理であると假定しても、第四階級の出產制限のみが之に對する唯一妥當の救濟策であらうか。『レーゼエ・フェール』主義やリカルドの經濟說は果して正しいものであらうか。人類の進化の爲めには大多數の者は極度の貧困をも忍ばなければならないのであらうか。

かやうな疑問に對して擧げられた反對の聲の中でも、マルクスの社會主義は最も有力なものであつた。

五

マルクスは、中流階級の自由競爭主義、商工主義、又は資本主義に對してどんな態度を採つたか。彼は當時の社會哲學なる『レーゼエ・フェール』の思想を如何に解釋したか。彼の思想とダーウキンの進化論との關係はどうか。それ等の事の大體をわたくしは玆で研べなければならない。

マルクスの社會主義は二本の大柱から成立つてゐる。その一つは彼の資本論であるが、之は主として剩餘價値說、即ち資本の儲ける利潤は勞働の掠奪から得たものだといふ事を證明したのに止つて、進化の觀念とは殆ど關係のないものである。マルクス社會主義が當時の生存競爭說と交涉する點は、彼の說のも一つの基柱たる唯物史觀に於てである。

マルクスの唯物史觀の根本思想は次の如き命題に盡されてゐる。曰く、一の時代に行はれる經濟的生產及交換の方法は必然にその時代の社會組織を定めるものであり、從つてその時代の政治的及精神的出來事の凡てはこれ等の經濟的事實から說明することが能きると。然るに彼の唯物史觀はたゞ之だけにとゞまらずして、彼獨特の『階級鬪爭』說にまで持ちはこばれるで、その點に於て彼の說は當時の進化論的生存競爭說と深い因緣を有するのである。彼によ

れば、人間社會には何時も二つの相對立する階級があつて、その間に鬪爭が行はれる。希臘の公民と奴隷、羅馬の貴族と平民、中世紀の親方職工と被傭職工といふ風に、一方には壓制者があり、一方には被壓制者があることにより、兩者の斷えざる鬪爭の結果、終には經濟組織の革命を招致して新しい社會が築き上げられる。『過去の凡ての歷史は階級鬪爭の歷史にほかならぬ』。で、近世の中流階級を主とする社會は、かくして封建制度の破壞の上に建てられた。現代の歷史は正に中流階級卽ち資本家と第四階級卽ち勞働者との鬪爭である。

マルクスはこの鬪爭を非常に極端に觀察した。『我等の時代、中產階級の時代は階級的反目を明白にした。全般としての社會は次第に二つの大きな敵黨、直接互に相對するところの二つの大きな階級、卽ち中流階級と第四階級とに分れつゝある』と。彼の眼にはこの讐敵的二階級が、徹頭徹尾利益の相反する二階級が截然として映じた。妥協をゆるされない無產被掠奪階級卽ち勞働者と有產掠奪階級卽ち資本家との間の溝渠は一日增しに深くなるばかりで、その結末は恐ろしい『大革命』を以て終るよりほかには道がない。それが歷史である、それが必然の論理である。マルクスはかうした歷史の運命を悲しむのではなくて、却てそれを奬勵してゐる。

『彼等共產黨員は公然と、彼等の目的が唯だ現存せる凡ての社會狀態を强制的に顚覆することによつてのみ達せられるといふことを宣言する。かの支配階級をして共產的革命の前に戰れしめよ。第四階級はその桎梏のほかには失ふべき何物をも持たぬ。彼等はこの世界を征服せねばならぬ。萬國の勞働者よ結束せよ』と。

マルクスの階級鬪爭說は一片の學理であるほかに、社會主義の宣傳であり、剩さへ深い感情の發露である。中流階級殊に資本家に對する彼の憎惡は非常に根深いものであつて、この感情は純粹經濟學の著述であるところの彼の『資本論』の每頁にさへ隱見することができる。彼の一生を費したこの述作の動機は科學的好奇心よりも寧ろ資本家に對する復讐心にあつたと見る方が妥當かも知れない。

マルクスの階級鬪爭說とその時代の社會學なる『レーゼエ・フェール』說及びダーウキンの進化論とはどんな關係があるか。それを次に述べよう。

六

十八世紀末から十九世紀にかけて興つた中流階級の活躍した壇場は主に產業の世界であつて、彼等の信條が自由競爭主義又は無干涉主義であつたこと、この支配階級のこの處世觀が必然の成行として社會を風靡した結果極端な物質的個人主義が榮え、財產及競爭の自由といふことが一種の『自然權』である如く受取られるやうになつた事は先に述べた。それから、かうした時代風潮はおのづから當時の學說にも深く影響して、ホッブスやマルクスの社會學說、スミスやリカルドの經濟學說を產んだばかりでなく、終にはスペンサアの大規模な進化哲學となり、それが純科學の領域にまで感染してはダーウキンの進化論となつたことも亦先に略述した通りである。

次で私は之に對する反動の先驅としてマルクスの社會主義が起つたことを述べたが、その反動のいかなる性質のものであるかを知る爲めに、特に彼の階級鬪爭說を力說して置いた。それから讀者は彼の學說と當時流行の生存競爭說との關係を略ぼ察知された事と思ふ。マルクスは近代の資本制度に反對し、その哲學なる

『レーゼエ・フェール』主義を攻撃して、一種の共産主義を打立てたのであつたが、彼の思想の根柢は猶進化論的生存競爭説から脱却することが能きなんだ。彼はホッブス流の極端な個人闘爭説に代ふるに階級闘爭説を以てしただけで、依然として社會進化の原理としての生存競爭説をば承認した。そこで彼の學説は中途半端な煮えきらない物になり、幾多の矛盾に陷らないわけにいかなんだ。

當時の社會を風靡した中流階級の勢威、その生み出した社會哲學の壓迫が、ダーウヰンの生物學にまで影響した如く、その社會に反抗して立つたマルクスでさへが矢張根柢の思想は時代の潮流から離れることが能きなんだ。マルクスの唯物史觀はダーウヰンの進化論と殆ど時を同じうして單獨に起つた。この一時はまた時代思潮が時の思想家に及ぼす感化のどれだけ大きいかといふことを語るものであるが、マルクスがダーウヰンに負ふところが少しもなかつたとは言へない。彼は初めヘーゲルの歷史學から進化の法則を學んだのであるが、後にダーウヰンの著書を披いて非常に感心したといふことである。彼以後の社會主義者、例へばフウイエやカウツキイになつては全くダーウヰンの進化論を以て階級闘爭を説明しようと企てたからである。マルクス派社會主義者はダーウヰンの説の信者であつて、生存競爭を社會進化の唯一の法則であると考へてゐるものと看做してよろしい。

個人闘爭に對して階級闘爭を、個人主義に對して階級主義を稱へたのが社會主義である。然るに社會主義の最終目的はこの社會に於ける闘爭の斷絶であるといふからには、人類進化の階級は闘爭にあるといふ彼等の根本觀念とは矛盾するわけである。猶ほ個人間の闘爭を排斥して共産主義まで稱へるかたはら、劇しい憎惡から起り且物質的利慾を目的とした階級闘爭を奬めるといふことは甚だ理に合はぬ。或る社會主義者は之を辯明して『食物の爭ひからより高き價値の爭ひ』へ進むのであるとなしてゐるが、マルクス流の唯物觀によれば『食物の爭ひ』が社會現象の凡てであると看做せるから、『より高き價値の爭ひ』を認めることは、取も直さず自分の根本思想を裏切ることである。

そこで、マルクス社會主義は現代中流階級の物質的個人主義から、新しく眞の社會主義へ進む過程に於ける中間産物であるといへる。それは今の世を毒してゐる極端な唯物主義と生存競爭主義とから超脱することが能きないで、僅かに『有たざる者』の『有つ者』に對する利慾的反目として終つた觀がある。今日の社會を脅かしつゝある階級闘爭が血腥く險惡な色を帶びてゐるのは、かうした主義に根ざすからである。

七

わたくしは以上説いたところにより、近代の生存競爭主義がどれだけ大きな波をなして私どもの實行界と精神界とを風靡したかといふことを明らかにしたつもりである。それは個人間では自由競爭主義となり、國家と國家との間では侵略的帝國主義となり、階級と階級との間では階級闘爭主義となつて現れた。

この風潮を裏書する爲めにいろ〳〵の學説の現れたことも先に述べた通りであるが、何と云つても最も廣く且學術的に之を立證したのはダーウヰンの進化論である。一般生物界に斯やうな深い根據を持つた説が『科學』の名に於て生存競爭の不可避であり、且人類の進化の爲め必須であることを説明する限り、女々しい仁義論を以てしてはとても之を打破ることは能きない。その證據は近代に於ける宗教の無權威と舊道德の敗滅とを見ればわかる。マルクスがこの

勢ひを觀破して『正義、人道、自由などの叫びは幾千回叫ばれたか知れないが、併しそれは不可能の事だによつて、唯だの夢として了るほかない』と言つたのは至言である。そこで彼は競爭に對するに競爭を以てし、物慾に對するに物慾を以てし、壓迫に對するに復讐を以てするといふ方寸に出た。かやうな爭ひの何れが勝つにしても、その結果は恐怖のほかはない。

然らば私どもの社會がこの逼迫した恐怖から免れるにはどうすればよいか。時機は既に遲れたにせよ、焦眉に迫つてゐる今後の社會革命をして成るべくその發露を素直にさせ、その勢ひを緩和するにはどうすればよいか。それには私どもは極端の個人競爭主義を拒否することは勿論、極端な階級闘爭主義をも統制するところの有力な社會哲學を以て今日の人心を支配しつゝある處世哲學に代へねばならぬ。組織の問題の前に人心の問題が來る。組織の改善は人心の改善に伴はない限り無意義である。現代英國の哲人カーペンタアが言つた、『これ等の改造は主として心理的性質のものである――即ちそれは社會組織の變化よりも、人生に對する精神的態度の變化、諸價値に對する態度の變化に負ふところが多い』と。

併しかうした改造は何によつて行はれるか。人生の諸價値に對する精神的變化を來すやうな哲學なり道德なりを何處に私どもは求めることが能きるか。先にも述べたとほり、現代の強烈な競爭說に對し、薄明的な仁義論や、『ねばならぬ』の哲學は殆ど無效である。私ども近代人の良心は昔からの宗教道德が說くやうな愛や犧牲の福音を受け入れるにしても、それがなぜ承認されねばならぬか、かやうな道德はどこから由來するかを確めねば措かない。またカントが『絕對命令』の尊威を敎へてくれたにしてが、コントが『社會的愛』の哲學を立ててくれたにしてが、それさへ事實としての生存競爭の力には刃向ふことが能きない。で、私どもの新しく要する社會哲學は、今日進化論の上に成立つところの闘爭の哲學に對抗しうるだけ十分有力なものでなければならないのであるが、それには私どもの良心ばかりでなく近代人の深い要求であるところの眞理欲をも同時に滿足させるといふことがこの哲學に對する何よりの條件である。即ちそれは、人道的にかくあらま欲しいといふ道德的敎理と、論理的にかくあらねばならぬといふ哲學的推斷とに先んじて、事實上かくあるといふ科學的證明を有したものでなければならぬ。わたくしの之から說からとする『ソリダリテ』の學說がそれである。

生物の進化に於て生存競爭、適者生存の現象は、無上の眞理であらうか。進化は競爭の一事によつてのみ促進するのであらうか。個と個、種族と種族との間の妥協のない劇しい競爭が生物を支配する一元的因子であらうか。之を人間社會にしては、自由競爭主義、帝國的侵略主義、階級闘爭主義はジャスチファイさるべきものだらうか。

わたくしは之から漸く本論に入る。

八

ダーウキンの進化論がマルサスの社會競爭說の感化をうけたことは事實である。併しダーウキンとしては、最初の意志は唯だ動物界に於ける進化の一因子としての生存競爭を研究するのが目的であつた。彼は生物學上の一假說としてそれを用ひた。而して多くの場合に方便として狹い意味で之を使つたことも事實である。併し彼は決して生存競爭を以て進化の唯一の因子であるとは看做してゐなんだ。彼は最初から生存競爭の觀念が、『一生物が他生物の上に依存する事實をも含んだ廣い比喩的意味』で用

ひられねばならぬことを戒めた。殊に彼は晩年に『人間の系統』といふ書物の中で、人間社會ばかりでなく多くの動物の社會に於て各個の間に於ける鬪爭の現象が協同の現象により置き換へられてゐるといふこと、この置換が何れだけその種屬の適存を助成したかといふこと、愛他心はあらゆる生物に共通の本能であるといふこと、生存の最適者は必ずしも強い者や利巧な者に限られないといふことを闡明した。彼はかうも言つた、『最も同情的な成員の大多數から成る社會は最も繁榮し、且最多數の子孫を成育さす』と。

之に由ると、生存競爭を進化の唯一の因子と見ることが決してダーウヰンの眞意ではなかつたことがわかるのである。それと同時に、彼は明かに協同又は依存を以て進化の他の重大因子と認めたことが知られる。不幸にして彼の進化論はその時代の社會思潮であつたところの「レーゼエ・フェール」の哲學の爲めに萬能の武器として曲げて藉りられた結果、狹い生存競爭が生物學の最後の詞であるかのやうに受取られるやうになつた。

ダーウヰンの認めた如く、生物の進化は一元的でなく二元的である。競爭と協調とが同時に都合好く行はれて、そこに初めて進化の事實が現れる。個々の生物の間に自然に又は意識的に行はれる協調、相互扶助、依存、ソリダリテの現象を無視するといふことは、取も直さず『社會』その物を否認することである。狹い生存競爭の上に立つ今日の哲學なり科學なり道德なりは、期せずしてこの大きな誤謬を冒してゐるのである。

相互扶助又はソリダリテの現象は昔から人の意識に上つてゐたのであるが、それは久しき間、主として感情の方面から道德的の形式を說かれたに過ぎなんだ。例の有名なゲーテとエッケルマンの會話の中に次のやうな一節がある。或時エッケルマンの飼つてゐた二匹のみそさざいが籠から逃げ出したので、よく捜してみると、次の日それが駒鳥の巢の中でその仔鳥と一緖に扶養されてゐたのを發見した。その事をゲーテに話すと、科學的意識の鋭い彼は、この事實から深い印象を受けた。そしてエッケルマンに言つた『見ず知らずの他者を扶養するといふこの事實が一般法則として凡ての自然界に行はれてゐることが眞ならば、それこそ幾つもの謎は之によつて解かれるのだ』‥‥かういつて彼は熱心にその事の研究をエッケルマンにすゝめた。『この研究の結果は全く測り知ることの能きないほど貴重なものだ』と彼は附け加へた。

ゲーテの深い眼が見ぬいたこの生物界の大法則は、いろ／＼の理由によつて、他の一面の法則卽ち生存競爭のそれよりは遲れて發見された。換言すれば『社會』の發見は『個人』の發見よりもずつと後であつた。

社會の發見に關しては、コント、ドラモンドなどの學者に負ふところが多いが、併しそれが廣く生物學や心理學の科學的法則として成立したに就てはケスレル、クロポトキン、それから最近物故したダアカイムなどの獻功を擧げねばならぬ。猶私どもは先頃から佛蘭西の學者によつて研究されたソリダリテの哲學に注目せねばならぬ。

九

社會性又はソリダリテは一般生物界を支配する重大な現象であつて、生存競爭卽ち個人の擁立と相並んで、進化の二大法則である。各生物はその周圍に打克つて自己の個性を發達させようとする衝動を有すると同時に、同類相扶けて互に親和する衝動をも有してゐる。生存競爭の中に相互扶助があり、ソリダリテの中に

個性の獨立がある。相互扶助の觀念のみが推稱される社會はとかく沈滞に傾き易く(歐洲の中世紀末がさうであつた)、生存競爭と個人主義とが一途に蔓る社會は分裂によつて破産する(現代がさうである)。進化の二大車輪であるところの是等の何れか一つが失はれても、社會は永く支持されるものでない。然るに近代の傾向は、先に述べたとほり、生存競爭の一面のみを重く視た爲めに、ソリダリテの一面は全く度外視され、その結果が資本主義の跋扈となり、今回の世界戰爭となり、更に戰後の階級鬪爭となつて現れた。されば今日の社會に於ける急務は、今まで理由なしに唯だ拒否され侮蔑されて來たソリダリテの眞理を理解し且宣傳するのほかはない。

ダーウヰンの進化論に眩惑された當時の社會は彼の眞理を彼の意志に反してまで極端に解釋した結果、生存競爭の意義が甚だ狹く採られることとなつた。然るにその後生物學の研究が進むにつれて、かやうな解釋の不當であることが次第に判明した。今日の生物學は生存競爭の意味を明かに二つに分類してゐる。卽ちその一つは自然と敵族とに對する外的鬪爭であつて、他の一つは同種屬間に行はれる內的鬪爭である。前者は確かに進化の行程に於て非常に必要な因子であるが、後者はソリダリテ卽ち相互扶助と相待つて適宜に調節されない限り至つて危險である。餘り通俗化されて世間に擴がつた進化の觀念が、この內的鬪爭の一面をのみ過大視したのはダーウヰンの爲めにも悲むべきであ。

生物界に於ける相互扶助の法則を闡明し、それが競爭の法則に劣らざる實相であることを明かにした第一の功勞者はクロポトキンである。之に關する彼の著書は『自然の一法則及進化の一因子としての相互扶助』といふのであつた。その中で彼は最初い〳〵な動物の世界に於ける相互扶助の現象を記述し、進んで文明の各階級に於ける人類社會に行はれたところの相互扶助の事實に說き及んだ。例へばその胃袋に一ぱい蜜をためてゐる蜂が空腹の蜂と逢つた場合前者はその友のために自分の蜜を吐き出すといふ事や、同穴の蟻の間では食物の分配を拒む權利がないやうに見える事や、若しこの義務を履行しないずるい蟻のあつた場合彼は同輩から他の種屬を遇するよりも酷い目に遇はされる事や、同じ庭に住む雀たちはそこへ投げられた餌物を仲間全體に知らせる義務を有することや、一つの雀は決してお隣の雀の拾つた藁を盜んではならない事や、旅鳥がお互に扶け合つて遠い旅をすることや、同場所に住むモルモットはその友達が自分の食物庫に這入ることを拒んではならない事や、原始狩獵時代の野蠻人の間では病者や老衰者が勝手に誰の家へでも這入つて食物を採ることが許されてゐたことや、人類文化の進歩につれて共產的村落が起り、それが次第に發達して終に中世紀の立派な自由市となつたことや、ギルド組織のことやが、詳しくその書に誌されてある。

クロポトキンの結論はかうである。動物の種屬の大多數は社會を成して住み、彼等はお互の協和によつて外部に對する生存鬪爭の最大武器を見出す。生物界に行はれる所謂鬪爭は狹き意味にとられたダーウヰン的弱肉强食主義ではなくて、協調の力によつて廣い自然に向けられた戰ひである。從つて一の種屬の間では相互の競爭よりも相互の扶助が必要である。相互扶助は進化の重要因子であると。

十

わたくしは前回にクロポトキンの相互扶助說を述べたが、人間社會に行はれるソリダリテの

現象は、彼のこの說から推測しうる以上に深い意義を有したものである。而してその意義のいかなるものであるかを知る爲めには、私どもは人間社會が一の完全な有機體であるといふ事を知つてゐねばならぬ。なぜなら眞のソリダリテの行はれるのは一の有機體を構成する各細胞又は各機能の間に於てであるから。

人間社會が比喩としてでなしに、眞に一の完全な有機體であるといふ事は今日の社會學者の等しく認めるところである。殊に最近に於てダアカイムが的確に之を立證した。併しそれを詳しく茲で述べるのはわたくしの任務でない。唯後の說明に緊要なこの事實を讀者に呑込んで貰ふために、一つの譬を擧げて置かう。私どもの社會は例へば一の桝に盛られた豆粒のやうな同質物の集合ではない。この社會を全體として支配する統一性は各成員の類似から起るのではなくて、各々が獨立性を有するところの成員間の依存卽ちソリダリテから發生するのである。例へば酸素と水素とが化合して水を作るが、水は酸素でも水素でもなく、またこの二つの元素の性質の合計でもなく、全く性質の異つた新物質である。酸素と水素とは各相異つた性質を有してゐて、それが化合の力により分業的に參加することにより初めてそこに水が出來る。社會の成立ちも亦之と同じである。各成員の個性が微妙な有機的分業をなし、其間にソリダリテの力が加はつて、一の新有機體――社會が發生する。私どもの社會は人間とは全く別な生物である。社會は部分的に見るときは人間で、統一的に見るときは超人間的の一の獨創生物である。

社會が一の有機體であるとすれば、その間には一般有機體に行はれると同樣のソリダリテの法則が行はれねばならない。然らば有機體を支配するソリダリテの法則とはいかなるものであるか。

シャール・ジイドにかういふ詞がある。『ソリダリテは生命を特色づけてゐる。若し人が生物を定義しようとするならば、その各部を聯結してゐるところの機能のソリダリテに依るほかはない。而して死とは、個物を組織してゐる諸要素間に於けるこの關係の破壞にほかならぬ。そしてこれらの諸要素は分解して了ふと、また新なる結合にはひる、卽ち新なる生物の要素を形造る』と。であるから、生命の觀念は一種の結合卽ちソリダリテの觀念と一致する。各細胞、各機能を微妙に聯結してゐるソリダリテの力なしにはいかなる生物も成立たない。

十一

わたくしは前節で、人間社會が一の有機體であるといふこと、凡ての有機體にはソリダリテの法則が行はれるといふことを述べた。してみると、かういふ事が明かである、曰くソリダリテの法則は亦私どもの社會をも支配する。

人が生活する、すゝとその生活は必ず多數の他人の生活と十重二十重に關係する。人が思考する、するとその思考は他の者の思想を反映するばかりでなく其が表現された場合には他の者の思想に反映する。人が樂み、苦しみ、賞し、憎み、また惱む。するとそれ等の感情は他人の感情に波を起す。更にそれ等の他人の感情が他の他人の感情に感染する。かうして私どもお互の生活は無限に連續した多數の波紋をなして相重疊する。それのみならず、私どもの肉體、私どもの言語、私どもの制度、私どもの思想、私どもの藝術は、みんな祖先からの遺産の蓄積である。私どもの努力はまた私どもから子孫への遺産である。どこにも間隙がない、何もかもがソリダリテの絲で繫がれてゐる。機關夫の傍にはワットが働いてゐ

る。農夫の傍には姿の見えない鍬の發明者が手傳つて耕作に從事してゐる。自分では少しも意識しない考案家をナポレオンが保護してゐる(なぜなら彼は特許法の創設者であつたから)。かうして社會は過去から現在、未來に亙り、いかめしい帝王からあどけない村落の兒童に亙り、家族も、組合も、國家も、民族も、ひろくは人類全體も、それが知る識らないに拘らず、相依り相扶けて"Solidaire"な全體を形造つてゐる。ゲーテが言つた、『私の作物はいづれも、多くの人々や、あらゆる事物に依つて暗示された。學者、無智者、賢者、愚者、幼き者、老いたる者が私の仕事を共にしてくれた』と。同じやうにナポレオンは言ふべきである、『是等の多くの人たちが私の帝國を建てる仕事を共にしてくれた』と。同じやうにロスチャイルドは言ふべきである、『是等の多くの人達が私の富を作つてくれた』と。

ソリダリテは事實である。それは生命を支配する必然の法則である。生物的有機體にあつては自然は獨りでに働いてこの法則を編んでゐる。そこに個々の生命が作られ、種が作られ、社會が作られ、言語が作られ、思想が作られる。人間も亦この法則を侵すわけには行かない。然るに人間社會は單純な有機體ではない。それが一般必要のソリダリテの法則に從ふことは勿論であるが、それと共に一つの新しい要素が加はる。卽ち人間に特有の意識や意志の如き力が働くのである。フウイエの言つたやうに、私どもの社會は『契約的有機體』である。意識的人間の集團では、その成員は必然の自然律に從はなければならないと共に、之を組成してゐる他の成員の承認を必要とする。卽ち『私どもはかく〳〵である』と共に『かく〳〵であらねばならぬ』。そこに正義や義務の觀念が發生する、之を要するに、人間社會に於ては事實としてのソリダリテ(必然)のほかに、目的としてのソリダリテ(義務)が生じて來るのである。意識的生物たる人間はソリダリテの自然則のその儘行はれるのを唯だ觀察するに止まらないで、その社會の目的の爲めに、意識的に之を適用しようと意志する。こゝから私どもの道德が生れるのである。されば私どもの社會に行はれるソリダリテは無道德であると共に道德的である、必然と義務との二重法則である。

わたくしは先に『社會の發見』はごく近代のことであるといふ詞を用ひたが、その意味は玆で初めて讀者に納得されることと思ふ。人間はいかなる理由によつて社會を作るか、また作られねばならぬか。人間の社會性はどんな法則のもとに立つか。是等の疑問に科學的正確の答への與へられたのは、上述のソリダリテの法則が確認されてからである。

十二

わたくしは社會的ソリダリテの現象に就て大略の敍述を了つたと思ふが、更に詳しくその性質を究明する爲めに類別の方法に依つてみよう。

ダアカイムは人間社會に行はれるソリダリテを分つて、(一)機械的ソリダリテ、(二)有機的ソリダリテとなした。私はそれにもう一つ(三)精神的ソリダリテを加へることを必要と考へる。この三種類のソリダリテに就て、是から私は自分の説明を加へる。

機械的ソリダリテは最も單純な本能の發現であつて、その動機はソリダリテの行はれる相手間の類似又は好愛である、人は本能的に自分と類似の性質を有する者、從つて自分の好む者と先づ親和するのは然るべきことであつて、かやうなソリダリテは最も原始的である。なぜそれを『機械的』といふかといふに、かやうにして

出來上つた集團はその成員の共通に有する性質の總和を以て現されるからである。かやうな社會はその成員の類似性が多ければ多いほどその間に行れるソリダリテも强いわけで、從つてその極限に於ては個性の零を豫想する。若し今の社會に於てこの種の極端なソリダリテが强ひられるものとすれば、それは餘程考へものである。仁義論に基いたユートピア社會主義の多くにはその弊がなかつたであらうか。マルクスの理想した共產的黃金世界は矢張かやうな機械的ソリダリテの世界ではなかつたらうか。これ等の事は社會改造の首途にある私どもの十分考へなければならないことである。機械的類似の過當に强ひられる社會は利己的生存競爭の自由に放任せらるゝ社會と共に忌避すべきである。

有機的ソリダリテは發達した社會に於て初めて現れる現象である。文化の進むにつれて各人の個性は益々その特徵を示し、從つて人は各々その天地を開拓しようと努める。そこに自然的分業が生れる。分業は益々人間の個性を研く。かやうにして私どもの社會は微細に且複雜に分離された分業の統一體となるのである。分業の發達するにつれて、一は他を要することがいよ／＼切になり、社會の各部間に於ける依存と義務とは次第に必然の度を增加する。而してそこに堅實なソリダリテが打建てられる。機械的ソリダリテは譬へば粘着力であるが、有機的ソリダリテは化合力である。酸素や水素との分子の力よりも酸素と水素との化合に與ふる親和力の方が何れだけ强いかといふことと同じく、機械的ソリダリテよりも有機的ソリダリテの方が何れだけ强いかを知ることが能きる。猶有機的ソリダリテは、機械　ソリダリテのやうに個性の滅殺を强ふる危險がない。有機的ソリダリテの發達すればするほど各々の個性は自由にして完全な生長を遂げ、反對に個性が自由にして完全な生長をなすほど社會のソリダリテは愈々ます／＼重要な相を帶びる。

次に私は精神的ソリダリテに說き及ぶであらう。この社會は一體として或る一の目的を有してゐる。換言すれば人類の一の共通理想をもつ。宗教はかやうな理想を名けて神と稱んだ。私どもは一樣にかやうな超自然的又は超現世的の共通目的を追ふことにより、相互に一の結合に這入る、それはちやうど地球が他の星と共に一の共同の太陽に結び附けられて運行するのと同じである。ベルグソンに從へばこの宇宙はいくつかに分派された生命の進化過程である。併しこれ等のいろ／＼な生命活動は同一の『生の衝動』に促されつゝあるもので、丁度打上げ花火の穗先のやうに一の中心から發射してゐる、『この中心が卽ち神である』。

何れにしても、人間の精神の奧には一の超現世的共通理想を追求する志望があつて、それが多くの場合宗教の形に於て現れ、よつて社會的ソリダリテの强い根柢となることは、見逃すべからざる事實である。次に揭げるトルストイの詞はこの事を非常に巧に言ひ現してゐる。曰く、『世界はちやうど大きな寺院のやうな物で、その眞中に天から光が落ちる。我等がお互に結び付く爲めにはみんながその光の方へ行かねばならぬ。かやうにして四方の端から來た者が喜びの光の中で各自を見出すのである』と。

私どもの社會は以上三つのソリダリテに依つて結合される。で、一人の人間がこのうちどのソリダリテを最も重んずるかといふことは、主としてその人の性向と敎育とによることである。

十三

次にわたくしはソリダリテの法則の應用方面

を談らうと思ふ。

進化の二つの因子として、生存競爭と相互扶助とが相對的に行はれてゐることは先に述べたとほりである。相互扶助の現象は凡ての生物界を普遍に支配するソリダリテの法則から來たものであつて、意識的生物たる人間の社會に於ては、それは更に目的としてのソリダリテ即ち義務として二重に働きかける。私どもの道徳は意識されたソリダリテである。で、各個人がその個有の才能を充實して外界に擴がらうとする競爭本能と、個々人の活動を調節して全體の平衡を破るまいとするソリダリテの本能とが、適宜に並行して實現されない限り、この社會は不具である。

然るに近代の極端な個人主義的自由主義は、一方の競爭本能のみを重大視して、むげに他の一方なるソリダリテの本能を拒否した結果、そこに平衡が破れて、今日の逼迫した社會的不安を來すやうになつた。かやうな譯合であるから、現下の社會的動亂にのぞんでの唯一の救濟策は、ソリダリテの思想の宣傳にあらねばならぬ。

生存競爭説は、近代の社會的風潮に乘じ、いろ／＼の方面でいろ／＼の學者の説明が與へられ、殊にダーウヰンの進化論によつて生物學の最後の詞であるかの如く確められてから、之に對する抗議としては、從來の女々しい仁義論では通らなくなつた。然るについ近頃から相互扶助の學説が出て、生物學的ソリダリテの新觀念が紹介せられるやうになつたので、個人と社會との新な關係が漸く人の認識に上り、こゝに社會的道徳の思想は面目を一新して、正義や自由や權利や義務やの古い單純な考へ方を一變したかの觀がある。

私どもの社會道徳の基調をなしてゐるソリダリテの法則は、昔から説かれたところの愛とか同情とかいふ感情に依つてのみ立つのではない。それ等の原始的感情は、勿論社會的ソリダリテの一部を扶けてゐるには違ひないが、併しそれは私が先に機械的ソリダリテと稱したところの最も幼稚な形である。相互扶助又はソリダリテの現象を單にこれ等の感情に歸することいふことは、その普遍性と確實性とを減殺する結果に陷る。私どもはお隣に住む家族の人たちを知らない場合でも、火事の中からその人達を救ひ出すために危險を冒すことがある。野飼ひの馬は狼の襲撃をよける爲めに、そろつて輪を作る。これ等の現象は愛や同情といふ狹い詞では現はすことのできないもので、之を動かす槓杆はもつと廣い本能の奧にある。ソリダリテの發現は感情よりも事實であり、偶然よりも必然である。

かうしたソリダリテの觀念が在來の社會哲學にどれだけ深い變化を與へるかといふことは誰もたやすく想像しうる事である。今まで自由主義の名によつて許された極端な利己的個人主義が間違であつたといふこと、生存競爭主義の一面のあらはれである階級鬪爭主義がその根本から考へかたを變へねばならないこと、新しい社會の秩序はソリダリテの法則に立脚して立てられねばならないこと、從つて在來の社會主義的思想の一切は之に準じた訂正を要することなどがわかつた。

十四

ソリダリテの思想によれば、この社會は有機的分業により、成員間の相互扶助を以て成立つ。で、かやうな分業の法則が行はれゝばこそ、私どもは各自の天分に從ひ自己の諸才能を自由に伸張しうるのであつて、有機的ソリダリテ即ち分業は私どもの社會的自由の根本條件である。さればこの社會には絶對自由なるもの

はない。私どもは先づ自己の自由を要求する前に、ソリダリテの法則が私どもの意識を通じて課するところの義務に從はなければならない。

そればかりではない。私共は空間の島に於ても時間の島に於てもロビンソン・クルウソオではない。私どもは社會人である、即ち宇宙的ソリダリテの一分子である。私どもの各瞬間に於ける一擧一動は無數の人間から成る大波のつながりであり、私どもの肉體や思想は遠い祖先からだん〳〵に蓄積された遺産である。私どもお互は大きな義務をもつた負債者として生れて來たのである。お互にはこの負債を濟すべき義務がある。この決算は社會的勤務の交換によつて仕拂はれねばならぬ。ソリダリテは權利や自由の觀念に先立つ法則であるから義務はもろ〳〵の社會的道德の長子である。

即ち、自己の自由擁護といふ利我的立場からみても、社會的負債者としての利他的立場からみても、義務は社會人の行爲を規範する法則のアルファである。併し私は必ずしもそれがオメガであるとは言はない。個人としての立場からみるときは、其目的は矢張社會にあらずして自己にあるのであるから、社會的負債は個人的自由の獲得の前提であつてよろしい。

義務の觀念は、別に精神的ソリダリテの立場からも觀ることができる。人類は一體として或る一の目的を有してゐる。即ちそこには社會を支配する共通理想がある。宗敎は之に名けて神と稱んだ。私どもの銘々勝手の『自我』は一の偉きな『非自我』を中心として結び附かうとする慾求を有してゐる。これが私のいふ精神的ソリダリテである。かやうな場合に生ずる義務の觀念は、崇拜の念から湧く自他の尊敬、聖愛の導きによる相互の共鳴であつて、犧牲にして犧牲よりも深く愛にして愛よりも廣いものである。そこでは神祕な瞑想の中から非我的の行爲を生み出すのである。

およそ生物には、個性の伸張といふ傾向と繁殖といふ傾向とがある。この兩者は一見矛盾した傾向である。一の生物に於て獨立した個體としての存在が十分に發達する爲めには、その生物が自己を殺し自己を分離させて獨立した子孫を作るといふことは許しえないことである。けれども、若しそれが許されない場合には繁殖といふ事は不可能になる。なぜなら繁殖とは舊い有機體の一部が新しい有機體となることであるから。で、この兩傾向の何れが强いか重いかといふことは、生物學に於ける重要な問題である。今自然の現象から察するに、個性の存在は種の繁殖の爲めであるかに見える。ベルグソンが言つた『生命とは發育した有機體を媒介として、一の萌芽から他の萌芽に移る流のやうに見える』と。そこで、彼は自然の背後にあつて總ての物を押し動かす偉大な意志——『生の衝動』——神——を假定し、この意志に從つて凡ての生物は無意識に一の大きな目的の爲めに協力すると做した。所謂精神的ソリダリテの起源はこゝにある。

わたくしはソリダリテの諸相から義務の觀念を解釋したが、私どもの社會的自由や權利や正義やの觀念はこれから正當に導き出されねばならない。この世の中には絕對の自由や絕對の權利といふものはない。またソリダリテの義務を離れての正義といふものもない。今日の法律や經濟學や、社會主義やは、この點から幾多の改訂を要すべきである。

十五

ソリダリテの學說は、今日喧しい『改造』の具體的諸問題に對して適切な答案を與へる。

（一）財産――ソリダリテの原則に從へば、この社會のあらゆる財寶や智德やは私どもの祖先からの共同努力の結果であつて何一つ相互依存の産物でない物はない。今の社會に於て或る種の人々の有する特權、或る階級の爲めに利する法律の如きは、皆許すべからざるものである。

クロポトキンは、彼の相互扶助説から割出して、彼獨特の共産主義を打立てた。彼によれば今日の文明社會を建設したものは、幾千年に亙る幾百萬からの人間の共同努力である。或者は森を伐り開いた、或者は沼を干した、又或者は陸に海に道を造つた。私どもが今日歐洲で耕すところの肥えた土は、幾つかの民族の汗によつて濡されたものだ。その一坪々々が幾百人かの辛い勞働の歴史を物語らないものはない。一哩の軌道、一ヤードの隧道でもが、人間の流した血の分前を受けずに出來上つたであらうか。更に一つの都市を看よ。その文化、その産業其立派な特色が今迄どれだけ多人數の協調によつて、徐に發達したかを思へ。

思想といひ發明といふも亦さうである。今日私どもが誇とする一つの機械でもが、有名無名の幾多の學者や發明家に俟たないものがあらうか。それ等の人たちは亦周圍の勞働者や婦人によつて、物質的にも精神的にも助けられなんだであらうか。つまり、この社會はその中に生活したあらゆる人々の極く僅かづつの持ち出しかな成立つた寄合世帶である。から考へると、誰がどんな權利によつて、世の中の一微物たりとも、之は自分の所有だ、之はお前の物ではないと言ふことが能きるか。

クロポトキンの結論はからである。あらゆる産業の機關は人類の共同努力の結果であつて、從つて、それによつて生産された物は私ども全體の共有財産である。『凡ての者の所有である』。

ユートピア社會主義は漠然たる仁義論から共産の天國を夢み、マルクス派社會主義者はその唯物史觀の不徹底な結論から同じく共産社會を支持するのであるが、その何れもが私どもを黙頭かせるだけの根據を有してゐない。廣い意味の社會主義即ち共産主義は、ソリダリテの原則によつて初めて科學的に證明しえられるのである。

（二）組織――今日の社會組織の多くは惰性的習慣の遺物であつて、文化の進歩に添はないものが多い。從つてそこにいろ〳〵な無理が出來る。社會の初期に於て有機的分業のまだ發達しなかつた時代に行はれたソリダリテは機械的ソリダリテであつた。かやうな時代の社會を統一する爲めには、その社會を成す各成員の『類似』といふことを必要とした。而してこの『類似』は、主として壓制又は訓練によつて作られた。今の社會組織の大部分はその遺習にほかならぬ。然るに近代に於ける個人の發達は非常な速度を以て行はれた爲めに、社會組織の改善と個人の解決とは足並をそろへることが能きなんだ。餘りに古い組織と餘りに自由な個人との間の矛盾――これが現代に於ける道德的及經濟的不安の原因である。然らば之が救濟はいかにすべきかといふに、第一には最早舊時代の遺習であるところの機械的ソリダリテの制度を廢することであつて、第二には解放された個人の要求に添ふやうな有機的ソリダリテの制度を採ることである。壓制や度を過ぎた訓練やは不可である。マルクス流の國家社會主義が、現在の儘の政府の手を以て公産制度を行はうとする如きは、至つて中途半端の思想である。有機的ソリダリテによる社會の單位は『職業的』でなければならぬかに思はれる。この點からみれば、ギルド社會主義の考案した社會主義が最

も當を得たものであらう。

十六

(三)分業――ソリダリテの原則から見れば、分業とは一の有機體の諸機能が各々その賦へられた個性を發揮し、かくて全體の生長を扶けることであつて、之を人間社會から言へば、各人がその生命を確實にし、自由に自己の才能を伸長させ、最小努力のある所にその意力を適用することである。自由の觀念とは意識された分業本能である。されば、自由の壓迫、個人の意的活動の阻止は社會の進歩を停滯させるものである。

有機的な分業の進化は文化の唯一の條件である。然るに先にも述べた如く、近代に於ける個人の異常な發達、之に伴ふ自由解放の欲求は、社會組織の改造と歩調をそろへることが能きなんだ。機械的ソリダリテの衰頽にも拘らず、之に代るべき有機的ソリダリテの組織がまだ起つてゐない。そこで社會と個人との間に大きな矛盾、分裂が起つた。之が現代のあらゆる社會的不安の原因である。私は次に三つの不自然な分業を擧げることが出來る。

その第一は理智の異常な發達に伴ふ人心の分裂である。今、近代人の生活を見るに、理智――特に科學的理智――が他の凡ての精神的機能を犧牲として發達した形である。然るに理智の作用は破壞的であり、且分離的である。氣儘勝手に放任された理智は一種の冷笑主義に陷り、本能を荒らげ、靈能を窮束し、一種不思議な不人情、不活氣の空氣を社會に撒く。他を犧牲として單獨に發達した理智は精神的ソリダリテの敵である。かやうな社會に於ては知識が極度に特殊化され、諸科學は益々統一のない分化に走り、引いて、癒すべからざる人心の分裂を來したのは、無理からぬ事實である。之が現代に行はれる不自然な智的分業である。

不自然な分業の第二は資本と勞働との分業であり、その第三は勞働に於ける分業である。分業が社會的ソリダリテの要素である爲めには、(一)勞務は各人に不公平なく分たるゝ事、(二)その勞務は各自の個性に適したものである事、即ち各人のとる勞務は自由で自主的であり、強制的であつてはならない事、(三)勞務の報酬は公平である事、の三つの條件を必要とする。然るに今日行はれてゐる資本と勞働との分業は、この凡ての點から見て不滿足である。第一に勞務が公平に頒たれてゐない。一方には贅澤に遊惰にその日を送つてゐる階級があり、他方には貧乏に一生を縛られてゐる階級がある。第二に今日の勞務は多く強制的であつて、筋肉勞働者は奴隸の境遇に置かれてゐる。第三に資本と勞働とに對する報酬が少からず不公平である。

次に勞働に於ける分業を見るに今日の大規模な産業組織のもとでは、極度な機械的分業が行はれ、その結果勞働者は唯機械の番人として、自分の創意を働かす機會もなく、製作の喜悦を味ふ餘裕もなく、一生奴隸として使役され、不具的に其生命を傷害しつゝある。昔の手工時代の工人は、名目は奴隸であり、且つその生活は貧しかつたにせよ、製作に對する工案の自由が許され、製作品の完成に伴ふ喜悦を味ふことが能きた點に於て、現代の勞働者より幸福であつたと謂へる。

以上擧げた三つの不自然な分業は現代の社會に於ける主たる缺陷であつて、その爲めに私ども社會の有機的及精神的ソリダリテは共に傷けられてゐる。所謂階級鬪爭の起源も亦そこにある。

そのほか、ソリダリテの原則に照して解釋さるべき問題はいろ〳〵ある。マルクスの唯物史

観やサンヂカリズムの暴力説から導かれた階級闘争説の誤りであつて、且その結果の恐るべきこと、逼迫した現代の社會に於ては或程度の階級闘争は不可避であるにしても、今の如く階級的ソリダリテを力説する前に社會的ソリダリテを教へることの必須であること、今後の教育方針は、機械的ソリダリテの見地からではなく、有機的ソリダリテの見地から立てられなければならないこと、不自然な智的分業の結果衰頽しつゝある精神的ソリダリテを復活する爲めに新しい人生哲學と新しい宗教とを起す必要のあること――などを私は説きたいのであるが、讀者の倦怠を恐れてそれは他日の機會にゆづることにする。

　要するに、ソリダリテの原則に立脚した新しく且眞の社會主義が、未來の社會改造の根據となるであらうことを、私は信じて疑はない。

ビートーベン（六）

當時の或者は彼の曲をさして、醉漢の音樂だと言つた。然うだ、確かに醉漢の音樂だ。然し、それは『俺は人類の爲めに喜の御酒の口を開けてやるバカスだ、おれは精神の聖狂を人間に與へる者だ』といつた醉漢だ。

彼はナポレオンを見て斯う言つた、『俺が音樂の術を知つてゐるやうに戰術の心得があれば、彼に教へてやるものを』と。彼の容貌はナポレオンに能く似てゐた。殊にその意志を現はすしまつた口元が。

この『未來の人道』（der künftigen Menschheit）を目的として一生を捧げた偉大な靈は、一八二七年、五十七歳を一期として靜かな往生を遂げた。

彼は息を引きとる前に、自分の一生を顧みて斯う言つた、『喜劇の終り』だと。

その日は殊に嵐が劇しかつた。二月の寒い空には雪ふぶきがして。

『悲しみを經ての喜び！』

彼ぐらゐ聖い喜びに憧れた者はなかつた。悲慘の生活のどん底から、彼は未來の人類のために『喜悦』の福音を歌はうと思つた。彼は幾度かためらひ、幾度か失敗したあとで、遂々最晩年にその希望を現實した。「第九旋律曲」といふのがそれである。

曲の中途にオーケストラが急に停つたかと思ふと、深い神祕な沈默が、やゝしばし續く。そして『喜悦』の神が、柔しい靜かな歩みを以て、人の心の悲を見舞ふ。次第々々にそれが我等の全身を占領し、やがては狂熱の形に變る。そして嵐の中のリヤ王のやうな狂暴に移つたあとで、それがまた靜かな宗教的法悦の境に這入り、最後は聖愛の無我郷で曲が結ばれる。

何がかやうな勝利と並びえたか。オーステルリッツの戰勝も、この永世の凱歌の前にははかない一場の夢ではないか。

偉大な生の熱愛者よ。汝の口からは常に喜悦の聲が洩れた――不幸が汝の命を奪はうとしたその日でも、『オ、かくも美しい人生よ』と。また、『私は千たび繰返して私の生を住みたいと思ふ』と。

魔の花

古くから露西亞に傳はつてゐる物語がある。その廣い高原の何處かに——誰も知らない所に一本の魔の樹が立つてゐる。やさしい花が咲いて、年中青々として、枯れることも知らないでゐる。その樹が地の上に生長して花が咲いても、誰も見ることができない。なぜならば、葦と高原の草が高く延びて、そのやさしい花を隱すからである。然し悲しい秋が來てから裸な高原を旅する者にはこの永久に青い花が見られる。そして遠くから魔の花のにほひが聞える。一種特殊な、言ひ盡されないほど豐かな香ばしいにほひである。どんな物でも及ぶものがない、似ついた物さへない。で、そのにほひを嗅いだ者には世界が一變する。その人には何でも分るやうになる、默したものは語り、言葉あるものは瞞すことができない。彼は僞善の音の下に深くかくれた考を透して見る。獸も樹も岩も、意味ある言葉で彼に話す。彼は自然の聲を聞き、いかに彼女が呼吸し勞作し創造するかを知ることが出來る。彼は夜々の旅にある星の歌を聞く。しかし、このにほひを嗅いだ者は皆悲しくなる。なぜ皆悲しくなるのであらう。天地に振へる歌は——憾う曠野の貧しき民が言ふ——一つも歡樂の歌でないからである。

ビートーベン（七）

苦しむ者よ、苦しむ力のある者よ。汝の爲めには、この偉人の一生ほど好い慰安と刺戟はない。彼は自分の悲慘の頂點にゐる時に、彼の實例が、後世の苦しむ者の爲めに助けになることを望んだ。そしてから言つた、『憐むべき忍苦者は彼と同じやうな一人の人間——あらゆる自然の障害にも拘らず、男らしい男になるために彼の全力を盡した一人の人間を玆に見出して、慰安を感じたであらう。』と。

（『嵐の前』より）

◇

花袋君。人生は情熱と意志との二元場裡であります。この二つの交互の流れのリズムが我等の生活であります。そして我等の生活のリズムをして完全ならしめるためには、我等は我等の情熱と意志との其の何れをも『自由』であらしめなければなりません。我等の生活がどちらの極に近づからとも、そこにはジェヌインの姿を保たなければなりません。放縱と拘束とを超越した自由にだけは我等の責任を帶ばしめなければなりません。自由な情熱と自由な意志とのハーモニーが取りも直さず人生の極致であります。

しかしかやうに美妙な平衡は、最初からとても望むことは能きません。一方の情熱は甚だ危險な我儘な子であります。そこで平和な妥協を望む社會はいつも我等の情熱を繼子扱ひにいたします。社會は道德だの宗教だの慣例だのといふものを造つて人間の情熱に眼隱しすることを努めてゐます。文明とは或る意味に於て情熱の海邊に築かれた堤防だと見ることが能きます。（『田山花袋氏へ』より）

年譜

明治十一年十月、長野縣上伊奈郡南向村に生る。生家は天龍川に面したる、竹林の茂る舊家で、有名な「養命酒」の醸造本家鹽澤家である。鹽澤重雄といふのが、彼の生家よりの名前である。「ふる郷は川沿ひ一里桃林、母に別れて、云々といふ臨川自身の短歌を思ひ出させる風光明媚な雲白き南信濃の暖い谿間の地である。少年時の臨川はおそらく天龍で遊泳し、山野を駈け歩いて愉快な日を送つてゐたことであらう。彼は水泳には非常に秀でてゐた。スポーツにも非常な興味を持つてゐた。後年押川春浪等と「天狗倶樂部」の創設者であつた。

明治二十五年、松本中學校入學。文藝愛好の念は當時から非常に深く、その頃の中學生は文藝熱が高かつた中でも、彼は特に優れてゐた。詩もかき、小説も書いた。けれど、同時に彼は數學が殊に得意であつた。電氣科學を專攻して、傍ら文藝を愛好する事が當時からの彼の心願であつた。

明治三十年、松本中學卒業、仙臺第二高等學校へ入學。その頃、長野縣南安曇郡梓村中澤家へ養子に貰はる。

明治三十四年、東京帝大工科大學へ入學、電氣學專攻。在學中、窪田空穗、小山內薫等と雜誌「山比古」を發行。島崎藤村、國木田獨歩、田山花袋、柳田國男、蒲原有明諸氏と交遊す。獨歩の「湯河原より」「運命論者」などはこの「山比古」に發表したものである。當時、彼はユゴオのもの、トルストイのものを愛讀した。

明治三十七年、工科大學卒業、東京電氣鐵道會社技師となり、後、京濱電車鐵道技師長たり。晩年、松本市外に工場を建設し、中澤電氣株式會社を經營した。

第一文集『鬢華集』(感想及び文藝美術の評論の集)出版後、ロシヤ文學及びロシヤの研究に熱中し、トルストイその他に關する諸種の評論を「中央公論」等に揭載、又、ニイチエ、ロマン・ロオラン、ベルグソン、タゴール、ダ・ギンチ等に關する研究、紹介を發表す。一時、雜誌「文藝復興」を發行せしことあり。著譯書は、論文集に『舊き文明より新しき文明へ』『破壞と建設』、評傳に『トルストイ』『ベルグソン』、飜譯にブランデス著『露西亞印象記』、生田長江との共著『近代思想十六講』等。

大正九年八月十日死去。この年十月、評論集『新社會の基礎』、翌十年十月『嵐の前』出版さる。

大正十二年、『臨川全集』發行の企てあり。第一巻『舊き文明より新しき文明へ・破壞と建設』及び第二巻『偉人傳』成りしも、第三巻『藝術篇』、第四巻『社會改造の基調』の二巻は未だ刊行の運びに至らず。

◇

革命か、デモクラシーの善用か。今日の世界を救ふ道はこの二途を出でない。前者は魅惑的であるが、併し夜の仕事である。我等は飽くまでも正道に據らなければならない。

(「知識階級と團結せよ」より)

片上伸集

序

片上先生の人及藝術

片上伸先生は明治十七年二月愛媛縣越智郡波止濱村に生れ、松山中學を經て早稲田大學文科に入り、明治三十九年卒業、其の後母校の教壇に立つ傍ら文藝批評の筆を執つた。逝去されたのは昭和三年三月五日で、早稲田大學に在つては、坪内逍遙、島村抱月、兩氏の後を繼ぎ、純文學に志す人々の指導者として功績が多かつた。

人としての片上先生は敏感で、好惡の感情の強い、而も其れを憚りなく態度や言葉の上に表現する、直情徑行の性格だつた。愛すべき者を愛し、憎むべき者を憎む——其れは世の常の人情だが、片上先生の場合では其れがかなり極端に、非妥協的に發揮された。さう云ふ點で先生は實に思ひのまゝに人生を生きた人と云つてよい。

先生の批評家としての活動は大體に於て三期に分つ事が出來る。第一期は所謂自然主義運動の擁護者としてで、先生が初めて批評の筆を執つたのは明治四十一二年、日本文壇を自然主義運動が風靡した時代であり、先生は此の運動の理論的方面の總帥島村抱月氏門下の有力な論客だつた。だが當時の日本文壇の自然主義運動は、實は一種のロマンティシズムの提唱であつた事は識者の認むるところで、生來明晰な學者的頭腦と、ロマンティックな詩人的情熱とを兼備へた我が片上先生の青年時代の著作の中にも、ともすれば唯物的、科學的なナチュラリズムの主張より、寧ろ清純幽玄なロマンティシズムの匂ひを嗅ぐ事が出來る。外、自然主義運動に携りながら、内、自我の省察と解放とに努めて居られた時代とも見られる。

第二期は自然主義運動が下火になつて、先生個人としては一層自己に沈潛して、内省的、冥想的になられた時代であり、詩人としての先生の特質が、此の時代の陰翳の濃い、情味の豐かな文章によく現れてゐる。エマスンの著作を譯されたのも此の頃だと思ふが、エマスンの文章を一層近代的に精練した樣な含蓄と屈伸性に富んだ先生の文體は、何と云つても日本の批評文學中で特異な物であるに違ひない。

大正四年秋、先生は早稲田大學留學生としてロシアに赴き、七年春歸朝した。此の時代から先生の活動は第三期に入り、ロシアの國土と國民に關する豐富な觀察知識を傾注して、先生はロシア文學の研究と解釋とに努力され、續いては日本文壇のプロレタリア運動の發達に盡瘁された。大正より昭和にかけての日本文壇の無產階級文學成立の當初に、其の理論的根據を確保した批評家の一人としても、先生の名は永遠に記憶されていゝ。

此の「片上伸集」に收むるところ『國木田獨歩論』以下十數篇、紙數に制限があつて、數多い先生の著作中の代表的な物だけを盛る事さへ不可能で、中期の著作は概ね省かねばならない有樣となつたが、近代文學に對する先生の豐かな鑑賞力と鋭敏な識見とは隨所に見出し得ると信ずる。先生と同時代の現存せる批評家の殆ど凡てが書齋に隱れて單なる學究として甘んじ、一方新時代を統率すべき權威ある批評家の未だ現れざる今日、先生を憶ふの情切なるものがある。

昭和五年十月

谷崎精二

國木田獨步論

一

獨步といふ人は、幼少の時分から死ぬる時まで、少しも面變りのしなかつた人であるといふことが、誰かの追憶談のうちにあつたと覺えてゐる。實際少年時代からの寫眞を見ても、あまり面變りがしてゐない。明治十八年十四歲時分の不恰好な中學校の洋服を着た寫眞を見てゐると、獨步が晩年殊に死ぬる一年前頃の面ざしとそのまゝのやうに思はれる。それと必ず關係があるとは言へぬであらうが、獨步がまる三十七年の生涯にも、その思想の上では、成熟はあつてもがらりと面變りがしたといふやうなことはなかつたやうに思はれる。獨步は死ぬるまで生れたまゝの獨步であつたやうに思ふ。早くから獨步の愛讀者であつた小山內薰君が、「獨步の作物は初めから終りまで變らなかつた。其書いて居ることと見てゐることは昔から同じだ。獨步が新らしければ昔から新らしいのだ。獨步がえらければ昔からえらいのだ。」と言つてゐるのは、さすがに知己の言である。而してこれは作物の上ばかりではない、面ざしの上ばかりではない。その人物性行も、思想感情もすべてが生れたまゝで伸びて行つた。それ故に、獨步の生涯には、外部の境遇の變化は可なり多かつたが、內面の生活は一貫して變らなかつた。佐伯時代、民友社時代の獨步は沈思と讀書と戀愛の人であり、諸新聞社時代は、政治的興味の人であり、近事畫報社時代以後は雜誌の經營と文壇正面の人である。獨步の生涯はこの三期に分れるとも言へるが、それは寧ろ生れながらの獨步が種々の境遇事情に應じて現はれたのであつて、彼自ら三段に變つて行つたのではない。佐伯時代の獨步も、晩年の獨步も、その面ざしの如く變らぬ同じ人である。ことに僕のやうに、その作物を讀んだのも、その人に接したのも、つい終りの二三年の間に過ぎなかつたものには、『欺かざるの記』に見える獨步と、後の作品のすべてに見える獨步と、その實生活に見える獨步と、これ等はすべて一つであるといふ感じが強い。前後十四五年の間に實生活も作物も、思想も感情も、目に立つほどの面變りをしてゐない。獨步は『欺かざるの記』に於いて、既に殆んどその全面を見せてゐる。『欺かざるの記』は、人間として、「詩人」としての獨步を最もかくすところなく見せてゐるものである。

二

獨步は初めから「詩人」にならうとは思つてゐなかつた、小說家にならうとは思つてゐなかつた。二十八年五月二十四歲の頃にも、彼はまだ自分の往く可き方向に迷うてゐた。「今は我大いに苦しみつゝあり。則ちわれ政治家たる可きか。詩人たる可きか。實際家たるべきか。豫言者たる可きか。これなり。國家の多難なるは吾をして前者たらしめんとし、人生の觀察は吾をして後者たらしめんとす。」彼は山口縣にその幼少時代を送つて、維新志士の精神からも刺戟を受けた。植村、德富氏等に接して、キリスト教の救世的精神や實社會的興味をも感得した。ワーヅワースの詩は人生自然の深い味ひを想はしめた。彼はもとより多感眞實熱誠の人であつた。以上の刺戟がなくとも、彼は空漠としてその青年時代を過し得た人ではなかつたに違ひな

い。而もその當時の日本に於ては、最も淸新な、また最も多く熱意を帶びた精神的刺戟を併せ受けた爲めに、この多感眞實にして熱誠なる青年は、一層深く一層强く又眞劍に自己の生活に思ひ惱んだのである。尤も獨歩はその生來の氣質に於いて、多血質にはありがちな輕い浮は浮はしたところを相當に持つてゐた。彼の少年時代は順境に在つて、その俊敏多感なる感情性分を壓迫するものがなかつたのであるから、彼は少なくとも一面驕兒であつたに違ひない。しかし我がまゝではあるがその一方では極めて素直な、傲慢ではあるが又極めて氣の弱い、多感熱烈ではあるが又極めて淡泊放膽な、――而もそのうちに生れながら雋秀の氣性を有つてゐた。彼は天分の豐かな俊才であつた。どのやうな境遇に置かれても、自分のライフの意味を考へずにぼんやりと日を送ることの出來る人ではなかつた。人間の生活の平凡なあたりまへな事實を、あたりまへと見てすますことの出來る人ではなかつた。「己れの死を痛感する者は生を痛感す。生を痛感するものは死を痛感す。生死を痛感するはシンセリティーの始めなり。生死を痛感すとは例の言ひ草の口眞似に非る也。大詩人、大豫言者、大哲人、皆生死を痛感したる結果なり。大なる生命眞の生命の入口なり。己れを天地の間に見出す者にして始めて然り。己れを天地の間に見出す者は凡ての者を天地間に見出す。卽ち一個人の一擧手一投足、社會の出來事、自然の變化、凡て此の不可思議なる、爭ふ可からざる、大事實なる、生ける、永久なる、無窮無邊なる、此の玆の宇宙の裡に見出す也。……吾が、己れ及び事實を天地の間に見出し感受する能はざる時に於て、如何に言ふ可からざる悶を感ずるぞ。吾が自ら淺墓を感じ、皮相的を感ずる時は卽ち此の時なり。」これは二十六年七月獨歩が二十二歳の頃の日記に自ら記すところである。此れに似通つた意味の文句は『欺かざるの記』の到る處に繰り返されてある。これ等の文句のうちには、いくらか意味內容の充實してゐない氣味のものもあるが、獨歩本來の性格が極めて眞摯であつたことを知るには不足はないのである。獨歩は詩人小說家として人生を思ひ考へたのではなく、一個の人間として自己の生を思ひ、また弘く人間の生活を思うた。生活の意味、生活の價値を考へるといふことは、彼自身の內から湧き出でた深い强い必要であつた。飮食便利の必要であるやうに、人生の考察冥想は寸分時も打ち棄てて置けぬものであつた。彼はこの意味から一個の哲學者でありまた精神家である。彼の哲學は幼稚であり單純であるかも知れぬ、不徹底であるかも知れぬ。しかしながら、彼は眞正なる意味に於いて哲學を必要とし、且つ自らそれを造ることに努力した人である。彼の好んで用ひた言葉で言へば、彼は哲學の必要を痛感し、また自ら造つた哲學を痛感體得せんとしてもがいた人である。彼が文章の習練から經上つた世間並の小說家と比べて、その風格を異にしてゐる最も主要なる點は、このところに在る。獨歩は經世家風のところを有つてゐたとか、宗教道德上の教導者といふやうなところを有つてゐたといふ批評のあるのは、もとより當然のことであつて、人間として人間の生活に思ひを潛めた彼が、而して殊に前に言つだやうな種々別方面の刺戟を受けた彼が、文章を操る舊來の小說家と違つてゐるのは怪しむに足らない。

獨歩は小說家となり詩人となる前に、先づ人間としての自己の生活を思うた。「吾に著作者のヴァニテイあらば、神よ、卽座に吾を殺せよ。希くは美妙を發揮する詩人として滿足するを得たし。此心だに保持するを得ば一文を作り得ずして死すとも可なり。著作其事は何の意味も

なければなり。吾は先づ吾が信ずる所によりて人として生存し、其の次に著作者として爲さんことを望むのみ。」二十七年三月二十三歳の日記には斯う記してある。今日の眼から見れば、別に異常の覺悟でもない。島崎藤村氏の『新片町より』の序にも、こんな樣な意味の言葉があつたと覺えてゐる。極めて平凡な眞理である。而もこの平凡な眞理が多くの人々の胸に沁みわたり、多くの人々を實際に動かし始めたのは、つい近頃のことである。尤も獨步が幾年前にこんなことを書いてゐようと、それが大してその人をえらくするわけでもないが、しかしまだ文學者として何一つ書かぬ前に、これだけの覺悟を有つてゐたといふことは、餘程おもしろいことと思ふ。かういふ態度覺悟からして、獨步は初めも終りも變つてゐないのである。十四五年前の考へが、十四五年後の今日にも、潑剌たる生命を有つて動いてゐる。ぼんやりしてゐてかういふ意味の深いことに想ひ到つたのでは勿論ないが、この邊を考へても、獨步が天分の豐かな、そして、極めて眞摯な人であつたことはわかると思ふ。迷ひ抜いた末で獨步は結局詩人として立つ決心をした。しかし、その決心は、その晩年まで、いくらかづつ動き／＼してゐたらしい。それは獨步が初めから文學者となるつもりで、他の事業などは少しも念頭にないといふ肌の人ではなく、生活の意義乃至價値の問題の苦悶から進んで詩人となる決心をしたところから、また彼の生れつきに、華美な動いてやまない實生活に興味を感ずるところがあつた爲めに、また彼が少青年時代に受けた影響刺戟が種々の他の方面から來てゐた爲めに、それこれの理由で、自分は必ずしも文學者としてのみ世に立たねばならぬ筈はないといふやうな心持から、政治の方面や、實務の方面に手を出して、一生懸命に働いたのであつたらうと思ふ。又或る時は文壇から正當に認められなかつた爲めに、他の方面へ行くことを助けたこともあつたらう。とにかく彼はそれ等の他の方面で働くことを思ひ切つて、專心文學者となることの出來なかつた素質と境遇とを有ち、且ついくらかは自ら造りもしたのである。獨步自身日記のうちでところどころ反省してゐるやうに、彼は相當に物質的の榮華を欲する念乃至虛榮心を有つてゐたらしい。些細なことであるが、衣食その他物質上の供給に就いて、わり合ひにやかましい又贅澤な好みがあつたことや、その方面で負け惜しみの强かつたことなどを考へると、尤も我まゝな潔癖な、好き嫌ひの何につけても烈しかつた人だからでもあらうが、いくらかは物質欲とか虛榮心とかの混つてゐたことも事實であらう。しかし彼が文學以外の方面に手を出したといふことが、ひとへにその虛榮心に基づくといふのでは勿論ない。獨步の氣性として、實世間のことはただ傍觀してゐればよいといふ氣にはなれなかつたのであらう。自分もその中へ飛び込んで一つ何か仕事をして見たいといふ熱血性、而もよほど空想的な熱血性が、ついつい彼を動かしたのであらう。そのくせ彼自ら實世間に手を出すことの不向きなことを夙に知つてゐたのである。『欺かざるの記』にも明らかに書いてある。また後になつて自分は空想の實行者だと自分から評してゐる。それでありながらやはりその方を斷念することは出來なかつたらしい。彼は實に現世的執着の非常に强烈な人であつた。彼があんな風の「詩人」となることの出來たのも、一方から考へると、その强烈な現世執着の心があつたからだと言へるのである。

三

獨步が彼自ら好んで言つた「詩人」となる決心をするに就いては、種々に思ひ惑うたのである。

或ひは「昨夜吾は斷然文學を以て世に立たんことを決心せり。則ち『人間の教師』として吾が力に ふだけを務めて此世を終ることは最も吾が命運に適し、吾が生を値するを信じたり。……吾は自ら大なる名譽高き文學者を希望するに非ず。文筆を以て小學校教師たるを得ば甘ずべし。只だヒューマニティーの自然の聲を聞き、愛と誠と勞働の眞理を吾が能くするだけ世に教ふるを得ば吾が望み足れり。」といひ、また、「あシェークスピア、ゴエテ、ユーゴー、新聞記者、大臣高等官、グラットストン、ピット、ナポレオン、クロムウエル、文學者、かかる題目に由て築かれたる虛榮城中を脫して、かの三家村里、若しくは佐賀村岩城山下の同胞人類の生命命運を想へ、人生果して何の意ぞ。「多くの歷史は虛榮の歷史なり。バニティーの記錄なり。人類眞の歷史は山林海濱の小民に問へ、哲學史と文學史と政權史と文明史の外に小民史を加へよ、人類の歷史始めて全からん。」といひ、また、「吾れ詩人の本分を考ふるに、此の人間の人性が人間胸臆の深底に於て發する幽音悲調を聞いて之を說明し、之れを教ふるに在り、則ち此の幽音悲調はクリストよりも、孔子よりも、ウォルヅウォルスよりも、又シェクスピ・ア、王陽明よりも聞くを得べし。又た自らの靈よりも聞くを得べし。聞いて而して之れを發揮する所以は則ち以て人間を教ふる所以也。」といひ、また、「吾が目擊する所の此の社會の、此の人々の生活の有樣こそ深き意味のある事なれ。人生意味ありとすれば、此の目擊の事實の底にこそ大意味大奧妙も存するなれ。……此の擾々たる生民、遂に如何、畢竟如何、彼等の生命、彼等の精神、到底何の意味かある、大人聖哲の生命の意味は寧ろ心悟するに難からず、彼等は各々理想を有し、高遠偉大なる希望に由りて一生を走りたる者なれば、彼等の理想を看る時は彼等の生命の意味も感得し得べし。只だ彼の紛々擾々たる生民多數の生命に至りては、其の意味遂に如何。思ふ思うて玆に至る實に茫然たらざるを得ず。思ふに人生の悲觀者が血涙懷恨に堪へぬも、此の有樣に打たれしにあらざるか。然り、宗教も玆に起りしにあらざるか。然り。」と言つてゐる。

これ等の言葉が、ワーヅワースの藝術觀人生觀から多くの刺戟影響を受けてゐることは言ふまでもない。「幽韻悲調」は即ち sad music of humanity である。「小民史」は即ち low and rustic life の記錄である。「人間を教ふ」といふは殊にワーヅワース式であつて、即ち、自分の詩は孰れも a worthy purpose を有つてゐる、事象には強い感情が伴つて起り、其の感情には必ず一個の目的意味が伴ふものである、自分のこの考へが誤りなら自分に詩人たる權利はないと激語したワーヅワースの意氣は、即ち獨歩の「人間を教ふ」べしといふ意氣である。獨歩は「詩人」として終始これ等の精神意氣を失はずまた渝らなかつたが、殊に彼の最も著しい特色は、「生きて肉體に由りて事情を作り、互に隔離せらるゝと雖も等しく一死の必ず來る可き命運に由りて不知深酷の國に合一すべきを思ふ時は、路傍の人にすら猶ほ握手せんことを欲するの感ある也。吾は自由なる天地の靈の一なるを自認し得たるが故に詩人たる可し。」と言ふ一節によく現はれてゐると思ふ。殊に「路傍の人にすら猶ほ握手せんことを欲するの感ある也。」といふ一句には、深い深い情味があるではないか。吾等人間の生は紛々擾々として、自ら思ひ味ふこともなく、またもとより互ひの上を思ひ味ふこともなく、空々漠々のうちに過ぎて行き消えて行く。大海の波浪の如く、打ち寄せ打ち引く人生の潮は、千古萬古渝りなく果なくどよめき動いてゐる。而も曾て在りし人々、今在る人々は、皆すべて大海の漣波の如く、渦の如く、

寸分時のうちに死滅してしまふ。自然の偉力を思ひ人間の生のもろさを思へば、悠々たる哀感の胸に響きわたつて、慟哭しても尙ほ足らぬ物悲しさを覺える。自然の力のままに押し流されて行く人々の別々の寂しい哀れな生活に何の意味があるか。それを思ふとぢつとして傍觀してはゐられない氣持になる。而も皆そんな事は思ひもせず感じもせずに、騷がしくその日その日を送つて行く。人間生活の悲しい深いまことの情味は、その騷がしい底の方を幽かに流れてゐる。さう思へば尙更懷かしく悲しくまたもどかしい。聲をあげて慟哭してこの心を傳へ得るものならさうもしたい。手をとつて哀泣してわが熱情を披瀝し得るものならさうもしたい。皆知らぬ顏をして人生を通り過ぎてしまふ。こんなにして自分も人も共に泣いたり笑つたり苦しんだり悅んだりしながら、いつの間にか過ぎてしまふ。人生はもどかしい、悲しい。さう思へば矢も楯もたまらぬほどに懷かしく、見知らぬ人なら尙更のこと手をとつて言葉もかはしたい。獨步は恐らくかういふ風に思つたのであらう。この心持こそ彼の一大自然の不可思議に驚異する一心ではないか。一永久に存する此大自然の幽遠測り難き懷裡に坐する感ではないか。彼の日記には如何なる文句が記してあるにしても、彼はこの永遠悠久なる大自然の懷裡に在る人間の生活を、何となく果敢なく、哀しく、力弱く、心細く感ぜずにはゐられなかつた。またそれ故に一層現世の生活を懷かしく貴く惜しく思つたのである。彼は永遠なる自然の偉力を畏るれば畏るゝほど、益々現世の生活を愛惜する念が強く烈しくなつたのである。

尤も獨步は生來多感熱情眞摯の人であつた故に、彼がすべての情に厚く、誠意を人に惜しまなかつたことは性の自然である。彼は記して言ふ、「決して悲哀寂寞の思ひ有る可からず。吾卒然、寂寞の感に堪へぬ事あり。天地殆んど吾に取りて氷洲の如き感あり。今日も亦た、獨り自由社の一室に沈思に陷りて、屋外は所謂銀座街頭、吾が居る處は新聞社なりしにもかゝはらず、實に天地の寂寞、吾の孤獨なる感に打たれたり。然る時、忽然故鄉の父母を思ひ起したり。殊に母の顏容のあり〳〵と目前に浮び出でたり。オヽ哀れの母よ！　慕はしき母！　故鄉に母あり秋風の淚の句、悠然として現はれ來り、つぐに一滴の暗淚を以てせり。吾れの凍れる胸は急に愛の微光をしたゝめぬ。母愛すべく、父愛すべく、弟愛すべく、友愛すべく、人々皆愛すべく、天地山川皆愛す可き感情は泉の如く湧き來れり。」また東京專門學校同窓の舊友會のことを記したところには、「吾は初めより此の會に就て一種の感に打たれぬ。會の散ぜんとする時、此の會は永久續かんことを望み、兩三年の後は又た會合す可しと云ふ相談に決す。余歸宅後此の相談を想起し、悲歌飮泣す。吾等少壯の者、各々天の約束に充たされて地に來る。そも至情か、アヽたゞそれ至情か、希くば詮ずる所遂に如何。‥‥永劫無窮の者、たゞ友愛も亦大に至情ならしめよ、然らば汝等永久に生きん。」と記してある。「親友はわが戀人なり。」「吾は親友狂なり。」と言つたばかりでなく、その生涯を通じて極めて友情に厚かつた事實は、日記中に記された是れ等の文句を生かしてゐる。彼がその兩親弟を思慕する念の切なりし事は言ふまでもない。またその周圍に比較的多くの心友を常に有つてゐたことも言ふまでもない。彼の人を懷かしみ愛する心は誠實であり熱烈であつた。彼は自分を犧牲にすることの出來ない人ではなかつた。この美しい性質は自然とその周圍に多くの人を引き寄せることが出來た。獨步社の悲境に陷つた頃多くの友人が彼を助けたのもこの德があつた爲めであらう。

今の文壇を見渡しても、種々の因縁や利害關係の爲めに親交を結んでゐるらしく見える人はあつても、眞實の情愛を以て交つてゐるものがどれだけあらうか疑はしい。打算を超越した意氣相感の交りは極めて乏しいやうに見える。文壇の交友には節操が乏しいといふのは、遺憾ながら半面の事實である。獨歩はこの點では幸福な人であつた。

獨歩は熱情多感の人に有りがちな、極めて氣の弱いたちであつた。彼は自分の弱きことを切に感じた。彼の我がままも、つまりはその弱い氣性から、一切の自分を投げ出して、兒の母に縋るやうなたぐひの我がままであつた。家人に對しても表面ではやかましく言つても、かげでは深く深く思つてゐた。彼は人を憎み得るほどに心の硬い、また強い人ではなかつたのである。彼は直情徑行、赤心を他人の腹中に布かずしては、物足りなく心細いやうに感じたのである。その『病牀錄』に「余は蒼茫極りなき天地に介立して、俯仰千古に亙り、大自然と相面して、自己の隻影を顧みるの時、今更の如く吾が生の孤獨と荒涼と不安とに堪へず、何物か神祕の力に賴らんと欲するの情極めて切なり。」とあるのは獨歩の心細い弱い心持をよく傳へてゐる。彼は人間の微弱を切に感じた人である。彼自ら同じく『病牀錄』に於いて「余は空想家にして又空想の實行家なり。日夜空想を夢みて、其空想を實行せんと欲せり。而もそを實行すべく余は餘りに現實に對して執着の心薄し。之れ余が奈何なる事實にも成功せざりし根本原因なり。現實に執着の心薄きは、余に絕えず脫俗的觀念あるが故なり。大自然に對して吾が生の荒涼と微弱とを痛切に感ずる時、余は泣いて此煩雜の世を遁れ、孤獨以て天地の間に介立し俯仰また物累なきを希ふ。而も此遁世の感や水の如く充實し來り、忽ち又水の如く流れ去る。あゝ生に對する此哀痛の感今一層深く、銳く、長く連續するあらば、余は既に世を遁れしならむ。曷ぞ又塵俗の間に伍せんや。現世に執着すべく余は餘りに脫俗せり。而も俗世を遁るべく余は只管に生の孤獨を嘆ずること能はず。」と言つてゐるのが果してよく彼の意を傳へてゐるとすれば、これには多少の解釋を加へて見ねばならぬ。彼自ら現世に執着の心薄しといふのは、實はその執着の心の強かつた證據である。彼が現世を熱愛してゐたればこそ、彼は自己の、またすべての人間の生活の微弱なるを思うて悲しまざるを得なかつたのである。彼は生の荒涼と微弱とを痛感して哀情の胸に溢るるを禁じ得なかつた。しかし彼はそれが爲めに脫俗脫離の念にのみ任すことは出來なかつた。彼が俗世を遁るべく余は只管に生の孤獨を嘆ずること能はず。」と言つたのは、彼が地上の生活に悲哀を感じながら、而も尙そこに捨てがたい強い執着恩愛の情を感じた證據ではないか。彼が不起の病牀に橫たはつて、生死の岸頭に悶々した心情は、實にこの絕ちがたき切なる恩愛執着のなやみではないか。心弱き獨歩は、大自然の偉力を畏れた。現實の生は微弱にして流轉變化極まりない。いづこにか自己の安心の地を見出したい。而もその微弱にして流轉變化極まりなき現實の生を他にして、わが一心を寄託すべき安住の地は何處にあるか。すべての物は皆逝く。而も皆逝くが故にこそ、最も懷かしく惜しきは其のすべての物、すべての人、すべての自然、要するに現實の生死の姿ではないか。獨歩はこの意味から極めて現實の執着の強かつた人である。煩惱を絕ちかねた人である。彼は其の執着煩惱を脫離するには餘りに多感であり熱情的であつた。彼は神的、超越的、靈的、頓悟的の人ではなく、あくまでも人間的、現世的、肉的、煩惱的の人であつた。彼

が自己の情熱の爲めに幾多の苦しみと幾多の失行とを避け得なかつたのも已むを得ぬ次第である。僕は獨步の一面に極めて醜い極めて弱いところのあつたことを認めざるを得ない。彼はこの弱い心を懷いて天地人間の間に慟哭したのである。人間として詩人としての獨步はそこに見られる。

四

獨步の作品には、流轉變化する過去の生活を追慕するものと、無名平凡の「小民」の生活を錄したものと、何れにしても一種の悠々たる哀感を誘ふものが多い。而してその哀感の奧に、沈默せる自然の力、潛める運命の神秘を思はしめぬものはないのである。而してそれ等は皆前に言ふ如き獨步その人の性格の發露である。而してその性格もその作風も、始終一貫して目に立つほどの面變りをしてゐない。獨步は純一な、生れたままの人であつた。

流轉變化する過去の生活を思慕するものには、『少年の悲哀』、『忘れえぬ人々』、『馬上の友』、及び『畫の悲しみ』などがある。これ等は皆詩である。人間の逢遭別離は、意味もなき如くにして過ぎ行く人生の最も意味深い事實である。逢ふべくして逢つたのでもない人々の來しかた行く末や、過ぎ去つた生活の移り行きを思へば、そこに不可思議なる運命の力を感ぜざるを得ない。生死の海に漂ふ人間の多種多樣なる運命は、音もなく永劫のかなたへ流れて落ちて行く。『酒中日記』の主人公の弱い、はかない、而も肉的快樂的の生涯、『春の鳥』の白癡少年の哀れ深い物語、『源おぢ』と紀州との不思議なる身の上、『都の友へ、B生より』、『湍〻』ことに『田舍町』、『波の音』など、すべて皆平凡無名の人々の生死の大海に流れ漂ふ姿である。『正直もの』にせよ、『女難』にせよ、『第三者』にせよ、『窮死』にせよ、これ等の作を讀んであとに殘る幻像は、はかない脆い人間の生活、而もその間に倘現世の快樂に執着して、思ひ切りかね棄てかねてゐる哀れに花やかな凡人の姿である。ぱつと照らす夕日の一時の花やかさが、いつとはなしに、誰にも知られず薄れて行く心地である。――哀しい切ない心地であるが、ぢつと沈んだ落ち着いた哀しみではなくて、やるせない、もどかしい、胸のもだ〱するやうな、肉の悲哀である。あくまでも執着煩惱の悲哀である。已に肉の悲哀であり執着煩惱の悲哀であるから、何となく重い。『運命論者』や『酒中日記』は、仕組みのことは取り除けて見ても、いかにも重苦しい氣持を與へる。それが『泣き笑ひ』や、『竹の木戶』や、『疲勞』や、『あの時分』には、いくらかヒューモアの氣分が加はつて、自ら違つた意味を有つてゐる。獨步その人にこのヒューモアの氣分はあつたのである。彼は人生を哀しき運命の世界と見た故に、そのうちに哀樂悲喜する人間の生活を、哀しき戲れとも見ることが出來たのである。またそれを哀しき戲れと見なければ、あまりに重苦しく堪へがたいやうな氣持もしたであらう。これ等の作品の主人公の心持、若しくはこれ等の作品全體が與へる心持は、また實に作者その人の生活に對する心持であつた。

流轉生滅する平凡なる人々の生活に、不可思議なる運命を痛感したのは、明らかに獨步がワーヅワースの精神から學んだところである。而もワーヅワースには獨步ほどの煩惱なく執着なく、その態度は、いかにも靈的、超越的であつた。ワーヅワースには哲人の靜かなる心を懷いて世上を哀れむといふ風があつた。どこか澄み切つたところがあつた。そこへ行くと獨步はあくまでも熱情の人である、煩惱の人である。彼はこの不可思議なる運命の姿を、沈靜なる心

を懷いて哀れむだけに止まることが出來なかつた。彼はすべての運命の姿を、我れならぬかなたのこととしてのみ見ることが出來なかつた。獨歩の見るさまざまの人の運命は、やがて直ちに彼自身の運命であるとしか思はれなかつた。憫れみ慰めるといふワーヅワースの態度とは違つて、我も共に苦しみ、我も共に悲しみ、我も共に泣いた。ここは獨歩がワーヅワースに比べてはるかに熱情的であり、隨つてまたはるかに弱く、女性的であつたところである。彼がその作品の情味にいくらかヒューモアの氣分を帶びて來たのも、寧ろ女性的な、弱い、やさしい氣質の自然の變化である。

彼の氣弱かつたことはその幼少時のいろいろの逸話をあげるまでもなく、その日記に明らかに現はれてゐる。『欺かざるの記』は、反省に反省を重ねて、殆んど日記の全部が反省の記錄であると言つてもよい位のものでありながら、どこかにイージー・ゴーイングな氣質がちよいちよい見えぬでもない。後悔の多い正直な、はにかみやの獨歩を目の前に出して來る。自ら輕卒を責め、人を凌ぐ我がままな勝氣な性質を戒めながら、尙それが爲めに輕侮せられるやうな場合も少なくはなかつたらしい。彼が二十七八年の役に國民新聞の從軍記者として軍艦千代田に便乘してゐた折にも、その士官次室に於いて少壯の士官たちと論爭して、敢て下らず、短軀瘦身の彼はいくらかその連中から生意氣な男といふ風に思はれてゐたらしい。二十七年十二月の日記には、その爲めに艦內の生活を不快に思つたらしく、「目下の吾が心の不穩を靜めん爲めに、吾が過去快心の事を誌して左にならべ、暫らく『過去』てふ懷かしき故鄕の女神と遊ばんと欲す。」と書いてある。負けぬ氣の強い獨歩は、不快の情を遣るに由なく、僅かに樂しかりし過去の追想に悶を排したのであつたらう。

彼が氣の弱い、やゝもするとイージー・ゴーイングになりやすい氣質を有つてゐたことは事實であるが、またそれが爲めに、彼が自省に力めたことも著しい。『欺かざるの記』は實にその反省錄である。殊に彼の生涯に深刻な悲哀の感銘をとどめた失戀の後の日記には、最も鋭き自己批評のあるを見ることが出來る。僕はここでその事實に就いて批評をしようとは思はぬ。この特殊なる事實によつて、獨歩が殆んど自己の價値を認め得ざるまでに失望し、自棄せんとするまでに苦悶し、自ら愛の足らざりしを悔い、狂熱の事を誤りしを悔い、謙遜忍耐の新生活を始めんと決心したその間の痛ましき心事を想へば、この一事が恐らく最も深い「人間の苦しみ」の經驗を與へたのであらうと思ふ。獨歩の人物並びに作物に見える剽逸な淡いヒューモアの氣分は、恐らくこの苦い味ひによつて一層強められ育てられたのであらう。淡い諷刺の趣きもこゝらの經驗が助長したであらう。

五

獨歩が「人生觀なきものは憐れむ可し。」と言ひ、「先づ人として生存し、その次に著作者として爲さんことを望む。」と言つて、人生根本の問題に先づ思ひを潛めたことは前に說いた通りである。この事實は三十年の四月、田山花袋、松岡國男、太田玉茗、矢崎嵯峨のや、宮崎湖處子等と共に出した詩集『抒情詩』中の彼の作に就いて見ても明らかである。この集中の詩が皆多く感傷的戀愛の詩であることは言ふまでもないが、ただ獨歩の『獨歩吟』のうちには、他の作家と趣きを異にしたもの、卽ち獨歩の一生を通じて渝らなかつた獨自の想念と感懷とが歌つてある。卽ち「驚異」と題して

ゆめと見る／＼はかなくも、
なほ驚かぬ此のこゝろ、

吹けや北風此のゆめを、
うてやいかづち此のこゝろ。
をのゝき立ちてあめつちの、
くすしき樣をそのまゝに、
驚きさめて見む時よ、
其の時あれともがくなり。

と歌へる一篇は、やがてまた『牛肉と馬鈴薯』に於ける岡本誠夫の心である。『岡本の手帳』には斯う書いてある。「わが切なる願とは、夢より醒めんことなり、夢を振ひおとさんことなり。この不思議なる、美妙なる、無窮無邊なる宇宙と、此宇宙に於ける此人生とを直視せんことなり。われを此不思議なる宇宙に裸體のまゝ見出さんことなり。不思議を知らんことに非ず、不思議を痛感せんことなり。死の祕密を悟らんことに非ず、死の事實を驚異せんことなり。信仰を得んことに非ず、信仰なくんば片時たりとも安んずる能はざる程に此宇宙人生の有のまゝの恐ろしき事實を痛感せんことなり。」而してこの岡本の願ひは、やがて直ちに獨歩その人の願ひである。彼がその日記に於いて、「嗚呼此の自然は不思議なり。吾は不思議なり。人類は不思議なり。生活は不思議なり。凡ての關係は不思議なり、されど未だ常に深玄に眞直に此の祕密の感に打たるゝ能はず。」「生活の變化は人をして自然を忘れしむ、宇宙の不思議を忘れしむ。」といひ、「天は吾をして人間の弱點を自覺せしめ給ふが如し。人間の弱點は何處に在りや、其の最大なる弱點は如何。曰く、天地人生に就て眞面目なる感情を常に絶ゆることなく保持する能はざることなり。一言以てこれを斷ずればシンセリティーならぬことなり。更に言ひ換ふれば、生命そのものの不思議なることを感ぜざる 在り。」といひ、「吾が友は忽然として二人此の より去りたり。吾は平然として何の痛感大悟もなし。吾が情は此の恐ろしき大事實に動かず。……吾が切に此の大事實に就て痛感せん事を欲す、而も痛感する能はざるは奇なる哉。」といひ「あゝわが心のなやみはわが心の眠り居ることを自覺せる事なり。吾が心の誇はこの自覺なり、されどわが心の悲はこの自覺なり。」といひ、「吾未だ吾ならぬ此大自然に驚嘆するシンセリティーを十分有する能はず。電光の如く時々閃き來ると雖も、忽ちにして電光の如く又消え去る。未だ胸間の大光明となる能はず。」と言つてゐるのは、皆ひとしく天地人生の神祕に驚異する「赤條々の大感情」を求める煩渇の聲である。この痛切なる欲求は、日記の到るところに繰り返されてある。驚異を欲する心はまた明らかにワーヅワースの精神である。僕はここにこの心に就いて註釋を加へることを控へる。獨歩の宇宙人生觀照の態度は、彼自ら以上の文句に於いて、また『牛肉と馬鈴薯』、『惡魔』、乃至『號外』などの作品に於いて、ほぼ言ひ現はし得て居ると思ふ。

獨歩は自然を愛し自然を畏敬することをワーヅワースから學んだ。しかし彼の性分は殊に彼をして自然の神祕不可思議に畏れしめたのである。彼は自然の力に深き恐怖を感じ、一體としての宇宙に無限の畏怖を感じたのである。而も畏怖し恐怖する宇宙自然のうちに在りながら、倘平然安然として生活する自己の不眞面目に想ひ到るとき、彼は慟哭するばかりに自ら悔い悲しんだのである。彼は自ら弱くして常に驚異憧憬の生活を持續する能はず、物に狎れ形に褻れ自囚盲目の生活に墮し行く頑硬なる自己を詛つたのである。小なる自我を空しくして、「人類的主觀」に返れ、「大主觀」に返れ、彼はその日記に幾たびもこの意味を繰り返してゐる。彼はこの心の湧く毎に、初めて眞我に立ち返る思ひをしたのであらう。また初めて自然人

生を觀るの眼を開いた心地がしたのであらう。

彼は弱い人であつた。畏怖する大自然の前にすら、常にその畏怖の念驚異の情を以て對する能はざるほど自己の薄弱輕浮なることを感じたのである。この弱い心が、而してまたその弱きことを悔いる深い悲しみが、彼をして詩人たらしめたのである。この自ら悔い自ら歎く悲しみがなかつたら、彼は或ひは宗教に自分の生活を見出したのであらう。彼がその最後まで遂に信仰を得ずして逝いたのは、彼の弱い性分によることが多かつたであらうが、しかし彼はその自己の弱きことを知らぬものではなかつた。それを知ればこそ、而してまたそれが人間の弱みであることを知ればこそ、彼は哀泣慟哭しても倘飽き足らぬ無限の執着と悲哀とを感じ得たのである。

獨歩が四十一年二月の『早稻田文學』に掲げた『自然主義と余』といふ文章は、彼が自然主義と自己との關係を説いて、ワーヅワースの影響感化を受けたることを言ひ、自己の立場を明かにしたものである。その最後に「悠久にして不思議なる、生死を吐呑する此大宇宙、爾が如何にもがきて飛び出さんとするも能はざる此大自然、事實中の大事實、當面の眞現象に就ては何等の感想をも懷かない文人が、如何に巧みに人間の事實を直寫したからとて、それは一藝當たるに過ぎない。斯くて文藝何の値ぞ。所謂自然主義何の値ぞ。」とある一節は、始終一貫して渝らざりし獨歩の人生觀上、藝術の立場を明らかに示すものである。彼は一種の運命論者であり、神祕主義者であり、而してまた同時に物質的機械的世界觀の壓迫を感じてゐた人である。寧ろその機械的世界觀の壓迫を痛切に感じてゐた爲めに、而してその壓迫に堪へなかつた爲めに、かくれ家を求めておのづから神祕的運命論者となつたのである。人生は流轉し消滅する。それを圍繞し支配して、儼乎たる永劫の沈默を守る自然の威力の前に、微弱なる人間は慴伏して慟哭する他はない。人生はうら悲しい。寂しい。泣いても、もがいても、じりじりと吸ひつけて行く目に見えぬ運命の磁力には、萬古を通じて渝らぬ不可思議の神祕が潛んでゐる。彼は『山林に自由存す』と歌つて、自然の生活に憧れたが、しかし彼が見たる「石狩の野は雲低く迷ひて、車窓より眺むれば、野にも山にも恐ろしき自然の力あふれ、此處に愛なく、情なく、見るとして荒涼、寂寞、冷酸にして且つ壯大なる光景は、恰も人間の無力と儚さとを冷笑ふが如くに見えた。」彼は「時雨の音の淋しさを知つてゐる。然し未だ曾て、原始の大深林を忍びやかに過ぎゆく時雨ほど淋しさを感じたことはない。これ實に自然の幽寂なる私語である。深林の底に居て、此音を聞く者、何人か生物を冷笑する自然の威力を感ぜざらん。怒濤、暴風、疾雷、閃電は自然の虛喝である。彼の威力の最も人に迫るのは、彼の最も靜かなる時である。高遠なる蒼天の、何の聲もなく唯だ默して下界を視下す時、曾て人跡を許さざりし深林の奧深き處、一片の木の葉朽ちて風なきに落つる時、自然は欠伸して曰く、『あゝ一日も暮れんとす』と、而して人間の一千年は此刹那に飛び行くのである。」「要するに理想は冷やかにして人情は温かく、自然は冷嚴にして親しみ難く、人寰は懷かしくして巣を作るに適して居る。」彼は「空知川の岸邊」に於いてその自然觀を殆んど殘りなく記してゐる。彼は自然を畏怖する點にツルゲーネフと相似てゐる。しかしながら彼は冷嚴なる自然を畏怖して慟哭せずには居られなかつた。彼は冷嚴なる自然と相對して沈默するに堪へなかつた。

　要するに悉逝けるなり―

　在らず、彼等は在らず。

秋の入日あか〳〵と田面にのこり、
野分はげしく颯々と梢を拂ふ。
うらがなし、あゝうらがなし。
水とすむ大空かぎりなく、
夢のごと淡き山々遠く、
かくて日は、
あゝ斯くてこの日は、
古も暮れゆきしか今も又！
哀し、哀し、我こゝろ哀し。

と歌つた『秋の入日』の一篇も、彼が最後の散文詩『沙漠の雨』も、皆彼が慟哭の聲である。而してこの慟哭し哀泣すべき自然の間に介在して、役々としてまた嬉々として生を消し行く人間の生活を想へば、まことに哀しむべき一場の戲れとも思はれる。瓢逸なる獨步は哀しき獨步の半面に過ぎない。

天地人生の祕義を痛感するを得ずと言つて哀泣慟哭した獨步も既に亡し。彼は果してその最後の一瞬に當つて、天地人生の祕義を痛感し得たのであらうか。

（明治四十三年一月）

◇

近代文學を讀んでは、その生命の爭鬪の深く強きを思ふとともに、更に一步をすゝめて深く大いなる渾融統一の境に到らんことを願ふ。私がかつてイブセンやトルストイやフローベールやダヌンチオに就いてその蔽ひがたい懊惱苦澁の色調を指摘し、更に何等か一層深く一層大いなる生命の力の、渾然として一つに輝く生々光明の心境を求めたのは、恐らくまたイブセンその他の人々の暗默のうちにひとしく求めてゐた境であらうと信ずる。將來の文學は、必ずこの明るい深い大いなる生々伸張の力に向つて、吾々の眼を轉ぜしめ吾々の讚嘆を要求するであらう。而してこの深く大いなる渾一の境は、決して休止や妥協を意味するものではない。大いなる爭鬪、大いなる反抗の後に來る大いなる飽和、大いなる渾融である。大いなる分裂の後に來る大いなる集中である。然しこの集中や統一や飽和や渾融は、要するにまた決して絕對的のものではない。更に大いなる爭鬪と更に深い分裂とは、必ずまたその後に生ずるであらう。この一層大いなる爭鬪と一層深い分裂との爲めに生命の力の集中と統一とを求むべき時が今吾々の前に迫りつゝあるやうに感ぜられる。イブセンやトルストイやその他の人々が私の心に殘す不充足の感じは一層大いなる爭鬪と分裂とを豫想するこの渾融と集中とによつて滿たされるのであるやうに感ぜられる。少くとも私は、イブセンによりトルストイによつて、大いなる集中と渾融とに行かねばならないことを深く感ぜしめられる。彼等の後に起る可き文學は、必ずやこの深い大いなる生命の渾融をその中心の特色としたものでなければならないことを感ぜしめられる。私はまた實にさうであることを切に要求する。この要求や豫想は、決して近代文學の幾多の天才を侮蔑し非難することにはならない。この要求や豫想は決して彼等が生命の集中と渾融とを棄てて顧みなかつたことを意味するものではない。否寧ろ、これ等幾多の天才が、深い大いなる生命の力の集中と渾融とを求めて、暗い寂しい奧深い人生の路を鬪ひすすんだればこそ、この要求と豫想とがあり得るのである。この要求や豫想は、所詮惱み求めて來た彼等の深い强い生命の力によつて裏づけられてゐるものである。

（『薄明の中より』より）

アーサー・シモンス論

一

アーサー・シモンス(Arthur Symons)に就いては僕は十分なことを知つて居ない。殊にその經歴の詳しいことは殆んどわからない。ただ、千八百六十五年二月二十八日にイギリスのウェールスで生れて、三十六歳で娶つたこと、處々の私立學校で學んだこと位を、文學年鑑によつて知るばかりである。隨つてシモンスを知るには二十種ばかりの著述に依るほかはない。それも僕は悉く讀むことが出來なかつたから、この研究は不十分なものである。シモンスは詩を書き、小説を書き、評論を書き、ダンヌンチオの戯曲の飜譯をもして居る。評論も文藝のあらゆる部面に亙つて居る。極めて多方面な人である。しかしそれ等の多くの著述のうちで、彼の特色を最もよく見ることの出來るのは、質の上からも量の上からもすぐれて居る詩と評論とである。

シモンスの詩集はすべて八册ある。その中で僕の見たのは六册だけであるが、その中の詩が殆んど悉く戀愛を中心にしたさまざまの情緒氣分を軟らかに、安らかに、單純に歌つてある。たとへば『ルネー』(Renée)といふ詩で、

Rain, and the night, and the old familiar door,
And the archway dim, and the roadway desolate;
Faces that pass, and faces, and more, yet more:
Renée! come, for I wait.

Pallid out of the darkness, adorably white,
Pale as the spirit of rain, with the night in her hair,
Renée undulates, shadow-like, under the light,
Into the outer air.

Mournful, beautiful, calm with that vague unrest,
Sad with that sensitive, vaguely ironical mouth;
Eyes a-flame with the loveliest, deadliest
Fire of passionate youth;

「雨、そして夜、そして古い馴染の戸口、そして薄暗い潜り廊下、そして人氣のない路、通る人の顔、また人の顔、まだ通る、まだも通る。ルネーよ、來ないか、待つて居るのに。闇の中から蒼白く、物凄いほど白く、雨の精のやうに蒼ざめて、髪に夜闇をこめて、影のやうに明りの下を、ルネーはよろめいて來る、そとの空氣へ。あのとりとめのない不安を懷いて、憂はしげに美しく、おちついて。あの感じの鋭い、何とも言へない皮肉な口もとをして、うち沈んで。眼は非常に美しい恐ろしい若い情熱の火に燃えて。」とあるのや、殊に『パステル』(Pastel)と題して、

The light of our cigarettes
Went and came in the gloom:
It was dark in the little room.

Dark, and then, in the dark,
Sudden, a flash, a glow,
And a hand and a ring I know.
And then, through the dark, a flash
Ruddy and vague, the grace
(A rose!) of her lyric face.

と歌つてあるなどは、闇のうちにおぼめく光りと匂ひとを、花火のやうに印象派風の筆つきで粗つぽく單純に描いてあるばかりで、而もそのうちに生き生きした鋭い感じが軟らかに現はれて居る。(シモンスの詩などは殊に、飜譯の出來ない程に言葉が軟らかに用ひてあるから、ここに飜譯を附け加へるのは僕の本意ではない。『パステル』のやうな詩は、取りわけ僕の拙い飜譯を附け加へない方がよいと思つて、わざと省いたのである。その他に附け加へたものとても、ほんの大意を傳へるに過ぎない)

シモンスの詩は極めて細やかな、またとりとめのないやうな心持を、軟らかに自由に歌つてある。情緒が軟らかになだらかに現はれて、何となく肉の軟らかさを持つて居る。『花のやうに軟らかな、薔薇いろの白い肉の、うすべにの綱』(Rosa Mundi)といふ感じがある。その喜びも悲しみも、鋭い皮肉も、暗い心も、匂ひも、色も、音も、すべて軟らかな感じを與へる。すべての心持が、溫かみのある、自由な、安らかな趣きを帶びて居る。何といふことなしにシモンスの作におもしろみがあるとすれば、それは溫かみ軟らかみのある氣分が現はれて居るからである。シモンスの詩の手ざはりは、どうしても彼の謂ふ「花のやうに軟らかい、薔薇のやうに白い肉」(" the flower-soft, rose-white flesh")の手ざはりである。

二

シモンスの最も好む色彩は、藍である、綠である、白である、また灰色である。女の眼を草間の螢にたとへたのや、また少女の眼を They seem lost in the blue depth of a dream と言つたのや、煙草の烟を、The blue-gray smoke of cigarettes curls from the lessening ends that glow と言つたのや、The green coo song that I long to hear と言つたのや、斯のやうな例を擧げれば限りがない。光りはある、而もほのぐらい。どこか蒼みのあるガスの光りである。蒼みがかつた、濕り氣のある、うるほひのある光りである。シモンスの多くに行き亙つた心持も、亦何となく濕つたうるほひのある心持である。霧の立ちこめて居るやうな、ぼやとした、そしてそのうちに明りのあるといふやうな心持である。シモンスの好む光りは、ロンドンの霧の夜の巷を照らすガスの光りである。テームズの夜霧に浮ぶ燈火の光りである。シモンスは都會を憎むよりも寧ろ愛する人である。町そのもの、光りそのものが、霧とともに浮き立つて動いて居るやうな情景、生きて、肉身のある人間のやうに動いてゐる情景は、シモンスの最も好むところである。シモンスに取つては、都會も街もすべて肉身のあるものにならなければならぬ。彼は都會をも女のやうに憎み且つ愛する人である。されば シモンスの最も好む情景は、夜と雨とである。また隨つて光りと水とである。燈火と涙とである。彼の詩は殆んど皆これ等の情景の間に生ずる愛と憎みと嘲りと哀しみとに充ちて居る。

既に夜の心を歌ふのであるから、あらゆる官能はすべてとりとめもなく一つに融けたやうになつて、匂ひのやうな軟らかな音樂を成して現はれる。而もそれはぼうと仄明るい、何となく濕つた心持を帶びて居て、氣分の移り行きも急でなく、遲々として緩やかに徐かである。入

水の女を歌つた The Abandoned といふ作の如きも、何となく夢のやうな、闇も仄白く明るいやうな感じを與へる。The Absinthe-Drinker で歌つて居るやうに、その苦しみも悲しみも、中心を嚙むやうなものではなくて、どこか夢のやうである。軟らかに懷かれて辷つて行くのであるが、それすらも心づかぬ程の心持である。踏み止まるけれどもずるずると辷つて行くやうな心持である。恐ろしい、苦しい、悲しいとは思ふが、それが何か夢ででもあるやうな心持をさせるのである。シモンスは自らその詩の中で自分は夢みる人であると言つて居るが、全く彼の詩は、樂欲の世界に耽溺せるドリーマーの見る軟らかな藍色の夢である。さめかけても、さめても、醒め切れない、重い甘い夢である。ことにその London Nights 一卷は、シモンスがその藍色の夢の忘れられぬ執着と愛慕とを歌つたものと言つてよい。White Heliotrope と題する中で、

And you, half dressed and half awake,
Your slant eyes strangely watching me,
And I, who watch you drowsily,
With eyes that, having slept not, ache;

女はとり亂した裝ひで、眠むさうな眼を傾けて自分を見つめて居る。自分はまた一夜眠らなかつたので、痛む眼で、眠むさうに女を見つめて居ると言ふ一節などにも、その心持は現はれて居る。

ほの暗い藍色の色彩と夢のやうな心持とに包まれた世界はたそがれである。シモンスの詩にはツワイライトを歌つたものが少なくない。ことに『春のたそがれ』(Spring Twilight) と題して、

The twilight droops across the day,
I watch her portrait on the wall
Palely recede into the grey
That palely comes and covers all.

The sad Spring twilight, dull, forlorn,
The menace of the dreary night;
But in her face, more fair than morn,
A sweet suspension of delight.

黄昏が迫つて來る、壁にかけたあの女の肖像を見つめて居ると、色があせてだんだん薄暗い灰色になつてしまふ。その灰色が蒼ざめた色をしてすべてのものを蔽うてしまふ。氣の引き立たない、たよりない心持のする、氣の沈んだ春のたそがれ、いやないやな夜が迫つて來る。けれども朝見たよりもくつきりと美しいその女の顏に、喜びの色がしばらく隱れた、といふ意味を歌つたものなどは、極めて單純な言葉を用ひて、表面に現はれて居る情景に伴ふ心持以外に、心の奥のもつと深い心持の閃きを歌つたものと言つてよい。そしてその仄暗い春のたそがれの室の中に、ほの白く浮き出して見える女の顏が、どこか沈んだ情調を帶びて見えるといふあたりの情味は、最も特色的である。

三

シモンスの詩には夜と雨との世界を歌ひ、蒼い夢の世界にきらめく燈火と涙との「ほの暗い心のいたみ」(grey heart-ache) を歌つたものの多いと同時に、隨つてまた女を歌つたものの多いことも事實である、而も彼の歌ふ女は皆歌唄ふ女である、舞踏の女である、女優である。而してまた賣女である。シモンスの詩には稀れに、しろとの女を歌つてあるけれど、それとても多くは童貞を失つた女に對する哀傷の情である。『尼僧』(The Nun) といふ詩などにも破戒の尼僧の心持が歌つてある。彼が『ステルラ・マリス』(Stella Maris) のなかで言つて居るやうに、情事はすべてこれ The chance romance of

the streets である。女は所詮 The Juliet of a night である。されば I know your heart holds many a Romeo である。彼も亦た I too have sought on many a breast the ecstasy of an unrest, I too have had my dreams; and met (ah me!) how many a Juliet である。シモンスの女は前に引いた『ルネー』の中の「雨の精のやうに蒼白い」女である。彼は『ロザ・アルバ』(Rosa Alba)で、

The beauty of no woman to my flesh
Is intimate spirit if she be not pale;
I love not roses that are dewy, fresh
If on a cheek they tell no passionate
tale;
And passion is the after-sunset breath
That withers them, wrinkling their
petals white;
Also, since love is next of kin to death,
Let love foreshow the colours of
that night.

蒼白い女の美を讃して、煩惱は紅の薔薇を萎ましめ色を褪せしめる夕風である。戀は死に最も近いものであるから、戀をして死の夜の色を豫め示さしめよと言つて居る。烈しい恐ろしい煩惱の熱を歌つたものであるが、彼の女は亦たこれ程の烈しい煩惱の女である。

イギリスの詩人で、シモンスほど大膽に肉を歌つたものはあるまい。シモンスほど大膽に肉の嫉妬やその慘酷や、その魅力や、その心醉やを歌つたものはあるまい。『遠ざかれるものへ』(To One in Alienation, I and II.) の第一では、極めて大膽に肉の嫉妬を歌ひ、第二では、あだし女の床に眠つて、思ふところはただ昔の記憶を得ようとするばかりである、今にして初めてどれ程御身を愛して居たかを知り得た、あだし女の腕に眼ざめて、徒らに遲々として明けぬ心なき夜を呪つた、

For I lay in her arms awake,
Awake in such a solitude of shame,
That when I kissed her, for your sake,
My lips were sobbing on your name.

と言つてゐる。ダンヌンチオの『蕩兒』の主人公を想ひ浮べしめるほどの殘酷さである。また烈しい煩惱執着である。肉の匂ひの強い『ロンドンの夜』のなかでも、殊にその匂ひの烈しいのは「ビアンカ」(Bianca) と題する十章の詩である。そのうち第一章の「ビアンカ」では、

Only her eyes, only her mouth,
Live, in the agony of drouth,
Athirst for that which may not be:
The desert of virginity
Aches in the hotness of her mouth.

といひ、また、

Through her closed lips that cling to
mine,
Her hands that hold me and entwine,
Her body that abandoned lies,
Rigid with sterile ecstasies,
A shiver knits her flesh to mine.

といふあたり、その第四の「手」(Hands)のなかで、like the velvet warmth of fur, Your soft and glowing palms compress desire into their daintiness といひ、指尖のときめきといひ、徐かな紫いろの脈搏といひ、すべて肉の緊張、緩やかな温みを歌うて、その匂ひに咽ばしめる。肉體の渇仰を歌つたものは、The woman ......merely is the masterpiece of flesh: well, be it so ...... Tyrannously I clave, clave alone, her body ...... と歌へる『アイディアリズム』(Idealism) などである。その心醉は「ステルラ・マリス」の That ineffable

delight when souls turn bodies, and unite in the intolerable, the whole rupture of the embodied soul. といふあたりに盡きて居る。

　而もシモンスは、一切の打算と顧慮とを忘れて驀らに自ら樂欲の海に耽り溺れようとしながら、また耽り溺れながら、その間に、また其後に必ずつき纏ふ暗い物寂しい蒼ざめたやうな心持を抑へ切れずに居る。その女は前に言つたやうに『蒼白い女』である。彼の心は、『あかつき』(Dawn)に歌つて居るやうに、女は心なく眠つて居るけれど、自分は勞れて、仄明りの中にさめて、曉を待ちわびながら、明けがたの寂しさを感ずるのである。『繋縛』(The Bond)に歌つてゐるやうに、どうしても斷ち切れない肉の執着の傷ましさを感ずるのである。唇の唇を求める時は心の漂泊を忘れるけれど、一たび離れると古い疑ひと古い苦しみとは鎖のやうに身を緊めて、其苦しみと疑ひとのあとには、寂しい闇が死のやうに取り卷く、あの『孤立』(Isolation)の感じを抑へられない。いづれにしても、倦み勞れた、荒んだ心持が、心の隅から押し擴がつて來て、一面に暗くしよう暗くしようとする。いつも薄暗い夜のやうな、海底のやうな、雨の日のやうな、濕つぽい蒼い夢のやうな心持になりがちである。

I am weary of living, and I long to rest
From the sorrowful and immense fatigue of love;
I have lived and loved with a seeking, passionate zest,
And weariness and defeat are the end thereof.
I have lived in vain, I have loved in vain, I have lost
In the game of Fate, and silently, I retire;
I watch the moon rise over the sea, a ghost
Of burning noontides, pallid with spent desire. (Moonrise, Amoris Exsul.)

戀に倦み勞れた心持は、灼くやうに照らした眞晝の日の幽靈のやうに煩惱を燃し盡して蒼ざめた月の、海原をさし昇る寂しい物淒い心持である。また『カヴールにて』(At the Cavour)の皮肉な心持である。而も、愛が憎みとなるほどになりながら、やはり、I cannot do without you である。Amoris Victima 十四章に歌ふ強い綿々たる執着を、どうしても斷ち去ることが出來ない。暫くは別れて、逃れて見たけれど、

Now, as I tread these London streets again,
There grows up softly, from the night and rain,
The same old ghostly haunting of your eyes;
And the old poisonous mist of memories
Rises about me, and the old desire
Quickens along my veins in sharper fire.
O! I am lost, you will not set me free,
Unless I turn again, and seek the sea,
Some vague new world of waters, bounded by
The soft and sudden barrier of the sky. (Amoris Victima, XI.)

再びロンドンの町を踏めば、夜と雨とは、自分の眼の前に女の眼をつき物のやうにちらつか

す。瘴霧のやうな記憶が湧いて、古くからの欲望が鋭い火のやうに脈の中に打ち出す。ああ、どうしても女は自分を自由にはしてくれない。やつぱり又海を追うて、茫漠たる新らしい波の世界へ行かねばならぬのであるか。斯やうにしてシモンスの求めた遁れどころは波の蒼い海であつた。藍色の夢の水底であつた。

シモンスの詩が軟らかく、潤ひと溫かみとを持つて居ることは幾度も言つた通りである。彼の詩に何となく水氣があり、雨氣を含んで居ること、隨つて浮き上つて動くやうな趣きのあることも前に述べた。さればシモンスの詩に見える自然は、その周圍の空氣なり氣分なり、すべて生き生きした色どりを含んでゐる。自然を人間として、憎んだり愛したりせずには居られぬのである。彼の作に特に自然を歌つたものといふのは少ない。『ディープにて。灰色と綠』(At Dieppe: Grey and Green)その他數篇がそれである。彼はロンドンの町でもウェールスの海濱でも、すべて自分の心持と一つにしてでなければ自然に心を牽かれない。それ故その詩に見える自然は、多く海である、夜である、雨である、燈火の光りである、たそがれである。シモンスの生活はやはりこの蒼いほの暗い海に在る。

シモンスは實にこの蒼い海の世界にその樂欲に飽き滿ちたやうな、倦み勞れたやうな心を沈め遁れようと思つたのである。この逃避の心を歌つたものは、前に引いた『アモリス・ヸクティマ』の第十一章のほかに、

I have grown tired of sorrow and human tears:
Life is a dream in the night, a fear among fears,
A naked runner lost in a storm of spears.
I have grown tired of rapture and love's desire;
Love is a flaming heart, and its flames aspire
Till they cloud the soul in the smoke of a windy fire.
I would wash the dust of the world in a soft green flood:
Here, between sea and sea, in the fairy wood,
I have found a delicate, wave-green solitude.

(In Ireland: V, In the Wood of Finvara)

歎きにも涙にも今は倦みはてた。生は夜の夢である。氣づかひの中の氣づかひである。槍の嵐の中を裸身のまゝで走るのである。我を忘れる歡びにも愛欲にも今は勞れた。戀は焔の燃え立つ心である。その焔は騰つて、吹きまく火の烟に靈を蔽うてしまふ。今は軟らかな綠の潮のなかで世間の塵を洗ひたい。神仙の森のなか、海と海との間のここに、自分は波のやうな碧いろの樂しい隱れどころを求め得た、といふ一節などに、最もよく歌はれて居る。シモンスの心の底にはいつもこの「蒼い水底の夢」のやうな心持が流れて居る。その詩がどんな題材を歌ひ、どんな心持を歌つてあつても、どことなく夢のやうな軟らかな沈んだ調子を帶びて居るのはこの故である。彼はそこに心の逃れどころを求めたのではあるが、しかしシモンスは、愛する心の果が烈しい恐ろしい憎みとなつてすらも、徇愛せずには居られない(Love's Hatred)ほどの人である。苦しくとも戀せずには居られない人である。勞れ倦んでですら徇愛欲を斷ちかねて、重い瞼をあげて夢のやうな波の底を眺め入る人である。シモンスの歌ふすべての惱みも

歡びも、憎みも嘲りも、つまるところこの强烈な煩惱執着のあげる聲である。彼の詩に人間の匂ひ肉の匂ひの咽ぶやうに强いのはその筈である。彼はそのすべての煩惱と執着とを、極めて率直に、單純に、安らかに歌つたのに過ぎない。シモンスの詩は斯やうにして飽くまで軟らかな潤ひのある人間肉身の聲である。

四

シモンスはその詩集『影畫』の再版の序のなかで、自分が詩に就いて世人に求めるところは、ただ人間と自然とのあらゆる氣分を表白する自由を與へよといふことであると言つてゐる。彼はまたその詩集『ロンドンの夜』の再版の序のなかで、道徳が藝術に對し判斷の權能を持たざることを述べ、一人間の性情のうちに見出さるるもの、たとへば情慾にせよ感覺にせよ精神にせよ、また人間の心の地獄にせよ天國にせよ、すべてそれ等は自然が素材のままで編み成す永久の實質である。藝術はこの素材を處理するのである。目に見ゆる全世界はそれ自ら一つの象徴であるといふではないか。詩は刹那のモニューメントである。その題材に就いて彼れと是れとの當否を區別するは笑ふ可きである。人間の氣分と同じく無限に湧いては消える海の波を、この波あの波と擇び出して書く必要のないのと同じことである。人間の氣分は無限である。藝術の領域はそこに在る。一たび自分の氣分であつたものなら、たとひそれが泡の如きものに過ぎず、渦の如くはかなく消えてしまはうとも、これを詩とするに憚るわけはない。氣分は氣分である、波の泡のやうに脆いものであるといふことを、先づ批評家と讀者とに了解して貰ひたい。自分は敢てこの詩集『ロンドンの夜』の作が、悉く事實の記錄であると公言するものではない。ただこの集中の作は、すべて一たび自分のものであつた獨自の氣分を、その刹那には、自分の心に少しも他の氣分がなかつたといふやうに、これ一つの氣分として歌ひ出さうとする眞摯なる試みである。自分は善いも惡いも、さまざまの氣分を、包まず擇ばずに歌つた。その中に感じなかつたらよかつたと思はれるやうな氣分があると言ふ人があるなら、自分は直ちに答へよう。或ひはさうであらう。而もそれが何であるか、それ等の氣分は自分の心中に存在した。存在した凡てのものは藝術的存在權を得たものではないか。」と謂つてゐる。シモンスは實にその題材に就いては無條件の自由を主張してゐる。彼は存在する凡てのものを取捨しない。存在するといふことが、それだけでシモンスには極めて力强い價値を有つてゐると思はれてゐるのである。

シモンスは、生活と藝術との價値の大部分はそれ等に伴ふ眞摯の度によつて定まると言つてゐる。謂へらく、眞摯にならうと思つたとて必ずしも眞摯であるとは言へない、意向といふものは麻痺患者が手足を動かす夢を見るほどのことでもない、たとひこの宗敎を信じよう、この藝術說を信じようと言つたとて、その信仰なりその說なりが、闇の中に散る火花のやうにパッと光りを放たなければだめである、この時にここに初めて眞摯になり、いつも知つてゐた事を初めて發見したやうに思ふのである、實生活に於いても藝術に於いても、この眞摯即ち光耀照明こそ最も意味あるものであると。隨つてこの考へを前の表白自由の論を結びつけて考へると、つまり刹那の氣分を詩に歌ふといふ場合に、その氣分はすべてシモンスの心に、パッと光りのさすやうな心持を起させたものである。パッと光りのさすやうな心持でその氣分を歌ふからこそ、その氣分がどんな種類のものであつても詩になるわけである。それ故、刹那

刹那に眞摯な心持を懐いて、パッと光りのさすやうな心持で生きて行けるなら、その生活は卽ち最も意味の深い生きがひのある生活である。シモンスの考へによると、人はこの物質世界を脱せんとして、宗敎に戀に若しくは藝術にそれぞれ自己を見出す。その何れにしても美しい情緒の生活なしに一日を過すは一日を浪費するのである。藝術に人間が自己の生きた最も生氣ある刹那を不滅にせんと欲するときに始まる。藝術家ならぬ人と雖も、その心境に到れば、その生活は既に藝術となつてゐる。生活を藝術とするのはこの物質的現實から遁れて、吾等自身の精神生活に適應せるエクスタシーの狀態に往かんとするのであるといふ。隨つて眞實に生きると思ふ刹那、パッと光りのさすやうな心持のする刹那、エクスタシーの刹那、左樣な心持を經驗する刹那は、その各の刹那が極めて意味の深いものとなる。その刹那は刹那であつて同時に全生活である。

シモンスはあらゆる生存に一樣の命を認める人である。それが眞摯な心持で經驗せられる限り、パッと光りのさす心持で味はれる限り、刹那の生存も亦た不滅であるといふ感じを懷かずには居られない人である。シモンスはブレークを論じて、ブレークは生存そのことすら神祕であり不可思議であると思つた、ブレークの詩はすべて生の肯定であると言つて居るが、この言葉は、また移してシモンス自らの上にも當てはめ得られよう。又シモンスは抒情詩を以て embodied ecstasy であると言つて居る。このエクスタシーは言ひかへれば極めて純一な、而して極めて深いよろこびである。シモンスの詩と彼の藝術上の考へとが象徵的傾向を持つて居るのはその筈である。この純一な深いよろこびの他に、象徵主義の根柢はないのである。この純一な、しかしながら強い生の愛着の心を懐いて、その心の傷き躓き倦み勞るゝあとを歌つたのがシモンスの詩である。彼の詩に夢のやうな心持の行き亙つてゐるのも、このよろこびの心に外なるまい。シモンスはイエーツの詩を評したなかに、最も美しき詩は純一でなければならぬ、またその詩の一つ一つの言葉は音樂となつて殆んど消えてしまふほどに、ほんの一呼吸であらねばならぬ、詩は人間の根元の欲望を熱情的な靜かさを以て表白するものである、イエーツの詩はそれであると言つてゐる。またバイロンを評したなかに、バイロンの悲哀の詩は生活の欲望を歌つたものであると言つてゐる。これ等はすべて移してシモンスみづからを評するものとしてよい。シモンスの詩に見える悲哀は、自己の靈を自ら不可思議と思ふ哀しみである。人間の靈の、憐れむべき敵の如く、心ならずも互ひに傷くる歎きである。愛は憎みを生じ、憎みは愛よりも懷かしきその煩惱と悲しみである。

五

シモンスが「蒼い水底の夢」に逃れどころを求めようとする心持は前に述べた。彼は「生活よりの遁れ」といふ言葉を好んで用ひる。藝術は人生の悲劇的幻影を示す故に、これもまた、事物の心髓にある煩ひからの、一つの遁れどころであると彼は言つて居る。シモンス自ら imaginary portraits と呼んで居るその短篇小說集『スピリチュアル・アドヴェンチュアズ』(Spiritual Adventures) のなかで、彼の少年時代の自傳とも見るべき『人生の序曲』(A Prelude to Life) の主人公シーワードは、平凡單調な生活を呪うて、これから遁れるには讀書と音樂と散歩とによる外はないと思ふ。シーワードは生活を愛するものである。厭世者ではない。而も彼の愛する生活は現在の生活ではない。彼の

先づ愛したのは孤獨の生活であつた。而も後に至つて異性の生活の間に、眞の生活、生きてゐることの温かいありがたみ」、言ひかへると「逃れどころ」のあることを知つた。人間らしい人間の生活がそこに在ることを知つた。人生は流れの如くに過ぎて行く。シーワードは其あらゆる泡立ちを自分のものにしようと試みた。此のシーワードの心はやがてシモンスのある時期の心持であらう。又同じ集の中で、クリスチャン・トレヴルガといふ音樂師の生活を書いたものの中に出て來るラナといふ女は、生活を享樂する他に何もない女である。『エステル・カーン』の現はすところも亦た、過ぎ行く人生の言ふに言はれぬところを捉へようとする煩ひである。すべての興味は皆生活の眞の味ひといふ一點に集つてゐる。これ等作中の人物の心持は、幾らかづつまた作者の心持である。シモンスがその『七藝術の研究』(Studies in Seven Arts)のロダン論のなかで、「ロダンには、生ける凡てのものが皆美しい。ただそれが生きてゐるといふだけの理由で。」と言つて居るのは、やがて亦シモンス自らの心を言つたものである。前に引いたブレーク論の中の言葉なども殆んど同じ意味と見てよい。シモンスが『劇、演技、音樂』(Plays, Acting, and Music)の中の一論文で、「刹那の美を生み出したものも、數千年間續く美を生み出したものも、藝術の上では同じ結果を得たものと言はねばならぬ。藝術の關するところは唯仕上げであつて存續の期間ではない。」と言つてゐるのも、つまり刹那でもよいから生のよろこびを感ずれば、それが眞の生活であるといふ考へに基いてゐる。シモンスの詩論に刹那の氣分を說いたのも、つまりこの心からである。彼の「生活からの逃れ」といふのは、やはり眞實の生活、「純一な、しかし深いよろこび」の心境に外ならぬものである。彼はこれを求めて肉の歡樂に往き、あらゆる藝術に往き、而して最後に彼の謂はゆる「沈靜にして同時に熱情的な宗教」卽ち天主教に入つたと傳へられる。天主教に入つた後の彼の消息は僕はよく知らない。ともかくもシモンスが「單純な深いよろこび」を求めて斯やうな徑路を辿つたのは、彼の心生活の全部に行き亙つて暗い一種の運命觀的氣分が流れてゐるからであらう。

「この世の唯一の幸福は、心の眼を閉ぢ、聽官を殺し、不知を恐れる鋭さを鈍くすることによつて得られる。人生は唯しばらくの間である。その間に吾等のすべきことは唯一の吾々の所有である瞬間の現在を考察するばかりである。而もその現在も疾く過ぎて、唯記憶となり希望となつて享受せられる外はない。而もそれ等すら不確かであり無益であることをおぼろげに認めるのが高々である。さればときどき眼ざめて、吾等の無智を悉く知るのは恐怖である。また吾等の何處に往くかを幾らかでも思ふのは恐怖である。現在の位地を知つては一日を過すことすら堪へがたい。吾等は躊躇したり、言ひ拔けをしたり、妥協をしたりして、わづかに助かる思ひをするのである。眞の結果を避けて暫く休止し忘却するのである。吾等の生は死を忘れんために忙しく費される。孤獨を恐れ伴侶を欲するはその故である。生が一時の休止であるといふことは、たゞ朧げに知つて居るばかりであるとして、いろ〳〵の夢幻に、宗教に、煩惱に、藝術に、荒涼たる歸無的現實からの逃れどころを見出すのである。これ等はいづれも忘却である。いづれも創造の象徵である。宗教は新らしい天國の創造であり、戀愛は新らしい地の創造である。而して藝術は天國と地上とを混じて、地上より天國を創造するものである。皆一種の崇嚴なる私慾である。聖者も、戀する人も、藝術家も、その最高の境に

於いては、自ら窮極の到達と信じて、到底他に傳へることの出來ない大歡喜を有して居るのである。而も、それ等は結局「逃れ」である。彼等はその自ら知ると否とを問はず、實際に於いて、すべて皆唯一つの生を有するのみといふ動かしがたき思想から、またいかに用ひられても、結局その一生は消費せられねばならぬといふ今一つの思想から、逃れようとしてゐるのである。而も死に就いて吾等の尋ぬべきことは生の意義である。吾等の凡てが求めるところは、吾等に最もよいと思はれる吾等自らの方法で、最も十分に力をこめて、生き永へて行くに値するものがあるといふことを、確かめたいといふことである。」シモンスはその『文學上の象徴主義運動』の結論に於いて斯くの如く説いてゐる。而してシモンスの謂はゆる「生き永へて行くに値する」と思はしめる據りどころは神祕主義である。しかし神祕主義は不可知の恐怖を滅ずるといふ意味は說いてあるが、その最後のあたりは、十分に受取りにくい。この結論では、暗い運命觀の壓迫に對する、あらゆる人間の努力が唯消極的に言ひ現はされてゐるに過ぎない。しかしその人間の反抗といふこと、若しくは忘却といふことが、シモンスに在つては、やはり強烈な生の執着であることは言ふまでもない。どうかして「純一な深いよろこび」の心で生を享受しようといふ一念が傷ましく物凄いほどに迸つて居る。彼にとつては、エクスタシーの心境は即ち「生よりの遁れ」である。「蒼い水底の夢」の心地も、それが詩である限りは「生よりの遁れ」である。パッと光りのさす心持もまた「生よりの遁れ」である。「生よりの遁れ」は即ち死よりの遁れに他ならぬ。即ち彼の謂はゆる新らしい天地の創造である。彼はこの意味で一種の遁避者であると同時に、また確かに一種の生活の肯定者である。（明治四十三年六月）

◇

○凡てのものが可愛い。自分を憎むものまで可愛い。木も石も草も水も皆可愛い。吾々にも時にはかういふ心持の起ることがある。ことに夏の眞夜中の天地は、凡てのものを自分の懷ろに抱きたいやうな心持にさせる。吾々はこの心持で、朧げに昔の聖者の心を想像して見ることが出來るやうに思ふ。愛することは知ることである。透徹した客觀的態度は、眞に愛する力あるものにして初めてよく取り得る。眞の詩人は常にかういふ心持に生き得る強者である。吾々は現實の生命を愛すること微弱なる自分を愧ぢざるを得ない。

○吾々が現實を觀る眼は、賢き母親の眼でありたい。愛に溺れないことが母親として大切な資格であると同時に、兒の生命の自由を惜しまない母親の心は、やがて眞に深く愛するものの心でなければならない。賢き母親は先づ愛するが故に知らねばならない。愛するが故に知る賢き母親の極めて稀であると同樣に、愛するが故に知る眞のリアリストも亦頗る少い。あるものは餘りに寛大仁愛を裝うて、無智と愛の不徹底とを包み、あるものは餘りに苛細であつて、對者の生命に徹底するの眞情に乏しい。彼は上辷りであり淺薄であつて、是れは無味乾燥だ。いづれも愛する心の弱く誠の足らないのに基く不自然な母親だ。不自然なリアリストだ。繰り返して言ふ、吾々が現實を觀る眼は、あくまでも賢き母親の眼でありたい。（「母の眼」より）

イエーツ論

一

ジョージ・モーアがその小說『エヴェリン・インネス』にユーリック・ディーンといふ人物を描いて、「彼はアイルランド風の長い顏をしてゐた。少し凹んだ平たい頰と長い頤と、すべて直線をなしてゐた。それを綺麗に剃つて、黑い髮の重い房が、いつも兩眼の上に垂れかかつてゐた。彼の顏に陰氣なうつとりとしたやうな樣子を與へたのはその眼であつた。眼は大きく、暗く、深く沈んで、特殊の形をしてゐた。そして洞穴の火のやうに、闇の中で燃え上つたり消えかかつたりして、燻つてゐる樣に見えた。彼は脊の高い、瘠せた青年で、黑のジャケツを着、上衣の上にぶらぶら兩端の垂れてゐる長い襟飾りを着けてゐた。」と言つてゐるのは、イエーツのことであるといふ。私はアイルランド風の顏の特色といふものをよく知らないけれど、私の手許に在る二枚の肖像を見ると、モーアの說明はよくイエーツの外見を言ひ現はしてゐるやうである。殊にクランスの評論に插んであるのがそれに近い。クランスに據ると、イエーツはどんな人だかりのする中に居る時でも、どこかその周圍から離れて、日常の出來事や目前の興味の渦卷から超脫してゐるやうな樣子が見えるさうである。しかし一二人の友人と打ち解けて話す時は、樂しげに暢やかで、この幽玄な人生及藝術上の考へすら、如何にも安々と快く聽かれる。そしてその中にはウィットもありヒューモアもあり、如何にも優しい、おツとりとした、善い氣立てを示してゐる。ただその燃えるやうな眼が彼の內心の深い生活を語つてゐるといふ。これはクランスも言つてゐるが、その眼が又不思議に老けて見えるので、顏面にどことなく疲れた陰がさしてゐる。暗い蒼い眼瞼といふ感じを與へるシモンスのやうなのではないが、一體に若々しい晴れやかなところが見えない。イエーツは千八百六十六年の生れで、今年は四十五歲の中年であるが、肖像は恐らく十年以上前のものであらうから、年の爲めに老けて見えるのでは勿論ない。彼の深い內心生活を語つてゐる眼に、疲れた色のあることは、先づ私の心を牽く。私はこの眼の意味を解いて見たい。

イエーツの生れたアイルランドの國は、ケルト民族の住む國である。ケルトは一體に感情的な民族で、想像の力に富み、宗教心深く、敏感にして華美を愛し空想を好む民族である。或ひは輕快に或ひは沈鬱に、哀歡の情に動き易い。アイルランドの農夫は、今も荒野や森や川や沼に棲む魔を恐れてゐる。ケルトの血には神祕的な感情が流れてゐる。アイルランドが傳說に富んでゐるのもその故である。アイルランド文學の復活は、專らその傳說に新らしい生命を與へようとする運動であると言つてもよい。イエーツはこの運動の指導者と見られてゐるが、この運動については茲では說かぬ。

二

イエーツの戀の詩には、一體にしんみりとした寂しい果敢ない心持が歌はれてゐる。戀の恍惚よりも、戀の脆さ果敢なさが彼の心を強く牽いてゐる。時の力が天然の姿にも人間の心にも、いつの間にか荒敗壞滅の痕を印して

行く。秋は山葡萄の葉に、濕れる野苺の葉に、大麥の束に棲む鼠の上に來た。

The hour of the waning of love has beset us,
And weary and worn are our sad souls now;
Let us part, ere the season of passion forget us,
With a kiss and a tear on thy drooping brow.

(The Falling of the Leaves)

戀の褪せ衰へる時は吾等を襲うた。吾等の傷ましい心は今倦み疲れてゐる。吾等の熱情のさかりの時の吾等を忘れぬ間に、別れしめよ。君がうな垂るゝ額に一度の接吻と一滴の涙とをのこして。

老いたる胸を懐いて靜かなる湖畔に再び立ち、二人して落葉の徑を物思ひつゝ行けば、木々はあたりに立ち繞り、黄ばめる葉は光り幽かなる闇夜の星の如くに落ち、老いたる跛の兎は彼方に跳び行く。戀の脆さを歎く女を慰めて、「吾等の疲れたるを歎く勿れ、多くの戀は倘吾等を待つ、悔いなき年月に亙つて憎み續けよ戀ひわたれよ。」

Before us lies eternity; our souls
Are love, and a continual farewell.

(Ephemera)

吾等の前には永遠がある、吾等の魂は戀であり又絶えまなき別離である。

と言ふ男の言葉にも、戀の永遠を思ふ一方に、脆さ果敢なさの心を蔽ひ難い。脆ければこそ果敢なければこそ永遠をも思へ。老い朽ちる落葉の秋の悲しければこそ、常若の春の國をも慕へ。流星の光りを仰げば、その消えぬ間に吾等の心は倦み、空の果低く垂れたる黄昏の星の蒼き光りは、消えやらぬ哀傷を吾等の胸に覺ます。物うき心は露に濡れた百合と薔薇と、この二つの夢みるものより生ずる。流星の光りを夢みる勿れ。零露に漂ふ蒼き星の光りを夢みる勿れ。吾等はただ白い鳥となつて漂ふ波に泛びたい。

I am haunted by numberless island, and many a Danaan shore,
Where Time would surely forget us, and Sorrow come near us no more;
Soon far from the rose and the lily, and fret of the flames would we be,
Were we only white birds, my beloved, buoyed out on the foam of the sea!

(The White Birds)

私は無數の島と數多きダナーンの岸邊とを屢幻に見る。そこでは「時」は吾等を忘れてしまふに違ひないし、「悲み」は再び吾等に近く來ないであらう。忽ち薔薇と百合とから、又焦るる心の煩惱から遠ざかるであらう。戀人よ、二人して泡立つ海に泛び出た白い鳥となりさへすれば。

とも歌つてゐる。長詩「オイシンの放浪」(The Wanderings of Oisin) にイエーツが歌つたのも、この白い鳥となつて海に泛ぶ憧れの心である。還るを忘れて百年の永き眠りに耽つたオイシンの夢の生涯も、恐ろしい時の荒敗を遁れたのである。脆きが故に永遠を思ひ、永遠を夢見るが故に、更に時の荒敗を悲しむ。時は燃え盡きた蠟のやうに朽ち、山にも森にも終りの日が來る。焔の光りに幻の如く見えた美くしき少女を慕ひ、やがて共に手を取つて永遠に月の白銀の林檎と日の黄金の林檎とを探りつつ、寂しく草間を行くその日を夢みて、遠き放浪に老い行くエーンガスの憧れは、「果なき欲望」の南の國を夢みてゐるのである。欲望は無限で

あるのに、時は絶えず朽廢の業を休まない。時の荒敗の魔力の及ばぬ遠い島根の國、白光の靜かに照らすところ、永遠の戀に耽つて、無限の欲望を滿たしたいのは、凡ての夢みる人の願ひである。彼の戲曲『心の渇望の國』(The Land of the Heart's Desire) はこの願ひを歌つたものである。イエーツが時の荒敗を恐れる心は、遂に不可解の欲求とならざるを得なかつた。

永遠の戀、不可解の欲求は、遠いギリシャの昔から、人々の夢みた夢である。夢みる人は昔から多いけれど、昔の幸福な夢見る人は、無限無邊際の天地に、永遠の憧れの情を、心往く限り漲らしめた。彼等は不可能の欲求が不可能であることを少しも思はなかつたのである。たとひ思うても、それによつて生ずる内心の苦しみに深く傷つくことがなかつた。不可能の欲求に絶望しなかつた。しかし知識は遂に避け難く逃れ難い苦悶の意識を呼び覺ました。近代の夢みる人は、不可能を不可能と知りながら、倘且つ不可能を欲求する一念を斷つことが出來ぬ。彼等は無限の天地に自己の心を放つだけの心の自由を有つてゐない。彼等の知識は人生の有限を示してゐる。彼等も亦それを幻ならぬ避け難い眞實とは知りながら、倘その知識に安住して有限に滿足することが出來ない。無限永遠を追求する不可能の欲求は益々募つて、傷ましい絶望の心を生む。無限の欲求は、彼等にとつて、到底捨てることの出來ない重荷である。彼等の夢は覺めて見る白日の夢である。苦しい傷ましい絶望の夢である。

三

詩は不可能を求める人間の欲望の結晶である、又艱難の絶大なる壓迫によつて作られた金剛石であるとハーンは言つてゐる。しかしその追求の心は、荒敗の悲みに伴ふ恐怖と、不可能の絶望に伴ふ疲勞とに傷いてゐる。すべての動搖と、艱難と、强い明るい光りの刺戟とを避けて、靜かな、軟らかな、夢のやうな霧のやうな安息の幽かな境を求めて、傷いた心の隱れ家とせねばならぬ。ハーンが日本の生活を愛したのは、そこに東洋的な幽寂と沈靜と溫雅とを見出すことが出來たからである。イエーツが湖心の島を慕うて、

I will arise and go now, for always night and day
I hear lake water lapping with low sounds by the shore;
While I stand on the roadway, or on the pavements gray,
I hear it in the deep heart's core.
(The Lake Isle of Innisfree.)

いざ立つて行かう、夜でも晝でも、いつも湖水の水は低い音をして、ぴちや〱と岸邊を打つてゐるのが聞える。私が路傍に立つてゐる時でも、灰色の鋪石の上に立つてゐる時でも、私はその音を心の深い心髓の中に聞く。

と歌うてゐるのは、そこに騷がしい群衆の生活を遠く離れた平和と安息との境を見出したからである。インニスフリーの湖心の島には、土と簀垣の小さな小屋を作り、九畝の豆畑と、蜜蜂の巢一つとを我がものにして、蜜蜂の唸る林の中に獨り住まうとするのである。平和は蟋蟀鳴く朝霧の中からしづかに滴り落ちる。眞夜中には薄光おぼめき、眞晝には紫の光り照り、夜は紅雀の羽音に充ちる。靜かな光り靜かな音、殊に幽かな波の音は、煩はしいすべての外界を厭離した人の心の核心から響いて來る。沈默と幽寂との境から遠く響いて來る。

傷き疲れて沈默と幽寂とを求める人にとつ

て、客觀の現實世界は、繁殖と勞働との世界である。變化荒敗の世界である。卽ち有限にして餘りに平明である。內心の天地にこそ、欲求と不滿と憂鬱と恐怖とは宿つてゐる。そこは無限永久の境である。神祕と夢幻との境である。勞働に囚はれ、有限と變化と動亂とに囚はれてゐるものは、到底永遠の神祕と夢幻とを深く味ふことが出來ぬ。憂鬱と恐怖とに心を暗くし、欲求と不滿とに心を痛めるものでなくては、澄み渡る心靈の光りに打たれることはない。外界に倦怠したものは、それを免れる爲めに、事物を棄てて事物の本體に還らねばならぬ。肉體は脆く戰慄して、人生の勞作に適しないでもよい。唯內心に限を注げ。これを藝術の上に見ても、微かな色と光りと形と、謂はゆる頽廢せるものは、その沈默と陰暗とのうちに、深い神祕と夢幻とを藏してゐる。神祕なる本體に達せんとするものは、有限なる知識と事蹟とを棄てて無限永遠の相を捉へねばならぬ。神祕の光りに照らして見る現世は、極めて貧しいものである。五官に囚はれたものの心は暗い。心靈の光耀は心を不安我執から放つて、冥想直觀の三昧に耽り、一切外界の擾々から脫離することによつて到達せられる。肉眠り心靈ひとり湖水の如く澄めば、靈智の光りは一切の神祕をここに映す。かの永遠を欣求する情緖の白熱は、人をして恍惚たる忘我の境に入らしめる。而してこの恍惚たる忘我の境には、ただ沈默と情緖の戰慄とがあるばかりである。湖水の波は岸邊を打つか、果たわが心の心髓に遠く深く鳴るか。ただ沈默である。ただ戰慄である。夢幻の如く永遠の光りの如く、心の全面におぼめき亙る光耀は、想像の力によつて象徵的に傳へられねばならぬ。想像は人間と永遠の神祕とを繫ぐ唯一つのものであり、象徵は有限と無限とを繫ぐ唯一つのものであるからである。

夢は凡ての物を完全にする。夢みよ、額の上の罌粟の花は麗しい。激しき愚かな勞役者は王である。行ひまた行うて、遂に夢みることがない。「惡魔の捧げる曇つた鏡の中に、すべての物は荒敗して行く」、外界は倦怠に曇れる鏡である。折れ挫けた枝間を、不安の大鴉は飛び交はす。「戀人よ、君自らの心を見つめよ、聖の木はそこに生じてゐる。悅びの爲めに聖の枝々は動き、凡ての花は枝に慄ふ。その木の實の變り行く色は、星に樂しき光りを與へ、その隱れた根の安固は、夜の靜かさを植ゑた。繁れる梢の搖ぎは、波にその調べを與へた。」イェーツにとつて外界は凡て塵の如く、ただ內心の幻によつてのみ生きる。

四

イェーツも亦た近代生活の粗硬なあくどい刺戟に堪へられない一人である。靜寂と溫柔との境に、疲勞と恐怖との心を橫へたいと思ふ人である。しかしその安息の隱れ家は、東洋の天地でもなければ、亦勞役の生活を脫した美しい官能的歡樂の中にもない。彼がアイルランドの古傳說をその詩に戲曲に歌つたのも、必ずしもただ過去の生活のローマンスに現在の生活を忘れようとしたのではない。古傳說であるから興味を感じたのではなくて、その中に自らの欲求と悲哀と恐怖との共鳴を見出したのである。『心の渴望の國』は、時の荒敗の魔力を悲み恐れる彼が、同じ心から永久に老いぬ歡樂の鄕を憧れた、その戲曲中の主人公の心を歌つたものである。イェーツの追求するところは、過去のローマンスでもなく、海の彼方の國でもなく、また眼前の歡樂でもない。ただ自らの心の內に在る。彼の靜寂なる隱れ家は、恐怖を感じ悲哀を感ずる彼自らの心の內に在

る。永遠を慕ふ無限の心の内に在る。彼がすべての勞役を卑しみ、事蹟を輕んずるのも、この心内の追求に專らならんが爲めである。觀照靜觀によつて、自己の内の要求を滿足せしめんが爲めである。『肉體の秋』(The Autumn of The Body)を讚美して、微かな形や色や光りや、低い弱い靜かな調子の韻律を尊重するのもこの意味からである。長い靜かな夜、沈默と愛との墓場、遠く人間を離れた安息を欲するのもこの意味からである。心を騷がし亂す風を憎むのもこの故である。内心の生活は彼にとつて唯一つの隱れ家である。すべての沈默とすべての騷擾との中から、靜かな、微かな、心の核心の聲が、最も高く彼の耳に鳴り響く。昔のケルトが、粗土に脣を着けて、既に隱れてしまつた太陽の不思議な火力の、身内に震動するのを感じたやうに、物言はぬ大地の黑い脣から、深く潛み漲れる心の響きを聞く。すべての沈默は、最も深い神祕を語り、すべての騷擾は遠い沈默の神祕の境に心を追ふ。

近代の科學はすべての知られざるものを認めてゐない。凡ては明らかである、少なくとも明らかにせらるべきものであらねばならぬ。白日の下にすべての物を照らして見る時、たとひ人はこれを醜惡と感じても、これを幻として打ち消してしまふことは出來ない。たとひその謂はゆる醜惡な現實を去つて、空想の天地に遊ばうとしても、現實を離れた空想は、どうしても空虛の感じを蔽ひ切れない。自己意識の鋭くなつた近代の人は、批評の精神によつて現實を見出したのである。見出された新らしい現實が、たとひ醜惡苦痛の感じを起さすとしても、それを無視し否定することは、批評の精神が許さない。個々の外界の現實は到底避け難く遁れ難い。吾々はこの個々の外界の現實を否定しないで、これに即して内心の不滿と苦痛とを脫することは出來ないであらうか。荒敗する外界の事物のうちに、新らしい永遠の生命を作り出すことは出來ないであらうか。已に個々の外界の現實が、避け難く遁れ難いとすれば、苦む心の内に、永遠の生命を求めるより外はない。安息の隱れ家を求めるより外はない。イエーツの心には、斯やうに思うても、尙荒敗の悲みと恐れと、永遠の追求の疲れと絕望とが、暗い陰をさしてゐる。何となくその心持に傷ましさの陰を染めてゐる。彼の眼は常に内心に向ひ、彼の心は常に内觀に專らである。そして内觀に專らなるは彼自らの深い要求でありながら、而も尙それ自らが漠然たる恐怖である。漠然たる憧れは卽ち漠然たる神祕の恐怖である。

個々の外界の現實に、新らしい永遠の生命を與へることは、内心の幻に確かな生命を與へることである。内心の要求、哀傷、恐怖、また絕望、すべての心の光りと影とは、生活に無限の魅力を根着けて行く。イエーツの言ふやうに、一切の肉體は空虛であつて、内心の靈のみが最高の充實した光りであるとしても、吾々はどうしても、感覺の印象なしに情緖の燃燒に達することは出來ない。この事はイエーツ自らもその二篇の象徵主義論で述べてゐる。醜惡なるものの中から美しきものを、實際の中から想像を、卽ちすべての有限と變化との中から、無限と永遠とを作り出さねばならぬ。生活に限りない魅力を根着ける心の明暗に、一つ一つ無限の姿を與へねばならぬ。内心の閃きに幻に、常住の姿を與へねばならぬ。限りない心が限りある形に溶け、限りある形が限りない心に宿すときに、その形にも、その心をも、分つ可からざる永遠の生命が生れる。荒敗し壞滅する現實は、直ちに悠久なる靈の流れとなる。靜かな幽かな白光に充ちた、夢のやうな、霧のやうな、心の安息所、そこには沈默の聲が微かに、又

高く響いてゐる。歡喜の聲でもある、悲哀の聲でもある。刹那は卽ち永遠である。生死も、明暗も、哀歡も、すべては一つに渾融して、生の流れは薄光を放つ。象徵の世界である。

五

イエーツの內觀は、神祕の恐怖に入り、象徵の恍惚に到つて極まる。シモンスの謂はゆる「熱情的靜寂」(a passionate quietude) の態度を以て、荒敗する現實の中に、魔力を信じ、恐怖を感じ、無限と永遠とを欲求する彼の心は、醜惡を厭うて美を愛したワイルドの心持とは違つてゐる。イエーツが自然を愛し、アイルランドの夢幻的な傳說を愛するのは、それが美しいからではない。自然も、夢幻的の傳說も、すべて彼にとつては神祕である。美しいすべてのものは、彼にとつて色彩と形と音との歡樂ではなくして、神祕である。夢幻である。イエーツの眼には常に暗い恐怖の色がちらついてゐる。幽かな神祕の影がさしてゐる。彼はどうしても荒敗の恐れを脫することが出來ず、知識の知り得ない魔力の實在を疑ふことが出來ない。彼はどうしても憂鬱の心持をなくすることが出來ない。夢でなければ、皆老いて行く。皆暗くなつて行く。彼の內觀には寂しい夢を辿るやうな趣きがある。白日の夢は覺めても、尙眼前に妖魔の朽廢がかげろふ。戲曲『陰暗き海』(Shadowy Waters) で彼が歌うたのも、絕對の要求と現實の生の朽廢と矛盾の悲みである。同じく『何ものも無きところ』(Where There is Nothing) で、神祕と驚異とのない人々の間に生活することの苦しさに堪へかねて、ジプシー人のやうな放浪の生活に入つた主人公のポールが、病を救はれた僧院生活の間に、現し身ながらに無限の涅槃に入らんことを渴求し、現世の荒敗壞滅によつて、謂はゆる "Where there is nothing" に到達することを信じ、遂に僧院を逐はれて慘死する。あのポールの心は、やがてイエーツの心ではあるまいか。涅槃を慕ひ無限の流れに融け入らんことを欲する心は、常に幽寂の秋の悲みに慄へてゐる。而も、彼は決してその幽寂の中に沒してしまふことの出來ぬ苦みを懷いてゐる。彼は決して自己の個性を忘れて、大涅槃の中に沒入することの出來ぬ、深い銳い自己意識を有つてゐる。イエーツの顏に「陰氣なうつとりとしたやうな樣子」があり、その樣子を與へる眼は、大きく、暗く、深く沈んで、洞穴の火のやうに、闇の中で燃え上つたり消えかゝつたりして、燻つてゐる、といふモーアの描寫は、よく彼のこの心持を現はしてゐるではないか。彼の眼にどことなく老けた疲れた影のあるのも、自ら彼の恐怖と倦怠とを現はしてゐる。彼は神祕と幽寂とに戰く心を、夢みるやうな薄光の靈の流れに浸して、無限を有限のうちに作り、そこに安息を求めてゐる。象徵は彼にとつて永遠の隱れ家である。

（明治四十四年五月）

與へる人

詩人は「與へる人」である。新らしい生命を與へる人である。新らしい生命の光りとよろこびとを與へる人である。

自分自身に生命を與へることによつて人は自分を生ひ立たして行く。あらゆる方面の天才は、あらゆる方面のすぐれたる人々は、自己の生命を深く強く培養し得る人々である。天才は强者である。弱い天才といふことは言葉の矛盾である。

（『南の窓にて』より）

近代文學に對する疑ひ

私は近代文學に就いて一つの疑ひを懷いてゐる。しかし近代文學は範圍も廣く種類も多く、頗る複雜である。そして私が有つてゐる近代文學に關する知識も理解も、決して十分と言へる程のものではない。私は自分の知識や理解の足りないことを思うて、また殊に現在私の懷いてゐる疑ひを處理する爲めからも——その疑ひにどれだけの確實な根據があるか、またどの程度までその疑ひが正當であるか、如何にしてその疑ひを批評し解決すべきか、これ等の點を明かにしたい爲めからも、更に今までとは違つた興味と理由と必要とから、近代文學に就いて新らしく學びたいと思つてゐる。しかし近代文學に就いての私の知識や理解が十分でないにも拘はらず、今までに得た私の僅少な不十分な知識と理解とは、私の心に一つの疑ひを投じて止まない。知識や理解が不十分であるが故の疑ひであるならば、私はこの疑ひを述べて敎へを乞ふことによつて自ら啓發するところがあるであらう。又もし私の疑ひに、私自身の知識や理解の不十分といふことに拘らない何等かの根據があるならば、私はこの疑ひを述べることによつて、一つは自分の心を開き、一つは眞摯なる思想家の批評と考察とを促し求めたいと思ふ。

近代文學の與へる興味は多種多樣であるが、それ等を一貫して吾々の心を牽くのは、實にそれが生活の痛苦を表現してゐるところに在る。如何なる態度に於いてか生活欲望の惱みを表白してゐるところに在る。生活欲望の充足せられない苦痛や惱みを切實に表白してゐるところに、近代文學に對する吾々の深刻な興味が繫がれてゐる。勿論生活欲望の現はれかたもさまざまであるし、それの充たされない苦しみや惱みの表白もさまざまではある。陰暗な慘苦な生活をそのままに表現したものもあれば、光彩ある華麗な生活を表現したものもある。沈默した冷酷な態度や、皮肉な笑傲的の態度や、遁避的遊離的の態度や、必ずしもまともに生活欲望の惱みを表白してゐないやうに見えるものも隨分ある。しかし、一切の題材や態度に拘はらず、凡そ近代的といはれる文學の內に湛へられてゐる興味の中心は生活欲望の惱みの外に出でない。少なくとも生活欲望の惱みを切實に深刻に表白してゐるものが最も強く吾々の興味を牽くことは事實である。滿足のない、解決のない、不定限な、不安定な心持が、近代文學の特色であり興味の中心であつて、一たびそれに滿足と解決と定限と安定と、凡て生活欲望の充足の感じを與へるやうな心持が混つて來れば、それだけ近代文學としての興味も薄らいで行く。近代文學はその意味で滿足安定のない生活の表現である。近代的と言ふ言葉には不充足不安定といふ意味が常に裏附けられてゐる。

勿論近代文學の中にも、前に言ふ通りいろいろ違つた表現がある。皮肉な笑傲的の態度で人生を觀てゐるものや遁避的遊離的の態度を採つてゐるものが、その實はやはり生活欲望の惱みを直接間接に表白してゐるものであることは言ふまでもない。またたとへば光彩ある生活の歡喜を高唱してゐるやうに見えるものも、その光彩の中には眼に見えない濃い陰影の翳が閃々として動いてゐる。歡喜の高唱の中には不安の顫動が潛んでゐる。眞に充ち足つた裏

心からの歡びの聲をあげてゐるものは決してない。また一面近代文學の最も著しい力强い表現となつてゐる因襲の打破、現實の暴露、幻影の破壞乃至强烈な自我の主張といふやうな題目に就いて見ても、それ等の突發や驀進には深い一種の誇りが伴つてゐるにも拘はらず、尙且つ言ふことの出來ない不安な寂寞な心持が伴つてゐることを蔽ひ得ない。要するに常に充ち足りない心の表現である。これが近代文學の中心の生命であつて、同時に惱ましい暗い影を拭ひ去り得ない所以である。

近代文學の作品を讀んで深刻な痛切な感じを懷かないものはあるまい。吾々が好んで近代文學を讀む興味の中心には、あくまでも深刻な、痛切な、緊張した生活の味ひを味ひたいといふ欲望が宿つてゐる。實際近代文學の興味は深刻である、インテンスである、嚴肅である、切實であり痛烈である。併しそれが深刻であればあるだけ、切實であればあるだけ、緊張してゐればゐるだけ、その凡てを通じて拭ふ可からざる苦痛の色が漲つてゐる。充たされない生活欲望の惱みが溢れ流れて居る。

陰慘な痛苦な、張りつめた心を懷いて、寂しく而も誇りを以て藝術の道に殉じたフローベールの一生を想うて見よ。吾々はその緊張した沈默のうちに、異常の力の濃く脈搏つてゐることを感ずるとともに、いかにも一生懸命な、しかしながらまたいかにも無理な、苦しげな、痛ましい生命の悲劇を想ひ浮べ得るやうに思ふ。フローベールよ、彼の一生は努力精進して藝術の牲となつた尊い立派な一生ではあるが、それだけにまた息詰つたやうな重苦しい慘苦の色が心の額に滲んでゐる。沒個人格を唱へた彼の嚴肅な冷酷な藝術上の態度と覺悟とには、異常な力を靜止せしめたやうな不安な痛ましい心持が漲つてゐる。

自我の解放、强烈な個人性の主張を唱へて驀進した、あの嚴肅な莊重な剛邁なイプセンの一生を想うて見よ。吾々はその大膽な現實の暴露と力强い自我の主張とに、偉大な壓力と掃蕩力とを感じ、深刻な社會觀に戰慄を禁じ得ない。しかも彼の一生のいかにも嚴肅な、しかしながらまたいかにも孤獨な、寂寞なものであつたことを想はざるを得ない。イブセンは孤獨と沈默のうちに異常の誇りを以て近代文明の上に峻烈な批評を加へた。而も彼の作品は晩年に及ぶに隨つてだんだん自己の衷心の孤寂を愬へるやうになつたではないか。そして彼の一生は結局嚴肅深刻な批評の一生であつた。あの矜恃するところの高いイブセンの心にも、何ものか尊い限りない光りであり命であるものを掴み得なかつた寂しみを蔽ひ得ない。偉大ではあるが寂しいのが彼の一生である。

シャルマンドスキーの尼僧院に老いたる妹を尋ねて、アスタポーヴォの小驛に永眠したトルストイの八十二年の長い一生を想うて見よ。彼の一生は變化の多い複雜な一生ではあつたが、而も彼は自ら農民となり無抵抗主義を唱へて、靜かな幸福な純一な生活を求めて瞬時も已むことのなかつた求道者であつた。彼はこの平和な敬虔な生活に到達する爲めに、その長い一生の大半を、いや、その長い一生の初めから、苦しみ惱み努めて已まなかつた偉大なる求道者であつた。吾々はこの老いたる求道者の心を想うて、一種の深い痛ましさの感じに打たれざるを得ない。彼の如き努力と精進とを以てしても、あれ程の長い根氣强い生涯の努力と精進とを以てしても、それでも遂に安心と滿足との境に到達することの出來なかつたトルストイの心を想うて見れば、吾々の心には言ふ可からざる深い感慨の生ずるを覺える。偉大なる不安、偉大なる惱み、吾々の心は限りなくその一點に

吸ひ寄せられて、今更の如くこの巨人の意味ありげな最後の悲劇を想ひ浮べざるを得ない。彼も亦た充たされない寂しい不安な心を懷いて、八十餘年の一生を思ひ惱み苦しみつつ生きたのであつたらう。彼の苦しみは自ら求道者となつた刹那から始まつてゐる。彼は求道者ではあつたけれど、遂に自分の心內の惡魔を追ひ拂ふことが出來なかつた。彼も亦た惡魔であることを苦しみ惱む惡魔ではなかつたらうか。

更にまたダヌンチオを見よ、フランス世紀末のデカダン詩人や象徵派の詩人たちを見よ、彼等は光彩ある人生を高調し、あらゆる官能と神經との鋭敏な不思議な歡樂と苦痛とを讃美し、それに陶醉し耽溺して、戰慄する刹那の緊張に生命の眞髓を賭するを惜しむまじき冒險兒である。彼等の追求し彼等の與へる興味はシュリリングである。全身の內外に鋭い戰慄の快感を漲らし、痛烈な緊張を欲求することに彼等の生命は繫つてゐると言つてもよい。殘忍の美も、醜惡の魅力も、罪惡の快感も、腐爛せるものの蠱惑も、凡て頽廢的、蠱惑的なものの與へるところには、光彩と陰影と快感と苦痛との混和し錯綜せる不可思議なる興味を感ずる。惡の華の戰慄する緊張の興味は、近代文學の最も著しい一つの魅力である。吾々はそこに強烈な執着や飽くことを知らぬ欲望の渦卷をなし火花を散らして烽火の波の如く明滅する、物凄くも花やかな光景を見るのである。冒險的ではある、華麗ではある、痛烈ではある、緊張してはゐる、而もその華麗や痛烈や緊張の背後には、陰暗な、苦しい、無理な、われとわが身を腐蝕させてゐるやうな物凄さたよりなさがあるではないか。わびしいはかない惡夢の後のうすら寒い心持があるではないか。疲勞と倦怠と自棄と暴虐との感じがあるではないか。

近代文學の特色はこれだけには盡きてゐないであらう。しかし上に述べた二三の方面が、近代文學の最も目立つ重な特色であることは疑ひを容れない。少なくとも近代文學が私自身にとつて最も深い興味を與へたのは凡そこれ等の點であつた。深刻な、嚴肅な、陰慘な、緊張した、惡魔的な頽廢的な興味、私はそこに強烈な生活欲望の潛んでゐることを感じ、またその欲望の強烈であればあるだけ不滿不充足の感じの深く鋭いことを感じ、その複雜な深刻な苦痛や惱みに、強い共鳴を感じたのである。實に、近代文學は私にとつて一つ　深い力強い蠱惑であり執着であつた。陰慘沈痛な暗黑と強烈な光彩と燃燒との、相錯綜して一種の深刻殘忍な焦點を烙きつける近代文學の興味は、私にとつて不可抗的の魅力であつた。而してその魅力は今も尙ほ私の心にこびりついてゐる。私の心にはトルストイが生き、イブセンが生き、ダヌンチオが生き、ボードレエルやヱルレエヌが生きてゐる。しかし自分の心に生きてゐるこれ等の人々に對して、言ひ換へればこれ等の人々に共鳴してゐる自分自身に對して、私は今一つの疑ひを懷いてゐる。極めて漠然としてではあるが、しかしながら私の內心の事實としては可なり力強く頭を持ち上げて來る一つの疑ひを懷いてゐる。

私が近代文學に興味を感じたのは、ただ上に述べたやうなさまざまの不思議な魅力に魅せられることによつて、一種の複雜な快感を味ふ爲めにでは勿論なかつた。私は自分のうちに享樂的氣分のあることを否定するものではない。しかし私はそれの爲めに自分の全部を支配させることの出來ない人間である。私は初めのうちは漠然と、そしてだんだんに自覺的に、自分の內を知る爲めに近代文學の興味を深く感じて來

た。私は自分を批評する爲めに、自分の生活に力强い暗示を受けたい爲めに、打ちあけて言へばある時は自分を是認したい爲めに、ある時は自分を鞭つために、貧しいながらもさまざまの近代文學を讀み味つたのであつた。そして現在私は自分の近代文學を知ることの乏しいのをよく知つてゐる。しかもその一方で私の心には、貧しいながらも私の得た知識や理解に基いて一つの疑ひが生じてゐる。今までの私の經過から考へれば、この疑ひもつまりは近代文學に對する私の疑ひであると同時に、私自身に對する疑ひであることは言ふまでもない。

　强烈な自我を主張したイプセンは何故に何ものか尊い限りない光りであり命であるものを摑み得ないで、寂しい一生を終つたのであらうか。藝術に殉じたフローベールは何故に苦しげな痛ましい一生を送つたか。八十年の長い間求道者として精進して已まなかつたトルストイは、何故にその深い惱みを脱することが出來なかつたか。ボードレエルやヱルレエヌの一生は何故に光彩のうちに陰影を湛へてゐるのであるか。近代文學の巨人が、何ものか無限の力であり光りであるものを求めつつ、而も悉く慘苦懊惱の生涯を送つて、その作品の上に、隨つて近代文學の全面に、一種の惱ましい痛ましい影を投げてゐるのは何故であるか。藝術家の一生は痛ましい苦しい惱ましいものであると言へばそれまでであるが、それにしても近代の文學に最も著しい興味である生活欲望の惱みが、それ程までに深く色濃く漲りわたつてゐるのは何故であるか。そもそもまた、トルストイやイプセンが、彼等の强大な力と深い切なる求めとを以てしても、倘且つ遂に得なかつた或るものとは何であるか。近代生活の全面に亙つてゐる强烈な生活欲望の惱みが、かやうな文學を生んだのであるといふやうな說明は、今の私の心に光りを投げてくれるに足りない。私の疑ひはその近代生活の根柢にある生活欲望の惱みに對する疑ひである。何故に生活の欲望は惱みであるか。何故にその不充足の惱みは益々烈しくなり行くのであるか。そもそも生活の欲望が求めて已まないものとは何であるか。如何にして吾々の求めるものは得られようか。近代文學の根本生命が强烈な生活欲望に在るとし、その不充足の感じが近代文學に一般の特色であるならば、而してその欲望の募るにつれて不充足の感じは益々深く鋭くなるのが事實であるならば、吾々はその不充足の惱みを愈々深く鋭くする事に生きることは到底出來ない。私の疑ひはそこに在る。

　吾々の生活はもとより深刻であらねばならない、緊張したものであらねばならない。しかし深刻であることは必ずしも痛苦であり懊惱であることと同じではない。生活の皮相に甘んじ安んずることを飽き足りないとして、假面を剝ぎ堅い皮を棄てて、飽くまでも眞實な生命に徹することが、眞實な生命の搏動に親しく觸れて感ずることが、深刻であることの本意である。深刻であるが故に苦痛であることは眞實の意味では有り得べからざることである。近代文學の深刻といふことは、皮を剝ぎ假面を碎くことによつて生命の眞實に觸れることを志しながら、まだその本當の生命に觸れてゐないのである。少なくとも今一層深く今一層沈んで行かねば本當の生命には觸れ得ないのではないか。眞に深刻な心持とは、無限に高い誇りと自信とを有するがゆゑに、極めて低く深く沈み得る謙遜な心であらねばならぬ。また緊張した心持といふものも、決して肩臂を張つた硬い貧しい心持であつてはならぬ。内から溢れる力の自らの充

満による緊張でなければならぬ。皮肉や笑傲や遁避やは凡て眞の生命を愛し生きんことを欲する態度ではない。謂はゆる近代文學の苦痛なる興味をあくまでも追求することは、一面執着の強い冒險兒とも勇者とも見えるとともに、實は自己の生命に對して自ら暴虐を加へてゐることである。眞に生命を愛するものは、いかなる冒險を以てしても、生命の感じの深刻痛切なることを望むのが當然ではあるが、それは苦痛と懊惱とに自ら耽ることでは勿論ない。また苦痛と懊惱との愈々鋭く深くなることを自ら得意と感ずることでは勿論ない。近代文學の強烈な生活欲望は、充たされない惱みをいつまでも追求して、いよいよ踠き苦しむのをその本意とすべきではないのである。惡魔的傾向を脱し得ない苦しみ、自我の主張の空虚な孤寂な感じ、自己燃燒の暴虐、これ等の近代的傾向に對しては、吾々はただ徒らに興味を持ちもしくは漠然と是認してはならない。今迄に吾々の心を牽いて來た近代文學の興味は、それだけでは到底吾々の心に充足の感じを與へてくれない。今一歩深く眞實の道に踏み込むのでなければ、吾々はこの苦しい息詰つたやうな近代文學の束縛を脱することは出來ない。近代文學はその破壞的な思ひ上つたやうな苦しい心を碎き去つて、眞の誇りと眞の充足とに達する爲めに、自然な、すなほな、而も力強い生命の力を愛する心に往く可きではないか。眞の心の充足を求めるのは、決して固定した滿足を求めることではない。無限の力を有する生命の尊貴に感謝し信順する心になり得てこそ、初めて無限に成長して已まない心の充足を得られるのではないか。そこに生活に對する眞に透徹した理解があり得るのではないか。眞のリアリズムの精神が充ち溢れるのではないか。而して一切は生命であり、生命の象徴であり、光りと力と命とに充ちたものとなるのではないか。純眞な人の心が、自己の心に衞られ、自己の感情に光被せられて、到底壓服し破壞することの出來ないやうに、愛せらるるものの上に起つた事が、如何なる些細なことでも愛するものにとつて些細ではないやうに、吾々の生活が力強い無限の生命の律動として感受せられ、藝術がその律動の表現として感受せられるのは、眞に生命の無限力に信順歸依するものにして初めて可能である。吾々は近代文學の惱ましい苦しい無理な痛ましい心持から、眞に自由な生命の力に賴りすがる心持にならねばならぬ。將來の新らしい文學はこの意味で象徴的でありこの意味で創造的であるであらう。隨つて吾々の新らしい生活は、あくまでも謙遜な、すなほな、うぶな、眞に渴するものの心の中に芽を吹くであらう。

しかし私は決して自ら眞に謙遜になり得てゐるとは思はない。眞に渴けるものとしては甚だしく傲慢であることを恥ぢてゐる。近代文學に對する私の疑ひもまだほんの石を投げられた程度のものに過ぎない。しかし私の心は擾ぎ、私の心は渴きを覺えてゐる。私は自分の心持の明りをかすかに望んでゐるやうに思ふ。この一篇の意は更に詳密に充たされねばならぬと思つてゐる。

（大正二年十月）

何もしないでゐる時

事にかまけてゐる間は何でもないやうだが、何もしないでゐる間の生活は中々むつかしい。「何もしないでゐる時」の心持が、自分には一番大切な心持だ。（『南の窓にて』より）

思想の力

「罪と罰」のラスコーリニコフは、下宿屋の女中から何をしてゐるのかと尋ねられたときに自分は考へることをしてゐるのだと言つてゐる。彼は確かに考へることをしてゐた。しかし彼の考へることは要するに空な考へごとに過ぎなかつた。彼は本當の意味での思想家ではなかつた。

彼の思想が論理上の錯誤に陷つてゐるといふ解釋は、彼の論理がただの「頭の論理」であつて、「生命の論理」になつてゐなかつたといふ意味でなら、卽ち彼の思想が本當の思想に成つてゐないといふ意味でなら承認することの出來る解釋である。彼の考へたことは理窟である。それも冷たい理窟でなくて、何となく壯んな鼻柱の强さうな一種の超人思想を說いてゐる理窟である。けれどもその考へは要するに理窟であつて本當の生きた思想ではなかつた。彼の理窟そのものは、理窟として間違つてゐなかつたかも知れない。しかし彼がその理窟を言ふときに、その理窟は彼自身のものになつてゐたかどうか。彼に於てその理は眞であり得たかどうか。言ひかへればその理は彼の生命から生み出されたものであつたかどうか。彼といふ人間とその考へてゐることとが離れ離れにはなつてゐなかつたかどうか。

彼は自分の考へに基いて、殺人といふ非常なことを行ふには行つた。そしてその事は、彼自身では自分の思想を實行したことになつてゐる筈である。隨つて自己實現の滿足こそはあつても、それに對して不安や恐怖を感ずることはない筈である。しかし殺人後の彼の生活は地獄である。彼は理窟の上では探偵のポルフヒーリなどに向つて一種の超人思想を說いたりしてゐるけれど、眞實は不安と恐怖との苛責に堪へられない。彼の考へたことは單なる頭の中の理窟であつて、彼自身の力――彼自身の生命の中から作り出されたものではなかつた。彼自身の本當の力の――本當の生命の表現ではなかつた。卽ち彼自身の本當の思想ではなかつた。また隨つて勿論本當の實行でもなかつた。

彼のした殺人といふ行爲は、彼自身の眞の力によつて行はれたことではない。彼には――本當の彼には、そんなことをするだけの意志はない。彼は思ひ切つてやつてしまつたのであるが、その思ひ切つてやつたことは、本當の果斷決行でも何でもない。自棄的、機械的、反動的、發作的――つまり非力の反射的行動である。意力的自發的の行動ではない。

彼自身もそのことを不安に感じないではなかつたのであるが、彼にはその非力の反射的行動を統制するだけの力すらなかつたのである。彼の考へたことは――彼の謂はゆる思想は、彼の實際の力――彼の有つてゐる實際の生命の力とは離れて、それには構はないで彼の手足を動かしてしまつたのである。彼の謂はゆる思想が、彼の手足をそそのかして、彼の生命に背叛せしめたのである。彼の苦悶と不安とはその當然の結果であるに過ぎなかつた。

彼は自分の本當の力――本當に自分の有つてゐる生命の力を知らなかつた。彼は自分の生命の力の弱いことを知らなかつた。自分の考

へが自分の生命の力から發生してゐないことを知らなかつた。彼は自分の考へが、本當の自分自身の考へでないことを知らなかつた。彼は、その考へが本當の自身のものであるかないかを、隨つてその考へが自分の生命に背叛するものであるかないかをも、考へて見なかつた。彼には自分の力といふものが問題になつてゐなかつた。自分の力を正當に公明に批判する力がなかつた。自分の生命が本當に自分の問題になつてゐなかつた。彼が自分の力といふものを問題にして、それを正當に公明に批判するやうになつたのは、ソーニアの感化を受けることが出來るやうになつた後である。彼が自分の生命の問題を本當に自分の問題として考へるやうになつたのは、彼がソーニアの感化を受けるやうになつた後である。ラスコーリニコフの本當の生活はそれから始まる。

ラスコーリニコフは一人ではない。そこには多くのラスコーリニコフが居る。吾々の内にもラスコーリニコフが居る。

ラスコーリニコフの心には、弱い自分に反抗する心持があつた。力なき自分を誘惑して、自棄的に、反抗的に、突進せしめた一空虛の思想があつた。彼が殺人後に感じた哀愁と寂寞とは、生命の空虛なる思想に自分を任せた心細さとたよりなさとである。彼は彼の考へてゐる一種の超人思想を實行したと思ふプライドが、さすがに何となく自分ながら本當のプライドではないやうに感ぜられたのである。彼の寂寞と苦痛とは、力なきものが强ひて暴力を揮うた後の寂しさと苦しさである。自分の良心に對して自ら加へた暴行、自分の生命に對して自ら加へた暴虐、彼の行つたことは要するにこれに他ならない。

而してラスコーリニコフは一人ではない。そこには多くのラスコーリニコフが居る。吾々の内にもラスコーリニコフが居る。

『罪と罰』に描かれたラスコーリニコフの前半の生活は、思想が生命の力から乖き離れてゐる生活である。そしてその生命の力から離れた思想が、生活を無殘に荒らしてゐる。思想としては死んだ空虛な思想である。生活としては魅かれた生活である。死んだ思想に引きまはされて操られてゐる生活である。彼がいろいろのことを思へば思ふほど、彼の生命の光りは暗くなつて行く。彼がいろいろのことをすればするほど、彼の生命の力は削られて行く。たゞそこには破壞の嵐があり、騷擾があり、紛亂があり、焦躁があり、怒號があるのみである。

ラスコーリニコフの生活の破綻は、思想と實行とを別々のものと考へたからであるといふよりも、思想の本質を眞に解し得てゐなかつたからである。隨つて、考へてゐたことがそのまゝ眞に實現されてしまはなかつたのである。彼は頭で考へたことを謂はゆる實行として表に現はした。一般の言ひ現はしかたによれば、彼は思想を實行したのだ。しかしその謂はゆる實行には直ぐ破綻が伴つて來た。彼の考へてゐたことが彼を賣るやうな結果になつた。隨つて彼の考へてゐたことの駄目であることが――自分の生命に叛いてゐるのだといふことが分つて來た。彼の思想が本當の思想でないことが分つて來た。生命から發出した思想でなくして、生命の表現である思想でなくして、外から侵入して來て暴力で生命を引きずりまはさうとする魔ものであることが分つて來た。彼の罪は考へることをしたといふ點に在るのではなくて、その考へが本當の根生ひの考へでなかつたといふ點に在るのだ。自分の生命の力が作り出した考へでなくて、たゞの理窟であつたといふ點に在る

のだ。彼に向つては、なぜもつと本當に考へなかつたか、なぜ自分の生命の力で考へなかつたか、といふ點を責むべきである。

思ふといふことは、最も深刻に、最も力強く行ふことである。思ふといふことは、最も確實に、動かすことも打ち消すことも出來ないやうに明白に行ふことである。吾々は、自分の外の行ひを都合よく無造作に曲げたり飾つたり調子を取つたりすることが出來ると思ふ場合にすら、自分の内の思ひを都合よく無造作に操ることは到底出來ない。吾々は、外の行ひに溫柔になり得ると思ふ場合にも、內の心に溫柔にはなり得ない。自分の內なる心を動かし、自分の內なる思ひを導く力は、決して無造作には得られない。容易に移り難く更まり難いのが吾々の心吾々の思ひの不斷の事實である。內なる思ひの移らず動かぬとき、强ひて迫り立てする外の行ひは、本當の實行ではない、本當の我れの表現ではない、本當の生命の表現ではない。所詮ラスコーリニコフの生命に對する暴虐と同じ性質のものに過ぎない。思ふといふことは、眞に恐ろしいほどに力强い深刻な行ひである。恐ろしいほどに確實明白な僞ることの出來ない行ひである。

形は時としては人を欺くことが出來る。しかし內心の事實は自分を欺くことが出來ない。自分の意識は時として欺くことが出來ても、無意識に生動して已まない自分の生命そのものを欺くことは到底出來ない。形を欺くものは心の疚しさを感じ、心の疚しさを欺くものも、生命の不安と疑懼との曇りを一掃することは出來ない。

最も深く思ふことは、最も深く生命の力を感ずることである。また最も明らかに生命の姿を心に映し出すことである。思ひは生命の力であり、姿である。あらゆる外の形も、あらゆる外の事情も、あらゆる外の事件も、內に思ふことを動かし得ない場合がある。思ふことの力に一指をだに加へ得ない場合がある。思ふことの力は本當の生命の力である。思ふことの深さは生命の深さである。思ふことの强さは生命の强さである。思ふことに光りあるは生命の光りである。思ふことに翳りあるは生命の翳りである。行ふといふことが生命の表現であるとするなら、思ふといふことは、いかなる樣式の行ひにもまして眞先きに、最も明白に確實に行ふことである。卽ちいかなる樣式の行ひよりも眞先きに、最も明白に確實に生命を表現することである。

思ふことは靜であつて行ふことは動であるといふのは、動と靜との標準を外の形に置いた考へである。極めて淺薄な幼稚な考へかたである。思想は眼に見えず耳に聞えない深い强い活動である。限りある形には到底現はしつくすことの出來ないほどの、無限無邊際の波動である。時には頑强な執着固定でもあれば、時にはまた驚くべき飛躍驀進でもある。その力も、その廣さも、その底も、その沖る限りも、到底究め知ることは出來ない。思想の世界は無限の活躍の世界である。眼に見え耳に聞える一切の有限の活動の世界は、この內なる世界の表現に外ならない。內の世界の自由な力を有たない一切の外の世界の表現は、根の淺い哀れなものに過ぎない。一時の痛快な驀進に過ぎない。

私は思ふことの眞に容易ならざるを感ずる。思ふといふことの、恐ろしきまでに確實明白な行ひであることを感ずる。思ふことが如何に深く生命の源に發出してゐるか、思想の深さといひ力といふものが、如何に生命の深さであり

力であるかといふことを感ずる。而してまた、思想の自由といふことが、如何に生命の力と自由といふことと同じであるかといふことをも、感ぜずには居られない。今は、一切の營みが先づ内なる源に就いて、自ら養ふことによつて、徐ろに自然の成長に往く可き時である。眞に自己を愛するものは、先づ自ら深く思ふことによつて深く生きるの道を拓くべきである。自ら深く思ひ自ら深く生きて行くことによつて、徐ろに自分を知り、自分を明るく開き顯はして行くべきである。本當に力あり光りある美しき自分は、かやうにして顯はれて來るに違ひない。眞に思想と謂ふことの出來るものは、あくまでも根本的本源的の實行である、最も深刻な實行である。この本源の力を外にしては、力強き實行といふもののありやうがない。吾々は先づこの意味に於ける思想の力の强さと深さと自由とに生きなければならない。少なくとも先づこの意味に於ける思想の力に畏れることを學ばなければならない。思想の力が生命の力であることを深く感じなければならない。

（大正三年三月）

藝術の味ひ

藝術の深い味ひは「全き生命」の暗示から得られるものに外なるまい。藝術の眞の魅力は、「全き生命」が引きつける力に外なるまい。人間生活の深い興味も――些々たる日常生活のさまざまな興味も、所詮「全き生命」を慕ふ心に根ざしてゐる。「神聖なる生命」の愛慕から生れてゐる。

「全き生命」の愛慕に生き、「全き生命」の感じの深きに生きるものは、寂寞孤獨の心からだんだん遠ざかつて行くであらう。ひとり居て樂しむこころの靜かなるよろこびには、深い大いなる力の感じがある。

ナイヒリスト

ある批評家がトルストイを論じた中に、ツルゲーネフは『父と子』の中でバザロフといふナイヒリストを描いて、ナイヒリズムといふ言葉に初めて「一切を信じないで否定する傾向」といふ意味を與へたが、ツルゲーネフはつまりナイヒリストを描寫したまでであつて、必ずしも彼自ら本當のナイヒリストではなかつた。本當のナイヒリストはトルストイだ。丁度たとへて言ふならば、ツルゲーネフはコレラに罹つた病人を初めて診察した醫者で、そのコレラに罹つて苦しんだ患者はトルストイだ。といふ意味のことが言つてあつた。實際トルストイは惱める魂である。トルストイの藝術も宗教も一生の精進も、凡て惱める魂の惱みの色に染んでゐる。彼の力も彼の寂しみもこの深い非凡な惱みの中に宿つてゐる。トルストイを敬ふのも憎むのも、哀れむのも、凡てこの惱みの故であらねばならぬ。あくまで地べたに着いて引きずられて行くやうな重い暗いトルストイの一生は、あたかも十九世紀後半のヨーロッパ文明の深い深い底の力の象徴であるやうにも思はれる。魂の自由解放を求める地底の呻き聲といふ感じがする。そこにまた土に喰ひついて生きる農民國のロシヤの色も濃く沁み込んでゐる。

（『南の窓にて』より）

生みの苦み

藝術の創作は身を切り骨を削る苦みではない。身を切り骨を削る思ひをするのは、生みの苦みではなくして生み得ざる苦みである。生まんが爲めに力を集めて、生みのよろこびを待つ間の苦みである。生むことは苦みではなくして、苦みからの解脫である。重荷をおろして、ほつと身の輕くなつた心持である。生みの苦みといふことは、嚴密な意味に於いてはあり得ないことである。少なくとも不正確な曖昧な間違ひやすい言葉である。

生むに當つての苦み、若しくは生まんがための苦みといふ意味の言葉に欺かれて、生むこと卽ち苦みであると思うてはならない。生むことは決して苦みではない。深い大いなるよろこびである。身も心も輕くなり若やぐ無限のよろこびである。藝術の創作は常に必ず深い限りないよろこびである。少なくとも肩の輕くなつたほつとする心持を與へるものである。

生活を深く十分に見、知り、感ずることの出來るときに、表現は初めて可能である。十分に見ず、知らず、感ぜざる生活は自分にとつて存在しない生活である。自分の内に織り込まれない、滲み込んでゐない生活である。さういふ生活は自分にとつて表現のしやうがない。表現は生活をしつかりと摑んで行くその一段一段に行はれる。自分の摑んだ生活を殘りなく十分に知ることの出來るときに、卽ち自分の生活を十分に批評することの出來るときに、さうして行く一段一段に吾々は自分の生活を表現して行く。そしてまた更に一段一段と自分の生活を批評して超越して行く。

生活の批評とは、一枚一枚生活の外殼を脫ぐことである。この外殼を脫ぐことが自己の客觀化である。藝術的表現である。藝術の創作は生活の外皮を脫いで行くことである。

藝術家の苦みは、容易に生活の外殼の脫ぎがたきところに在る。容易に新らしい生活の衣を着けることの出來ないところに在る。一度脫いだ生活の舊衣を、小切りにして書くときに、同じ調子の同じ味の作が連出することになる。しかし生活の外殼を脫いで常に新らしい生命に觸れることは容易でない。自ら超越し解脫しようとする生活から、更に深く更に新らしき境に出で得ないときに、人は生み得ず脫ぎ得ざる苦みを感ずる。しかし、生命が自ら成長成熟して、堅い外殼がひとりでに剝げ落ちるときが來れば、人は初めて解脫のよろこびを感ずる、成長のよろこびを感ずる、身輕になつたと感ずる。創作はこの時に成る。生みのよろこびは所詮成長乃至解脫のよろこびである。

解脫のよろこび成長のよろこびを感ずるときには物が書ける。外殼の落ちないことを苦んでゐる間は書けない。さういふ場合に書くことは「作る」のではなくて傷けるのである。自然に脫ぐのではなくて無理に生剝ぎするのである。この生剝ぎの苦みは、生みの苦みといふことは出來ぬ。

内在批評以上のもの

文學批評上の問題は、つまるところ大抵は文學研究の方法論の問題になるやうである。いつの時代にも絶えない文學批評上の論爭のあとを辿つて行くと、その殆どすべては文學研究法の摸索のあとにほかならないやうである。

日本に文學の科學的研究といはれるほどのものが始まつてから大よそ何年くらゐになるか知らないが、その結果がどれほど權威あるものとして世の中に知られもし行はれもしてゐるであらうか。ほんの概論風な手ほどきやうのものはないでもないし、一二特殊の研究もあるやうに思ふが、それ等が實際の文學批評の上にどれほどの力となつて働いてゐるであらうか。文壇に於ける實際の文學批評の場合では、今日では、文學研究法の概論程度のことは殆ど常識となつてゐるものと見てもよからうから(或ひは存外さうでないやうな事情があるかも知らないが、とにかくほゞそれくらゐの常識は普及してゐるものと見て)、今更さういふことを持ち出すのは甚だ迂遠な話に相違なからう。しかし、その文學研究法の一般知識が當然含んでゐるであらうところのものは、恐らくはいろいろの方法の寄せ集めであつて、そのいろいろの方法の間に一つの秩序があり、大小輕重の區別が立ち、中心が定められるといふところまで行つてゐないのが、今までの文學研究法概論に通有の事實ではなかつたらうか。概論風の知識がいつでも大抵そんな風に整頓せられてゐて、またそれが無害有益だと考へられて來たやうな傾きは、たしかに事實あつたといはなければならない。而してその結果は、――もしその中心のない、大小輕重の區別の明確でない、つまりしつかりした系統の立たない知識が常識程度にとり入れられて、時に應じて活用させられるといふやうなことになつたとすると、その場合その場合で都合のよいやうに判斷や解釋の立場を變へて行く一種の多元論的批評の態度ともいふべきやうなものが出來て來る。

多元的立場にある批評家を相手にしてものを言ふといふことは、相當骨の折れる、そのくせいつまでも埒のあかない、くたびれる仕事でなければならない。而してもし、その多元的批評家が、一人や二人ばかりでなく、凡そ文壇にいて批評らしい發言をする人の大部分までその仲間だといふやうなことにでもなつて來た場合には、さういふ人たちを向うへまはしてものを言ふといふことは、それが味方である場合でも敵である場合でも、その如何に拘らず、尚更以て甚だ骨の折れる、そのくせいつまでも埒のあかない、くたびれる仕事でなければならない。つまりその結果は混戰あるのみ。誰が何を言つてゐるのだか分らなくなつてしまふ。分るのは多くは怒罵のみといふやうなことにもならないとは限らないのである。

文學批評上の論爭も、結局は人生觀上の爭ひにほかならない。たまたま文學といふ特殊の社會的現象を生活興味の中心對象として、それを機縁に人生觀上の立場を表現する要求があればこそ、文學批評も成り立つのである。文學といふ特殊の社會的現象を生活興味の中心對象として、それの成立、發達、乃至影響といふやうな點について、一つの系統ある世界

を組み立てようといふ要求から、文學の研究も行はれ、またその批評も行はれるのである。文學の研究や批評によつて、一つの人生觀を打ち立てて行かうとするのだと言つてゐゝかも知れない。この根本の要求さへあれば、たとひその批評の言說のうちに、多少の矛盾や不統一があつても、少なくとも一つの意向だけはその間からあらはれて來ないではゐないであらう、批評の意志が自ら感ぜられないではゐないであらう。たとひ批評には——それが研究でなくて批評である場合には——たとひその批評にまとまつた系統や秩序があらはれてゐなくとも、せめてこの一つの中心的意志の表現がなくてはならない。寧ろ批評の場合に於いては、この中心意志の明らかに强くあらはれることが最も必要であるといはねばならない。批評の力といひ熱といふものは畢竟それにほかならないのである。批評に意志　必要とするのは、批評が決してたゞの受身の仕事ではないことを意味する(批評が專ら受身である場合は、批評の働きの一部分に過ぎない)。批評はいつでも結局主張である。

日本の文學批評は、多くの場合內在的批評の範圍を出でてゐない。文學個々の作品の形式や技巧や主題の性質やに關する批評の範圍を多く出でてゐない。內在的批評が、文學批評の基礎條件を成すことはいふまでもないのだが、それだけで批評は完了してゐるとは言へない。批評が文學の社會的成立を是認するところから出立してゐるものである限り、批評は　に一つの社會的現象としての文學を取り扱はなければならない。勿論この部分は、批評の恐らくは最も困難な仕事に屬するであらう。しかしながら、この部面の批評なくしては、批評はその中心意志を表現するところまでに至らずして止まるであらう。寧ろ多くの批評は、中心意志の表現を避けるために、內在的批評の程度に止まつてゐたとも見られる點がある。

而も今は最も切にこの內在的批評以上のものを必要とする時ではないか。社會的現象としての文學を批評すべき時ではないか。この意味は孰れもつとゆつくり詳しく說く機會があるであらう。時間がないから今度はこれだけの雜感にとゞめて置く。

(一五・二)

生きてゐる心持

生きてゐるといふ感じは、實にはてしない限りない一種の不思議な感じである。ある時は悠々たる心となり、またあるときは躍りあがるやうなこゝろとなる。生きるといふことは極めて確實なことであつて、同時に絕大のローマンスであると思ふ。神祕であると思ふ。この、生活は事實であると思ふこころと、神祕であると思ふこころとが、一つに融けて强く深く明らかに吾々の心の中に充ち湛へて來るとともに、吾々の生活は眞に强く深く明らかになつて行くのであらうと思ふ。イプセンの謂はゆる第三の王國は、この事實の感じと神祕の感じとが一つになつた生活の境地であらう。事實といふ眞といふことが、ただの表面の現象として見たものでなく、不思議な限りない力の發現であり運動であると感ぜられ信ぜられるやうな心の境であらう。そしてまた凡ての事實が實際にさういふ風な有樣に於いて生起し、すべてのことがさういふ風な有樣に於いて行はれる時代であらう。

(『南の窓にて』より)

現代日本文學の問題

一

チェーホフは、イワノフ・ラズウームニクの言葉をかりて言へば、千八百八十年代のロシヤの現實に對する諷刺家であつた。社會の凡俗主義、現狀非打破的傾向の停滯の間から生れた諷刺詩人であつた。實際、イワノフ・ラズウームニクの言つてゐるやうに、もしあの時分にプーシュキンが生きてゐて、チェーホフの物語を讀み聽かされたら、彼がゴーゴリの『死せる魂』を聽いた時のやうに、「吾等のロシヤは何といふ物悲しいところであらう」と言つて、嗟嘆したでもあらう。チェーホフの作品は、一面亡び行く時代に對する挽歌でもあるが、その涙の中には、笑ひがある、否定がある、諷刺がある、批評がある。

現代の日本文學に、最もあるべくしてないのは、この批評である、諷刺である、否定の笑ひである。

それは過ぎて行く時代を悲しみ葬る意志である。それは自ら己れを弔ふものであつてもよい、自ら否定する笑ひであつてもよい。それは直接に、正面から打ち下すやうなものでなくてもよい。たとへばチェーホフの諷刺が、正面から打ち下すものでなかつたやうに。

現代の日本は、否定の笑ひか、憤りか、そのどちらかを感ずることなしには、一日も生きてゐられない國である。吾々のやうな、比較的單純な生活の交渉の中に在るものですら、それ等の心持を刺戟せられずには、殆ど一日として過ぎないくらゐである。更に直接自分の關係を離れて、ひろい世間の事實を觀ると、わづかに最近の間に於いてすら、隨分度々息づまるやうな思ひをして來てゐるではないか。

震災の後に、世間を驚かした著しい二三の事實とその成り行きとを考へて見るがよい。誰がこの國のこの時代の空氣の重苦しさを感ぜずにゐられよう。不合理で暴虐で厚顏でシニカルな壓力が、鉛のやうに心を抑へて來る。それが自分等の國の同時代である。いくら跪いてもそこから脱出することは出來ない。それで人は存外平氣である。白日に見る夢魔のやうなのが、自分と同時代の日本の社會的事實だ。かういふ空氣の中に平氣で永くゐるためには、人は窒息するほかない。しかも、一思ひに窒息することすら出來ない息苦しい白日の夢魔が襲ひかゝる……

現代の日本文學に、最もあるべくしてないのは、この白日の夢魔の苦悶の表白である。

二

現代の日本文學に足りないのは意志である、生きようとする意志である。

自然主義の文學は、現實を物質的肉的生活の上に見出した。そこへ突き進んで行くことが、自然主義文學の生きんとする意志であつた。自然主義には打開の意志があつた。それだから苦澁の凝視の中にも歡呼があつた。自然主義に對する直接の反動として起つて來た新ロマンティシズムの傾向――惡魔主義的享樂主義的傾向の中にも、異常の形に於ける生命の緊張と充實とを欲する意味で、たしかに生きんとする意志があつた。しかし、それ等の意志の相爭ひ相競うた時代を過ぎてしまつた今日では、リヤ

リズムの意志も新ロマンティシズムの意志も、一通り業を卒へたやうな氣持で、落ち着いて、をさまつてしまつた。今の日本の文學は、謂はば三代目の文學である。創業開拓の意志を失つてゐるのである。すべての感じが既成的である、保守的である。

現代の日本文學に、否定の笑ひがなく、批評がなく、白日の夢魔の苦悶のないのは、その筈である。それは生きようとする意志が鈍り切つてゐるからである。生きようとする意志が鈍り切つてゐるから、現實は深い交渉を以て迫つて來ない。つまり現實の感じが空虚になつてゐるのである。形の現實は眼に映るが、現實の生命――現實の意志は心に響かない。現實は自己の意志を説明はしない。現實の意志が心に響いて來ないのは、こちらに生きようとする意志が動いてゐないからである、鈍り切つてゐるからである。

文學は意志である。文學の生命は意志を有する處にある。だから文學は固定してゐられない。

文化は自然の原始的な力なしには作られない。自然の原始的な力は、すべての文化を創造するための基礎である。しかしそれには人間の意志が加へられねばならない。人間の意志が、ばらばらの自然を新らしい統一に創造する。

「詩」は到るところに在るといはれる。空の雲にも、往く水にも、嵐にも、爭ひにも、憎みにも、悲しみにも、到るところに「詩」がある。自然と人生との中に遍在するところの「詩」は、すべての文學を創造するための基礎である。しかし、それには人間の意志が、加へられねばならない。人間の意志が、ばらばらの「詩」を新らしい統一に創造する。そこに、發達し展開する歴史を有つところの文學が成り立つ。

吾々にとつての問題は、いふまでもなくこの意味の文學である、人間の意志の展開のあとを辿ることの出來る文學である。この意味の文學には、いつでも定冠詞が附く。時代がある、變遷がある、打開がある。少なくとも、常に新らしい打開が豫想せられる、またそれが要求せられる。それが即ち「詩」の新らしい統一を要求する意志である。

吾々にとつての問題は、この意味での文學に於ける意志である。

而して、現代の日本文學に足りないのは、この意志である。現代の日本文學の衰微不振は、文學に意志がなくなつてゐるからである、文學に意志のないことをさほど怪しまないからである。

三

地震、火災、饑饉、戰爭、革命――さういふことによつて、文學が微動もしないといふ考へを懷くやうな人があるとすれば、それはその人が一つの迷妄に安住してゐることを意味する。

震災火災で「詩」は滅びない。焦土にも「詩」がある。焦土の中にわづかに命をつなぐ人々の間にも「詩」は求められる。飢の中に笛を吹く兒があつたといふのもそれである。しかしそれは、意志を有つ文學藝術ではない。それは現代の意志が選んで創造した新らしい統一の藝術ではない、偶然である、必要な偶然ではあつたかも知れないが、最深最高の意志が選んだ統一ではない。

焦土にも「詩」はある。焦土の中に在つても「詩」は滅びないで、生きてゐる。しかし、それだから文學が微動もしないと考へるのは、文學に意志を認めないことである。人間の生きようとする意志が、あらゆる社會的變動と沒交渉であると考へるものであつて、はじめてさういふ結論を肯定することが出來る。「詩」が滅びさへ

しなければ、生きようとする意志などは文學の上で問題とするに及ばないと考へる場合に、さういふ宣言で安心してゐられる。

どんな社會的變動が起つても、「詩」の珠は碎けないであらう。しかし、文學は碎けもする、燒かれもする、そしてまた新らしく芽ぐむ、また新らしい統一に創造せられる。意志が動くからである、惱んで潛り拔けて行くからである。生きようとする意志は、さういふ社會的變動と、結局沒交渉ではゐられない。必ず、いつかは交渉が始まる。生きるといふことは、一切の必要を攝取して、常に新らしい統一を創造して行くことでなければならないからである。

何ごとがあつても「詩」は微動もしないといふやうな種類の藝術觀現實觀からは、いはゆる唯美主義乃至藝術至上主義の狹い偏つた考へ作り上げられる。それはいつでも保守的である。その極致は、人生的内容の空疎な小手さきの藝になる。

どんな社會的變動があつたとて、個人の生活内容はさう急に變るものではない、隨つて、文學の上にも變りはないといふ考へを懷く人があるとすれば、それも亦、殆ど同じやうな迷妄に陷つてゐるものである。「詩」は無人の荒野にも見出される。しかし、文學はそこにはない。「文學は――それ自ら一つの禮拜堂である。民衆の天才が、己れを信ずるものに向つて言ふ、――吾が名によつて二人または三人の集まるところに、われは彼等の間に在ると。人はたゞ己れに似たものの間に在つてのみ、眞に人間となる。」信じて集まるのは、一面に於いて打開である、また新らしい統一である、生きようとする意志の表現である。生活の新統一の意志の強烈でないものが、自分を尺度として、すべての人々に新らしい創造の意志を否定するのは爲我的な迷妄であり、僭越である。

文學に於ける意志を認めないことは、やがてまた社會的現實に盲目である結果となる。それはその人々が自分たちの詩とするところのものを固守して、――言ひかへれば文學の形態にひとしいものを固守してゐるのである、文學が動かないのではなくて、その人々が固定してゐるのである。

四

文學藝術の人生に於ける意義を、社會的變動や自然力の激動を機會として疑つたりすることがあるとすれば、それは、その人が、人間としても眞に生きてゐなかつたためである、また眞の藝術家でもなかつたためである。眞理の光りのない、不合理不公平な生活が、死よりも苦しいことを感じ得るかぎり、かういふ問題は、眞の意味で問題とはなり得ない筈である。生活といふことの上に、文學藝術の意義が疑はれるのは、窒息しさうな空氣の中にゐても、平氣でゐられる心持である、眞理とか公正とかいふことがどんなに虐げられてゐても、あまり苦にならない心持である、生きる上に、眞理とか公正とかいふことがさまでに必要でない場合、生きる上に、文學藝術も亦さまで必要ではなくなつて來る。而してこの心持は多くの社會的現實に無頓着ならしめる、少なくとも無頓着であらしめる筈である。隨つて、この心持からは、意志を有つ文學は生れない。平俗な意味での、生きようとする意志らしいもの――「いのちあつてのものだね」といふやうな心持が、大びらで跋扈して、無造作に、すべての眞の「必要」を不必要にし、贅澤にしてしまふのである。簡明にして勇敢な凡俗主義の哲學である、凡俗主義を明快に是認する賴もしげな常識哲學である。

現代の日本文學には、要するに明らかな意志

の表現がない。

それだから、いくら多くの創作家がゐてもいくら多くの作品が書かれても、現代の日本文學には傾向がない、雰圍氣がない　文學が重大な關心事であるらしく言ひ合つてゐても、その間に氣分の高揚が生じない。隨つて眞の主張上の離合がない。批評が振はない、といふよりも殆ど批評らしい批評がない。「詩歌の詩歌」としての批評も、科學的研究としての批評も殆ど見えない。

五

現代の日本の文學に、一つの傾向を作らうとした試みは、最近では、プロレタリヤ文學の主張であつた。あの論は、いろいろに混雜してしまつたやうであるが、その主旨は極めて明白で、要するに社會的現實に徹せよといふ意にほかならなかつた。社會的現實に徹して、窒息するやうな雰圍氣の中に自他を見出すと同時に、眞に生きるための意志が動かねばならぬ。批評も、否定の笑ひも、白日の夢魔のための苦悶も、そこから自然に表白を求むべきである。この意志の發動を促したのが、あの論に共通の精神であつたと見ねばならぬ。

あの當時のプロレタリヤ文學論には、幾多の疑ひが挾まれ得るであらう。またいはゆるプロレタリヤ作家の作品も、論以上に不滿足な空疎なものであつたに相違ない。しかし、あの一時の主張と呼び聲とが、(今日では殆ど全く音をひそめてしまつたやうではあるが、)文學に意志を持てといふ要求から發したものであつたことは、認めないわけには行かない。

最近に突發した自然力の激動と、それに伴つて生じたいろいろの社會生活の變動と、異常の出來事の發生と、これ等はたまたま、自然に社會的現實に對する意識を刺戟した。現代の日本文學が、この社會的現實に對する態度の決定を機として、自ら分解解體すべき兆候は、既にプロレタリヤ論當時から明らかに見えてゐたのであるが、最近の事變は、一面に於いて社會的現實を今までより露骨に見せつけるとともに、隨つて、他面に於いて、その現實に對する態度の決定の時機を、一層促進せしめたと見られる。最近の事變の當時に於けるさまざまの藝術論風の表白は、不用意の間に既にその事實を示してゐるのである。最近の事變は、たしかに日本現代の文學の分解の機を早めたことになるであらう。現實に對する意志を缺いてゐた在來の作家の作品は、作品の市場では或ひはますます盛んに取引せられるでもあらう。しかし、それ等の作家が、何等かの意味で社會的に意志を有つて來るやうなことは、恐らく全くあり得ないところであらう。隨つて、それ等の作家の運命は、遲かれ早かれ、本質的には定まつてゐると言つてよい。

現代の日本文學に足りないのは意志である。それは、「詩」の滅びないことに安心するやうな心持ではない。それは、「いのちあつてのものだね」といふやうな心持から、眞の必要を贅澤と見るやうな凡俗主義ではない。眞の生活に、眞理と、公正と、美とが、呼吸の如くに必要であると感ずるものの心である。その必要の充たされないために、窒息する思ひをして、白日の夢魔にうなされつつあるものの、いのちがけの、生きるための叫びである。そこにはもとより「詩」がある。而して同時に、眞にいのちを生かすべき、贅澤ならぬ「必要」がある。それこそは、眞の新らしい文學である、眞に生きんとするものの、凡てのための文學である。

(二・一二)

無產階級的文學批評

無產階級文學運動の中心點が、無產階級のイデオロギヤの確立にあるとする說（『文藝戰線』二月號、山内房吉氏）は、その言ひあらはし方の多少の不十分を問題にしない限りに於いて、何人も異存はあるまい。無產階級文學といはれる作品の多くが、今のところ可なり未熟であるが故に、およそすべての無產階級文學なるものに就いて、その將來に亙つてまでもこれを否定するといふやうなものの言ひ方をするのは、勿論論者の意味する如くに不當である。その意味から無產階級文學運動の結局の意義が、イデオロギヤのための爭鬪にかゝつてゐることを力說するのは當然である。無產階級文學運動を廣く解釋した場合には、それはいふまでもなくイデオロギヤの問題に他ならないからである。

イデオロギヤの爭鬪としての文學運動が、單に作品を示すには止まらないといふのにも同意せられる。それが文學運動であるかぎり、文學批評はそのための重要にして有效な武器である。

一般的にひろく無產階級的イデオロギヤを徹底せしめ普及させることは、それを以て直ちに文學上の運動とは言へない、また言ふ必要もあるまい（文筆による運動といふやうな意味でなら勿論この限りではない。しかしこゝでは文學といふ言葉をさういふひろい意味で用ゐてゐるのでないのだから）。それが文學上の運動といはれるかぎり、無產階級的イデオロギヤの徹底乃至普及が、文學といふ特定の組織力を通して行はれることを意味するものであるのは明らかである。

文學といふ特定の組織力を通して、無產階級的イデオロギヤの徹底と普及とが行はれる場合に、それはいふまでもなく二つの形をとつて現はれる。その一つは文學上の創作である。今一つは文學上の批評である。

從つて無產階級的イデオロギヤのための爭鬪としての文學運動が、單に作品を示すことには限らないといふなら、それ以外の手段方法は文學批評である。

この場合に於ける文學批評は、文學の理論的研究をも、歷史をも、せまい意味の批評をも、そのすべてを含むものと見て差支へない。

論者の說くやうに、それは必ずしも作品を示すことにのみは限らない、批評でもよいのである。「批評でもよい」のではなく、批評が殊に今日に於いては必要である。謂ふところの「基礎工事」のために必要である。無產階級文學運動の意義精神に對する一般の「認識不足」をなくするために、無產階級文學の歷史的意義を正しく理解せしめるために、批評は殊に今日に於いて重要にして有效な運動の手段である。

しかしながら、それが文學運動であるかぎり、無產階級的イデオロギヤの徹底と普及とは、どこまでも文學を通して行はれなければならない。明日の文學の基礎たる唯物史觀が、マルクス主義の社會學が、それだけとして受け入れられることも、一つの先行條件にはなるが、單にそれだけでは、これを文學上の運動とは言へない。

無產階級的イデオロギヤの徹底と普及と——

要するにこれをひろく大衆の間に確立するために、文學がその手段方法として選ばれたかぎり(それを特に選ぶに至つた事情なり理由なりは必ずしも一樣でないであらうが)、文學に特有の約束條件を無視若くは輕視するわけには行かない。文學に特有の約束條件を十分に支配することが出來れば出來るほど、その文學運動の目的が確實に有效に達成せられる筈だからである。

無產階級文學運動の中心點が、無產階級のイデオロギヤの確立にあるとする說は、最初にも言つたやうに、その言ひあらはし方の多少の不十分を問題にしない限りに於いて、何人も異存はあるまい。こゝで、その言ひあらはし方に多少の不十分があるといふのは、無產階級的イデオロギヤを確立する手段方法(この場合では文學、くはしくはその創作と批評)の問題に、當然の注意が與へられてゐないやうに見えるからである。從つて、無產階級文學運動は單に作品を示すに止まらないといふのが、やゝもすると負惜しみらしく受取られる懸念があるからである。さうでなくても、世間の無產階級文學を輕んじもしくは難ずるものは、作品によいものがないと言つて責めてゐるのではないか。作品を示す以外に、この文學運動に意義があると言ふなら、それは、文學に對する獨特の見地からの批評研究による無產階級的イデオロギヤの徹底と普及とでなくてはならない。さうでなければ文學方面の「戰線」の勝利を期することは不可能である。

批評が結局何等かの意味で主張であり鬪志の表白であることは、別の處で手短かに說いたが、それが無產階級文學運動の場合に於いては、一層その特質を明らかにして來ると言へる。作品以外にこの文學運動の意義を見出すのは、批評の方面であつて、そこには幾多の未解決未解釋の文學上の問題がある。またそこには全く觸れられない夥しい文學批評上の材料がある。無產階級文學運動は、この方面に十分の力を用ゐることを要する。內在批評以上のものが要求せられるのも、この意味での新批評がなくてはならないからである。

しかし、上に言ふところの新批評は、その精神に於いては結局一つの戰であつても、必ずしも鼻つぱしの强さうな、喰つてかゝるやうな調子でなくてもいゝのである。一體今の文壇で評論の取扱ひを受けてゐる部類の文章には、あまりにさういふ調子があり過ぎるやうに見える。さういふ調子必ずしも場合によつては惡くはないにしても、それが相手を說得する力に於いて寧ろマイナスの效果をしか持たないとしたらどうであらう。今のときは、寧ろ强くくはしく、明白且つ正確に、十分の根據と用意とを以て說くべきではないであらうか。痛快さうなものの言ひぶりほど、よけいに說得力を失ふのではあるまいか。殊に況んや、無產階級的イデオロギヤの一表現としての文學批評乃至硏究の如きは、今日のところ、どこの國にも先例も甚だ少なく、文學論としての整理も甚だ不十分だから、これを理解させ承認させるためには、今までの文學論よりも手數を要する。どこまでも諄々として說くだけの十分な用意を必要とする所以である。文壇の少なくとも一部は、批評の上のやゝ面倒な考察をきらひ、樂に讀み流せるやうに手つ取り早くものを言ふことをよろこび過ぎはしまいか。文壇にうるさい口いさかひの多いのも、一つはさういふ不用意なものの言ひ方をお互ひにしてゐる結果ではあるまいか。私は決して、いやに小面倒くさくいやに用心深くものを言へと言ふのではない。中村君がある

誌上で一寸言つてゐたやうに、私自身にさういふ癖があるなら、努めてその弊を除くことにしよう。しかし、ひそかに考へて、今の文壇にもあまりに不用意なものの言ひ方が多いのではないかと思ふ。それはとにかく、上に言ふ新批評が、啖呵を切るやうな調子、喰つてかゝるやうな調子になることは、一つの示威的效果もないではあるまいし、味方の勢ぞろひの元氣づけにもなるではあらうが、文學戰線での新原則を承認させるためには、出來るだけ十分な根據と用意とを以て說得する覺悟がなくては、所期の效果は收め難からう。說得するための談理のうちに、熱意はおのづから人に觸れずには措かないからである。

最後にも一つ加へて置きたいのは、無產階級文學運動の人々の間に、もつと嚴密な相互批評がなくてはならぬ、殊にその作品に就いて、眞の批評がなくてはならぬといふことである。これなくしては、無產階級文學の成長は阻止せられる。それは作品の上に進步がなくなるばかりでなく、批評そのものもまた權威を失ふ。無產階級文學の立場に據る批評家が、その仲間の作品に好意の勵まし與へ、少しでもそのよいところを擧げようとするのは必要でさへもあるだらう。しかし、仲間であるが故に、批評として當然指摘しなければならない作品の弱點に目を蔽ひ、安つぽく最大級の讚辭を呈することを以て、一つの戰術と心得てゐるかの如く見えたりするのは、甚だ採らないところである。この事は、少なくとも第三者の眼に、その批評の權威を疑はしめる。批評の權威が疑はれるところではその批評は效果を持たなくなる、卽ち無產階級文學運動の手段としての役目を果さないことになる。

味方にわるく寬大であるものは、眞の味方ではない。今の無產階級文學方面の人々は、それが文學運動であるかぎり、もつともつと文學上の批評心を鋭くす必要がある。これは卽ちその武器を磨くことにほかならないからである。

（一五・三）

行ふことと思ふこと

行ふといふことは、必ずしも手足を動かして仕事をするといふことではない。行ふといふことは生きるといふことである。眞に生きてゐるといふことである。思ふといふことは行ふことである。人は勝手に出たらめに白いと思つたり黑いと思つたりするわけには行かない。白いと思ふことは、白いと思つて生きてゐることである。白いと思つて行つてゐることである。白いと思ふことから一轉して黑いと思ふやうになるといふことは容易ならぬことである。世界が變ることである。生きかたががらりと變ることである。人は白いと思つて生きてゐることから、出たらめに黑いと思つて生きることに變つて見ることは出來ない。さういふことは一生の間に何たびあることだか分りはしない。大抵の人は一度もさういふ目を見ないで死んでしまふ。白いと思つたら思つたままで死んでしまふ。寧ろ白いのだか黑いのだかよく分らないで死んでしまふ。白いと思ふことから黑いと思ふことへ變るのは一大事である。

この「思ふ」上の一大變化は、その人の全體の生活を變へてしまふ。ぢつとしてゐたものが動き出すといふやうな變化ではなくて、白く生きてゐたものが黑く生き出すのである。生活上の變化である。實行上の變化である。思ふことは卽ち生きることである。また隨つて行ふことである。

（『南の窓にて』より）

「否定の文學」

一

否定は力である。

事實、なまなかの肯定に比べて、否定ははるかに深い強い力である。

否定の力のあらはれて來るのは、生命の動いてゐる證據である。否定は眞によく大切なものを生かす。否定は眞によく大切なものを育てる。

否定することによつて自己があらはれる。否定することによつて、心の泉が流れ動く。否定することによつて、眞に自ら生きる道を見出す。

少なくとも、ロシヤの文學に就いて見ると、このことは眞實である。ロシヤ文學はその源を否定に發してゐる。ロシヤ文學は否定の中から生れて來た。十八世紀以後、ロシヤ文學が成り立つてのちの事實は、さらである。

ロシヤの現實――その現實の見解はまたさまざまに分れた。現實として認めるものの内容や、それに對する解釋は、時により、人によつてさまざまに分れた。しかしながら、とにかくロシヤの現實を對象として、これを肯定するか、もしくはこれを否定するかが、いつでも重要な問題であつた。平生はそんな問題には無頓着であるやうに見えてゐて、心の動搖が深くなつて行けば行くほど、その動搖の底から、形を異にしては、いつでもあらはれて來るのは、この問題であつた。誰でもよく知つてゐる例をあげるなら、トルストイもそれである。トゥルゲーニェフもそれである。ことにドストイェーフスキーがそれである。近くでは、ゴーリキーも、ブロックも、ソログープも、アンドリェイ・ビェールイも、その他一々名前をならべ立てるの煩に堪へない。

ロシヤにとつては、西か東かの問題である、科學か宗教かの問題である、惡魔か神かの問題である。しかしてそれは、ロシヤの現實を如何に否定するかの問題である、また如何にそれを肯定すべきかの問題である。しかして、この問題の批評の前には、いつもよくピョートル大帝が立たされる。ピョートル大帝を否定するか肯定するかの問題とさへも、しば〳〵考へられることがあるのである。

二

君主が主導者となり中心となつて、國家的の見地から、一國の文明文化の改革を、性急に、大膽に、且つまた一徹に斷行しようとする。およそ、ものの分別があつて、多少でも批判を加へたり是非を辨へたりすることの出來るものは、その批判辨別の力を、悉くこの國家的見地に基く改革に向けねばならぬ。それ以外に、その當時に於いて、批判辨別の力を加へるに足る對象はあり得ないからである。ともかくも、そこで社會に批評が出る、輿論といふべきものの萌芽が出る。凡ての批判は時事評論である、國家的見地からの改革を主題としての時事評論である。

これがピョートル大帝時代のロシヤである。――ただこの時代の時事評論には、力の對立が見られない。少なくとも表面に現はれたところでは、力の對立が、その評論の上に見られない。不平もある、誤解もある、呪詛もある、

怨言もある、――しかし一方には、改革・主導力として君主が立つてゐる。しかも非凡の斷行家である、精悍な、聰明な、驀進的な斷行家である。これに表立つて對抗することは即ち死である。そこで、表面にあらはれて來た時事評論は、いふまでもなくその主導力を中心として、その改革の意義を説明し辯護することであつた。時代の聰明な智力は、その時代の最高の智力は、また恐らく、改革の意義を説明し、辯護することに自己の本分を認めたであらう。改革の意義を認め得ないことは、その主導力たる君主に楯つくことであるとするよりも、文明の自然の勢に、言ひかへれば正しき力に楯つくことであるとしたに違ひない。さう見ないことは、その時代の最善最高の智力に對する侮辱である。

兎に角、評論の對象は國家であつた。殊に時代の最善最高の智力が表明したところは「君主の意志の是認」であつた。文明改革の辯護であつた。そこに個人の心の影を投げ入れるべき餘地はなかつた。改革を正しとすることに於いては、一つであらねばならなかつた。時代の勢力に對する隨順である。

ピョートル大帝から後、文學は專ら文明と、それのために心づかひする君主とのための頌であつた。眞の意味での社會的根據を有してゐない當時の文學は、自然に宮廷のために作られるほかはなかつたのである。ものものしい、白々しい、臆する色もない阿諛は、女皇アンナにたてまつつたトレディヤコーフスキーの、日本との通商を豫言した歌にも見られる。これ等の阿諛の作品が、しかもその宮廷の高貴の人々によつて、さまでに顧みられなかつたといふことも事實である。文學もしくは文學者といふものは、當時の高貴の人々からは、輕侮と戯笑との眼で見られてゐたに過ぎなかつたからである。

三

「君主の意志の是認」から、多く顧みられなかつた宮廷的阿諛の詞華を經て、エカテリーナ二世の時代に及んで、ロシヤの文學は、ここにはじめて、個人の心の濃き投影を見る。ロシヤの現實に對する否定の表白があらはれて來たのである。ラディッシュチェフが、その『ペティエルブールグからモスクワへの旅』(千七百九十年)の中で、「農民たち、その自由を、地主たちから期待してはならぬ、寧ろ最も苛酷な奴隸狀態の間か　こそ期待すべきである」と言つてゐるのは、強き否定の間からこそ、眞の肯定が生れるといふ意味にほかならない。眞の肯定のためには、強き否定が行はれなければならぬ。エカテリーナ二世が、この書を一讀して、ラディッシュチェフは、「農民からの叛亂に未來の希望を置いてゐる」ものであるとしたのは、この書の眞意を正しく理解しなかつたためである。しかしながら、地主の好意や善意にかけられた幻影の消滅は、ラディッシュチェフの心の影を濃くし、深くした。寧ろこの一篇は、ラディッシュチェフの詩である。憤慨と、嗟嘆と、傷心と、自責との心の隅々から、おのづから溢れ出でた一篇の詩である。「吾等は主人であるが故に、吾等は奴隸である。吾等は吾等の同胞を拘束してゐるが故に、吾等は自ら農奴である。」といふ後のゲルツェンの心は、既にラディッシュチェフの言葉の中に隨處にこれを見出すことが出來る。外部の觀察から轉じて、「わが内に目を向けて見れば、人間の不幸は、やはり人間から發してゐることをさとつた」ラディッシュチェフの言葉には、抑へがたき熱意があり、鮮かな感情の色彩がある。詩である。

ラディッシュチェフの否定の詩は、ロシヤ文學の道を拓いた。少なくとも、農奴制度との鬪ひを中心として懷疑的な、批評的な、諷刺的な

心持のうちに——現實に對する否定のうちに、ロシヤの文學は、その往くべき道の出發點を、はじめて眞に見出し得たのである。

　ロシヤは初めから、死ぬべき運命を有してゐた。自ら破壞すべき運命を有してゐた。自ら破壞し、自ら殺すことによつて、はじめて自ら甦り、自ら建造するに至るのが、ロシヤの運命であつた。ロシヤの生活の全過程は、自己の破壞、自己の否定を出發點としなければならなかつたのである。自己を否定することが出來るやうになつて、ロシヤは初めて自己を生かす道へ出たのである。否定による肯定、死による生、この徑路を、正直に、大膽に、一徹に、しかして驀地に進んで來たのがロシヤである。どこを指して往くか分らないと言はれたトロイカ(三頭立ての橇)は、所詮生きるために死を急いだロシヤの姿にほかならない。

　否定の道はもとより嶮難であつた。死ぬべき運命を有してゐたロシヤが、死ぬるために、どのくらゐの苦惱を經て來たかは言ふまでもない。しかし、そのために、否定の力は更に強まり、更に深まつた。惱みと苦みとによつて、自己に對する要求は更に高まつた。ロシヤの文學は、この否定の力と、矜持の心との表白である。生きんがために死なうとするものの地獄の巡歷の記録である。その色調の上に、おのづから一味の峻嚴苦澁のあとを加へてゐるのは已むを得ない。陰慘幽暗の谷から出て、無邊際の曠野を往くやうな時にさへ、廣濶のよろこびの間に、北方の白日に、影なき小鬼の躍るを見、風になびく千萬の草の聲なき嘆きを聞く。それは、生きんがために、死んでは死に、死んでは死にして來た、無抵抗の抵抗の姿にほかならない。ロシヤの生きようとする力は、これほどまでも深く、逞しく、豐富であつたのである。

四

　ロシヤ文學に於ける懷疑の胚胎は、恐らくラディッシュチェフ以前、もしくはフォンキージン以前に遡る。容易に表面にあらはれない力として、鬱屈のままに、根深い懷疑と否定との力が存在してゐたであらうことは、プイピンの如きも、その『文學觀の品隲』のなかで論じてゐるのである。フォンキージンや、ラディッシュチェフや、或は又ノーキコフの前に、諷刺劇詩人カンテミールの如きも、また時代の懷疑的傾向を表現したものと言ふべきである。受身の忍從を、スラヴ民族の最高の美德として考へるくせのある人々は、それ等の早い懷疑的否定的傾向を、外來のものとしてのみ見ようとする。しかし、十七世紀に於けるロシヤ教會を中心としてのギリシャ派とローマ派との爭ひが、教會の分離が、果して何を語つてゐるかを考へてみるがよい。教會の分離、異端の發生、これ等の事象を一貫する精神は、即ち直ちに根深い懷疑的否定的精神にほかならないではないか。この精神は、やがてまた、文學に於ける現實否定の思想である。それはラディッシュチェフの『ペティエルブールグからモスクワへの旅』となり、フォンキージンの喜劇となり、グリボエードフの『聰明の悲しみ』となり、リェールモントフ、プーシュキン、乃至ゴーゴリその他の作品ともなつたのである。懷疑と否定との精神が、如何にロシヤの文學に重大な力となつて現はれてゐるかは、次第に說くところによつて明らかにせられるであらう。

　懷疑と否定とは、要するに個人と社會との分裂を意味する。また更に、個人と國家との分裂を意味する。現實と妥協することの不可能、現實を是認することの不可能、それは本來の意味では生活の一種の變態である。苦惱はそこから生ずる。ロシヤ文學は、この苦惱のうちに

沈淪する多くのすぐれた人々を描いた。現實生活の常軌から外れた「よけいもの」は、この分裂を根本的になくするために、更に苦しみ惱んだ。周圍の現實に對する輕侮と嫌惡との苦みから、そこにはしばしば絶望自棄の色が見える。殊に、ロシヤの懷疑は、科學の教へるところに從つて、たとへば國家經濟の見地から、農奴の問題を考察するといふ以前に、もしくはそれ等の考察よりも深く強く、その根柢には直接端的な感情があつた。懷疑と否定との底には、良心の憤りが、感情の傷みが、中心の力として動いてゐた。しかも、エカテリーナ二世の時代から、アリェクサンドル二世の卽位の頃に至るまで、殆ど百年に近い間、ロシヤには、この傷心と憤激とをなだめ癒すに足る改革が行はれなかつたのである。生活は百年の間に成長した。國家としての公けのロシヤは成長した。思想も亦成長した。しかし、生活の形式は昔のままであつた。官僚政府の發達と共に、農奴制度もまた更に固く保持せられて來た。そこで、思想はすべて反抗となつた。それはまた、苦惱と嗟嘆との聲とならざるを得なかつた。歎きの聲は、ひとりヲルガの大河の上に流れわたるばかりではなかつたのである。ロシヤの文學は、この歎きの歌である、この憤りの詩である。

五

ゴーゴリがかつて自作『死せる魂』の一節を取つて、プーシュキンに讀みきかせたことがある。プーシュキンは、ゴーゴリの朗讀を聽くと、いつもよくをかしがつて笑つたのであつたが、その時ばかりは、聽いてゐるうちに、だんだんまじめになり、しまひには、幽愁にたへないやうな暗い顏をして來た。いよいよゴーゴリが讀みをへると、プーシュキンは、いかにもさびしさうな調子で、「あゝわれ等のロシヤは、何といふ憂鬱なことであらう！」と言つた。

憂鬱なロシヤ！　その憂鬱の間から、一致しがたい矛盾の間から、ロシヤに於ける否定の精神は生れて來た、諷刺の文學は生れて來た。十八世紀末から十九世紀へかけての、諷刺の文學は、笑ひの中に解放を求めた。をかしいものは恐ろしくない。少なくとも、をかしいものの前には、慴伏することを必要としなくなる。笑ふものは、その笑ひの對象となつたをかしきものの上に立ち、をかしきものは、小さく、つまらないもののやうに見えて來る。地主も、ゴーゴリに描かれて、その恐るべき力を失ひ、官僚も、ゴーゴリに描かれて、その愚かさを暴露した。笑ひは、農奴制度と官僚政治との幻影を消滅せしめた。笑ひは破壞であつた。笑ひは否定の力であつた。

ゴーゴリは、ロシヤの現實の空虛をまざまざと見せた。この空虛の中にあつて、苦しみ惱みつつ生きることは、眞に物凄いおそろしいことであつた。ゴーゴリは、その笑ひの中へ、物凄さを導き入れた最初の人である。笑ひを、諷刺を、悲劇的なものにしたのはゴーゴリである。

それはゲルツェンの言ふ「變な笑ひ」である。「物凄い笑ひ」である。「身の毛の彌立つやうな笑ひ」である。その笑ひの中には、自責羞恥の感じと、自ら嚙む良心の惱みとがある。「をかしさあまつて涙が出る」のではなくして、「泣いて泣いてしまひに笑ふ」ところの泣き笑ひである。

或はまた、國家の偉業、英雄の功業のために、その臺石の下に踏みつぶされてしまつた、弱い見るかげもない平凡人の一生がある。或はまた、現實の羈絆を破つて、天馬空を往かうとして身を亡す驕兒がある。プーシュキンもリェールモントフも、それ等をただそれだけのものと

して觀たのではあるまい。

何れもみな、否定の試みである、懷疑である。死ぬべき運命のロシヤが、死ぬるために急ぐ道程の記錄である。ピョートル大帝の銅像の下に踏みつぶされた平凡人の反抗が、天馬空を往くの概を地上に實現しようとした驕兒の破壞が、二十世紀の革命でなかつたとは誰が言ひ得よう。死ぬることによつて生きようとする否定の力は、革命である。ロシヤの文學は、否定の力の發現としてのみ見るには、尙幾多の複雜な要素を有してゐるかも知れない。しかし、この力を中心として、この一角からロシヤの文學を讀むことは、決してロシヤ文學を冒瀆することではあり得ない。否定の力は、——生きんがために死なしめるこの力は、豐富な複雜な、頗る變化に富む力である。地に落ちて身を亡す一粒の麥のうちに籠つてゐる力はいつかあらはれて來る。

否定の力としての文學は、やがて眞に生きる力としての文學にほかならない。繰り返して言ふが、ロシヤは初めから、死ぬべき運命を有してゐた、自ら破壞すべき運命を有してゐた。自ら破壞し、自ら殺すことによつて、はじめて自ら甦り、自ら生き、自ら建造するに至るのが、ロシヤの運命であつた。ロシヤの文學は、自己の否定を出發點として、否定による肯定、死による生、この徑路を、正直に、大膽に、一徹に、而して驀地に辿つて來たのである。

そこにロシヤ文學の苦惱と悲哀がある。そこにロシヤ文學の力がある。地獄に下つて魂を救ひ來つたものの物凄さと、歡びと、力とがある。

なにがしの君に（シェリイ作）

やさしき聲は消失せて
樂音胸にうちふるひ
薫のすみれしぼみては
にほひを人の身にとどむ。

うばら枯るれば薔薇の葉を
いもが床とてつみかさぬ
君しゆくとも戀にこそ
君がおもひはかくぞ眠らめ。

槲（テニスン作）

世をへてん、老も若きも
かの槲の木のごとく
春はかがやき
いのちみつこがね。

かくてぞ夏のさかえ
かくてぞ秋のうつろひ
おごそかに色なりまさり
ああまたも黄金の光。

つひにみた落葉しはつる
みよ、立てり槲のひともと
幹も小枝も
裸々の雄々しさ。

トルストイの宗教的人生觀

一

トルストイの名を知らない人は、多少文字のある人の間に殆どないと言つてもよいであらうが、トルストイの說いた宗教的社會觀人生觀の本旨は、いろいろに曲解せられ、誤解せられてゐる。トルストイが一切の文化文明の否定者であるといふ說、また彼が原始時代の生活への復歸を主張するものであり、勞働の原始的狀態への復歸を主張するものであるといふ說の如きがそれである。尤もこれにはいろいろの理由もある。トルストイの所說が秩序的でなく、時を前後して說かれ、その間に變化があり、矛盾もあるところから、その間の眞意を捕捉することの比較的困難なことも、たしかに曲解誤解を招くに至つた一つの原因である。トルストイの宗教觀人生觀社會觀を說いた論文は、既に世に公けにせられてゐるものだけを見ても、百篇どころではない。しかもそのなかには隨分の長篇も少なくない。隨つてこれ等の諸論文を渉獵して一つの明確な眞意をつかむことは、容易のことではない。殊にトルストイの思想がその最後にいたるまで常に變化し、飛躍して行つたことを思へば、たとへばメレジュコーフスキーの如き、シェストフの如き、またミハイローフスキーの如き批評家の所說も、トルストイの全豹を傳へ得ないことになつてゐるのも、またやむを得ないと謂はねばならぬ。

トルストイの人生觀を紹介的に說いたものには、クロスビーのものが一般に知られてゐる。エルツバッヘルの『アナルヒーズム』の中にも彼の無政府主義的人生觀が說いてある。しかし、後者は肝腎のトルストイの宗教觀から切り離して說いてゐるところに重大な不備がある。トルストイの思想家としての特色の中心は、あくまでもその宗教的なところにあるからである。ロシヤで出たものでは、ストラホフの書いた論文の他に、ティムコーフスキーの『トルストイの魂』(一九一三年、モスクワ版)ブルガコフの『キリスト教倫理』(一九一七年、モスクワ版)などが最もよい。

ここではこの後の二書などを手引きにして、トルストイの宗教的人生觀を紹介する。

人は生れて、先づ自己に近き周圍の人々の有する法則や人生觀に導かれる。たとひ無意識でも、自己の行動を一定の人生觀――少なくとも自己の生活の意義ともいふべきものと一致せしめる。しかし成長するにつれて、人は漸くその人生の意義に就いて考へを異にして來る。(『新人生觀についての考察』)。小兒の人生觀と大人のとは違つて來る。自然に受入れられ、外から與へられてゐた信仰は、知識と經驗とで漸く薄らいで來る。そこで、自分では少年時代からの信仰がもとのままにあるとおもひながら、その實とくにそのあとかたもなくなつてゐるやうなことが少なくないのである。かういふ時機には、わづかな、偶然の一語が、舊來の、既に實力なき信仰を一掃してしまふ事になる。(『懺悔』)。かくの如くにして、人はその理性の力によつて虛僞の力なき教へを排し、現實の生活の直中に在つて、その意義を探求しようとするやうになる。(『人生論』)。眞の人生の意義は何であるか。人生とはそもそも何であるかと訊ねるやうになる。昔から、生命の起源に就いては二つの見かたが知られてゐる。靈的人生觀と物的人生觀と

がそれである。この二つの立場の爭ひは今も尚續いてゐる。それはこれ等の見解の目的が遂せられて論ぜられてゐるからである。人生そのもの、吾等が快苦喜樂を實感しつゝある人生そのものに就いてではなく、物質的法則によつて偶然發生したものとして、或は、それみづから不可思議な原因を藏するものとしての人生に就いてのみ論じてゐるからである。人生を如實の、苦みと歡びとの意識として、幸福への努力として論じてゐないからである。或はこれをもつて、死に反する作用の集積だと言ひ、一定の期間に有機體のうちに變化するところの現象の總和であると言ひ、或は普遍にして間斷なき分解と結合との二重の經過であるといひ、或は一定の順序による種々の變化の一定の總合であるといひ、或は活動するところの有機體であるといひ、或はまた內面と外面との攝合であると言つたりする。要するにこれをただ經過と見たり、現象と見たりして、吾々が常に人生といふみじかい言葉で實感的に經驗するところを端的にあらはしてゐない。吾等が人生といふときに、それはXでもなんでもない、凡ての人々が自分の全身で、分つべからざる全き己れの身を以て自分の內からのみ知つてゐるところのものである。惡から善への努力としてしか考へることの出來ない人生は、善も惡もないこの世界の中に生起してゐる。人生といふものゝ理解の中心はそこで人間の個々の生活の中にあつまつて來る。凡ての人々は自分の幸福のために生きてゐる。人が自分に善かれと願ふ心を感じなかつたら、その人は自ら生きてゐるとは感じない。自分に善かれと願ふ心持のない人生といふものは考へられない。生きるといふことは、凡ての人々にとつて、幸福を願ひこれを得るといふことと同じである。幸福を願ひこれを得るといふことは、卽ち生きるといふことである。卽ち人生とは、滿足や苦痛の感じの伴ふところの、幸福への努力に他ならない。（『人生論』）

人は人生を自己の個人生活に於いてのみ感ずる。それだから、人は初め自分の願ふ幸福はただ自分一個の幸福であるかのやうに思ふ。初めは自分だけ本當に生きてゐるやうに思ふ。他のものゝ生活は、自分のと同じではなく、ただ自分の生活に似てゐるものとして考へられる。觀察によつて他のものも亦生きてゐると知る。他の生存に就いて考へる氣になるときに、人は他人の生活に就いて知るやうになる。しかし自分のことは、一刹那も自分が生きてゐることを忘れたりは出來ない。それだから本當の生活といふものを、人はただ自分自身の生活によつてのみ知つてゐる。周圍の人々の生活は、ただ自分の生存の一條件としか考へられない。もし人が他人に對して惡を願はないとすれば、それはただ他人の苦みを見るのが自分の幸福を破るからである。もし人が他人に善を願ふとすれば、それは自分に善を願ふのと全く同じではなくて、ただ他人の幸福が自分の幸福を增大してくれるためである。人にとつて、自分のものとして感ずる生活に於ける幸福、卽ち自分の幸福だけが重要であり必要である。かやうにして自分自身の幸福を求めて、人はその幸福が他の生存に依存することを認めるやうになる。それは他の人々も、動物でも、自分と同じやうに生活を感じ考へてゐるといふことを知るに至るからである。凡てのものは、皆ただ自分の生活自分の幸福のみを感じ、皆ただ自分の生活をのみ大切とも思ひ本當のものとも思ひ、他の生活はすべてただ自分の幸福のための手段だと考へてゐる。人はまた、生ける一切のものが、自分自身をも含めて、自己の小さき幸福のために、凡ての他人の大きな幸福や生命までも、また自分

自身のそれをさへも、奪はなければならないことを知るに至る。自分個人の幸福の中にのみ生活といふものを理解してゐる人が、その個人的幸福を容易に得がたいばかりか、それを奪はれがちだといふことを知るに至る。人は長く生きてゐればゐる程、經驗によつてこの事を確かめるやうになる。そればかりか、人はたとひ自分の生命に危險を感ずることなしに、他人と爭つて打勝つことの出來る有利な事情の下に在つてさへ、理性と經驗とは、やがて人にかういふことを教へるであらう。——即ち、個人の快樂といふ形で彼が人生から捕獲したそれ等の幸福は、眞の幸福ではなく、ほんの幸福の型のやうなものに過ぎず、それによつて彼が、快樂と常に關聯してゐるところの苦痛をば、一層まざまざと感ずることの出來るために與へられたものに過ぎなかつたといふことを。人が長く生きれば生きるほど、快樂は益々少なくなり、退屈、飽滿、勤勞、苦痛は益々多くなるといふことを一層明らかに知るであらう。そればかりか、自分の力が弱り病み始めるとともに、他人の病や老衰や死を見るにつけ、その中に唯一の眞の生活を感じて來た自分の生存そのものが、刻々に、身動きをする毎に、弱り、衰へ、死に近づいて行くことを認めざるを得なくなる。また、自己の生命が、自分と爭ふところの他の生命から受ける無數の偶然の破滅や、刻々にまさり行く苦痛の前に露出せられてゐるばかりでなく、その生命の本質上、單に死への、——即ち個人の生命とともに明らかにあらゆる個人的幸福の一切の可能を亡失するであらうところの狀態への、間斷なき接近に他ならないことを認めざるを得なくなる。即ち人は、個人は、生活を感ずるその本體は、到底爭ふことの出來ないものと、——全世界と爭ふことばかりをしてゐるのだといふことを知るに至る。また人は、わづかに幸福の形の如きものを得て、しかも常に苦痛に終局するところの快樂を求め、而して持續しがたき生命を持續しようとするものであることを知るに至る。人にとつて何よりも大切なものであり、唯ひとり本當に生きてゐると思はれてゐるところの個人生活、それは亡び、灰となり骨となる。而して、彼にとつて不要であり、大切でもなく、生きてゐることを感じもしない、相爭ひ且つ交代するところの事象から成り立つてゐる外界は、或はあとにのこつて永久に生きるであらう。そこで人間の感じ得る唯一の生活は、何だか欺瞞的のものであり、彼の外部の、彼の感じない、知らない生活が、本當の生活であるらしく見えて來る。而してこれは人の到底思ひ感じずにはゐられないところの事實であつて、この考へかたは人の避け能はざるところである。(『人生論』)

二

トルストイの『人生論』は、かやうにその最初の部分に於いて、死の不可避と肉體的個的生活の幸福の不可能を說いてゐる。人間は理性を有する、それによつて人生の意味を說明しようとする。(『キリスト教の敎へ』)。然し、人生は何のためであるかといふ疑問を問ひつめて行くと、人間の生活の內外の調和は破られてしまふ。尤もかういふ疑問はつまらないものであるとして、往々人はこれを打ちやつて置かうとする。そんな事は分り切つてゐる、それを知りたいと言ふなら、わけはない、そんな子供らしい知れきつた疑問はひとりでに分つて來る——かういふ風に言つたりする。しかし、この疑問は、それにも拘らず、人生に於いてしきりに繰り返され、繰り返される毎にその答へを求める心が切になつて行く。人が一度その疑問に觸れてこれを解決しようとするやうになると、その疑問の子供ら

しい馬鹿馬鹿しいものでなく、又到底考へて解決の出來るものでないことを知るやうになる。しかも、その疑問は人を待たない、答へることなしに生きることは出來ない。しかも答へは得がたく、人は生活の足場を失ひ、根據を失つた感じを懷く。その場合人は生活の休止を感ずる。呼吸し、飮食することは出來る。眠ることは出來る。またせずにはゐられない。しかも欲望を滿足させることを合理的だと思ひ得ないのであるから、生活はないと言つてよい。欲望の滿足と不滿足との如何は、何等自己の生活に增減するところがない。眞理を知ることも人の欲するところではなくなる。何故かといふに、その眞理は、人生は所詮無意味だといふ眞理の他の何ものでもないであらうから。

野原の眞中で猛獸に追はれた旅人の話は、昔から東方に語り傳へられてゐる。そこで旅人は野中の水なき井戸に身を投じて免れようとする。しかも井戸の底には大蛇が巨口をあけて、待つてゐる。井戸から出ることも、底まで身を投ずることも出來ない旅人は、井戸の中の隙間から生えてゐる小さな灌木の枝に縋りつく。兩手はだんだんに疲れて來る。井戸の内と外とに待つてゐる敵のために、いまに自分は命を失はなければならないと思ふ。さう思ひながら尙枝に縋りついて、ふと見ると、白と黑との二匹の鼠が、その幹をくるくる廻りながら嚙んでゐる。いまに、兩手を離さずとも、その灌木自身が折れて、旅人は底にゐる大蛇の口に落ちるであらう。死は到底最早免れ得るところではない、さう思ひながら、尙且つ自分のあたりを見まはして、その木の葉末に宿つてゐる蜜の數滴を見出すと、それを舌で嘗めてゐる。人間の生活が丁度それである。死の大蛇がいまに自分を呑むであらうことは知つてゐながら、何のためにこの運命を自ら選んだか、何のために、この井戸にゐなければならないかは明らかに分らない。かつて自分を喜ばした蜜の甘味を嘗めても、既にそれによつては慰められない。日夜に二匹の鼠は木の幹を嚙む、大蛇を下に見ては蜜も甘からず、二匹の鼠の刻々に死を早めるのを見ながら、どうすることも出來ない。昔の人生の歡喜も今はただ欺きに過ぎず、現前の事實は既に人を欺くことが出來ない。人生の意味は分るものでない。考へるな、ただ生きよといくら言はれたところで、日夜死の不可避の手が逼りつつある以上、考へないで生きることは出來ない。そしてただその死の不可避をのみ考へる。何故かといふに、それだけが唯一の眞實であつて、その他の一切は虛僞に過ぎないからである。(懺悔)。

人生の意味如何といふ疑問は、一切の人間の心の底に横はつてゐる極めて簡單な疑問である。「今日わが爲すところから何が生ずるか、明日は何を爲すべきか、わが生涯は所詮何を生み出すか、」「何のために自分は生きねばならぬか、何のために何ごとかを願ひ、何のために何ごとかを爲さねばならぬか、」「不可避の力を以て眼前に迫りつつある死が滅ぼすことの出來ない人生の意味は、そもそもあり得るか、」これ等の疑問の意は一つである。而して古來この疑問に對して、人間の知識が答へたところもののの中に、この疑問の答へはあり得ない。古來人間の知識は、この疑問に對して二樣の態度をとつて答へた、一つは否定的であり、一つは肯定的である。否定的の態度からは、この疑問を認めない態度をとる。この疑問に無頓着に、それに拘泥する事なく人生を說明しようとする。經驗的の知識がそれであつて、その極端に立つものが數學である。肯定的の態度からは、この人生の意味如何といふ疑問を認める、けれどもそれに答へない。それは純理的知識であつて、その

極端に立つものが形而上學である。經驗的知識から、人は天體の化學的組織を知り、天體の運行の理を知り、人類の起原を知り、無限小の微細胞の形を知る。この方面の知識が、人生の意味如何といふ疑問に答へるところは唯一つである、卽ち——人間生活と名づけてゐるところのものは、人間そのものは、所詮微細胞の一時的の偶然の集合に過ぎない、その微細胞の相互の影響や變化が、人間の生活と稱するところのものを作り出す。この微細胞の集合は一時は持續せられるが、やがてその相互の關係がやむと共に、人生と稱せられるものも止み、それと共に人生の意味如何といふ疑問もなくなつてしまふ。經驗的知識がその本來の立場を嚴密に守つて說明する場合には、これ以上の事は言ひ得ない。これ等の知識はたしかに人の興味をひく。しかしながら、これ等の知識が明確であればあるほど、それに反比例して、これ等の知識は人生の意味如何といふ疑問にこれを適應せしめることが出來なくなる。これ等の知識が人生の疑問に解決を與へようとすればするだけ、これ等の知識は不明確なものとなつて來る。數學の如きは、全く人生の疑問に答へることをしない。更にまた人生の疑問に答へようとする如き經驗的知識の方面を見ると、卽ち生理學、心理學、生物學、社會學などの方面を見ると、なまなかその疑問に答へられさうに見えるだけに、その不明確、その貧弱、その矛盾が明らかに目に見える。人生の疑問に答へようとしないところの經驗的知識は、而して自己の純科學的な特殊の疑問にのみ答へようとしてゐる經驗的知識は、人をしてその明確さに驚歎せしめるとともに、全く人生の疑問といふものを無視してゐるのである。人間が何であり、何のために生きるかといふやうな疑問に對しては、それ等の經驗的知識は答へを有たない、また答へようともしない。光に就いて化學的結合に就いて、有機體の發達に就いて、數量に就いて、理性の作用に就いて、その特殊部分的の法則を明確に說くことは、實にこの經驗的知識の能くするところである。もしこの經驗的知識が人生の疑問に答へ得るところがあるとすれば、それは恐らくかういふ形に於いてであらう。——問、人は何故に生れるか、答、無限大の廣がりの中に、無限大の長い間に、無限小の微細胞が無限の複雜さに於いて變化する、この變化の法則を了解するときに、人ははじめて、何故に地上に生きるかといふことを了解するであらう。（懺悔）。卽ちこの答へは疑問に對して答へてはゐないのである。人にとつて必要なものは、自己の生活の意味であつて、人生が無限大の一微分子に過ぎないことを知るのは、單に人生に意味を與へないばかりでなく、一切の意味を失はしめるものに他ならない。

次ぎに純理的知識の方面に轉じてみると、その答へはかうである、——人類は精神的基礎、理想によつて進む、而してこの理想は宗教、科學、藝術、國家の形式といふやうなものとなつて現はれる。個人は人類の一部であるから、この全人類的理想の自覺及び實現のために共働努力するところに、個々の人間の生活の意味がある。

かくの如き知識が、人類の一部に就いて得た結論を一般的のものとするところから、いかに不正確なものとなるか、更にまたその理想の何であるかによつていかに多くの矛盾を生ずるか、それ等は勿論のことであるとしても、更に一つ最も奇異の感を與へる點は、「自分は何ものであり、何のために生き、何を爲すべきか」といふ最初の人生の疑問に答へる前に、この知識の說くところに從ふとすれば、人は先づ、「わづかの時期に於けるそのわづかの一部しか知り

得てゐないところの、ひろい全人類の生活とは何であるか」といふ疑問に答へなければならないことになる。自分と同じやうに己れ自身の生活を了解し得てゐないところの多くの人々から成り立つてゐる、この不可思議な人類といふものを先づ了解した上でなくては、人は自分の何であるかを了解し得ない事になる。「無限の空間に於いて、無限の微細胞の無限の時間に亙る無限の複雑さの變化を研究せよ、さすれば自己の生活を了解するであらう」といふ經驗的知識の答へが、何故に生くべきかの疑問を自ら懷いてゐるものに滿足を與へないと同じやうに、「その始めも終りも知る事が出來ず、その一小部分をも知る事の出來ない全人類の生活を研究せよ、さすれば人は自己の生活を了解するであらう」といふ答へが、眞に人生の疑問を懷けるものに滿足を與へ得ないことは勿論である。經驗的知識はその研究のうちに究極の原因を招來しないときにはじめて眞の知識であり、形而上學的知識は、原因結果の關係で現象を見ずに人間をその究極の原因との關係に於いて見るときにはじめて眞の知識である。哲學は自我と世界の何であるかを問ふ。而してその答へは一つである。それは觀念であり、或は實在であり、精神であり、意志である。それが哲學の自我及びその周圍の世界の本體に關する答へである。しかし、何故にその本體があるかに至つては、嚴密な哲學的考察は答へるところを知らない。その本體が何故にあり、それが何のためであるかは、哲學自らの尋ねんとするところであつて、それが眞の哲學であるかぎり、哲學の全任務は、この問を明らかに立てるところにある。その問の答へそのものに至つては、嚴密な哲學の「知らず」と答ふべきものに屬する。

三

世間の人々の人生の疑問に對する實際上の態度を觀察すると、この疑問の惱みからともかくも脱するの道が凡そ四つある。第一は無智の道である。それは、人生が惡であり、無意味であることを知らず、了解せずにゐるところに成り立つ。まだ井戸の底の大蛇をも見ず、木の幹を嚙む黑白二匹の鼠にも氣づかずにゐるのである。しかしこれは要するに時間の問題に過ぎない。一旦大蛇と鼠とに氣づくと同時に、無智の安心は忽ち失はれる。人生の無意味を知るに至つた人間にとつて、この無智の安心は何の足しにもならない、既に知つてゐることを知らなくなることは到底不可能だからである。

第二の道は快樂主義である。即ち人生の絶望的であることは知つてゐながら、ほんの目さきの一時だけ、手に入るだけの快樂幸福を享受しようとする。上流貴族は大抵この態度で生活をつづけて行く。彼等の生活の條件が、たまたま彼等の生活に害惡よりは幸福と快樂とを比較的多くしてくれる。その上彼等の道義心の鈍さが、「その一時的快樂の免れも要するに偶然の事に過ぎず、病と老衰と死とが今日でなくば明日、必ず不可避の力で彼等の生活の滿足を破壞し去る」といふ事を忘れさせてくれるのである。(『懺悔』)。この種の人間の獲得するところの學問藝術は、それ等の意義乃至價値に就いてどんな立派なことが說かれるにもせよ、要するに彼等にとつては、退屈をまぎらし、快適なときを過すためのものたるに過ぎない。彼等は結婚する、家庭を作る、そして動物的生活の幸福を獲得しようとする貪慾心が、家庭の是認といふことで一層强められる。他人との爭鬪が一層激烈になり、自家の幸福のためにのみ生きる傾向が確定的になる。波のまにまにあてどもなく運ばれて行く人間が、その往かんと欲する方向へ泳いで行きつつあるかの如く見えるのと同じ

やうだ、この種の人間もただ生きてゐるらしく見えるだけのものである。（「人生論」）。
第三の道は力と精力との道である、生活の惡と無意味とを知つて、生活そのものを絕つことである。この道は稀に見る力強い、首尾一貫してゐる人々の道である。この道に往く人は益々多くなりつつある。（「懺悔」）。しかしながら、この人々の考へるところに確信があり疑ひを容れないやうなところがありながら、しかも事實に於いてはその最後の決斷に往々一歩をふみ止まりがちである。それはその判斷の眞實さに就いて何となく疑ひが殘つてゐるからである。「もし生命がなければ、理性もないわけである。さすれば理性は生命の生んだ子である、しかもこの理性が生命を否定してゐる、人生が惡であり無意味であることは、疑ひのないところである。しかし自分は生きてゐる、まだ生きてゐる、全人類も生きて來たし、まだ生きてゐる。人生の無意味といふ判斷は、多くの人々も夙に下した所である、また知つてゐたところである。しかも何人々は何等かの意味を人生に與へて生きて來た。何だかそこに變なところがある。どこかに考へ違ひがある。」かういふ風に自ら疑ふ。しかしその誤謬が何處にあるかといふことは、どうしても見出すことが出來ない。

そこで第四の道を選ぶことになる。人生の矛盾から免れる第四の道は、弱きものの道である。即ち人生の無意味は知りながら、人生が結局何ものをも生み出さないとは知りながら、ただ徒らに生活を引きのばして行くのである。死の生にまさる事は知つてゐるが、その理性に從つて行爲し、人生の歎きを去つて自殺するだけの力がないために、何かを待つかの如くぐづぐづと生きて行く。一層よきもののあることを知りながら、そしてその一層よきものは自分でどうでもなるものでありながら、その一層よきものに身を投じないのであるから、つまり弱きもののとる道に他ならない。論理的にはこの道は不可避の道であらうが、理性の確信は少ない。理性はこの場合働いてゐる、しかしそれ以外のあるものが働いてゐる。それは生活の意識である　理性を導いて絕望から全く別の道に往かしめようとするところのある力が働いてゐる。その力は今まで明らかでなかつたものを明らかにする。即ち、もし人が生きんことを欲し、人生の意味を理解しようと欲するなら、その意味を失つて自殺しようとする人々に就いてではなく、生きて來、生きてゐる人々、自ら勞役する多數の人々に就いて、その意味を探求することを要するといふ事である。これ等の人々は自ら人生の疑問を立て自ら明らかにこれに答へる。これ等の人々は苦痛と缺乏との生活を送る。而して自殺を最大の惡とする。然らば彼等は何に人生の意味を見るか。合理的知識は人生の意味を與へない。多數の人々、全人類によつて人生に與へられるところの意味は、一種のいやしめられてゐるやうな知識のうちに作り出される。合理的知識は學者や賢人を通じて人生の意味を否定する。しかし大多數の人々、全人類は、人生の意味を非合理的知識のうちに認める。而してこの非合理的知識こそは即ち謂はゆる信仰である。而してこの信仰こそ、自ら考察する力に目ざめた人々の意識が排斥せずにはゐられなかつたところのものである。即ち、三位一體の神であり、六日間の創造である、惡魔と天使である。そこで、合理的だと思はれてゐるものがそれほど合理的でないのか、或は非合理的だと思はれてゐるものがそれほど非合理的でないのか、どちらかでなくてはならない。合理的知識の思考の道を辿つて見ると、人生の無意味を結論することは避くべからざる正しき順序であつた。ただ誤謬は、立てられた疑問に應

ずるやうに考へをすすめて行かなかつたといふところにあつた。即ち疑問は、人は何のために生きるか、有限の生存がこの無限の世界に如何なる意味を有するかといふのであつた。この疑問の滿足させられるやうな答への有り得なかつたのは、その疑問自身のうちに、無限を以て有限を說明し、有限を以て無限を說明しようとする要求を藏してゐるからである。超時間的な、超空間的な超因果的な人生の意味は何であるかといふ問に對して、時間と空間とに制限せられ、因果律に支配せられてゐる人生の意味は何であるかと言つて答へてゐる。即ち答へは結局なかつた事になる。有限は有限に、無限は無限にひとしといふことを斷えず說いて來たのであるから、その結果、力は力、物は物、意志は意志、無限は無限、無は無といふことしか言へなくなつたのである。二つのものを等しといふのであるが、それは初めから等しき二つのものであつたので、計算に誤謬はないが、要するにAはAであり、XはXであり、OはOである、といふのに過ぎない。知識は一見積極的に明らかに答へてゐるやうで、結局人生を惡とするのは、OはOである、人生は無であるといふので、積極的ではないのである。疑問に答へてゐることにはなつてゐないのである。即ち合理的知識は答へを與へず、ただそれは、問題を立て直すことによつてのみ答へを得られる。即ち有限の無限に對する關係の問題が考察せられるに至つてはじめて答へが得られるといふことを示すに過ぎない。また、ここに至つて、信仰の與へる答へがいかに非合理的で、いびつなものであつても、とにかく有限の無限に對する關係をその答へのうちに導き入れるといふ取柄を有してゐることを知るのである。合理的知識は、人生の無意味を認めしめる。そこで自殺の欲望が生ずる。しかも人々は生きて、人生の意味を知つてゐるといふ。それを知つてゐる間は皆生きてゐた。その人生の意味と生きることの可能を人々に與へたものは信仰である。人類生存してこのかた、信仰は生きることの可能を與へてゐる。而してその特色はいつでもどこに於いても同一である。いかなる人にいかなる答へを與へたいかなる信仰であらうとも、すべての信仰の答へは有限の人生に無限の意味を與へてゐる、苦痛や缺乏や死によつて滅す可からざる意味を與へてゐる。即ち、信仰のうちにのみ人生の意味と可能とを發見し得る。(『懺悔』)。それ故に宗教は常に存在した、また宗教が合理的人間の生活にとつて必要缺く可からざる條件でなくなるといふことはあり得ない。(「宗教とは何ぞや、その本質は何に在りや」)。

四

人生の問題は結局宗教に往く。

しかし、人間の社會には、宗教の眞の意義が失はれて、その實勢力の殆ど失はれるやうな時がある。かういふ時には、少數教養ある社會は、宗教の眞義を信ぜず、ただ多數民衆を在來の生活組織のうちに安定させるために必要なところから、信じてゐるやうなふりをするのが常である。民衆も亦惰性で形式だけは守つてゐるが、ただ習慣や法律でさうしてゐるだけで、實生活の指導力としては宗教を認めてゐないのである。これはどこの社會にもよくあつたことである。しかし、教養ある富有な社會が、單に宗教を信じないばかりでなく、現代では宗教はもはや無用であると言ひ、在來のものよりもすぐれた一層合理的な明らかな宗教を說くといふではなく、宗教などは時代おくれで、單に無用であるのみか、寧ろ社會に有害であること、あたかも人體に於ける盲腸の如くであると說くこと今日の如きは、未だ嘗てなかつたところで

ある。随つてかくの如き人々によつて、宗教は内面的の經驗として研究せられるのではなく、一つの外面的現象として、恰も疾病の如きものとして、ただその外面の兆候によつて研究せらるべきものと考へられてゐる。宗教を、自然の一切の現象に精神を認めるアニミズムの教へと見る人もある。死せる祖先との交渉の可能を說くものと見る人もある。また自然の力に對する恐怖から發するものと說くものもある。(『宗教とは何ぞや、その本質は何に在りや』)。又從つて想像せられる事物への崇敬と見るデモクリスト乃至最近の宗教史家の如きもある。(『宗教と道德』)。しかし今日の科學は、木や石に精神があるとせず、死せる祖先は生けるものの行爲を感ぜずとし、自然の現象は自然の原因によつて說明せられるとしてゐるので、もはや宗教の必要はなくなつたわけだと考へる。(『宗教とは何ぞや』)。

しかし超自然的存在を認めることが、自然の知れざる力に對する恐怖から來てゐるとばかり言へないことは明らかであるが、宗教が自然の不可思議力に對する人間の迷信的な恐怖から來てゐるといふ考へは、そもそも人間の見えざる超自然物に關する觀念が何處から發生したかといふ重大な疑問には全く答へてゐないではないか。もし人が雷電を恐れるなら、單に雷電をこそ恐るべきである。然るに何のために人は見えざる超自然的存在を考へ出したのであるか、而してその超自然的存在が自分を支配すると考へたのであるか、何のために死せる人の生ける魂を考へ出したりしたのであるか。これ單に恐怖からばかりでなく、何か他の原因によつてゐるのである。而してその原因のうちにこそ、宗教と呼ばれるものの本體が存するのである。また殊に、いかなる人も、多少の宗教的感情を經驗した人は、その感情が何か外界の恐ろしき現象によつてでなく、自然の不可思議力に對する恐怖などとは全く無關係な、內面的な自己のつまらなさ、さびしさ、罪深さの感じから、いつでも呼び起されたことを知つてゐるであらう。そこで人は、宗教が、自然の不可思議力に對する迷信的な恐怖によつて呼び起された神體への崇敬といふやうな、ある幼稚な時代の人間にのみあり得る如きものではなく、恐怖や人間の教育の程度とは全く無關係なものであり、教育のいかなる發達によつても滅ぼされることの出來ないものであるといふことを知ることが出來るであらう。何故かといふに、無限の世界に於ける自己の有限を意識し、自己の罪深きこと——卽ち人が爲し得たであらうし、また爲すべきでもあつて、しかも實際に爲さざりしところの凡ての怠慢を意識するといふことは、人間が人間であるかぎり、いつでもあつたことであり、またいつでもあるであらうところのことであるから。(『宗教と道德』)。

しかも僞學者の間には、人間社會の發達の歷史を說いて、最初にあつた無知蒙昧時代卽ち宗教時代は、今は殆ど全く人類の經過した時代であるとし、次ぎには形而上學的時代があつて、それも經過し、今や人類は科學卽ち實證科學の時代に生きてゐる。科學は宗教に代つて、迷信時代の人間が夢にも思ひ及ばなかつた發達の階段に導くものであると說いてゐる。オーギュスト・コントの一派の說がそれである。ここで科學といふのは、人類の知識のすべてが調和して擇取せられ、その價値の大小に從つて配列せられ、その得たところのすべての知識が疑ふべからざる眞實であるといふやうな方法を驅使するところの一大統一的科學を意味するものであらねばならぬ。しかし事實上かくの如き科學は存在してゐない。今日科學といはれるものは、ばらばらの偶然の往々にして全く無用な、單に疑ひなき眞實でないばかりか全くの迷妄でさへ

もあつて、今日の眞實は忽ち明日の謬誤虚僞であるといふやうなものの集積に過ぎないのであるとすれば、卽ち依つて以て宗教に代るべきもの――眞の科學と言はれるところのものは存在しないことになる。それ故に、科學が宗教に代るといふ說は、全くの獨斷であつて、神聖不可侵の科學といふものに對する何等の根據なき信仰に基いてゐる說であることは、恰も神聖不可侵の教會にたいするいはれなき信仰とその軌を一にするものである。しかも學者と稱する人々は、既にかくの如き科學が存在し、以て宗教に代るべきであり、代り得るものであり、既に代つたかの如くにさへ考へてゐるのである。宗教はすたれた、科學以外の何ものかを信ずるといふことは、無知蒙昧である、科學は一切の必要をなし遂げる、生活はただ科學によつてのみ指導せらるべし、――學者自らかく言ふばかりでなく、學者を信ずる群集も亦宗教を迷信とし、科學を以て人生を導くべしといふのである。蓋し科學を以て人生を導くべしといふのは、その眞の意味では、何ものによつても人生を導かないといふことを意味する。何故かといふに、科學はその本來の目的に於いて、一切の存在の研究であつて、人生に何等の指導力を加へ得るものではないからである。(『宗教とは何ぞや』)。しかし宗教は、昔からさうであつた如く、人間社會の生活を動かすのであり、心臟である。それなくしては、心臟のないものと同じく、合理的生活はあり得ないのである。

しかし世に眞の宗教と稱すべきものがあらうか。凡ての宗教は相異してゐて、どれを以て眞の宗教と確定することは出來ない。統計の示すところによると、世界の宗教はその種類千に上るといふ。佛教、ブラマン教、孔子教、キリスト教その他、それぞれの信仰はその信仰を有する人々にとつて眞實である。宗教はその外面の形に於いては別々であるが、その根本に於いては凡て一である。而してこの根本義こそは一切の宗教に通ずる眞の宗教であつて、それこそは現代の凡ての人々のものであり、それこそは人々を救ひ得るものである。(『宗教とは何ぞや』)。凡そ宗教といへば、不可見の世界の神祕的解釋ででもあるかのやうに通常考へられがちである。或はまた人々を支持し、慰安し、覺醒せしめるところの儀式禮拜と考へられ、世界の起源を說明するものと考へられ、神意によつて許されたる道德律として考へられたりする。しかし眞の宗教は第一に萬人共通の最高のもの、萬人に最も大なる幸福を與ふるものの啓示である。(『世紀の終』)。眞の宗教は人間の理性と知識とに隨つて、人間によつて打ち立てられたところの、人間をとりまく無限の生活に對する關係である。その關係によつて人間はその生活をこの無限と結びつけ、またそれによつて人間はその行爲を導いて行く。それが眞の宗教である。(『宗教とは何ぞや』)。一切の宗教哲學、一切の神學、世界創造の說などは、ただ地理的人種的歷史的事情に伴つて生じた宗教上の外面的兆候に過ぎない。いかなる宗教と雖も、それが宗教であるかぎり、その根本に於いて、人間とその周圍の世界との關係乃至人間と根本原因との關係を含んでゐないものはあり得ない。いかなる宗教上の儀式禮拜といへども、また同じくそれ等をその根本に有してゐないものはない。一切 宗教上の教へは、その宗教の創始者が自己及び一切の他の人々を、この世界乃至その根源に對するいかなる關係に於いて、人間として認めるかといふことを表現したものに他ならない。(『宗教と道德』)。今日のすべての人々に共通する宗教、一派の特殊の宗教ではなくして、世界の人類の九割以上が信仰するところのさまざまの宗教に於いてひとしく認めることの出來る

根本的の宗教は、現に儼存してゐるのである。僧侶や學者の力によつて、宗教虛僞の感じを吹きこむために、それを意識的に受入れることを妨げてゐるけれども、すべての國民のうちの眞によき人々は、たとひ無意識的にもせよ、上の意味に於ける宗教心を懷き、またそれを說き傳へてゐるのである。而してこの意味の宗教は、凡ての人々に本具的であつて、ひとたびそれを說かれると、人は疾く了解してゐたことであり、また自明の事であるかの如くに受入れる。ヨーロッパ人にとつて（トルストイをも勿論含んで）この意味の宗教はキリスト教である。ただその外面的形式の點からでなく、その內面的根本的の點で、ブラマン教、孔子教、ユデヤ教、佛教、回々教などと共通するところのものとしてのキリスト教である。それと同じく、佛教や孔子教を信ずる人々にとつても、眞の宗教は、その根本に於いて凡ての他の宗教と一致共通するものとしての佛教であり、孔子教であらねばならぬ。而してその根本は極めて單純明白である。（『宗教とは何ぞや』）。かくの如くにして宗教の多種多樣であることは、個々別々の宗教上の教へや、個々別々の教會が、本來それだけでは成り立たないものであることを強く示すことにはなつても、宗教の必要缺くべからざること及びその眞實を否定することには決してなり得ないのである。有限と無限との矛盾の解決、人生を可能ならしめるところの人生の疑問への解答、それは人間にとつてあくまでも必要であり貴きものである。（『懺悔』）。

人間の世界乃至その根本原因に對する關係、態度の表現は、極めてさまざまであつて、その宗教の創始者やこれを受入れる民衆の生活する人種上歷史上の事情によつておのおのその相を異にする。しかもまた、その關係態度の表現は、さまざまに解釋せられさまざまに誤り傳へられ、その結果、その態度關係は實に夥しき數に分れて行く。しかしながら人間の世界に對する關係の根本的樣式は、凡そ三つに分つことが出來る。第一は原始的個人的關係であり、第二は異教的社會的關係であり、第三はキリスト教的乃至神的關係である。而して第二の關係は、要するに第一の關係をやや廣めたといふものに過ぎない。（『宗教と道德』）。而してこの三つの關係乃至態度は、勝手にひとりぎめで定めたものではなく、凡ての人々の態度がその根本では三つの人生觀のうちに歸着し、また實際この三つの態度以外の態度を以て人生を了解することは不可能であるのである。（『神の國は汝等のうちにあり』）。

第一の關係は、人間が自己の個人的幸福を出來るだけ多くこの世界に於いて獲得するためには、そのためにいかに他の人々の幸福が傷けられても意に介せず、自己を全く獨自絕對の存在として認めるところに成り立つ。小兒や原始的野蠻民の生活はこの態度によつて營まれてゐるといへるが、その態度からは異教的古代宗教や現代の幼稚な邪教風のものが生れる。佛教や回々教の頹廢的な形のものにはさういふのがある。物體の神化、犧牲、地上の幸福のための祈りなどは凡てこの態度から生れる。第二の異教的社會的態度は、人生の意味を單に個々の個人的幸福に認めずして、個々人の一定の集團の幸福のうちに認める、卽ち家庭、種族、國民、時としては實證論者の如く全人類の幸福のうちに人生の意味を認める。その集團の幸福が存在の目的となる。支那及び日本の宗教、ローマ人の國家的宗教、實證論者の全人類の宗教などがその例である。支那及び日本に於ける祖先崇拜の儀式、ローマに於ける皇帝崇拜は、要するにこの態度から生れたものと見られる。第三の態度は、第

この態度が多く勇敢な民族の間に生れた態度であつたのに對し、多くは老人の態度であり、また今の人類の漸く取らうとする態度である。即ち人生の意味を個人的幸福乃至何等かの集團生活の幸福のうちに認めるのではなく、人間と全世界とを、それぞれの目的のためにでなく、絕大の意志の目的のために創造したところの、その意志そのものに奉仕することのうちに認めるのである。この態度の萌芽は、エジプト人にもペルシャ人にもブラマン教徒にも、佛教徒にも見られるが、その眞の表現はキリスト教に於いて見ることが出來る。凡ての宗教は要するに以上の三つの態度に分たれる。（『宗教と道德』）

トルストイの宗教的人生觀が、どういふ思索の順序によつて成り立つてゐるかは、大要以上の梗概で會得せられるであらう。この宗教的人生觀が、或は無抵抗主義ともなり、教會、國家の否定ともなり、勞働の重視ともなり、またその藝術觀ともなつたのである。トルストイの宗教的人生觀の本旨は、さらにその愛の福音、禁慾論、その他の點に亙つて細かく說かれることを要する。以上はわづかに人生に於ける宗教の意義を說いたのに過ぎない。しかしこれだけでも大分長くなつたから、今は以上の紹介にとどめて置く。讀者は、トルストイの所說のある意味での平凡さと、ひろさと、自由さと、また隨つていろいろの意味で大膽な形式打破の精神に充ちてゐるところを、その逞しい合理的精神の現はれを、以上の紹述の間から看取せられるであらう。

人間の貴族

消えかかつた生命が、自分自らの力で再び燃え上つて來るときに、吾々は奇蹟を感じるのではないか。脆い微かな生命の力でも、それに賴りそれを强めることによつて、殆んどあらゆる外からの助勢を入用としないときに、吾々はまた奇蹟を感じ不思議を見るのではないか。微妙なる生命の力の發動として見ればすべての不可思議は不可思議でなくなる。それと同時にすべての事實はまた不可思議とも見られる。

生命の力に拜跪し信賴するものの心が、外からの助勢を出來るだけ少なくしようとするのは當然である。それと同時に、同じその心が、あらゆる事象にその生命の力の表現を見出したいといふのも亦當然である。かれは宗教の禁慾的傾向となり、これは宗教藝術となつてゐる。吾々の前には更に新らしい象徵主義の藝術が起らねばならない。更に新らしい象徵的生活の道が開かれねばならない。禁慾主義はある意味で生命の力に對する盲目的崇拜であると同時に、生命の力の抑壓破壞である。生命に對する一種の暴虐である。眞に生命の力を信じ且つ愛するものは、それに力を與へるすべてのものに價値を感じ、親しみを感ずることが出來る。而して生命の力を養ひ育ててくれる外から來る助勢そのものも、やはり生命が自ら探索して自分の行く道に置いたものに外ならない。自分の行く道へ牽き寄せたものに外ならない。自分自らの作つたものに外ならない。それを破壞し抑壓することは勿論自己に暴虐を加へることである。吾々は外からの助勢を出來るだけ少なくして堪へ得るだけの力を必要とすると同時に、外からの助勢を喜び受け、外へ向つての表現を樂しむことの出來るだけの無邪氣と純一とすなほさとを有つてゐたいと思ふ、この心持を有つものが人間の貴族である。

（『南の窓にて』より）

現代ロシヤ文學の印象

1 現代文學の基調

一

千八百九十二年、メレジュコーフスキーは、『現代ロシヤ文學の衰頽の原因及び新潮流に就いて』を書いた。この論文で取り扱つてゐる「現代ロシヤ文學」は最も新らしいところでも、チエーホフとガルシンとに及んでゐるに過ぎない。丁度そのころは、三卷の短篇集を殘して、三十三になつたばかりのガルシンが自殺してから、四年經つか經たぬ頃であつた。また、チエーホフは『決鬪』を出したり『六號室』を書いたりしてゐる頃であつた。新詩壇の先驅者バリモントの處女詩集は既に出てはゐたが、まだ新機運の源となるだけの力を藏してゐなかつた。しかし、メレジュコーフスキーのこの論文は、ロシヤ最近代の批評壇に現はれた第一の新聲で、丁度文壇全體が、この論文の出た頃を轉機として、吾々自身にとつての「現代文學」の時期を開いたことになつてゐる。この意味だけから言つても、メレジュコーフスキーは現代文學の先驅者であり開拓者であつて、肉にも血にも魂にも、溢れるばかりに近代的な人間味と近代的な藝術味とを藏してゐる近代人であつた。

メレジュコーフスキーが、あの論文で、當時の文學の衰頽のおもな原因としてあげたのは、功利的、傾向的乃至指導的な批評の暴威である。これあるがために文壇の鑑識評價が酷しく低下して、價値の高下の判斷がその據るところを誤るに至つたといふのである。實際今から三十年ばかり前のロシヤの文壇では、文學はある一つの特殊の義務を負はされてゐた。この義務といふのは、社會的理想に奉仕することである。而してこの義務を全うするための表現の樣式はリアリズムである。社會的理想への奉仕と寫實主義と、この二つが當時の文壇を支配した律法で、これが取りも直さず當時の批評の標準であつた。而して當時の批評家たちは、ミハイローフスキーを初めとして、單に文學の批評家であるといふばかりでなく、また直ちにひろく社會生活の批評家であり指導者であつて、しかもまた唯一の批評家指導者であつた。彼等は眞に時代の木鐸として仰がれ、その言論の權威はただならず重かつた。彼等の言論が文壇を壓したのは、一つはかやうな特殊の事情からも來てゐる。

二

かくの如き批評に威壓せられた文壇では、作家は多く自己の觀るがままに人生を表現するの自由なる寫實主義に往かず、寫實主義ではあつても、それは社會を覺醒せしめる意圖を表現するための寫實主義で、つまり傾向的功利的である。奧深くひそめる内心の自己の聲を發するといふよりは、特殊の社會的目的に副ふための描寫もしくは詠歎が尊ばれる　あらゆる個人的な獨自の内生活はあと廻しにされ、閑却される。個人的な獨自の主觀の汾湧はおさへられ、觀察の範圍は一定の社會理想に限られる。作家の個性は一面にのみ局限せられて、自由な多種多樣の自己表現を許されない。これが千八百八十年代のロシヤ文壇に於ける謂はゆる「日常平凡な寫實主義」の跋扈であつて、メレジュコーフスキーが指摘した功利的、傾向的乃至指導的批評の暴威はここに見られる。

しかしながら、かやうな個性に對する壓迫が、いつまでも堪へ得られる筈はない。功利的批評の威壓がまだその力を失つてしまはぬうちに、既にはやく反抗の芽を吹き出して來たものは、メレジュコーフスキーがあの論文を書いた千八百九十年代の青年文學者である。彼等の反抗は、要するに個性の壓迫に對する自由な個性の反抗であつた。彼等は自分の内にある自由な心の生活の複雜と多樣とに、自ら驚き自ら喜び、そのあるがままを、内心の生活の一切のあるがままを、何の憚るところなく表現するの權利を、初めて自ら認めた。その歌はんと欲するところを、何の憚るところなく、小鳥の歌ふが如くに歌ふことの權利を、初めて自ら認めた。――藝術家が公衆に與へ得る最も價値あるものは、その魂の最も深き奥底に生れ、その個性の髓のうちに實る。藝術家の個性に獨得な、繰り返すことの出來ない、無類な、内心の世界の消息こそ、最も貴きものである。何故かといふに、個性に獨得な内心の生活のどん底で、藝術家ははじめて眞に重大な獨創的な生命に接觸し、その魂の最も深い震動のうちに、はじめて眞の事物の本性は啓示されるからである。それであるから、藝術家の内心の生活の物語や歌は、ただ心耳を澄まして敬虔に聽くべきであつて、外からとかくの註文を出すべきではない。その魂の響きが如何に奇異であらうとも、それがまことの魂の響きである限り、そこには何等かの未來への啓示があり、物の本質の暗示がある。藝術家の個性のあがきには魂が沸き立ち、その底からは命のかけらが跳り上る。――かういふのが、自由な個性の反抗主張の聲である。

この主張が、今までの傾向的寫實主義と全くその根據を異にし、人生觀を異にしてゐることは明白である。功利的、實用的、制限的であつたのに對して、全的であり根本的であり直覺的であつて、明らかに藝術上の新らしいロマンティシズムである。メレジュコーフスキーもミンスキーも、バリモントもブリューソフも、この意味ではひとしく新ロマンティシズムの一族である。而してこの新ロマンティシズムの由來するところが、ニーチェの思想であることを忘れてはならぬ。

三

ロシヤの寫實主義は、西ヨーロッパ殊にフランスあたりの寫實主義と比べて、大分その趣きを異にしてゐると謂はれる。これをロシヤの寫實主義に固有の病所の方面から見ると、ロシヤの寫實主義には、社會的理想の實現のためにするといふ一種の社會道德の傾向が、あまりに根深く附き纏うてゐる。これがまた一方から言へば、文學上の病所であるに拘らず、その種の寫實主義文學を社會に勢力あるものとならしめた根據でもある。しかしこの傾向的寫實主義が、ロシヤ文學に一種の特色を與へたとともに、またどの位ロシヤ文學の自由に深まり自由に伸び行くことを妨げたかも知れない。西ヨーロッパの寫實主義が一轉して自然主義となつたのは、褊狹な傾向的道德觀から開放された寫實主義へすすんだものと言つてよい。ロシヤでは西ヨーロッパのやうな自然主義の文學は生れて來なかつた。ロシヤでは社會理想の實現のためといふ道德主義の中からそれを表現するに必要な、また都合のよい寫實主義が發生した形であつた。少なくとも千八百八十年代までのロシヤの批評家は、すべてかくの如く傾向的寫實主義の立場に在つて作品を評價した。チェーホフに對するミハイローフスキーはもとより、あの特色的な『ロシヤ最近文學史』を書いたスカビチェフスキー等の態度が、明らかにこの立場を示してゐるものである。

かくの如き批評家と、かくの如き批評家の言説に指導せられて來た一般の公衆とが、千八百九十年代に出でた新文學の先驅者たちを如何に迎へたかは、多く言ふを要せぬ。抑々この新ロマンティシズム運動の特色は當然沒道德的(必ずしも反道德的ではない)であつた、また反社會的であつた。而してこの沒道德的、反社會的な新ロマンティシズムの傾向は、單に創作の上ばかりでなく、批評の上にもまた、今までの反動として、著しい一つの運動となつて現はれて來た。

メレジュコーフスキーは、功利的な批評家の暴威を揮ふ事を難じたが、全く當時に於いては、文壇の批評家は悉く社會的理想の宣傳者で、功利的な道德主義の立場から文學を評價した。帝政時代のロシヤでは、政治上社會上の問題に就いての言論の自由は、筆の上でも舌の上でも殆ど全くなかつた。ただ僅かに文壇の批評によつて、政治上社會上の問題を論ずることが出來た。この意味で文學批評は唯一の言論の形であつた。唯一の許されたる、また民衆を惹きつける力ある言論の形であつた。

しかしながら、これを先にしては九十年代から發生した個性の主張や、沒道德的反社會的傾向に伴つて、これを後にしては千九百五六年頃からの一般言論機關の自由の擴張とともに、この批評界の特殊の事情は著しく消滅して行つた。議會その他の公けの代議制度が、曲りなりにも一方に言論のはけ口を與へた。新聞雜誌の上でも、自然ある程度までは時事の評論が行はれるやうになつた。而してまた、個性の自由の主張は、批評の上でも、批評家の自由な鑑賞と作品の自由な享受とを主張せしめた。作品に、時代と社會との關係乃至影響といふ方面を見ることなく、ただひとへに作家の表現した内心生活の消息を味ひ知らうとせしめた。その結果、批評の上では、在來の社會理想を插んでの批評に對して、純然たる心理的乃至美學的の鑑賞批評、さらに進んでは印象批評が起つた。この傾向の現代の代表者としては、ツルゲーニェフの社會的傾向を忌んで、その『狩獵家の覺え書き』をも傾向的な作品として、殆どそれに言及だにしなかつたアイヘンワリドを擧げねばならぬ。チュコーフスキーもまた印象派の批評家として可なり知られてゐるが、しかし新批評壇の代表者としては先づアイヘンワリドに指を屈せねばならぬ。アイヘンワリドの代表作としては『ロシヤ文學者のシルーエット』三卷があつて、散文詩のやうな文章は、丁度細く強く且つ光澤ある絹絲にも譬へようか。時々思ひ切つて大膽な、寧ろ無謀なほどの獨斷があるに拘らず、その自由な鑑賞、清新にして透徹せる識見には、批評の態度の上で反對の立場に在るものも敬服せしめられる。

而してこの批評家に最も著しい特色は、その鑑賞の底を貫いて、藝術に對する戀の如き熱愛の横溢してゐることである。

四

個性の自由の主張、偏狹な道德的傾向からの解放、これはロシヤ文學をその正道に引き出したものである。勿論この正道を歩んだものは、それまでのロシヤ文學に少なからずある。プーシュキンも、ゴーゴリも、フェット、チュッチェフの二詩人も、ドストエーフスキーもトルストイも、皆おのづからこの正道を歩んで來た。しかし多くの批評家は、彼等の作に何等かの社會的理想を發見しようと力めたり、またはフェットやチュッチェフに對してのごとく、或は默殺し或は嘲笑した。舊來の傾向的批評家の威嚇は、たとへばツルゲーニェフの如き大才をすら多少脅かした氣味がある。舊來の文壇　社會道德への奉仕の主張は、それが主義的であるだ

けに、たまたま一二の天才が出現しても、その事實だけでは動かなかつた。ドストエーフスキーの出現が、その周圍の傾向的主張を弱めなかつたやうなものである。それにはやはり他の新らしい主義主張であたる外はなかつた。而していまはその新らしい主張が、在來の傾向的主張を壓して、文壇の空氣を自由にし、清新にした。今は何人も來つて文壇に自由に呼吸し、製作することが出來る。しかし、自己の個性の表現は、ひとり自己の魂の力のみがこれを能くする。藝術は卽ち人格であり、その作家の生活の深さである。

そこで十九世紀の末から現在へかけてのロシヤ文壇にも、その內心生活の深さから見て二三流以下の作家が著しく殖えた。いはば內心の生活に對する好奇心とでもいふべき心持から、讀者の方でも作家の心の告白を聽くことを求める。それは、一般の人々の前に、今までにない精神生活の新野が拓かれて、その光景を、自由に思ふままに貪り眺めてもよいことになつたわけであるから、未來派の詩人と一時謂はれてゐたイーゴリ・セーウェリヤニーンのひと頃の人氣も、蔽ひかくさない人間內心の光景に對する欲望に基いてゐると見るべきではないか。彼の詩には、さほどの內心生活がうたはれてゐるとは思へない。多くの場合に於いて、空虛の寂しみをさへ感ぜさせられるものである。しかし、彼の歌ふところは、ともかくも彼自身の內心の生活である。しかも彼はそれを極めて自然に、少しの無理なく、打ちつけに安らかに歌つて行く。しかも、自らの內心の消息をあからさまに歌ふことは、何人も奪ふ可からざる彼の權利であるといふ十分の自信を以て。セーウェリヤニーンの力は、實にその十分な自信に在ると言つてよい。作家も心の告白を欲し、讀者もまた心の告白を求める。その心は淺い輕いものであらうとも、ともかくも心である。與へられた社會理想ではない。一定の傾向道德ではない。そこに現代詩人の强みがある。

現代のロシヤ文學は、萬華鏡の如く多種多樣である。しかし、これを一代前の文學と比べてみると、メレジュコーフスキーの謂はゆる功利的批評家の暴威を脫して、個性の自由を限りなく許し、主觀の自由を限りなく認めたところにその第一の基調がある。現代人の病弱、疲勞、不安、頽廢、興奮、恐怖、喜悅、憧憬、摸索、あらゆる內心の事實を、それが內心の事實であるが故に、統一のないままにおのおのをして表現せしめたものが、現代のロシヤ文學である。而してこの統一のない多種多樣の主觀の表現が、或はまた現代の世界の文學、世界の思想の特色であるかも知れない。

2　個性中心の批評

一昨年の暮から昨年の正月へかけて、ロシヤ全國中等學校のロシヤ語及びロシヤ文學の教師の第一回大會が、モスクワで開かれたときには、その會議の席上でも、モスクワ及びペトログラードの新聞の論壇の上でも、文學教授の方針乃至方法に就いて、可なり盛んな論爭があつた。この中へ、その教師會議へ爆彈を投じたものは批評家アイヘンワリドであつた。彼は『學校に於ける文學』といふ小論文で、文學は必修的課業とすべきものではない、一定の教課規定に從つて生徒に課すべきものではない、文學は「魂の花」である、語學は教課として教へることが出來るし、また教へねばならぬが、文學を教へることは不可能である、文學はただともに樂しみ味ふべきであると言つた。これが彼の謂はゆる「教師會議」への爆彈であつた。

文學の社會的任務を重大視する在來の批評

家は、今ではもう殆ど文壇にあとを絶つたと言つてよい。しかし、あの舊批評家の精神衣鉢を承け繼いでゐるのは、各大學を根城とする文學史の教授たち、乃至大學以外の多くの文學史家である。それも今は教學の方面に立てこもつて、文壇とは殆ど沒交渉であると言つてよい。併し、何かの折には、その謂はゆる「社會派」の批評が、謂はゆる「唯美派」の批評と相搏つ。「社會派」の見かたには、傳統があるだけに、可なり執念き力があつて、まだ全くこれを無視することは出來ない。教師會議を機會としてのこの二主張の爭ひなども、依然としてこの二つの力の對抗を示してゐる。大學教授中でも、ともかく一方の批評家として知られてゐるのは、たとへばペトログラード大學のロシヤ文學教授ウェンゲロフである。この編纂好きな、勤勞に於いてすぐれてゐる教授の、可なり得意であるらしい『ロシヤ文學の英雄性』などが「社會派」の代表と見られる。この教授の編纂に成る未完の『ロシヤ二十世紀文學史』の第一卷の序で、新代の批評家を論じた中に、アイヘンワリドが「狩獵者の手記」(前出「狩獵家の覺え書き」)を無視し、もしくは貶したといふ點を特にあげて難じてゐるのなども、この教授の立場からすれば至當のことである。

二

アイヘンワリドの批評上の代表作は、『ロシヤ文學者のシルーエット』三卷である。而して、彼の批評上の立場を最もよく自ら説明してゐるものは、その第一卷の序論である。

文學を科學として研究しようとするやうな、大學教授たちの態度に對しては、アイヘンワリドは、この序論のはじめで、藝術の本質がそのおのおのの作品に於いて唯一無二であり、藝術に主要なのは、それが互に類似してゐることではなくして、それが己れを他と區別する特色を有することであると説いてゐる。而して、もし謂はゆる文學の研究が、文學の社會的影響を主題とする限り、それは文學そのものの研究ではなくして、文學の社會に與へた影響の研究であるから、隨つてその研究は、文學の歴史ではなくして社會の歴史であり、作者の歴史ではなくして讀者の歴史であることになる。これは既に社會學であつて、文學ではなくなる。文學の批評は評價であつて、それは嗜好であり、證明すべからざる主觀的印象である――。

――テーヌが文學を人種、環境、時代の三つの要素の所産であるとしたのはこれ等の影響を受ける深い動力、卽ち個性を全く閑却したものである。文學といふ個性の力の所産を、社會的集團的勢力で蔽はうとしたものである。勿論一切のものは相影響する。ただ問題は、その影響するものが、藝術の本體を成り立てしめる必至の條件を成してゐるかどうかに在る。社會的勢力の下に藝術が生れ、藝術の本務は社會的教化に在るとして、專らその方面の研究にのみ往くものは、時代そのものをも藝術家の個性をも、確かに把握することが出來ない――

――人間は生れながらに藝術家である。人間の心は、魂は、常に休むことなく何ものかを思ひ、描き、夢みつつある。魂は動力である、休みなき動力である。藝術はこの動力から生れる。もし藝術を通ずる法則が必要なら、藝術創作の心理狀態――思ひ、描き、夢みる心理狀態を知ることは出來る。しかも、魂が何故に如何にして一つの藝術を作り出したかは、到底語ることは出來ない。魂は依然として知られざる偉大なる偶然である。魂の法則はない。隨つてまた藝術の法則もない――

――言葉は行爲よりも先である。藝術は人生を作る。人生の反映が藝術となるのではない。藝術は率ゐて進む將軍である。文學は常に前へ進む。文學は「永久の未來」である。文學の文

學たる本質は、時處を絶し、作者は常にまた到るところに生きてゐる。作者は自己の同時代の人々に同時代の人でなく、自己の同國の人に同國の人でない。天才は不朽であり、また孤獨である。天才の悲みはそこに在る。もし天才が、その時と處との制限を離れては力を失つてしまふやうなら、それは天才ではない、藝術家ではない。ただ絶對のもの、永久なもの、それが作者の力と大いさとを示す――

――いかに個性に及ぼした環境や時代や人種などの影響を精細に研究してもいかにそれ等を詳しく知つても、結局はやはり作者その人へまで往かねばならぬ。而して作者の個性は、解剖し證明することの出來ない最後のものである。個性は説明しがたい。いくら何故といふ疑問を出しても、個性の特質を説明して滿足を與へてはくれない。個性は絶對な單位であり根原である。何故からであるかといふ不可決の問題を棄てて、ただかくの如くあるといふことを、即ちその作者の何人であるかを説き語る外はない。勿論作者の個性に及ぼす影響のあることは否定するわけには行かない。しかし、問題はその影響にあるのでなくて、それを受ける本體の個性にある。何人が環境の影響を受け取るかが主であつて、その影響が如何なるものであるかが主ではない――。

上のやうな考へかたは、いふまでもなく、藝術家の個性の絶對的尊貴、藝術家の個性の能力の無制限を意味する。而して、その個性は、アイヘンワリドの謂はゆる「小環境」、即ち時代とか土地とかの制限的環境と連結してそこに初めて存立の意義を得るのでは勿論ない。個性は、謂はゆる「大環境」即ち人間の本性と直ちに結び附く。時と處との制限に拘らない個性の底に、深き廣き「大環境」が開ける。藝術家自らが動かす力であり、その自己の力によつて「小環境」を支配し統制して、直ちに「大環境」に徹する。「藝術家はいつでも勝利者である。」

三

批評は科學的方法によつて藝術を分類統一することも出來ない、またその創造の魂の祕密を説明することも出來ない、ただその魂の所有者である作者が何人であるかを物語ることが出來る――この考へかたは、實に印象批評の態度に外ならない。既に個性の無二絶對を認めるが故に、これを取扱ふ批評家の態度の上にも、個性の無二獨自性を、遺憾なく受け入れることの出來るだけの用意がなくてはならぬ。藝術の上では、この中心たり根帶たるものは、藝術家の個性といふ理智の分解を絶した力である。作品及びその作者たる個性、それが最も肝要なものであり、疑ひを容れない事實である。「そこには傾向があるのではなくしてただ作者がある。言ひ換へれば、作者の數だけ、それだけ傾向がある。」個々の作者が自らの道を選び定める。彼の言葉によれば、作者は「生きた唯一無二のもの」であり、「例外」である。

一體ロシヤでは、文學もその批評も、社會的興味のために毒せられて來た。アイヘンワリドに從へば、そのために美に感應する能力を失ひ、人間の本性に固有のものを狹めた。美しいものを無駄なものと思ひ、そこに罪惡と空虚とをのみ見た。奴隷は暴行者である。政治的の奴隷であつたロシヤ人は、藝術鑑賞の上では暴行者であつた。ピーサレフのやうな偏僻な立場の批評家――寧ろ時事評論家が出て、プーシュキンやチュッチェフやフェットなどを、むだ花か何ぞのやうに言つたのがそれだ。チェルヌイシェフスキーがツルゲーニェフの『アーシャ』の批評と稱して書いた『あひびきするロシヤ人』といふ批評などがその暴行の好い證據だ。凡

て社會的興味のために、藝術を見る眼がくらまされてゐたのである。集團の生活を以て個性の內心の生活を虐げることを畏れなかつたのである。

作者の個性の問題に關係して、作者の傳記の研究が往々過大に重要視される。この點に就いても、アイヘンワリドの考へかたは、どこまでも個性の力の主張に外ならない。彼の考へに從へば、傳記の研究が全然無用であると言ふのではないが、しかし作者の外面生活の記錄は、それだけではまだ何の意味をもなさない。重大なのはその內面の生活で、それは作者の意志に拘らず作品が語つてくれる。おのおのの作品はその創作者の自傳に外ならない。外面の事實に意味を生ずるのは、それを如何なる個性が經驗するか、如何なる特殊の精神生活を藏する人がそれを觀照し經驗するかによつてである。

作者の私生活を知るのは興味のあることであるが、多くの場合好奇心の滿足を求めることになり易い。勿論傳記の研究が、作品の內容やその由來を說明するの助けになることは事實であるが、それによつて作品そのものの不朽な本體をどうすることも出來はしない。たださうかと言つて、傳記を知つてゐて强ひて知らぬふりを裝ふ必要はない。傳記をのみ土臺として作品を見ることを忌むのである。批評家はいつでも傳記よりはその作品を第一に重んじなければならぬ。文學は文學の範圍でその本體を現はす、必ずしも傳記の穿鑿にすがる必要はない。この意味では、ゴンチャローフがその私人としての生活、書簡類を一切祕して公けにすることを許さなかつたのは正當である。所詮「作者の生活は手段であり、目的はその作品である。」世間の歷史的文學研究は、とかく目的を遠く離れて手段にこだはる。傳記、諸種の影響、社會思潮、さういふものは第二であつて、中心はいつでも作品である。作品そのものに行くことが、——この內在的方法が、最も自然な正當な方法である——

——藝術の創作は、藝術家にとつて、その根柢に於いては無意識的である。批評は意識的である。批評家は第一の、最もよき讀者である。この意味で作品は何人のためによりも批評家のためである。」而してまた、「詩は詩人の爲めである。聾者にとつて言葉は啞である。」讀む者の心に藝術的天分がなかつたら讀者は作品を了解することは出來ぬであらう。それ故に、讀むすべを知らない、卽ち批評家であり得ないものが、文學の歷史の研究などをすべきではない。——實際ロシヤでも、大學の敎授とか、文學史の研究家といふやうな人は、多くは文學を讀むすべを知らぬ人で、アイヘンワリドの謂はゆる「小環境」の穿鑿に沒頭して、藝術の眞味を味ふ事は少しもしない。丁度日本の多くの國文學者たちがさうであるやうに、「文學の研究」のために「文學を味ふ」ことを輕蔑してゐる「言葉の聾」が少なくない。ロシヤの大學の敎授たちは、口ぐせのやうに文壇の批評家に學術的研究がないと言つて輕蔑する。恰も文學の學術的研究といふものが、無條件的に可能ででもあるかのやうに、また、文學の研究が、批評とは全く段の違つた立派なすぐれたことででもあるかのやうに。アイヘンワリドが、批評家であり得ないものが、文學の歷史の研究などに從事すべきではないと言つたのも、その邊の消息を指したのである。

四

アイヘンワリドに從へば、讀むといふことには限りがない。「一つの作者を讀み切つてしまふことは決してあり得ない、何故かといふに、作者はをはりを有つてゐないからである。眞の詩人には酌み盡すべからざるものがある、それ故に

彼は常に吾等にとつて新らしい。一作者は固定したものでもなければ、一定の印刷せられた本文だけを意味するものでもない、作者は魂である。精神生活の一個の渾然たる世界である。動く力であり動かす力である。日月星辰の動き照つて限りなきやうに、作者もまた無窮に動き照る。詩人は日に日に新らしき光景を讀むもののまへに展開する。しかしてこの事實は、讀むものの――批評家の主觀の發動を意味し、またそれを是認することになる。是認するばかりでなくして、批評家の主觀の發動がなくてはならぬものであることを意味する。作者の主觀と讀者（批評家）の主觀との相逢ふことによつて、作品の眼に睛が點ぜられる。「文學上の作品は常に對話である。作者と讀者との。後のものは初めのものに助力する。藝術家の創作は、丁度彼が世界に投げかける問ひのやうなものである。しかして世界は、自己の印象を以てそれに答へる。響きに對して反響を與へる。」

勿論この反響は、その反響を與へるものの主觀に從つて、或は豐かに或は貧しく、或は高く或は低く、或は充ち或は空しい。實に作者と讀者との大小は相對的である。一は他なくして發動し得ず、一は常に他を定める。讀者は作者を作る。批評家は作者の潛む力を感ずる。固定した客觀的な、一定不變な作者といふものは實は存在しないと言つてよい。彼はいつでも獨りであり得ない。作者は吾等と共に住み、吾等の中に住む。作品の效果は、いつでもこの二つの魂の接觸から生ずる。藝術の鑑賞が主觀を離れて不可能であることは、これでも分る筈である。批評上の問題は、その主觀がどんなものであるか、誰が作品を受け入れるかに在る。この作者と讀者との主觀の接觸融合によつて藝術鑑賞が行はれるといふ見かたは、藝術の批評に作者と讀者（批評家）との個性を中心とする意であつて、印象主義批評の重大な特色をなす。作品が永久に新らしいといふのは、作者の動力の讀者の心にあたへる印象が、次から次へと變り行くからである。作品を讀み了へ讀み切るといふことのないといふ意味もこれに外ならない。印象はさまざまであつて、同一の讀者に於いても固定するといふことがない。第一の印象と第二の印象とは異なり、更に第三、第四の印象も異なる。個性の內容が固定しない限り、印象の絲はどこまで續いて行くか、何人も見定めることは出來ない。印象は深くなり、廣やかになり、新らしくなり、新らしい祕密をその作品のなかから見いだす。ただ、その印象はどこまでも眞摯誠實であらねばならぬ。主觀的印象によつて藝術の力、藝術の味ひが見出される、これを措いて文學も藝術もないと言つてよい。――アイヘンワリドの印象的批評に對する解釋は、ほぼ以上に盡きる。

五

既に作者及び批評家の個性を重んじ、主觀を重んじ、批評の方法としては印象主義であるが故に、アイヘンワリドは、文學の研究に時代的概觀を試みるやうなことは全くしない。彼の代表作が『ロシヤ文學者のシルーエット』といふのも、またこの主張に裏づけられてゐる。しかしてその三卷の內容は、徹頭徹尾個々の文學者に就いての個人評論である。彼がツルゲーニエフを評して、「彼は單にロシヤ國の境を超えて外國へ行つたばかりでなく、ロシヤ的なものの境を越えて行つた（もし、現實精神、眞摯、及び精神的自由の心理的具體化として、自然さと素朴さとの同意語として、ロシヤ的といふ言葉を解するなら）。」と言ひ、また、ツルゲーニエフが、あまりデリケートなヨーロッパ人になり過ぎ、ロシヤを去り過ぎて、「原始的な深みも、神聖な素朴もなく」なつたと言ひ、『狩獵者の手

記』を貶したのなどは、當つてゐるところもあるが、可なり思ひ切つた批評である。ビェリーンスキーに對する彼の見かたも、全く今までの評價を覆すやうな大膽な否定的な態度で、それが評論壇の問題となつて、彼自ら別にその論難に報いるための小册子を書いた位であつた。しかしてすべてこれ等の異常な見かたは、彼があくまでも個性の純藝術的表現を主として、時代の背景乃至社會との交渉を、文學そのものの批評の上に必要なしとするがためである。アイヘンワリドは、モスクワ國民大學と女子大學とでロシヤ文學の講義をするにも、「ロシヤ文學史」といふ言葉は決して科目の名として用ひない、その講義も全く『ロシヤ文學者のシルーエット』と同じやうに、個々の文學者の評論の連續であると言つてよい。彼は『フランス文學史』の著者ランソンや、オスカー・ワイルドの『インテンションズ』に同感するところが多いやうである。彼は印象批評家乃至「唯美派」批評家として、藝術を人生の祝祭と見るに拘らず、――藝術の實用を排するに拘らず、藝術の眞の價値を、人生の深さ貴さ――彼の謂はゆる「大環境」の表現に在りとして、その意味に於いての眞の藝術を愛することと戀するが如くである。彼の眞摯な、何となく稚醇な人柄、やや羞恥を帶びてゐるやうな、人をいたはる、「デリケートな、しかしながら可なり大膽に自分の思ふところを表白する確信ある態度、それ等の人としての風格が、彼の論文に鮮やかに表現せられてゐる。彼の文章は縷々として細やかに、おのおのの言葉をいたはりつつ書かれたやうな味ひがあり、光澤がある。しかもその縷々たる文章は何となく勁く、隨處に思ひ切つた總括と飛躍とがあつて、緊張した一種の貴族的な律を成してゐるやうに感ぜられる。彼が最近に現在のロシヤの社會思想上の問題を論じた短い論文の如きも、その見識の新鮮を以て群を拔いてゐる。彼が藝術を以て人生の慰めであり喜びであるとするやうに、彼の批評もまた常に讀むものの心に慰めと喜びとの樂律を傳へる。

3 詩壇の不安

一

彼等は待ち望み、彼等は摸索する。あを白む東を望んで、豫言者の來るのを待ち、太陽の昇るのを待つメレジュコーフスキーは、彼自ら歌ふ如く『夜の子』であつた。この暗黑の子は、光を見るとともに、その「光」のうちに死ぬる」のかも知れない。しかし、「凡ては異ならん」、新らしい知られない世界」の創成せられることは疑へない。現在を以て生きることは出來ないが、明らかならぬ未來のうちに、未だ言ひ現はされない願ひのうちに浸つて生きて行くことが出來る（バリモント）。どことも知らぬ遠い果しないところに、全く別の土地があつて、そこにわが花嫁は住んでゐる（ソログープ）。冥想と火とで織られた赤い帳のかなたには、吾等の待ちのぞむものが在る、喜びの姿が立つてゐる（アンドレイ・ビェールイ）。春の土からこそ世界を照らす光を待ち、ただ一人の「彼の女」を思ひ描く（ブロック）。混沌の中から、黑きものの中から星が生れる、かたくなな否定から、神聖な肯定を起たしめよ（イワーノフ）。夜をして果しなく永からしめよ、闇よりこそ光は生るれ！（ギッピウス夫人）

彼等はすべてみな待ち望んでゐる。彼等はすべてみな東方のあを白むのを待つ『夜の子』である。何等か新らしい光の現はれ來ることを感じ、その面影をさへ「幻」に描く。しかし、彼等は「眞を知つてゐるやうに自分に思はれる、ただその眞を現はすべき言葉を知らない」のである。

待ち望みはある。東から來る光に對する期待とその期待に伴ふ強い興奮とはある。ただ興奮には力が伴うてゐない。そこには空しき翹望と摸索と、しかしてまたヒステリカルな興奮とがある。東から光は現はれても、その光のうちに生くる力を有してゐるか否かは疑はしい。彼等自らはまだ闇の子である。眞を知つてゐると思ふ喜びの興奮はあつても眞そのものを現はすべき言葉を知らない。

　彼等はシムボリストであると言はれ、またデカダンであるとも言はれる。ロシヤ最近の詩壇の不安は、そこにある。

二

　シムボリズムの特徴は、それがあくまでも豐富なリアリズムの精神に充ちてゐるといふことである。宗教的乃至神秘的生活の――最も深い強い人間内心の生活の實在を信じてゐることである。しかしてその信ずる心に於いて些かの不安もない。これに對してデカダン的傾向の特徴は、リアリズムの精神の空疏薄弱なことである。宗教的乃至神秘的生活の――最も深い強い人間内心の生活の實在を信ずる心は不安に傷き荒み、空しく疲れてゐることである。彼は充實した實在の感じに生き、これは空漠不安な幻影にまどろむ。シムボリズムは創造を意味し、デカダン的傾向は病患を意味する。シムボリズムとデカダン的傾向とは、この意味に於いて全く相反對する性質を帶びてゐる。シムボリストは眞を知つてゐると思ふ喜びに興奮するばかりでなく、眞そのものを現はすべき言葉を知つてゐなければならぬ。興奮があつて表現のないヒステリカルな心の狀態は、卽ちこれをデカダン派の詩人に見る。

　吾等が日に見る現實の世界は、さまざまの色の雜りあつた、離れ離れの現象の世界であるやうに見える。しかしシムボリストは個々の現象のあなたに全く異なる一つの世界を見る。そこではばらばらのものが有機的な全き一つを成す。そこで個々の事實の混沌が調和ある渾一の世界を成す。そこでは一切の惱ましい矛盾がなくなり、惡も苦みも、眞の太陽の光のもとに灼かれ融けて、全く新らしい意味と價値とを有つ。美も愛も、調和も、そこではあますところなく實現せられ、味はれる。しかしてまた、このコスモス――渾一の世界は決して紛亂の現實の世界と全く別なものではない。ただ、現實の世界の實性に徹して觀る魂の力が、この渾一の世界を見出す。この魂の力こそ、個々の現象に妨げられ囚はれない眞のシムボリストの力である。まことの詩人――まことのシムボリストの命の深さ強さである。自由な、充實した、無礙な透徹した心のあらはれである。この心に浸することの出來た個々の事象は歡喜と調和との渾一の世界に甦つて行く。現實の世界では、皮相的な僞りの印象と刺戟とが吾々を嚇かし惱ますあの動きのとれない息苦しい事實は、その膠着から解放されて、廣やかな豐かな限りない命の、自由に縱横に流れ亙る光の海へ生き伸びて行く。個々は悉く全となり、斷片はみな完き一つに甦る。

　しかしこの渾一の表現、渾一と現象の世界との關係の表現――要するに詩人が自己の最深處の生活の表現には、その內容と言葉との相伴はざる事が感ぜられる。いかに適當に遺憾なく表現しようとしても、言葉はその悉くを現はしつくさない。チュッチェフとともに、「現はされたる思想は僞りである」といふ感じがする。しかし、適當に遺憾なく現はさうとすることは、思ふことのすべてを、一々の言葉に現はしつくさうとすることは、眞の詩人にとつてはまさに一つの誘惑である。さうするところからこそ「僞り」が生れる。眞の詩人はその誘惑を避けて

象徴を造る、生活の内容を裸形にせずして、これに衣を與へて却つてその本質を示唆し表現する。即ちシムボリズムは二つの極めて密接に融合する要素から成り立つ。一つは神祕的な自由な生命の力であり、他は「衣を與へて本質を示唆する」技巧の力である。

三

ロシヤ最近の詩壇の不安は、渾一の世界を失へるところにある。詩人が渾一無礙の世界の祕密を確かに支配し得ないところにある。自己の實在と力とを、また自己の統一を、深く強く自ら感ずる事の出來なくなつたところにある。彼等は、「くすんだ紫」のたそがれの中におぼろげな怪しげな見分けのつかない姿で立つてゐる。彼等は現實の世界の實性に徹して觀る魂の力を失ひ、斷片的な美しい物象を弄ぶやうになつた。彼等の多くは、渾一の世界を見失ひ、神祕的な自由な無礙な生命の力に萎縮して、ただぼんやりした、不思議な幻のやうな美しきものの碎片を見ることを、屢々繰り返すやうになつた。そこに何ものか[illegible]限の命がかくれてゐるらしくて、實は力のない空しい美しい靄のやうなものがあるに過ぎない。異樣な曖昧な言葉が「衣を與へて本質を示唆する」ものの如くであつて、實は空しき美しき言葉以上に出でない、本質の空しさを蔽ひかくす衣であるに過ぎない。描かれ歌はれる物象は、蒼ざめた空しい幻であつて何ものをも表現しない。隨つてまた何人にも解せられない。また解せられやうがない。シムボリズムに似て非なるデカダンスの藝術である。ソログープ、ブリューソフ、バリモント、イワーノフ、ビェールイ、ブロック、ギッピウスその他の現代の詩人に於いて、何人もこのデカダンスの匂ひを嗅ぐであらう、しかしてまた同時に何人も彼等のうちにシムボリズムの閃きと光とを見るであらう。彼等はあるときはシムボリストであり、あるときはデカダン詩人である。ロシヤ現代の詩壇の不安はそこにある。

彼等は東方のあを白むのを待ち望み、眞を知り得たやうに思うて興奮する。ただその眞を現はすべき言葉を知らなかつた。彼等はみなその言葉を求めた。言葉を求めることをのみ急いで、彼等が自ら知り得たと思つた眞そのものの――彼等が觀ることの出來る渾一の世界の、實はただ靄の如く幻の如く空しきものであることを思はなかつたところから、デカダンスが生じた。言葉を甘やかし過ぎるところから言葉は空しく美しく萎んだ。空しき生命を蔽うてなきものをあるが如くに見せようとするところから善良な、無遠慮な、一所懸命なやうな、遊び半分なやうな、言葉の濫用、虐待が始まつた。しかしてこれ等はすべてみな眞を知つてゐるやうに自分では思ひつつ、その眞を現はすべきただ一つの命ある言葉を知らぬものである。謂はゆる未來派の諸詩人もまたその範圍を出でない。彼等が未來派らしいときは彼等はデカダンである。ヒステリカルなもしくは無遠慮な興奮で、しきりにその「ただ一つの命ある言葉」を摸索する。彼等が興奮すればするほど、彼等の求めるものの狙ひが亂れる。彼等が鎭まつて、いら立たしさの少ないときに、彼等の心の『みどり兒』が面影を現はす。ロシヤ詩壇の不安の最もいら立たしくまざまざしきものを、即ちこの未來派の諸詩人に見る。

ロシヤ無產階級文學の發達

一

無產階級文學の發生發達と、無產階級政黨の發生發達との間には、一つの共通の原則が行はれてゐるやうである　無產階級政黨が、勞働運動と社會主義との一致握手の結果として發生するものであるといふことは、エンゲルス、カウツキー及びレーニンたどの既に言つてゐるところであるが、この原則は、無產階級文學の場合について見ても、同じやうに當てはめられる。前後一貫した系統的の無產階級文學がロシヤ文學の上に現はれて來る以前に於いて、無產階級的ではないが、社會主義的ではあるところの文學は、既に久しく存立してゐたのであつた。ロシヤの革命的インテリゲンツィヤの間に、ユートピヤ的な空想的な社會主義思想のひろがつて行つたのは、十九世紀の三四十年代のことであるが、それと同時に、文學の方面にも、ユートピヤ的社會主義思想を表現したものが出て來たのである。詩人としてまた社會評論家として知られてゐる亡命客オガリョフ（一八一三―一八七七）の如きも、ロシヤに於ける最初の社會主義者の一人として、社會主義詩人とは言へるが、無產階級詩人ではない。六十年代には、ハイネ、ロングフェロウなどの飜譯者として知られてゐるミハイロフ（一八二六―一八六五）があり、七十年代には、農民革命運動に參加した多くの社會主義的インテリゲンツィヤの詩人がある。卽ちラウロフ（一八二三―一九〇〇）、ニコライ・モロゾフ、ウェーラ・フィグネルなどがそれである。八十年代には、詩人ヤクーボキッチがあり、小說ではウスペンスキー（一八四〇―一九〇二）、劇ではサルトゥイコフ（一八二六―一八八九）がある。社會主義的インテリゲンツィヤの本流からはやや離れてゐると言はれてゐるが、尙この潮流に近く立つものに詩人ネクラソフ（一八二一―一八七七）がある。これ等社會主義的インテリゲンツィヤの文學は、八十年代の終りの政治的壓迫によつて殆どその光りを失つたかの如く見えた。これに代つたものは、八十年代の終りに出たシュクーレフ、ネチャーエフなど勞働者の詩歌である。勿論、この時代の勞働者詩人は、階級的自覺を有するプロレタリヤ詩人といふわけには行かない。その出身境遇こそはプロレタリヤートに屬するが、その最初の頃の詩は、爭鬪の意志をうたふよりも、寧ろ信仰と勤勞とによる他日の幸福を期待するやうなものであつた。かやうにして、一つは社會主義的感情はうたつてあるが無產階級的でなく、今一つのこれに代つたものは、勞働者の詩ではあるが社會主義的ではなかつたのである。この二つのものが、九十年代に至つて、漸く一つの無產階級的なものに融け合はうとするに至つたのである。

二

その出身に於いてはインテリゲンツィヤに屬しながら、社會主義者として、勞働者の立場に立つところの最初の無產階級的詩人と見られるものは、九十年代の半ば頃に出たラーディンである。彼の詩の多くは、靜かに書齋で吟誦すべきものといふよりは、寧ろ勞働者の集團の中でともに合唱すべきものであるが、同じやうな傾向を有する、同じインテリゲンツィヤ出身の

社會主義詩人ミハイロフが、六十年代に於いて書いたところの詩には、

あはれな打ちすゑられた民衆は、
うめき且つ重くためいきつき、
兩手をわれ等にさしのべ、
われ等に助けを呼ぶ。

とあつて、「われ等」とは言ふまでもなくインテリゲンツィヤを指し、それと民衆との間に距離があることを明らかに示してゐる。それに對して、ラーディンの詩には、

われ等民衆より出でたり、
勞働の家の子等………。

と言つて、インテリゲンツィヤではあるが、やはり同じ民衆の仲間に伍して、爭闘の列に加はつてゐることを語つてゐる。この二つの差は六十年代の知識階級的社會主義から、九十年代の勞働運動への推移を示すものとして意味をもつ。ミハイロフは社會主義的インテリゲンツィヤの代表者として、「あはれな打ちすゑられた民衆」から「助けを呼び」かけられるものとして自分を感じてゐるのであるが、ラーディンは、自ら無産階級の戰士として、その同一戰線に自分を置いてゐる。民衆を自分以外のものとして、その民衆から、「助けを呼び求められると感ずるのと、民衆の仲間に身を置いて、「われ等皆民衆より出でたり」と感ずるのとは、全く違つた二つの世界觀に基いてゐると言つてよい。ラーディンは、インテリゲンツィヤ出身であつて、無産階級の立場に身を置いた最初の詩人であつたのである。『インテルナチョナール』の飜譯者ダーニンとか、タラツフなどは、千九百五年に出たこの種類の詩人であつた。勞働者出身でありながら、無産階級意識に目ざめてゐなかつたシュクーレフ、ネチャーエフなどの詩人たちも、九十年代からの勞働運動の刺激によつて漸く階級的自覺を持つやうになり、千九百五年の第一革命の頃には、

われ等は鍛冶工、心は若し。
幸福の鍵をきたへん。
重き槌よ高くあがれ、
鋼の胸に倚強く打て！

と言つて、その爭闘的氣分を高調するに至つたのである。かやうにして、今から八十年以前には社會主義的インテリゲンツィヤの中からの最初の詩人が出で、四十年以前には最初の勞働者詩人が出て、別々に現はれて來たこの二つの流れが漸く一つに融け合ひ、無産階級文學の流れとなるに至つたのである。

多少とも組織的な形で無産階級文學が現はれて來たのは、世界大戰の前、千九百十一年から十四年あたりへかけてのことであつて、ロシャの無産政黨の機關たる『ズエズダ』、『プラッダ』などによつてその作品が發表せられたのである。勿論これは帝政時代のことであり、世界大戰直前のことであるのだから、この無産階級文學が、一つのひろい社會上乃至文學上の運動となるためには、いろいろの障礙があつたのであるが、それでも、もうこの時代には、一人か二人ぽつりぽつりと出て來るのではなく、小説の方面ではビビク、ベスサリコ、詩人としてはサモブィトニク、デミヤン・ベードヌイ、フィリプチェンコ、ゲラシモフなどが一時に輩出した。本來個人主義的傾向を有するマキシム・ゴーリキーは、單に都會のどん底生活を描き且つ歌ふばかりでなく、勞働者の生活に接近し、無産階級文學の先驅と見るべき種類の幾多の作品を書いた。彼はこの當時に於いても、新らしく出て來た無産階級詩文人の先輩として保護者として、それ等の作品をあつめ、その詩文集の出版に骨折つたのであるが、この點では千九百十七年の革命以後にあらはれた無産階級文學に對してもまた同樣にさまざまの世話を惜しまなかつたので

ある。この時期は、勿論革命の準備時代であるが、しかし勞働運動全體の上から見ても、無産階級文學運動の上から見ても、歴史上重要な意味をもつてゐる。この時期に於ける無産階級文學は、サモブイトニクがその詩の中で言つてゐるやうに、最初の「よろこびの呼吸」に過ぎず、「最初の青みの發芽」に過ぎないのであるが、しかも、それはやがて來るべきものの出立點であつた。無産階級文學が十分な發達成長をしはじめたのは、千九百十七年の十月革命以後、無産階級が支配階級となつてからのことである。無産階級藝術は、ひろく現實生活の範圍に於いて勞働者階級がその創造力を活動せしめるやうになつて後にはじめて出現する。而して現實生活の範圍に於いて勞働者階級の創造力の活動を見るのは、彼等が獨立して生活を建設創造し、社會生活の主人公となつたときに於いてはじめて可能である。

三

ロシヤに於ける無産階級文學の著しい成長發達は、十月革命後に於いてはじめてこれを見ることが出來る。十月革命以後、レニングラード、モスクワ、その他地方の都會に於けるプロレトクリト（無産階級文化本部）を中心として集つた無産階級詩文人の數は少なからぬものであつた。キリロフ、ゲラシモフ、オブラドーキッチ、カージン、ポモルズキー、ベスサリコ、ロドフなどもまたその中に在つた。千九百二十年には、プロレトクリトの詩人の大部分はそれから脱退して『クーズニッツァ』の一團を形づくり、これが無産階級文學の精鋭をすぐつてその中心となるに至つた。内亂時代乃至戰時共産主義時代の無産階級文學といへば、この一團をほかにしては殆ど存在しなかつたと言つてよい。この圏外に立つものは、煽動詩人デミヤン・ベードヌイただ一人であつた。

この『クーズニッツァ』を中心とする無産階級詩人の特色は、多くは抽象的であつて、具體的に現實を示すことを考へなかつたやうである。絕叫的な言葉で、大づかみに、鮮明に、革命の大事業の成就をうたひ、それに伴ふ熱情興奮をうたひ、革命の世界的意義、解放への熱狂を、概括的に、象徴的に、宇宙的な大規模で聲高くうたふといふ風であつた。この時代は、ロシヤ革命にとつて、興奮と混亂との時代であつて、落ちついて具體的に描寫し細敍してゐるいとまのないやうな時代であつた。抽象的で、宇宙的な大規模なところが、この時代の特色であつた。宇宙の革命とか世界の革命とかいふやうなことが頻りに言はれ、

火星の運河のほとりに
世界のコムミュンの宮殿を建てよう。

といふやうな調子であつた。

われ等は「勞働」の無數の凄い群だ、
われ等は海と大洋と大陸との廣さを征服
した、
人工の太陽の光を以てわれ等は都會を
燒いた、
反亂の猛火によつてわれ等の誇らしい
魂は燃える。

われ等は嵐の如く熱烈なる陶醉の手中に
ある、
人をしてわれ等に叫ばしめよ――汝等
は美の斬罪人だと。
われ等は「明日」の名によつて――ラファ
エルを燒かう、
博物館を毀さう、藝術の花を踏みにじ
らう。

われ等は壓迫する傳統の重荷を投げすてて

た。
生命なき智慧の妄想を蹴散らした、
「未來」の明るい王國での少女は、
ミロのギナスよりも美しからう。
涙はわれ等の目に乾き、やさしさは殺された、
草や春の花のかをりをわれ等は忘れた、
われ等はスティームの力やダイナマイトの强さを愛する、
號笛の歌や輪車や軸の運動を愛する。
金屬と同化し、機械と心は融け合ひ、
われ等はためいきをついて空をあこがれることは忘れてしまつた、
われ等の望むところは、地上の一切が滿腹してゐて、
パンを求めてうめき泣く聲のきこえなくなることだ。
おお、唯美派の詩人たち、偉大なハ*ムをのろへ、
われ等の踵の下の過去の破片に接吻せよ、
毀された殿堂の廢墟を涙を以て洗へ、
われ等は自由だ、われ等は大膽だ、われ等は異なる美を呼吸してゐるのだ。
われ等の腕の筋肉は巨大な勞働に飢ゑてゐる、
集團の胸は創造の慾に燃えてゐる、
すばらしい蜜で蜂房を上まで充たさう、
われ等の遊星のために別のかがやかしい軌道を見つけよう。
われ等は生活を愛する、その陶醉せしめる嵐のやうな歡喜を、
物凄い鬪ひで、苦みで、われ等の精神は鍛へられてゐる、
一切がわれ等だ、一切の中にわれ等がある、われ等は焰であり征服する光だ、
自ら神性で、審判者で、法である。

キリロフの『われ等』と題するこの詩こそは、この時期を代表する無産階級詩の特色をあざやかに示してゐる。この時代は前にも言ふやうに革命の嵐と混亂との時代であつた。この時期に於いてたとひ具體的に事實を細敍したものが出ても、それをゆつくりとは讀んでゐられないやうな時期であつた。また實際さういふものを書いてはゐられなかつた。この詩の示すやうな興奮を以て、概括的に、抽象的に、世界的宇宙的に革命の力を讃へる時期であつた。われ等の遊星即ち地球のために、別に新らしい軌道を見出さうとするまでに宇宙的革命的の興奮のうちに在つた。

四

しかしこの興奮の時期は久しくは續かなかつた。千九百二十一年とともに革命の新陣營は布かれ、新經濟政策が實施せられることになつた。この新經濟政策が無産階級文學に及ぼした影響は悲劇的であつた。赫々として燃えるやうな、廣大な都會の、鳴りひびく雜音の渦卷の中で、「やがて來るよろこばしい時代の歌」耳にしたキリロフが、今はその同じ都會に向つて、「永久に魔法にかけられた、みじめな無禮講騷ぎ」と呼び、同じく無産階級詩人オブラドーヰッチは、

かつては燃えさかりし心の上に、
半ば消えたる蠟燭の餘燼。
誰ぞかしこに、道なき霧の中に、
わが滅亡を叫ぶは誰ぞ。

と歌つたりしてゐる。これ等はいづれも、新經濟政策とともに無產階級文學の上に來たところの危機を語るものであつた。內亂や戰時共產主義時代に於いては、一切の苦痛や窮乏に拘らず、強い興奮があつた、緊張があり燃燒があつた。さまざまの危險や飢ゑや寒さの中に在つて、人々は世界革命の大使命を負うて立つ誇りを持つてゐた。しかし今や革命は新らしい時期に入り、長い、退屈な、質朴な、困難な、しかしながら重要な時期が始まつて來た。かがやきのない、目のさめるやうなところのない、灰色の日常生活が始まつて來た。詩人はこの平凡單調な生活のうちに、更に深く革命の意味を探り求めなければならなかつたのである。しかしながらこれは、革命の最初の興奮の日に於いて、ロマンティックな感激を以て、宇宙的規模を以て、抽象的に熱情的に革命をうたふよりも、はるかに困難な複雜な仕事でなければならない。この革命の轉機に際して、革命が示した新容に對して意氣沮喪したものはキリロフ、ゲラーシモフ、オブラドーキッチその他の詩人であつた。彼等はこの革命の轉機に際して、革命の底に潛める深い意味を探り來ることが出來なかつたのである。革命の新らしい陣營が立てられるとともに、文學の方面に於いても、おのづから新陣營が築かれなければならないことを、新らしい文學上の態度が、立て直されなければならないことを、彼等は明らかに認めることが出來なかつたのである。そこで、一方では依然として革命の興奮をうたひ、抽象的な熱情の表白を試みようとする立場にゐながら、一方では內心の眞實をいつはらずに言はうとすればするほど、その本當の心持は、深い失望と疲勞との感じを包みかくしきれないことになつて來たのである。そこに蔽ひがたい矛盾がある。革命の初期に於いては、一般的な革命、興奮と、詩人個々の內心の心持とは全く同一性質のものであつて、何の疑ひもなくその間に一致があつた。この二つはおのづから融合して統一ある熱情の詩となつた。それだから、その一般的な革命の興奮は、たとひ抽象的な概括的なものではあつても、そこに一つの氣分のまとまりがあり、中心生命があつた。今は、內心の眞實な心持に失望と疲勞とを感じながら、つとめて革命の感激をうたはうとする努力が感ぜられた。外界には、もう革命の初期に於けるやうな一般の興奮は見られなくなつた。その感激はこれをつとめて探し見出して來なければならない。そしてその感激を自分の內心と一致させなくてはならない。しかしこの事は、無產階級詩人の多くにとつて、極めて困難であつた。そこで一方では、この矛盾不一致を包みきれないで、內心の眞實卽ち失望の心持をうたはずにゐられなくなるか、それでなければ、强ひて依然として今までのままの調子を繰り返してゐなければならないことになる。これが新經濟政策の實施に伴ふところの無產階級文學の危機と稱せられてゐるものである。しかしてこの無產階級文學の危機こそは、それ以後のロシヤ文壇に於いて見られるところの不健全な狀態をつくり出す重要な原因とはなつたのである。無產階級詩人の多くが、この革命の新らしい地盤に布かれた際に、依然革命初期からの抽象的な宇宙的な興奮の高處にとどまつて、新らしい革命の時期の要求を理解し、新らしい社會生活の方法に適應して、文學のうへにも新らしい態度手法を立てなほさうとし得なかつた結果は、いはゆる、革命の隨伴者乃至「革命の道づれ」と稱せられるところの一派を、文壇の中心へ推し出すやうなことになつたのである。いはゆる「革命の道づれ」の一派の詩文人は、その根本の現實觀に於いて無產階級的でなく、小ブルジョワ的であつて、日本へ

來て文學の超階級性を說いて行つたピリニャクなどもその中の一人である。しかしながらこの一派は、現實の生活を具體的に描寫する能力技術に於いては、はるかに宇宙的興奮の無產階級詩文人たちにすぐれてゐるのである。無產階級的立場の現實觀を把持しない「革命の道づれ」が、この危機に於いて文壇の中心に出て來たといふことについては、この危機を救うて、無產階級詩人たちをして革命の新陣地へ移らしめるための適當な指導と忠告とを與へなかつたといふ點から、一も二もなく「革命の道づれ」の一派を保護し推賞したといふ點から、ヲロンスキーその他の批評家などが文壇の左翼からの攻擊の的となつてゐるのである。しかし、このいはゆる危機に於いて、かやうな情勢を示すやうになつたのは、必ずしもそれだけの簡單な原因によるとのみは考へられない。初期の無產階級文學にあらはれ、個々の詩文人が、前に述べたやうに失望と疲勞との境に落ちて行つたといふ事實はあるにもせよ、革命とともに成長して來た無產階級文學そのものの道筋は、自然の進行をしてゐたと見られぬではない。新經濟政策の實施せられた現實は、革命の感激を冷却せしめるに足るものを十分にもつてゐた。それが已むを得ない戰術であるにもせよ、宇宙的革命などを歌つてはゐられない革命過程の困難な現實の前に、直面せしめられたのは事實である。革命の過程は、このいはゆる危機によつて、抽象的な宇宙的なロマンティックな興奮を通り拔けふるひ落して、一層現實に切實な傾向へとすすんで行かねばならなかつたのである。つまり無產階級文學が、その將來に於いて、一層現實に切實になるためには、この「革命の道づれ」の出現は、避くべからざるものでもあれば、そのために必要な要素――リヤリズムの傾向を、將來の無產階級文學のために提供するものでもあつたと言ひ得るのである。

五

前からも述べて來たやうに、千九百十七年から二十年までを革命後の無產階級文學の第一期とすると、千九百二十一年は無產階級文學のための危機として第二期を劃し、千九百二十二年からは卽ちそれの第三期に入るものと見られる。十月革命以後、この第三期に至るまでの數年の間に、無產階級文學の力、少なくとも、その將來の力となるべきものがいろいろの方面にその萌芽を示して來た。ロシヤ共產黨の中央機關新聞を中心として各地の勞働者の間に設けられたいはゆるラブコール（勞働者通信員の意）の運動の如きもその一つであらう。ラブコールは各地の勞働者でその工場の生活を中心として通信を寄稿するものを言ふのであるが、それが共產黨の立場からの一つの目付役のやうなものであるところから、一方では一種のスパイだといふやうにも見られ、ラブコールの通信で非違を指摘せられたりした側からは、いろいろの壓迫をそのラブコールに加へるやうなこともあり、そのために殺人事件さへ起つたこともあるくらゐである。しかしとにかく、今まで文筆を取るやうなことのあまりなかつた勞働者が、自分に近い周圍の生活について、眞に筆にしなければならぬとする事實について書くのであるから、そのうちには一種の奪ふべからざる力があらはれてゐるものも少なくない。黨でも政府でもこのラブコールの使命はなかなか重要と見てゐて、殊に勞働者の間から生れて來る將來の文學の下地がここに在ることを認めてゐる。從つて、それはまだ文學を生み出すまでにはなつてゐないのであるが、それでも無產階級文學の陣營からは、この一群もまた新らしい力として考へられてゐるのである。そのラブコ

それはとにかく、新らしい無產階級文學の團體としては、『モロダヤ・グワルディヤ』（若い衛兵）、『ラボーチャヤ・ウェスナ』（勞働者の春）などが成り立ち、千九百二十二年の十一月七日には、自ら無產階級文學の最前衛を以て任ずるところの『オクチャーブリ』（十月）の一派が組織せられるに至つた。これ等の文學團體を構成する要素は、その年齡から言つてもいづれも大抵その當時に於いて二十歲前後の青年であつて、三十歲に達してゐたものは極めて少なかつたやうに見受けられる。無產階級文學の第一期を支配した『クーズニッツァ』の一派が、革命の抽象的宇宙的興奮を熱叫したものであるとし、第二期の危機がその興奮と新經濟政策の現實との衝突から生じたものであるとすると、この第三期は、やうやくその危機を脫して、新らしい現實の世界へ踏み出したものだと言へる。革命を如實に見せよ、抽象的な革命の頌歌や賦によつてでなく、現實の描寫によつて、この偉大な時代の姿を示せ、十月革命を肉と血とを備へた具體的なものとして示せ、一般的な「勞働者」でなく、花文字で始まつてゐる「勞働者」でなく、具體的な何の某といふ勞働者の姿を示せ、生きてゐる革命人の姿を示せ——これが『十月』一派の標語であつた。この一派の青年詩人ベズィミャンスキーが、『クーズニッツァ』の詩人たちに」と題する詩で、「天體を泥の塊のやうに投げるのもよからう、電氣の詩（ゲラーシモフを暗に指す）で宇宙を讚へるのもよからう。どこかの郡の林業事務主任に、未來の光が潜んでゐることを觀たらよからう。赤衛軍が眼にとまらないなどは滑稽だ。十月革命の嵐の電光が見えないなどは滑稽だ。革命の名の下にいろはを習つてゐる兵營の赤衛兵でも讚めて歌つたらよからう。犬の詩を何百書くのも御隨意だが、生きた人間のことを歌つた詩を、たつた一つでも見せてほしい」といふやうな意味を歌つてゐるのは、單にこの『十月』一派の宣言詩と見るべきばかりでなく、ひろくこの時期に於ける無產階級文學の精神を表白したものであると見てよいのである。

而してこの精神は、火星の運河のほとりに立てる世界共產の宮殿などを瞑想することによつて、世界的宇宙革命の興奮を示すといふやうなことではなく、「一つ一つの些事の裏に世界革命を見出すすべをわきまへてゐるものこそ、その人のみ吾等の時代よりも小ならず、その人のみ吾等と往く道を同じうするもの」とする精神なのであつた。新經濟政策の實施が、革命の興奮と現實との矛盾を開示して、無產階級にとつての一つの危機を形づくつたとすれば、それだけに、その重要な轉機となつた新經濟政策とい、革命の全體は、つまらない些細なことのやうに見える凡ての事實（たとへば靴とか織物とかいふやうな製造工業の品物の値段馬鹿に高くて、農業の生產品が馬鹿に安くなつてしまひ、その間の値のひらきが大きいといふことなど）の中に、世界革命の重要緊密な意義が含まれてゐるのだといふことを了解しなくてはならなかつたのである。これ等の些事のうちに、眞に世界革命とつながるところの、無產階級革命の悲痛も情熱も忍苦も自制も、悉く深くこもつてゐるのであるといふことを了解しなければならなかつたのである。社會生活に於けるこの轉回は、無產階級文學にとつても自ら新らしい問題を提供するやうになつた。革命の嵐の時期に於いては、內外に革命の敵が逼り、事實鐵劍を執つて戰はねばならなかつたやうな時に於いては、文學はおのづから力を讚美せざるを得なかつた。詩は何よりも戰の行進曲であらねばならなかつた。しかして今は周圍の資本主義的國家に取圍まれて、內を養ひ固めて行かうと

いふ時となつた今では、この現實の生活のあらゆる些事が、いかに大革命と直接間接の關係を持つてゐるか、いかにその些事の裏に多くの革命的悲痛と苦悶とがつゝまれてゐるか、――これ等の消息を語らなければならなかつたのである。

革命を具體的に表現するための第一の題材となつたのは、やつと通り過ぎて來たばかりの、まだ記憶に新らしい內亂時代の生活である。これを題材としたものに、リベディンスキーの『一週間』があり、セラフィモーキッチの『鐵の流れ』がある。この二篇は、無產階級文學の中、小說の方面での重要な作品として推稱せられてゐるものである。セラフィモーキッチは革命以前から久しく筆を執つてゐた老作家であるが、リベディンスキーは、この一篇によつて、はじめて文壇に出た青年作家である。それ等についでは、ファデーエフの『流れに逆つて』、グラトコフの『火の馬』、シューピンの諸短篇など、いづれも無產階級の立場から、市民戰を中心にした革命の現實を描き示すところの小說である。無產階級文學の初期の作品が、殆どすべて詩歌であり、少なくともそれを中心としたものであつたのに、この時期にいたつては漸く小說の方面にすぐれた作品の出て來るやうになつたといふ事實も、主觀的な興奮から客觀的な觀察への轉回を示すものである。ピリニャクの諸作にも、この市民戰時代の斷片的事實を取扱つたものがあるが、それ等はその立場の點から、無產階級文學に屬するものといふことは出來ない。詩歌の方面でも、ベズイミャンスキーの『コムソモリヤ』やアレクサンドローフスキーなどの市民戰を題材とした敍事詩、ジャロフ、ドローニンなどの抒情詩が出で、新經濟政策の實施によつて一時意氣沮喪した形のあつた多くの無產階級詩人も再び陣容を立て直した觀がある。ゲラーシモフやキリロフは、新經濟政策の打擊で革命に失望した側の代表的な詩人であるが、オブラドーキッチの如きは再び「まどろまぬ哨兵、燃えかがやく燈明臺」として、革命を擁護するものとなつた。同じ『クーズニッツァ』の詩人ポレターエフの如きも、最初に「鐵の如き不易の義務」の冷靜な意識を感ずる革命の戰士であつたのだが、一時はやはり個人主義的孤立の世界に立てこもらうとして、更に新らしく失望の境から出て來たものである。實際無產階級文學の危機といはれた頃には、革命に失望して、自殺するものもあつた。詩人ニコライ・クズネツォフの如きもその一人であつた。ポレーターエフは、「自分はコーリャ・クズネツォフのやうに首をつることは出來ない。……ここに、この岸に、火は燃え、薔薇はかをつてゐるのを知つてゐるからである。……自分は強い葡萄酒を愛する如くに人生を愛する。去年の落葉の匂ひを愛する如くに人生を愛する。麻布もわが喉を緊めず、銃の發射も血を以て煙らすことはない。……ランプよ消え失せよ、十月の日が、われ等の七年の記念祝日が、曙けようとしてゐる」と言つて、いはゆる危機を乘りこえたもののよろこびを歌つてゐる。

具體的な革命の過程の事實のうちに、生きてゐる人間の個々の生活のうちに、革命の眞の意味を、そのよろこびを、その悲痛な苦悶を見出さうとする傾向は、この指標を新たに掲げてあらはれて來たものと、この指標に從つてその道を立て直して來たものと、その二つをあはせて、いはゆる第三期の無產階級文學を形づくるに至つた。前からあげて來た小說家詩人のほかに、詩人としてはサンニコフ、小說家としてはリャシュコなどをも忘れてはならない。小說の方面に多くのすぐれた作家が出て來たこともこの時期の特色である。

六

危機を乘り越えた時代の無產階級文學が、主として軍事共產主義時代、市民戰爭時代の生活を題材としたと言へるなら、無產階級文學がその題材として取扱ふべき範圍は、決してそれに限られてはゐなかつたのである。たとへば、市民戰爭時代に於ける戰線に立つ勞働者などの生活は多少描かれたにしても、その日常の生活、工場に於ける乃至家庭に於ける勞働者の生活で描いたものは、まだあまり多くは出てゐなかつた。この方面の作品が出はじめたのは、最近二三年の前からのことである。若い勞働者プラトーシュキンの書いた『新生活』などは、その結構その他藝術上の幾多の缺陷に拘らず、勞働者の生活を主題として、その新舊生活の爭鬪や婦人の解放のための闘ひなどを取り入れてゐる點で、ともかくも一つの先驅者的な位地を與へられてよいものだと言はれてゐる。そのほかニキーフヲロフとかチェトウェルニコフとかのその方面の作品もあるやうだが、就中この種のものとして近年のサヰェート文壇で推賞せられたのは、グラトコフの『セメント』であつた。この作は工場に於ける勞働者の生活を主題とした新興無產階級文學の代表的なものの一つとしてあげられる。しかしながら、この方面を主題とした作品は、まだまだ甚だ少ない。ロシヤ無產階級文學は、將來この方面に於いて生面を開くであらう。勞働者の生活と並んで、もしくはそれに次いで無產階級文學が見のがすことの出來ないのは、村落の生活である。無產階級前衞の立場から觀た現代ロシヤの村落農民の生活である。この方面に於いても、いままでに出たものは甚だ少ない。小說の方面で望みを囑せられてゐた農民出身のネウェーロフには、幾多の佳作があるが、惜しいことに中途で歿した。ネウェーロフ記念の農民文學者の會といふものも出來てゐて、その中にはヤ・ヲイその他の小說家もゐるが、まだこれと言ふ作品は出てゐない。現代のロシヤの農村では、新舊思想の衝突が頗る烈しく、昔からのムジークと新社會の空氣に感染してゐる青年共產黨員肌の若者との間には、何かにつけて爭鬪があり、政府の農民懷柔政策の影響などもあつて、極めてややこしい關係を形づくつてゐるものと見られる。農民文學者の間には、勿論無產階級の立場から農村生活を觀るといふことに一致してゐるにしても、實際は無產階級の思想觀念と相反する感情などがはひつて來やすい。農村の暗黑面と新生活の萌芽と、それ等の葛藤乃至爭鬪を描く事が、たしかにこれからのロシヤ無產階級文學の一つの仕事であるであらう。そのほか、無產階級革命後の社會に於ける知識階級、新經濟政策實施後にあらはれて來たいはゆるネップマン(新經濟政策成金)、僧侶、小市民などの生活も、これを無產階級の立場から觀察すれば、たしかに興味ある題材であるに相違ない。更にまた、革命史上の事蹟を題材としてこれを無產階級の立場から敍述した一種の歷史小說に對する要求も提出せられてゐる。これ等の方面ではいづれもまだこれといふほどのものは出てゐない。而して、これ等と相並んで、無產階級文學が、自己の階級の必要と興味とに生きるかぎり、いはゆる宣傳的な文學の製作を否定すべきでないといふ主張要求も、サヰェート文壇の最左翼の批評家たちによつて持ち出されてゐる。たとへば航空事業のための宣傳が行はれたときに、無產階級詩人の大部分はこれに共鳴して、そのための詩作を發表してその事業を宣傳することにつとめたのであるが、それ等の詩歌は必ずしも詩としてそれ等の詩人の平生の作よりも劣るものではなかつたと言つて、宣傳と文學との一致

が單に革命のために必要であるばかりでなく、十分可能であることを證明したものであるとさへ言はれてゐる。この考へかたに對しては勿論反對の立場を取るものも少なくなく、左右兩翼の間にさまざまの分派もあつて、論爭は今日に至るもなかなか盡きない狀態に有る。

無産階級文學に關する論爭は、いろいろの方面の問題に亙つて行はれて來たのであるが、それ等の中で實際上切實な問題として考へられてゐるのは、形式と內容との關係の問題である。從つてまた文學上前時代の遺產の繼承の問題である。新らしい生活內容が新らしい形式に盛られなければならないのはもちろんとして、その新らしい形式は何から作り出されるかの問題である。何もないところから新らしい形式を作り出すことの出來ないのは勿論である。そこには何等かの下地がなくてはならない、材料がなくてはならない。その下地となり材料となるものは、前々からの時代の、違つた階級の詩文人の手によつて作られた作品にほかならない。而してそれを詳しく言へば、それ等の作品の形式は、それぞれの時代のさまざまの條件に從つて、おのおの違つたものであるとともに、それぞれ前々の時代からの影響を、多かれ少なかれ受け入れてゐるものに相違ない。無産階級文學は、その新らしい形式を作るにあたつて、これ等の前時代の作品からなにものをも受け取らないといふわけには行かないのである。それ等は多かれ少なかれ、無産階級文學にとつて必要であると言はねばならない。

およそ一つの階級なり社會的集團なりが、新たに勢力の得ようとして起つて來る場合にはその若い新興の階級なり社會的集團なりの間から生れて來るところの文學は、一般に、普通に言ふやうな意味で形式よりも內容が勝つといふ傾きになることは已むを得ない結果である。このことはロシヤ文學の過去について見ても分る。十八世紀の前半期から始まつたところの貴族文學は、十九世紀の初めプーシュキンに至つて完成の域に達し、プーシュキン以後は貴族文學から知識階級の文學への遷り行きを示すと言はれてゐるが、その貴族文學も、その初期に於いてはポーランド文學の形式の模倣に過ぎなかつた。けれどもそれが貴族文學の出立點となつて發達して行つたのは事實である。無産階級文學の場合に於いてもほぼ同じやうなことが考へられる。無産階級文學は、まだやつとその出立點を踏み出したばかりのところである。今日の程度に於ける無産階級文學に、就中その形式の上に、多くの前時代の模倣があり、それの束縛影響から脱してゐないであらうことは、寧ろ當り前のことでもあり、已むを得ないことでもある。詩歌の方面で、小說の方面で、無産階級文學が獨得の形式風格を備へて來るのは、これから後のことでなければならない。無産階級文學が前時代の文學から受け取るべきものは、前時代の階級なり社會的集團なりがまだ若くて、健康で、登り坂に向はうとするやうな時期に於いて持つてゐた處の形式であるべきであらう。この形式の問題は、第一に文學の種目の問題にも觸れて來る。たとへばロシヤ十八世紀の貴族文學の種目が專ら頌歌といふ形の抒情詩や諷刺詩であつたといふ風に、無産階級文學の種目は何であるかといふ問題である。かりに文學上の種目を世間並に敍事詩類、抒情詩類、戲曲類の三つに分けるとすると、無産階級文學はこれ等の種目とどういふ關係に立つかといふことが問題になつて來る。前から述べて來た事實について見ると、革命の初期卽ち軍事共產主義時代は、詩人の主觀的な興奮をのみ主として歌つた時期であつて、その時代の無産階級文學の中心の種目は抒情詩であつた。それに次いで、具

體的に生きた人間の生活を表現することを標榜するやうになつてからは、無產階級文學には小說の作品が多くあらはれるやうになつて來た。卽ち敍事詩類の方向へと遷つて來たのである。詩の方面で物語を含んでゐる言葉通りの敍事詩、及び小說などは、いはゆる危機以後に出て來たものである。

サヰエート・ロシヤに於ける批評家のうちマルクス派の立場を取るもののほかに、ともかくも有力な一つの傾向を代表する一派は、いはゆる形式派である。この派の批評家の說くところのうちに、いはゆる文學種目の崩壞といふ一項目がある。現代文學の種目が崩壞して、今までのやうな一つの中心ある統一を保つことが出來なくなつて來たといふのである。およそもし小說といふ一つの種目が、文藝復興期のブルジョワジーの勃興とともに發達したものであつて、最初はばらばらの短篇であつたものが一つに繋ぎあはされ、それが段々一つに統一せられて、長篇小說となるに至つた（ボッカチオの『十日物語』からセルヴンテスの『ドン・キホーテ』などを經て近代の長篇への發達）と言ひ得るなら、今やブルジョワジーの崩壞の氣運とともに、その小說の形式もまたばらばらに崩れようとする兆候を示して來てゐるのではないか。卽ち形式派の批評家の言ふやうに、文學上の目（その一つである小說）の形が崩れて、結構布置の統一が失はれ、ばらばらのものとならうとする兆候が、かのピリニヤクの小說の如きものとなつて現はれてゐると言へるであらう。セルヴンテスの『ドン・キホーテ』はばらばらながら求心的であつたが、ピリニヤクの作品は同じくばらばらでも遠心的である。無產階級文學は、その新らしい形式や種目をつくり出すためには、かやうな崩壞期に在るところの前時代の文學から學ぶべきではなくして、たとひ、それは年代的には遠くとも、新らしく興らうとした時期に於ける前代の文學の特徵の中から取つて來べきであるといふのが、この問題に對する定說と考へられてゐる。たとへば同じ無產階級文學のうちでも、しかも同一の作者の手に成つた作品でありながら、リベディンスキーの『一週間』と、同じ作者の『明日』とを比べて見ると、前者が作品として一層すぐれてゐるといふ理由は、やはり主として前者の構造が求心的統一的であつて、後者が遠心的、斷片的である結果であるとさへ考へられてゐる。この考へ方からすると、たとへば小說の方面では、無產階級的文學の形式は寧ろ古典的な文學形式の精神を取り入れようとするものだと言つてよいのである。この事實は、詩の方面に於いても見受けられる。頹廢的崩壞的傾向を有する詩人が、たとへばイマジニストの一派の如きが、事物の形象をのみ重んじ、言葉の思想的方面は哲學の仕事であり、音響的方面は音樂者の仕事であつて、詩人の仕事とすべきはただその形象の方面のみである、詩歌は思想なく音樂なき「形象の目錄」であつてもよい、それでもその詩は藝術的であり得る、いかに思想的に眞實で深くても、音樂にすぐれてゐても、形象に乏しいものは詩であり得ないと主張する如きもその一つである。未來派の一派の詩人が、詩の音樂的方面をのみ重んじて、その思想とか意味とかは全くかへりみず、全く無意味な囈語としか聞えないやうな音の綴りあはせを以て詩とする如きもその一つである。これ等はいづれも詩を構成するさまざまの要素を統一して一つの中心にあつめる力を失つたものである。而してたしかにブルジョワジーの崩壞期に生ずる遠心的傾向のあらはれであると見られる。無產階級文學は、散文の方面でも詩の方面でも、これと全く相反する傾向のものでなくてはならない。無產階級文學は新らし

い藝術上の統一でなくてはならない。思想も感情、形象も音樂も、あらゆる藝術上の要素が緊密に統一せられたものでなくてはならない。直ぐ前の崩壞期の文學が、形式的要素の、しかも形象とか音響とかいふやうな一部分だけを特に文學の（上の例で見られるやうに詩歌の）唯一の中心的要素であるかのやうに考へてゐたのに反して、無產階級文學は、事實に於いては前にも言つたやうに、寧ろ形式よりも内容が勝つものであるにしても、その志すところは、原則として、それ等兩面の集中的統一にあらねばなるまい。無產階級派の若い詩人たちに古典的なプーシュキンに就いて學ばうとするものの多いのも、この意味から考へて尤もな話である。

附記、以上は千九百　十五年の夏頃までの事實によつたものである。革命後に新らしく出たサキエート・ロシヤの詩人小說家として、日本に傳へられてゐる人々の名前は少なくないやうであるが、それ等の人々についてこの講話のうちに少しも言ひおよばなかつたのがあるとすれば、それはそれ等の人々が、正しい意味では無產階級派の文學以外に屬すべきものだからである。無產階級文學については、ロシヤの文壇でも、今日に至るまでいろいろの議論がつきない。それ等の議論にもおのづから發達があるのだが、そのうちの主要な題目については、大正十五年一月の『中央公論』に『無產階級文學評論』といふ標題で書き、それを『無產階級文學の諸問題』といふ標題にあらためて、大正十五年十一月新潮社刊行の、『文學評論』の中へ收めて置いた。この講話の含む一部分（殊に初めの方）の材料は、その論文の中から採つて來た。同一の事實を同じ程度の詳しさで同一人の筆者が書く場合、それは已むを得ない事である。讀者がこの點を諒として、前記の論文をも參照して下さらば好都合である。

*この講話の百九十二頁（本集の第四八六頁）にある「ハム」といふのは、聖書の傳說にあるノアの洪水で知られてゐるノアの、三人の息子のうちの一人の名であるが、ここでは無智な卑しい粗野な人間といふやうな意味で用ひてある。即ちこの詩の中でいふところの「勞働の無數の物凄い群」を指す。

奇蹟

昔から宗教上の傳說には必ず奇蹟がある。私はまだその傳說の凡てを會得することが出來ない。しかし全く作りごとでない限り、眞實起つたことである限り、その悉くが極めて自然な自由な出來事で、何の無理もなくすなほに起つた事であるとしか思はれない。私はとにかく奇蹟を信ずることが出來るやうな氣がする。そして奇蹟が極めて自然な自由な無理のないすなほな出來事であると信ずることが出來さへすれば、同時に自分の生活が非常に自由な自然な無理のない幸福なものになるに違ひないと思ふ。

私の會得し得る限りに於いてすら、奇蹟を自然なことだと思ひ得たときのうれしさは到底言葉には言へないほどである。この幸福は靜かに流れ入つて自分の魂を滿ち溢れしめるやうな感じがする。

（『南の窓にて』より）

年譜

明治十七年（申歳）

二月二十日（戸籍上は中學に入學の際訂正して十六年二月二十日）、愛媛縣越智郡波止濱村に生る。伸と命名。家は代々地主にして庄屋を勤む。父は良、母は節。弟妹八人あり。

土地一般に基督教の勢力盛にして、母方の實家は悉く基督教徒なり。殊に母の祖父は本來漢學者なりしも、夙に新思想を懷抱し、幼時此の祖父の影響を受けたる事多し。

明治二十年

幼稚園に通ふ。

明治二十一年

頻りに學校へ入らん事を父に強請し、父當時村長たりしを以て未だ學齡に達せざりしも、變則に波止濱小學校に入學を許さる。

明治二十三年

一家を擧げて松山市に移り、外側小學校に轉校す。

明治二十五年

高等小學校に通ふ頃、郡中町にて醫を營める伯父の家に一時寄寓し、後實家に歸る。

明治二十八年

松山中學の前身なる愛媛縣尋常中學校に入學す。入學の際年齡足らざりしも、父の斡旋により戸籍面を訂正したるなり。當時夏目漱石、同校の上級に教鞭を執りゐたりしが、教へを受くる機會なかりき。

明治三十三年

中學卒業、四月下旬に上京して中學の先輩、札幌農學校出身の菅菊太郎の許に同居して早稻田大學の前身、東京專門學校に入學せしも、十月末より脚氣を病みて休學、歸省す。

翌年七月迄、多度津小學校に教鞭を執る。當時蒲原有明の編輯せる雜誌「新聲」に天弦と號して詩作を投ず。

明治三十四年

十月、再度上京して二箇月餘國民英學會に通學。此の頃より家運衰へ、東洋協會發行の會報を編輯し、其の報酬を以て學費の補助とせり。

明治三十五年

四月、改めて早稻田大學文科豫科に入學。同級の友人相馬御風、小杉德等と「如月會」なる團體を造り、文學研究にいそしむ。坪內逍遙、金子筑水等の教へを受く。

明治三十八年

五月、母を喪ふ。秋、島村抱月歐洲留學より歸りて早稻田の教壇に立つ。『テニスンの詩』を隆文館より出版す。

明治三十九年

一月、「早稻田文學」復活し、六月、島村抱月の慫慂にて同誌の記者となり、月手當十五圓を給せらる。七月、早稻田大學を卒業す。

明治四十年

四月、早稻田大學豫科講師となる。

明治四十三年

二月、和歌山縣人にして早大哲學科出身の桂井當之助の妹、朝子と結婚す。此の年より早稻田大學文學部本科教授をも兼ぬ。

大正二年

二月、長男晨太郎を擧ぐ。『評論集』生の要求と文學』を南北社より出版。

大正三年

ドストエフスキイの『死人の家』の飜譯を博文

館より出版。

大正四年

五月、長女道子生る。『ドン・キホーテ』を植竹書院より、『無限の道』を日月社より、エマスン『自然論』の譯を南北社より出版す。

十月、早稻田大學留學生としてロシアに赴く。初めペテログラードにありしが、後モスクワに移り、國立大學、及び市立の國民大學に入學して近代ロシア文學の研究をなす。國立大學教授サクーリン、國民大學教授アイヘンワリドに負ふところ多し。

大正六年

三月、ロシア革命勃發し、初めの一週間は肩のすく程の愉快を覺えたりと自ら語れり。

大正七年

四月、歸朝、直ちに母校の教壇に立つ。

大正八年

五月、『ロシアの現實』を至文堂より、『思想の勝利』を天佑社より、七月『草の芽』を南北社より出版。

大正九年

四月、早稻田大學文學部にロシア文學科新設され、其の主任教授となり、後文學部長に進む。

大正十一年

九月、『文藝教育論』を文教書院より出版。

大正十三年

六月、早稻田大學教授の職を退き、再度ロシアに遊ぶ。

大正十四年

十月、歸朝して專ら文藝批評の筆を執る。其の評論は夙に斯壇に重きをなし、殊に後期の述作に於ては、日本文壇のプロレタリア運動に理論的根據を與ふる事に主として力を盡せり。

昭和二年

『文藝評論』を新潮社より出版。

昭和三年

二月、偏頭痛治療のため神田佐野病院に入院中、腦溢血を起して三月五日死去。享年四十五。死後『露西亞文學研究』第一書房より出版さる。

信愛の力

自由解放といふことを消極的破壊的の一面にのみ偏つて考へてはならぬ。自由解放は、深く信愛の心の力によつてのみ得られる。他に對しても、また勿論自分自身に就いても。信愛はある人には甚だしい結縛とも見られることがあらう。しかしその謂はゆる甚だしい結縛と、無邊空濶な自由とが不思議にも、而してまた極めて自然にも、渾融和一せるところに信愛の力は溢れて來る。この心の境に至ることが、人が神になるといふことである。この心の境に至つて、すべての不思議、すべての奇蹟、またすべての神秘は、最も平明な自然な現實であるのだ。この境に至り得るとは、人間に許された最高無上の幸福であるのだ。

ノラが『人形の家』で求めたものもこれに外ならない。エリーダが『海の夫人』で求めたものもこれに外ならない。ただノラはそれを得なかつたが、エリーダはその夫のワングルの愛によつて與へられた。『海の夫人』は眞の意味のコメディーの發端である。イブセンも決して偏へに偶像破壊者ではなかつた。

（『南の窓にて』より）

吉江孤雁集

双の触手は大空を探って
全身で己の行跡を
書きとむる蝸牛

吉江孤雁

緑雲

槻の森

槻の杜のなかは次第に暗くなつて來た。

今までは、それでも折々西風が烈しく野を吹いて此杜に衝突つて來たが、いつかそれもやんでしまつて、小枝のさき一つ動かない。

杜の外には一條の街道が微白く薄闇の中を走つて、其末は遠く灰色の野中に沒して了ふ。人ッこ一人通つて來るものもない。

杜は盡く舊い槻の樹である。太い幹は根本から少し上ると、二本にも三本にも岐れて、爭つて空に向つて身を伸し合つてゐる。枝と枝とは縱横に入亂れてゐて、一度嵐が襲つて來ようものなら、それこそ怖ろしい聲をたてて、打合ひをしはじめる。

キイッ、キイッと鳴いて蝙蝠は飛んでゐるが、かたちは見えない。冷たい重くるしい闇の色はもう杜全體をつゝんでしまつた。

氣がつくと、此杜の中から火が見える。とぼとぼとした光だ。今にも闇の中にすひ込まれてしまひさうだ、が、また少し明るくなる。何だらうと思つて杜の中へ入つて行くと、奥深く、杜の北の方の出口に屈んだ草屋が一軒立つてゐて、其家の戸口から洩れて來る燃火の影だ。いかにも小さな家で、家根は藁葺、四方は板壁で、杜に向つた方に窓をつけて、北の出口には障子が二本立ててある。

家の内には爐が切つてあつて、爐には枯木の節くれ立つたのが、燻りながらとか〳〵燃えてゐる。上からは煤けた繩で火棚を釣るし、火棚からは鉤をさげて鍋を掛けてある。爐の一方には松板で作つた衝立やうの物が折曲げて立ててあつて、其中には爐に燃べる枯木が一ぱい積込んである。

衝立の前には袖なし胴着をきた五十ばかりの老婆が坐つてゐる。頭髮は切つて撫付け、顏には濃い痘痕が一面、火の光が照り付けると、いかにも怖ろしさうだ。傍には二人の男の兒が、何かいつて、きやつ〳〵と戯け合ひ、今にも爐の中へころび込みさうにする。と、其度每に老婆は、火箸を握つて、

「氣を付けねえと、危えぞ、幾度いつても、解らねえ餓鬼共ぢやねえか」と睨みつける。兒童等はおとなしくなつて向う側の爐縁へ膝をのせて、二人で蹲る。炎はちよろ〳〵燃えあがつて、鍋の中では、何かぶつ〳〵煮える音がする。兒童等は默つて火を視つめて、折々目を上げて婆さんの方をぬすみ視してゐる。

一人は六歳位で、色の青白い、瘦せた、弱さうな兒だ。もう一人は八つか九つで、眼のくりくりした色の黑い巖乘な兒だ。兄弟とはどうみても受取れない。二人とも婆さんの孫だが、親は違ふ。年上の方のは婆さんの娘が生んだ無父兒だ。母親は、此兒を生んで祖母に委せて置いて、何處へか行つてしまつた。弱さうな兒は、婆さんの長男の玄造といふのの兒だが、玄造はつい近頃死んでしまつて、家には祖母と母親と、此兒と、色の黑い從兄と四人で、此杜の奥に住んでゐるのだ。

「森の玄造」といへば此界隈で何人も知らないもののない正直な農夫だつた。町へ出て行くと、店屋などでも心易く品物を貸せるといふや

うな風だつた。――不思議な事に此玄造の父親といふのは、非常な大酒のみで、酒を飲んでは村中荒れ廻る。肌脱ぎになつて、太い棒を振廻して何人とでも喧嘩をする。隨分村中から厄介者に視られてゐたが、其反動なのか、玄造と來ては、正直で素直で、大聲一つ擧げて人と爭つた事もない。一たい家は杜續きの屋敷で、可なり廣く生垣などを廻らして、土藏も一つ位は建ててあつた。それを酒で飲み潰して、玄造の代には、杜の入口の藁屋へ住まなければならない事になつてしまつてゐる。

ところが、玄造にとつて不幸なのは、父親の酒毒を受けたのか、農夫には有難くない羸弱な性質に生れ付いた事であつた。

眼の眇な、頰のこけた、顏の蒼白い、頭髮の薄い、歩むには前方へ屈むやうにして、手を振つて、いかにも大儀さうにして歩いて行く。力も弱く、一人前の仕事は出來さうにもなかつた。けれども、氣だけはなか／＼丈夫なもので、

「なあに、朝起は三文の得があると言ひまさあ、朝早く、夜遲くまでゆつくりやれば、仕事なんかいくらでも……」と、いつも口癖のやうにいつてゐた。

實際玄造は早起をした。一番鷄の鳴くと共に起きて爐で火を燃やし、土間の片隅に埋けてある當石の上で、藁を叩く。其音は異樣な響きをてて、ともして、朝早く杜の外なぞを通ると、薄暗い杜の奥の方からトン／＼／＼聞えて來るのであつた。

玄造の藁叩きは年中かはらなかつたが、それからの仕事は、杜の周圍の草地を開墾して桑畑を作ることだ。暇さへあればきつと、鍬と鎌とを持つて、草地へ行き、新地をおこして、端から桑苗を植付ける。所が、玄造が折角苦心して植ゑた桑畑の上へ杜が押覆さつて來る。欅の樹の露がぽた／＼落ちて來る。樹の根ははつて來て、翌年になると、鍬の刃先がビリ／＼いつて動かないやうになる。――大抵の者なら心根が盡きて了ふ。

玄造はそれにもかまはず、青草を刈つて畑に敷いたり、欅の根を鍬の先きで叩き切つたり、日蔭になつて來る枝へかき上つて、どん／＼切りおろすのであつた。

五抱へにも餘る大きな樹の幹へ長い梯子をかけて、枝下凡そ四五間もある所を、少し登つては休み、登つては休み、小さな青蛙のやうに、喘ぎ／＼攀ぢ登つて行くのだ。枝の岐れ目へ來ると、持つて來た棒を横に渡して、其上へ馬乘りに乘るか、或は太い枝へ身を縛り付けて、鉈と鋸とで、邪魔になる枝を思ふ存分に切りおろすのだ。「畜生」とか「此奴が」とかいひながら、打ちおろす鉈の手には驚く程の力が籠つてゐる。カサ／＼と搔く度に、鋸の歯から、白い切屑を吐き出す。若葉はザア／＼と音を立てて慄へる。枝はサアッと、高い響きを立てて、幹から裂けて地へ落ちる。日の光に切り落された枝の間から流れて、明るく玄造の畑の上へ射すのであつた。

まづ氣がすんだと思ふと、玄造は樹の上からおりて來る。そして日の光の廣く射し込む畑の上へ來て、足もとの若葉の枝を細かに切り刻みながら、打勝つたといふ風で、得意氣に上を見上げてゐる。

秋になると、欅の葉は茶褐色に染め出される。すると、嵐がこれを卷いて四方へ散らさなければやまないのだ。ところが、此落葉の工合によつて來年の豐凶がわかる。初霜が薄く置く年は、後からも烈しい霜がこない。木の葉は落ちるにも落ちられないといふやうなふうに、枝の上に所々にしがみついてゐて、雪が降るやうになつても、一度落ちそこねたやつはなかなか枝を離れない。渡鳥が杜に集るのは其樣な

年だが、農夫は來年は凶作だといつて眉を顰めてゐる。――が、十月の初旬に嚴霜が一時に重くおくと、木の葉はぐつたりとしてしまつて後から一二度風が吹きまくつて來る。と、もう杜全體が赤裸々に、一片の葉も殘らないやうに搖り落されて、玄造の家などは殆ど落葉の中へ埋まつて了ふ。「杜が裸になつたぞ」と村人は皆なで、悦んでゐる。實際、霜の烈しい年は、雪も多い、風も強い、その代り翌年の夏は緑葉が常年に增して繁茂する、從つて農作物も元氣が好い。なんのことはない、霜の多い年の冬から翌年にかけて、「杜」は最も活動を示す時なのだ。――此年は落葉の殊に烈しい秋であつた。

こつ／＼と骨のやうになつて慄へてゐる枝と枝との間から、朝日がぎら／＼射し込んで來る。玄造は霜葉を搔き集めて、大きな穴へ山盛りにして、端から火を付けて燃くのだ。村の兒童等は、常は杜の中は氣味が惡いといつて寄つて來ないが、葉を燒く時だけは面白半分にわい／＼集つてくる。そして、各自に一抱へ位づつ抱きかゝへて、穴の所まで持つて來る、と、玄造はそれを穴へ投げ入れ投げ入れして、片はしから火を付ける。

はじめは露じめりで中々燃えないが、日があたつて來ると、霜も消えて、葉が次第に乾く、火は勢よく燃え出して來る。細々立つてゐた煙が、其のうちに大きな柱となつて、ひら／＼と蛇腹のやうに伸びあがり、樹の幹に纏ひつき、枝に爬ひあがり、高く／＼頂まで立ちのぼらずにはやまないのだ。見る／＼木の葉の山は火で崩される、後から搔き集めては、投げ入れ投げ入れ、息もつかせないばかりにする。煙は一時窒息したやうになつて消えて了ふが、暫くすると、又バサ／＼バサ／＼音がして、葉と葉との重り合つてゐる下から下からと、もぐり出、くゞり出て、一つになつて立ち騰る。

兒童等ははやし立てて、落葉をかゝへて來ては、投げ入れ投げ入れてゐる、が、

「玄さん、何だつて、斯樣に葉を燃くんだえ」

「何だつて、灰を獲るのさ」

「灰をどうするでえ、そんなに」

「麥を蒔く時につかふのさ、――それ、其方のはうが消えさうだ、早く投げ入れろ、ぐづ／＼してゐると葉と一所に投げ込むぞ」

埃浚で搔き集めるもの、集めたのを運んで來る者、投げ入れる者なぞで、杜は一時大騷ぎである。

落葉燃く煙は四五日續いて止んでしまふ。老樹の枝には、只そこゝに宿木の葉が青々と、黃色な實をつけて着いてゐるばかり、打當つて來る風も何の障りもないので、只カラン／＼と枝と枝とを打合はせて過ぎ去つてしまふ。群がつてゐた小鳥等も何處へか消え、雀だけは每年殘つて、寒さうに小枝の上に並んで、羽をふくらませてゐる――杜の中に住む者とては只玄造の一家ばかりになる。

玄造は早くから冬籠の支度に忙しがつてゐた。屋根の薄くなつた處へ藁を插し、家の周圍へは藁の束を高く立て並べ防風の用意をなし、引窓を卸し、近くの杜から枯木を伐つて、納屋一ぱいにつめ込み、軒先きの南向きの地を掘つて室を作り、上から藁の屋根を長く降して地上まで垂れ、光を取るべき小窓を二つ、其の一つをば入口の代用に當ててある。室の中には小さな爐を切つて、杉の根本の脂瘤の出たのをいけて、絕えずドカ／＼燻らせて置く。信濃のやうな雪國の農夫が、冬籠の唯一の隱れ家だ。

もう隱れ家が出來上つたと思ふと、峻嚴な信濃高原の冬は次第に其威力を示して來る。常時は黑色をして四境を繞つてゐる連峯も、白衣に變つて、棲む者も無い太古のまゝのやうに思

はれる雪の曠原の上に、嚴として迫つてゐる。大抵の日は晴れ渡つて、北國の冬空のやうに薄曇で陰鬱で、絶えず雪が舞ふといふやうな事は無い。紺青の空が色濃く、雪白の山の頂に垂れ懸つてゐる。寒さは身を刺すやうに嚴しい。日が照り渡つて眩いばかりの雪の原の上には、其處此處に枯木が立つてゐて、餌のない鳥が黑く群をなして此上を舞つてゐる。

夜になると寒さは一層烈しくなる。ピシンピシンと何處ともなく家の中が鳴り渡る。屋根板の間、掛樋の中、屋内の器具一切のものに含まれてゐる水分といふ水分が氷り切らずにはやまないのである。軒先きの巣の中では鷄がク、と鳴き、老樹の枝は寒さで折れるのか、折々戸外で音がする。と、何處か遠く原の上で高い響きが起つて、カアン／＼と遠鳴りして消えて行つて了ふ。

雪の降る日は曇つた空が上から覆ひかゝるやうで、寒さが四邊から迫つて來る。夕方からかけて其樣な事、夜になると眞の寂寥、何の物音もない。

戸を開けて見ると眞暗い中を雪がたえまなく降つてゐる。

朝になつて見ると、滿目只雪、空は疲れたやうに見えて、雲はまだ晴れない。山の陰あたりが薄暗く、重々しく降り敷いてゐる雪は、これでも溶ける時があるかとばかり思はれる。欅の樹は全林盡く厚い雪の衣に纏はれる。

此樣な大雪の朝であつた。玄造は常の事とて別に氣にも留めず、一人で早起して、雪を搔き分けて、家から街道へ通ずる小徑を作らうと雪搔を持つて戸外へ出た。雪は一尺餘も積つてゐた。玄造は頭を布でつゝみ、筒袖に股引を穿いてゐた。體を曲げて一生懸命に力を入れて雪を搔いてゐると、手先きだけは冷たいが、身體は汗の出る位骨が折れる。やがて一條の小徑が家から長く欅の根本に沿つてつけられた。玄造は一寸雪を搔く手をやめて、腰を伸ばし、ほつと息をついて雪搔を杖にして立つてゐた。

その時、上の枝からはら／＼と少し雪が落ちて來た。何事かと思つて仰いで見ると、其途端、非常な響きがして、枯木の太いのが一本横になつて落ちかゝつて來た。あつと思つて飛び退かうとしたが、積雪で足場がない。それでも二足三足雪の中を轉げるやうにして逃げた、が、此時枯木は邪魔する枝を打折つて空中を飛ぶやうにして、玄造が逃げる方へ逃げる方へと躍りかかつて來た。雪はどうつと瀧のやうに落ち、霧のやうに飛散り、玄造の姿はもう何處にも見られなかつた。

四邊が靜かだけ、響きは怖ろしく高く鳴り渡つた。家の者は何事かと飛び出して見ると、雪の上には血が一面に飛んでゐる。雪搔は遠くへ投げ出されてある。太い枯木の下には人の足がぶる／＼震へてゐた。

わつといつて馳け寄つて見たが、重くて早速は取り除けられない。太い／＼枯木の丸太だ。小枝なども何年か前に枯れて無くなり、外皮も剝げてゐる。七八尺もあらうか、大きな蛇の腹のやうになつて雪の上に横はつてゐる。

玄造の妻や母親はころんだり起きたりして兩手で雪を搔き分ける。滑りすべるのをやうやくの事で、二人は其の木を横へねぢ向けた。何といふ樣だ。玄造は頭を打たれ、顏はひしやげ、柘榴のゑんだやうに、額は破れて血が流れてゐる。二目とは見られない。それでも猶手と足とはぶる／＼震へてゐる。抱き起すにも痛々しい。妻は泣くにも聲が出ない。此れがほんとに自分の夫だらうかといふやうなふうで呆然其傍に立つてゐた。

母親は初めて氣が付いた樣に「わつ」と聲を擧げて玄造の上へ倒れかゝつた。

「やあい玄造、しつかりしろよ、なんて樣だ、しつかりしろよ」といつて、玄造の頭の下へ手を入れてそつと持上げようとした。玄造は纔かに眼――それも碎けて形ばかりになつてゐる眇な眼をば少し動かしたやうであつたが、ものをばいひさうにもしなかつた。

妻はもう疑ふ餘地もないと覺つたやうに、「あゝ大變々々、誰か來てお呉んな」とけたゝましい聲を出して雪の中を馳け出して行つた。雪路ではあるし、殊に朝早くの事とて誰一人通る者もない。が、それでもいつか村中に傳はつたものと見えて、人が次第に集つて來た。

「一體どうしたんでえ」

「もう駄目なんけえ」

「早く起き過ぎたんだえ」

「俺、そんだで言つてるだ、餘り早起するんぢやねえ、魔がさすつて」

「魔がさしたんでえ、雪の朝は昔から早起するなつて、いつてるだに」と、口々に罵つてゐたが、玄造はもう一語も發しなかつた。皆して筵へ載せて、家へ運び込んだ時は、もう蟲の息ばかりであつた。

雪はそれでも少しづつ溶けて來た。折々は軒端に雨滴の音も聞え出した。槻の枝からは絶えずはら／＼と粉雪がこぼれて來る――が森の樹には風も起らず、何かすべき事をしてしまつたとのやうに靜然と立つてゐる。

午後には日の光が少し見えて、枝上の雪は夕方までにすつかり落ちて了つた。夜になると軒端の雨滴が其まゝこほつて長い氷柱となり、枝からも同じく氷柱が垂れさがつた。雪の降つた後の夜の寒さは又格別で、其夜の深更に、玄造は遂に息をひきとつて了つた。

玄造の妻も母も兒も只夢のやうだ。まだ確然事實とは受取れない。死んだのは自分の子だらうか、夫だらうか、何處からか迷つて來た一人の旅人ではあるまいかといふやうな思ひのしてゐる中に、玄造の遺骸は棺に納められて、村人に擔はれて、村人の共同墓地へ葬られて了つた。

玄造が死んだ後の家には、女房が大きな男の兒の外にも一人乳吞兒をかゝへてゐる。貯へとては一文もないので、明日から働いて食べなければならない。老婆は何處へか飛び出した娵の事ばかり思ひ出して、せめて彼女でも傍に居てくれゝばいゝに、「一體、玄の奴の、心懸けが惡いのだ、自分ばかり稼げばいゝと思つて、妹の事なんか何とも思はねえからあんな目にも逢つたんだ、罰が當つたんだ、――それといふのも手前が惡い、なぜ、もつと氣をつけて、玄を人並々の者にしねえだ、馬鹿女め」と、氣でも違つたかと思ふやうに當り散らす。毎日の事で手がつけられない。それでも嫁の里で口を入れて、母親は母親で其生家へ行き、嫁は兒を連れて實家へ歸り、無父兒は隣村へ呉れてやつて、一時一家が離散するといふ事に定まつてしまつた。

一家の四散にはもう間もない。

爐の火はまた燃えあがつて、老婆の黑い痘痕の面を照しだす。兒童等は暫く默つてゐたが、直ぐにまた二人で頰を突いたり、手を抓つたりして騷ぎ出す。

「いゝに、またか」と、老婆は火箸の柄を握る。兒童等は、はつと氣が付いたやうに、しづまつてしまふ。

此時裏口の戸が開いて、嫁は何か大きな包を抱へて入つて來た。背には小さな兒を負んでゐる。

「何をしてゐるだ、今頃まで何處をほつき歩いてゐるだ。馬鹿ともなんとも……」と、老婆は嫁の姿を見ると　そのまゝ浴びせ掛けた。年は二十六七で、頭髮は卷き付けてゐる、目は細く、

口は稍々大きい、齒は黒く染めてゐる。ひゞだらけの手を一寸下へ突いて、
「遲くなりまして、西の叔母に逢つたもんだで――」
「西の叔母に何が用があるだ、また人の惡口でも言つてゐたんづら、――さつさとしさつし、餓鬼共はさつきからお夕飯〱と騷いでゐるぢやねえか」
　氣に留めても仕方がない、包をおろして、傍の戸棚から、行燈の紙の煤けたのを出して來た。そして付け木で、爐から火をうつして、燈心へつけると、ぼつと薄暗い光が菰を敷いた、床の上へ落ちる。小高い棚から、膳を取りおろして、其行燈の周圍へ並べると、二人の兒童は我先きにそのまへに陣取つた。老婆も爐から鍋をおろして、しぶ〱立つて膳に向つて、皆默つて夕飯の箸を上げた。
　爐の中では松の脂瘤がブツ〱音を立てて燃えてゐる。納屋の方ではもう鼠がコト〱騷ぎ出した。
　戸外はもう寒さと闇とがひし〱と此家の周圍を取卷いて　欅の巨樹は縱横に腕と腕とを組み合はせて、何かたくらむやうに、ひそ〱語り合つて立つてゐる。

車の男

江戸川の堤を通つた人は何人も見た事があるに違ひない。關口の瀧のある岸に枳殼の藪があつて、今では新芽をふいて白い小さな花が其の中にほのかに咲いてゐるが、其藪の所を少し上へ登ると、堤が平らになつて展望も廣くなる。此堤の上に如何なる日でも一人の男が箱車に乘つて、兩手に二本の棒を持つて、巧みに其車を前後に運轉させて行くのがある。
　腰が立たないとかで、足はいつも車の中に折りまげたまゝ、二本の棒で車の輪を強ぢまげて方向を轉じ、左へ右へ思ふがまゝに向つて行く。上は駒塚橋を渡つて猶遠く面影橋の邊まで行く事もあれば、下の方は關口の瀧から、石切橋邊まで出かけて居るのを見かける事もある。
　氣をとめて見ると、其男の車の傍には何日も可なり大きな籠が付けられてゐる。そして車の中には、三つか四つに折疊みの出來る釣竿が載せてある。車を推して川岸の適當だと思ふ所へ出ると、蘆の葉を巧みにかきのけて、鳥の巣のやうに作つて、其中へ車毎身を入れ、手早く釣竿を取り出して釣に取りかゝる。學校歸りの學生などが、堤の上を通ると、蘆の中で何か物音がするので、すかして見ると、其男が必ず釣をして居るのであつた。一體、江戸川は魚を釣る事は嚴禁されてゐるのであるが、此男のみは特にゆるされてゐるのらしい。それは、此男が若い頃に此水道の修覆の時分に過つ　今のやうな足腰の立たないまでの負傷をしたので、それが爲めに今では人も許し、巡査なども大目に見脱してゐるとの事だ。
　或る日の事で、私は學校の歸途を例の堤の上を通つて來た。風が少し吹いて堤上には砂塵が捲き上つてゐる。駒塚橋の所まで來ると、橋の向ひから例の男が車に乘つてやつて來た。そして小兒等が澤山其周圍に群つて、竹杖を振つてゐるものもあれば、紙の旗を立ててゐるものもある。何かがや〱叫喚きながら車の後から押してゐるものもある。男は得意氣に左右を振返りながら兩手で車を進めてゐた。
　私が橋の上まで來ると、今まで得意でゐた男も、餘り小兒等の取りすがるのがうるさくなつたのか、何か二言三言云つたが小兒等は退きさうもない。すると不意に二本の棒を揚げて小兒等を追ひ散らした。
　傍を通ると、不圖私の方を睨むやうに見詰

めた。其眼、光る鋭さ、私は思はず胸を射られるやうに感じた。其男の額は塵にまみれ、髯に埋もれてゐるが、其中から爛々と輝き出す目の若々しさ、私は如何にも不思議な感じをさせられた。

　二三度棒を振ふと、もう小兒等は恐れて寄り附かない。只後方からわい〳〵いふばかり。其暇に男は車の輪に棒を當てて堤上を軋らせて行つた。砂塵はみる〳〵立ち揚つて其の車の後影を包んで了つた。

　或る冬の日の事で、私が學校に居ると、突然訪ねて來た男があつた。見ると三年前に分れた梶尾と云ふ友人で、熊本の高等學校へ行つて居る筈の男であつた。

「學校はどうした？」と訊くと、「學校！　學校なんかつまらないからね」と投げ出すやうに言つた。

「實は遙々君を訪ねて來たんだがね」「あゝさうか、まあ家へ行つて話さう」私は幸ひ面白くもない東洋哲學の時間なので、早速休んで、梶尾と二人、其頃雜司ケ谷に弟と借りてゐた家へ歸つて行つた。

　早稻田の田圃の茗荷畠の小徑、寒風に吹き晒されてゐる枯田の間を縫つて、榛樹の飛びとびに立つてゐる下から、駒塚橋の手まへへ出た。蘆は枯れて水が碧黑く渦紋まいて流れてゐる。上流の面影橋のあたり、竹藪が靡いて、水車が寒げに轉つてゐる。日光は射して居るが風は冷たい。水に臨んだ枯蘆原の中を見ると、何か黑い者が動いてゐる。又例の男だなと思つてゐると、梶尾は突然立ち留つたきり動きさうにもしない。凝然と其車の男の方を見詰めてゐる。

「どうした、え、君」といつたが猶動かない、「うむ」といふばかりで猶立つてゐる。私も不思議に思つて、其男を見た。いつもの如く釣竿をしつかり握つて、凝然と水面を諦視してゐる。そして折々左の手の指で髯をばさばいてゐる。赭黑く赤銅のやうに燒けた横顏には、少し皺が見えてゐるが、其肩巾の廣いこと、兩腕の太く節立つてゐること、一度其太い棍棒を持つて立ち上つたらば、と思はれる。折々何か口の中でぶつ〳〵囁いて居るばかり、猶水面を凝視めてゐた。

　梶尾は突然、

「先年君と此邊を散歩した時も、居たつたね」と何か思ひ入つたやうな調子で言つた。

「居たとも、最う餘程永く居るさうだ。まあ歸らう、ね、君。」

　此時「ヤア」と云ふ聲が聞えた。見ると、其男は今釣竿を引き上げた所で、絲端には大きな鮒が一尾跳つてゐた。其男は如何にも悅しさうに、滿面の髯を動かして呵々と笑つた。其無邪氣な樣に私等も思はず微笑を洩した。

「悅しさうだな、彼樣にも悅しいのかな」と梶尾は獨語のやうに云つたが、私が復た歸らうと促すので、默してついて來た。

　目白の坂を登つて、雜木林の中の私の家へ着いた。弟は學校へ行き、賴んで置く老婆も下谷の親戚とかへ行つて留守。靜寂かな林の中の一軒家は、風が來て折々林の木を騷がすばかりだ。

　此梶尾と云ふ男は國の中學からの舊友で、私とは最う十年近く交つて居る。神經質の、やゝ偏癖な、思ひ立つた事には隨分突飛な事もやる方で、此度も、樣々な不平から學校をやめて、一飛びに亞米利加へ渡らうと上京したとの事である。

　熊本に居た頃は大方病氣がちで、時々轉地して病を養つて居た。そして赤瀨の海岸へ行つてゐた折の事だといつて話し出した。

「其頃僕は頭の工合も惡いし、刺戟は烈しいし、

家からの報知は面白くない。いつも海岸の岩の上に來ては坐つて色々な事を思つてゐたね。七里隔てた海上に溫泉岳が見えて、碧い波が緩く起つて來る。僕はいつも、今のやうな斯樣な夢のやうな影のやうな生活を送つてゐる位なら、一層一思ひにあの青い波に包まれて、遠くへ運ばれて行つたらと、幾度思つたか知れない――まあ言はゞ危險な狀態にゐたんだね。所が不思議ぢやないか、僕はつく〴〵不思議だと云ふね。

或る日の正午近く、僕は平常のやうに岩の上に來てゐると、波が油のやうに濃く、ゆたりゆたり寄せて來て、日の光が輝き、溫泉岳が別して懷しく思はれた。僕は又いつものやうな思ひがしてゐると、不圖、今日見たあの男の事が胸に浮んで來たぢやないか。

さう、あの車に乘つて居た男の事さ。ね、そして何日だつたか、先年君と一所に歩いてゐた時、君が、『何故、人てものは、彼樣になつても生きてゐたいのかね、僕等なら疾くに自殺でもしてゐるのだが』と云つた、あの君の言葉までが、ひし〳〵胸に響いて來るぢやないか。顏も見えたよ、髯だらけのね。そして車に乘つた彼の男の姿が、あり〳〵波の上へ見えて來るぢやないか。――いちがいに僕の神經の迷ひとのみも言へまいと思ふね。何も僕の身と關係のある事では無し、僕は眼を閉ぢた。そして自分の今の有樣と、あの男と比べてぢつと考へて見たね。どんな違ひがある、何故自分には死ねないのだ、――暫くして目を開いて見た。日の光は汎く四邊に溢れて波が廣く湧き立つて來る。何とも言はれない壓倒されるやうな思ひがしたね。

不圖、氣が付いて見ると、何時の間にか、僕は知らず〳〵岩の上を降りて、旅宿の方へ歸りの小徑を歩いて居るぢやないか。何の爲に自分は今此途に向つたらう、と思ふと、何となく空腹を覺えて來た。――あゝ淺ましい、何と云ふ事だらう、今まで死ぬの何のと考へて居た身ぢやないか。僕はもう耐らなくなつて夢中で其邊を驅け廻つたね。」

梶尾は默して了つた。私は梶尾の話と、車の男の事とを思ひ比べて、繰り返し〳〵考へてゐた。

其夜遲くまで梶尾は話して歸つて行つた。

早稻田田圃の冬枯の寂しさ、黑く微かに西の方に見えてゐる秩父の峯を越えて、吹いて來る風の寒さ、名物の茗荷畠も枯れ〴〵になり、江戸川の蘆の葉は皆折れて水に蘸つてゐる、朝夕此田圃を通ふつらさは、都下の何處の學生も想像だに及ばない。

灰色の雲が半天に蔽ひかゝつて居るかと思ふと、忽ち嵐が枯葉を捲いて、野を越え、丘を越え、學舍の窓に叩きつける。霰が飛び雲がちぎれる。日暮からして夜になると、其嵐が稍收つて、此度は雪が亂れ飛ぶ。翌朝になると、田圃、櫟林、茗荷畠、一面に四五寸の雪が積つてゐる。

此樣な雪の日の或る暮方晚く、私は一人江戸川堤を關口の方へ降りて行つた。四邊が薄暗く、雪の途が一條ほんのりと前方に見えてゐる。そして蝙蝠が二三羽淋しげに鳴いて、流の上を飛んで居た。妙に氣の沈む晚で寒さがひし〳〵身に迫つて來た。

下駄の雪を拂ひながら、枳殼籔の所まで來ると、最う夕闇が一面に鎖して只瀑布の音が其れを破つて聞えるばかり。瀑布の向岸の一軒家も、此方の岸の家々も戸を鎖して、只窓から燈火が幽かに洩れて見えるばかりであつ　。

斯樣な夜、雪の途を歩いてゐるものは、たつた自分一人きりではないかとやうな、妙に心細い感じがして來た。

瀑布の所から半町程下ると、欅の樹が四五本立ち並んでゐる。其樹の下まで來ると、不圖、川岸に近く、樹の根本に火が燃えてゐた。見ると、例の車の男が、車の儘火に向つてゐる。上からは、形ばかりの鳥羽の屋根が覆ひかゝつて、傍には焚火の料にとて枯枝が澤山積み集められてゐる。

闇の中で、焚火に照らされてゐた男の顔は、如何にも不思議で、膝に半ば埋められてゐるが、其中から例の眼は爛として輝いてゐる。不圖小屋近くで足音の止つたのを、怪しく思つたのか、凝然と闇をすかして自分の方を見たが、樹の幹に隠れて見えなかつたか、其儘復た焚火の方に正面に向つた。

右の手には何か木の枝のやうなものを持つてゐる。そして其尖端には魚がさゝつてゐた。左の手で焚火をかき立てると、火がぱつと燃えて、一層明るく其赭黒い顔を照らす。と、何か口の中にぶつ〳〵云ひながら、右の手の魚をば火の中へ插入れた。魚は苦しさに跳るらしい、火がぱち〳〵と飛ぶのが見えた。「何だえ、雪が降つたつて何だえ、此鐵公の身體は鐵條張りだぞ」と、不意に闇の中から聲が聞えて來た。見ると燒けかゝつた魚を鹽も付けず、片端から嚙んでゐる。

風が少し起つた。と、樹上から雪がぼた〳〵と落ちて闇をば吹きつける。火は消えさうにする。其度毎に男は急いで枯枝をさしくべて火をかき立てる。ぱつと燃えあがると闇は退く。男は呵々と笑つて、「何だえ、雪が降つたつて何だえ」とまた續けてゐる。終夜火と闇との戰ひ。――不圖、私は思つた。いつもの男ではない、今戰つてゐるのは、足腰の立たないいつもの男ではない。今眼前で、執念く寄せて來る闇と戰つてゐるのは、一體何人だらう？　何人とも知れないが、此男の背後には目に見えない、無數の味方がついてゐるのだと、思はず樹蔭から二三歩歩き出した。すると小屋の中から復た「何だえ」と聞えて來た。私は復た立ち戻つて見ようとしたが、其儘下流の方へ下つて行つた。

翌日は夜中に積つた雪で、寒氣は烈しかつたが、日光は華やかに輝いてゐた。例の如く學校へ行くと、堤の上に、昨夜の男は、元氣の好い顔で車を押してゐた。

草叢

私は今草叢の中へ來て思ひに耽つてゐる。私の坐つてゐる前には、草の小徑が幾條ともなく縱横に走つてゐる。今此小徑の一つ〳〵を辿つて行つたならば、果して如何樣な所へ出られるだらうと、別に不思議でもない事を、何か新らしい事のやうに思つて見た。

今朝からして胸は理由もなく亂れて、苦しくて耐らなかつたが、此草深い中へ來て涼しい風に吹かれてゐると、胸は靜まり、心は空虚になつて、そして何とも知られない、肅かな、悲しいやうな思ひが身に沁み渡つて來るのであつた。

今日は日曜日で、教會へ行つた。途々一所に行つた友は、心輕げに「讚歌」を口誦んでゐた。私は胸が重く頭をもたぐるのでさへも、憂い、何と云ふ同情のない友人だらう、斯樣な場合は、平生親しい友も、只東西に行き違ふ途上の人たるに過ぎなかつた。

日光は烈しく射して、垣越しに茂つてゐる樫の若葉に風が觸れ、巷に塵がまき揚る。常は風に吹かれると跳る自分の心も、今日に限つて少しも輕くならなかつた。

教會へ行つた。牧師は口重く讚歌「二百三十番」と呼んだ。それでも洋々とした樂器の音につれて一同のうたふ聲を耳にしてゐると、胸は

次第に靜かになつて來た。

「爾等火を以て驗せられよ」牧師の說敎の題目は是れであつた。火の如くに燃えて、火の如くに盛なれ、燃えつくさずば熄まず、燒き果てずばとゞまらず。――自分の求むる所は此れではないか。如何なる罪をも燒き盡せ、如何なる羈絆をも燒き切れよ。燎原の火の盛なるやうに、自分の心は常に燃えよう〳〵と求めてゐるではないか。

此話を聞いて居る間、胸は躍り、胸は湧き立つた。恐らく、傍から私を注視する人があつたらば、此時私の眼は輝き、頰に血の色の登るのを氣付いたであらう。――私は敎會が終つてから、其友人と別れ一人で此草叢の中へ來て見た。

常に沈滯して居る私の心でも、亦跳る時があるかと思ふと愉しくてたまらない。踊れ、舞へ、狂へ。靜止は死である。奔れ、飛べよ、何の束縛もなく、何の羈絆もなく、自在の活動、此れぞ自分が斷えず求めてゐる姿ではないか。

「何の爲めに、君は生きて居る？」と杖を振つて叫んだ一人友人があつた。何の爲めに生きてゐる。勿論私には解らない。只「生きてゐたいから生きてゐる」とより外に答へる事はできなかつた。從つて動きたいから活動するのだ。私の考へは極めて單純であつた。

併し「生きてゐたいから生きてゐる」此程弱い語が世にあらうか。其反對のことが同時に言はれるわけだ。「死にたいから死ぬのだ」自殺に何の罪がある。本然の要求ではないか。花の開落に罪がないならば、要求のある以上、人の生死にも罪は無からう――と思ふと、私の胸は復た押へ難く亂れて來る。

今私の眼前には草の小徑が幾條も走つてゐる。此小徑の孰れを求めて走つて行かう。岐路に立つては常に狐疑し逡巡してゐる。孰れの途を行つても霧が鎖し、野の鳥の聲が寂しく聞えてゐる。岐れ路へ來ると、いつも心は亂れて、進みも退きも爲し難くなつて來る。果ては面を掩ひ耳をふさいで、何れとも分かず、走つて走つて走つて見る。呼吸が切れ足が痛む、眼を開いて見ると、日は草叢を照らして、綠り葉に蝶が眠つてゐるが、見ると、私は復た野の岐路に立つてゐる。あゝ何處まで行けば、此岐路は盡きるであらう。草野は果しなく日路のかぎりに續いてゐる。――狂奔の瞬時、此が私の生命か、岐路に立つての躊躇、此が眞の心の姿か、私は此狂奔の度毎に疲勞に疲勞を加へて、草叢の中に倒れて了ひさうになるのであつた。

嘗て青葉の小徑を、人と共に辿つて行つた事があつた。夕闇が暗く、森には鴟鵂が鳴いて居た。思はず寄り添つて手を取つて行つた。曇つた空に、風が何となく寂しく、初秋の樣な夜であつた。「泣きたい樣な夜だね、心細い」「貴方もさう、私もさうよ」「此樣な夜は機會さへあれば、人は死ぬかも知れないね」「さうね」二人はそれきり默して步みつゞけて行つた。手をば互に取り合つて居たが私の胸は少しも跳らなかつた。市からの燈火が明るくさして來たので、私等は離れ〳〵になつて步いて行つた。

やがて歸り途、私等は、途切れ〳〵に色々な深い思ひを表はすやうな語をば語り合つた。そして家近くに來ると、其人は私の耳に口を寄せて、「さよなら、今夜の事忘れちやいやよ」と云つた。私も口眞似のやうに「忘れやしない」と言つて見た。二人は別れた、そして其人はうな垂れて家へ這入つて行つた。

翌朝目が醒めて見ると、近くの森に鳥の聲がして、朝日が窓から射し込んで來る。戶を開く

と、碧の空は晴れ渡つて、森の綠をすかして、眞白い雲がもや〳〵と、湧き立ちもせず、消えもせず、鮮かに横になびいてる。風が少し吹いて、其氣持の好いこと、昨夜のことなどは全然胸から消えて仕舞つた。只何となく悦しくてたまらない。自分の居る窓近くの若楓が、光をあびてゆら〳〵搖れて居るのを見ると、心も共に爽かに動いて來る。私は急いで家を出て、一日何處ともなく野か森かを驅けずりまはつて歸つて來た。――只もう浮雲のやうに動いて居る。右へ左へ、風のまゝに吹き送られ、日に照らされ、泣きつ笑ひつしてゐるのである。

不圖した折に友の言語が非常に氣高く、亦非常に懐しく思はれた。又時とすると、さる女性の眼が取り分け美しく私の胸を射た事があつた。又或時綠の山は懐を開いて自分を抱いて吳れた。――けれども其れも瞬時、翌日相見ると、友は前日の尊容は何處へか失つて、「君、其樣な事は、行末の爲めになるまいよ」などと說き聞かせた。何と云ふ變化ぞ。

眼の美しかつた人に復たの日相向つた。何と云ふ痛ましさぞ、又怖ろしさぞ。此人の身の何處に、此人の眼の何處に前日のやうに私の胸を射た美しさは籠つてゐたらう。女が魔性だと云ふならば、其變化が魔である。或刹那を過ぎて女の美しさは永へに消えて了ふ。

綠濃かな山の姿、今日はまた何と云ふ愍然なざまぞ、全體が灰色の雲に包まれて今にも泣き出しさうだ。私を招いた懐しさは何處にある。嚴しい欺き手よ、私の心は最う何物にも繫ぐ事が出來なくなつた。

灰色の天地、他奇なき人生、何に因つて私の胸は跳つたらう――刹那、刹那に神祕の寶をば示しながら、自然は何故に、再び深い霧の帳幃をば人間の上に覆ひかぶせる事であらう。何故にかくまで無情なのか。狂奔の時か、逡巡の時か、何れかは知らないが、自分は此瞬時瞬時を求めて走つてゐる。いや、人は恐らく何人でも私と同じく求めて居るに違ひない。

天上の星の樂をば聞いた人があるかも知れぬ、いや、有るに違ひない。私等が若し「慣れて居る」と云ふ、此因はれから脱する事が出來るならば、直ちに草の葉の戰ぎさへ聞き分けるを得るに違ひない。

「慣習」の力は大小に渡つて縱横に人を網にして居る。意味もなく口から洩れる聲の反響をば人は言語と呼んでゐる。此反響を傳へて眞に言はんとする事も言ひ得ず、遂には言はうとする事さへ忘れて了ふ。――此習慣の怖ろしい力さへ脱する事が出來れば人は自由である、眞に自由である。天地の間に彷徨する事さへ出來る人間の精神でありながら、生後直ちに、此「習俗」の網に捉へられ、動きの取れない始末になるのだ。

或朝早く眼が覺めると、窓ガラスから淡い朝の雲が見えて、近くの森にひんからと鳥が鳴いてゐた。そして、昨夜窓枠の上へ出して置いた撫子の薫がほのかに朝風に包つて來た。此時自分の心は眞に靜かであつた、そして眞に空虛であつた。何の事も浮んで來ない。無念無想。鳥の歌と花の香の中に初めて地上に生れ來たもののやうに思はれた。此時、此刹那、過去と、未來とか、現在とか、時を區劃する、姿などは思ふ事が出來ない。自分の心は只十年以前も亦此儘であつた。百年後も斯くあらう。自分は今永劫の境にゐるとのやうに思はれて來た。幼時の姿も目の當りに見えて來るし、百里隔てた人も今眼前に現はれて來る――斯樣な刹那こそ眞に人生の至寶ではあるまいか。

「百年に一度、星辰が天上に現はれたならば、人は如何に其美に驚嘆するであらう」何と云

ふ痛ましい語ぞ。「慈母逝いて初めて其懐しさを思ふ」何と云ふあさましい事ぞ、只慣れてゐる爲めに美しくない――「習俗」は直ちに「罪惡」ではないか。

脱れよう、脱しようと走つても、潮のやうに寄せて來る「習俗」の力に沒せられて、思ふに委せない。果ては自分で何の意とも知らず、ひたすら變化を求め、境遇の移轉をもがき臘つてゐるのみである。木に繋がれた馬の何とも知らず、頻りに地上を蹄で掘つて居ると擇ぶ所がない。

吹雪の夜、只一筋の途を求めて、アルプスの頂に登つた青年があつた。麓の家では爐の火が暖かに燃え、少女は眞白いエプルンを掛けて此旅人を款待した。そして甘き一夜の物語りに人々は此若者を引き止めようとした。青年は拒んで再び登山の途に就いた。吹雪も冒したらう、嶮路も通つたらう。勞苦と困難とで贏ち得た其結果は彼がアルプスの最高峯に立つてゐた事であつた――併し此青年の求めてゐたのは何であらう、アルプス最高頂登山者の名譽か、夫れとも美しい下界の瞰望か、――いや、此青年には最う登るべき頂がないのだ。「仕方がない」と囁いて、再び吹雪の中を舊時來た途へ降りて來たに違ひない。何と云ふ痛ましさぞ。

自分より以前に、幾多、小徑を狂奔して行つた人々は、此「仕方がない」と言ふ哀れな一語を以て、草深い中に倒れて休んでゐるだらう。――自分等の行末も亦此れではあるまいか。

燃えつくせ、燒きつくせ、螢火のやうに微かに明滅する生命が何になる。今の囚はれを脱れ、此闇みを脱して大空の下で、自由に呼吸する事が出來ないならば、「生」も「死」も別に變りは無からう。仰いで日を見るも、俯して地を見るも、同じ一人の「我」ではないか。

「生きたい」「動きたい」此等の要求は直ちに大自由を得たいと云ふ聲ではないか。幾千萬年の歴史が何になる。眞に感じた一刹那こそ生命ではないか。人は此刹那を求めて終生走つてゐる。

あゝ私等は、躊躇し、狐疑し、狂奔し、疲勞する旅人の姿だ。今自分の眼前に見える草の小徑には夕日が薄れて、闇が次第に迫つて來る。寂々として心の痛ましさよ、私は尙暫く此草叢を立ち去る事が出來なかつた。

新綠

晴明の時節には、折ふし風の烈しく吹き起る事がある。斯樣な日に武藏野へ行つて見ると、丘を越え林を出で、草の途絶えた赤土の原へ出る事がある。砂塵の吹き揚げらるゝ其樣の如何に不思議に、如何に壯快なる事よ。遠くの原を吹き越えて此砂原へやつて來る風は、直ちに地皮を捲き上げて、其砂塵をば新綠の森の上へ灑ぎかける。初めには地を爬ふやうに立つてゐる砂煙が忽ちにして、隆起し奔騰し、此處彼處に幾條の柱となつて捲き揚り、濛々として天地が爲めに小暗くなる。其中を野飼の馬が高嘶きして跳つてゐる。風が少し吹き弱ると今迄空に揚つてゐた砂塵は、降つて森といはず林といはず、人家といはず埋れんばかりにふりかゝる。

砂塵の捲き揚る壯觀は平原に於ける一つの特徴である。

此風を避けて小村の中に入つて見る。家並が僅かに續いて、小流れに橋が架つてゐる。其橋を渡つて行くと、風がしばし途絶え、空が薄明るく、自分の影が地にかすかに見えると思つてゐると、風が復た傍の丘の林を吹いて、砂塵

は何處までも追つ掛けるやうに後方からやつて來る。

　今度は小徑を求めて丘の上へ登つて見ると、廣い原の半ばを覆うて起ちのぼる砂塵は次第に其巾を擴げるやうで、天地の間に何か暝合する所があるやうに見えてゐる。丘を繞つて欅槻などの薄紅、楢樫などの銀白、及び白楊楓などの淺綠の若芽が此砂塵をあびていた〳〵しく震へてゐる。見たまへ、砂塵は一陣又一陣、間を置いて、狂ひ廻るやうにして襲つて來る。其度毎、防ぐに術なく、林の樹は、風の荒るゝまゝ、砂の襲ふまゝ、前後に搖れ伏してゐる。風は此をば折らない程度に、戲れ狂つてゐる。私は其風の中に吹かれて立つてゐる、胸が躍つて其風に乘じ、共に何處までも狂ひ廻りたくなる。天地活動の騷亂の中に立つて我一人靜かにしてゐる事が出來ようか。

　終日風が荒れ、終日砂塵が起つてゐると、不思議にも、其夕方からか、或は翌日は必ず雨となる。靜かな雨の脚は半日か一日位つゞく。昨日の風にひき更へて其靜かな事、肅かな事、夜などは軒近く若楓がゆらいで露をふりこぼす音が聞える。風と共に踴つてゐた心は靜かになつて、何となく人が戀しくなる。否、戀しいといふのは稍々強い、何人ともなく人が懷しくなる。「愛」の芽は斯る靜かな境に於て人の心に萌え出づるものであらう。判然と其所以を解する事は出來ないが、氣が沈んで、連りに人の事が思はれる――。若し機會なるものが人に友人を與へ愛人を與ふる事がありとするならば、若葉の雨の夜などが其れである、新樹にふり灑ぐ雨の音を聞きながら、燈火の下で、しみ〴〵話に耽つて見たまへ。人は必ず心の友を得よう、相思の人も得よう。

　雨がいつしか小やみとなる。遠くの方で蛙の聲が聞える。ほんのりと月が何處かに有ると見えて、稍々遠くまで見渡される。風が少し起つて闇に樹影が搖れてゐる。連りに人が思はれる、けれど寂しくも悲しくもない、心は肅かになる、此れと共に何處にか悅びが籠つてゐる。一體が若くて生々とした心の樣である。「愛」を得た人の胸は此の如きものではあるまいか。

　翌日雨が霽れる。雨後の綠。復た昨日の新綠の丘へ行つて見たまへ。前の日の嵐は忘れたやうに、木々の葉は悅しげに踴り、群つては何か囁き合つてゐる。そして其「綠」の鮮かな事、葉端からは今にも綠の露が滴るかとばかり思はれる。ふと大きな力が、昨日の砂塵を降らし雨を灑いで、此綠をば研ぎ上げるのではないかと、胸に感じて來る。實に「力」である。何物にも此力は溢れてゐる。と思つてゐると、碧の空をふは〳〵と一片の雲がちぎれて飛び、其れが丘の上を過ぎる、若葉が暗く明るく、陰影が身を包んで不思議な思ひがする。行きすぐるとぱつと明るく、葉と葉が搖れて日影を洩す。其葉は未だ伸びきらず、淺綠の色を籠めて搖れてゐるのが、如何にも悅しげで、此を見つめてゐると、「吾が生も若し、永への青年よ」と言ふやうの希望が胸に溢れて來る。

　實に「生」ではないか。昨日まで嵐に吹き晒されて白く見えてゐた遠林の頂が、薄紅色に變り、枯れ果てたものと思はれた銀杏の怪樹に若芽が吹いて來る。枳殼の藪には白い花をつけて、夕風に搖れて鷄の巢の端をば繞つてゐる。「生」をば深く胸に感じて來る。「生」と共に「活動」は伴つて來る。雲は恣まゝに空に舞ひ、風は恣まゝに野山に狂ひ、若芽は恣まゝに伸びて行く。あゝ自由よ、若い心は新綠の中へ來て踴らずにゐられようか。

「生」よ、「活動」よ、「希望」よ、そして「無限

の愛」よ、新緑の福音は斯くの如くにして、人の心に非常の力を與へ、非常の惠みを表はす。「森林には永への青春あり」との語が眞ならば、即ち新緑の中には無限の希望と、永遠の生命とがある。――我が生に如何なる慘苦の降り來るとも、我が眼前に開かれたる此新緑の天地は不斷の樂園ではないか「神の緑の衣」ならば、我が如き者をも其中に包みたまふ惠みの豐かなるかな。吾の生かくて永へに若し。此惠み我のみ獨り享くるにあらず、「緑の衣」は廣く、我が同胞を包むと思ふと、人の心は靜まつて、深い「愛」をば感じて來る――不思議にも此時人は人が懷しくなるのである。

所として神いまさざるなし、います所は即ち「美」がある。砂塵の起るにも、塵埃の飛ぶにも「美」の無い所はない、生々として大能の力を發展し行く宇宙の姿、新緑は其最も美しい形象を人に示すものではないか。無限の力、無限の自由、無限の愛は共に其色の中に溢れてゐる。

緑に萌える若草の芽、其若芽を付けた樹々の枝をば折つて見たまへ。其尖端からは緑の露が溢れ出るかと思はれる。流れずばやまじ、行かずば止まらじ、水よ、雲よ、風よ、森よ、吾生の姿は其處に彰はれてゐる。

夢

不圖昔の夢が胸に浮んで來た。

私は或る山へ登らうとしてゐた。禿山で、頂には樹木も無い。草花が所々懸崖の端に咲いてゐる。私の傍には二人の小兒が居た。一人は男の兒で六歳ばかり、一人は女の兒で四歳ばかり、男の兒は先きに立つて登つて行く、女の兒は私の手に縋つて歩いてゐる、不圖懸崖の頂の草花が目に入つた。

「あれ取つて頂戴な」女の兒は私に取りついて放れない。危いのを、右手で其兒を押へながら、身を曲めて、左手を伸ばし、取らうとすると、砂がほろ〳〵崩れて崖下へ落ちて行く。下は深い谿だ。底深く吹き上げて來る風に草花はゆら〳〵搖れてゐる。また、手を伸ばさうとする、が、一歩踏みはづせば其まゝ深谿へ落ちて了ふ。纔かに花を摘んだ。女の兒は悦んで其花を手にして登つて行く。

此山へ登るものは只私等三人より外に人が無いやうな氣がする、が、何人か、何人とも解らないが、私とは別れて別の途を行つた人のあるやうな氣がする。

途は下り坂となつた。凸凹の途に足が傷んでたまらない。見ると、脚下に遙か遠く、人家が立並んでゐる。薄雲の空は上から覆ひかゝるやうにしてゐるが、鐵色した塔の頂、白壁の家などが、歴々目に入る。私は立留つて眺め入つた。沈靜の色、何の物音一つ聞えて來ない。人家は並んでゐるが、其中に何人も住んでゐる人があるとも思はれない――途が少しづつ下る。ふと思ふと、私の傍を一人二人づつ、旅姿をした男女が通つて、傍目もせずに下つて行く。私も急いで降りようとしてゐると、後方から小足におりて來る人がある。一寸立留つて振廻つて見ると、少し隔つて若い女性が佇んでゐる。見覺えのある顏だな、と思つたが、其人は立つたまゝ動かない、おりて來ようともしない。何人だらう。私は二三歩後戻りした。「あゝ自分の妻だ！」胸の動悸は急に高まつて來た。如何樣したのだ、一所に下りて行かう、と慫めると、視線を落したまゝ動かない。小兒等は俄かに泣き出した。

二人共自分に取縋つて、哀れな聲で「下りて行つて頂戴よ、下りて行つて頂戴よ」顏をば私の袖へ固く押し當てて離れない。妻は猶動か

ない。一所に下りて行つたらば好いだらう、此先き 休場もあるからと云つても猶動かない、疲れたやうな黄色をして靜乎と立つてゐる。「後方へ歸りませう、如何樣に險しくても、今迄の途なら知つてゐますから」たゞそれだけ、眼を閉ぢて動かない、冷たい風が下の方から吹いて來る。――今迄の途なら險しくても知つてゐる、此れから先きの途は如何なるとも判然らないと云ふのか。私は耐らなくなつた。同時に小兒等は大きな聲を擧げて泣き出した。

はつと思ふと眼が醒めた。

私には妻もなく子もない。何故夢に見た人が自分の妻であると知つたか解らない。不思議で耐らなかつた。其時の寂しさは、消えずにいつまでも胸に殘つてゐた。

春の街

私は一人で二階の窓から凝然と戸外を見てゐた。すると、春の日に照らされて暖かさうな下の路上を樣々な人が通つて行く。制服制帽の學生、外套を纏ひ帽子を目深に冠つた老人、重さうに荷を背負つた商人、走り使の丁稚などが、一寸途切れたかと思ふと、又一人二人と現はれて來て、向うに見える角の柳の樹の下を曲つて消えて了ふ。

此人々は一體何處を目當てに行くんだらう、何故忙しさうに小走りして、物騷な樣に、重さうな外套などを着て歩いてゐるのだらう。何故皆一所になつて其樣な重荷なぞを投げ捨てて、着てゐる物を脱ぎ、裸體になつて、狂奔して一樣に此春の街を走つて行かないのか。綠の色は空を覆ひ、樹々の梢に溢れ、巷路々々の草の葉に浮び、紅の色は櫻にのぼり、桃の花に燃えてゐるではないか。何が恐ろしく、何が恥かしいのだらう。

三月某日、今日自分の目前に路上を通つてゐる人も、もう明日は復び同じ姿をして自分の前へ彰はれて來る事はない、いや、一度自分の目前を去つたらば、もう未來永劫逢ふ機會の無い人々かも知れない、確かにさうだ、今目に寫つてゐる人々は竟に自分とは何の關係も無い人なのか、と思ふと、不意に寂しさが胸を襲つて來る。私一人が孤獨なのか、私一人を置いて、人々は皆何處へか行つて了ふのではあるまいか。

風が少し吹いて來た。角の柳の絲が搖れ、街の角には輕く砂塵が捲き揚る。人は一層小急ぎをして通つて行く。いつその事大風が起つて來い。風が來て、家屋も電柱も、路上の柳も、人も自分も、皆一くるめに何處へか遠く吹き飛ばして了つたらば痛快ではあるまいか。

風の日

朝から曇つて日影は射さない。

頭腦の工合が惡いので蒲團を引被いで臥てゐると、玻璃窓越しに戸外が見えて、灰色の空の下に、屋根の上へ欅の枯木が見えてゐる。そして一陣の風がどつと吹いて來ると、其枯木が波を打つて彼方へ靡き、風が過ぎると、復た寂然として立つてゐる。

留守居を賴む婆さんも今日は來ず、隣室の友人は用達しに出て行つた。　い家ではあるが唯一人きり臥てゐると、風の音が一層高く聞える。屋根を越え、戸障子を搖り動かし、向うに見ゆる欅の枯木を靡かして風は一しきり吹いて行く。がた〳〵と屋鳴のしたのが止むと其後の靜けさ。自分の脈搏の音が頭に響くやうで、頭痛が際立つて感ぜられる。

痛む頭を凝然と枕へ着けて、眼を閉ぢてゐると、遠くの方からぐわうと音を立てて風がま

た打當つて來た。障子の破れ目が鳴り、天窓がかたびしやいつて、戸袋が煽られる。一寸間を置くかと思ふと、又襲つて來る。一陣又一陣、次第に其音が高くなつて來ると思つてゐると、最後にどつと打當つて屋根でも剝がれはしまいかとばかり烈しく過ぎたが、此度は其儘止んで了つた。

不圖私は思つた。此れが町中でなく、廣い廣い風に吹き曝される平原の上に立つてゐる家であつたらば如何であらう。林が鳴り枯草が飛び、乾いた土が捲き揚つて、日影の無い空に雲が重々しく、四邊に人の家の無い原中に只一軒立つてゐる家であつたらば如何であらう。私が病んで只一人、口が渴き頭が痛み、水を求めても與へる者もなく、恣まゝに風が吹いて屋根を飛ばし、窓から吹き入り、粉雪を捲いて私の臥てゐる上へ撒き散らしたらば如何であらう。枯草が飛んで枕へかゝり、砂塵が白く床の上を埋めるやうであつたらば如何であらう。寂しからうか、悲しからうか、泣くだらうか、笑ふだらうか、狂うて風と共に躍り廻るだらうか。

苦痛！　肉體の苦痛が何である。滅して仕舞へば夫れ迄ではないか。遍通自在、有りのまゝの姿になつて、風と共に、天にも地にも森にも林にも、海にも、陸にも、山にも、湖水にも、狂ひ廻り躍り廻る事が出來れば愉快ではないか。

「活動」を說き、「希望」を說き、「青春」を說くけれど、「死」は近くにある、「絕望」は遠くない、「廢滅」は旣に背後に迫つてゐるではないか、私は今空屋の中に唯一人風に吹かれて横はつてゐる。何處に、「活動」があらう、「希望」があらう、「青春」があらう。今一層強く風が吹いて家を潰せば夫れまでではないか、雪を捲いて私の五體の上へ降り積まば如何にも仕方がないではないか。

風が此時又かつと鳴つて吹き過ぎた。はつと思つて眼を開くと、窓越しに雪のちら〳〵舞ひ出したのが見える。

復た眼を閉ぢて頭を枕に着けた。

曠野の上の空屋の姿があり〳〵目に入る。

黃ばんだ枯草の徑、茶褐色の櫟林、遠くを遶る山々の頂、雪を包んだ灰色の雲、其曠野の中を私が一人で彷徨つて行く。不圖見ると、一本の枯木の陰に草屋が立つてゐて、近づくと中に一人の男が病み疲れて横はつてゐる。何の氣なしに、其家の中へ入つて、病人の枕頭に立つと、今まで苦痛の爲めに目を閉ぢてゐたのが、人の氣色に目が醒めて、がばと跳起きて、私の裾へ取りつき、逃げようとすると背後から兩肩へしがみ付く。はつと思ふと其病人は自分の半身で、取り付いたが最後離れない。悶え爭ひ、狂ひ戰ふも、遂に力は盡きる。二人は同時に床の上へ倒れた。あゝ最う自分の五體は碎けて了ふ。病人の身體も碎けて了ふ。二人は一所になつて、何處へか飛んで了ふ。風と共に天へも地へも、此地球を離れて遠い天體の所までも。

頭の痛みは猶止まない。が、風は以前のやうに烈しい音は立てない。戸外は靜かに雪が降りだした。

死

「死」の意味は何であらう？

勿論解せられない。けれど「死」程自分に取つて怖ろしいものはない。といふのも、敢て自分の死ぬのが怖ろしいといふのではない。

或夏の初めのことで、自分は弟と共に軒端の瓦の間に作つた雀の巢を搜つて見た。すると中には二匹の雛がちい〳〵鳴いて、親鳥の來るのを待つてゐる。手を捜し入れると、旣に十分羽が伸びてゐたので、一羽は鳴きながら瓦の

間からむぐり出て、一羽は危く自分の掌中に握られた。

梯子を降りると、子雀は眼をきよろ〳〵させ高い動悸に胸を打たせ、折々羽をもが〳〵させてゐる。

弟は傍から連りに見たがつて、自分の手を開かせようとする。――と此時、如何したのか自分は急に殘酷な心になつて、一握りに掌中の子鳥を握り殺したくなつた。力を入れると子雀は脚を悶いて哀れな聲を擧げる。一層力を入れて其頸を捩ぢると、もう聲を立てる力もない。此咄嗟、自分は不意に非常な怖ろしさを感じて身を戰慄せた。急いで手を開くと、子雀の死體は地に落ちた。が、もう動きさうにもしない。

自分は其れを見ると、恐怖の念が全身に沁み渡り、思はず飛ひ上つて馳け出さずには居られなかつた。後方から何者かが追掛けて來る。如何にも耐らない。聲を擧げた。すると、追掛けて來た者は其儘止つたやうである。ほつと息を吐いて、振返つて見ると、何者もゐない。弟は猶以前の場處に地面を見詰めて凝然と立つてゐた。

又或時、自分は家近くの水溜りへ行つて見た。夏の事とて水は大方田に灌がれて底に僅か殘つてゐるばかり、其周圍は白く乾破れてゐる。

見ると、其殘溜水から細い流れが下の方へ出來てゐる傍に、一尾の鯉が死んで横はつてゐる。稍々程經たものと見えて、其目は白く、鱗も所々剝がれ、腹の邊は蟲の喰ひ入つた痕がある。大きさは尺ばかりもあるので、自分は好奇心に驅られて側まで行つて見た。そして棒をもつて其鯉をば突き動かさうとすると、其時不意に其鯉が動き出したやうな氣がして、思はず飛び退いた。

動悸は高く打つて、手先きは慄へる、そして目は暗み、全身に寒さを覺えて立つてもゐられない。わつと聲を擧げて、堤の上へ馳け登つた。四五間は夢中で走つて、立ち止り、思ひさま空氣を吸ひ込むと、初めて元の元氣を恢復した。

が、それから長く其鯉の死骸は自分の日についてゐた。今でも自分の食膳の上へ、日を白くした燒魚が、尾鰭のまゝでつけられると、身ぶるひがして、到底其食を喉へ通すことが出來ない。

或秋の日、自分は前の小山から澤山の楓の木の小さなのを集めて來て鉢植にして、霜に晒し風を避け、一日又一日、其葉の紅を染めて行くのを樂しみにして、机上に載せて眺めてゐた。

次第に紅が濃くなるにつれ、下葉から散りかかる。一夜又一夜、自分の知らぬ間に、風も當らないが、落ちて机上に重なつてゐる。

或朝自分は机に向つて、凝然と其鉢植の楓を見詰めてゐた。はらりと一葉散る。と又一葉枝を離れる。そして、かさつと落ちて前の一葉の上に重なる。其響きの不思議なこと。自分は思はず目を張つて、其落ちた葉を凝視めた。

もう何の音もない。寂然として四邊は元の靜寂さである。ぢつとしてゐると、自分の心臟の鼓動の音ばかりが聞えるやう。すると又一葉が枝を離れた。此度は重ならずに、ひら〳〵とこぼれて鉢の外へ落ちる。耳立ててゐたが何の音も無い。其儘疊の上に平らになつた。

不圖其時に自分は思つた。若し人間に、今よりは一層鋭い聽覺があつたならば、此葉の落つる瞬時に、必ず高い響きを聞いたに違ひない。黑鐵の戸の何處かで鎖されるやうな響きがし、一葉の落つると共に天地のとよめく音を聞き得たではあるまいか。

斯樣思つて鉢の木に向つた。戸の隙から洩れて來る風で楓の葉さきは搖れ　ゐる。そして其

さまが如何にも不思議に思はれて耐らない。今日一日過ぎ、今夜一夜を過ぎたらば、自分の眠つてゐる間に、此木の葉は如何樣な惜しい響きを立て、散り盡すであらう、と思ふと、例の如く恐怖の念が全身に沁み渡つて來た。

急いで其鉢をば破つて、楓の木をば大地の胸へおろしてやつた。纔かに心の落ち着く事が出來た。

「死」とは何でせう。

時から時へ、場處から場處へ、不斷に續いてゐる一つの大きな精神が、其の表現の姿を變じて行く時の有樣をば云ふのではあるまいか。一面から見れば生物の「死」は非常な自由を意味してゐるのかも知れない。「形骸」に捉はれ、「時」の中に囚はれてゐたものが、直ちに「永劫」の世界に驅け入つた姿なのかも知れない。けれど、少なくも生物には活動がある、自由がある。其活動を捨て、自由を捨て、風の吹くまゝ日の照らすまゝ、草野の中に遺骸となつて横はつてゐるのを見た時、何人が其遺骸の陰に籠つてゐる不思議な力を感ぜずにゐられよう。

一つの生物も其自身から見る時は全宇宙の中心ではあるまいか　其生物の一つを我手で殺す時、其陰に無限の哀音を聞くのは當然である。否、我自らも知らず―共に哀んでゐるに違ひない。野山を荒らし、木々の葉を散らし行く風の響きは直ちに我が胸の響きであらう。一葉の枯れて落つる時、天地は震撼し我胸も亦戰慄く。

「死」の意味は何であらう?

解することは出來ない。けれど自分は生物の遺骸に對した時、今いつた「怖」ろしさより外に感ずることは出來ないのである。

曇天

灰色に曇つてゐる空を雨雲がところ〴〵に動いて行き、吹く風が何となく身にしみて、初夏の頃とも思はれない。頻りに氣が沈んで口をきくさへ物憂い。如何樣な親しい友人でも傍にゐると思ふのでさへ、氣懸りでたまらなくなつて來た。

斯樣な日は一人で若葉の森へ來て默想してゐるのが何より嬉しい。私は雜司ケ谷から、目白の森へ入つて行つた。上からは雲が覆ひかゝり、四邊からは若葉が雨氣を含んで其薫が壓して來る。細い下徑を通つて行くと、立ち籠めてゐる若葉が搖いで、心は一層沈んで來る。槐樹の芽の銀白なのや、樫の芽の淡紅なのや、櫻の葉の淡緑の蔭には既に小さな青い實がほ〳〵見えてゐる。森の中は一體に靜粛で、又何處となく懐しい。不知不識引きつけられて、奥へ入つて行く　眞の戀の樂しさは斯る時の眞面目な心のさまに似てゐるのではあるまいかなどと不圖思つて見た。

立樹が稍々途絶えて、下草が一面圓座のやうになつてゐる處へ出た。空が上から明るく覗き込むやうにして、雨雲の滑つて行くのも見える。樹の切株へ腰を下して、楓の樹を背に何方ともなく周圍のさまに眺め入つた。私の居る所から少し隔てて草叢の中を一條の小徑がうね〳〵走つてゐる。雜司ケ谷から落合村の方へ出る途であらう。向うの方は少し坂になつて、其れを下りるとやがて見えなくなつてしまふ。

何の事もないが、若葉に搖ぐ風を何か囁くもののやうに聞いて、暫く恍然としてゐると、不意に近くで物音がした。見ると、前の小徑を一人の男が忙しげに走つて來る。私の方へ近づくと、不圖立ち止つた。そして私に向つて、

「練馬へは何方へまゐりませう」

と訊ねた。如何にも不意なので、私は暫く無言で其男を見詰めた。前垂を折り返して帶にはさみ、矢立を插し、黑い靴下の長いのと、半靴を穿いてゐる。克く市中で見る商館の手代と云ふ風で、復た腰をかゞめて、

「練馬の方へ行くんですが」

と私が默つてゐるのでいぶかしげに尋ねる。私は初めて氣が付いたやうに、前方の小徑を指して、「其れを降りて右へ曲つて行きなさい」と敎へてやつた。すると其男は、二三度腰を曲めて慌てて草の中へ沒して了つた。

――何を求めて左樣忙しいのだらう、何處まで行つたなら氣が落着くのだらう――彼の男には此靜かな若葉の森は目に入らないのか。私は復た默想に沈んで了つた。

「何を求めて左樣忙しいのだらう」私は同じ事を胸の中で繰り返してゐた。恐らく何と云ふ事もないのだらう、求める目的もなく走つてゐるのだらう。只影のやうな生活だ、薄い〳〵影のやうな生活だ。否、影にも形はある、私等の生活に何の形があるか。

「いや、有らう、只知られないばかりだ」と考へたが、「同じ事ぢやないか」と何處かで囁くやうに感じた。

私は心がやゝいら〳〵して立ち上つて森の中を彼所此方歩き出した。若葉が密いで妙に森の中は明るい、そして下草が其明りを受けて不思議な色に見えてゐる。此の上、日光が華かに射し込んで來ようなら、私の胸は躍らずにはゐられまい。

此時不圖何所からか、雨の前兆だと言はれてゐる山鳩の聲がほろ〳〵と聞えて來た。私は思はず立ち止つて耳傾けた。何ものかを求めるやうな、又何か舊い悲しみを思ひ出して泣くやうな其聲、ほう、ほう、と遠いやうな近いやうな。何だか鳥とも思はれない。思はず知らず其聲の方へ引きつけられる。此時胸は空虛になつて、故鄕の山峯の姿が、眼の前へ浮んで來た。――が其幻想も瞬時で消えてしまつた。杜は依然として靜かであるが、若葉は一たいにさわ〳〵と騷ぎだした。

此杜の中には池がある。昔時何人かの屋敷跡だと云ふ事で。平常は近邊の兒童等の魚釣に來てゐない事はないが、雨に怖ぢてか今日は影も見せない。水の半面を覆うて蘆が繁茂り、蘆の中には葭切が鳴いてゐて、藻草の廣く浮かつてゐる中に、點々として薄紫の花が浮いてゐる。――樹に倚つて凝然と池の向岸の若葉の中を見入つてゐると、氣が沈むよりは、穩かになる、そして易らかになる。眼の前のものがさながら胸に映るやうな氣がして來た。風の吹くまま、木の葉の搖ぐまゝ、いつか幼兒の心に返つたやうに思はれる。何の虛飾もない、何の虛僞もない。耳もと近く「汝の思ふまゝに」とやうに愛の籠つた聲で囁かれるのを感じた。私は思はず倚つてゐた樹の幹へ縋りついた。

あゝ自由よ。何の束縛もない、溫かい惠みよ。見たまへ、樹々の葉は今思ふまゝに枝を伸ばし合つて、若葉は風にをどつてゐるではないか。若い若い杜の心、自分の魂も其中に包まれてゐるかと思ふと、「我が春は逝く」と嘆ずる人の心が解らないやうな氣がして來る。

風が少し起つて池の面が亂れる。蘆が搖いで葭切は飛び出して、向岸の草叢へ隱れた。藻の花は波をあびて震へてゐる。森の中には何か下草の花の香が風に薰つて來る。……少しづつ小徑を傳つて小松の原へ出た。當もなく步き廻つてゐると、樹立が一層薄くなつて、前方の畑の見渡される處へ來た。風がまた颯と吹いて麥畑を渡つて來た。すると不圖、今朝手紙を寄越した人の事が胸に浮んで來た。

國を出て、父に連れられて其人は今東京へ來

てゐる。家産が傾いたので一家の人も大方國には止まつてゐられないとの事だ。けれど彼女には柔しい母もある、祖母もある、病氣であるが兄もある、妹もある。何を求めて東京などへ出て來たのか。嚮の日の華かな生活を夢みて、手中の玉でも失くしたやうに、彼の一家の人々は狂奔してゐる。——何故さう慌だしい、生活の渦中に漂つてゐるのか、知らずして漂はされてゐるの　あらうか。今朝は手紙を寄越して、英語を學びたいと云つて來た。英語などは學んで何になる——斯樣な事を思ひながら歩みを續けてゐた。

徑は下つて、登つて、楢の林へ出た。不圖また思つた。若葉の杜へ、此靜かな若葉の杜へ其人を連れて來たらば何と云ふであらう。若葉の緑が美しいと言ふだらうか、森が靜かだと言ふだらうか、夫れとも、斯樣な寂しい場處は厭だといふだらうか。或は又、此小徑をしみじみ話しながら歩いて行つたならば、急に默して、はては泣き出して、自分に取り縋りはしまいか。——徑はいつしか林を出て、又池に向つた方に來てゐた。此方の岸から見ると銀杏樹の新緑がさわやかに、榎、欅などが立ち籠めて、黒い雨雲が其上を壓して走つて行くのが能く見える。

池に面した樹に身を倚せて、また回想の影を追つてゐた。——頽廢した村落の姿、老樹の屹立してゐる荒屋敷のさま。其樹の下で共に遊んだ小兒時代の事、其時の同じ小兒であつた自分と從妹とに、同じ頽廢の運命を負つて、何か大きな力に追はれ、風に吹き散らされる木の葉のやうになつて今では共に都の中へ驅け込んで來てゐるではないか。あゝ「家門」が何であらう、只束縛ではないか。此遺骸を守るために、幾多の人は葬られる。自分等も共に其殉死者の一人となるべき運命を負つてゐるのか、桎梏の爲めに囚へられ、互に自他を欺いて、其が盡すべき尊い力めのやうに思つてゐる。何の自由がある——一度は枯れ盡したかとも思つた樹には若芽が勢よく伸びてゐるではないか。——「何が眞の幸福であらう」否、「何が眞の生活であらう」自分は知らない。けれど、世の樣々な、意味の無い、而して力強い「習俗」の鐵鎖を脱れて、此靜肅な杜の中で、半日の幻想に耽るを得るのは、自分に取つて至大な幸福である。若しあの人も、自分に同じ樣に此杜へ來て、靜かな心になつて、此懷しさを味ふ事が出來るならば、幸福である。狂奔の姿を捨てよ、青葉の杜に隱れたまへ。緑の色は永へに靜かに御身の胸を包むであらうに。——私の頭はやゝ熱して來た。

この時新宿行の汽車が目白驛を發したのか、汽笛を鳴らし林に丘に谺して下を通つて行く。鴉が騷がしく鳴いて、竹藪高く森の上へ群つて來る。汽車が次第に遠く大久保の青葉の中へ埋れて、煙が長く麥畑の上に靡きかゝつてゐる。それをぢつと見てゐると、今にもと脅かしてゐた空は遂に雨となつた。

私は急いで杜を出た。

夏の日

秋元君と二人月島へ用事があつて出掛けて行つた。用事をすまして二人は蘆原の中の小徑を堤の上へ出て、海の方へと歩いて行つた。

眞夏の日の光！　堤の下は一面蘆の葉が眞青に茂つてゐて、海からの風に靡き、白い雲がふはふはと動くともなく動いて、蘆原の上を明るく暗く照らして過ぎて行く。白帆も見える。「房州の海へ行つてらつしやいよ、そして貝のおみやげを澤山ね」と云つた人のことばが不圖思ひ出されて思はず微笑んだ。

空想に耽りながら堤の上を海へ海へと歩い

て行くと、秋元君は連りに自分の學生時代の事を語り出した。初めは實業家にならうとゝしたし、宗教にも入つたし、ストライキもやつたし、隨分熱烈な事もやつた。が、

「其時分には今の君のやうな生活が羨ましくつて、僕等の理想だつたね・・・今ではさうでもないがね」

「僕の生活て、何がさ？」

「多少の收入があつて、呑氣に勉强も出來、時間もあるつて事がね」

「さうかね」

「まあ、世間知らずの者にはそんなものさね」

秋元君と云ふのは慶應義塾の舊い卒業生で、かれこれ四十位の年輩で、至つて、身長の高い、顏の長い、見るから怖さうな男。地方の中學の教員もやり、新聞記者にもなり、二三年は友人間から踪跡を晦ました事もある。今だに獨身で、居所もさだめずにぶらついてゐる。私は同じ雜誌社で編輯をしてゐたので、近頃知合ひになつたのだ。「學生時代には最少しプランのあつた男でしたが」と、此人の學友の一人は評して居た。「あの男の行く途は我々のライフとは稍々沒交渉だね」と社中の一人が云つてゐた。投げやりではあるが相應に親切で、慾氣も薄く功名心も燃えてゐない。肉體に奉ずる事も薄いやうだ、何を樂しみにして居たのであらう？　同人の間に一寸疑問になつてゐる。

海からの風は如何にも心地が好い。蘆の葉がさあつと靡いて、波がざぶ〳〵と根本に寄せて來る。私は復た空想に耽つて、連りに遠くの海へ行つて見たくなつた。――「海へ行つてらつしやいよ」――斯樣な日に遠い濱邊へ行つて、何人も居ない蘆原の中を其人と一所に日に照らされて思ふまゝ歩き廻つてゐたらどうであらう。

「僕がね」と不意に秋元君が言ひ出したので空想は破られた。「僕がね、今の社へ入らない前は、隨分やけを起してむやみと此邊を歩き廻つたもんだ」

「ふむ、だがね、君、やけだけはやめたまへ、如何樣な場合でも」

「所が金錢のやけと來ては起したくても起されない、で、むやみに方々歩いたり、色々な事を考へて見るのさ、まあ時間のやけだね」

「はゝあ・・・」

「其時は又妙に寂しくつてね、一人で此樣な處まで來て見ると、何だか急に氣が沈んでくるが、また其樣な時こそ、どこか眞理てやうなものに觸れるやうな氣がしてね」

「さうかね、寂しい時が却つて眞面目かね」

「さうさ、それがどうも僕には能く解らないがね、時岡（自分等の年少の友人）やなんかも口でこそ色々な事を言つてるがね、あれで惡遊びなんかしても、眞個に樂しいつて事はあるまいよ――藍澤なんかとは違つて、どこかに寂しいつまらないつて氣があるに違ひないと思ふがね」と口疾にしかも語尾に力を入れて云ふ。此人の癖だ。

「さうだらうね、全然の馬鹿にはなれないから」

「いつそなれたら幸福かも知れないがね」

秋元君はそれきり口を噤んで了つた。そして氣の拔けたやうな風をして、海の方を向いて立留つた。

海には白帆が遠く浪の上に浮んで、日の光はキラ〳〵と波の面を照りかへり、房州の濱が戀しくなつて耐らない――「貝のおみやげを澤山ね」耳もとでまたさゝやかれるやうな氣がする。

不圖見ると、秋元君が長い身體をひよろ〳〵運ばせて、堤をおりて細い板橋を渡つて行かうとしてゐる。

「何處へ行くの？」

「つまらない、歸らうや」

「歸らうか」
私は長い身軀の後方の方からついて行つた。
「全然の馬鹿にもなれない！」人は遂に自暴自棄にすらなる事が出來ないぢやないか。「つまらない、空想なんか何になる」私は思はず呟いた。
「うむ」と秋元君は一寸身をねぢ廻したが、別に深く訊き正しもせず、そのまゝ先に立つて歩いて行つた。

渡鳥

十月の下旬からかけて十一月の中旬まで、渡鳥の群が、東京の空の上を騷いで過ぐる事がある。曇り日の夕方或は雨の少し降る日など、牛込小石川邊の高臺の森の上に、幾百ともなく群鳥が喧しい音をたてて舞ひ狂つてゐるのである。赤城神社の杜、築土八幡の杜などは、此等の鳥の群集する場所となつてゐる。
夕方が最も好い。少し小高い見渡しのきく丘へ登つて西の方を眺めやつて見たまへ。幾千の群鳥が輪をゑがき、線と伸び、昇りつ降りつ、一團の黑影と密集するかと思ふと、忽ち散つて、萬片の木の葉の空に舞ふ如く、曇つた空の灰色の雲を背景にして樣々な行動をしてゐるのである。或時は亦杜の中の一本高い樅の樹の枝に二三羽の烏が止つてゐると、其周圍を幾百の渡鳥が群を爲して、隙間も無く攻め寄せる。或は遠く取り卷き或は近く迫り、其羽叩きと、鳴聲とで烏を威嚇してゐる。烏は逃げ損じた武夫の如く、攻圍軍に攻め立てられて、懸命になつて枝に取り縋つてゐるばかり、翼を揖めて鳴聲すら立て得ない。
此等の渡鳥は嵐に吹き捲られてか、木の葉に包まれてか、一群又一群と都の空から消え行つて了ふ。そして十一月の下旬になると、大方其姿も止めてゐない。
あゝ長驅懸軍、彼等は何處を指して行くのであらう　彼等の行く處、木の葉は空に飛び、彼等の過ぐる時嵐は後方から追掛けて來る。雲に包まれ、嵐に擊たれても、行くべき方まで行かずば止まない。一團又一團、群れつ散りつ、次第々々に空を掠めて過ぐる。暫し立ち止まつて、其行方を目送したまへ。海に陸に、一隊又一隊、遙か遠くゼルサレムの淨地へ向つて出發した聖十字軍の姿を思ひ浮べずにはゐられまい。
或夕方私は戸山の原へ出て、草の深く茂つた丘の上へ登り、入日の後の鈍色の雲を眺めて立つてゐた。すると不意にけたゝましい音を立てて、空を鳴きつれて行くものがある。驚いて見上げると、幾百かの群鳥が一團となつて、空も黑くなるばかりに連つて行くのであつた。それも私の立つてゐる丘から、さまで隔らない空の上であるから、羽音まで明かに聞えて怖ろしい位であつた。が、不圖氣がつくと、私が立つてゐる叢の中へ、何か空からぽたんと落ちたものがある。草を分けて見ると、紅の木の實が一つ落ちてゐた。今過ぎて行つた渡鳥が、何處かの杜から啄んで來たものを、誤つて此草原へ落したのか、と思ふと、「はぐれたる木の實よ、漂泊の鳥の翼に乘つて、何處の森より來りしぞ」とやうな、何か不思議な感じがした。其實を拾つて、鳥の行方を見ると、もう其影は次第々々に幽かになつて、入日の雲が微かに明るい地平線下に沒して了つた。
其渡鳥が過ぎた翌日であつた。夕嵐が烈しく起つて原を吹き、杜を吹き、枯草を飛ばし、僅かに殘つてゐた木の葉を捥ぎちぎり、雲の中から霰がたばしつて來た。もう秋の終り、今日よりは冬の領ぞ、とやう感ぜられた。私は又一人、嵐に吹かれながら野路を辿つて行つた。

黍殼の束ねたのが吹き飛ばされ、取り殘された唐黍が赤く畑に晒されてゐた。昨夕の丘へ登つて見たが、只荒涼。灰色の雲が見る〳〵空の上に漫つて來る。

あゝ愈々冬になつたのか。

華かな夏が寂しい秋に遷つて行く時は、物のくま、日の影などに、それとなく人の心に知らるるものであるが、秋が冬に更る時は、心を注めてゐないと、判然らない。渡鳥の最後の一隊、此れが即ち秋の殿軍である。

昨日の夕方鳴き連れて過ぎたのも、此冷たい嵐を人に告げ知らせる爲めであつた。あゝ殿軍の一隊よ、汝等の過ぎ去つた後、世は氷雪の領となるのである。

冬になつてから、ともすると一日か二日、拾ひ物をしたやうな暖かい日がある。斯様な日、前庭の南天の紅い實などに、ばさりと鋭い音を立てて降りるものがある。見ると、それは百舌鳥で、身の引き緊つた、翼の先の切れ尖つた、好個の戰士の姿をしてゐる。其嘴は短く尖つて、眼は爛として輝き、降りると先づ四邊を警戒す。此れは渡鳥のはぐれ者である。肉食鳥には常に戰ふべき敵がある。餌食を求むるにも、先づ敵に意を注がなければならない。爛たる其眼、凛たる其嘴、慓悍の氣は細い身内にみち〳〵てゐる。庭前に降りた一羽の百舌鳥、汝は落武者である、落武者なればこそ一層周圍に氣を配る必要がある。恐る〳〵南天の葉を動かして、紅の果實を啄んでゐたが、忽ち何物に驚いたのか、キアーと一聲長く引いて、眞直に舞ひ上り、壁を越えて姿は見え　くなつて了つた。

落武者の身は何處を指して行くのであらう。

枯林

寂しいものの極みの様に云はれてゐる冬枯の林の中、或る夕方私は其中へさまよひ入つた。一度は葉守の神の宮居とも思はれ、百鳥の鳴き交す紅葉の樂園とも榮えて居た林が、今はもう葉と云ふ葉が盡く落ち盡して、如何なる小枝の端のはしまでも、其あとをとめて見る事ができる。樺の樹、榛の樹、榎、栗などの幹もあらはに、骨のやうになつて、いかにも寒げに立つてゐる。

林の中は寂然して、落葉を踏んで行く私の足音が、次第に罩めて來る四邊の夕靄のうちに消えて行くばかり、外には何の響きもない。私はとある榛の樹の幹に倚つて、凝然と枝の端から上の方を見上げた。空はまだ微少と明るく、雲の浮いてゐるものも見える。克く春の夕方などに、輪をなして樹間に飛んでゐる小さな羽蟲の群も見えず、秋の暮方喧く鳴きながら塒に歸つて行く山鴫の聲も聞えない。只樹間をすかして、日沒後の餘光が微かに横雲の灰色したのを下から照らして、低い山の巓と雲との間に、細長い深紅色を止めてゐるのが見えるばかり。其雲間を遠く眺めやり、其紅の次第に黑くなつて行くのを凝視めて居ると、我知らず涙が眼瞼に溢れて來る。此時の寂しい懐しい思ひは何に譬へようか。

此頃はもう嵐も度々は起らない。野を吹き森を拂ひ、山を越えて爲すべき任務をば爲し果てたのか。只雪を含んだ雲をば野末に遠く地平線の上を彼方此方に追ひやつてゐるばかり。闇の色が林の奥から次第に濃くなつて來るにつれ、寂寞が四邊を領して來る。

不圖氣が付いて見ると、樺の樹の高い小枝に一片の葉がついてゐる。風のありとも思はれないのに、ひら〳〵と廻つて居る。周圍が寂として音もなく動かないのに、此葉のみが微かに聲立てて踴つて居る様がいかにも不思議で、何か

目に見えないものが其葉の陰に來て、其れを吹き鳴らしてゐるのではあるまいかと思ふと、不意に怖ろしい物の力が身に迫るやうな氣がして、五體の緊縮るのを覺える。が、やがて其葉の搖ぎも靜まつて、枯林の中は眞暗となつてしまふ。私は何ほ動かうともせず、闇の中に立ち盡してゐた。

＊　＊　＊　＊　＊

或る朝の事で、普通には霜をれのしたと云はれてゐる、うら寒い曇つた日に、江戸川堤の上をさまよつた。霜は白く刈田の上に置き、堤の枯草の葉に結び、掃き集められさうにも見えてゐる。が、平常霜の朝には見える、華かな麗しい日光も、今朝は隱れて灰色の雲が濃く、雀の鳴聲も續々何處からか、じい〳〵と寒げに聞えて來るばかり。寒さは肌に沁みて、なべての景色が何となく、頭の上から壓するやうだ。ふと此時頭上でから〳〵と鳴る音を聞いた。見上げると堤上に立並ぶさいかちの樹の梢に、莢と莢とが相觸れて音を立てるのであつた。復たからからと鳴る。其寂しい響き。思はず立ち止つて傾聽せずにはゐられない。下にはありとも思はれない風の、梢高く來て觸れるのか、それとも莢の中なるさいかちの實の自づと搖いで發する響きであるか、自然の物音の中で、此程寂しい思ひをさせる物はない。靜かな日に林の中で自づと落つる松かさの響きや、夜更けて後庭つゞきの柴山に、ぽつ〳〵と落つる栗の實の音、孰れも靜寂の感に耐へざらしむるが、霜枯のした川添堤、さいかちの實のから〳〵と鳴るのを聞く程寂しいものはない。ぢつと眼を閉ぢて聽いてゐると、其響きが胸にしみ込み、身はさながら靜寂の中へ消え去つてしまふかのやうに思はれて來る。

折ふし薬場などへ行つて見ると、四邊の靜寂な中で、薬檪の榊の葉のみが、獨りさら〳〵と音立ててゐることがある。周圍の寂しいだけ夫れだけ其物音は不思議な感を起させる。さいかちの實の鳴るのも同樣で、寂しさの中心は其物音に繋がれてゐるやう。聽く者の身も心も其物音に引込まれ、我孤獨と云ふやうの感じがひしひしと胸に迫つて來る。

＊　＊　＊　＊　＊

或る夕暮一人桑畑の間の小徑を辿つて行つた。葉の盡く落ち盡した桑條に風が鳴つて、乾いた畔の土がふつと吹かれて飛ぶ。其時の物寂しさ。畑の向うには檪林が一帶に立つてゐて、ざわ〳〵と騷ぎ立て、其葉は一片二片風にちぎれて飛んで行く。いつたい檪の木は冬にも葉が落ちず、其黄ばんだ枯葉は、春四月の下旬若芽のふくのを待つて落ちるのであるが、他の枯木の林の中に此木は雜つてゐて、嵐の吹き過ぐる每に風が來たと全林に告げ知らす樣に、身を振はせて鳴つてゐるのである。それに加へて此檪林の多くは畑の畔、村落の外郭などを形づくつてゐる。武藏野あたりに多く見る松林、楢林などの中へ入つて行くには、是非一度此木の中を通らずには行かれない。

畑中の小徑は導いて、檪林から、落葉松林の中へ入つて行つた。冬枯の落葉松林、此程寂しい思ひをさせるものが他にあらうか。杉林の闊遠な趣もなく、雜木林の稍々賑かな懷しい感も起させず、一層荒涼な一層寂寥の感に耐へざらしめる。

殊に此林が風に吹き曝される曠原の上とか、燒野の原などに立つてゐる時は一層此趣が感ぜられる。淺間山の麓、追分の原などへ行つて見ると、黑ずんだ燒岩が所々枯野の中に埋つてゐて、草深い北國街道の上には一人の行客の姿も見えず、灰色に曇る空の上に淺間の煙が直ちに登つて行く。此時原へ來て、處々に散在してゐる落葉松の林へ入つて見る。四方の山は雪

が白く、原の上にも林の中にもまだ消え殘つてゐる。そして樹の幹の色は年を經て黯く、枝からは兎絲が垂れさがつてゐる。暫し樹幹に倚つて眼を閉ぢて默想して見たまへ。自分一人永へに無人の野に捨てられたやうな思ひか、然らずば、自然の力の如何にも怖ろしく、人の世の敗滅し行く姿に觸れるやうな思ひがするに違ひない。

徑は次第に遠く、林は深くなる。林の奧からは何か怖ろしいものの吐息が聞えるやうで、私は思はず引返して林を出た。林の外はもう夕闇が迫つて、村の端には燈火の影が見えてゐた。

＊　＊　＊　＊

時とすると冬には稀に、靜穩な溫かい天氣のあるもので、斯樣な日の朝など、獵銃を肩にして枯林の中へ入つて行く。空が紺青に澄渡つて、日の光が直射すると、樹々の梢は此を遮る何物もないので、眩ゆさうに搖れて、霜の華は滴となつてぽた〳〵落ちる。遠くの方には杉の森が鬱然として、其影を倒に空の鏡に寫すやうで、其嶺の互に首肯き合ひ、何か相談でもしてゐるやうに思はれ、其れが破れたらば、今にも嵐となつて荒れだすかと思ふが、其まゝまた休んでしまふ。

林の中は靜寂であるが、何處からか丁々と斧の音が聞え、さあつと枝の空を切る音、どつと幹の倒れる音がし、人聲が交つて來る。其音をたよりに進んで行くと、三四人の人が勢好く鉈を振ひ、斧を振上げて、枝を拂つてゐる。傍には燒火がしてあり、燒火の周圍には背負子を敷いて座が設けてある。其火の傍へ行き、火にあたりながら、何處へ行つたならば獲物が多からうと訊くと、

「冬は兎は篠原の中にゐますぞ、南山へ行つて御覽じろ」

と、鉈の手も休めず、勢よく梢の枝を切り拂ひながら敎へて吳れる。すると他の一人、連りに鎌をといでゐるのが、

「燒山が好い、燒山には屹度一羽や二羽の雉子はゐますぞ」

と、云ふ。自分は敎へられるまゝに復び銃を肩にして其處を出た。次第に遠くなるにつれて、斧の音も鉈の音も聞えずなる。此時風が一陣颯と吹き過ぎ、頭上の枝と枝とが打合つて、からん〳〵と鳴る。白樺の幹の皮は、白くほけ小さく剝げて飛んで行く。風の過ぎた後は一層寂然となる。

小徑はやゝ下つて欅の樹、榎の樹などの下を通つて行く。其樹の幹の如何にも巨大なのに比して、枝振りのしなやかに、極めて微細な梢の端の端までも分れて居るのが、如何にも微妙と云ふ感を起させる。

雜木林を出て、敎へられた南山へ行つたが一匹の兎も居ない、燒山へも出た、けれど同じく一羽の雉子を見かけず、一日駈け廻つて疲れて歸つて來た。

＊　＊　＊　＊

一冬私は雜司ケ谷の森の家で送つたことがある。宵の間は聞えてゐた樹上の風も、夜半過ぐるとやんで了ひ、戶外には何の物音も無い。遲くまで讀書に更かした爲めか、神經を痛めて如何しても眠ることが出來ない。臥床にもぐり込んでも、怖ろしい妄想が湧き上つて來る許り、果ては夢魔にでも襲はれた樣に、五體から冷汗が出る。遂に堪らずなつて飛び起き、寒さもいとはず森の中へ出て行つた。森の中はしんとして暗く冷たい。が、見ると、樹間をすかして一點の燈火絃のやうに下弦の月が登り初めた。

月よ、月よ。私は思はず駈け出して、森の端まで來て、うれしさに聲を擧げようとした。月はまだ低くて光も放たない、たゞ置型のやう

にして東の空に懸つてゐる。常は傲慢な女王の姿で、闇夜に見る數多い可愛い星の影をば打消し、、如何にも冷かな、如何にも誇りがな、其麗はしい月の影も、其夜ばかりは懐しいと思つた。

振返つて見ると、次第に強くなる光につれて、枯枝の影が地に長く墮ち 、杜の中からは何か囁き聲が聞えるやう。復び月に背いて、杜の中へ這入りたくなる。光は射しても闇は猶其處此處に殘つてゐる。そして其闇の中から何人か手招きでもして呼ぶやうで、知らず／＼復たその中へ引きつけられる。寒さは嚴しく肌に透り、從つて頭腦も次第に澄んで來る。今まで心中に潛んで居た樣な思ひもゑぐり取られたやうになり、蠢々として聳え立つてゐる欅の樹の下を行くと、初めは其樹幹の如何にも巨大なのに莊嚴な感に打たれてゐたが、不圖目を閉づると、其巨大な樹木の下をとぼ／＼と辿つて行く自分の卑小な姿が見えて來る。すると不意に自分の身の如何にも微少な者だと云ふ感じがせられ、自分は此樹の下に生れ此樹の下で死んで行く者だとやうに頻り　感ぜられる。もう光も無い、闇も無い。只此まゝ此杜の靜けさの中へ此身は吞み込まれてしまふではないかと思ふと、堪らず、四肢五體が引きしめられる。と思ふと、此時森の奥の方で雉子が一聲鳴いた。大方夜寒に耐へられないのであらう。

月は次第に高く、杜の中もやゝ明るく、落葉に霜が白く、奥の方の茅屋の屋根も見えて來る。全然疲れて急いで家に歸つた。

梅雨

梅雨頃の空合、降つてはゐないが、薄墨色の雲が天を包んで、いつそれが破れるとも覺束ないやうだ。それでも何處からか風が渡ると見えて、浮雲がふは／＼飛んで居る。

渠は出社しようと思つて家を出た。渠は某校の文科の出身で、さる雜誌の編輯に從事してゐる。柏木の知人の家に同居してゐるので、每日甲武線の電車で神田まで往復して居る。日曜日の外は缺かさず出勤すべき筈であるが、とすればそれが弛み勝ちだ。朝九時の出勤の規定が十時となり、十一時となる事もある。氣の勝つた社の編輯長は渠を許して、「奴等は出社て來ずに何をしてゐるのだらう、忙しさうな氣がしてゐるばかりで、實際は何も手につかず、ぶらぶらし　ゐるに違ひない」と言つたが、平常のやうに今日もまた頭が重く、妙に寂しいやうな氣がしてたまらない。少し遲くなつたが、それでも行つて來ようかと家を出た。

停車場までは五町程ある。櫟の樹の二本立つてゐる茶店の前を通つ、鐵道線路に傍ふ砂礫を取る砂場まで來ると、右手に當つて少し高く一帶の雜木林がある。中には陸軍の測量臺が寶夫のといやのやうな形をして立つてゐるが、今では大方人は居ない。曇天の下で杜の綠は一層色が濃く鬱蒼として、風が其中に籠つてざわざわいつてゐる。今迄首を垂れて步んで來たが、渠は不圖頭を上げて森を見た。そして林に吹く風を聞いてゐると、何となく誘ふやうな氣がしてたまらない、しらず／＼足は林の方へ向つて了つた。

桐ケ谷の森、樫、櫟、楡の樹、楢、栗などが立ち罩めて、下草は長く伸び、眞白い小さな花をつけてゐる。渠はいつも寂しい厭な思ひに囚はれて耐らずに飛び出して來るのは此森である。

「寂しい、寂しい」と云ふのは渠の癖になつてゐる。一日働いて電車で歸つて來る。歸つたらばあれもしよう、これもしようと思ひ設けて、急いで家へ來て、さて机に向ふ。と、がつかり

して氣抜がして了ふ。ほつと息をついて、柱に倚つて眼を閉ぢる。不意に氣が滅入るやうになつて到底讀書する勇氣などは無くなる。「寂しいな」何故だか自分も解らないが、一度此寂しさを感じて來たら耐らない。凝然と坐つてゐても、四邊から何者かゞ壓するやうで、室の中も暗くなる。兩手で頭を押へて机の上に肘を突いてゐても、いつか其腕が碎けて了ふ。斯樣な時は希望も無くなる、野心も消えて了ふ。友情だの、戀だの、事業だのと云つた所が一切無意味に思はれて來る。果ては、「何の爲めに人間は生きて居るか」と云ふやうな問題まで考へて來る。「生きたい爲めに生きて居るのなら、死に度ければ死んでも好いではないか」といつも同じ歸結を繰返して考へてゐるが、室内の灰色が次第に濃くなる樣な氣がして、其中に壓せられさうだ。急いで家を飛び出さずにはゐられない。

渠が桐ケ谷の杜へ來るのはいつも此樣にしてであつた。

慣れてゐる途なので、渠は次第に深く這入つて行つた。風が次第に強く吹き渡つて、空の雲は色が薄くはげて行く。雲と雲との間から青空が見えさうになつて來た。

樫の樹の厚く立つてゐる中へ來て、渠は其幹へ身を寄せて凝然としてゐる。鬱蒼としてゐる樫の葉の緑、青々としてゐる下草の色はいつまでも消えず續いてゐるもののやうな氣がして、風はあれど、靜寂の森の中、他に人もないので、自分一人だけが此世に於ける生物だとやうな思ひが起つて來る。友人などは盡く遠くへ消えて影のやうになり、激しい電車の往復、編輯局樓上の喧騷など、皆遠い世の夢のやうになる。心が總て空虛になつて、此まゝ眼を閉ぢてゐたなば、草の葉が下から伸び、樹の枝が下つて來て、自分の身を包んで了ひはしまいかと思はれる。

不圖眼を開けて見た。鳥が一羽つい近くの樹の枝に止つて、キチ／＼鳴いてゐる。其鳴聲が全身に響いて、渠は痩せこけた、ひよろ長い身體を樹幹から離して、草原の中を歩き出した。草原には小さな白いこてまりのやうな花が一面に咲いてゐる。身を屈めて取るともなく其花の一つを取つた。そして無意味に脣に當ててゐる。顔は稍々蒼黑く、頬はこけて、眼は細く釣上つてゐる。鳥はまだ樹上で鳴いてゐたが、近寄る人の氣合にばさと羽音をさせて逃げて了つた。ひよいと渠は頭を上げて、鳥の行くへを目送したが、又力なげに視線を落して其儘歩いて行つた。林は稍々坂になつて、樹がまばらになる。上からは俄かに明るくなつた空がのぞくやうにして見えてゐる。

不圖此時渠の胸に「結婚」云ふ問題が浮んで來た。友人は皆慫めて、「結婚したまへ、寂しさは消えるから」と云つた。父母は、「心もとないから早く結婚せよ」と催促する。渠の答はいつも斯うであつた、「フム、結婚が孤獨の寂しさを破る事が出來るもんか、假令破れても消す事は出來はしない（寂しさは彼に取つて終生離れない伴侶と思つてゐるらしい）――孤獨だつて好いぢやないか、つまらない、妻が出來て子が生れる。そして死んで行く。人類の繁殖が目的なら、何故神は斯樣な煩はしい手續を省いて、最後の目的を一時に果さなかつたらう。今假に人類全體が此地球上から無くなつたならば如何であらう。花も咲かう、鳥も鳴かう、杜の樹が一層茂り、湖水の水が一層溢れ出よう、荒涼寂寞と言つた所で、人間が無ければそれまでではないか――つまらない、何人が結婚なんかするもんか。眉を顰め、脣を噛んで、激昂する對手でもあるやうにむやみに草原を歩く。

此時ぱつとして林影一時に搖いだかと思はれ

ると、氣まぐれな空合ではないか、だんだんになつてゐる雲と雲との間から日の光がきらきらと射出して來た。不思議な物象の變化だ。淡黃色の樫の若葉は躍るやうにゆらいで一齊に光を浴びてゐる。楡の樹はほろ〳〵と白い花をふりこぼす。下草の葉にとまつてゐる黃金色の蝶が閃いて飛び立たうとする。渠は眩いやうに其變幻の姿を目睹つてゐる。

暗く明るく雲の徂徠に林影が搖動する。草の間からは濛々として白い蒸氣が次第に立ち騰る。胸はそれにつれて重く輕くなる。林の奧に魔術師でもゐて、鏡を照らし隱しするやうだ。風が吹いて來る、が、もう乾いてゐる。太い息を吸ひ込むと、身體ぢうに爽かな氣が充ち渡る。歩みも輕くなる。

不圖渠は立止つた。何處か遠くで松蟬の聲が聞え出した。ジイ〳〵と風の合間に傳はつて來る。耳を傾けてゐると、「夏だなあ」と云ふ感じが強く胸に起つて來た。もう夏だ、梅雨の雲が晴れ渡ると、後は直ぐ盛夏だ、と思ふと、暑中休每に歸つた渠の故鄉の山河があり〳〵眼前に見えて來た。淡靑の空に劃然と聳え立つてゐる八ケ岳の姿、裾野の草原、草原つゞきの湖の波の色——故鄉を思ふと共に人戀しさの情が耐らず胸に湧き上つて來た。情が激して來る。日に輝く靑葉の端を見てゐると、身體ぢう慄へるやうで、熱い淚が湧いて來る。渠は其情を抑へようとするやうに、兩手で面を掩うて木蔭へ身をおろした。常は蒼い渠が頰の上にも血の色が上つてくる。

眼を閉ぢ顏を掩うて寂然として坐つてゐると、樣々な感じが胸中を走り過ぐる。故鄉の事、父母の事、友人の事、そして今迄自分を繞つてゐた幾多の女性がつぎ〳〵に閃光の如くひらめいて來た。——空想勝ちな眼を擧げて、放れじと取り縋つた者もあつた。病める身の甲斐なさを熱い淚に浸らして注いだ者もある。幼き戀を互に神かけて祈つた事もある。——不圖、輪郭の正しい、引緊つた、眼尻の上つた、鼻筋の通つた、やゝ蒼白い女の顏が浮んで來た。「芳子」と渠は呟いた。渠の睫は震へるやうで、面を掩うてゐる手は一層固くなつた。「芳子」渠は復び明かに其面影を浮ばせようと、努めたが、もう無益であつた。遠く〳〵霞の奧に消える胡蝶の翼のやうに微かになつて了つた。渠はほつと息をついて、顏に當ててゐた手を放して四周を見廻した。渠の眼は濕つてゐる。兩頰はぽつと紅くなつてゐる。眼を見張つて、遠く見やつたが、猶立ち上らうとはしない。片足は伸ばしたまゝ、片膝を立てて、兩手を組み、顎を其の上へのせて、又凝然と近くの草叢に見入つて了つた。日の光は樫の葉の茂みを洩れて、ちら〳〵と渠の背から頸へかけて陰翳を落してゐる。蟬の聲は又何處へか消えて了つた。

深く〳〵思ひ入つた心の働きが、外部へ對して何の痕跡も殘さずに消えようとは渠には思はれない。芳子は渠が幼時からの戀人であつたのだ。しかし其戀をば打開けて語る機會が無かつた。否、其機會をば作らなかつた。年は經過する。戀ふる心は變らないが、妙に其戀はそれて了つた。渠は芳子の心には何の響きも無いかと疑ひ出した。と言つて、我から言ひ出して見る勇氣も無い。事實其時期は既に過ぎて了つたのだ。「弱いな」と思はず渠は聲を擧げた。「自分の樣な弱い者が何處にある」と、渠は如何にも心外なやうに、不意に草叢から飛び上つた。そして無暗と草原の中を步き出したが、「つまらないぢやないか、馬鹿なッ」と投げ出すやうに言つて脣を嚙んで、首を昂げた。「あゝ活動、活動だ活動、活動、活動さへしてゐれば何もかも忘られるんだ」と兩手を握つて、身軀に力を入れた。そして思ひ決めたやうに、すた〳〵と杜の

小徑を出て來た。

雲の徂徠は定まらない、遠くの方は茫乎として白い靄のかゝつたやうで、近く丘陵の下あたりは日光が鮮かに輝いてゐる。中野の町近き松林の上には空が開いて淡青の色がほのめいてゐる。希望の微笑だ。渠は遠く見やつた。胸が輕く、「五體に生氣が充ち渡る　一何事か爲すとして成らざらん」とやうに自信が湧いて來る。急いで停車場へ驅け付けて、彼は電車へ乘つた。

大久保新宿代々木千駄ケ谷、電車が勢好く風を起し兩側の草や樹を靡かして行くので、愉快でたまらない。右手の方の野や林の上に日光の斑點が描かれて其斑點が次第に移つて行く。早く忙はしい活動の中へ入りたい、何もかも忘れて目の廻る樣な繁忙な中に身を置きたい。電車の搖れるにつれて兩足で踏んでゐる板を叩きたいやうな氣がする。やがて電車は御茶水へ着いた。渠は階段を登つて、駿河臺の通りを元氣よく小川町の方へ降りて行つた。

夕方になつて、開いた空が又閉ぢて、武藏野の上一帶に暗雲が雨を含んで迫つてゐる。電車は疾走して柏木へ着いた。渠は平常のやうに、停車場を出て家の方へ歩いて行く。いかにもがつかりしたと云ふ風で、今朝家を出た時と同樣、若い額を少しうつ向けて、眉を皺せながら危い足どりで痩せた身軀を運んで行く。林に沿つて砂場まで來ると、嚇してゐた空が遂に雨となつて、林はさつと寂しく夕風に鳴つた。

霜月

一年を十二ケ月に區分するのが既に面白いのに、又月々によつて其々趣のあるのは一層面白い事ではないか。

星は數を增すと云ふ十一月。私は殊に此霜月が好きだ。

霜月、名まへが既に優美ではないか。曙かけて日出まで、枯草原、樹々の梢、其上を飾る霜の美しさ、此頃になつて初めて見る事が出來るので。雪よりも白く庭樹一面に置いた朝、井戸よりは白い蒸氣が立ち騰つて、葉陰の柚子の實の黃になりかゝつたのが、うす化粧してゐる可愛らしさ。此頃になると八角金盤の樹は怪しげの花をつけて、天狗の葉團扇にも似た其廣葉の上、朝々霜が冷たく置くと、縮まるやうにして其花は、葉陰に引籠つてゐる。馬蘭の莖には白い花をつけて、花壇の中には、黃菊、白菊、萬顆の珠を飾つてゐる。

あゝ此月、天上には星影が數を增して、地上には菊花が眞盛り、そして人の胸にも堅實な希望が充ち溢れる。

年に一回、我等が地球は、此霜月を定めて、紫紺の空を、無數の群星の間を繞つて行く。幾多の小さな、地球の軌道の兩側に群がつてゐる星共は、此月の來るを待ち受けて、そして我等の地球が一夜一夜其等の中を通つて行く時、一年の間、天上に起つた幾多の祕密をば語らうとするのであらう。靜寂な夜、庭へ出て空を仰いで見ると、燦然たる其光、何とも言はれず懷しく、薄く淡く銀河一帶、斜めに遠く野末に落ちて、ありともない風がさら〳〵と栗の梢に鳴つて、天にも地にも言ひ知らぬ靜かな悅びが充ち溢れてゐる。

また此頃になると入日の雲が殊に美しく、其も夏の日の燃え立つやうな華かさではない、また春の日の薄紅の中に寂しい色を包んでゐるのでもない。其靜かな沈んでゐる黃金の色は、莊嚴で幽遠で、そして無限の希望の光を藏し、また何處ともなく人を引付ける懷しさを籠めてゐる。

若し其を疑ふならば、先づ試みに丘の端に來て、野末に遠く、其より高く天半をぼかして

ゐる此夕映の色を眺めて見たまへ。そして若し傍に竹の林でもあらば、暫く其中に分け入つて見たまへ。竹の葉の一葉一葉が盡く黄金の色を反射してきら／＼と閃いてる。其を見詰めてゐると、何とも知られない不思議な力が、其葉さきに籠つてゐるやうで、其力がまた怪しく其人の胸を掻き亂すに違ひない。而して再び林を出て丘の上に立つて見ると、今までは古王宮の壁の色のやうに輝いてゐた其光、今はもう次第に薄ぐらくなつて、野末はおぼろに山影は黑く、見てゐる人の胸も其につれて寂しさを增して來る。振り返つて見ると、もう竹の林の閃きも消えて、次第に恍惚の境から醒めて來る。其時の心もち。空の上には無限の悲みが漂つてゐて、人も其悲みの中に包まれるのを感ずるに違ひない。

あゝ寂しくて懐しい其憂愁。遠き昔に人々が自然と別れた其恨みをさながら、我等の胸に傳へてゐるのではあるまいか。武藏野の秋の入日、一度此を眺めた人は、必ず自分と同じ思ひに打たるゝに違ひない。

此頃の夕暮毎に、私は此光を仰いで、樣々な思ひを辿つてゐる。或時は高田の杜の上を遠く戸山の原の方に眺めながら、樫の林に這入つて行つて、其中に射し入る靜かな光を浴びたり、また江戸川の堤に出て、其光が水に落ち、水は黃金色を流し、蘆の葉が黑く其面を劃してゐるのを眺めたりなどしてゐる。

大久保の原は私等に取つて思ひ出の多い所だ。而して此處はまた落日を眺むるに尤も適してゐる。左手の杜からかけて半天黃金色を染め出す時、家並の續く町の角から不意に折れて此處へ出る時などは目ぶしい許り、其麗しさに思はず聲を立てずにはゐられない。此處彼處、原上に群れてゐた小兒等さへ手を叩いて、美しい空よ、美しい空よと云つて馳けまはる。遠く飛んで行く水鳥の影も空へ寫るやうだ。

此頃になるとまた折々嵐が吹き起る。

朝日の光が向うの杜の頂を掠めて、庭樹の上に射して來ると、栗の黃葉が寒げに戰ぎ白楊の葉は華かに飜る。暫くすると空は忽ち曇つて來る。雲あしが疾く空を壓して南へ走るかと思ふと、庭の面が急に暗くなつて、樹々の姿が重くるしいやうに見えて來る。と思つてゐると急にはら／＼と時雨がこぼれて來た。疾驅する雲間を洩れて折々、日影が閃くので、銀のつぶてのやうな雨は落葉を叩き、菊花にかゝり、暫く降りつゞいてゐた。

また暫く、此度は不意に北風が吹き起つた。近くの櫟林からは木の葉が間斷なくばら／＼と飛び初めた。雨はもういつしか止んでゐる。が雲行きは前とおなじで、空高く舞ひ狂ふ木の葉を捲き込むやうに、林を壓して走つて行く。

木の葉は止め度もなく降つて來る。庭も籬も目たゝく間に埋れるかと思ふくらゐ。其落ちた葉は、また生きてゐる物のやうに地上をぐるぐる馳けまはる。自分も思はず一所になつて其中を馳けまはり度くなつた。庭へ出た。見上げると空一面、舞狂ふ木の葉隙間もなく、追ひつ追はれつ、遠く／＼何處とも知らず舞つて行く。

櫟林の中へ入ると、どつと打當る風一陣、其度毎に、林もあらはになりはしまいかと思はるるばかり、ばら／＼と木の葉はちぎれて飛ぶ。林を出て、稻田の畔、榛樹のつゞく小徑を行くと、刈り殘された稻の葉が波打つて、案山子の笠はちぎれ、鳴子は搖れて自づと鳴り、畔の藪、かな葎、から瓜がちぎれ／＼に、畑の大根の裏葉は白く飜る。

一連につゞく丘の上、其端に立つてゐる公孫樹、萬片の黃葉は空に飛揚し、松の林は鳴り、竹の林は亂れ、雜木林は大騷亂を起してゐる。私は斯る景色に包まれてゐると、自分の心も自

づと踴り出し、此天地の大浪の中に捲き込まれ、無限際の空に飛んで行きたくなつて來る。

黒雲が幾重亂れ靡いてゐてもさすがに秋だ、空の果に遠く紫紺の色が濃くあらはれて、甲斐が根の低く横はつてゐるのが見える。

丘より杜、杜より薄原、風に追はれて馳けめぐつて、また雜木林の中へ入つた。風が一陣吹き過ぎた後は　只其餘勢に木の葉の落つる音ばかり。其靜けさ寂しさはなか〱平常に増ると思つてゐると、又颯然、風が何處ともなく吹き込んで來る。

あゝ風よ風よ、アルペンの山を吹き越え、アルトの浪を騒がし、岸邊の杜に吹き入つて、若い詩人の胸に如何樣な力を與へた事であらう。「西風」の名篇は斯る日に於て出來たと云ふではないか。

夕暮かけて嵐は靜まる、空は處々に雲切がして、戸幃の隙をもれる寶玉のやうに其間から燦爛たる星影が閃き出す。やがて此等の雲も何處へか消えると、後は滿天の銀砂子、ちら〱として如何にも悦しさうに瞬いてゐる。

また此頃の星の夜程樂しいものはない。

星影の多い夜に一人柴山を登つて行く。紫の空低く垂れて、山の頂にも接してゐるかとばかり、一歩一歩登つて行くにつれ、空は近く星も近く、其頂に行つたら、やがて紫紺の色につゝまれてるであらうかと思ふ時の樂しさ。細徑づたひ、兩側に繁る笹藪の間を辿つてゆくと、夜風が藪に吹き入つてかさ〱と鳴るのも懷しく、何とも言はれない悦しさを覺えて來る。

もう山の頂まで來る。平野は遠く脚下に續いて、枯林の姿は所々に黒く、空は低く垂れて野を圍く繞り、星あかりに薄く其かとばかり見ゆる野面を掠めて、小山を拂ひ、斜めに消えて行く風の響き、自分一人地球の上に立つて、虚空を吹く風に包まれたやう。此風と共に飛んで行つたら、何處とも知らぬ大空の果に揚る事ができるやうに思はれる。

闇の夜はまた秋に限つて、寂しく懷しいものだ。

雲が重く、星影一つも見えないやうな夜、一人林の中に入つて見る。此林は何でもよい、杉林、松林、榛樹林、夫々趣きが異つてゐる。併し私は常々來馴れてゐるので、雜木林が何より好きだ。

夜一人此林の中に入つて來て、櫟、楢、楡などの葉の互に囁き合つてゐるのを聞いてゐると、何か不思議な物語が此等の葉の中に籠つてゐるやうで、自分の心も此に連れて、靜かに踴り出す、而して樹の下へ寄つて、ぢつと耳を澄してゐると、下にはない風が、梢高くを吹き過ぎて行くのであらうか、から〱と葉の鳴るのが聞える。見上げると、うす暗い中をすかして、木の葉がひら〱と落ちて來る。寂しさが身に沁み渡ると思ふと、また言ひ難い懷しさを感じて、思はず其葉を胸に抱かうとする。

私のゐる宿近くの森に、霜の白く置く夜な夜なは必ず雉子の鳴く聲がする。夜寒にたへられないのであらう。木枯の夜はまた雛の鳴く聲がする。そして風も無く月も無く、星影ばかり輝いてゐる靜かな夜は、必ず何處か遠くの方で長く尾を引く、高い物音を聞く。其が一聲で消ゆる時もあれば、また二聲三聲相應呼するかのやうに響く時もある。大きな平野に有りがちな野の聲と云ふのだと聞いてゐたが、隣の老爺は天狗の笑ひ聲だと云つてゐる。

もう樂しい霜月も終りとなり、鷦鷯が夕暮方には、必ず庭の藪陰から飛石の上へ移つてちよつちよと鳴いてゐる。

「兄樣、鷦鷯には何がなるの？」と聞いたのは、

私のゐる宿の小さな女の兒であつた。冬のみ彰はれて來て、夏の間は何處ともなく消えて行く此鳥を、何か他のものの化生のやうに思つてゐるのであらう。餘りに可愛いので、私は、「燕でもなるだらうよ」と云ふと、「あゝさう、家の燕がなつたんだね」と尤もらしく頸をかたげてゐた。

あゝ燕の化身か、其鶺鴒はちよつちよと鳴いて、朝夕何事か人に告げ顏だ。菊の花壇もいつか枯れ果てて、怪しげな八角金盤の花も萎んで了ひ、朝な〳〵霜は增々白く、夜更けると、むさゝびの鳴く聲が軒に聞えて、雪の近く、冬の來るのを示してゐる。

石地藏

昨夜僕は友人と二人で、蚊帳の中に寢て居た。何の故だか如何しても眠れない。十二時の打つのも聞いた。一時も二時も聞いた。其れが妙に心臟に應へて、其度每に身軀ぢうが引緊められるやうな氣がする。眼は增々冴えて來る。ぱつと燈火の點いたやうに室中が明るく見える事がある。蚊帳の萠黃色も鮮かに、友人の寢顏さへ判然と見える。はつと思ふと直ぐもとの暗黑となつて了ふ。と、さてなか〳〵睡られない。闇の中には友人の寢息だけがすや〳〵と聞えてゐる。何故友人だけは睡れて僕は睡れないだらう。僕が如何程苦悶して見ても同伴の友には何のひゞきも無いのか。何處に友人として繫がれてゐる連鎖があるであらう。樂しく睡る者と、覺めて苦しむ者と。不圖其人を呼び覺ましてやらうと、身を伸ばし、兩手を肩にかけて、搖り動かさうとすると、不思議ぢやないか、友人の身軀は石のやうに固くなつて動かない。怖ろしくなつて手を引いた。耳を澄すと、やはり寢息は以前と同樣に聞えてゐる。最一度起してやらうと手を伸ばすと、其瞬間、其人は不意に笑ひ出した。石地藏の笑ひだ。闇に傳はる其物凄さといつたらない。僕は思はず撥ね起きた。心臟の鼓動は烈しい。手を當てて見ると、今にも破れさうな氣がする。前は靜かであつた室の中が、今度は連りに騷がしくなつたやうな氣がする。物音のする度に心臟は一層烈しく打つ。何物の境も盡く沒せられて、無限に廣い闇黑の中を、人間の目にこそ觸れないが、樣々な形をした者が、勝手放題に行き交ひ、躍り廻り、狂ひ合つてゐるではあるまいか。光明の中に住む人間には闇は敵だ。同時に闇の中だけに住んでゐる者があるではあるまいか。――耐らなくなつて來る。何か蚊帳の外部へ觸つたものがある。呼吸が迫む。身軀が固くなる。聲を立てたらば、あらゆる闇中の物が、注意を僕一人に集めはしまいかと云ふ懸念がある。――僕の此苦悶のさまを、何者か何處かで嘲笑つてゐるやうな氣がする。仕方がない、眼を閉ぢて、頭を垂げて、凝乎としてゐると、友人は笑つたきり後は何の音も立てない。石地藏だ。僕は何の感じも無い石地藏と一所に寢て居るんだ。――……と思ふと、もう身の置き所も無い。勇氣を鼓して枕許に置いたマッチを擦つた。闇がぱつと退く。ランプへ點ずると、室中が明るくなつた。僕は幾分か胸が靜かになつた。

蜻蛉

秋の空は灰色に曇つて風が冷たい。昨夜は稍々遲くまで更かしたので、頭も重い、如何にも氣が進まない。でも急に出さなければならない郵便物もあるし、婆やを賴んでやるにしては少し解り難い事もある。だが如何も嫌だな、自分で行きたくはない。婆さんを呼んで見た。

「婆さん、郵便局へ行つて吳れないか」

「えゝ、あの、お片付けをしてからでよろしうございませう」不承々々返辭だ。

「いや好い、僕が行から」ものの十五町とはない所だから僕は出掛けて行つた。

郵便局はつい先き登りの坂の下だ。路に向つて窓が二つ並んで、左の窓際からペンキ塗の壁が三尺ばかり道路の方へ向つて付けてある。兩方の窓口には人が立つてゐて近寄れない。暫く立つてゐると、左方の窓口の學生らしい人が「失禮しました」と會釋をして、其處を去つて行つた。

僕は其窓際へ寄つて、書留小包を頼んで、受取りの出來るのを待つて凝乎と立つてゐた。一二分たつたらう。出し拔けに、實際出し拔けにガアッといふ音がしたと思つたら、何物か僕の頭の上から壓するやうに落ちて來た。アッと思つて見ると、車ぢやないか。荷車だ。轅棒が右の肩越しに背後の板壁に衝當つてゐる。氣が付くと、膝頭が痛くなる、左の踝が痛くなる。肩から掛けて、右手がぶる／＼震へてゐる。櫛卷の女の顏、半被を着た男の顏、眞黑い幾つかの子供の顏が、うよ／＼と周圍一面に群れて目に入る。僕はにたりと笑つた。確かに笑つたと覺えてゐる。が、まだ其儘凝乎と立つてゐた。——するると何人か來て車の轅棒の下をくゞらせて引出して呉れた。

人の群の中を肩へ助けられて郵便局の中に入れられて、暫く休んでゐたが、人だかりがして來て耐らない。人車で歸つて來た。

車の上で身軀ぢうが震へる。色々な思ひが胸に閃いて過ぐる。——あの車は確かに僕の身を碎くために落ちて來たんだな。それが目的で、僕の一寸の隙をつけ狙つてゐたんだなと思つてゐると、不圖胸の中へ故郷に居た頃の幼時の樣が浮んで來た——稻田の間の細い路だ。垂穗が黄になつて、葉が路の上に折れ返つてゐる。其處を通つて學校へ行く途中だ。鞄を掛けてゐる小さな姿が見えるやうだ。不圖見ると、稻の葉の上に蜻蛉が一匹止まつてゐる。朝日を受けて羽を伸ばしてゐる。尾の紅い、羽の先には二重の丸の付いた紅蜻蛉と云ふやつだ。そつと足を忍ばせて近づいて、右手を伸ばして其片羽を押へた。蜻蛉は一寸ばた／＼したが、それきり止んでしまつた。兩羽を一しよに押へると足をもが／＼させる。其足を左の小指でつゝきながら學校へ持つて行つた——そんな事が思ひ出された。私もその蜻蛉だ。吹く風が冷たい。身軀が震へる。

醫師へ寄つて繃帶して貰つて歸つて來た。

櫻の若木の木立の葉が黄になつて散りかゝつてゐる。其さきに棕櫚が二本立つてゐる。ガラス窓が見える。吉田君の濃い頭髪と確然した輪郭の顏とが見える。見ると急に懷しくなつて耐らずに、「吉田君」と縋るやうに呼んだ。吉田君は何も知らずに窓を開けて笑顏を向けた。

郊外

三月となつた。

今降らずば時がないとのやうに大きな切れの雪が小止みなく降つて來る。雨が加はつた。風も出た。やがて霙となつた。地に落ちた雪は端から端から溶けて了ふ。途は一面の深い泥、窪地と云ふ窪地、溝と云ふ溝には泥水が溢れ出す。風がさあつと落ちると、其泥水が動き出し、顫へるやうにして、道側の小川へ逃げ込まうとすると押し返される。逃げ場を失つて道一面に爬ひ廻る。風は一層強く、何處からか雨と雪との有らん限りを送り盡して大地に打ちつけずば止まないとやうに吹いて來る——夜になると、風は少しく穩かになるが、それでも猶、直ぐ隣の寺の境内を立ち隱してゐる杉の防風林に打當る音

がぐわう〳〵響いてゐる。雨の音は四方に聞える。斯様な夜は宏壮な構への家に住むよりは、手狭な小屋の方が一層樂しい。戸外で活動してゐる物皆の響きがひし〳〵胸に迫るやうで、障子一重直ぐ外からは何處までとも知らず闇が續いて、其闇の中を雨と雪とが音を立てて降つてゐるかと思ふと不思議でたまらない。闇に取巻かれ、自然の樂に圍繞せられてゐる一つ家だ。雨も其闇も其物音も此一つ家を壓しようとするのではない。燈火の明るいのにも響きが通ふ。人の胸も、戸外の風雨にも皆若々しい調子が行亙つてゐる。樂しい夜だ。

夜の間に雨は霽れた。草原を斜めに横切つて行くと左方に遠く秩父の山々が一帶に横はつてゐる。輪郭が鮮かで、茶褐色の頂には雪が斑に消え殘つてゐる。「嵐の後のユングフラウ！」懐しさに堪へられず草原の上に立つてゐると思はず涙がこぼれ落ちる、刹那の思ひだ。せめてもの命だ。日常無意味だと思ふ生活を送つてゐるのも此「刹那の思ひ」を求めてゐるのではあるまいか。友人の胸に此「刹那の閃き」を讀む事がある。女性の言語に此「刹那の尊さ」が響く事がある。何故人は此の思ひをのみ辿り、此思ひをのみ味つてゐる事が出來ないだらう。只一人だ、只一人で曠野の中に立つてゐるのだ。其野の果に遠く山影を見る、それが懐しくなくて如何しよう。此まゝ消えて了へ。吹く風と共に五體が四散して了つたらば其様な快心な事は又とあるまいに。――頭を垂れて、復た重い足を引きずつて行くべき方へ行かなければならない。道が少しづつ坂になつて小高い丘の上へ出る。見渡しのきく丘だ。諏訪の森からかけて向う目白臺一帶の枯林の頂は薄紫に染つて來た。やがて若葉の角ぐむ頃ともならう。綠が燃えて驟雨が降り注ぎ、野末の黄雲が風に靡き、霰が飛び、木枯が渡ると、又枯林となる。かくて二十年、三十年、自分等の身も遂に何處へ行つてゐるやら解らないではないか。――竹林の中に途は入つて行くと、日影が射さず、水が溜つてゐて泥深い。注意して其處を通り抜けると、草の廣場になつて、向うの藪には日が暖かさうに照つて鶯の聲が聞えてゐる。

夕暮から又晴れてゐる空が鎖されて、薄鼠色の雲が半天を覆ふ。其雲の色が妙に明るく、途行く人の額に微白く照る。胸の中までも明るくなるやうな氣がする。大久保の通りは長く一條につゞいて、其果が小さな口になつて、木立の間から空が覗くやうにして見えてゐる。

雨模様の空は夜になつて一層黒くなる。一人闇の中を通りから出はづれて、櫟林の中から小高い草山へ登つて見る。水分が多いので、東の方都の空の上、雲は常より紅くぼかされ、其天際には電燈の光眩い高樓の頂が浮んで見えるやうな氣がする。草山の麓からは果なき暗が續いてゐて、所々に火影は見えてゐるが家の在る所は一圓黒く上から壓せられるやうで、其火影も今に消え失せはしまいかと思はれる。ふと遠くの方に響きが聞え出した。次第々々に近くなる。大原の上、暗は破れて、響きと共に細かな火花が飛ぶ。甲武線の終列車でもあらうか。それが過ぎ去ると、闇が一層濃くなつたやうな氣がする。北から吹く風が稍々冷たく覺える。猶立去らず、遠く〳〵眺めやつてゐると、目の馴れた故か、暗黒な空にも猶濃淡の區別が朧氣ながら浮んでゐる。微明るい方を見つめてゐると、今にも其雲が抜けて星影が閃き出しはしまいか、地平線上遠く其星影を蘸して碧の浪が湧き上つて來はしまいかと思はれる。不圖遠く海岸に病を養つてゐる人の事が胸に浮んで來た。たまらずに懐しくなる。日頃は目前の

事にのみ追はれて紛らはされてゐるのが、心に陰影が消えて、相向つてゐる時よりも、一層痛切に其人が思はれて來る。砂丘の中腹、松林の中、波打際に近き病院の一室に、痩せ衰へた病軀を寝臺の上に横へて、砂丘の上に明るく暗く影を落して過ぎ行く雲を眺め、遠く／＼四方から寄せて來て其砂丘の麓に碎ける濤聲を聞いてゐる天才の面影。灰色空の下に立つてゐる、砂丘の姿、家近き杉並樹の風の音に茅ケ崎の海が目の前に見える事がある。今私は闇の夜の草山の頂へ來て草へ跪いて心から其人の祝福を祈つた。

草山を下りて、藪だたみの中の小徑を辿つて來ると、やがて雜木林に入つて、いつか通りへ拔けた。稍々遠くに見える黒い杉並樹の影、其濃い影の下に消えるばかりに見えてゐる窓の火、それも自分が身を入れる家かと思へば懐しくなる。

夢から不圖さめると、近くの林から鶯の聲が聞えて來る。庭に咲き出した丁字の花の香が高く匂つて來る。ガラス越しに戸外を見ると空は曇つてゐる。あゝまた曇つてゐるなと思ふと氣がうんざりする。起き上る勇氣もない。降りさうだ、今にも降りさうだ。――暫くすると果して降り出した。ばら／＼したかと思ふとまた止む。頭が重い。繁劇な市中ならば紛らはされる點もあるが、周圍が靜寂であるだけに曇天の時なぞは耐つたものでない。殊に此頃の曇天と來ては到底たへられない。空が低くなつて今にも天と地と一所になるやうな氣がする。――逃げようか、繁劇な市中生活へ最一度逃げようか。大勢の人が何の爲めかは知らないが、騷ぎ狂つてゐる市中生活が渇望される。狂奔の生活、併し生き／＼とした生活だ。此樣な灰色の空、何の容赦もなく、いつ始まつて、いつ終るともない、取り縋るすべもないやうな空の下に介然として立たせられて耐るも、か、其冷かな面と相面して立たせられて耐るものか。同じ空の下でも大勢で共に居れば紛らせる手段はある。其怖ろしさを散らす法もあらう。何が嫌だと言つて此灰色の空位いやなものはない。人は健康を害ねたと云つて服藥する。併し健康が何にならう。明日知れぬ身は瞬間の連續を驅け足で過ぎて了ひたい。此樣な不安な空の下に家庭なんか作つてゐるのも不自然かも知れない。總て破碎して了ふ。破碎の連續、此がせめてもの單調を破る唯一の途ではあるまいか、とのやうな氣がして來る。――雨はまた降り出した。いつ此灰色の雲が破れて晴朗の日になるだらう。杉の並樹は常より一層色濃く見えてゐる。

風の快い、日の光の美しい朝だ。まだ濕れてゐる草原の上を散歩しながら燻らして行く煙草の味ひは忘られないものの一つだ。薫が高い。總てのものが生き／＼としてゐて、同じく高い薫を放つてゐる。草の若葉の匂ひ、藪に咲く丁字の花の匂ひ。そして總てを載せてゐる大地の日に照らさるゝ匂ひ。林に入れば林の匂ひがある。角ぐみかゝつた若芽の風に漂ふ匂ひ、到るくま／＼若々しさが瀰漫してゐる。藪の中、林の中、木と云ふ木、枝と云ふ枝は思ふまゝに手を伸しあひ、腕を擴げ合つてゐるではないか。自由だ、活動だ。大地から登る其力の勢は大原の上に立つてゐる自分の身をも貫かずにゐようか。力の限り働きたい。

電車に乘つて繁劇な巷を走つて行く。其電車の響きの傳はる所、都會の喧騷は此處から湧くやうな氣がする。路行く人も小急ぎにしてゐる。巷に立つ柳の影は斷えず搖れ、兩側に並び立つ人家も動いてゐるやうだ。都會の總ての物は皆一樣に聲を立てて何處をか目當に走つて

行くやうだ。雨も盲目的に走つて行くやうだ。繁劇な一日の仕事を終つて、電車がトンネルを出抜けて小高い丘の上を走る時、武藏野に暮れて行く春の日の光は柔く、富士の姿は遠くに黒くなつて立つてゐる。夕暮の風は爽かで、例の長い一條の大久保の通りを歩いて行くと、極めて靜かだ、長閑だ。兩側から伸び合つてゐる櫻の枝が微動してゐる。大氣の中には物をしづめて柔げるやうな力が浮動してゐる。

滿天の星影。野は微明るい。丁字の花の香は夜氣に一層高く傳はる。紺青の天が低く垂れて地と接する邊大きな星が輝いてゐる。賑かな夜だ。悠久の思ひが胸をめぐる。活動も繁劇も何もない。唯自分は一人星を仰いで曠野の中に立つてゐるのだ。

都會と自然

(一) 若芽

三月の下旬、雨の細く降りそゝいでゐる日、丸の内の濠に沿うて歩いて行つた。立ち並ぶ柳は既に薄緑して、其下を人は傘を肩にして歩いて行き、電車は輕げに走り過ぎる。何處ともなく「春」の氣合が現はれてゐた。

ふと氣が付いて見ると、電車の敷石の縁に沿うて、若草の二葉が芽をふいてゐる。其芽の緑が如何にも鮮かで元氣が籠つてゐる。若し雨が降り風が吹いて、電車の通行が十日も止つたなら、其草の芽は長く伸びて、敷石の上を覆ひ隱さう、其割目からは根が張つて、石をば碎き果てもしよう、怖ろしい力が二葉の中に包まれてゐる。

實に「春」ではないか。今まで北の空の一隅に蹲つて居た雲の群は、日の光に燦く照らされて、騷ぎ出し、ちぎれ〳〵に亂れて都の上を覆ひ、浮々焉としてニコライ塔の頂を掠めて飛び、帆檣のやうに群り立つてゐる煙突の上を、鳶は輪を描いて舞つてゐる。風が吹くと輕塵が擧がる。馬車を驅つて日比谷の公園を廻る人も多くなつた。見たまへ。此時、都の中、到る處少しの空地でもあれば、春草が一面に生ひ出でて、日毎人の踏まないことのない電車の路の縁にでさへ、土を破つて草の若芽は萌え出づるではないか。

人生「敗滅」の姿は「春」に於て窺はれる。人は誇りがに勝者の冠を戴からとしてゐる其都會に、自然は何も其怖るべき力を示して人を嘲つてゐる。城は春にして草木が深い、けれど草の深いのは獨り古城の址のみでない。今若し命じて一月の間、車馬の通行を禁じ、人の往來を止め、各家戸を鎖して郭外地に立ち退いてゐたならば、其結果は如何樣であらう。恐らく煉瓦を敷きつめた銀座の街頭も忽ち青草の原と化しはしまいか。怖ろしい自然の力よ！勝者と自信してゐる人類も、畢竟大聖の掌上に踊つてゐた悟空のやうに、やがて此力に壓倒される運命を持つてゐるのではなからうか。

私は自分で胸に描いた自然の力の怖ろしさを目前に見るやうな氣がして、樣々な空想に耽りながら、濠端に沿うて歩いて行つた。

(二) 幻影

或冬の日の夕方、私は、上野の臺から不忍池畔へ下つたことがある。夕榮の空は紅にぼかして、向ケ陵一帶の丘陵の森や高樓の頂に、日沒の餘光が反射して、其影は長く水面に落ちてゐる。丘の上遠く富士の姿が黒く鮮かに紅の中に立つてる。我一步臺を下ると、富士は少し見えなくなり、一步又一步、次第に隱れて遂に其姿は森影の後方に沒して了ふ。池の中には、

枯蓮の葉が浮いてゐて、鴨が四五羽氷りついたやうにぢつとしてゐるばかり。常は多い散歩の人の影も見えない。橋を渡り、辨天の社の裏へ出でて、百日紅の枯木へ身を倚せ掛け、凝然と水面を見詰めてゐた。池を繞つて、汽笛の響車馬の響き。夕方のどよみは一つとなつて聞えて來る。

ふと今まで聞えて居た汽笛の音も車馬の響きも聞えずなつて、前面の丘陵が遠く開け、池の水が擴がり、蘆が茂つて、天の紅が上から覆ひかゝるやうにして、人一人ない曠野の姿が眼前に浮んで來た。そして我一人其野の中に行き暮れて、寂しい思ひをしてゐるやうな氣がしてゐると、不意に水鳥の羽叩きがして幻影は消えてしまつた。汽笛の響きは復た耳に入り、煙突からは前のやうに煙を靡かせてゐる。池も以前の狹い池で、枯蓮が寒げに浮いてゐるばかり。

私は池を廻つて家へ歸る途々、西の空の紅の次第に褪せ行くのを見ながら不思議な感に打たれてゐた。

此等の幻影をば、人は呼んで空想だとか神經の作用だとか云ふかも知れないが、私には、自然の力が人の胸中に忍び入つて、不圖した折に、其場所の過去の姿が、未來の樣をば眼前に浮ばせるとより外は思はれない。私は左樣信じてゐる。

（三）白鷺

電車が濠に沿つて紀國坂を下ると、濠を隔てて森がある。杉の樹、松の樹なども交つてゐる。柳の樹が水に臨んでくねり、櫻の葉は既に散つて、枝もあらはに見えてゐる。其曲つた柳の樹の枝に、見たまへ、如何なる日でも、白鷺が一羽止つてゐない事はない。それもほんの只一羽のみで、時には水へ降りて餌を漁つてゐることもあり、或は濠ばたの藪の際に立つてゐる事もある。が、大方は其枝を止り場處としてゐる。

初めて其鳥を見付けたのは、春の雨が細く杜の樹に煙るころであつた。雨の中に白い羽をすぼめて、樹の枝に止つてゐる姿が不圖目に入つた。其侘しい姿が忘れられないので、朝夕通る度毎に電車の窓から見ると、日として其姿の目に入らない事はない。

杜の山櫻の花が散ると、夏の緑は全林を覆ふ。淡緑なの、嫩紅なの、若芽が盡く伸びて、空も、杜も、濠の水も碧一色。只一羽の白鷺を殘して、萬反の碧紗、一顆の白玉を包んだ姿となる。

白雲が遠い空に湧き騰ると、都の上に驟雨がふり注ぐ。杜の青葉が音をたてて、濠の水が白珠を飛ばす頃になると、鷺は何處へか暫く姿を隱して了ふ。

もう再び歸つては來ないかと思つてゐると、見附跡の櫻並樹が落葉して、辨慶橋のたもとの公孫樹が萬片の黃葉を空に飛ばす時となると、復た何處からか舞つて來てもとの處にとまつてゐる。

秋の入日が華かな餘光を西の方の處々とゞめて沈んで了つた後、杜の中がうす暗く、風もない。柳の葉は黃ばんでひら〳〵水に落ちる。見ると、其枝には鷺が變らず眞白い姿をして、凝然と動かずにとまつてゐる。そして折々は仔細ありげに頭を曲げたり、嘴を翼の間にはさんだりして、眠つてでも居るかのやうにしてゐるが、大方の時は其長い頸をば昂然と伸して周圍を瞰下してゐる。

夕闇が暗く杜を包み、水の上を鎖す頃、疲れた身を電車に託して其坂を上る時、不圖窓外を覗ふと、闇をすかして微明と、まがふ方もない其白い姿が認められる。

──あゝ孤獨なる白鷺よ、夕闇の中に、寂しくは

ないか、いつも同じ場處に汝は何を求めてとまつてゐるか？」――私はいつも同じ疑問を胸に繰返して坂を通つてゐた。

或時私は、此鳥の事を思ひながら電車に乘つて行くと、隣へ一人の老人が乘り込んで、如何した機會か、連りに窓外の濠の事をば說いて聞かせた。――昔時此濠は廣い〳〵水溜で、蘆なども茂り、杜は一層深く繁茂し、今辨慶橋になつてゐる所は、渡場の跡で、小さな舟が日每人を載せて通つてゐた。――私は不思議な氣がして聞いてゐると、其老人は赤坂見附で電車を下りて了つた。

「鷺は、其頃から此處に居たのではあるまいか？」――不圖其樣な思ひが胸に閃いた。

濠の此方には、日に幾回となく烈しい響きを立てて電車は上下し、土を盛つたトロッコは、工夫の掛聲勇ましく、風を切つて坂を走り下りる。馬車が通ふ。人車が通ふ。けれど、水の中、或は樹枝の上に、白鷺は何も知らざるもののやうに、少しも動ぜず靜然として立つてゐるではないか。

日每坂は掘り下げられ、人の往來は次第に烈しくなる。けれど、あの一羽の鳥をば、人は如何ともする事は出來ないのか――同じ思ひを繰り返して私は日每坂を往復してゐた。

剎那、怖ろしい考へが胸を衝いて走る。

何日か、此烈しい電車の往復が絕え、車馬の往復の止む時があらう、そして、坂は再び草に覆はれ、水が復び恣に溢れ出す時があらう。否、たしかにある。その時こそは、此一羽の白鷺が幾十の群となつて、歡聲を擧げ、其水、其丘の上を羽音勇ましく飛びまはる事であらう。其羽音、其叫聲は今でも耳に聞えるやうな氣がする。と思ふと、私は恐ろしさに身を慄はさずにはをられなかつた。――見ると、鷺は今柳の枝を舞ひ上つて、何も知らざるものの如く、靜かに杜の上を舞つてゐる。私は思はず、ほつと太息を洩らした。

あゝ孤獨なる白鷺よ、汝の使命は果して何であるか？

（四）暴風雨

八月の下旬から九月の初めにかけて、年々大嵐の起るのが例になつてゐる。夕暮から雲が深く空を鎖して、平日に增して暑さは甚しい。每夜涼しさうに瞬く滿天の星も見えず、都の暗い空の中にニコライ塔が巨然として聳えてゐるのを見るばかりである。今にも雨になりさうな空模樣、涼みの客も雨を氣遣つてか、大川端を次第に立去つて了ふ。――果然、夜半過ぐると、大粒の雨がぼつ〳〵落ち始めた。風も吹き出した。果ては橫ざまに雨が飛び風が荒れて、滿都の電燈は今にも吹き消されんばかりの有樣に見える。暑氣は烈しくも、人々は屋內へ引籠らずには居られない。一夜風雨は吹き荒んだが休む景色もない。

翌朝になると、濠の水は溢れて、電車は車輪に波を蹴立てて進行してゐたが、それもやがて波の爲に喰ひ止められて了つた。土橋近、昨日まで掛聲勇しく、土を掘り石垣を並べてゐたものが、見れば何等の壯觀、濠一面の洪水、溝を埋め、石垣を崩し、滔々として一大河と變じてゐるではないか。――でも、猶雨も休まず、風も休まず、上から吹きおろす風の烈しさ、雨は飛沫のやうになつて、瓦の屋根を爬ふやうにして四方に飛ぶ。物の崩るゝ音、樹の倒るゝ音、而して水の流るゝ音。人つ子一人路を行かず、滿都は只風雨の荒るゝがまゝ、狂ふがまゝ。人は此風雨に囚はれて、出るにも出られず、行くにも行かれざる有樣である。

ところが、一日一夜にして嵐は幸に靜まつた。水は幸にして落ちて了つた。一日置いて

風雨の跡へ行つて見ると――其翌々日などは別しても天氣の好いものだが、天も地も洗ひ去られて雲もなく塵もない。日光が直射して、滿都の破碎の跡を徧く照らしてゐる。

試みに山の手の町の巷路々々へ行つて見ると、吹き破られた生籬の修繕をするもの、庭樹の倒れたのを直すもの、戸障子の破れを補綴してゐるもの、人々は忙しさうに腰をかゞめて走つてゐる。江戸川の岸傳ひ、或は大川を越えて本所深川などへ行くと、戸毎疊を取り出し、床板を放し、泥を浚へ、流れた道具を拾ひ集め、處彼處に集まつて何かわい〳〵喚いてゐる。

一昨日水が溢れて大河となつた濠端を沿うて歩いて行くと、崩された溝の石をば抱き上げるとて、此處に三人、彼處に四人、泥にまみれて呻吟いてゐる。そして、泥を運ぶ長い柄の畚をば二三人して擔いでゐる。

水はもう次第に落ちて、逃げ後れたやうな幾條の細い流れは、枯蘆の根を繞り、石垣の下に咽び、物怖ぢするやうに、少し震へを帶びて、狹いながらに空を其胸に寫してゐる。烏は空から降りて其中で羽を洗つてゐる。――凄じかつた先の日の勢は何處へ失せたらう。

岸へ立つて、凝乎と水面を見てゐると、空の何處からか、或は水の中からか、岸の草の葉の陰からか、から〳〵と云ふ凄い笑ひ聲が聞えるやうな氣がして、私は思はず怖ろしさに身の震へるのを禁じ得なかつた。

高原の村

中央信濃の高原が南に迫つて、地が次第に高く登るとやがて鹽尻嶺一帶の連山となる。嶺の麓は松林の丘が起伏して、其丘を繞つて小村が點綴してゐる。

海拔三千尺の高原村は今鮮かな綠の色に埋つてゐる。松林を鳴らして風は終日吹く。四方の峯には雲が懸つたり、晴れたりする。雨模樣で、雲が濃く山の姿を包んで了ふと、松林が浮き出たやうに眼前に迫る。雨が降り出すと、八月の中旬でも猶寒くて耐らない。雨が霽れると、山際が澄んで空色が濃く、桑畑、稻田、槻の森、松林、其綠の色の鮮かさ、到底平原地方では見られない。

夜風はもう冷たい。月が照つて、峯々の白雲に輝く。稻田を隔てて遠く森陰に燈火がまたゝいてゐる。其森陰の後方は直ぐ山、西の城山と云つて、他の連嶺を離れて孤立してゐる。其山の姿が妙に懷しくて、其山を越えて、向うは何となく海でもあるやうな氣がして、幾度其山の頂へ登つて見たいやうな思ひがしたか知れない。今其山の中腹を貫いて中央東線の汽車が走つてゐる。

村の東を包んで走る連嶺は綠の色が淡い、大方が草山で、全體を描く線が柔かだ。五月頃は山躑躅の花に山の色が薄紅くなる。積雪が夕日に照ると紫が浮ぶ。此連山の中に鉢伏山と云ふのがある。頂が平かで遠望は鉢を伏せたやうに見える。東の山に雲がかゝると思ふと先づ第一に鉢伏の頂を隱す。筑摩野に散在する村々から東方を仰いで、空を劃する優婉なる線の美に打たれるのは此山だ。山の高さは六七千尺に過ぎないが、各種植物の採收に便なる事、此山のやうなのは少い。併し此は篤志な專門家の外には多く知る者があるまい。

西を鎖す連峯は山の色が黑い。岩質が異ふとの事。地質學者に依ると、此東西の兩山脈は日本に亙る大火山脈の二大系統の相異だと云つてゐる。さうかも知れない。鐵壁のやうに連つて、其奧は如何程とも知れない。連峯が簇々として其中には隨分名山がある。槍ケ岳、乘鞍、

槍ケ岳、其他、名を知らない山は群がつて、其頂には今も雪が消えずに條をして見えてゐる。最も手近に見えてゐる山は鉢盛だ。桔梗ケ原を巡つて何處へ行つても此山の見えない事はない。草原・果に嚴として立つてゐる。此山は秋の中旬、よく燒ける事がある。山を包んでゐる笹の燒けるのは、遠く原の上までも灰がまつて來る。

西の峯、東の峯、麓の村々は灌漑の水が缺乏する時は必ず其頂へ登つて雨乞ひをする。村々から寄り集まつた連中が蓑笠の用意で山へ登る。鐘を鳴らし鬨を作つて、山々の草原へ火を付ける。鉢盛へ行き鉢伏へ行く。必ず雨の降らない事はない。東の峯へ雲が湧いたかと思ふと、必ず急雨が來る。「そら東から來たで、甚いぞ」と家々は用意をする。岩燕が幾千となく群れて空を暗く舞ひ出したかと思ふと後から追駈けるやうにして大雨が降つて來る。烈しい、如何にも烈しい。槻の葉は叩き落され、山蕗の葉に穴が開く。今迄涸れた石の白く出てゐた川に忽ち水が奔馳して來る。此山川の岸に沿うて村々の家は建てられてゐる。僅かな水を揚げて水車も仕掛けてある。車はギイーと音を立てて僅かに廻り出す。山川の水は岐れ岐れて幾畝の田へ灌ぐのである。

大旱の幾日も續いた後には必ず見られる現象だ。日中から夕方へかけて連山へ薄く靄がかかる。此が西へ廻ると、落日を包んで炎のやうに燃える。日は眞紅で何物をも燒き盡すやうな勢を示してゐる。森へ射入ると巨きな樹の幹を照らして、樹皮に付いてゐる蘚苔を紅く染める。日が沈んだ後でも、夕燒雲が紅く輝いて餘光が野を照り森を照らす。蟬の聲が喧しかつたのが休んだ後でも、一時雀が騷がしく囀つてゐる。蒼鷺の聲が高くに聞える。と、涼しさが一面に行き亙る。森の中がうす暗くなる。

斯ういふやうな或夕方の事だ。家の人々は家の前へ涼み臺を持ち出して、腰を掛けて、山の方を見ながら色々な話をしてゐた。不圖氣が付くと、杜の入口の樹の蔭で何か黒い者が連りに動いてゐる。カッサ〳〵音もする。何だらうと驚いて見ると、何か眞黑い者が笹を雨手に持つて振りながら連りに踊つてゐる。顏からは白い布が垂れ下つてゐる。「アッ」と聲を擧げて小兒等は家の中へ駈け込んだ。――何だらう。近づいて見ると女のやうだ。頭髮を束ねて其上から頬を覆ふやうにして白い布をかけ、紺の筒袖を着て、雨手に笹を持つてゐる。狂人だ。

キャアと聲を擧げたかと思ふと、恭しく一揖して、カッ〳〵と杜の外へ馳け出して行つた。杜の口まで追ひかけて行つて見ると、一條の街道の上を今の女はカタ〳〵〳〵駈けて行つたが、不圖一軒の家の前へ止まると前と同じやうな事をして踊つてゐる。

涼み臺の處まで歸つて來ると、小兒等も復た家から出て來て、皆で話し合つてゐる。狂女はつい近くの家の者で、去年頃まで何處かの土工か何かについて行つてゐたが、突然歸つて來たかと思ふと、氣が狂つてゐると見えて、取りとめもない事を口にして、御嶽樣の御使だと云つては踊つてゐる。そして男さへ見れば馴々しい話をかけて抱きつく。「俺の赤兒を何處へやつた。早く返せ」といつてはわめく。――惡い者に出逢つたと見えて去年の冬懷姙した。すると不思議な事には穩しくなる。毎日のやうに働いて閑暇さへあれば赤兒の衣服を縫つてゐる。思ひ出したやうに兒守唄を歌つてゐる。と、如何樣したのか其兒は流産して了つた。狂氣は復び始まりだした。男さへ見れば飛び付く、踊り廻る、手の付けやうがない。と、又懷姙した。同

じやうに氣が鎭まつたのが、二度目の流産で、前よりは一層烈しく狂ひ出した。「小兒を小兒を」と何人にでも抱きつく。可哀さうな者だと杜の口に住んでゐる老爺が話して聞かせた。

其夜更けてから、私は一人二階に寢てゐると、「キャー」と云ふ鋭い叫び聲が遠くから聞えて來た。醒めて飛び起きると、垣の外の田圃の方で何か連りに爭ふ聲がする。障子を開けて見た。月が涼しく射して欅の樹が影も暗く稻田の上に投げてゐる。其影の邊で二つの黑い影が摑み合つてゐる。「あゝ、苦しい、其樣な目に逢はせるなら、いつそ殺しちまへ」高い調子の女の聲だ。「自分で死ね」太い男の聲だ。そして二つの形は縺れ合ふやうにしてゐたが、やがて光明へ出た。頭髮の亂れて居る女は後方から、先方へは肌ぬぎになつた男がぐん／＼女を引張つて田圃道を歸つて行つた。――翌朝聞いて見ると、人目が惡いと云つて縛して置いた狂女が、夜、拔け出したので、弟が後を追馳けて出たのださうだ。

養蠶が忙しいので、狂女の番も出來ない。縛しきれないで放して置くと、皆と一所に籠を背にして桑摘みに行く事もある。默つて桑を摘んでゐるかと思ふと、不意に馳け出して踊りまはる、暑い中でも關はずに踊つて居る。

五十戶、八十戶、百戶位の小村は森の中、稻田の間を、其處此處に點在して居る。其小村の各に一人二人位の狂人の居ない事はない。或者は金を失つた爲めに、或者は學問したい爲めに、或者は女房を無くした爲めに狂人になつた。けれど、此等の狂人は何れも騷ぎ廻る者はない、皆默々として働いて居る。或若い男は村の學校で秀才と言はれて居た。當人も學校でも學問するのを希望した、が、老爺が許さない。それが爲めに何度となく家を飛び出して東京へ逃げる、其度每に連れ戾されては甚い折檻を受ける。老爺と云ふのが至つて頑固で、十五六の年から三四十年間の馬追で、嶺を越して諏訪の方までも廣く顏が知られて居る。馬追で商賣もする所から金も少からず貯蓄めた。何としても自分の業を繼がせなければ止まない決心だ。子を連れ歸つて來ると、太い棒を以て擲り上げて、頭でも背でも處きらはず叩く。果は手を後ろに縛して置いては擲る。如何なる強情な子でも遂には折れて從つて了つた。が、子は其後默つて了つて一語も物を言はない。馬を引いては山へ行く。行つては默つて草を刈つて居る。人に逢ふと丁寧に長揖して頭を下げたまゝ其人が通り過ぎるのを待つて居る。そして人が通つて了ふと、頭を擧げてニヤッと笑ふ。如何にも氣味が惡い、――所が此默狂が一度また出奔した事がある。其時の騷ぎと云つたらない。村中の人を賴んで山々谿々を搜しまはす。晝間は鐘を叩いて聲を擧げて呼びまはる。夜は松明をつけて「オーイ／＼」と、山の中の沼だとか池だとかを搜し步く。其松明の火と呼び聲とは兩方の山に響いて物凄い。二日二夜其樣な騷ぎをして搜したが、三日目の朝になると、其默狂は何處からか、ひよつくり出て來て、家の垣の傍で何か取集めて火を燃やして居た。人の騷ぐのなどは耳にはひらないやうだ。にや／＼して居る。

今でもさうだ、脊を丸くして、頭髮をば、毬栗のやうにして、髯なども何日剃つたとも知れないやうな、丸顏の、眼の丸い、熊のやうな男が默つて馬を追ひながら、行くのに逢ふ。人が行き過ぎなければ何時までも頭を垂げて居るのに逢ふ。これが其默狂の父だ。

「お六」と云ふのが居る。「ぼろ玉」と云ふのが居る。「お六」は女房の名前であつたが、數年前に其女房が山中の池に溺れて死んでから氣が

違つた。「玉」と云ふのはもう三十位になるが今迄唖で通つて来た。人の話では玉は只聾は至つて従順な男で、村の素封家の作男をして居た。其の家の下女と馴ひ合つて居たが、女の親が許さない。玉はそれから其家を辞してぶら〳〵で日を送つて居る。何人が勧めても決して女房を貰はない。人に雇はれて食料のある間は寝て食べてゐる。食が無くなると山に入つて薪を採つたり、栗を拾つて来て売つては米を得る。玉が茸を採るに巧みな事は、置いた物を持つて来るやうに、山に入つたかと思ふと直ぐ籠一ぱい持つて来る。何處から採つて来るのかと後方から付いて行くと、藪の下へかゞんだかと思ふと、つツと抜けて谿の下へ下りる。従いて下りると、もう岡に登つてゐる。登るともう姿も無い。向う岡の方で何かごそ〳〵やつてゐる。到底續かないと、ついて行つた者は断念して了つた。着物は何年と云ふ事なく同じ物を着てゐる。ぼろ〳〵になるまで着てゐる。

此「六」と「玉」とは先づ二人一所になつて日を打つてゐる。山の陰の畑を二人は終日耕してゐるが、黙つて互に一語も言はない。と、突然笑ひ出す、一方が笑ふと、又一方も同じく笑ふ。笑つて了ふと又黙つて語らない。只折々口の中で何かぶつ〳〵言つてゐるが、何とも解らない。日打つてゐる畔を人でも通らうなら、何人にでも同じやうに恭しく礼をしてゐる。

或冬の夜の事だ。雪の深く積つた中を、夜番だと云つて拍子木を打ちながら村の中を通つて行くと、田圃の畔の小屋に盛んに火の燃えてゐるのが見える。「火事！」と其方へ駆け付けて見ると、「玉」の小屋だ。焚木を集めて来て盛んに火を燃やしてゐる。其火の先きは小屋の屋根までつきさうだ。戸口まで行くと、中では独りで何かぶつ〳〵言つてゐたが、足音が耳に入つたのか、急に黙つて了つた。「オーイ、危いぢやねえか」と怒鳴ると、何と思つたか、急に「アーイ、お豊か」と云つて、ごそ〳〵と飛び上つたやうで入口を開けた。提灯を突き出してきよろ〳〵真暗い外面を見たが、見えない。やうやく外面の人が目に入つたかと思ふと急に「へえ、へえ」と辞儀をして、頭を下げて了つた。――翌朝となると如何したのか、「玉」の小屋は全く地上に潰れてゐる。玉の姿も見えない。何處へ行つて了つたかと思つてゐると、二三日して玉は其小屋の所へ来て汗を流して小屋を建て直してゐる。何處へ行つてゐたか何人にも解らない。「お豊」とは何人かと聞いて見たが何人も本知つてゐる者がなかつた。

山中には此種の瘋狂が多い。

高原の村は今や活動の時節である。桑木は成長する、蚕児は盛りである。桑を摘む者、草を刈る者、やがて繭を運ぶ馬車、人車、馬も人も車も多忙を極めてゐる。狂人等も其中に入つて黙々として働いてゐる。

葡萄園

山々に取囲まれてゐる国の児童等　遊戯に就いての考へはすこぶる面白い。嘗て私が郷里にゐた時、一人の児童が、それは或小役人の子であつたが、今年は蚕の作がえらくいゝいね、東京もやつぱり蚕様に豊作かと聞くのであつた。東京には蚕が無いよ、と云ふと、「そや、東京は可哀想だね、麦作は好かつたかね」と真面目になつて尋ねるのであつた。

此等の児童が遊戯を思ふにつけて、第一のしるべとなるものは、自分等の村を取囲んでゐる山々の、其頂まで、麓の方からうね〳〵つけられてゐる幾條の小径であつた。何人が何日の昔につけ初めたのかも判らないが、村の東南

からして、崎原松原の中を通じて、頂上の樹立の無くなる所まで其徑は續いてゐるのである。彼等が生れる以前から既につけられてゐた。少し年とつて物心ついた時に、彼等が山を見て第一に問を發するのは此小徑であつた。「祖父さま、あの徑は何人が付けたのです」祖父さまの答は、「何人が付けたか知らないが、舊時からついてゐるのさ」と幾代も〳〵、同じ問に對しては同じ答が繰り返されてゐるのであつた。

自分等の家の前を流るゝ小川の橋の上に立つて眺めやつた時、若しくは村の學校へ行つて、其校舎の窓から遠く望んだ時、いつも山の頂を越えて何處へ行くとも知らず消えてゐる其小徑を見ては、向うは一體何處だらうと云ふ一種の好奇心が兒童等の小さな胸に起るのであつた。そして何人か、自分等と親懇しい人でも家を出て、「東京へ」でも行くと云ふやうな時は、必ず向うに見える其山の頂を越え、其小徑の上を辿り辿り行くやうに思はれ、山の絶頂の空と劃するあたりに其人が立つて、自分等の方を振り返りながら、次第々々に小さくなつて、雲の中へ隱れて行つて了ふやうに思はれてたまらないのであつた。それで、いつでも彼等の胸には早く大きくなつて、あの山へ登つて見たい、あの山へ登つて、あの小徑が導く他國の不思議な景色を望んで見たいとの願ひが充ちてゐた。又實際此郡境の山々を越えて他境へ逃げだした青年の幾人もあつた。彼等を見知らぬ他國へ誘つたものは、此山頂まで通じてゐる細い小徑の力であつた。——所が、今は其山の中腹を穿つて汽車が通じてゐる。汽笛の響きが年中靜かであつた山村の空氣を破つて鳴り渡る。杉林の上に白い煙が一條長くたなびいて殘る。停車場附近へ行くと多少でも他國へ旅行した經驗のある者には一種の旅情を覺えさせる石炭の香がたゞよつてゐる。加之、日淸戰役後初めて日本の地へ渡つたと云はれてゐる「支那草」と云ふ、たけの長い白い花を付けた蓬に似たいら草が、汽車の開通と共に、麥大豆其他の穀類の俵へ付いて運ばれて來たものと見えて、停車場附近、桔梗ケ原の空地には一面に生えだした。周圍の面目が次第に新たになつて來る、總てが動くやうに思はれて來る。さうでなくも他國へ飛び出して見たいと思つてゐた山林の兒童は最う耐らなくなつて來た。此に付いて一つの話がある。

桔梗ケ原の中に廣い葡萄園がある。其園守はつい近くの村の老農であつたが、自分から好んで、其園守になつたのであつた。其園守に一人の男兒があつた。由造と云つてすこぶる元氣の好い兒で、好く老爺の手傳をしては葡萄園の手入れ、酒の釀造に働いてゐた。由造は二匹の犬を飼つて、葡萄園を守らして置いた。其外に馬が一匹、由造は此馬に乘る事が得意で、好く朝早く此葡萄園の傍を通つて附近の桑畑麥畑などへ行く人は、由造が裸馬に跨つて、ホーイ〳〵とかけ聲勇ましく、眞一文字に草叢を横切つて、二匹の犬を後方から驅けさせながら飛んで行くのを見るのであつた。朝の涼しい大原の空氣を彼は馬上で飽くまで吸ふと、馬を松原へ放して、それから朝露のしとゞ充ちてゐる草をば刈るのであつた。草を刈つては日に乾して小屋へ積み入れる。冬の日の馬糧にするので、九月の末旬までには大方此乾草を集めて了ふ。

九月の末旬からかけて、次第に葡萄摘みの面白い時期が始つて來る。近郊の村々から若い男女が集つて來て、樣々な唄をうたひながら、其紫の玉を摘んで籠に入れる。「小木曾とひしや、との水上で、主は柴かろ、ま柴かろ」原の西、木曾路へ入らうとする其口に奈良井と云ふ驛がある。奈良井川の岸、其川には錦襖子が鳴いてゐる、山には夏遲くまで鶯が鳴いてゐる。此驛

の女は昔から色が白く聲が好いと云はれて居る。葡萄摘みの中には奈良井の驛の少女も混つてゐる。「可愛い主さの柴刈る山は涼し風吹け空曇れ」何とも云はれない寂しい節だ。野路行く旅人が夕暮立留つて聞くと云ふのも此處に唄ふやうな節ではあるまいか。夕暮遲く月影の雲間にほのめく頃まで其唄聲をつゞけてゐるが、葡萄摘みの人々は半ばは自分の家に歸り、半ばは園の中へ宿るのであつた。

葡萄摘みの唄聲がやむと、やがて暫くは釀造で喧かであるが、それも靜つて十二月、冬の初め頃には藏の内に幾つかの桶が並び、目張せられて醱酵するのをまつのである。由造の仕事はそれから冬籠りの支度に薪を伐り、枯木を集める事であるが、程なく雪が降り出すと、廣い桔梗ケ原の上に一人の人の影も見えなくなる。馬が裏の厩でこと〳〵蹄をならし、二匹の犬が何かの音に耳をたててゐるが、不意に唸り聲を出して、けたゝましく飛びだして行く。が、別に何事も無かつたのか、連りに鼻を鳴らしながら程なく歸つて來る。由造は老爺と冬籠りの爐邊で來る年も〳〵同じ平和な冬を迭つてゐるのであつた。

此由造の平和な生涯は遂に何事もなく了るべき筈であつたらうが、さうはゆかなかつた。幾多の山岳を切り開き、幾多の谷を埋め、トンネルを穿ち、「中央東線」の鐵路は西城山の中腹から下つて桔梗ケ原の南端へ停車場を設ける事になつた。北の方は原を縱斷して松本の市街から篠ノ井線となり、西は原の南端を横ぎつて木曾路へ入る「中央西線」になるのである。停車場が出來ると共に夏は學生の東京より歸省して此葡萄園へ遊びに來る者が次第に多くなつた。葡萄を買つて行くもの、葡萄酒の罎詰を携へて歸るもの。或時は布哇へ行つて居たと云ふ夫婦連れ、白い金巾の洋服を着せた可愛い子供を連れた一行が尋ねて來て、葡萄を買つて歸つた事もある。其人々の話に、汽車で幾日、汽船で幾日、棕梠だの椰子だのと名も多く聞いた事のない樹々が茂つてゐる大きな島へ上陸するので、殊に山も陸も見えない水の上を幾日も走つて行くと聞かせられた時には、由造の胸には何となく一種の押へ難い好奇心が湧くのであつた。來る人も來る人も由造には珍らしく目新らしく感ぜられた。殊に夏の烈日の下に照らされて、草いきれのする大原の上を二條の鐵軌が眞黑に光つて、草を分けて何處までも〳〵眞直ぐに走つてゐる姿は如何にも不思議に思はずには居られない。其の上を煙を吐き、怖ろしき響きを立てて、眞黑な汽車が日に幾回となく疾走して行くではないか。怖ろしいやうな、又不思議なやうな好奇心に驅られて是非それへ乘つて遠く〳〵何處までも行つて見たいやうな氣がして耐らなくなつて來た。

汽車が出來ての其翌年の夏、まだ葡萄摘みには間のある八月の上旬頃、由造は毎年の習慣で、山から取つて來た青い篠竹で葡萄を入れる籠を編むのであつた。晝間は流石に暑さに耐へられないが、夜間の風の涼しさ、其涼風をうけながら由造は老爺と二人、一生懸命に籠をあんでゐる。其樣な夜は老爺は必ず此原で行はれた、古の戰爭の話をして聞かせる。由造は年々聞き飽きたものの、老爺の話の上手なのと、一つは幾度聞いても又多少別種の興味を覺えるものは古代武士のロマンティックな戰物語である。原の西の方にある、山本勘助の捨兒にされてゐた松だとか、馬場美濃守が如何した處だとか、木曾義仲の陣屋が何處だとか虚實取りまぜての話。殊に此老爺が一つの誇りは其時武田方に付いてゐた齋藤周防と云ふ武士が自分の家の先祖であるとの事であつた。由造もさすが遠い世の物語とのみは思はず、眼を輝かせて聞い

てゐた。
　或晩の事で、二人は同じく竹籠を編んで、又同じ物語を繰り返してゐたが、其時由造は不意に籠をあむ手をやめて、老爺の方を見て、
「ね、老爺さん、つまらねえぢやねえか、斯うやつて毎年同じ事ばかりやつてゐたつて」
　老爺は愕いた。
「何がつまらねえ」
「それでも、老爺さんが能く話す、御先祖様てのは、大變えらい軍人だつていふぢやねえか」
「さうよ」
「其豪い人の子孫が、こんな葡萄園の番人なんかし　つまらないぢやねえか」
「何がつまらねえ、葡萄園の番人だつて結構ぢやねえか、正直でさへあれや人間は好いのだ」
　二人の會話はこれで斷えて了つた。
　老爺は不安らしい顔付をして由造の方を見るのであつたが、由造は其儘何もいはず復び籠を編む手を續けてゐた。「葡萄園の番人だつて結構ぢやねえか」「何が結構な事があるものか、年々同じ事ばかり繰り返して、其中には老爺と同じやうな老人になつて了ふのか」と思ふと由造は何だか押へられないやうな力で跳ね廻りたくなつて來た。急に立つて外へ出て見た。

　星明りで野はあかるい。それに、見ると處々に火が燃えてゐる。村々から馬を牽つて來て夜間草を喰はせるので、此處に一團、彼處に一團燃火をしては、其等の馬から遠く離れない所に人々は番をしてゐるのである。由造も急いで、自分の厩から馬を引張りだして、飛び乘つて、最も遠くの方に見えて居る燃火を目がけて、暗の中を驀地に馳せだした。不意の蹄の音に驚いた其附近に散在してゐた馬共が高嘶をして縱横に駈け廻る。犬が吠えて後を追ふ。燃火の周圍の番人が狼狽して立ち上る。由造は思ふまゝに疾驅して燃火に近づいたと思ふと、ひらりと飛んで地に下りた。やがて手綱を取つてのそりのそり火の傍まで近寄つた。「皆なの衆、御苦勞樣」と聲をかける。燃火の周圍の番人等は、不意に暗の中から由造が現はれて來たので、不氣味な樣に暫く互に顏を見合はせてゐたが、やがてそれと見定めたか、「どんしたんだ、出拔に吃驚するぢやねえか」と稍々怒つたやうな調子で云ふ。由造は只默つてにや〳〵してゐたが、暫くすると又其馬に飛び乘つて元來た途に疾走しだした。――復び馬蹄の響き、馬共の奔逃する騷ぎ、犬の吠ゆる聲、燃火の周圍にはぱつと黒い影が遠退いて、明るい火が長く草の上へ射した。

　由造は自分の家の戸口まで乘り付けて馬を厩へ繋いで、出て來た。すると、此時松本行の終列車がグヮウ〳〵響きながら、赤い大きな眼のやうな光を輝かせて、次第々々に松林の中に走せ去つて行くのであつた。由造は凝然と立ち留つて、其響きの遠く〳〵消え盡すまで行方を見送つてゐた。
　其頃から由造の擧動は次第に荒々しくなつて來た。馬を無暗に叱り付ける、馬は怖ぢけて立竦んで了ふ。犬も尾を垂れて恐る〳〵足許へ寄つて來るが、一寸した擧動で逃げて了ふ。老爺も雇はれて來る男等も皆由造の樣子の變つたのに駭いてゐた。
　九月の上旬、二百十日前後は、例年の如く大暴風が中央信濃の此高原の上を吹き捲つて行く。野を吹き、森を吹き、山を吹き、地上のあらゆるものを吹き盡さずはやまないと云ふやうな勢を以て此大原の上をば荒して行くのである。何物として動いて居ない者はない、何物として聲を擧げてゐないものはない、有らん限りの力を盡して活動してゐるやうに思はれる。一日一夜、吹き捲つた後はもう空が澄んで秋の氣が爽かに野山に充ちみちて來る――其大嵐のあつた日ださうな、由造の姿は何處へか消え

て無くなつて了つた。老爺は血眼になつて求めた。得られない。村人を賴んで森や林や、好く人の行方を探す時にする大騷をして求めたが更に判然らない。心當りの遠方を聞き合はせても判然らない。嵐は由造を包んで何處へ迯つた事か、それから後一年、原の葡萄園には老爺が死んで、今では他の人が來て番人をしてゐるが、由造の行方は今だに判明らない。

汽車が通じてから桔梗ケ原を繞る幾多の村々には種々な變化が起りつゝある。鹽尻の古驛、中仙道の肝要な宿場の一つであつた其町も、今は殆んど頽廢して、巷路の上に草が生じ、家々の軒が傾いて、折々停車場から峠下まで通つて來る馬車は、疲れ切つたやうな瘦馬の歩みが遲く、がた〳〵と今にも轉覆しさうに思はれるが、喇叭を鳴らして、其響きが暗い家々の隅々へ反響するやうにして通つて行く。其他は荷馬車さへ多く通らない。それに、此驛は諏訪へ越す峠下に當つて居るので、舊時から遊廓が設けられてある。秋の夜、星明りが幽かに照らして、山々の影がほの黒く見え、野には一面蟲の聲がしてゐるやうな時、此破驛の端の一郭から、折々絃歌の聲が起つて來るが、秋夜の寂しさを破るどころか、一層凄涼の感を增さしめる。

墓

雜司ケ谷の森、目白の通りから右へ折れて雜木林の中を行くと、椿の藪の間から小川の岸へ出る。此に沿うて橋を渡ると、楡の樹が一本流の上を覆ひ、初夏の頃には眞白い花が青葉に匂ひ、水にこぼれて柔しい風情を見せてゐるが、此頃はもう、其葉の戰ぎも寂しい音を立てゝ、下ゆく水の流も幽かに咽んでゐるばかり。途は少し登つて黍畑の間から草叢へ出ると、桐樹林となり、廣い途を横ぎると、此處には幾十の墓標の立つてゐるのが見出される。

夕日が武藏野の果に沈んで餘光天の一半を燃やしてゐる頃、此墓場の中へ來て立つて見たまへ。墓場を抱いて繁茂してゐる竹の林、風を含んで其葉さきが搖れ合ひ、墓場の北隅に立つ銀杏樹の巨樹、未だ萬片の錦をば飾らないが、盡く北方を指す枝の不思議なさま、此等が皆夕べの澄渡る空氣の中に爽かな氣色を見せてゐる。

此時、見ると其鴨脚樹の下近く、一基の墓標の立つてゐるのに氣が付くであらう。墓標を包んで樒の綠葉は厚く茂り、棕櫚や芭蕉の破葉がかさこそと夕風に鳴り、其間には小さな水鉢が据ゑられて、萎びた花環がそなへられてある。基石を廻つてクローバーの葉が半ば枯れかゝり、其葉の中には小さな羽蟲が飛んでゐる。

何人の墓標と思ひたまふぞ。

柴生の上を最少し近く立ち寄つて、心籠めて見たまへ。森の上の夕映の色が、此時最後の光を投げて、碑の面を鮮かに輝らすならば、「淨華八雲居士」と云ふ文字が、碑面に浮び出づるやうに見らるゝであらう。八雲居士、此は我が八雲小泉先生の御墓ではないか。

あゝ夕映の紅、嘗て南米の大野の中に先生を照らし、深き憂愁を覺えしめた其同じ光は、今靜かなる先生の御墓を照らしてゐるではないか。實に百代の愁ひも瞬時、紅に宿り、空に浮び、我等祖先が養牧の時代、華かなりし夏の別れを悲んだ曠野の嘆きは、さながら我等が胸に潛んで、今に猶ゆゑ知らぬ悲調を奏でてゐるではないか。其夕映の色、其夕映の紅も野を罩め森を包み、墓場を照らし人に無限の思ひを抱かせる。

羅馬の郊外、カンパニヤの野のほとり、橄欖

の葉に包まれて並び立つてゐるといふ詩人等の墓標のさまは此御墓の靜かなのに似てゐるであらうか。夕風が稍々強く野を遠く吹いて來て御墓の樒にさら〳〵と鳴つてゐる。

祖國を去つてゼルマンの僻地に隱者の如き生を送り、やがて自殺に終つたトーマス・ベドース、其「ドリーム、ペドラリー」の一篇を推して全バイロンをも壓すと先生は評せられたが、其人の痛しい物語、此をば、遠く故國を去つて此武藏野の片ほとりに永眠したまふ先生の身上と思ひ合はせたならば、何人とても傷ましい感の耐へられなくなつて來るであらう。

實に美しくて傷ましい詩歌のやうだ。此ぞ先生が一生涯の歷史であつた。グリシャの海、英國の野邊、「チタ」の作者として其美に醉ひたまひし北米の曠野、幾度先生が回想の園生の中に現はれ來つたらう。萬里の波濤を遠く此邦に來たまうて、やがて此武藏野を永久の休息所とはなしたまふ。神の「綠の衣」か、自然は常に先生を包み、先生の前に美の國を現出するのであつた。

嘗て月明かな夕べ、ドヴァー海峽、潮の響きに人生の悲調をたぐへた詩人があつた。今先生の前、自然は不斷の樂を奏して時より時に過ぎて行く。波には千古の響きあり、風に百代の騷きを聞くと。而して此樂や實に人生の悲調、幾代の幽韻。美しき陰には憂愁ひそみ、紅なるは恐懼を包む、我等が胸には昔人の血潮流れ、我等を繞らすは昔人棲息した其自然の美、かくてその空ゆく雲の一片にも、小川に浮ぶ花片にも昔の魂の騷きが聞ゆるではないか。

もう落紅盡く消え去つて、鷄脚樹に風が荒れ夕闇は四邊を鎖して來る。あゝ其風の中、先生の御聲も交つてゐるであらう。離々として枯れかゝつた草は地に靡き、其中に立つ人の身には無窮の思ひが迫つて來る。

心ある人は行いて見たまへ。雜司ケ谷の森、其森の中に立つ先生の御墓、むさし野は此處に無上の寶を藏して、永へに自然の嘆美者が尋ねて來るのを待つてゐる。

森の庵

今ではさうでもあるまいが、少し以前までは、よく何處の村々へ行つても、森の中、山の陰などへ庵を設けて、其中に一人二人の尼の籠つてゐるのを見かけないことはなかつた。朝早く森の中から鉦の聲、木魚の響きが聞えて來ると、床の中で村の兒童等は、覺束なげな其音を耳にすると、何物か目に見えぬ物に襲はれるやうに、頭を縮めて復び夜着の中にむぐり込み、「母樣、庵主樣の木魚がはじまつたよ」と小聲で騷くのであつた。朝霧の中から遠く〳〵と響いて來る其音は彼等に取つて如何にも解し難い不思議なものとせられてゐた。そして夕方など森の中に歸つて行く老尼の後姿、黑い衣に何か袋やうのものを肩にして、風に吹かれながらとぼとぼ遠くなつて行くのを見てゐると、小兒心にも、何となく寂しく、そして怖しい感じを抱かずにはゐられなかつた。

されば、尼と言へば直ちに其人の身に何か物語めいた傷しい歷史のある事と思ひ、常に一種の好奇心に驅られるのであつた。

丁度私が借りてゐた原町の宿の身内の人で、武さし野のあざが谷村に庵主をしてゐる人があつた。廣い野の森の中の尼の庵、其を思ふと、どうも行つて見たいやうな氣がしてたまらなくなる。早速宿の人から途を敎はつて尋ねて行く事とした。

初めて行つたのは秋十一月、風の烈しく吹く日であつた。

中野の驛から汽車を降り、線路を左に森に入

ると、草龍膽の紫なのが秋の名殘を見せて、此處彼處に匂ひ、一陣襲ひ來る嵐の響き、全林が駭き亂れて木の葉は大方吹きちぎられて空に舞ひ、下草は地にひれ伏して風の過ぐるのを待つてゐる。鵯の聲、百舌鳥の聲。嵐の波に何處へか吹き送られて、風の過ぎた後の靜けさ。蟲が復た其處此處の草叢から鳴き出す。

斯樣な間の途を凡そ一里、あざが谷村に入つて、「庵主さんは、庵主さんは」と訊いて行くと、「村はづれに地藏樣が立つてゐますね、そこから薄の中の小徑を左へはひると、其つき當りが太子庵でさあ」と敎へて與れた。

敎へられたまゝ、薄原の中、卒塔婆の斜めに亂立してゐる間を行くと、さゝやかな門があつて、入ると、芭蕉の葉が亂れ亂れて化物のやうな樣に立つてゐて、紫苑の花が枯れ〳〵に、南天の實が紅くなりかゝつてゐる。

音づれると、障子を開けて、兩頰がふくらんで落ちさうな老尼が現はれた。私は訪ねて來た所以を話して、宿から賴まれた物など渡すと、尼は、「まあ其はどうも、ようこそ」と、佛壇の前の、小さな爐を切つて在る所へ導く。爐のそばには座蒲團が敷いて在つて、其上に三毛の猫が細い眼をして居眠してゐる。

風が颯と林に當つたかと思ふと、滿面に夕陽を受けてゐる障子に枯薄がさあ〳〵と靡きかかり、竿につるした乾柿が落ちさうに搖れるのが見える。

尼は茶をすゝめ、柿の實をすゝめて與れる。日影が次第に薄れて障子の面が暗くなり、風は一層强く吹きつけて來る。

私は歸らうとしたが、庵主が、今に使の者も歸つて來るであらう、寂しくも一夜泊つて行けとすゝめて與れるので、私は曠野の夜の靜けさを味つて見たいやうな氣がして、言ふまゝに泊めて貰ふことにした。

やがて使の人は歸つて來た。見ると年は庵主と同じくらゐ、片眼の婆さんだ。今日は中野の町へ知邊を尋ねかた〴〵買物に行つたとの事だ。

夕餐が終へると西風は吹きやんだ。只もう靜寂、木の葉の折々かさ〳〵と落つるばかり。栗をゆでながら爐邊に寄つて、話を始める。庵主は黑い綿入の上に麻の短い羽織めいたものを着て、爐邊に坐つて珠數つまぐつてゐる。其細い目は、額ぢうの皺で、笑ふ度に消えるやう。片眼の婆さんは、火箸で火をばかき立てながら、「はあ〳〵」と受け答へをしてゐる。此も眞に人の好ささうに見えてゐる。

戶外の薄がさら〳〵と音を立てると、佛壇の上の、燈明が小暗くゆらいで、二人の影が疊の上にうすく長くゆれてゐる。戶外の響きがやむと、只爐の上に栗が煮えてこと〳〵と鳴るばかり。何となく物語の一節を見るやうな景色だ。ぢつと見てゐると、人物こそ違へ、私はそゞろに「浮世の波」の一節を憶ひ起さずには居られなかつた。

「其德利とりて爐の邊に寄りたまへ御僧、酒は年ふりたる匈牙利酒なり」名は忘れたれど、彼の元氣好き若者の老僧と相對して、戶外の嵐を聞きながら物語に夜を更かしたのは、斯る林の中ではなかつたらうか。浮世の波にさそはれて、美しい王妃の前に身を捧げた哀れな若者、其若者の運命を憫んで、霜の朝、林の中に立つてゐた老僧の面影、此等を胸に描いて思はず空想に耽つてゐると、「もうゆだりました、おあがりなされ」と、栗を盆の上へあけながら、婆さんがすゝめて與れる。

不意に空想から破られて、私は少し狼狽てて盆の上の栗をむき始めた。

「庵主さん、國をお出さつたのはいつですか」

「左樣、もう四十年位にはなりますでせうか」

「四十年、大變ですね、其から一度も歸らないですか」

「いゝえ、幾度も歸りました」

「お國はたしか越中でしたね」

「はあ、越中で御座います」と、其から庵主は諄々として、其身の昔譚を語り出した。

「私が初めて國を出ました時は、同じ年恰好の人達十二人一所でした。御存じのやうに私の國では、禪宗と淨土宗とが盛で御座いますから、尼樣の御寺なぞも、所々方々に御座いました。其中でも、高岡近くの山の中、松林の中に御座いますのが、彼の界隈で一番大きな御寺で御座いました。此處にはいつでも二三百人の若い尼樣達が集まつて朝夕御つとめをなさいます。私の在所は高岡近くで御座いますが、市街へ泊掛けに出かけました時など、老年の尼樣に連れられて、黒い衣に白い袈裟を掛けて、珠數つまぐつて若い尼樣達が山から降りて來られます。其を見ますと、只何と無く涙の出るやうに懷かしくなりますのでした。夫で理由もなく尼樣になりたい爲りたいといふのが、其頃の若い娘達の願で御座いました。

其に一人出家すれば宗族濟はれるとか申しまして、家の人達も慫めます。愈々尼樣になる事に定まりまして、髮を剃り阿彌陀樣のお前に坐りました時は、悅しいやうな悲しいやうな、ほろほろと涙がこぼれました。香の薰が高く、金色の御像から光が射すやうで、恍惚として居りますと、尼樣達が一齊にあげる讀經の聲に、急に心細くなり、いつそ衣を脫いで歸りたいと思ひ出しました。眞に御恥しい事で。

私の入りましたのは、先刻も申しました高岡近くの其の御寺で、其處に居りました事は三年位、其うち十二人の人達と二人の老寄の方に連れられて行脚に出かける事になりました。國元を出ましたのは春の初め、高岡の御城下の柳畷が薄青く見え、曳船の渡から富山へは二里、陸路親不知子不知の嶮岨を越しまして、越後の方へまゐります。波に追はれては岩間に隱れ、波が退くと其隙に砂地を走ります、眞に心細い一筋途、岩が波風に暴露されて黑くなつてゐるのが物凄く、越後路へ這入りますと、波の向うに佐渡が島が見えまして、泊、糸魚川などを通りまして、海ばた傳ひにやがて五智の如來樣へ詣でます。もう御庭の山櫻の花が散りこぼれ、海棠や梨子の花が咲いて、宵月夜の頃で御座いました。夜もすがら御堂の中で御通夜を致しました。夜が更けて御念佛の聲が冴えるやうになりますと、濱邊に寄する波の音がどう〳〵と遠くに聞えてまゐります。廣い御堂の中に香の烟が罩めて恍惚とするやうで、此時もまた涙がほろほろとこぼれました。眞に御恥しい事で御座います。

春日山の麓から高田の御城下、此からは一日一日、善光寺々々と美しい御上人樣の御姿が夢にも見えました。善光寺の大觀院は同じ淨土宗で御座いますから、そこに暫く居りまして御堂へ御こもり致しました。

三國峠を越えて上州へ出ましたのは翌年の夏で御座います。上州の甘樂郡に淨光寺と申す小さな御寺が御座いまして、淺間つゞきの山間の寂しい所、周圍が竹の林に包まれて、遠方からは只山門が見えるばかり。此竹林の中には大蛇がゐると言はれて居ります。尋ねて來る人も稀な、修行には眞に結構な所で御座います。此御寺に四年程居りました。其頃はもう一所に出た十二人の人達も大方所々方々に散々になつて、一所に居りましたのは四人程で御座います。其御寺を出て三河島の御寺へまゐり、やがて程なく大久保の觀音院へまゐりました。此處には常に二百人位の尼樣が集つて居ります。先に別れた人達にも此處で逢ひました。此

御寺に三四年居りますうち、二度ばかり國へ歸り、一度は四國西國の方へまゐつた事も御座ります。其うちに此方へまゐる事になり、此處にはもう彼れ此れ二十年も居ります。其うちに此人が國元から來て吳れまして」と片眼の婆さんの方を見る。婆さんは火箸を手さきで動かしながら、微笑してゐた。

庵主は佛壇に向つて、珠數をすりながら、念佛を唱へ出す。佛壇の上の燈明が搖ぎ、花が搖ぎ、軒にむさゝびの聲がして薄はさら／＼と戸にふれる。

私は暫し夜の景色を見ようとて、裏戸を開けて、薄原の間から櫟林の中へ入つた。十日頃の月が紫紺の空に傾いて、野末に遠くほの黑い山の影が見えてゐる。北斗の影は高く、七つの星は斜めになつて燦として輝いてゐる。大野の夜の靜寂さ。草の葉先に霜が置くのであらう、枯薄の葉がきら／＼と光るのが見える。

小みちを辿つて岡の端へ出ると、林をすかして庵の燈火が見えて來る。此寂寞につゝまれてゐる尼の生活、御堂の春の夜を、御籠りに更かして、思はず落した尼の涙、美しくて悲しい其物語の筋々が胸に沁みて暫しぢッと立つてゐた。すると、遠くの森に一つの響きが起つたと思ふと、彼方の森、此方の岡に反響して、紫紺の空にも響くやうで、やがて遠く／＼幽かになつて消えて行つた。

私は自分の身も其景色の中に消え込んでしまふやうに思つて遲くまで立つてゐた。

冬の國

武藏野の果を限つてゐる秩父の山に今日は終日灰色の雲がかゝつてゐた。夕方から風が起つて其雲が吹きちぎられ、寒さうに空の中へ飛びはじめた。風はあの山を越えて、野を一面に覆つて吹き捲つて來るのか、見る／＼其處此處の林に藪に叢に木の葉草の葉がばら／＼と舞ひだした。空は大方夕日にぼかされて紅に光つてゐるが、冷たい刃金色が上の方から押つかぶせるやうにして、其紅もやがて其中に吸ひ込まれて了ひさうだ。雲がちぎれて飛んでゐる山の向うの方は、鈍色に暗くなつた。何となくものものしい。あの山を越えたらば、暗い嵐の雲が一面にもや／＼立ちこめてゐるのではあるまいかと思はれる。

夕方稍々遲くまで私は野の中に立つて見てゐた。

不圖、野に鳴り渡る風の中に響きが起つて來た。耳を澄ますと、其響きは次第に近寄つて來る。黃色に蔦色に枯れた林の中から白く煙が舞ふ。汽車だ。見るうちに次第に姿が現はれて來る。煙はちぎれ／＼に林の上を爬ひ、響きは風にまじつて野に一面に散る。其風の中を突き拔くやうな勢で汽車は走つて來る。

近くへ來て見ると、汽車の屋根は白くなつて、上に煤煙がうすく散つてゐる。何だらう？と思つてゐると、ぐわらと音がして、目の下の小山の裾を汽車は走り過ぐる。あゝ雪だ。汽車の屋根を雪がうすく覆つてゐるのだ。窓際からは汗の點滴のやうにぽた／＼水がしたゝつてゐる。其しづくを振ひおとしながら、汽車は元氣よく走つて行く。――もう甲斐と信濃は風雪の國になつてゐるのかしら、私達の鄕土は風が暴れ雪が舞つてゐるのかしら。さうだ、汽車は其風雪のなかを脱れて今都へ入つて來たのだ。

武藏野はまだ小春日和だ。百舌鳥が鳴き、鵯が鳴き、竹林が戰ぎ、銀杏樹が黃金色に耀き、藪には茶の花や山茶花の花が咲き、野菊や、龍膽がすがれてもまだ殘つてゐるのに、信濃はもう谿々峯々に木枯が亙つて、渡鳥の群を吹き捲り、野にでも山にでも風の行くてのさはりと

なるのは盡く吹き飛ばされて何も殘らない。桔梗ケ原をめぐる四方の山々にいつも雲がかゝつて居て、雲があがつたかと思ふと、山の中腹まで薄雪がつゝんでゐる。西の方の山々には毎日のやうに嵐の雲が群がつてゐて、其雲が崩れたかと思ふと、霰をまいて原を横に吹き渡る。でも夕方になると西風は忘れたやうにやむのがならひだ。風が休むと其あとは如何にも靜かで、枯林の中に立つてゐる野の小家には爐でたく火の光が見えだして來る。――もうそんな景色だらう。

冬の初めの山の林は靜かとよりは寂しい。少し前までは、薄い黄色な丸葉がひら〳〵ついてゐた白樺も、もう梢に一葉もとめてゐない。楢の林、欅の林、ぢつとしてすなほに枝を伸ばし合つてゐる。霜があつく置いて、それでも雉子うちの獵師が朝早く通つて行つたものと見えて、一條の草鞋のあとが林の中についてゐる。小山の裾と野との境にはよく櫟林が立つてゐるものであるが、櫟だけは枯葉がこんもりついてゐて來年の若芽の出る頃まではおちないものだ。南向きの山の裾などならば、其櫟林にきつと一羽か二羽の鷦鷯がちゝと鳴いてゐるか、さもなくば群にはぐれ、嵐の來るのに逃げおくれて、きまり惡さうに、羽をばさ〳〵いはせながら、あとりか、ひはの二三羽ゐる事がある。百舌鳥が高なきして茂みから飛び出すこともある。が、山も林も鳥も皆な騒ぎのあつた後、やうにひつそりして、また何か來るものをまつてゐるやうだ。

日の光が、峯をかくしてゐる雲の上からちらちら照らしだすと、木の梢から滴が滴れる。徑の上の霜が少しづつ消える。何處ともなく人の聲が聞えだす。背板を負うた者、鉈や鋸や斧を無造作に背負子に入れて背負つたもの、腰へ荒繩を幾重かまきつけた者、銃を肩にしたもの、長い竿の尖端へ鎌を結び付けたのを持つたもの、様々な風をしたものが林の中へ現はれて來る。そして、枯木を集めて第一に燃火を始める。はじめはくすぶつて容易くもえつかないのが、次第に霜が乾いてぷす〳〵と煙を立てて燃え上る。一度もえ出すとなか〳〵勢が好い。火の光が美しい。其火を取りまいてあたりながら話しだす、そしてなか〳〵仕事に取りかゝらうとはしない。――私も其群の一人に入つてゐた。

皆のする仕事といふのは、松の林を拔切りするので、雪折れしたのや、曲つたのや、細つた松をば林の中から選んで切るので、私の仕事は、其切るべき木を見付けて木の皮をむいてしるししてやるのであつた。私が先きに立つて、端から木にしるしを付けてやると、後から鋸を持つたり、鉈を持つたりして木をきり出す。五六人で切り出すと、林が賑かになる。木の倒れる音、枝の折れる音。私は木の皮をむくのを止めてぢつと聞いてゐると、皆な默つて斧や鉈を縦横にふるつてゐる。がさつ、がさつ、といふかと思ふと、さあつと音がする。唄一つうたふ者がない、戰でもしてゐるやうだ。私は餘り皆が默つてゐるので、「オーイ」と聲を掛けてやつた。皆な怪訝な顔をして木を切る手をやめて私の方を見た。其瞬間、林の中は森然として何の物音もない。皆の姿が浮び出るやうに見えてゐる。私は、「いや、別に用ぢやない」と言つてやると、又皆默つて働き出す。ボキ〳〵と枝を折る音、ゴイ〳〵と木を挽く音、戰のやうな騒ぎがまた始まる。私は何故皆唄一つうたはないだらうと、そんな事を思ひながら、今日ぢうの仕事はあると思ふ位木にしるしを付けて、林を一めぐりして、もとの燃火の所へかへつて來た。白く灰になつてゐるが、それでも中にまだ火が二つ三つ殘つてゐる。枯木を集めて吹き立てて火

を燃やす。また林の中へ入つたり火の所へ戻つたり、一日同じ事をしてゐたが、何人一人唄をうたふ者がない。只時々「オーイ、オーイ」と何か合圖のやうな事をいつてゐるばかりだ。

　午後になると、西あれがきつと立つて來る、灰色の雲が西の空の半分を覆つてしまふ。其時の寒さといつたらない。谿に吹き込んでのぼつて來る、其音を聞いたばかりでもたまらなくなる。默つてゐる人たちは一層だまつて、きよときよと忙しさうに松葉を集めたり、枝を束にしたりしてゐる。夕方は風はやむが、半天の雲は此時もう次第に擴がつて、四方の山一面を包んでしまひ、日は落ちたとも落ちないとも知れないうちに林の中は暗くなつて來る。切つた木は薪に挽いて割つて、束にして積むのだが、其積んだ束の小口へは盜難を防ぐために、しるしを付けるのだ。皆がめい〳〵で思ひ〳〵のしるしを村の鍛冶屋から鑄て貰つて、それに墨をつけて薪へ打込むのだ――此打込む役も私がするのであつた。大抵皆が背負荷をまとめて歸つて行つた後までも、私一人殘つて、此しるしを打込んでゐた。カン〳〵と其響きが林の奧のもう暗くなつて來た中へひゞいて異樣にきこえる。またカーンと打つと谿へひゞく。もう斯う遲いので林の中にゐるものは私一人より外にはないなと思ふと怖ろしくなる。林を出て來ると、山の下の枯れた桑畑が黑くなつて遠くつゞいてゐる。其畑の中の處々に家が見えて、火が見える。其懷しさといつたらない。

　野の家も畑中の家も西風に吹き曝されて立つてゐるが、西あれがひどくあれた其翌日は大方雪が舞ふならひになつてゐるので、まちまうけたやうに、其心がまへになるのだ。夜の明けないうちから風が荒れだす。近い林の枝の打ち合ふ音も聞える。窓が明るくなつたので、起きて見ると雪が一面に舞つてゐる。まだ取り入れの終らない菜や大根が雪に埋もれる。――旅人が嶺を越えて諏訪の方から來るのも、小急ぎで町の方へ行つて了ふ。夕方近くなると何人一人道を通るものがない。廣い原の上を、深い山の奧を、遠くつゞいてゐる林の上を、雪が一面に降つてゐるのだ。

　もう山から林から野から一つらに雪につゝまれてしまふ。昨日木を切りに行つた松林も雪に埋まつてしまふ。何も黑いものとては見られない。こんな雪のなかに果して人が住んでゐるだらうかと思はれるばかりだ。一度降つた雪はなかなか消えない。根雪といつて垣根の陰や田の畔などに殘つてゐて、上へ〳〵と降り積もる。年を越して寒中にでもならうものなら、烏が群をなして眞白い雪の上に飛んでゐる。

　其風雪の中を汽車は鄕土の人をのせて都へ逃げて來たのだ。今頃は新宿の停車場へおりて、電燈の光で目を驚かしてゐる人もあるだらう。日毎夜毎、汽車は都へ〳〵と鄕土の人を載せて送つて來るやうな氣がする。雪の國を脱れ脱れて皆な、都へ來て、此寂しさと、暗さが、何處も同じに包んで了つたらどうだらう。雪は降りに降り、風は狂ひ狂つて、山も谿も林もどよめいて太古原始の姿になるだらうか。春が來て雪が消え、谿々から落ち合ふ水が野に溢れ縱横に流れてもせき止めるものもない。草木がのび合ひ、山の色が一層黑くなつても人一人其裾野をさまよふことが無かつたらどうだらう。――野はもう眞暗い。寂しさが充ち渡る。此暗さ、寂しさは、武藏も甲斐も信濃もいづこも同じく包んでゐるのだ。

信濃高原

　畑の玉蜀黍の穗が出て、薄紫の豆の花が葉陰にほのめいて來た。山々にかゝる淺霧が次第

に濃くなつて、やがて、曇り日となり、風が冷たくなる——。中央信濃の高原には既に秋意が浮動して來た。

草原の中にはまだ百合花が咲いてゐるのに、萩、桔梗、薄の穗も赤く靡き、蟲の聲が喧しく鳴き出した。雲間を渡る日影の耀きに、野は一時にぱつと明るく、眞晝頃は草いきれがして、小徑を通るさへ苦しいが、薄日に曇ると、草の葉さきの搖ぐのにも何か籠つてゐるやうで、妙に寂しさを覺えさせる。

中央信濃——東は鹽尻嶺、鉢伏山、袴腰の諸山、西は鉢盛山、鍋冠山、有明山を境に、筑摩野、安曇野の高原を云ふので、梓川の流域、奈良井川の流域、幾里に亙る稻田の眺め、桔梗ケ原、波多の松原、小倉の松林を包んでゐる大高原がそれである。其中央には松本の市街が其かみの古城の遺跡を傳へて立つてゐるのである。

信濃と言へば山岳重疊、溪流其間を廻つて、一徑縷の如く通じてゐる木曾あたりの景色を代表的に考へてゐる人々には、此中央信濃の大高原の姿は稍々意外であるかも知れないが、信濃は國が大きいと共に山も野も總てが曠大の姿を示してゐるのである。

まだ八月の上旬、都は炎熱に惱ませられてゐる頃、此の信濃の高原には秋氣が動き初めてゐる。夕暮汽車に乘つて、松本から次第に桔梗ケ原の高原に登つて來る。桑畑の遠く續いてゐる果を劃して黑色に聳えてゐる西方の山々、落日の後に餘光が劒なす頂を照らして、上なる雲に反射してゐる。紅と黃とに燃えてゐる雲から上は、眞黑い色が半天を包んでゐる。

東の空は垂れて、水色に澄み、鉢伏山の頂にかゝつてゐる。桑の葉に風の渡るのが涼しく、桑畑の中に立つてゐる白壁の家が懷しさを感じさせる。此原の中に立つてゐる停車場は村井と鹽尻とである。村井の停車場は松林の中に立つてる。乘る人の少い田舍の事とて、寂しい趣を見せてゐる。

村井を出て汽車は暫く桑畑の間を走るが、やがて九里陵と呼ぶ小丘の上にのぼる。松林が蜒々として原の中央を東から西に橫斷してゐる丘なので、その昔は此丘の麓を奈良井川が流れてゐたとの事だ。此九里陵を上ると一層高原の趣が深くなる。落葉松の林、松の林、雜木林が所々に點在して、其間を秋草が一面咲き連ねてゐる。此等の林の綠は濃く、夕暮などは黑くも見える。武藏野あたりに見る淺綠の林とは趣が違ふ。林と草原との中に粟畑があり、麻畑があり、豆畑があり、大根畑がある。そして周圍の村々から移住して來た人々の家が其處に一群此處に一群、原上の燈火の影懷しく立つてゐる。

夕暮かけて遠野の綠の鮮かな事。次第に高まつて松林が濃く、やがて草山となる東の峯の一帶のたゝずまひ、西山の暗綠色なるに對して、柔かな若々しい色を浮べてゐる。丁度乙女峠を下つて箱根山中の高原に立つた時と同樣に清涼な透徹した感が胸に行き渡る。アルプスの麓の高原をば思ひやらずにはゐられない。

此原の中には葡萄園がある、桃林がある。葡萄園は開いて間がないが中々に廣い。高原地の事とて風透りが好いので、蟲が付く。葡萄につく蟲は黃金蟲と、蔓に喰ひ込むはだか蟲とである。葡萄園には此蟲を食はせる爲めに必ず鷄が飼つてある、そして鷄の番をする爲めに犬が養つてある。犬は野良猫を防ぐと共に空からおろして來る鷲を防ぐ用を爲てゐるのだ。桃の實はもう顆々紅を帶んで枝もたわゝに熟つてゐる。白銅一個を投じたまへ。ポッケット一ぱい、兩手に餘つて持ちきれない程の桃の實を得るに違ひない。葡萄は廣葉のまゝ紫玉を盛つて

小さい手籠で賣つてゐるが、又美しい酒にも釀して賣る。

鐵路も通ぜず、葡萄園も出來なかつた頃は、秋草が枯れて離々として夕風に飛び、冬は雪が深く一面に降り埋めて、只其上を鴉が黑く群を爲して舞つてゐる時、よく途を失つた旅人があつた。そしていつ掘つたとも知られない底知らずの井戸の草深く埋つてゐるのに馬もろ共に落ちて死んだと云ふ話なども耳にしてた事がある。

原の中には所々に小丘があり、小丘の麓を繞つて桔梗の花が、紫の波を湛へて咲いてゐる。此等の丘はその昔戰場であつた頃死者を葬つた墓であらうか。桔梗は林の周圍、丘の麓若しくは少し低くなつたやうな所にことに紫の花を集めて咲いてゐる。

桔梗ケ原――名前が既に柔しいではないか。植物學者に聞くと、日本で此高原位、桔梗の花の多い所はないとの事である。紫の大輪なのがぱつと夢から醒めた少女の眼ざしのやうに秋野に開いてゐる時、輪となり線となつて秋花の中に紫紋を引き廻したやうに亂れ亂れてゐる時、古墳の裾を取り繞いて自らなす紫の花輪、星影微かな下に露を受けてかたみに頷き合つてゐる時、此花の中に來て立つて見ると、如何なる心から、如何なる思ひから、紫の花が盡く此原を求めて集つて來たか不思議な思ひをせずには居られまい。

此原の中に一種の草がある。「狸豆」と云つて細長い葉の、柳に似た葉を付けた草である。薄紫の花が咲いて、秋になつて實がある。夕方など一人で草原の小徑を通つて行くと、からからといふ音が聞える。如何にも物寂しい。五步にして聞える、十步にして猶聞える。薄曇の日、粟畑から立つ渡鳥の群が遠く／＼小さく消えて行くのを見送つて立つてゐる時など、不圖此草の實の莢の中でから／＼となるを耳にすると何とも言ひ難い寂しさを味ふものである。今大根引く爲めとて小舍掛けをして夜も原上に宿つてゐる人々がある。其小舍へ行つて今年の粟作の話、小鳥の話などしながら一夜を明かして見たまへ。夜更けて何の響きもなく只時々魘えたやうにけたゝましい聲をして羽音鋭く畑の上を橫切つて行く夜鷹があるばかり。其れも過ぎた後の靜けさ。一寸小舍を出て見ると、滿天の星は曠野の上に臨んで、銀河が白く寒げに走つてゐる。鉢盛山の姿が黑く遠野の草から直ぐに表はれてゐるのを見てゐるとき、つい近くの草原で、から／＼と此狸豆の鳴るのを耳にするであらう。微妙な、そして寂しい自然の樂の音である。莢の中に鳴る草の實の響き、曠い野の寂しさの中心が其か細い一莖の草の中にあるやうな氣がして來る。

今栗の葉の茂つてゐる畑の上、五六月頃は麥が青々とのびてゐる。旅人の笠が其中を浮き沈みしてゐる果に松本の城下が見え、五層樓の天主閣が眺められる。冬の間はいづこにか潛んでゐる小鳥がつぎ／＼に出て來て、雲雀は麥畑の中、藪陰に巢を營む翁草（此地方ではちごちごと呼んでゐる）が、其巢のふちを繞つて、﨟たげな、可愛い花を飾つて巢の中の雛を慰めてゐる。――今は此等の草原の上を日毎通つてゐる者は近村の桑摘みの男女と、白衣の御嶽道者とである。

八月の初旬は桔梗ケ原近郊安曇筑摩の村々で夏蠶の上簇に近く、最も繁忙な時である。村々の人々は鉢盛山の頂にかゝる一片の雲にさへ心をいためてゐる。此頃の天候は養蠶家が最も心を用ふる所である。籠を背負つて行く者、車を挽いて行くもの、桑摘みの忙しさ。日に照らされて桑の香に蒸され、汗にまみれ、夕立雲が西の峯に蔽はれたと見ると、暑さも苦しさも

忘れて、彼等は兩手に桑の葉をむしりこき籠につめ、車に積んで家路に急ぐ。紫光一閃、彼等の後から黒雲は追掛けるやうに曠野を覆うて、野は忽ちに白雨亂射、土煙が騰り、草が伏し、一面雲につゝまれて遠近が見え分かない。

暫時にして此驟雨が止んだかと思ふと、草の途の上を白衣の道者がちりん〳〵鈴を鳴らしながら鮮かな日に照らされて遠くに行く。彼等が向ふ所は、木曾の「御山」である。遠い遠い幾百里の國から彼等は講を組んで年々のやうに、夏から秋の初めへ掛けて木曾の御山を目當てに集つて來る。何々講と書いた小さな藍色の旗、同じ揃ひの檜笠、同じ白衣、金剛杖を振つて、彼等は野をも山をも幾多の河をも越えて旅路遙々此信濃の國まで辿り來たのである。原を横切つて行く先きは鳥居嶺、其嶺を越ゆると木曾路、二日の後には彼等が永い間の目的地──御嶽山の靈場へ達する事が出來るのである。登つて行く人降つて來る道者、桔梗ケ原には日として此白衣姿の道者を見、其鈴の聲を聞かない事はない。

最う其道者の鈴の聲にも何となく秋の響きがこもるやうに思はれて來た。赤蜻蛉が一つ二つ道者等の通る途の上に飛んでゐる。空の上、雲の往復が怪しく、不意に日影が雲に包まれると、山の色まで急に眞面目になつて、其山の頂近く青色の空が窺はれ、空を劃する絶頂の外郭線が劃然と見え、其上を何人とも知らないが、懐しい人が遠く越えて行つて了つたとやうな殘り惜しい一種の悲しみが胸の中に起つて來る──もう夏が逝くのではあるまいか。

今言ふ筑摩安曇の平野は往古大水を湛へてゐた跡だと言はれてゐる。縦二十里に横十五六里に亙る一大湖が、此中央信濃の山中に湛へられてゐて、猶其頃信飛境の絶峯が、各々火を噴き煙を靡かせて居たとするならば、其頃の壯觀は今思つて見るも胸の躍るを覺える。假令其火山であつた事は猶一層遠い〳〵古の事とするも、湖水であつた事の事實は地質學者考古學者が證明する所で、地勢から稽へ、地名を調べて見ると明かにそれとうなづかれる。

萬山重疊の中に湛へてゐた此一大湖水は、何日の頃か(恐らく景行天皇の御宇と傳へてゐるが)一方に潰裂の口を求めて奔騰し出した。幾百年幾千年の間か知らず囚はれてゐた水は一縷の漏口を求めて、叫喚怒號、列岳を震撼し、怪巖を打破り、先きを爭つてより廣き地に向つたものと見える。其潰裂の個處は今日犀川沿岸の中信南第一の奇勝山清路である。一度山清路の景を見た人は何人も古の遺跡を認めるに違ひない。巨岩峻峯の重り合つてゐる幾百丈の懸崖と、破らずば止まず崩さずば止まない狂奔の水とが不斷の爭ひを續けて居る一大壯觀、瞬時も休みなき苦鬪奮戰、その上の姿を今も猶其まゝに傳へ續けてゐるのである。其後大地震があつて山は崩れ河水を止め、昔の姿を再び復さうとしたが、(そはつい近世の事、安政年間、善光寺大地震の時の事である、水の勢は終にそれに打勝つて、善光寺平は一面の洪水になつた事がある。

綠なす山々は往古の樣をば知つてゐようが、大水の跡は只幾多の河川にその面影を止めてゐるばかり、十萬石の稻田、二十萬に餘る人口、白堊燦たる一大都市、方一里に餘る松樹の大森林、秋草繚亂たる高原地、幾千年の昔此地が一大湖水であつたとは何人が想像する事が出來よう。

又此高原地には幾多の戰爭が行はれた。甲州の軍勢も打出て來た。小笠原の軍兵も出て戰つた。木曾の軍勢が出て勢揃ひをした事もあらう。現に桔梗ケ原の東端に小池と云ふ小村がある。其處には耳塚と云つて武田小笠原兩氏が

戰つた折の戰士の墳がある。猶舊くは如何なる民族が此高原を領して居たか、矢の根石が鋤の尖端に觸れて澤山に掘り出される。此高原地の四周を繞つて樣々な小丘が起伏してゐるが、それ等が多く城地に適してゐたものと見え、二百騎三百騎の武士が戰國當時は各々籠つてゐたものと見える。城が峯、東城山、城山などと云ふ名稱は多く見出される。夫等が皆事ある時は互に烽火を擧げ相應呼して軍兵を集めたものに違ひない。戰國時代の武士の子孫、武田浪人とか、水野の族とか、何々七騎とか何々十騎とか云つた連中、後代德川家に走せ參じて共に大阪の城攻めに從つたとか云ふ戰士の子孫が皆安曇筑摩の高原の村々に散在してゐて、少なくとも三四百年連綿たる家系を保つて、多くは鬱蒼たる森林の中に居をかまへ、猶當時の餘勢を傳へて、他邦から漂浪の人々、若しくは土着の農民に對して一種の尊敬と愛慕とを要求してゐる。

總てが大きな興亡の歴史が印して行く痕跡の幾分を傳へて、現時の若者の胸に一種の好奇心と、回顧に依つて生じて來る「無限」に對する渴仰と奮勵との刺激を與へてゐる。見たまへ、我が家の庭前一樹の古槇、一樹の古松、我が家の祖先がその上初めて馬を繋いだ所だと教へられた時、其兒の胸の中に黑馬鐵鞍、秋風原頭縱横に走り廻つた古武士の面影が浮ばずに居ようか。轉變烈しい都會生活とは違ふ。村内を流るゝ一條の小流れにも、秋草に露を宿す一基の古墳にもそれ〴〵の歴史がある。朝夕仰いで見る山影も、村から續く松林も、我より以前幾代の人々が仰いで見たる所、親しく踏んだ處かと思ふと、彼等の胸には抑へ難い力で血潮が湧き上つて來る。森を渡る夜風を耳にしても彼等の胸には百代の喜びが漲つて來る。高く振ふ鋭鎌の尖端に靡き伏す小草の葉にも百代の哭きがゐる——氣は澄んで、綠は飽くまで鮮かだ。高原地の男兒は活氣が五體に溢れてゐる。彼等は蠢々として幾代も同じ生活を送つてゐるに忍びない。信州の河川が流れて、四方に下る如く、彼等は鯨波の聲を擧げて烈しい生活の戰闘に向ふのだ。

中央信濃の高原、もう宵々の電づまの光が薄れて朝曇の空がやがて寂しい雨となり、周圍を繞る山々に雲低く垂れて、わびしい雨がなかなか晴れさうにもない。恐らく此雨の晴渡る頃は山景が一層明かに浮び、空に白雲が細くたなびいて、凜然たる秋の氣が天地を領して來るのであらう。

橡の落葉

梓川の上流を遙か遠く遡つて、安曇の山の奥深く分け入ると、橡の林が立ち續いて、秋十月頃は朱を染めた樹々の木の葉は美しく、果實は黄になつて纍々枝上に懸つてゐる。其間を山雀四十雀其他の小鳥が末秋の悲しい節をつたへ、崖下に咽ぶ溪流の響きと共に深山の秋を歌つてゐます。

谿を越え峯に亙つて危き徑に棧橋を渡し、此方より彼方へ蔦の蔓などを絡げ合はせて往き來の人のたよりとなし、兎も角も道と名づくべき一條の徑が通うてゐますのは、野麥街道と云つて信濃と飛騨の國境を越え遠く十里高山の町へまでつゞいてゐる其道です。此道が國境の野麥峠へ差しかゝる少し手前、梓の流が奔湍となつて一方の峯から落ちて來る溪流を合せる邊、道は二つに分れ、一つは峠に向ひ一つは梓川の岸猶深く深く、山奥まで沿うて行くのです。が、此は白骨温泉へ通ふ一筋途で、倚嶇羊腸、或は登り或は降り瀑布の下を過ぎ、激流の邊に出で、棧橋を渡り洞穴を潜るなど、眞に變化

曲折ある面白い途筋です。

大野川村から三里、白骨道となつてから凡そ一里の山奥、峯にも尾にも橡林の繁茂してゐる其中に二三軒の藁屋があるのです。橡の大樹の根元に造りかけて、崖下には急流が雪を飛ばして岩根を洗ひゆくのを眼の下に、藤の蔓で結ひ付けた丸木の家、形ばかりの丸窓には蔦の葉が爬ひかゝつてゐる。此頃はもうそれが黄色となり紅となつて、入日が斜めに橡の林を染むる頃は、反照が深林に入つて此丸窓の上を照らし、眩いばかりの其光が見る〳〵薄らいでゆくと、橡の紅葉が溪風にはら〳〵と散つて窓の邊へかかつて來る。其時の寂しさと言つたらなんとも言ひやうがない。誰でも秋の夕、此橡林の中を通るやうな時は、其寂しさが胸に沁みてたまらなくなるといふ位です。

此林の中に住んでゐる人はどんな風に日を送つてゐるかといふと、眞に寂しい生活をしてゐますので、日毎行き逢ふ者といつては白骨の溫泉へ登る二三人の旅人か、或は溫泉へ食料運ぶ牛の群の五つ六つ連れて遠くの方から鈴の音を響かせて來るそればかりです。其外には尋ねて來る人もなければ又何處と言つて尋ねて行く處もない。三軒の家は何時立てられたのか、さまで新しくもなく昔のまゝに傳はつて昔のまゝに傳へてゆくといふやうに見えるのです。此三軒の家の丸窓のある眞中の家にお光といふ娘がありました。谿に湧く水は淸く林の中の空氣は鮮かで　只もう鳥の歌や流の響きを耳にして山櫻の花や紅葉の色を眺めるばかり、溫い兩親の愛情と美しい自然の景色の中に包まれて、お光は大きくなつたのです。今ではお光は日毎習ひ覺えた歌を唄つて枯枝を集めたり、靑草を刈つたりして暮してゐます。お光に取つては山川の景色、花の色、鳥の歌は誰よりも一番親しい友達のやうで、崖の所へ腰をかけ遙かの下に咽んで行く流の響きを聞きながら、向ひの岸に若楓の日影を浴びて滴るやうな碧のきらめくのを眺めてゐる時は、何もかも忘れて了ひ、時の經つのも知らない位です。又春の末、山櫻の花が谷と云ふ谷を咲き埋めて薄紅の雲が流の上に漂ふ頃は、小鳥も樂しさに堪へられないやうに鳴き立てて、夜に入つても快い響きは谷に殘つてゐる。其頃はお光も亦小鳥のやうに歌を唄つて山に登り谷に下りたりして一日を遊び暮すのです。自然の大神はお光に無限の惠を與へておいでなさる、草も樹も森も林もお光に取つては生きてゐる者のやうで、花に置く露は宛らの甘い乳、房々と茂つてゐる靑草と涼しい若葉とは自らなる搖籃となつて、四邊の物皆が光を哺んでゐるのです。一花一草の間に神を認めると言つた哲學者の悟りも、一本の百合に無限の福音の籠つてゐると歌つた詩人の樂しみも、お光が此頃の樂しみには及ばない事でせう。けれど大なる悅樂の實となり種子となつて永遠に續くには幾多の風雨を經なければならないのです。これが運命とでも言ふものでせうか、取りも直さず神樣の一層大きな御惠です。

深山の奥に幾春秋を送り迎へて、只流の響き鳥の歌の外は耳にする事も少かつたお光の胸も、いつしか風の行方、木の葉の戰ぎにも心ひかれ思ひを寄せるやうになつては實に美しい少女姿、林の奥に咲く百合花の精かとも思はるゝばかりの艶かさを添へたのです。丁度春の末の頃の事でした、谷々に鳴き交してゐた鶯の鈴を轉ばすやうな樂しい響きも夕暮かけて峯にも尾にもかゝつて來る薄靄のうちに幽かになつてゆき、流の音がこれに更つて下の方で何か囁き告げるやうになつて來ると、薄絹に包まれたやうな月の影が群がる峯を離れて散り方の櫻の花

の上を照らし出し、川を隔てた谷の隅、月の光の及ばぬ邊は白靄が厚くたゝなはつて、其奥から怪しい響きが聞えて來るやうで、森の女神が此宵は花陰に出て遊ぶのではなからうかと思はるるくらゐの懐しい夜の景色でした。斯様な夜、斯様な景色に包まれて人は知らず〳〵心の底に沁み渡るやうな懐しさを覺え又そゞろにも悲しい思ひをするのです。お光はいつもの窓の所へ倚つて此景色をみてゐましたが、月の光の餘りに美しいのに誘はれて、林の中を日常來て見る崖の所まで行きますと、一本の櫻の花が繚亂と咲き亂れ、川を挾んだ兩岸は茫乎として薄い匂ひの雲が懸つたやう、流の水の閃きも只もう夢かのやうな景色でした。お光は櫻の樹の下へ倚つて何を思ふともなく此景色の中に包まれて佇んでゐると、月の光は櫻の梢を洩れて斜めにお光の片頰を照らし、ありとなき風が忍び來て其たびに花片が二片三片ひら〳〵とお光の肩に散りかゝる。お光はそれも知らないやうにうつとりとして立つてゐました。すると何處からか遠くの方で流の響きの合間あひまに鈴の音がして歌の聲もそれにつれて聞えて來るやうです。お光は夢からでも覺めたやうにふと氣がついて見ると、向うの谿間、川上の方から木の間傳ひに松火の火がちら〳〵見えて唄の一節、鈴の響きが一層明らかになつて來ました。今頃誰が歸つて行くのだらうか、馴れてゐる處でもさぞ寂しい事だらうと思つて、樹蔭からそつと其近づいて來るのを見てゐました。すると山の岨路から今橡の林の中へ入つて急に暗くなつたのでせうか、しツ〳〵と牛を叱る聲が聞えて、ぢやらん〳〵と鳴る鈴の音も四邊に響き、牛の鳴らす鼻息と、かさこそと落葉の上を蹈んで來る音がして、其後から一人の若者が手に鞭を振りながら近寄つて來るのでした。見てゐると月影があらはに橡の梢を洩れて、ちら〳〵と牛の背を照らし、肩より掛けて若者の顔をば照らしますので、日頃往き來に言葉交してゐた友といふ川下の村の牛追ひであるといふ事が判りました。お光はそつと花の蔭から出て行くと、友は驚いて何しに其處にゐるのかと訊きました。お光は笑ひながら友さんはどうしたのだと訊き返しますと、白骨温泉で牛に荷を負はせてゐる中に仲間の者に取り殘されたのだと言つて、一人でそんな處へゐると天狗に連れて行かれると威しながら、お休みと言つて別れて行きました。橡の林を出外れると思ふ頃から又元氣の好い聲を張り上げて追分節を歌ひながら、鈴の響きは次第に遠く、歌の聲は次第に細く、松火の火のちら〳〵するのも小さくなつて、遂に流の音に遮られ、山の狹間に見えなくなつて仕舞ひました。お光はぢつと其行末を見送つて暫くの間歸るのも忘れてゐるかのさまでした。

さしもの花の眺めもやがて若葉する夏の初めとなると、風なきに自づと散つて谷の流に寄集ひ、紅匂ふ一路の浪、深山の春を送り盡して、いつしかに五月雨の雲、峯をこめ溪を埋め、卯の花くたし佗しくも日又日晴るゝ隙なく降り續く頃となつたのです。峯を洗ひ巖を穿つ雨の脚、樹々を傳ひ下草を浸す其の勢ひ凄く、低きより低きを求め、峯といふ峯澤といふ澤、分け下る流の末は一筋の梓の川に降り集ひ、濁浪の響き滔々として物凄く岸を嚙み林を振ひ、朝夕は峯より覆ひかゝる雲の帷の裾を打ち、彼方流の末の山影は浪の飛沫に朧にかすみ、山も川も四邊一つらに鬱悒のいろに包まれます。其の頃になるとお光は日毎家に籠り丸窓の處へ寄つて此物凄い流を眺め、此流の末は何處へ行くであらうか、其行末にはどんな處があつて又其處にはどんな人がゐるだらうかなどと云ふおぼつかない想像に耽つてをります。二日三日、はては七

日十日と續いても雨はなか〱に止む景色もない、橡の樹の幹は洗はれ葉は浸され、ぽた〱と大きな雫は絶えず降る雨と共にお光の窓へ散りかゝり、窓の下の青草は房々として雨滴の中に浸つてゐる。流の響きは日増しに高く、日頃は只遙か下の方の岩間に咽ぶ泉のやうに聞きなされてゐたものゝ、今ではもう橡の樹の間から濁つた浪の渦卷き返るさまが見らるゝやうになつて、もう五日も此儘で續いたならば林を浸しお光の窓下迄も押寄せて來ようと云ふ勢ひを示してゐます。けれど雪は未だ峯を離れさうにも思はれない、雨はいつ霽らうと云ふ景色も見えないのです。彼處の棧が落ち此處の崖が崩れたと云ふ話も僅か軒傳ひに隣の人々から聞くばかり、枯木集めにも草刈にも少しも戸外へ出る事はできないのです。其時でした、先の日の晩にお光に出逢つた友と云ふ若者は至急の飛脚に頼まれて、白骨温泉に使ひに行つた其歸り途、勿論牛は連れないのですが、棧の崩れ落ちた爲めに歸る事が出來なくなつたと云つてお光の家へ泊めて貰ふ事になつたのです。

　戸外へは烈しい雨で少しも出る事が出來ない、只朝から晩迄爐邊に集つて去年の秋拾ひ集めた茹栗を割り乍ら、昔話や又罪の無い浮世話に耽つて居ました。夏一度大野川まで橋姫の祭見に行く外は里へ下つた事のないお光に取つては、此れが何よりの樂しみで、松本の城下の賑かな事や、昔のお天守の今も殘つてゐて、其天守のお堀には蓮の花が一面咲いてゐると云ふ話などを聞きましたが、お光に取つてお天守と云ひ蓮の花と云つてもどんなものだか少しも想像が附きませんでした。けれど友は至つて氣立の好い快活な男で、又其話の口振の如何にも巧みなのには普通の在りふれた話でさへ聞く者は思はず釣込れて了ふ位です。殊にお光は物珍らしい所の話を聞きたがつて夜の更けるのも忘れる位でした。こんな風で友は一日二日皆と一所に暮してゐましたが猶なか〱雨は晴れさうにも思はれません。流の音は愈々高く家の内は朝から晩まで薄暗く陰鬱で、雨は屋根裏を透し壁には汚點ができ、柱も床も白く濕つて手でも袖でも觸れる所は其所だけが形を殘して、着てゐる衣服も蒲團も眞に氣味惡く、幾日も日影を見ないので蔦の葉が窓から延びて内側の壁を傳ひ、青蛙の小さいのが幾つとなく床の上を飛びあるき、軒を傳ふ雨の音のばさ〱と云ふのが葬式の太鼓の音か何かのやうで、實に不愉快なそして心細い頂上でした。一體山の中の霖雨のどんなに凄まじいかなどと云ふ事は都に住む人の到底想像の及ぶ限りではないのです。けれどお光は此頃になつて何だか前に覺えのないやうな樂しい心持になつたのです。少しづつ榾さしくべて若者の話するのを聞いてゐる時は、火の光に照らされて生々となる其若者の顏と其輝く眼とは如何にも男らしいやうに思はれて、其人の口から聞く物語はお光に取つては如何なる聖の垂れたまふ教へにもまして尊いやうで、聞いてゐる中に我が息もせはしくなり我髪の毛も打振ふかと思はるゝ位でした。けれど皆默鎭まつた夜更に一人目覺めるやうな時は、晝の間聞いた話が思ひ出されてどうしても眠られない。そツと起きて窓の所へ小さな灯をつけ、ぢつと雨の音に耳傾けながらそれとなき思ひに耽つてゐました。なべてお光の此頃の擧動は、不思議に思はるゝ位以前とは變つて來たのです。窓の下の青草は雨の惠に養はれて愈々たけ長く延びてゆき、お光の戀の思ひは若者の話を聞いてゐるうちに何時しか知らず養はれたのでせうか。

　天の大なる御惠は再び山中の人々の上に及んで、若者がお光の家へ止まつてから七日ばか

りたつた頃でした、さしも烈しかつた雨の脚も次第に輕くなつて、八重に立ちこめた雲の鎖が薄くなつてゆくかと思つてゐると、川上の空の一角に深碧の色が輝き出して、飛驒の堺の山影が鮮かに、日の光が雲間を洩れて其嶺の上を射下すと、丁度遠くの空で碧綠の玉の輝くやう、久振りで仰いだ山の影日の光、雨に籠つた人々にはこんなに樂しいものは他にないでせう。峯といふ峯から雲は離れゆき谷といふ谷から霧は脫け出で、眞白き厚い霧の帷が空に引き上げられたかと思ふと、其後はまあなんと美しい新天地でせう、スコットランドの雨の間に見られると云ふ山河の景色もからでせうか。降り續く雨の中、いつか知らない間に森も峯も雲も草も木もなべて碧一色におし包んで、空から落ちる日光は此に反照して滿山の綠將に燃え立つばかりの美しさ、逃げ遲れた白雲の一片が峭立つ崖を横さまに滑つて、嶮しい岩に其横腹を衝き割かれ四分し五裂し絮となり蓬となつて烈しい光に照りつけられ、殘んの雪の淡くも消えて碧の中に失せて了ひます。左し右する雲の變動の急な事、谷を出で峯を繞る其姿の不思議な事、空から落ちる日の光の壯麗なこと、天地山川碧の色の目醒むるばかりの美しい事、水は見る〳〵落ちてゆき、澤より森より立ち登る水蒸氣の白くもう〳〵として再び凝つて雨となりはしまいかと氣遣はるゝくらゐな事、其間千變萬化の不思議な景色は、此山中に入込んで雨に籠つた人でなければ知る事の出來ない所です。雨の霽れると共に里より通ふ途は自づと通じ、落ちた橋はかけられ、崩れたる崖は掘り片付けられ、久しく休んでゐた牛の群の鈴の響きは又山々谷々に谺して聞ゆるやうになりました。友は雨が止むと早々お光の家を出て里に下る事となりました。けれど其時はもう二人は樂しい戀を語り合つて行末かけて溫い望を抱いて居たのです。

お光の此頃の思ひは、花を摘み栗の實を拾うて無心に樂しんで居た頃のとは非常に異つて、樂しい事はいふまでもないけれど、其中に何處となく心もとないやうな又物足りないやうな氣がされるかと思ふと、又何か溫い雲にでも包まれたやうに理由もなく樂しさが胸に溢れて來ます。天地の間に充ちてゐる戀と云ふ大きな力は今お光の身を透して現はれたのです。山の色水の響きも、今迄よりは一層美しく、花と花、鳥と鳥、谷間に咽ぶ水の聲、梢にゆるゝ青葉の戰ぎ、皆お光の胸の響きと調べを合せて、生れ落ちてから目に馴れ耳に聞き馴れた物皆の景色が此に一轉化して新しい夢の國へでも入込んだやうに思はれます。戀は自然の祕密を覺らせる一つの鍵でせうか。戀に依つて見た自然の色、戀に依つて見た人の世のさま、限りなき樂しみの中に何處となく一點の愁を包み一點の恐れを持つてゐます。これが自然の眞の姿でせうか。お光は今戀の甘い酒に醉うてゐます。

朝橡の樹に小鳥の騷ぐ頃は日の光が水を射て白靄次第にうすらぎゆく川下の杣途から友の涼しい歌の聲と鈴の響きは聞えてき、夕べ百鳥が塒に歸る頃は峯より降りくる雲の色おぼつかない水上の狹間から復た其懷しい響きは聞えて來る。お光は其度に草刈る手を止めてヂッと聞いてゐました。そして林近い棧のあたり迄來たかと思ふ頃には草籠も打ち捨て置いてかけ出して行きました。友も亦毎日お光の迎へる笑顏の樂しいので雨の日も風の日も怠る事なく溫泉へ通つてゐます。

お光の親達は二人の如何にも睦じいやうな樣子を見て、來年の春は一緒にしお光の家の邊同じ橡林の中に小さな家を造つてやらうときめました。友は今迄かせぎ溜めた金で斑毛の牛をもう一つ買求め、溫泉へは鹽だの米だのを里から

運び、山からは炭だの枯木つけて下るやうにしようと言つて、其家を建てる場所をもきめて、今から其時になつたらからのあゝのと色々豫想して二人は一層樂しい思ひに耽つてゐました。

五月雨が晴れてから最早一月、橡の青葉は愈々繁り、山の碧は一層深くなり、大空渡る雲の色にも眞夏の影はそこともなく深くなり、今はもう蟬が松林に喧しく鳴く頃となりました。其頃になると毎年の慣ひのやうにお光は大野川村の橋姫の祭見に伯母の家へ呼ばれて行くのです。此橋姫の祭と云ふのは近郷に聞えた賑かな祭で、わざ〳〵其祭見に町から登つて來る人もある位です。又此橋姫については一條の物語があるのです。昔時此の大野川村と川向うの番場と云ふ村との間に細い一筋の柴橋が架つてゐましたが、或年の秋の大荒れに其橋が落ちてからは崖は崩れ流の勢ひは一層急になつて如何にしても再び橋を架渡す事が出來なかつたのです。丁度其頃此方の村に住んでゐた一人の女子が橋向うの某若者と互に戀ひこがれて深い思ひを通じてゐましたが、橋が落ちてからは二人は相逢ふ術がとだえたのです。只朝晩岸の所へ來ては二人で相見て果敢ない逢瀬を泣いてゐました。女子は毎日岸の上へ立つていつも流の面を眺めてゐましたが、やがて藤蔓を集めて綱を作り毎日々々それを延し遂に其はしを身に纏ひつけ流を横ぎつて向うの岸へ泳ぎつきそれで初めて橋の形ができたと云ふ話です。二つの村の人達は恩人だと云ふので、女子の魂を祭つて橋詰の巖の上橡林の中に橋姫の社としてあるのです。

さて七月の初旬になると、二つの村の若者はわざ〳〵遠い町まで揃ひの衣裳を誂へて、七日も十日も前から御神樂の稽古に忙しく、其日となると橋の欄干へは此方から彼方まで注連繩を張渡し、橋板の上には一面厚く青草を敷きつめ、夜に入るのを待つて橋姫の車を挽き出し御神樂の囃につれ昔から歌ひならした挽歌を唄ひながら、橋を越えて橋場村の裏手の森山へ引上げ、夜中其所で御神樂を上げ、夜の明くるのを待つて又元の社へ歸るのです。此の森山は橋姫の夫であつた人を祀つた社で年に一度祭の時に此橋を渡つて橋姫が逢ひに來らるゝのだと云ひ傳へてゐます。橋姫の車が橋を渡ると云ふ其日には、村の娘達は晴の衣裳に揃ひの手拭で、山から色々の花を取集めて花笠を作るのです。紅白の岩牡丹の燦として映いばかりなのが、藤紫の薄色に黄金山吹の取りまぜ面白く、躑躅の花の深紅に燃え立つ中に一掬の雪と見えるのは山梨の眞白い花、其他夏の初めのありとある野の花森の花は盡く娘達の頭の上に匂うてゐます。

晝間の中は此美しい花笠が彼方此方行きちがつてゐるのですが、夜になると皆一つ所に集つて、神樂の囃につれて橋姫の車を引き出すのです。車には二筋の長い綱が付いてゐて、片方には揃ひ衣裳の若者が、片方には此花笠の娘達がつらまつて、神樂の囃は前と後に一組づつ、笛や太鼓の音につれて車は靜かに動き出す。橋の袂には川の兩岸に松火の火を明るく燃し、橋の上には近在から祭見に集つた老若男女が欄干に倚つて押し合ひながら立つてゐる。お光も伯母に連れられて、毎年の事ながら物珍らしく又花笠の娘羨ましく其行列を見てゐました。車が靜かに橋板に敷いた青草の上を軋つて行くと、綱引の若者娘達は節を合せて挽歌を唄ひだす。それには音頭取が一人必要なのですが、常々涼しい聲の歌自慢な友は遂にこれに選ばれた。神樂の囃の間々友の歌の聲は橋の上までも澄み渡つて、これに合はせて歌ふものも一節終る毎に友の涼しい聲を待つてゐる。眞に其聲

は夏の夜の靜かな空氣の中に響いて星影の下に黑く見える森の中へ消えてゆくやうで、又橋の下を流れる水の調べと通ふやうで、聞いてゐる者の胸にはどんなに響くのでせう。況してお光は、只うつとりと聞きほれてゐました。友は歌ひながらお光の前を通りましたが、目を見合つて微笑みながら手にしてゐた躑躅の花を手早くお光の胸の所へ投げつけて過ぎてゆきます。お光は嬉しくてたまらないやうで急いで其花を拾ひ髮へ插さうとする。伯母は默つて見てゐましたが、小さい聲であゝ好い聲だと言つたやうです。

お光も皆の後からついて森山まで行つて見ますと、花で飾つた橋姫の車は中央に据ゑられて、二組の囃は一つとなつて神樂を奏してゐる。綱引の人々は此處に一群彼處に一群互ひに靜まつて其囃を聞いてゐます。　囃が一わたり濟むと車の所から少し遠のいて勝手に休むのです。其時は皆の樂しみの時で暑いと云つて衣裳の肩を脫いで風を入れてゐる者もあれば、其花をと言つて娘の後を追ひかける者もある。友は其夜の立物で花笠の娘連に取り圍まれてなか／＼逃げる隙がなく、二人は遂に其夜出逢ふ事ができませんでした。さうする中に東の空は白んで又橋姫の車の歸る時となると、今度は節を更へて神樂の囃は寂しい悲しい調べを奏するのです。聞く者は皆しんとして只遠くの下の流の聲がするばかり、姫神も今別れを惜まるゝのでせう。聽く者の中には淚をながし咽泣する者もある位です。其歸途でも友は涼しい聲で歌ひました。人々が橋姫のみ車を社に納めて家に歸つたのはもう朝日が東の山の巓から黃金の波を青葉の上に降り注ぐ頃でした。

翌一日は人々は疲れの爲めに休んでゐる。お光は祭を終つてから二日目に家へ歸る事になつて友は牛の背中に鞍を置きお光を橫にかき載せ伯母から心付けの物など同じく結付け、手綱を取つて先に立ち川に沿ふ青葉の小徑を川上へ歸つて行きました。橡の林に入ると蟬の聲雨よりも繁く、林を出ると棧があつて遙か下の方で岸にぶつかる水の凄まじい有樣を牛の背の上から眺めてはお光は其度每にひや／＼しましたけれど、友も牛も至つて平氣なもので、棧などのあるかないか少しも氣を止めてゐるとも思はれない。お光は先の夜の友の歌聲の如何にも美しかつた事を言出でて讃めますと、それよりも一層美しい者があると言ふので怪しみながらお光が聞きなほすと、それは躑躅の花を插してる誰やらだなどと言うて笑ひながら友が戲れる、お光は包みきれない嬉しさを忍んで、花笠の娘達の羨しい事や橋姫の別れの神樂で泣いた事やそれから人は何時かあんな風に別れなければならないだらうかなどと云ふ事を話しました。こんな話を聞くと友も眞面目になつて二人の戀の何時迄も更らないことや來年の春になれば二人は一層どんなに樂しくなるだらうかなどとお光の胸の鎮まるやうに語り合うて、果はお光の望みのまゝに友は先の夜の歌を唄ひました。あゝ美しい山美しい川、人の心を爽かにする碧の色は今ほしいまゝなる姿を湛へて空を包み森を染め山を蔽うてゐるではありませんか。此爽かな美しい後景に抱かれて互に相慕ふ二人の者は無限に醉うてゐます。只心の弱いばかりに習俗の絆を斷つ事のできない者や自ら作つた要もなき桎梏の爲めに煩悶する者などの到底夢想する事もできない所でせう。愛の優しい姿は此二人を通じ現はれてゐます。願くば綠の玉宮よ、永へあせずあれかし、そが中に立つ二人の戀よ、永へ淸くあれかしと祈りたくなるのです。岩間の淸水を掬んでお光にのませたり甘い山芙蓉の實を取つたりして、二人が家に着いたのは正午少し過ぐる頃でした。

　眞夏の景色は日增に深くなり、峯に湧く白雲の徂徠忙しく、烈しい雷雨の一陣擊ち來るかと思ふと瞬時に晴れて、水上遠い峯の一角灰色の雲のゆき交ふ間から松の木立が見え、折りふし思はぬ方に旅人の菅笠の二つ三つの連なり行くのが見えますが、これは何れ山路傳ひ白骨の湯へ行くのでせう。山中の夏の景色はなべて雄々しいもので、雨も雲も瀧も流も皆活動の姿を現はしてゐます。只夏になつて苦しむものは溫泉へ通ふ牛の群で、其全身から流るゝ汗とつく息とが如何にも苦しさうなので、其頃になると牛追等は朝早く溫泉へ登つて夕方日が入つてから里へ下る慣ひになつてゐます。友は暑さにも怯げず日每溫泉へ通ひお光も日每森に靑草を刈つてゐる。望の光は二人の前に輝いて森陰から窺ふ朝日の光の華かなるにもまして美しい、悅びの泉は二人の胸に湧いて岩間に咽ぶ淸水のそれにも增して一層樂しく溢れてゐます。あゝ來年の春、此三字は二人の胸にどんなに樂しく響く事でせう。山櫻がまた谷と云ふ谷を咲き埋める頃は、橡の林にも家が一つふえ新しい庭が一つ作られ、今迄三軒であつたのが茲に初めて四軒となるのです。これを思ふと二人ばかりでなく三軒の人達も其折を今から待つてあゝのからのと考へを廻らしてゐました。

　深山の夏の姿は華かで雄々しい代りに又至つて短いのです。六月の末から算へて七月一つき八月の初旬になるともう何處となく秋のけはひが立ち初めて、遠い峯にたなびく雲の姿も細く長くなり、空は高く澄んで星が數を增して、森に鳴く蜩の聲、下を流るゝ水の響き、取り集めて物寂しいさまとなつて來ます。かうなると一日々々に秋の色が深くなるやうで、九月の中旬からもう氣早な櫻の葉や白膠木の下葉が色付いて、葡萄の蔓は谷と云ふ谷に紫の玉を連ね樹々の實は盡く黃になり紅となり、名も知らぬ小鳥の群は幾つとなく其馨しい木實を啣求めんとて林に集つて來る。此頃になるとお光の窓の賑かな事、朝から晩まで百鳥が鳴き交し一葉々々に朱を染めて橡の紅葉がはら〳〵と散りかゝつて來ます。やがて窓の蔦の葉に置く霜白く十月の中旬となると、時雨の雲が山を繞り、木々の紅葉は岩にこぼれ、吹き渡る夕の嵐一群二群渡鳥の群を送り盡し、夜となく晝となく蕭々として木の葉の散るに絕間なき頃となるのです。此頃はもう日影は薄く、又大方の日は曇勝ちで、峯に聞え谷に谺する牛の鈴のぢやらんぢやらんと云ふ響きもとり分けて胸に寂しい思ひをさせる。けれど友は怠らず溫泉へ通ひお光も怠らず冬籠りの營みに働いてゐます。

　或暖い日の事で、此頃には稀な好い天氣でした、お光は茸を求めて森に入り谷に下り、取り集めた色々の茸で腰にしてゐた竹籠も重くなるくらゐ、親達が待つてゐるだらうと思つて山の狹間を歸つて來ました。すると水上の方から鈴の音が響いて來て、森の蔭で人の姿は見えないのですが、覺えのある歌だと思つてゐると、やがて涼しいまがひのない友の歌聲が起つて森の蔭から曲つて出て來ました。友は不意にお光の姿を認めたので唄ふのをやめて急いで寄つて來ます。お光は嬉しさうに大變早いねと言ひますと、友は荷物の都合がよかつたと言つてお光の腰のびくを怪しみながら覗いて見ます。びくの中には濕地茸の大株なのや紅茸の美しいのやが重なつて入つてゐる。やあこれは大變だ、一株貰つて行かうと云つて濕地茸の大きなのに手をかける。お光は笑ひながら嫌だと言つてびくを後の方へ引くやうな眞似をしましたが、そのまま身をかゞめて二人一所に大きな株を選つてゐます。入日の光は今川向うの紅葉の森の頂を掠めて此方の山の中腹に輝き牛の背を越えて黃

金の波をお光の髪に注いでゐる。友は一株選り取つて牛の背の麻の袋へ入れながら、入日に向ひ紅葉の反射を受けるお光の美しいのに暫し見とれてゐると、先に行つた連の戀しいのか牛が一聲鳴き出す。二人は驚いて又連れ立つて林の方へ返して來ますと、入日は次第に峯に隱れてゆき、今はもう頂上の梢にたゆたつて名殘の紅葉を照してゐる。二人は林に入つてお光の家の前まで來ましたが、お光は日常の橋までと言つて復た林の端れの棧まで送つて來ました。此處は毎日二人の別れる所で、さよなら、お休み、明日また、と言つて友は毎日別れて行きます。棧を渡つて少し行くと曲り目となつて友の姿が見えなくなる。お光はいつまでもそれを見送つて、歌の聲と鈴の響きの小さく〳〵やがて聞えなくなるまで其處に立つてゐるが常でした。今はもう日の入つた後、夕べの色が其處此處の谷間にかゝつて來て、流を隔てて一聲鳴いた百舌鳥の聲が一層寂しく、友はもう棧を渡つて曲り目へかゝりました。四邊が寂しいせゐでせうか牛が又聲高く一聲啼きました。それが森に谺して次第に遠く消えてゆき、友は振り返つてもう一度さよならと言つたやうに頭をさげて其儘見えなくなりました。お光はなんだか胸の引きしめられるやうな悲しさを覺えて思はず涙をおとしながらぢつと其人の行つた方を見詰めてゐましたが、夕べの色が次第に濃くなつて來るに氣が付いて驚いて家へ歸りました。

あゝ風が吹くと花は零れ夏が過ぎると碧はあせてゆく、變化流轉は萬象の姿で歡樂と云へばやがて哀傷を想はせる、變化卽哀傷の姿は永へに此の境を脱れる事はできないでせうか。天地の間何物をも容赦しない運命の慘酷い手は今やお光の身體にも及んでゐます。お光が身も心も捧げて相愛し相愛された戀人の友はもう此世に歸つて來ないのです。どんなに哭きどんなに悲しんでも運命の鐵槌が一度下る所に如何なる戀も如何なる友情を微塵に碎けて飛んで了ひます。先の日の歸るさでした、友はお光に別れて一人家路に急いだ。其途中とある棧を渡つたのです。長い間風雨に曝されて朽ちかけてゐた其橋柱は其時脆くも折れて友は逆まく水に牛諸共陷つた。もとより急な山川の事ですから泳ぐべき術もなく遂に空しくなつて了つたのです。お光の悲しみはどんなでしたらう、昨日までの樂しみ、昨日までの望み、今はもう宛で夢のやうに消えて了ひ、戀があつてこそ美しかつた山の色、戀があつてこそ樂しかつた流の響き、それが今ではもう悲しみの色を示して、窓に來る鳥蔦の葉に戰ぐ風も皆哀れを告げてゐます。況してお光が一人夕暮毎に窓に倚つてぢつと外面を見てゐますと、流の上から谷の小徑をかけて白靄が厚くかゝつて來て、其間から牛の歸りの鈴の音がひゞいてき、夜になると松火の火がちら〳〵と林の中に見えかくれして二つ三つづつ連れ立つて遠く〳〵消えて行きます。お光は其響きを聞き其火を思ひつめてゐると夜雲の遠くの向うの方に友の姿が見えるやうで、別れた日に振り返つてさよならと言つた姿で自分を呼んでゐるやうで、思はず暗の中へ出て見た事もありました。

「明日」はと言つて歸つて行つた其棧の上に霜が眞白く置くやうになつても、其「明日」は永への「明日」となつてもう再び返つて來ない。朝にも夕にも鈴の音を聞き歌の聯を聞く度に、若しやと云ふ疑ひの爲めに幾度迷つた事でせう。此頃ではお光は晝夜窓の所へ倚つて落葉掻きへも出なければ枯木集めにも行きません。夜は窓へ小さな灯をつけて、峯々谷々を吹き渡る嵐の末の橡の林を動かして怪しい鳥の叫ぶやうに過

ぎゆくのを聞きながら在りし世の事ども色々胸に浮べてゐます。初め日の暮に逢つた事から、五月雨の日の物語のどんなに樂しかつた事、橋姫の祭見に行つた晩、其歸るさのどんなに嬉しかつた事、最後に別れた日のどんなに寂しかつた事など毎日毎夜繰り返してゐます。丁度無限につきない絲の端から端へと辿るやうにお光は飽くこと知らず悲しい思ひに耽つてゐました。

お光の親を初め林の中の人達も、新しい望みを失つて、皆氣拔けしたやうに、又言ひ合せたやうに友の事については一言も言ひ出しません、これもお光の悲しみを增さないやうにと努むる爲めでせう。けれどお光が此頃の有樣には皆心を傷め、どうぞ身體に障らないやうにと祈つてゐました。

噫來年の春は四軒になると言つた其家も永へに三軒だけで殘つてゐなければなりません、今はもう此三軒の家も橡の落葉に埋もれて、雪は近くの山々に降り初め森も林も梢あらはに落葉し盡す頃となりました。白骨の溫泉の人々は皆里へ下りて了ひ、牛の通ひ路は落葉と雪に埋められて、橡の林の三軒の家も來らん年の春、鶯が谷の戸出づる頃迄は里との交通は斷ち切られて、只もう眞白い厚い雪の衾の中に眠つてゐなければならないのです。

此冬の間の寂しさと言つたら何とも言ひやうがない。折々烈しい風が雪を捲き雲を吹いて荒れすさびゆく其外は鳥の鳴く聲すら聞えない。晴れた日には信飛境の峻峯が深碧の空を劃して白衣の姿氣高く聳え立つのを仰ぐ事もあるのですが、大方の日は灰色の雲が空を鎖込んで只霏々として白雪のとぶばかりです。人々は爐を擁し晝夜を分たず眠つたやうに日を送つてゐます。雪折の音なだれの響きが折々遠くでひびくばかり、流も氷張り詰めて潺湲の音も立てない。況して夜などは眞の寂寥です、デッドカルムです。折ふし聞ゆる狼の遠吠えは一層の寂しさを添へ、一鈎の銀月が深碧の空にかけて降り積つた白雪の上を照らす時何とも云ひやうのない寂しさです。若し寂寥の何物だかを味はうと思つたら此山中に一冬送つて御覽なさい。寂しさは人を擊つて人の命を縮めます。況してお光の身になつたらどうでせう、初めから人を知らず戀も知らなんだ去年の冬迄は、其寂しさも別にさうとも感じられなんだ、けれど今はもう望みもなく只寂しさに氣押されて日每憂に沈んでゐます。無情な雪はいやが上に降り積り寂しい雲は絕えず谿を鎖して此寂寥は何時迄つゞく事でせう。雪の中に年を迎へ、一月となり二月となるも寒さは愈々烈しく、斷崖の面は一面鏡を立て並べたやうで、崖の上からは雪がなだれて此鏡面を滑り深い谷底へ落ち込んで行き、其響きは谺して絕えずお光の窓まで聞えて來る。折ふし雲間を洩るゝ僅かの日の光で軒先の雪が少しばかりとけて雨滴が傳ふかと思ふと、やがて氷柱となつて日每少しづつ其たけが延びて行くと思つてゐると、何時か太い柱となつて地上に達してゐる。折ありては小さな小鳥が何處からか窓の下へ來てちッ〳〵と鳴いてゐる事があるかと思ふと、間もなく嵐がどつと峯を颪して吹雪を捲き大叫喚を引き起す其物凄さと言つたら殆んど想像の及ぶ所ではないのです。

三月の末からやがて四月となると谷々の積雪が少しづつ溶けて、張り詰めた氷もいつしか逆卷く濁浪と變つてゆき、梢の雪が落ちて雪間には若草が少しばかり萌出すと、雪氣の雲も峯を離れ日影は次第に暖かになる。此頃になると人々は初めて途を修繕ひ、落ちたる橋を架け、再び溫泉へ登つて來るのです。さうすると間もなく橡の林の人々が待ち憬れてゐた牛の鈴の音が谷々に谺して聞えて來る。あゝ其時の樂しい

事、丁度永い夜の夢に魘されてゐた人が窓にさす朝日の美しい光に醒めた時もさうでせうか、人々は初めて生返つたやうな氣がして、お光も幾らか心の紛れるやうになつたのです。峯の雪谷の氷の解合つて溪川は一時に溢れ、其勢ひ凄まじく兩岸を嚙んで行きますが、鶯は早や幼い聲で谷の中に鳴き出し、森の下草は小さな花をつけてゐる。温泉へ登る人は日增に多くなり森の中も日增に賑かになり、お光も此頃は戸外に出て枯枝を集めてゐます。けれど去年の此頃のやうに歌ひもせず戯れもせず終日口をつぐんで働いてゐます。やがて峯に霞がたなびき谷には櫻が吹き出し、懷しい春の景色はまた四邊を包む。お光は花により鳥の歌によつて又更に新しい悲しみを繰り返してゐる事でせう、毎日のやうに櫻の樹に倚りかゝつて深い思ひに沈んでゐました。去年花の晩に見た月の影はさながら朧にかすんで流の末も覺束なく其上に花の雲は幾重もかゝつてゐる。お光はそゞろ去年の夜の事を思ひ出して堪へ難く悲しいので、同じ樹の所へ倚つてぢつと流の響きに耳を傾けてゐました。

櫻の花が流の上に散り盡し木々の梢はまた若葉する頃となつてもお光はもう其夜限り歸つて來ません。麗しい花の精がお光を何處へか導いたのでせうか、水に沈んだ友の魂が戀しさに歸つて來て同じ流に誘つたのでせうか。

思つて見れば戀と死は誰でも經る人間の二つの大きな經驗で、戀によつて人は合ひ、死によつて人は離れる。此融合と分離とは萬象を通じての法則でせうか。お光は僅かの間に此二つの大きな經驗に逢つたのです、けれどお光の罪なき小さな心は此等によつて現はるゝ大きな力に觸れるには餘り弱きに過ぎたのです。お光の身體の此世から消えて行かうとも行かないとも二人の戀には少しも變りがない、二人の戀は永へに美しい戀で此頃はもう天上の樂土で無限の愛に浴してゐるのでせう。

白骨の温泉へ登りたまふ旅人は、大野川村から三里の山奥、橡林紅葉美しい中に三軒の家の今も其まゝに並んでゐる、棧の傍小高い草叢の中、小さな石碑の表面に二人の名前を刻んであるのを見らるゝ事でせう。其前には朝夕往き來の牛追が手向けてゆく木の實草花が絶えた事なく、其崖の下、梓の川の激流が岩に咽び雪を飛ばして永へに老いぬ戀の物語を語つてゐます。

伐木（一）

靜かな冬の朝の日の光は、こんもり茂つてゐる椿の藪影を濃く地上に印して、その葉影のまはりの地上の霜は、キラ〳〵輝きながらじつじつとかすかな音を立てて消えて行く。ガラスの窓越しに見る冬の空は、淡青に冴えて、迷ひ雲の一片すら見られない。郊外の村を繞してゐる杉の森の中に、細い煙突が一條見えて、薄白い煙が森の頂に靡きかゝつてゐる。十二月の初旬からかけて一月中旬まで、「冬」はその最も「靜寂な姿」を示してゐる時だ。渡鳥の鳴聲一つ、落葉の小枝を搖がす風さへ聞えて來ない。夏の夜に耳にする若やいだ人々の話聲は、何處へ消えたのやら、總てが冷たい空氣の中に、ぢつと凍てつきでもしたやうに、靜肅のきはみを見せてゐる。と、何處からか、、、、どさんと物を投げ出したやうな賴りない物音が響いて來る。その物音は強く空氣を震ひ動かすのでもない。いかにも力なげに、疲れた身軀をクッシャンの上に投げるやうな、投げたらばもう立ち上る勇氣もなささうな物の響きだ。

杜の家

杜の家

四百年餘も年を經た槻の樹が七本立圍んでゐて、周圍は、松、杉などの古樹が飛び／＼に取卷いて、塀の壞れかゝつた芝生の土手を繞らし、其土手の下には、細長い濠が此れに沿うて掘られてゐる。此槻の樹の杜の中に立つてゐるのが、自分の生れた家である。

四月の初旬自分は祖母の病氣を見舞ふために家へ歸つた。槻の樹にはまだ若芽がふかない。家の周圍の土手の上には、若草が僅かに萌え初めて、蒲公英の花が、其處此處に黃に咲いてゐた。近くの山からの雪消の水に量を增した小川は、籬の外を流れ、其川の岸には猶去年の落葉が堆く敷かれてゐる。

春先きではあるが、今でも折々西山からの颪が此老樹の杜に打當つて來て、其度每に家も震動するやうに覺える。――家には、老祖母と、父と、伯母と、それに小さな弟がゐる許り。舊時は酒造りや作男などが二三十人もゐて盛に暮らしてゐた家は、今では徒らに隅々に小暗い所が出來、終日戶も開けないやうな室が多くなつた。

ランプを二つや三つ點したとて、家の中の暗さは中々去りさうにもない。自分が久し振りで歸つたので、爐には平常よりは盛に火も燃えてゐるが、打消す事の出來ない冷たさは、何處にか祕んでゐて、火勢が一寸でも弱くなると、直ぐ四方から推寄せて、家ぢうに漲らうとしてゐる。爐の端で、連りに火をば燃やさうとしてゐる弟は「何故斯う燃えが惡いんだらう」と呟きながら、懸命に火を吹いてゐるが、火が燃え上ると、ゆら／＼と搖れて弟の影が後ろにながく引くが、やがて薄くなつて、復た闇の中に呑まれて了ふ。

古風の行燈の下で、久し振りの一家親子の晚餐、父が日頃丹誠した野菜、弟の飼養した鷄の卵、不味からう筈はない。話は遠くに別れてゐる妹と、最一人の弟の事で持切つてゐた。祖母も病氣を押して、假りに皆と一所に食膳に着いたが、別に何も食するでもなかつた。只折々寂しい笑を洩らして、話を聞いて居られるばかり。父は久し振りで樂しく醉つたと云つて、連りに青年時代の活動を說く。「兎角、若い時は、何事にでも眼前の事柄に、全力を擧げて打當つて見よう／＼とするものさ」と、自己が衆議院議員の候補者として、連夜徹宵して演說などした事をば話して聞かせる。

樂しい晚餐は了つた。祖母は病室へ退かれる、伯母と父は祖母を抱へるやうにして、從つて行つた。自分は一人で屋外へ出て見た。

薄月の光は枯木の枝を通して射して來る。見上げると、七本の槻の樹は、互に其怪腕を伸し合つて、縱橫無盡に入り亂れてゐる。そして其枝の伸び行くのを遮る何物でもあらば、突き退け推し破らずば息まないとのやうな勢を示してゐる。一度此怪腕の觸るゝ所何物か碎けずに居るものがあらう。

薄月の影は微かに地に落ちて、盤錯してゐる老槻の根の上に自分の影を投げる。顧みて其影を見ると、何と云ふ愍然な、憐むべき姿ぞ。今にも嵐が杜に打當つて來たらば、直ちに吹かれて何處へか飛ばされて了ふに違ひない。否、今

にも樹の根が裂けて、自分の身をば呑み込んでしまひはしないかと、思はず身を振はせて飛びのいた。

樹と樹との間に「鬼の蹲踞まつてゐる」やうに巖乘に建てられてゐる其家の影は、眞黑い一團となつて見えてゐるが、其れが何か巨大な動物の遺骸か何かのやうに思はれて、自分等は今其遺骸の中に葬られてゐるのかと思ふと、身内は一層戰慄を覺えて來た。

樹の下を拔けて、田の間の畷途へ出ると、寒いながらに春の月は微茫として、田を四五枚隔てての向ひの丘に、松の林が夢のやうに横はつてゐる。そして丘の麓に燈が二つ、素絹を透した珠のやうに見えてゐる。寂しい中に言ひ難い懷しさがあつて、其燈火は瞬き瞬きて何か告げるやうに思はれる。

振返つて見ると、森の影、家の影、眞黑く、闃を壓するやうに夜霧の中に立つてゐる。あの黑い影の中に老祖母が病み臥してゐるかと思ふと、復た耐らずなつて、杜の中へ引き付けられるやうに馳け込んで來た。

家へ入ると、父は暗いランプの下で、自分を呼んで、一人は次第に少くなる、此樣な大きな家は到底維持されない、先づ第一に家を壞さうぢやないか―と十露盤を取つて家を賣る相談を始めるのであつた。

祖母は、自分が歸つたので、幾分氣に緩みが出來たのか、其夜は平常よりは惱みも少く眠らるゝやうだと、頭母の枕頭で伯母は小聲で自分の耳に告げた。

其夜は疲れたので自分も祖母の傍に眠つて了つた。

四月の初旬であれば春は未だ淺い。樹々の枝はあらはに葉も着けず、僅に其端が薄紅を染めて、若芽の希望を示してゐる許りである。が、五月の初旬頃になると、若芽が次第に伸びて新綠が杜を包む。けれど、其頃には、杜に苗代鳥――椋鳥が群れて來る、此鳥が來てガヤ〱鳴き出すと、しめ〲五月雨が降り出して、夜などは眞の木下闇、晝間も四簷に雨滴の音ばかりして、其侘しい樣と云つたらない。樹の枝は滴に濡れて、葉と葉は重さうに下に向ひ、滴々は傳つて、太い槻の幹まで、殘す所なく濡れて了ふ。樹の根元、池の岸、草叢の中などには大きな蟇が幾つも何處からか飛び出して來る。太い枝の空洞の中に作つてある雀の巣も雨に洗はれて、小さな卵のまゝで、幾つも其巣が根元に落ち散つてゐる。此時は、杜が最も侘しい時で、夜などは一人として村人などの訪ねて來る者もない。家の者も仕方がないので、早く戸を鎖して臥て了ふ。そして一日も早く雨期の去るのを待つてゐるのである。

けれど、一度此雨期が濟んで、苗代鳥の群がガヤ〱鳴いて杜を去る頃は、若葉は伸び盡し、下草は長く生じ、久しく隱れてゐた日光が、杜の綠を直射する時、眞に綠蔭滿地、爽かな風が鮮かな綠葉に渡つて、其時の心地よい事、何とも言ひやうがない。殊に其頃、此槻の森を遠望すると、徐やかに晴渡つた空に、浮々焉として飛んで行く白雲を背景にして、綠一團、流れてそゝぐ眞晝頃の日の光を浴びて、燃え立たんばかり、家は其中に包まれて、有りとも思はれない。新たに翼のびた雀の兒は、幾十となく群れて、鳴聲も悦しげに、杜の中を飛び交つてゐる。何物か大きな力の溢れ溢れて、人の胸をも包まずには息まないやうな思ひをさせるのである。

青葉は愈々繁つて影深く、地上に日の光も洩れて來ないやうになると、夏雲一朶、老槻の頂に懸るかと見るまに、驟雨沛然、杜の中には白銀の矢が亂れ飛ぶ。

其華かな夏が過ぎ、蟬聲次第に薄れ、西方を

続る巒峯に雲が纏く、灰を焼く煙に遠い山の篠、の葉が交つて風に吹き送らるゝ頃になると、此欅の森は夙く霜に染つて、深碧の空の下に一團の樺色の宮となる。そして十一月の初旬からは、夜となく晝となく、しつきりなしに木の葉は散つて、其音の寂しさ、杜は再び寂寞の領となるのである。

掃いても掃いても、木の葉は忽ち庭を埋め、畑を埋め、屋根の隅、廊下の中まで堆くなる。表の門長屋には老爺夫婦が住んでゐるが、二人がかり毎朝のやうに木の葉を掃き集め大きな束にして桑畑に送つたり、殘りをば朝早く焼いたりしてゐる。「今朝でもうおしまひだ」と老爺は言ひ〳〵してゐるが、何處からか、木の葉は夜の間に舞つて來て、老爺が綺麗に掃いた庭一面に散り敷いてゐる。

木の葉が堆くなつてゐる處から屋根が腐り雨漏りがして來る。樹の根は伸びて家の土臺を下から擡上げる。廊下の床を曲げ、物置納屋が傾きかゝる。

木の葉の落つるのが息むと、陣々として冬の嵐が山々からおろして杜を襲つて來る。雲を捲き、霰をふらし、窓から戸隙から、吹雪を吹き込んで其寒い事、慣れなければ如何して一冬越すさへ容易な事ではない。

自分等の母は信濃の中でも、稍々暖い南國の趣を備へた伊奈から來られた。雲は白く竹は戰ぐ南信濃に人と成つた母に取つては、此杜の家の冬はなか〳〵に耐へ難いものの一つであつたに相違ない。今でも覺えてゐる、母の居室は、西日の當る六疊の小さな部屋で、冬の日は毎時も炬燵に當つて、縫物をして居られた。自分が其炬燵の向側に行つて、あたつてゐると、風が颯と吹き付けて、滿面の障子に、枯枝の端の搖動するのが寫る。母は少し身を震はすやうにして、針の手をば止め、一坊や、戸外へ出てはいけないよ、風が淩つて行つて了ふよ」と、恍惚とした眼で、凝然と自分を見て左樣言はれた。其眼の柔しさ、自分は其眼で見られて、斯樣せよと言はれた時は、何事を捨てても命ずるまゝに爲ずには居られなかつた。

母はどつちかと言へば小造りな方で、常時も、幼々しい樣子を見せてゐた。母の里方から、折々訪ねて來る老婆さんの話によると、母は自分の家へ來てから、一層物怖ぢするやうな風になり、臆するやうな風になつたと言つてゐた。

又自分の家には、一人の寡婦となつた伯母が居る。父の姉に當るので、夫の死後歸つて自分の家に寄寓してゐるのである。普通よりは身長が高く、痩せぎすで、顏の輪郭の正しい、目の細い、唇の確乎結んだ方で、常は默して克く人の話を聽いてゐるが、一旦思つてゐる事を口にし出すと、其舌端は中々烈しい、平常も、祖母と一所に家の隆盛であつた時の事を說き、其末には口癖のやうに、「家風に合はない者は、後來の爲めにならない」「富岡家の爲めには、何物も換へる事が出來ない」と云つて居る。

年々神經が鋭くなるかして、夜も多くは眠られない。何時も枕頭に古風な行燈を持つて行つて、何か舊い歌の書籍などを讀んでゐる。冬の嵐の夜など、不圖眼が醒めて見ると、伯母が未だ炬燵に當つて、何か書物を讀んでゐる。蒼白い細い顏にランプの光を斜めに受けて、凝然と書物に見入つてゐる、折々嵐が怒號して杜に打當つて來ると、肩を窄め、目を上げて、ぢつと戸口の方を諦視める。嵐が一陣過ぎて行くと、復た目を落して、靜かに書物に向つてゐる。其姿が如何にも物凄く、背後まで迫つてゐる闇の中に、伯母の顏だけが白く正面に光を受けて浮き出したやうに見える。自分は何物にか

襲はれるやうな氣がして、思はず夜具の中へ身を縮めた事もあつた。――斯樣な夜は、大方母も伯母に伴つて、遲くまで起されてゐるのであつた。物縫ふ手先きが慄へるやうにして、大方は潤目勝ちにしてゐる。そして折々伯母に聲掛けられると、慌てたやうに小さい顏を擧げて返辭をする。其樣が如何にも氣の毒で耐らなかつた。

青葉の夏の間は杜の家は養蠶で忙はしい、人も二三人は雇ひ、門長屋の老爺夫婦は家を仕舞つて宿泊りきりに來てゐる。桑を摘んで來るもの蠶に桑をやるもの、小さな弟などは朝早くから上を下に家の內ぢうを飛び廻つてゐる。不思議にも其頃は伯母の元氣の好い時で、先きに立つて養蠶の世話はやく、甲斐々々しく皆の者の指圖はする、そして隨分快活に話もすれば、稀には笑談の一つ位を言つて皆を笑はせる事もある。

所が、每年九月初旬、二百十日と云つて農家の厄日として風神を祀る日がある。其日の前後には必ず大きな嵐が杜を襲つて來る事がある。二日三日間は、杜は大動亂、巨楝の枝と枝と打合ふ音、葉の揉れる音、屋根板の飛ぶ音、家は大浪に搖らるゝ孤つ岩のやうに、今にも碎けて飛びはしまいかと思はるゝが、此嵐が吹き過ぎると後は快晴が少時續いて、間もなく秋雨の時となる。

此秋雨が降り出して來、嵐が起つて來ると、不思議ぢやないか、伯母の氣質は非常に恐ろしくなる、肩が凝る、歯が痛む、頭痛がすると言ひ出したらば、最う耐つたものでない。呆然傍へ行つて物でも言はうものなら、其れこそ大變、甚麼事になるか解らない。一旦怒り出さうものなら身內は戰慄ふるへ、傍人の思ひも寄らない激語を放ち、自分の居間へ引籠つて、容易に出て來ない。祖母も父も腫物に觸るやうにして、話聲すら潜々とさせてゐる。戶外は雨、滴が欅の葉を傳ひ、軒端を叩く音がしつきりなしにしてゐるばかり。屋內は空氣が濕つぽく、疊の上に足痕だけ白く殘つてゐる。其時の寂しさと言つたら耐つたものでない。

折々は家の問題が起つて來る。持ち切れない家屋を如何にしようとか、小さな弟を何處へやらうとか、皆で話し合つてゐるが、其度每に、父は、「如何しても、此家には大勢の人が一所に住む事は出來ない」と口癖のやうに言つてゐる。

實際此杜の家には大勢の人が一所に住む事は出來ないのであらう、母は或年の秋、生家へ歸つて行かれて了つた。

其れは每年のやうに杜に大嵐の亂れた後、間もない程の事であつた。其年の嵐は近年に稀なもので、岡崎村幾百町步の稻田が、出穗に揉まれて、只眞白な稗籾ばかりとなつた凶作の年であつた。

其日は朝から風が烈しく、雨さへ凄まじく降り出して、杜の動亂と言つたらない。日が暮れ、夜が更くるに連れて、風の勢は增々募つて來る。天窓の戶は吹き飛ばされ、雨は其處から屋內に降り注ぎ、戶と云ふ戶は皆がた／＼鳴り渡り、今にも何物か飛び出して來さうに思はれる。燈火を早く消して皆臥所の中に息を凝して、戶外の嵐の音を聞いてゐる。殊に伯母は夜もすがら眠られないと見えて、屢々咳する聲が聞えて來る。自分は强ひて眼を閉ぢて眠らうとしても中々眠られない。轟と云つて、一陣の風が裏口の欅に打當つたかと思ふと、家がぐら／＼と大地震の時のやうに搖れて、屋根石の墜落つる音、庭の松の大枝が折れたのか、梟のけたゝましい啼聲で、池水の四方に飛び散るやうな響きがする。

如何樣なる事かと耳聳立ててゐると、又ぐわ

うぐわうと風の中へ何物か包んで、遠く〳〵運んで行くやうな音がする。此家までも一所に引き包んで行くのではあるまいかと思ふと、如何にも心細くなる。身をまるめて蒲團に縋つてゐると、不思議ぢやないか、祖母から常々語り聽かせられた、自分の家の御先祖の姿があり〳〵闇の中に見えて來た。

身長の高い、黑い鎧を着た人で、白馬に跨り、緋の房を左右に靡かせて、頭に鍬形の甲を頂いてゐるのが、其甲は燦爛として怪しい光を放つてゐる。手には長い槍を横へて、闇黑の中を彼方此方音も立てず馬を進めてゐる。風がぐわうと打當つて來る度に其馬は跳り上る。――身は蹋蹐むやうになつて、怖しさに聲も立てられない。闇を透して凝然と視詰めてゐると、馬の跳る度に甲冑のかち〳〵鳴る音が耳に響き、甲の光がさつと明るく闇を裂いて輝いたかと思ふと、嵐が一陣、どつと怒號して打當つた。と見ると、其まゝ其武人の姿は何處へか消えて了つた。吐息と一息したかと思ふと、自分は非常に疲れたやうになつて熟睡して了つた。

嵐は一夜吹き荒れて、明方からは忘れたやうに止んで了つた。朝早く急いで戸を開けて見ると、池の水は吹き上げられて庭一面に溢れてゐ、樹の枝は打ち折られ、縱横に飛び散つてゐる。小鳥の巣は無數に枝每に落ちてゐる。生垣は吹き倒され、梨子畠には青い小さな梨子の實が畠一面に狼藉のさま目も當てられない。裏へ出て見ると、稻の葉が一さいに吹き靡けられ、何か怖ろしい魔物の蹂躙し去つた痕としか思はれない。

が、欅の樹は最う、昨日の嵐は何處ぞと云ふやうな樣で、梢一つ鳴らさず、忘れたものの如く靜然として立つてゐる。小鳥の群も嵐と共に遠くへ吹き逐られたのか、平常の囀り聲が聞えない。加之、其翌日一日は日が照らず、曇つた空は如何にも疲れたと云ふ姿で、地上に臨んでゐる。

何の爲めの嵐であつたらう、野を吹き杜を吹き家を吹いて、荒れに荒れて稍々滿足したのか、其れとも未だ十分心が行かないのか、顰面をしたやうな空は如何にも氣難しさうに見えてゐる。

自分は昨夜の事を話したが、誰一人信ずる者がなかつた。

何の爲めの嵐であつたらう? 自分に取つては此嵐は實に非常な打擊であつた。何の故であつたか明かに記憶してゐないが、此嵐のあつてから間もなく、祖母を初め家の人々の間に烈しい口論があつた。――其結果からか、母は遂に此杜の家を捨て生家へ歸つて了はれた。

「如何しても大勢が一所に住む事の出來ない家」か。其後暫く家に居た妹も他家へ嫁ぎ、弟は遠くの學校へ行き、自分も遠く離れてゐ、家には祖母が病んで、父と伯母とが枕許に侍してゐるばかり。小さな弟が、折々近くの町の學校から歸つて來て祖母の用をたしてゐる。

祖母の病氣は、自分の歸つた時はさまででもなかつたが、四五日たつと急に病勢を增して來た。それも晝間は平常と餘り變らず、折々床を離れて人々と談話などせらるゝが、夕方からかけて夜間は非常に惱み出し、看護の者は交代で終夜枕頭に侍してゐる。

小さく瘦せた祖母の顏に、惱みの色が見はれて、細い手を悶えて苦しまれるのを見ると、周圍の者が一層耐へられない。夢中で折々遠くに離れてゐる弟の名を呼び、手など伸ばされる。自分はそと其手に觸れると、其儘捉へて離しさうにもしない。やがて、惱みが稍々靜まると其まゝ眠り入つて了ふ。

自分は其まゝ祖母の睡眠をさまたげじと、寂然としてゐると、自分の傍に父が坐つて、祖母

の顔をば諦視してゐる、――自分は不圖前年の嵐の夜をば思ひ起して、色々と母の事などを思つてゐた。が、其夜は至つて靜肅で、風一つ樹の梢を鳴らさず、只折々梟が樹上でホー〳〵と啼くのが聞えるばかり。

「靜かな夜ですね、少しは御樂になつたやうです、お父樣、お息みなさつたら」

「なに、俺なんか關はない、お前こそ疲れたらう」

「いゝえ、一夜ばかりですもの」

祖母の眠りを破るのを恐れて其儘默して了つた。燈火がうす明るく、天井に丸く火の影を寫してゐる。父は其行燈の陰に坐つて居らるゝのであるが、其横顏の窶れた樣、髯が伸び顴骨も高くなつたやうに見える。自分は目を閉ぢて凝然と坐つてゐた。微かながらに、祖母の鼾の聲が耳にはひる。猶其儘其處に坐つてゐると、不意に何に襲はれたのか、鼯鼠が一聲鳴いて、軒を過ぎて行つた。――此夜一夜祖母の枕頭去らず看護してゐた。

程なく祖母は亡くなられて了つた。家には父と伯母とばかり。所が、此頃では、伯母が祖母と同じ病氣で次第に重つて行く、暇を得たらば、早く歸つて來いとの報が來た。そして、其終焉に、家屋は遂に打壞して賣る事にした、と書いてあつた。

切株

家屋は大半破碎せられ、屋敷の外を廣く取圍んでゐた杉の生垣は引破られ、裏庭から續いてゐた松林、楓の樹、高く聳えてゐた榎、其根本から樹の中程までも爬ひ登つてゐた葡萄の大きな藪、皆切り拂はれて、鬱蒼と一團の杜をなしてゐた七本の槻の老樹は、其中の大きな三本を切つたので、後はすつかり明るくなつた。今迄は日影も浴びず、ひよろ〳〵してゐた下草は元氣よく生長する。犬蓼、露草、藜などがたけ高く伸びて、其三つの切株を覆ひかくすやうにする。吸葛や朝顏が一面に爬ひまはつて、紅に水淺黄に其切株の面に點綴する。

朝日が登り初めると、切殘された槻の樹の青葉は影を長く地に敷いて、切られて間もないその三つの切株の面をば痛々しさうに覆ひ包む。日が次第に高く登ると、緑の陰も次第に遠く退けられて、周圍をかこむ草の露も乾き、白く稍々茶褐色を帶んで來た切株の面は容赦なく烈日の下に照らし出される。切目は疊六枚敷く位の大きさがあらう、其面にはピシ〳〵と罅が縱横に入つて、中央には、地下幾丈の下までも續いてゐるだらうと思はれるやうな大きな穴が穿いてゐる。

厚は此切株の側に立つて樣々な回想に耽つてゐた。

厚が故郷を出たのは十年前だ。五年前に一度歸省したが其時はまだ杜も舊時のまゝ、舊の家屋もそのまゝ、家の人も、祖母も居た、伯母も居た、母も生存してゐた。それが今では、其三人の女性はもう此世にない。弟二人もそれぞれ散つて家にゐない。只父と少妹二人とが破屋の片端に居るばかりである。

夏の朝の空氣はいかにも爽々しい、深く吸ひ込めば身も輕くなる。四方の山影が鮮かで、今まで杜に遮られて見えなかつた隣村の家々、別な國へでも行つたやうに際だつて目につく。

草叢の中から切株の周圍をめぐつて、酒倉、穀物倉の立つてゐた跡へ出て見ると、一面の大豆畑に變つてゐて、青々と茂つた葉の蔭に、うす紫の花が微かに咲いてゐる。松の林のあつた方へ行くと、夏草の中に昔ながらの苔むした井戸端に、水が一ぱいに湧いて流れてゐた。

幼時の回想は潮のやうに彼の胸に溢れて來た。そして、五年前と五年後と轉變の如何にも甚しいのに、只舊い物語の中でも歩いてゐるやうな氣がした。

穀倉が三棟、文庫倉が二棟、その他の酒造所、油倉、一時に四五駄の米を搗き上げた水車場、二三の小作人の家族が住んでゐた門長屋、物置場、厩、秣小屋、乳金門、盡く跡方もない。生垣に添うて取卷いてゐた細長い池は、大方岸が崩れこんで水が銹びてゐる。岸を踏んで通ると、ぶつ／＼白い泡が浮き上る。――斯樣な荒廢した跡が、嘗て自分の生れた家かしらと、不思議な氣がする。一寸立留つて見渡してゐると、妙に靜寂で、白ちやけたやうな調子が隅々まで行き亙つてゐる。切殘された樹の青葉は半面日の光を受けて、黑い影を切株の上まで投げてゐる。――何物かさん／＼に亂暴した後で、一ざまを見ろ、少しでも俺に手向ひすると、此樣な目に逢はされるぞ―と何處かで嘲笑つてゐるやうな氣がする。

厚の父の失敗から、四五百年もつゞいた家が、このみじめな樣に陷つたのだといふ者もある。鑛山事業に手を出したり、政治運動に失敗した爲めだとか、解釋を付ける者もあるけれど、厚には人一代の失敗ぐらゐが、幾代も固めて來た舊家を破る原因にならうとは思はれなかつた。

往時はよく杜に嵐の荒れて行く事が有つた。人に教へられたのか兒童等は大樹の幹にしがみつき耳を當てて、風を聽くといふ事をやつた―ぐわうといふ響きが、枝を傳はり幹を通して、地下まで深く沈んで行くやうで、其の響きが高くなればなる程、幹は搖れ、地は裂け、家屋は撥ね飛ばされ、家の人々は皆殺される樣な氣がして、思はず泣聲を立てて、其の樹の下を飛びのいた事も有つた。

何か不平で不平でたまらずにゐる或る巨きなものが、杜を倒し家を突き拔いて、何處へか飛び出して行かずば止まないといふ樣な氣がさせられた。

槻の樹は其の植ゑつけられた當初から、もう大地に捉はれて、あがきもがいて、纔かに、空へ向つて腕を伸ばし、手を差し上げ、其の悶をうつたへてゐた。幾百萬の小さな實となつて其の苦みは年に一度づつ四方へ散布せられるけれど、なほ飽き足らず、葉を振り、根を伸ばし、巨きな樹幹其のものが、唸を立てて空中を飛行したい勢を見せて來る。其の發展の障害になるものは、人家といはず、生物といはず、盡く吹き飛ばし、打壞さずにはゐない強い力を見せて來る。

一度は必ず、暗い巨きなこの家の破碎される時があらう、樹の切られる時が有らう、そして明るい氣持のよい家を掛けて、家族のものが其の家の爐邊に集まる時があらう、さうすれば屋敷が明るく廣くなつて、生々するだらう、といふやうな空想に耽つたこともあつた。

ところがこの空想は殆んど實現せられて、眼前に發展されてゐる。厚は殘念でも、口惜しくもない。父の代に現はれなければ、自分の代にか、またその次にか、いづれ見えて來る現象に相違ない。いかなる森林の中に生活する人間にあつても、その森が年を經て來れば來る程、その森の力は人間を壓して來る。植物と人間の爭は慘たらしいまでに烈しくなる。彼等植物は嘗て人類によつて切り縮められた自分等の領土を取り返さうとする強い復讐心を、後代の者の上に加へて來る。日の日を逐つて、森の住民の神經をいら／＼せしめ、人間同士の間に爭鬪を起さしめ、互に噛み合ひ、摑み合ふ樣を眺めて、彼等植物は、屋上に幾千の葉の手を擴げ、鳴りを立て、笑ひさゞめいて居る。家を破

つて、天日を屋内へ導き入れるか、でなければ樹を切り倒して、人間の反抗を、此等の杜に加へるか、いづれかの途をとらずには居られなくなる。

厚は屋敷の内を一廻りして、欅の樹の下へ來て、その幹に身を倚せかけた。樹肌が衣物を透して身に觸れるやうに覺える。心は靜かになつて、樣々な過去がありくく眼前に蘇つて來た。

夏の初め、欅の若葉の出初める頃は、白い極めて小さな、有りとも思はれないやうな花が一面葉隱れに咲く、やがて實となる。これも小さい青い色をした菱形のもので、此小さな木の實から如何して此樣な巨樹が生ひ出たのかと不思議な思ひがさせられる。此實が落ち出したら、それこそ止む時がない。ほろくくと夜でも晝でも、屋根に落ち、畑の中へ落ち、掃き集めては川へ捨てても捨てても、直ぐ後から溜つて了ふ。或年其掃き捨てた殘りを掻き集めて置いたら、何斗ばかり有つたらう。それを俵へ入れて庭の片隅に置くと、何處で聞いたのか、旅商人が來て、それを賣つて呉れとの事であつた。何にするのかと訊くと、方々の森の木の實を集めて遠くへ送つてやると、植林するために其等の實を播き付けるとの事であつた。もうそれ等の實からは芽が出て、若木となつて、知らぬ土地に生長してゐるのかも知れない。其年限り「欅の實」を買ふ旅商人は尋ねて來なかつた。

根本の小高く盛り上げてある土の中からは、幾つかの蟬が拔け出て大樹の幹にとまり、其拔殼が殆んど隙間もなく、幹の周圍に取りついてゐるのであつた。所が其頃には克く欅の外皮が剝落する。自ら落つるものと風に吹かれて無理に剝ぎ取られるものとある。其剝ぎ取られた跡は青い色をして、乳のやうな水が其處から滴り落ちる。いかにも痛々しい。樹の根には無數の黑蟻が巢を作つてゐて、日毎幹をば上下してゐるが、それが群がつて木地へ吸ひ付く。樹肌から沁み出る乳をば吸はうとしてゐるのであらう、眞黑くなつて一處に輪をなしてゐる。それを見ると、嫌な氣がして、身體ぢうが身震ひするやうで耐らなくなり、家の中へ驅け込んで、一日でも二日でも戶外へ出る事すら出來ない事もあつた。

五年の間に色々な事が起つた。伯母の死んだのは枯林に雪の降積つてゐる頃で、祖母と母の死んだのは若葉のまだ柔かい夏の初めであつた。祖母と伯母とは家の舊分子、舊時代の權化で、母は新たに他所から嫁いで來たので、力が弱い。舊い歷史の籠つてゐる家には、何時からとも知れず釀されてゐる恐ろしい排他的の思想がある。其思想が固まつて祖母となり、伯母となつたのだ。淋しい、懷しい、いつも淚を持つたやうな眼をしてゐた母は取りつくすべも力もなかつた。

厚が五年前に一度歸つた時でも、母の姿は見る影もなく瘦せてゐた。美しかつた頰の色が失せて、頭髮は薄くなり、肩は一層こけて、呼吸づかひも苦しさうで、一體が華奢な小形な人が、一層華奢になつたやうに思はれた。

家の人達が寢靜まつてから、ランプの下で、聲を潛めて母は語り出した。

「お前なう、後生だから伯母樣に善くして上げてお呉れ、お前が伯母樣に善くして上げないと、又私につらくつて困るから」

「だけれど、嫌ですね……」

「嫌だつて、それでは私が如何すれば好いか分らなくなつて了ふ。お前に手紙を出す事も出來ないし、歸つて來ても餘計な事を喋つてはいけないと、昨日も固く言ひ渡されたしね」

「かまはないぢやありませんか」

「かまはないてお前、それを少しでもしようものなら、それこそ恐ろしく叱られるのだからね。もう私の身體なんか長く續かないやうな氣もするし……」

「だつて、それは仕方がない、お母様が忍べるだけ御忍びなさい」

「忍ぶ事は忍ぶがね、せめてお前にでも話さうと思つて……」

母はその儘語を切つて、一寸傍を向いてランプの光を避けた。薄くなつた頭髪を小さく結つた髷が下つてゐた。細い頸が青白く、何か物の影を見るやうな氣がした。「せめてお前にでも話さうと思つて……」其語が鋭く胸へ響いて、何か言はうとしても、厚は語が出ない、情ないやうな淺ましいやうな言はれない思ひが充ち滿ちた。

母は賑かな町家に育つて、十八歳の暮、振袖の美しい姿で、此の杜の家へ嫁いで來たのであつた。家はまだ盛の頃で養父母と夫と夫の姉二人と、召使の男女も四五人はゐた。やがて祖父が歿する、夫の姉も他へ方づいたが、一人は程なく夫に死なれて歸つて來た。夫は年少だつたので、少しの借財を苦にして、それを整理するといふ次手に、所有の田畑をば金に代へ、金廻しの爲めにとて、妻の里方へ預ける事にした。此れが一家紛亂の基となつた。一時隆盛であつた里方も、商業の失敗から、遂には其預りの金さへ返されなくなつた。

母は窮境に立つ事になつた。父の家出は其頃から烈しくなる、遂には十年も居た後で、母は二人の子供を殘して里へ歸る事になつた――里へ歸つて後の母の困難はいふまでもない。所が、其後又十年以上も離別の姿になつてゐた母は、或人の骨折で復び厚の家に戻る事になつた。「里方の者とは緣を切つて、只子供の爲めに戻る」といふ事で、厚に取つては未見の弟を連れて歸つて來た。十年以上も逢はない母親だ。如何にも懷しい。懷しいけれども其間に何物か入つてゐる。情がしつくり合はない。厚の頭腦は既に排他的に傾いてゐた。舊い歷史が半ば以上彼の頭腦を支配してゐた。「母は氣の毒な人だ」と彼は口癖のやうに言つてはゐたが、彼の情は母を溫め、母を勵ます事が出來なかつた。弱者を嘲るといふやうな恐ろしい念が不圖彼の胸を突いて走る事があつた。

母子の間に情ない會話があつた翌朝、厚は朝早く庭へ出て見ると、何人か大樹の蔭でひそひそ話し合つてゐる者があつた。一人は母の聲らしい、一人は出入りの老婆の聲だ。

「でも、厚様が御歸りなさつて幾許かおよござんしよ」

「いゝえ、あれが歸つて來ると、猶更家内がむづかしくつてね。私に好くして呉れゝば、呉れるで皆様が嫌な氣がなさるし、それに、彼れが氣だつて何だか解らないしね……」

風が青葉に喧ぐので克く聞き取れないが、不圖其語が耳にはひると、はつとして思はず厚は驅け出さうとした。いつもは氣振にも見せない母がやはり自分の無情なのを感じてゐるのか。心から泣いて母の愛を受けようとしても、妙にそれが逸れて了ふ。濕ひのある眼に力を入れて、それでも何處か物臆ぢするやうな風で、「お前、此を仕ておくれでないか」と言けかけられると、妙に一寸逆つて見たくなる。「嫌です、私他に忙しい事があるから」と一言に退けると、強ひて言ひ張らうとは爲ない。しを／＼とした風で、「さうかえ」とばかりでやめて了ふ。取り付くすべもないとのやうな母のその風を見せられると、耐らなくなるが、どうも何とか逆はずにはゐられない――老婆の聲が又耳にはひる。

「そんな事が、とんでもねえお前樣、厚樣だつて、どんなにかお前樣の此方へ御歸りなさるのを待つておいでなさんしたし、え、え、お母樣が歸つて來てさへ呉れゝばつて仰しやつてね……」

「さうかね、私だつて此度歸つて來るには、厚一人をたよりにして來たやうなものだがね、それが、來ると直ぐ東京へ行つて、歸つて來てもね……」

厚はもう聞いてゐるに忍びなかつた。小急ぎに其處を去つて、後庭の池の方へ行つた。何だか胸が搔き挘られるやうな、又嫌な氣がして耐らない。暫く無意味に池の岸を歩いてゐたが、振返つて見ると、大きな樹の根本を母と老婆とが右と左へ別れて行くのが小さく目にはひつて來た。

何故心から母が愛されなかつたらう、耐らないやうな氣がしてゐると、回想は一層以前へ辿つて行く。

五月雨がしと〱降つて闇が深く杜を包んでゐた頃だと思ふ。或る晩厚は眼が痛んで眠らずにゐると、母は枕頭へ金盥へ水を入れて持つて來て、手拭を絞つては痛い眼に當てて終夜看護して呉れた。翌朝になると、眼の痛みは大方なくなつて了つた。其朝だと思ふ、家の人々が、祖母も伯母も皆居る所で、厚は、「昨夜はお母樣が、終夜私の眼を擦つて居たので、幾許睡くても眠られやしなかつた」と言ひだした。母は一寸眼を擧げて厚の方を見たが、座に耐へられなくなつたのか、つと立つて室を出て了つた。祖母も伯母も默つて、他所事のやうに、茶を飲んでゐた。

後二年して母は歿して了つた、勿論厚は其死目には逢はなかつた。

「母は死ぬ爲めに歸つて來たんだ。何人にも愛せられず、只死ぬ爲めばかりに歸つて來たんだ」と思ふと、恐ろしい力が身に感じて來る。外界から來る者は何者も入れまいとする、如何なる人をも排出しようとする此家には、一體如何なる力が籠つてゐるのだらう。

破屋の一隅の今の住居、廣かつた臺所の一部を切り、舊時の十分の一位の爐を作り、周圍に莚を敷いて、村の農夫が毎晩のやうに樣々な話を聞きに來るのを相手に、父は爐へ枯木を燃べながら話してゐる。如何にも安氣で、今初めて所を得てゐるやうだ。「なあに、なるやうに成るものさ、俺が爲なければ貴樣がやるばかりだ」と言つてゐる。

樹上の青葉には風が一層騷ぎ出した。向うに見える廣い松原を越えての山の頂からは白い雲が湧き出して、次第々々に擴がつて行く。青葉が騷ぐにつれて回想は繁くなる。雲が擴がるにつれて陰影は明るく暗く切株の上を覆うて走る。

松林

縱一里に亙る黑い松樹の大森林、眞白い一條の道が高原の一角から、此森の中へはしり込んで、その上をとめて行くと、また矢の如く、その道は眞直ぐに向うに走り拔けてゐる。

一二尺も積つてゐた雪が溶けて消えて、その道は次第に乾いて來た。また所々水はけが惡く地は濕つてゐるものの、大方は白く、日が照り付けて、原上の輕い地は、吹き過ぐる風に其處此處に小さな龍卷を上げてゐる。

森の西方二里ばかりの所を、日本アルプスの高嶺が鐵壁のやうに空高く立ち連なつて眼界を劃してゐる。淡青い日の光が空をすべつて山頂へ落ちると、尖つた山の幾襞は强く黑光を放

つやうに思はれる。

白い道の兩側からつゞく高原の上には、黄褐色の地にうす綠を交へて、その中には紫天鵞絨に銀線をぼかしたやうなちごちごの花が一群二群輪となり點となつて原一面を覆ふ。原の上を縱横に通つてゐる小徑を緣取つて、原を覆うて燃え盛つて來た野火の末の消え殘つたかたみのやうに、木瓜の花が眞赤に咲き連なつてゐる。その徑の上を通つて行く人も見える。

落葉松の林が青く芽をふき、楢の樹が若葉より先きに銀灰色の花房を垂らし、櫟、柏が嫩綠の芽を見せて來た。空を群れて一群又一群椋鳥が何處からともなく黑く舞つて來る。が、此等の鳥の假の泊りは、此高原の上に其處此處に立つてゐる欅の老樹の森である。五月の空の晴れ亙つた下の此等の老樹の綠の色程盛んな姿を見せてゐるものはない。太古は此高原の上一帶に覆うて繁茂してゐた此等の大樹林が、次第に燃き拂はれ、切り倒され、今では舊い神社の森か、または舊くから續く土着の大地主の家を立ち隱して、大海の中の孤島のやうに、僅かに昔時の面影を止めて居るに過ぎない。鳥は此森影を求めて、舊時と同じに夜毎の泊りとしてゐるのだ。

松の大樹林もまた同じく太古の姿の一部を高原の一角にとゞめて立つてゐるに過ぎない。日本アルプスが昔時火を噴いてゐたものであるならば、その當時の形見を、此松林につゞく西方の麓の原に、冷たくなつて苔蒸して點在してゐる磊々たる大石にうかゞひ見る事が出來る。

ぐわうと鳴つて過ぎ行く風の響きが、稍々緩かな調子になつて來た。冬の間のさあッ〳〵と物を突裂くやうな烈しい松の響きは、その下を通つて行く者の肩をも思はずすぼませたが、今はぐわう〳〵と吹くでもなく、過ぎて行くでもない緩かな物のひゞきになつて、その中を通つて行くものは思はず眼を擧げて、暫くでもその響きの行方を考へずには居られないやうだ。

吸ひ込まれるやうにして巨きな林の一方の口から入つて行つた旅人の群は、一二時間してまた向うの白い道の上を小さく辿つて行く。飛驒路へ通ふ峠道の途中の或る驛路まで、馬車は松本市の西の端から毎日のやうに通つてゐる。白木綿で上から左右の窓まで垂れ下らせてある日覆ひの幕も、砂塵で薄灰色に染つてゐる。車臺は上部を大きく下を少しすぼめるやうにして、前後に烈しく搖れるのを寧ろ定めのやうに作つてある。二匹の痩馬が白泡を噴きながら、蹄で強く大地を叩いて、肩から背から、汗を流し、七八人の乘客を乘せて走つて行く。未だ今年は湯を開いて間もない白骨への湯治の客か、でなければ飛驒路へ越ゆる白股引の旅人の群である。

疲れた馬を勵ます爲めに、折々吹き鳴らすラッパの響きが、原の上に鳴り渡つて、馬はその度に勢を出し頭をもたげて走り出す。土煙を蹴立てながら馬車は松林の中へはしり込む。兩側からの松の影が白い道の上を彩つて、ちらちらとその影が動く。馬車の覆ひの上をも、兩側の窓からもその影がちら〳〵と旅客の膝の上まで亂れ射す。

馬車が森の中程まで走つて來たかと思ふと、馬の足掻は自づと緩くなつて、馬車はとある松の樹の傍へ引き寄せられる。見ると、其處には薄く松板で葺いた二階家が一軒立つてゐる。

馬は强く鼻嵐を立てながら二匹並んで息をついてゐる。

「よく早く來たね」と、家の中から聲がして四十位の頭髮を束ねた、鼻のひしやげた女が、襷掛けのまゝで、客の數だけ茶を汲んで持つて出て來る。

「あゝ、おつかあ、畜生の奴、此間から弱りや

がつて、どうも足が遲くていけね」と、言ひながら馭者臺から降りて手早やに、家の裏手の方から馬桶に水を汲んで來て馬に飮ませてゐる。
「まあ好く可愛がつてやりましたよ。ほんまだ、畜生だつてお前の米櫃ぢやねえか」
「ほんまだ、可愛いぞ、ハヽヽ、可愛くなくつてどうするだ、歸りにやな、馬草どつさり吳れて可愛がつてやらあな、ハヽヽ」
「置いとくんな、眞個に、嫌だ、嫌だ……」と若い女の聲がしたかと思ふと、バタ〳〵奧の方から駈け出して來たものがある。見るとだらしのない、細帶のまゝで、二十歲ばかりの女が一人飛び出して來た。
「姉樣、一人にしちや嫌だ、嫌だ」とまた後から年下らしい者が出て來た。同じ姿をしてゐる。
「ヨオ、梅てき、晝間の中からなんだえ、ハヽハ、そのざま。歸りに澤山馬草をかつて可愛がつてやるぞ、待つてゐろい」
「何だつて、松さ、可愛がつてやるが聞いて呆れらあ、此間のだつてまだその儘ぢやねえか、男のやうでもねえ」
「さうぶり〳〵するねえ。——また來てゐるな、いくら頭だつて眞晝間から見つともねえ、他人樣が居るぞと言つてやれ、ハヽヽヽ」
「いられねえお世話だ、さつさと馬の支度でもして行つて來い、人並に歸りにやまつてやるに」
「ハヽヽ、人事ぢやねえだ、馬鹿々々しい」
「やい〳〵梅公、何處え行くだ、馬鹿」太い高い男の聲で呶鳴るのが奧から聞えて來る。女は一寸馬車の方を家の中から覗き込むやうにして、また奧の方へ行つた。

　太い息をついて、高く波打たせてゐた馬の腹も次第におちついて來た。馭者はチョッ〳〵と口を鳴らしながら、馭者臺へ飛び乘るが早いか、ヒューと口笛を鳴らして雨手綱を引いた。先きの四十女は急いで出て來て、茶盆を客の膝の上から取つて行く時、客の手からは一二錢づつの茶代が盆の端に載せられた。

　ヒューとまた口笛が鳴る。元氣よく馬は頭を振り動かして馬車を引き出した。蹄の音が四方へ響く。輕く風が吹き出して窓の日覆ひが後方へ靡く。土煙が輕く馬車の後を追ふ。車内の乘客はまたぼつ〳〵何か談り出した。見る見る馬車は一軒家から離れて走つて行く。森の向うの出口が小さく遠く見えて、松の林が兩側から足並をそろへて道に迫つて立つてゐるやうに見える。馬車の後影は次第々々に小さくなつて、出口近くなると後方からの白い土煙に包まれて、姿はその中に沒してしまつた。

　馬車の通つて行つた後を、輕く足支度した旅人が一人二人松林の中を通り拔けて、不圖怪しさうに林の中の一軒家の前に立ちどまつて見るが、中には四十女が一人くつたくさうに坐つてゐるばかり、休んで行けとも言はないので、そのまゝ、前を通り過ぎてしまふ。

　靜かな森の中は日の光が細かな枝と枝との間、針葉と針葉との間を透して、射し込んで來るばかり、何の物音も聞えないが、遠くから何處かカアン〳〵と鐵を叩くやうな響きが、此靜寂な森の空氣に漂つて來る。耳をすませて聞くと、まがふ方もない鐵を打つ音である。鍛冶の音にしては、連續してゐる。猶一層仔細に耳傾けて聽くと、遠くからではあるが、松の林の外圍を繞る原の上から響いて來る。微かに人聲さへも混つて來るやうだ。鐵路を敷いてゐる工夫等の鐵槌の響きである。××の驛から桔梗ケ原を橫斷して木曾路へ入つて行く、中央西線の鐵路の布設の響きである。

　高原の上を鐵路は東から來て、此森の東南端の一角を掠めて、また大きな孤線を描いて南方へ向つて走つて行くのである。枕木だけを並

べた眞直ぐな道は、もう大方出來上つて、所々の小さな橋梁を殘してあるばかり、何處からともなく、また何處へ消えるともないやうに、太い一直線の道は草を分け森を開いて、何處までも何處までも走つてゐる。その線の所々に黒く人が集つて、カアン〳〵鐵の響きを立ててゐる。

日が次第に傾いて來ると、西山の姿は一層高く黒くなつたやうに、森の背後に迫る。松の森は大原の上にひらみつくやうにして、懸命にその領分を奪はれまいと翼を張つてゐる巨きな夜の鳥の樣になる。歸りの客を載せて馬車は上りの時よりも元氣よく森の中へ駈け込んで來た。一寸一軒家の前へ止まつて馭者は無駄口を叩いてゐたが、そのまゝまた走り出して森を出拔けて町の方へ歸つて行つて了つた。日はもう全く山陰に沒してしまふと、原の上に所々燃火の影が見えだして來る。夜業の工夫の燃く火だ。火は點々として一列に遠く見えてゐるが、森の中にも一點の火光がゆらめく。夜間交替の工夫の群がぞろ〳〵森の周圍をうろつ　てゐる。二十人三十人位づつを一組に「頭」共は各自の飯場々々を作つてそれ〴〵監督してゐる。總ての物を覆ひ包んでゐる一色の闇の中で、巨きな山の姿と、森の影とが、一層黒く浮びだすやうで、靜寂な大原の夜の空氣を破つて、細いけれど澄んだ高い夜業の工夫の鐵を打つ響きがカアン〳〵と鳴り渡つてゐる。

高原の上を包む緑の色が次第に濃くなつて來る。欅の森は、遠く望めば大きな緑の塊團となつて燃え上る樣に見えてゐる。松の樹は小枝小枝の先き毎に緑を伸ばして來た。晴天が四五日續いた後には午日になつて不意　風が何處からともなく湧き起つて來る、どつと來て欅の森に打當ると、その中から幾百となき椋鳥が一時に黒く舞ひ上るが、それがぱつと四方へ散つて、また小さな團りとなつて、森へむぐり込む。松の緑が伸びると、黄色に松の花が咲きだす。松林の中の小徑を通つて行くと、微かな松の香が鼻を襲つて來る。

風が折々起るにつれて雲が空に奔騰する。うす曇の朝ならば何時雨となるかわからない。山際は明るくても、雲の動くにつれて、所々に小雨をこぼして、雲は山から森へ、森から野の上へと滑つて行く。その動く雲と雲との間から、折々ぱつと日が照つたり、思ひ出したやうにまた風が起る。濛々として雨が森をつゝみ野を覆ふと、その雨の中を雲がもく〳〵長く伸び横に擴がつて、人なき森の上を自在に爬ひまはつてゐる。

雨の晴れ間には松林の一端に沿うて、工夫等の働いてゐる姿が折々見られるが、次第に降雨の日が多くなつて、濃い雲が山から森へ引渡したまゝ晴れさうにもしない。松は幾重も幾重も折り重なつて、松の林の中は一層陰氣になつて來る。旅人とてももうその中を通る者はなくなつて來る。勿論馬車のラッパも響いて來ない。松の葉は上から落ちる雨の滴に何等の抵抗力も失つて、もうその雨滴の叩くまゝ、その露がたまつて枝が折れよ、葉が落ちるなら落ちても關はないといつた風で、枝から幹から根まで、もう一分の隙もなく濕れ、しみ透り、腐れてそのまゝ倒れてでもしまひさうになつて立つてゐる。

根本に堆積してゐた枯葉が盡く推し流され、小徑といふ小徑が盡く小流れとなつて、兩側から眞中の大路へ向つて押し出して來る。路は一筋の淺い川となつて南から北へ流れて行く。

晝夜の區別なく雨は降りしきる。

その陰氣な森の中から折々人の罵る聲が聞えて來る。唄の聲も交つて聞えて來る。

「土方殺すにや刃物はいらぬ、雨の十日も降れ

ば好い。一軒家の中では騷がしい混雜な殺伐な物音がしてゐる。醉ひしれた聲、酒樽を叩く音、十人許りの荒くれた男の聲に混つて、女の調子の高い聲も聞えて來る。雨に反抗して燒けばちに騷ぐ人聲、——一里以上の黑い松林の中は、只此一軒の人家が死物狂ひに騷いでゐるばかり、一寸の間でも騷がずに居ようものなら、集つてゐる連中は互に顏を見合はせて、そのまま何物にか吸ひ込まれて行きさうな氣がする。表口からでも裏口からでも、戶の隙でも壁の破れ目でも、何處からでも、何物か冷たいやうな物が、目には見えないが、はひつて來て、音も立てず、皆の顏を撫でまはして行くやうである。

　ゾッと寒さが皆の全身を通じて走る。何か大きな手が何處からか出て、家ぢうの者を一摑みに摑んで何處へか持つて行つて了ひさうな氣がする。耐らずに悲鳴を擧げる、「土方殺すにや刃物は入らぬ、雨の十日も降れば好い」——もうどうにでもなるやうになれといつた調子で、酒樽を叩き出す、口論が始まる。取組合ひが始まる。今まで向ひ合つてゐた奴の顏が急に眞青になつて、今にも此方へ飛びかゝつて來さうな氣がする。いつその事、此方から飛びかゝつてやれ、咽喉笛へ噛り付いてやれ、頭の鉢を叩き破つてやれ、彼方でも此方でも擲ち合ひが始まる。女は如何して好いのか途方に暮れて、隅の方へ身を縮めて、物をかぶつたきり頭をあげない。

　ざあ〳〵ざあ〳〵松林にふりそゝぐ雨の音、細いながらに、一滴の雨のしづくの物を穿つ力、松の樹の幹にも喰ひ入らう、板屋根の一枚一枚を叩き破つて、沁み入る處までは沁み入らずば休まない。大地の胸を叩きわつて、奧深く沈み込まう、松の樹が倒れようが、人の家が傾かうが、降るだけ降らずば休まない勢で、空間を埋めて雨は降下する。

　飯場々々に厚いテントを張つて二十人三十人位づつ集つてゐる連中は仕業なさに、身をすぼめてテントの隙間から外面を覗いたり、燃火の周圍に群つて皆な默つて火を見つめたりしてゐるばかり、ろく〳〵物を言ふものもない。氣まぐれな奴が時々炭俵を冠つて、ひよつくり外面へ飛び出して見ると、灰色雲の重くおつかぶさつてゐる原の上を、レールの敷かれかゝつた眞直ぐな路が一本走つてゐて、折角盛上げた砂はずる〳〵ずる〳〵崩れて、小川をなして流れてゐる。雨の中に草が伸びて、踏み固めた砂の中でも、ぴよい〳〵と青く芽を吹いてゐる。

　だらしなく四方へ枝を垂らして、一しきり强降りの來る每に、今にも折れて下に落ちさうな欅の樹の森、椋鳥はその中で弱つてゐるものの、每日ギャア〳〵聲を立ててゐる。地上には一面何處で生ひ立つたのか、靑い小蛙が樹の根を埋めるばかりに、元氣よく飛んでゐる。松の森に比べると同じ森でも欅の森には生氣が籠つてゐる。

　雨は十日以上も降りつゞいたが、まだ晴れさうな景色もない。雲は次第々々に重なつて、一層松林の上を覆うて壓し付けるやうである。雲の不思議な細長い手が伸びて、松の樹間を盲目滅法何物かを摑まうとして探しまはしてゐるやうに見える。今まではそれでも負けまい負けまいと競ひ立つ樣に、元氣を振興してゐた松の樹ども、もう戰に疲れ切つて、倒れるばかりの姿をしてゐる。一軒家の中からも何の物音も聞えて來ない。皆べた〳〵べた〳〵疲れて倒れてしまつたのではあるまいか、——と、思つてゐると不意に、キャアッとけたゝましい人聲がしたかと思ふとバタ〳〵バタ〳〵二三人の足音で、表戶を押倒して飛び出して來る者がある。

見ると眞先に立つて飛んで行く奴の頸から肩へかけて血が流れてゐる。後から眞青い顏をして齒を喰ひしばり、匕首を振り上げて行く奴がある。戸口から十歩許りも馳け出したかと思ふと、先きのは道際へばつたりと倒れてしまつた。後のも其處まで追ひ付くと、もう刃物を振り廻す勇氣も失せて了つたのか、重なるやうにしてその上へ倒れた。倒れたまゝ二人は別に爭ふでもなく、そのまゝにして臥てゐる。雨のしづくは容赦なく上から叩いて、二人の周圍は砂泥が高く跳ね飛ぶ。松の枝からばら〳〵と大滴なのがこぼれてかゝる。何人も後から追ひ掛けて來る者もない。二人はそのまゝ雨に漬つてゐるのかと思ふと、それでも暫くして、二三人ひよろひよろしながら戸口から出て來た。二人が倒れてゐるのを見て、何かぶつ〳〵言ひながら上のを引き起したが、固く齒を喰ひしばつてゐるきり口を利かない、下のは、頭を泥の中へ埋めて、ぐだつとして全く呼吸が切れてしまつてゐる。

上のをば無理やり引張つて、家の中へ連れて行つたが、事の切れてしまつた下のには、菰一枚を持つて來て、無造作に押覆せたまゝ、出て來た二三人の者も、急いで家の中へ逃げ込んでしまつた。菰の下の者はそれでも動きはしまいかと思はれるが、動かない。血が流れ出て雜水と共に砂泥の上に續いてゐるが、血だけはぢつと澱んで松の根へしみ込みさうだ。

森の中は一層暗くなつて來た。雨はどしや降りに降つてゐる。小徑からの水、廣い道の流れは勢よく、南から北へ流れて行く。菰を冠つた者の周圍に、その流れは激して、塵溜を押し流すやうに、水は一層其處を目がけて集つて來る。だぶ〳〵と湛へて膝までも沒して了ひさうな深さになる。家の戸は一度閉ぢたつきり、もう開かない。家の中からも何の物音もしない。闇が次第に森を包んで、雲が深く押覆さつて來る。雨と闇と水の流れと、その中に浸つてゐる男と、森の中には只それがあるばかりである。

烈しかつた雨の脚が、それでも次第に弱つて來た。もう降る方でも飽きが來た。嚇すだけ嚇したら、此度は何處へか異つた場所へ移つて行かうといつた風に、幾重か重なつてゐる雲が次第に動き出して來た。雨は降つたり休んだり、南の空の山際が明るく、雲は其方へ向ふと見えて、陸續として南の山の頂を、もく〳〵其腹を岩角に擦らせて越えて行くのが見える。その山と雲との間に青光の空の一線が、久し振りで晴れやかな微笑を見せる。樹といふ樹、草といふ草はほつと息をついて、重い水滴を振り拂ひ、身仕舞ひを直して頭を上げる。次第に移つて行く雲の群の上から、日が一時にぱつと野を輝かす、雲は眩しさうに惶てて逃げまどふ。山から森から野から爽かな綠の色が生々として照り渡る。

雲はもう大方山の頂を越えて逃げてしまつた。びしよぬれになつて立つてゐた松の樹は次第に乾いて來た。照りつける日の光で地氣が白く濛々と立ち騰つて、林の上にたゆつてゐる。森の入口から吹き込んで來る風も乾いた暖かさを持つて來る。閉ぢられてゐた一軒家の戸が開いて、今まで囚はれて居た連中が一時に開放せられて、森の中から飛び出して行く。

紺碧の空の色は一層濃くなつて來た。其空を劃して西方一帶に屹立してゐる山脈の岩角から放つ黑い光は、一層强く、その角に突裂かれ突裂かれて眞白な雲の一團々々が、折々丸い形を取つて通つて行く。山の麓を繞る松と野の綠の爽かさ、松蟬の聲がその綠の中から鳴き出して來た。彼方此方の林で相應呼して鳴く。色彩の鮮かな光の强い、そして空氣の澄み切つて涼し

い高原地の夏が愈々始まつて來るのだ。

飯場々々に閉ぢ込められてゐた工夫の群は、今原の上で働いてゐる。カアン〱と鐵を叩く其音は、既に敷かれてゐるレールの一端を傳つて、遠く〱何處までも響いて行く事であらう。既に敷かれたレールは眞直ぐな黑い二條の線をなして、草原をひた走りに走つてゐる。鐵の響きが松林の中まで傳つて來る頃は、もう道の水も乾き切つて、旅行者の姿も見え出して來る。一軒家の戸も開いて、四十女は以前と何の變りもない調子で店に坐つてゐる。馬車のラッパはまた林の中の靜けさを破つて聞えて來る。

松の林はぐわう〱と極めておだやかな、嘗て何の變事も無かつたものの如き響きを樹間に傳へて終日鳴つてゐる。

伐木（二）

ちつと耳を澄してゐると、此度は短いが、稍々手ごたへのある、澄んだ響きが傳つて來る。がつさ〱と木の枝の搖れるのが聞える。――地續きの櫟林を伐つてゐるのだ。少し間を置いて、またどさつと倒れる音がする、がつさ〱と枯葉の付いたまゝの枝を拂ふ音がする。二三人の人聲さへ聞えて來る。物寂しい悲しい思ひがかすかに胸をめぐる。郊外の林々を伐り倒し、伐り倒して、人は家を立てる。それも若葉のみづ〱しい初夏の森には手もつけ得ずして、枯木のやうにぢつと動かず立つてゐる冬の森へ來て、人々はこは〱その冷たい幹へ斧を打込んでゐるのだ。

花も咲いてゐず葉も落ちつくした冬枯のチエリーの園を伐り倒してゐる斧の響きには、舊家を見捨てて行く居住者の無限の寂しさが籠つてゐた。

五抱へにも餘る欅の大樹を伐り倒して、その樹幹が深く地中に喰ひ込んで、高く土煙を立てた恐ろしさと寂しさは今でも私の胸に深く沁み込んでゐる。五月頃の欅の若葉の重なり重なつた眞青な塊團は、口惜さに身を慄はせ一葉々々の細い神經が盡くびり〱震へてゐた。根元の大きな白い伐り口は、幾百年籠つてゐた精氣を吐き出して、人間をその中に包んでもしまひさうに伐り倒した杣達でさへ恐しげに打たれたか、暫くその周圍を廻つてゐるばかり、伐り口へ手をつける勇氣を持つ者さへなかつた。

「若樹を伐るのは罪だ」と故老は言傳へてゐる。郊外の森を伐り拂ふには定つたやうに、冬枯の時期にしてゐる。杉や櫟や欅の樹が、皮を剝がれたり、枝を伐り拂はれたり、幹を伐り刻まれたりして路傍に投出されてゐる。その樹肌に冷たく霜が置き、むごたらしく日が照付け、ざら〱した砂塵が痛ましく肌目に沁み込んでゐる。

山國の寒い空氣に高鳴りを傳へて、谿間に伐り倒される松の樹の音には、鋭く地殼を裂き破つて地中まで深く突き貫して行くやうな凄い響きが籠つてゐる。伐り倒した者の立つてゐる地面が、同じ凄い唸り音を立てて一木の倒れた後に長く〱その響きを藏し傳へてゐるやうだ。夜陰になつてから何とも知れず地を破り山を突裂いて高く鳴り渡るものの響きは、この伐木の恨めしい物音が、地中から高く反射するのかも知れない。かあんと響いて高く斧を彈き返す凍つた樹幹は、暫し刃金の鋭さをも寄せつけずにゐるが、幾度も打込む斧の刃は、遂にその樹の胴へ深く喰ひ入つて、きしむやうにして容易くは拔き取れない。

自然美論

（一）

ロシヤのツルゲエネフには、自然が嚴しき方則、繼母の酷き姿のやうに觀ぜられた。時代の推移はワアズワアスに於て慈母であり、溫容を　せてゐた自然を、ツルゲエネフの前には冷酷な、情な、黑鐵の如き嚴しきものとして現はさしめた。ワアズワアスにあつて讃美歌の響く殿堂であつた自然は、ツルゲエネフに於ては、齒車の機械的にきしる工場の如きものとなつて現はれた。機械は方則に從つて運轉するだけである。人がそれに捲かれて命を落さうが、その機械の周圍に立ち舞ふ塵ほどもその機械にとつては關しない。

自然の前で人間が死なうが、松の一葉の落つるほどの微動すらしない。眞黑な姿して巨然として立つてゐる自然は眉の毛一つ動かしはしない。而も赤兒が無情の繼母の懷にでも乳房をさぐるやうに、人間はその冷たい自然の懷に生をつないでゐずには居られぬ。傷ついた病獸がいづこともなく死處を森林の中に求めて、その死體を人の目につかぬやうにする如く、人間も人間同士の間に傷を負ふ場合は、こそ／＼と自然の懷に冷たく隱れ家を求めて行く。而もその森林も、大平原の中に立つ黑き松の林の冷たさ、もの凄さは、人をして長く止まらしめない。こそ／＼と再びその森を出て、なつかしい人家の燈を求めて、夏の蛾の如く、飛びつくやうに、人環へ歸つて來ずにはゐられなくせしむる。さうでなければ、その森林の中に住む人間をして、一種の自然物の如く化成せしめて、殆ど無表情な、樹の幹でも見るやうな顏つきにせしめずには置かないのである。要するに自然は、酷く、恐ろしく、そして不思議に一種の同化力を持ち、魅力を持つてゐる。人間を化成して無生物たらしむる、獸したる物たらしむる、一種の妖魔の如きものである。

の晩年の作物「犬」の如き、又「幻」の如き物を見られるが好い。それは自然を不可解の神祕力と觀じながら、而もその不思議な力と人間の力との間に調和一致を認められず、彼は頭の中では、思想の中では、その兩者の間の結合を「愛」の一點で繋がうとしながら、それが出來ずに苦しみ悶え、而して、遂に自然をば、何とも解せられざる一種不思議な魅力あるものと見るにいたつたのである。

「この樫の木は幾年か前に電火に打たれ、頂は裂けて枯れてゐた。が、まだこの木の中には生氣がこもつてゐて、來ん幾世紀の間は生存してゐさうに思はれた。私がその木の處まで來かゝると、一片の雲が月を掠めて過ぎた。厚く繁つた枝の下は、眞の闇であつた。最初は別に何物も目にはひらなかつたが、ちらつと、一方を見ると、私はすつかり元氣も失せてしまつた。――眞白な姿が、森と樫の木との間のたけ高い藪の傍に身動きもせずに立つてゐるのであつた。頭髮は一時に逆立つた。が、私は勇氣を振り起して、その森の方へ行つた。」「幻影」

これは、每夜彼を訪ねて來る不思議な幻――卽ち自然の精であつた。彼は每夜、その精に伴はれて、空中を飛行した。或時は南方のローマの廢墟へ行つた。また或時は北方へ――冷たい、病める如き、ロシヤの都會へ飛んで行つた。

そして、森林の上を、平野の上を、大河の上を、海洋の上を、自然に飛び廻つた。この「幻」は一體人間に好意をもつてゐるのだらうか、それとも惡意ある魔の働きであらうか。解らない。ただ何となく、宵々ごとにその夢幻に誘はれて、心ならずも家の中から拔けださずにはゐられなかつた。この偉大なそして不思議な自然の誘惑は斷えず彼の上へ強い力を及ぼして來た。――この幻怪的な、自然な光景は、ポオの寫す自然とは異つて、それほど物凄くはないが、何とも言へない不思議な、冷たい、そして一種の魅力あるものとなつて讀者の心を同じく引きつけるのである。

「頭の上には重苦しい煙のやうな嵐の雲、それらの雲は亂集して、荒れ狂ふ一群の怪物のやうに動いて行く……下の方には、また別種の怪物がゐる。怒り立ち、怒り立つ海……その白い泡は、忽ち急に、忽ちゆるく、狂ひ立ち、狂ひ上つては照り渡り、またその上に小山のやうに波を湧き上らせ、きざ〳〵した大波を呑みつ吐きつ、瀝青のやうな眞黒な、巨きな斷崖に向つて、暗澹たる響きを立てて打當る。嵐の怒號、その嵐に搖られる深淵の身ぶるひさせるやうな吐息、波浪の重い飛沫、その中に時々何ものか悲泣してゐるやうな、遠く大砲を發射するやうな、鐘の鳴るやうな物音がするかと思はれた。――渚の礫のばり〳〵碎けていがみ合ふ音、眼には見えないが、かもめの不意に叫ぶ聲、眞暗な地平線上には航行力を失つた船體、――四方たゞ死、死、死、しかして恐怖、……眩暈がまた私の身を襲つて來た。私はまた沈み行く心持を持つて眼を閉ぢた……」(「幻影」)

この幻は夜な夜な彼の晩年を訪れて來た。彼が晩年パリの客舍で身體の自由を失つて寢てゐた時、斷えず彼の頭上に閃きを見せたのはこの「幻」であつた。そして、彼はその幻の片影から、彼の散文詩を作つたのであつた。彼の散文詩は、自然文學の研究者としては是非通讀しなければならないものである。

この幻怪的な自然が、それが人間の肉體と直接關係あるものの如く考へた場合には、言ひかへれば、自然を一層肉體的に考へた場合には、また其處に一種異つた不思議な自然が現出せられるのである。それは感能の極致からはひつ　自然とも言ふべきもので、我々の五官が非常に鋭い働きをするにつれて、その感能の上へ表出せられる自然が即ちそれである。これはポオの自然のごとく、夢幻的のものではなく、またツルゲエネフの自然のごとく瞑想の具體化せられたるものでもなく、我々の官能の極致に映ずる不思議な自然である。その神經過敏な自然は一方においては、北方ロシヤに於てはアンドリエフの描く自然となつて現はれ、一方においては、南方フランスのモオパッサンによつて描かれる自然である。

この兩者共に鋭い神經によつて自然に接觸し常人が觀得する以上に深い不思議な自然の力を感ずるのであるが、一つはより多く視神經によりまた聽神經に映ずる自然を描き、他はより多く皮膚の接觸に映ずる自然を描いてゐる。我々はアンドリエフによつて、殆んど擴大せられたる自然力に接せしめられる如き感じを抱き、モオパッサンによつて肉と肉と接觸する如き自然を味はしめられるのである。

アンドリエフの描く自然は盡く神經の鋭い尖端に觸れて不思議な姿を見せてゐる自然である。それが作中の人物の生命のなかにまでも喰ひ入つて、常にその人の生命を左右する力を持つてゐる。その人を狂はすのも、その人を生かすのも盡くこの怖ろしい自然の力である。

「壁一重へだてて庭で犬の啼聲がして、罷むと、鎖のぢやら〳〵といふ音がして、犬は小舍に潛り込むやうだ。鼠は默つて私の素足を眺めてゐる。それが側に居るのは自ら知れる。堪らなく、怖ろしくて、死神に抱窘められたやうに、身體が竦み、石の塑か何ぞのやうに、ぢつと動かなくなるにつけても、それは知れるが、もし大聲を立てることが出來たら、私はこの市どころか、世界中を呼びさましたかも知れん。たゞ聲が中途で立消えをして出て來ぬので、大人しくぢつとしてゐたが、小さな冷たい冷たい手先がむづ〳〵と身體中を這ひ廻つて、咽喉元へ逼る。……

何やら大きな眞紅な血だらけな物が私の上へ覆さつて、歯のない口元でゲタリと笑つてゐる。

これが赤い笑だ。地球が狂氣になると、かういふ笑方をするものだ。お前は知つてゐるだらう。地球の氣の違つたことは？もう花も歌もなくなつて、地球は圓い、滑い眞紅な、皮を剝いた頭のやうな物になつて了つた。見えるか？……」（「赤い笑」）

痛々しい神經の顫動が自分の全身ばかりでなく、周圍へも、全世界へも瀰漫して、全世界が「赤い笑」につゝまれる。これが神經の顫動の劇化（ドラマタイゼーション）といふ事で、自己の神經と周圍の生活との一致及び、周圍の生活が自己の生活に直接影響する現象である。或はアンドリエフの作が多少誇張的だと言はれるのも、この神經の劇化の故である。

「古の世の野蠻人が故郷の森林を出でて、文明の都會にはひつた時、まるで頭の中がひつくりかへつたといふが、それとこれとは反對で、この近世の野蠻人は都門居屋の束縛を脫れて、今この自然の面前に引出されては、力無く、たゞ弱り果てた感じがした。こゝは萬物、凡て生命がある、感覺がある、意志があつて、頭上でさつ〳〵の籟を傳へる薄暗い森林、その奧底の知れず、限りないのが恐ろしい。又は林間の空地に、日が輝いて、青草の綠深く、目もあやに、露じめる梢よりは、そこともしれず音曲の浮び出るやう。姉か妹のやうに懷しく、抱きつきたい。濃い青空は、母のやうに手招きして微笑んでゐるではないか。ペトカは何ともいへないほど感じた、顚へた、色を失つた。自ら微笑まれる。老人のやうにそろ〳〵歩いて、森の緣や、沼の傍らの木立のある水邊を逍遙した。疲れ切つて息が切れて來ると、そのまゝ其處へどつかと倒れた。露を帶びて軟らかい草の上に倒れて、その中にまるで沒れてしまふ。たゞそばかすと薄紅くなつてゐる鼻の頭だけが綠草の上に出てゐるばかりであつた。」（「ペトカ」）

大都會の中には、アンドリエフの所謂この「近世の野蠻人」が澤山住んでゐる。彼等は星の美しさも知らず、野の綠の鮮かさも知らずに、蒼白い顏をして、煤烟に鼻の穴を黑くして生きてゐる。そして身體が弱つて、脊が曲つて、その中に死んでしまふ。彼等は生きるべき美しい國を知らずにゐる。前にあげたペトカといふのは床屋の小僧で、年中狹い家の內で苦しい息使ひをして、人の頭ばかりを對手にして、鋏やかみそりばかりを使つて、親方にしかられながら、生きてゐた。けれど彼は次第に身體が弱つて來た。或時この近代の野蠻人は田舍へつれて行かれて、生れて初めて美しい自然の中へ身を入れた。彼は最初の間は殆んど夢の國へでもつれて來られたやうにたゞぼんやりしてゐた。次第に彼の顏には血色が現はれて來た。足どりが

確かになつて來た。生れて初めて太い呼吸を勢一杯することが出來るやうになつて來た。彼には周圍の自然が身内の者のやうになつかしくなつて來た。草の葉を抱き、樹の幹に縋りつき、水の中へ身をひたして、初めて生き甲斐ある生活が味はれた。彼は生れながらの自然兒のやうに山野を野獸のやうに飛びまはつた。自然は彼の生命であつた。自然が彼に生命を吹き込んだ。自然がなければ彼は死んでしまつたのであらう。

けれど彼の境遇はそれを許さなかつた。彼は眞に生きてゐることを許されなかつた。生來初めて甲斐ある日を奪ひとられる運命が彼の前途にまつてゐた。彼はいやがるのを無理につれられて、再び都會へ歸つて來た。そしてまた以前の生活を續けなければならなかつた。その子は次第に弱つて來た。また以前のやうな苦しい呼吸をして、鏡と人の頭とを睨み合はせて、親方に怒鳴られながら、死の來るのを待つよりほかに仕方なくなつた。

また一人の狂人があつた。その男は學者で醫者で、常に綿密な研究をしてゐた。それが氣が狂つて一人の友人を殺し、病院へ收容せられてゐる。彼の神經は極端から極端へ走り、常に全身を顫はせてゐる。しかしこの男が、その心身の動亂の中で平靜な心持を得るのは、秋の日麗かな野原を、小犬をつれた少女が保姆に伴はれて行く光景の思出であつた。彼の暗い心理の中に、この光景がぱつとアパリションの如く時々ひらめいて來るのであつた。丁度或人の頭の中へ、或詩歌の文句が時々閃いて、その人を靜かな、統一ある心持になさしめ得ると同じやうであつた。この秋の日の光景は、この自然の描き出した藝術は、彼にとつて命ある詩歌であつた。この自然の詩歌があつて初めて、この狂人は平靜な時間を維持することが出來た。この自然の藝術があつて初めて、彼は生きた瞬間を持つことが出來た。それがなければ彼は全然暗黑な生活を送つてゐたに相違ない。いな、全く死の生活にはひつてゐたであらう。

或時は自然は、全然不可解な力を振つて人間の生活を左右し、命令し、次配する。自然は或時は「霧」といふ一現象にその力を籠めて、人間をその霧の中へ包み、その「霧」の中へ溶け込ませて、その盲動を共にせしめ、心身を攪亂せしめる。不自然な性慾の發現に苦しめられてゐる或る青年は、この霧の中へ捲き込まれて、全く途方にくれて、たゞ衝動の導くまゝ、本能の導くまゝの生活に陷し入れられて、遂に或る女を殺害する樣な事になつてしまふ。この場合の自然は、全然人間を勝手に引きずりまはす不思議な力を持つてゐる、人間の神經系統を勝手に支配する力を持つてゐる。自然は殆んど遊戲本能に驅られて人間の生命を弄んでゐるかとも思はれる。

ところがまた或る殺人罪を犯した者や、暗殺を企畫した者が法廷に連れられて、判官の裁判を受けてゐると、その法廷の高い天窓から紫色の空の一部がのぞき込む。犯人はその判決などは氣にも止めないで、ぢつと目を上げてその空を仰ぐ。と、少年時に自由に飛びまはつた故鄕の秋野を覆うて、遠く地平線の彼方まで連つてゐた大空の事が胸に浮んで來る。身は法廷にゐることも忘れて、死が近く身に迫つてゐることも忘れて、その犯人は自由な空氣を吸ふことが出來た。平和な靜かな生活を、假令瞬間にせよ味ふことが出來た。死の迫るのも忘れて、樂しい生活をすることが出來た。この場合自然はその男に、一時的にもせよ樂しい命を與へたのであつた。――自然は活殺自在な力を備へてゐる。

さていよ〳〵それ等の犯人が死刑執行所へ連

れて行かる丶中途、森の出はづれからして海の光景が遠く展望せらる丶場所へ來ると、彼等は等しく聲を　げて、海こそは自由なる我がふる鄕と歌ひ出した。そして彼等は等しく、自分等の死の事も忘れて、この自由なる海と共に、何處までも何處までも伸び展がる限りなき命を胸に抱くことが出來たのであつた。彼等は肉體の死を忘れて、眞に自由に生き得る力を海より與へられたのであつた。海洋の力については、後で少し詳しく說くことにするが、かくして自由な活力を賦與し得る自然のシムボルとしては常に海が認められるのである。

兎に角アンドリエフの描く人間の鋭い神經と、自然とが如何にングルして生死共に不可思議な世界を現出し來るかは以上の簡單な例證によつても多少了解せられた事と思ふ。

次にモオパッサンの描く官能的な自然に關して考へて見よう。モオパッサンは人間の感覺を單に五官に限らずに第六官をも說いた人であつた。第六官とは、人間の感覺が今より一層鋭くなつて、外部の感受を一層明瞭に感じ得る狀態をいつたのである。それほど常人より鋭い感覺を持つてゐた人である。暗夜に吹いて來る風が肌に冷たい粟を生ずる所から、直ちにその風が、暗に包まれてはゐるが、海の彼方の地平線上に、雪を頂いて立つてゐる連嶺を吹き越えて來るのだと感ずると、その瞬間に、直ちに彼の眼前には、遙く頂の白い連山が浮びあがる。そしてそれがアルプスの連嶺であると思ふと、同時に、彼の耳にはその山の麓を立ちこめてゐる橄欖の林を渡る風の音、鳥の聲、及び村人等の舞踏のさゞめきが聞えて來る。と同時に、彼の鼻にはそれら樹々が放つ果實の香、樹下に生えてゐる花草の香が漂つて來る。――皮膚を襲つた一寸した冷たい風が、直ちに彼の眼前にはこの光景を現出せしめるに十分であつた。彼はこの鋭い感覺をもつて、自然に對して、晩年には一層不思議な感じを抱かずには居られなかつた。

「それは十月の灰色の日であつた。その頃人々はコルクを造るために、これ等の樹の皮を剝ぐ。彼等はそれ等の樹の根元から、第一の枝まで皮を剝ぐ。そして其皮を剝がれた幹は赤くなる。皮を剝がれた人の手足のやうに、血赤くなる。それ等の幹は、奇怪な、曲つた形狀をなして、癲癇病の發作で、跪き捩れてゐる不具な人間のやうな樣子をしてゐる。そして私はふと、私の身が苛責を受けるものの森へ、血の滲み出るダンテ流の地獄の森へ、連れて來られた樣な氣がした。其處では人々に根が生えてゐた。其處では人の體軀が苦痛で痛められた樹に似てゐた。其處では生命が、それ等の血の滲み出る傷口から受ける果しのない苦痛で斷えず弱つて行つた。そして、それ等の傷口は、私の上に、人が不意に血腥い光景に接して感ずるやうな神經緊張と、氣の遠くなる感じと、また壓し潰された人々か或は屋根から落ちた人の思ひ掛けない衝動とを引起させた。そして此情はいかにも鋭く、そしてこの感じはいかにも生々してゐたので、私は遠く離れて、數限りない、心を搔き亂す、叫び聲と、哭き聲とを、聞いたやうに思つた。私は氣遠くなるやうな心を確かにしようと思つて、それ等の樹の一つに手を觸れた。そして私はその手を引いた時に、その手が血で塗られてゐたと思つた。」（「水の上」）

かういふ感じは決してたゞ一時だけではなかつた。モオパッサンの晩年にはいつもそれがあつたやうであつた。一見ロマンティックな、奇怪なものの如くに感ぜられるにしても、決して

さうではない。モオパッサンにはやはりこの鋭い感覺から見た世界が、現實に生きて動いてゐたのである。そしてその鋭い感覺と、それに映ずる不思議な世界との間に苦しめられて、遂に彼は狂ひ死をせずにはをられなかつたのである。

「日沒の頃になると、沼は私を醉はし、私を奮ひ立たせる。靜かな水溜りは終日熱氣を受けて靜まりかへつてゐるが、黄昏の瞬間にそれが魔術の國、フェアリイの國となる。この靜かな底知れぬ深い水の中に空が映る。黄金の空が、血紅の空が、火焔の空が。それ等は水の中に沈み、それを浴び、その中に溺れる。その空は、上に無限の蒼穹にかゝり、下に、私達の足元に、いかにも近く、けれど手のとゞかない所に、尖つた草が刺毛のやうに突き出てゐる淺い水の中に、映つてゐる。

地上に裹まれてある、人を魅し、人を壓するやうな樣々なあらゆる色彩が、巧みに彩られ、見事に輝き、睡蓮の一葉の周りにすら無數の影を刻んでゐる。紅や、薔薇色や、青や、綠や、紫やのあらゆる影は、空を映し、空間を映し、夢の國を映し、上を掠めて飛び行く鳥の姿を映す小さな水溜りの中に浮んでゐる。そして、その他にまだ何物かが漂つてゐる。——何だが分らないものが——沈み行く日の光の中で見る沼のうちに、私はその中に、あの分らない神祕めいた、とりとめない默示を感ずる。原始生活の本源の呼吸を感ずる。」

「この深い水の周圍を取卷いて、この平地の隅々まで行き亙つて、山々の麓に至るまでなほ一層多量の水が湛つてゐるといふ感じを抱かせられる。睡つてゐるやうで、しかも生きてゐる人惑はしの沼の水。廣い澄み切つたその水の面に空が影を落し、雲が掠めて過ぎる。その水の中に廣く散らばつて、しどろに亂れ合つて、藺が生えてゐる。朽ちたる生と、死の醱酵とに充ちた豐かに輝く水。食物であると同時に毒藥でもある熱氣と、沼氣とを釀し、底にある不思議な腐敗物の堆積の上を包んで、心を引きつける美しさで、身を伸ばしてゐる水。大氣は心持よく伸々としてゐて、同時に危險である。廣い靜かな水溜りを區劃する崖といふ崖の上に、厚く生ひ茂つてゐる叢といふ叢の中の、泥にまみれた、忌はしい冷血動物の群が、縺れ合ひ、のそり／＼歩き廻り、跳ね上り、爬ひ廻つてゐる。私は、普通、人から避けられたり、怖れられたりするこれらの陰險な冷血動物が好きだ。私にとつては彼等の中にはどこか、神祕なところがあるやうに思はれるからである。」（「水の上」）

肉感が鋭くなるその極致は、そこに一種不思議な世界が現世せられる。樹幹に手を觸れて流血を感じ、骨立する巨木の林を苦痛の國の如くに感じ、自分の身をも同じその苦痛の中にゐる者の如くに感ずるといふ事は、ロマンティスムの人々がたゞ漠然として自然と自分と同じ生を送り、同じ呼吸をしてゐると感じてゐるとは異り、鋭い感覺によつて、苦悶の中で、共に悲み、惱む中で、一種の共通性を覺えるのである。アンドリエフに見られた神經のドラマタイゼーションは此處にも見られる。たゞこの兩者を比較して見れば、モオパッサンの方がより多く感覺的であり、より多く肉體的であるといふ事が出來る。モオバッサンの「水の上」を書いたほどの晩年でなく、もつと初期に於ては、これほど鋭い神經的でなく、純然たる感能一方の自然が見られるのであつた。

春の日の美しい森の中で、花草の香につゝま

れてゐると、いかに年寄つた人々でも思はず、相寄り相抱くといふやうな事が、それが全く野の鳥か何かのやうな有様で、少しも嫌惡の情は起らない、また不自然な感は起らない。丁度ゴルキイが人間の如何なる悲慘事をも、それを大自然の懷に於て行はれてゐる一つの事件と見て、一種大きな自然の是認をもつてゐる如く、モオパッサンの肉相描寫も、それを大自然の中の一現象として觀ずる時、決してわざとらしい挑發的なものではなく、野の鳥の歌ふ如く、野の獸の走ると同じ、自然の中の一現象として見られるのである。ロマンティシストの漠然たる感情上の同一生命ではなく、肉體的現實的な根柢ある實際上の問題として見られるのであつた。

文藝上の所謂ナチュラリスムの人々の見る自然は多くこれである。性慾をやはり自然現象と見て、それを原始の姿に立ち返らせて見ようとしたのであつた。けれど、ナチュラリスムの多くの人々の晩年に於ける如く、モオパッサンの晩年に於ても、この現實的のものの觀方だけでは滿足せられなくなつた。單に人間を大自然の懷へ歸せしめ、その原始狀態に於て見るだけでは滿足せられなくなつた。その自然狀態原始狀態に於て、猶一層の自然猶一層の原始へ歸つて見たい要求が起つて來た。言ひ換へれば、人間を單に肉體的の生活に於て原始狀態に還元せしめ、自然狀態に歸一せしむるばかりでなく、その奧に流るゝ生命を確かに捉へてみたいと願ふやうになつて來たのである。肉體生活の是認肯定ばかりでなく、それを是認し肯定する所以の根柢を深く考へて見ようとするのであつた。その要求が強く起つて來れば來るに從つて、彼は從來の自分のして來た生活、觀て來た物の觀方に不滿を感ずるやうになつた。その不滿が一層烈しくなればなる程、彼の神經は一層鋭くなつて來た。神經は鋭くなつても、その不滿を醫する問題の解決は未だ與へられない。それが與へられなければ、一層彼の神經は狂ほしくなるばかりであつた。そこに一種惡魔的な苦悶の姿が現ぜられる。彼の晩年に於ける鋭い神經に映じた自然は、この惡魔的色彩のものとなつて現はれたのであつた。けだし惡魔とは、天使の惱んでゐる姿に外ならない。そしてその惱みを治すべき方法手段が發見せられない時の狀態に外ならない。手段が發見せられざる故に、徒なる苦惱が伴つて來る。最初自分一の惱みが、神經の尖端より瀰漫して周圍を包むやうになるのである。彼は遂にこの惱みのために狂ひ死をしてしまつた。彼は慘ましきナチュラリストの最後を見せたものである。現實自然主義者の犧牲となつた人である。彼は身をもつて彼以後に出て來る人々のために問題を提供したのである。彼が晩年に描いた神秘的な幻怪な自然は、彼のこの嘆き慘ましき苦惱の姿を見せる縮圖である。

（三）

前にアンドリエフの自然を説いた所で、海をば、同じ自然でも、自由の表象の如く考へる傾があるといつておいたが、實際、何人にとつても海は自由な、より廣い、より大きな世界のシムボルの如く思はれるやうである。大自然の壓迫を感じて悲觀してゐるツルゲエネフでさへもかういつてゐる。

「けれど、森林は大海にくらべれば一層陰鬱である、一層單調である。殊に松の森となると、いつも何の變化もなく、殆んど一つの響きも聞えない。大洋は威嚇したり、愛撫けたり、色々な風をして噂戲れたり、樣々な聲で話し掛けたりする。また蒼穹を映して、その蒼穹からは同じ永劫の吐息が洩れ

て來る。そしてこの永劫の中には我々人類と脈の通つてゐる所がある。」（「森林の旅」）

チエホフは又「我々人間が海を描寫するのではなく、海が、我々を、人間を描き出すものである」といつてゐる。その意味は、海の千變萬化する波浪の姿は、その中に無限の生命をこめてゐて、人生の姿が現じ出されるのであるといふのである。卽ち人間と共通の生命を海の面に見られ得るといふのである。實際海に面して立つとき、そして、ホライゾンを劃するあの力強い、しかし柔かなまろみある線上に視線を投じ、その向うの薄灰色の空を遠く仰いだ時、單に我々は、眼前に展かれた大きな光景を一時我が視域に收めたといふだけの滿足を得るに止まるであらうか。さまぐな變化を見せて伸びては縮み、縮みては伸びつ、蹴りつ走りつするあの波を見てゐる時、それが生あるものの如く感ぜずにはゐられるであらうか。四時を分たず奏し出す大海の音樂、あの心地よき諧調こそは人間の鼓動と響きを合はせる眞に生きた音樂でなくて何であらうか。陸上では人を脅かし、人をいぢめ、不自然な生活をしてゐるゴルキイの作中の盗賊すら、この海に對しては、からであつた。

「彼――盗賊にして皮肉家なる彼は、海を愛した。興奮し易く、神經質な、そして新たなる印象を欲して止まぬ彼の性情は、絶えず海の暗澹渺茫を思ひ、無際限を思ひ、自由を思ひ、偉力を思うて疲れなかつた。」

「海へ出ると、いつも彼の胸の奥からは、廣々とした暖かい一種の感情が起つて、全精神を抱擁し、暫くは地上生活の汚れから自分の身を潔めてくれる。彼はこの感情を尙び、その感情の中に善化せられたる自己を見るのを好んだ。水と空との間に出てゐると、諸々の生の想念も、生そのもののすらも常に先づその鋭さを失ひ、やがてはその價値をも失ふ。海上では夜になると夜の寝息の優しい囁きが聽かれる。その何ともいひやうのない音は、人の心に平和を注ぎ、諸々の邪な衝動を懇に壓へて、心中に力強い冥想を起させてくれる……」（「チェルカッシュ」）

神經の昂奮で夜間も十分に眠れなかつたモオパッサンですら、快艇「ベラミイ」に乘つて地中海へ出ることを唯一の樂しみにしてゐた。そして「海上に寝る者の樂しい眠り」を說いてゐる。海こそは我が心のふる鄕であらうか、海こそは自由の國であらうか。

舊くから、ロマンティスムの人々ですら海をば戀してゐた。「いざさらば、我がふる鄕よ」と歌つて故國の岸邊を離れて行つたバイロンにも大洋の響きを歌ふ大洋の賦がある。テニソンは海上を理想の國を追うて走る人の心を歌つてゐる。或る科學者によれば、人間はもと海水中に住んでゐた動物である。從つて人間には鹽がなくては一日も生息が出來ない、人間が海岸に轉地し、或は海上へ出て健康を恢復するのは、以前の生息地へ歸るを意味する、夏期になつて海水を浴びるのは卽ち以前の自然狀態へ歸るのであると說いてゐる人もある。併しその學說の當否は暫く問題としても、それほどに我々が海を戀ふる心は萬人に通じてかはらない。山國の兒童は海を想ひ、海を羨んで、一度、その大海の見える砂丘の上へつれられて行つた時思はず聲をあげて泣きだした。彼は永年思ひ憧れてゐた母親に不意に出逢つたのであつた。「海こひし」といふ心はけだし何人でも抱く情緒であらう。

イプセンは「自然の誘惑」として海洋の力を用ひてゐる。「海の夫人」を御覧になつた諸君は、それを十分了解せられることと思ふ。何處とも

知らす海上から來た不思議な人物は直ちに海そのものの權化であつた。少女は我知らず、その人と一生を約し、海と婚して、離れじと誓つた。それは即ち自然の誘惑が人間の上に及んで來た明かな現象である。併し後になつて彼女は人間としての生活を考へずにはゐられなかつた。以前の如き單なる空想でのみ生きてはゐられなくなつた。　なる憧れや、誘惑の爲めにのみ生きてはゐられなくなつた。其處に自然と人間とのストラッグルが始まつて來た。彼女は今や家庭の人である。再びその海上の不思議な人物が現はれて來て、彼女を誘うても、彼女はその誘惑を打切る十分な力をもつてゐた。けれど、この海　誘惑は決して容易に打勝ち得る如き力弱きものではない。其處には、その力の底には、單に自然が人間の社會を切り崩さうとする誘惑ばかりでなく、一層深い力が籠つてゐるのではあるまいか。我々が是非とも誘惑せらずにはゐられないほどの一種の力が籠つてゐるのではあるまいか。然らばその力とは何であらうか

メエテルリンクは、天と地とは溶合し、人間と自然とは合致　た生活をなすべきものであることを說いてゐる。諸君が愛人を抱く前に、窓を開いて秋空に戴く星の上に視線を注ぎたまへ、そしてその光が十分深く諸君の胸へ沁みたと思つた時に、窓を閉ぢてベットに入りたまへ、その時のエンブレエスは、決して常に灰色の壁をのみ見てゐるに慣れてゐる時のエムブレエスとは同じものではないであらうと說いてゐる。彼は——夕方海洋に面して立つてゐる時、人が如何なる考へを抱くであらうか。友人を欺き、同胞を苦める如き考へが果してその人の心に浮ぶであらうか。さうではあるまい。その場合、そんな考へを抱かうと努める方が却つて苦痛である——と說いてゐる。これは諸君が直接各自の經驗について考へて頂きたい。我々は今大切な時期に來てゐる。我々は最早や單なる憧れや、單なる肉體的自然やをばかり考へないで、猶その奧を考ふべき時機に到達してゐるのであろ。

海は自由をあたへ、自由を思はしめるといつた所で、それはたゞ自然の現象の一部を現はしてゐるに過ぎない。メエテルリンクは、「群盲」の中の表象にも、その他の作中のシムボルにも海をば、より廣き、より自由な國を暗示せしめるた　に用ひてゐる。それは事實である。併し、單に海をのみ、如實に考へてはいけない。その他の作家、前に擧げた人々についてもさうである。單に海は自然の一部であるが、それがより多く吾々に自由を思はせる機會を與へるに過ぎないものである。またダヌンチオは、海の響きと、戀人の胸の響きとを左右の耳で同じリズムで聽くことが出來るといひ、更にタゴオルは、ベルガル灣の水が大地の胸へ、丁度赤兒の仰臥してゐる母親の胸の上へ這ひ上る如く、昇つて來るのを說き、水で手足を洗ふのは、直ちに水に籠る精が、人間の靈に接するのであると說いてゐるが、いづれも海とか、水とかを、單に如實の海、如實の水とのみ限つて考へてはならない。

ポオル・クロデルは「五大賦」の中の「靈と水」と題する詩の序文でかういつてゐる。

「詩人は北京の塞内に囚はれてゐて海を想ふ。無限と解放との水の甘醉である。けれど靈はそれよりもさらに自由と透徹とに於て立ちまさつてゐる。我々を偶生より解き放つ、唯一絕對の神への進勢である。現在にては我々は神より引きはなされてゐる。けれども、目には映ぜずとも神は存す、而して我々は、この流動の元質、靈また水によつて神と脈絡を結ぶ、　物はこれによ

つて浸透せられてゐる。靈にして水、この成形要素及びこれに課せられたる意志、その立てる聲こそは、この祝福せられたる融合の表現である。靈は萬物に於て水を救脫せしめ　照らし、かゞやかす。これは死の闇より脫出し、自己自身にてあることを神に對して祈願することである。神の召に應じて湧出するとき、水は淨化する。これは忍苦の心より湧き出づる涙である。過ぎ去つた過失の思ひ出である。今や總は終つた。詩人は深い沈默の底で、囁く聖靈と、萬人に話し掛ける叡智の聲とに耳傾ける。」

水の如くに各處に存在せよ。流通自在、あらゆる形を包み、その中に形像をとれども、それ自身の形式は持たず、動き、流れ、跳れども、中心の靜けさを失はず。これは生命の大源より流れ出る聖なる水、靈なる水の姿である。この靈なる水の中に於てこそ、またこの靈なる水に由つてこそ、萬物は共存の念に徹することが出來る。これは萬物の所有であつて同時に萬物への溶合である。

海洋の美、「海！　この語それ自身に、何かしら虛無の靜寂と共に、無限の或るものを持つてゐるやうに思はるゝ」と、ピエル・ロティはミシュレの「海」の敍文で言つてゐるが、私は、八年前、戰爭の最中、赤道を北から南へ、またケープ・タウンをまはつて、最一度、赤道を南から北へ經過して、二ケ月半を海洋上に暮らした時のことを思ひ出す。日本の初秋の海と、熱帶の永住の夏の大洋と、また晩春初夏の南亞の海と、更にまた不斷の夏を經過して、突如として西歐の冬の海へ過ぎて行つた。その間に二回經た赤道無風帶の光そのものの如き、油にとけてた波、上下二重の洪大な藍青の鏡の如き國、地球の中央を橫斷して、永劫動亂の起ることなき靜寂そのもの、光と死との領域、實際、虛無の靜寂と、白日の夢と無限の或るものを思はする境界がまざ／＼と浮び上る。コオルリッヂの「老水夫」の詩に現はるゝ如き幻怪な光景が事實として考へらるゝ。

文藝に現はれたる海洋は多く、陸岸より見たる海である。ミシュレの有名な「海」でも、英文學の中で優れた描寫だといはれてゐるディッケンスの「デェヴィット・カッパアフィルド」の中の「嵐」でも、その他多くさうである。

海洋そのものの力、勢、美を現はしたものは、英國ではジョゼフ・コンラットの「タイフウン」その他の作品、佛蘭西ではピエル・ロティの諸作、特に「氷島の漁夫」などである。前者に於ては、海洋が生氣あるものの如く、殊に動亂の中に於ては、全く生きた何者かが狂ひまはり、泣き、叫び、打當り、碎け合ひ、もつれ合ひ、自然そのものが烈しい病氣にとりつかれ、痙攣を起してでもゐるやうな物凄さと、不思議さとを見する。作者その人の體驗でなければ描かれない光景である。

ロティに於ては、海は一種のノスタルジイを引起さしむる、心の鄉土である。彼と海との關係は殆んど生前からの宿緣のやうである。幼年時から、海は、彼の心に、恐れと同時に不思議な魅力を引起してゐた。暗綠の色をした果しなき水の曠野、四方から迫るが如く響きを寄せて來る夕方のブルタアニュの海を、初めて彼が眺めやつた時、恐れと悲しみと、寂しさと、しかも言ひ難い誘引とを身に感じた。

この不可思議な誘惑、これはセルト族の血の流を身に受けてゐる者には宿命的に感ずる魅力である。夢を追ふの心、不思議な國を追求する心、卽ち我ながら知らぬ故鄉を慕ふ一種のノスタルジイである。この誘惑が彼を驅つて洋

上の人たらしめたのである。それ故、彼の作、ことに「氷島の漁夫」なぞを讀む時は、海そのものが、自由に擴がり伸びて、地球はほとんど水の大なる球となつて虛空を廻つて行くやうな感じを與ふるのである。彼が夢を追ふ心は、海波と共に流れて四方に擴がり、彼の想像は日の光となつて、波と共に同時に世界の果までも伸びて行くのである。

ロティの作は、アイルランドの劇詩人、シングに影響して、「海への騎者」を呼び醒ましたと言はれてゐるが、それは事實に異ひない。少くもシングはロティ　この作によつて、彼等の中に眠つてゐる共通なセルトの魂を目醒ましむる機會を持つたのであらう。シングの「海への騎者」中の老婆——自分等に生命を與へ、自分等を育て上げ、やがてまた自分等から命を奪ひ取つて行く海、その不思議な廣大な自由な水の國、その海が、彼女の男の兒を一人また一人と奪ひ取つて行くのを、凝と忍び耐へて、四方の水平線上から遠く攻め寄せて來るその響きに聽入つてゐる老婆、彼女は自分の運命を悲みもし、哭きもしても、その底には深い諦めがある。彼女その者が海波の中から拔け出て、孤つ岩の上で、暫し休息してゐる海獸の姿のやうにも思はるゝ。ロティの「氷島の漁夫」に現はるゝ老祖母イヴォンヌにしてもさうである。ブルタアニの岸邊へ打寄せて來る海波は、彼女の周圍の者を盡く冷たい、北の波の中へ奪つて行つてしまふ。そして最後に一人殘つた孫は、東方の熱帶洋上で死んでしまふ。彼女は、やがて自分と同じ運命の途を歩むべき少女と共に寂しい生を孤つ家に送つてゐる——此の二人の作家の作品の中で、女性は、運命への默從者であり忍從者である。男性は運命の誘ふまゝに、何處へでもあれ、夢を追うて走り行く。ロティのこの作では、この男性の代表者はヤンである。彼は强健な體軀と、負け嫌ひな氣象との快男兒である。如何に甘き陸上の戀が彼を引止めようとも、彼は遂に自分が豫見してゐた花嫁、恐ろしい歡喜の響きを立てる海と結婚するまでは、如何にしても海上生活を思ひ止まることは出來ない。蛾が燈火に身を燒かるゝやうに、海の魅力は遂に彼の生命を吸ひ取らずにはゐない。

日本を遠く離れて、日本を思ふとき、太平洋と日本海とに四方取りまかれて、銀盤上に浮び漂ふ綠の島國が、遠い〳〵水平線上に姿を見する。紺青の波に浮び、白銀の浮彫を盛つて、夜の海に漂ふ日本の島國、自在な海波は劫初この方、この岸邊を洗ひ、不斷の樂を立ててゐる。「日本人にとつて、海は生命の源泉である。海は日本人の魂を誘ひ、慰め勵ます。日本人にとつて海はいつも若く、またいつも生きて、朗かであると同時に、常に何等かの不思議を藏してゐる。この不可思議な明るさ、この輝くエニグム、これが劇曲『浦島』の獨特な魅力である。乙姫は理想美を、浦島は人間を代表してゐる。兩者の間に生るゝ愛は、卽ち理想と現實との關係、兩界の結合を示すのではないか」と、私は坪内博士の「新曲浦島」の佛譯の敍文に書いて置いた。巴里ソルボンヌ大學のセニョオボス教授は、巴里大學に來る日本と支那の學生について聞いて見ると、日本人の多くは海によつて歐洲へ來るし、支那人の多くは、それが南方の支那人であつても、大抵陸路シベリア經過で來る、こゝに兩國民の相異が見られると語つて居られたと友人が語つてゐた。

日本の文藝により一層海洋の自在性、海洋の廣さが加へられても好い筈である。心の鎖國を我々は破らなければならぬ。波の打込むだけの岩窟の狹さでなく、もつと四方に、自在に伸展する大洋性を我々は持つ可きである。海の波と

共に更に聲を擧げて、もつと「自由」を、世界的の「自由」を呼ばうではないか。

（三）

海洋は、廣さと、自由さと、伸々しさと、同時に動と靜との感じ、靜寂と叫喚、動亂と平穩との美を與へ、森林は集合生活、團體生活、複雜多樣、混淆秩序、一種複合の美を見せ、山岳は立體的、彫刻的、線の美、面の美を盛り上げて動ぜざる姿を示す。海洋が物の成しとげられたる美を見するならば、山岳は物の始まり、源泉動力の美を示すのである。

山岳には一種の深い靜けさと、同時に、その靜けさの中から起る不思議な音樂と、また平地では見られない、純な、澄み切つた色彩の變化と、それ等を綜合し、統一した全體的な大觀的な、總てを包む氣分が、ことに、その頂上に於て抱かれるものである。最早や仰いでも、紫の空より外には何物もないといふ感じの中から、一種永遠に對する不可思議な力を覺え、そして氣分は純化せられ、歸一せしめられ、超脱せしめられ、淨化した爽かさを味はしめられずにはゐられない。

「ユング・フラウの頂上に立つものは、一種の清爽な、同時に敬虔な情に打たれる。大自然が縷彫したこの巨きな藝術は、その存在そのものが直ちに理想である。こゝにイデアリスムとレアリスムとが握手する。此處に我々は確かな存在性と、無限に憧るゝ情念との融合を見出す。我々の頭上を覆ふ紫紺の空は果しなき高さを示し、我々が踏む山の頂は大地の動じなき確かさを見する。——ユング・フラウの中腹には、無數の草花が、短き季節を爭つて、咲き亂れてゐた。氷河を隔てた日當りのよい草原には、鈴の音を鳴らしながら、牛の群がさまよつてゐた。登山鐵道の軌道は、八月の日光にも消え殘つてゐる雪の間を縫つて、隧道をくゞり、溪の上を傳はつて、次第に頂上へ導いて行つた。——雪に輝く尖頭と氷に埋められた溪谷と、麓の村々と、山の裾をめぐる深碧の湖水と、それを縁どる常綠樹の林と、下より上へ、上より下へ、眞白な雪のちぎれて飛ぶ蒼空の中へ、この麗しくて雄々しい巨峯が、身をもつて描き出した一大彫像は、理想を現實へ現實を理想へ示す一つの象徴として、嚴然として屹立つてゐた。」——私はこのユング・フラウの頂上へ立つた時の感じを忘れることは出來ない。時々の思出となつて私の心をとりしづめて呉れる、と同時に、私の情念を高く放つて、淨化し洗滌して呉れる。

山岳は、人間が地上に棲息する以前から恐らく、存在して、人間が初めて目を見開いた時から、その眼前へ、その偉容と美裝とを輝かしてゐたことであらう。けれど、この眼前に存在する美を、或は遠く地平線上に浮ぶ美の姿を、人々は目には映ぜしめても、それを美しいとは感じなかつたらしい。或時期の來るまでは、この天地間に大きく彫み出され、築き上げられ、描き出されてゐる美も、その存在を認められず、隱されてゐたのである。その時期が來ると、俄に眼前に眞白い山が浮び上つた如く、富士山が一夜にして湧出した如く、人々は驚いて、爭つて、その美を仰ぎ、拜跪せずにはゐられないのである。

この時期は歐羅巴と日本とでは、日本の方が遙かに早いであらう。萬葉集の時代から日本人は既に富士の美をうたつてゐる。けれど全體として山岳の美觀を味ふやうになつたのは最近のことである。歐羅巴では、この山岳の美が一時に人間界に開放せられたのは、地上に大革命のあつた後、ロマンティスムの文藝が初めて情緒を開いて自然を感じ初めた時、即ち十九世紀

初頭である。

十八世紀末までは、山岳といへばむしろ恐ろしい場處であり、惡魔の棲家であり、足を踏入る可き處ではないかのやうに思はれてゐた。グンデルワルドといへば今日では、アルプス山中の最も感じのよい、空の美しい、空氣の淸い、そして明るい、朗かな谷間であるにも關らず、千七百六十年にグリュンネルといふ人の記述によれば、全く地獄のやうな永久の闇の立罩めてゐる谷間で、寒さは身を切るばかり、そして底知れぬ水溜りのある、恐ろしい肉食鳥の飛んでゐる場處とされ、そこへ足を入れたら最後、二度と出て來られない谷間と見られ、即ち歐羅巴大陸の中で、最も恐ろしい、氣味の惡い場所の一つにせられてゐる。これほど、山岳とか、自然とかの觀方は幼稚な、恐怖に充ちたものであつた。それ故、十八世紀末までは、山を描いても、それは平野から麓まで、或はせい〳〵山の中腹までの美しさであつた。ルウソオの如き自然の解放者でさへも、そして親しくアルプスを二回も徒歩で越えてゐる人でありながら、自然の、また山岳の偉大なこと、或はその壯美とかいふことには、いまだ思ひ及ばなかつたのである。彼の目に映じた自然の美は、林間の空氣の美しさ、草花の香氣、或は谷間の牧人等の生活であるとか、穩かな、靜かな方面の美であつた。

それから、ロマンティスムの文藝が盛んになると共に、初めて山岳全體の美しさ、モンブランの莊嚴とか、伊太利アルプスの大觀とかいふことが、切實に味はるゝやうになつたのである。英國の詩人、コオルリッヂの「モンブランの頌」とか、シャトオブリアンの「モンブランの旅」とかが殆んど初めてこの隱れたる美を人界へ引き出したのである。

佛蘭西では、山岳の美を稱ふる時、第一にはアルプスであり、第二にはピレネエである。この兩者への旅行記は多くの文藝家の手によつて書かれてゐる。ことにピレネエのものには、ユウゴオのもの、テオフィル・ゴオチエのもの、更に　イポリット・テエヌのものなぞ、いかにも淸新な、爽かな氣分に充ちみちたもので、それと共に、精細な觀察、詩的情調が漲つてゐる。

モンブランといふ山は、ことにフランス人にとつては、最も美しい山の代表のやうになつてゐる。リヨンのフゥルヴィエルの丘の上から、遙か遠い地平線上に浮んでゐる姿、シャムベリイから眺め、瑞西のジュネエブから眺めた姿、いづれも純白な、輝かしい、美しさを見せてあらゆる詩人の嘆賞の的となつてゐる。「美しき合調、氣高き調和、他に於ては晦暗なものが、此處に於ては麗朗の中に漂ふ」とミシュレは、その著「山岳」の中で言つてゐる。私は、幾度となく眺めやつたこの山の氣高い姿を忘れることは出來ない。殊に、オオト・サボワの山中で、蒼黑い杉林の上から眺めやつた、夕暮のモンブラン、白光が薄紅に、やがて紫にかはつて、遠く空際にたゆたひ、森の中からは傳說の角笛が谺して響き渡り、羊の鈴が霧の中を流れて行く上に、殘り惜しげに身をかくしたこの山の姿は、永久胸につゝまれてゐる。

テオフィル・ゴオチエの「月曜の休暇」にはこの山の美を說いてやまない。「夜の間に、モンブランは、身を包んでゐた薄紗を投げすてて、秀麗な裸形となつて現はれた……そして、幾里の距離を置い　ゐようとも、これに觸るゝには、たゞ手を伸しさへすれば足りるがに思はれた。」いかに人間近く、この美しい「氣高き姿したる聖なる美神」が立ち現はれたことであらう。昨日まで隱れてゐた美そのものが、突如として眼前に浮び出た驚喜を見せてゐるのである。

・ラスキンの「近代畫家論」は、審美眼をもつて自然の形象を論じた劃時代的作物である。そして、人間の繪畫、彫刻、建築と、自然の關係を理智的に的確に立證した不朽の名著である。――而してこの兩者の關係、特に山岳美と人體美との關係を、實際、具體的に成形的に我々の眼前に浮ばせて呉れるものは、近代の巨匠ロダンの彫像である。我々はロダンの諸作を通じて、近代人の痛苦と、反抗と、そして一種の押へがたき隆起の力を認むると同時に、その諸々の裸形を表出する線に、山岳を圍む、力強き、默しては居れど怠りのなき、緊張した、隆起を認めずにはゐられない。恐らくこれが、ロダンの彫刻美をして古典彫刻の美と特に區別せしむる要點の一つであるに異ひない。解放せられたる自然力と近代人間力との一致點である。

日本の著名な山岳の頂上は、大方佛者等によつて開かれたものであつた。それは彼等が始祖の業蹟を追うたのか、それとも超脱、純化を生命とした教義の本來に從つたのか、或は難行を修道の必須條件とした爲めか、知らないが、日本の高山の多くは早くから多少とも佛教の關係を持つてゐた。そして其處に佛教の超人間的一方面がうかゞはれる。これに比ぶれば歐羅巴のクリスト教は、寧ろ平原の中に育ち、或は森林の中から出て來て、より多く集合生活的、卽ちより多く人間味、日常生活味を含んでゐる。――古來から日本人一般としては、登山の習癖があつた。隊を組み、講社をなして「お山」へ登るのが一種の義務の如く見られてゐた。日本人にとつては、山頂を眺めるに一種崇拜の情なしではゐられなかつた。日本人にとつては、山岳は惡魔の棲家ではなくして、寧ろ聖地であり、靈地であつた。其處へ足を入るゝのは禮參であつた。惡魔を恐るゝのではなく、神佛の靈地を汚すことを氣遣つた。そして參拜のゆるさるゝ個處だけには是非とも登らねばならぬことにされてゐた。今日でも、地方によつては、その地方の高山靈山に一度參拜しないものは一人前の青年とは考へられない地方が多くある。

所謂アルピニストに呼ばるゝ純粹の探嶮、探美の人々が登山を始むることになつたのは、日本に於ては極めて最近のことのやうである。二十年を出でないであらう。歐羅巴に於ても百年を出でない事と思ふ。而して、日本の中央山嶺が日本アルプスと呼ばれて、多數の登山者を引きつくるにいたつたのは一層最近のことである。それ以前は、山岳は講社を組んだ一定の禮拜者以外よりは見向きもされなかつたものであらう。

信州の溫泉地などへ行つて見れば解る。從來の家屋は所謂日本アルプスなる山嶺に面した方面は、盡く壁にして、その方面へは窓を開けない工夫がしてある。今日までの人々にとつては、その美しい日本アルプスなるものも、たゞ冬期に嵐と雪とを吹き送る厄介なものに過ぎなかつたに異ひない。卽ち舊來の家は盡く、この大山嶺に對しては、背を向けてゐる。然るに此頃の新築家は盡く、その方面へ窓を開ける。のみならず、舊い家とても、樣々な工夫をして、背後へ口をつける事を始めだした。――日本人にとつても、同じく十數年前に初めて、この中央の大山嶺は突如としてその美容を我々の眼前へ輝かし出したのである。

この山嶺の美の文藝的表現はどうであらうか。遠景美觀、或は中腹以下の人事と密接に交渉ある方面から次第に進んで、やがて絕頂の美觀がその表現相を持つことになるであらう。海洋と共に自由に伸びんことを求むる日本人に同時に、山嶺の永續性、隆起力を體得して、この力を、この美を人間の中へ解放せしむること

は決して無益なことではない。

スタンダアルは言ふ、若し巴里の附近に、ドオフィネに於て見る如き偉大な山岳があつたならば、確かに佛蘭西文學は他の生面を持つてゐたであらうと。我々もまた、東京の近くに日本の中央山嶺のあつたことを望んでもさしつかへなからう。現在の日本文學はあまりに都會的である、あまりに部分的である。少數者の手中で作られて、配布せられてゐるに過ぎない。我々の前に俄に生現した、この新らしき自然美が、たゞに好奇と探險との眼にのみ映ぜられず、その巨きな投影は、廣くのびて、都會の上までも達したからとて差しつかへないはずである。山嶺の氣をして動かしめよ、日本の中央にそゝりたつ巨人をして物を言はしめよ、日本の現在の文學にもまた他の一新生面が開けて來るであらう。

（四）

自然を人間の活動する單なる背景、若くは舞臺とのみ考ふるな。此處に我々の生命の源泉が横はる。我々はその懐の中に住む。

或時代が來て、人間は自分等の立てた社會組織に不滿を感じ、不平を見出し、缺陥を覺るとき、人々はその立て直しを要求する。その場合に、人は振返つて、自分等の住んでゐる自然の懐をさぐる。そして其處から新たなる生活源泉を求め出す。「自然へ還れ」といふ呼び聲を擧げずには居られない。

また或時が來て、人々は現代の立て直しを、より自然に近き生活、大地に卽したる生活をなしてゐる人々の中に求むる。「民衆の中へ行け」といふのがそれである。けれど、この場合の民衆は、實は大地への棲息者を意味する。かくて、トルストイは、その八十年の生涯を歩みつゞけて、農人の胸の中へ突き入らずにはゐられなかつた。

ルウソオが「自然に還れ」といふ呼び聲をもつて、瑞西より下つて、佛蘭西の平野を巴里へ出かけた時、既に彼の周圍には目に見えぬ自然力が發動し、清新な山氣は、アルプの方面から首都へ向つて吹きつけてゐたのであつたらう。ルウソオはたゞその自然の力に一道の表現を與へたのであらう。

トルストイが農人の胸を求め、大地の隱れた力を求めて、ロシヤの野へ立ち出た時、實は、既に、ロシヤ全體の黑地は、大きなうねりを立てて、無言の動波を空中に發散せしめてゐたのであらう。この動波を不知不識の間に彼は身に感じて、その根原へ救ひを求めて行つたのであらう。

これが具體的な、現實的な表白實現となつて現はれて來るのは、ルウソオの歿後でありトルストイの死後であつたにせよ、自然といふ存在は、その胸の上で跳つてゐる人間等の誤れる生活を、時々立て直さんがために大なる動搖を引起し、そして、その都度自分の存在を忘れ、若しくは無視してゐる人間等の目を醒まさするのである。そして日頃、自分に忠實に、自分の胸を大切にして働いてゐる人間共を立たして、その社會の立て直しの大切な役目を演ぜさせるのである。この自然の發動に早く氣付く人が豫言的言語をなす。ルウソオがそれであり、トルストイがそれである。

けれど、この自然力の表露の口と身をなしてゐる人々の言動は、その當代に於ては、却つて異端者の語の如く、背教者の行動の如くとられ、當代の人々よりは迫害の加へらるゝのが常である。

常に自然に近く身を置き、常に自然の聲に耳を傾くる者にとつては、卽ち斷えず立ち歸つて、己れが眞の住家を見舞ひ、己れを育てる存在

の胸を確かめるものにあつては、自然は保護者であらう。けれど、これに背き、これを忘れ、これに遠ざかつてゐるものにとつては自然は或る時、無用の飾裝の如く思はれ、また或る時は、それを汚すとも知らずして汚し、そして、不圖氣がつけば、何となく不氣味であり、恐ろしくもあり、復讐でもせられさうであり、おづ〳〵その傍によれば、嚴格であり、冷たく、酷く、卽ち繼母の如く、嘲笑をあびせ、飜弄もし、威壓もするものの如く感ぜらる。けれど、その胸に生れ、その懷に育てられたる人間であるが故に、不氣味でも、物凄くも、冷たくも、つい縋りつき、まつはらずにはゐられない。卽ち一種の誘惑がある。

　近代人が情感の眼を見開いて自然に對して以來、我々は或時は、無邪氣なる幼兒としてその胸に抱かれ、或時は蕩兒の如く、その懷を捨てて去り、そしてまた或時は、その叱責を恐れながら近寄り、うかゞへば、以前の溫容、俄かに冷たきものと變つて居り、その變貌に驚き恐れ、再び逃げ出さんとすれど、何處まで逃げても逃げられず、常に背後からの追求を感ずる、丁度、雲を起して虛空を縱横に飛び廻つた得意をもつて歸つて來て見れば、依然として如來の掌上に載せられてゐた孫悟空の姿のやうなのが人間である。この自然の背反者は逃げて、逃げて、またその背反者等の集まつて作る人間社會へ身を隱すけれど、その背反者の團體そのものが旣に崩壞せらるべき運命に際會して、自然の怒りは一擧にして、その團結を投げ倒さずには置かない。――自然は常に慈母でもなければ、繼母でもなく、また常に神の綠の衣をまとうてゐるのでもなければ、同時にいつも醜惡の妖魔でもなく、寧ろいつも不變の嚴父である。過去幾世紀間、我々はこの自然の嚴父に對して、樣々な我儘をして來た。

　同じこの自然の胸上に生れ育つ身でありながら、互に奪ひ合ひをした。唯一つであるべき大自然の領域に區別をつけて、その區劃の中を絕對自己のものと考へ、本來の自然の存在を忘れてしまつた。また同じこの自然の懷から生れた身でありながら、その奪ひ合ひの結果互に嚙み合ひ、殺し合ひもした。しかも大げさな殺戮までも仕合つた。これも共同の親、自然の存在を無視してゐるからである。その結果は、これ等の自然への背反者の或る團體は倒れた、崩された。そしてそれに代つて立つたものは、より近く自然に接して住み、大地に卽して住み、その自然の聲をより好く聽いてゐるものでなければならない。若しさうでなければ、この奪ひ合ひ、この殺し合ひは果しなく續かなければならぬ。さういふ筈はない。自然の嚴父は、必ず己れに近く、己れの命により好く從ふものを立てしめるに違ひない。――大戰の中に、また後に生じた人間社會の變動なるものは、この自然の怒り、大地の振興が基調となつてゐなければならぬ筈である。

　何故に人間は、同じ自然の胸の上で、同じ自然が共通に人間に與ふるものを、區劃を立て、奪ひ、爭ひ、摑み合ひなぞしてゐる暇に、更に協力して、その自然が與ふる共通の寶の發掘、共通の生命の源泉を切り開くことに心を向けないであらうか。それは皆自然の存在を忘れてゐるからである。共通嚴父の存在を忘れてゐるからである。アナトオル・フランスは言ふ、「土地、鑛山、水、地球のあらゆる實質、あらゆる力を發掘するためには、人間あらゆる人間、あらゆる人類でなければならぬ。地球の完全なる發掘利用は、白人、黃人、黑人の結合したる働きを要求する」と。これは自然の存在を忘れずして、その胸の上で、協力して力强く働く事である。自然は人間のこの協同の努力をこそ

求めてゐるのである。同じ自分の胸に生れた人間どもの協力一致、そして、それが自分の胸に強く喰ひ入つて來る事をこそ自然は求めてゐるのである。それを忘れ、自分を無視し、徒に自分の胸の上で所有を奪ひ合ふ如きに對しては、必ずや自然は嚴しき叱責を加へずにはゐられないのである。

心すなほに自然の命令　聽け。個人にしてもさうである。團體生活にしてもさうである。我々の五體をめぐる血潮の昇降、流過も、海洋の潮の滿干と調子を通はせ、我々の心臓の鼓動も、空をすぐる空氣の流波と歩みを合はせてゐる。心おちつけて、氣を澄まし、よく心眼を見開いて、自然に對し得るものは、本然として、大きな生活狀態に身を置いてゐるのである。その人の生活は個體に限られずして、その背後をめぐる自然の精氣の發露する口となり、その人の生命は、直ちに廣く、遠く伸展して、同時に、確固なる基礎に据ゑられてゐるのである。

海洋の示す自由を、山岳の藏する永續性を、而して森林の見する集合の姿を、人間の生活組織に表出することを忘るゝな。自然をたゞ一つの人間生活のデコオルの如く見なす者は、必ずそのデコオルの發動に驚かされて、狼狽を出來すに異ひない。常に大地の存在を忘るゝな、地に即く文明を持たない國は、空中に築かれたる樓閣よりも崩壞し易い團體である。——自然の存在を忘るゝな。日夜立つる自然の無語の聲に耳傾けて、その命令に從つて組織を改めよ。その聲をして常に人間の中に發露せしめよ、清新にして自由、協同にして平等、その端的直接な表現が、我々を向上の路にむかはしむるであらう。

自然に對しては甘えるな、我儘を振舞ふな、恐るゝな、逃ぐるな、端然として立ち、素直に、柔順にこれと面接せよ、神話の時代、宗教の時代、情緒の時代、神經の時代は過ぎて、明智をもつてこれに向ふべき時代に我々は來てゐるのである。

伐木（三）

刃金と樹幹との烈しい爭闘は、冬の寒國でよく見掛ける現象である。抵抗するだけの力も無く不意を襲はれて伐り倒される郊外の櫟林の裏淋しさ。高鳴りを立てるだけの力さへない。若芽の角ぐむを待つて落つるべき運命を持つてゐる櫟の葉は、たゞがつさ／＼と鋸の根元に喰ひ入つて行く每に、斧の烈しく打込まれる度に、かすかな身慄ひをしてゐるに過ぎない。枯草の上へ投げ出された幹の、病者が床の上へ崩れて倒れるやうなはかない響き、それに武藏野の横なぐりの秩父おろしに抵抗した力が籠つてゐたらうか。

人家と人家とが周圍に立ち圍んで、僅かの空地に、互に身を寄せ合ふやうにして立つてゐた小さな櫟林は、今年の冬までの命で伐り拂はれてしまふ。切株の上に人の家が建ち、切株の上に道路がつけられて、暗夜にその上を通る人の足に、他とは異つた不思議な感じを下駄の齒に響かせて、それを感ずるだけの神經を持つた者も、持つてゐない者もある。かく伐り拂はれ征服されて行く「森林の復讐」は何、如何なる形を取つて、人間の上に及んで來ることであらう。伐木の頼りない力ない響きは終日冬の郊外の林に響いてゐる。

（「緑の門」より）

藝術の歩道

一

文藝をその取材の變遷といふ方面から調べて見ると古代に於ては文藝は、今日から見て所謂神話と呼ばるゝもの、卽ち超自然的現象と人間との交渉を主として取扱ひ、その超自然的現象と交渉する人間も、普通の人間ではなく、殆ど半神半人の英雄である。これは西歐諸國に於ても、また東洋に於ても、同じことである。中世紀に於ては、宗教的な、神祕的の材料、若しくは、武士的冒險、封建的な材料が採用せられ、文藝復興期以後は、近代の理性と、情熱とが相交錯して、古代の姿を現在の心理に、現在の時代相を古代歷史に託して、渾然たる包括統一の姿をとるやうになつては來たが、これとても、文藝作品の中に活動する人物、舞臺は、王侯であり、貴族であり、その周邊であり、歷史である。これ等は人間生活の大多數を主として見る時は、いづれも、材料上からしては部分的であり、偏在的である。その中に平民が幾分の役目を演じないことはないが、主要の人物ではない。多くは滑稽化せられ、道化化せられてゐる。

この平民が眞價を發揮し、眞の生命を示し、眞の意氣込みを見せるやうになつたのは十八世紀以後である。例を佛蘭西にとれば、佛蘭西の十八世紀は、來るべき生活上の大革新の準備時代であり、時相の暗遷默移を藝術が示してゐる時代である。綜合統一が分離個立に向ひ、共通よりは個獨を尊び、社會集合生活の基礎を個にて求めた時代である。特權に對する反抗、自由平等の要求、專制に對する破壞を求めた時代である。その大勢の代表として、また反響として現はれた文藝が、十八世紀末のボオマルシエであり「セヴィユの理髮師」、「フィガロの結婚」の中にこそ、平民が初めてその元氣と、精力とを示してゐるのである。

從來は社會の表面に公然と現はれず、隱れたる力、知られざる部面とせられてゐたのが、時期が來ると、その所謂下層と言はれ、下積みにせられてゐた階級の中から、新らしい元氣が、精氣が、大地の開かれたる口から隱れたる地氣を吐き出すが如く、發散せらるゝ。フィガロは一平民であり、貴族の家僕であつて、いつも、專權の傳統に立籠つてゐる當代の貴族社會に反抗し、それを破つて行く機智と元氣とを示すと共に、自己の眞摯な要求に對しては、如何なる嘲笑も、攻擊も物ともせず、一意專心に突進して行く勇氣を備へてゐた。

この新らしい精氣の前には當代の社會は動搖を感じ、不安と戰慄とを覺えずにはゐられなかつた。從つて當代の社會は、フィガロの勢力、卽ちこの新元氣の發現を恐れて、この「フィガロの結婚」を上場を禁ずること三年間、千七百八十四年には、それでも禁止し切れずして、初めて上場をゆるした。この上場こそは時代を劃すべき顯著な事件であつた。觀客はオデオン座へ向つて殺到し、入場を爭つて負傷し、氣絕するものすら生じた。フィガロの當代の社會を批評する一語一語には、觀客は熱狂した。「フィガロ萬歲!」の聲は巴里の街々に波のやうに湧き返つた。その聲は貴族邸内の侍女、下僕の口々からすら發せられずにはゐられなくなつた。

これは當代の新元氣、新生命の藝術化、具

醜化である。政治上、社會上の革新に先き立ち、藝術が新氣運の發露の機關となつたのである。

次いでロマンティスムの文藝は、大革命の藝術上の表現である。個人要素が初めて藝術上に的確の働きを示した姿である。この中には、材料の方面より見ると、都會の平民、貴族等の家庭に仕へてゐる人物といふたぐひとは更に異つた方面まで範圍は擴がつて來た。下僕と呼ばれ、家婢といはれゐる人々とは異つて、殆ど社會生活上に存在を認められず、地上に於ける生存權すら主張することが出來ず、それをほんの少しばかり強調したといふので罪に問はれ、獄に投ぜられ、動物に等しい生活を強ひられてゐる如き人間が、文藝作品中で主要な役目を初めて演ずるやうになつて來た。ヴィクトル・ユゴオのジャンヴァル・ジャンの如きがその顯著な實例である。社會生活の下層に敷かれ、蹂躙せられ、泥の中に命を引きずつて歩いてゐるやうな人間が、初めて目を醒まして、幾世紀となくたゝなはつてゐた重い、固い、殼を破り、幾時代となく無自覺の眠の中に、恐ろしい夢魔の生活を送つてゐたのが、不意に破れて、全く新らしい力と、光とがこの人間生活へ射すやうになつた。この光の前には、傳統の陋習に固まつてゐたものは、眩燿し、たじろき、驚嘆し、最初はそれを理解せず、見知らぬ者を見て、烈しく吠えたてる犬のやうにしてゐた者共も、遂にはその新らしき力を嘆稱せずにはゐられなくなる。

更に一生を大地面に接して、わき目も振らずに働いてゐる人々、草原の中に姿を沒し、地皮より立つ土煙を眞正面に浴び、汗にまみれて働いてゐる人々が、初めて文藝の中へ姿を見せた。嘲笑を浴びながら、滑稽化せられず、有りのまゝな勇敢な姿をして、初めて萬人の前へその存在を主張し出した。田園生活者、農民が初めて如實の姿を示すことが出來た。ジョオルジュ・サンド等の主情的な文藝は此處に取材の範圍を擴げた。

やがて、更に地中にはひつて働き、幾日も日の目を見ざるやうな鑛山工夫の生活が、レアリスム、ナチュラリスムの文藝と共にまざ〱と描き出されて來た。更に海上水夫の勞働生活が取り入れられた。特に佛蘭西に於ては、農業勞働者が比較的保守的であると思はるゝやうになつてからは、工場勞働者の生活が、進取的要素を代表するものとして描かれることが多くなつた。

文藝の材料は、最初神人が交る如き境、雲に包まるゝ山の頂、高い尖端から徐々に下つて、今は裾野一面にその範圍を擴げて來た。のみならず、最初、光明は天より山の尖頂へ落ち、徐々にその光が地上まで及ぶものと思はれたのが、今は、大地自體が持つ光が、幾重の厚い地殼を破つて、下から發散すべきを信ぜらるゝやうになつて來た。

あらゆる人間がまづその存在權を主張しだしたのが十九世紀初頭以來の傾向である。ロマンティスムの藝術である。併しこれはまだその存在の主張にすぎない、人間の集合生活を形成してゐる最大多數者は、僅かにその代表者を藝術の中へ送つて、それ〱の存在權を要求したに過ぎない。更に、その多數者の實生活の現狀が知られなければならない。その調査研究をなしたのが自然主義的現實主義の文藝である。

この存在權の主張要求と、調査研究とに次いで來べき順序は、當然、これ等の多數者が各自の自覺を持つて、人間文明の改善進展に交渉を持つことである。この順序を經て、第三の階梯に立ち、今後の文明を開展せしむる思想要求をまづもつて藝術的に表現せんとするのが新興

藝術と呼ばるべきものである。

從來は、偏に或種の指導指揮にのみ盲從して來た。何故と問ふなかれ、命令なればこそ從つて行く可きであると思料し、盲信して來た。併し、その指揮者等は常に、何處の國たるを問はず、また如何なる團體たるを問はず、陷り易い常習を持つてゐる。野心、欲望、虛榮、排他がそれである。力あり、精力ある人物であればあるほどこれ等の念は強い。然るにそれ等の念を一國の爲めとか、一國の利益とか、または一國の權威とかいふ概念と結び付け、若しくはそれ等の概念を楯にとり、その蔭に隱れて、相互に野望、虛榮を充たさうとしてゐる。これがいづれの國に於てもの、いづれの團體に於てもの指導者等の常習である。國際戰爭の如きは、これ等の謬れる指導者によつて導かれ、その導くがまゝに從つて起る現象である。團體間のこの常習を脱せざる限り、眞の新らしき文明は世界の表面に生れ出でないであらう。

この新文明を生れ出さしむるためには　從來無自覺狀態に置かれてゐた多數者等が、目を開くことである。從來全く文明の表面に立つを得なかつた人々が、眞に己れを知り、眞の自然の要求に基いた、常習に囚はれざる生活をもつて、當來の文明　開發して行かなければならない。數千年來の未開の土地が、永眠狀態の精神生活が、無限に擴がつてゐる。まづそれを拓け、その精神を目醒めしめよ。如何なる花がその新開地から咲き出づるかも知れない、如何なる希望がその新たに目醒めたる靈の中から生れいづるかも知れない。これを開かざる限りは、人々が口にし、人々が求めてゐ　永久の平和なるものは行はれないかも知れない。恐らく、この永久の平和の芽は、現在の集合生活を形成してゐるその最低基礎の生活者、大多數者の中に眞に籠められてゐるのではなからうか。

根柢多數者の目を開かしめよ。その開いたる靈の連結が世界の表面になさるゝ時、初めて、人々が求めて果されない平和の方へ多少の歩がなさるゝであらう。平和は幻の如く、迷景の如く、またかげろふの如く、現在人の頭に浮んで來ても、それを確實に把捉することの出來ないのは、根柢生活者の胸に籠められてゐる希望が、絲遊の如く立ちのぼるだけで、その希望が確實なる存在を示し得がたい爲めであらう。口に平和を唱へ、胸に平和を願ひ、然も手では戰爭をする。斯くの如き矛盾は何處から生ずるであらうか。それは現在生活者の大多數がいまだ、眼　開ずに殘され、自覺　持つ　會すら與へられず、闇路をのみ辿る生活を強ひられてゐるがためである。而して、光は常に上からのみ來ると思ふ迷誤が人を導いて、その上來の光に接する特權を享樂し、誇示し、山の頂のみを仰いで、大地そのものが持つ本來の地光を知らずにゐるが爲めではなからうか。この地光を開放せしめよ、恐らく、人々が常に求めて、然も得られなかつた要望が實現せられるであらう。この地光の藝術的發現こそは卽ち當來の藝術と呼ばる可きものである。

文藝　材料の方面より見る時は、現在はまさにかゝる階梯にまで來てゐ　と考へて、さしつかへないのであるが、更に文藝　主義の變遷から、理論の上から、考へて見よう。

二

文藝をイズムの上から大別すれは、一方は古典主義(Classicisme)があり、他方に浪漫主義(Romantisme)がある。一つは統一綜合を本質とし、他は分離個立を特色とする。一つは理性代表的であり、他は自由を求むる。一つは理性の命令を指導と仰ぎ、他は感情分子をその根子とする。共通は理性の本質であり、個獨分

理は情緒の特質である。一つは南方的で、明暗が生命であり、他は北方的で不思議が生命とする。一つは方則的であり、他は自由的であり、一つはアリストクラティックであり、他はデモクラティックである。それを極端にいへば、一つは中央集權的、他はアナルシックである。國民本來の素質よりすれば、一つを代表するは佛蘭西であり、他を代表するは英國獨逸である。これを時代に當てて考ふれば、一つは上古、他は中世、一つは十七世紀、他は十九世紀がこれを代表する。

更に、歷史的に言へば、十七八世紀の方則、共通要素を主とする古典主義に反抗し、これを破壞して個的要素を基調とする浪漫主義藝術が生れ出たのであるが、この新主義藝術は餘り個的情緒に重きを置き過ぎて、共通性を缺く、他の語でいへば科學が缺けてゐた。卽ち抒情主義にのみ傾いた。言ひ換へれば古典主義藝術は人間の理性を開放し、それをもつて有らゆる人間心理の指導者となし、浪漫主義藝術は人間の情緒を開放し、初めて自由な個的要素を藝術に取入れたのであるが、個に偏し、情緒に走つて、共通性が缺け、理智の共通領土がないが爲めに、その反動として、理智を主とした、科學的方法を採用した、研究調査を基本とした現實主義的自然主義の藝術が起らずにはゐられなかつた。從つて、この現實主義、自然主義藝術は、浪漫主義に對する古典主義の反動復活である。ギュスタアブ・フロベェルの藝術を「近代の古典」と呼ぶ意味の一つはそこにある。

けれど、餘りに科學的な手段で人間生活を研究し、現象と現象との連鎖をもつて人生を解決せんとし、人種、環境、時代の勢力にのみ重きを置き、各個人の本質、獨創、特性を輕く見ようとするに傾く結果は、社會集合生活を研究し描寫する文藝は生じても、餘りに科學的であり、餘りに個を無視したといふ不滿が生ぜずにはゐられない。理智主義に對する反抗が生ぜずにはゐられない。それと同時に、この現實主義、自然主義の藝術は、浪漫主義の人間の情緒を開放したのに對して、官能を開放はしたが、言ひ換へれば動物性は開放はしたが、その動物性が各個々人に於て如何に働くか、その動物性を制斷する力が各個々人に於ては何であるかを究めずして、專らこの官能的の力をもつて人生解決の一方定式としようとした。

此處にまた不滿が生ずる、萬人に共通な動物性を方式として、それに當てはめて、この公式によつて人生を解決せんとする科學的態度に不滿が生ずる。人生の開放を官能にまで持ち來した以上、更にその先きの開放をなしたい要求と、その一般公式を超越した、個人の生活とを現示したい要求とが當然起つて來た。これが十九世紀の末に生じた宗教感の復活であり、個人の靈を開放して端的表現をなさんとした象徵主義の生起である。これは理智主義、一般共通主義に對する文藝上の個人主義の反動であり、動物性に對する靈性の奮起であり、現代の古典主義に對する現代の浪漫主義の反動である。

けれど、この新らしき浪漫主義が各個人の靈の開放にとゞまつて、その開放せられたる個々人の結合集合に重きを置かない間は、いかにも弱いものである。かよわい靈の浮動の如く、いつまでも象徵の世界をさまよひ、現實世界を照らし出し、現實生活を指導し、新らしき眞の文明を地上に建設するだけの力を示すことが出來ない。「女性的象徵主義」と呼ばるゝに到るのもやむを得ない。眞の個人自覺、個人世界の把持だけでは、いまだ實際に於て、集合生活をしてゐる人間に於ては、十分なる確乎たる生活といふ事が出來ない。各個々人の明かな自覺と、平等

自由感と、同時に、その個々人の調和ある結合とがなければならない。

從つて、この象徴主義の藝術に對しては、既に飽き足らないで、一種の反動、より多く多數的な、より多く集合生活的な即ち社會的な藝術が勢力を示さんとしつゝあるのである。國々に於て、それ〴〵の異つた地方色のあることは勿論であるが、その根本基調は、眞に目醒めたる個々人が、自由な平等な結合をなして、それを實社會上の文明に實現し、新らしき文明の局面を打開し來らんとしてゐるのである。或る國に於ては、既に實際社會上の大變動の後に於て、この傾向が現下に舊分子の驅除に強く向けられ、更に積極的に新文明の建設の方向に用ゐられつゝある。また或る邦に於ては、一方に舊慣に囚はれたるものに對抗し、他方にいまだ目醒めざるものを喚起しつゝ多數者の世界を開き來らんとする精氣を示しつゝある。斯る傾向のなかの一つとして「未來主義」と呼ぶ藝術を見出したところが、何も駭くには當らない。

要するに文藝は、反動に反動を重ねて來てゐる如く思はるゝ間に、次第に人間の生活力を開放し來つて、その最後の階梯に達せんとしてゐるのである。理智の開放、情緒の開放、官能の開放、靈の開放、而して、それが部分より全體へ、特權より全般への開放に伴つて發達する。即ち文藝の人生に及ぼす全質的開放は、外演的開放と相伴つて發達する。現在日本に於て、新らしき藝術を呼ぶ聲が次第に強くなりつゝあるとしても、それは當然の順序であり、これこそは文藝の人生に於ける內質的開放を、外演的に普及せしめんとする當然の要求にほかならない。ブルジョア藝術なるものは、中間の藝術であり、無限なるものに制限を置き、特權を享樂する藝術である。これを破壞し、多數者の目醒めの中より清新潑剌たる元氣の具體化せられたる藝術を求めんとする要求が、即ち新らしき藝術を呼ぶ聲である。

前章に說いた文藝の材料の變遷と、この文藝の論理上の發達とを併せて考ふる時、現在及び今後の藝術が如何なる步をとるべきかは、略ぼ推察するに困難でないと思ふ。

若し理論上から、文藝の形式を命題化するならば、左の如くになる。

第一提出命題(古典主義)
第二反命題(浪漫主義)　}第三綜合命題

この第三の綜合的な藝術時代が、今後に於て當然來る可きである。個々の生活を基調としながら、全體に通ずる方則の自づと生ずる生活、統率的ではなく、しかも合奏共鳴のある生活、その生活を具體化し、その生活を率先開いて行く藝術が來るべきである。しかしそれがためには、從來、自覺を持つ機會の與へられなかつた大多數者が、まづもつて目醒めなければならない。從來自分等の生活を形成する文明を開展せしむる直接の手段を缺いてゐた大多數者が眞の覺醒した活動をしなければならない。この活動が國々によつて、種々な形成はとらうけれども、その目的とするところは同一である。今暫く、藝術はこの活動の發露機關となつて敏活に働くであらう。その働きの如何が即ちこの國の文化の程度を示すことになるのである。

三

藝術は人生の表現である、といふ定義が、あまりありふれた定義であるとしても、少くもこれは事實である。或る場合に藝術は人生の希望となつて現はれ、或時は當代の批評となつて現はれ、または現實直寫の姿をとることもある。けれど、いづれにもせよ、人生の表現である。いづれの國たるを問はず、その國の文化が普

及してゐれば、その國に於ける藝術は自由な表白をなし得るのである。即ちその國に於ては、その國の人生――を構成してゐる集合生活が、自由な表現をなし得るのである。

　人生を中心として、その放射線を形づくるのが藝術である。成形の藝術、言語思想の藝術、律動の藝術、これ等が一の藝術圈をなして中心人生の發動機關となつてゐるのである。而してこの藝術圈が完全に存在してゐる場合には、中心人生が或る新らしい衝動に驅られて、新らしい表白を要求するときは、その藝術圈の一端に或る新らしい藝術の形成が曙光を見せると、直に波動を起して、その藝術圈全體を巡廻する。詩に論文に、繪畫に音樂に、やがてそれ等諸種の綜合藝術たる劇に具體化せられ、建築にまで及び、新時代の新表白は、劃然として人目を聳動するのである。

　若しこれに反して、各種の藝術が孤立的な姿に存在し、その間に何等の聯絡がない場合には、假りに或る思想、或る傾向の藝術が、新たに現はれたとしても、藝術全般に亘る活動にはなり得ない。即ち部分的なものに終つて、その藝術の生命は、その國の社會全體を動かすことが出來ない。それを逆に言へば、その國の人々の一部分が新らしい運動に參加しただけにとゞまり、その他の大多數の人々は、何が當代に於て當然要求する表現であるのか、殆ど無關心でゐるのである。これは即ちその國に藝術圈が完全に存在してゐないことを示し、その藝術圈の完全なる存在のないのは、その國の文化程度がいまだ十分でないことを示すのである。これを言ひ換へれば、その國の多數者は、自己の要求なり、熱望なりを、表現する手段を知らず、若しくは與へられずにゐることを示すのである。

　例をとれば、嘗て日本に自然主義といふ文藝上の運動が起つた。これは輕浮なる理想主義、一時的の情感に囚はるゝことなく、深刻に現實を直視し、その現實中に存する嚴然たる自然法を認め、同時に、その自然法に對する各自の態度を明かにせんとした運動である。一度この運動を經なければ、人は常に夢幻の中にのみ囚はれてゐるかも知れない。現在の日本にとつては、最も大切な運動であつた。これがため人々は初めて自己反省の機に接したのである。併しこの運動は、言語思想の藝術に於てこそ顯著であつたけれど、それが果して繪畫に、彫刻に、どれほど明かな痕跡をとゞめたであらうか。更に音樂にいかなる表現となつて現はれたであらうか。人生の最も端的な表現たる音樂にその跡が見られないとすれば、この運動の傳播力は可成りの制限を置かれたものといはなければならない。

　如何なる新運動でも全般的に效果を示さない場合は、如何に部分的に強烈であつても、その結果は十分とは言はれない。舊式な思想家の反抗は意とするに足らないまでも、新らしき方面への傳播が十分徹底的でないが故に、その運動の末は細くなりがちである。思ひ切つて革新が出來ないうちに、直ぐそれに對する反動が生じて來る。時代は小刻みな相をとる。

　これとは反對に、象徴主義といふ藝術が、或は未來主義といふ藝術が、或國に於て、――例へば佛蘭西の如く――詩歌に新らしき第一の聲が擧げられたかと思ふと、直ちに、音樂に、繪畫に、彫刻に、劇に、その輪動が浮び上つて、いかにもその當代の表現要求が顯著であるのを示す場合には、その國に於ける人生は、全く自由な、新らしき表現を享樂し得るのである。

　即ち、或時代、時代の人生が自由な表白をなし得る如き狀態に置かれ、有らゆる藝術がその新らしき表白の機關となり、敏感に迅速に

その表白を具體化し得る如き國に於ては、その國の文化が比較的よく發達してゐるといふ可きであり、その反對の場合にあつては、文化程度はいまだ十分ならずと言はれても仕方ないのである。

換言すれば一國を組織する多數者が、藝術といふ機關を十分に享有して、十分に自己のものとして、それを通じて、自己の要求、批判、熱望を直ちに表白し得る如き國は、文化程度の比較的普通してゐることを示してゐるのである。それとは異ひ、一國の多數者が藝術に對しては無關心であるか、または藝術に對して誤つた觀念でも抱いてゐて、自分等の最も自然な、最も力強き表現の如何なるものなるかを知らず、寧ろ藝術の發達を阻止せんとする如き力が強く働いてゐる如き國にあつては、文化程度は悲し・可く低いといはなければならない。

藝術が或國の一部分に於てのみ生存してゐる如き場合には、その藝術は、骨董品となるか、または娛樂物に墮してしまふ。そして、それが隷屬する階級はブルジョアジィである。すべて普遍的である可きものに制限を置き、その制限を特權であるとして享樂し、その特權のなかに於てのみ幸福を見出してゐるのがブルジョアジィの心理である。從つて、このブルジョアジィの階級に藝術が屬してゐる限りは、それは眞正のものではない。この藝術をブルジョアの手より解放して多數者のものたらしめ、一國の多數者がそれを十分自己のものとせざる限りは、眞の藝術は存在しないといふ可きである。

藝術のなかに於てこそ、人は眞の己れの姿を見ることが出來る。これのみが人間の主張し得る眞の唯一の所有である。この所有が一國の一部分に偏在してゐる限りは、その國の文化は十分の發達をなしてゐるものとは言へない。藝術の所有とは、藝術品の所有のみを意味しはしない。藝術の機能を理解し、この藝術を通じて、眞の自分等の表現せられたる姿を知り、自己を知り、自己の力、自己の過去、自己の未來、あらゆる隱れたる自己の本質の表白せられたるものを知ることであり、それを通じて自己を表はす欲求を持つことである。これを通じてこそ、その國內に橫はる無限の生命は渾然たる形をとり、これを通じてこそ、その國內に隱れて居る未知、獨特性は、初めて天日の下に姿を見せるのである。普通、人の云ふ如く、日本の文明が獨創を缺いてゐるといふならば、それは、日本に於て、いまだこの藝術の創造感が一般に行き亙つた經驗を持たなかつたといふことを意味するのである。大多數の日本人が、自覺して立つとき、從來無自覺を強ひられてゐた大多數の日本人が、自己創造の藝術感を痛感するとき、こゝに獨特の新文明がこの島國に初めて開展し來るであらう。

◇

闇に浮ぶ物の匂ひの中にも、或は街路を走るものの響きの中にも、目に見えない、忘れられた人生がひそんでゐる。その匂や、その響きの入り亂れ糾れ合つてゐる中に、幾多の人生が樣々の綾をなして織り出されてゐる。一人々々の特殊に持つてゐる世界は、不思議な渦をなして街路の上を流れて行く。先きに立つて行く人の足音の中に、不圖忘れてゐた生の蘇つて來る事がある。闇の夜の木犀の香の中に、舊がまざ〳〵浮び出て來る。それが皆、人々によつて異つた生活の姿をして、都の街路の上に、賑かな目に見える世界と、隱れて渦まくインヴィジブルな世界との糾れ合ひを示してゐる。（『綠の國』の「響」より）

年譜

明治十三年——二十五年
九月五日、松本市、母の生家にて生る。成長したるは長野縣東筑摩郡鹽尻町。父は久一郎、母は松枝、舊い欅の巨木の立ちかくしてゐる舊い森の家は、少年時を送るに物寂しいものであつた。父は僊堂と號し、漢詩人である。母は故あつて大方生家へ歸つてゐた。父は最初は財產の整理、後は政治問題で大方家にはゐず、父母と一年を通じて暮らしたること全くなし。祖母と伯母とに大體育てらる。少し遲れて村の小學校へ行く。當時は高等小學で英語を教へてゐた。家では神經質の伯母が『近古史談』、『日本外史』などの素讀を教へてくれた。この間に憲法發布にて、戸々國旗をかゝげて祝ひたる記憶あり。

明治二十六年——三十年
松本中學校へ入學、この五年間は呑氣で愉快な生活であつた。直ぐ上級に、鹽澤重雄（中澤臨川）がゐて、「文學界」だの「國民之友」だの、創刊したばかりの「文藝倶樂部」だの、「新小說」だの、當時の文藝熱が山間の中學生までも動かさずにはゐなかつた時代で、彼に鼓吹せられて、夢中になつて耽讀した。好きな文章を拔萃して、二册も三册も拔萃帖を作つたものである。この間に日清戰爭がやはり少年の情熱を掻き立てたものであつた。

明治三十一年——三十三年
この間は家居を餘儀なくせられて、家產が年々傾き、債主が門に迫り、執達吏の來襲度々あり、陰鬱な不健康な生活、だゝ廣い家は雨戸を開けぬ部屋も多く、山林の拔採、養蠶の手傳ひなぞに身を疲らす。バイロンの『チャイルド・ハロルド』、ゲエテの『ウェルテルの悲み』なぞ耽讀、家に傳はる漢詩書を亂讀。

明治三十四年——三十七年
前年の歲末、母は長年の別居より復籍。この年一月、上京、四月早稻田大學高等豫科第一期生として入學。當時は一週四十時間近き授業で、夜七時八時に歸る事屢々あり。專念勉强。窪田空穗、水野葉舟等と同居、中澤臨川帝大工科在學中、屢々往來す。英文學科といへども半ば以上哲學科の科目多く、波多野精一先生には特に教へらるゝ所多し。坪內先生は自宅にて屢々文學研究會を開かれ、啓發、導、手をとらんばかりに教へらる。學課以外には、ロシヤ文學を當時の一般と同じく愛好す。「ツルゲエネフ短篇集」翻譯出版。三十五年母死去、三十七年、日露戰爭始まる。ラフカディオ・ヘルンの晚年の講義を聽く。

明治三十八年——四十年
七月、大學文科卒業。同年歸朝したる島村抱月先生につき、研究科學生として「早稻田文學」に現はれた自然美の研究の指導を受く。同時に矢野龍溪總裁、國木田獨步主幹する近時畫報社へ入り、「新古文林」を編輯す。當時戰勝の氣分横溢、日比谷事件、全都の燒打ち騷ぎ。畫報社はやがて獨步社と改め、國木田獨步の經營となり、雜誌「新古文林」は當時の多くの文藝家等の寄稿による事多かりしも、稿料は殆ど拂へず。四十年獨步社解散、これより先き三十九年より同時に早稻田中學にて英語を教ふ。四十年結婚す。妻貞子。

明治四十一年——四十二年
四月、早大高等豫科講師となる。七月、國木

田獨歩南湖院にて死去。十二月、由美子生る。四十二年三月、最初の散文集『綠雲』出版。小島烏水氏の好意を受くる事多し。同年十一月、第二文集『高原』出版。

明治四十三年――四十四年

早稲田大學英文科講師、英詩擔當。但し當時大陸文學の研究熱初めて昂まり、ボオドレエル、マアテルリンクの特殊研究を受持ち、同時に學校に於て初めてアイルランド文學の講義を開く。四十四年七月、第三文集『旅より旅へ』出版。

大正元年――三年

十月、第四文集『靑空』出版。同二年七月、第五文集『砂丘』出版。同二年九月、モオパッサン作『水の上』の飜案出版。同三年二月、ゴルキイ作『三人』の飜譯出版。同三年六月、第六文集『霧の旅』出版。同三年九月、世界大戰始まる。

大正四年

『ツルゲエネフ短篇傑作集』飜譯出版。同四年一月、『近代詩講話』、六月、『綠の國』、同じく『旅路』出版、この二册は、以前の文集を蒐錄したるもの。十二月、『神祕主義者の思想と生活』出版、マアテルリンク研究をまとめたるもの。同じく十二月、第七文集『愛と藝術』、同じく第八文集『純一生活』出版。早稲田大學教授。

大正五年――九年

ピエル・ロティ『氷島の漁夫』の飜譯出版。アナトオル・フランスの『ジャンヌ・ダーク』の飜譯出版。學校にては前々學年より佛蘭西文學史擔當、渡佛留學の準備忙はし。大戰は愈々急をつげて、ヴェルダンの城塞危しとの報あり。それが爲め留學なか〳〵ゆるされず。五年九月出發。

印度洋上到る處に軍船の出沒に逢合す。赤道無風帶を越えて、船は喜望峯へ廻る。地中海は既に潛水艇にて危險地となる。武裝せる商船は砲を載せて、洋上屢々練習をしつゝ進む。喜望峯から佛領ダカルの港へ、ロンドンへ着したるは八十五日目なり。巴里へ行き、ソルボンヌ大學の自由聽講をゆるさる。

ランソン、ストロスキイ教授等に親しく敎を受く。ランソンは古典劇を講じ、ストロスキイは近代文藝を說く。戰時の巴里大學は半ば外國學生にて埋む。學生戰死の報時々報ぜらる。千九百十七年の冬は全く火氣もなく、パンも砂糖も、煙草も定限せられた巴里人一般受難の中で、大學は依然開講をつゞく。十八年は長距離砲の攻擊と、敵飛行機の爆彈投下の中に大學はやはり講義も試驗もつゞけて行く。同年四月、一時巴里の砲擊を避けて、リオンから地中海の岸邊へ、南國を歷訪して、アルプスの麓、スタンダアルの故鄕、グルノオブルへ夏を送りに行く。この地の夏季大學では二年聽講。山間都市として絕美の都である。

千九百十九年、戰後の巴里は東方の文藝を要求するので、その要求に應ずる第一の試みとして、坪內博士の『新曲浦島』と『役の行者』との佛文譯をすることとし、スイルヴァン・レヴィ先生と、ミシェル・ルボン敎授との配慮の下に、右兩作を飜譯、兩作共巴里にて出版。『浦島』の方は作曲も出來て、白耳義で、瑞西でオペラとして上演せられたが、『役の行者』の方は背景のデッサンも出來てゐるが、いまだ上演には到らない。この間、この兩作の出版に關して、二荒芳德伯、黑木三次伯、後藤文夫氏等の多大の援助あり。この兩作については、アンリイ・ドゥ・レニエ、ストロスキイ教授等の批評あり。十九年の夏は瑞西を

一週して、サボワの山中にて過す。千九百二十年の四月から伊太利一周。平和會議にて多數の日本人巴里へ集まる。小牧近江氏等とアンリイ・バルビュスと面見。同年九月、歸朝。早大文學部文學科へ佛蘭西文學科を創設。佛蘭西文學史、佛蘭西古典劇、近代劇、擔任。

大正十年――十二年

「東京朝日新聞」、「文章世界」その他へ巴里より通信したる文章を集めて、九月、『佛蘭西印象記』と題し出版。同十一年、ジョッフル元帥來朝、レジオン・ドンヌールを贈らる。同十二年五月、『佛蘭西文藝印象記』（新潮社）出版、主として雜誌「新潮」へ連載したるもの。同年九月、大震災。

大正十三年――十五年

早大文學部文學科主任、「文學原論」の講座擔當。三月、『近代文明と藝術』（改造社）出版。同じく『若き自然』（春秋社）出版。同十四年一月、『角笛のひゞき』（實業之日本社）出版、五月、早大文學部會成立、その研究發表機關として、「文學思想研究」發行、その編輯を擔當す。同十五年三月、『自然美論』（春秋社）出版。五月、『輝く自然』（春秋社）出版、同じく『自然の寂光』（同社）出版。

昭和二年――三年

一月、『自然の沈默』（春秋社）出版。十二月、モオパッサンの『水の上』改譯（岩波書店）出版。同三年一月、『現代佛蘭西文藝思潮』（春秋社）。五月、フランソワ・ドゥ・キュレル劇作『新らしき偶像』飜譯（第一書房）。十月、佛蘭西古典悲劇ジャン・ラスィヌの劇『アンドロマク』、『ミトリダアト』、『フェエドル』飜譯（新潮社）。

昭和四年

七月、『自然讀本』三册、春秋社出版。同じくピエル・ロティ作『氷島の漁夫』改譯（岩波書店）出版。十一月、『佛蘭西文學概觀』前半（新潮社）、『歐羅巴文學概觀』（アルス）、同じく『南歐の空』（早稻田大學出版部）出版、伊太利紀行及び、文學評論、佛蘭西女性觀、農民文學論などを集めたるもの。

昭和五年

十月、散文詩四十篇を蒐錄したる『吉江喬松詩集』（梓書房）出版。ゾラの大作『ルゴン・マカル』叢書の聯合飜譯の計畫あり、その第一篇を擔當、『ルゴン家の人々』を飜譯し、春秋社より出版。早稻田大學文學部長を命ぜらる。『佛蘭西文學概觀』後半（新潮社）。早大文學部文學科を中心に歐羅巴文學研究會を創設。その表現機關として「歐羅巴文學」の發行を企劃す。

◇　・

私は毎朝近くの樫の林で鳴き立てる鵯の聲に目醒されて、二階の窓を開けることになつてゐる。開けて見ると郊外つゞきの連綠の林が、まだ醒めきらない綠の國を眼前に展開する。その連綠の中に一本の高い榎の樹と銀杏樹とがある。後者は年經て不思議な姿をしながら、枝といふ枝を北へ向けて、今ではこの枝に新綠の若葉が再生の悦びを漲らしてゐる。前者はしなやかな、伸びやかな、いかにも自由な風姿を空へ浮ばせて、重なり合つた若葉の陰から、黑い樹幹を所々に覗かせてゐる。曉の輕い風に鵯の鳴聲が樫の若葉の間を流れ高い榎の枝がゆれ、銀杏樹の葉がゆら〳〵ゆれてゐる。

（『綠の國』の「序に代へて」より）

昭和五年十一月五日印刷
昭和五年十一月十日發行

現代日本文學全集 第二十八篇

編纂者 山本三生

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43) 一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

株式會社秀英舍印刷

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02978 9641

改造社